一橋ボート百年の歩み

揮毫　四神会名誉会長

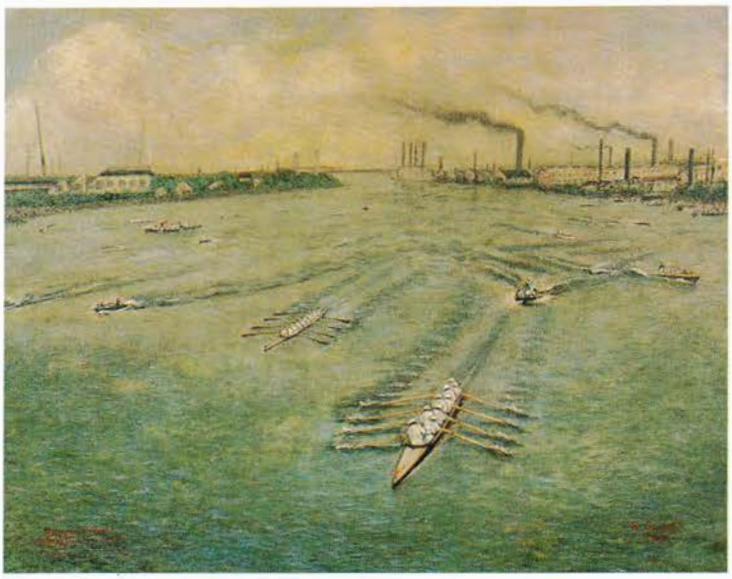
畑　弘平氏



向島隅田公園に新築落成した新艇庫(昭和5年頃)
(まだマーキュリーがつけられていない)
デルタ造船所所蔵。画・野村英一氏(昭和8年東大卒)



伝統に輝く紫紺の大優勝旗(HCS)



雌伏八年後第16回関東インカレ決勝戦ゴール直前、相手は明治尾久コース、昭和11年9月13日
(この油絵は如水会館14階に掲示)



戸田艇庫安全祈願碑
除幕式（昭和46年3月6日）



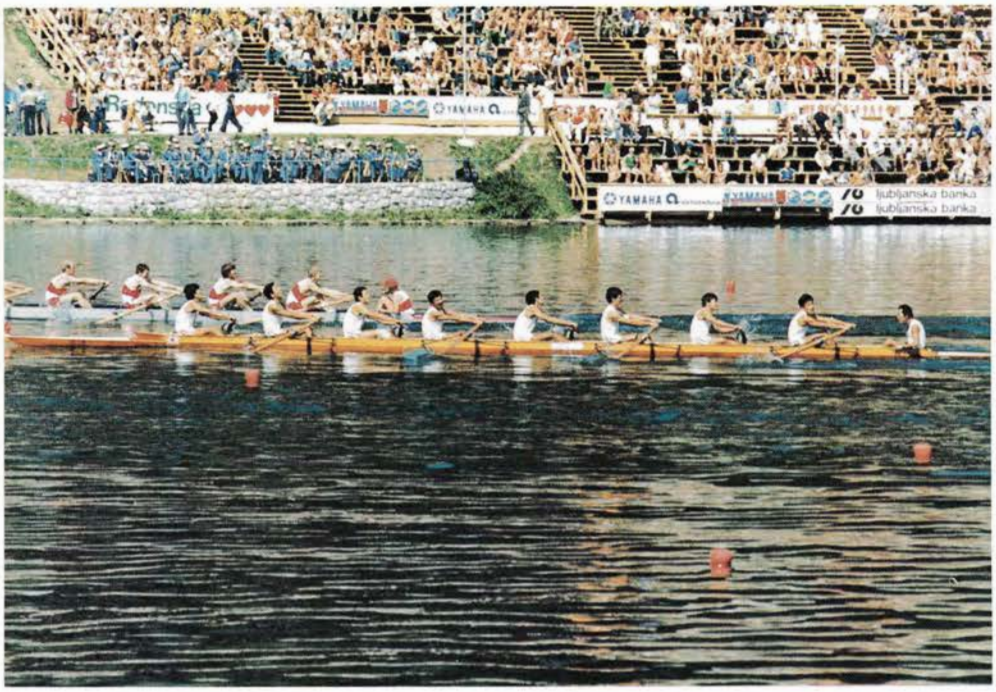
安全祈願碑「幸いにして元気有り」の文字は、故村松部長の揮毫



緑化なった戸田艇庫



相模湖艇庫合宿所
（昭和47年8月13日竣工披露）



世界漕艇選手権大会（軽量級）対カナダ戦
（ユーゴスラビア・ブレドにて、昭和54年9月2日）



ドノラチコ製の艇とオールで試漕
（昭和54年8月25日）



第5回全日本軽量級選手権競漕大会
世界漕艇選手権派遣選考会
優勝（昭和58年 5月26日）



優勝カップを胸に
（昭和58年5月26日）



ゴール直前の力漕



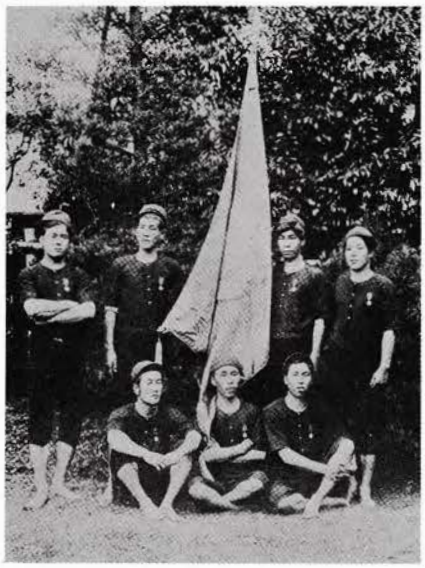
オールは日の丸、西独デュイスバーグの
世界選手権大会の檜舞台にて
（昭和58年8月27日～9月4日）



レースは終った



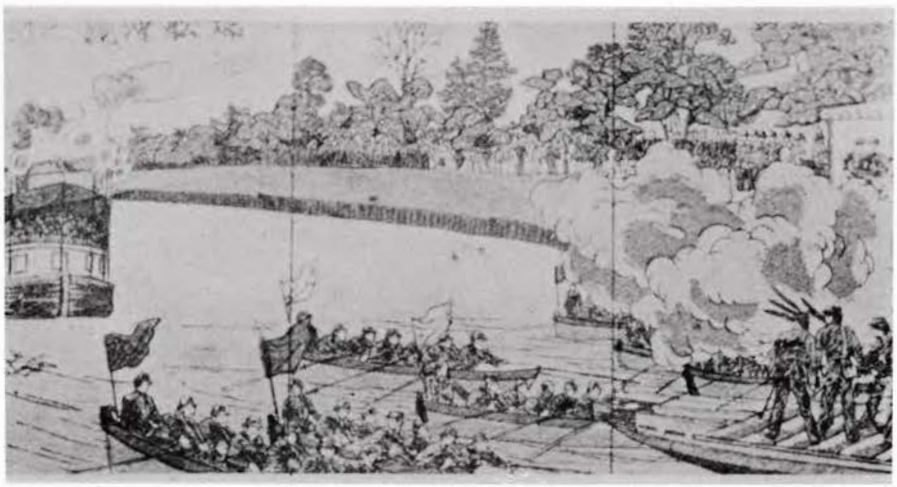
ストレンヂ氏
わが国ボートの開祖



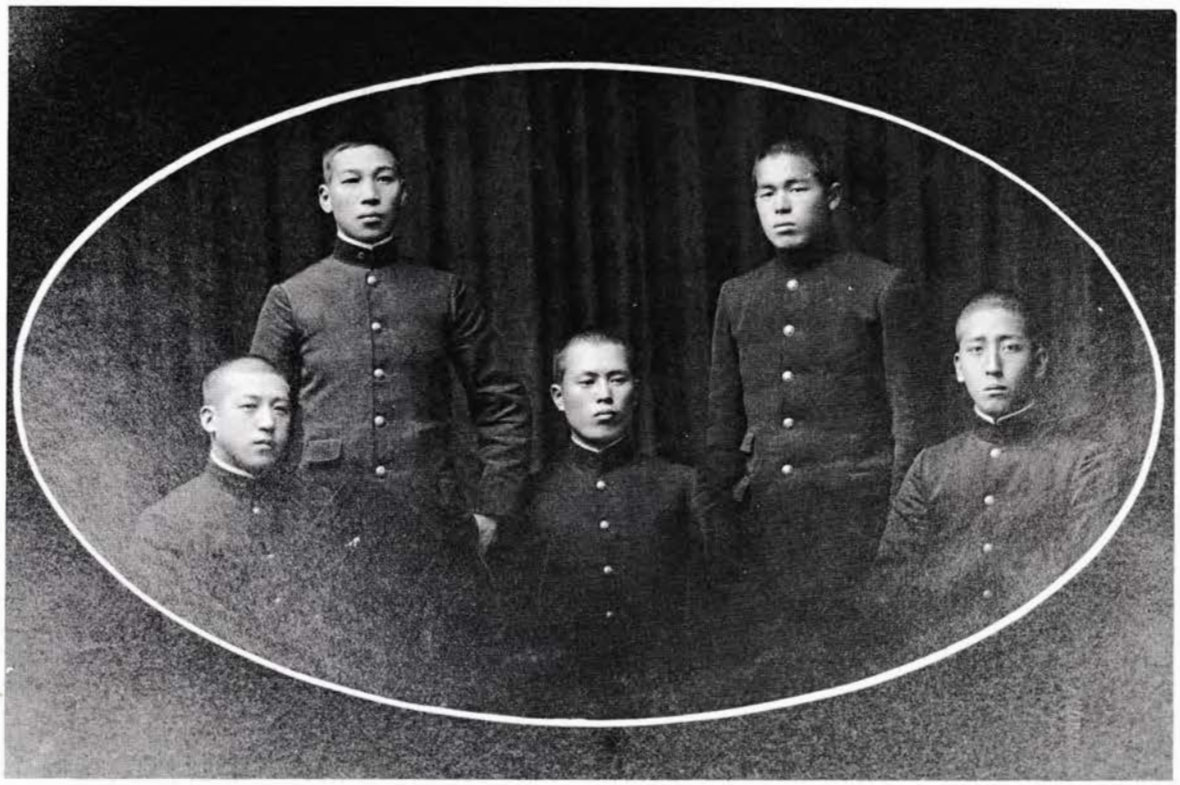
東大端艇部(明治20年)



第17回春季競漕大会(明治37年4月)
S組第二選手優勝(中央舵手は菅禮之助)



端船漕競の図(明治14年発行錦絵)

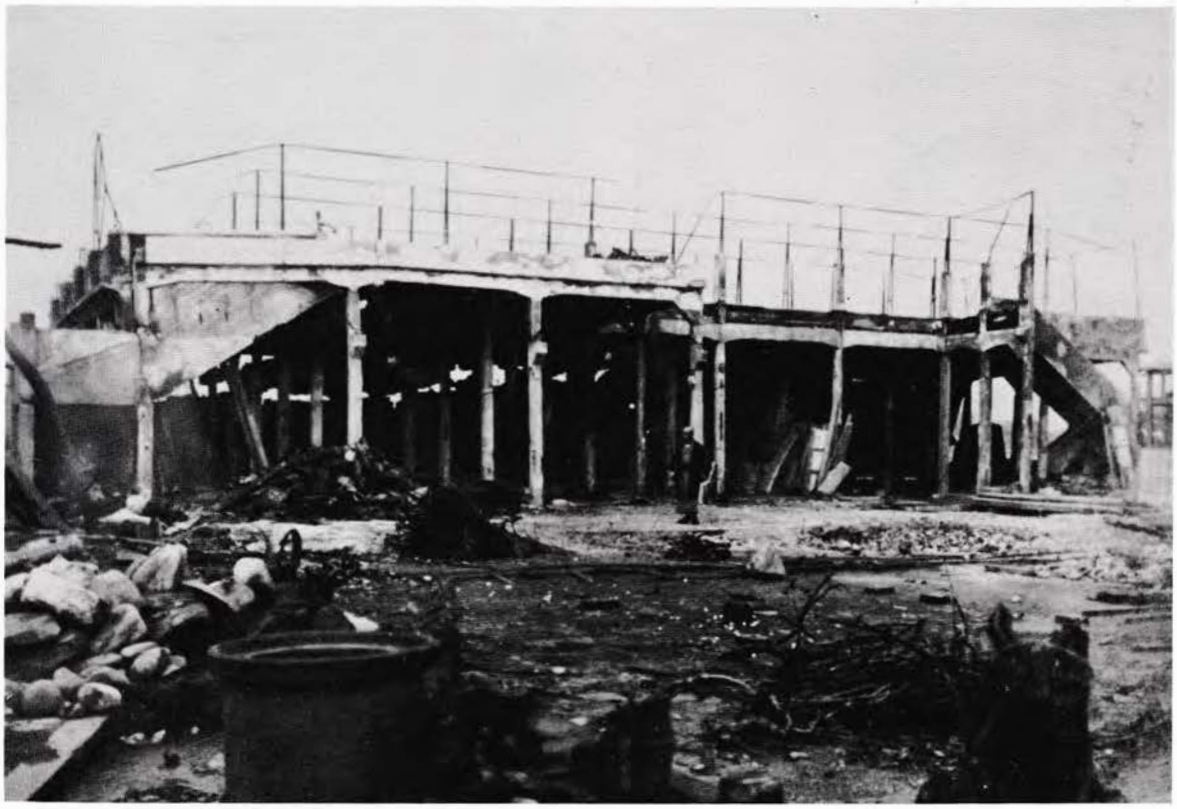


明治40年12月末、朱雀号宝山沖遭難にて艇友村井俊二、柏木粂作両君を失い、柳川家の必死の救助作業によって辛くも一命をとりとめた生存者5名の謝恩記念写真と感謝状。

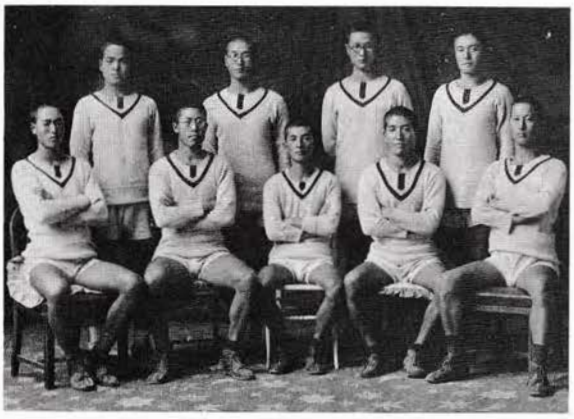




一橋五十年史(朱雀艇救出の記事あり)



大正12年の大震災で焼けた艇庫



第5回10大学対校競漕
優勝記念絵葉書(大正14年)





インターカレッヂ優勝と
それを報ずる一橋新聞
(昭和2年)



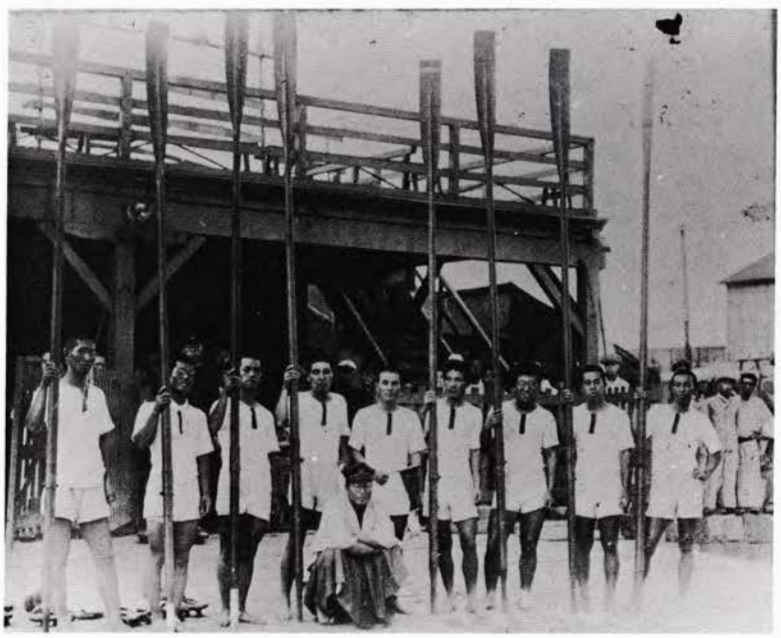
墨堤風景①



墨堤風景②



向島新艇庫
落成記念祝賀会
（昭和5年7月6日）



第3回全国高商競漕
専門部優勝クルー
向島仮艇庫（震災後
のバラック建）にて
（昭和3年8月1日）



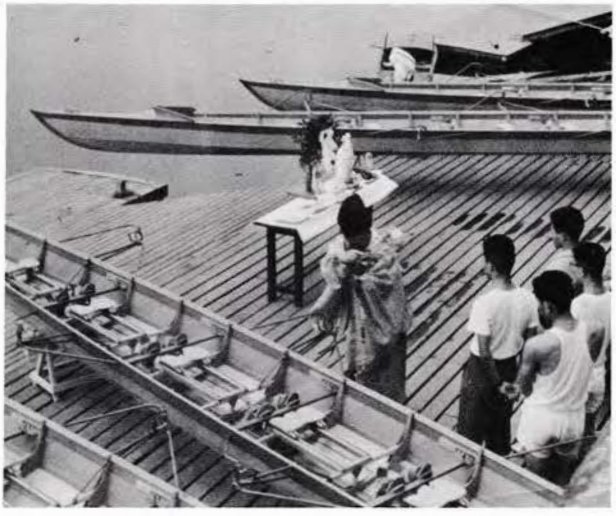
向島艇庫タワーより白鬚橋を望む
(昭和32年)



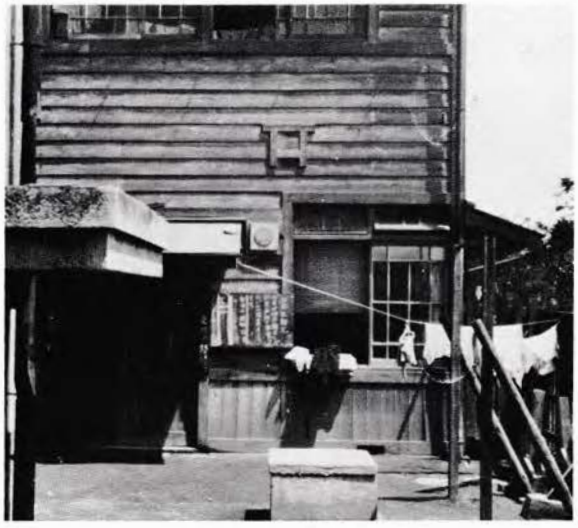
銚子遠漕(昭和32年12月)



昭和32年戸田艇庫



初めてのナックルシックス進水式(昭和35年)



向島艇庫艇番室と二階食堂

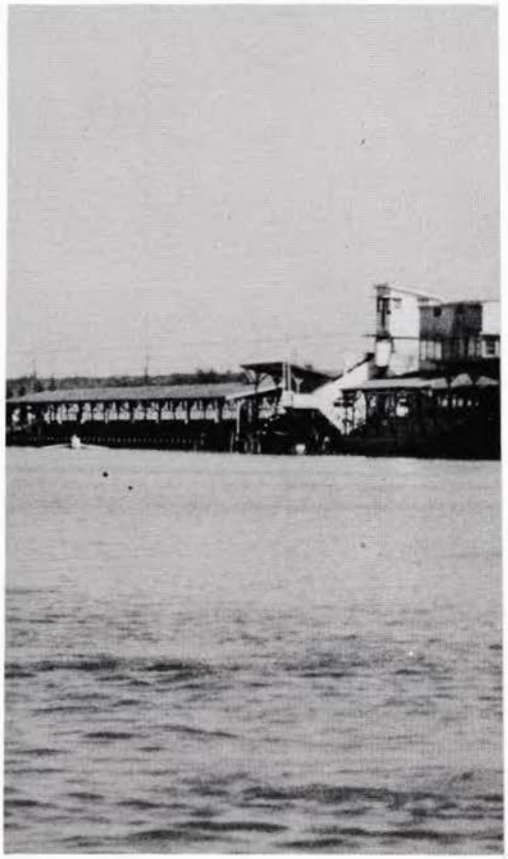


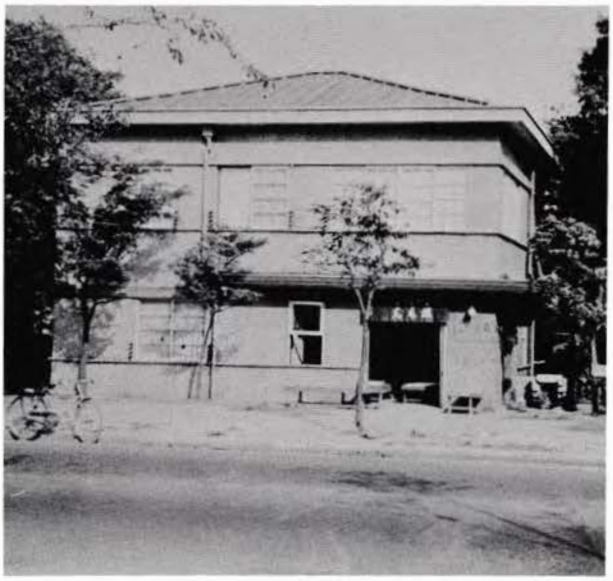
昭和35年HCS合宿
（向島バック台の部屋）



昭和35年HCS秋合宿
（向島台所）

第38回全日本レガッタ、スカル優勝
スタート直後（昭和35年8月21日）





長命寺桜もち（昭和35年秋）



昭和35年HCS合宿の台所(向島)
マネージャー、栄養士、艇番山本氏

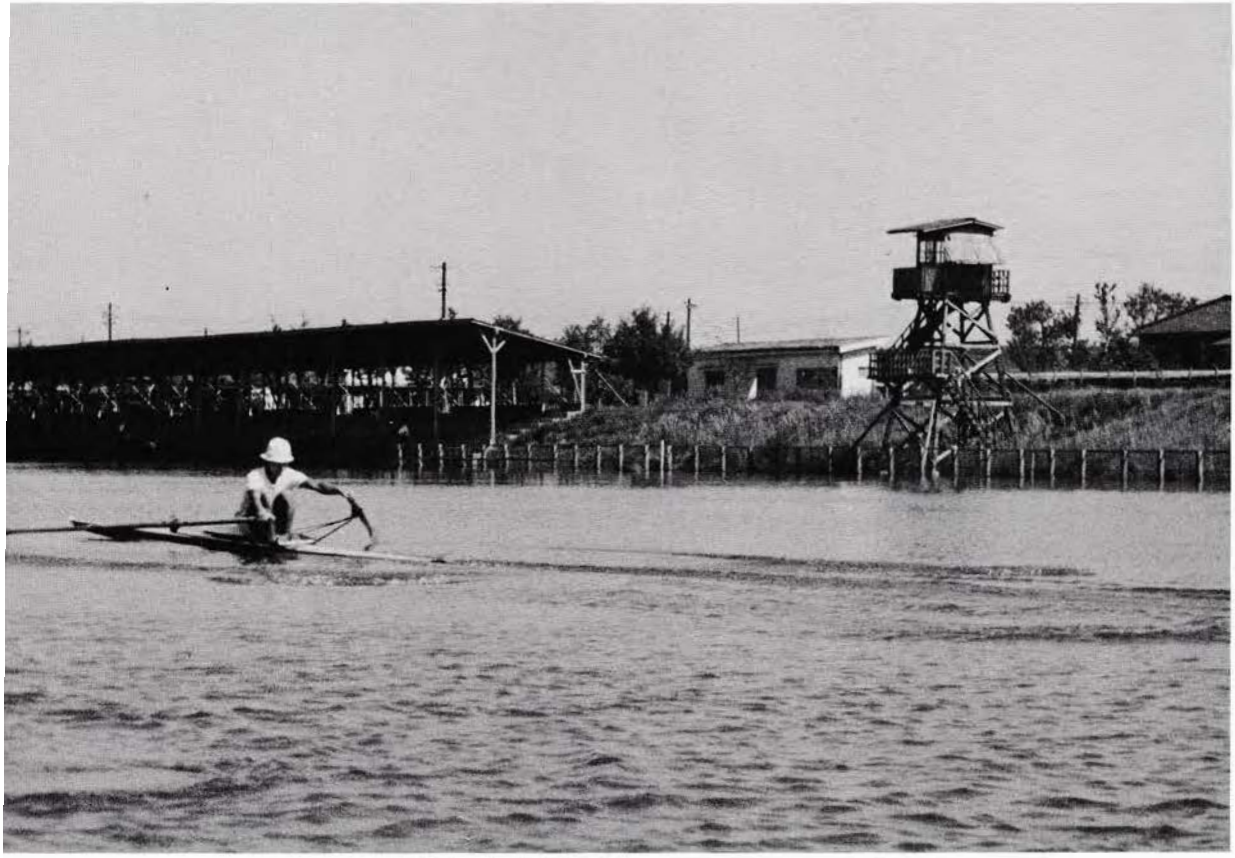


(上・下)相模湖クラスチャン(昭和36年5月2日)



昭和35年言問団子







戸田慕情



(上・下)昭和42年第45回全日本優勝(エイト)
祝賀会での村松部長



スカール進水式(昭和54年)





河西氏を偲ぶ会旧如水会館(昭和53年)



一橋大学向島艇庫惜別式



銚子「大新」〝思い出〟の旅行(昭和51年7月17日)



相模湖マーキュリー碑除幕式(昭和54年6月10日)



宝山柳川邸・慰霊碑起工式(昭和51年7月18日)



昭和54年6月17日第一回全日本軽量級選手権決勝レース、ハーバード大(招待)との接戦の上2位(国内1位)、世界選手権(プレド)に日本代表として派遣決定



昭和54年世界選手権壮行会



第5回全日本軽量級選手権決勝レース
ゴール直前の力走、見事優勝、日本代表に決定(昭和58年6月26日)

一橋端艇部史の完成に当って

一橋大学端艇部長
大川政三

一橋大学創立百周年記念事業の一環として企画された一橋端艇部史がここに完成した。明治中期のパイオニヤ的活動から，大正・昭和にかけてのインターカレッジにおける華麗な戦績，戦後の東商戦ならびに全日本選手権レースをめぐる興隆，雌伏の跡等々が，史料を正確にふまえ，かつ，現実体験を豊富に織り込み，生き生きと記述されている。一橋大学百年史の観点からみれば，本書はたんなる一運動部史に止まらず，一橋大学の重要な側面史となる内容を含んでいる。

初めに本書を端艇部固有の活動の歴史叙述とみるならば，一面においてそれは輝しい優勝の歴史であるとともに，他面においては，優勝に至る苦難の歴史記録でもある。むしろ，後者の苦難史部分の方が時間的にも，また本書の叙述においても長いと云える。自らの足りなさを責めることが非常に厳しい。目標が常に優勝におかれ，それ以外の戦績をすべて無価値と責める厳しい批判の中に，端艇部は自らを置いてきた。なぜ，そのような厳しさを自らに課してきたのか。それは，日本漕艇界のパイオニヤであり，かつ，その発展の推進者である責任と誇りを，一橋端艇部が常に把持してきたからである。

一橋大学運動部がますます多彩化していく中で，ひとり端艇部のみが以上のような厳しさを背負っている。本端艇部史は，その重荷に堪え，新たな栄誉を積み重ねていった精進の歴史であるとともに，今後もたゆみなくその努力を続けることを願う激励の書でもある。

本端艇部史は，端艇部が参加したレース記録としての価値をもつのみならず，端艇部ＯＢの四神会が端艇部の充実整備にいかにかかわってきたかを明らかにしている。さらに，本書のもう一つの特徴として，一橋大学発展史の中で端艇部がいかなる地位を占め，一橋大学生一般との関係において端艇部が「橋人皆漕」の理念をかかげ，一橋大学愛の醸成にいかに大きな役割を果してきたかを教えてくれる。端艇部の功を重視するあまり，他の貢献を軽視する過大な自己評価をいましめなければならないが，

一橋大学のシムボルとしての自覚と，それにかなう鍛錬が端艇部にあったことは，自他ともに認めるところであろう。

本書が一橋大学の重要な側面史的価値をもつと先に述べたのは，以上のような意味においてである。かかる歴史的意義のあるものを，500ページになんなんとする大著にまとめ上げられた執筆者各位，編集担当者各位の労に対し，感謝の念を禁じ得ない。本文にもあるごとく，本端艇部史編さん委員会の発足は，遠く昭和13年にさかのぼる。それ以来の多数関係者の犠牲的努力に十分報いる評価が本端艇部史に対して与えられ，かつ本書が端艇部の今後の活動に対して適切な指針を与えてくれることを祈って止まない。

目　　次

口　絵

一橋端艇部史の完成に当って　一橋大学端艇部長　大川政三

通　史　編

まえがき

第1期　学生ボート草創時代（明治8～17年）…… 1

近代的学校教育の普及 …… 1
イギリスにおけるボートの歴史 …… 3
イギリス・ボートの海外への普及 …… 5
一橋ボートの源流 …… 6
イギリス人教師ストレンジの指導 …… 8
商人風と書生肌 …… 9

第2期　一高・高商対校レース時代（明治18～32年）……12

明治18年・19年 ……12
東京商業と東京外語との合併――一橋ボートの始まり……12
明治20年……13
東京帝大の招待レース――本邦最初の対校レース……13
明治21年……15
第2回一高・高商レース……15
明治22年……16
第2回春季競漕大会……17
第3回一高・高商レース……17
明治23年……18
第4回一高・高商レース……19
一高・高商レースの中止……20
明治24年……21
第4回春季競漕大会……21

明治25年……23
第5回春季競漕大会……23
明治26年……25
明治27年……26
明治28年……27
一高・高商戦復活への動き――琵琶湖レース……27
明治29年……28
第5回一高・高商戦の開催……28
明治30年……30
一高・高商戦再び中止……30
第10回春季競漕大会……30
蔵前仮艇庫の建設……31
明治31年……32
銚子遠漕……32
明治32年……33
最後の一高・高商レース……34
第3期　HCS創設時代（明治33～38年）……37
明治33年……37
第13回春季競漕大会……37
明治34年……38
第14回春季競漕大会……38
明治35年……40
各学年対抗からHCS対抗へ……40
最初のHCSレース……41
一橋会の創立と橋人皆漕……41
明治36年……42
一橋会端艇部としての初の春季大会……42
明治37年……44
一橋会歌の制定……44
端艇部資金横領事件……45
明治38年……46
提灯行列事件……48

福田教授と菅礼之助の交情……49
岩下家一の「漕艇管見」……49
上野憲一と如意団……50

第４期　向島ヨール艇時代（明治39～大正８年）……52

明治39年……55
向島新艇庫の建設……55
新艇庫の設計に係る岩下家一の苦心……55
第19回春季競漕大会……56
春季競漕大会における不祥事……56
H・C・S各組漕法の特徴……57
対校競漕への期待……58
全校に普及したボート……59
ボート部員の生活……60
明治40年……61
春季競漕大会……62
朱雀号の遭難……62
明治41年……64
春季競漕大会……64
宝山の卒塔婆……64
各校の新艇建造熱……65
漕法の変化……65
明治42年……66
大学昇格問題と申酉事件……66
第22回春季競漕大会揚子江杯の受贈……67
明治43年……67
開校35年，一橋やや安逸の気分……67
第23回競漕大会にかげり……68
新艇進水……68
明治44年……68
昇格問題の小康と学生の弛緩……68
第24回春季競漕大会……69
明治45年……69

専攻部の存続決定……69
端艇部の自己反省……70
第25回春季競漕大会……70
大正２年……70
ヨール新艇建造……70
第26回春季競漕大会，秋季小会……71
大正３年……71
如水会の設立……71
第27回春季競漕大会……71
関端艇部長の辞任……72
大正４年……72
第28回春季競漕大会，三社競漕の復活と盛況……72
創立40周年記念行事……73
第29回秋季競漕大会に変更……73
大正５年……74
春秋競漕大会の併存……74
レース中接触事故の頻発……74
大正６年……75
ヨール艇での初レース……75
第31回秋季大会……76
大正７年……76
春季小会，第32回秋季競漕大会……77
大正８年……78
他競技の進出と共に端艇界往年の盛を失う……78
福田徳三教授が部長に就任……79

第５期　商大名門時代（大正９～昭和２年）……80

大正９年……80
大学への昇格……80
第１回インターカレッジでの初優勝……81
大正10年……82
第35回春季競漕大会……82
第２回インターカレッジ……82

大正11年……85
第3回インターカレッジ……85
大正12年……86
関東大震災とその復旧過程……86
大正13年……90
春季競漕大会……90
三科分立問題とボート部への対応……90
第4回インターカレッジ……93
水を求める動き……95
大正14年……97
第5回インカレ優勝と決勝レースでの接触問題……97
大正15年…… 101
高商レースと春季競漕大会…… 101
第6回インターカレッジ…… 101
新艇庫建設に対する動き…… 102
昭和2年…… 103
第7回インターカレッジ…… 103

第6期　雌伏八年時代（昭和3～10年）…… 106

概説―フェアバーン漕法の採用とインカレでの優勝…… 109
昭和3年…… 112
オリンピック出漕と東京商科大学…… 112
昭和4年…… 114
尾久コースにおけるインターカレッジ…… 114
校内レース…… 115
昭和5年…… 116
東洋一の向島新艇庫の完成…… 116
専門部端艇部の生立ちとロンドン杯レース出漕…… 119
昭和6年…… 122
対校選手のHCS分離とインターカレッジ惜敗，籠城事件 …… 122
昭和7年…… 125
オリンピックチャレンジレースも低迷の時代…… 125
昭和8年…… 127

関東インターカレッジ…… 127
昭和９年…… 128
関東インターカレッジ…… 128
昭和10年…… 130
オリンピック派遣選抜レース…… 130
第７期　優勝黄金時代（昭和11～15年）…… 136
昭和11年…… 138
宇治原先輩の遭難…… 138
第50回春季大会…… 139
対校選手の編成…… 141
高垣部長の辞任…… 141
尾久レース…… 142
関東インターカレッジ…… 143
宿敵一高に勝つ…… 144
決勝で明大に勝つ…… 144
ロンドン杯に専門部５連覇…… 145
瀬田での全日本制覇…… 146
優勝に寄せる讃辞と感想…… 148
河西先輩の提言…… 150
端艇部の危機感…… 151
昭和12年…… 152
第51回春季大会…… 152
第17回関東インターカレッジ…… 153
全日本選手権に一橋から３クルー出漕…… 155
専門部クルーの接触による惜敗…… 156
専門部増田主将の痛恨…… 157
対校のHCSからの再分離 …… 158
フォアの全日本制覇…… 158
昭和13年…… 160
第52回春季大会…… 160
部員大会での討議…… 161
一橋会との懇談会…… 163
関東インターカレッジにエイト・フォア両覇…… 164

全一橋応援団の結成と新作応援歌の募集…… 165
全日本レガッタにエイト，フォア優勝…… 166
新作応援歌の発表会…… 169
昭和14年…… 170
上田学長，戸田コース艇庫敷地検分…… 170
第53回春季大会…… 171
役員交替と部員所感…… 172
第９回予科，専門部レース…… 173
上田学長端艇部長に就任…… 174
朱雀号遭難三十三回忌宝山に卒塔婆建立…… 174
夏季小会と第１回全国高専レース…… 175
第19回関東インターカレッジ…… 176
全日本選手権レース…… 177
「網定」の大祝勝会…… 178
第10回明治神宮体育大会レース…… 178
宝山三十三回忌法会…… 179
昭和15年…… 180
緊迫する時局…… 180
新役員の抱負…… 180
第54回春季競漕大会…… 182
上田学部長の急逝…… 182
高瀬新部長の就任…… 183
第２回高専レース…… 184
尾久レガッタと第20回関東インターカレッジ…… 184
戸田静水コースの初制覇…… 186
対校フォアの優勝…… 187
小平流水タンクの落成…… 189
端艇部会計の実態…… 190
第８期　戦争時代（昭和16～20年）…… 192
昭和16年…… 194
第55回春季競漕大会…… 194
海軍記念日レースと夏季小会…… 194
全国高専競漕大会…… 195

関東学生選手権大会…… 195
神宮レース…… 195
昭和17年…… 196
第56回春季競漕大会…… 196
全国大学高専競漕大会…… 196
第４回全国高専競漕大会…… 197
中山伊知郎教授端艇部長就任…… 198
明治神宮大会…… 200
昭和18年…… 201
第57回春季競漕大会…… 201
第38回海軍記念日水上錬成大会…… 203
第23回関東大学高専漕艇選手権大会…… 204
予科・専新人競漕，新艇“八紘”進水…… 204
海の記念日海洋競技大会と第５回全国高専競漕大会…… 205
学徒動員（オールから銃へ）…… 206
昭和19年…… 207
昭和20年…… 208
戦　災…… 208

第９期　戦後再建期（昭和20～28年）…… 209

敗戦から部活動の再開へ…… 209
昭和20年…… 210
昭和21年…… 210
春季大会行われず…… 210
空腹との戦い…… 211
昭和22年…… 212
戦後初の第58回春季競漕大会…… 212
第25回インターカレッジ…… 213
昭和23年…… 215
第26回インターカレッジ…… 215
昭和24年…… 217
学制改革と端艇部の新態勢…… 217
第60回春季競漕大会…… 218

第１回東商対抗レース…… 219
新制大学の発足…… 220
食糧事情と部財政の強化…… 221
昭和25年…… 222
第２回東商戦…… 222
全日本選手権レース…… 223
一橋創立75周年記念ボートレース…… 224
昭和26年…… 226
第26回春季大会…… 227
第３回東商戦…… 227
全日本選手権兼オリンピック予選…… 228
昭和27年…… 229
四神会の組織強化…… 229
第63回春季大会…… 231
第４回東商戦…… 231
小見川合宿…… 232
漕法・造船技術の進歩…… 233
昭和28年…… 234
第５回東商レースに２連覇…… 234
第１回朝日招待レガッタに全勝…… 234
昭和20年代の３つの特徴 …… 236
向島から戸田へ…… 236
流れ漕法から静水漕法へ…… 237
飢餓から希望へ…… 238
第10期　第三黄金時代（昭和29～34年） …… 240
昭和29年…… 242
漕艇技術の研究進歩…… 242
白虎の建造…… 242
食事の栄養学的研究…… 243
全日本選手権と朝日レガッタ…… 243
校内レース…… 244
昭和30年…… 244
第７回東商戦…… 245

全日本レガッタ…… 246
各種校内レース…… 246
学園と一体化した部活動…… 246
昭和31年…… 247
メルボルン五輪出場ならず…… 247
第8回東商戦…… 248
朝日レガッタ…… 248
全日本選手権兼オリンピック代表決定戦…… 249
戸田合宿所の完成…… 249
朱雀の建造…… 250
第67回春季大会…… 251
部史編纂委の発足…… 251
バックの組織の確立…… 251
応援部と一橋大学体育会の創設…… 252
昭和32年…… 252
第9回東商戦…… 252
朝日レガッタ…… 253
全日本選手権…… 253
校内レース…… 253
村松端艇部長外遊…… 254
部史資料集の刊行…… 254
財政難…… 255
昭和33年…… 255
活発な部活動…… 255
東商戦…… 256
朝日レガッタ…… 257
全日本レガッタ…… 257
校内レース…… 257
遠山先輩水葬式…… 257
優勝旗の大修理…… 257
優勝への新方針…… 258
昭和34年…… 258
対校の合宿…… 259
東商戦4年ぶりに優勝…… 259

「青龍」「ケインズ」の建造…… 260
オックスフォードを破って全日本優勝…… 261
茨戸での朝日レガッタ優勝…… 266
一橋祭での祝賀式典…… 266
校内レース…… 267
750万円特別募金 …… 267

資料編　I

• 外語と一高，高商の関係（外語ボート70年史による） …… 269
• 一高高商戦漸く白熱化す（抄） …… 270
• 新宇治川（抄）〔江見水蔭〕…… 271
• 隅田川に短艇競漕を観るの記（抄）〔穂積重遠〕…… 275
• 対一高戦…… 276
• 漕艇管見の諸論其他〔菅禮之助〕 …… 278
• 屁理屈〔石井阿杏〕 …… 281
• 漕艇管見〔岩下家一〕 …… 282
• 旧艇朱雀遭難事件記事（一橋会雑誌付録） …… 285
• 老野次の祈り〔水沢嘉一郎〕 …… 291
• 大正八年インカレ棄権の経緯〔大森芳夫〕 …… 292
• 福田徳三先生を憶う〔藤瀬英二郎〕 …… 292
• 端艇部長としての思い出〔高垣寅次郎〕 …… 294
• 老先輩の手記「ボート今昔物語」〔和田庸之助〕…… 296
• ボート生活の思い出〔中川英造〕 …… 306
• 高垣部長と向島新艇庫〔塚田松二〕 …… 307
• オーソドックスとフェアバーン〔朝海浩一郎〕 …… 327
• 我れは一橋ボートマンである〔関川信二〕 …… 327
• 専門部エイトの回顧〔大森吉次郎〕 …… 330
• ロスアンゼルスオリンピックのチャレンジレースの記録〔坂口　侃〕 …… 337
• 銚子遠漕〔笠原文雄〕 …… 339
• わが青春とボート〔前田　正〕 …… 342
• 我がボート生活の生成発展に関する若干の考察〔伊藤治雄〕 …… 346
• バックマンの事ども〔近藤勝重〕 …… 349
• 昭和13年優勝クルーについて〔堀川富太郎〕 …… 352

• 会計幹事の思い出〔伊藤茂三郎〕…… 354
• 墨堤有情〔丸山泰男〕…… 357
• 鼻唄漕法ほか〔平野　昌〕…… 361
• 募金趣意書…… 362
• ボート入門・その他〔角鹿哲也〕…… 363
• ボート追憶〔大西重則〕…… 365
• 私のボート生活〔岡村俊夫〕…… 366
• 昭和12年から17年までの思い出〔下元進助〕…… 369
• 端艇班幹事日誌〔小沢恒與〕…… 370
• 学徒出陣とボート〔辻　君雄〕…… 371
• 出陣学徒答辞〔鈴木邦治〕…… 373
• ピンネース競漕会・新艇香取・学徒動員〔後藤隆之〕…… 373
• 戦中派ボートマン〔橋本　博〕…… 374
• 敗戦直後のボート部〔畑　弘恭〕…… 375
• 思い出すもの〔三堀正太郎〕…… 377
• 主体性の確立〔長岡　孝〕…… 377
• 惜敗の記〔中山伊知郎〕…… 378
• カブトのスパルタ教育〔畑　弘晃〕…… 379
• 敗戦の記〔村松祐次〕…… 380
• 自信の欠如が敗因〔畑　弘平〕…… 381
• 一橋大，エイトに優勝…… 383
• 一橋大，30センチ差で勝つ…… 384
• Oxford University Upset in Regatta…… 387
• オ大また敗れる…… 387
• 水の心〔太田可夫〕…… 389
• 東商戦プログラム余話〔塚田松二〕…… 390
• 艇・オールと価格〔前田　正〕…… 391

資料編　Ⅱ

• 昭和35年…… 395
• 昭和36年…… 396
• 昭和37年…… 398
• 昭和38年…… 400

• 昭和39年…… 402
• 昭和40年…… 403
• 昭和41年…… 404
• 昭和42年…… 405
• 昭和43年…… 407
• 昭和44年…… 409
• 昭和45年…… 409
• 昭和46年…… 410
• 昭和47年…… 412
• 昭和48年…… 413
• 昭和49年…… 414
• 昭和50年…… 416
• 昭和51年…… 417
• 昭和52年…… 418
• 昭和53年…… 422
• 昭和54年…… 423
• 昭和55年…… 435
• 昭和56年…… 437
• 昭和57年…… 439
• 昭和58年…… 441
• 故村上驍君遭難事故記録…… 442
• 笹目上流白虎号遭難の記録（抄）…… 448
• 向島艇庫の変貌…… 453
• 端艇部財政危機の克服と戸田，相模湖諸施設の整備…… 464
• 相模湖に艇庫を！　土地買収契約成立，第一歩ふみだす…… 485
年　表…… 493
出漕者名簿 …… 547
一橋ボートの唄 …… 631
隅田川周辺図
あとがき

通史編

まえがき

明治草創の８年，一橋大学の前身，商法講習所が設立され，幾多の紆余曲折を経つつ，18年，東京外国語学校と合併して，東京商業学校の誕生と共に，一橋ボートの歴史が始まる。

爾来，今日に至るまで，一橋ボート栄枯盛衰の歴史は，一橋の歩みと，軌を一にして来たと言っても過言ではない。外国商人が威をふるった商館貿易を，日本人の手に取戻し，日本人によって，世界を股に，貿易をもって富国の一翼を担わんとしたのが，一橋建学の精神であった。一橋の門に入る者は，将来の，キャプテン・オブ・インダストリイを目標に，一橋全体が，新興雄渾の気運にみちみちていた時，外国文物とともに入ってきた新興スポーツ端艇が，海外雄飛の志に燃えていた若人の心を捕らえたのは，けだし歴史の必然であり，帰するところ端艇は一橋の校技となり橋人皆漕の具現を見るに至った。

一橋が実業界に，幾多有為の士を輩出するにつれて，一橋の地位はあがり，一橋の学問大いに興隆するも，文部省は士農工商の考えから脱却し切れず，官立校でありながら一橋を，ひいては商の地位を軽く見ようとする。かくて一橋は当局としばしば摩擦を生ずるに至り，帰するところ帝大に対する対抗意識となって現れる。対一高戦に，高商が挙げて，熱血をたぎらせたのも，その現れの一つといえよう。国運の伸展と共に，一橋もまた興隆するが，端艇部もまたこれと歩みを一にする。諸般の事情により，対一高戦が中止となるに従い，一橋の精気は，校内競漕大会に凝集され，大正９年大学昇格を待って始めてインターカレッジレガッタに参加するまで一橋健児の鋭気のはけ口として盛況を極める。

この間一橋の学問，また大いに振い，内には幾多有名教授の簇出あり，外には在学中ボートを漕いだ卒業生の実業界での活躍あり，正に隆々たるものがあった。かくて端艇部は常に一橋の中心であり，一橋人の生活は端艇部を中心に形造られて居たといってもよい，それほどに端艇と学生の関係は密であった。全学を挙げて学問と端艇に精進したのであり，かるが故に一スポーツに過ぎぬボートの勝敗に一喜一憂したのはそこに一橋精神のほとばしりを見たからである。一橋盛んなる時はボート強く，ボート不振の時は一橋の文運もまた沈滞したからである。

当時（大正初期），東大の大内教授は言う。

「一橋系は，その新鮮さに於いて，その意気において，明治の末期，東大を圧し，慶応を圧圧していた。それは商業から出てきたという意味でテクニカルにも優れていた……一橋系経済学が，日本経済学の王座を奪いつつあった時，大学への昇格問題が起った。これは先生達の実力からいっても，学生の質からいっても，当然の要求であったが，文部省の考え方―官学主義，東大，京大第一主義と反した。折角健全に発達してきた，専門学校の性格を，この時なくした事は，残念であったが，ともかくこの問題は，大変やかましい問題となり，文部省に対する騒動―申酉事件―となった。数年の後には昇格を達成し，商科大学となったが，この学校が，商業技術の学問を中心とするという性格は漸次，薄れる様になった。と同時にこの大学が経済学の西か東の本願寺であることが，いよいよ確定した」

と述べているのは，這般の事情を裏書きするものといえよう。

明治40年の朱雀号遭難に，教授，学生一丸となって，事態の収拾にあたった事は，一橋学園と端艇部との固い結び付きを示した事であり，それに続く，申酉事件での全学の団結もその延長と見られる。勿論この間，他の運動競技も逐次とり入れられ，盛況に向うが，端艇部が一橋及一橋会の中心的存在であった地位には揺ぎはなく，一橋ボートが勝つときは，即一橋精神の発露と考えられた。大正10年，東大を破って制覇した時，佐野，福田，上田の碩学がみな狂喜乱舞された如きは，その証左とも言うべきであろう。また上田教授は昭和14年端艇部長就任の時に「端艇部はわが一橋学園に於ける運動部の元祖であり幾多有為の士が在学中ボート道に依て身心の鍛錬に励み，その人達が現にわが国の実業界，政界等に活躍している。従って端艇部は熱心な古い先輩を最も多く持っており，一種独特の伝統的精神が脈々として流れているのである……」と述べられている。故中山学長も後年端艇部長に就任された時，「一橋精神の生れ，育てられ，伸びて行く所は端艇生活である」と述べられたのも同じ趣旨である。

今日に至る迄の一橋の歩みが必ずしも平坦でなかったごとく，端艇部の歩みも同様であった。社会思潮の変化に従い，時代毎の学生の気風，学園の空気も変って行く，橋人皆漕，一橋会員はすべて，ボートメンたるべしといった不文律も，昭和３年以後の不況，また第２次大戦，戦後の再建といった環境下にあって，大いに変っている。然し「文武は車の両輪」という考え方，士魂商才という理念，烈しい肉体的鍛練を通じて得られる人格形成の価値等は，如何なる時代においても，如何なる社会体制においても必要なものと考えられ，端艇部生活の意義もここにあると我々は考える。ボー

トの勝利は即ち全学の勝利であった。クルーも全学の声援と期待を担って出漕したのであり，その負託に応えるべく眦を決して戦ったのであり，一橋とボートの渾然たる団結の後に，幾多の勝利がかち取られたのであり，端艇部だけの力に依るものではなかった。

勝敗は兵家の常であり，打ち続く敗戦悲運に泣いた時期の方が，栄光の時よりはるかに長いのであるが，今日までの全時代を通じて一橋と端艇部が見えざる絆で結ばれており，有事の際に力を発揮したところに一橋と端艇部との間の他に見られぬ特異性があるものといえるし，この法灯を継承するのが後世諸兄の責務と考える。

以下時代区分によって語られる，通史がどのくらい，読者の共感を得られるか，危惧なしとしないが，各位のご理解を得られれば執筆者一同の望外の幸いである。

第１期　学生ボート草創時代（明治８～17年）

一橋のボートがどのようにして始められたのか，その源流もしくは由来は，記録や文献が乏しいため，必ずしも明確ではない。言うなればこの時期は，イギリス伝来の「学生スポーツ」としてのボートが，明治維新以降の近代日本に採り入れられ，一般社会の関心を集めるに至った草創期であり，黎明期であった。

もちろん漕艇競技として，長崎で今日でもなお盛んに行われている「ペーロン競漕」のごときは，その淵源を奈良朝時代にまでさかのぼることができると言われている。また櫓をあやつる日本古来の和船の競漕も古くから行われていたし，徳川末期の海軍艦船の陸地との連絡用や，遭難の際の救命ボートとしてのカッターの訓練と競漕も明治以前からもあったし，また明治になってから，更に盛んに行われていたようである。しかしこれらは学生スポーツとしてのボートと直接関係はない。

近代的学校教育の普及

ところで日本における近代的な洋式の学校教育が行われるようになったのは，もちろん明治維新以降である。しかし，その母胎は既に徳川時代に存在しており，例えば江戸幕府の洋学研究教育機関として「蕃書調所」などは安政２年（1855）に設立されて，のちに「洋書調所」と改称されて，幕末までオランダ，イギリス，フランス，ドイツ等の外国語の学習や翻訳などを行っていた。明治維新以降になって，この洋書調所は「大学南校」と改称された。また安政５年（1858）幕府直轄の西洋医学の学校として開設された「医学所」が，明治になって「大学東校」となり，明治10年（1877）にこの両校が合併して，本邦最初の総合大学としての「東京大学」が創立された。

明治５年(1872)には，東京教育大学の前身である東京師範学校が，明治10年(1877)には，産業近代化促進のための行政府としての工部省（明治３年創設）直轄の「工部大学校」が開校された（明治18年に東大と合併して工学部となる)。明治８年（1875）には，東京商船大学の前身である「三菱商船学校」が，創設された。明治２年(1869)創立の「海軍操練所」は明治９年に「海軍兵学校」と改称されている。

鎖国300年のあとでの日本の急速な近代化のためには，語学，法律，商業，医学，工学，航海，軍事等の各般にわたる欧米の学問，知識，技術を急速に吸収する必要が

あった。そのためには，江戸幕府時代には，一部の幕臣の子弟に限られていた教育を，一般庶民に開放し，広く人材を養成するための各種諸学校の整備と充実が急がれたのである。

このようにして欧米の列強に追いつき，追い越せと近代日本の将来に夢を託す血気盛んな「書生」という一種特権的な階層が，社会的に成立し定着するようになった。このような学生層の出現によって，初めて学生スポーツとしてのボートが外国から輸入され，普及するに至る素地ができたことは言うまでもない。

「東京帝国大学漕艇部五十年史」（昭和11年刊）によると，当時の「東京開成学校」（前記「洋書調所」の後身）の学生達は，明治８～９年頃から旧海軍のカッターを小さくしたような「バッテーラ」（６人又は４人漕ぎ）の中古品を，学生達の醵金で購入して，「舟遊び」に大いに興じたようである。

また当時一ツ橋にあった「東京開成学校」から隅田川に出る最も近い距離にあった浅草橋際の船宿「野田屋」に，明治10年以前から東京開成学校所有の２隻のバッテーラが預けられていて，この２隻のボートを中心として「舟行組」という日本最初の学生のボート・クラブが組織された。このクラブも競漕というより，その後の遠漕のような舟遊びが目的で，近くは桜咲く隅田川の上流（向島）はもとより，当時の樹木の生い茂った行楽地である神田川を，万世橋からお茶の水，水道橋辺りまで，遠くは荒川をさかのぼって川越まで，更に柳や紅葉の美しい綾瀬川や江戸川などを漕ぎまくって，学業のかたわら大いに鋭気を養ったようである。

ところで，日本で初めてイギリス式の近代スポーツとしてのボートが導入されたのは，明治維新３年前の慶応２年（1866）であった。横浜在留の英国人が，本国から４人漕ぎのスライデイング艇（今のナックル・フォアに近い）を取り寄せて，現在の山下公園前の海岸通りに，横浜アマチュア・ローイング・クラブ（ＹＡＲＣ）を設立して，大いにローイングを楽しんだ。

明治２年，イギリス本国のヴィクトリア女王の誕生日に，横浜入港中のイギリス海軍のカッタ・レースを交えて，数回の滑席艇のレースが行われたという記録がある。これが恐らく，日本における最初のボートレースであると言われている。そして明治維新以降，日本政府が招聘した多数のイギリス人の語学，工学などの教師達が，日本の学生に近代スポーツとしてのローイングの技術を教えたのである。したがって，日本のボートの歴史を知るためには，まずもってボートの発祥地であるイギリスの歴史についても触れてみる必要がある。

イギリスにおけるボートの歴史

そもそもイギリスにおけるアマチュアー・スポーツとしてのボートの発祥は，18世紀の初頭からテームズ河の渡船や遊覧船や艀（はしけ——Barge）の会社に雇われていたプロの競漕選手であると言われている。彼らは競馬や競輪や競艇のように一般の観客を集めてレースをやり，多額の賭や賞金で生活の資金を稼いでいた。

古いところでは1715年頃から，こうしたプロのオアーズマンのスカルレースの優勝記録が残っている。（スカルといっても，今のおわんボートのようなもの。）こうしたボートレースの人気が，やがて1815年の「ウォーターロー大戦」で，ナポレオンを破って人心にゆとりのできた英国紳士達や，名門校の学生達のアマチュアスポーツとしてのボートクラブの続出を促した。

初めはプロ選手のコーチを受け，またコックス（舵手）としてクルーに参加してもらって，ボートが行楽や競漕に使用されるようになった。すでに1811年に名門イートン校が，6人漕ぎ2隻，8人漕ぎ3隻，10人漕ぎ1隻の計6隻のボートを所有していたという記録がある。イートン校は，テームズ河畔に位置し，全生徒は，入学と共にクリケットかローイング即ち「ドライ」か「ウェット」のスポーツのいずれかを選択しなければならなかった。（辞典「ブリタニカ」による）

また1815年には，オックスフォード大学の校内レース（インターカレッジ＝学部対抗）が行われたという記録もある。当時の日本は徳川家斉将軍の治世で，杉田玄白の「蘭学事始」が出版されたのが，ちょうど文化12年（1815）である。社会人のローイングクラブは，1810年前後に数多くできたようであるが，記録に残っている著名なアマチュアのローイングクラブとしては，1818年頃に創設されたリアンダークラブ（Leander Club）が挙げられている。

ケンブリッジ大学が学部対抗レースを行った最古の記録としては，1826年（文政9）があり，オックスフォードより10年の遅れがあった。イギリスで，最初に行われた大学対抗レガッタは，現在まで150年以上の歴史をもつ有名な「オックスフォード対ケンブリッジ・レース」であり，1829年（文政12）がその第1回であるとされている。

1815年以降における当時の英国紳士によるアマチュア漕手のレースの時の服装は，緑色フラノの半ズボンに白い長靴下，ビロードのハイカラーの金糸縫い込み金ボタンで，漕手は黒のシルクハット，コックスのみが白のシルクハットをかぶるといった，

極めて英国らしい威厳に満ちた華美なものであった。

しかし，用艇の方は，今日公園の池などに浮かぶ「おわんボート」を大きくしたような，無骨で頑丈なカッターであった。オックスフォード対ケンブリッジの第1回のレースの行われた1829年から10年後の1839年に，最初のヘンレー・レガッタが行われた。

テームズ・レガッタは，1843年から46年にかけて隆盛を極めた。そうした有名なレースには，グランド・チャレンジ・カップとかゴールデン・カップのような賞杯が設けられていたが，初めはオックスフォードとケンブリッジの学生クルーだけが出漕していたのが，やがては，他の大学や地方のクラブのクルーも参加し，20世紀に入ってからは外国クルーも参加するようになった。

このような毎年のレガッタの隆盛と地方への普及に伴って，レース用のボートに種々の改良発達が見られた。用艇については，何らの規制もなかったためか，最強を誇っていた著名なクルーが軽快で効率的なボートを建造した無名のクルーに敗れて，優勝杯をさらわれるという事態も少なくなかったと言われている。

踏み板（左右舷側をつなぐ横板ガングプランク）の撤去，外板もクリンカー（重ね張り）からシエル（平張り）に(1839年)，舷側リガーからアウトリガーにかえてボートの幅員を半分以下（1846年），無龍骨艇（keelless boat）の採用（1856年），さらに1871年にはスライディング・シートの導入があり，1876年の固定式ララック（fixed rowlock）から回転式（swivel rowlock）への転換があった。

もっとも，最後の二つの改良はアメリカで発明されて，イギリスへ逆輸入されたものであった。ただイギリスの職業選手の間では，皮製のパンツをはいて，シートに油脂を塗って尻を滑らせる漕法が，アメリカからのスライディング・シートの輸入以前に採用されていたと言われている。

いずれにせよ，オックスフォード対ケンブリッジの対校レースが行われるようになってから僅か30年程の短期間に，競漕用のボートは著しく軽量化され，細身となり，効率的となった。そして日本にイギリス式のボートが導入される明治初年頃（明治元年＝1868年）には，ローイングボートの基本的な構造上の改良は，ほとんどすべて終わっていたと言うことができよう。

ところで，イギリスにおけるアマチュア・スポーツとしてのローイングの歴史で，もう一つ触れておかなければならないことは，プロ選手のアマチュア・ローイングからの追放ということである。前にも述べたように，イギリスのアマチュア・ローイン

グが，古くからあったプロ選手の指導に負うところが大きかった。しかし，プロ選手は，艇の扱い方や，漕法や操舵（屈曲のある河川では極めて重要）の技術や，また選手の監督や訓練方法において有力な専門家ではあっても，その精神や目的が現在のプロ選手と同様に賞金稼ぎであったり，報酬が物を言う世界であった。従ってその弊害も少なくなかった。

例えば，ファウリング（接触）の悪習のごときは，故意にしかも巧妙に敵のボートに接触して，その進行を妨害して，勝利を奪うという方法で，これには長年の経験による操舵技術が物を言ったのである。1839年には，オックスフォードとケンブリッジの対校レースにおいて，プロ選手の排斥と接触の禁止と紳士道（ジェントルマンシップ）尊重のルールが，まえもって両大学当事者間で確認されている。

またこれより先，ヘンレー・レガッタにおいても，同様のルールが採用されていた。それにも拘わらず，このルールはクルーの舵手にプロを雇うことを抑えることができても，プロのコーチやトレーナーを採用することまでやめさせることは，仲々できなかった。勝敗にこだわる余り，有能なプロコーチを採用する誘惑を排除して，アマチュアリズムを名実共に確立するには，なお相当の期間を必要とした。

しかし，イギリスでは，アマチュアスポーツとしてのボートの精神が，肉体的鍛練や忍耐力養成のみならず，高尚な紳士道の発揮にあることが機会ある度毎に強調されてきたことも確かであった。

イギリス・ボートの海外への普及

イギリス以外のアメリカやヨーロッパにおいても，ボートレースが，1800年代になってから，かなり普及するようになった。1800年代初期に，ニューヨーク港内において，船舶乗組員とプロ選手との間にボートレースが行われたという記録が残っている。しかし，アメリカで最も古い歴史を持つ有名な大学対抗レガッタであるイエール対ハーバード対校レースの第1回は，オックスフォード対ケンブリッジ（1829年）より遅れること23年の1952年（嘉永5）であった。かくして，テームズ河を「揺りかご」として育ったボートというアマチュア・スポーツは，イギリス国運の隆盛と共に，アメリカ，カナダ，オーストラリア（最初の大学対校レースは1870年）へと，世界各地に伝わって行き，1868年の明治維新以降は，極東の国日本にも急速に普及するに至ったのである。

こうしたイギリスを発祥地とするローイングが世界各地に伝わるようになったの

は，その多くは，七つの海を股にかけて貿易や産業や教育などの分野で活躍した当時のイギリス人達の手によるものであった。従って，前述したように，ボートが日本に最初に伝来したのも，前にも述べたように，1866年（慶応２年横浜の在留イギリス人が，本国からボートを輸入して，横浜アマチュア・ローイングクラブ（ＹＡＲＣ）を設立して，大いに漕ぎまくり，1869年（明治２）のビクトリア女王誕生記念日に，日本では最初のイギリス人によるボートレースが行われた。また，横浜以外の開港地であった神戸，長崎，および上海にも，イギリス人たちによるローイング・クラブがあり，それらの申し合わせで春秋２回，各港の持ち回りでクラブ対抗レースが行われていたという記録もある。（『東大50年史』，明治18.10.13　東京日日新聞記事）

固定席艇による最初の日本人学生のレースは，明治17年（1884）の東京大学の校内レースであるとされ，４人漕クリンカー滑席艇による日本における最初の国際レースは，明治18年に前記の横浜の外人クラブ（ＹＡＲＣ）と東京大学クルーとの一戦であった。しかし，日本の漕艇界は，半世紀近く，世界水準から見て時代後れの固定席レースに執着して，欧米流のスライディング・シェル・エイトによる大学対校レースを始めたのは，大正９年（1920）の日本漕艇協会創立の年の第１回大会の時であった。

それはイギリスにおいてオックスフォード対ケンブリッジ・レースで滑席艇を初めて使用した1873年（明治６）より遅れること47年であった。言うなれば，日本のボートの歴史は，英米のそれに比べて半世紀の後進国であったし，日本のボート界は，初めはイギリス人教師の直接の指導によって，後には何冊かの原書による漕法解説書に頼って，自主的に進歩発達を遂げて行ったのである。

ともあれ1765年のワットによる蒸気機関や1779年のミュール紡績機などの発明によって幕をあけたイギリスの産業革命が成熟し，1820年にこれら機械技術の海外進出が解禁となって，幕末の黒船渡来によって鎖国300年の太平の夢を破られた日本が，いち早く明治11年（1878）にランカシヤのミュール紡績機を輸入し，イギリス人技術者を招聘した時期に，イギリスのボートが日本に導入されたということは，極めて興味深い点であるといえよう。

一橋ボートの源流

わが一橋学園の歴史のルーツは，明治８年（1875）に，森有礼がアメリカ人ホイットニーを招聘して，銀座尾張町の鯛味噌屋の２階に私塾として開いた「商法講習所」

であるとされている。

しかし，当初の商法講習所の学生数は，明治８年には24名，翌９年に東京府（勧業課）の管轄となっても，42名という少数で，12年に予備科（英語教育）を新設したが，府会の予算削減により，翌13年に廃止，14年には廃校の憂目にあったが，農商務省の補助金その他で再興され，17年に農商務省直轄となり，「東京商業学校」と改称される。

そして翌18年になって，初めて文部省の所管に移され，その同じ年に一ツ橋にあった文部省所管の「東京外国語学校」及び同校附属高等商業学校と合併するに至る。したがって，明治８年の「商法講習所」開設後の10年間というものは，学生数が少なく，変転受難の時期であっただけに，他の学校の学生達のように，ボート遊びに興ずるといった余裕など持ち合わせていなかったものと推察される。事実この時期に「商法講習所」の学生がボートを漕いだという記録はどこにも見当たらない。

むしろ一橋ボートの源流は，合併前の「東京外国語学校」もしくは，その前身であり，また東大の前身ともなった「開成学校」であったとみるべきである。というのは，ストレンジ（F. W. Strange, 1854～1889年）という若い英語教師が，母校イートンで，また横浜のＹＡＲＣでローイングをマスターしていただけに，明治８年前記外国語学校の英語教師に着任するや，英語教授のかたわら，学生に熱心にボートを教えたのが，日本の学生ボートの始まりであるとされているからである。ストレンジは，のちに外国語学校の英語科が独立して，「東京英語学校」となり，さらに東京大学の附属「大学予備門」となるに及んで，明治10年にその予備門に転任している。

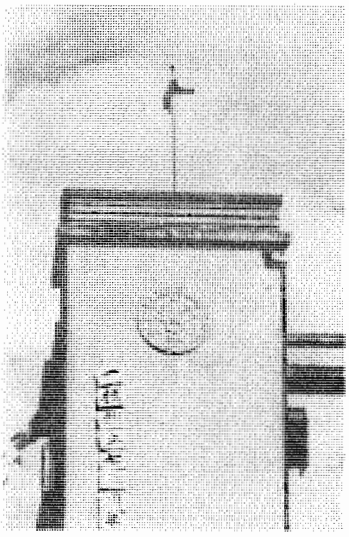
もっとも，日本人の学生にイギリス式のローイングを教えたイギリス人教師としては，ストレンジのほかに，明治10年開校の当時虎の門にあった「工部大学校」（東大工学部の前身）のウエストが，数隻のボートを所有していて，これを学生に貸与したという記録があるから，当然イギリス式のボートの漕ぎ方も教えていたとみることができる。

また，明治10年，一ツ橋にあった前記「蕃書調所」の後身「開成学校」の専門部を母胎として創立された総合大学としての東京大学の物理学教授イギリス人ノットもまた，ストレンジと共に，学生ボートの指導を行った。明治17年に当時神田一ツ橋にあった東大法文理３学部中の法文２学部の本郷移転を祝って，同年10月17日に本邦最初の学生ボートレースが行われた時に，最も熱心で優秀な選手を２クルーに編成し，ストレンジとノットの両教師が舵手となり向島で１マイル以上のイギリス流模範レース

を行ったという新聞記事がある。

ついでに，その時の東京日日新聞（毎日新聞の前身，明治17.10.12）の記事によると，「昼夜を分たず内外の書籍に目を晒すは，学生の本職なれ共，当時身体の健全を心掛けるも亦必要なり。然るに外国学生の勉励することは欧米にも恥ぢざる所なるも，身体の健全に至っては往々之を粗略に付するの弊あり。東京大学の人々は此弊を匡済せんものとて，数年前より学生の中に学業の余暇，漕艇を勉強する輩ありしが，兎角盛大に至らざりしに，此度大学並びに予備門の学生生徒並に大学に縁故ある人々の発起にて東京大学走舸組と称する一会を興し，（中略）毎年春秋二回……大競漕会を開くの規則を定め云々」とあるのは，当時一般世間の学生ボート観を物語るものとして興味深い。

（後年，わが一橋の新向島艇庫のタワー上に，マーキュリー・マークを囲んだ MENS SANA IN CORPORE SANO——「健全なる精神は健全なる身体に宿る」というエンブレムレリーフを掲げたことと思い合わされる。）



向島艇庫のタワー

イギリス人教師ストレンジの指導

ところで，明治初年の日本の学生達に，イギリス式のローイングを教えたイギリス人教師の前述の3人のうち，何といっても，ストレンジが最も熱心であり，年齢も学生と10歳も違わない，この若いイギリス人教師の日本のボート界に与えた影響は極めて大きかった。

宮田勝善著『ボート百年』（昭和40年初版，51年改訂新版）によると，「ストレンジの指導方針は，技術より精神に重きを置き，特にスポーツマンシップを強調した。また『スポーツで最も大切なことは，互いにベストを尽くして戦うことで，勝敗は問題でない』と言った。また『スポーツの究極の目的は，情意の鍛練で，筋骨の練磨はその手段にすぎない』とも言った。それでレースに勝った時は，必ず『ウエル・ロー（よく漕いだね）』と言って，相手をいたわれと説いた」とある。

このあたりにも，前述のイギリスにおけるボートの伝統としてのアマチュアリズムの精神，もしくはジェントルマンシップ＝スポーツマンシップ＝フェアプレーの考え

方が良く表れている。

日本の学生達の間に，明治以来急速にボートが普及したのも，幾つかの理由が挙げられよう。一つには世界列強に負けまいとするためには，いち早く日本を西洋化し，近代化する必要があった。そのために，外来の文明・文化を吸収するために，社交ダンス（鹿鳴館）であれ，テニスであれ，洋食であれ，「異人」「毛唐」を先生として何でも見よう見まねで「学習」し「勉強」した。もとより，前にも触れたように，イギリスの近代的な機械化綿紡績業を日本に移殖したのも，その重要な方策の現れであった。（明治16年渋沢栄一が，大阪紡績を創立して，大成功をおさめた。）

ボートもまた，当時としては，日本古来からある柔剣道では得られないハイカラな「隅田川はテームズ河に通ず」という，西洋崇拝というか，「文明開花」の恰好のいいスポーツであったからであろう。わが一橋の恒例の春季校内大会レースにおいて，皇室はじめエリートの紳士淑女を招待し，昭和15年ごろまで残っていたバージン・フラッグやレディス・バッグの風習も，イギリスの社交界を集めたボート・レースのそれに倣ったものであった。ただレディス・バッグといっても，「財嚢」と呼んで，錦織の袋を白木の「三方」の台にのせていたのが，いかにも日本的で面白かった。しかしまた，それと共にストレンジが説いたように，ボートがイギリス伝統のジェントルマンシップの精神に裏打ちされており，そのことがまた日本の当時の学生達の武士道精神とか，「士魂商才」といった高邁な精神主義と一脈相通ずるものがあったことも，見逃してはならない。

ともあれ，「東京外国語学校」におけるストレンジの薫陶を受けたボート好きの学生達は，明治18年，遂にこの学校が一つは一高に，一つは東京高商に二分され，廃校となった時に，２隻のボートと共に学生達も二分されて，その１隻が，わが一ツ橋の東京高商に移され，一橋の学生達の間にボートが広がっていったのである。

商人風と書生肌

大正14年，一橋会発行の『一橋五十年史』は，「合併時の確執」という見出しのあとに，木挽町から移ってきた「商法講習所」の生徒と，旧幕時代（文久２年〈1862年〉）以来，一ツ橋にいた「蕃書調所」の衣鉢を継ぐ「東京外国語学校」の生徒との間に，気風の大きな違いがあったことを，次の如く指摘している。

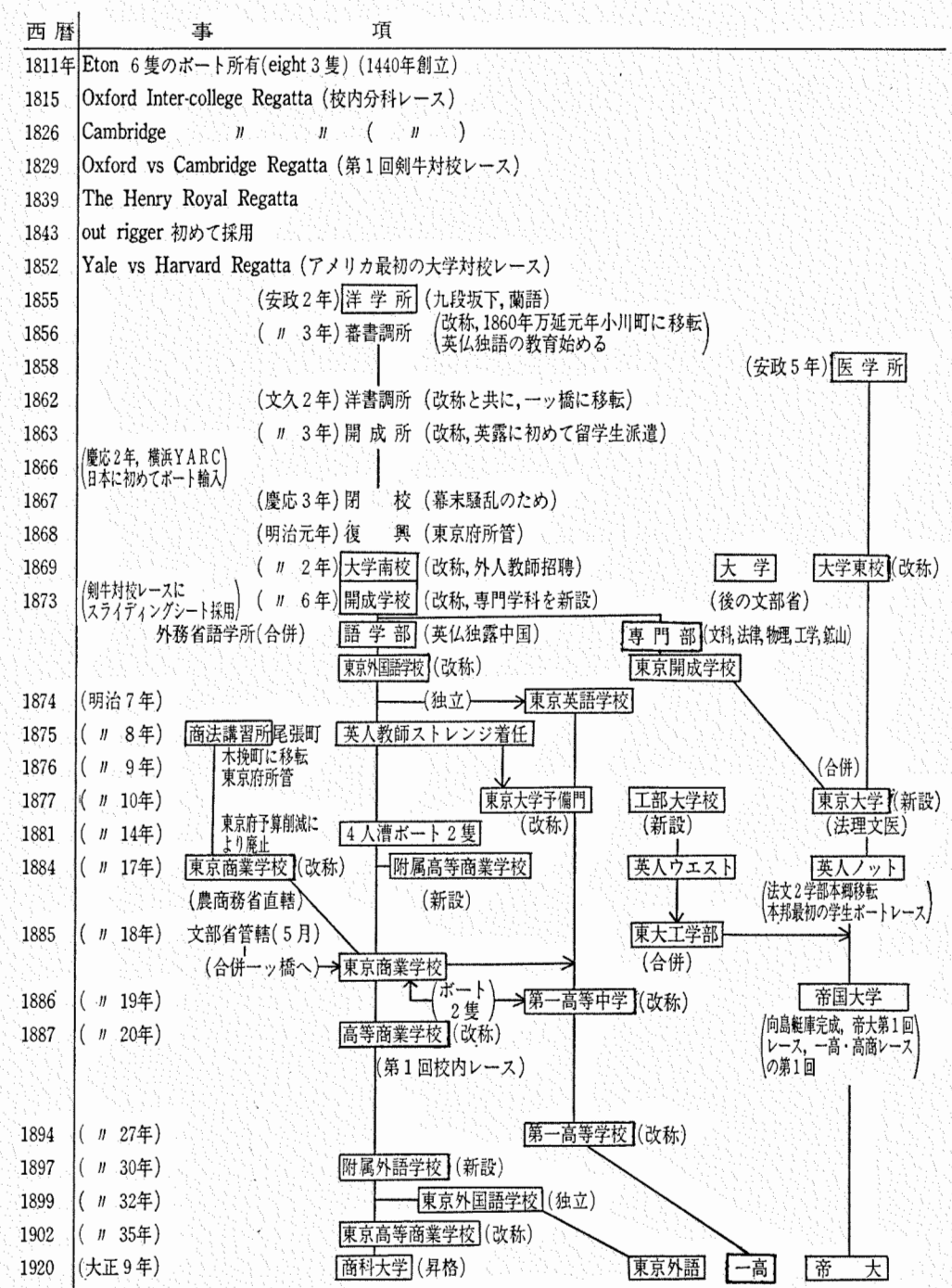
「商法講習所を流れてゐる空気は商人風であった。即ちこの型の生徒は大家の若旦那，或はお店（タナ）もの然と唐桟（トウザン）の着物に，縞の羽織を着流しに，前垂れかけのこしらへで

あった。甚しきは丁稚(デッチ)に弁当箱を持たせて通学した者もあった。（中略）一ツ橋の東京外国語学校の生徒は，富国強兵を金科玉条となし，体育を重んじて……衣嚢(コロモカン)(すね)に至り，袖腕(ソデワン)に至る式の所謂バンカラを標榜し，兵児帯を用ひ破袴を穿って，常に自ら称へて浪人を以て任じてゐた。かゝる気風の生徒が木挽町商法講習所の町人臭い生徒と合併する事となったのであるから，一ツ橋側の生徒は算盤手習をなすは，学問に非ずと唱へ木挽町側を蔑視して居た。のちに確執は除かれ表面上は相融和するに至ったが，所謂商人風と書生肌の二は到底一致するべくもあらず。今後暫くは此の対立を続けて，やがては商人風は次第に駆逐され，書生風を以て一橋の風格を形造るに至った。」と書いている。また次章でも引用されている江見水蔭の「新宇治川」の一節にも，「わが高等学校に最も尊ぶべきもの士気なり。……ボートは士気を鼓舞し一致団結の基礎ともなりて，他日天下の商界に雄飛するに……大いに得る処あるべし」と記している。

これらを見ても，一橋におけるボートの源流は，木挽町の「商人風」の講習所ではなくて，むしろ一ツ橋の「書生肌」の東京外語にあったことが容易に推測される。

明治以降における学校の系譜も，前述のように「洋書調所」が一ツ橋に移転して以来（1862年），その一つの源流から明治になって「東京大学」が生まれ，「大学予備門」＝「第一高等学校」ができ，「東京高商」が現れることになったということができる。明治における学生ボートの歴史は，ストレンジなる若きイギリス人教師の手ほどきによって始められ，後年における一高対高商の，東大対商大の激しい熱戦と厳しい対校意識も，もとはと言えば後に東京高商から独立した東京外語を含めて，同じ一つの源流から分かれた「兄弟」であり，「親戚」であったということができるのである。この辺の複雑な学校間の離合集散の系譜と，学生スポーツとしてのボート導入の経過を明らかにするために，これを年表風に図解すると別表のようになる。（次ページ参照）

ともかくも，東京外語とストレンジを源流にするとはいえ，一橋のボートは，先に「開成学校」から分離独立して行った東大，一高などに遅れて，明治18年になってようやくそのスタートを切った。しかし，また遅れてスタートしただけに，次章以下で述べるように，「校技」としてのボートを中心としつつ，一橋全体が，同じ国立校である一高，東大に対する激しい対抗意識を燃やして，自主的に，しかも精力的に，その成長と発展を遂げて行くのであった。


西暦
事項
1811年 Eton 6隻のボート所有(eight 3隻)(1440年創立)
1815 Oxford Inter-college Regatta (校内分科レース)
1826 Cambridge 〃 〃 (〃)
1829 Oxford vs Cambridge Regatta (第1回剣牛対校レース)
1839 The Henry Royal Regatta
1843 out rigger 初めて採用
1852 Yale vs Harvard Regatta (アメリカ最初の大学対校レース)
1855 (安政2年) 洋学所 (九段坂下, 蘭語)
1856 (〃 3年) 蕃書調所 (改称, 1860年万延元年小川町に移転 英仏独語の教育始める)
1858 (安政5年) 医学所
1862 (文久2年) 洋書調所 (改称と共に, 一ッ橋に移転)
1863 (〃 3年) 開成所 (改称, 英露に初めて留学生派遣)
1866 (慶応2年, 横浜YARC 日本に初めてボート輸入)
1867 (慶応3年) 閉校 (幕末騒乱のため)
1868 (明治元年) 復興 (東京府所管)
1869 (〃 2年) 大学南校 (改称, 外人教師招聘) 大学 大学東校 (改称)
1873 (剣牛対校レースに スライディングシート採用) (〃 6年) 開成学校 (改称, 専門学科を新設) (後の文部省)
外務省語学所(合併) 語学部 (英仏独露中国) 専門部 (文科, 法律, 物理, 工学, 鉱山)
東京外国語学校 (改称) 東京開成学校
1874 (明治7年) (独立) 東京英語学校
1875 (〃 8年) 商法講習所 尾張町 英人教師ストレンジ着任
1876 (〃 9年) 木挽町に移転 東京府所管 (合併)
1877 (〃 10年) 東京大学予備門 工部大学校 東京大学 (新設)
1881 (〃 14年) 東京府予算削減により廃止 4人漕ボート2隻 (改称) (新設) (法理文医)
1884 (〃 17年) 東京商業学校 (改称) 附属高等商業学校 英人ウエスト 英人ノット
(農商務省直轄) (新設) (法文2学部本郷移転 本邦最初の学生ボートレース)
1885 (〃 18年) 文部省管轄(5月) 東大工学部
(合併一ッ橋へ) 東京商業学校 (合併)
1886 (〃 19年) (ボート2隻) 第一高等中学 (改称) 帝国大学
1887 (〃 20年) 高等商業学校 (改称) (向島艇庫完成, 帝大第1回レース, 一高・高商レースの第1回)
(第1回校内レース)
1894 (〃 27年) 第一高等学校 (改称)
1897 (〃 30年) 附属外語学校 (新設)
1899 (〃 32年) 東京外国語学校 (独立)
1902 (〃 35年) 東京高等商業学校 (改称)
1920 (大正9年) 商科大学 (昇格) 東京外語 一高 帝大
(この年, 日本漕艇協会設立, 本邦最初のスライディング, エイトレース)

第2期　一高・高商対校レース時代(明治18～32年)

明治18年・19年

東京商業と東京外語との合併――一橋ボートの始まり

明治18年の夏も過ぎ，秋の気配も漂う9月22日。東京商業学校と東京外国語学校が合併され，旧外語の校舎で授業が開始された。この日が一橋の創立記念日として今日まで伝わっている。

士農工商の身分制度が色濃く残っていた当時の日本。商業教育の重要性が盛んに説かれ，東京商業学校が文部省の直轄となったのも，同年5月のことであった。

新たな組織として出発した一橋は，矢野次郎校長のもとで，急速にその内容を充実させていった。前章でもふれたように，合併以前の外国語学校の生徒は，いわゆるバンカラ学生そのものであった。兵児帯に破れ袴のいで立ちで勇ましいことこの上ない。

一方の商業学校の生徒の普段着はというと，縞の羽織を着流して，おまけに前垂れまで掛けて，いかにも商売人といった風体である。服装があまりにチグハグでは，一つの学校として都合が良くない。制服・制帽を義務づける規則も，いくつか制定された。商神マーキュリーを校章に定めたのもこうした事情による。もっとも，学生たちは服装などには，あまり頓着しなかった模様で，この規則もほとんど守られてはいなかった。

外国語学校との合併が一橋にもたらしたものは，何もチグハグな服装だけではない。われら一橋にとっての何よりの土産，それは外ならぬボートであった。

外国語学校では，合併前からカッター漕ぎが大変盛んだった。

「後年海外に雄飛せんとする者は，ボートの漕ぎ方くらいは心得ておくべし。」とのことである。いささか無茶な論理のようでもあるが，当時の人々にとっては相当説得力があったであろう。ボートと言えばハイカラなスポーツの代表格である。「ボートの漕ぎ方」と「海外雄飛」は，今日の我々が思うほど論理的に飛躍した取り合わせではなかった。

外語にカッター漕ぎの教授をしに来たのは海軍士官であったが，彼らの指導の厳しさは言語を絶していた。上からの押しつけによるボートでは，海外雄飛のためにも有

益であるとは思えない。そこで外語のバンカラ学生は，各自で金を出し合い，やはりカッター様式のフォアを2隻購入し，前章で述べたように，英国人教師ストレンジのイギリス式ローイングの指導を受けた。このときの2隻のうちの1隻が，第一高等中学（のちの一高）に，あとの1隻が両校合併の際に一橋へともたらされたのである。

一方，合併前の一橋では，スポーツがあまり盛んではなかった。体育といっても，大川沖で僅かに水泳訓練が行われていただけである。しかし，スポーツの比較的盛んだった外語との合併により，学生間のスポーツ熱も徐々に高まっていった。ラケットなどが不完全ながらもテニスが行われるようになり，器械体操も始まった。

中でも学生たちに最も人気があったのは，外語から譲り受けたボート漕ぎである。たらいのようなフォアに限りないロマンを感じたのであった。

外側の手は下方からオールを持つというカッター漕法で，品川から大川沖にかけて，それこそ無我夢中で漕ぎ回った。そしてその胸にあふれた熱き思いが，以後100年もの長い年月にわたって脈々と受け継がれようとは，彼らのうち一体だれが予想し得たであろうか。これが一橋端艇の記念すべき第一歩だったのである。

明治19年になると，外語から譲り受けたカッターに加え，フォア6隻が新たに建造された。ボートに対する学生たちの情熱は，他のスポーツへのそれを全く寄せつけなかった。彼らは勇躍双腕を撫して，蔵前にある係留場へと毎日通った。

東京商業学校クルーが，東京帝国大学第1回競漕大会に招待されたのは，まさにそのような頃――明治20年春のことであった。

明治20年

東京帝大の招待レース――本邦最初の対校レース

ボートに集まる人気の絶大なことは，東京帝国大学においても類を見ぬものがあった。勉強もせずに来る日も来る日もボートを漕ぐという猛者は，当時から大勢，いたらしい。

文豪夏目漱石の『満韓ところどころ』の中の一節に，当時の学生生活を描いたものがある。

……余のごときは入学の時こそ芳賀矢一の隣に座っていたが，試験のあるたんびに下落して，仕舞には土俵際から，あまり遠くないところで，やっと踏み応えていた。それでもみんな得意であった。級の上にいる者を見てなんだ点取りがと云って

威張っていた位である。さうしてややもすると，我々はポテンシャル・エナージーを養うんだと云って，無暗に牛肉を食って，ボートを漕いだ……

ポテンシャル・エナージーばかりを蓄積した漱石は，ついに落第してしまった。

明治20年4月。帝大は，8箇条から成る「艇庫及漕艇取締規則」を制定し，間もなく初代向島艇庫の完成を見た。木造2階建，延べ190坪弱で，漕艇10隻の収容が可能だった。そこでこの新艇庫の落成式と新たに建造された4隻の進水式とを兼ねて，競漕大会が開催される運びとなった。この大会のレースの一つとして，文部省直轄校レースが企画され，第一高等学校，高等師範学校と並んで，わが東京商業学校が招待された。

明宮殿下をはじめとする多数の来賓と大観衆の見守る中を，競漕大会は盛大に挙行された。4月16日のことである。

18日付けの「時事新報」は，当日の模様を次のように伝えている。

「同日は朝より天気も麗(うらら)かにして風さへもなし。向島の桜は既に真盛を過ぎたるも花咲雪に酔顔を吹かるるも亦一入ならんと，花見がてらに競漕会の見物を兼ね押し出したる連中非常に多く，三囲(みめぐ)り辺りより長命寺近傍は申すまでもなく，西岸の橋場今戸辺りまでも見物の老若男女人の山をなして，競漕の勝を得る度ごとに両岸の拍手歓呼は川水に響き渡りて凄じき程なりき。中にも貴婦人令嬢と覚ぼしきが，取りかかりたる桜の下にて落花をば，絹の蝙蝠傘(こうもり)にて斜めに受けつつ，片手に紅色のハンカチーフを打振りて祝意を表したるなどは，最も奥ゆかしく見受けられしと。とにかく当日の景況は実に盛んなることなりしといへり。」

全12番のレース中第11番は，待ちに待った三校競漕である。商業は紫，一高は緑，高師は紅と，それぞれに服帽をうちそろえ，同色に塗られた競漕各艇に乗り込む。スタート地点の八百松まで小汽船にて曳航され，各艇用意良しと見るや轟く号砲。各艇一斉に漕ぎ出し，艇庫前までの1,100mのコースを抜きつ抜かれつの大接戦。後半にわが商業クルーは，ついに力尽き，力漕及ばず3位に甘んじた。

この三校競漕こそ，わが国初の正式な対校競漕である。その熱戦の模様は世の多くの人々の興味を惹き，明治時代の中等学校用教科書にも採録されたのである。

翌21年には高師が抜けて，わが商業学校が高等商業となって，一高・高商の対校競漕となるのである。

こうして，初の対外レースを経験した一橋のボートは，同年11月3日の佳節に，第

1回校内競漕大会を挙行するのである。大会会長は矢野校長で漕程700m。言問橋の上流にステッキボートを置き，その周りをぐるりと一周して帰って来る。いわゆる回航レース方式。生徒の服は赤・白・紫・樺の4色に分けられ，全17番のレースからなる大盛会であった。大会のメイン・レースたる学年別対抗競漕では，別科クルーが優勝した。

この秋季大会に先立つこと1か月。10月5日東京商業学校は，東京高等商業学校と改称されて，「高商時代」の幕明けとなった。

明治21年

第2回一高・高商レース

東京帝国大学競漕会は，前年に引き続き，春爛漫の隅田川において挙行された。今年も文部省直轄校レースたる三校競漕が計画されたが，高師が欠場したため，一高・高商のみの顔合わせとなった。厳密に言えば，今回のレースをもって両校競漕の第1回となったわけである。

コースは，吾妻橋から100mばかり上流から艇庫までの約1,100m。艇庫や審判艇の上には様々な旗章がはためき，艇庫の下には軍楽隊が陣取って楽を奏して，大会の雰囲気は大変な盛り上がりを見せている。言問橋上には入口が設けられ，番人が入場者を一々検査するのが見える。水上へ目を移せば，水上警察まで出動している。レース中に他船がコース内に入らぬよう，眼を光らせているのだ。

当日は，朝から雨模様で，日中かなり強く降るというあいにくの天候であった。それにもかかわらず，レースを一目見ようと集まった人々で，岸は溢れんばかりである。朝野の紳士・貴婦人の姿も多く見受けられた。

さて，いよいよ問題の一高・高商対校レースである。

第13番レースに出漕の両クルー，一高は赤，高商は白で共に懸命の力漕。雨に打たれて乱れ散る桜の合間を矢のごとく疾走する。吾妻鉄橋も青く霞むほどの深い霧の中，凱歌を上げたのは，またしても一高であった。

競漕大会は，全13番の盛会のうちに終わったが，用艇に不慣れな出漕者の失態は，まさに目を覆うばかりであった。

艇に乗り込んで出艇しようと舵手が命令するのに，艇を桟橋に結びつけたまま知らぬ顔を決め込む漕手。舵手も決して人の事はとやかく言えぬ。自分の艇が蛇行してい

るのに修正しようとはしないのだ。そうかと思えば逆に懸命に舵を動かし，右に100m左に100mと艇をジグザグに進める者もいる。これでは漕手の方がいい迷惑であろう。

漕艇技術も何ら確立されたものを持たず，やたらとピッチを極端に切りつめる者もいる始末。

来賓の外国人クルーは，1,100mのコースを4分41秒の好タイムで漕ぎ切った。これに対し，他の12のレースで1着に入ったクルーのタイムを平均しても，6分17秒6にしかならなかったという記録がある。いかに彼我の実力の較差が大きかったかを窺うことができよう。

しかし，我が国にもたらされてから未だ日の浅いボートである。先人達は文句なしに漕ぐこと自体を楽しんでいた。敗北を喫したあるクルーの一人が，大平記時代の名将の討死を模してこう詠んだ。

かねてより負けることとは知りながら

かほど迄とは思はざりけり

この年には，「運動会」が設立され，その規則も制定された。この運動会は校長が会長を務め，「会員ノ身心ヲ強壮快活ナラシメ，併セテ相互ノ親睦ヲ図ル」ことが趣旨であった。

運動会規則は全99条から成るが，そのうち実に78か条をボート関係に当てていることからも，高商におけるボートの存在の大きさを窺い知ることができる。端艇競漕は，春季に大会，秋季に小会が開かれることを定めているが，これが今日の春秋レースの起源である。

明治22年

またこの運動会が明治36年になって創立された「一橋会」の前身であり，その母胎となった。明治22年2月11日，この日，大日本帝国憲法の発布があって後，青山練兵場において観兵式が行われた。その時，都下の文部省直轄校生徒が宮城前に整列して天皇をお迎えし，各校代表が「君が代」を歌うことになった。

ところで，わが校の席が帝大，一高の後と決まったから問題である。一高・高商戦を通じて対抗意識が強まっていた折である。我々専門学校が，何故，大学予備校の後に付くのだと息巻いて文部省に迫った。しかし文部省はこの抗議に取り合おうとしな

い。高商側は，ついに桜田門外にて天皇に敬意を表そうと決議して，その旨を文部省に通知した。これには文部省も当惑し，結局，一高と向かい合って席が定められた。

東京帝国大学競漕会で2連敗を喫した高商では，敗因の一つとして艇の問題が持ち上がった。対校レースは帝大の4艇のうち2隻を用いて行われたので，一高の方は借艇をして練習するのも容易だが，高商はまことに不便である。

そこで3月に石川島造船所に命じて，6人漕ぎの固定席艇4隻を建造して進水式を行った。中国の漢の時代，東西南北を，それぞれ青龍・白虎・朱雀・玄武と言い，四方に「四神」を配することが盛んに行われていた。新たに建造した4艇の進水に当たり，わが校はこれに四神の名を冠した。今日でもこれらの名はシェルエイトの命名に用いられ，一橋端艇部ＯＢ会が「四神会」と呼ばれているのは周知の事実である。

第2回春季競漕大会

4月6日には，これら新艇を使用して，前年発足した「運動会」主催の第2回競漕大会が挙行された。来賓として榎本文部大臣夫妻をはじめ，土方宮内大臣，清国大使夫妻，和蘭・朝鮮各公使，海軍将官ら大勢を迎えた。僅か2か月前の憲法発布日に本学創設者の森有礼が暗殺されているが，榎本文部大臣はその後任であった。

川中では数十本もの打ち上げ花火が上げられ，海軍軍楽隊の奏楽が終日，大会気分を盛り上げた。貴婦人財嚢（レディス・バッグ）賞を目指してのレースも行われた。当日はあいにくの雨模様であったが，全17番，漕程1,000ｍの大会は，盛会のうちに日暮れに至るまで続いた。

第3回一高・高商レース

第2回春季大会の僅か4日後の4月10日，高商クルーは三度一高クルーと対戦することになっていた。このレースは，もはや帝大の校内競漕における招待レースというより，完全に独立した対校競漕の観があった。必勝を期して新艇を建造した高商としては，負ければ体面にもかかわり兼ねない。母校の成長と共に帝大や一高などに負けてはいられないという意気込みが，だれの胸にも芽生えていたのである。

この対抗意識を背景に，選びに選ばれた猛将揃いの高商クルーは，あるいは母校の新艇により，あるいは帝大の艇を借り，必死の練習を重ねてきていた。まだ合宿練習こそ行われていなかったものの，彼らは可能な限りの時間を割いて練習に励んだ。

さあ，いよいよ雌雄を決する時は来た。両校生徒の応援はすさまじく，殺気さえ漂わせていた。観衆の熱狂ぶりもすごい。競漕の始まる前から，赤と言い白と唱え，あるいは高商と叫び，一高と呼ぶ。その大歓声は軍楽隊の演奏と共に河面を震わせ天に届かんばかりだった。

高商の赤艇は１コース，一高の白艇は３コース。それぞれ所定の位置に着き発艇を待つ。号砲一発，まず飛び出したのはピッチ40で漕ぐ一高クルー。ピッチ31～32の高商クルーをたちまちのうちに，２～３艇身引き離す。しかし高商クルーは少しも動ずる気色もなく悠々と漕ぎ，後半の渡場（ワタシ）に至るや一高の疲労に乗じて力漕また力漕。ここで遂に両艇並び，観衆を熱狂のるつぼに叩き込んだ。そのまま両艇なだれ込むようにゴールイン。赤か白か……。

僅かの差で一高が逃げ切り，高商クルーは，三度戦い三度敗れた。落胆は大きかったが，この雪辱を涙のうちに誓い合った。

しかし，敗れたとは言うもののタイムは６分５秒。大学の選手競漕で優勝した法科クルーの６分８秒をしのぐ好記録であった。

三度にわたって隅田の水を沸かせた一高・高商戦により，４歳そこそこの一橋端艇部は校の内外にその名を高めた。校外の競漕会に招待されることもしばしばで，５月には日本銀行第１回競漕会に出漕した。

また，当時の学生ボートの目標とされていた横浜ローイングクラブ（ＹＡＲＣ）の競漕会にも招待され，同クラブとの競漕を試みたのが６月15日。高商クルーの技術レベルは高い評価を受けた。

明治22年の高商の学生総数413名。彼らは青春の燃える想いをボートに託していた。（資料「一高・高商戦漸やく白熱化す」明治22. 4.11東京日日新聞記事参照）

明治23年

当時，大学卒の月給が40円であったのに対し，一橋出のそれはかなり下回っていた。専門教育を受けた者がこれではならぬとして，矢野校長が東奔西走の労をとった結果，23年度卒業生の給料は50円に上がっている。別の見方をすれば，高商卒業生の優秀性が広く世間一般にも認められていたのである。

４月６日，第３回春季競漕大会は，午前10時半から開始された。花の季節とて多くの観衆が集まり大声援を送る中，貴婦人財嚢（レディス・バッグ）賞競漕（来会の貴

婦人達から集めた賞金を競うレース），分科選手競漕などが行われ，全16番のレースを完了したのは午後6時であった。

第4回一高・高商レース

春季大会が終わると一高・高商戦まであと僅かである。どこへ行っても都下ではこの話で持ち切りだった。車屋までが，

「今年は一つ橋（高商）の方が景気が良いそうじゃないか」

「ナニやはり追分（一高）のものだよ」

などと話し合っていたそうだから，今日のプロ野球顔負けの人気である。とにかく，当時の日本では唯一の対校競技であったため，人々の関心の向け方も尋常ではなかった。

このレースに備えて，一高側は言問で，かなり長い期間にわたって合宿練習をした。これに対して高商側は，学校当局が授業の欠席を認めなかったため，練習時間がかなり制約されていたのである。

練習量の差がすぐに力量の差となって現れるのが，ボートの恐ろしさである。当時の選手もそれを良く承知しており，コーチにフランス人のサラベールを起用して，可能な限りの猛練習を積んだ。ピッチやスパートの時期を一高のスパイに知られぬよう，常に川下へ出かけての練習だった。

一般市民や関係者の興奮は，レース当日にピークを迎えた。言問団子のそばから福岡楼，艇庫前までは応援の学生や市民で，文字通り立錐の余地もなかった。皇太子殿下も午後からお見えになり，その他来賓の紳士淑女の数は数百名にも上った。一高側の応援は特に熱心であり，端艇を30隻以上も用意して何十という旗を風に翻していた。

対校レースの雰囲気には，一種独特のものがある。2校による一騎打ちの場合，そこに存在するのは勝者と敗者のみで，その明暗がはっきり分かれる。

応援する側もする側で，興奮のあまり相手の応援団が百年来の敵のように思われてくる。今日の東商戦の熱気とも，全日本などのレースとは，また一味違った強烈さがあった。

特に当時の高商の学生は，一高・帝大にどこか負い目のようなものがある。何しろ商業教育自体が，まだまだ軽んぜられがちな時代である。士農工商の身分制度の名残で，一高の士族出の応援団に，「おい平民，平民！」と威張られて憤慨した高商生も

少なくなかった。一高生の中には，特に乱暴で有名な者もいて，破れ袴に破れ羽織，手に手に青竹の杖を持って「お前らが勝ったら，ぶん殴るぞ」と脅かして回るのである。ある高商の卒業生など，「あの時は，本当に恐ろしかった」と，孫にまで語り聞かせたそうだから相当なものであった。

土手の喧噪をよそに，スタートの時刻は刻一刻と迫って来た。

コースは一高が浅草側，高商が向島側。6名の漕手はオールを手にし，舵手は舵を手にし緊張の面持ちでスタート地点まで小蒸気船に引かれて行く。応援団や数万の大観衆は，ここぞとばかり声を限りの声援を送る。

轟く号砲と共に戦いの火蓋は切って落とされた。スタートでは高商が飛び出し，約半艇身のリードを奪う。しかし，一高も負けてはおらず，力漕につぐ力漕で，中盤は逆に1艇身のリードを奪い返される。終盤，高商は決死のスパートで一高を追うが及ばず。

高商は，またしても勝てなかった。選手の落胆は目を覆うばかりであった。観衆が帰途に就くころ，あちらこちらで，喧嘩が起こった。一高の応援をしに来た者の中には，南無阿弥陀仏の衣を着て，はじめから喧嘩をするつもりでいた者が混じっていたくらいだから，始末が悪い。実際問題として一高が勝ったから良いようなものの，高商が勝ちでもしたら，タダでは済まなかっただろうなどと，まことしやかに囁かれたということである。

一高・高商レースの中止

両校の対立的気分があまりに激しくなり，不測の事態を惧れて，両校当事者は協定を取り決め，当分の間，対校競技を中止することにした。しかし，一高・高商戦がボートに対する一般の興味を高め，漕艇技術の発達に貢献した功績は特筆すべきものがあった。ともあれレースが中止されたことで，多くの人々の期待を裏切り，ボート熱をさましてしまう結果になったのも否定し得ない事実であった。

レース中止の決定に失望した大勢の人々の慰安ともいうべき小説「新宇治川」が，江見水蔭によって翌年に発表された。明治24年4月11日から17日までの7回にわたって「読売新聞」に連載された「新宇治川」は一高・高商戦を題材にして，練習風景からレース当日までの様子を興味深く描いている。（資料編参照。）

登場人物はもちろん架空のものであるが，当時の学生がボートに賭けた，ひたむきな情熱が肌を通して伝わって来る。連載最終回の17日が帝大の競漕大会——本来なら

ば一高・高商戦が行われたであろうその日であったところに作者のヤマがある。小説の中での対戦は，ゴール直前に突如コースに入った漁船のため，両校ファウルとなり，勝負なしで，めでたしめでたしということで終わる。

しかし，この小説も連戦連敗を喫した高商にとっては，何の慰めにもならなかったであろう。フランス人のコーチ，サラベールも明治23年の惜敗のレースについて，

「もっと早くからスパートすれば良かったのに」と盛んに悔しがったそうである。

明治24年

第4回春季競漕大会

新たな年が明けたが，高商生の意気は今一つ盛り上がりを欠いていた。昨年までの一高・高商戦に賭けたあの熱き想いが，皆の胸にくすぶり続けていたが，あの興奮を再び味わうことが，果たしてできるのだろうか。

この鬱積した想いを，春の競漕大会で晴らそうとしたのであった。今年で第4回を迎えた春季競漕大会も，今ではすっかり学生や市民の間に，東京の春の行事として定着していた。満開の桜をバックに，ハイカラなボート競技に興じる学生たちの姿は，岸で彼らをじっと見守るうら若き乙女たちの熱い視線を浴びていた。

4月3日に挙行された春季大会が過ぎても，ボートの練習をする学生の数は一向に減らない。数少ないボートをめぐって，少しでも良い艇を得ようと，皆必死であった。それでも艇を使えるのは良い方で，下手をすると配艇にあずかれないのである。

学校当局及び「運動会」はボートの使用を規制するために，事前に使用許可証，即ち「舟鑑」を交付する方法をとっていた。しかし，陽が昇ってから艇を借りに行っても，あぶれるようなことが度重なると，「それでは夜明け前に出かけよう」と思う者が出ても何の不思議もない。しかし夜明け前では門が開かないから必然的に塀などをよじ登らざるを得なくなる。こうして蔵前の係留場へ忍び込んだ学生が，官吏の見つけるところとなり，哀れにもこの学生は停学処分となるのである。他の学生にとっても，この事件は決して他人事ではなかった。まかり間違えば，自分が塀を乗り越えて忍び込んだかも知れないのだ。しかも物盗りの類ならばいざ知らず，ボート好きが少々行き過ぎただけのことではないか。「同級会」は学校の処置を非難して処分の取り消しを迫った。しかし，学校当局の態度たるや曖昧の一語に尽き，これではラチが明かぬと文部省にまで委員が出された。文部大臣に直接会っての談判も行われたが，停

学処分もやがて解かれ，事件は一応落着した。この事件はのちに「舟鑑事件」と呼ばれ，矢野校長排斥運動の発端となった。

草創期の一橋の学生は，矢野校長ら学校当局の方針通り，わき目もふらずに勉強した。商業教育に対する世間の理解が低ければ低い程，逆に学生たちの勉強意欲も高まった。

しかし，一橋の土台ができて学生の視野も広がってくると，学校当局と学生の間に意見の対立が生ずるようになった。明治22年ころ組織された同級会は，学校当局に対する要望や非難なども討議し，前述の停学処分問題をはじめ，無能な教員の弾劾までも行い，積極的に母校の改革に努めた。

学校当局と学生の対立をもたらした原因は，ほかにもあった。春秋の学内レース，あるいはかつての一高・高商戦のような対外レースへ出漕するクルーは，どうしても午後の授業を休んで，隅田に艇を浮かべねばならない。しかし，学校側は少しもこれを容赦せず，厳重に罰点をつけた。これに対して学生側は，ボートを盛んにする一助として，当局の手加減を要望した。学生係の中にはボートに対して好意的な者もいて，こっそりと欠席の罰点を消してくれたりしたらしいが，矢野校長はあくまでも手加減を認めなかった。勉学がおろそかになることを恐れたのである。

ちなみに一高では，授業を休んで練習することも比較的自由だった。帝大の先輩たる猛者を見習って，牛肉を食ってはボートを漕いで，漱石のいう「ポテンシャル・エナージー」の養成に努めていたのだろう。対一高戦で連敗を喫したのも，学校当局のボートに対する無理解が一因である——このように考えた学生たちは，矢野校長に対する反感を深めていった。小説「新宇治川」の中で，江見水蔭は，学生の気持ちを代弁するかのごとく，次のように述べている。

「それ商にせよ農にせよ工にせよ，人各々士気なかるべからず。殊に我が商業学校にはもっとも貴ぶべきもの士気なり。簿記の得意が商法家にあらず，算術代数の高点を取りたればとて，術は術なり，術のみに依頼して泰然たる度胸なき時は，一生を教師か銀行の手代にて終わるべし。更に言わん，ボートレースは士気を鼓舞するの一部分なりと。再言，ボートレースは一致団結の基礎ともなりて，他日天下の商界に雄飛するに方り，提携大いに得る処あるべし……」

この威勢の良さは，良きにつけ悪しきにつけ現在の端艇部に受け継がれている。

小説「新宇治川」が読売新聞に連載されてわずか10日後，同じ読売新聞に「ある教

育家」が語ったという，ボートレースの三弊害なる匿名の記事が載った。その三弊害とは，

(1)　健康，特に心臓に悪影響を及ぼす。

(2)　レースが過熱して，友愛の情を損なう。

(3)　練習のため，貴重な時間を浪費する。

の3点である。

この知育偏重の教育家が矢野校長であったとは，どこにも書いていないが，少なくとも矢野校長の心の中はこの通りであっただろう。

矢野校長と学校当局への反感が鬱積していた折も折，明治24年12月の第一学期試験に際し，補修科の性質を帯びる地理および簿記の2科目を試験科目から除くことを，本科2年生一同が要求した。これが拒否されるに至って矢野校長排斥運動が表面化し，学生は矢野校長の功労には感謝しつつも，今や退陣の時期到来せしことを勧告した。

しかし，矢野校長の意志は明らかにされず，不穏な空気の漂う中に，明治24年は暮れていった。

明治25年

第5回春季競漕大会

新年1月8日。矢野校長は開校式に欠席した。その出席を要求する学生のために式は混乱し，解散された。1月10日に開かれた同級会で闘争方針が討議されたが，その席上，ついに主導者46名に対し退校命令書が発せられた。一同は痛快を叫んで手続きをとり，事件は一段落した。(『如水会の歩み』17〜22ページ参照)

学内は紛糾の度を高めたが，恒例の春季競漕大会は，4月16日に開催された。一高・高商戦が中止されてから丸1年。血沸き肉躍る対外レースもなく，とかく沈滞しがちなボート熱であったが，これを育くみ来たるべきH・C・S時代への橋渡しとなったのが，春秋2回の校内レース，特に春季の競漕大会であった。

レースは，本科3学年，予科1学年という具合に，学年対抗のレースであった。当時は文字通り「橋人皆漕」で，全校生徒は皆ボートメン，猫も杓子もオールを手にせぬ者の無い時代である。放課後になるとすぐに大勢の学生が蔵前まで歩いて行き，向島付近で練習を行った。「言問団子」も学生でいつも賑っていた。

高商の係留場は，厩橋下流の浅草側に位置し，東京電灯会社の東洋一と称された大煙突は，すぐ隣にあった。艇の上げ降ろしをする台の所から川までは水路が引かれ，艇は引き上げられたまま雨ざらしの状態であった。近くには使用されていない米倉があり，オールやその他の用具はそこに収容された。外には艇番の小屋が一つポツンと建っていた。

授業への出席がかなり厳しくチェックされたため，長期間に及ぶ合宿練習は行われなかったが，明治20年代後半になると，2～3週間程度の合宿が行われていた。

明治20年代に高商生のだれかが作った唄が，記録に残っている最古のものとして知られている。当時のようすがわかって興味深いものである。

神田下宿八時立ち，弁当さげて
行列揃えて，あれわいさのさ，コチャ
艇庫に着いたは十時頃，コチャエー

◇

今日はデパート，チャン揃い，オール出し
右と左に取りすがり，コチャ
エンヤラヤッと艇下ろし，コチャエー

◇

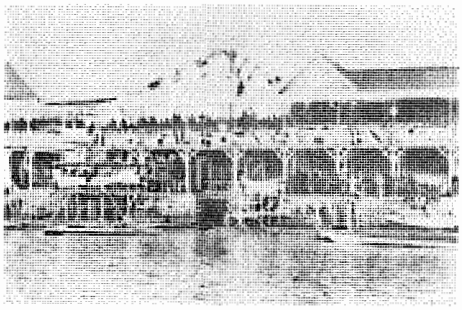
水門漕ぎ抜け首尾の松，ちょっと眺め
いま厩橋へとさしかかる，コチャ
ヘビーを十本ひと休み，コチャエー

◇

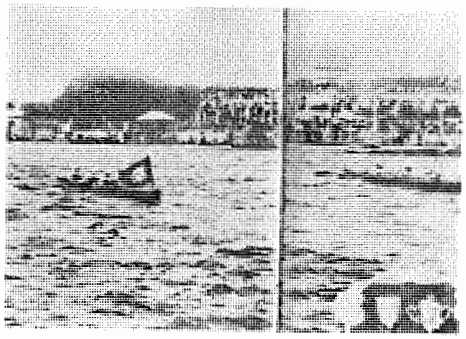
右を眺むりゃ駒形の，観音堂
春の勝利を祈りつつ，コチャ
蒸汽を追い抜け吾妻橋，コチャエー

◇

かかるヘビーに腕が鳴る
オールも折れよとふんばって，コチャ
いつしか学校の桟橋へ，コチャエー



墨堤の盛況



蔵前から競漕場であった向島まで漕ぎ上る情景を，「お江戸日本橋……」の節に合わせて唄ったものである。1番の「デパート」というのは，第一選手，第二選手など

を「ファースト・デパート」「セカンド・デパート」と呼んだころの用語。3番の首尾の松は江戸時代の詩歌によく出た名所。ヘビーとは大正中頃まで使われたスパートの意味である。

春季大会が行われる4月上旬は，墨堤がちょうど春爛漫の頃であり，春の桜を楽しむ者と競漕観覧者とで黒山のような人だかりとなった。江戸時代を思わせるような屋形船での花見客も多く，華やかな競漕大会に一層花を添えた。

出漕艇は美事に塗り上げられ，漕手は黒白だんだら染め横じまのユニフォームに，赤白青黒の色帽をかぶった。会場では，本科3年が売店を開き，様々に意匠を凝らした品を売って，観客を喜ばせた。軍楽隊も必ず来て，レースごとに花を添えるのが，常であった。

レースの数も非常に多く，最後の選手競漕の頃には真っ暗になったため，いわゆる提灯レースが行われた。夜桜を見ながら一杯やって，暗闇の中をすいすいと走る提灯を眺めるのは，非常に乙なものである。今日戸田で見受けられる，消防自動車のような電灯をつけた船では，酒を飲む気も起きぬであろう。

当時の校内レースでは，競漕規則などほとんど無視され，勝てばそれでよいという風潮もあった。中には豪傑がいたもので，相手をオールで引っぱたきつつ勝を占めたということもある。コース侵害も日常茶飯事で，舵手としても，いかに相手の進路を妨害しつつ最短距離を進むかと，研究に余念がなかった。操舵技術は一流でも，フェア・プレーの精神に反すると，大分悪口を言われたコックスがいたのも，十分うなずける。

何はともあれ，当時のレースは明治時代の先人達の気骨をうかがうことができる。豪快で野放図で自由闊達なものであったことは間違いない。

明治26年

明治20年代のボートの興隆ぶりには目を見張らせるものがある。その舞台となった隅田川は，ボートの発展と切っても切れない関係にある。近年の隅田川は再び浄化も進み，昔日の美しさを徐々にではあるが取り戻しているようだ。しかし，明治時代の隅田の水は，練習中に手ですくって飲むことが平気だった程の清流であった。とくに向島は，江戸時代から「文人墨客」のあそぶ風景明媚の名所とされていた。

水面には白魚捕りの網が光り，土手には鯉釣りの太公望が悠然と糸を垂れ，白い帆

を風にふくらませた高瀬船がのんびりと行き交っている。学生達は四季の変化を肌で感じつつ，大自然と一体になってボートを漕いだ。すべてが，まさに詩的であった。

高商では，ここ数年来，矢野校長に対する反感が高まっていたが，この年の4月をもって彼は遂に退陣した。6月には門下生一同による慰労会が開かれたが，彼の胸には一橋への限りない愛着と懸念と失望とが，渾然一体となって渦巻いていた。

矢野校長は，自分の立場上，学生が勉学の時間を削ってまでボートに打ち込むことに喜んで賛成することなど，とてもできなかったのであろう。もちろんボートを全く否定したわけではなかったが，発展途上にあった一橋の将来を思えばこそ，彼はあえて憎まれ役を買って出たのであろう。

しかし，高商の若いエネルギーは，己れの信ずる道を真一文字に突き進んだ。向上の上にも向上を欲してやまぬ一橋は，かくてあらゆる障害を排し，様々な学校制度の改革を試みて行くのである。

明治27年

墨堤を沸かせた一高・高商戦が中止になって，丸4年が過ぎようとしていたが，あの熱戦の模様は，未だに生徒の間で，語り草になっていた。対校戦の経験者は，すでに学校を卒業して，それぞれの道を歩んでいたが，皆それぞれに当時の思い出を胸に秘めていた。

何とかレースの再開はできないものだろうか——この同じ思いは，多くの人々の胸にあった。

明治27年の春，その夢が実現への第一歩を踏み出した。まず口火を切ったのは，一高から帝大へと進み，相も変わらずボートに明け暮れている連中であった。

恒例の帝大校内レースで一高と高商を招待し，対校競漕を復活させようというのだ。早速両校に招待状が送られた。

一高側は直ちにこれを了解した。すぐさま漕手を選び，いつでもレースに応じられる体制を整えた。対校レースの久々の実現を思うとその腕は高鳴るのであった。

しかし，残念なことに，この企ては成功しなかった。高商がこの呼びかけに応じなかったのである。

対校レースを実現させたいのは，高商の生徒とて同じである。しかし競争相手は一高でなく帝大だと考えていたのであった。いやしくも，大学に準ずる専門学校である

自分達が，なぜ帝大の予備門たる一高を相手にせねばならぬかと言うのだった。

成功こそしなかったものの，このときの動きは一高・高商戦再開へ向けての大きな前進であった。明治27年――日清戦争勃発の年のことである。

明治28年

一高・高商戦復活への動き――琵琶湖レース

一高・高商戦の復活が成らずに憤懣やる方ない一高は，その鬱積した不満を晴らすべく，新たな競漕大会の企画を始めていた。

ここ数年来，数多くの競漕大会が各地で行われている。しかしこれらは，一つの団体内部でのレースがほとんどで，閉鎖的傾向に陥りやすく，レベルの向上はあまり望めない。まれに2～3校が互いに覇を競うことはあっても，結局勝ち負けにこだわり過ぎて，挙げ句の果ては険悪なムードにさえなってしまう。

これらの弊害をなくすため，多数の競漕団体の参加を呼びかけ，ついに実現したのが「琵琶湖連合競漕会」――今日の全日本競漕の祖となった大会である。

明治28年7月14日。ここ大津打出の浜に集まった出漕者は，北は仙台・秋田から，南は九州までの各地から馳せ参じた精鋭270余名であった。

この大会に参加した高商生も，全国のボートメンに交じって胸を高鳴らせていた。しかし単独の高商クルーとして出漕したのではなかった。

琵琶湖競漕の最大の特色は，全24番のレースのうち，前半の15番までを占めた混合レースであった。つまり異なる学校の生徒が同一クルーを組み，文字通り呉越同舟といった状態でレースをするのである。

高商の生徒が出漕した混合レースには，ほかに一高・帝大をはじめ，三高・日銀・百十九国立銀行の漕手の顔が見えた。普段はそれこそ犬猿の仲である一高生と同じ艇に乗るのは，「呉越同舟」で何かしら奇妙な気持ちである。しかし，とにも角にもレースに出るのであれば，とやかく言っていられない。折からの大雨の中を各艇に分乗し，スタート地点へと向かった。

レースは中盤まで赤組がリードしていたが，降りしきる雨のため艇内の水を汲み出す作業に手を取られ，ついに白組に追い越されてしまった。

しかし，勝った白組は表彰式上で，あっぱれにも受賞を辞退したのである。実力においては赤が勝っていたことを自ら認めたのである。明朗なスポーツマンシップを標

榜する琵琶湖競漕の大会目的を，そのまま象徴するかのような出来事であった。

レース終了後に開かれたパーティーは，若人の熱気で溢れんばかりであった。あちらに1団，こちらにも1団，酒を飲み放談する若者達の中に，高商生の顔も交じっていた。ボートに秘められた無限の可能性の，そのほんの一端をかいま見たような，ある種の感動を味わったのであった。

日本はこの年，日清戦争に勝利を収め，列強の一員として世界に雄飛せんとしていた。小山新校長の下で活気のみなぎっていた高商は，わが国の貿易，商業の伸長に伴い，ますます発展していくのである。

明治29年

第5回一高・高商戦の開催

一高・高商戦再興の気運は，ここ1～2年の間に急激な高まりを見せた。明治23年に競漕が中止されてからは，時の流れと共に当時の過激な対抗意識も和らぎつつあった。前年の琵琶湖競漕が両校生徒に与えた影響にも無視できぬものがあった。

勝敗のみに固執し過ぎては，何か重要なものを見過ごしはせぬか，勝敗はある意味では時の運ではなかろうか，という考えがあった。

一高と高商の生徒達は，新たな道を模索すべく再び立ち上がった。琵琶湖競漕以来，諸学校間での競漕が盛んになる兆しも見え始めた。一高・高商戦こそがその模範たらねばならない。両校生徒は，かくのごとき気概を胸に，対校競漕復活へ向けて前向きに交渉を進めて行った。

こうして迎えた3月。交渉委員の努力が実って，対校戦復活はほぼ確実視されるに至った。6日には一高の対校選手が発表され，その数日後，ついに第5回一高・高商戦の開催が決定されたのである。明治23年の最後のレースから丸6年。両校生徒の願いは，やっと叶ったのであった。来たる4月11日に決行と決まり，レースまで後1か月を残すのみであった。

一高に続いて高商の対校選手も発表された。漕手は，いずれ劣らぬ猛者揃いであったが，中でも特に勇名を馳せたのが，整調を漕ぐ岸吉松（明29本卒，三谷一二と同期）である。背丈は5尺8寸（約176cm），当時では最も優れた体格であり，校内はもとより一高にも，その名を知られていた。

両校選手は，すぐさま向島にて合宿練習に入った。一高選手の合宿スケジュールを

見ると，朝食前の腕慣らし1回，午前10時，午後2時，午後4時の計4回からなる練習である。クルーが練習をすると，母校生徒の応援やら相手校生徒のヤジやらで，大変な騒ぎであった。

向島では物価が高く，合宿の台所を預かるマネージャーの苦労も大変である。しかも環境の変化によるものか，あるいは飲料水が良くないせいか，下痢のため練習を休む者が両校とも少なくなかった。その都度，監督やマネージャーも，さぞ頭を痛めたことだろう。

一高・高商戦は，あくまでも帝大の校内競漕大会の中の招待レースである。したがってレースには帝大のボートが使われるのである。

練習の際にも帝大のボートが使えれば，それに越したことはないが，高商はもとより一高もなかなか思う通りにならない。一高の艇は帝大のものとは構造が大分違うため，帝大の艇と良く似た学習院のものを借りるなど苦労も多かった。

かかる状況の下，日を追うにつれて高商の練習は厳しさを増した。整調の岸吉松など，力余ってオールを次々と折ってしまう程である。この岸吉松は，極端なローピッチ漕法を主張していた。並み外れた怪力の持ち主であるため，フォワードで精一杯前へ出て，長いレンジを引かねば満足しない。当然ピッチも低くならざるを得ないが，この漕法に対しては批判的な者が多かった。

一高も猛練習を積み重ね，数回に及ぶタイム・トライヤルで自信を深めつつあった。

練習が開始されてから日も浅い3月19日，一高の選手が高商の選手を晩餐に招待した。闘争心を掻き立てるしか能がなかった以前に比べ，大変な進歩である。30日には高商選手が一高選手を招待した。その席上，怪力の岸吉松が鉄製のクラッチを漕ぎ折ったことが話題になったが，「多分虫が食っていたのだろう。」と，彼はこれを豪快に笑い飛ばした。

両校生徒は，大いに意気投合し，レース中に万一衝突しそうになっても互いに相譲り，決して汚点を残さぬようにと固く誓い合った。

緊迫した中にもかつてない和やかさの漂う中，競漕の日は刻一刻と近づいた。帝大運動部は本年に限り大量の招待状を増刷して，その発送に大わらわであった。

満開の桜も風に舞い始めようとする春爛漫の4月。多くの人々の期待と興奮が渦巻く中，運命の11日が来た。見渡せば長江一碧，堤上の桜花は雲のごとくで，艇庫，言問，福岡楼を初めとし，河岸は数万の人出で，ごった返した。

夕方までに8番のレースが完了し，第9番がいよいよ対校競漕である。高商応援団は和船数十隻を連ね，満船に赤旗を揃えての大軍団。陸上の高商生と呼応して挙げる鬨の声は，墨堤を揺るがした。

大観衆の見守る中，一高・高商の両クルーは小蒸気船に引かれてスタート位置へと向かう。高商・高商と叫ぶ声，あるいは一高を呼ぶ声は耳をつんざくばかりである。

両艇の用意が整うと見るや号砲が炸裂。長いレンジで低めのピッチが高商クルー。片や一高は浅く短目のオールにてスタート。スタートが弱いと見られた一高は，予想に反して，たちまちにしてリードを奪う。10漕，20漕――一高はさらにリードを広げる。高商も負けずにこれを追う。レースは中盤から後半へ。河岸の軍楽隊の演奏もさらに激しさを増す。歯を食いしばり最後の力漕――。

ゴールに入るや否や高商クルーのある者は天を仰ぎ，あるいはその場で崩れるように倒れた。一高クルーの狂喜する声が彼らの耳にうつろに響く。暖かい春の風が汗にまみれた漕手の体を優しく包んだ。その風に乗って散る桜の花は，鳴りやまぬ河岸の歓声をいつまでもいつまでも聞いていた。

明治30年

一高・高商戦再び中止

“ボートの会の競漕は，特に優れて花々と　音に名高き高等の　商業校の選手をば　4年がほどに4度とも　いともたやすく打ち負かし　なおも懲りずに進みくる　今日の競漕ものともせず　舵取漕手もろともに手なみのほどをあらわせり”

前年の一高・高商戦で一高側が歌った応援歌の一節である。一高・高商戦は応援合戦があまりに過熱したため，明治23年から一時中断された。明治29年にようやく再開へと漕ぎつけたが事態はさほど好転しておらず，相も変わらぬ熱狂ぶりである。しかも，高商生の神経を逆なでするような応援歌が白昼堂々と歌われては，学校当局がハラハラするのも無理からぬ話である。ようやく再開へと漕ぎつけた対校戦であるが，再び中止の憂き目を見たのであった。

第10回春季競漕大会

春季大会は，この年で第10回を数えた。絶好の日和に恵まれて大勢の観客が集まっ

た大会当日，全18番の競漕で最も人気を集めたのは，日本郵船，日本鉄道，三井，三菱の来賓競漕である。結果は，三菱運動倶楽部の２連勝であった。最終レースの選手競漕もそれに劣らぬ人気を集め，本科３年クルーが優勝を飾った。

９月には新艇が４隻建造されることになった。何分，勃興してから日も浅い日本ボート界である。艇の構造も甚だ幼稚なものであったが，様々な改良も懸命に加えられつつあった。この年帝大工科が改良クラッチを作ったが，これが結構良く走るように見える。そこで高商の新艇にもこの改良クラッチを付けようということになった。

新艇は，石川島造船所で建造され，１隻が400円程した。完成すると高商の選手がこれを取りに行ったが，新艇は細めの構造でバランスが悪い。途中でついに転覆してしまった。

これらの艇のうちの１隻は，朱雀と命名されてレース等で盛んに使用されたが，年月の経過と共に，いつしか老朽化した。明治40年の冬には遠漕に使われて７人の一橋健児を銚子まで運んだが，帰路沈没して２人の尊い生命を奪った。今なお語り継がれる宝山沖での惨事である。

蔵前仮艇庫の建設

明治20年代を通して，高商のボートは蔵前の係留場に置かれていた。しかし，雨露をしのぐ屋根も満足になく，ボートはほとんど雨ざらし同然の状態であった。

そこで，明治30年の秋，新艇の建造を機に，創立以来一橋端艇部の本拠であった蔵前に，曲がりなりにも屋根のついた仮艇庫の建設に着工，翌年３月に完成した。木造延104坪，予算800円を要した。

この年の秋季レースでは，本科１年生クルーが優勝したが，特筆すべきは，その漕法である。対一高戦で連敗を喫した原因は，高商の低いピッチとレースコースでの練習不足にあるのだと考えた。一高の高いピッチでの漕法と，レースコースでの徹底的な練習が，美事に功を奏したのである。彼らの努力に刺激された高商生達は，効果的な漕法の確立を目指して，より一層の努力を重ねていくのだった。

明治30年の６月には高商に専攻部が設置されている。以来，数多くの俊英がここに学んだが，やがては大学昇格運動の中心となり，一橋を最高学府へと導くことになったのである。

明治31年

一橋における漕法の改良は，新艇の完成によって，さらに活発に議論されるようになった。これと同時に，またしても一高・高商戦を望む声も高まりつつあった。1勝もできずにいたのでは，高商の面目が立たない。隅田での練習中に一高クルーが見えようものなら，どうにも虫が納まらない。

しかし，生徒が再開へ向けて躍起となればなる程，学校当局は眉をひそめるのであった。ボートに勝ったの負けたので，大乱闘でも起こされてはかなわない。結局，この年も対校戦はお預けとなった。春の帝大校内レースには，一高と高商が別々に招待され，高商は自校の4クルーのみで，来賓競漕を行った。

この年の春季大会における選手競漕は，大会の眼目たるにふさわしい好レースを展開してくれた。予科と本科1年，2年，3年の4クルーが，文字通り抜きつ抜かれつの大接戦を演じたのである。結果は，年季に物を言わせた本科3年の優勝であった。

なお，この大会のどのレースかは不明であるが，身長の高い者と低い者とを分けてクルーを組んだという記録がある。なかなか新鮮な趣向であると，当時の「時事新報」は述べている。

同年5月，文政当局は従来の小山校長を文部次官に任じ，帝大の書記官である清水彦五郎を校長に任じようとした。しかし，帝大を最大のライバル視する高商生である。帝大の一書記官を校長と仰ぐことに断固として反対した。もっともらしい理由もいくつか挙げられたが，心情的に絶対我慢がならなかったのだろう。

特に卒業間近の本科3年生は，退校の決意を固めての運動を展開した。この運動は同窓会にまで波及したが，最終的には調停が成立し，文相の更迭と校長の依願退職をもって幕を閉じた。事の正否はともかく，当時の高商生の意気軒昂たることを物語って余りある事件であった。これが世に言う「流水事件」もしくは「排水事件」であった。(『如水会の歩み』38ページ参照)

銚子遠漕

学園全体の意気が盛り上がりを見せる中，一橋端艇部の活動も多方面にわたった。

明治31年初頭，本科2年が冬期休暇を利用して銚子遠漕を企てたのである。漕艇技術の向上には，長い距離を漕ぎ，漕いだ本数を増やすことが必要不可欠である。しか

し当時の隅田がどんなに美しく詩的であったとしても，来る日も来る日も同じ場所を行きつ戻りつしたのでは，精神衛生上もあまり好ましいとは言えない。

「隅田の水はテムズ河に通ずる」のだから，その気になれば地球上のどこへなりとも漕いで行けるはずである。テムズへ行くのは大変だから，まずは手始めにというわけで，記念すべき銚子遠漕が試みられたのである。この銚子遠漕は明治30年代中頃になると，すっかり定着し，今日でも毎年夏になると新入生達を楽（苦？）しませている。

5月には学生有志による独自の競漕大会も試みられている。当時は春秋の2回，盛大なレースが行われていたが，今日のレースの数と比べても少なく，エネルギーのあり余った高商生達がたくさんいたのだろう。

同じ頃，一橋のクルーは三井善友会の端艇競漕大会に招待されたが，隅田では他にも様々な競漕大会が催されていた。隅田はまさに洋式漕艇競技が真っ盛りだったが，この年日本体育会で講演したベルツは，立った姿勢で漕ぐ和式漕艇術を，健康上から好ましいと述べている。確かにその方が腰を痛めにくいだろうし，何よりも尻の皮がむけて困ることもあるまい。

しかし，あえて苦しい洋式漕艇への道をひたすら歩む一橋であった。

明治32年

毎年春を迎える頃，高商の生徒は猫の手も借りたい程の忙しさになる。勉強もさることながら，4月の校内レースへ向けて様々な準備に追われるのだ。

レースをする際，何と言っても重要なのは勝つことである。そのためには地道な練習があるのみだ。ある者は学校の物置に特別な装置を作って秘密練習をした。今日のバック台のような物と滑車を使い，漕ぐ動作を繰り返しては，ロープの先に結んだおもりを引き上げるのである。薄暗い物置で埃にまみれて行う練習のため，多くの者には好まれなかった。

レースで漕ぐ事も重要なら，裏方の仕方もまた然り。東都の華とまでうたわれた校内レースも，景気の良い，派手な演出も欠くことができない。陸上では花火を上げ，水上には郵船会社から借りた蒸気船を浮かべ，海軍軍楽隊を招いて，これに乗り込んでもらう。

当日は花見客も大勢来るため，交通規制その他の打ち合わせを，関係各方面と念入

りに行わねばならない。その他にも来賓用の特別桟敷を設けたり入場券を用意したり等々。生徒の多忙ぶりは想像に難くない。

高商の生徒同様，来賓競漕出漕者もまた練習に余念がない。来賓としては帝大をはじめ一高，商船，学習院，日銀，三菱，三井，正金銀行，郵船会社，高田商会員が招かれる。

このうち三菱，三井，郵船の３クルーが対抗レースをすることになって３年目。これが毎年かなりの人気を呼んでいる。やはり異なるクラブの対抗戦の方が，レースが白熱して面白いのだろう。今年もそれぞれレースへ向けて，合宿練習をする程の熱の入れ方である。高商の生徒も，よくコーチなどをしに行った。この年三社競漕の勝者には，時事新報社から豪華な銀杯が贈られることになっており，それが誰の手に渡るのか，注目の的となっていた。

準備万端整った４月９日。北白川若宮殿下のご来臨もあり，花見の客も大勢繰り出し，文字通りのお祭り騒ぎ。毎年人気を呼んでいる財嚢（レディス・バッグ）レースでは，来賓の中を回る錦布の中に300円もの大金が集まった。

注目の三社競漕は郵船が勝って銀杯を手にし，最終レースの分科選手競漕は雨のぱらつく中で行われ，木科３年が凱歌を上げた。

最後の一高・高商レース

一高・高商戦の歴史は，中断と復活の歴史である。レースの白熱化と応援の熱狂ぶりが極限状態に達すると，学校当局が危険を感じてレースを禁止する。そうなるとレースへ注がれていたエネルギーがレースの復活へと方向転換する。学校当局も学生の熱意に負けて再開を許可，そして過熱，またもや中止……。

ところで，この年の動きは，まさに再開へ向けての突進である。明治29年を最後に中止されたままの対校競漕。今までは帝大の校内競漕大会における来賓という形式をとっていたが，今度は両校の独立した大会を開く話が具体化しつつあった。

当局に掛け合った学生は熱っぽく語る。

「スポーツはフェアプレイだ。だからスポーツのために喧嘩をするなどというのは，あってはならないことだ。（実際には結構あったから問題なのだが）剣牛（ケンブリッジ対オックスフォード）などはずっとレースをして来ているが，一つも間違いはない。喧嘩を恐れてレースを中止するなんて恥じゃないか。日本人の恥じゃないか。スポーツはそんなものじゃないんだ。」

学生の熱心な働きかけが功を奏し，対校競漕の復活が許可された。帝大の校内レースからは完全に独立した対校レース――「巳亥連合競漕大会」は，こうして実現の運びとなったのである。

高商の選手は1月から厩橋付近で，一高の選手は2月から向島にて合宿を開始した。裏方も裏方で，毎日のように仕事に追われた。

対校競漕は放っておいても白熱するものであるから，大会の運営はできるだけ質素にするよう申し合わされた。桟敷も設けなければ軍楽隊も呼ばない。しかし生徒の応援だけはいつもと同じであった。例年通り蒸気船や小舟を浮かべて盛大に行う計画である。生徒をいくつかの分隊に組んで，それぞれ持ち場を定めての応援もあった。

喧嘩を恐れた学校側も，種々気を使う。レースを3日後に控えた4月27日――この3月から高商の校長となった駒井重格は，全校生徒を校庭に集めて演説をした。「精一杯の応援をするのは当然のことだが，決して高商の名を辱しめることのないように」とのことであった。

待ちに待ったレース当日――大会本部は帝大艇庫に設けられたが，周辺への立ち入りは関係者以外厳禁であり，詰めかけた新聞記者の不評を買った。

最終レースが両校選手による対校競漕であることはもちろんだが，それまでは両校の生徒から成る混合クルーによるレースが賑やかに繰り広げられた。

午後6時を過ぎる頃，両校選手は用意も整い，蒸気船に引かれてスタート地点へ向かったが，この時高商クルーに若干のアクシデントが起こった。高商応援団の船がクルーに接近し過ぎ，艇に水が入ってしまったのだ。整調の足に掛けてあるストラップの皮の所へ届く程の水である。

本来ならば当然スタート時刻を遅らせて水を掻い出すはずであるが，ここでクルーの面々は，ハタと考え込んだ。土手評では高商クルーは引き潮に強いと言われている。現時点では上げ潮だが，もう少し経つと自分達に有利であると思われている引き潮になる頃だ。ここで水を掻い出してスタート時刻を遅らせては，高商は自らを利するため，わざと水を入れたのだと言われかねないであろう。結局，水を掻い出すことなく，そのままでレースに挑むことにした。

レースは，まれに見る大接戦となった。スタートに失敗した一高は，必死の力漕で中盤に巻き返しを図る。中盤からは再度高商クルーが一高を抜き返すも，船底の水をそのままにしてあるので，速度も落ちるしバランスも悪い。オールが若干バタつく間に一高クルーにするすると出られ，わずか2シート差で涙を呑んだ。

勝負の世界に「もし」は禁句である。しかし，あくまでもフェアプレーの精神に徹した高商ボートメンの心意気を高く評価したい。

この一戦を最後に，両校生徒の願いも空しく，対校競漕はまたもや中止の決定が下された。人々を熱狂させた一高・高商戦は，以後2度と復活されることはなかった。戦後新制となった東京大学と一橋大学との間でレースが始まったのは，昭和24年のことである。

第３期　ＨＣＳ創設時代（明治33～38年）

明治33年

第13回春季競漕大会

明治33年４月８日，第13回春季競漕大会が北白川諸王がご観覧される中で催された。毎年多くの来賓競漕が行われて大会に花を添えるが，この年も帝大，学習院，商船学校のカッターレースや，日本銀行などの社会人クルーを来賓に迎えた。

当時の隅田では，高商や一高・帝大を初めとする学校関係以外にも，三井や三菱等の社会人クルーを多く見ることができた。これらの会社では，社員の健康増進のため大いにボートを奨励しているのであった。それが高じて「ボートの心得がない者は新入社員としてあまり好ましくない」などと言い出す商事会社もあった程である。今日の就職状況を見ても，端艇部員は何故か会社から歓迎されることが多いようであるが，それも昨日今日に始まったことではないらしい。

高商の春季大会では，三井・三菱・郵船による三社競漕が相変わらずの人気である。これらの会社のクルーには，高商時代にボートを漕いだという卒業生が大勢いて，学生時代と同様オールを握っていたのである。

この年の三社競漕は，都合により三菱が出場できず，三井と日本郵船の一騎打ちとなった。その結果，三井が前年の雪辱を果たして郵船を破り，時事新報社寄贈の優勝杯と，中外商業からの優勝旗とを手中に収めた。

来賓の商船学校は，カッターによる競漕である。標的をぐるりと回ってスタート地点へ戻る回航レースで熱戦を見せてくれた。

分科競漕は４レースが行われ，第１レースから順に専攻部，本科３年，予科１年と勝利を得，いよいよ大会の締めくくりとなる分科選手競漕を残すのみとなった。

選手競漕では本科３年が朱雀，２年が白虎，１年が玄武，予科が青龍とそれぞれの艇に乗り込んだ。時刻もかなり遅くなり，各艇は各々赤・白・黒・青の印をつけた提灯をぶら下げてスタート位置へ着く。

号砲のもと各艇スタートすると，その直後に予科の舵手が舵を切り損ね，玄武に接触してしまった。再レースとなって，本来ならば失格のはずである予科も再び参加す

る。しかし再レースでも予科が接触事故を起こし，ついに翌日に持ち越され再々レースとなるが，本科１年が優勝した。優勝のクルーには東京富多山商会からの18円相当もする銀杯と文部大臣からの硯とが贈られた。

高商の校内レースに様々なクルーが来賓として招かれるのと同様に，高商クルーも多くの競漕大会に招待された。この年も一高を初め，帝大，日銀，学習院，横浜連合競漕会，横浜商業学校などの大会に招かれている。隅田には来る日も来る日もボートが浮かび，オールとクラッチの擦れる音が絶えることなく聞こえた。

高商は既に多くの優秀な人材を実業界に送り出していた。日本の経済が発展するにつれて，高等な学理に基づく有能な人材が，ますます多く望まれる。この年の７月，本校同窓会主催の渋沢栄一氏の還暦及び叙爵祝賀会の席上，渋沢男爵は初めて本校の商業大学昇格論を力説せられたのは，まさにそのような時代の要請によるものであった。これに呼応して，10月17日に行われた同窓会秋季総会は，商業大学設置運動の展開を決議した。大正９年の大学昇格達成へ向けての長い道程の第一歩であった。

明治34年

商業大学設置運動は，当時外国に留学していた福田徳三，関一などの９教授達へも波及した。彼らはベルリンに集結し，商業大学の必要性を満場一致で認めた上，いわゆる「ベルリン宣言」を採択して意見書並びに学制調査書を同窓会会誌に寄稿した。

このような内部の盛り上がりにも拘わらず，世間一般の商業教育への理解は，まだまだ低いものであり，為政者の多くもその本質の何たるかも知らずにいた。

この年の６月，「専攻部を卒業したる者は商業士と称することを得」という１条が高商の規定に加えられた。これは単なる称号の変化であるにとどまらず，大学昇格への重要な一里塚となったのである。

躍進する一橋の意気を反映して，端艇部も飛躍への道を歩みつつあった。今日の一橋においても，「一橋のボートが強い時は学問も盛んである。」とよく言われるが，当時の状況がまさにそれであった。

第14回春季競漕大会

第14回春季大会の挙行は４月14日であった。翌明治35年からは，Ｈ・Ｃ・Ｓ制が導

入されたため，明治20年から続いて来た分科競漕――つまり学年別対抗の形をとるのは，この年が最後であった。

ところで，この頃のボートや漕法を見てみよう。当時のレースは固定席式シックスを使用して行われていた。従って，現在のボートよりも，むしろカッターに近いと言える。オールの握り方もカッター方式で，漕ぐ手も下から回すやり方なのである。

レースについてもう一つ特筆すべき事は，コース侵害が日常茶飯事に行われていたことであろう。明治22年に制定された端艇競漕会規則では，「競漕の漕程は1,000mにして直行競漕」と一応なっている。しかし，実際には相手より2～3艇身先んずると，するすると相手コースへ入ってしまい，進行妨害――かぶせ――をするクルーが多かった。技術が未熟でそうなるのではなく，普段からこのための練習をしていたようなふしがあった。

春季大会の賑わいは，今年も相変わらずである。笑いながらの豪快な漕ぎを披露してくれた帝大のクルー。出艇の際に，他のクルーのオールを間違えて装着した三井クルーは，審判にこれを咎められて一悶着。三井は，あわや脱会かと思われたが，何とか円満なる解決を見て，第5回を迎えた来賓三社競漕は三菱の勝ち。

メインレースの分科選手競漕は本科1年の勝利であった。本科3年クルーは，終始4～5艇身の遅れをとっていたため，他のクルーの「かぶせ戦法」の犠牲となった。

本科3年生は，会場で「三年屋」なる店を開き，酒・たばこ・菓子のほかに競漕の賭籤を発売していた。賭けに当たると桜餅がもらえるのである。しかし「三年屋」の連中は，賭籤を親しい人にばかり売ろうとしていたので，翌日の「時事新報」はこれに関して次のようなコメントを載せた。曰く「商売あくせくして外国貿易の理を知らざるか。」既に多くの高商生が社会へ巣立ち，実業界において目覚ましい活躍をしていた。この事実が世間に広く知れ渡っていればこそ，この一文は多くの読者をして思わず微笑せしめたであろうことは明らかであった。

12月9日，数々の偉勲があった駒井校長が突然逝去された。全一橋が涙のうちに迎えた新校長は，官僚的教育家の最右翼とみなされていた文部省の寺田勇吉参事官であった。これに対して，再び学生の排斥運動が起こるのである。

明治30年代に入ると，一橋は以前にも増して凄まじい発展の勢いを示した。行手を妨げる障害物は次から次へと蹴破って突進する――まさに疾風怒涛の時代であった。

明治35年

各学年対抗からＨＣＳ対抗へ

校内競漕大会は，明治20年の第１回大会以来，各学年対抗の形をとっている。しかし回を重ねるごとに，この方法に対して幾つかの欠点が指摘されるようになった。

第１の欠点は，異なった学年との縦のつながりができないことである。在学中にどれだけボートに親しんでも，縦のつながりが薄いと卒業後はつい疎遠になりやすい。それにボートに熱中するあまり落第してしまった場合も問題である。落第にもめげずに彼が校内競漕に出場するならば，前年まで味方だった連中を敵に回すことになる。これを嫌ってボートから遠ざかる者も，少なからずいたようである。

第２の欠点は，公正さを欠くことである。予科は経験の浅さから非常に不利な立場に置かれる。経験豊富な本科２，３年が何と言っても有利なのである。

これらの問題点を解消するために，学内を縦割りにして競漕してどうかという案が，この１～２年の間に台頭して来た。しかしその一方では，伝統ある分科競漕に固執する者も大分いたのである。このような折も折，明治34年の春に予科へ入学した生徒を見て，上級生は呆然とした。とにかく腕っぷしが強いのである。ボートを漕がせてもやたらと速い。34年の春の分科競漕でも，出たレースはすべて勝ってしまった。この分では，今後４年間，彼らは向かうところ敵無しであろう。縦割り案が急速に賛同を得て，実現の運びとなったのは，この時であった。

縦割りの組は三つとし，Higher Commercial School(高等商業学校) の頭文字をとって，Ｈ・Ｃ・Ｓの名前を冠することとし，同時に紫紺に金文字のマーキュリー・マークを刺繍した大優勝旗を制定作成した。こうして明治35年以降，Ｈ・Ｃ・Ｓ第一選手による大優勝旗争奪戦が展開されることとなった。このＨ・Ｃ・Ｓ制の導入は，わが端艇部の今後の発展に計り知れない影響を与えたのであった。しかし２月28日の国民新聞に高商生の神経を逆なでするような記事が載った。それは帝大の学生による「高等商業の端艇選手」と題する記事であるが，文中「高商は力が弱い」「つぶしが利かない」「明快なスタイルの観念がない」などと言いたい放題で，おまけに，Ｈ・Ｃ・Ｓ制のことを評して「どういう分け方か気の知れぬ，物好きなやり方」と決めつけたからたまらない。たちまち高商生の反論が相次ぎ，しばらくの間，紙上を賑わし続けた。

最初のHCSレース

この年の春季大会は，4月6日に予定され，H・C・Sの各組は，わが組こそが初優勝をと練習に余念がない。各組から第一・第二・第三のクルーが出され，第一選手の勝った組に紫紺の大優勝旗が手渡されることになった。

この大優勝旗たるや畳2畳敷の大きさで生地は紫紺の絹。これに金モールで縁取りをして，黒い竿に銀の頭の付いた豪勢な代物であった。この優勝旗がいずれの組に渡るのかと，「国民新聞」紙上には，数度にわたって予想記事が載った。

レース当日，まず観衆の注目を浴びたのは，恒例の三井・三菱・郵船による三社競漕であった。3年前から，この三社競漕の勝者へは持ち回りの銀杯が時事新報社から贈られている。しかし，この年からは2年連続優勝を遂げると銀杯を永久に得られるとあって，前年の勝者たる三菱は大いに意気が上がっていた。春季大会を一層華やかたらしめたこの三社競漕――結果は三菱の願いも空しく三井の勝利に終わった。

西の空にすっかり陽も傾いた夕方6時，大会の最後を飾るH・C・S第一選手競漕が始まった。割れるような声援が渦巻く中，S組が速いピッチでスタートから勢い良く飛び出した。途中からはCの頭を押さえんがためか，隣のコースへ割り込んでの力漕。この策が効を奏してか，凱歌はSに揚がり，Hが2位，Sに押さえられたCは最下位に甘んじた。かくして新しく制定された大優勝旗に初めてのSの金文字が縫いつけられた。

一橋会の創立と橋人皆漕

H・C・S制の導入とともに，明治35年にはもう一つの大きな改革が試みられた。学生の自治会組織たる一橋会の設立である。明治22年に設立された運動会では，ボート部が主体となり，これに柔剣道部等が従属されていた。今回の改革は，文芸に関する諸部を運動会各部に併せ，これらすべてを一橋会の下に統轄しようとするものだった。結局，一橋会の組織として，研究，編纂，英語，端艇，庭球，撃剣，柔道，弓術の8部が設置された。

一橋会設立の中心となった交渉委員――いわゆる六人組が従来の運動会との話し合いに当たり，運動会もこの趣旨に賛同して一橋会への合併を承諾した。その際に端艇部から出された主張により，一橋会はすべて端艇部員から成ることが定められている。これは取りも直さず「橋人皆漕」の制度的確立である。ここにおいて端艇部は一橋会端艇部となり，H・C・S制の下に今後の大発展の基礎を確立したのであった。

一橋会の設立は，校風の刷新をもたらした。時代にそぐわない「高商のしまズボン」は姿を消し，寄宿舎設立論も起こって講演会も開かれた。

前年12月，駒井校長の突然の急逝により迎えられた寺田新校長は，この年の8月に早くも高商を去った。その官僚的な性格が反感を買ったのである。

寺田校長の後を継いだのは帝国大学教授の松崎蔵之助であるが，前職を兼任したままの着任であったことから高商の教授との軋轢が深まって行った。そして，ついに講演会の席上，母校出身の当時30歳若年の福田教授が松崎校長をなぐるという事件にまで発展したのである。

これら一連の校長排斥運動が，帝大・一高への競争心から発していることは間違いない。帝大・一高に勝つことは，全一橋人の願いだったのである。全学の意気の昂揚を背景に，一高・高商戦を望む声がまた挙がった。この年の高商クルーはなかなか強い。一高のクルーと練習中に並べても負け知らずで，「これなら今度こそ勝てる！」と高商生は自信満々である。34年に入学した，例の豪傑どもが揃っていたせいである。

両校から交渉委員が選ばれて話が進展していったが，しばらくたって一高側が言うには，「どうしても校長が許してくれないので如何ともできぬ。」「それでは君達一高が弱いので逃げたのだということにして良いか。」と聞くと「仕方がない。」との返答。かくして当時の新聞にはこの通り書かれてしまったのだった。

一橋の意気の高まりはボートのみに留まらず，庭球，柔道，弓術なども大いに対外試合をし，その名を内外に轟かしめた。特に庭球は，当時王座を占めていた高等師範学校をも破り，新聞紙上を大いに賑わせた。まさに燃えるがごとき熱気をはらんだ一橋であった。

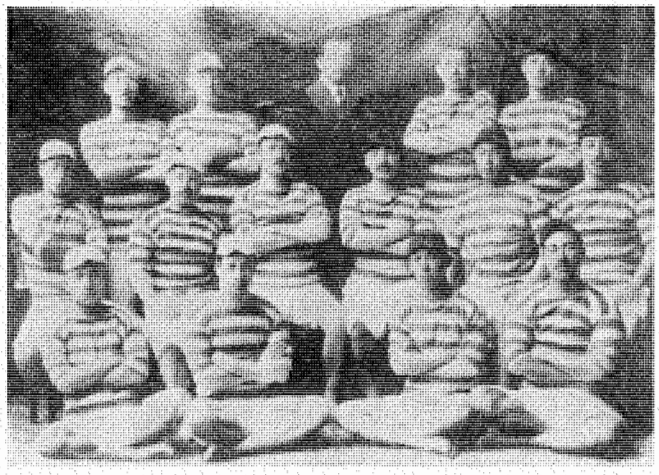
明治36年

一橋会端艇部としての初の春季大会

前年11月に発足した一橋会のもとに高商の運動部が統合され，一橋会端艇部としては第1回にあたる春季大会が4月5日に催された。今年はどの組が優勝するのかと，様々な土手評が乱れ飛んだが，結局C組が勝った。

大会は休日と重なったこともあって，大変な賑わいであった。だれがどうやって数えたのか，当日の人出は学生2割，兵士が2割で残りが何と婦女子であったと，「時

事新報」には書いてある。競漕や桜見物などそっちのけで，乙女に見とれる輩も多かったようである。いかに当時のボートレースが華やいだものであったかを示していよう。



ヒゲを生やしたボートメンも

前年のH・C・S制導入により，学内における，言わば「敵味方関係」は，大きな変化を遂げた。敵として争う他の組には，自分がつい先頃まで一緒に漕いだ仲間もいるのだ。初めのうちこそ何となくやりにくかったが，そこはスポーツたるボートのことである。かつての仲間であるだけに，かえって強いライバル意識を燃やし，より一層練習に精を出した。

漕法も各組ごとに工夫を重ね，キャッチに重きを置く組，あるいはフィニッシュに重きを置く組と，それぞれ特徴を持つようになって来た。各組には世話役と呼ばれる，言わばコーチかトレーナーのごとき役目を持った者もいた。レースへ向けて選手の体力や体調を監視するのである。会計もすべて組ごとに行われるようになった。

ところで，当時を別な面から見ると，ボートがいくら盛んになっても，学業において「ボートを漕いでいたから……」という言い訳は通用しない時代であった。学生達は好むと好まざるとに拘わらず，学業をなおざりにすることができなかったのである。

当時の高商は全員が端艇部員であることを，しっかり自覚していたが，その中でも特に40〜50名の者が中心となってボートを漕いでいた。彼らは様々な競漕会に出漕したり，対校競漕があれば，その選手になったりした。彼らの集まりが，今日で言うところの端艇部の原型であった。

H・C・Sレースでは，組によって青・白・赤のオールを使用していたが，高商クルーとして対外レースなどを行うときは，当時から既に赤いオールを使っていた。かつての分科競漕時代に，一番強かった本科3年クルーが赤いオールを使っていたためである。

しかし，この赤いブレードを対校競漕で見ることがなくなってから久しい。この年にも一高・高商戦を望む声が挙がり，交渉も行われたが不発で，翌年にはついに永久に復活が断念されたのであった。

一高への雪辱の機会さえ与えられないため，高商生の欲求不満は大いに募った。しかしこの不満が校内レースの充実へと昇華された。今まではあまり重要視されていなかった感がある秋季大会も，H・C・S制の導入に伴って活況を呈するようになる。ちなみにこの年の秋季レースは，H組の完全優勝だった。

一橋会とH・C・S制の確立という制度的な充実に伴い，一橋精神は大いなる昂揚期を迎える。

この年の冬，薄ら寒い柔道部の一室で，「六々会」なる一団が結成式を挙げた。ボートメンや柔道部員を中心に，学内有力者を加えた総数21名で，端艇道の精神を振りかざして校風の改善を意図する者達である。六々会のスローガンは会員達の胸にしっかりと刻みつけられていた。曰く「吾人屁理屈を知らず，幸にして元気有り。」

明治37年

一橋会歌の制定

長煙遠く棚引きて　入相の鐘暮れてゆく
隅田の流れ夕潮に　オールを軽く浮ばせて
秋西風に嘯きし　その豪快のあとかたや

今日も多くの橋人に親しまれている一橋会歌の一節である。一橋会歌の歌詞は，明治35年の一橋会の創立の翌年36年6月に公募され，この年の2月15日に本科1年生の植野庄三郎（後に中田，明41本卒）による作が選ばれた。一橋会の理念を謳うべきその会歌の下の部の冒頭は，隅田のボート風景が真っ先に描かれているのだ。当時の学生生活とボートが，どれだけ密接につながっていたかを如実に示して余りある。

この年の初めには新艇が4隻建造された。以前の旧艇には様々な構造上の欠陥があったらしい。舳手には小さい者しか乗れず，クラッチも甚だ幼稚なものであった。

これらの欠点を一新して現れた新艇は吃水線も浅くなり，用材にはチークと桧のみを使い，当時の最先端を行く構造であった。

端艇部資金横領事件

新艇の値段は，大学出の給料が50円とかいう時代に1隻590円もするのだった。一橋会からは新艇建造の補助費として毎年350円が出されるが，今回はその他に一橋会会員やOBから多額の寄附を集めてその費用に充てた。その合計金額たるや実に4,500円に上った。

この金を預かっていたのは，学校の会計を担当していた岩田という事務員であったが，彼は投機事業に失敗し，この金を横領してしまったのである。苦心して集めた4,500円は，わずか50円を残して消え去った。

何と言っても，一番あわてたのは幹事学生である。腹が立つやら情けないやら。支払期日が目前に迫るが，自分達だけではどうすることもできない。OBに頭を下げて寄附を集め直して回る他はない。寄附をもらうというのは，ただでさえ肩身の狭い思いをするものだ。しかも先日の寄附金を盗られたからまた欲しいと言うのでは，きまり悪さもこの上なかったであろう。ある先輩を訪れて訳を話すと，学生達は頭ごなしに怒鳴られた。よりによって，これから実業界へ出ようという高商の学生が，金をだまし盗られるとは何ごとかと言うのだ。絶望した学生達がすごすごと門を出ようとすると，もう一度先程の先輩が出て来てにこやかに言う。「君達はまだ若い。さっき言ったのは教訓だ。これからは良く気を付けるんだぞ。」と，そして差し出されたのは，前回をはるかに上回る多額の寄附金であった。

大変な苦労をして，ようやく必要な金額が集まった。そして集金屋に渡した時は，さすがにうれしくて涙が出そうだった。しかし，その安堵も束の間，今度はその集金屋に金をごまかされた。泣き面に蜂とはまさにこの事だ。しかし学生達は不屈の根性を発揮して襲い来る蜂に敢然と立ち向かった。ボート部の大男を連れて行き，ゴロツキと殴り合いをして金を取り返して来たのである。全額は取り戻せなかったが，足りない分は親から借りて，ここにようやく悪夢のごとき支払劇は幕を下ろしたのであった。

新艇には，早速，青龍・朱雀・白虎・玄武の名が付けられ，1月31日に進水記念レースが行われた。松崎校長・志田教授・関部長の3人がコックスをしての混合レースも行われた。平素のいがみ合いも何のその実に和気藹々とした雰囲気だった。新艇建造の責任者だった幹事学生は，さぞかし感慨深かったことだろう。

この新艇を使って，春季大会は4月3日に挙行された。ロンドン在住のOBからは



第17回春季競漕大会（S組優勝）
菅礼之助(真中コックス)，藤岡忠太郎(中段右)，島金之助，森川一甫，上野憲一，北村敏，津守豊次

銀杯が贈られ，第二選手の勝者が最初にH・C・Sのいずれかの名を記すこととなっている。

当日の応援船の中でも特に目立ったのが，白地に赤くSを染めた大きな旗を翻した荷足船であった。その応援が功を奏したか，第二選手は見事にS組が勝った。2位のH組にわずか1シート差の勝利だった。

第一選手競漕ではスタートラインに間違いがあってレース後一悶着あったが，話し合いがついてC組の優勝で決着がついた。

明治30年代に開始された遠漕は，H・C・S制の導入以来，各組ごとに強化練習の一環として定着していた。蔵前を出発して江戸川へ入り，運河を通りぬけ，利根川を下って銚子に至る往復2週間の大遠漕である。組によって，年末年始にかけて行ったり，夏に行ったりと様々であった。千本漕を取り混ぜた苦しい練習の中にも色々と楽しいことがあった。

有名な「なんじゃもんじゃの木」とやらへ連れて行かれて礼拝をしたり，鉄砲を担いで鳥を撃ちに行ったり……。この年，日露戦争が起きたのであったが，ボートの思い出は尽きない。（この頃の遠漕については，資料編，菅礼之助氏の名文「大利根」を参照。）

新艇の4隻は主として，H・C・S選手専用とされ，一般の漕手は旧艇4隻を奪い合う状態で，その乗艇券は，明治24年の「舟鑑事件」の頃と変わりなく，未明3時には全部先着順で配布済になるという状況であった。

明治38年

この年の初頭，昨年と同様に再び新艇が4隻建造され，練習やレースの際の配艇が少しは楽になった。

2月4日にはS組による単独のレースが行われている。S組の学生・同窓生のほか

に，H・C組からの来賓を加えたレースである。今日では見ることのできない，ファイトある行動である。

春季大会へ向けての合宿は，3月中旬から始まり，各組は虎視眈眈として大優勝旗を目指した。雨天で1日順延された4月3日にレースは行われた。今年は第一，第二，第三選手ともC組が勝ち，C組は3年連続優勝を完全優勝のおまけ付きで手にしたのだった。

5月3日に行われた卒業生レースは雨のため中止となり，代わりに盛大な送別会が行われた。この年の卒業生は明治34年の予科入学生——H・C・S制度のきっかけを作った怪力揃いの学年である。

一同は札幌ビールの園内に会し，飲めや食えやの大宴会を催した。卒業生の中には怪力無双で勇名を馳せた加藤季彦，理論家として右に出る者はなかった岩下家一ら，ボート部の大御所の顔も見えた。

岩下家一は，この年の一橋会雑誌に4回にわたって優れた漕艇理論を展開している。この論文は漕法・操舵術・練習法・競漕会等の5章から成っており，当時の高商のボート理論が，かなり高い水準にあったことを示している。（資料編参照）

この岩下と加藤には，ボート部への貢献が大であったとして，感謝状と銀杯とが贈られた。彼らの胸の内には，ボートとかかわってきた学生時代の様々な思い出が，走馬灯のように駆け巡っていた。

ところで，この第3期HCS創設時代の記述を終える前に，当時の豪快なボートマン気質と一橋愛に燃える青春像の一端にふれてみることにしよう。（以下の記述は，後に如水会の第9，10，13代の理事長になった菅礼之助（裸馬と号す）が，昭和3～4年頃に執筆発表した何編かの随筆に負うところが多い。—菅裸馬著随筆『うしろむき』上・下昭和4年刊所収）菅礼之助は明治33年に東京高商に入学して，明治38年本科卒業まで端艇部に籍をおいたが，後に菅裸馬として俳壇に名声を馳せただけあって，学生時代から非常な文筆家で，詩歌，論説を次々と一橋会雑誌に発表し，またその編集をも引きうけていた。当時は資料編の出漕者名簿にもあるように，明治32年には，村田省蔵，左右田喜一郎，南郷三郎が春の大会の選手となっていた。菅礼之助が入学した明治33年から，その卒業の38年までの第3期には，三浦新七，内田信也，加藤秀彦，岩下家一，小坂順造，加藤弥兵衛，松葉谷良太郎，石田礼助，田村年三，上野憲一，池田源七郎といった後に学，政，財の各界で著名となった錚々たる人材がボートの代表選手に名を連ねていた。このようなボート部の意気軒昂たる学生たちの間にあ

って，菅礼之助もまた傑出した人材の一人であった。

提灯行列事件

明治37年（1904）２月10日に，明治天皇の対露宣戦の御詔勅が下った。10年前の日清戦争では多数の戦死者を犠牲にして漸く確保した遼東半島を帝政ロシヤの領土的野望による三国干渉の圧力で，日本はその還付を余儀なくされていた。その上ロシヤは満州，朝鮮に兵力を進駐せしめて，わが国に軍事的圧力を加えていた。従って国論はたちまちに一致して，かつての国辱をはらし，「東洋永遠の平和」のために，「断乎ロシヤ討つべし」という熱気が日本全国にみなぎっていた。血気にはやる純真な一橋の学生たちもまた，戦捷祈願の一大提灯行列を決行しようとした。菅は頼まれて市中行進のための５節からなる長文の勇ましい晩翠調の軍歌を一夜にして書き上げた。その最初の節では，わが母校の帽章マーキュリーの翼の生えた杖で，アジアに「万世富強の基」を築こうと歌っている。

ところが，肝心の提灯行列の準備が完全にでき上がった当日の夕刻になって，突如として，東大教授兼任の松崎校長は，事なかれ主義から一旦許可を与えておきながら，これを取り消し，提灯行列中止の命令を下した。もとより，学生としては憤懣やるかたなかったが，当時は校長の命令は絶対で，これには服さざるをえなかった。しかしこの軍歌は，当時年少気鋭の福田徳三教授の目に触れて，一橋会雑誌にこの軍歌のドイツ語訳を掲載し，そのまえがきに「余は一読直ちに之を暗誦し」と書くほど感銘をうけた。さらにこの独訳から英訳したものがロンドン・タイムスにも掲載された。

こうした提灯行列事件なども契機となって，松崎校長に対する菅をリーダーとする学生たちの排撃運動がますます高まって行った。（明治42年辛酉事件で松崎校長辞職）また当年30歳の熱烈な母校愛に燃える青年教授福田徳三は，これらの学生たちのよき理解者であり，むしろその先頭に立って堂々の論陣を張って，血気にはやる学生達の喝采を博した。

かくして，たまりかねた松崎校長は，夏休み中の明治37年８月２日に，「文官分限令」をたてにとって，突然福田教授の休職処分を発表した。夏休みから帰ってきた学生たちは，この処分を断乎粉砕すべしと立ち上がった。そのリーダーを務めたのが，他ならぬ菅礼之助であった。今度は松崎校長は，この学校騒動の「巨魁であり煽動者である」という理由から，同年10月11日に一橋会編纂部幹事の肩書をもつボートマンの菅を放校処分にしてしまった。こうした弾圧によって，中心を失った学生騒動も一

応の休戦とはなったが，この処分発表の翌日，鎌倉に蟄居していた福田徳三は菅に「トモヨユルセ」という痛切な電文を寄せている。こうして，学校から同じ追放の憂目をみた福田と菅との間には師弟の関係を越えた交情が燃え上がって行った。そしてこの悲運を共にした二人は相呼応して，一橋会雑誌に母校の現状を憂え，相互の衷情をたたえる名文を，やむにやまれず「匿名」で発表した。

福田教授と菅礼之助の交情

一つは福田教授が「浜の人」というペンネームで，菅の放校処分直後の一橋会雑誌に投稿した「バアンス伝の稿を火くの辞」であった。この一文は前述の菅の「討露の歌」を，スコットランドの熱血詩人バアンスの絶唱になぞらえて，このような俊才を放校した母校の愚策を悲しみ憤っている。この若き恩師の情愛あふれる名文に接して，菅は感泣して直ちに艇友松葉谷の号「痴牛」の名を借りて，同じ一橋会雑誌に2回にわたって，「嗚呼韓文公」なる漢文調の流麗な名文を発表した。これは唐代中期の文人韓愈の伝記（再度左遷の悲運にあり，儒学を尊び，李白や杜甫を敬い，豪放奇抜な詩作に長じた文人）になぞらえて，恩師福田先生を心から敬慕し礼讃した文章であった。例えば，韓愈は教育家なり，学者なり，文人なり，されど時ありてか風雪を叱咤して起つの勇士なり，その燃ゆるが如き熱誠は何物をも焼き尽くすべしと菅は書いている。

幸いにして，この二人は後に復校を許されたのであるが，菅は松崎校長の復校の内示を2度にわたって拒否している。最初は菅の復校に大変尽力してくれていた佐野教授（後に商大初代学長）が，中国旅行で不在中であり，二度目は試験にカンニングした学生と同時であることが気にくわぬという理由からであった。三度目に佐野先生の「身元引受」のもとに，目出度く復校したが，菅は後に「母や妹は嬉し泣きに泣きながら家の玄関を送り出して呉れた」と書いている。

岩下家一の「漕艇管見」

ところで，菅は前述の放校中に，彼の家へ始終励ましに訪れていた友情厚い艇友岩下家一に，勧めて書かせたのが，前にも触れた「漕艇管見」であり，一橋会雑誌に数回にわたって連載された漕艇術の力学的理論的研究の元祖であった。もっとも，その結論だけは，9頁にわたって菅が書いたのだが，放校中のためもちろん名前はでていない。この緒論の末尾に菅が添えた「我輩屁理屈を知らざるも幸に元気あり」のモッ

トーが，広く校内に行きわたり，今日まで一橋ボートメンの標語として受けつがれているのである。（資料編参照）

上野憲一と如意団

菅は余り身長の高い方でなかったので，ボートに初めて乗ったのは，舵手としてであり，その時の整調が上野憲一（明40本卒）であった。菅はこの上野との交友について，のちに（昭和３年）彼の鎮魂賦ともいうべき一文を発表している。上野憲一は丹波の山奥の出身であったが，秋田銀行の頭取の長男であった。菅とは，神田の商工中学の同級生となり，菅より１年遅れて，明治34年にようやく一橋に４度目の入学試験に合格した。一橋入学後も秀才の菅とは違って，いつも成績はビリで，２度，３度落第する仕末であった。「文字通りの弊衣破帽で，垢じみて汚かった」さすが熱血漢の福田教授も「上野は素晴らしい男だが夏分は臭くて困る」とこぼしたといわれる。菅によると，上野は悲憤慷慨を好んで，「感情は激越，思想は奔放」であり，純真で潔癖な道義観をもっていたが，その反面，性格が明るく，どこか人を引きつける愛嬌があった。

菅はボートの権威，岩下家一に師事してはいたが，家一，憲一と両名を平等に呼び捨てにして，裸のつき合いをしていた。ところが憲一は，どういう訳か家一が大嫌いであった。家一は在学中から子爵の身分でありながら，それをおくびにも出さぬ男ではあったが，家一がボートを技術的な合理主義で律しようとする点が，憲一にはどうにも気にくわなかったようであった。そして到頭，憲一の方から先輩である家一に喧嘩をふっかけてしまった。ところが，家一の方は初めから憲一の人物に惚れこんでいて，蔭ではいつも憲一のことを褒めていた位であった。菅はこの家一の心根を，家一の面前で，憲一に諄々と説いて聞かせた。憲一はついにボロボロと涙を流し始め，自分の小心非礼を詫びると共に，この結末をどうつければ良いのかを菅にただした。菅は言下に「ボート道の名において貴様を懲戒する。鎌倉の円覚寺に幽閉するから呼びに行くまで山内を出るな」と宣言し，憲一も一も二もなく，これを承諾して，翌日から厳しい参禅三昧の生活に入った。しかも普通の修行者が尻にふとんを当てがって座禅するのを嫌って，達磨和尚のように夜通し雨に打たれて石の上で座禅を組んだこともあった。

この座禅によって，憲一は人間として大きく成長し，ますます魅力ある人物となって行った。そして憲一は一橋の一般学生に「石炭に値なし，火に値あり」という難解

な檄文を掲げて同志をつのり，一橋如意団を組織した。いうなれば，菅と憲一がその後の永い歴史を誇る一橋如意団の産みの親であった訳である。

かくして憲一は禅とボートを通じて，人間として益々立派になって行った。にも拘らず，一方では学校の成績は依然として振わず，ついに２度にわたる落第のため，旧藩主からの学資金を打ち切られてしまった。憲一は中国に行って車夫にでもなるといい出したのだが，菅の友情にあふれた斡旋で，彼の人材を惜しむ村瀬春雄教授の住込書生として，学資を出して貰い，ボートも力一杯漕いで明治40年にめでたく一橋を卒業した。上野憲一は卒業後，古河鉱業に就職していたが，明治42年５月の辛酉事件の時には，足尾銅山からやむにやまれず一橋に駆けつけている。彼は昭和２年末頃に，ボート時代の親友たちに，「おれは胃癌になった。直に死ぬよ。永々有難う」といって飄々淡々として冥界に旅立ったという。

菅は憲一のボートについて，「オールの引きが強かったが，整調としては，少し頑張り過ぎた。最初の頃はレースに負けると，大雨の夜中に長命寺の竹藪にもぐりこんで慟哭していたが，後には必ずしも勝敗にそれほど煩わされなくなった」と書いている。何れにせよ，菅礼之助を中心とした福田徳三（大正８年～９年端艇部長），岩下家一，上野憲一などのボートにゆかりのあるそれぞれに若々しく個性豊かな母校愛に燃える人物の関わり合いに，今日でもなお尽きぬ興趣があったということができよう。

（註）菅礼之助と如水会　昭和21年５月～昭和27年５月第９代，第10代，昭和32年４月～昭和30年４月第13代如水会理事長を務め，如水会の戦後復興のため尽力され，昭和34年の如水会創立45周年記念には正田貞一郎，田中都吉前理事長と共に，感謝状と金杯を贈られ，また昭和35年６月には，管理事長の功績を讃えるために旧会館敷地内の同理事長の雅号から命名した裸馬亭が竣工した。

また昭和31年11月に発足した「財団法人一橋大学後援会」の募金に当たっても，発足時には相談役として，また村田理事長急逝（昭和32年４月）後は再度如水会理事長として，募金会会長，財団の理事長に就任された。

また理事長退任後，昭和40年に発足した如水会館改築のために設けられた「長期計画審議会」および「財務委員会」の委員長にも就任され，さらに昭和45年８月に発足した「会館改築準備資金募金会」の会長に推されたが，翌46年２月18日逝去された。戦前はいうまでもなく，戦後昭和21年より実に25年の長きにわたり，一貫して母校一橋大学と如水会のために尽瘁された。

第4期　向島ヨール艇時代（明治39～大正8年）

概　　説

校技として橋人皆漕の旗幟の下，逐年隆盛に向かいつつあった端艇部は，狭隘を嘆きつつあった蔵前艇庫より，念願の向島新艇庫への移転を明治39年に果たし，一層の充実期を迎える。船台その他附属施設において，また漕艇人口において，名実共に隅田の第一人者たるの実力を示現した。東大艇庫と並んで，隅田河畔を圧した新艇庫は端艇部員のみならず，全一橋人の心の古里として，また人格形成の修練場として，威容を誇り，大正10年，第2回インターカレッジにおいて，一橋の初の制覇も，この向島艇庫においてであった。また，しばしば皇族各宮殿下のご来臨の会場ともなり，ますますその名を高めたのである。

不幸大正12年の関東大震災により，この向島艇庫が烏有に帰したことは痛恨の極みであったが，このことはまた，復興仮艇庫の建設，さらには昭和5年鉄筋3階建コンクリート造りの新艇庫完成まで，端艇部員の団結の一層の強化の契機ともなった。

この最初の向島艇庫の設計，建設については，後述するごとく，先輩岩下家一の功績を忘れるわけにはいかない。それは，艇庫機能のすべてを具えた見事なものであった。

彼は無類のボート好きであり，このほかにも豊富なる漕艇技術の知識の持主で，当時の第一人者として，一橋端艇部のみならず，わが国漕艇界に重きをなした。不幸にも大正14年インターカレッジの商明による決勝レースにおいて，明大のコース侵害によるファウル事故があり，結局明大の失格，商大の独漕優勝となったが，その処置をめぐり岩下審判長に，心なき一部の批判あり，爾来快々として楽しまず，卒然として漕艇界を去った。わが端艇部のみならず，日本漕艇界にとっても一大損失であった。この39年は，また一橋内で，高商対一高の対校競漕の復活を望む声が高まった年でもあった。

明治40年は，明治33年から始まった東京高商の大学への昇格運動が，社会の耳目を引くに至った年である。端艇部の士気も活動も旺盛であったが，好事魔多く年も押し詰まった12月30日，S組第二選手の乗り組んだ固定席艇朱雀号が，銚子遠漕の帰途，宝山沖にて烈風激浪の中で転覆遭難の事故が発生した。詳細は別項に譲るが，事故の

収拾に，教授会，一橋会，端艇部は全力を挙げて取り組み，一橋の団結力を如実に発揮した。

商業大学設置，一橋の大学昇格というわれわれの要望に対して，大学は帝国大学をもって足るとする文部省との対立が数年来続いていたが，42年に文部省が専攻部廃止案を出すに及んで，有名な申酉事件の勃発となるが，一橋の団結と粘りは，この時も遺憾なく発揮された。

申酉事件は，一応我に有利な条件で結着したが，43年以降になると，一橋全体に偸安，沈滞の気分が次第に蔓延し，校紀ために弛緩し，校風刷新の警鐘が有志により乱打されるに至った。

けだし，日露戦争で高まった国民の士気が戦争終結と共に漸次緩み，さらには戦後不況がこれに拍車をかけた無気力さが，学園にも次第に及んだものと言うべきであろうか。端艇部にもこの影響が必然的に及び，盛大を誇った春季競漕大会への来会者，応援団等も往年の活況を少しずつ失うに至った。

もっとも，かかる現象は，帝大の競漕大会等にも現れ，新聞等からは，各校が学内競漕のみに終始し，対校競漕をやらぬためで，かかるマンネリズムを打破することが必要であるとの批判を受けていた。

漕艇界全般をめぐる雰囲気がこのように変わってきたのは，他の運動競技の台頭，それへの観客の傾斜等も原因と考えられ，やはり時勢と言わざるをえないだろう。

漕艇界自体にも，改革の気運がでてきて，従来の固定席艇偏重の状態に次第に不満が高まり，もっと速度があり，漕ぐのにもより高度な技術を要するヨール艇が，一橋のみならず他校でも，積極的に採用されるに至った。かかる傾向は，各校共に種々の曲折をたどりつつ，大正8年東大による6人漕ぎシェル艇の採用，次いで大正9年，本邦初の滑席艇シェルエイトによるインターカレッジへと発展して行った。

かくして対校レース開催の機運も熟し，8年には東大・早大の間でわが国漕艇界初めての，6人漕ぎ滑席シェル艇によるレースが行われた。わが一橋の端艇部もまたこれへの参加を熱望したが，大学昇格を目前に控えた佐野校長以下の学校当局は，応援学生の熱狂等による不測の事故を警戒して出漕を許さず，鬱勃たる闘志を秘めたまま，大正9年を迎えるに至るのである。

この第4期の14年間を通観すると，初め5年間位は，概ね好調に終始し，中4～5年間は不景気による中だるみ状態，終わりの4～5年間は，また良好であった。すなわち大正3年の第一次世界大戦により，わが国経済界が好景気を謳歌すると共に，学

園も活況を呈し，端艇部も必然的に再び活気を取り戻すに至った。

わが国漕艇界にも対校レースひいてはインターカレッジレガッタ開催の気運大いに高まった。かねて往年の高商一高戦の復活を熱望して来た一橋同人及び端艇部は，対校レースへの出漕実現に情熱を燃やし，士気大いに揚がり，一橋の大学昇格への気運も一段と熟す。かくてこの，ある意味でのストルム・ドラングの時期は終わり，大正9年の大学昇格実現，第1回インターカレッジへの参加という新しい幕明けに発展して行った。

この第4期の時代が，端艇部の性格にどのような変化となって現れたかを見ると，一言にして言うと，通史第3期に至るまでの一橋のスポーツは，柔剣道等の古来からの武道はさておき，輸入されたスポーツとして，いち早く取り入れられたボートは，必然的に一橋の校技となり，「橋人皆漕」ということになった。

ところで，一高対高商の対校競漕が中止となってからは，ボート競漕は専ら春秋の校内競漕に限られたところから，ボート選手はシーズンオフの時には，体力の鍛練・維持のために，ボート以外のスポーツにも，積極的に取り組む傾向を生じた。従って第3期まではボート部員は，スポーツのジェネラリスト（何でも屋）であったと言えよう。事実，ボート選手でありながら，他のスポーツ（柔剣道も含む）の選手を兼ねた者が沢山いた。

この傾向は，第4期の初期ぐらいまで続くが，他の種々のスポーツが入って来，興隆するに従い，それらの個々のスポーツに専念する学生が，次第に増えて来たのもまた必然であり，ボート選手の兼業は少なくなって行き，多少の例外はあってもボートに専念するに至る。すなわちスポーツのジェネラリストからスペシャリストへと徐々に転化して行ったのである。

しかし，一橋のラグビー部の歴史は，大正11年になってからであるが，それは当時冬期のボートのオフシーズンに，寺尾，畑，高橋氏等々のボート選手が始めたのが，きっかけで，当時は東大，早大等の各大学ラグビー部を相手に盛んに対校試合を行った。これなどはボート部が，なお大正年代までジェネラリストたるの体質を残していた一例であったと言うことができよう。

明治39年

向島新艇庫の建設

明治39年4月3日，4年前よりの懸案であった新艇庫が，向島は言問にその偉容を現し，盛大なる落成記念式が行われた。

当日は春季競漕大会も合わせて開かれ，牧野文相をはじめ，フランス・アメリカ・中国の各国公使，浜尾東大総長などの来賓を含め，本校は松崎校長ほか数百名が出席した。この新艇庫の落成により，一橋会端艇部はこれまで朝夕となく親しんできた蔵前艇庫に別れを告げて，昭和31年戸田新艇庫に移るまでの50年間にわたる向島オアーズメンの歴史がここに始まったのである。ちなみに，この新艇庫の建設資金は，同窓会有志その他よりの寄附金を募集して，これに充当した。（収入19,677円68銭6厘，支出建設費等17,662円46銭8厘，残金2,015円21銭8厘は端艇建造基金に充てる。）

新艇庫の設計に係る岩下家一の苦心

この新艇庫を設計したのは岩下家一であった。彼は，スウェーデンからの手紙の中に，「新艇庫の設計は実に一朝一夕の考案に由りしものに非ずして，随分以前より考え尽したるものと申すことに憚らず候……」と，その設計時における苦労談を記している。彼はまず，限られたスペースに最も多くの船を納める方法に苦心惨憺した。当時移動台には，横式，縦式及び放射式などがあったが，艇庫設立地の地形，船の最大収容数，工事（掘下げ工事，無柱艇庫）費用の節約，船揚げ傾斜度の最小化などの点を考慮した上で，縦式移動台を採用した。

もう一つ，彼の頭の中に常に去来したものは，向島艇庫の上に集会所を設けることであった。「……吾等は常に向島に於て特に艇庫の上に一集会所を得ん事を，日夜希望して止まざりしなり，然るに時節到来して新艇庫の設立は計画せられたり。即ち最も激しく我等を刺激せしものは，新艇庫と此集会所の設計なりき……」（スウェーデンよりの便り）

実にこの苦心の結果，集会所が設けられたのであるが，縦式移動台の採用によって初めて可能となったものである。以来集会所で酌み交わした酒は，この移動台のロールが運んだともいえるわけである。

第19回春季競漕大会

さて，この新艇庫完成を祝い第19回春季競漕大会が行われたが，好レースを期待して集まった観衆には，お祭り気分が漂っていた。「時節は花に先立つこと旬日，紅蕾枝頭に充ち」，「我隅田川は瀲灩として春光を浮べ，塘上の新草色燃えんとす」る清々しい日であった。——と部報では記しているが，実は競漕会が開会された8時半には空は一面雲に覆われていたのである。この日起こるべき一つの汚点の兆しであったのかも知れない——それは三社競漕の時に起こった。

時事新報社主催の三社競漕は，明治36年以来行われていなかったが，この日をもって復活したのであった。三菱・三井・郵船の三社は，折しもビール，砂糖，紙などの業界への進出競争が激しく，財閥相互の対抗意識が盛んな時で，各社社員は応援のため大挙押し掛け彩旗を翻し声援した。従ってメインのＨＣＳに劣らぬ白熱ぶりであった。

陽光に美しく映えた青・白・紅の旗をつけた各社の艇は，５時30分，郵船の巧みなスタートで滑り出した。一時は三井が抜き出たが，持久力に勝る郵船は他の艇に４艇身余りの差をつけて優勝し，三菱は三井に僅か１尺の差で逃げ切った。

春季競漕大会における不祥事

河面では，このような熱気みなぎる好レースが行われていたが，ちょうどこのレースが始まろうとしている頃，観戦会場では接待委員と来賓との間に騒ぎが起こっていた。ビールに酔った接待委員が来賓に絡み付き，格闘する等の混乱を生じた。

これに対し，朝日新聞は次のように厳しく批判している。

「斯の如きは果して高商の名誉に関せずや。殊にこの種の会において一部の心無き委員が酩酊し，来賓に対する軽視非礼の態度あり，人々の顰蹙を買ひ競漕会の品位を傷つけたるは慨歎の外なく，かくては終に再び同校の競漕会に赴くもの無きに至らん。」

当時の高商端艇部の活動は，逐一新聞紙上にて衆目の下にさらされていた。まだ西洋スポーツが盛んでなかった時代に，ボートだけは例外的に多くの人々の関心を呼び，中でも高商ボートレースは都民にとって一つの大きな行事であった。そのようなおおやけの会場において，このような見苦しい問題を起こした事は，まことに遺憾な事であった。

H・C・S各組漕法の特徴

さて，注目の第一選手競漕はこの三社競漕の後に行われた。

Hの「円熟自在」な，Cの「一気呵成」な，そしてSの「堅実確固」たる漕法は，各組の漕法変遷の歴史の通りであり，各組固有の技術的特色を発揮していたと，部報は記している。レースは，C組の好スタートで始まったが，国民新聞が「大差なし」と土手評を下した通り好レースが展開され，中盤でH組が一糸乱れぬ力漕により抜け出し，そのまま逃げ込んだ。

予定では，このレースで当日のプログラムは，すべて終了のはずであったが，実際にはこの後，8時20分，日は既に没し強風が吹き，雨雲が垂れこめる中で，第二選手によるロンドンカップ再レースが行われた。

なぜ再レースになったか，その経緯を記しておこう。本レースは，4時半に行われH，S，Cの順に東から位置をとった。ちょうどこの頃から東南の風が強さを増し，スタートからHとSは左に寄せられ，水門，渡場辺りではH，Sはそれぞれ2コース，3コースに完全に入ってしまった。浅草側の3コースからはずれてしまったCは，折からSがHとCの間を縫って抜け出したところで3コースへ復帰しようとして右転したのだが，舵手が舵の角度を大きく取り過ぎたためCの艇首がSの艇尾を衝いてしまった。一瞬Sの艇はほとんど直角にその進路を左旋してしまい，審判艇は号砲を鳴らしてレースを中止したのであった。

審議の結果，H，Sは他の航路を妨害したという事実はなく，Cに関してのみ接触の直接原因たる責任があるとして，再競漕の出漕権を剝奪することに決定した。

この決定は，当然の措置ではあったが，Cにとって耐えられない程，口惜しいものだったであろう。ボートレースは，正に水ものでありレース中何が起こるか，分からない。漕手の体調だけでなく，風，波，流れなどによってレース展開に思わぬ椿事も起きる。このC組第二選手たちも，その無念さを味わされたのである。

H組にとっても，中止の号砲が鳴った時，すでにゴールインしており「今さら…」という気持ちがあった。しかし，再レースはやむを得ないものであった。見物人は一人残らず帰ってしまい，今にも雨の降って来そうな闇の向島にHとSの間で再レースが行われた。S組が勝ち，H組は艇内に倒れ伏し，C組は土手でこのレースを見守った。

この後，新艇庫と共に高商端艇部は起伏烈しい永い歴史を刻んで行くのであるが，

この大会，このレースはその前途を暗示するかのような諸事件の続発があったのである。

対校競漕への期待

明治39年11月４日には，秋季小会が催された。快晴無風の絶好のコンディション。第三選手はC組を振り切ってH組が，第二選手はS組を半艇身抜いてC組が，そして注目の第一選手は，C組とH組とが並んで雁行し，コースを気にしているうちに，S組が独り差をつけ優勝した。

このように，校内レースは年々盛況裡に毎回行われていたが，一高との対校レースは32年を最後に中止されていた。一高に対して激しい対抗意識に燃えていた高商端艇部としては，誠に歯がゆい日々を送っていたのであり，端艇部員ならずとも墨田川の華がなくなったことに物足りなさを感じていたのであった。

このような折，秋季小会の12日後の11月16日，次のような文面の書簡が，早稲田大学端艇部からわが高商端艇部に舞い込んだ。

「……御承知の通り都下陸上諸運動の隆盛に反して端艇界は全般に亘りて今や沈静の極に達したりと申さんずる有様にて，特に貴校対第一高等学校との端艇競漕中止となりてより隅田川も寂莫として吾人端艇部員は何となくもの足らぬ様感じ候……（中略）……貴校に対し弱年の弊校我を不顧，競漕を申込致すとは，いささかあつかましき事には候へとも……(後略)」

早大端艇部は，前年慶応義塾との対校競漕の第１回を行い，早大が勝ったものの，それが最初で最後となり中止されていたのである。「当時の学生の気質は大変荒く，早稲田対慶応の野球試合なども，応援団の間に喧嘩騒動があったりして，中止されることになった。」（木下照太郎，40年記）とあるように，ボートにおいても，対校競漕はどこの学校でも規制されていたわけである。

この申込みに対し本校端艇部は，「目下当部に於ても学生間に於ける運動会の状況に鑑む処有之……」という理由で断っている。

高商端艇部はこれより先の高等師範の挑戦状及び翌年２月の神戸高商からの申込みも断っている。しかし，これらの申込みの拒絶は，対校戦が学生間の騒動を巻き起こすという理由からではなく，高商端艇部には実力において勝る優位感があったからであって，その証拠には５敗を喫したライバル一高には，再三再四，対校戦復活を申し入れている。

そして，機運熟せりとばかりＨＣＳ合同の対校候補の２クルーが，片や帝大も法医工３学部の合同クルーが，それぞれ千住大橋辺りで秘かに練習し，その日に備えていたが，結局これは実現されなかった。高商端艇部としては，当時最強のクルーを擁していたので，帝大側が「若しや」を危惧して応じなかったのではないかと考えたが，このように面子にこだわる意識は高商が早大，神戸高商からの申入れを拒絶した時にも，大きく作用したことは疑いなく，高商端艇部員は端艇部の名誉と繁栄は，そのまま学校の名誉と繁栄につながるとの信念に燃えていたのである。

全校に普及したボート

かくて母校を愛する気概と誇りを持つ高商端艇部員であったが，毎日練習している者，土曜・日曜に友達と集まって艇庫へ来て練習する者など，様々であった。それは生徒がＨＣＳのいずれかに属し，一橋会員が全員ボート部員であるという，他の学校に類を見ない制度からすれば，当然のことであった。つまりＨＣＳ対抗選手として優勝を目指す者だけでなく，ＯＢ生徒の誰もがボートを楽しんで漕いでいたのである。

ＨＣＳの弥次レースも甚だ盛んであり，出場者が多くてプログラムを作るのに苦労した程であった。また遠漕も選手以外の参加があって賑やかであった。特に春の大会は家族的で，見合いの場所となるなど皆レースを楽しんでいた。そして高商のレースともなると有名であっただけに，学生以外の観衆も多く集まり，艇庫は紳士淑女の華やかな社交場となったのである。

一橋会員にこれだけボートが普及愛好されていたのには，様々の理由が考えられる。

一つは，ボートという競技そのもののもつ魅力である。ボートは他の競技と比べても全員の調和が特に要求されるものであり，そこにおける一体感の微妙さが人々の心を捕らえたのであった。そして，「個人を捨てて全体に尽くすという，そんな野暮な考えはなく，（ボートという）スポーツに同化（融合）していた。」（松葉谷，明39本卒）

さらに，ボートはゆっくり漕げば隅田川に浮かぶ遊覧船であり，多分に憩いの手段となる要素を含んでいることである。日露戦争の勝利で意気上がる当時の人々の格好の娯楽であったし，のんびりした学生生活を送っていた当時の一橋生の空気とも合っていた。そして，当時の財界にはボートを漕いだ卒業生が大勢おり，ボートがいわゆるステイタス・シンボルでもあった。このことは，ボートが実業界に強い支持者を持

っていたことを意味していた。このようにボートは多くの人々を惹きつけ，そして盛んになって行ったのであるが，一橋会費の少なからぬ部分が端艇部に割り当てられ，先輩の寄附と相俟ってオールその他設備全般にわたって急速に充実していったことも，多数の一橋人にオールを握らせる誘い水ともなっていた。

ボート部員の生活

ボートが大衆化し普及化し，娯楽となったとは言え，ボートのスピードを競う，レースとしてのボートが盛んであったことは言うまでもない。観る人々にとっては，緊迫したレース展開は，正に無我夢中，あたかも自分がレースをしているかのような興奮の極に達し，勝敗に一喜一憂するのである。もちろん，ボートマンも勝つために青春の一時期を，すべてボートに傾注し，厳しい練習に耐えて行くのは，昔も今も変わらない。ボートに憑かれた青春群像である。

向島に新しい艇庫ができる前の旧艇庫は，蔵前つまり両国橋と厩橋との間にあり，昔，幕府の禄米を蔵入れするために使った堀割の跡を艇の出し入れに利用していた。艇庫などと呼べるほどのものではなく，艇を4～5隻並べられる程度の粗末な平屋造りで，文字通り舟置場であった。しかし，その頃から練習はすでに向島で行っていた。そして土曜・日曜などの休日に行うだけで，平日はあまり練習しなかったが，逆に言えば土曜・日曜ともなると端艇部員は挙って隅田川へ集まり漕いでいたのである。

練習には，別に決まったコーチは付いていなかったが，先輩が時々艇庫に来て漕法技術を指導した。学生の方でも漕法を良く研究している者もあったが，ほとんどは次のようなものであった。すなわち，

「私は田舎から出て来て世界が全く分からず，動物の代わりに漕いでいただけだから，ボートのことについて，何か伝えよと言われても何も持っていない。ボートについてはCOXの方が良く知っているだろう。私はただ牛馬のように漕いだだけで，牛馬のように漕いで気絶したことがある。」

と松葉谷良太郎（明39本卒）は述べている。

実際，選手と呼ばれる人の練習量は他の人と比べて遙かに多かった。休みになると練習をするか，遠漕するか，いずれにせよ河の上にいるので，東京のことは何も知らないという人もいた。ただ，レース前日ともなるとレース前の1か月に及ぶ合宿生活の疲れをとるため，練習を休み，全員で浅草公園を散歩したりする。雷門のところの食料品店に入れば，すももなどの缶詰めを買って帰る。当時合宿中は甘いものを禁じ

られていたので，とてもおいしく感じられた。

さて，この明治39年に再レースを演じたセコ選手達はどのような生活をしていたか。C組の第二選手は隅田園という菓子屋の2階を合宿所としていた。レース1か月前から漕ぎ始め，1週間位は向島で合宿した。夕食後，第一選手の合宿所にセコとサードが集合し，冗談話や疲れホグシをやり，兼ねてバック台で100〜150本を1〜2回やる。「C組の漕ぎ方は実に一生懸命力一杯の漕ぎ方」であった。(矢島富造明40本卒談)

H組はいわゆるスタイリシュで，軽妙，技術を極めた漕ぎ方であり，これを指導したのが一橋ボート部の歴史に永遠に残るべき岩下家一であった。学習院の中等科から来た彼は，隅田川の主とも呼ばれ，カレント（川潮の流れ）の研究から岩下漕法を編み出したその人である。

「岩下舵手の合宿及び遠漕の日々は，早朝静かに起き出して朝食並びに諸々のその日の準備をしてから初めて漕手を叩き起こす。毎食の献立から，猛練習のため手の豆，尻の皮を破りパンツを血に染めるものも珍しくないが，それを一々丁寧に消毒し治療してくれるのも，彼の仕事だが，イヤな顔などついぞ見せたことがない。だから猛烈な練習を強行しても，誰も文句を言わないのはもちろん，陰でこぼす者もなく和気藹々，レースの日を楽しみに待ったものである。」(田村羊三明40本卒談)

このようにコックスが家政夫（！）となって苦労をしていたのである。合宿費用はすべて選手の自弁であり，それだけに賄いには格別苦心していたが，食べ物のことになると，話は尽きない。向島名物の言問団子，本郷中央会堂横隣りの牛めし屋，両国辺りで買って来る馬肉等々たまらなく旨いものであった，当時のボートメンたちが追憶している。

明治40年

春季競漕大会

日露戦争の勝利による商工業の発展に伴う商業大学の必要性，すなわち高商の大学昇格の気運の高まりが，一橋の学生の間に広がりつつあったこの年も，春の向島は高商の端艇競漕会が初頭を飾っている。

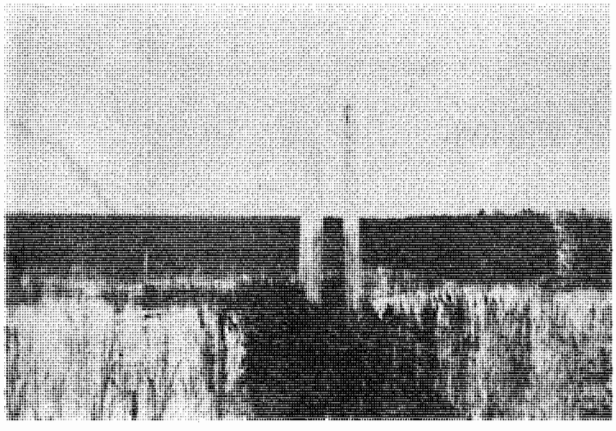
レースについての「国民新聞」の土手評は，ＨＣＳ各組にわたり詳しかった。新聞記者のボートに関する知識の豊富さもさることながら，世間の関心の高まりを反映して，かその取り上げ方は隔世の感がある。

ところで，土手評はH有力であるが，新聞では「Ｓには特徴の奇襲」があり，「Ｃには猛烈なる漕法」があると書いた。予想に反して，潮は上げ止まりの微風の好コンディションの中，Hが２年連続優勝を果たしている。H組は，前述の岩下家一式のスタイリッシュで軽妙な漕法，Ｃ組は加藤季彦の黙々として力一杯の漕ぎ方，Ｓ組は理屈，議論が好きだった――と当時の選手達は各組の特色を語っている。

さて，５月には本三送別レースが隅田川上流で行われている。卒業が迫り試験準備に多忙ながら，多くの本科３年生が出漕した。送別レースという意味からすれば，今日でいうところのＨＣＳ大会のようなものであるが，内容は全然違っていた。混合・対部・語学の各レースに加えて，貧士・人種・対級というレースもあった。貧士レースとは「神士」をもじった訳のわからぬものだが，当の選手も，「貧士」という名がいやで，結局，「赤２隻レースで赤の勝ち」という記事になって残っている。人種レースは，蝦夷・贅六・琉球と分けたようだが，なぜそう呼ばれたか，わからないが出漕している。

学級対抗レースは，本一・本二・本三が競漕するものだが，この年は本三が大人振って本一に花を持たせ勝たせている。要するに，和気藹々といった楽しい送別会である。

朱雀号の遭難



宝山沖の卒塔婆

６月27日には，H組が他の組に先駆けて夏の遠漕に出発している。船は青龍(シックス)で，積んだ荷物は角砂糖，軍用ビスケット，ジャム，セール２張り，オーニング錨１。30日には銚子に着いているが，大新の近くの河口では，水揚げされた鯨を見ている。Ｃ組だけは出水のため行き先を荒川に変更した。初日

は戸田の宿屋で宿泊している。

12月末には，例年のごとく，ＨＣＳ各組は銚子への冬季遠漕を挙行した。Ｓ組第二選手の乗った旧練習艇朱雀号は第５日目の12月30日，大新を辞して帰航の途中にあった。やがて笹川水道に入ろうとしたとき，折からの寒風は狂ったような烈風となり，恐怖の三角波となって７人を襲ったのである。



辛くも一命をとりとめた５名の謝恩記念写真

「……不幸なる７人は巨浪の中に漂えり，舳手柏木は直ちに艇より放たれて巨浪中に浮沈するにぞ，矢ケ部は大声にて『艇を離すな』と呼びしに『応』と答えしのみにて，終に其の姿利根の浪中に消えぬ。幾度か廻転せる艇に辛うじて縋れる６名は此時上流より来れる帆船を望みて，声を挙げて救助を求めしが，来るよと思いし彼船は舵を転じて下流に向えり。村井はこれ迄と覚悟しけん。首をシートの下に突き入れて艇と共に廻転し，終に放れて水底に沈みぬ。……(朱雀遭難記事より)」

残り５名の漕手達も死を覚悟して「一橋会万歳」を絶叫した。しかし，宝山に住む柳川家の人々が協力して救出，５人は九死に一生を得た。一橋学生遭難の悲報は全都に伝わり，人々は悲痛の思いでこの事件を受け止めた。事件の翌日から船21隻，人夫百余人を動員しての遺体捜索が行われたが，困難を極め，結局元旦に村井選手，１か月後の１月28日に柏木選手の遺体が河底から発見され，引き揚げられた。

この痛ましい事件に際し，これが収拾諸対策の中心となった一橋会は，一致団結し事に当たったが，この事件は一橋会のその後の結束・発展の転機ともなった。

この年の４月には端艇製造基金を募集し，その額2,317円71銭８厘に達したので，端艇３隻，ヨット１隻と，４隻分の船台を建造し，その決算報告を行っている。

明治41年

春季競漕大会

朱雀号遭難という暗い雰囲気の中に，一橋人は新年を迎えた。一橋会編纂部は全校より弔慰の詩文を募り，遭難者の霊を慰めた。また朱雀号遭難の詳細記事が一橋会雑誌39号に掲載され，また遭難学生弔慰捜索資金の募集も行われた。また遭難事件責任問題の調査審議を行っていた端艇部は，生存者５名には責任なく，全くの不可抗力による事故であるという結論を発表した。こういう雰囲気の中で３月４日に行われた春季競漕大会は，当然のことながら遭難選手に対しての慰霊の意味を持つものとなった。

さて，この大会，H組は前回大敗の雪辱を果たさんものと意気高く，C組は体力的に恵まれ必勝を期す。S組は艇友の霊を慰めるために優勝せんと，物凄い練習をしてきた。そのレース結果は，第二選手は接戦の末，半艇身の差でS組が勝った。そして注目の第一選手レースは……

「来賓として出漕せしは帝大・一高・商船・学習院・日本銀行の６クルー，何れも奮漕力漕劣らぬ中に殊に目立ちて観覧者を騒がせしは，第二選手と最後の第一選手競漕なり，第二選手のS組は彼の利根川沖の遭難生存者（中村・南を除く），艇も変らぬ朱雀号。艇庫の人，土手の人，何れも同情の眼を朱雀号に集注せり。」（明治41．４．４読売新聞）

レースはH組が早いピッチでスタートから飛び出した。H・Cに遅れをとったSは水門ではHに１艇身の差をつけトップに立ち，その死力を尽くした奮漕は，見事効を奏して，Hに先立つこと２艇身半の大差をもってゴールに入りロンドン杯を手にした。

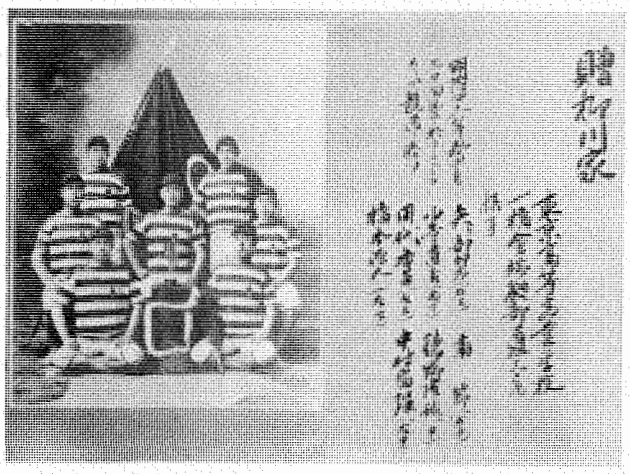
彼らは見事にその期待に応えたのだった。サード，セコ共にS組が既に勝っている以上，続いて行われた最後の第一選手レースには，期せずして墨堤の人気残らずS組の赤艇に集まった。この期待に応えて第一選手もS組が勝ち，S組は全勝をもって２人の友の霊に捧げることができたのだった。しかも，S組の優勝は実に７年ぶりであった。

宝山の卒塔婆

夏休みに入ると各組とも恒例の遠漕に出発した。そして思い出多い宝山に亡友の悲

しき跡を弔い，かつ柳川家を訪れ，その御厚意を謝したのであった。以来，現在に至るまで銚子遠漕の折には必ず柳川家を訪れる慣習が続いている。

戦前は利根の水中に立つ卒塔婆に対し奉納力漕を行った。これは一橋ボート部のみならず各校ボート部もこれを行うを常とした。戦後は河川改修により卒塔婆を立てることができなくなったので，昭和51年柳川家の重ねての御厚意により同邸内の一角に，石造りの慰霊碑を建立した。現在のボートメンは遠漕の折，柳川邸内の慰霊碑を訪れている。柳川家のわが端艇部への御厚意は筆舌に尽くし難い。



S組第二選手



S組第一選手

各校の新艇建造熱

この頃，各校共新艇の建造が盛んで，艇のスタイルはほとんど一変している。この変化は明治39年ごろから起こってきたもので，元はと言えば38年に本校を卒業した岩下家一の置き土産である40フィートの快速艇（いわゆるヨール艇）である。この艇にならい，早大，帝大などの各校が研究を重ね，新艇作りが活況を呈した。その最後に出来上がったのが，慶応の42フィート艇である。新たにアウトリガー方式を採用し，隅田川端艇界に新紀元を画したのであった。（英国のアウトリガー採用の1846年から数えて62年おくれとなる。第1章参照）

漕法の変化

新艇の普及が漕法に与えた影響は大きく，いわゆる「スタイル」の重要性が著しく

減じた。当時の「スタイル」は，大きく分けて「カッター漕ぎ」に顕著なように力をストロークの後半に用いる「バック」フィニッシュ漕法と，ストレンジ教授が伝えたストロークの前半に力を用いる「ジップ」(dip) キャッチ漕法とに分けられた。

この二つの漕法の艇足に及ぼす影響は明らかではなかったが，レースにおける安全性という意味では「ジップ」が有効であり，漕法の主流を占めていた。しかし，快速艇が普及し，レースコースを短時間で漕ぐことが可能になり，さらに当時の選手の体格の向上も加わった結果，「スタイル」にこだわって労力を節約しなくともよくなった。すなわち，「スタイル」は軽視され，体力の差が勝敗を決することになった。そのため，レースがすこぶる単調となったと嘆く向きもあったが，技術進歩のもたらしたもので，やむをえないところであった。

しかしながら，「スタイル」が完全になくなってしまったわけでなく，やはり一般には「ジップ」が主流であり，我が端艇部も艇のシートが低いという理由もあってか「ジップ」即ちキャッチ漕法の傾向を持っていた。

明治42年

大学昇格問題と申酉事件

この年は一橋史上有名な申酉(しんゆう)事件の起こった年として永く記憶されるべき年である。

前々年に端を発した商大昇格問題がいよいよ燃え上がり，学内は騒然としてきた。2月以来連日の学生大会，文部大臣への請願，松崎校長がこれを拒否し学生数名の退学，無期停学を命ずるや松崎校長排斥運動起こる等緊迫した事態を呈するに至る。

4月一橋同窓会は東京高商を改組し商業大学とし，これに高等商業学校と同一程度のものを併置せしむることを決議し，時の小松原文相に陳情した。文部省は帝大教授会と諮り法科大学内に商科大学設置を決定，5月省令をもって専攻部廃止を発表した。一橋の教授，学生，同窓会の反対のみならず，大隈重信以下，朝野を挙げて文部省への批判が高まった。

5月5日松崎校長辞職，関・佐野・瀧本3教授らの依願免官，そして5月11日，学生総退学という最悪の事態になり，本校の存亡にかかわる重大危機に直面した。24日に至って五商業会議所等の委員会が，学生の主張貫徹に努める旨の調停により，学生復校，6月に専攻部4年間存置の省令を発し，事件は一応収拾されたのである。7月

には卒業式を迎えたが，今後専攻部問題，大学昇格問題は未だ解決したわけでなく，将来への問題をはらんでいたのである。しかし，この申酉事件でボート部員を中心とする柔剣道部など運動部員の愛校心に燃えた活躍には目覚ましいものがあったといわれている。

第22回春季競漕大会揚子江杯の受贈

このような中にあっても，春の隅田川の初頭を飾ったのは，やはり他ならぬ我がHCS対抗レースであった。この年，上海在住の高商卒業生から第三選手に揚子江杯が贈られ，どの組がこれを獲得するか大きな興味を呼んだが，接戦の末，処女杯はS組が獲得した。

第一選手は，体力で優位に立ち前評判の高かったC組が，僅か¼艇身内外の差でS組を押さえて優勝旗を手にした。C組は前の秋季大会も勝ち実力随一であったが，スタート直後に艇首に障害物が附着し進行を妨げるという不幸なハプニングが起こったものの，これを物ともせず勝ちを収めたのは見事であった。

遠漕は，この年も9月と12月に行われ，予科クラス選手セレクションレースも11月29日に行われている。来賓競漕としては，帝大，明大，高工，附属中学などの競漕大会に出漕している。

なお，この年の秋には向島の土手が2か所にわたり決壊している。当時，秋になると台風や大雨のため隅田川が増水し，向島辺りがよく決壊していた。向島には言問団子のような2階建ての家は少なく，ほとんど平屋だったので，出水の折には相当の被害を出すのが常であった。

明治43年

開校35年，一橋やや安逸の気分

本学にとって，この年は開校35周年に当たっており，日韓併合の1か月後，9月22日には，その記念式典が盛大に挙行されている。5月11日には，申酉記念式が盛大に開催され外部的には申酉事件結着後も引続き本学団結の堅固さを示したが，内部的には申酉事件に結集した情熱が沈静すると共に，反動として一種の安易かつルーズな気分が学校内にはびこり，具眼の士には一橋の危機と映じ警鐘を鳴らして懸命に一橋同

人の覚醒を促していたのである。

第23回競漕大会にかげり

このような一般の安逸をむさぼり閑居不善をなす気風はおのずから学生においても色濃く反映されるようになった。すなわち，４月に開かれた春季競漕大会では，４～５年前に比べて応援隊も極めて活気の乏しいものであった。「橋人皆漕」の伝統で結ばれていた本学学生にも，校風の変化の波が押し寄せてきていたと言えよう。

しかし，これは一橋に限ったことではない。日露戦争で高揚した士気がそれに続く不景気で沈んで行った社会全般の風潮と無関係ではない。明治も終わりになると，向島の競漕大会もその全盛時代を過ぎ，墨堤の観客の数もめっきり減り出した。当時の新聞によると，レースとレースの間が長いので退屈であること，対校レースをやらないので盛り上がりに欠けることなどを原因として挙げているが，４月に行われた明治大学競漕大会が，この年最も盛会であったのは，秋に早稲田大学との対校レースを予定していたからであった。

新艇進水

１月23日，本校ボート部は新ヨール艇（クリンカー艇）４隻の竣工に伴い，進水式を挙行している。４人漕ぎ滑席艇(クリンカーフォア)は，明治18年，ストレンジの指導により，東大と横浜アマチュア・ローイング・クラブが競漕で使用しているが，６人漕ぎ滑席ヨール艇の本格的採用に踏み切ったのは，本学をもって嚆矢とする。

これに刺激され，翌年明大では６人漕ぎクリンカー艇を，その後早大でも本学と同型のヨール艇を採用している。しかしこの艇を使用し大いに意気を揚げようとした本学春季大会の試みも，前述した通り盛り上がりを見せなかった。

明治44年

昇格問題の小康と学生の弛緩

久しく論ぜられ，一橋同人の意気を示してきた商大問題も，やや小康状態にあり，申酉事件で依願辞職し，講師であった佐野善作，関一両氏は教授は復帰され。一方，一橋同人の団結心離れと校風退廃が顕著となる。２月の一橋会雑誌には，本三の有秋生が一橋会第二会歌「公孫樹下に立ちて」を発表して眠れる学生達の覚醒，奮起を叫

び昨年から食堂に掲示して，試験における校紀刷新，公正受験を説く「稜々党」の活動等が顕著となる。

6月下旬から7月にかけて行われた入学試験では，募集人員250人に対し，応募者数1,150人余と最低を示した。（43年は1,200人，42年は1,460人）ここにも一橋の校風校紀の弛緩の様子が窺われる。

しかし当時，ボート部は，蔵前の旧艇庫に加え向島言問の新艇庫があり，また艇は最新式ヨール艇4隻，新固定席艇4隻，練習艇及び旧艇4隻とその所有艇は東都随一を誇っていた。かく施設の面では充実しつつあったものの，本校全体の校風の変化と同様，ボート部内部での問題も表面化しつつあった。

第24回春季競漕大会

4月2日には伏見・華頂の両宮殿下台臨の下に第24回春季端艇競漕大会が挙行されたが，最後の第一選手レースにおいてH艇のファウルのために競漕中止，H組が除外され，C・S2艇の再レースを翌日決行することになった。再レースについてもコース及び乗艇に関してC・Sに論争が生じ，Sは棄権を申し出て，C組の優勝となった。

しかしこれは表面上の解決に過ぎず，このためにボート部内に軋轢が生じ，S組幹事引責辞職という事態に立ち至った。ここにおいて，着々と基礎を築きつつあったボート部に対して，「端艇道すたれたり」として忠告や忌憚のない厳しい意見等が寄せられた。

明治45年

専攻部の存続決定

明治42年，文部省令第14号によって専攻部の廃止が決定され，申酉事件に発展し，一橋は動揺の嵐に包まれたが，4年間専攻部存続決定により事態は一応収拾された。

この年45年3月25日，文部省は上記省令第14号を廃し，新たに省令第9号をもって専攻部の存続を決め，かつ専攻部規定が定められた。この事も影響してか，本年の入学試験には，募集人員250人に対し応募者数は，千四百数十人に増加している。さらに専攻部の存続は，本学が商科大学昇格に到着する過程のワンステップともなった。

端艇部の自己反省

この間有志による一橋の校風刷新，一橋会員の人心の離反を食い止めんとする動きも盛んであった。端艇部は専攻部存続の決定は大学昇格への布石が打たれたものとし，将来への飛躍を実現させるためには，まず内部に向かって自己反省せねばならなかった。従って昨年ボート部内に軋轢を生じて恥を同人の前にさらけ出すに至った事が，このような反省の契機となったものであるが，このことはボート部がまず全一橋人の反省の口火を切ったことに外ならなかった。

そしてボート部にとどまらず，一橋会の各部にわたって団体生活の運用を阻害するあらゆる障害を除去するためには，いたずらに内紛を恐れて現状を糊塗すべきではないとの気運が高まった。かくして5月14日，一橋会臨時総会が開催された。その結果従来越権専横の嫌いのあった一橋会の役員14人が辞職し，6月22日新役員の選出となり，古き皮袋に新しい酒が盛られ，更新の気は校内に満ち溢れた。

第25回春季競漕大会

第25回春季競漕大会は，第一，第二，第三選手共，H組が勝ち，全勝優勝を遂げた。

7月30日，明治天皇の崩御に伴い，9月13日，全校職員生徒挙げて二重橋外芝生に参列し，明治天皇の御霊輔を奉送し，新しい大正時代を迎えるのである。

大正2年

ヨール新艇建造

新年早々1月15日，ボート部はヨール新艇4隻を建造し進水式を挙行した。これによりボート部の所有する艇は19隻の多きに達した。

当時，新式艇（シェル艇）を採用するかどうか，またその新式艇が隅田川に向くか否かが論議された。帝大では前年に6人漕ぎシェル艇2隻を輸入している。帝大漕艇部員が試漕していたが，極めて乗りにくく，1本ごとに激しくローリングするところから，結局，当分採用を見合わせることになった。

従って本学も，新式シェル艇ではなく，明治43年来のヨール艇を建造することとなった。6月にはさらに，明治45年度卒業生から快速艇（ヨール艇）1隻を寄附され，所有艇は20隻となる。

この年の春には，学習院，一高，明大，帝大などのレースが墨堤で行われている。しかし，いずれもやはり盛り上がりに欠けるものであった。

第26回春季競漕大会，秋季小会

4月3日に行われた本学の第26回端艇競漕大会は，第一選手がC・S・Hの順に終わっている。また秋季小会は11月2日に行われ，Sが優勝した。9月にはHとS，12月にはH組が銚子遠漕を行った。

この年11月から一橋会を中心とする「商業大学問題に関する委員会」が連日のように開かれていることからも窺えるが，この年に入って商大問題はいよいよ白熱化した。学内では学科の改廃及び増減，筆記主義固執の改正，試験方法に関する考案など自己内省として学制改革運動や，文部省の「帝大合併説」に対する反論等で学内には緊張が高まっていた。しかし一橋側の熱烈な要望により，12月に至って，文部省も一応原案を白紙還元することを約束した。

この年は恒例の対神戸高商庭球試合も行われている。前年東京高商が負けているだけに，また他に情熱を打ち込むに足る対校試合がなかっただけに，応援は白熱化し，野次合戦の様相を呈したが，結果は高商の勝ちとなった。

大正3年

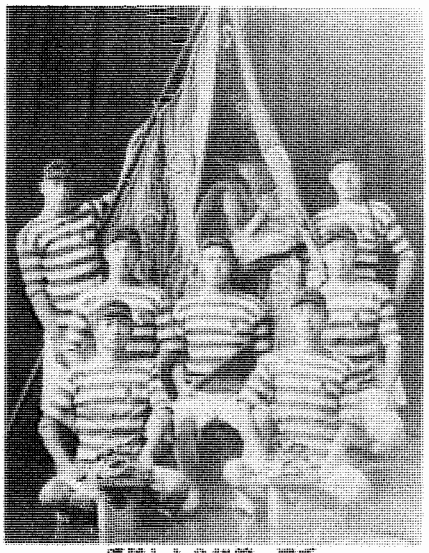
如水会の設立

1月23日には，築地精養軒において「如水会」設立発起人会が開催され，11月には正式に設立された。これまでの種々の一橋の問題解決に際して，同窓会の一致的行動が与って力あるものであり，さらに団結を固くするために倶楽部を組織し，同窓会の基礎を確立しようとする動きは，前年頃から見受けられていた。かくて「如水会」は，以後の一橋及び端艇部の動きに，会を通じて大きな影響力を与えることとなった。

第27回春季競漕大会

第27回春季大会は4月3日，ボート界のトップを切って開かれた。第一選手は，C・H・Sの順で，C組が優勝を飾った。慶応，早稲田，日大などの競漕会はいずれも10月に開催されており，この頃からボートシーズンは春秋2期になった。

同じ4月に，前年熱狂的な応援の下で行われた対神戸高商庭球試合が神戸で行われ



優勝したS組第一選手
（前列左から宮本，元泉，２列目中川，杉村，児玉，後列平林，市毛）

たが，遠征のわが方は惜敗を喫した。

英語部第19回大会もこの年４月に開催されているが，これら三つの行事は一橋の諸活動中の三大イベントとされていたのである。

関端艇部長の辞任

この年には明治36年以来，端艇部長を務められた関教授が辞任され，後任として東大出身(一高ボート部先輩)の志田教授が就任された。関教授の辞任は大阪市長に就任のためであった。

関教授に次ぎ校長坪野平太郎も８月15日に辞職し，新しく佐野善作教授が校長となった。初めての高商出身校長であり，また同氏は爾来昭和10年に辞任されるまで22年間にわたり校長，学長の職にあり，母校発展に行政的手腕を大いに発揮されただけに，同氏の就任は一つのエポックメーキングな事柄であった。

大正４年

第28回春季競漕大会，三社競漕の復活と盛況

４月３日に第28回競漕大会が行われた。この日８年にわたり中絶していた三井・三菱・郵船の三社競漕が復活され，満都の興味を大いに引いた。応援合戦も華々しく，十を超える三社の応援汽船が，三社競漕となると，一斉に汽笛を鳴らし，折からの小雨の中を，吾妻橋のスタート地点に集合した。観衆注視の中，この日のために猛練習を積み重ねてきた三社のクルーは，それぞれに見事なユニフォーミティを見せつつ，並行して水門まで進む。ここで体力に勝る三井の力漕が効を奏して抜け出し，２位郵船に１½艇身の差をつけて優勝した。レース自体も白熱した好レースであったが，これを追う三社の応援の汽船が多かったこととその応援ぶりも，また観物であった。

いよいよ待望の第一選手レース，堤上の応援隊や雨にもかかわらず多数集合した観客の間にも，異様な緊張感が漂う。互いに示威的な試漕を終えてランチに引かれる第一選手達は，一層盛んになる野次に苦笑いしたり，あるいは自信の微笑を浮かべたり

している。

3艇共に好スタートを切ったが，中でもピッチ37のCが，言問下流の八百松ではSに3シートの差をつけたと見るや，たちまちに艇差を広げ，言問上流の洗場でスパートに入る頃には，CとSの差は4艇身に達し，力漕を続けて優勝した。C組はコースが有利だったとの声もあったが，体力，練習量においていずれも他に勝っていたのは，否むべくもない。Hは3位に甘んじた。

前年の佐野校長の就任に伴って，この年は学制にも大きな改正があった。1月12日専攻部への入学規程を改正し，東京高商卒業生以外は東京と同じく4年の修業年限の神戸高商にのみ開かれていた門戸を，3年制の他の官立高商にも広げたことである。この改正が公表されると都下新聞が「高商帝大の軋轢」として報道し，世間の注目を集めた。また，学年始めも9月から4月へと変更された。

創立40周年記念行事

この年はまた，本学の創立40周年に当たり，9月4日から4日間，記念祝典や一般行事が行われた。3日目には各種の余興が催され，分教場の櫓太鼓の音と共に始まった大相撲では，ボート部の健児が本物の力士を投げ倒して観客から歓声が上がった。4日目の行事は向島での競漕会であったが，準備の都合で25日に行われた。競漕会は，第1レースから第3レースまで混合レース，第4レースから第9レースまではクラス会レースが行われた。

老も若きも，ボートを漕いで珍レースが繰り返された。昔取った杵柄の思い出話に興は尽きる事もなかった。かくてこの競漕会をフィナーレとして，40周年記念祝賀大会は閉幕した。「一橋倦怠すの声を聞く時，この催しは効果的であった。先輩と後進と，共に胸襟を披いて往年の苦闘を語る時，愛一橋の精神は高調せられて，『吾が一橋よ』の叫びは，深く若人の肺肝に宿るのであった。」(『一橋五十年史』)

第29回秋季競漕大会に変更

一橋会端艇競漕大会は東都の年中行事の一つとして約30年間，毎年春向島で行われ，秋季には単に小会を行うに過ぎなかった。

しかし，今回高商の学年期始めが9月から4月に変更された事の余波を受けて，この大正4年以降，秋季レースをもって大会とすることに決定され，11月15日に春の第28回大会が行われたに拘らず，同じ年に第29回の秋季競漕大会が開かれる運びとなっ

た。しかし，当日は休日ではなかったため，絶好のボート日和でありながら観客は少なく，ボートメンも物足りなさを禁じ得なかった。

第一選手レースはスタートしてから水上署のランチにCのオールが接触し漕げなくなり，ためにCは大きく遅れた。それでもこれを物ともせず力漕，遂に渡場でHを抜き烈しくSに迫ったものの及ばず，結局S組に優勝旗が渡った。C組にとっては痛恨の事故であった。

他各校の競漕大会も春から秋へと，順次移行された。

大正5年

春秋競漕大会の併存

前年度の学制改革のため，入学期は9月から4月になった。これにより，これまでは春4月に盛んに催されていた種々の競漕大会は秋に移行した。新学制においては，入学期は9月であるから，競漕会は新入生が学校に慣れる春4月に行われていた。そこで入学期が4月に変更されたからには，競漕大会は秋10月頃に行われることが望ましい。この年，隅田川でレースを行った学校は，春には帝大，一高他11校，秋には高商他7校となってきた。

ただし，多数のレースが行われていながらすべて校内レースであり，一つの対校レースも見当たらない。前年行われた新式のアウトリガー・スライディング・シートの新艇による早明対校戦もこの年には行われていない。

この年，言問新艇庫の観覧席が改築された。これを記念し，落成式を兼ねて春季小会が5月28日に開かれており，C組が優勝した。

レース中接触事故の頻発

第30回の競漕大会は11月5日，筑波の秀峰が見渡せるほどの秋晴れの下で行われた。

競漕大会が行われていても，隅田川が貸し切りになる訳ではない。プログラム10番目に行われた4，5，6クラス選手レースのときにも，邪魔者が入った。発艇直後第1コースのHは第2コースに入り込んだ。前方の大船に驚いた（あるいは白に対抗してか）第3コースのSも同じく第2コースに寄ってしまい，遂に2艇は接触した。

審判艇は砲声をもって中止を宣言したが，第2コースのCは，2艇を尻目にさらに

漕ぎ続ける。何を思ったか，Hも再び漕ぎ始め，負けじとSもこれに続く。結局，CとHは力漕してゴールイン。再レースは18日に行われたが，このときも少なからず和船が邪魔になっている。

夕闇の迫る頃，第一選手レースが発艇した。Sが好スタートを切りリードするが，八百松を過ぎる辺りではCの力漕が功を奏し先頭に立つ。Cは前方に小蒸気船が現れたためこれを避けるうちにSに追いすがられるが，これをかわし，その後は小蒸気の波も砕けとばかりに突き進む。洗場に至り各艇俄然ピッチを上げ壮烈を極め，Sはピッチ40でCを追ったが，結局C，H，Sの順にゴールインした。このレースでも数回にわたって船による障害があったが，Cはこれらを巧みに乗り越えた。しかし一方，Hはモーターの波を食って艇速を著しく減ずるという不運に見舞われた。

このように，レース中に攪乱船，伝馬船等がコースに入り込み，レースの円滑，公平な進行を妨げる事態が，かなり頻繁に起こるようになった。時恰も第1次世界大戦の最中にあり，戦火に捲き込まれなかったわが国は，大いに軍需景気を謳歌していた。必然的に隅田川の舟運が活況を呈して来たことが，レース中に邪魔が入る原因となったものと思われる。

大正6年

ヨール艇での初レース

5月26日，春季小会が開かれた。この大会の興味の一つは新ヨール艇にあった。新ヨール艇が初めてレースに使用されるとあって，観客，漕手ともども第一選手レースの青龍，玄武及び朱雀の3艇に注目した。

3艇ともに好スタートを切ったが，他艇より一つ高いピッチ――37でHが僅かにリード。八百松を過ぎる辺りでCが抜け出て，水門を過ぎると38で奮漕するCをSとHが37でほとんど並行して追漕する。渡場を過ぎる頃から，水門での力漕の反動かCはHに肉迫される。洗場に来るとピッチが一向に上がらないCをHは40で一気に捉え抜き返し，1艇身差でゴールインした。

このレース各艇とも漕舵ともにすこぶる堅実巧妙で，新ヨール艇は使いやすいことを巷間に知らしめた。特にHの漕ぎっぷりは余裕ありピッチが高くなっても，一糸乱れぬすばらしいものであった。

第31回秋季大会

第31回秋季大会は，例年どおり天長節（10月31日）に挙行された。数日来の小春日和のこともあって，観覧席も墨堤も人波で埋まった。

第一選手レース。スタートは各艇とも良かったが，その直後，第2コースのSが第3コースに向いてしまった。警告を受けて狼狽したSは，操舵思うに任せず，遂に八百松辺りで第3コースに入りHと接触し失格となった。S組のクルーはバウサイドが著しく強く，そのために第3コースに寄ってしまい，焦れば焦るほど事態を悪くし，辛うじて艇の方向を戻したときには，すでに第3コースに入り接触してしまったのである。再レースは，持久力に勝るCが後半でHを捉えて勝つ。

恒例の三社レースは，力に勝る三井を技術で勝る三菱が¾艇身の差をつけて勝った。なお，第二選手及び第三選手もC組が優勝し，結局第31回大会はC組の完全優勝に終わった。

ところで当時の部報（一橋会雑誌第134号）には，この大会を賞讃し，一橋ボートメンが「墨堤競漕界の最高権威たるの地位」を失っていないことを述べると同時に，全般的にやや衰退の気配あるボート界の牽引車であることを誇るべしと述べている。

確かに当時，端艇界が他のスポーツ（野球，庭球）に比べて衰退の徴候を見せていたことは時代の趨勢として否むべくもない。

にもかかわらず，端艇競漕を行う学校の数は次第に増加する傾向にあり，春にレースを行った学校は，わが高商を含め18校に達している。都下を騒がす一大イベントとしての競漕大会の時代は終わり，他の学校の生徒も地道ながら参加するという静かな大衆化に向かい出したと言えるのである。

大正7年

本年3月9日と11日の「国民新聞」に掲載された投書にも見られるように，端艇界の全般において競漕の衰退が次第に深まりつつあるとの危機感が学生のみならず，ボート関係者一般に漂いつつあった。一昔前の全盛期には全都の注目を浴びた隅田川の端艇界も，流入する西欧の各種近代スポーツの波に学生・大衆が引き込まれて行くのを防ぐ術もなかった。

ただし，この投書が当時の練習法(硬的練習法と軟的練習法)を批判していると同時

に，「帝大如きが未だフィックスにしがみついているのが余計衰退を大にしている」と述べていたのは，重要な忠告であった。当時は次第に漕法ばかりでなく，艇自身の改良，変更が重要視され，スライド艇の導入が端艇界の一大関心事であった。にもかかわらず，その導入は仲々進まなかった。このことは端艇界衰退の一因はその内部にもあったと言えないでもない。

対校試合が途絶えていたことも大きな原因の一つである。しかし隅田の覇権を争い，対校競漕をもって対決するということが，人々の興味を集めていたとは言え，ライバル意識過熱のため，対校競漕会が開けなかったのである。一時，対一高戦が復活する兆しがあり，都下各新聞に報道されたこともあったが，これは噂にとどまった。一橋はヨール艇を用い一高は依然フィックスを用いていたため，到底競漕は行えない状態であった。（『一橋五十年史』より）

併せて，例の商大昇格問題も絡んでいたと考えられる。高商自体は，この頃大正初年からの帝大合併問頭が一段落つき，全学挙げての単科大学昇格への運動が盛り上がっている時期でもあった。スポーツよりも，この運動に全学生の関心がより強く向けられ，かつ一丸となって取り組んでいた時代と言えるかも知れない。

春季小会，第32回秋季競漕大会

春季小会は，5月19日に開かれている。秋のレースの小手調べとは言え，全レースとも緊張する好レースとなり，第一選手はS組が優勝している。

第32回競漕大会は10月30日に行われた。数日来の雨も上がり晴れ渡った朝，墨堤へ応援のため集い来る人々は，口々に今日のレースを予想し合い，会場は次第に気運が盛り上がっていった。しかし，対部競漕ではメンバーに故障が多かったり，洗場においてオールを流してしまったりして興味をそいだ。また全レースにわたり蛇航する艇が多かった。

第一選手競漕，例の如く試漕を終え，ランチに引かれて来た各艇は浮標につきスタートを待つ。しかし，伝馬船などがコースに出入りして仲々発艇できない。Cの選手から，八百松辺りの第3コースに在る蒸気船を除去するよう要望が出されたが，邪魔にならないと判定した審判艇はスタートに踏み切った。案の定，Cは蒸気船を避けてコースを変えなければならなくなり，これを見た審判艇は号砲をもって中止しようとした。しかし，3組とも艇を止めず，結局，C・H・Sの順にゴール。H，Sとも号砲による障害がなかったため，このレースを有効とした。このように何かしら問題の

多い大会であったが，結局，C組の完全優勝に終わった。恒例の三社競漕が行われなかったことは，残念なことであった。

大正8年

他競技の進出と共に端艇界往年の盛を失う

前年に引き続き，高商では学校自体の昇格運動に忙しく，一橋自身の問題を解決しないことにはスポーツ方面の発展は顧みられる余地がなかった。スポーツ，特にボートの凋落が著しいのは何も高商に限ったことではなく，他校においても同じことが言えた。帝大にあっては，漕艇部廃止の声さえあった。(永井了吉氏大正8年東大卒記)

しかしながら，この年，帝大は明治45年に導入した英国製シェル・シックス2隻と同型の国産新艇4隻を用い，分科レースにおいて日本で初めてのシェル艇競漕を行った。スライドのヨール艇では明治42年に明大，早大に先駆けて導入した高商であった。しかし，シェル艇となると，固定席艇の漕法では簡単に漕ぎこなせない上に，高価（固定席艇200円前後に対し，シェル艇560円，大正3年の一橋会端艇部春季大会支出668円）であることにより各校とも仲々手が出なかった。

帝大以外にも早明，相次いで新艇を建造し，帝大と早大がシェル艇で対校競漕を挙行したのを機に，一挙にシェル滑席艇ブームが広がり，それに乗じて冷えかけていたボート熱に再び火が点された。

10月には日本で初めてスカルの競漕が東京ローイングクラブにより向島で開かれた。またそれ迄各学校個々に行われていた競漕会を，競漕協会設立のもとに一同団結して学校対抗の競漕会にしようとする運動が活発に行われた。(資料編大森芳夫氏回想参照)

この年東大が日本で最初に建造した6人漕シェル艇を進水するや，早大も直ちに，この採用に踏み切り，東大にレースを申し込み，東大艇を借艇して11月23日，日本最初のシェル艇による対校レースが行われ，一日の長ある東大が勝った。これが前哨戦となり，大正9年第1回のインターカレッジレガッタにつながる。

実力派のわが端艇部は，この大正8年のレガッタに参加出漕を熱望したが，大学昇格を翌年に控えていたため，応援団体が熱狂して不測の事件を起こすことを極度に警戒した佐野校長以下学校当局の反対により，この年の参加は断念したのである。

第33回競漕大会は例年より遅く，11月10日に挙行された。他校が華々しくボート界

を盛り立てているのに対し，わが高商端艇部の記事は新聞にほとんど載っていない。高商端艇部の沈静を示すがごとく，大会当日は朝からドンヨリと曇っていた。結果はC組の優勝となった。

福田徳三教授が部長に就任

前述したように大正3年以来端艇部長となっていた志田教授が，一高・東大のボートのOBであったために，同教授とわが端艇部との間がしっくりいかなかったところから，この年の7月部長を辞任され，強烈な母校愛に燃える端艇部が待望していた福田教授（明治29年専攻部卒）が新端艇部長に就任された。福田教授とボート部との関係は，前期の菅礼之助との交情にも現れていたごとく，大変に熱心な部長として，部員の指導に当たられた。

第5期　商大名門時代（大正9～昭和2年）

大正9年

大学への昇格

明治40年に端を発し，社会問題にも発展しつつあった商業大学問題は，本学の同窓会の熱心な主張や学生の投書家等，盛んな母校昇格の実現運動によって展開された。ところがその実現は，文部官僚の考えに阻まれて困難を極めたのである。

大正4年の秋に至り，大学問題が再燃して一橋人の胸をついた。単科大学としての商業大学，のちに東京商科大学と呼ばれるのであるが，その設立こそが，一橋多年の懸案であった。それは一橋同人が全精力を傾注して求めてきた夢であった。しかし，文部省側から出された商大への昇格の対案として，東京帝国大学への合併問題が生じたこともあり，実現への道程は決して平坦ではなかったのである。

大正7年5月末日，臨時教育会議小委員会において，迂余曲折を経た学制問題に断が下され，翌8年の12月6日，ついに新大学令の発布によって，商業大学の実現は確実となった。そして大正9年3月31日，勅令第71号により東京商科大学官制が公布され，予科，附属商学専門部，附属商業教員養成所が設置された。

翌4月1日，いよいよ一橋は名実兼ね備えた単科大学として「東京商科大学」の名称のもとに開設された。学長には東京高等商業学校校長であった佐野善作商学博士が任ぜられ，新しい一橋という船は，大海に向けて出発したのである。

4月11日には，商科大学に昇格後最初の春季競漕大会が，第34回目として催された。第一選手はS，第二選手はS，第三選手はCがそれぞれ優勝した。前にもふれたように，学制改革により従来は秋が大会で春が小会とされていたが，この年の大学昇格を期として春を大会とすることに改められた。

当時の新聞は「商大のスライディング艇（ヨール艇）は，もはや旧時代の遺物であって，レースとしての興味はあまりない。」と報じている。一つの時代の終焉と転換期を感じさせるものとして興味深い。

6月1日には，「日本漕艇協会」が設立される。会長には岸清一が選出された。加盟校は，本学，東京帝国大学，早稲田大学，明治大学，東京高等工業学校，東京高等

師範学校，東京外国語学校の7校であった。

7月には一橋会端艇部は，大学昇格を機に向島艇庫の増築と新式ボートの建造を計画して，その資金募集趣意書を各方面に発送した。

9月23日，東京，京都両帝国大学競漕大会が，滋賀県瀬田川で開催される。これは新式のスライディングシェルエイトを用いた日本最初の2マイルレースであった。

そしてその頃には，ボート界が他のスポーツ，例えば野球，テニス等に比べて衰退の徴候を見せていると憂える人々の間で，ボートを他の運動同様，盛んにしようとする動きが起こる。当時，対校競漕こそ行われていなかったが，学内レースを行う学校の数は次第に増加して，対校レースを望む声も高まってきた。このような動きが，インターカレッジ大会創設の遠因ともなったと考えられる。

大正8年帝大がシェルの6人漕ぎ艇を新造し，スライディングシェル艇全盛時代への第一歩を踏み出した。9月23日には東大京大の第1回対校レースが，瀬田川で開催されたが，このレースが本邦最初のスライディングシェルエイトのレースであるとされている。（英国のオックスフォード対ケンブリッジにシェルエイトが採用されてから遅れること半世紀であった）かくして，スライドのヨール艇では他校に先駆けた本学であったが，シェル艇では帝大に先んじられた。

第1回インターカレッジでの初優勝

シェル艇導入の波に乗って，大正9年10月23日，24日の両日にわたり，日本漕艇協会主催による第1回対校レースが開かれた。本学ボート部は，前述したように昨年の東早対校レースの参加を断念したが，待望の大学昇格も実現し，内田信也先輩（明38本卒）の学校当局への説得もあって，インカレへの参加があらかじめ許可されて，そのための準備と練習をすでに前年から行っていた。まず，従来踏襲してきたいわゆるヨール艇漕法から，シェル艇のための新漕法に移行するための努力を重ねている。そして，様々な精神的，物質的援助が，このレースのために行われ，前述の基金によるシェルエイトの玄武と朱雀の艇がレース前に建造された。

参加校は本学，東京帝国大学，早稲田大学，明治大学，東京高等工業学校の5クルーであった。スライディング・シェルエイト艇を用いたレースになったために，東京高等師範学校と東京外国語学校の2校は，新式艇の建造が間に合わず不参加となった。

早稲田大学が新進気鋭の東京高等工業学校に惨敗し，本学も優勝候補として高く評

価されていたにもかかわらず，予選において帝大に名をなさしめてしまった。結局，決勝まで進んだ帝大が勝ちを収めて，第1回インターカレッジの覇者となった。

誰よりも帝大に勝つことを切望しておられた熱血漢の端艇部長福田徳三博士は，この本学の敗戦に悲憤やる方なく，直ちに部長を辞任されたのであった。福田博士は部長辞任後もなおひそかに，ボート部に強い関心を寄せておられた。そしてしかし，ボート部にとってもこの年の帝大との敗戦への反省が，翌年の発展への強い起動力となって大正10年の第2回インターカレッジでは，見事にその雪辱を果たして隅田の覇者に輝いた。このボート部の優勝を誰よりも喜んだのは，他ならぬ福田博士であった。

大正10年

第35回春季競漕大会

大正10年4月17日，第35回目の春季競漕大会が開催された。墨堤の花も咲き揃い，天気も晴朗，風かすかに薫る絶好のレース日和であった。

第一選手（シェルエイト2マイルレース）H組，第二選手（フィックス）1100mロンドンカップレースS組，第三選手（フィックス）1100m揚子江カップレースS組が優勝した。

昨秋以来，艇の構造と漕法に関する研究は，ボート部にとって片時も忘れることのできないで課題であった。そして，今春の大会はその成果を試す好機会であった。

高商時代のヨール艇は，スライド艇を日本に導入した最初のものであった。しかし時代は変わり，その指導の任は終わったのである。そして，漕法面からもまずフィックス艇で十分に基礎を固めることが極めて肝要であり，ことに従来のヨール艇漕法から脱却する上においても重要であった。このような理由で，第二，第三選手はフィックス艇を使用することになったのである。

第2回インターカレッジ

昨年帝大に敗れ，断腸の思いで隅田を去った本学クルーは，雪辱を期して厳しい合宿練習を重ね，その技を磨いた。そして10月8日，壮厳な出陣式を行い，一橋は全学を挙げて必勝を期したのである。

10月22日，23日に行われた9大学対校競漕大会は，皇太子殿下の行啓を迎いだ台覧

競漕であった。新聞の予想では，昨年の覇者帝大を一番目に挙げていたが，本学も昨秋は惨敗したが，本年はコーチ陣も固めて昨年の比ではないとのことであった。

本学，東京帝大，早稲田大学，慶応大学，明治大学，拓殖大学，高等師範学校，高等工業学校，東京外国語学校の9校参加による2マイルレースの予選は次のとおりである。

予選A：早大，帝大，外語のレースでは帝大が6艇身差で1着。

予選B：明大が高師を破って1着。

予選C：慶大が拓大を破る。

予選D‥本学が高工を大差で破る。

第1日目のレースを終えて，帝大，明大，慶大，本学の4校が翌日の準決勝に進むことになった。大会2日目は，わが国のスポーツ界の歴史に特記されるべき日となった。それはこの日，皇太子殿下が観漕に臨まれたからである。これはわが国のスポーツ界に極めて光彩を添えるものであり，当時のボートレースが花形スポーツであったことがよく表れている一例である。ちなみに前年第1回のレガッタの時は，皇太子殿下が浜離宮から海軍艇に乗艇されて，船上よりレースを観覧された。皇室とボートレースの結びつきを物語る一つの事例である。

秋雨が煙のように河面に降り注ぐ23日，墨堤は前日にも増しておびただしい人出であった。必勝を期した本学の応援隊約500名が手に手に赤旗を林のようになびかせて，猛烈な声援を送っているのが異彩を放った，と当時の新聞は語っている。

準決勝で本学と帝大が勝ち残り，本学は午後4時の決勝レースで宿敵帝大と対戦することとなった。スタートで本学の滑り出しが良かったので，帝大はピッチ40でこれを追い，大倉邸前において約半艇身抜いたが，帝大艇庫前にて，本学は34のピッチで応戦して，渡場では1艇身差，厩橋下にて2艇身。橋を過ぎてから帝大はピッチを36.5に上げて追ったのであるが，ついに2艇身半の差で本学が隅田の覇権を握ることとなった。本学の応援隊は，選手の上陸を待ちかねて，嬉し泣きに涙を流して胴上げをする姿も多く見られた。「佐野，福田，上田（貞）等の商大の看板諸教授も我を忘れて狂喜され，一橋と端艇部の一体感がこれほど如実に見られた事はない」とは畑弘平氏の言である。一橋が東大に一矢むくいたとして，全学が溜飲を下げた訳である。

決勝レースの後，午後4時20分には，皇太子殿下は本部楼上に臨まれて，ユニフォーム姿の各選手に拝謁を賜り，「本日，日本漕艇協会のボートレースに臨み……諸君の洗練せる技術と努力は，私の最も満足するところであります。……今後とも諸君は

スポーツマンとして身心ともに健全なる修練を積まれんことを希望します。」とのお言葉に他校の選手はもちろん，優勝を飾った本学クルー及び一橋人の喜びはひとしおであった。

23日のレース経過は次のとおりである。

準決勝A　本学と慶大で，4艇身差で本学が勝つ。タイムは10分59秒

準決勝B　帝大が明大を4艇身差をもって破り決勝に進出する。10分43秒

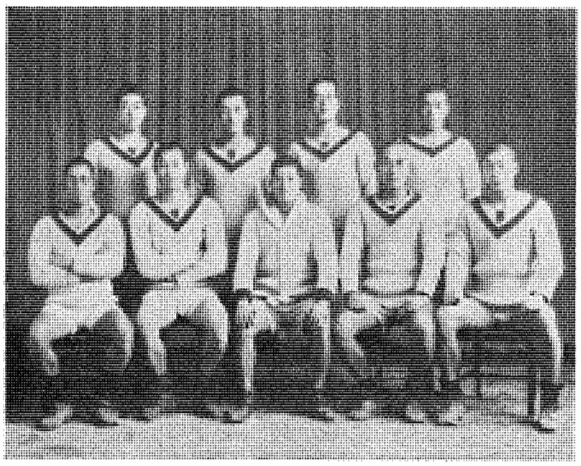
決　　勝　本学が帝大を2艇身半差で破り，優勝する。タイムは，10分23秒

決勝レースでの両校のピッチ

	本学	帝大		本学	帝大
スタート	37.5	41	吾妻橋	30.5	32
大倉邸前	33.3	36.5	駒形橋	32	32.5
艇庫前	31	33.5	厩橋	32	32.5
言問橋	32	32.5	三本煙突	31.5	36.5
洗場	32	32	高工艇庫前	32	36
水門	32	32	ゴール	33.3	36.5
八百松	31.5	32			

前年，本学はピッチが非常に高くて全コース35以上であったが，今年の決勝レースではコンスタントピッチは，全コース平均して31〜32であった。

ここで本学と帝大のクルーを紹介したい。



優勝クルー　前列左から和賀井泰，鷺島富造，寺井俊彦，野田憲策，中山克己，後列左から寺尾一郎，藤瀬英二郎，内田量平，畑弘平

	本学	帝大
舵手	寺井	野津
整調	野田	東
7番	鷺島	坂田
6番	中山	朝川
5番	和賀井	長谷川
4番	内田	吉村
3番	藤瀬	本間
2番	畑	東
舳手	寺尾	中村

大正11年

第3回インターカレッジ

大正11年，新聞の記事から見ると，ボート界の大行事が行われる時期が春から秋に移った感である。春の大会はそれなりの歴史的意味があるものの，他面，秋の対校レースのための前哨戦か，そのための練習という感じであった。この年には，英国皇太子が来日されて，4月14日の台臨観艇式には，海軍のカッター，本学，東京帝大，慶応大，早稲田大，明治大，日本大，高師，高工，外語校，拓殖大の10校クルーが参加した。

4月16日には恒例の第36回春季競漕大会が催され，第一選手レースにH組が優勝した。

昨秋，隅田の覇権を握った選手一同は，あれから1年刻苦精励し，技術を磨き，心身を鍛えて敵に備えるものがあった。そして本年も勝利を得るために苦心するのは，もちろんひとり選手だけではなかった。対校レースという表舞台に出ることなく縁の下の力持ちとして，目に見えない努力を重ねていた人たちの存在なくして一橋ボート部は語れないし，存続もできない。

全一橋が待ちに待った日が今年も訪れた。10月21日は朝から空が晴れ上がった絶好のレース日和であった。今回のインターカレッジは日本大学の新参加によって，10校参加による隅田川上流の両国，白鬚間において行われた。しかし前年優勝の本学は予選で早稲田大学に敗れて涙をのんだ。初日のレース結果は以下のとおりである。

予選A	明大	帝大	慶大
	2位	1位	3位

明大はよく善戦したが及ばず，5秒差で東京帝大の勝利に帰した。

予選B	早大	本学	拓大
	1位	2位	3位

早大は最初から本学について，吾妻橋において本学は早大を抜いたが，すぐに抜き返されて結局6秒差で敗れた。

予選C	高師	日大
	1位	2位
予選D	外語校	高工

1位　　2位

2日目の22日は前日に劣らぬ好天気で，伏見海軍中将宮，山階飛行中尉宮殿下が台臨されて，決勝進出の外語校と早大を除く8クルーによる御前試漕と決勝レースを観漕されるなどがあって，この日の向島は未曽有のにぎわいを見せた。以下レース結果。

準決勝A　東京帝大　外語校
2位　1位

接戦数回ののち，僅か2秒の差で外語校が帝大を下した。

準決勝B　早大　高師
1位　2位

38秒の大差で早大が勝つ。

決　勝　早大　外語校
1位　2位

スタート後の外語校は，高いピッチで良かったのだが，たちまち早大に抜かれて，早大が悠々とリードして11秒差で大勝した。

結局，早大が外語校を破って今年度の隅田の覇権を獲得したのであるが，しかし「各校を通じて一番良かったのは，敗れこそしたが東京商大である。早大は商大に比較して力において優り，術において劣った。早大が予選で商大に勝つことができたのは，好調子が加わったからであろう。」という評も聞かれた。また，「今年は早大が優勝できたが，思えば誠に油断のならないボート界の現状である。来年のレガッタのことが思いやられる。商大，帝大，高工，外語校，明大等と一騎当千の強者が手ぐすねひいて待っている。」と勝者早大も述べているように，わが国のボート界も充実を見せてきていることがうかがえる。

同年，11月19日には日本漕艇協会主催のスカルレースが行われて，本学の遠山不羈夫が優勝した。

大正12年

関東大震災とその復旧過程

大正12年春，第37回競漕大会が4月22日に開催されて，第一選手はC組が優勝，第

二選手はS組が優勝，第三選手はH組が優勝した。

しかし，この年に本学やボート部のみならず，関東地方一円にかけて一大惨事が起きようとは誰ひとり想像したものはいなかったにちがいない。呪われた9月1日，この日は朝から波が高く，強い西南風が吹いていた。水面も荒れていて，エイトを出すことができなかったために，やむをえず，タブペアーを交替で出していた。そのクルー一同がまさに午前の練習を終えようとしていた時——午前11時58分——であった。実際にタブペアーで河面にいたクルーの一人は，スライドショックを受けたと当時の日記に書き残している。

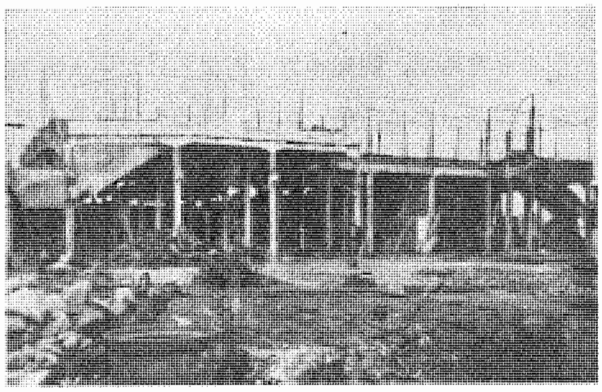
烈震の襲来に大地は波のように揺れて，堅牢を誇っていた本学の大艇庫もグラグラと揺り動かされたために，バルコニーは傾き，支柱も折れる有様で，対岸の浅草12階も振り返るとすでに見えなくなっていたということである。そして選手の中には，この模様をまのあたりにしながら，生まれて初めて見る光景に，しばし思考を奪われて，詳しい記憶がないとまで言わせるほどのものであった。艇庫内にあった各艇もアームから滑り落ちたりして，ほとんど大破してしまった。

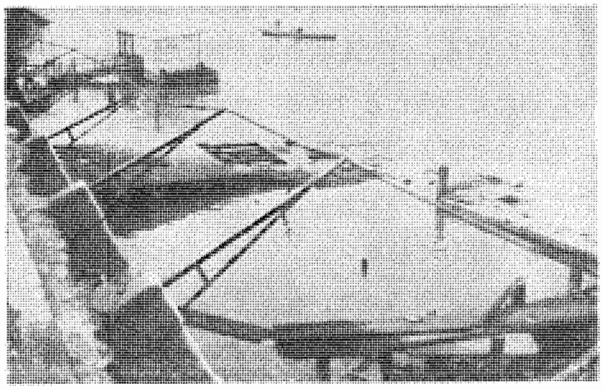
そのうちに対岸の浅草も本所方面も炎にあおられて，見渡すかぎり東京中の空が埃と煙でいっぱいになり，浅草方面からも多くの人々が逃げて来るといった有様であった。墨堤は上流目指して逃げようとする人々で埋まってしまった。午後3時頃には，東大選手一同が難を尾久に避けようとして出発した。

その間といえども強震烈震が相次いで起こり，凄惨を極めた。そして「津波来る。」という警報も何度となく伝えられ，ついにわが部員も一時艇庫を離れて新荒川方面へ避難することとなった。これでレースがなくなってしまうともかぎらない。身体を大切にすることが第一である。そういう考えに基づいて，艇庫は天運にまかせ，その安全を祈りつつ向島をあとにしたのであった。

強い風のためか，石ころも飛んで来ることもあったらしい。ビスケット等の食料を買い込んで，飲料水も一升瓶に詰めて持ち歩いた。しかし，午後4時半頃近隣の洋食店から出火して，折からの強い南風にあおられて，たちまちのうちに言問一帯は火の海と化して，帝大，本学の両艇庫も黒煙に包まれているとの悲報に接し，急いで現場に駆け付けたが，時すでに遅しであった。その間の艇番による必死の防火も空しく，40年にわたる栄光の歴史とともに灰燼に帰してしまったのである。

翌朝一同が艇庫に戻ると文字通り大変であった。艇庫はすっかり焼け落ち，本学の艇は半壊の台船と，台船につないであったフィックス一艇とタブプアー2艇が半焼の





関東大震災により焼失した艇庫

姿で残ったほかは全焼し，リガー等が無惨に焼けただれ曲がっていた。本学艇庫のバルコニー部分は鉄筋コンクリート造りだったので飴のようになった鉄筋が残っていたが，帝大は木造なのですっかり焼け落ちていた。隅田川には白い男女の死骸がいっぱいで，それは言葉に尽くせない光景であった。

大学は11月末まで休校，それまではそれぞれ故郷へ帰ったが，ボート部員は早速，同窓罹災者の救援，大学の，そしてボート部の復興への仕事を始めた。部員による復興委員会もできて，毎日のように佐野学長や黒川事務官に会って，ボート部復興に関する膝詰談判を繰り返すかたわら，自ら復興の労役に服して，多少でも造艇費をかせごうという積極的な努力も行われた。

そのような時，慶応大学ボート部からの本学ボート部に対する好意を示す葉書が届けられた。その葉書が我がボート部にとって，大いなる歓喜をもって迎えられるほどの内容をもっていたことは，その内容を見れば想像に難くない。その葉書は塚田松二昭和２年卒）が所有していたのであったが，先の大戦で紛失してしまったために原文は不明であるが，その文意を以下記しておきたい。

「今回の震火災のために，光輝ある貴艇庫は名誉ある戦歴を有する幾多の愛艇と共に焼失したことを心から惜しむと共に，貴部を気の毒に思う。しかしやがては倍旧して，威容を備えた新艇庫が新艇を擁して言問の河岸に聳え立つ日も来ると思うが，その日までのブランクを埋めるためにも，我部は貴部に対して所有する艇の一切を解放して貴使用に供するであろう。至急連絡されたし。」

この慶応大学ボート部からの好意にわが端艇部は感謝すると共に，翌春の校内レー

ス用のフィックス艇が新たに建造されるまで，クルーは白鬚橋下の慶応大学艇庫に通いつめたのである。この慶大の好意は文部省の官僚にも大きな感動を与えることになり，その後の復興事業に多大の好影響を及ぼすことになったらしい。

大震災による艇及び艇庫大破という未曽有の事態に直面した本学ボート部は，連日連夜幹事会を召集してこれに対応した。その結果復興事業を管掌するために，広範な権限を与えられた「復興委員会」が創設されて，幹事会からは葛西秀千代（H）畑弘平（C）木村賢治（S）の3名が選出された。そしてこの3名を中心にして生まれた一つの力が，彼ら自身と全一橋をも動かして，本学ボート部の建て直しという大きな事業を達成させたといっても過言ではないであろう。当時のボート部にはそういう雰囲気があったのである。

ここで付け加えておきたいことは，この復興事業に際して，数多くの本学ボート部在籍のバックマン——非力で実際に艇に乗ることができず，対校レースという檜舞台に出ることはできないが，ボート部を思う気持ちは実際にオールを握っている対校クルーに優るとも劣らない人々。あるいは，いつもはブラブラしていても，ことボート部の一朝有事の際には，まして今回のように震災によって，艇もろとも大艇庫が崩壊し，本学ボート部の危急存亡の声を聞けば，真っ先に仕事を引き受けてしまう人々。——の一群が，この時ほどあらゆる力を発揮して，一橋人に働きかけた時代はなかったであろう。そして復興委員会もまた，こうしたボート部の一勢力に着眼して協力を要請した，またそれを受けた多くのバックメンたちも見事にその任を果たし，復興事業に大きな役割を演じたのであった。

12月9日には，他校に先駆けて復興レースが行われた。艇は慶応大学等の好意により，借艇を用いてのレースであった。

また，翌春の校内レースに間に合うようにフィックス艇と仮艇庫を建造してくれるとの朗報も大学側から伝えられた。財源は本学復興予算のうち，次年度臨時費から出るとのことであった。復興委員会はこれに対して早速受け入れ体勢を固めて，艇は第一選手レース用とし，練習のためにも一日も早く入手の実現を期すこと。艇庫は春季大会までに完成させて，楼上には観覧席を設けるように当局に請願すること。この春季大会を内容的には復興レース大会として，これを契機に一橋精神の振興に役立てること。そしてこの復興レースを記念して，佐野学長の筆による「復興」の2文字が書かれた手拭が配布されること等が決定された。

大正13年

春季競漕大会

大正13年４月20日，恒例の春季競漕大会が，工事中の言問の新造艇庫で挙行されることになった。しかし，レース日が確定したにもかかわらず，肝心の艇庫建造工事が遅々として進まない。大会委員が，岡本造船所や現場の大工に催促しても一向に反応がない。余談になるかもしれないが，この状況を逆転させて，一挙にレース期日完成に向けての突貫工事へと進ませた一つの力は，向島に住んでいた「柴山の金太」という職人によるものであった。

彼は本学の艇庫によく出入りしていて，特にわが部に対して一方ならぬ好意を抱いていた。その彼の働きかけによって，艇庫はすさまじい勢いで完成へと向かったという話も，当時の資料からうかがい知ることができる。一つの事が成るかげには，こうした人々が無数に存在することを痛感させる一事例である。

そして大正13年４月20日の予定日に，恒例の第38回春季競漕大会が開かれて，第一選手は新造のフィックス艇を用い，他は慶応大学，日本郵船，三菱等から借艇するという状態ではあったが，新艇庫のもと，今後の本学ボート部の発展を期して無事行われたのである。第一選手レースの優勝は，Ｓ組であった。

三科分立問題とボート部への対応

この問題はその淵源をたずねると，震災前の大正９，10年頃から本学の空に低迷していた暗雲のような印象を与えるものであった。学内はこの問題の賛否について２派に分かれてしまい，両者は妥協点を見い出せないまま，時だけが過ぎ去るばかりであった。この問題は，後述するように我がボート部にとって極めて重大な要因をもつことになるので，ここでその経緯について触れておきたい。

本学が東京商科大学としてもった過去３年間の生活様式が，果たして今後の一橋同人の生活様式として認められるものであるかどうかは重要な問題である。その３年間の生活経験は，おそらくすべての一橋人に従来の一橋の生活様式が，もはや転換期にある新一橋生活者を律するのに不適当であると感じさせていたようである。

一橋会規則は，大正９年４月，商科大学の創設に際して３年間の有効期間をもって施行された。その３年間に，暫定規則の不備な点を徐々に理想的なものに変えていく

べきであったが，その有効期間の3年がまさに過ぎようとする時期に急遽，会則の起草委員会が組織された。その委員会は大正11年10月，各部，各科，各学年から選出された委員と理事評議員を加えた70余名で組織された。新会則作成にあたり，まず一橋会存続が決定されたのであったが，新会則作成において根本の問題として起こったのが，本科，予科，専門部の三科の分立可否論であった。ここで両者の主張する点，内容を簡単に記すと以下のようになる。

(1)　三科分立論

一橋人が一個人の人間として当面する社会制度，経済組織には幾多の不合理，不徹底があり，若き新人あるいは理想に燃える学生をその是正に奮起させてきた。そして，一橋人が6年あるいは3年の星霜を過ごす学園においては，少なくとも真の自由，自治独立のもとにあるべきである。この見地に立ってみるとき，暫定一橋会規則に支配された一橋生活の内容は，前述の理想からはほど遠いものであった。つまり，本学は事実上，本科を頂点とする一つの専制とも言うべき状態にあり，現行の規則の第8条第2項「理事は，各部幹事において，その大学本科幹事の中から各一名を選挙す」は，その端的な表れであった。現に，一橋生活を内部から動かしてくるものは本科の意思であり，専門部，予科は多くの場合，その意思への屈服を強いられて，自らの地位と意義とを全く放棄して，一橋本科という外皮のもとに従属させられていた。そして，一橋全体において，停滞弛緩の傾向があるその主要因は，各種学生が同一規定，同一制度に統括されていることに基づいていることが大である。この気運を打破して局面を転換させるのには，一つの革命が必要である。すなわち，予科，専門部を本科生のもとに従属させずに分立対等化するべきである。

以上が三科分立賛成論として唱えられていたものである。

(2)　三科不可分論

そもそも，人格の完成に本科，予科，専門部のような制度による区別の必要はない。本科，予科，専門部とは単なる学制上の区別以外の何物でもない。一体，一橋生活において，本科個性，予科個性，専門部個性などと主張する根拠はどこにもない。「三科分立」とは，自分と他の間に城壁を築くことに等しいともいえる。一橋の内部に城壁を築いてはならない。逆にその壁を打ち破って一丸となり，一橋文化の完成に努めるべきで，いたずらに各科個性という空名に迷わされて，本科の先輩が築いてきた理想を忘れてはいけない。

これが，ボート部を枢軸とした分立反対論の骨子であった。

数か月に及んだ議論も，起草委員会において12票対39票をもって分立論が勝つところとなった。しかし，委員会において最も賛成が多かったのは，「三分は，大一橋をしてさらに大ならしめんがための三分であって，決して三分せんがための三分ではない。当然，三分は一つの手段であり，各科をより大にする必要がある。今までの各科は萎縮していた感があった。各科はもう少し伸びる可能性もあれば，また伸びなければならない。各科の発達をはかると共に，それは常に大一橋の内にあることを忘れてはならないのである。」というもので，これが最も力強き論であったと同時に，最も受け入れやすい論であった。

次に，三科分立がボート部に及ぼした影響について述べてみたい。

従来から，予算審議には多大の時間を要していたのであったが，三科が分立した結果，以前は三科合同のために，一つの設備で足りたものも，分立のために各科ごとに備える必要が生じて，合同当時は幾分安くできたことも，分立すれば各科の計画に基づき，しかも各科のもとで負担していかなければならない。加えて，三科分立は各科の向上心を促し，新たに生じた部も少なくなかった。三分されたために，著しく減少された予算で新たに生じた部にまで支給することは，極めて困難であった。

我がボート部においても，三科が分立することになったために，財政上の変革が重要な問題として生じてきた。つまり，現在までボート部は，春，秋と年2回の学内レースを実施してきたが，これでさえも経費不足で苦労していたところを，「三科のボート部が，それぞれの個性を発揮して，年2回ずつのレースを行う」とすると計6回の勘定になり，その上，対校レースも加えると財政的には破綻である。艇を造るにも，オール1本を補充するのにも，はなはだ具合が悪いことになる。

以上の理由等によって，ボート部としては原案を鵜呑みにはできなかった。そして，この問題への対応として，各科が合同するというものであった。つまり，一橋会の制度は忠実に尊重したのちに，各科ボート部は自発的意思に基づいて合同するのである。こうして，「一橋会合同ボート部」は新たに理事を設けて，予算は各科ごとに収納し，これを一つにまとめて合同会計を編成したのであった。

つまり，形式上は一橋会決定の制度を守るが，実質的には以前と大差ない機能を保ち続けることになったのである。三科分立を無視はしなかったが，これを超越した独自の方策を見い出すことに成功したのである。一応は分離して，運営上は必要があれば，随時一つにまとまって機能を最高度に発揮していくのに支障がないことを期したのであった。この三科分立制度に対応するためにとられた処置は以下のとおりであ

る。

① 各科ボート部を止揚した合同ボート部を創設する。

② 三科ごとにＨＣＳを存続させていく。

③ 各科ボート部の委員長は，自動的に各組の幹事を兼任する。

④ 他に幹事各１名を各組から選出して，前項幹事と合わせて幹事会を構成する。

⑤ 本科委員長は自動的に理事に任じられて，部の代表機関であることは従来どおりとする。

また，同年６月には専門部廃止案そして横浜移転問題が生じたが，如水会幹部の尽力と専門部学生の活動により存続が決定した。この年大正12年は，関東大震災という天災の他に，「三科分立」「専門部廃止案」等という問題が，一般学生のみならず，ボート部にも多大の影響を及ぼした多難の年であった。

第４回インターカレッジ

関東大震災によって一時混乱状態にあったボート部も，今春，恒例の競漕大会を無事終えることができた。続く５月10日，11日の両日にわたって行われる日本漕艇協会主催の全日本小艇選手権レースに，本学も出漕することになり，４月25日から向島の貸席（鈴木方）において合宿練習を開始してレースに備えた。本学からは，一橋漕艇クラブと一橋レッドオアーズの名で２クルーが参加することになった。結局，決勝レースに勝ち進んだ一橋漕艇クラブは，関西の雄である同志社大学と対戦して，４艇身の差をつけて優勝した。

決勝レースの両クルー

	一橋漕艇クラブ	同志社大学
舵手	鵜飼	人見
整調	小松	武津
３番	鷲島	荒木
２番	高橋	元持
舳手	寺尾	市岡

日本漕艇協会は大正９年以来，毎年東京の各大学，専門学校のエイト対校レースを挙行してきたが，前年の震災のために多大の打撃を被ってしまったので，漕艇界の復旧と振興のために，少人数でできるフォアとスカルを奨励したいという希望から，今年春を期して両者の全日本選手権レースを挙行したのである。

6月21日の午後，練習を終えてから，対校選手のスタート会が開かれて，理事葛西秀千代君の主旨説明に始まり，畑弘平君のプレジデント推戴演説に次いで，プレジデント鷺島富造君の挨拶があった。ここでいうプレジデントとは，一橋クルーの主将を意味する。従来はこういった制度がなく，クルー中の第一人者が不文律のうちに統率してきたもので，時としてクルーはその中心を失う嫌いがあった。この新しいプレジデント制度発足には，そういった懸念を打ち破ろうという意図が含まれていたのである。

また，8月20日には帝国ホテルにおいて，前年の震災による艇喪失の再建を図るための総会が開催されている。

そして，10月4日，5日の両日にわたり，第4回インターカレッジ大会が2年ぶりに開催された。参加校は，本学，東京帝大，慶応大学，早稲田大学，明治大学，日本大学，高等師範学校，高等工業学校，東京外国語学校，大倉高商の10校であった。

10月4日のレース内容

第1予選：本学，外語学校，高工のレースは本学が2位以下に大差をつけて1着となる。

第2予選：早大，高師，大倉のレースは，早大がオール16本差で勝つ。

第3予選：明大，帝大のレースは，予想外にも明大が3艇身差で勝って，万歳の声が隅田の空に響いた。

第4予選：慶大，日大のレースでは，予想どおり慶大が1着となる。

翌5日は秩父宮殿下台臨の光栄ある日であった。

第1準決勝：早大と明大の対戦で，明大が3艇身半差で楽勝する。

第2準決勝：本学，慶大のレースでは，約4艇身差で本学が勝つ。

こうして，準決勝で勝ち残った本学と明大との決勝レースが行われることになった。言問に集まった多くの一橋人は，両艇がスタートを切ると，眼光を河上に注ぎながら盛んにスクールカラーである赤旗を振りつつ，声を大にして応援歌「東都の流れ」を歌ったのである。しかし，その応援の声も天に届かず，大接戦を演じたものの，結局$\frac{1}{3}$艇身差で明大に覇をなさしめてしまった。翌日の新聞には，〝彗星明大出現。一橋ついに長蛇を逸す〟という記事が見られた。

ここ数年は，スライディングシェルエイトの採用などにより，ボートは再び盛んになりつつあり，新聞にもオリンピックレースや英国のオックスフォード大学対ケンブリッジ大学との対校レース前の練習などが紹介された。

大学関係では，新道路建設のために本学の移転が問題化したり，4月から本科は一ツ橋本校で，予科は石神井分校でそれぞれ授業を再開している。後述するように，このことが，〝水を求める動き〟につながることになる。

また，11月にはニューヨーク在住の先輩からハドソンカップの寄贈を受けている。これは，三科分立後，ボート部は従来の第一，第二，第三選手制度を廃して，その代わりに各科ごとにＨＣＳのクルーを作り，予科選手はロンドンカップを，専門部選手は揚子江カップを争っていたが，ただ本科選手のみは，優勝旗のほかは競うべきカップを持っていなかった。そこで，ニューヨーク在住のボート部の先輩は，このことを遺憾として，同市在住の本学出身の先輩と協議して，本科選手レース用として，ニューヨーク市を流れるハドソン河にちなんで命名したハドソンカップを提供して呉れたのである。このハドソンカップは後年秋季小会の第一選手競漕に使用されることとなった。

水を求める動き

震災後，その復興過程の中で，本科及び専門部が発祥の地である一橋を去って国立へ移り，さらに予科が石神井に移されるといった問題が生じた。発祥の地，一橋。それは一橋人にとって限りない郷愁を呼び起こすものである。そしてまた予科は一橋の特色であり，一橋精神を育てる強力な温床であった。この予科を本科から分離して生活させることの弊害はいかばかりか。当時の一橋人の頭を大いに悩ませたことであった。

しかし，事態は大学当局の予定どおりに進んで，一橋の焼け跡には粗末なバラックが建てられて本科と専門部が収容され，予科は石神井の新校舎へ。これもバラック建てが武蔵野の一角に新築された。

以上の経緯により，本科と専門部が国立へ，予科が石神井に移転されることになったために，学園の周囲に水を見い出す，水を求める必要が生じた。そして今日でも本学が国立にあって，相模湖合宿所ができたとはいえ，今なお近隣に水を見い出せずにいることは，ボート部にとって極めて重大な問題である。かつて隅田川が一橋人にとって身近かな存在であったのと同じ条件のような，つまり地理的，時間的，経済的関係において，我がボート部に「水」を求めているのである。当時その問題を何とか解決しようとして生まれたのが近い場所での「水を求める運動」であった。

本学の国立移転に携わっていた箱根土地の中島重役の好意によって，多摩川沿いの調査が行われた。国立駅前から中央線に直角に南下した直線が多摩川に交差する地点

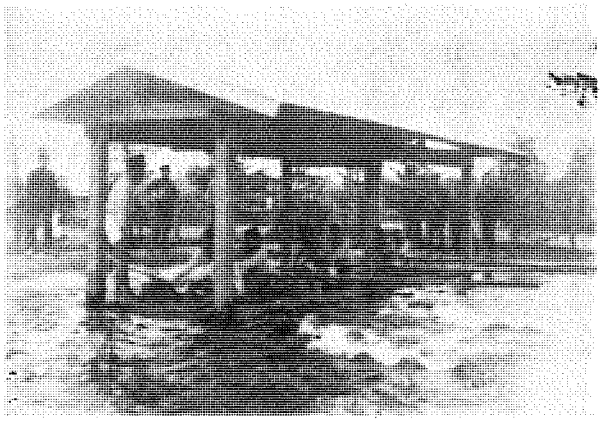
から上流約1㎞の左岸，三軒家部落付近の流域にストレイト800mのコースがとれる。川幅も常時150mはとれるし，流れも非常に緩やかである。この水使用をめぐってボート部は，本学当局の了解や後援を受けて内務省と交渉することになった。担当者は高林定一郎君であり，彼の努力によって役所から水使用の権利を獲得することができた。

その他にも様々な場所が学生の手によって調査された。その一つが村山貯水池である。もしここが使用できるのであれば最高であった。国立からの距離，経路，環境など立地条件は申し分なしである。

本学当局の協力と支援を得て，さっそく市当局に対する折衝が開始され，ついに彼らを説得することに成功した。しかし，当時の東京市に対する行政監督権は府知事が掌握していたために，市が通過しても府で突き当たるのが通例であったらしい。結局，村山貯水池の水面使用と池畔にボートハウスを建てるための用地借用の件は，府会で拒否されてしまった。その後，昭和11年にもこの運動は再開されて，如水会や四神会の有力先輩の援助を求めて活動したが，はかばかしい成果はみられなかった。

また予科の石神井においても，水を求める問題は深刻であった。しかしその苦悩が，予科の敷地の東側に沿って流れる細流を構内に引き込んで，ローイングタンクを建造するという発想をもたらすことになった。

この提案は部内において正式決定をみることになり，黒川事務官に折衝した結果，石神井タンクは夏休みが明けて新涼の気が武蔵野の林野にみなぎる頃，予科正門前庭に設置され，固定シートの上に左右3本ずつのオールが深さ2mの貯水を掻きなぐる装置となって完成した。しかし，デッドウォーターの中でフィックスのオールを使って漕ぐのでは，河で漕ぐ感触が得られないので，オールのブレード部分に6個の穴をあけるなどの試みもなされたが，所期の効果は得られず，あまり活用されなかった。



ローイングタンクでの練習風景

またこれと並行して，赤羽上流に小艇庫を建てる計画も進められていた。この

艇庫の敷地として，ボート部が予定していた場所は，国鉄赤羽駅下車，その北方の台上に，当時あった工兵大隊前の広場を横断してさらに北上した崖下にあった。

本学当局の了解を得て，予定地付近の地主関係の調査や実地調査が実施された。そして大正13年の暮れにフィックス艇のみ収容できるバラック艇庫の完成をみた。本科と専門部は国立へ移るまでは，神田一ツ橋にいたので依然言問へ通い，この赤羽上流艇庫へは予科の学生が主として往復していた。しかし，石神井から赤羽までの所要時間や経済的負担を学生に負わせるという欠点をもっていた。そしてこの艇庫は，昭和9年秋，予科が小平に移転するまで利用された。

大正14年

第5回インカレ優勝と決勝レースでの接触問題

大正14年4月には，日本漕艇協会が全国的組織に大改造を行っている。つまり，各実業団体，諸官庁及び青年クラブ等の関東，関西の漕艇協会，全国学生漕艇連盟等を包括するものとなった。

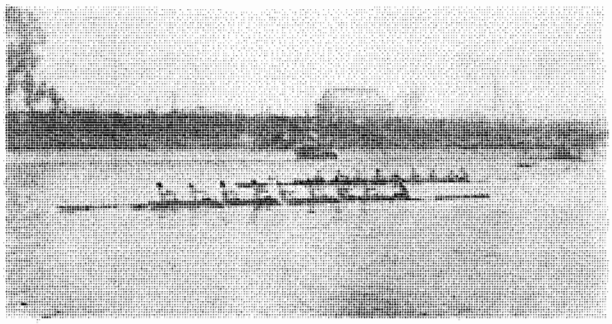
同月19日，恒例の（第39回）春季競漕大会が開催されている。今大会で昨年ニューヨークの先輩から寄贈を受けたハドソンカップは，本科レースでS組の手に渡り，予科レース（揚子江カップ）はH組，専門部レース（ロンドン杯）はC組の獲るところとなった。

また9月19日には，本学創立50周年記念祝典が挙行され，記念ボートレースも開催されている。

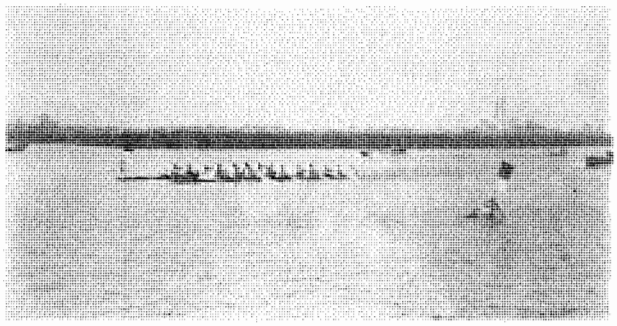
従来は10月下旬に行われていた10大学対校レガッタが9月26，27日の両日にわたって開催された。本学は予選で早稲田大学を破り，準決勝でも東京帝大を破って，決勝では明治大学と対戦することになった。昨年の雪辱を果たすためにも絶対に負けられないレースであった。しかし，スタート後まもなく明大が本学のコースに侵入して接触となり，岩下審判長の判定によって明大はオミットとなり，本学が独漕することで優勝が決まった。

26日のレース

予選A　大倉高商，東京外語学校，日本大学のレースでは，エキサイトしていた日大と外語学校が途中で流木のために故障し，ついに早大艇庫前でファウル。協議の結果，外国語学校を除いた2校で再レースとなって日大が勝つ。



準決勝　1コース帝大，2コース本学（牛島神社前）



決勝　明大とファウルの瞬間（天野工場前）

予選B　慶応大学，高等工業学校，明治大学のレースは明大が勝つ。

予選C　高等師範学校，東京帝大のレースは，豪雨の中で行われて，帝大が1着となる。

予選D　早稲田大学，本学のレースは雨上がりの良コンディションのもとで行われて本学が勝つ。

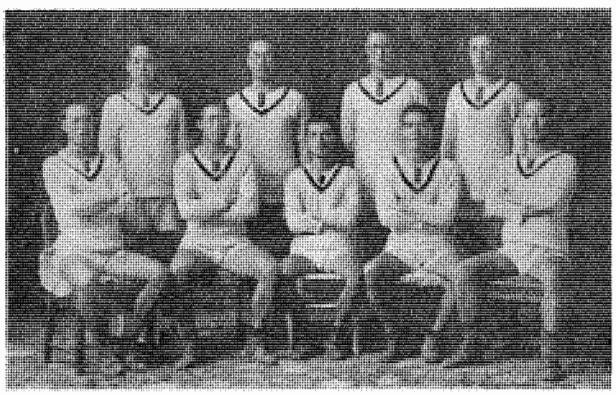
27日のレース

準決勝A　本学が帝大を5艇身差で破る。

準決勝B　明大が日大に大勝する。

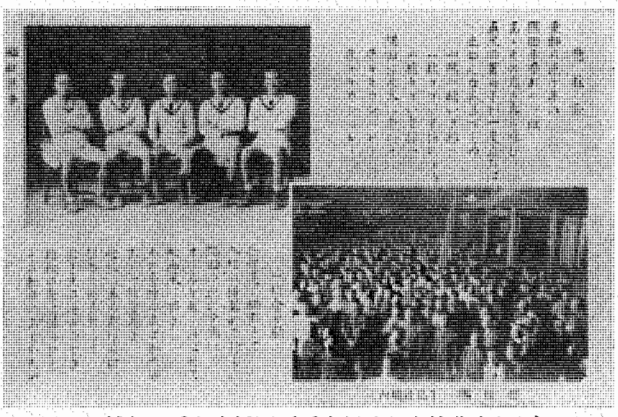
決　　勝　明大が本学のコースに侵入して接触。明大がオミットされて本学が単独でレースをして優勝する。

決勝レースの判定に対して明大側から抗議が出されたが，岩下審判長はこれを明大のファウルとして却下した。そのため，岩下審判長の専横，漕艇協会が本学勢力の天下であるとの非難が高くなって，また明大は一時協会を脱退するとの動きも見られた。この接触レース問題は新聞紙上等で騒然となり，のちのボートレー



優勝クルー

ス判定に大きな影響を及ぼすことになるので詳細を記しておきたい。



補欠選手と応援団（再度優勝記念絵葉書から）

まず翌28日の新聞記事には次のようにレースの経過が述べられている。

「滑り出しは両クルーともよく，商大が幾分か高めのピッチをひいて進み，天野工場前において約1シートをリードしたが，水神のカーブに至ると急に両クルーは接近して，審判艇からの再三の警鐘もエキサイトしているために耳に入らず，コーナーフラッグの中央において明大クルーが商大クルー側のコースに入り，ついに接触するに至った。かくして両クルーはオールを上げてレースを中止するのやむなきに至ったが，審判長は慎重協議の上，明大が商大のコースをおかしたものとして，明大を除外して商大は午後5時30分，独漕レースを行なった。」

またこの判定に対する新聞記事は以下のとおりである。

「明大と商大の決勝レースは，明大が商大のコースをおかしたためにファウルとして審判長から失格を命じられ，商大は独漕して優勝者となることができた。ファウルの原因は，水路係から明大クルーに対して，そのコースが徹底していなかったためであって，また明大はファウルをするに至ったコースが自分たちのレースコースであると信じてレースを進めたものであって，これに対しては水路係や当日の総務も認めているものであった。しかし，審判長の判定は絶対的なものであって，断呼として明大を除外したのであった。これを聞いた明大クルーは涙を流しながらその非をならして引き上げたが，おさまらないのはむしろ応援隊の方であった。商大の独漕が終わり，ランチが商大艇庫前に着くと，数百名が一団となってつめかけて，あわやという事態があった。」

次に本学ボート部の君塚茂太郎先輩が，当日の副審判長としてランチ上から同レースを観ていたので，その詳細を書き残すことができた。それを要約して以下述べてみたい。

「結論として岩下審判長が下した判定――明大オミット，商大独漕――はまさしく

審判規則にそったものであり，何ら非難を受けるものではないと同時に，将来に悪例を残さなかったことは実に立派なことであった。そもそも審判には厳正な態度が要求されるが，ボートレースにおいてはなおさらである。ある大先輩は『ボートレースの審判は，その間だけ神様にならなければならない』と言った。

今回のレースで審判長が，その決定を遅らせたことは審判として遺憾とするところであり，大きな誤解も生んだが，岩下審判長が本学ボート部の先輩であるがために，本学にとって有利な判定を下したという愚説も一部において流れているが，とんでもない見当違いである。本学ボート部の先輩であるために，かえって審判という役職を越えて，本学側に再レースをしてはどうかというような勧誘を考えるに至ったり，そのため決定が延びて，様々な誤解を生んだことは本学にとって不測のことであった。

今回の判定はあくまで厳正で，決定に少しの揺らぎもないことは，誰もが認めることである。大会規則では，競漕する当事校を代表する副審判係と審判長とが作る審判班によって審判がなされる。審判長は，協会評議員会で出席者中⅔以上の同意があったうえで，会長が委嘱するもので，当日のレースに対して最終絶対の判断，命令裁決の全権をもっていることは当然である。この決勝レースは岩下を審判長として，明大は由村，本学は自分（君塚先輩）を副審判として臨み，その他に早大の高木審判係が立会者として審判艇に乗っていた。

この接触に対する判定について，審判者に最も好都合であったのは，接触が第１コーナーを示すリミットフラッグ間で生じたので，いずれが悪いかを極めて明瞭に判断できたことである。審判長は直ちに接触が第２コースの本学側で生じたことを各審判に説明した。その結果，副審判と立会者の高木もこれを認めて問題は解決した。

しかし，岩下審判長はこの決定を延ばして，『理論上は，明大をオミットにすべきであるが，スタート後わずか１分余りのことであるから，商大側がもし再レースをすることに同意するならば……』と本学側に勧誘したために，混乱の種がまかれたのであった。

その後の経過の中で，明大側が『理論上，明大の失格は認めるが，武士の情けで商大に再レースの勧誘を願いたい』という発言をしたために，のちに新聞紙上等でとりあげられた『武士の情け論，スポーツマンスピリット論』にまで発展してしまった。

結局，判定の公表が遅れたために，様々な意見や問題が生じた。しかし審判規則にも，艇が自己のコースを外れ他艇と接触の危険ある時は，その艇に進路を正すことを審判長が注意する。また各艇がレース中に正しい水路にあるかどうかは審判長が決定

する。もし他のコースに侵入して接触した場合には，その艇をレースから除外するという事例に，今回のレースは当てはまり，少しの疑点もない。

今回，審判長の決定が遅れたとはいえ，正しく判定されたことは，日本漕艇界のためにも大いに嬉ばしいことであり，真のスポーツマンスピリットはその中においてこそ発揮されるべきだと確信している。

以上が君塚副審判長の意見であった。

また東大ＯＢの久保勘三郎氏も「再競漕は原則に反する。明大側にも一理あるが，商大への非難は不当」と述べている。

接触レースという問題は，大正10年，隅田川で行われた一高対三高レースにおいても生じた。しかしこの場合，審判は断乎として三高のファウル，オミットとともに一高の勝利を宣言したのであった。

やはり，今回の本学と明大との接触レースは，競漕規則に照らしても明大側にその非があることは明らかで，岩下審判長が下した決定はまさに正しいものといえる。再レース云々は誤ったファイティングスピリットであり，その気持ちは理解できても，そのことを明大が公に述べるべきことではない。この問題は様々な議論を呼んだが，岩下審判長が下した決定に従うのが当然であった。

大正15年

高商レースと春季競漕大会

年も明けた大正15年，１月早々，第１回目の本学ボート部主催の高商レースが開かれた。１月５日の大会に参加したのは，本学専門部，大倉高商，彦根高商の３校であった。本学専門部は一橋の漕法をもって臨み，大倉高商は例年のインターカレッジにも顔を出す力を持ち，彦根高商は琵琶湖をひかえての関西の雄であった。そして専門部はこれに優勝した。

続く４月25日には，恒例の春季競漕大会が開かれて，第一選手はＣ組が優勝している。

第６回インターカレッジ

この年の秋には，第６回インターカレッジが千葉医科大学を新たに加えて，11校参

加のもと9月25日，26日の両日にわたって開催された。本学は予選で明治大学と対戦して，事実上の決勝戦といわれた。しかし白熱した大接戦を演じたが，わずかの差で明大に敗れてしまった。

このレースのエピソードとして，本学ボート部の性格の一端を示す記事が挙げられる。明大クルーはゴールに入るとすぐに，昨年の雪辱のつもりか「ざまあ見やがれ」とか「商大のヘナチョコ野郎に負けてたまるか」と口々に連呼したが，本学の主将高橋朝次郎は「恐れ入りました」と唯一言答えただけであった。そしてこの言葉に感じてか，明大クルーはそれきり一言も発しなかったということである。決勝レースではその明大が再び帝大と接触したが，昨年の騒ぎの二の舞いを警戒してか，再レースが行われて，帝大を1艇身差で破って，隅田の覇権を手に入れたのである。

新艇庫建設に対する動き

大震災の犠牲となって，収容していた愛艇と共に一切が灰燼に帰した旧艇庫に代わって，木造の家屋ではあったが，屋上に観覧席を特設した艇庫が震災後早々に出来たことは既述したとおりである。本学にとっては，これでも当時は非常な喜びであり，好個の刺激となったことは事実である。

その後，三科分立問題が一応終息し，続いて本学移転問題にともなう「近くに川を求める運動」が村山貯水池の利用に焦点化され，わがボート部が全力を挙げて進む道はただ一つ，といった気運が濃縮されつつあった。その矢先に新艇庫建設の問題が，急遽，表面化したのであった。そして，この新艇庫誕生の動機として次のような状況があったことを記しておきたい。

震災地復興を目的とする「復興院」の業務も，いよいよ最終段階に入っており，墨田リバーサイドパーク計画もその一環であった。この隅田公園を日本における臨江公園のモデルケースとして完成させようという意気込みであった。かくして隅田川に臨んで建っている本学と帝大の仮のバラック艇庫を，その公園にふさわしい立派なものにすべきだという意見が，復興院技師の衆論となっていた。そこで復興院は，文部省を通じて正式に両大学に対する勧告を行い，新公園にふさわしい建造物に改築するように要請したのであった。その後，学生や大学当局の協力のもとに昭和5年5月竣工して，東洋一の大艇庫が再び隅田に誕生したのである。

なお，この新艇庫のタワーにとりつけられた，隅田を見下ろすマーキュリーのマークの周囲に，今日ではよく知られているラテン語の「MENS SANA INCOR

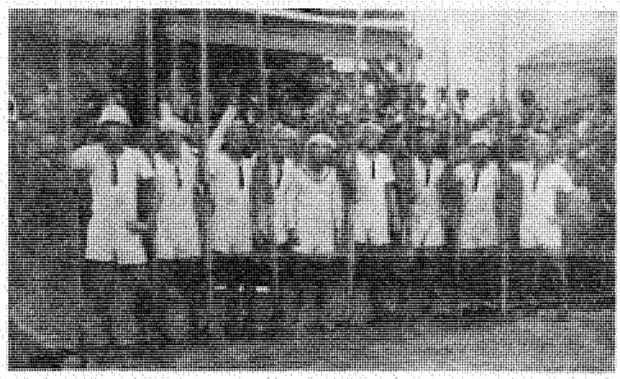
PORE SANO」(健康な精神は健康な肉体に宿るの文字) が，当時のボート部長高垣寅次郎教授と佐野学長との相談の結果，彫りこまれることになった。

昭和2年

第7回インターカレッジ

年号も改まって昭和となり，4月24日，恒例の春季大会が第41回目を迎えた。第一選手スレーほか全レースでH組が全優勝した。続く5月から，昨年のインターカレッジでの雪辱を果たすため合宿練習に入った。今回，多年の経験に鑑み新漕法が考案された。「力の経済と艇脚第一」を目標にして改良されたものであり，遠山不羈夫コーチによって指導されることになる。その新漕法の具体的内容は以下のとおりである。

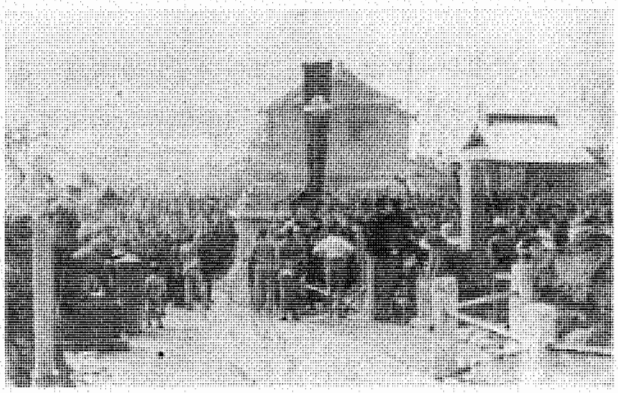
従来のフォームに重点を置きすぎた漕法を改めてなるべく無駄な力を使わないようにして，一度用いた力をすべて効果的に艇速に用いることに重きを置く。従来の不経済に力を用いるオーソドックスの直輸入漕法を改めて，選手の総力を前進にのみ使い，急ピッチの間にもフォアワードで，充分休息するようにした。そしてコースの状況も究めるために，最初の練習からしばしばコースを漕いだ。



三度隅田の覇権を握るわがクルー

こうした合宿を続けた成果を試すべき第7回インターカレッジが9月24，25両日に開催された。拓殖大学の参加で出場校は12校となりにぎわいを見せた。

今回はコースの短縮で隅田川下流の水神言問間の2,000m コースで行われ，これにともなう漕法の変化，並びに来年8月のアムステルダム・オリンピック



牛島神社に集まる応援団2,000人

日本代表選考会ということで著しい興味を惹くものとなった。

昨年，明治大学に惜しくも敗れて長蛇を逸した本学は，その後，臥薪嘗胆の苦闘を続け，新進気鋭のメンバーを選抜して遠山コーチのもと，伝統的オーソドックス漕法を改めて，新漕法を採用し，数か月の猛練習を続けてきた結果，準決勝で優勝候補の帝大，早稲田大学を破り，決勝において明治大学を一蹴して，昨年の雪辱を果たし，7艇身の大差で優勝し，三たび隅田の覇権を握った。

詳細を述べると，第一予選は，高等師範学校に6艇身差で勝つ。続く第二予選は，帝大，早稲田大学と対戦して，帝大に1艇身半差で勝つ。そして決勝では明治大学に7艇身の大差をつけて優勝した。以上の経過で，本学は一昨年の決勝レース，そして昨年の予選レースと同様に明治大学と対戦してこれを見事に破り，インターカレッジ創設以来，実に三度隅田に覇をとなえ，全学的にも一橋の意気が高まる一方，ボート界においてもいわゆる「商大黄金時代」を築くことになった。



この年，昭和2年は本学ボート部にとってのみならず，日本の漕艇界にとっても極めて画期的な年であり，この年から日本独自のスライディングシェル艇の漕艇が始まったといってよい。日本にスライディングシェルエイトが輸入されたのは大正7，8年頃で，その正式のレースが行われたのは大正9年であった。

それまでのレースは，もっぱらフィックス艇が主であったから，この新式のシェル艇を漕ぐためには，当時の世界の漕艇界の大先輩であるイギリスに，漕法，造艇，オールなどを学ぶほかに道はなかった。そして，その時の漕艇のバイブルは“Complete Oarsman”という本であった。

この漕法は，いわゆるオーソドックス漕法といわれるもので，我が国の漕艇界はこぞってこの本に学んで，スライディングシェル艇を漕ぎ，また，イギリスからシェルエイトやオールを輸入し，あるいはそれをまねて艇やオールを建造してレースを始めたわけである。

ところが，わが商大ボート部は昭和２年のインターカレッジ競漕大会において，日本で初めてこのオーソドックス漕法を離れ，フェアバン・スタイルの漕法を採用し，このインターカレッジの優勝を勝ち取ったのである。

このような事情から，昭和２年の本学の優勝は，本学ボート部にとっては無論のこと，日本の漕艇界にとっても近代的な新漕法採用の画期的な年となったわけである。これから後，日本の漕艇界は，この新しい漕法の研究に没頭するとともに，日本人の体格に合った最も合理的な漕法の発見に努力し，さらに，日本人の体格に適合した艇やオールの開発に精力的に取り組むことになったのである。昭和２年に商大ボート部が投じた一石は，日本漕艇技術の発展に大きな役割を果たし，日本漕艇界に新しい時代をもたらしたものといってよい。

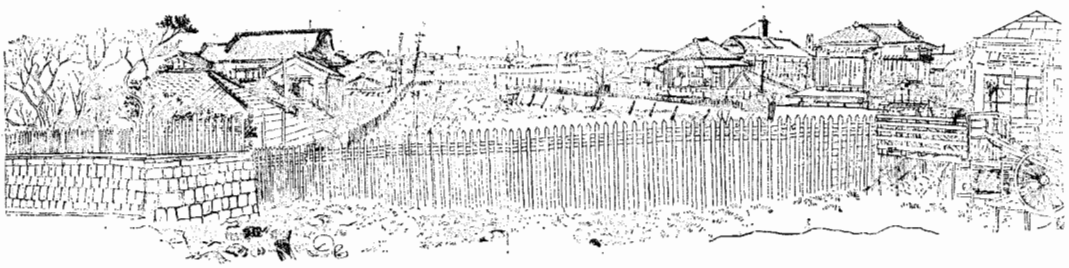
第6期　雌伏八年時代（昭和3～10年）

概　　説

昭和2年の全国制覇以後，昭和3～10年の長きに亘って東京商科大学の全日本制覇はなく，冬の時代を迎える。しかしこの間，対校クルーは弱かった訳ではなく，毎年優勝候補の一角にありながら悲運に泣いた。昭和4年は準決勝で，昭和7年は予選で，艇が水舟になって惜敗した。かかる事故がなかったならば，十分に優勝するところであった。

ことに，昭和6年は，優勝筆頭候補に上がりながら最大の強敵慶大と第二予選で同着，再レースの死闘を演じ，疲労困憊して，調子の下降を来したまま，難敵と当たらず楽勝を続けてきた早大の前に屈してしまった。翌年のオリンピック代表候補クルー決定レースには他を退けてチャレンジャーとなったものの，再び早大に敗れ，オリンピックの夢が潰えた如きは，ともにその一例である。勝つのが仲々難しくなったのも事実で，これは一に他校も段々と強くなってきたためである。

思うに昭和2年頃迄，商大は漕法において，また，用艇において一歩先んじていたが，年を遂ってその差がなくなってきた訳である。昭和3年，第2回目の優勝を遂げた早大の舵手であり，後年名コーチとなった永井久雄氏は，その著『わが漕艇』の中で「昭和2年，フェアバーン漕法を取入れた商大に決勝で負けた私は，その原書2冊を手に入れ，拙い英語力で首っ引でこれに取っ組んだ。たまたまアムステルダムのオリンピックに行く日本クルーの練習に，第2クルーの舵手として参加したので，フェアバーン漕法の当時の第一人者であった商大先輩小松栄氏（オリンピック・クルーの日本でのコーチ）の教えを受けたので，その大要を身を以て知る事ができた。昭和3年には未だ学生であったが，早稲田のコーチをすることになったので，一大決心



昭和9年頃の向島，大倉別邸附近

で，此のフェアバーン・スタイルを取入れた新漕法で母校の漕法改革を強行し，幸いにして商大のお株をうばって全日本の優勝をなし遂げる事ができた。爾来，フェアバーンの書を「座右の銘」とし熟読百回，我がものとするを得た」と述べている。

また昭和8年，東大は画期的な新艇を造るとともにフィニッシュに重点を置いた漕法に移行し，各レースにいずれも2艇身以上の差をつけて優勝したが，今日の東大漕法の基礎はこの時に確立されたものといえる。

東大は昭和10年6月にはベルリン・オリンピック代表クルー決定レースにも優勝した。早大は昭和10年の全日本エイトに優勝し，東大とともにベルリンへ行った。

商大はこれらオリンピック決定レースでは，いずれも利がなかったが，昭和10年の関東インター・カレッジ，エイトでは，ベスト4人をフォアに送った残りで編成したエイトクルーで早大と同着レースを演じ，再レースでは敗れたものの実力では2位であった。この8年間は，昭和9年春，関東インター・カレッジ，フォアに優勝したが，メインのインター・カレッジ・エイトレースに関する限りは苦節の時代であった。

しかしながら，次期への飛躍の基礎が段々とできつつあった。専門部は，昭和5年初めてエイトクルーを編成し，ロンドン杯レース出漕に踏切った。以来種々の困難な条件を克服しながら，このレースに連続勝利を収めたが，B級レースのため参加クルーが少く，脾肉の嘆をかこつことになった。しかし，専門部は独自のまとまりと気迫によって，毎年インターカレッヂ上位クルーと伯仲の実力を備え，全一橋雌伏の時代にも気を吐き続けると共に，後年(昭和12年)全日本選手権レガッタ参加クルーのオープン化に大きな役割を果した。このように昭和5年の当時東洋一の規模を誇った新艇庫の竣工と相俟って，ボート部の健在を証する事柄も多々あったといえよう。

ただしかし昭和5年の本学の国立への移転は振り返ってみると，学校百年の計から



白鬚より久保田鉄工を望む

見て正しい判断だったとは思うが，隅田川への距離が著しく遠くなったことによって練習に著しい不便を生じたとともに，ボートの大衆化，橋人皆漕の理念からすればボート部には大きなマイナスであり，その影響は他の運動部に比し，比較にならぬくらい大きく，未だにその尾を曳いているといわざるを得ない。

眼を学内に転ずると，昭和２年のアメリカの金融恐慌に端を発した世界同時不況の影響は日本も免れる訳には行かず，不況，失業の増大に伴い，学内にも左翼運動の高まりもあり，一部学生には選手制度の廃止，運動部の大衆化といった声もあったが，取り立てて対立が烈しくなるということもなくて推移した。ボート部といわず，全運動部が，門戸を自由に開放しており，選手以外の使用は認めないとか，選手による独占，私物化等は全くなく，またボート，ラグビー，ホッケー，テニス，バスケット，サッカー等商大の伝統的運動部が，リーグの一部，二部にあって，かなりの成績をあげていたこともあり，一般学生の運動部への反対が高まるようなことはなかった。

	昭和３年度	昭和２年度
イ 収入	7,000円	7,000円
ロ 支出		
1 理事会	707	525
2 学術部	1,170	1,000
3 文芸部	820	450
4 国際部	220	300
5 音楽部	150	170
6 庭球部	850	918
7 ボート部	1,285	1,392
8 剣道部	267	315
9 柔道部	256	315
10 競技部	217	261
11 弓道部	172	235
12 ラ式部	315	320
13 ア式部	25	130
14 馬術部	64	100
15 水泳部	130	145
16 籠球部	307	313

○ア式部昨年度においてほとんど存在の実を示さず。
○野球部再三の催促にも予算案を提出せず。

ただしかし，かつてボート部が「運動会」(明21～35)の中核として君臨していた頃や，明治35年の学生の自治団体「一橋会」が創設されたときに，「一橋会員はすべて端艇部員」という規約が設けられた頃に比べると，他の運動各部が多数新設されたし，またそれにも増して一橋会の理事会や文化部の学内における地位や比重が高まったことはいうまでもなかった。その例証の一つとして，昭和３年度における一橋会本科会の確定予算を前年



向島艇庫より河を望む

度に比較して示すと，前掲の如く運動各部が削減されて，理事会学術部，文芸部が増加されている。

予科専門部廃止法案をめぐって昭和6年9月に籠城事件が起こり，卒業生，在校生一丸となって反対運動を展開したことによる愛校心の昂揚もまた反運動部気分を鎮静化するにあずかって力があった。更に同年勃発した満州事変以来，徐々に非常時体制に入り，右傾的革新が進むに従い，学内の大勢は時勢に順応して行く傾向を示すのである。種々の批判があったにせよ軍需景気を主軸に経済が好転し，失業も減少，雇用機会が増大するにつれ，右の傾向は強まりつつ次の時代に入って行くのであった。

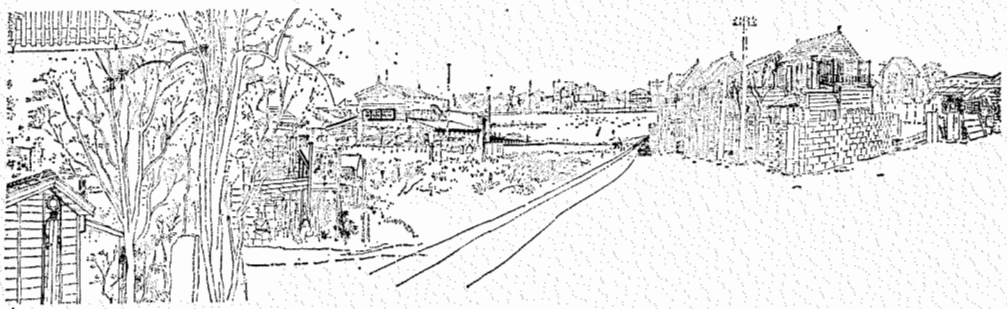
昭和10年9月に入り，いわゆる「白票事件」が起こり学内騒然としたが，ボート部は，他の運動部とともに終始中立的立場を堅持した。これは事件の真相は色々言われたが，客観的に理非曲直を判断する材料もなかったし，一方の言い分を聞いて軽々しくそれに組みすべきでないと判断したからに因る。あれから50年近くを経過した今日，冷静に考えて見ても当時の判断は間違っていなかったと思われる。

以下順を追って，この8年間のボート部活躍の後を振り返って見ることとする。

概説——フェアバーン漕法の採用とインター・カレッジでの優勝

前に述べたように昭和2年は商大端艇部にとってのみならず，日本の漕艇界にとって，極めて画期的な年であり，この年から古典的なオーソドックス漕法から近代的なフリースタイルのフェアバーン漕法による日本独自のスライディング・シェル艇の漕艇が始まったといってよい。

ところで，昭和2年にこのフェアバーン漕法を，わが一橋が他にさきがけて採用するに至った事情にふれると，大正15年も押し詰まった年の暮れ，S組先輩の高橋保幸がC組先輩畑弘平に1冊の英書を手渡した。これがケンブリッジ大学ジーザスカレッジのボートコーチ，フェアバーンの著書 “Rowing Notes” であった。たまたま，畑弘



向島艇庫上流

平は九州へ転任となったため，これを在京の若い先輩達に託して赴任していったのであるが，この本を託された在京の若い先輩や学生は，昭和２年の初めからこの本の翻訳研究を始めた。

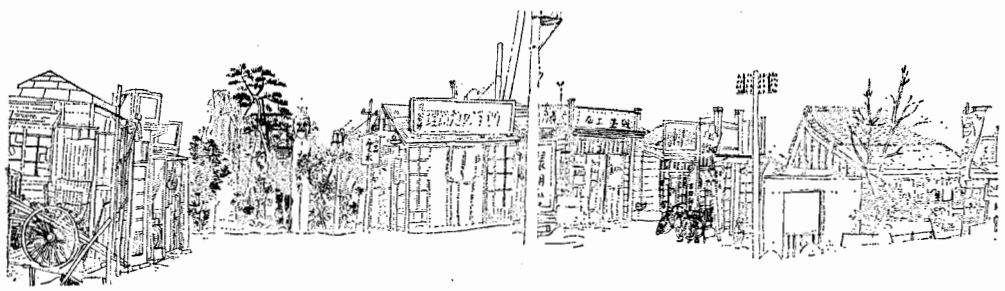
当時の対校選手の編成は，春４月下旬に行われる学内大会のＨＣＳの第一選手の中から選ばれ，コーチを決め，５月初めに第１期練習をスタートし，９月下旬のインター・カレッジに備えるのが普通であった。その年のコーチは，遠山不羈夫（大13卒舵手）であった。もちろん，遠山コーチは高橋先輩の手に入れた Rowing Note” を読了していて，この漕法の長所を認め，昭和２年の対校選手の漕法においてこれを取り入れたのである。

古きものにかたくなに執着するイギリスにおいてオーソドックスに反対するフェアバーン漕法が芽生えたこと自身まことに面白いことではあるが，それの長所を認め，直ちに商大対校選手の漕法として採用した遠山コーチを始めとする当時の若き先輩達の知性と勇断は敬服に値するといえよう。

昭和２年の優勝は，このような事情のもとで勝ち取った記念すべき優勝であり，この優勝が日本の漕艇界に及ぼした影響はまことに大きいものがある。そして，各大学とも，われもわれもとオーソドックスからフェアバーンスタイルへ移行して行ったのである。

こうして，日本のローイングは自らの力で，自らの道を切り開く，一歩を歩き始めたのである。しかし，皮肉なことに，この日本漕艇界に大きな飛躍発展をもたらすきっかけをつくった商大端艇部が，その後８年に亘って実力常にトップクラスにありながら，優勝できなかったということは，何とまた皮肉な運命のいたずらであったろうか。

遠山コーチは，漕法に新しいフェアバーンスタイルを取り入れたばかりでなく，オールや造艇について，いろいろな工夫をこらし，日本のオールや造艇の技術の発達のきっかけをつくられたのである。大正時代のシェルは，大体イギリスから輸入された



精進料理の「雲水」，昔のＳ組の合宿所（定宿）

艇の模倣に過ぎなかったが，それが大正15年から昭和２年にかけて造られた艇は模倣から抜け出してきたのである。

模倣艇は，艇の長さ約60呎，幅24吋，艇の横断面は半円と箱形との中間，縦断面は⅔は直線という常識的な形が多かった。遠山コーチが昭和３年に設計された艇は，後にマホガニーと略称されたように，当時一般の材質がアメリカ産の檜であったのに，マホガニーを使用していた。艇の長さ57呎，幅22吋，横断面はU字型，縦断面はトップから７番位までは直線であるが，それから舵の付け根まで急激に細くなり，舵の付け根はスカールの艇尾と同じ位小さくなっていた。艇首部は，軍艦のそれのように両側から弓なりに凹んでいるという変わった形であった。この艇は，すべての点で新機軸であったので，対校選手が乗りこなせないまま対校選手艇としては１回も使用されず，昭和５年C組第一選手が春の学内大会にこの艇で優勝したにとどまり，昭和７年，専門部ロンドン杯選手が使用練習中，曳船と衝突切断されてその短い命を終わった。

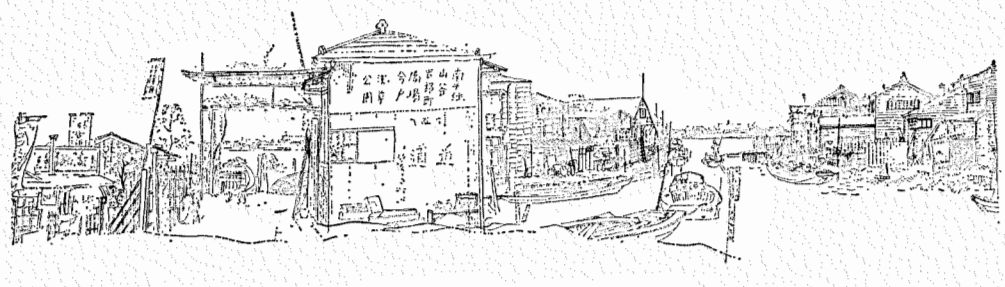
当時は，どのような艇が最もよい艇かということを模索中だったから，その後鷺島コーチ，宇治原コーチなどの設計した特異な艇が新造された。

鷺島コーチ設計艇　（昭和４年）長さ59呎，幅23吋，材質アメリカ檜，断面U字型
宇治原コーチ設計艇（昭和５年）長さ58呎，幅23吋，材質アメリカ檜，断面U字型

また，オールについても長さ，ブレード幅を縮めたものなどが工夫された。

当時のオールの標準は全長12呎（3.66m），インボード３呎７吋（1.09m），アウトボード８呎５吋（2.57m），ブレードの幅６吋（15.24㎝），長２呎８吋（81.28㎝）であつた。

現在（昭和58年）用いられているオールは全長3.8ｍであり，又ブレードの大きさは幅8.6吋（22㎝），長さ２呎（60㎝）と変わって来ている。



早大艇庫附近，ポンポン船発着所

昭和３年

オリンピック出漕と東京商科大学

昭和３年は，アムステルダムオリンピックの年であり，このオリンピックに日本のクルーが初めて参加した。このオリンピック出漕クルーは，各大学から選抜されたメンバーによって編成されたシェルフォアクルーとシングルスカルであった。この出漕クルーのメンバーの選定は，もちろん日本漕艇協会に一任された訳であるが，前年優勝の商大クルーからは一人の選手も出なかった。商大から候補にあがったのは舵手中島俊郎と漕手和田庸之助だったが，結局，商大は選手を送らなかった。商大は，“ボートのような精神的団結を第一とするスポーツでは，個人個人の体格技量が優れていてもクルーとして強力なものにはならない”という「一橋伝統」の考え方を持っていたので，商大の単一クルーの出漕を希望したためである。選手を出さない代わり，商大出身の小松栄がオリンピック選手のコーチを引き受けることとなった。

オリンピック出漕クルーは，フォアコーチ＝千葉四郎(東大ＯＢ)，小松栄（商大ＯＢ)，クルー＝舵手薗部司（東大)，整調能勢一男（明大)，３番土田信（東大)，２番高島勇（早大)，舳手佐藤八郎（日大)，シングルスカル＝石井金一郎(東京ローイングクラブ）であった。オランダ入りの前，イギリスで，イギリス人コーチが１カ月指導した。土手を馬で走りコーチしたという。

商大の単独クルーが，オリンピック代表クルーになるべきであり，商大の強い希望であり，またそれが強い日本代表クルーをつくる道だという商大の信念は，次の昭和７年のオリンピックの際採り入れられ，爾来，東京オリンピックに至るまで，日本漕艇協会のオリンピック日本代表クルー選定の大方針として30年に亘って続いたのである。

さて，昭和３年のインター・カレッジのレースであるが，１年おきに勝つジンクスどおり，本学は予選で早大に３艇身差で敗れ，早々に姿を消してしまった。商大に做って，熱心にフェアバーンを採り入れた早大が２回目の優勝を飾った。どういう訳か，当時の商大クルーは１年おきに優勝していたのである。

また第１回だけで，種々の事情から中止されていた本学端艇部主催の全国高商レースは本年復活し，本学専門部，神戸高商，長崎高商の３校参加によって開催された。専門部と神戸の間で接触したが，再レースの結果，専門部が優勝した。

この昭和３年は優勝を逸したものの商大端艇部にとって，極めて重大なことがいろ

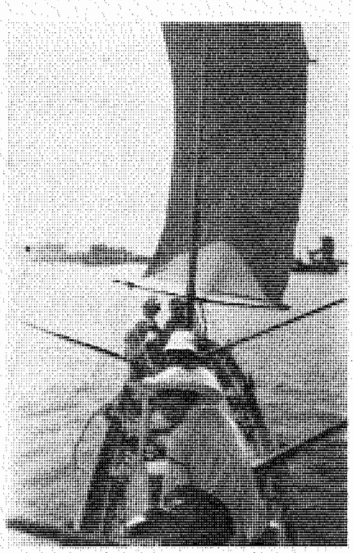
いろとあった年であった。まず第一は，漕法の改革につづいて前述の遠山コーチによる新機軸のエイトの新造があった。また，商大が神田から国立に移転することが確定するに伴い，国立近辺に練習用新コースを開拓することを目指し，中川・河西等に依る多摩川・荒川の遡航調査遠漕が試みられた。

さらに，この年初めて乞食遠漕が試みられた。元来遠漕は，合宿入りに先立ち，体力づくりの長漕訓練であった。したがって，出発から帰京まで禁酒禁煙であって，ただ銚子大新に宿泊する2日間だけが飲み放題だったのである。往路4日，帰路3日の苦しい長漕ぎの慰労と休養のため，特に大新に2日泊った訳である。

この大新の2日の泊りの間に，数々の武勇伝や逸話が生まれ，大新の部屋にその名残が残されていたのである。このように，大新は“一橋ボートマン”の桃源境であり，メッカであり，遠漕歌の〽今宵大新飲み明かす，の歌詞の中には，青春の喜びと情熱が染み込んでいるのである。

そこで，乞食遠漕であるが，「船は気まかせ風まかせ，予定も立てずに遊びながら，銚子まで行って来よう」という考えで，当時本科2年の半田清が企画したものである。もちろん，原則として旅館には泊まらず，自炊をし，艇を河岸に着けて河原で寝たり，流れにまかせて艇の上に寝たり，帆走したり，艇を曳いたりして行く訳であるから所持金は極めて少ない。なお実施時期は夏であって，そこで“乞食遠漕”と命名した訳である。

しかし，この半田清の企画は，「遠漕は神聖な練習である」という商大端艇部幹部





乞食遠漕風景　左，江戸川上りを帆走，右は江戸川河川敷の野営

の猛反対を受け，彼が昭和３年７月の乞食遠漕を実行し得るまでには，この反対に対し根気よく説得を続けなければならなかった。

何時の時代でも，保守と革新？の対立は避けられないものである。彼のこの企画の成功は，ボートを愛する後輩によって引き継がれ，これを試みた連中の青春の楽しい想い出として心の中に残っている。

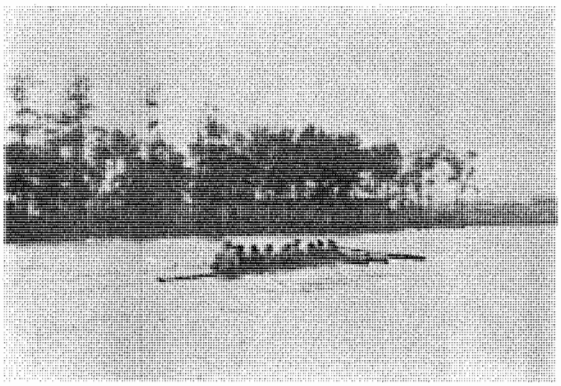
昭和４年

尾久コースにおけるインターカレッジ

この昭和４年は，商大が優勝すべき年回りの年であり，また，優勝しなければならない年であった。有能な新人選手（８名の漕手中，６人が予科，専門部学生）を対校選手に起用するとともに，遠山に代わり，鷺島富造がコーチに選任された。彼は，当時としては極めて異例な183㎝の身長を持つ偉丈夫で，現役時代から墨堤に勇名を馳せた名選手であった。また，漕法についても極めて熱心な研究家であり，この昭和４年には，名著『漕艇術』を発刊していた。

この年は，隅田川が言問橋，白鬚橋の橋梁架け替え工事のため，隅田川でレース・コースを採ることができず，上流の荒川尾久で2,000mの直線コースを新設してレースを行うこととなった。そのため商大は千住の上流に仮艇庫をつくり，千住の民家を借りて合宿することとなった。

当時の慣習として，対校選手にはシェルフォア１隻の補欠選手を練習させていたが，コースの変更による経費増のため，補欠選手なしの練習となった。当時尾久は，隅田川に比べ通航船が少なく，両岸の護岸が少なかったため，水面に波が立たず穏やかなコースであった。この点を考えて，この年鷺島コーチが設計した新艇は，幅20吋，U字型，58呎で，波が立つことは99.99％あるまいという想定で造られたものであったが，何とこれが優勝を逸する原因になろうとは，神ならぬ身の知る由もなかった。



対校選手練習風景（榛の木――千住上流）

この年の対校選手は，１年おきに

強いという慣例どおり強かった。遠山によって導入されたフェアバーンスタイルの漕法は，3年目を迎え一橋漕法として地についた感じであった。コーチが遠山から鷺島に替わったことによって，基礎理論は同じでも漕姿に多少の相違が見られたが，それがかえってプラスとなったようで，尾久のコースを漕ぐ商大クルーは他大学を圧倒していた。

9月初めに行われたインター・カレッジの前哨戦，1,000mの尾久レガッタでも圧倒的に強く全勝を記録した。先輩も学生も商大の本番における必勝を予想していた。前年優勝の早大はこの年も強く下馬評が高かったが，第二予選で商大は見事1艇身差でこれを葬り去った。ところがその後に，誰も予想し得ない悪魔が忍び寄っていたのである。それは天候であった。レースの二日程前に大雨が降り，そのため通常ならば満干とともに川が流れ，それによってスタートが上下流に変わり，川の流れに乗ったレースとなるのだが，雨のため落水が激しく，加えて準決勝のときは，逆風が強く，鏡のようなコースである筈の尾久コースが，予想外のラフウォーターとなってしまった。準決勝の相手は慶大であった。当時の慶大は，未だ一度も優勝を経験したことのない大学であったが，商帝早慶四強と称される一流クルーであった。ただ，どういう訳かスタートが下手で，伝統的にスタートのうまい商大は，スタート10本で半艇身はリードできることは確実であった。したがって，誰も商大の勝利を疑わなかった。レースは予想どおりの経過となり，1,000mあたりでは1艇身近くのリードを奪った。しかし，1,000mを過ぎる頃より商大の細い艇は，次第に浸水が増え，そのため艇足が落ち，ゴールインしたときはほとんど同時であった。そして，判定は無念15cmの差をもって長蛇を逸したのである。なお，この慶大は，結局決勝レースで東大に敗れてしまった。この商大の不運は，昭和11年の9年ぶりの優勝まで，いろいろの形で怨霊の如く，商大にまとわりつくのである。

校内レース

なお，昭和4年4月21日に開催された第3回春季大会HCSレースは，この年新しい優勝旗ができたのを契機に従来の方式を変え，昔に戻って第一，第二，第三選手制度を採り，すべてスライディング艇を使用することとなった。日本にスライディング艇が輸入され，それによるインター・カレッジレガッタが始まってから9年目となり，スライディング艇の競漕や漕法が定着し，所有するスライディング艇も増えてきたので，選手の競争はすべてスライディング艇を使用しようということになったので

ある。

そこで，従来フィックス艇で行ってきた予科ＨＣＳ選手および専門部ＨＣＳ選手のレースをやめ，予科，専門部，本科を打って一丸とした第一選手，第二選手はスライディングシェル艇，第三選手はクリンカーフォア艇のレースということになったのである。

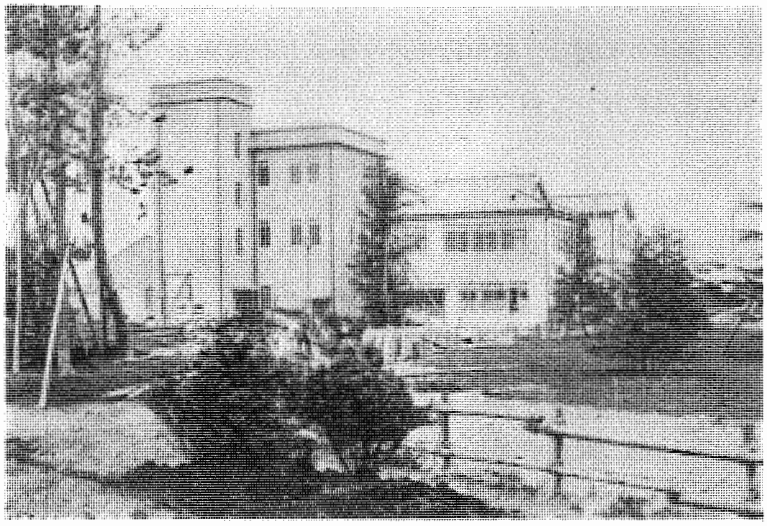
春季競漕大会第一選手レースではＨが，優勢を伝えられたＣを２艇身差で抑えて優勝し，新優勝旗に初のＨをマークした。昭和４年の対校選手の主力は，これら第一の手中の本科３年生，２年生が占め，技術的には兎に角，如何にも若々しく無限の可能性を秘めたクルーができたのである。

秋季小会は，第一選手のみが，シェルエイトのスライディング艇のレースとなり，予科および専門部のＨＣＳレースは６人漕ぎ固定席艇のレースで行われた。また，予科および専門部の１年生のクラスチャンレースと，遠漕はその性質上固定席艇を使用することが多かった。

昭和５年

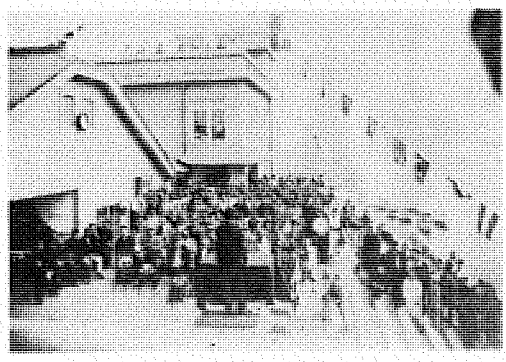
東洋一の向島新艇庫の完成

昭和５年５月，待望の向島艇庫が隅田公園の一角に竣工した。延建坪472坪５合(約1560㎡)。同時にわが艇庫と隣り合わせに建てられた東京帝国大学艇庫と比べて，東京商科大学のそれは数段と大きく立派で，商大端艇部の社会的力の強さと大きさを誇



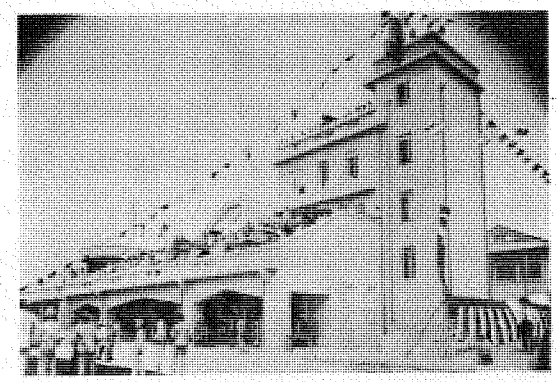
向島新艇庫（この時はまだタワーの上にマーキュリー・マークがつけられていなかった）





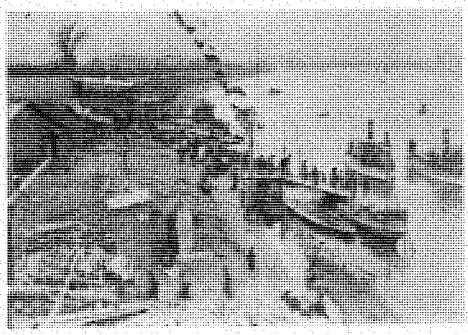
新艇庫落成記念祝賀式とパーティー

示するものといえた。その偉容は，写真のとおりで，鉄筋コンクリート造り3階建，大きく広い観覧席および役員室（1），対校選手，ＨＣＳ選手の合宿所（計4），会議場（1），事務室（2）を備え，艇庫は，固定席艇用，エイト用・小艇用の三つに分かれ，収納可能艇数は，固定席艇9隻，シェルエイト10隻，シェルフォア5隻，タブフォア・タブペア5隻，シェル小艇10隻の多きに達していた。この主建物のほかに，艇番住宅，合宿厨房，食堂（2）宿泊所（1），乾燥室（2），大手洗所（1）を含んだ別棟の木造建物が付属し，当時としては考えられる限りの便宜を備えた大施設であった。

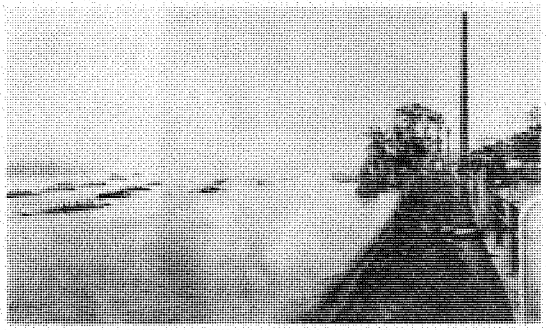


新艇庫落成祝賀レース

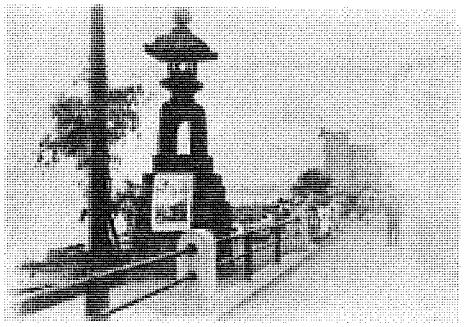
これに加えるに艇庫の前面隅田川に面して船台二つを有し，固定席艇は別



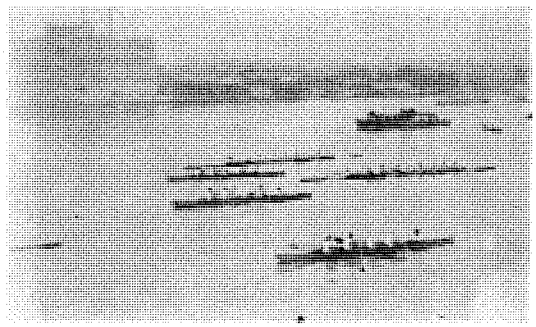
旧艇庫にて



現有総端艇を動員した大閲艇式



墨堤風景

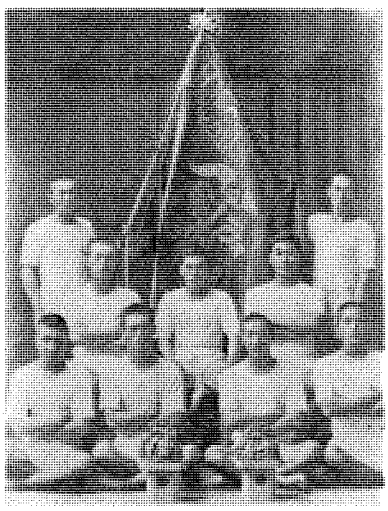


ＨＣＳ対抗リレー・レース，エイトからフォアへのバトンタッチ，Ｃ組優勝

の出口から出艇できるようになっており，艇庫施設としては前古未曽有であって，この後，これだけのものを見たためしはないといってよいであろう。

昭和５年７月６日，この艇庫完成の祝賀レースが開催された。従来のＨＣＳレースと替わったＨＣＳリレーレース（エイト・フィックス・クリンカーフォア）や現有艇全部を動員する大閲艇式などを行った。なお，この艇庫は，隅田川が漕艇場として不適となり，戸田にそれが移されるに及び約40年の命を終わったのであるが，その塔上にあった一橋のマーキュリーとそれを囲む「メンズ・サナ・イン・コーポレサノ」のテラコッタ製のマークが，今は相模湖の一橋の合宿所の入口に移築され，永久保存されている。

この年の春季大会の優勝は，Ｃであったが，ベテラン選手に代わって，昭和４年の対校クルーを漕いだ強力な若手が優勝をもたらしたといってよく，それだけに，昭和４年よりは，より洗練されたクルーとなり，今年こそは対校選手が優勝をもたらすであろうと期待されていた。しかしながらジンクスは破れず，強い対校選手は誕生しなかった。



昭和５年春季競漕大会優勝Ｃ組クルー優勝旗，財嚢(レディスバック)に注意

この年の末，不幸にも前年度の鷲島コーチが交通事故により急逝されたので，急遽，遠山不羈夫と新卒の宇治原兼一の二人がコーチを引き継ぐことに決まった。第１期練習は宇治原，第２期練習は遠山が担当した。また，新艇は，宇治原コーチが担当することとなった。普通の場合，新艇はレース前１カ月

ぐらいに完成するのであるが，この新艇は6月初めに完成した非常に特徴のある艇であった。

幅23吋，長さ58呎，U字型は普通であるが，艇の舷のラインが2番から7番まで直線という変わった形であった（普通は重心点3～4番のところの艇幅が最大となる。）。この艇は，タライと略称され，対明大対校レース（6月実施）に使用され勝利を得たが，インター・カレッジには使用されなかった。安定はよいが，艇が走り出すと艇首に波が立ち，漕手にスピード感を与えないのが，選手には不満であったのである。

この年の対校選手は，なかなか艇足が伸びず，選手コーチとも悩みに悩んでいたが，その原因はある意味では余りにいろいろなことを試みてクルーをいじり過ぎた面にもあったように思える。ストレッチャーのストラップを外して漕がしたり，整調を終始取り替えて練習したりしたことも一因であろうが，このとき，突如ロンドン杯レースに出場の専門部クルーの艇足が，驚異的な伸びを示していることが分かったのである。

それを述べる前に，専門部端艇部のそれまでの歩みについて述べておきたい。

専門部端艇部の生立ちとロンドン杯レース出漕

一橋が大学に昇格したとき，本学に予科と専門部が設置されたが，端艇部もこの学制にしたがい，大正14年から本科，予科，専門部の三つに分かれ，それを本科が統轄する形をとった。当時商大としての対外レースは，全一橋として出漕し，予科単独又は専門部単独の出漕は認められなかった。しかし専門部端艇部には，独立性維持のため，他の運動部と同じように，専門部として，対外レースに出漕したいといふ希望が極めて強く，それに応え商大主催の全国高商レース（固定席艇）が大正15年に発足することになった。しかしこのレースは参加校が少ない上，わが専門部の実力が独り抜き出ていたので，昭和4年までに連続3回の優勝を飾っていた（昭和2年は中止）が全国の名にそぐわない有様であったため，このレースには一橋端艇部内においても廃止説が高く，殊に専門部端艇部では同レースに甚だしく不満を感じ，他の大会に出場することを望んでいた。

たまたま，昭和4年日本漕艇協会は，インター・カレッジレース出漕の各校のクルーの間には実力に相当の開きがあることから，ロンドン日本人会から昭和3年のアムステルダムオリンピックにボート・フォアクルーの初参加を記念して贈られて来たロ

ンドン杯争奪のレースを創設し，トップクラスとは別にエイトレースを行うことにした。そこで，相手不足をかこっていた専門部クルーは，昭和５年の第２回ロンドン杯レースに初めてエイトをもって出漕することに決め，春季大会終了後，対校クルーのメンバーを出した残りの選手の中から専門部クルーを編成し，大正12年専門部出身の中山克己（大10，11年対校選手）をコーチに招き，猛練習を開始したのであった。

当時の練習の習慣としては，１大学１クルーのせいもあって，練習中，艇を並べて練習することはほとんど無く，また，練習で他大学のクルーと艇を並べることは全く無かったといってよい。ところが，昭和５年は，商大は対校と専門部の二つのクルーがエイトで練習していたし，同じ商大のクルーであるから練習のため艇を並べて漕ぐということは，大いにプラスになると思うのは当然である。

そこで，９月初旬のある日，たまたま練習中，千住の上流で対校クルーと専門部クルーが一緒になったとき，30本程パドリングで艇を並べて漕ごうということになった。９月20日頃のレースの本番を控え，９月初旬であるから，双方ともある程度仕上がっているクルーである。対校クルーは，当然30本で半艇身から１艇身は勝つものと考えていたのであった。

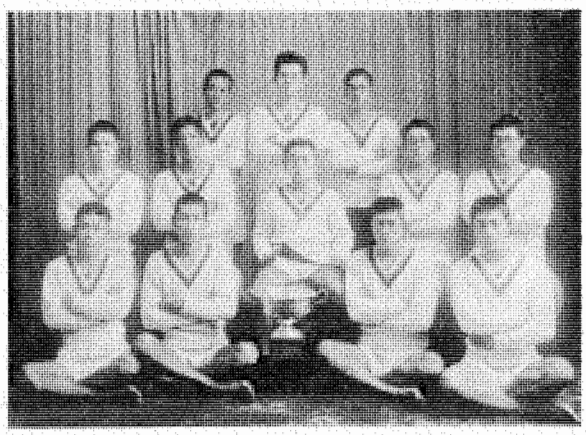
用艇は，対校クルーはタライ，専門部クルーは赤船。軽量の専門部クルーとしては，赤船は，少々重すぎるのではないかと思われた（重量＝150kg）。コーチ艇が号令を掛けて一斉にスタートしたが，勝つ筈の対校クルーがするすると専門部クルーに１艇身ほど置いて行かれてしまった。選手もコーチも唖然として嘘ではないかと思った程である。

そこで，もう１回ということになり，再度競漕したのであるが，結果は同じ30本で，１艇身も対校クルーが負けたのである。その日はそれで終わったが，対校クルーは全員が何としても納得がいかない。短かい距離だから負けたので，2,000m ならば負けることはないと思い，日を改めて，荒川放水路で2,000m のレースに臨んだのである。しかし，これがまた，４～５艇身も負ける始末。

艇が悪いのではないかということで，専門部使用の赤船を対校クルーが漕いで見たが，これまた結果は同じで大差を付けられる。この結果は，他校に知られてはまずいということで，秘密にしておいたつもりが，どこからか漏れ，他大学にこのレースの結果が知れ渡ってしまった。そして，今年の商大は弱いという噂が，墨堤に広まってしまい，選手自身もコーチも先輩も，今年は駄目だとレース前にあきらめてしまうような変なことになってしまった。

しかし，対校クルーが弱かった（ある程度練習中でのイジリ過ぎのせいもあった）というよりは，専門部クルーが抜群に強かったというのが本当だったようである。何故ならば，わが商大対校クルーは，その年優勝の東大と準決勝で当たり，大接戦の末1艇身差で負けたのである。専門部と競漕すれば，4艇身も負けてしまうが，この4艇身といえば，15秒差であって，これは簡単に縮まらない数字である。

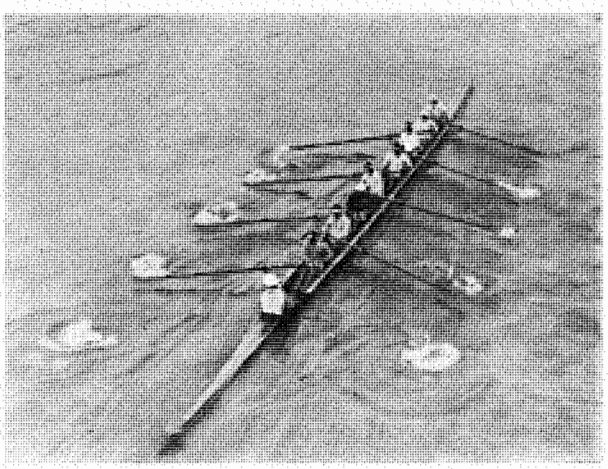
この結果から見ると専門部クルーは，隅田川一つまり日本一強いクルーだったといえるし，レースの結果から他校先輩も認めていたようである。だから，商大が東大に1艇身で負けたとき，対校選手は商大の先輩によくやったと褒められるという妙なことになったのである。初陣の第2回ロンドン杯レースでは専門部は，東大法学部に8艇身の大差で，初優勝を飾った。



第2回ロンドン杯優勝記念

当時の経緯を大森吉次郎（昭6卒）の回想から拾ってみよう。

『ロンドン杯レースは，昭和4年に創設されたのであるが，如何に弱体クルーとはいえ，矢張りいやしくも1校を代表するものが，自らB級を志望しようというものはなく，結局これに申し込んだクルーは，その年の校内レースで優勝した東大工学部の1クルーのみで，商大としては，その準備がなかったので申し込む暇がなく，遂に東大工学部の独漕で第1回ロンドン杯は，彼等の獲得するところとなった。漕艇協会としては，折角の試みがこれでは竜頭蛇尾となるので，盛んに各校に翌年の出漕を勧誘してきた。ここにおいて，専門部としては，昭和5年の全国高商大会の廃止を一橋会に申し込



昭和6年ロンドン杯出漕クルー

むとともに，ロンドン杯出漕のため，空前の専門部エイトの結成を決意し，一橋会端艇部，四神会，墨堤会に，これが賛成を求めることとなった。このように専門部の意気旺んなるに比し，当時の空気としては，一橋端艇部，四神会方面で時期尚早論が強く，墨堤会としても意気は買うが，予算などの実現を危惧し，余り血気にはやらぬよう自制を要望する向もあった』と回想し，さらに『計画当事者たるわれわれが，一番頭を悩ましたのは予算の点であった』と付け加えている。

このような困難を克服すべく，部員達によって自発的に始められたのが，“ホワイトライス会”であった。当時，食堂の昼食は，カレーライスが1皿15銭，飯に福神漬を添えただけのいわゆるホワイトライスなら1皿5銭ですんだ。学生達の昼食は，カレーライスが常であった。しかし，この計画が持ち上がるや，このグループは，昼食をホワイトライスで辛抱することとし，1食につき10銭を醵出したのである。この“ホワイトライス会”には，同情者の加入が相次ぎ，全校こぞっての後援が高まったのであった。

昭和6年

対校選手のHCS分離とインターカレッジ惜敗，籠城事件

昭和7年はロスアンゼルスオリンピックの年であり，商大の主張が，日本漕艇協会において容れられ，昭和6年のインター・カレッジ優勝校が，エイトで日本代表候補となることとなった。商大としては，従来の経緯からいっても，この昭和6年において何としても優勝し，オリンピック行の切符を手に入れて，世界の檜舞台に日本の代表としての商大の漕姿を示さなくてはならないと考えたのは当然のことであった。また，それが商大全体の先輩，学生の希望でもあったのである。

そこで従来，対校選手は4月の春季大会終了後に選考し，5月から練習を開始することにしていたものを，前年の昭和5年の10月に選手・コーチの選定を終わり，対校選手は春季大会に出場しないで，11月から練習を開始，1年間まとまった選手による練習によって必勝を期したいという考えが，前年の惨敗後，学生，選手の間に起きてきたのである。しかし，このことは，商大の強さはH.C.S制による校内レースによって支えてきたという考え方も強く，また，先輩の間にも広く支持されているので，簡単に学生だけが決める訳にはいかなかった。

学生は端艇部の幹事会で再三協議の末，“昭和6年の対校選手に限り，春季大会H

ＣＳ選手より外し，１年間の練習を行い，オリンピック代表権を獲得するため，インター・カレッジレガッタの必勝を期す”という決定を行い，直ちにＨＣＳ各組の先輩の同意を求める運動を行ったのである。“昭和６年対校に限り”ということで，何とか同意を得ようということであった。

学生の熱意によって何とか先輩の同意を得ることができ，この制度は昭和６年以降商大が優勝できなかったせいもあって，昭和10年まで続けられた。そして，後述するように翌昭和11年になってこの制度が廃止され，廃止とともに商大が全日本の優勝を勝ち取ったということは何とも皮肉なことであった。

対校選手の練習は，11月から始まり，コーチは遠山不羈夫氏と決定した。遠山コーチの練習方式は基本から始めるということで，陸上練習，タブウワーク，固定席艇練習を行い，エイト練習に入ったのは，翌年４月に入ってからであったが，たまたま遠山が３月末に上海に転任になったので，小松栄(大15学卒，大11, 12, 13, 14年対校選手)がコーチを引き継ぐことになった。通常，対校選手の合宿は，７月末ないし８月初めであったが，この年は３月の試験終了後から連続の合宿に入り，２か月ごとに１週間ないし10日の休みが与えられるだけで，一意専心練習また練習であった。

この年はまた，オールをイギリスに注文し，日本人向けの比較的短い，ブレード幅の狭いものを作らせ，ハイピッチと臨機応変のスパートに備えた。艇はアメリカ檜とマホガニーのものと材質を変えて，同型のもの２隻を新造した。艇の幅23吋，長さ58呎，U字型，新奇をてらわず，この数年間造ったいろいろの形の艇型のうち，最も無難な形式を選んだものといえる。同型であるからアメリカ檜製もマホガニー製も漕手にとって同じように漕げると思われたが，決してそうではなく，マホガニーの方が材質が堅いだけに漕ぎにくく，レースに使用したのはアメリカ檜製のものであった。

必勝を期した商大クルーの猛練習は，その成果を挙げ，土手評は商大強しの呼び声が高く，これとレースできる強いクルーは，慶大のみという一橋スパイ団の意見であった。もちろん，レガッタ前哨戦の尾久レースも全勝した。この年の東大は全く弱く，早大また低調で，先輩，学生とも，否，すべてのボート関係者は，どの相手にも１艇身以上の差をもって勝ち得ると信じて疑わなかった。だれの目にも必勝と見えた商大クルーであり，直ぐそこに大きな不運の落とし穴があることには気付かなかった。その不運は準々決勝に訪れた。

第１日目の２回戦準々決勝は，商大を除いては一番強いと見られていた慶大が相手であったから，これに勝てば優勝できる筈である。慶大は例によってスタートがまず

い。半艇身のハンディをもらってレースをするようなものだから，万が一にも負ける筈はない。ところが，1,500m辺りまで1艇身弱抜いていた商大が慶大に追い込まれ，同着レースとなってしまったのである。

当時の審判長は東大出身の郷隆氏，判定は矢張り東大学生の中沢徳彌君，ゴールインしても勝ったクルーの旗がいつまでたっても上がらない。しばらくして，審判艇から同着直ちに再レースが宣告された。このレースは日没に近かったため再レースが，やれるかどうかむつかしい状態であった。商大クルーは激しい大接戦の疲労にも歯を食いしばって再レースに備えた。応援の先輩，学生も，だれ一人艇庫を離れない。しかし，慶大は出漕しない。へばってとても再レースはできないというのである。もはや，日はとっぷり暮れて川は夜の闇に包まれている。審判長はやむを得ず翌日の再レースを宣告せざるを得なかった。

翌日午前の再レースは，前日と同じレース展開となったが，1,500m以後商大が慶大を突き放して，1艇身半の差をもって勝った。午後の準決勝では，東大に2艇身差で勝ち，決勝は早大とのレースとなった。ただし，日程が1日ずれ月曜日の午後のレースとなったこの決勝で商大は，強いとはいわれない早大に何らなすところなく敗れ去ってしまったのであるが，これは慶大との2回のレースで精神的にも肉体的にも疲労し，調子を出し切れなかったと考えるほかはない。つまり，敗因は慶大との同着にあったといえよう。

ロンドン杯レースでは，専門部は東大医学部に3艇身差で敗れ2連覇ならず，無念の涙をのんだ。また昭和6年の春季大会の第一選手レースでは，Sが圧倒的に強く4艇身差で優勝し，次いでHCの順であった。

前述のインター・カレッジレガッタが終わって数日して「東京商科大学予科，専門部廃止法案」に反対して“籠城事件”が起こり，一橋全員がこの一橋の浮沈に関する大問題に巻き込まれ，先輩，教授，学生，全員一致して予科，専門部の廃止に反対し，学生は10月初めより一橋バラック校舎に籠城し，全員退学届に署名して不退転の決意を表明した。もとより端艇部員は全員籠城に参加し，積極的な役割を果たした。

このため，政府も折れ，予科，専門部が存続することになったのである。しかしながら，この籠城のためで，日本漕艇協会がロスアンゼルスオリンピックにエイトと共に出漕させるフォアの候補クルー決定レースに，商大クルーは参加する機会を逸してしまったのであった。このフォアの選衡レースは慶大が優勝した。やむを得ないこととはいいながら，一橋にとっては不運の連続といわざるを得ない。

また，この年の秋，固定席艇による第1回予科対専門部のレースが行われ，前半リードされた予科が，ゴール前の追い込みで½艇身差で専門部を振り切って勝利を収めた。

昭和7年

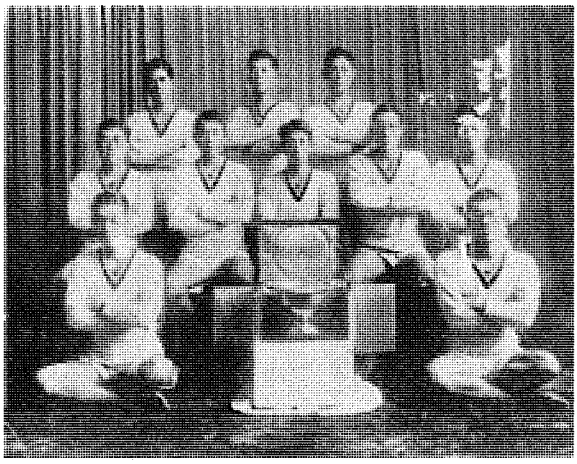
オリンピックチャレンジレースも低迷の時代

オリンピック候補選手は，エイトは早大，フォアは慶大と決まったものの日本漕艇協会では，未だ1年近い時日があるので，候補早慶に対してこの年の5月にチャレンジレースを行い，もし候補クルーに勝つクルーが出れば，その勝ったクルーをオリンピック選手とすることとした。そこで，早大慶大はもちろん，商大ほか各大学とも直ちにチャレンジレースに備えなくてはならなくなった。そのため商大も1年限りとした対校選手のH．C．S分離をさらに1年延ばさざるを得なくなった。コーチには，小松がそのまま就任し，対校選手のなかには卒業生もいたので選手の入れ替えを行い，チャレンジレースを迎えた。昭和7年5月のこのチャレンジレースは，まず，チャレンジャーを決め，それと早慶のエイトとフォアがそれぞれ3回レースを行い，2回勝った方がオリンピック代表とすることとなった。

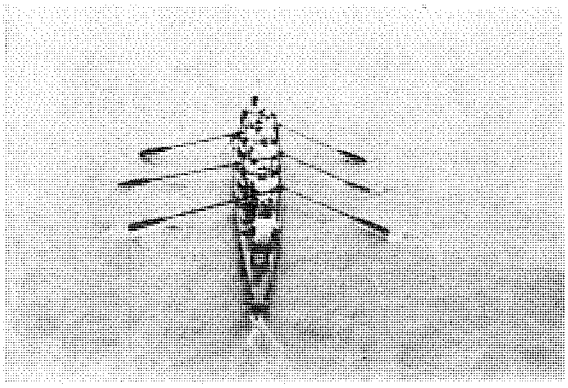
このチャレンジレースは決勝で東大を破ってチャレンジャーとなり，早大エイトに挑んだ。しかし，勝運われに利あらず，第1回戦は2艇身，第2回戦は1艇身の差をもって敗れ，涙を飲んだのである。一方，フォアのチャレンジレースでは，候補クルー慶大に，外語クルーが挑戦したが，慶大の一蹴するところとなり，ロスアンゼルスには，結局，早大，慶大が日本代表として派遣されたのであるが，世界水準との差は，いずれも2,000m で20秒という大差であった。

さて，商大では小松栄がコーチを退き，昭和5年専門部の強力クルーを作り上げた中山克巳(大12門卒)がヘッドコーチに，小松，岩崎（恒弥）がサブとなって，コーチ陣が強化された。小松氏がパドル一辺倒の猛練習で漕手を鍛えたのに対し，中山は，漕手に自由に漕がせながら，その最大公約数的特徴を見付け出し，このクルーは，フィニッシュでユニフォーミィティを出すようにしよう，このクルーは，キャッチでのユニフォーミィティをという考え方で，柔軟性のあるコーチングであった。

かつ，ライトパドルに大変重きを置き，ライトパドルで漕手のブレードワークを調節した後に，1,000m～2,000mのパドル，レースコース等をやる。そうするとブレー



第4回ロンドン杯レース優勝記念



昭和7年秋季小会予科レース，H組勝つ

ドワークが荒れるので，これをまたライトパドルで矯正するというやり方で，なかなか効果のあるやり方であったが，やや，パドリング不足のきらいがあった。

この年の対校クルーは，なかなか強く，一方，他校にはめぼしいクルーはなく，優勝候補の筆頭であった。第一次予選で東大と当たり，前半3艇身以上の差を付けながら，後半で2度に亘って攪乱船の大波を受け，水船となり，沈没寸前の状態となりながらゴールし，カンバスの差で涙を飲んだ。

この年は，日大が初優勝した。爾来日大は毎年着実に力を伸ばしてくるのである。

商大はこの年，新艇を造らず，2年目の旧艇が吃水が深かったため，波に弱いという欠陥をさらけ出したもので，昭和4年の敗戦とともに，まことに不運な年であった。

ロンドン杯レースでは，商大専門部，東大医学部，慶大経済学部，慶大法学部の4クルーの参加を見た。専門部クルーは，レース10日前頃，用艇マホガニーの衝突事故に遭ったが，これによって却って戦意が旺盛となり，代替艇によって優勝を勝ち取った。慶大（法）との決勝戦では，専門部はスタートよく直にリードし，白鬚で水をあけ，商大艇庫前では2艇身の差となり，以後益々艇差を増して，3艇身の差でゴールに入る。これによって昨年奪われたロンドン杯を再び手中に取り戻すことになった。

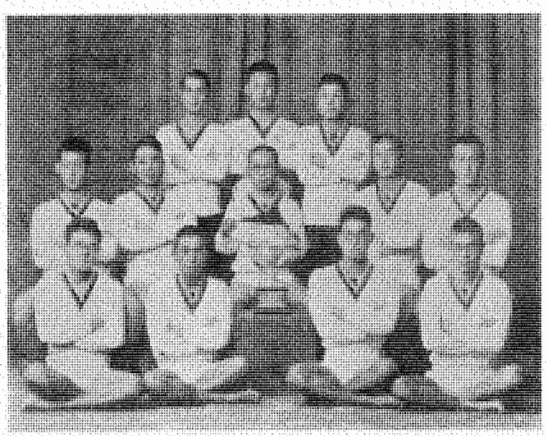
昭和7年の春季H. C. Sレースは，第一，第二選手はともにS，第三選手はCが優勝した。第一選手レースでは，若いクルーのHが見事な戦いぶりを見せ，前半をリードして出たが，大倉別邸のインカーブでSが出，白鬚にかかるときは，⅔艇身リード

していた。しかし，後半Hがこれを急追，あわやというところだったが3尺差でSに逃げ込まれた。秋の小会の予科レースでは，H組が圧勝し，C．Sの順であった。また，専門部レースはS．H．Cの順であった。また，秋の第2回予科対専門部レースは，専門部が快勝し，前年の雪辱を遂げた。

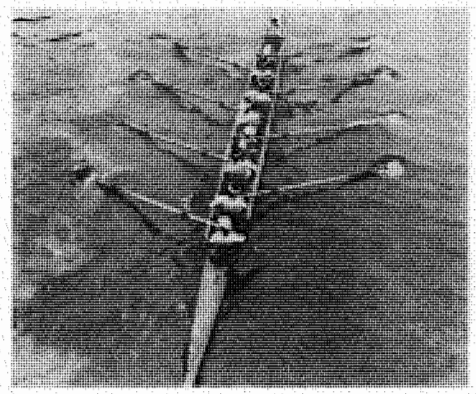
昭和8年

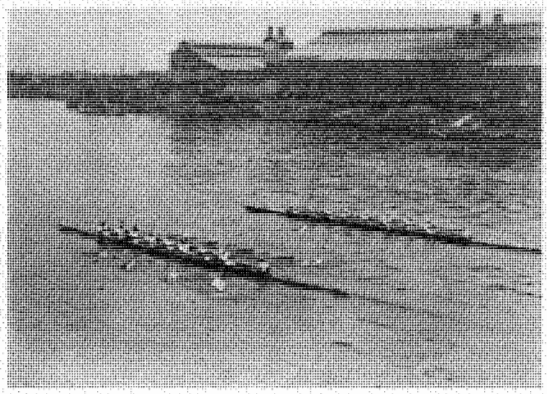
関東インター・カレッジ

昭和8年の対校クルーのコーチは，前年同様，中山，小松，岩崎の3氏であった。前年の選手が6人に，この年の専門部代表クルーより2名を補充しただけの老練強力なベテランクルーであった。練習はライトバドルによる調整に可成りの重きを置いたものの華麗なユニフォーミティを誇っていた。ところが東大はこの年，造船工学の研究成果をとり入れて，デルタ造船所に発注して長さ54呎，幅24吋，U字型の新艇を進水させた。隅田川のラフウォーターを十分考慮に入れた安定度の高い艇であった。(それまでの艇は，長さ58呎，幅22〜23吋ぐらいが常識であった。)



この安定のよい艇で，フィニッシュのユニフォーミティに重点を置いた漕ぎ方で，如何にもよく引き切っているように見えたが，実際の艇速の程は当方とさしたる逕庭ありとは思われなか





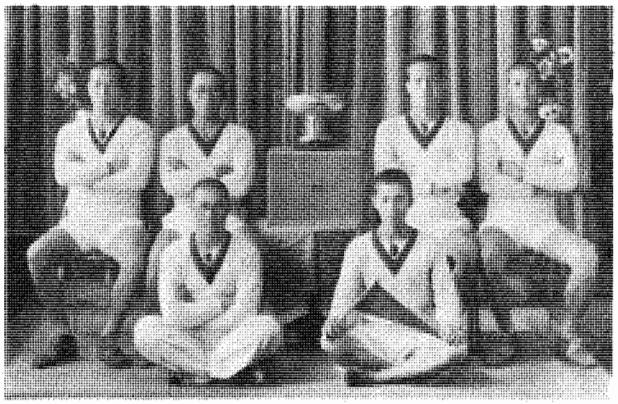
昭和8年第5回ロンドン杯レース優勝

った。本学のこの年の新艇は岡本造船所製作による艇長57呎の在来型であった。ところが，本番のレガッタの３週間前の尾久レースで手合わせしたところ，軽く２艇身を抜かれた。

結局，この差は，その後の練習で詰めることはできず，インター・カレッジでは，第一次予選で東大と当たり，再び２艇身余の大差で敗れ去った。この年の東大は，ずば抜けて強く以後の対戦相手に，ことごとく２艇身以上の差を付けて優勝した。東大は，余勢を駆って翌々年には，オリンピック代表クルーの栄冠をも勝ち取った。この年以後，現在に至るまで，東大の優勝回数が一番多いこと，また東大の漕法が，時代とともに少しずつ変わってきているにせよ，大筋としては変わっていないことを考えると，東大にとってこの昭和８年は画期的な勝利の年であったといえよう。

専門部はロンドン杯レースで，このレースの好敵東大医学部と対戦し，２連勝の栄冠を勝ち取った。言問をスタートして艇庫前では逆カンバス東大のリードを許したが，白髭で追いつき，調子に乗って半艇身の差で勝つ，終始水のあかない接戦であった。春季H. C. Sレースでは，H組が全勝優勝を遂げた。この年もインカレののレガッタに先立ち，応援団が結成され，出陣式が国立で行われたが，この時の秋武応援団長が，今年は慣例にしたがい応援をするが，「その代わり爾今『一橋会員はすべてボート部員たるべし』という不文律は，その実が伴わざるに付き，廃止してもらいたい」と高垣端艇部長に迫るというハプニングがあった。これは公認はされなかったが，翌年から応援団は実質的になくなった。

昭和９年



第２回関東インターカレッジ優勝前列左マネジャー山田武夫，右舵手戎野千太郎，後列左から兼本豊，伊藤治雄，間宮行直，有ケ谷英男

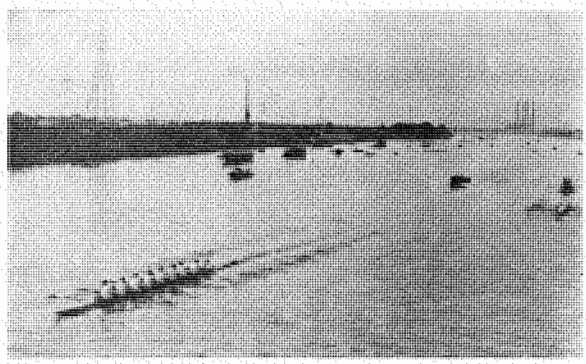
関東インター・カレッジ

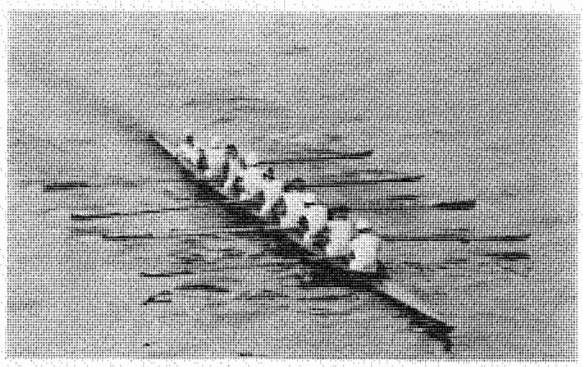
昭和９年の対校クルーは，春のインター・カレッジフォアを勝ち取り，秋のエイトレースへの気勢を上げようと考え，まず，フォアクルーを編成した。主将は，広松三好（後の名コーチ柵山），コーチは，高橋朝次郎（昭２学卒，大12, 13, 14, 15

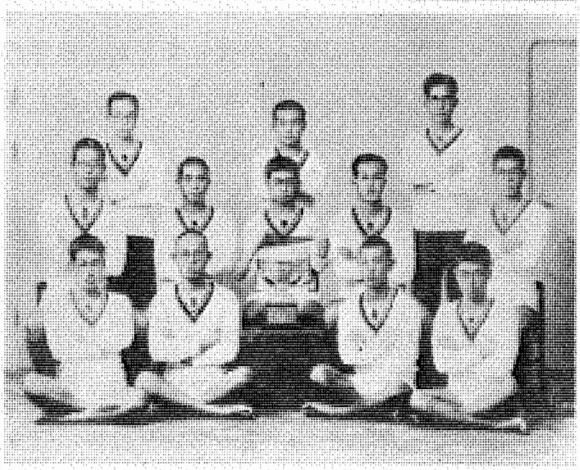
対校選手，後のキリンビール社長）であった。冬休3週間の合宿練習，シェルフォアによる野田遠漕等，他より練習を積んだ効があってか，4月14日・15日のレースでは，東大，その他を破ってにわかに台頭してきた大倉高商を決勝で1艇身の差で下して優勝した。

対校エイトクルーは，このフォアクルーに春の第一選手から4人を選抜して編成された。前年クルーのベテランは皆，艇から下りてしまったので，新クルーのうち5人は，予科，専門部学生という若いクルーであった。高橋氏もコーチは初めての経験であったし，広松主将も途中腰を痛めて下りる等，余り運のいいクルーではなかった。

この年の新艇は昨年の東大にならい，長さ54呎，幅24吋，U字型のすこぶる安定度のよい艇をデルタ造船所で建造した。長く親しまれた向島のコースは，攪乱船の往復が激しく常時ラフウォーターで，練習は荒川放水路が主体とならざるを得ない有り様であり，到底レガッタには不向きという事で，この年から尾久に移転した。







昭和9年第6回ロンドン杯レース優勝記念

さて，インカレ・レガッタでは，商大は第二次予選で日大に初めて3尺差で敗れた。その日大は準決勝で慶大にカンバス差で敗れた。順当に勝ち進んだ東大と慶大の決勝レースでは，土手評を裏切って，調子を上げてきた慶大が逆に下り坂の東大を破って初優勝を遂げた。この辺がボートレースの面白いところで，実力があっても籤運

により，また，レガッタ１週間前ぐらいから上り調子になるのと下り調子になるのとで，明暗を分けるのである。

商大は従来，「スタートの商大」と言われ，スタートでの飛び出しはお家芸であったが，この年はそれが見られず，逆にコンスタントな艇足には，かなり見るべきものがあったにもかかわらず，実力を充分に発揮するに至らなかった。この年は，他大学も低調で傑出したクルーが見当たらず，商大の本科３年で，前年からのベテランが引き続き漕いでいたら優勝は比較的容易ではなかったかと悔やまれる訳である。

ロンドン杯レースに３連勝を期す専門部クルーは，高島コーチの指導により，イージイなフォアワードと脚力を生かした素直な引きによって，対校クルーにも優る艇速を示し，インターカレッジ優勝候補の塁を摩する実力を備えていた。レースではスタートから慶大（医）をリードし，12秒（４艇身）の大差で破ったが，その実力は記録の上からもインターカレッジ上位６クルーと全く伯仲であった。従ってこのレースを一層権威づけるものと評価はされたが，専門部にとってはこれを発揮する機会に恵まれず，脾肉の嘆をかこつばかりであった。

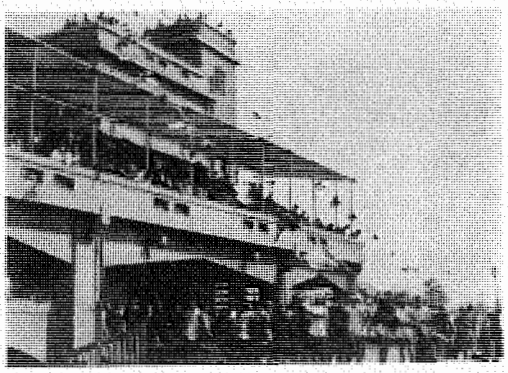
春季H．C．Sレースでは，第一選手はSが優勝した。第二選手レースではH組が負けたものの２年の有望新人が育ってきた。彼等が２年後の対校優勝に大きな役割を果たすことになるのであるが，すでにここに立ち直りの芽生えが見られたと言うべきである。

昭和10年

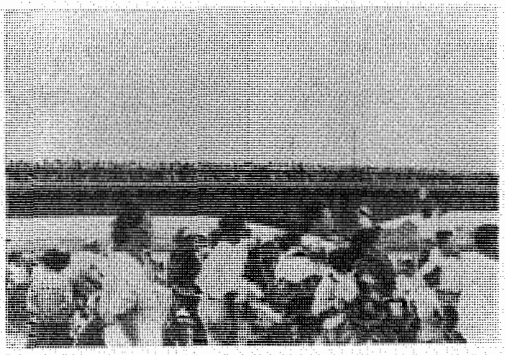
オリンピック派遣選抜レース

昭和10年は，インターカレッジ以外に，翌年のベルリンオリンピックへの派遣クルーを決定するレガッタが，エイトは６月に，フォアは11月に行われるなど，行事が多くまた意義のある年であった。

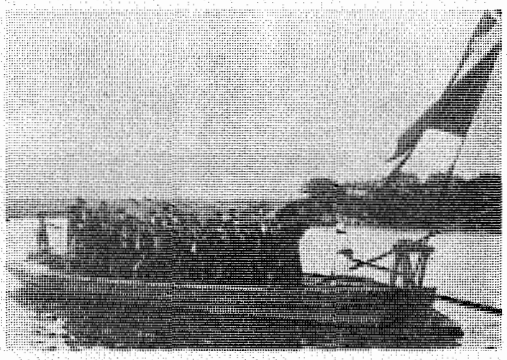
商大対校クルーは，前年のクルーから１人が抜けただけで早くから編成を終え，経験を積み，若さを持った逞しいクルーといえた。本科３年になった広松三好は，前年の経験に鑑み，自らコーチたることを宣言してメガホンを取ったが，選手も彼の熱意に応えた。長期に亘る猛練習が続けられ，その中には，当時としては画期的なフォアおよびスカルによる銚子遠漕もあつた。彼がねらったのは，ライトパドルと長漕の連続によるコンスタントスピードであり，フォワードでのネガをできるだけ無くすこと



昭和9年春季大会



詰めかけた観衆



応　援　団

であった。ある意味で現在の東大クルーのねらいと共通するところと思われる。この年の商大クルーの欠点は，スタートに出足がなかったことである。彼は，天性のコーチであり，また，有望な新人を掘り出して育てあげることのうまい，いわゆる「伯楽」の目を持っていた。加うるに気迫と闘争心である。東京オリンピック後に没して約20年，わがボート部としても大きな損失であった。

この年はオリンピックという大きな目標があっただけに，各大学のクルーは皆，猛練習を積んだが，レース前の土手評では，東大，日大，商大の優勢が伝えられた。しかし，結果は再び我に利がなかった。6月1日の第一予選で日大と当たり，スタートのしくじりが最後まで尾を引き，⅔艇身差で敗れた。敗者復活戦で浮かび上がったが，準々決勝の対拓大戦で終始リードしてきたにも拘らず，ゴール直前で6番がローアウトし切り込んだはずみにラダックが飛ぶという事故で，一瞬の逆転の憂目を見た。

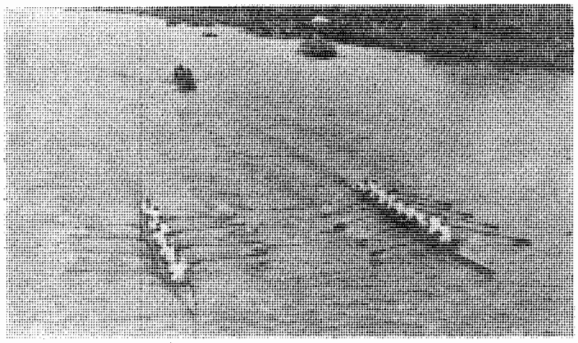
結局決勝は，東大，日大の間で2度争われたが，いずれも東大が勝って代表クルー

となり，チャレンジレースなしに1年間の練習後，ベルリンに行くことになった。東大がオリンピックエイトのために造った新艇（旭艇）は，長さ52呎の短い艇で，木曽御料林の軽質の檜材を使用した造船工学の粋を尽くしたものといわれ，今なお各大学エイトのモデル艇となっている。

11月のクリンピック・フォア代表決定レースでには，エイトを2分割して，フォア2クルーで参加することを考えたが，検討の結果，ベストフォアクルー一つを残し，残りはH. C. S第一選手から選抜の4人と併せてエイトを編成し，9月のインターカレッジ・エイトに参加することとした。

また，前述のベストフォアクルーは，インター・カレッジフォアに出漕することとなった。フォアコーチは，引き続き広松が，エイトは中山がメガホンを取った。

9月15，16日の両日にわたって開催された関東インターカレッジ・レースでは，エイトは順調に力をつけて，早大と並んで優勝候補の筆頭に挙げられたが，第二予選で早大と同着レースを演じ，再レースで1艇身余の艇差で涙を飲んだ。そして，早大は結局エイトで優勝した。



第7回ロンドン盃レース（右は慶大）



優勝記念

商大フォアは，鋭い艇足を有し，500mぐらいならエイトを抜くぐらいの出足だったが，レース1週間前に病人が出て，レガッタでは準決勝で商大同様エイトを解体した日大フォアに敗れた。昭和9年のレースと合わせて3回，日大が前途に立ち塞がったことになるのである。

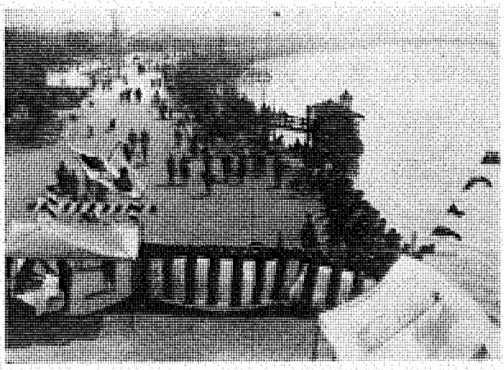
ちなみに，レース前3週間に，フォアコーチが遠山，エイトは安井コーチにと変更された。艇足をもっと上げることができるという配慮から出たものであった。

また，専門部端艇部はロンドン

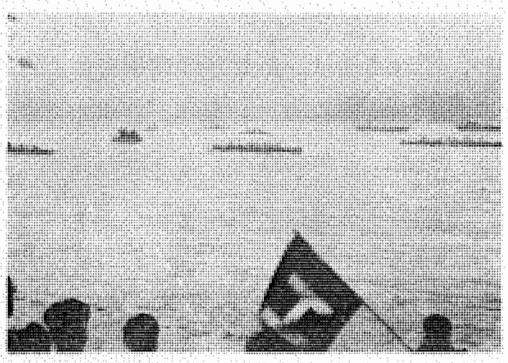
杯レースにすでに3連勝しているが，このレース以外にはエイト出漕の機会がないため，例年にも優る気慨を以てこれに臨んだ。しかし，練習途中で屢々コーチ，選手の一部が交替を余儀なくされるなど，苦難の連続であった。レースでは，スタート100mで専門部僅かに出たが，慶大（B）よくつめて直ちに並行し，500mでは逆に半艇身，700mでは1艇身抜かれる。1,500m専門部のスパート奏功して慶大に迫り，1,700mで並行，辛くもカンバスの差で勝利を収め，4連勝を果たした。

11月のオリンピック・フォア代表決定レースでは，日大第一クルーが，優勝候補の筆頭に，インターカレッジ・エイトから編成した早大第一クルーが，第2位にランクされ，商大玄武（フォア第一クルー。別に商大青龍＝インターカレッジ・エイトから新たに編成したクルーも参加。）は，ダークホースに挙げられた。商大玄武は，第一予選で日大第二クルーを，第二予選で日大第一クルーをそれぞれ撃破し，対日大戦4回目にしてようやく雪辱を果たした。レース後，広松コーチが，艇に取りすがって泣いたという，彼の気性を物語るエピソードが今もって語り継がれている。

しかし，準々決勝で，拓大にカンバス差で敗れ，ベルリン行きの夢は消えた。この



昭和10年春季大会



昭和10年のクラスチャンレース



4月花見頃の墨堤



晩秋暮色（竹屋の渡し）



雪の向島艇庫

拓大は決勝で，早大第一クルーにカンバス差で敗れ，早大がフォア代表クルーとなった。そして，先輩も伝統もないまま，ただ4人の漕手が雑草のたくましさで漕いだ拓大フォアの強さと健闘は，広く関係者に絶賛されたのであった。

恒例の春季競漕大会は，第一レースでは小兵のC組がH．Sを抑えて5年ぶりの優勝を飾った。また，5月の予科対専門部レースは，クリンカーエイト艇で行われ，昭和6年の第1回レース以来，予科が久しぶりで勝った。

総じてこの年は，いろいろな対外レースがあり，商大はそれなりに全力を挙げて戦い，部分的には，かなりの成果を収めたが，やはり，東大，早大に比し，一枚下であったことは否むべくもない。若手漕手の著しい進境は将来を期待させるものがあったが，なお，「冬の時代」であったといえよう。

対校レースの打ち続く敗戦により，先輩の批判も高まってきた。そして，昭和6年



昭和7年横浜市民レース優勝
前列左から中川B，西堀C，久村S，今村，
後列茅根3，津布楽2，河西，中目

以来の対校選手分離制度を廃し，H. C. Sレースの原点に立ち戻り，春季競漕大会以後に対校クルーを編成すべきこと，かつ，精神力および耐久力強化のために第一選手レースは3,000mレースとすべきことが，有力先輩から強く要望されるに至った。

学生側は，これを受けて立ち，昭和11年の春季競漕大会から前述の方針どおりに実行することとし，各組対校選手はそれぞれの組に帰り，各組ごとに自主的に練習することとした。昭和11年，9年ぶりに全日本制覇をしたことには，種々な原因，要素があるが，この従来の対校分離制度からHCS復帰に改めたことも，人心一新にかなりの効果があったとはいうことができる。

第７期　優勝黄金時代（昭和11～15年）

概　　説

昭和２年，第７回インター・カレッジに優勝のあと雌伏８年，ようやく昭和11年の第16回関東インター・カレッジと全日本選手権を手中に収め，わが商大端艇部は，長い間の「負け犬」の屈辱をそそいで，久方振りに優勝の美酒に酔った。

この９年振りの優勝がきっかけとなって，昭和12年のインカレのエイトには敗れたものの，11月の全日本小艇レースにフォアが優勝し，昭和13年，続いて昭和14年の関東，全日本エイトを連覇することができた。続く昭和15年，３連覇を逃したとはいえ，戸田新平水コースの初レース（皇紀2600年奉祝明治神宮大会）に，エイト，フォアともに優勝を飾った。８年間の連敗の後に続く短い４年間にエイトで３回も優勝した。過去19回の選手権競漕における優勝は，商大６回，東大５回，早大４回，明大２回，日大１回，慶大１回と，名実ともにわが国漕艇界の王者の地位についた訳である。したがって，この時代は，大正９年から昭和２年に至る“商大名門時代”に次いで，まさしく第２の「優勝黄金時代」と呼ぶことができよう。

しかし，同じ黄金時代といっても，この時期は，第１次大戦後の好景気を満喫し，大正デモクラシーを謳歌した大正末期から昭和初期にかけての第一の名門時代とは，全くその様相を異にしていた。昭和11年には，第１次大戦後の昭和恐慌の反動としての「昭和維新」をスローガンとして，血なま臭い「二・二六事件」が勃発し，その後に続く動乱の時代の幕明けを暗示していた。昭和12年７月には，蘆溝橋において日中両軍の衝突が起こり，これを契機として，日中戦争の泥沼に突入して行くのである。ヨーロッパにおいては，昭和13年の「ミュンヘン協定」を境に，自信を深めたナチスドイツは，翌昭和14年ポーランド進撃を開始し，ついに第２次世界大戦の幕が切って落とされた。そしてわが国もまた，昭和15年７月の第２次近衛内閣の成立とともに，同年９月27日に締結された「日独伊三国同盟」を軸として，破滅的悲劇的な太平洋戦争へと突入して行くのである。

時局は，着々と戦時体制への転換と強化に向かっていた。それは，思想統制と経済統制の強化による戦争目的への“国民総動員体制”の整備を意味していた。そして，

この時局の荒波がひたひたと，わが一橋学園にもその影響を及ぼし始めるのである。やがて，昭和16年には歴史と伝統に輝く学生自治のための「社団法人一橋会」の自発的解散と，戦争協力のための「一橋報国団」への編成替えが行われ，「第8期の戦争時代」における全学徒動員令により『オールを捨てて銃を取る』学生スポーツ活動の停止期を迎えることとなる。したがって，この時期は，わが商大端艇部が，戦争暗黒時代に入る直前の最後の輝かしい「黄金の日々」であり，充実した「栄光の時代」であっといえよう。

戦争に突入して行くこの不安な時代のなかで，長い歴史と伝統に育まれ，さらに，自らの刻苦勉励の血涙の努力によって獲ち取った輝かしい栄冠の数々は，この時代に端艇部に席を置いた者たちにとっては，いまなお，痛切で鮮烈な青春の想い出として生き続けているのである。

ところで，この時期のわが商大端艇部をめぐる学園の状況は，必ずしも順風満帆とはいいえなかった。少なくともその前半の段階においては，むしろ試練の時期といってもよいであろう。前第6期の終わりの頃の昭和10年9月に起こった杉村助教授の博士論文をめぐる「白票事件」を契機としたいわゆる「粛学」の嵐は，佐野善作学長の引責辞職，三浦新七博士の学長就任によって，一応の結着を見るはずであったのが，昭和11年5月まで，長くその尾を引いた。「白票事件」の持つ歴史的意義について論ずることは割愛するとしても，この事件が運動部，特にわが端艇部にもいろいろな影響を与えた。

大正9年から昭和2年に至る「第一の名門時代」には，まだ残っていた一橋の校技としてのボート，『橋人皆漕』の伝統が，その後徐々に後退し，端艇部の危機が，部員や先輩の間で叫ばれるようになっていった。もとより，前第6期の雌伏八年時代において，商大名門時代に築かれた商大端艇部の名声と権威が，学園内で徐々に失墜して行ったことも争えなかった。

そこに「白票事件」が起きて，若手助教授や多数の学生を巻き込んだ「粛学」の嵐が，佐野体制に対する反主流的気運となり，佐野学長派と見られた高垣教授をも，学外に去らしめることとなった。高垣寅次郎教授は，長年にわたって端艇部長として，端艇部を愛し，選手や部員を温かく指導してこられただけに，端艇部員の大部分は，いわゆる白票教授とくに高垣部長を弾劾する学内の熱気に，安易に追随することができなかった。

そのような一橋会を中心とする学内の革新的な動きと古い伝統をもつ端艇部との間

に，精神的なギャップが生まれ，一種の違和感が生ずれば，おのずから学内に反端艇部的な気風が出てくることも当然の成り行きであった。このような端艇部の危機を自覚し意識すれば，100人を超える部員を擁する端艇部としては，一方において全国制覇を石にかじりついても実現して，学内の母校愛の中核となるとともに，他方において母校内のあらゆる動きに気を配り，それらに協力して，「国立」と「隅田川」との精神的な距離を縮め，白々しい違和感を払拭しなければならなかった。そのために，本科，予科，専門部の端艇部員たちは，一体となって幹事会や部員総会や部報の発行を通じて，種々の問題点やその対策を熱心に論議した。従来の端艇部のモットーとされていた『吾人屁理屈を知らず，幸いにして元気あり』の行動で示すという考え方だけでは不十分であり，ただ過去の歴史や伝統のみにこだわることなく，ボートというスポーツを，「一橋端艇道」という言葉を使って，何か精神化し理論づける必要が生じてきたのである。

白票事件が終熄した後も，学園全体に一種の「しこり」が残ったが，昭和12年の日中戦争の勃発と共に，戦時体制の圧力の中で「商学」の殿堂を守ろうとするより大きな一橋学園全体の危機意識によって，自然に解決して行った。むしろ，この時期におけるボート部の輝かしい連勝の戦績が，一橋学園全体の求心力となって，学長，教授を始めとし，一般学生の賞讃や祝福の的となることになったのである。前期の雌伏8年の時代に，連続惜敗の悲運の涙とともに蓄えられたエネルギーが，この時期に見事に爆発し，開花したともいうことができよう。かくてわが端艇部は久し振りに，しかしほんの束の間の「わが世の春」を謳歌するに至ったともいえる。しかしそれは前述したように，第2次世界大戦による学生スポーツの暗黒時代に入る直前の，落日の夕陽の一瞬の輝きにも似た「黄金の日々」であったと言い得よう。以下年次をおって，この期におけるわが一橋端艇部の足取りを見ることとしよう。

昭和11年

宇治原先輩の遭難

正月早々，宇治原兼一先輩（昭5本卒）の東北八幡平における雪中遭難の悲報があった。彼は，学生時代は対校選手として，あるいは端艇部理事として八面六臂の活躍をするとともに，卒業後も漕法について熱心な研究家であり，後輩の指導について寸

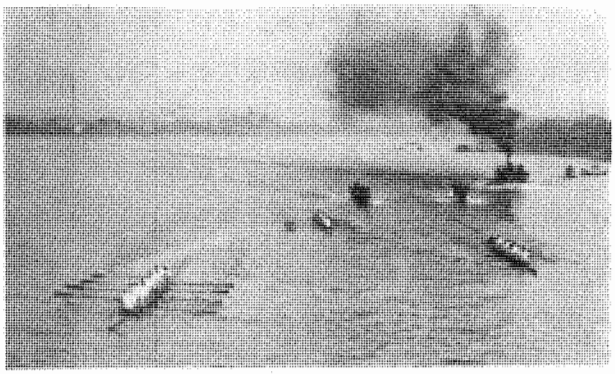
暇を割いて心を砕かれた方であった。それだけに，「猿チャン」という綽名で，同輩後輩から敬愛されていた。宇治原氏を失ったことは，わが端艇部にとっては，大きなマイナスであった。しかも，雪中遭難であっただけに，雪解けを待って遺体が発見されるまで4カ月以上もかかり，6月になってようやく端艇部報の『熱魂遂に帰らず』と題した宇治原氏追悼特輯号が発行された。一橋ボート関係者の悲哀はひとしおのものがあり，また宇治原氏は前述した対校選手のＨＣＳ復帰を強く主張されていただけに，その遺訓に応えようとするボートメンの決意を促すものがあった。

また，この3月「ボートの鬼」と言われた広松三好（後に柵山と改姓）が，在学中に一度も優勝の美酒を味わうことなく，連敗の無念を残しつつ卒業していった。彼は，一橋のボートのために生まれてきたような男であり，商大ボート部を強くするためには，あらゆる努力を惜しまず，時には学生の身分も顧みず先輩にまで筋を通した信念の男でもあった。しかし，彼は卒業後も，軍務のかたわら，あるいは会社づとめの多忙な時間をさいて，死ぬまで母校ボート部のために尽力した。

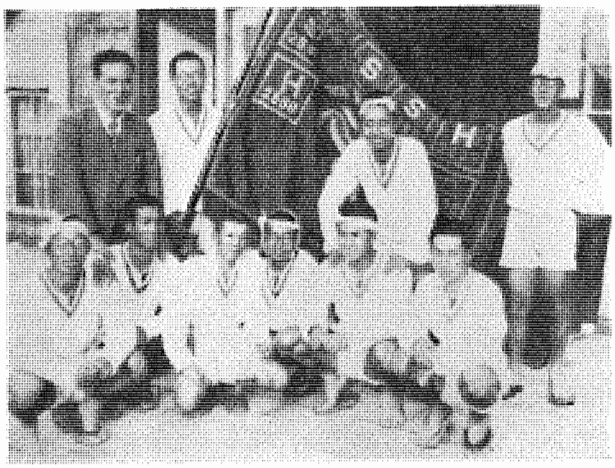
第50回春季大会

「ＨＣＳの昔に帰れ」という大方針のもとに開かれたこの年の春季大会は，例年とは異なり，各組のクルー特に第一選手の実力は向上し，他大学の対校選手レースにも勝るレベルであった。4月19日（日曜日）寒波のために例年より遅れた満開の桜花が咲き誇る墨堤で，恒例の春季大会が行われた。午前9時には，早くも高垣部長，三谷一二審判長以下，先輩，役員の顔がそろって開会式。朝方からの春雨もいつしか晴れ渡り，3階建の偉容を誇るベージュ色の艇庫のタワーには，赤のマーキュリーの校旗をはじめ色とりどりの万国旗が，青空にへんぽんと翻るなか，午前中には，一般学生の弥次レース，ＨＣＳのＯＢレースが行われ，午後の招待レースには，オリンピック日本代表クルーの東大，さらには日本郵船(株)，東京海上火災保険(株)，早大，慶大，大倉高商などのクルーが参加した。まさに桜花は満開，絶好の日本晴，そのうえ日曜とあって，向島桜堤の観客は，数万有余の多きに達した。午後2時，白髪の三浦学長，非常時内閣の文相，当時70歳の平生大先輩（明23本卒）がお見えになり，いよいよＨＣＳの第三選手（固定席6人漕ぎ，1,000m），次いで第二選手（スライディング・クリンカー・エイト，言問～日活間，2,000m），さらに第一選手（シェルエイト，言問～鐘ガ淵間，3,000m）のレースがつぎつぎと行われていった。

レースの結果は，第三，第二選手ともに，Ｓ組1着，Ｈ，Ｃの順であった。午後4



昭和11年春，ＨＣＳ第一選手レース。白鬚橋上より下流を望む。日本郵船のタグボート（石炭ボイラー），正面に商大艇庫タワー，長命寺の屋根が見える



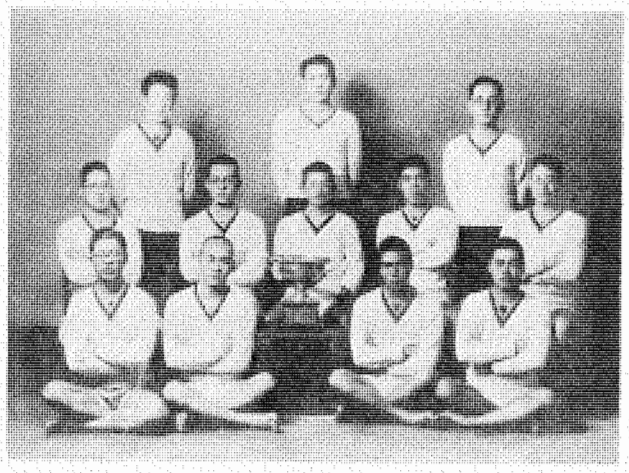
第一選手H組優勝クルー，内６人が対校クルーの選手となる
前列左から堀川，伊勢谷，菊地，北村，塚越，植松，後列左から広松，伊藤，丸山，前田

時，待望の第一選手レース。緊張したＨＣＳの３クルーは，青，白，赤のバージン・フラッグを舳先にはためかせて，言問橋のステッキ・ボートに付く。桜花らんまんの両岸および橋の欄干には黒山の人だかり。水面は水上警察署や学生水路係の努力で絶好のコンデション。潮はほぼ上げ止まりで満々たる水面。発艇係の旗がさっと下りて，審判艇の三谷審判長の号砲一発，３艇一斉にスタート。毎年恒例の日本郵船（株）提供の大型ランチには，100人近くの観客が，鈴なりに乗り込み，黒煙を上げ，白波を蹴立ててレースを追う。洗場の第１カーブでHわずかにリード，商大艇庫前，Hピッチ40で力漕，ＣＳを半艇身リード。大倉艇庫前カーブ直前でＣ力漕，Hにほぼ並行するも，早大艇庫前で再びHリード。白鬚橋の１コースよりの急カーブを利して，第１コースHはハイピッチ40の決定的な力漕でＣＳを完全に突き放す。ＣＳともに遅れじと必死のスパートをかける。にもかかわらず，Hの力強いオールさばきは，ますます快調。差は次第に増して，結局，鐘ヶ淵紡績㈱工場前のゴールでは，HはＣを抜くこと４艇身半，ＳはＣに遅れることさらに２艇身半，Hの3,000mのタイムは，順風とはいえ９分12秒の好タイムで快勝したのであった。

艇庫楼上で賞品授与式が行われ，三谷審判長の講評，最後に本大会会長三浦学長の発声で一橋会の万歳三唱。そして文字通り，一橋会歌「長煙遠くたなびきて隅田の流れ夕潮にオールを軽く浮かばせて」が，夕暮れの隅田川にこだまして行った。各組それぞれの合宿所では，老先輩も入り交じっての悲喜こもごものコンパが，夜遅くまで

繰り広げられていった。

このように第50回の一橋会主催の春季競漕大会は，「ＨＣＳの昔に帰れ」という先輩，学生の悲願をこめて，前期「雌伏八年時代」の不振と沈滞の商大端艇部更生の第一歩として，近年になく充実した盛会であった。



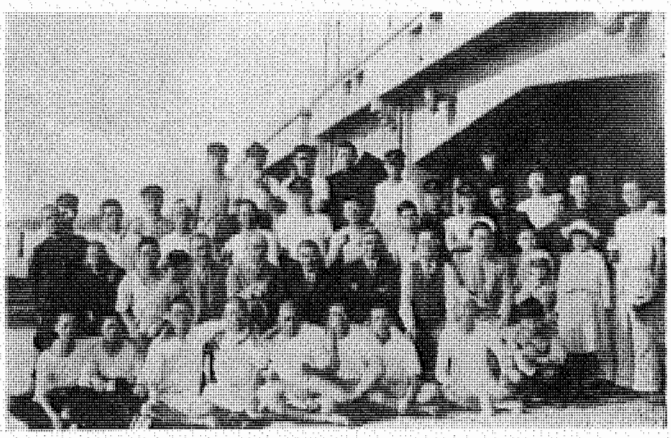
ロンドン杯レース優勝記念

対校選手の編成

かくして春季大会の直後，4月25日に，対校選手選考会を開き，Ｈから８名，Ｃから３名，Ｓから３名の14名の選手を選抜して，５月10日より合宿練習を開始することに決定した。またこの日の夕方，如水会館で，春季大会の審判長を努められた三谷一二大先輩（明29本科卒）のご招待で，ＨＣＳ各組第一選手，役員など40名以上が，慰労と激励を兼ねて晩餐会が開催された。平生文部大臣，三浦学長，高垣部長も出席され，その他数多くの先輩も列席されて，学生に種々の訓示や懐古談などの感銘深いスピーチが行われた。



花　の　墨　堤



Ｃ　組　大　会

高垣部長の辞任

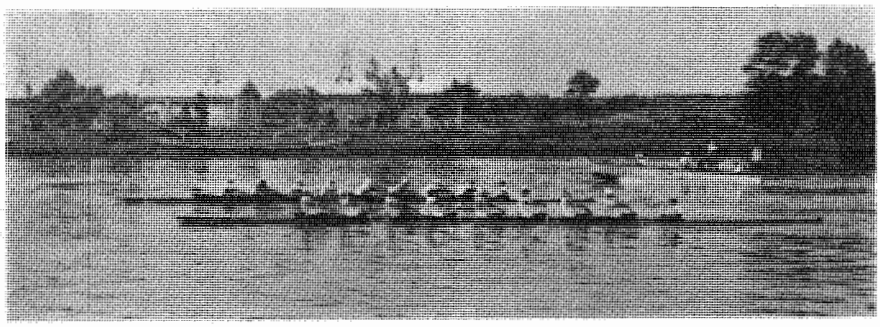
第一期対校選手が合宿練習に入る５月10日の前日，昨年来の学内騒動「白票事

件」の収拾のため，永年にわたって端艇部のために努力を傾倒し，学生を指導してこられた部員の尊敬措くあたわざる高垣部長が，教授，部長を辞職されるという悲報が伝わった。学生，選手たちは，慈父のごとき高垣部長を失うことに，そして，また一橋愛に燃えた先生が母校を去らなければならない残念なお気持に，淋しさと憤りを感ぜざるを得なかった。さきに宇治原先輩の不慮のご逝去，いままた，高垣名部長の無念のご引退に，学生，選手たちの弔い合戦への決意をますます強くせしめるものがあった。伊藤治雄主将は，部報復活第1号（昭和11年5月5日発行）で，対校選手の選考経過や選手紹介を行った後で，『矢は既に弦を離れた……秋の征覇を目指して馬のように突進するのみ。選手のファイティングスピリットは既に燃え盛っている。先輩諸兄あげて川に来て下さい。そして彼等を激励，以て永年の復讐を成就させて下さい。』と訴えている。

尾久レース

5月10日から始められた14名の対校選手候補は，固定席，タブペア，フォア，エイトとブレード・ワークの基礎と体力強化をみっちりとやって，7月2日から正選手9人による本格的な合宿練習に入った。また対校のコーチとしては，H組第一選手コーチ奥田二郎（昭9学卒，昭5，6対校選手）が選ばれ，中川英造（昭5学卒，昭2，3対校選手），瀬尾三郎（昭7学卒，昭4，5H第一選手）が，これを補佐して行くことに決まった。そして8月23日，インター・カレッジの前哨戦である“尾久レース”が，尾久1,000mコースで挙行された。わが商大クルーは，大倉高商，慶大，早大の3校と当たったが，いずれも2艇身以上の大差で相手を退け，まさに，鎧袖一触の感があった。

わが商大クルーは，ほぼ完成に近い状態で，殊にスタート・ダッシュにおいては，



昭和11年尾久レース　向う側商大，1／3艇身リード

無敵というべく，必ず1艇身近くリードし，しかもセトルダウンが安定し，50近くのハイピッチのスパートも一糸乱れず威力を発揮した。

この年の商大クルーは，いざ本番となっても，勝負に強いファイトにあふれるクルーであることは万人の認めるところで，選手関係者は必勝の自信を深めていた。

関東インター・カレッジ

9月12日・13日の両日に亘って，いよいよ関東インター・カレッジ競漕大会が行われた。第1日目はまず慶大，スタートから終始リードして，艇差2艇身半で1着。第2回戦は早大，さすがにわが商大のスタートの怖さを知っている早大は，スタート直後，力漕連続3回の捨身戦法に出て600mまでは並行して進んだ。しかし，コンスタント・スピードに勝れる商大は，じりじりと抜いて，1,000mのスパートで1艇身近くリード，ゴールでは結局2艇身差。第2日目の9月13日，準決勝の相手は，因縁浅からぬ第一高等学校。40年前からのわが一橋端艇部の宿敵であり，しかも，前日すでに東大（オリンピック留守クルー）を下し，商大と並んで，優勝候補の双璧とされていただけに，いうなれば事実上の決勝戦。

レースは，だるま船のコース内座礁のため予定より1時間余り遅れて，11時20分スタート。わが商大はもとより赤のブレード，一高は白，両校のおびただしい応援旗が水上，両岸に激しく揺れる。緊張と興奮のうちに，両艇がスタート，商大ややリードしたが，ダッシュに移るや，一高猛然とピッチを48に上げて，しゃにむにリードを奪い，わが商大の得意の出鼻をくじこうとする作戦。事実，わが商大クルーは，400mで⅔艇身の差を付けられた。500mで力漕を入れたが，一高もこれに応戦，差は縮まらず，逆にじりじりと抜かれて，1,000mでは，ついに水があくほどの艇差。観戦応援するものも，オールにかじり付いている選手も一瞬血の引く思い。前半で半艇身や1艇身はリードするはずであったのが，まるでその逆の情勢となってしまった。これは，対一高戦ということで，やはり選手の気持ちが少しばかりうわずっていたこともあり，またスタートが1時間以上も遅れて身体が固くなっていたこともある。しかも，審判艇のミスで，コックスの木村大三が艇の方向を修正中で，右手を上げていたにもかかわらず，スタートの号令が下ったため，やむなく発進して，コースはアウトカーブを弓なりに膨れたものとなり，非常にロスをしたことなどが重なって，コンスタントピッチが普段より二つ三つも高くなって，ついにブレードワークに乱れが生じたためであった。

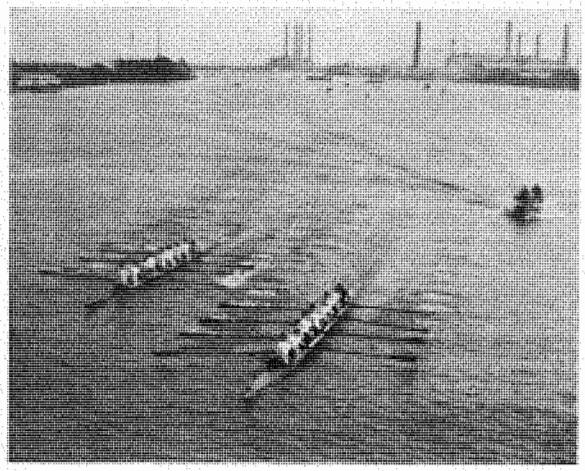
宿敵一高に勝つ

従来の対校クルーであれば，このまま一高に置いて行かれるところであった。しかし，必勝の信念と喧嘩に強いタフな体力をもつわが商大クルーは，1,000m でかねて練習中から鍛えに鍛え抜いた死に物狂いの力漕を2回連発して，ようやく艇差を半艇身ぐらいまでに縮めることができた。もちろん一高も力漕で応戦したが，余り効いていない。しかも，前半の無理がたたったものか，疲れが見え始めてきた。このとき，わが商大クルーも，若干平常心を失って乱れ気味のハイピッチで疲労が甚だしかったが，1,000m の連続スパートの効きめに気を良くして，5回目の力漕にかかり，カンバスの差に迫った。しかし，すでに1,500m，このまま逃げ込まれてはと，6回目の必死の力漕で完全に並行。その後は，もう気が遠くなり，視界もうろう，ただ力漕に継ぐ力漕のみ。コックスの押すベルが，5番の足先で鳴りっぱなし，ゴールに入ったときは，¾艇身差を付けて1着。ついに宿敵，強敵の一高を下し，漕手は全員どっとばかりに後に倒れてしまった。全く息のつまるような白熱戦であった。そして，後半1,000m で1艇身の遅れから，逆に¾艇身抜き返したわが商大クルーの闘魂にはすざましいものがあった。対校コーチの瀬尾三郎は『最後まで平素より3本以上高いピッチを引いて破綻を見せなかった戦闘力に敬意を表する』と端艇部報の中で高く評価している。

決勝で明大に勝つ

この対一高戦のレース中，両岸でまた水上で，『赤・赤・赤』と絶叫を繰り返した応援団は，まさに狂喜乱舞。本部楼上の三浦学長以下諸教授，三谷一二(明29本卒)，木下裕（明31本卒)，山中勇(明35本卒)，等の老先輩をはじめ諸先輩が，手を取り合って歓喜の声を上げる。ことに明治年代，対一高戦に連敗の苦杯をなめた老先輩たちの感激と興奮は，まさに，身の置き所を知らぬといった状態であった。いよいよ午後の明大との決勝戦に臨むのみである。定刻午後4時30分，明・商両クルーはスタートラインに艇を並べた。わが商大クルーは凄絶な対一高戦を勝ち抜いてきただけに，若干の余裕さえ見受けられ，普段から猛者ぞろいの明大クルーも笑顔で『お願いします』と声をかけてきた。もちろんこちらからも笑顔で『お願いします』と応酬する一幕もあって，対一高戦とは打って変わって和やかな雰囲気のなかで，4時35分スタートの号令。わが商大はスタートからリード，平素のコンスタント・ピッチにセトルダウン，ますます好調。『矢鱈に抜き離そうとはせず，悠々喰い付かせてはスパートで

振り離して行った』と瀬尾コーチの講評にもあるように，余裕しゃくしゃくのレース振りであった。ゴールでの艇差はなんと1艇身¼。明大クルーは完全にローアウト，全員船底にぶっ倒れてしまった。しかしながら，帰途に付くとき『有難う，来年願います』と挨拶，全くすがすがしいほどの礼儀正しいボートマンシップには敬服の外はなかった。（前田正・部報記事）



昭和11年関東インカレ9年ぶり優勝，決勝レース，左は明大

ともあれ，『破れるばかりの応援団の歓呼乱舞のうちに一橋は墨田に覇を称えた。赤旗空中にひるがえり，みな天を仰いで一橋の春の謳歌す。九年ぶりの勝利にて，ただ喜びに胸が一杯で筆に表現し得ない』と当時の部報は伝えている。また，この決勝レースは，商大ボート部先輩の中村アナウンサーによって，ＪＯＡＫ（現NHK）の実況放送で，全国に生中継され，全国各地の商大ＯＢは，これに耳を傾けたのであった。そして，各地からお祝いの電報や電話が寄せられた。昭和3年本科卒の池上三次郎は，『ラジオ中継を聴きつつ始終優勢にして，堂々敵を圧する状況に感極まり，涙の滲み出づるを禁じ得ず』とその感激を書き止めている。

また前掲の写真をもとにして，油絵が描かれ，如水会に寄贈され，今でも新如水会館14階のラウンジに掲げられている。

ロンドン杯に専門部5連覇

同じこの13日，第8回ロンドン杯の決勝戦が行われ，わが商大専門部クルーは，第一早高をスタートより引き離し，コンスタント・スピードの相違は，全くレースを一方的なものとして，実に18秒という大差で優勝した。この年の専門部クルーもまた，例年と同じく専門部独特のファイテイング・スピリットをもち，2名の対校選手を送り出して，たとえ体格に恵まれなくとも，平野コーチのもと猛烈な練習と真剣な努力によって，「早・慶・帝」をしのぐ恐るべき実力を有していた。ただ従来，1校1種目1クルーのルールのため，インター・カレッジには出場できず，レースの相手は常

にBクラスであり，参加クルーが少なかったのは気の毒であった。しかし，練習の途中で，何度か対校クルーと艇を並べレースを行ったが，終始猛烈な競り合いを続け，ゴール直前でようやく対校クルーが抜くといった状態で，いわゆるスクラッチ・クルーとしても，この年の専門部ロンドン杯クルーは，対校選手優勝の隠れた功労者であった。この勝利によって，専門部クルーは昭和5年の初出漕以来，翌6年に敗退しただけで，7，8，9，10，11年の5か年連続優勝という偉業を達成し，ロンドン杯はついにわが専門部に永久に授与されることになった。（この専門部端艇部の輝かしい歴史を物語るロンドン杯は現在，新如水会館14階「一橋クラブ」のラウンジに飾られている）

ロンドン杯レースはB級レースであって，参加クルーも少なかった。しかし，このレースにおける連戦連勝は，毎年墨田第一等の実力によって勝ちとったものであって，些も優勝の価値を減ずるものではない。ロンドン杯の時代に限らず，専門部端艇部は毎年有力選手を全一橋クルーに送り，その余力を以てクルーの編成を余儀なくされるという困難な条件下にありながら，尚かつこの実力クルーを実現し続けたのであって，全一橋の漕手の裾野を拡げると共に，勝つべくして勝てなかった全一橋雌伏の時代に，一橋端艇部のために気を吐き続けた功績は特筆されるべきものと言えよう。

瀬田での全日本制覇

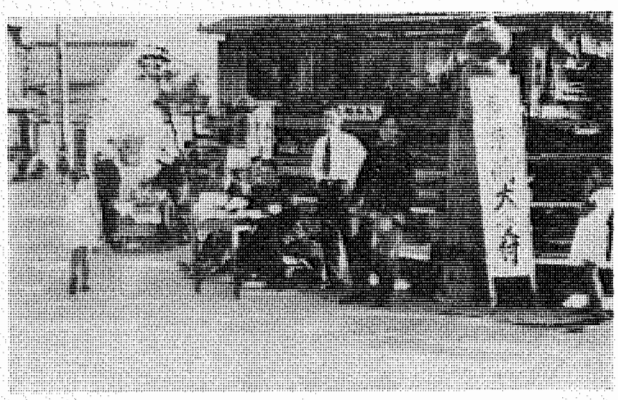
ところで，関東インカレ，ロンドン杯ダブル優勝のあと，「戦い済んで日が暮れて」，対校，専門ともどもの優勝に酔った三浦学長を初め諸教授，先輩，学生達は，期せずして向島艇庫前に参集し，学長の音頭による万歳三唱の後，校歌，応援歌の合唱が，隅田川の川面にこだまする盛大な祝勝会が開催された。しかし，わが対校選手は，9年ぶりの関東インター・カレッジの優勝の美酒に酔ういとまもなく，翌14日午後1時，一日も早く瀬田川の屈曲の多いコースになれて，関西インター・カレッジの覇者，第三高等学校と雌雄を決すべく，三谷先輩を始め多数の先輩の見送りをうけて，東京駅より一路



ロンドン杯第2回以後5年連続優勝により永久獲得

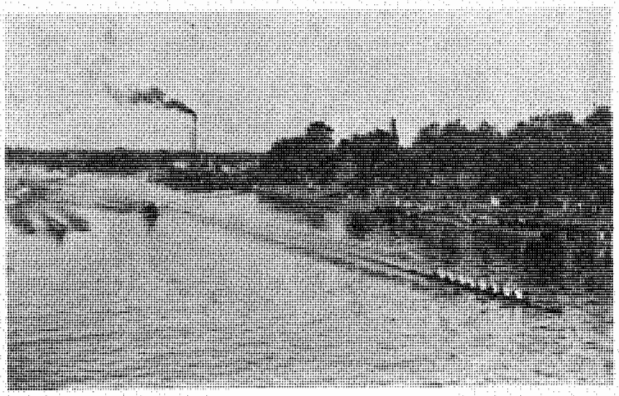
関西へ向った。琵琶湖の南端，流出口の瀬田川に架かる「近江八景」で有名な瀬田唐橋のたもとにある割烹旅館「網定」が，わが商大クルーの合宿所と決まり，ここで10日間の練習が行われた。そして，カーブが多く，流れも強く，浅瀬の多い瀬田川の難コースについて，十分な研究を行った。ちなみにこの川は，京都では宇治川となり，大阪では淀川となって大阪湾に注いでいる。こうして，いよいよ9月23日，全日本選手権競漕決勝戦の当日を迎えた。

三高は地元クルーだけに，水上，両岸，橋上にスクールカラーの赤旗を押し立てて，名高い「吉田山……」の校歌を歌って気勢を上げる。一方，わが商大側は，ラジオや新聞で関東インター・カレッジ優勝の報に接した京阪神地方からの多数の先輩，如水会員が続々と参集し，もとより東京からも，また，はるばる九州（畑先輩）からも一橋のボートを愛する先輩，学生百数十名が相集い，手に手に赤のマーキュリーの小旗を打ち振りながら必死の応援。この応援団は，遊覧船1隻に満載，あとは網船，おわんボートなどに分乗。いよいよ定刻午後5時，東久邇宮殿下台覧のもとに，レースが開始された。



瀬田網定前の受付　右から近藤，坂口，植松

スタートは，両艇並行。しかし，それも束の間，わが商大クルーは，ピッチを48に上げて猛然ダッシュしてとび出した。まず，敵に有利な第1カーブで，敵の出鼻をくじき，第2カーブでますます差を広げ，瀬田唐橋に至るや，すでに艇差は3艇身。遠来のわが商大クルーに弥次を浴びせていた三高応援団も赤旗を垂れ顔色なく，わが商大クルーは瀬田の急流に乗ってますます快調。ついに5艇身の大差で三高を撃破。ここに目出たく全日本選手権制覇の栄冠「秩父宮賜杯」を獲得した。学生よりも多数の先輩による応援団は，老



三高を引き離して力漕

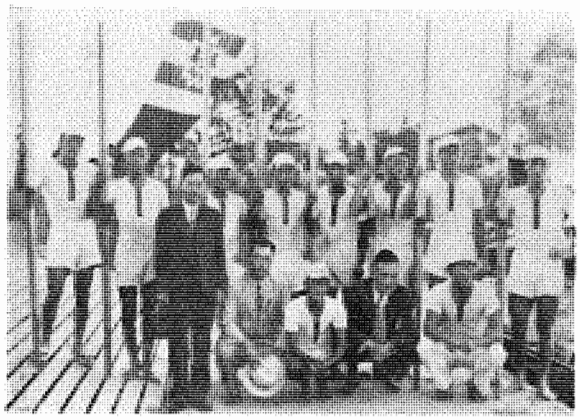
いも若きも商大万歳を連呼絶叫し，涙を流さんばかりに肩を抱き合って歓喜乱舞。夕暮近く「網定」の台船に引き上げてきた選手に，先輩たちの万雷のごとき拍手と歓呼。「よくやった！よくやった！有難う！」の声に包まれ，各新聞社カメラマンのフラッシュが眼に痛い。やがて，如水会京阪神3支部の合同主催による祝賀会が，「網定」2階の百畳以上の大広間で満員の大盛況裡に繰り広げられたのであった。

例年，現役バックメンが，寄附金集めに関西に赴き，戸別訪問して『今年こそは必ず勝ちます』と力説して歩いただけに，京阪神如水会員は大感激で，大阪支部長嶋専吉氏の名スピーチの後，銀色燦然たる秩父宮賜杯になみなみとビールが注がれ，一同次々とその美酒のうまさに酔いを重ねたのである。

10月6日には一橋会主催の申酉・籠城事件記念式が兼松講堂で開催されたが，引続きベルリンオリンピック大会で奮闘した本学ホッケー部チーム，馬術部の全日本学生馬術選手権獲得及びわがボート部の全日本エイト選手権獲得の祝勝式が挙行され，三浦学長の祝辞があり，わがボート部からは伊藤主将が答辞挨拶を述べた。

また，11月8日には，向島艇庫において，全日本制覇祝賀競漕会が開催された。中前正己（昭13学卒）は，その感激を部報のなかで次のように書き綴っている。

『ここ墨堤の黄昏に身を伏せて咽び泣く友の姿を君見ずや……。顧みれば，幾度，我々は悲しい敗戦の歌を涙と共に唱ったことか……。けれど六十年の歴史を貫いて流れる一橋スピリットは，その伝統を失っては居なかったのだ。昭和11年秋，積んではくずされ，築いては破られてきた我々の金字塔は，遂に完成されたのだ。11月8日，全一橋人は墨堤に馳せ集り，喜びを分ち合った。三谷先輩の嬉しそうな笑顔，高垣前部長の何時も変らぬ懐しい姿，見はるかす川面は，たゞ赤，赤の一色！　全一橋の指導的存在に帰るという大理想が炎となってもえている』と。



瀬田川での全日本レース優勝，
後の旗は相手クルー三高の応援団

優勝に寄せる讃辞と感想

この雌伏9年ぶりの商大の全日本制覇は，一般新聞にも選手の写真入りで，スポーツ欄で大きく報道された。例えば「読売新聞」は『商大は雌伏9年の間，例年相当の実力を持ちながら，いざレース

になるとカーッと来るという大きな欠点に禍いされて居たが，今年はこの精神的戦闘力の完成を目指して精進した処に制覇最大の基礎があった。』と，また「東京日日新聞」（現在の毎日新聞）は『明大が対商大戦に持つ唯一の望みは自己の力によるよりは，商大自身がこゝ数年挫いた弱味を待つより他になかった。だが商大は他クルーに比して技術的にまとまっていると同時に精神的にも訓練されていたので，明大も乗ずる隙なく結局力の差によって勝敗を決した……』と報じている。（肩点は筆者）



全日本優勝記念。前列左から奥野浩爾，北村隆義，木村太三，前田正，塚越賢哉，後列左から丸山泰男，伊勢谷嘉一，兼本豊，伊藤治雄，堀川富太郎

これらの新聞評を待つまでもなく，この年のクルーは，勝負強い精神力と強力かつ有効な力漕の二つの武器が勝因であったことは，万人の認めるところであった。一橋新聞の9月28日号でも，中川英造は，『最近数年間の一橋クルーは技術の点では決して他校に負けていなかった。そして，レースでは無惨に負けていたのである。真剣勝負に弱いクルー……であるといわれることは，一橋人にとって何物にも堪え難い屈辱であった。（そこで）昨年末から……対校選手をＨＣＳ各組に一応かえして校内レースに全力を尽くさせ，コースを3,000mにするなどのことが行われた……（こうして）今年の一橋クルーの勝因が，（技術や漕法よりも）気力と戦闘力にまさった点にあったという識者の一致した批評は，我々にとって最も嬉しい言葉であった。』と述べている。

そして，この年の11月に部報の「祝勝号」が発行された。数多くの先輩や選手やバックメンたちの，レース経過や率直な所感や感激にあふれた祝辞や反省を促す忠告や今後に備えての激励の文章が掲載されている。『9年ぶりの優勝は全く嬉しかった。血に燃ゆるくれないの旗が，隅田の河風に晴れやかにたなびき，マーキュリーの旗印が，琵琶湖のほとり瀬田の唐橋の上を躍り上りながら渡ったとき，二度三たび大声で叫んだあの万歳こそは，過去9年のあいだ吾等が幾度か叫ばんとして叫ぶことの出来なかった万歳であり，溜りに溜った多量の万歳であった。今まで，如何ばかり多くの

先輩たちが真剣に努力した事か，苦しんだ事か，更にまた如何ばかり選手たちが犠牲を払い塗炭の苦しみをした事か，亡くなった鷺島，宇治原の両人も定めし喜んで呉れた事であろう。』と遠山不羈夫が述べている。

また，対校選手伊藤治雄主将は，『一橋が今年勝った事は偶然ではない……宿敵帝大の陣営に高らかに挙る凱歌，誇らかにひるがえる淡青の旗に切歯し，悲憤の涙を流さねばならなかったことも一再ではなかった。しかしながら，過去8年間に……累積された先輩，選手，コーチの血と涙と汗の結晶が，成果が我々の時に到って現われ，我々を駆って制覇を成就せしめたのである。……高垣先生の御在任中と広松兄の在校中とに，遂にそのご恩に報ゆるに到らず，翌年に到って卒然として覇業成るいう運命の皮肉を嘆ぜざるを得ない。』と語っている。

河西先輩の提言

しかし，また一方では，河西源吉先輩（昭6学卒）のごときは，いたずらに勝利の美酒に酔うことをやめ，『この辺で吾々は静かに自己反省の必要に迫られておりはせぬであろうか』と，わが端艇部と一橋学園との関係について二・三の問題点を鋭く提起している。すなわち，『一橋新聞（235号9月28日発行）は今秋の母校優勝を報じた。然しその編輯の心事を思い，内容を一読し，如何にも貧弱にして恰かも他事を報ずるごとき無関心，無感激に全く痛憤に堪えぬものを感じた。』と指摘され，その原因の一つに，最近の学内における白票事件の余波や，文化部，学術部を中心とする反運動部，反ボート部的風潮にあることを示唆して，『真理の追求もちろん結構だ。しかし頭脳肥大にして体軀矮小なる畸形児は禁物だ。一橋意識に燃え大地に力強く両脚を踏ん張った偉丈夫が，現在の一橋には必要な筈だ。一橋学園草創以来，六十有余年，端艇部が母校と頒ち合った忍苦の事例……感激の数々は，『一橋五十年史』をひもとけば歴然と明記されている。ボートメンは須く学術書を左手に，一橋史を右手にすることを忘れてはならぬ。……如何なる環境，如何なる事情に変わろうとも，少なくもボートメンは一橋の中心たるべく，原動力たるべく……協力して母校の苦難に殉じ，その再建を達成せしむる熱意を失ってはならぬ。かくして一橋を母体として学園に深い根底を持つことによって，端艇部は永遠の生命と繁栄を約束されるものなりと確信する。ボートメンは常にこの意識を把持して，あらゆる行動に対処されんことを切望する。』と力説されている。

しかもそのためには，(1)端艇部史の編纂，(2)先輩，学生協議による各種研究会の設

置(漕法研究，体力強化，陸上タンク建設，会計の充実等)，(3)一橋会，新聞部，文化部，他運動部等の校内各部との連繋強化，部員の派遣，(4)日本漕艇協会への先輩，学生の多数参加などの諸提案を行っている。河西先輩は，かつて端艇部理事として，“昭和5年，東洋一を誇る鉄筋コンクリートの大艇庫”を完成させるため，獅子奮迅の働きをしただけに，単に対校選手の活動のみならず，ボート部全体の運営についても，他の先輩以上に熟知し，また心配もしていたのであった。

端艇部の危機感

学生側もまた，河西先輩の指摘を待つまでもなく，かつての“一橋会員はすべて端艇部員なり”という“橋人皆漕”の時代に比べて，学園の国立移転や，一橋会予算による端艇部比重が大きいことに対する他部門の反発や，8年の長期に亘る連続惜敗や，白票事件の微妙な余波などのために，端艇部の“衰勢”を自覚し，何とかこれを打破せんとする意欲を燃していたのである。昭和11年に端艇部理事に就任した伊藤治雄は，この年の5月5日発行の部報復刊第1号（昭和3年5月第1号より昭和5年10月第9号まで発行，その後中断）の「発刊の辞」の中で『現在の一橋に最も欠けているもの……は，集団意識であり，協調の精神であり，小我超克の精神である。かゝる精神を（最も強く）包含するものが端艇道であり，……最も如実に体得させて呉れるのが端艇部である。一橋と共に誕生し来った端艇部が，一橋の指導的中心として，この精神を育み，鼓吹して行く所に端艇部窮局の理想（があり，またその事によって）一橋の発展も企図せらるべき』であると強調している。ただしかし『果して現在の端艇部は真に一橋を指導するの実力ありやと問わるる時，遺憾ながら多くの疑問なきを得ません。』と自己反省し，端艇部員のすべてが，一橋ボートメンとしての自覚に徹し，学園内の諸活動にアクティヴに働き掛けることが肝要であることを説いて，当面の宿題として，(1)何よりもまず対校レースに勝つことと，(2)橋人皆漕，クラスチャンのための村山貯水池の獲得をあげている。

ところで，このようなボート部の危機感は，この昭和10年代になって初めて意識されたものではなく，実は昭和3年に部報が創刊されたときにも指摘されていたところであり，一橋ボートメンの永い間の苦悩でもあったのである。この年の対校優勝クルーの6番を漕ぎ，翌昭和12年の主将となった塚越賢哉の述懐からも，この苦悩を窺い知ることができる。『一橋に覇気満ち満ちて進む時，ボート又厳然として，その威風を誇示す。一橋に沈滞の声を聞くや，端艇亦勝つ可くして勝たず，沈滞の声と共

に，茲に九年。一橋復興せんとする時，ボートもまた八年連敗，嘲笑の声を聞き，人心漸く離れんとする時，善くけっ起して制したり墨堤の覇，思えば不思議にして感慨措く能わず。』と。また同じく５番を漕いでいた奥野浩爾君も『勝利の号砲が鳴っても何が何だか分らず，ただ涙が出て来るばかりでした。そのとき耳に響いてきたのは，あの「長煙遠く」の一節でした。幾度も唄いまた聞いてきた「長煙遠く」ではありましたが，この時ほど強く胸に響いた事はありませんでした。今もなお目をとじて当時の光景を思い浮べる時，湧き起るようにはっきり耳の底から響いてくるのは，あの「長煙遠く」です。これは恐らく一生を通じての感激となるでしょう。』と述べている。

これらの若い選手たちは，全一橋学園と端艇部との運命的な一体感を，若々しい感激をもって，誰よりも強く実感していたことだけは確かであった。いずれにせよ，商大端艇部の危機もしくは衰勢の一つの原因である連敗の歴史には，この昭和11年の優勝によって，一応の終止符が打たれたのである。したがって，この年以降のボート部の課題は，この優勝をスタートとして，来年も再来年も持続するとともに，学園内における商大端艇部の地位を確立することに向けられなければならなかった。もとより対校レースに勝ちさえすれば，すべての問題が解決するという訳のものではなかった。竹下貞雄(昭12門卒)が卒業に当たって，所感で述べているように，『徒らに伝統の殻を墨守した古い端艇部は，新しい一橋を率いてゆけぬ。全一橋の今の悩みを共に悩み，しかも着々たる実行力をもって自らを充実すると共に，同人を引っぱって行かねばならなかった。』のである。

昭和12年

昭11年12月23日，「白票事件」の火消し役として登場された三浦学長が，その役目も終わったとして辞任された。そして，そのあとを受けて，上田貞次郎教授が，学長に就任され，１月８日早くも第一声をあげて，学内の融和，学園の再建を力説された。また１月31日には，専門部端艇部のＯＢの団体「墨堤会」は，昨年秋ロンドン杯レース）に専門部クルーが５年連勝の結果，日本漕艇協会より同カップの永久保有を認められたことを祝って，特別記念杯を寄贈された。

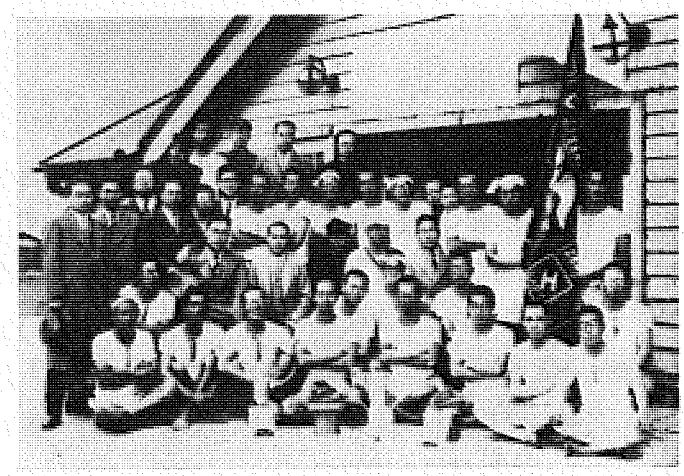
第51回春季大会

恒例の春季競漕大会（第51回）は，4月18日に開催された。この年も昨年同様，対校選手，校内選手ともども，ＨＣＳの各組に分かれて，前年の11月から練習を開始した。12月19日から一斉に10日間，50人になんなんとする意気盛んなるボートメンが，厳冬の合宿練習を行った。『寒風吹荒び，寒波凍らんとする墨田川に，しかもこの年の暮に，一橋端艇部のため精進を続ける姿は，一橋端艇部の興隆への血みどろな努力を如実に反映する』（塚越H組主将）ものであった。さらに正月に入ってからも９日から通い練習が続けられ，また２月の学期末試験後は，各組とも長期の本格的な合宿練習に入ったのである。いよいよ４月18日，レース当日は天候に恵まれて，昨年の９年ぶりの全国制覇の後を受けて，大変な盛会であった。呼び物のＨＣＳレースは，午後３時半，招待早慶ＯＢレースの後，第三選手，第二選手，第一選手の順で行われた。その結果，第一選手は艇差15秒，第二選手は艇差１尺，第三選手は３艇身差と，H組が３レースとも全勝で飾った。またこの頃，部員の敬愛してやまなかった高垣部長の退任後，しばらく空席となっていた端艇部長に，井浦仙太郎教授が就任された。６月６日，第７回予科，専門部対抗レースが行われ，新人選手，第一選手ともに，ここ数年の予科の復仇ならず，専門部クルーは，新人選手が１艇身半，第一選手が３艇身の差で連勝し，通算成績は５勝２敗となった。

第17回関東インター・カレッジ

４月18日，春季大会終了後，昨年と同じくＨＣＳ第一選手中より対校選手の選抜が行われた。もちろん，その意図するところは「幾多の先輩が成し遂げ得なかった連覇の栄を勝ち取る」ことにあった。

第17回関東インターカレッジ・レガッタは，９月４日，５日の両日に亘って，尾久コースで挙行された。コースは，この年から外国の例に学んで，新しく2,000mの直線を採り，また500mごとに伝馬船を両側に据え，その間に綱を張



昭和12年，ＨＣＳレースH組全勝記念

って，赤と黄のコース標識旗を設けた。会するものは，オリンピック帰りの東大エイト，早大フォアを交えて11校であった。

第1日は，慶大，千葉医大と当たり，それぞれ4艇身の大差で破り，第2日準決勝でオリンピック選手を乗せた東大との一騎討ちとなった。わが商大クルーの第1日目のブレード・ワークは，どうも荒れ気味であり，リズム感がギクシャクしていたので，レース前，遠山コーチがモーターをつけてその調子を取り戻そうとした。しかし，レースは，スタートでカンバスほどリードしたものの，500m での当方のスパートが効かず，逆に東大クルーの力漕で⅓艇身リードを奪われ，その後は東大の緩急自在のスパートに翻弄されて，わが商大クルーの相次ぐスパートも，リズムが乱れ効を奏さず，ついに2艇身の差で敗退してしまった。なお，決勝戦は東大，早大の対決となり，東大が艇差 30 cm の僅差で優勝したのである。

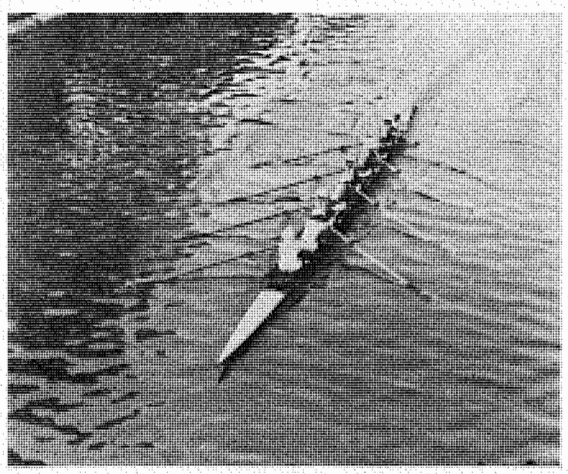
部報第6号の見出しは，「再覇ならず―絶大の期待空し」と報じ，井浦新部長は，『不肖敢て自ら図らず，さきに歴代各部長の後を承けて，光輝ある本学端艇部長の席を襲うてより，今日初一戦に当り勝を譲るの止むなきに至る。対校選手多年の努力，全学園学生の支持，殊にまた先輩，大先輩の多大の御後援を忝（かたじけ）のうしたるに拘わらず，かくの如き遺憾なる結末を招来したるは，一にこの部長不徳のいたす処，衷心慚愧（ざんき）に堪えざる処である。さりながら，またまた旬日を出でずして，更に責任の重且大なる全日本選手権大会を迎うべし。この部長は誠に非力，非才，到底頼むに足らずとするも，願くば選手部員の発奮，全学園及び先輩諸彦の一層熱烈なるご後援により，最終の美果を収めん。』そして最後に『起て！　対校選手並びに部員諸君，今日の小敗をいつまで歎かんとするか。須（すべから）く最終の栄冠を期して太ッ腹で行け』と激励している。

また，当時，国立の名物男といわれたボート部先輩の太刀川浩一郎学生主事（大正10年専攻部卒）は，同じ部報で『親愛なるわが端艇部選手各位，昨日親しく全一橋クルー敗戦の情をみ，瀬尾氏はじめ諸先輩のご苦心，ご後援と選手各位の努力の報いられざりし事を甚だ遺憾に存じ候。この上は来るべき全日本選手権競漕に於て，恒に一橋の士気を代表する者と自任せらるる選手各位は，全一橋，専門部，予科各クルーとも，皆一体となり烈火の如き闘志を内に蔵しつつ，大丈夫たるの落ちつきを持して，母校の名誉のため自ら省みて悔なきご力闘を祈願致し候。』と，これまた全日本選手権レースに大きな期待を寄せていた。

全日本選手権に一橋から3クルー出漕

この年，日本漕艇協会は，東京オリンピック開催に備え，組織を改正するとともに，全日本に限って，1校1種目1艇の規則を削除して，これをオープンとする決定を行った。従来，この規則があったため，わが専門部クルーは，前にもふれたように，独立校ではないという解釈から，インター・カレッジで一高や外語や大倉と同じように，時には優勝を勝ち取り得る実力を持ちながら出漕できず，ロンドン盃レースや高専レースなど二流のレースに「髀肉の嘆」をかこっていた。しかし，この年になって初めて，専門部は予科とともに全日本レースに出場権を獲得し，わが商大端艇部は，インター・カレッジに出漕した全一橋のほかに，専門部，予科の3隻のエイトが，全日本のオープン戦，秩父宮杯争奪戦に加わることとなったのである。一校から三つのエイトを出すということは，もちろん空前のことであり，他校にはまねのできないわが商大端艇部の層の厚さと長い歴史と伝統の力を誇示するものであったといえよう。なお前にもふれたように，全日本レガッタのオープン化によって，わが専門部クルーの唯一の対校レースであったロンドン杯レースが廃止となり，ロンドン・カップは永久に専門部クルーに授与されることとなった。

また，この年から東京オリンピックに備えて，外国のレースに倣った敗者復活戦や3杯レースが行われることとなり，こうした新機軸をとりいれた注目の全日本レガッタが，いよいよ開催されることとなった。9月12日午前9時，尾久コースにおいてレースが開始された。まず全一橋は一高と対戦したが，昨年の苦戦とは違って，2艇身の大差で楽勝した。また専門部は日医大に前半リードを許しながら，後半機を見てのスパートが効を奏して1艇身の差でこれを撃退した。しかも，このレースの専門部クルーのタイムは，第1日出漕の全クルーの中で，平水換算で最高のものであった。予科クルーは，第1次予選で東大とぶつかり，3艇身の差で敗れ，また専門部に敗れた日医大との敗者復活戦でも2艇身半の大差で敗退し，第1日目午前中にその姿を消すこととなってしまった。第1日午後のA組準決勝で



全日本選手権出漕の専門部クルー

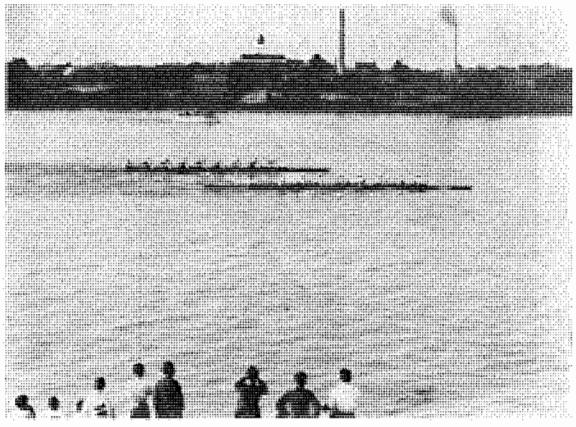
は，全一橋が敗者復活戦で上がってきた日医大と当たり，大接戦の結果，⅓艇身の僅差でやっと撃退することができた。また，B組準決勝では，専門部がやはり敗者復活で浮上してきた慶大と当たり，1艇身半の差でこれを降した。

明けて，いよいよ9月13日，第2日の午後，A組，B組の決勝戦が行われ，ここで選ばれたAB2校が関東代表校となり，関西代表1校と合わせて3隻のクルーで，全日本選手権大会初の3杯レースで決勝戦を行うこととなった。

専門部クルーの接触による惜敗

A組の決勝戦では，わが専門部クルーが東大と当たり，B組では，全一橋クルーが早大と当たることとなった。まずA組では，スタートで東大わずかにリードするも，専門部はガッチリと食い下り，1,000mのスパートの応酬ではシート差に縮めて半艇身リードされながら伍角の勝負をし，1,200mではむしろ専門部がじりじりと追い上げ，艇差を更に縮めようとした矢先，両艇ほとんど接触し，東大整調のオールが欠けたが，レースはそのまま続行，東大クルーの巧妙な作戦に乗せられて，専門部は東大の泡をかかされ，艇速伸びず，ついに2艇身差でゴールとなった。

B組で早大と当たった全一橋クルーは，スタート好調でまずカンバスのリード，800mの全一橋のスパートが効を奏して，約1艇身リードしたが，後半，早大俄然地力を発揮し，1,300mの見事な力漕で追い付き，逆にカンバスのリードを奪った。わがクルーもスパートしたが効なく，ラスト500mで相互に死に物狂いの力漕を繰り返し，息詰まる大接戦の結果，ついに⅓艇身の僅差を挽回できず，無念にも長蛇を逸し，早大に凱歌が上がった。ちなみに，第3日目の9月14日の午後行われた関東代表の東大，早大の2クルーと関西代表の同志社クルーとの本邦初の3杯レースでは，東大が早大に1艇身，同志社はさらに遅れること3艇身で，東大がこの年の全日本の覇権を握ったのであった。



全日本選手権決勝レース東大に惜敗

9月27日号の「一橋新聞」は，“連覇遂に成らず，帝早に敗退す”という見出しのもとに，特に専門部クルーについて『今日までロン

ドン盃にのみ出漕，年々栄冠を獲得して来た専門部が初めてこのエイトレースに出漕し，その兄貴分の全一橋にも見られない強引なストロークに，忽ち一流クルーを圧し，優勝候補の一つにおされ，漕艇界注目の的となったことは，たとえ敗れたりとはいえ，本レース中唯一の大きな収獲であった。』と賞讃の辞を惜しまなかった。

この強力クルーを育成した芝田年夫コーチは，専門部端艇部の歴史そのものと申すべき存在であった。昭和5年初出漕のロンドン杯クルーの主将7番として無敵クルーの中核であり，続いて6，8，10年ロンドン杯クルーのコーチとして，毎年実力隅田第1級クルーの実現の原動力となったが，本年専門部端艇部念願の全日本選手権出漕に当っても，忽ちこれを優勝候補クルーに育て上げた功績は特筆に値する。（沈着，温容の中に，烈々の気迫を秘めたまことのオアーズマンであったが，無念にも，第2次大戦の緒戦において，シンガポールを目前にして戦死を遂げられた。）

部報第6号の見出しでは，“空前エイト三艘の出漕——雄図惜しくも潰ゆ——秩父宮杯奪還さる”となっている。あれだけ井浦部長，太刀川学生課長の激励と期待があったにもかかわらず，ついに再制覇の夢が消えてしまった。部報には各クルーのコーチ，主将などの敗因についての所見が掲載されている。瀬尾対校コーチは，『当初の艇速よりも，ストロークのスピードに重点を置くために，ブレード幅をかなり削って引きを軽くしたことが，長期練習の初期段階ならいざ知らず，HCS後の短期練習では，その効果が裏目に出たのではないか』と反省している。遠山対校コーチは，この年のクルーは『非常に熱心に練習をしたのに拘らず，ともするとひどくギコチない重たい調子に陥ることがあった。それを克服することが出来なかったのは誠に残念であった。』と述べている。

対校選手の塚越主将は，『全一橋の期待を担って，再制覇によって端艇部を再興し，以て学園の内外に於て，往年の黄金時代を再現すべき使命を課されながら，遂に敗退し，昨年の優勝によって作られつつあった一橋端艇部の志気向上の契機を破ったのは，甚だ遺憾とする所であります。』と述べつつも，『諸先輩の中には又もや商大受難の歴史が始まるのではないかという様な危惧の念を抱かれる方もあるかも知れませんが，それは無用です。敗れたりとはいえ，吾々には勝つ自信があります。商大は勝つ気運に向っているという雰囲気が感ぜられます。』と盛んなる意気と力強い自信のあることを訴えている。

専門部増田主将の痛恨

ただ専門部クルーの増田賢治郎主将は，不運の敗戦について，『“背水の陣”を敷いた一戦だった。過去幾年かの間，蓄えられた専門部独自の力と妙味を，この一戦に披瀝して満天下をアッと云わせんと謀った全日本レガッタ。余りにも鮑気なく結末を遂げた。……忌まわしい接触，呪わしきコースの侵犯。……ヒイキ目を一切抛棄しても専門部は帝大を破る艇速を示していたと確信する。破るべきは帝大であると練習中から考えて居たが故に，ああ云った結果に終ったことを痛切に口惜しいと感ずる。専門部端艇部の過去の歴史を想い起し，一大躍進の途上に踏み出した現在を見つめ，限りなき向上の道に邁進せんとする将来に思いを及ぼす時，今年度の蹉跌の如何に影響大なるかを感じ，（その）不運を嘆かざるを得ない。尋常の勝負で敗れたなら，明日の栄冠を目指して心機一転する事も出来るだろう。』『永久に癒えない痛手であり』また『所詮は矢張り涙を呑んで泣き寝入りするより他に手はないのか。』と痛切に慨嘆している。

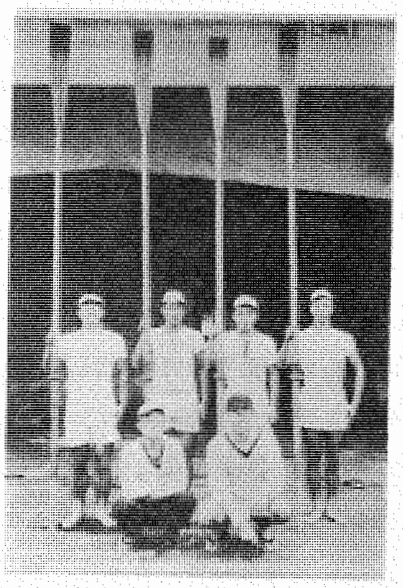
増田主将の口惜しさいっぱいの気持は分るにしても，非はすべて東大側にありとする見解には若干の問題がある。「東京日日新聞」に掲載された宮木昌常氏(慶大ＯＢ)は，「商専の奮闘は賞讃に価するが接触の醜を演じた事は，優勝東大に一抹の汚点を印したと同時に商専もまた，折角の力闘を無にしたものといわざるをえない。何れにしてもこの好レースの終りを完うせしめなかった両艇の舵手に黒星を与えなければならぬ。」という講評を下している。

対校のＨＣＳからの再分離

関東インター・カレッジおよび全日本選手権の苦い体験と敗因の検討を通じて，昭和10年末に決定した対校選手の春季大会後の編成と練習開始の方針を再度見直すために，全日本レース終了後間もなく，９月25日国立の本科学生集会所で，来年度対校の練習方針につき，端艇部三科合同の幹事会が開催された。そして来年度は，東京オリンピックの第一次予選を控え，各校も相当の覚悟で臨んでくるという客観状況を分析，検討した。その結果，従来のような春季大会のための練習となると，どうしても目先のレースにとらわれて，速成主義に走りやすく，やはり対校選手は，長期的計画で基礎から一歩一歩着実にみっちりと練習を重ねて行く必要があるという塚越賢哉主将，植松健悟理事の意見が大勢を占めた。

フォアの全日本制覇

10月5日夜，如水会館において，四神会主催で，恒例となっていた対校選手慰労晩餐会が開催された。この年は，空前の3クルーの出漕（全日本選手権への全一橋，専門部，予科の3クルー出漕）があっただけに，バックメンを含めて，大勢の現役学生がご招待を受け，また，最長老林幾多郎先輩（明23本卒）を始めとして，三谷（明29本卒），木下（明31本卒）両先輩ほか多数の先輩のご出席を仰ぎ，極めて盛大に行われた。席上選手一同は，先輩各位の温かい慰めと強い励ましの言葉に感激し，今後の一層の努力を誓ったのであった。そして，こうした先輩の激励にこたえ，学園の期待にそうときが意外と早く訪れた。この年の最後の対校レースとして，11月2日，3日の両日にわたって尾久コースで挙行された“全日本小艇選手権競漕大会”がそれである。11月10日号の「一橋新聞」によると，『先づ第1回戦に於て，事実上の優勝戦と目される対帝大A戦に6分58秒の好記録で見事宿敵を屠り，（全日本）エイトの復仇に溜飲を下げ，つづく2回戦には，余勢を駆って漕艇界の重鎮慶応を軽く圧して，準決勝を迎え，早大，外語を破って意気当るべからざる新鋭日本に対戦，堂々たるレーシングとストロークで6分48秒をもって，これを一蹴して関東代表となり，最終日の決勝戦に於ては31秒という古今未曽有の大差をもって同志社を撃滅し去った。記録7分2秒。』（なお，この記事には出ていないが，決勝戦には朝鮮代表総督府クルーも出漕していた。）また，この記事の見出しは，『俊速よく強豪を抜き，天晴れ全国制覇，宿敵帝大を屠って，エイトの復仇遂に成る』となっている。



このときの全日本フォア・レースは，昨年東大のオリンピック日本代表クルーが，イギリスの伝統あるヘンレー，マルローのレガッタに出漕，ヘンレーでは最後にチューリッヒに6艇身の大差で敗れたとはい



全日本フォア優勝記念
左から，丸山，平野，工藤，堀川，塚越

え，ともかくも予選で勝ち残り，準決勝に進出するという好成績を収めたものの，ベルリンでは予選で惨敗を喫したこともあって，将来の東京オリンピックに備えて，スカル，ペア，フォア，新しい舵なしの種目を含めて，小艇に力を入れようとする日本漕艇協会の特別の目的をもって開催されることとなったものであった。それだけに各校においても，強力なクルーを編成してこれに当たったが，わが商大もコックスを含めた5人の選手は，すべて本科生のみのベテランのクルーであった。それだけに，このフォアの全日本制覇は，その後にくる昭和13年，昭和14年の連覇につながる貴重な一勝であったといえよう。なお，同じ11月3日に催された“明治神宮固定席選手権競漕大会”に，予科クルーが出漕して，諸大学クルー20数校との争覇に見事栄冠を獲得したことも見逃してはならない。

ともあれ，この年はインター・カレッジに惜敗。全日本に空前の3隻出漕を果たしたとはいえ，ことごとく敗退の憂き目を見たが，端艇部現役陣の意気はすこぶる軒昂にして，全日本フォアで，全国制覇を成し遂げることができた。雌伏八年時代には見られなかった学生側の自主性というものが，練習計画にせよ，端艇部員の学内活動にせよ，個々の選手のセルフ・コーチにせよ，かなり色濃く現れるようになった。

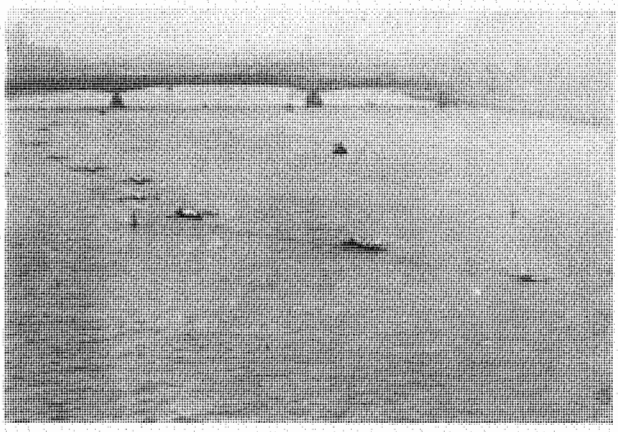
また，この年は，前年の“二・二六事件”に続く，7月7日の「蘆溝橋事件」，8月13日の上海での日中交戦，11月20日には，宮中に大本営が設置されて，思想統制，弾圧も始まり，世情がいよいよキナ臭くなり始めた年でもあった。しかしまた一方，大連では，一橋対一高のOBレースなどが行われ，宿敵一高を下したという嬉しい寄せ書きが，増田昇二，高橋保幸，北条秀一，田寿郎などの老若先輩たちから母校端艇部へ届いたりもした。さらに，12月20日には，東京オリンピック大会の全競技日程が，日本オリンピック組織委員会によって決定され，公表されるなど，まだまだのんきな空気が残っていたともいえる時代であった。

昭和13年

第52回春季大会

まず4月17日恒例の第52回春季競漕大会が開かれた。部報（第8号，6月25日刊）によると，「式は午前十時の開会式に始まり，君ケ代合唱，皇居遥拝，会長訓辞（学長），大優勝旗返還式，カップ返還，次いで選手代表堀川富太郎君の宣誓（後掲）後，大会の豪華版閲艇式が行われた。まず丸山理事のスカールを先導に，第三選手より順

に，ＨＣＳの精鋭フォア３艘，エイト６艘，最後に本年度対校選手と一列の縦陣を連ねて堂々長蛇の如く，言問より漕ぎ上って，艇庫前モーターの上から井浦部長の閲艇を受けたありさまは，全く墨堤を赤のブレードで埋め尽した大絵巻であった。」と述べている。この頃から，いよいよ戦時色が濃くなり，春季大会のやり方にもそれが現れている。例えば，選手宣誓文なども『今ヤ皇国多事ノ秋ニ当リ，我等学生漕艇競技ヲ通ジ，協調団結，不撓不屈ノ精神ヲ涵養シ，剛健雄偉ノ身体ヲ鍛錬シ，以テ生等他日活躍ノ機ニ資セントス。是モ亦実ニ我等学生ノ皇国ニ尽ス所以ナリト信ズ。』という内容であった。



閲　艇　式

またこの年，初めて行われた閲艇式は，大正10年代の皇太子台臨閲艇式の故事にならい，また当時の軍国調，即ち代々木錬兵場で行われた学徒の閲兵式や海軍演習の観艦式のイメージを取り入れたものであった。

各大学や会社の招待レース，来賓，本科，予科，専門部三科教職員レース，対校選手の試漕などの後，午後３時から待望のＨＣＳの第三，第二，第一のレースが行われた。Ｈ組が２年連続して全勝し，特に第一選手は３年連勝の３Ｈの新記録を樹立した。(明治35年ＨＣＳ制度が初まって以来，優勝の回数は，Ｈが11，Ｃが16，Ｓが11)。第三選手はＨＳＣの順，第二選手はＨがＣに１艇身差で勝ち，Ｓは３着。第一選手はＣがスタートでリード，Ｈはダッシュを伸ばして洗場で並行，艇庫前の力漕でリードを奪い，白鬚橋前では２艇身の差，しかし，Ｃピッチを上げてＨに迫り，水神で半艇身まで追い詰めたが，結局ゴールでは¾艇身差でＨが勝った。

部員大会での討議

恒例の春季大会が終わって約１カ月後の５月18日，向島艇庫の２階食堂において，端艇部部員大会が開かれた。この会議には，本科，予科，専門部から多数の部員が出席し，午後６時から10時半まで，真剣かつ熱心な討議が行われた。当日の議題としては，

(1) 予科，専門部対抗レースのコース選定の件

向島コースはカーブが多く，往来船舶が混雑し，天候によっては，レース不可能の日も少なくないところから，荒川放水路もしくは尾久の直線コースでやりたいが，尾久の場合は放水路でやる場合の3倍も費用がかさむので，やむなく放水路でやることに決定した。

(2) ＨＣＳ各組幹事会制度の再検討と予科，専門部，本科の三科代表幹事制度への切替の件

端艇部内の諸問題について，全部員が参画し，それぞれの持場で部の再建強化に協力できる体制を何とか整備しようとする考え方で，各種具体案が検討され，次回までに試案を作成することとした。

(3) 部史編纂の件

2年前，すなわち，昭和11年の9年ぶりの全日本制覇の際に，河西先輩からも提案のあった部史編集の事業が，昨昭和12年12月の端艇部幹事会において，「端艇部員よ己の歴史を知れ」というスローガンのもとに，着手されることとなった。部報第8号において，前理事植松健悟君は，『日本人が日本の歴史を知らずして，日本人たることを語るのは，……そこになんらかの浅薄さと空虚さを見逃し難い……わが端艇部に於ても，部史を知らずして，部員たるを誇るは危険を伴うことこそあれ，益はない。故に端艇部員たるの自覚を有さんと欲すれば，吾人はその歴史を知らなければならぬ。……『右手にオール，左手に部史』は必須の条件である。」と，部員に訴えている。

また一方，資料蒐集についての先輩への挨拶状において，『当部もその創設以来，既に六十年に垂(なんな)んとするに到り，その歴史は一橋裏面史として，又活きたる一橋六十年の歴史として，今日なお橋人の胸に多大の感銘と印象とを与へ居り候。然るに未だ部史編纂の業を見ず，生等現在の端艇部に生を享くる者，その歴史と伝統の偉大なるは知れど，之を眼のあたりに見るを得ず，六十年の歴史を通じ連綿として流るる一橋端艇道の真の把握に一大支障を来たしおる現状にこれあり，遺憾至極に御座候。』と書き記している。この時の委員は，植松健悟，堀川富太郎，奥野浩爾，丸山泰男，沢木宇吉，阿波博康，小牧辰志の7名であった。この部史編纂のため5月8日から4名が艇庫の一室に合宿し，資料蒐集作業を進めたことが，この部員大会で植松代表から報告されている。

(4) 全一橋応援団復活の件

昭和10年以降，一橋会を中核とする全一橋応援団の結成は中断され，予科，専門部の有志学生による応援団が続けられていたに過ぎず，これを是非今年から復活させたい。そのために近く一橋会代表役員との懇談会を開くことが検討され，承認支持を得た。

(5)　運動部委員長会，一橋会評議員会との関係強化の件

端艇部丸山理事が運動部委員長会の議長となり，また評議員として種々活動している状況を報告し，部員の支持，協力を要請して，諒承を得た。

(6)　端艇部の指導理念確立の件

「吾人屁理屈を知らず幸にして元気あり」というモットー――明治のボートの大先輩菅礼之助の作――が，従来の端艇部の指導精神とされてきたが，これは，『勇猛，純潔，敢闘の精神』を現しており，「実践性の無い理論を弄び，知識の過剰を悩み，すべての中心である人格の陶冶を忘れた≪青白きインテリ≫的な存在を排撃したものではあるが，それは決して頭の空っぽな馬鹿元気を標榜し，健全な理論までも排斥せんとする」ような排他的，反知的なものであってはならない。全一橋学園の復興と発展をリードするに足る一橋端艇部の指導理念について，部員一人一人が真剣に考えて見ようというところから，各自原稿用紙3枚に所信を書くよう提案して諒承された。

一橋会との懇談会

この部員大会後の5月30日，一橋会内部における一部の反運動部的な気分や，白票事件の影響もあって，一橋会と端艇部との間が，若干"チグハグな他人行儀の関係"となっていたものを改善，修復するために，端艇部側からの呼び掛けで，一橋会・端艇部懇談会が開催された。一橋会側からは，内海得治郎総務理事，沢田沢吉会計委員長，菲沢嘉雄予科総務理事が出席し，端艇部側からは，塚越賢哉対校主将，植松健悟前理事，丸山泰男理事，大西重則会計幹事，松井孝夫予科委員長，佐藤長太郎専門部委員長，堀川富太郎H組主将が出席した。当事の部報（第8号）から会議の論点を追って見ることとする。まず，丸山理事がその挨拶の中で『一橋会と端艇部とは，その歴史的関係からみても，密接不離の関係になければならないにもかかわらず，必ずしも十分とはいえず，何とか相互の意志を理解し合って，精神的結合を高め，一橋をリードするものとして一心同体となるべきである。』と強調した。これに対し，内海総務理事は，『一橋会と端艇部との(より緊密な）接触をはからねばならないということ

は，丸山君と話し合っていることであり，是非やらねばならぬと信じます。』と答えている。

結局，この懇談会を通じて，両者の間に合意を見たことは，(1)従来の春季競漕大会は，一橋会主催の重要な年中行事であるにもかかわらず，ほとんどすべて端艇部の役員の手で行われて，有名無実になっている点を改めること。(2)白票事件以後，無関心無気力な学生の多い現状の校風を刷新し，「一橋精神」という団体意識を昂揚するために，かつての端艇部を中核とする全一橋応援団を復活強化する必要があるが，これを上から強制することなく，下からそのような気運を醸成するよう相互に努力すること。(3)端艇部もまた全一橋的視野から，学園内の諸問題により強い関心を持ち，一橋会の強化と発展に協力すること，などがあげられたのである。

次いで6月15日には，端艇部理事の音頭取りで，全一橋運動部懇談会が開催され，校風刷新，一橋精神の昂揚，学生の体位向上などの共通問題について，意見の交換を行った。また一方，一昨昭和11年から実施されている予科1年の強制入寮制などの関係もあって，早急に小平，国立と近距離にあるボート練習用の水面を求める課題について，いろいろな検討や努力が行われた。先に村山貯水池の水面使用についても，学生，先輩こぞっての猛運動を展開したが，飲料用水池であるという事情から，ついに当局の容認が得られず，これを断念する結果となっていた。そこで，学生たちは武蔵野の地図を片手に自転車で，四方八方手を尽くしてボートの漕げそうな水面を捜し歩いたが，結局，思わしい結果は得られなかった。

この頃，対校選手は向島艇庫で，着々と練習計画を進めていたが，日中戦争（支那事変）の戦局が拡大し，準戦時体制（国家総動員法の公布）の強化などもあって，7月15日には，日本オリンピック組織委員会は，前年末に東京オリンピック大会の全日程を決定公表したにもかかわらず，昭和15年の東京大会開催を断念し，これを返上することを決定し発表した。この結果，わが国ボート界に一大革新をもたらすといわれ，前年5月30日着工の戸田静水コースの工事は，ついに中断のやむなきに至った。しかし，ボート関係者は，日本漕艇協会を中心として，文部省，厚生省に猛運動を行い，長さを2,500mから2,400mに，幅を100mから70mに，深さを3.5mから2.5mに縮小して，限られた予算で工事が再開されることとなった。

関東インター・カレッジにエイト・フォア両覇

今年こそはという悲願に燃えて長期の猛練習を行ってきた対校クルーは，いよいよ

9月3日，4日の両日に亘って開催される関東インター・カレッジに臨むこととなった。9月10日号の一橋新聞の見出しは，『鎧袖一触，強豪を圧しエイト・フォアに両覇』とある。続いて『秋季スポーツの華ともいうべき関東学生レガッタは，去る3日，4日の両日，台風一過久しぶりの快晴に恵まれて，尾久小台橋の下流二千米コースで，エイト・フォアの両選手権争奪戦が展開されたが，……本学は優勝候補随一の土手評に違わず，劈頭より好調のレースを続け，エイトでは，第1日強豪日大との一戦に艇を進め，猛然5艇身の大差で之を屠り，第1日最優秀の記録（5分50秒—平水換算6分45秒）を先取して，（第2日の）準決勝を迎へ，東京外語を破った大倉高商と対戦，7艇身差の独り試合に終り，余勢をかって一高を半艇身差で降した。早大と決勝に相まみえ，相つぐ早大の猛烈なスパートを抑へて1艇身強の艇差をもって，2年振りに堂々の覇を称へ，一方フォアに於ても，本学は予科生のみのクルーをもって，エイトを捨てゝ猛練習を重ねた拓大及び明大の代表クルーを退けて見事初の制覇を挙げた。』と勇ましく報導している。なお，9月11日には，商，早，慶3校の新人レースが行われたが，慶大は不出場，商大は，予科，専門部混合クルーで早大の新人クルーに勝ちを収めたのであった。

全一橋応援団の結成と新作応援歌の募集

前述のエイト，フォアの決勝レースの模様は，各新聞社のニュース映画に撮られて，全国各地の映画館で上映された。そして，このような一橋端艇部の意気当たるべからざる気運に乗って，わが端艇部が昨年来，学内各方面との諒解を取り付けた待望の全一橋応援団の結団式および選手出陣式が，国立の兼松講堂において，9月22日創立記念式典の後，一橋会理事会主催のもとに盛況裡に挙行された。また，全一橋応援団の4年振りの復活を記念して，端艇部が企画し募集した新応援歌が，6月末締め切り後，太刀川学生課長その他の審査員の審査の結果，当選第一席は本学学生尾田卓三作，次席は先輩遠山不羈夫作と発表された。これらの当選応援歌は，早速しかるべき作曲家に依頼して作曲を付けた上で，発表会を催すことが計画された。

当時の一橋ボート部黄金時代のムードを反映しているように思われる。

一席当選歌「出陣の歌」の歌詞の一部を紹介することとしたい。

『(三)

生ける誇を一筋の　　オールに寄する我が友へ

若き血潮の高鳴りや　　墨堤の空ゆるがして

乾坤(けんこん)正に　　とよむなり

(四)

墨堤十里日は高し　　正気溢るる一橋の

健児は永久(とわ)に栄(さかえ)あり　　見よマーキュリーの照りはえて

覇業の栄(えい)に　　輝かん　　』

全日本レガッタにエイト，フォア優勝

こうして，復活した全一橋応援団の結団式および選手出陣式より2日後の9月24日，25日の両日，第18回全日本競漕大会が，尾久コースで開催され，昨年同様新ルールによって，わが一橋からは，全一橋(対校)，専門部がエイトで，予科はフォアで，3科が艇を並べて出漕した。全一橋応援団は，3日間にわたって橋上や両岸を赤いマーキュリーの旗で埋め尽くし，応援歌を合唱し，『フレー，フレー商大』の雄叫びと声援を送った。

まず第1日目，秋雨そぼ降るなかわが対校クルーは，特異の漕法を持つ関西の雄同志社を1艇身半の差で屠り，専門部クルーもまた日医大，一高を，1艇身⅓，半艇身の差で降し，初日を飾った。第2日は秋晴れの好天に恵まれ，絶好のコンディション。まずフォアの準決勝で，予科は慶大を8秒の大差で破った。次いでエイトの準決勝で，全一橋は強豪早大，東大の3隻レースを争い，早大に1艇身さらに東大に1艇身半の差をつけて快勝した。しかし，専門部エイトは，優勝候補慶大および敗者復活戦で浮かび上がった同志社とぶつかった結果，同志社を抑えることはできたものの，惜しくも慶大に1艇身の½差で敗退したのであった。

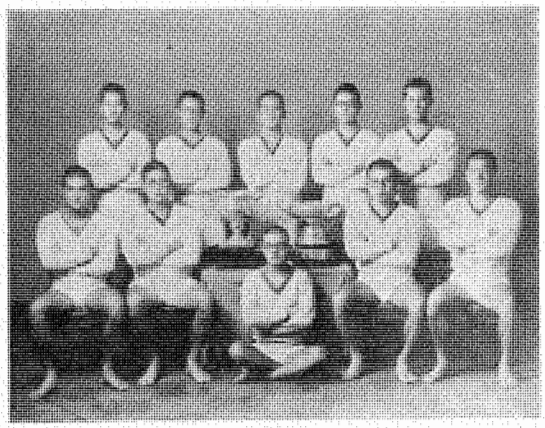
いよいよ，日本一を決めるフォアとエイトの決勝戦である。まず，フォアでは，予科が拓大を8秒の大差で破って，全日本の初制覇を飾った。次いで，エイトの決勝が行われる頃には，秋雨が降り始め，わが全一橋クルーは，準決勝で専門部クルーを降した慶大クルーと雌雄を決することとなった。まずスタートダッシュで商大の40.5のハイピッチに対し，慶大は37.5にセトルダウンして，500mを過ぎても両艇並行。750mあたりで商大42のスパートを試みて，ややリードするも雨まじりの突風に悩まされて意の如くならず，1,000mで⅓艇身リード。1,200mで慶大猛然とスパートすれば艇速鮮やかに伸びてたちまち並行。1,500mの応援団前では商大危うしと見えたが，絶叫に近い声援にこたえての必死のスパート効を奏して，徐々にリードを奪いカンバスの差となる。以後は両艇とも最後の力を振り絞ってのスパートの応酬がくりかえさ

れ，わが商大クルーは45のハイピッチで力漕し，慶大を½艇身差に抑えてゴールイン，一昨年に続き，しかし，今回はエイト，フォアともに全日本選手権を制覇することとなった。

レースが終わって午後5時，秋雨降りしきる中，全一橋応援団は，雨に濡れるをものともせず，小台橋一高艇庫前に集合。秩父宮賜杯の授与の後，全一橋，専門部予科の3クルー23名の選手を迎えて，上田学長始め，井浦端艇部長，太刀川学生課長，堀予科部長等の諸先生が次々と壇上に立たれて，『本日の一橋ボートの勝利は，全一橋団結の成果であり，喜ばしい限りである』と祝勝の辞を述べられ，一橋会内海総務理事の発声で，一橋会万歳を三唱した。祝勝式散会後，先輩各位や選手，応援団が，三々五々向島艇庫に集結して，祝勝コンパが開催された。そして，夜遅くまで勝利の美酒に酔い，校歌，応援歌の合唱が続いたのであった。



昭和13年インターカレッジ全日本選手権予科フォア優勝記念　前列左から古沢，中村，石井，藤井，奥野（コーチ）小坂



昭和13年関東，全日本前エイト優勝記念
前列左から，荻生，平野，工藤，塚越，佐藤
後列左から，角鹿，石原，高取(マネージャー)，黒川，田端　左秩父宮盃，右隅田盃

全一橋コーチ団を代表して，遠山不羈夫は，一橋新聞の記者の求めに応じて，レースの概評を次のように述べている。『強いブレード・ワーク，簡単にして明快なリズム，強固な目的意志，この三つが長期の練習によって，夫々鍛錬せられ，且つ綜合されて一つの立派なローイングが出来上るのである。ボートの魅力と真剣味，またボートの人生味もそこにあると思う。インター・カレッジに勝ったのも，全日本に覇を唱えたのも，技であるといえば，それでいい。精神であるといえば，それでもいい。慶大との決勝戦にオーバー40のピッチを引き通し，追撃の手をゆるめず，さすが好調の慶大をして手をほどこす術もなく屈服せしめた。長い期間の練習の効あって何よりも

嬉しかった。』

この9月25日のわが商大端艇部の空前のエイト，フォア両種目全国制覇の報は，津々浦々の如水会員にも伝わった。大阪では一昨年（昭和11年）の瀬田川での優勝の記憶もあって，間髪を入れず，10日後の10月5日に「関西四神会主催母校端艇部優勝大祝賀会」が開催された。この祝賀会には，東京からは塚越主将，植松前理事，堀川トレーナー，丸山理事，高取マネージャー，平野，工藤，角鹿の3選手が招待を受けて出席した。先輩各位は京阪神の各地から参会され，南郷三郎，日高驥三郎，志保井重要，岩倉具光，藤瀬英二郎，清水善造，小松栄，高村定一郎，木村賢治など37名の方々が来会された。

如水会報（昭和13年11月号）の記事によると，『宴会場の大広間の床の間には，畏くも秩父宮賜杯が燦然と輝き，全日本選手権獲得を表象し，もう一つの隅田杯は，関東選手権の栄誉を飾っている。……先ず一橋会歌斉唱の後，南郷三郎氏が輝かしい優勝を祝福され，之に対して主将塚越賢哉，前理事植松健悟の両君が答辞を述べ……，それからみな膝を交え，上衣を脱いで，老若渾然一ツ橋人となり切って，スキヤキをつつき乍ら，母校ボート部の偉業を称讃し，墨堤における若き日の想い出を語り合った。まこと本年度の一ツ橋クルーは，（関東，全日本を制覇，専門部クルーも善戦，弱冠予科クルーは大学クルーを一蹴し，新人レースでは予科専混成クルーが優勝して）尾久のコースは，伝統を誇る一ツ橋端艇部の赤きオールを以て，完全に占有せられた概があった。祝宴酣（たけなわ）にして志保井重要氏は明治初期の一橋端艇部の状態を詳細に物語られ，……小高親氏は明治四十年頃の一橋学園の危機（辛酉事件）は，我が端艇部の健在によって脱し得て，今日の光輝ある東京商大への大発展を齎（もたら）したことを雄弁に説き明かされた。更に岩倉具光氏は，四神会の生みの親としての苦労を語られ，（またこの席上）関西四神会の会長に南郷三郎氏，顧問に岩倉具光氏を推戴することを満場一致可決した。……ヘッド・コーチ遠山不羈夫氏の次のごときメッセージが植松君によって朗読された。『（前略）かくて我々は漕艇王国の一橋健在の声，街に起るを快く耳にしている。……国内はもとより，中北支聖戦の戦火の巷より，また全欧不安に戦く戦慄の都々からまでも，一橋の端艇部は幾多の激励と信頼に満ちた祝詞を頂戴した……果然，一橋のボートはただのボートではなかった。単なる学生の運動競技ではなかった。それは不屈不撓なる一橋精神の揺籃であり，源泉であった。想い見よ，あの勝利の日の光景を，秋水に光るオールを立てしわがクルーの先頭に立って威風堂々凱旋の庭に行進したわが先輩上田学長の英姿を。かかるが故に，それあるが故

に我々は勝たねばならぬ。……一橋の未だ若きボートメン達よ，誇らかに進め，驕(おご)る勿れ，苦しめ，而して耐えよ，怠らず自からを鍛錬せよ。次の勝利を戦い獲る為に。』痛快極まる団らんのうちに夜は更けて行った。ボートの歌，遠漕の歌を合唱し，来年の輝く勝利を祈念しつつ，大祝勝会を終わった。

次いで10月28日には，如水会館において，四神会主催で，対校選手(エイト)，予科選手(フォア)，専門部選手（エイト）および端艇部役員，幹事等33名を招待しての大祝勝会が開催された。当日はたまたま漢口陥落の吉報があって，まことに意気盛んなものがあった。林幾太郎，三谷一二，木下裕を始め，神田源七郎，小栗良三，高垣寅次郎，小田切賢，君塚茂太郎，岩崎恒弥，遠山不羈夫，高橋朝次郎など24名，学校側からは，内藤章教授，井浦端艇部長，太刀川学生課長，河合専門部端艇部長の４名が出席された。また11月３日の明治節には，国立において如水会，一橋会合同大運動会の当日，全一橋３科学生参加のもと，運動会宣誓式の後，栄ある「凱旋式」が挙行された。まず，全一橋2,000をこえる学生を代表して，一橋会総務理事内海得治郎君が力強い祝辞を述べ，次いで上田学長の『一橋のボートの勝利は，一橋に生をうけた者すべての歓びであり，一橋の全活動を支える元気と力の源泉である。』という熱気あふれるご挨拶があり，これらに答えて塚越主将が３クルーの全選手を代表して，『われらがボートの勝利は，一橋精神の勝利であり，粛学事件から立ち上った更生一橋団結の象徴であり，一橋の学問文化の創造興隆を齎す意志精神の源泉なり』と音吐朗々と「凱旋の辞」を朗読した。

新作応援歌の発表会

11月29日には，音楽部，端艇部共催による秋の恒例の定期演奏会（第36回）が，午後７時から神宮外苑の日本青年会館で開催された。学部２年中邨信一郎君の指揮による前述の端艇部募集の新作端艇部歌「春墨堤の花の色（遠山不羈夫作詞，外山圀彦作曲)」および新作全一橋応援歌「出陣の唄―流れたえせぬ大川に」(尾田卓三作詞，岡本敏明作曲）の発表会を兼ねた特別祝勝演奏会であった。日頃バンカラな日に灼けたボート部員も，この日ばかりは音楽部の指導を受けて練習した甲斐あって，これらの新しい歌を，何とか音楽的に聴ける程度に斉唱することができ，万堂の紳士淑女の喝采を浴びたのであった。また当夜のメイン・プログラムとして，ベートーヴェンの第５シンフォニー“運命”が力強く演奏され，「苦難を通じて勝利へ」という“運命”のテーマが，祝勝演奏会にふさわしい曲目として聴衆の感動を誘った。

こうして，この稔り多き昭和13年も，やがてその幕を閉じようとする12月21日，この年最後の部員大会が開催された。その席上，まず第一に丸山理事から，戸田平水コースに新艇庫を建設するための敷地購入の件について，すでに学校側にも事前説明を行い，年明け早々，上田学長，太刀川学生課長，大場事務官などを現地へ案内して，実地検分をするための準備を進めている旨の報告が行われた。

また第２議題として，井浦部長の明年の定年退官予定による新部長推挙の件については，各方面のご協力を得て，かつて佐野学長に端艇部長をお願いした前例もあることから，何とか上田学長に新部長にご就任いただくよう努力したい旨の報告があり，部員の支援協力を求めた。

第３の，小平の予科グランド敷地内に，自然流水タンク建造の件については，ここ２～３年来，多摩川，村山貯水池，その他について，練習用水面を物色し，また交渉もしたが，どれも望ましい結果が得られず，結局，かつて石神井で経験したように，小平グランドの境界に流れている玉川上水から引いた農業用水を利用して，流水タンクを建造することが，最も現実性のある案ということになった旨の報告があり，これが実現のため，学内外の関係者に猛運動を開始することとした。

さらに，第４の部史編纂事業の件については，植松代表委員より，先輩からの資料の入手もしくは借用について，その進捗状況が報告された。また，来年度は，優勝の功に甘んずることなく一橋クルーの猛烈な闘争心を鍛える場としてのＨＣＳ校内大会を充実させるために，対校選手を再び各組に復帰させることが決定された。さらに，年末の部員大会では，必ず新旧役員の交替があり，丸山理事から角鹿理事へバトンタッチが行われた。この部員大会を通じて，オールを持つ選手もオールを持たないバックメンも，理事，会計幹事，予科専門部幹事などの各役員も，すべて真剣に各自の使命と役割について，十分な自覚と意欲を持って努力していることが窺われ，当時のボート部の充実ぶりを具現していたということができる。

昭和14年

上田学長，戸田コース艇庫敷地検分

前年暮の部員大会の席上で報告された戸田艇庫敷地買収のための実地検分が，上田学長の都合に合わせて，１月29日に行われた。一橋新聞３月25日号は，次の如く報じている。『ボート隅田に左様なら，――敷地千坪買収確定――戸田コース完成に魁け

て』という見出しに続いて，『一橋のボートが六十年の歴史も夢に懐しい墨田を離れる事になった――オリンピック不開催と共に諸業事が中止された中で，埼玉県戸田のボートコースのみ計画が継続される事になったが，予算は半減され，資金難に陥り，漕艇協会が各大学に艇庫敷地買上げを要請してきたので，本学では従来，隅田川一帯は地盤低下し，満潮時には船台まで水が上るため非常に不衛生で，また船の往来はげしく練習に支障を来たし，練習は放水路でやっていたが，尾久も波が高い上に船も相当通るため，かねがね静水コースでの練習を希望していた矢先とて，早速土地購入に決定』したとある。同日，大学側からは，上田学長，太刀川学生課長，大場事務官，杉本教授，端艇部側からは役員幹事が同行した。先輩ならびに日本漕艇協会理事として遠山不羈夫が，現地の案内役を務め，図面に基づいて計画概要を説明した。寒風肌を刺す荒川堤防の上を，一同はかなりの時間をかけて，実地検分を行い，その結果，上田学長は千坪の敷地購入を即座に承認された。一橋新聞は，『学校からは時間的には向島へ行くよりは近い模様で，コースが完成すれば，学校のクラスチャンも早速やるとの事である。』と伝えている。

ところで，この年は日中戦争（日華事変）も3年目に入り，この戸田コース実地検分の前日には，平賀東大総長が河合栄治郎，土方成美両教授の罷免を文相に上申するというショッキングなニュースが流れた。（平賀粛学事件）。また，戦火拡大する中で2月11日の紀元節には，寒風吹きすさぶ代々木練兵場にて，都下の大学，高専の全学生を動員しての盛大な建国奉祝式典が挙行され，3月20日には文部省は，大学の軍事教練を必須科目とする旨を官公私立の全大学に通達した。

第53回春季大会

このような戦時色の中で，第53回春季大会が開催された。『戦時下に迎える興亜第二春，帝都スポーツ界のトップを切って，……4月16日の第3日曜日，花曇り無風の絶好の快コンデションに恵まれて向島で挙行された』と部報（昭和14年6月1日発行）は書き記している。特にこの年は昨年の一橋会との懇談会の席上で話し合われたとおり，一橋会総務理事が大会委員として参加し，春の大会を名実ともに一橋会主催の全学的行事とするために，積極的にその役割を果たしたのであった。昨年同様，国歌斉唱，皇居遥拝，戦没英霊への黙祷が行われ，選手代表の宣誓文朗読の後，昨年非常に好評を博した閲艇式が挙行された。艇庫バルコニーの来賓，郵船ランチ上の招待客，部員以外多数参加の一般学生はもちろん，黒山のような両岸の花見客も万雷の拍

手を送った。戦時意識を昂揚するために，おわんボートを使っての「敵前上陸」や「掃海作戦」と称する余興も取り入れて見物人を喜ばせた。

各組責任選手のレースは，第三選手がＣＨＳの順で決まった。第二選手もＣＨＳの順でＣ組が優勝した。ＣとＨの差はカンバス，Ｓはさらに遅れること１艇身であった。第一選手のレースは，午後５時，三谷審判長の号砲一発でスタートが切られた。Ｈは洗場カーブで半艇身リード，艇庫前ではさらに１艇身リード，その後は差が開くばかりで，ゴールでは追漕するＣを離すこと３艇身で，ついにＨ組は第一選手レースで４連勝を遂げ，大正５年より８年に至るフォアＣに次いで，フォアＨの新記録を樹立した。

役員交替と部員所感

ところで，昭和14年の部報（新年号）には，新旧役員および卒業生の所感や抱負が語られている。これらのうちからその一部を摘記して，当時のボート部員の考え方を見ることとする。

１）卒業生

植松健悟『完敗を喫した昭和10年オリンピック予選に拓大に負けた夜，艇庫の食堂でさゝやかな慰労会を行った。部員もいない，先輩も勿論いない。並んでいる者は皆テーブルに顔を伏せて泣いていた。広松兄の泣顔，言葉がつまって物もいえない。……しかし一橋には独特の一橋魂がある。この晩をスタートとして端艇部は更生の一歩を進めた。あの全国制覇（昭和11年）が一橋の先輩及び一橋人に与えた刺戟は確かに大きかった。……粛学運動も一段落の形となり，一橋にも比較的愉しい時が訪れた。嗚呼今にして考えれば，涙の文字通り涙の記録だ。こうした逆境に喘いだ我々が，今はそれと打って変った幸福の世界から実社会に出て行く。一橋に学び，ボート部に生を享くる諸兄は，ほんとに幸福だ。願わくばボートマンとして恥じない立派な生活を墨田川と共に送って呉れ。』

堀川富太郎『一橋に気と力を与える事は端艇部の使命の一つである。……端艇部の気風を全学にまで拡張することが肝要である。……ボートを漕ぐことそれ自身すでに無限の意義がある。ボートそれ自身の意義の他に，一橋端艇部としての伝統的長所がある。然し，……過去の伝統に甘んずる事は既に退歩である。伝統は常に批判され，否定され，創造されねばならぬ。』

伊藤茂三郎『いつまでもたゞ伝統を墨守した古い端艇部では，新しい一橋はリード

できない。古き伝統の精神を以て新しい事態を認識し，一橋の指導者とならねばならぬ。』

小口定一郎『一橋をリードする者は端艇道であり，端艇部でなくてはならぬ。しかし一橋をリードせんとするものは，理事会あり，評議員会あり，ゼミナール委員会あり，一橋学会あり，（運動文化の）各部がある。（従って，志ある部員は，これらの組織に積極的に参加し，かつ）これらの組織内に於て指導的位置に立つべきである。』

3）新旧役員

丸山泰男旧理事『一年前植松兄の推薦によって理事に就任したとき，「惰性的な伝統を批判せよ。然らば新しい道が開かれるであろう」と云った……その後機会ある度毎に一橋端艇道の再検討とか，思想性の樹立とか，自律的な端艇道を確立せよと叫んできた。……一つの人間の集団が同じ事に喜び，悲しみ，苦しむ合宿生活を，また一つのクルーがラスト30の号令で，お互いに励まし合いながら，敵をぬこうとするときの全体が一つになって，燃え上る炎の様な魂の叫びを，荒々しい心臓の鼓動を……，あの激しい肉体的実践から，血みどろな真の体験から，私達の生きた哲学を作ることができる……。上田学長もいわれたように，「われわれは断然高級のインテリを以て自任するが，しかしまた断然青白いものであってはならない。」』

角鹿哲也新理事『私の根本精神はともすれば弛緩しようとする精神を，次の勝利を獲るために引きしめようとする事であります。……端艇部は対校選手のみが背負っているのではない。吾々が端艇部員たる事を誇り得るのは，偉大な伝統を有する端艇部の名簿に，名前を連ねているからではなくして，……学内に於て最も真剣な生活をしているという自覚があるからであります。伝統を墨守しているからではなくて，新しい伝統を創造しようと努力しているからであります。』

さて，春季大会終了後，対校選手の編成が決定し，本科から4名，予科から3名，専門部から2名の選手が選抜され，コーチは広松三好，トレーナーは本科3年の平野昌と決定して，早速合宿練習に入った。

第9回予科，専門部レース

7月2日には，第9回予科，専門部レースが，昨年同様，緑濃き荒川放水路で行われた。近年特に攪乱船の往来激しく，しかも汚染の甚だしい向島コースでは満足なレースが望めなくなったところから，昨年バックメンの手で測量した水道鉄管橋と総武鉄橋との間の直線2,000mコースが使用された。第一選手は5月中旬，新人選手は6

月上旬から猛烈な合宿練習を続けていた。レース当日は天気快晴で上げ潮の好コンディション，大小先輩や予科，専門部一般学生の和船からの声援の中で，レースは行われ，従来のフイックスではなく今年からクリンカー・フォアを使用しての新人レースであったが，3年振りで予科に凱歌が上がった。しかし第一選手のレースは，専門部が艇差3艇身で4連覇を遂げたのであった。

上田学長端艇部長に就任

この予科，専門部レースの翌々日，7月4日には，かねてからの懸案であった井浦部長定年退官後の新部長として，太刀川学生課長などのご尽力もあって，上田貞次郎学長が第7代端艇部長就任を快諾され，その推戴式が如水会館で行われた。上田学長は部長就任の辞として，「……申すまでもなく端艇部はわが一橋学園における運動部の元祖でありまして……幾多の有為なる人物が在学中ボート道によって身心の鍛錬に励み，その人々が現にわが国の実業界，政治界等に活躍しておられます。従って……端艇部は熱心なる古い先輩を最も多くもっており，そこに一種独特の伝統的精神が脈々として流れているのであります。しかもわが端艇部は，古き伝統を誇るばかりでなく，現在わが日本のスポーツ界における最高峰の一つとして立っていることは，実に愉快なる事実であります。……しかし昨年勝ったからといって，今年は遠慮するという道理はないのであるから，今年も是非覇権を執ることを望みます。諸君が連勝すると否とは，端艇部だけの問題ではなくして，全一橋の士気に関するのであります。」と部員の責任の重大なることを強調せられている。

朱雀号遭難三十三回忌　宝山に卒塔婆建立

本年度対校選手の気持を引き締め，連勝への覚悟を新たにするために，銚子遠漕の途上，宝山の現地に立ち寄り，新しい卒塔婆を建立することとなった。7月18日佐原に1泊し，19日は四神会を代表して坂口侃（昭11本卒）が艇に同乗し，選手9名に平野トレーナー，篠崎マネージャーの12名が，宝山の柳川氏邸に到着し，柳川氏を初め遭難当時（明治40年12月30日）救助・捜索に当たられた老人たちから，当時の状況を色々と承り，柳川邸敷地水辺の葦の生い茂るところ，以前から建てられていた4半世紀の風雨に黒ずんだ卒塔婆のそばに，木の香も新しい卒塔婆を建てた。

菩提寺住職の読経の後，対校選手は厳粛な気持ちで力一杯の奉納力漕を行った。当時の部報（昭和14年10月15日号）には，『漂渺たる大利根の最中，此処に熱魂を沈め

た先輩の霊前に，腕も折れよと漕ぎまくる対校選手一同は，怒涛の中に「一橋会万歳」を絶叫した先輩を偲び，身の引締まる感を覚え，今年秋の再制覇を誓ったのでありました。』と書き記している。



第1回全国高専競漕優勝記念専門部クルー

夏季小会と第1回全国高専レース

7月30日には，予科，専門部の1年生の新人を養成する目的のクリンカーエイトによる第8回夏季小会が向島コースで開催された。S，C，Hの着順であったが，前年，前々年に比べると，若干技術的，精神的にレベルダウンのきらいがあった。8月20日には，尾久2,000mコースで，日本漕艇協会主催の第1回全国高専レースが行われた。インター・カレッジには，1種目1校1クルーの原則が依然として守られていて，全日本のみが1昨年からオープンとなっていたが，その関係でロンドン杯レースも廃止されたので，専門部や外語などの尽力で，この年から新しく全国高専レースを始めることとなったのであった。出漕校は，折角の外語がメンバー故障のため直前に欠場となり，商大専門部，大倉，早高の3校のみとなり，篠突く暴風雨の最中，白波の立つ荒川でレースが行われたが，わが専門部クルーは7月2日の予科，専門部レースと同一のメンバーで堂々たる強味を発揮して優勝したのである。ちなみに，艇差は早高に2艇身，大倉には4艇身の大差であった。

この時の専門部主将の杉本鉄二は，『高専レースが終って感ずる事は，何といっても相手の少く，かつ弱い事である。もっとも，この事はレース開催の運動を始めた頃より覚悟していた事ではあるが，済んで見るとやはり何だか物足らなくて，勝ってもうれし泣きに泣けない……せめて好記録をと思ったのが，あの物凄いコンデションではどうにもならず，全く残念で仕方がない。とに角我々はこのレースの将来を期待するのみである。絶対に第2のロンドン杯にはしたくない。……名実共に全国の名に応わしい高専レースが実現された時に始めて，今年漕いだ連中は心から喜びを味わう事が出来るのだと思う。」と，まるで優勝の弁とは裏腹のレースの低調について不満を

述べている。

第19回関東インター・カレッジ

本レース2週間前の8月27日に行われたインター・カレッジの前哨戦たる尾久レース（1,000m）では，商大対校および専門部（尾久レースはオープンで出漕できた。）の両クルーは，東，日，早および慶大に全勝し，赤のブレードが尾久を制圧した感があった。9月9日の関東インター・カレッジ第1日，わが商大対校クルーは，まず初戦，千葉医大に24秒の大差で，次いで対一高戦では500m で完全に水を開け，11秒の大差で鎧袖一触。第2日の準決勝では，「東と商」,「早と慶」の宿縁のある4強が覇を競うこととなった。昨年復活した全一橋応援団が，昨日に引き続き，両岸を埋め尽くして太鼓を打ち鳴らし，声を限りの応援を続ける中を，わが商大クルーは，スタートした。そして得意のスタートダッシュでたちまちリードを奪い，500m の力漕で水を開け，後半の東大の必死の追漕も，近寄ると見れば力漕をもって引き離し，完全に敵を翻弄して，1艇身¼の差を付けてゴールインした。このように，わが商大クルーは，順調に勝ち進んで，いよいよ好調の呼び声高い早慶の勝者，慶大と決勝戦で相まみえることとなった。

号砲一発，わが商大は自信のスタートダッシュで，カンバスのリードを奪ったが，慶大もさる者，猛烈に頑張って500m，1,000m での力漕の応酬によって差は開かず，コンスタントスピードは全く互角，逆に1,400m で慶大捨身の力漕で2尺わずかにリードを奪ったが，商大クルーもまた必死の力漕で半艇身の差に逆転。ラスト30で慶大はものすごいスパートで追いすがったが，結局ゴールではカンバスの僅差でわが商大に凱歌が上がり，ついに連勝連覇の偉業を成就することができたのであった。思えば，手に汗を握り，胸のとどろく熱戦であり，意地と気迫の名勝負であったといえよう。なお，フォアには予科クルーが出漕したが，準決勝で明大にカンバス差で敗れ，ペアは決勝で慶大に僅差1尺で惜敗し，スカルの決勝戦は商大独漕という成績であった。

『レース終って5時，秋雨降る中に応援団は夕闇せまる向島艇庫に集り，太刀川学生課長，堀予科主事，太田（可）予科学生主事らを囲み，先輩始め学生一同で祝勝会を開催したが，ビールの泡の乱れ散る中を，太刀川さんが何処から借りたのか，学生服を着込み，例のイガグリ頭に角帽をかぶり，大声で歌いながら，学生達の中に飛び込んで来て祝勝気分の学生を有頂天にさせた。』と，一橋新聞（昭和14年9月25日号）

が報道している。しかもこの祝勝記事の見出しには，『鎧袖一触，群艇を圧し，端艇一橋王座揺がず』と大きな活字が躍っていたのであった。

全日本選手権レース

翌11日午前9時，東京駅発の「燕号」で，選手一同，全日本選手権レースに臨むべく，一路瀬田川に向かった。如水会報10月号の記事によって，その模様を伝えることとしよう。『「ショウダイエイト　カチ　サイカス　タノム」という電報が，関西商大関係者に打たれた。レースは17日，1週間しかない。宿の設営，艇の借入，オールの到着，練習開始，会場の準備，観戦応援用の汽船（淡海丸）の手配とめまぐるしい。レース当日の17日に万事準備完了，唐橋の袂には「東京商科大学本部」と大きな立看板が立てられる。隅田川にたなびいた数本の真紅の「のぼり」が唐橋の上や，遊覧船の上に立てられる。先輩連は京都，大阪，神戸，更に東京よりも，この一戦を見んでなるものかとつめかける。さながら大一橋園遊会のようだ。

然し何とした事か，今まで輝いていた新秋の太陽は，比叡の頂きに湧き出でし黒雲にたちまち遮ぎられ，見るみるうちに瀬田川は烈風豪雨，さらには雷鳴までもともない，阿修羅と変ってしまった。そのとき川下より真紅のオールも鮮やかに，何のこれしきの雨などと颯爽たる東都の雄，わが一橋のクルーがやって来た。これに遅れること30分で，大阪商大も漕ぎ上って唐橋をくぐって雨にけぶる川上のスタート地点に向う。それから間もなく雨の小止みになるのをまたず，スタートしたという声が上ったが，豪雨のため200mさきが見えない。ようやく待望の艇が唐橋上流から見えてきた。間違いなく赤の8本のオール，既に水をあけている。それもっと抜け，がんばれ，と声をかぎりの応援で，艇はスパート，全く艇上艇外一身同体。艇差はますばかり，豪雨は少しも勢おとろえず，雷鳴は倍加し，幾条もの雷光が走る。一橋精神はかくも雄壮，かつ悲壮な決意をもって，悪天候の中を勝利の女神へと突き進んで行く。やがて3艇身以上の大差をもって，わが商大ゴールイン。成し難き連覇をもなし遂



第3回全日本競漕優勝記念

げ，はむかう敵を蹴散らして，この圧倒的な優勝！　一橋端艇部の関西遠征は単なるボートの遠征に非ず，如水会員のすべてにとって，強い力と勇気を与えてくれた。有難う。』と結ばれている。

「網定」の大祝勝会

こうして，一昨々年と同じように，橋畔「網定」の大広間で，祝勝大懇親会が開かれた。地元四神会の木村賢治氏の司会で，さきに大阪転勤になった遠山先輩，如水会京都支部代表，当日の雷雨で，電車不通の中を駈け付けた如水会清水大阪支部長，広松コーチ，応援団代表等の祝辞や挨拶が次から次にと続いたのであった。この瀬田の一角の不夜城のどよめきは，いつしか雨の止んだ黒々とした川面を伝って津々浦々の如水会員まで届くよう『東都の流』から新作応援歌遠山先輩作詞の『擢とる男一橋』，そして最後に『長煙遠くたなびきて』が歌われ，万歳三唱で閉会となった。しかし，この若々しい感激に，だれ一人帰る気配もなく，選手と先輩，学生と如水会員の間に祝杯が行き交い，時のたつのを忘れて祝勝の宴が続けられたのである。

正しくこの日の夜は，わが商大端艇部が，他のいかなる大学よりも優勝回数の多い名実ともに漕艇界の王者の地位に就いた夜であった。4年前オリンピック代表選抜レースに負けて，部員もいない，先輩もいない選手だけの向島艇庫の2階食堂で，涙が涸れるほど泣きに泣いたあの悲しい夜を想起すると，この4年間の歳月の重みが，選手一人一人の心の奥底にずっしりと痛感されたのである。昭和14年9月17日という日は，わが商大端艇部の歴史において，戦前における一つのピークをなすものであったということができよう。

第10回明治神宮体育大会レース

この2年連続の全日本制覇の輝かしいレースの後，稔り多き昭和14年の年末までにあった二つの出来事に触れておく必要がある。その一は，10月31日から11月3日に亘って，尾久コースで開催された第10回明治神宮体育大会レースである。このレースには，わが専門部クルーが全一橋を代表して出漕した。専門部クルーは，前にも触れたように，8月下旬の尾久レースで，目覚ましい好調を示していたが，大会第1日目には，帝大鉄門クルーを軽く引き離して快勝。第2日目は，去る高専大会で一蹴した第一早高，これまた2艇身半の大差。第3日の決勝では，宿敵一高とまみえ，大接戦の末，⅔艇身差で優勝をとげ，堂々全日本選手権を獲得した。インター・カレッジに

おける対校クルーの全日本制覇と並んで，錦上花を添える快事であり，これまた端艇王国一橋の名を天下に誇示するものであった。

宝山三十三回忌法会

さらに，もう一つの出来事は，先に触れたように対校選手の銚子遠漕の途中，宝山の川岸に新しい卒塔婆を建てて，今年の再制覇を祈念したが，昨年来の計画として，朱雀号遭難の33回忌の追悼法会が，年末の12月9日に如水会館でいとも厳かに，しかも盛大に取り行われたということである。先輩，学生多数列席のもとに，金色燁くマーキュリーの徽章の付いた丸帽を戴いた故村井，柏本両君の若きボートマンらしい温容の肖像写真2葉を祭壇中央に安置して，長岡孝先輩の司会によって追悼法会が始められた。まず，向島弘福寺の住職の読経に続いて，端艇部理事角鹿哲也が立って，霊前に次のような追悼の辞を捧げたのであった。

『惟レ時，昭和十四年十二月九日，此処母校ノ故地ニ祭壇ヲ設ケ，生等部員一同恭シク亡キ先輩村井俊二氏，柏木粂作氏ノ霊ヲ弔ヒ奉ル。顧レバ明治四十年十二月三十日，S組第二選手ハ朱雀号ニ乗組ミテ銚子ヲ発シ，遠漕ノ帰途ニ着キタリシニ，不幸，途次宝山沖ニ於テ暴風ノ為怒涛ニ呑マレ，両先輩ハ悲壮ナル最後ヲ遂ゲラレシナリ，悲シキ哉。然リト雖モ，大利根ニ沈ミタル熱魂ハ，一ツ橋ノ端艇部ニ生キテ空シカラズ，櫂執ル者，総テ，先人ノ血モテ描キタル歴史ノ跡ヲ偲ビテ，只管ナル精進ヲ為シ得タリシナリ。

今ヤ，一ツ橋端艇部ハ日本漕艇界ヲ席捲シ，毅然トシテソノ王座ヲ占ム，然リ，大利根ハ悠久ノ流ヲ湛エ，亡キ先輩ノ霊亦タ端艇部ヲ護リテ，永遠ノ生命ヲ蔵ス。

生等，生ヲ一ツ橋端艇部ニ享ケ，伝統ヲ呼吸シ端艇道ニ精進スル幸福ヲ享受スル者集ヒテ，茲ニ端艇道ニ殉ゼラレシ先輩ヲ偲ビマツルト共ニ，斯ノ道ニ微力ヲ致サムコトヲ誓フ。

冀クバ在天ノ霊，髣髴トシテ来リ享ケヨ。』

追悼法会終了後，晩餐をともにし，別席にて33年前柳川氏指揮のもとに，遭難選手の救済に当たられた木村，秋葉，奥田の3氏より（柳川氏はやむを得ない事情により欠席），当時の生々しい体験談を伺い，また，先輩方からも追悼の想い出話などが語られ，現役の学生一同，感銘を深くしたのであった。また席上，柳川氏への感謝の記念として，エイト・ラダーの置物一式が贈呈された。部報（昭和15年1月1日号）は，この記事の最後に『誠に朱雀遭難の払いし犠牲は，……一大教訓として，端艇部

千歳の史上に不滅の一頁を録するであろう。』と結んでいる。

この法会は，当時の端艇部員たちが，輝かしき２連覇をとげながら，ただ，その勝利を自らの力として誇ることなく，一橋ボートの歴史を尊重し，先輩たちの幾多の苦難と犠牲の上に，今日の栄冠が勝ち取られたことを忘れなかった一つの，明らかな証左ということができよう。

昭和15年

緊迫する時局

日中戦争は，すでに４年目を迎え，前年の９月１日のドイツ軍のポーランド進攻によって，第２次世界大戦の幕が切って落され，戦火は拡大されつつあった。若い四神会員たちも，次々と召集され，また現役入営で北に南に戦場へ駆り出されて行った。そして，それらの人たちの中から悲しい戦死の知らせが，学園や家庭に舞い込むようになって，現役学生たちの心を暗くして行った。学生スポーツの必要資材の入手も，あるいは統制で，あるいは値上がりで，そろそろ受難の時代に入っていったのであった。この年の９月27日には，ついに「日独伊三国同盟」がベルリンで調印され，より大きな戦争への展開の進路が決定された。10月12日には，大政翼賛会が発足し，皇紀2600年の祝賀行事が繰り広げられ「八紘一宇」や「一億一心」という標語が巷に氾濫して，スポーツに限らず，すべての外来語の横文字が敵性文字として禁止された。

新役員の抱負

この年の１月１日発行の部報第15号を見ると，まず上田学長，端艇部長の『皇紀2600年の紀念すべき年を迎へて，学生諸君と共に，前古未曽有の国難を突破して新東亜建設に邁進せん。』という『年頭の辞』を掲げた後に，新しい年の理事，会計幹事，対校主将を始め，H．C．S各主将，予科，専門部の各委員長，各主将の新幹事が，それぞれの抱負を述べている。まず，松井孝夫理事は『昨年は我が端艇部にとって光輝ある１年であった。全日本競漕における連覇の記録は，端艇部の歴史の上に，画期的な重要な１頁を加えたものであり，不滅の金字塔を打建てたものである。創立いらい60有余年の歳月をへてこそ，今日の端艇部が存在するのであり，またその故にこそ歴史があり伝統が生れてきたのである。……永遠の端艇部の一環として現在に呼吸する我々は，先人苦闘の跡を偲び，今日の安逸に堕することなく，この古き歴史と伝統

を有する端艇部の不断の新しい生命を植え付けねばならない。……未曽有の非常時局に際会した皇紀2600年を迎え，今こそ「われ端艇部を愛す，われ一橋を愛す，われ日本を愛す」べき秋である。』と力説している。

また，中村達夫会計幹事は『皇紀2600年は漕艇界にとっては，世界に例のない人工の漕艇専用静水の戸田コース完成の年であり，わが一橋端艇部にとっては，未曽有の3連覇と静水コースにおける世界水準の記録への挑戦の年であることを強調すると共に，小平予科グランド境界における流水タンクと一般学生の体育時間におけるバック台運動を励行せしめることによって，橋人皆漕の実現を期すべき年であって，会計幹事として，これらの目的達成のために，最大限の努力を傾倒する覚悟である。』ことを述べている。

また，この部報には恒例となっている卒業生の所感が述べられているが，その中から，二，三紹介することとしよう。平野昌は『勝った時は嬉しい。負けた時は悲しい。しかし勝ったときは淋しいが，負けたときは悲しいながら，何かしら光明がある。それは勝った時は目標が失われ，負けた時はまだ勝つという目標が残っているからである。人間目標がぼやけると安易に流れる。今の端艇部には少しそういう傾向がないとはいえない。』と忠告している。丸山泰男は『この数年来の学内における反ボート部的風潮と，これらに影響されて，一部々員の端艇部から脱落して行く傾向に対して，一橋端艇部の指導理念を思想的に確立し，部員相互の間にボートを介して，全人間的な理解と友情を深めることが，連覇という外面的な華やかさと共に，端艇部の内面的な充実と団結を高める所以である。』ことを説いている。また外松修一も『端艇部の黄金時代より受ける安逸と空虚に陥ることなきよう，＜全日本制覇＞から＜世界制覇＞へと目標を掲げるべきこと』を主張し，一橋ボートの黄金時代の陰にある，ボート部員の持つもう一つの半面，この緊迫した時局の中での青年としての苦悩の思索や真面目な人生観についての，語り合いの重要であることを指摘している。

専門部卒業の杉本鉄二は『俺は一橋で学問を勉強したとは思っていない。この短い3年間にボートに終始できた事を嬉しく思っている。一橋といえば，国立の壮麗な校舎よりも，まずゴムクラゲや猫の死骸の流れる隅田川が頭に浮ぶ。とにかく川と別れる日も近い。実に淋しくてたまらぬ。たゞ墨堤を一人歩くためだけに，荻窪から電車賃を払ってわざわざやってきたこともあった。任地の神戸からは，そう簡単にくる訳に行かぬから辛い。あゝわが魂の故郷，墨堤よ，さようなら』と別離の感傷を述べている。そして同じ専門部卒の浜昭雄も『隅田川の重い濁った水，放水路の軽い緑色

の水，葦切の鋭い鳴声を聞きながら，水面と葦の影をよぎった真夏の練習，甘酸っぱい秋の日ざしをうけて尾久の悪臭にむせた練習，向島艇庫のバルコニーから制覇の思いに胸おどらせて眺めた浅草の灯。すべては思い出だ。既に去った恋人との思い出を秘めたアルバムを手にした時のようなやるせない感懐が胸にせまるのみである。』と書き記している。

第54回春季競漕大会

毎年のことながら，この年も向島の桜とともに墨堤の春を飾るわが商大のＨＣＳボートレースが，４月14日に挙行された。『朝からの春雨も昼頃には，カラリと晴れて両岸にどっと押しよせた行楽の人々の人気を終日さらった感があった』と一橋新聞（昭和15年４月25日号）は報じている。午前10時，開会式，墨堤を圧する例年好評の閲艇式に次いで，小波一つ見えない絶好のコンディションの川面に，弥次レース，招待レースなどの熱戦が展開された。中でも来賓，三科職員レースでは，上田学長，太刀川学生課長組のおわんボートが，元気一杯に，上原(専)，堀（潮）主事組を破ってヤンヤの喝采を浴びた。呼び物のＨＣＳレースは，第三選手ではＣ組がＳ組を２艇身離して快勝。第二選手はＣ組終始リードを奪って優勝，第一選手もこれまたＣ組スタート好調に飛び出して，艇庫前ではすでにＳ組を軽く１艇身近くリード。白鬚橋を過ぎるやＨＳの猛烈な２位争いとなり，ＣＨＳの順でゴールイン。Ｃは宿敵Ｈを撃破して５年振りに全勝を記録した。

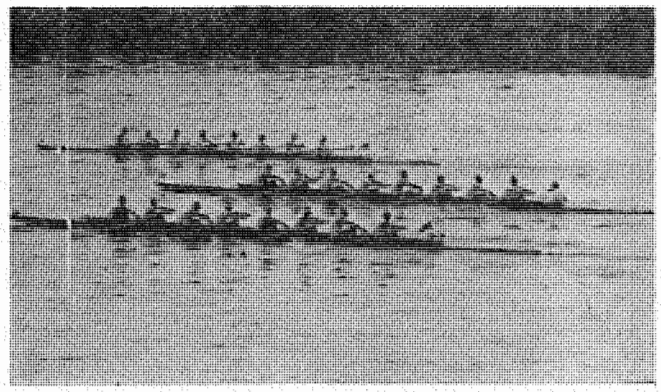
上田学長部長の急逝

この４月14日春の大会から１カ月もたたない５月８日に，大会にお元気な姿を見せておられた上田学長端艇部長が急逝された。この意外の悲報が学内に伝わるや，各方面に大さな衝撃を与えたために，５月12日予定の予科記念祭も中止，端艇部にとっても，先に戸田コース敷地購入について，いち早く決定を下し，また艇庫建設についても，直ちに予算を用意されるなどの措置をとられた矢先であり，その急逝を心から悼んだのであった。上田学長急逝後，日ならずして５月25日に，高瀬荘太郎教授が学長に就任された。そこで端艇部としては，後任部長について四神会と学生側で協議の結果，全員一致で新学長高瀬先生に第８代端艇部長をお願いすることに決定を見た。幸いにして，高瀬学長のご快諾を得たので，７月18日に，如水会館において，高瀬新部長推戴式を四神会，端艇部合同主催のもとに挙行したのであった。

高瀬新部長の就任

会するもの四神会員，学生部員併せて50余名。松井理事，窪川四郎先輩，高垣元部長，太刀川学生課長，河合専門部端艇部長などの挨拶の後，高瀬新部長立って『古き歴史と伝統をもち，一橋のリーダーシップをとる端艇部の部長となることは光栄である。自分はボートについては素人であるが，今まで陸上競技の部長をしてきた関係で，スポーツには理解あるつもりである。幸いにしてまだ年が若いから今後長く端艇部長として努力する。』旨の力強い就任の辞が述べられた。推戴式終了後，別席にて，まず目下酷暑を物ともせず，3連覇を目指し，炎天のもと墨堤に黙々と猛練習を続ける対校選手が紹介され，一人一人真っ黒に陽灼けした顔に，はち切れんばかりの元気を溢れさせて立上がる。次いで，柵山（広松）コーチ立って，烈々たる気迫のこもった抱負を吐露して，3連覇の確実たることを期待させたのである。そして，四神会幹事の近藤勝重（昭13学卒）から，いよいよ本年11月の全日本選手権レースを期して使用される予定の戸田静水コースの状況説明ならびに本学艇庫敷地購入経過の説明が行われた。また，学生大西重則前会計幹事から，向島艇庫の地盤沈下によって，満潮時には船台が水没し，3階建てのタワーもかすかに傾斜して，早晩使用不能となり，艇庫の戸田コースへの移転が必要不可欠である旨説明があって，さらにこの具体的建築プランも説明して，高瀬新端艇部長のご理解とご尽力をお願いし，そのご諒承を得た。最後に高瀬新部長のご発声で一橋端艇部の万歳を三唱して散会した。

これより先，5月25，26の両日，向島1,000mコースで開かれた海軍協会，東京日日新聞共催の第35回海軍記念日端艇競技大会において，わが全一橋クルーは，エイト，フォアの両種目に出漕。いずれも決勝戦まで勝ち残り，まずエイトは，全三田，二高の両クルーにそれぞれ1艇身の差を付けて優勝し，フォアも東大に2艇身差で快勝した。そして6月5日には，早くも一橋会定期総会の後で，一橋会理事会主催による全一橋ボート応援団結成式が，兼松講堂で意気高らかに挙行されたのであった。また，春の大会の後，直ちに編成にかかり，4月29日より合宿練習を開始した専門部クル



海軍大臣杯レース優勝　手前から一高，慶大，商大専

ーは，２名の強力選手を全一橋対校エイトに送り出しながら『対校何するものぞ断じて対校を抜かずば止まず』の専門部独特の闘志に燃えて練習を行っていた。まず，６月29日の第10回定期予科専門部レースでは½艇身の小差とはいえ，予科を血祭りに上げて，意気正に天を突くものがあった。高瀬新部長就任の同じ７月18日には，端艇部の先輩故各務鎌吉氏からの遺言による多額の端艇部へのご寄附によって新造された青龍(H)，白虎(C)，朱雀(S)の３隻の新固定席艇の命名進水式が挙行された。

第２回高専レース

この進水式から１カ月後の８月18日には，昨年から始められた第２回高専レースが，尾久2,000m直線コースで開かれた。専門部クルーは，この晴れの日のために，猛練習を続けてきたが，レースの１週間前に選手の故障があって，対校クルーの柵山コーチならびに石川主将の特別の好意で，専門部出身の波立一二三選手を一時専門部クルーに貸してもらい，その艇速に大いに自信を深めていた。さて，当日のレースの経過を如水会報（10月号）の長谷川主将の記事でたどって見よう。『天既に我れの優勝を祝するか，当日は一天雲なく日本晴れのボート日和，クルー全員絶好のコンディション，艇またよく伸びて快く午前の練習を終えた。レースは午後１時半準決勝，そして決勝は５時。１時10分郵船艇庫より艇を出さんとすれば，舳手のララックが折れたとのこと，止むなく一高の艇庫でララックを借りて取りつける。ためにおくれて１時40分出艇（すでにスタート時間に10分遅れ），しかしブレードは水にねっとりと粘りつき，艇はすいすいと伸びる。一本漕ぎに移って２，３本漕ぎ出したところ，ガタッというショック。今度は２番のララックが折れたとのこと。万事休す。炎天の中を40分もスタートを待っている大倉をこれ以上待たすのは，ボートメンとして出来得ざること。一高艇庫に引っ返し，コーチに語るも涙の中，先輩や部員に語るも涙，ついに専門部クルーは第２回全国高専に棄権した。我々の身を思い，奮闘を期待して下さる諸先輩，わざわざ尾久にまで来て下さって応援を惜しまれない上原専門部主事，河合部長その他の諸先生，並びに同人諸兄。嗚乎.／涙.／』と記している。専門部クルーの度重なる不運の続出で，あたら優勝の機会を逃したことは，まことに惜しみて余りあるものがあったといえよう。

尾久レガッタと第20回関東インター・カレッジ

さて，昨年11月に編成された全一橋対校選手は，長期の計画的練習を積み重ね，

1,000m レースとはいえ，5月26日の海軍レースでも優勝し，また8月25日の尾久レースにおいても，慶大に4艇身，東大に1艇身⅓，明大に2艇身強の差をもって，群雄をなぎ倒し，来たる9月14，15の両日に関東インター・カレッジにおいても，3連覇はほぼ確実とみなされていた。(一橋新聞9月10日号)

9月14日の第1日目は，拓大と対戦，大差で勝ち，第2日目の翌15日は，一面穏やかで天気晴朗，加えて順風という申し分のないコンディション。宿敵東大は1コース，本学は2コースと決まる。以下対校主将石原善二郎の手記（如水会報昭和15年10月号）によってレース経過をみることとする。

『午前10時40分，1瞬旗が閃いて猛然とスタート。本学はどうも飛び出しの鮮かさを欠く。敵は猛烈なハイピッチで，必死にわれの出足を抑える。吾はダッシュ終ってコンスタントに入るも，敵は依然ハイピッチのダッシュを続けて1歩も譲らず，1本1本これを追いぬかんとするも，敵艇僅かにリード，抜こう抜こうと気ばかりあせり，吾のスパート効を奏せず，1,000m にかかって，力漕に次ぐ力漕を以てしても，僅かに喰いこむのみ。最後の 500m の死漕も力つきては如何せん。暫時，激しい呼吸に喘ぎつつ茫然として為す所を知らず，審判艇の宣言を聞き，始めて敗戦に気付く。無念.／3連覇は夢かと考えただけで総身に粟を生じ，失意の涙は両頬を伝わり，「畜生ーッ./」と臓腑を貫く悲痛の叫びに吾々は男泣きに泣きました。涙にぬれた瞼の奥から，故上田先生の御尊顔や多数の先輩の方々のお顔またお顔に入り乱れて応援団の打振る赤旗の波がはっきりと浮び上って，吾々の心を千々に打砕くのでした。』と悲痛な惜敗（艇差カンバス）の模様を書きつづっている。舵手の岡村俊夫もまた『船台につけるとき応援団の＜長煙遠く＞が我々の肺腑をえぐる。なんのかんばせあって同人にまみえん./　艇を納むるや艇にすがってわっと泣き出す。』と部報に記している。しかし，石原主将以下敗因については，冷静かつ十分に反省しつつも，『敗戦は敗戦として，更に新しい好機の為に雄々しく再出発を決意した』と語り，その好機は，1ヵ月半後に迫った世界一の戸田静水コース開きの第1回全日本選手権（神宮レース）であり，『必ずや一橋の名誉にかけて来るべき日の雪辱を確信する』と力強い言葉を述べている。

南に北に出征した先輩たちからも，3連覇の吉報を胸おどらせて待望していただけに，続々と向島に，慰撫激励の書信や電報が届けられた。南中国の海南島のジャングルに駐屯する独立警備隊長の伊藤治雄からは，『南支に出征以来1年半にして味わう最大の悲哀だ。帝大や一高（決勝で帝大に勝って初制覇）に3連覇をはばまれたこと

は，何といっても口惜しいが，彼等に対する自信だけは持続してくれ，そして捲土重来を期してくれ』と書き届け，また，北満のハルピンに駐屯する奥野浩爾は，兵営の廊下に掛けられていた新聞の「一高初の制覇」という記事を見て，『自分の目を疑った。まさかと一度は否定もする気持だった。そして何ともいゝようのない失望感に襲われた。……レースという奴は，たとえ最初のボタンを掛け違えても，最後のボタンまではめて了わなければならない。間違いに対する処理能力を身につけよ。万人待望の平水戸田コースでの死闘を願ってやまない。』と激励している。安藤博先輩（明38卒）もまた，『ラクタンセヌ　トダコースニテカイフクデキル　アンド』という電文を寄せてこられた。

ところで，関東インター・カレッジには間に合わなかったが，昭和12年５月30日に起工式をあげた戸田静水コースは，３年半近い歳月を費やして，この年の10月23日にようやく完成して，盛大な入水式を挙行した。戸田コースでの雪辱を期する対校選手は，関東インター・カレッジ１週間後の９月23日から，本科生のみ10人（予科，専門部の選手は学期試験後に参加）で合宿練習を開始した。試験後，対校はエイト，フォアの２クルー，これに専門部エイトを加えて，商大からは，３クルーが出漕することとなった。10月28日までは向島で練習し，29日からは初めて完成なった戸田静水コースにボートを浮かべて猛練習を開始した。一橋ボート60年にわたるボートの歴史で，流水になれてきた選手たちが，初めて静水でオールを漕ぐという体験をした訳である。彼等がまず驚いたことは，今までの川幅の広いところから，狭いポンドに移って，エイトの艇速がいかに速いものであるかを実感したことであった。そしてまたブレードに引っかかる水が，流水とは違って，ずっしりと重い十二分に手ごたえのある圧力となることであった。こうして，まだ十分にこの初めての静水コースになれないうちに，11月２日の大会第１日を迎えたのであった。

戸田静水コースの初制覇

「皇紀2600年奉祝」の明治神宮大会の全日本選手権レースが，新装なった戸田コースにおける最初のレースとして，11月２日，３日の両日に亘って挙行された。第１日の予選では，フォアは明大を退けて７分55秒。エイトは第一早高，日本医大を大差で破り，６分58秒。タイムは従来の流水換算タイムに比べて驚くほど悪い。専門部は惜しくも慶大に敗退，対校クルーに兄たり難く，弟たり難いといわれてきた専門部が，くじ運悪く強豪慶大に勝を譲って，第１日目に退かざるを得なかった。ただ予科新人

(1年生)フィックスが善戦して，翌日の決勝に残ることとなった。そして明くる3日「明治の佳節」先輩満鉄クルーの主将有ケ谷英男(昭11門卒)捧持の神宮体育大会聖恩旗を仰ぎ，東京からバスで押し掛ける観客20,000人。一点の雲もなく秋空は晴れ渡り，コース水面は向島や尾久のように波を蹴立てる船の往来もなく静まりかえっている。この日の決勝の相手は，慶大と明大。1コースから明大，商大，慶大の順。定刻午後2時，号砲と同時に，24人のオールが一斉に水しぶきを上げてスタート。セトルダウンして慶大にカンバスリード，明大とは並行。500mでタイムは1分28秒半，『500で1分30秒を切ったぞ』と岡村コックスがどなる。バウフォアからは『ようし，この調子』という声が返ってくる。700mで力漕1発，明大が止まったようにストンと置いて行かれる。慶大との差1艇身強。1,200m明大は横に見えなくなるが，3コースの慶大が必死になって追いすがってくる。わが力漕効き目なく，1,400mで慶大との差は⅓艇身からカンバス，あわや抜きかえされそうな気配。応援団の『アカー，アカー』『商大，商大ガンバレ』の声援がガンガン聞える。静水の重いブレードで体力はもはや限界。ただ，ただ死に物狂いの力漕の応酬。ついにもうろうとした意識のうちに，ゴールの旗がさっと下りた。差はわずかにカンバス，商大寸時早くゴールイン。『勝った！勝った！』しかし，タイムはと聞けば，6分48秒。『畜生！　悪過ぎる！』6分10秒台の当時の世界水準を目指していたのに，余りにも差があり過ぎる。しかし，ともかくわが国初めての戸田静水コースにおける最初の公式記録を，わが商大クルーがマークしたのであった。関東インター・カレッジで流した苦い涙は，喜びの笑顔に変わった。これでレース1週間前に，軍務で野営地に赴かれていた柵山（広松）軍服コーチにも報いることができたのである。

対校フォアの優勝

一方，このエイトレースの15分後に行われたフォアレースの決勝は，京城工業，日医大，商大，慶大のコース順でスタートした。商大は，800mで慶大に2艇身，日医大に3艇身の差を付け，京城は競争圏外。しかし，1,500mで慶大力漕して少し差を詰めたが，ゴールでは艇差1艇身で商大優勝。タイム7分45秒という成績であった。こうして，インター・カレッジでの3連覇の夢は破れ去ったものの，また，東大，一高が不出場であったとはいえ，昭和15年の締めくくりを，戸田コースのエイト，フォア両種目の初制覇で飾ることができた。

であればこそ，この年の年末発行の部報「祝勝号」は，第1頁に「全一橋の誇」と

題する高瀬荘太郎端艇部長の祝辞を掲載している。その祝辞の一節をここに引用して見よう。『部を愛する気持は即ち部の伝統を愛する気持であり，部の伝統を愛する気持は，即ち一橋の伝統を愛する気持である。光輝ある伝統を守り育てる心こそ，部を愛し一橋を愛する心であり，一橋精神の根源である。学園内外の全一橋人を血に繋がる家族の如く固く結びつけているものも，また一橋の伝統に他ならない。この意味に於て一橋端艇部この度の優勝が，一橋伝統の勝利として，又一橋精神の発揚として，全一橋人の喜びと誇を齎したことを衷心から慶祝して止まない次第である。』

ただこの昭和15年は，松井孝夫理事もいうように一橋端艇部にとって「呪われた年」であった。高専レースでの専門部の棄権，予科選手の発病による合宿解散，対校クルーのインター・カレッジ惜敗。しかしこの年最後の機会に，何とか新しい出発への基礎を築くことができた。松井理事は，部報で「新しい道」という一文を書いており，中川英造先輩は，一橋新聞の11月10日号に「端艇部の再出発」なる「運動時評」を寄稿している。中川氏は，まず，インター・カレッジにおける敗因として，当時クルーが最も低調にあったが，そうした『調子の波を征服するだけの実力をもたなかったこと』と『スタートに定刻より遅れてついたため，呼吸を整えるいとまもなくスタートの号令が下り，出鼻をくじかれてしまったこと』の二つをあげている。また，従来の流水コースにおける平水換算タイムが非常に甘いものであって，静水におけるわが国の漕艇界のレベルは，世界水準から相当遅れたものであることを明確に直視し，もう一度静水における漕法や練習方法を根本から再検討し，当面６分30秒を目標にして再出発すべきことを強調している。３年振りに戦地から故国日本に帰ってきた木村大三先輩もまた部報で，「死水」デッド・ウォーターへの画期的な挑戦のために，従来の漕法や経験が必ずしも妥当しない面があることを指摘して，「コーチ絶対主義よりもセルフコーチ主義へ」「漕法の無政府的混乱や盲目的精神論を排して，科学的合理的一橋漕法を確立すべし」と二つのことを提唱している。

また「戸田優勝と今後」（部報）と題する一文で，君塚茂太郎先輩（大11攻卒）は，勝敗のみにこだわるべきでなく，「端艇道そのもの」の意義を把握することの大切さに触れ，『ボートほど単純にみえて，複雑なスポーツはない，クルーの一人一人が「渾然一体」となって各自のベストをつくすのがボートの真髄であり，醍醐味である。一艇の一体感は，端艇部の一体感へ，そして全校の一体化へと進んで行かなければならぬ。学生生徒の数や体格からいって，わが一橋に優る学校は少くない。今後この静水コースでのローイングに対して，平々凡々たる態度でのぞんでいたのでは，とても勝てな

い。体力が不足なら，造艇の研究でこれを補う。造艇が劣るなら漕法で一進歩を考えよう。更に練習量に於ては，何処にも引けをとるまい。かくてこそ一橋永年の栄誉を維持し』得ることを力説している。このように一橋端艇部の先輩たちは，戦地であれ，職場であれ，片時も一橋のボートのことを忘れることがなかった。負ければ，その労苦をねぎらって，温かく慰め励まし，勝てば勝ったで，厳しい苦言や忠告を浴びせて反省を促し，より一層の精進を求めるという気風がよく現れていた。

小平流水タンクの落成

一橋新聞や部報で今まで何回か報導されていた小平の予科グランドの南端に建設中の流水タンクは，仮工事ながら一応の完成を見たので，11月26日に関係者一同および多数の予科生参列の下に盛大な落成式を挙行した。当時の部報によれば，『午後3時40分，はるばる向島から招いた牛島神社神官の修祓のあと，関係者の挨拶や祝辞が述べられ，いよいよ岡村コックスの号令一下，万雷の如き拍手のうちに，真紅のブレードに6つの穴をうがった新しい10本のオールが，心地よい音を立て水しぶきを上げて一斉に動きだす。感激の一瞬である。想えば学校が国立に，石神井に，小平に移転して以来，部員一同の水に対する憧れは如何に大きかったか。何とかして近くに水が欲しい，学校の近くにオールを執る場所が欲しいというのが，全部員の心からなる念願であった。』あるいは多摩川へ艇庫を建設する計画のための向島から多摩川までのペアによる遠漕（中川英造氏学生時代），あるいは赤羽艇庫の仮設，あるいは村山貯水池や井の頭公園の池の使用許可への運動など，すべて不成功に終わった。ところが，強制入寮制になった予科寮の近くのグランドの南端に，ボート部員のみならず，一般予科生やあるいは専門部学生にも使用できる試漕台ができるとあって，学園内の一般の強い関心が寄せられていたのである。

試漕式の後，タンクを語る座談会が石田智郎建設委員の司会で行われた。石田委員によれば，専門部端艇部長の河合先生が，この工事の実地調査，箱根土地㈱との交渉，小平地元農民，水利組合，村役場に百回以上も足を運ばれ，このタンク工事の設計，施工（一部予科ボート部員の勤労奉仕）の指導監督に当たられた。河合部長はこの工事の経過説明として，この計画は，昭和13年，当時端艇部の理事であった丸山泰男君から何とかしてこの流れを使って試漕台を作りたいと仲々熱心な相談をうけたのがきっかけとなって，各方面に働きかけ，各種の難関を打破して，今日に至ったが，またこれからいくたの試験を行って本工事にもって行きたい』と述べられた。谷小平村長も

『学生の体育には十分理解をもっている心算ではあるが，当初は村民や村会議員の反対が強かったが，河合先生の頭の下る熱意に動かされて，ようやく反対の人々を説得することができた。今後も援助を惜しまない。』と力強い発言があった。かつて石神井にも同様のタンクを建設したことがあったが，流水でないために十分な効果を発揮することなく，小平への移転となった。またこの小平タンク建設資金の一部は，故各務謙吉氏の浄財の一部が充当された。この自然流水を利用したタンクの建造計画は，戸田コースにおける初制覇と並んで，一橋端艇部に新生面を開くものと考えられたのである。しかし，これだけの努力と一般の関心を集めた有意義なタンクの完成と活用も，その後の戦局の熾烈化に伴って，中断されてしまったことは，まことに残念であったといわざるを得ない。

端艇部会計の実態

ところでこうした当時のボート部の華々しい活躍を経済的に支えた先輩やバックメンたちの大きな努力も忘れてはならない。当時の一橋端艇部の会計収支について簡単に触れておくことにしたい。部報第18号(祝勝号)に，「先輩御寄附金6,600円を突破す」という見出しで，当時の中村達夫会計幹事が先輩諸賢への感謝状を掲載している。その中で『去る7月本年度対校選手練習費補助の意味にて例年のご寄附お願申上候処，内地は勿論，遠く満州，支那，南洋，印度等からも陸続として御援助被下，只今までに到達致したる額は，6,625円98銭の未曽有の高額を示し，部員一同深く感謝致居候』とある。しかし，この先輩寄附金は，対校選手のためのものに限られており，当時の端艇部の会計は，ＨＣＳそれぞれに，さらに，予科，専門部と別れていたので，今その全体の収支規模を明らかにすることは難しい。

ちなみに，昭和14年度の対校選手の練習補助の収支規模は，6,472円19銭であり，そのうち先輩寄附は，5,658円80銭となっているが，その他に全日本優勝による関西如水会3支部の特別寄附100円があった。

しかしＨＣＳ各組の収支をみると，昭和14年度のＣ組が748円，昭和15年度のＨ組が1,012円という記録がある。また，昭和13年度の専門部端艇部の収支決算が1,943円という記録もある。これらから類推すると，昭和15年当時の端艇部全体の収支会計の規模は，優に10,000円を超えていたと見ることができる。今日の物価に換算すれば，約2,000万円～2,500万円ということになるであろうか。また，先輩寄附の合計額は，総収入のうち8,500円～8,600円ぐらいと推定され，同様に今の物価でみれば，1,700万

円以上ということになるが，これらは，もちろん個人の一時寄附金であって，現在のような月額会費制ではなかった。また当時，一橋会の予算割当では，ボート部は運動部関係予算の30%近くを割当てられていた。）

当時の大口の個人寄附としては，1口100円という多額の寄附者として，毎年平生釟三郎の名前が上がっている。また，50円口としては，増田寿一郎，深尾隆太郎などがあり，30円口，20円口としては，三谷一二，庄司乙吉，内田信也，安宅彌吉，石田礼助，上野十蔵，貝島太市，岩崎恒彌，中島久万吉などの有力な財界諸氏の名前が上がっている。もちろん，50銭や1円という小額の寄附も集めた訳であるが，例えば，日本郵船如水会210円とか，如水会上海支部150円というように，職場や支部で一括しているので，何人の先輩から集められたかは定かでないが，優に3,000人は超えていたものと推定される。しかも，職場や支部で熱心な先輩が，如水会員であれば，誰彼をとわず寄附をお願いして集金をし，わざわざ送金してくれたというような状況であった。しかし，これだけの資金を集めるために，学生たちも相当の努力をした。関西方面はもちろんのこと，時に満州や中国の大陸にまで足を伸ばして，集金旅行に行ったこともあった。

春季ＨＣＳ校内大会が終わると，ボートに乗らないバックメンたちは，手分けして，横浜，名古屋，大阪，京都，神戸，福岡の各地に飛び，先輩の家に泊めていただき，酷暑をものともせず，名簿カードをもって，先輩たちの勤務先を歴訪して歩いたものである。先輩たちも母校から学生が，はるばる訪ねてきたとあって，中には昼食をご馳走してくれて，母校ボート部の状況の説明を受けるなど，まことに古きよき時代であったといえる。また先輩たちも，各地に四神会の支部を作って，当時戦線から帰還した会員を囲んで，経験談や追想談を交わして，ボートで結ばれた友情を確かめあっていたのである。何れにせよ，戦前のわがボート部は，財政的に極めて恵まれた状況にあったということができよう。かくしてボート部員の真面目な団結心と，先輩の四神会員の温かい後援に支えられていたわが一橋端艇部は，その輝かしい黄金時代から，次の暗い苦難の戦争時代へと移行していったのである。

第8期　戦　争　時　代　(昭和16～20年)

概　　説

この時代は，ボートマンにとっては戦争と受難の時期であった。日中戦争は収拾がつかぬまでに拡大し，対米英戦争必至とみた軍部官僚は戦争準備に狂奔し，次第次第にその圧力を強め，“非常時”“新体制”の標語の下に，学園内にも国家主義教育と戦時体制の確立を公然と要求するようになった。

この趨勢に逆らうことはできず，本学は伝統ある社団法人一橋会を解散し，これに代えて本科，予科，専門部に，それぞれ報国団を結成した。このため，運動各部は報国団中の鍛練部に包含されることとなり，端艇部は各報国団の「端艇班」と呼称を変更して従来の部活動を継続することとなった。

組織替えはしたが，本科，予科，専門部の各端艇班は強固に団結して端艇部の事業を推進し，苛烈な戦局下といえども一貫して，よく三位一体の実を発揮した。

しかしながら，端艇班新発足の年，昭和16年12月８日，日本は太平洋戦争に突入し，全一橋端艇部の前途は暗転した。生き残らんがために否応無く端艇班は苦難と沈潜の時代に引きずり込まれて行った。軍需産業は猫の手も借りたいほどの労働力の不足下，学徒は学ぶより働けとばかりに勤労動員に駆り立てられ，漕ぐ暇は徐々に縮少されて行く。

相撲が国技なればボートは校技なりと新入生の入部を勧誘はしたが，年々入部者は少なくなり，資器材の不足と，ことに食糧難は選手の合宿練習に大きな影響を与えた。練習中に穀潰(ごくつぶ)し呼ばわりされ，川岸から石を投げられるに至っては，幾ら我慢の子ボートマンも“馬鹿になって”漕ぎ続けることが苦しくなるのみならず，漕ぐことに疑念を抱き，折角入部しながらも脱落して行く者が出始め，班幹事はその阻止に奔走しなければならなかった。その上，ボートは勝つことにあると叫びながらも，対外レースでは打ち続き敗退し，ついに予科ではクラスチャンや応援団の無用論者が蜂起するに至っては，もはや端艇部の全学的な地盤沈下は否定することはできなかった。

しかし，わが端艇部は四囲を暗雲に閉じ込められたままではない。昭和17年11月，明治神宮大会に出漕した全一橋フォアが優勝した。漕手のうち３人までが新人なが

ら，フォアは決勝において稲門，早大，東大を押さえて堂々優勝し，“劃然一橋は力強く荊棘の途を拓き始めた”かの観があった。

時を同じくして，中山伊知郎教授の第9代端艇部長推戴がある。“一橋精神の生れ育てられ伸び行くところは端艇生活である”と叫ばれた就任の辞は，沈滞するボート部員の心に活力を注入し，先輩も部員もこぞって“此の上なき名部長を迎えた”と心から喜び，御就任を歓迎した。

さらに，翌18年7月，海の記念日レースに出漕した専門部クルーは，意外にも日大を押さえて優勝した。本命の高専レースを数日後に控えて小手調べに参加したレースであった。小レースに勝ったとて慢心するなと先輩たちはクルーに冷水を浴びせたが，これが何と，本学にとって戦時中最後の対外レースとなろうとは。専門部クルーは，正に有終の美を成した訳である。

このような暗澹たる時代に我々の心を明るくさせたことがもう一つある。対校と専門部の用艇となる新艇“香取”“八紘”の進水（昭和18年5月末）があった。両艇ともボートをこよなく愛する諸先輩の真心の結晶である。

“このような差し迫った時期にかかわらず新艇を建造した意義を忘れることなく輝かしい道を歩もう”と，進水式当日諭された山口茂先生の言葉が忘れられない。他校には見られない，わがボート部先輩との縦の心の繋り，力強く温かい援助はこのような差し迫った時期にも，ほのぼのと明るく美しい花2輪を咲かせてくれたのであった。

戦争苛烈となるころ，“端艇道”というテーマが論議されかつ，“一橋端艇道”と称する冊子も発刊された。それらの論点をみると，「端艇道とはモラリッシュエネルギーなり」とか，また，「一橋精神即ち，キャプテンノブインダストリーの精神こそ端艇部なり」などの定義づけが述べられた。打続くレースの敗退，漕ぎ続けることへの幾多の障害，食糧の不足，さらに，戦時中という時局の重圧に耐えかねて，“吾人屁理屈を知らず，馬鹿になって漕げ”と教えられたボートマンといえども，心のより所を求めて暗中模索せざるを得なかった。しかし，論議は論議として，ボートマンの求めた端艇道とは，漕ぎながら体得する行動の哲学，実践の哲理であり，宗教者の求道の姿でもあったといい得ようか。

ともあれ戦時下のため，物資不足，すでに底をつき，合宿も困難となった。さらに文部省当局は高専レースの中止，学徒体育大会の一切禁止という厳しい政策を打ち出してきた。これまで苦心しながらも遂行してきた端艇部の事業も，これ以上の継続はほとんど不可能と判断せざるを得なくなり，諸先輩が築いて来た光輝ある伝統の一橋

端艇部を，今後どのように維持継続してゆくかと部員一同が懊悩したとき，突如として政府は徴兵猶予の停止を発表した。すなわち学生も待ったなしで徴兵されることになったのであった。

時代の大きな流れを，一橋端艇部のみが独り立ち阻むことはできない。部活動をここで一切終息し，ボートマンはオール取る手に勇躍銃を取って第一線に出動することとなったのである。

昭和16年

前にも述べたように，昭和16年２月11日，社団法人一橋会は，文部省当局の指導により解散し，新たに一橋学部報国団・一橋予科報国団および一橋専門部報国団が誕生した。報国団新編成の目的は，現下の急務たる高度国防国家建設の一翼を担わんとする学生活動理念の変革にあり，端艇部は各報国団の端艇班となって，心身の練成に励むこととなった。

第55回春季競漕大会

新たに発足した端艇班の最初の行事は，新装の戸田コースで４月13日開催した第55回春季競漕大会であった。前年まで向島で開催されていた春季大会を，思い切って戸田に移したのは，静水コース時代に，本学のボートメンを少しでも早く慣れさせるためであった。しかし，当時の戸田漕艇場には選手の合宿所がなく，各組選手はそれぞれ戸田村の農家に分宿したが，戸田に艇庫がないということは，各組選手の精神を継承し，かつ，これを育成して行く上に支障をきたし，さらに意外な経費増をもたらす結果となった。

しかし，各選手・バックメンの一致協力のおかげで，大会は成功裡に挙行できた。本大会の第一選手優勝者はＨ組，第二選手はＳ組，第三選手はＨ組であった。

海軍記念日レースと夏季小会

意義ある催しの一つとして，毎年初夏の墨堤をにぎわして来た端艇競技大会は，本年からは名も水上練成大会と改め，５月25日，折からの豪雨を衝いて，隅田川向島コースで挙行された。本学からもフォアならびにエイトに全一橋，エイトに専門部クルーが出漕したが，意外にも両者とも準決勝で敗れ去った。

また夏季小会としての予科対専門部新人対抗レースは，本年度は7月30日向島コースで開催し，専門部クルーが大差で勝った。

このころヨーロッパにおいて，ドイツ軍がソ連への攻撃を開始し宣戦を布告，アメリカは在米日本資産を凍結，わが国では近衛内閣が軍部に抗し切れず総辞職等々，東西の緊張は高まり戦雲は急を告げる事態となり，若き日を誠実に生きようとする一橋人は，スポーツと学問を両立させる道を求めて悩まざるを得なかった。ボートでよくいう「馬鹿になれ」ない時代となってきた。

全国高専競漕大会

8月26日，新装成った戸田コースで全国高専競漕大会が挙行されることとなり，予科と専門部両クルーは戸田漕艇場で合宿を続けていた。

ところが，8月16日，突如，戸田コースの使用が禁止された。兵士がやって来て，「軍は，戸田コースおよびその周辺を占領，コースの使用を禁止する」と。すでに，50日余の合宿を重ね，レースをあと旬日に控えたクルーたちは，呆然とした。

やむなく両クルーは，艇を水門の外に運んで向島へ漕ぎ下って行ったのであった。

高専レースは，8月28日，尾久コースで行われた。処女出漕の予科クルーは，1回戦で東京外語を破り，2回戦で大倉高商に勝ち，決勝戦で慶大予科と戦った。コース運が悪く苦戦だった。ラスト200 mあたりで慶応の舳手が大きく腹を切り，あわやと思われたが，予科は逆カンバスの差で敗れた。専門部もこの慶大予科と準決勝でならべて敗れ去った。

関東学生選手権大会

全日本学生選手権レースに代わる関東学生選手権大会は，9月6日・7日，尾久コースを使用して開催された。前年9月6日・7日，全日本漕艇ファンの予想を裏切って東大に準決勝で一敗地にまみれ，端艇の覇者「一橋」の前途に一抹の不安を投げかけていた全一橋クルーは，捲土重来の意気高く7月1日以来艇庫に合宿，本年は先輩の寄付金で建造した新艇で本競漕に臨まんと鋭意修練を積んだ。

その結果は，第一予選で慶大を退け，第二予選で拓大に勝ち抜いてきたが，無念にも準決勝において再び東大（優勝）に⅔艇身の差で惜敗した。

神宮レース

11月3日，用艇は6人漕固定席艇で，例年どおり予科・専門部両クルーが参加した。予科は六高に敗れたが，専門部は決勝まで勝ち進んだ。しかし，ダークホース横専（横浜高等商業専門学校）に敗退し，涙を呑んだ。

12月8日，日本軍はハワイ真珠湾を奇襲し，米英両国に宣戦を布告，太平洋戦争に突入した。国内はすべて戦時体制となり，学園では戦時臨時措置の実施に伴い，12月27日，繰り上げ卒業者を送り出すこととなった。

全学園が臨戦体制を敷かなければならなくなり，ボートマンの部生活にも物心両面からの制約が，徐々に滲透し始めた。

昭和17年

第56回春季競漕大会

前年度戸田漕艇場で経験した種々の障害を考え，再び本年は向島艇庫を本部として，4月5日，盛大に挙行された。連日の汗ばむほどの春暖も，当日はやや低温で，しかも，かなりの風が吹き，コンディションは上乗とはいえなかったが，伝統ある大会だけに行楽の人々がどっと押し寄せたので，まさに人気を一手に集めた観があった。

コースは，第一選手3,000m（言問〜鐘ケ淵），第二選手2,000m（クリンカー），第三選手1,100m（フォア），レースは第三選手はS組が1着，次いでH，Cの順。第二選手競漕はH組が勝ち，S，Cの順。第一選手競漕は断然優勝との呼び声の高かったH組が堂々ゴールイン，輝く制覇をなし遂げた。2着はS組であった。

全国大学高専競漕大会

6月6日・7日の両日にわたって，戸田漕艇場で行われた。熱烈な応援もむなしく，全一橋の雪辱成らず——。大会第1日エイト予選は，一橋，東大，早大，明大，慶大，工大，日大，拓大，文理大および外語，大倉，同志社の各クルーが参加，熱戦を展開した。

過去2年間の惜敗を，ここで一気に挽回せんものと，全一橋クルーは数旬にわたる修練を続け，一方，予科・専門部は全学生をもって応援団を結成し，赤地にマーキュリーの旗を打ち振り応援したが，武運つたなく第一予選で早大に2艇身の差で敗れ，敗者復活戦においては敢闘の末，日大に半艇身まで食い下がったが，ゴール直前の力漕利かず，ついに惨敗——かくて一橋ボートメンの悩みの時代に入った。

加うるに時局の推移は，端艇班の行事にますます困難と支障とをもたらしたのみでなく，優勝黄金の時代は槿花一朝の夢と化し，端艇班は至難な時代を迎えることとなった。クルーの活力は華々しい伝統にあると信じて，伝統がすべてを解決し伝統によって艇が走ると信じているのではないかと，警鐘を打ち鳴らすボートマンも現れた。

本年度予科対専門部新人対抗レースは，6月13日向島コースで開催，前年に引き続き専門部が快勝した。

第4回全国高専競漕大会

8月2日，戸田コースにおいて参加校5校の間で行われた。予科・専門部両クルーは，一橋の双璧として決勝に挑んだ。

一橋の栄誉を双肩にかけ懸命に励んだ苦闘80日の合宿練習，準備万全と見られたが予科クルーはレース3日前に病人が出るなど，思わぬ支障もあって，予選において，確実なオールを引く外語に敗れた。専門部は予選で早大専，慶大予科に4艇身の差で快勝したが，決勝で外語に1艇身差で敗退――“墨田随一の艇足”は，無念，大言壮語の夢と消えた。

孜々営々たる努力も実を結ばず，悲運の年も過ぎた。かつて尾久に，また戸田に輝かしい勝利の記録を印した艇友のほとんどすべてが，学業短縮に伴い，早くも9月には懐かしの艇庫を去って行った。

8月4日，艇庫で挙行した班幹部交替式の挨拶には“一橋の意気の原動力はボート部にあり，端艇部は一橋の道義的生命力たれ”と叫ばれたが，打ち続く惨敗で沈滞したボートメンの心に活気を取り戻させることは困難であった。

部報第24号の記事の一部を抜粋してみよう。

『思へば負け続けた3ケ年，でも卒業ともなれば俺の様な奴でも人情として懐旧と哀惜の感に堪へない。私はあのどちらかと云へば泥濁りの汚い川の上に何か得るところがあった。沈黙の国立の杜から電車に揺られ乍ら雑多な狂躁の東京の街を抜けて濃緑の彼方に艇庫を見出し，懐かしい川の香りに接した時，ホッとした様な云ひ知れぬ慰安と安堵の気持になれるのも，そこに私をそうさせる何ものかゞあるからだ。

私はよくバルコニーに立って，蝙蝠が逆さまに飛ぶ黄昏の靄の中に，あのべっとりとした膠の表面に油を流した様な覚束ない汽笛のする曳船，細々とした人間生活の末梢を運ぶ石炭船，或は蛍の様な灯をつけた貸ボートの群……亦，大川の上から下に至る水色の変化，永代あたりの重い緑色とそこに深藍色を交へた川面や，冷や

かに青く濁った，黄の暖みを含んだ，フィニッシュの後にビールの泡の様なボイリングが色よくはねる千住附近の水等，川への愛着は尽きない……。

同じ釜の飯をたべ，同じ部屋に寝，同じ苦しみに泣いてくれた端艇部の人々よ，同じ此の世に地球の何処かに同じ様に生きて居乍らも永劫復たと邂逅しさうもない卒業の方々よ，辛くして感激の向島生活よ，淡き惨敗の哀愁よ，みんな左様なら。』

（専三　桜井俊平　戦死）

中山伊知郎教授端艇部長就任

ところで，端艇部長，高瀬荘太郎学長は，大学の戦時対応に追われ，余りにも多忙を極め，端艇部とは疎遠であった。

後藤隆之理事は，思案の挙げ句，端艇部を人一倍愛された太刀川学生部長を訪問し端艇部に鋭気を注入させるにふさわしい人を推薦してもらうべく相談を持ち掛けた。

この結果，当時の一橋学園の中核教授である中山伊知郎先生を部長に推戴すべしとの腹案がまとまり，後藤理事の辛抱強い，熱心な就任交渉が始まった。交渉の模様とその後について同氏の手記は語る。

『中山先生宅を初めて訪問したのは，８月26日，凄く暑い日射しの中だった。先生は一言のもとに，その任に非ずと辞退された。そして私の口説き訪問と先生の辞退が何日間も繰り返された。断られ乍らも先生のお人柄に益々傾倒し，玄関先で申訳ありませんネと云って送り出して下さる奥様のお心づかいに敬服した。私の訪問とお願いが続いたが，局面は動かないかと思われる毎日だった。

９月15日夜，私のもとに太刀川先生から電報が届いた。「中山氏，端艇部長引受けらる。太刀川」

御礼に参上したとき，中山先生は私を見つめて「後藤君，僕もチャンと一緒に向島で合宿するよ。」私は驚いた，感動した。「先生，合宿はいいですから，インターカレッジに優勝するまで，部長をお願いします。」

中山部長の推戴は，四神会に充分根廻しができず，先輩にはご批判もあったらしい。11月19日，如水会館で挙行された中山部長推戴式の開幕前に三谷一二大先輩の「中山伊知郎なんて，ワシは知らんぞ。」という大声がロビーで聞かれた。

しかし，式上の中山部長の御挨拶が素晴らしく，「隅田川の水は，テームズ河に通じる。」と語られ，一橋をオックスフォード，ケンブリッジと対比された時，盛んに拍手が湧いた。式後，三谷大先輩が「名部長だ！名部長だ！」と大声で喜ばれ

たことを思い出す。

学徒動員，敗戦，そして再び日本の土を踏んだ私が，久しぶりにお目にかかったのは故郷伊勢の大安旅館だった。開口一番「後藤君，一橋のボートは復活インターカレッジで，とうとう優勝したよ。嬉しいじゃないか。……ところで，やっと僕も端艇部長をやめさせて貰えるだろうね。」と話しかけられた。私は胸が一杯になった。部報第25号に掲載された中山伊知郎部長の「就任の辞」は，次のとおりである。

「就任の辞」

『大東亜戦争も輝かしき緒戦の一ケ年を経ていよいよ長期戦の性格を明瞭にして来た。一億の総力を発揮すべき秋が来たのである。吾々は皇軍に信頼して戦局の推移に一喜一憂することを止めると共に，真に長期戦に耐ゆべき大国民の実力を養ふべきであらう。

支那事変から大東亜戦への変化と共に，吾が国の経済体制にも著しい変化が起ってゐる。明治と大正とを通じて吾が国経済の躍進に指導的役割を果して来た吾が大学の在り方も，これに応じて変化しつゝあることは云ふまでもない。吾が大学に於て嘗ての指導精神は士魂商才であった。この標語が商業人の水準向上につくした功績は，われ人ともに否定し得ないところであらう。それから最近迄キャプテン・オブ・インダストリーが吾々のモットーであった。西欧資本主義との黙々たる決戦に於て，この標語が如何なる重要性をもったかは知る人ぞ知るであらう。この標語の下に身を以て西欧資本主義と闘った人々によって，吾が経済の確固たる地盤は育成せられ来ったのである。しかし今や歴史の転換に応ずる経済の革新と共に吾々の標語も亦新しく書き改められねばならぬ。今後の日本経済を率ゆべき新しき経済人の型を生み出すことこそは，吾か商科大学に課せられた名誉ある任務であらう。

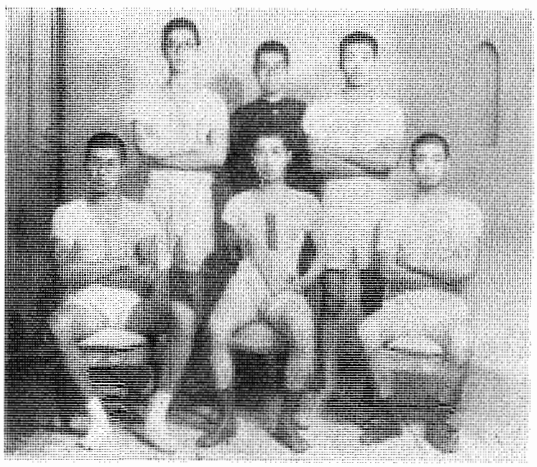
新しい型を生み出すことは単に新しい標語を追ふことではない。それは一橋の伝統を生きて流れる精神に客観的な表現を与へることに他ならない。新しい型といふことは，この意味に於て決して追随ではありえない。吾々は一橋の生活を貫く精神の強さを信ずるが故に，敢てこれを一橋人の将来に期待しうるのである。曽て一橋精神の生れ育てられ伸び行くところは端艇生活であるとせられた。果して然らば，大学の運命を決するとも云ふべきこの大きな仕事を端艇部の生活が持つ独特の精神力に期待することはまさに当然であらう。吾々はかく信する。さうしてこれこそ端艇部の将来に期待さるべき勝敗を超えた希望である。

端艇部のこと自体については私には，もとより多くを語る資格がない。学生時代の三年間オールを握ったことこそあれ，それは既に遠い昔の話である。学窓を出てから二十年間私の運動神経は，その全部を学問の世界に投げこんで来た。しかし秘かに想ふにこの学問生活に疲れることなく今日までの歩みをつゞけ得たのは僅かな三年のお陰であったやうに見へる。その意味で異った形ではあるが再び端艇生活に近づくことの出来るのは私にとっての幸福である。願はくば諸君と共に美しい伝統精神に生きよう。生きて，さうしてこの精神に新しい形を与へるべく努めよう。……』

明治神宮大会

11月1日・2日，戸田漕艇場で行われた。苦杯2年，戸田初制覇成って以来一橋は連戦連敗し，かつての栄光も暗雲覆うかと思われたとき，豁然として力強く荊棘の途を拓く。若冠フォアの制覇成る！　一橋は，月余に及ぶ精進に満々たる自信を抱き，10月26日戸田へ移転して以来，中山名コーチの適切明快な指導によって，選手一同ますます必勝の信念を固くしたのであった。

エイト第一回予選は折悪しく秋の細雨，微風，物凄い寒気の中で展開される。一高，工大，本学クルーは諸先輩，中山新部長の前を悠々スタートに向かう。その時一瞬，勝った気持ちが湧く。果たして1,000m，1,500mと一高を1艇身前後リードを奪い，敵よりも3本位の低ピッチで悠々。1,900m，敵は漸く⅓艇身と迫るも，既に我はラスト10本。1本，2本，勝った，と思った時しもバウサイドに悲壮な声。ハッと思うと同時に事故あって艇はガタリと止まり，敵はその間にスルスルとゴールイン。一高タイム7分02秒。かくて，栄冠を逸したのであった。



第13回明治神宮国民錬成大会フォア優勝
前列左から水垣和敏，牛島英彦，野村邦夫，後列左から斎藤弥助，藤本亮太，山田輝雄

一方，フォアは良く健闘する。翌日行われたフォア第一予選は，東大が日医大，京城電を軽く押さえる。第二予選，本学対明大は呼び物のレースにもかかわらず，本学6艇身の差で断然敵

を一蹴。第三，第四予選では，早大，稲門が勝ち残り，ついに本学は古豪クルーと覇を決することとなった。

決勝戦は，東大，商大，早稲田，稲門のコース順で，本学不利な出足にもかかわらず，頑張りまた頑張り，絶対譲らぬ強さを見せて，見事早大に3尺の艇差をもって最後の栄冠を得る。漕手の内，3人までが1年生という若冠フォアの堂々たるレースぶりには，見る者一同，頭の下がる思いであった。「夢のようだ！」と感激する選手を擁して我々も感激する。タイムは，7分49秒。近来レースの白眉として激賞されたフォアは，一橋端艇部に不滅の栄光をもたらしたのであった。

さて，当時の戦局はというと，日本軍はすでに敗色を帯びつつガダルカナル島を撤退，我々の知らないところで，せっぱ詰まっていた。

次代の要員としての学生の役割は，生産戦に直接協力する各種勤労作業，あるいは防空訓練その他特殊訓練等，多面的に戦う日本の第一戦に立つべく要請されるようになった。

昭和18年

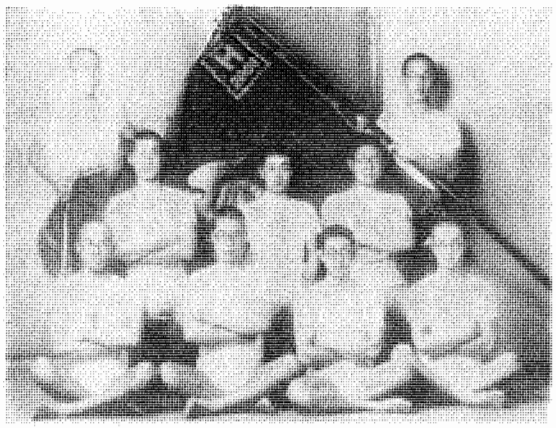
昭和18年3月に入ると文部省体育局長は，全国の大学・高専・専門学校長あてに，戦時学徒訓練実施要綱を送り，体育の目標を戦力増強に集中し，米英的スポーツを整理し，体育訓練を戦技中心とするよう積極的に示唆した。

このため，一橋会役員数名が小笠原体育局長を訪問して，学生の気持ちを訴えた。この後，新入生の5月のクラスチャン競漕に予科はピンネースを使用した。また専門部ではカッターの使用を検討し始めた。時局の要請と橋爪講師の熱心な指導で新設された海洋班は，このころまでには10人乗りオールチークの救命艇“潮風”の寄贈を三井物産玉造船所より受け，海洋訓練を始めていた。

第57回春季競漕大会

今年も春季大会は4月11日，向島艇庫で開催された。大会の模様を記録（専門部端艇班小沢幹事日誌）より抜いてみると――

『当日は薄曇，朝のうち風少し，墨堤の桜は八分咲，正に絶好のレース日和，此の日，先輩多数来会され光栄である。杉本・大森・新藤・山岸・桜井・益子・上杉・



第57回春季競漕大会第一選手優勝
前列左から小沢恒与，島田正敏，加藤周久，上島良一，
2列目　中北治郎，太田高穂，秋山栄一，旗の左，水
垣和敏，右　横田昱郎

壷内諸先輩，唯々学生諸君の来会少なきは遺憾である。聞けば入学式当日新入生に対して掲示をしなかった由，宜なる哉，されど新入生には此の大会を見る事に依って始めて端艇部の何たるかを知る事が出来るのだ。端艇部の発展を希いながら何と云う手落ちだ！

閲艇式10時，サード，C，S，Hの順。Hは猛烈な蛇行，本来オミットになるところを3着，去年はチャンがゴール寸前で接触した事を思い出す。コックスは専門部の北村である。専門部の恥だ。第二選手は優勝C，次いでH，Sの順。第一選手は距離2,000 m，優勝H組，次いでS，Cの順。田尻常雄審判長は講評で学生の大会出席者の少数なるを遺憾とされたが，同感である。今年の大会は出漕者の殆ど半数を専門部生で占め，大勢力であり頼もしい。ビール少なく，どの組も淋しい晩である。

なおこの頃のH組第一選手の合宿日誌から当時の練習風景をみると，食糧不足の状況がよく分かる。

『3月14日(日)晴，今日から合宿再出発，約70日ぶりに握ったオールの感触，墨田の流れ，隅田の匂い，俺を惹きつける。小波立つ悠久の流れを切ってスイスイと走る艇，男の心の拠りどころ，青春の心の家，此の合宿で俺は感激と，打算を超越した真底から湧き出た無垢な心情に到達するのだ。合宿の雰囲気は良し，和気藹々裡の生活，メンタルユニフォミティに富んだ，今日は総べてを讃美したくなる。

午前，荒川放水路を西新井迄遡る。矢張り消耗する。腹ペコだ，昼飯を頬張る。午後の練習で尾久からの帰途，鐘ケ淵迄来ると鐘紡工場の職工が，「此のゴクつぶし！」と叫び乍ら小石を投げて来た。艇は左岸寄りを走っていたので，幸に石は届かなかったが，瞬間，猛然とファイトが湧いて来た。納艇すると肉刺が両手に一杯できて居た。勝たん哉。何も考えることはない。漕がんのみ。植村コーチャー艇庫に来訪せり。夜はファイティングに勝つ，勝ったからとは言え，ひとより余計に食

うのは気がひける。』

大学は運動部予算を本年度から圧縮した。端艇部の財政は極めて苦しくなって，本年度春季大会に必要な諸経費1,000円の調達も困難となった。辻会計幹事は先輩からの寄附による案を出したが，後藤理事は本大会は端艇部のみの行事ではなく，一橋会の行事であるからと辻案に反対し，一橋会の負担を訴えた。

結局，東京商大奨学財団からの借入れによって切り抜けたが，財政窮乏から脱皮せんとして，端艇部基金の案が出たのも，このころであった。中山伊知郎部長は，この案に大変熱心で，成案があれば御自身先輩各位を訪問して実現に努力したいと申し出られた。後藤理事は荻生真通先輩（昭17学卒，昭13，14，15対校選手）にはかった。荻生氏は兵営に在る身でありながら，軍務の寸暇を割いて懇々と諭し，指示を与えてくれた。しかし，その後の戦局の悪化のため，ついにその実現を見なかった。

艇用部品，消耗品は逼迫し底をついた。5月29日，インターカレッジの前夜，遠山先輩がワックスを持参されてボートの滑りを良くしようぜと，クルーとともに心を込めて新艇の腹を磨き上げた。テキ屋のルートを頼って，何とかいう相当な親分を訪問して，苦心のすえ入手したワックスだと塗り終えた遠山先輩は語った。食糧も極めて不足した。合宿時にクルーは艇庫に米穀配給通帳を持参するが，並みの配給量で足る訳が無く，バックメンが時折端艇部名義で行う飯米配給申請は，なかなか受け付けてもらえなかった。

これより先，遠山先輩の主導のもと新艇建造のため諸先輩から寄付金を戴き，野口造船所に建造せしめていた。新艇は漸く完成し，5月22日，戸田コースにおいて新艇命名進水式を盛大に挙行，“香取”と命名された。インターカレッジを目前に控えた対校クルーは直ちに新艇で猛練習に入った。

第38回海軍記念日水上練成大会

5月23日向島コースで開催された。本学からは6人漕固定席艇とエイトが専門部から出漕した。固定席艇の2年生クルーは第一予選で早大専を一蹴したが，準決勝で東北医専にしてやられた。16年にも負けた仇敵だ。

呼び物のエイト競漕は日大，商大専，二高の三杯レースとなり，日大に2艇身の差で敗れたが，二高だけは抑えて2着となったので満足していたら懇親会に柴田，杉本，大久保諸先輩来り，各位感想を述べられた。感激と苦悩のひと時だった。

（専門部端艇班小澤幹事日記）

第23回関東大学高専漕艇選手権大会

5月29，30の両日戸田コースにおいて，本学，東大，慶大，早大，明大，日大，東工大，東京外語，拓大，一高，日医大の参加を得て挙行された。一橋端艇部再興の意気に燃え，先輩の厚情かおる新艇“香取”をもって出漕したが，予科生を半数含むクルーのこととて正規の練習が不足したこと，ならびに新艇にまだ慣れない等の諸原因が重なってか，初日予選の対一高戦に敗れ，敗者復活戦で準決勝進出の資格を得たものの翌日の準決勝戦において再び一高に対し惨敗する結果となった。本学の成績次のとおり。

第1日予選第3組

1着　一高　6分52秒6

2着　本学　差約1艇身

敗者復活戦

1着　本学　7分4秒6

2着　明大　差1艇身半

3着　工大　さらに5艇身

第2日準決勝3組

1着　一高　7分8秒3

2着　日大

3着　本学

決勝順位

1着　早大　2着　東大（差1尺）　3着　日大（差半艇身）

4着　一高（差1艇身半）

商大艇は1,000 mを過ぎるとガタンと艇足が落ちる。ローアウトしているのがはっきり分かる。伝統に閉じこもり，昔なりの漕法を固持していることがよくないのか，練習不足か，とに角後半の頑張りが足りなかった。それにしても早大の整調，網中は堂々たるローイング，あせらず，へばらず，泰然と自己のペースで漕ぎ切った。

予科・専新人競漕，新艇“八紘”進水

5月26日，予科対専門部新人競漕大会が向島コースにおいて挙行され，エイトは一

艇身の差をもって予科が快勝した。新人レースに先立ち，専門部は山口茂主事ならびに太刀川学生部長臨席のもと新艇“八紘”の進水式を執り行った。

新艇は，山口主事格別の御配慮による資金の捻出と，先輩諸賢の寄附金とを併せて昨秋以来，野口造船所で建設に掛かっていたものである。山口主事から，「ボートは勝たねばならない。この差迫った時局にかかわらず，新艇を建造した意義を忘れることなく，同時に一橋学園の中心であるボート部生活に恥ずることのない様に心せよ。」というご挨拶があった。

“八紘”は，当時の日本造船工学の粋を集めたと言われる重巡洋艦の概念を設計に取り入れて，カンバスを短く，艇幅を狭く（23インチ），もって艇足を出さうと軽量クルー用に建造されたものであるが，乗って見ると理想と現実とは食違い，艇が沈んでストロークが重く，艇幅が狭いためオールのハンドルを短く切ったが，矢張り艇速は出ず，専門部クルーの悩みの種となってしまった。

海の記念日海洋競技大会と第5回全国高専競漕大会

7月18日（日）海の記念日海洋競技大会が向島艇庫を本部にして開催された。7月13日以来高専大会に備えて戸田村の農家に合宿して猛練習を重ねていた専門部エイトは，レース当日の朝，向島に漕ぎ下って来て，午後の漕艇の部に出漕し，日大に対し大差をもって快勝した（用艇“林”）。

最近では昨秋の対校フォアと二度目の優勝である。しかし，この勝利もあと1週間後に迫った高専大会のチャレンジレースに過ぎない。専門部エイトよ勝って兜の緒を締めよ，というのであった。なお，この日専門部からスカルが2杯出漕したが，いずれも学習院並びに大正大に予選でいずれも敗退した。

7月21日午後2時ころ，後藤理事戸田コースに来るや，折からコースで練習中の予科エイト及び専門部エイトに対し高専競漕大会は無期延期との知らせで，一同呆然とする。しかし，気を取り直して各校と協議の結果，日大，外語，予科，専門部，4艇によるチャレンジレースを午後6時を期して決行することに意見一致。専門部は，実に本日3回目の練習で相当へばっているが意気軒昂。国家が総力を挙げて戦時体制を整えている時局で，我々がボートを専心漕げるとは何と果報な有難いことだ。今年こそは最後のレースであろうと考えていた所であるから，格別の驚愕でもない。事すでにここに至る，今や全力を振り絞って敵を破砕せんのみとの意気がある。

専門部小沢幹事の手記によると，『出艇直前日大が棄権した，敵は外語とみる。6時スタートにつく。1コース外語，2コース商大予，3コース商大専，微逆風スタート予科出る，500 m あたり商大専門部リード，ピッチ平常より高く，次第に苦しくなる。一途にオールを深くと心掛けて1,000 m で二度目のスパート。やや出て半艇身リード。予科は1艇身遅れる。次第に息がつまる。ガス（コックス）ここで一寸元気づけてくれるとよいと思うが，次第に動きが少なくなる。1,100 でスパート。ああ遂に出ず。外語スパート，畜生出る！　小癪にも，これから次第に外語が出る。1,500 でこちら完璧にローアウトして調子がた落ち。ラスト30で予科出だしてついに外語を半艇身に詰め，専門部は1艇身半で敗れた。余りにも鈍い後半1,000 mであった，外語が出るのも無理ない，それにしても予科にも敗れたとは余りにも残念だ，どう考えても負けるはずがない……。このあと，予科は一高にチャレンジして5艇身差で敗退した。』

このチャレンジレースを最後として一橋の一切の競漕艇は，戦後の端艇部再発足まで，その姿を墨田，戸田から消すこととなる。

予科，専門部，本科各部端艇班幹事は8月末それぞれ交替し，こよなく端艇部を愛し，後輩の心と技とを厳しく，あるときは温かく指導してくれた上級生は去って行った。

学徒動員（オールから銃へ）

前々から問題になっていた端艇班の海洋班への転向が，端艇班の拡大発展，否，存続のために真剣に検討しなければならない事態となって来た。秋のクラスチャンを「錬成」と称してカッターを漕ぐため，越中島へ練習に通うことも検討しだした。

一方，新人の勧誘とクルーの編成に奔走すると，苛烈な時局が学生の気分を畏縮せしめたか，目先に心動き打算に走るか，我が一橋学園のために艇を漕がんとする者嘆かわしくも寥々として来た。

クルーを漸く編成して合宿のために艇庫食堂の開設を交渉すれば，ガール（国立に居住の姉妹）はすでに軍需工場に動員された後，外食か自炊のほかはない。端艇部60年の伝統をどう守って行けばよいのか。だれ一人確信ある見通しに基づいて引張ったり，押したりしうる者はいない，前途は暗澹，我々は苦悩の底に打ち沈む。この秋（9月23日）突如として，我々には正に晴天の霹靂，政府は我々文科系学徒に対する徴兵猶予の特典廃止を発表した。しかも年内にはオールに代わり銃を取って戦線に立

つのである。壮行の辞に曰く――

『けだし，吾人屁理屈を知らず幸にして元気あり，隅田河畔にあるいは，戸田コースに黙々として漕ぎ，心身の練磨に励んだのは今日に在らんが為ではないか，艇友よ，欣喜として戦場に赴かん，一死以て三千年の光輝ある皇国を護持せん。』

11月14日，クラスチャンレースのあと一橋会端艇部出陣学徒壮行会が艇庫において開催された。中山端艇部長と遠山不羈夫先輩の激励の辞あり，続いて鈴木邦治主将の壮行の辞があった。征く部員を感涙にむせばしめた遠山先輩の激励の辞，

「先輩の命と列席者のお許しを得て，出陣の祝いの言葉を述べさせて頂くことになった。言わざるは言うにまさるとか，隅田川のほとりで諸君の前に立ったとき，言うべき言葉なし。一橋端艇部60年の歴史を省みるとき，お互は親子であり，兄弟である。この時に当り語る事無し。よろしく頼む，しっかりやれ。さり乍らつらつら思う。諸君なきあと，赤きオールが隅田の水に映る時はいつの日か……。我々はそれを希わず。けだし，一抹の寂寥の感無き能わず。けれども，此れは諸君と川とに対する愛着に過ぎぬ。我々は何のためボートを漕いだのか。一大事に備え強き心と体とを鍛えるためではなかったか，今やお国のために起つべき誠(まこと)の一大事が来た。諸君は莞爾として起った。我々は諸君を持つことを誇りに思う。自重してやって貰いたい。あとに残った者は，一橋端艇部の続く限りオールを取れ。一橋ボートの先輩三千，たとえ1人になってもボートを守るであろう。出で立つ諸君，安心して面を上げて誇らかに進め。戦に勝て。これぞ一橋端艇の諸君に教えた道である。米英撃滅の最後の一瞬まで銃を離してはならぬ。さりながら諸君はまた，戦陣の間隅田の流れを想え，そして先輩後輩を思え。尽きざる一橋端艇の追憶――それが一篇の詩となり，うつし画となって，諸君に力をつけ加えるであろう。」

昭和19年

工業経営専門部の新設に伴い専門部の入学式は5月1日となり，予科は例年通り4月に入学式が挙行された。クラスチャンレースは，予科は時局がら商船学校からピンネースを借用して4月末に，専門部は6人漕固定席艇で5月末に挙行できたが，例年の春季競漕大会は物心両面ともにとても挙行できる状勢ではなかった。

予科対専門部新人レースをめざして予科，専門部とも6月に向島艇庫で合宿に入った。しかし時に，敵はサイパン島に上陸を開始した戦局で終日防空体制下の東京で

は，合宿室は夜間は消灯させられ，このため真暗闇の室で，しかも空腹と戦いつつ両クルーとも練習に励んだ。この折角の合宿も，新人レースの開催不可能との見通しとなったため残念ながら１カ月足らずで打切らざるを得なかった。

この後も戦局はいよいよ急迫し，学園に在る者は軍需工場等に勤労動員に出動し，授業も中止しがちで，２週間に一度登校し午前授業，午後教練を行う状態となり，学生は次第にボートと離れて行かざるを得なくなった。遠漕の企画はしたが，空襲の心配もあり実現はしなかった。

昭和20年

戦　災

昭和20年３月には，中和寮，専門部校舎は東部第92部隊に貸与された。国立の大学図書館の図書は空襲を免れるため疎開された。そして，

３月10日には，アメリカ爆撃機隊が東京を大空襲，江東一帯は焦土と化し，向島の川面に多数の焼死体が漂流していた。また７月には立川飛行場に来襲した米軍機が本学施設に機銃掃射を行い，損害を与えた。向島の本学艇庫は幸い焼失を免れたが，艇庫，合宿所の設備，備品は無残に荒廃した。かくしてついに８月15日，ようやく長い長い苦しい戦争が「終戦」を迎えることとなった。

第9期　戦後再建期（昭和20～28年）

敗戦から部活動の再開へ

国破れて山河あり。昭和20年8月，戦火がやんだ後の川の水はひときわ澄みかえっていたといわれる（部報32号13ページ）。前に述べたように，この年の3月9日夜半の米軍機約300機による爆撃の結果，首都は一面の焦土と化したが，とりわけ隅田川をはさむ浅草から本所へかけての一帯は，熱風天を焦がす地獄図の中心舞台となり，言問橋の上だけでも数百人が焼死したと伝えられている（東京空襲を記録する会，戦災記第1巻）。しかし，商大・帝大の両艇庫とその近辺の須崎町の一角は辛うじて焼失を免れ，昔日のたたずまいを残したまま平和を迎えた。とはいえ商大の台船二基は焼失沈没し，桟橋は流失し，基台も破損が甚だしかった。

艇庫は，戦争の末期に，高射砲陣地の構築計画との関連で，軍に収用される可能性が生じた時点で，君塚，遠山両先輩が東大の千葉四郎氏らと対策を協議し奔走した結果，東大艇庫とともに千葉工作所（後のデルタ造船所）の倉庫に借り上げられることになり，主にモーターおよびワイヤーロープの置き場として使用され，合宿所は工員の宿舎にも当てられたのであった（早大谷古茂氏談）。しかし，この期間に，避け難いこととは言いながら，設備や備品にもかなりの荒廃がみられた（部報32号13ページ）。

すでに前章でみたように部の活動は，18年5月末の第23回インターカレッジあたりを最後として，事実上休止の状態に追い込まれていた。この18年の春頃から始まった勤労動員は，夏以後には目立ってその日数が増加し，正規の学業のための時間はますます圧縮されていった。秋にはいわゆる学徒出陣によって多数の学生が学園を離れ，翌19年秋までには残りの学生たちの多くも戦場へ赴いた。19年春から20年春にかけて，小平，国立および一ツ橋の校舎や施設は次々と軍の管理下に移され，あるいは，軍需会社（中島飛行機）の使用するところとなった。さらに見落としてならないのは，16年10月に出された修業年限（6カ月）短縮の臨時措置に続いて，18年春からは大学予科の修業年限がさらに短縮されて2年となったことである（ちなみに19年春の予科の入試合格者もわずか84人にすぎなかった）。つまり終戦後の20年10月の時点で，18年春以前の様子を多少とも知っている実質的な「ボート部員」の層は，予科にも専門部にももはや存在しなかったわけであり，端艇部再建の当初の担い手は，無事生還

した本科の出陣学徒の小集団以外にはほとんど見いだしえなかったのである。

昭和20年

昭和20年８月15日，終戦の詔勅くだり，戦場から兵営から複雑な思いを胸に学園へ戻り，思い直したように艇庫へ足を運んだ学生の数は，それでも８月下旬から９月へと徐々に増え始めていた。すでに９月には，そのような少数の部員たちによって，台船が使用できないため満潮を待ってエイトやフォアを出艇することができた日もあった。しかし，本格的な練習の再開を可能とするような条件は，さまざまな面にわたって，まだあまりにも不備であった。

このような中で，戦後初のインターカレッジが，20年11月18日に開催されることになった。東大は，学徒出陣を事実上猶予されていた理工系学部所属の古参部員を多数擁し，すでにかなりの練習を積んでいたが，本学ではそのような準備がなく，ベテランの多くは未復員の状態にあった。漕艇界の復興のため，ともかく出漕するようにとの先輩諸氏の勧めに従って急遽クルーを編成し，１週間の通い練習で出場したが，結局は東大に８艇身の大差で敗れた。現役エイトの出場校は，この２校のほかになかったため，このレースは公式のインターカレッジとしてではなく，いわば番外の「ボートレース復活祭」として取り扱われることになった（11月18日および19日付朝日新聞）。

大学では，８月末から９月末にかけて諸施設の軍からの返還を受けた後，10月８日から新学期の授業が開始された。引き続いて軍関係諸学校からの転入試験が行われ，11月15日にはその入学宣誓式が行われている。そしてほどなくそれら入学者を含む練習が，フィックスで始められた。

時あたかも，東大とのレースを契機として部の再建が論議されはじめ，そのための戦後初の四神会がお茶の水の岸体育館で「各自夕食を持参」して開かれた時期でもあった。しかし，この時期の練習が長続きした形跡はない。

昭和21年

春季大会行われず

21年の２月にはやや組織的に，予科，専門部，本科のそれぞれで通い練習が行われ

ているが，21年春には春季大会も，またそのための合宿練習も行われなかった。直接的には，台船がないためにフィックスしか使用できないという事情，およびこの年の変則的な授業や試験の日程（一橋新聞21年3月20日号）との関連によるものと思われるが，反面からみればこの時期は，部の再建事業の第一歩としての「人あつめ」に努力が傾けられていた時期でもあったのである。

大学では，戦時体制から旧秩序への復帰が進められる傍ら，新たな方向の模索も続けられた。学生大会における学園民主化の要求（学長選挙への参加の決議）を受けて2月には全学教授会で学長推薦規則が成立した。そしてこの年の8月にはこの規則に基づく上原学長の就任をみ，この上原学長のもとでその後の一橋の発展の構想が練り上げられて行く。それは学問の自由や大学と社会の調和的関係についての「甘美なる印象と予感の時期」（上原『学問への現代的断想』96ページ）であったが，それはまた同時に学生の生活諸条件がことのほか厳しく，食糧難のため6月早々には繰り上げの夏休みに入った年でもあった。

人一倍の精神主義者をもって任ずるボート部員がこの時期に拱手傍観していたわけではむろんない。漕艇界が全体として未だほとんど活動を再開していない21年に，その後の活動の基礎となるいくつかの課題に着実に取り組んで行ったあとをわれわれは容易に認めることができる。人集めの傍ら5月には部員総会が開かれ，部の組織，態制が固められた後，6月には銀座で開かれた四神会の総会に中山部長，高垣元部長を初め40人あまりの先輩の出席を得て，四神会組織の確認と部の再建の段取りについての協議が進められた。

まもなく懸案の台船の修復作業が始まり，7月には，艇庫を焼失した日本郵船から台船を借り受けることができ，8月末にはこれを本学艇庫に廻航すると同時に応急の桟橋工事も完成した。これと並行して先輩の名簿整理が進められ，学生たちが手分けをして寄附金募集に歩いた。そして9月6日から，インターカレッジをめざす対校選手の合宿が開始された。

空腹との戦い

10月19，20日のレースまで，50日近くの長期合宿は，当時の食糧事情のもとではほとんど無謀と思えるほどのものであった。荒れ果てた合宿所の大掃除にはじまったこの合宿は，「空腹との戦い」であったといわれる（橋本博手記）。しかも，まもなく

予科および専門部が，遅れてならじとばかりそれぞれフォアおよびフィックスのクルーを合宿させた結果，９月末には合宿人数が合計30人を超え，食糧不足は一層深刻化した。マネージャーは寄附金集めと米の買い出しに奔走した。買い出し先は東武や常盤線の沿線に及んだ。フィックスは，練習ばかりでなく，戸田から芋を運んで来るためにも使われた。当時の選手の日誌には，「へばった」，「非常にへばった」様子，「栄養不足」，「今一息の体力不足」の感じが訴えられ，その頃艇庫に合宿していた早大のある日の昼飯が豪華だったことが，わがクルーの士気に大きく影響した様子が描かれている。

むろん柵山コーチの要求する練習がかなりきついものであったことも事実である。しかし，合宿最後の１週間は，マネージャーの懸命の努力にもかかわらず，予科および専門部のクルーには，１人１日20円を与えて自炊させるほかない状況にまで追い込まれてしまったのであった。

戦後の漕艇界の本格的な幕明けとなったこの21年のインターカレッジには，エイトでは早大，慶大，東大，工大，商大，一高の６校が出場した。本学クルーは，準決勝で早大を10艇身差で破った後，決勝で東大と対戦し，接戦の末惜しくも力尽きて敗れた。フォアでも予科クルーが決勝で明大に敗れた。

しかし，勝敗とは別に，この困難にみちた合宿は，端艇部の歴史の中では独特の位置を占めている。それは戦前（戦中）の端艇部で育った世代と，戦後に入部した新しい世代とが同じかまの飯（ならぬ芋？）を食いながら，一橋ボートの精神を伝達・継受することができた（はずの）数少ない，ほとんど最後の機会だったからである。全員が本科生で構成され，戦前の対校選手の一種近寄り難い雰囲気を残していたこの年度の対校クルーの大部分がここで艇を下り，比較的経験の浅い若い選手たちが次の年度の対校の主力となる。このあと11月に行われた予科および専門部のクラスチャン・レースを契機として，新しい時代の端艇部を支える部員の数も増えてきた。

昭和22年

戦後初の第58回春季競漕大会

22年の春には４年ぶりに春季大会が挙行された。２月下旬から通い練習を始めた各組は，戦後初のＨＣＳ対抗に闘志を燃やし，４月中ごろから一斉に２週間の合宿に入った。４月27日の春季大会当日は，戦前のスタイルにならって，閲艇式からはじま

り，早大・慶大両校の招待レース，山中ゼミなど4クルーの弥次レースについで第二選手および第一選手のレースが強風波をついて行われた。第二選手はS組，第一選手はH組が優勝したが，各艇とも浸水が激しく，第二選手H組はゴール・インと同時に沈没した。

5月の下旬には，専門部および予科のクラスチャン・レースがあいついで行われた。6月1日には関東漕艇協会主催の第1回向島レガッタが本学艇庫を会場として開催され，エイトでは出漕12クルーのうち，東大が優勝し，フォアでは出場9クルーのうち商大（本科）が優勝した。

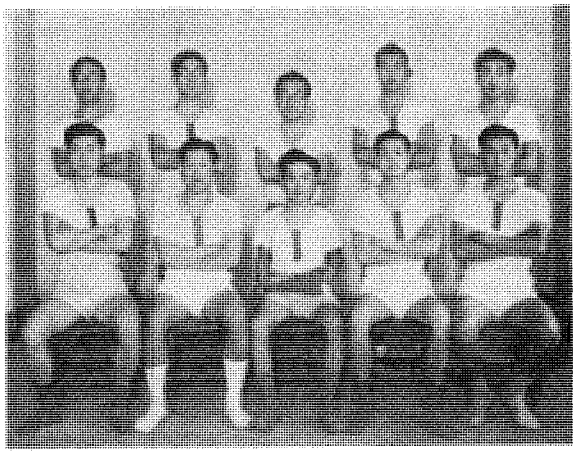
6月後半には予科および専門部の新人クルーが10日余りの合宿の後対戦し，接触のため再レースが行われたが，結局大差をもって専門部が優勝した。

こうして，数々の行事を消化しながら，22年の最大の目標である関東インターカレッジに向かって準備が進められて行った。前年と異なり，対校エイトおよびフォアは予科および専門部の選手を多数含む全一橋クルーとして編成され，しかもこれら対校クルー以外のインカレへの出漕は認めないという重点主義的方針が，すでに2月の部員会で認められており，従って予科や専門部は，これとは別に，秋の高専大会を目標に練習計画を立てたのであった。8月3日には対校クルーが，また，8月10日には専門部クルーが合宿を開始した。

合宿の事情が前年より特に改善された気配はない。激しいインフレのさなか，預金封鎖といわゆる竹の子生活の時代にまとまった寄附金を期待することはもともと不可能であり，学生たちは粗食に耐え続けていかねばならなかった。深夜の電気を使ってトウモロコシのパンを焼くために，マネージャーは徹夜しなければならないこともあった。通りがかりの橋の上から「腹っぺらし」の弥次を浴びながら，それでも選手たちはひたむきに艇を走らせ，前年の雪辱を果たすべく柵山コーチの厳しい要求に耐えて練習にはげんだ。人々が買い出しに狂奔している時代に，同コーチは西武線の大泉から毎朝1番電車に乗って向島まで出向き，出勤前の時間をコーチに費やした（部報40号5ページ）。その火の玉のような不屈の闘魂が，クルーを燃え立たせた。

第25回インター・カレッジ

9月20，21日向島で行われた第25回インターカレッジではエイトは出漕5校の中を順当に勝ち抜き，決勝では東大を相手に好レースを展開して見事優勝し，フォアも5校で争った結果，圧倒的な強みをみせて優勝した。



昭和22年インターカレッジ優勝記念
前列左から　遠藤，村山，君塚，野村，馬場，木原，井上，金子，三堀，山田

続く9月27，28日の全日本選手権では，エイトには専門部クルーが出場して京大に敗れたが，予科の試験日程との関連で対校エイトの一部を再編成して出漕したフォアは，出場8クルーの中を順当に勝ち進んで優勝した。こうして主要な目標を達成することができ，久々に国立の学生食堂で祝勝会が催された。

このあとからさらに高専大会（11月9日）をめざして予科が合宿に入り，専門部も合宿を再開したが，この大会には参加校が3校しかなく，しかも直前に早大高等学院が出場をとりやめたため，結局予科と専門部だけのレースとなり，専門部が優勝した。

こうして端艇部の再建事業は他校にくらべて比較的順調に進んだとみられるが，その背後に向島艇庫という遺産が大きな役割を果たしていたことは言うまでもない。漕艇界における商大の伝統的地位から見ても，この遺産を足場とした再建事業は，単にわが端艇部のみに終わらしめるべきではなく，漕艇界に広く及ぶものでなければならないわけであった。

実際問題としてこのころの漕艇界の活動は，瀬田川をほとんど唯一の例外として，圧倒的に向島に集中しており，商大の艇庫はその中心であった。22年から23年にかけて各校の活動が徐々に活気を取り戻してくるにつれて，それら各校のもとめに応じて，余裕のある限り，艇の保管や合宿所の利用に関して便宜をはかることは，むしろ当然のことであった。問題は，限られた物理的収容力と法的制約の中で，他校への協力と端艇部自体の長期的復興事業とをどのように両立させていくかという点にあった。できるだけ艇庫を有効に利用する必要，設備や備品を長期的に整備し維持してゆく必要をめぐって種々の案が検討され，また部財政の改善のための方策が模索され，可能なものから実施に移された。

部の所有する旧艇の一部を他校に譲渡し，当面必要な艇やオールの修理・整備がそれによって進められた。資金集めのためのダンスパーティーも催された。他方これと並

行して部の復興計画が練り上げられ，23年の初めからその資金募集活動が進められた。

昭和23年

22年（5月）には，早大・慶大の対校レースが復活し，慶大は23年2月に新艇ボローニャを進水させ，さらにまた，まもなくソルボンヌを建造した。むろん，早大もこれに対抗して新艇（奔星）を進水させた。同様に22，23年にはインターハイや一高，三高戦も復活し，旧制高校各校がその最後の活動を盛り上げていた。

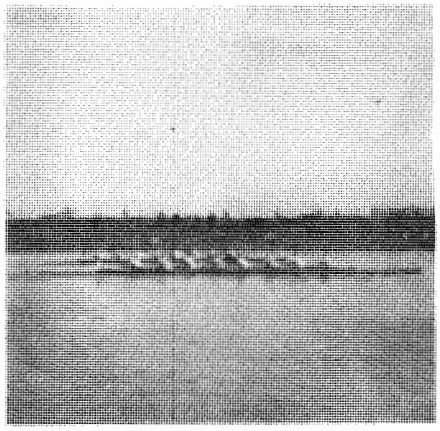
23年6月20日には関東高専大会が開かれて，6校が参加した。本学からは予科・専門部両クルーが出漕したが，いずれも敗れ，慶大予科が優勝した。こうして各校の活動が活発化するとともに，戦災で艇庫を失った各校にとっては，長期的な見通しの中で固有の活動の拠点をどこに設定するかは，遅かれ早かれ決断を下さざるをえない問題であった。この年漕艇協会が戸田コースの調査・検討を積極的に進めようとした背景には，こうした各校のかかえている問題があったはずであり，結果的には予想外に早く，23年のインターカレッジが戸田で行われることになった。しかし，それが決まったのはようやく6月のことであった。

23年春の行事はほぼ前年通り進行した。第59回春季大会は4月18日に開催され，閲艇式，弥次レース，先輩ＨＣＳレース，招待レース（東大医学部，慶大）に続いて行われた第一選手レースは，好コンディションのもとで，低ピッチのＳ組が優勝した。

5月8日には予科および専門部の新入生クラスチャン・レースが行われた。5月23日には憲法記念レガッタ（正確には，この年は，憲法施行1周年記念第2回都民体育大会兼第2回向島レガッタ）が開かれた。6月2日には第15回の（そして最終回の）予科専門部対抗レースが行われ，好レースの結果専門部が優勝した。

第26回インターカレッジ

この年の対校クルーの顔触れは前年とさほど大きな変化はなかったが，第1期の練習はすでに6月上旬から始められ，練習の日数は一層増加した。クルーの懸命の練習と並行して，復興資金の寄附募集も精力的に続けられた。9月19日には艇庫桟橋で戦後初の新艇の進水式が行われ，中山部長によって「くにたち」と命名された。この新艇を戸田へ運んで大倉高商のアームを借り，植野先輩宅の近くに合宿所を借りて万全の



昭和23年全日本選手権決勝
（手前商大）

仕上げを行った後，10月２，３日のインターカレッジを迎えた。しかし，優勝候補の呼び声が高かったにもかかわらず流水とは異なる戸田のデッド・ウォーターになじむ余裕がなかったためか，はからずも予選で早大に敗れ，復活戦で浮上したものの準決勝では僅差で日大に敗れて，決勝進出の機会を逸するという残念な結果に終わった。

優勝したのは早大であった。フォアは慶大が優勝した。スカルに出漕した吉村も健闘空しく３位にとどまった。日大の桜色が目ざわりな年であった。無念やるかたなく，クルーは一部メンバーを交代して直ちに猛練習を再開し，10月17日の全日本選手権兼第３回国体で見事優勝して名誉を挽回した。この大会ではＯＢエイトにも優勝したが，当日の観衆は２万人に達し，15年のコース開き以来の盛況といわれた。当時学生が口にすることのできなかった特級か１級の日本酒が優勝杯になみなみと注がれ，合宿所の庭先は黒山の人となった。11月１日には国立で祝勝会が行われた。

こうして，前年に引き続いて部の活動はほぼ軌道に乗り，一橋の伝統を守り続けて行く態勢が一応整えられた。しかし，その裏では，依然として続くインフレが特に地方出身の学生の経済生活を窮地に陥れており，アルバイトに追われ，やむなく部活動から離れ，脱落していく部員も少なくなかった。23年になってもまた，食糧難と学生の健康状態を考慮して，大学は夏休みを６月早々に繰り上げている。22年に八十数人を数えた部員の数は，23年には約60人，そして24年には四十数人，と減少しつつあった。将来の部の中心勢力となるべき23年の予科専門部レースの両クルーの平均体重は，14.3貫（53.6kg）にまで低下していた。

選手層の厚みの問題が早晩深刻な問題となることを一部の者は感じ始めていた。しかし，それは一橋だけで生じた傾向ではなかったし，一橋だけで解決できる問題でもなかった。食糧事情を別としても，個人主義の風潮の中では，ボートはすでにかなり時代遅れの，地味なスポーツと見られていた。ともかく，多少のコンディションの差はあれ，23年のインカレの優勝タイム（早大）が６分54秒６，全日本の優勝タイム（商大）が７分11秒２であったのに対し，同じ年の８月のロンドン・オリンピックの

優勝タイム（アメリカクルー）は5分56秒7であった。前途はなお多難であった。

昭和24年

学制改革と端艇部の新態勢

戦後の学制改革による旧制の大学高専の新制大学への編成替えは，少数の私立大学を除き，24年春，一斉に実施に移された。一橋は本科，予科，専門部，養成所を統合して，新たに4学部からなる社会科学の総合大学へと発展することになり，大学の名称も，19年9月の東京産業大学への改称，22年3月の東京商科大学への復帰に続いて，24年6月から一橋大学が発足するという具合に，めまぐるしく変化した。

旧制の在学生が卒業する28年まで商大は形式上存続したが，実質的にはすでにそれまでに急速に全一橋への統合が進んだ。すなわち，24年には旧予科および専門部の1年終了者と新たな新制高校卒業者が新制大学の1年生を構成して小平で学ぶことになり，その代わり予科の3年次生が最後の1年を国立の専門部校舎で過ごした後，かなり多数の専門部卒業者とともに本科へ進む結果になったからである。なお，専門部も形式上は26年3月まで存続し，その間ほとんど空席となった学年に，新たに編入学者を受け入れたのであり，これらの編入学者の多数は専門部卒業後再び，新制大学の3年への編入を認められたのであった。

端艇部でも本科，予科，専門部という三者構成は，23年度末で事実上発展的に解消し，24年春以後はもはや予科，専門部の独立的な組織は消滅し，独自の活動もほとんどみられず，全一橋の端艇部への統合がきわめて自然に進んだのであった。むろん，ＨＣＳの3組区分は，これとはかかわりなく従来通り存続した。むしろ組織単位としてのその重要性はいっそう高まったといってもよい。

部内の行事としては予科専門部対抗が自然消滅したが，漕艇界全体でも伝統的行事の中からインターハイや高専大会が，この24年からは姿を消した。また，これらとの関連で，関東学生選手権がこの年から全日本選手権に統合され，それによって引き継がれていくことになった。

新制大学への移行に伴うこれら一連の変更と並んで，わが一橋端艇部にとっては，意義深いもう一つの出来事が，たまたまこの時期に重なった。それは端艇部長の交代である。中山部長は戦中戦後の多難な時期を通じて端艇部のために大いに尽くされたが，24年1月には学長に就任され，新制大学への移行と一橋大学の発展のために山積

する課題に取り組まれることになった。

これに伴い端艇部は新たな部長に村松祐次教授を迎えることになり，この新しい部長のもとで部の再建がさらに本格的に進められることになる。同部長はその後定年退官を目前にして逝去されるまで四半世紀の長きにわたって端艇部の発展と一人一人の学生の人間形成のために心血を注がれたのであった。その教育者としての見識は，部報に寄せられた数々の文面からも容易にうかがえるところであろう。戦後の端艇部にとって，向島艇庫が復興の大きな力となったのに劣らず，このような部長を推戴できたことはまことに幸いであった。しかし，その当初の24年ころは，部の前途は洋々というにはまだ程遠い状態であった。

第60回春季競漕大会

24年の春季大会は例年よりやや遅れて5月15日に東大の学部対抗レースと合流する形で開催された。会社招待（兼松，千代田銀行），ＯＢレースのあと，ＨＣＳ第一選手レースが行われた。２コースＣ組が３コース（Ｓ組）を侵犯したため再レースが行われたが，再び２コースが３コース（Ｈ組）と接触したため再々レースとなり，午後７時20分スタート，ほとんど暗闇の水神ゴールに，２コースＨ組が３コースＣ組をカンバス差で抑えてゴールインした。舵手の訓練不足について先輩から厳しい注意があった。前年に続き，この年も第二選手のレースはなかった。

この年あたりから国体のボート競技との関連で，ナックル・フォアが普及しはじめ，それとともに会社や銀行の女子クルーが川に姿を見せるようになり，４月10日のお花見レガッタ以後，休日の川面はボートでにぎわいを見せることが多くなった。何と言っても，向島は日本のボートの中心であったし，それはその後も当分変わることはなかったが，墨堤におわんボート屋が開業し，モーターボートが走り回るようになると，大学のボートにとっては種々の不都合も生じてくる。

この24年には４月早々に戸田コースの復旧工事が進められ，それと同時に公式のレースを漸次戸田へ移す方針が漕艇協会でも明確に打ち出されるようになった。この年の５月１日の憲法記念レガッタは戸田で行われ，６月５日には戸田町主催の第１回戸田レガッタが開かれた。このレガッタには，学生エイトに本学クルー，一般エイトに商大ＯＢ，スカルに藤井先輩が出場し，いずれも優勝した。むろんこの年の全日本選手権も戸田で行われることになっていた。

こうした動向と符節を合わせるかのように，慶大は５月下旬に戸田艇庫を竣工さ

せ，多数のナックル・フォアを浮かべて水上運動会を開いた。わが端艇部でも4月初めに戸田艇庫用地をあらためて視察し，6月の四神会では戸田艇庫建設の件が議題となっている。しかし，当分は，向島を本拠としながら戸田にその都度仮の前進基地をもつという二重生活で対応していくほかないのが現実であった。

24年の対校の第1期合宿は5月30日から戸田の海洋道場で行われた。第2期は6月26日から行われた。第3期は7月30日から始まった。8月13，14日には第1回淡路島レガッタ（由良コース）に出漕したが，半艇身差で日大に敗れる結果となった。決勝は1位が慶大，2位が東大であった。

第1回東商対校レース

2週間後の8月28日に，その後のボート部の最も主要な行事となる東商対校レースの第1回が挙行された。かつての一高・高商戦の復活ともいうべき両校の対校レースの構想はすでに大正時代にも昭和に入ってからも，ないわけではなかった。しかし，何故この時期に至ってこれが実現したかについては，これを何か特定の理由と結びつけて説明する必要はないように思われる。

勝敗に単なる競技を超えた重い意味をもたせるようなボート観がすでに遠い過去のものとなったということ，むしろ漕艇界に伝統的な地位を占め，しかも隣接して艇庫をもつ両校の間に，定期的な接触の場がないことの方が不自然と映るほど，時代が変わったということであり，早慶レースに刺激され，新制大学への移行を契機として，両校ＯＢの間での自然発生的な話し合いが急速に具体化し，この年の春以後に両校の間で開催が取り決められた，とみるべきであろう。そしてその意味でどちらかといえば気軽に始められたこの定期戦が，まもなく両校関係者の間に大きな反響を呼び，比較的短期間にかなり大がかりな行事に成長していったと見るべきではなかろうか。

ともかくこの第1回のレースは，東武鉄橋から鐘ケ淵までの2マイルのコースで行われたが，終始東大の優位は崩れず，洗場あたりのスパートで水があき，ゴールでは5艇身の差になった。一橋は華麗ともいえるほどよくまとまっていたが，今一歩底力に欠けていた。慶大ＯＢの宮田勝善氏が新聞評の中で，商大は大正以来今年が一番弱く一番小さいクルーだ，と指摘され，「大廈(たいか)の顚(てん)れんとするは一木の支うるところに非ず」というやや耳障りな引用を添えて警告されたことに対し，部員一同は奮起したのであったが，3週間後の全日本選手権では汚名をそそぐどころか，予選で再度東大に敗れた後，敗者復活戦でも早大に敗れて，宮田氏の指摘された「危機」的状況を実

証する結果となったのであった。

この時の対校クルーの平均体重は，16.5貫（約62kg）であったが，部内では最良のメンバーを揃えており，前年に続く藤井コーチの行き届いた指導のもとで他校に劣らぬ練習を積んでいたのであった。しかし，他の諸大学の水準がそれ以上に上昇していた。とりわけ選手の層の厚みという点で，確かに本学は相対的にその優位を失いつつあった。

新制大学の発足

予科，専門部が全一橋に統合されるという過程で，部員の減少傾向はともすれば見過ごされ勝ちであった。本科，予科，専門部の三者の連合体としての強みを持っていた一橋の端艇部は，気がついてみると，普通の一端艇部になり下がっていた。この24年の場合も，すぐその前年あたりまでインターハイで活躍していたような旧制各高校のえり抜きの猛者連が東大クルーの主力を構成していたのに対し，本学の対校クルーの顔触れは，1～2年前の予科クルーとほとんど変わるところがなかった。

もし，例えばＨＣＳの組織が格段に強化され，それがピラミットを支える三本の柱としての機能を果たしていれば，伝統校の地位を維持することもさほど困難ではなかったかも知れない。しかし，そのＨＣＳ各組も現実には春季大会の第一選手を揃えるのがやっとという程度であった。これまでの，予科，本科合わせて6年漕いだ学生に代わって新制の学生が4年で卒業することをも考慮に入れると，選手の底辺を強化することは重要な課題であった。

終戦直後から，23年度あたりまで続いたインフレの嵐は学生の経済生活にも大きな爪痕を残したが，それが一段落した24年から25年にかけても事態がさほど改善されたわけではなかった。学生たちは粗食に耐え寒さに耐えながらも，それなりに学生らしい理想主義的な生活態度を持ち続けていたが，わざわざ貴重な時間を「腹っぺらし」に費やすのは，この時代の現実からみれば，やはり変わり者のすることと映ったであろう。向島が小平や国立から遠く離れていたことも，不利な条件に数えられるであろう。

とりわけ，戦前のようにさほど迷うことなく既定の目標に向かって専心努力を重ねることができた時代と異なり，戦後の学生たちは，大さく揺れ動く政治や社会の中で，自分の取り組むべき課題に大きな戸惑いを感じないわけにはいかなかった。24年ころには戦没学生の手記が多くの学生たちに読まれ，5月には全学連の第2回全国大会が兼松講堂で開かれ，またレッド・パージ反対の檄や声明があちこちに貼り出され

ていた。

また別の面でも，自由と個人主義の時代の学生たちの間では，最も地味な団体競技であるボートはもはやさほど魅力的なスポーツとは映らなくなっていた。むろんこうしたことはおそらく程度の差はあれ他校にも共通することであった。ただそうした悪条件の中で部員の補充を進めていくためには，小規模な大学であればあるだけ，多くの学生に直接ボートの魅力を知らせるための努力を格段に強く払わなければならないわけであった。

部員の勧誘は24年6月25日の新制一橋大学入学式の直後から始められたが，9月末にも組織的な勧誘が行われ，10月下旬にはあらためてスライディング・エイト各1クルーによる新入生ＨＣＳ対抗レースが行われた。この間練習参加者の出欠表を体育教官室に報告することとし，また日数に応じて交通費を支給し，焼き芋を配給した。

食糧事情と部財政の強化

食糧事情は，23年秋の主食増配によって僅かながら好転した。そして，闇米屋の活躍のおかげで，この頃には，部員が直接買い出しに奔走するような必要はなくなった。しかし，合宿の際には，各自が配給米の現物を規定の配給量に日数を掛けた分だけ，大きな布団包みと共に，持参しなければならないのは当然のことであった。米の代わりにパン券（配給券）を持参した新入生もあった。マネージャーは買い物かごをぶら下げて八百屋や豆腐屋を回って歩き，薪を割って飯を炊き，みそ汁や豚汁をバケツに入れて配膳した。

栄養を考えないわけではなく，24〜25年頃には，僅かばかりの豚のコマ切れが大抵毎日1回は何らかの形で姿を見せた。予算の都合からか，と殺場から豚の頭一個が運び込まれたこともある。通い練習の時は，対校選手の何人かは，神田で半がわり10円の（正体の怪しげな）シチューを2杯も食ったり，1皿5円の芋あんを食べたりして空腹をしのぐのが常であった。食糧事情が実質的に改善されたのは，朝鮮動乱による好景気が行き渡った，26〜27年以後のことであった。新入生への焼き芋の配給は，それゆえ，当時の端艇部としては最大の好意の表現だったのである。

この時期のもう一つの大きな課題は部財政の基礎を固めることであった。学生達の側では，何人かの部員が手の空いた時間に従事できる統計局の消費者物価調査のアルバイト等を手がけたりしたが，積極的に部財政に貢献するほどのものとはならなかった。

前年の復興資金募集は多くの先輩の協力によってかなりの成果を挙げたが，インフレの中では永続的な基礎とはなり難いものであった。先輩の側でもまとまった一時金寄附が可能な状況ではなかった。そこから，月額会費制による寄附金募集の方式が編み出され，その組織としての四神会への加入依頼が24年夏以後続けられ，これはまた多くの先輩の協力によって予想以上の成果を挙げることができた。ただ，毎月集金に歩く学生の方が不足し，対校選手が練習の合間を縫って集金に歩いたこともあった。また，他方で支出も増加を続けており，それに見合う会員数を確保することはさほど容易なことではなかった。

しかし，こうして部員の確保と財政的基礎の強化という最も基本的な課題に取り組み，その解決の方向を打ち出したことは，この時期の重要な成果であった。しかもそれは，第1回東商戦の行われた時期と重なったことによって一層効果を高めることになった。というのは大学でも，また卒業生の間でも，いよいよ一丸となって東大に対抗していこうという空気が盛り上がりつつあるさなかにあって，この対校レースが当時の学園の姿勢を象徴するかのように受け取られたからであり，端艇部は橋人皆漕の理念に一歩立ち帰ることによって，いま必要な基礎固めを一段と効果的に行うことができたからである。

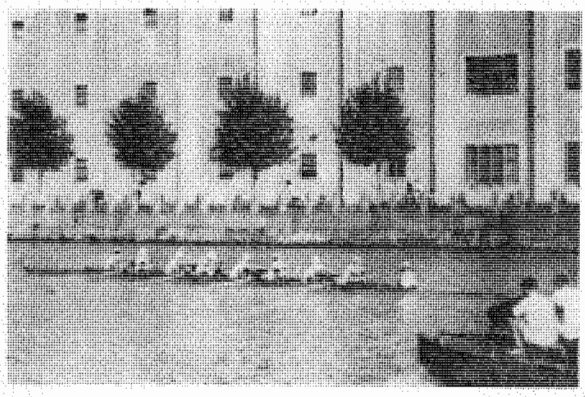
昭和25年

第2回東商戦

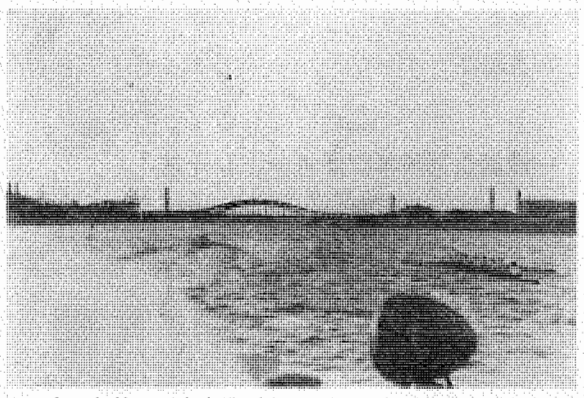
第1回東商戦は，結果はともかく，広く一橋人の関心を集めた。その声援に応えて，第2回こそはどうあっても勝たねばならなかった。すでに12月に対校クルーの第1期練習が行われた。春季大会直後の4月19日から第2期練習がはじまった。8月20日の東商戦と9月9，10日の全日本に焦点があてられ，すべてにこれが優先する態勢がとられた。大事な新入生の手ほどきもそのあとまで延期された。いわば非常態勢であり，クルーは全員丸坊主になり，歯を食いしばって練習に励んだ。この年の対校クルーは約半数が新人に入れ代わったが，故障者が出て途中で交代もあった。コーチも藤井から平野へ，さらに工藤へと交代した。

前田先輩の配慮により，艇庫にコーチ用モーターボートが常備されるようになった。かつてない厳しい練習の連続だった。この年の対校クルーの平均体重は16.4貫（61.4kg）でほぼ前年と同様であった。

この25年の春季大会では，慶大のナックル・フォアを借りて，第二選手のレースを行うことができた。熱戦の結果第一，第二選手ともC組が優勝した。5月3日に行われた憲法記念レガッタには対校クルーが出漕して3位に終わったが，7月の関東学生リーグ戦には昨年に続き本学は参加しなかった。6月4日の第2回戸田レガッタには，当時の部内の最下級生（2年生）で構成された甚だしく軽量のクルーが出漕し，予選で往年の宿敵明大の対校を破って意気天を衝いた。

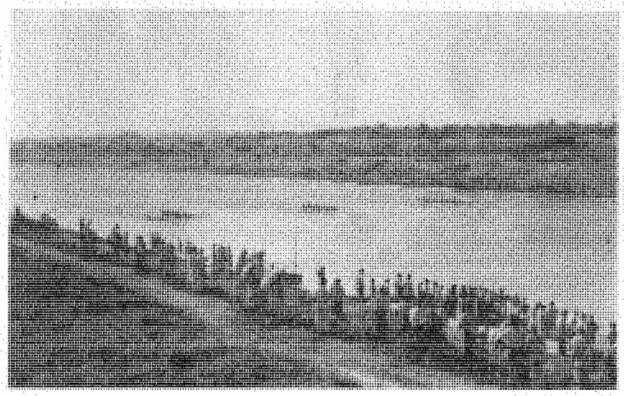


一橋クルーの練習（吾妻橋アサヒビール横）



昭和25年第2回東商戦（右が一橋）

8月20日，第2回の東商戦は小雨の中両国橋から大倉別邸までの2マイルのコースで行われた。スタートではまずリードした東大を一橋は直ちに抜き返したが，蔵前で浅草側の東大が有利なインカーブを巧みに操舵して水をあけ，低いコンスタント・ピッチで差を広げたのに対し，一橋は必死の力漕も及ばず，5艇身差で敗れるという結果に終わった。



昭和25年全日本決勝，左から一橋，慶大，東大

全日本選手権レース

9月早々にはエイトの新艇「一橋」が進水した。そして9月9，10日の全日本選手権では予選で日大を，また準決勝で立大を下したものの，決勝では後半で追い込ま

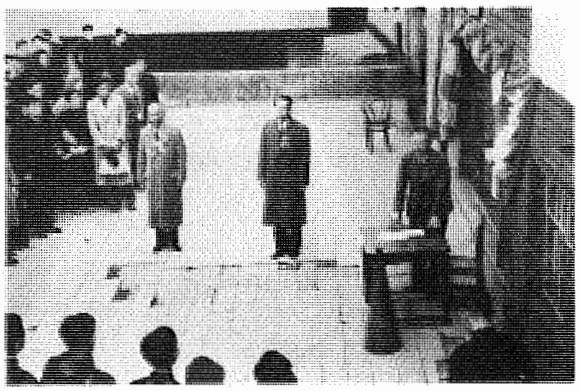
れ，最後の500mで精根尽きて東大，慶大に次ぐ3位に甘んじなければならなかった。この決勝レースは，1,500mから1,800m附近にかけて3艇が全く一線に並ぶという空前の好レースであった。

こうしてこの年も，執念に燃え，部の総力を傾注して奮闘したにもかかわらず，武運つたなく敗北に終わったのである。しかしそれは優勝へはあと一歩という期待を抱かせるに十分な迫力をもつものであった。

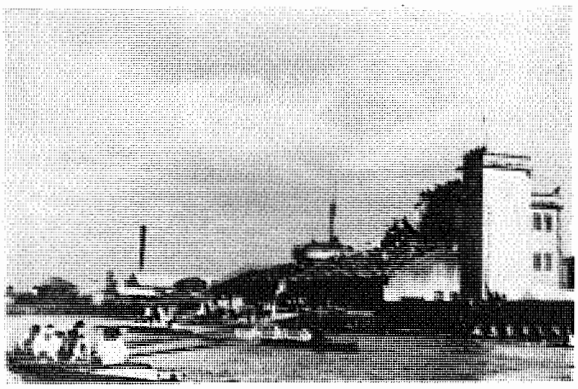
続いて飛躍のための基礎づくりというべき新人の勧誘と指導に移り，小平で組織的な勧誘を進め，前年と同様に交通費の補助その他を行いながら，かなり大勢の学生をクラスチャン・レースの練習に狩り出した。遊び気分の者もいたであろうが，橋人皆漕の理念に従って，できるだけ多くの学生がオールを握れるよう配慮された。結局HCS各組2クルーがクリンカー・エイトで練習を続けた。

一橋創立75周年記念ボートレース

この昭和25年の秋は一橋創立75周年にあたり，10月下旬にはこれを記念する一連の行事が行われることになった。ボート部としてもむろんこの行事には積極的に参加す



創立75周年記念レース開会式
左から，大森芳夫審判長，中山伊知郎学長，村松祐次端艇部長



75周年記念大会の盛況（向島艇庫）

ることになり，10月29日に向島艇庫を会場とする記念大ボートレース大会が盛大に挙行された。この準備にも大勢の部員がかなりの努力を傾けた。一般の学生のためにフィックスのオールがまとめて新調された。大学の手で，何年かぶりに艇庫の補修工事も行われた。当日は東大，早大，慶大，立大，東経大などの招待レース，附属，開成招待レースを初めとして，フィックスの弥次レースにはゼミやクラブを単位とする一般学生が21クルー，職員が5クルー出漕した。会社や銀行のレースにも9クルーが参加した。クリンカー・フォア，ナックル・フォアなどの試漕，対校クルーの試漕などが行われ，旧制（商大）対新制（一橋大）部員の対抗レースも行われた。

上述の新1年生のHCS対抗レースもここで行われ，先輩のHCS対抗レースもあった。飛び入りのおわんボートのレースには，山口，堀，杉本の三教授のレースも附け加わって，いかにも学園全体のボート大会という雰囲気が盛り上がった。消防庁音楽隊の演奏をバックに，最後にビア樽を抜いてコップ一杯ずつのビールで行った乾杯には大歓声が挙がった。

豪放磊落を身上とする端艇部員は，ともすれば一般学生の関心のありかには頓着しない傾向があったが，結果的に一般学生から隔絶された向島の小世界に引きこもってしまっている現実への反省から，このころには，「学園全体のボート部」を目指す努力が再び強められた。

戦後，報国団の解散に伴う一橋会の再建案が不成立のままとなり（一橋新聞383，384号），通常の学生自治会の中で端艇部は一般の運動部の一つとしての地位を有するに過ぎなかったから，戦前のような特権的地位を主張することも，また予算の配分に際して獅子の分け前を要求することも不可能であったが，ボートが一橋全体の名誉を担う代表的なスポーツであり，一橋人全体のためのボート部であるという自負はその後も持ち続けられたのであり，ボート部はながらく一橋会端艇部を称したのである。このころから学生自治会の代議員にも何人かの部員が選出されるようになった。国立の部室が整備されたのもこのころのことであった。

この25年の11月には各組とも例年になく多数の新入部員を交えて松戸や野田への遠漕を行った。この時点で部員の数は久し振りに80人を超えた。

翌年度のレースに備えて，対校クルーは12月5日から通い練習を開始した。増加する出費に見合う収入を確保するために，資金調達の仕事もさらに組織化が進められた。先輩に部の活動状況を逐次報告する必要から，すでにこの年の5月1日には四神

会報第１号，６月10日にはボート部だより（いずれも比較的簡単なガリ版刷り）が発行されたのであったが，主に先輩への活動報告を強化する目的で，26年早々には「一橋会端艇部部報」の復刊第１号が発行された。

第１号は活版刷りであったが，費用を切りつめる必要から，第２号以下は当分の間ガリ版の謄写印刷であった。用紙の入手についても先輩に配慮を煩わさねばならなかった。そしてまもなくこの部報は部員自身の連帯感を強める上でも予想以上に役立つことになった。

他方この時期の印象深い出来事として，台船沈没の一件がある。25年暮れのある日，台船が沈没しているのが発見された。潮の引くのを待ち，寒い冬の夜を徹して排水作業を行い，一旦浮上したものの，やがてまた沈没した。正月過ぎに再び同じ試みを繰り返した揚げ句，近くのある造船所へ曳航し修理を依頼したのであったが，この25年ころの日本経済を特徴づける深刻な金づまりと労使関係が絡んでいたのであろう，予定の期日に至っても修理は完了せず，代金の前払いが強要され，ようやく何人かの先輩方の保証で話はついたものの，引き取り後１日でまたもや沈没してしまうという有様で，こうしたことのために，26年春の行事は大幅な影響を受けたのであった。

さらに大きな問題は，艇庫の建物の沈下が進みつつあったことである。水害のために艇庫が水浸しになることはそれまでにもあったが，それに備えて岸壁の補強が行われたのとは逆に，艇庫内の床面は年々低下し，大潮の時には艇庫内のかなりの部分が水面下に没するようになった。

昭和26年

長期的な対策を考えなければならない時期にさしかかっているわけであったが，他方短期的な課題にも追われていた。部員の増加とは逆にオールは不足し，25年の春季大会では第一選手と第二選手が交代で同じオールを使わなければならないような状況であった。特に25年の東商戦で，オール不足が思いがけない形で重大な敗因につながったことが契機となって，先輩の間からオールの寄附運動が起こり，寄附者の氏名が記されたオールが艇庫に並ぶようになり，26年の対校クルーはそれぞれ特定の先輩の名の入ったオールを使って練習に励んだ。

艇の修理も必要であった。26年春には旧艇鹿島（フォア）とスカルがデルタ造船所へ修理に出されている。

第62回春季大会

26年の春季大会は4月22日に行われた。合宿は各組とも一斉に4月8日から例年通り2週間行われ，参加者各人が合宿費700円と米4升2合（6.3kg）を持参している。レースの結果は第二選手（クリンカー・エイト）はC組，第一選手もH・Cの接戦の末C組が優勝した。

新入生にフィックスを漕がせる必要が再認識されて，この年からクラスチャン・レースが再びフィックスで行われた。

5月3日の憲法記念レースは再び向島で行われ，エイト2クルーとフォアが出場した。6月3日の戸田レガッタにもエイト・フォア各1クルーが出漕した。

第3回東商戦

昭和26年の大きな変化の一つは東商戦が6月に繰り上げられ，剣牛（ケンブリッジ・オックスフォード）と同じ4マイル¼に延長されるとともに，かなり大がかりな行事へと発展したことである。むろんこれは端艇部の基本的な方針に沿うものであったが，また両校の多くの先輩の協力によって初めて可能となったことでもあった。この第3回から，この大会は朝日新聞社の後援を得ることになり，またNHKの実況放送も行われることになった。コースの設定についても水上警察署の協力が得られた。審判艇や放送艇を含む10隻あまりの観覧艇の手配については，日本郵船の特別の配慮に負うものであった。大会の開催を告げる赤と淡青のポスターが電車内を彩った。大会の費用を賄うために集めた広告がプログラムを埋めた。

対校の合宿はすでに4月末から始まっていた。この年の練習は前年に劣らず厳しいものであったが，本学のクルーがほとんど前年と同じで軽量であったのに比べ，東大は前年よりさらに重量化しており，勝敗はまことに予断を許さないものがあった。

6月16日，雨上がりの上，全面的な交通規制で静まりかえった川面を，水神から2艇が走り出した。そしてそのあとを追って，穏やかな下げ潮をまるで逆流させようとするかのように，審判艇以下の船隊が大波を立てて川を下った。一橋は前評判の見事なリズム，洗練された漕ぎ方がうまく生かせず，必死の努力は見る者にも感ぜられたが，じりじりと差をつけられ，艇庫前を過ぎたころには水をあけられて，ほぼ前半で勝負は決し，結局10艇身の差でまたもや敗北に終わったのであった。

この日の川筋は観衆で埋め尽くされた。むろん艇庫は先輩と学生であふれんばかり


三谷一二先輩（81歳）を囲んで

であった。かつて一高・高商戦で漕手として戦い，その無念の傷跡を癒し得ぬまま，血涙のうちに一橋端艇部を今日あらしめた（部報復刊5号24ページの小田健造による）81歳の三谷一二先輩も，このレースを見るために広島から出て来られた。艇庫の観覧席では，だれもが敗北をかみしめるように押し黙っていた。そして無言のうちにクルーの健闘をたたえた。それはおそらく実況放送を聞いていた全国の一橋人の気持ちにも共通するものであったに違いない。敗北はむしろボート部に対する一般学生の共感をかえって強めたかも知れない。そしてそれ以上に古い卒業生の関心を集める結果となったことは，このレースの後にあいついで開かれた古い年次の卒業生による激励会などからも察知できる。

この年の7月10日から5日間，対校選手団は他校に先駆けて戦後初めての銚子遠漕を行った。これには全日本選手権のために新たに編成されたばかりのフォア・クルーが同行し，各地で多くの人々の暖かい歓迎を受け，また宝山ではほぼ10年ぶりに卒塔婆を確認して故人の冥福を祈った。この遠漕は選手たち自身にとっても極めて有意義な，印象深いものであった。そしてそれに引き続き9月8，9日の全日本選手権に向けてのたゆまざる練習が，柵山，工藤両コーチのもとで進められた。春以来例年になく長期の練習が続き，かなり無理が重なったため，すでに東商戦の直前から入れ代わり病人が続いた。しかし練習は続いた。特に新人を主力とするフォアは苛酷なほどの練習が続けられた。フォア・クルーのために新艇「利根」が建造された。戸田入りは9月3日であった。

全日本選手権兼オリンピック予選

9月8，9日の全日本のレース当日，フォアは予選で商船大，準決勝で学習院大および東工大を破り，決勝では着実なペースで東北大および東北ローイングを振り切って優勝した。他方エイトは予選で慶大に敗れ，復活して準決勝で京大を抑えて決勝に進出したものの，慶大，東大に続いて前年と同様3位にとどまった。このレースのゴール前の慶東の接戦はすさまじく，慶大はこの優勝によって戦後初のヘルシンキ・オリンピックの出場権を獲得したのであった。一橋の艇速は例年よりかなり向上してい

たが，慶東の向上がそれをさらに上回っていたのである。

26年には，このほかなお若干の新しい動きがあった。一つは，この年から体育の正科に「漕艇」が加えられることになり，7月の5日から一般の学生約100人が艇庫に合宿し，体育科の臨時コースとしてボートの手ほどきを受け，それによって体育の単位を認められることになった。

もう一つはこの年から秋季小会を復活し，一般部員の練習の機会を広げたことである。前年の75周年記念大会の狙いを引き継ぎ，一橋祭の一環としてこれを行うこととし，学生や職員の弥次レースを行った後，ＨＣＳの対抗レースを行い，第二選手はＨ組，第一選手はＳ組が優勝した。フィックスによる学生弥次レースの出漕クルーは24クルーに達した。

せめて一般学生向きの水面を学校の近くに確保できないものかと，多摩川辺りを探し歩いたのもこのころのことであった。こうして部を広く一橋全体のものにしていくという目標に，一歩ずつ近づくことができた。26年8月現在の部員は110人を超えていた。

昭和27年

四神会の組織強化

24年夏から始まった一口月額100円の会費方式による募金活動は，多数の先輩の協力によって成果を挙げ，端艇部にとってはまさに干天の慈雨とも言うべき貴重な資金源となったが，部の活動が活発化するとともに支出も大幅に増加した。この後援組織を拡大していくためには組織そのものを整えることが必要であった。26年4月に京橋の竹葉亭で開かれた四神会では，会長候補に佐藤尚武，小坂順造，内田信也先輩らの名が挙げられ，副会長や幹事の選出に関しても検討が進められた。地方組織は未整備であったが，大阪では，毎年夏の関西地方の募金活動に犠牲的な協力を惜しまなかった高林定一郎，広瀬勇らの尽力によって，26年8月28日に四神会大阪支部が発会した。

ほぼこれと前後して，端艇部財政改善のための四神会費加入口数1,000口を目標とする拡充運動が進められ，広く端艇部の後援に関心をもつ卒業生にも参加を依頼した。その結果卒業年次会や勤務先ごとにまとまった加入もあり，目標到達は容易ではなかったが，運動の進展とともに部の財政はかなり大幅な改善をみた。こうした方式を形式上確認する意味で，27年4月20日の春季大会当日行われた四神会総会では新た

な会則が承認され，新会長に佐藤尚武氏を推戴することが決定した。

戦前の四神会は対校選手クラスの卒業生で組織されたいわば貴族的な団体であったともいわれるが，戦後その性格は変わり，特に専門部卒業者の組織であった墨堤会がほぼ学制改革の時期に事実上四神会の中に吸収されて以後は，極めて開放的な端艇部後援組織となっていたのであるが，そうした一橋卒業生全体に開かれた後援組織としての四神会の性格が，ここで明確に確認されたのであった。

四神会の連絡事務所はこの時期には事実上浅沼商会（浅沼英二，吉三先輩）のもとに置かれていたといってよいが，とりわけ27年以後はここで定例の昼飯会が開かれるようになり，連絡の中心となった。

四神会の組織強化の一環として名簿の整備も進められた。すでに23年の墨堤会名簿や24年の四神会名簿が当座の連絡には大いに役立ったが，戦中戦後の混乱期に連絡のとれなくなった先輩も少なくなかった。四神会組織の拡充のためにも，この機会に過去の出漕者名簿と照合しながら端艇部卒業者のその後の消息を調査し，その結果が，新たな後援会員とともに戦後初の活版刷りの四神会名簿にまとめられた。

むろん端艇部の支援は四神会の組織を経由するものばかりではなかった。特に26年の夏以後は，いくつもの卒業年次会を中心に，まとまった一時寄附金とか，オール8本の現物とかの寄附が相次いだのであった。これらの支援は，その同じ年代のボートの選手達が一般の学生達との間に持ち続けてきた緊密な精神的きずなの強さに負うものであった。その昔，一般の学生達があれほど熱心にボートに声援を送ったのは，選手達が自分達の「勝手」で漕いでいるのではなく，一橋全体の一員として行動し，一橋の名誉を代表して漕いでいたからであった。つまりそこでは純粋な精神的共同体が生きていたのである。いまこの時期に四神会組織の内外を問わず，かつての卒業生の広い層から物心両面にわたる支援が寄せられたのも，まさにそのような共同の名誉にかけて最善の努力が傾けられることに対してであり，しかもそれは好意的な「後援」なのであった。それにしてもこれだけ多数の卒業生の後援が得られるボート部は他の諸大学にはなかったし，一橋のボート部の復興がこれら先輩の後援に大きく負うものであったことは忘れられてはならない。

こうしてほぼ27年ころには，部活動のための外的諸条件が整い，内容的に一段と充実した活動が可能となったのであった。そしてこの27年ころは，同時に，部員の間で漕法に関する積極的な研究が本格化するようになった時期でもあった。

第63回春季大会

27年の春季大会は4月20日に挙行された。弥次レース，会社招待レース，OBレースなどが盛況のうちに行われたのであったが，4月特有の強い風波のため，たまたまS組クルーが2隻とも沈没する結果となり，レースは24時間延期されて21日に行われ，第一，第二選手ともC組が3連勝した。

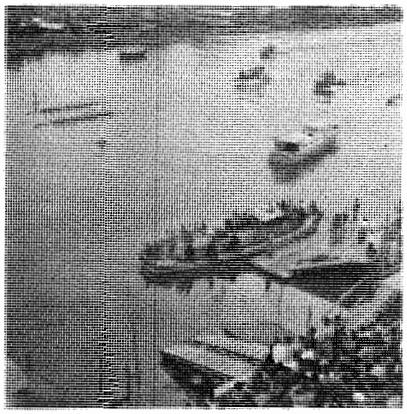
5月25日の新入生クラスチャン・レースには10クルーが出漕した。5月3日の憲法記念レガッタにはエイトとフォアが出場し，フォアは優勝した。6月1日の第4回戸田レガッタ兼オリンピック・クルー壮行レースでは，フォアがオリンピック出場の慶大クルーに約2艇身差で敗れ，三位にとどまったが，エイトにはジュニア第2クルーが出漕して優勝した。

この年の対校の練習はすでに前年の11月30日から開始された。クルーのうち旧制（商大）部員がほとんど艇を下り，前年フォアで全日本選手権に優勝した新人3人がそのあとを埋めた。コーチには長老級の遠山・畑両先輩も参加され，またトレーナーの佐藤（清）と補欠漕手の長友が終始合宿を共にした。この年からはまた東商戦にジュニア・クルーのレースも加わることになったため，合宿選手の人数は一挙に倍増した。合宿の食事も，健康管理も，前年よりさらに改善された。練習には陸上の各種トレーニングがとり入れられた。水上でもダブ・ペア艇やスカルなどによる多面的な練習が重ねられた。むろん練習はきびしく，クルーは毎日のようにフルコースを引かねばならなかった。

第4回東商戦

一橋のような宿命的な軽量クルーにはそれにふさわしい艇を設計する必要があるということは，すでに一再ならず指摘されていたが，それらの点をもある程度考慮に入れながら，より進んだ設計上の試みが遠山先輩を中心として進められ，その最初の作品が全長50フィートの新艇「玄武」となって姿をみせた。これは6月4日に進水し，6月15日の東商戦に登場した。

第4回東商戦は，薄曇りながら絶好のレース日和となり，OB各種目に一橋が勝利を収めた後，水神—厩橋間の2マイルで行われたジュニア・エイトのレースでは，抜きつ抜かれつの水のあかない大接戦の後，一橋は吾妻橋からゴールまでの最後の400mの間に1艇身の差をつけて初優勝した。



昭和27年6月第4回東商戦(向島艇庫前)

午後4時にスタートを切った対校エイトは前年同様観覧艇の大船隊を従えて水神前を好調にすべり出し，早くも白鬚橋で半艇身リードし，早稲田前の力漕と洗場のスパートで引き離し，東大のスパートに対しても「強く」で抑え，その後は着実に差をつけて5艇身差で遂に優勝を遂げた。

実に一高・高商戦以来，それは60年ぶりの見事な勝利であった。艇庫のバルコニーではだれもが感極まった表情でただ右往左往していた。帰還したクルーには万雷の拍手がしばし鳴りやまなかった。心を一つにして努力した結果を確かめ合うかのように共感の輪が大きく広がった。敗れ続けたあとにようやく手にした勝利があまり大きかったために，あるいは常軌を逸した振舞もあったであろう。ともかくこの夜の合宿所は，いつ果てるとも知れぬ歓声に包まれた。放送を通じて，また新聞の大きな記事によって，この勝報は全国の橋人に伝えられた。



東商戦勝利の後で，中央畑，左へ安井，中川，伊藤，最後列中央遠山，右から前田，広松，三好

小見川合宿

続いて7月には，対校クルーはスクラッチ・クルーとともに千葉県小見川に1週間合宿し，好条件にめぐまれたコースで遠山コーチの集中的な指導を受けた。佐藤トレーナーのもとで東商戦のジュニア・クルーを中心とする予備軍の合宿も続き，これが故障者の補充をもつとめ，全体として活気のある合宿が続けられた。

しかし今年こそはの期待を抱かせた9月の全日本選手権の当日には，予選ではからずも早大に敗れ，復活して決勝に進出したもののまたもや3位にとどまる結果に終わ

った。一橋は優勝候補の呼び声が高く，また事実，いざという場合には抜きかえす実力を十分備えていたはずであったにもかかわらず，決勝レースでは終始東大にリードされ，最後の500 mでは早大にも追い抜かれてしまった。フォアも準決勝で，優勝校東経大に敗れた。こうしてあらためて，優勝というものが技術と体力と精神力のすべてにわたる総合力の上にはじめて可能であることを思い知らされたのであった。

復活第2回（通算17回）の秋季小会は10月26日に行われ，弥次レースや招待レースのあと，第二選手ではH組が，また第一選手レースではC組が優勝した。学生弥次レースには15クルーが出漕した。

漕法・造船技術の進歩

27年から28年にかけては，上述のように，漕法と艇の設計の両面にわたる技術的な諸問題に部内の関心が高まり，その研究が進められるとともに技術的水準も向上しつつあった。戦後この時期までほぼ一貫して一橋は戦前に形作られたその伝統的な漕法を守り続けており，それは鈴木善照氏＝ベルリン・クルー型の東大の漕法とは素人目にも分かる程の際立った対照を示していた。それはこの20年代の後半に至っても基本的に変わることはなかったが，部員たちの間での自発的な研究や討議の中から描き出されつつあった新しい漕法理論の性格は，結果からみると，具体的な闘争相手との精神的な「勝負」としてのレースのための漕法や戦術の理論というよりはむしろ，客観的な記録そのものへの挑戦という意味でのレースに有効な漕法理論，もしくは純粋力学志向の理論に近づきつつあったということができるであろう。

そしてこの後者の立場からすれば漕法との緊密な関連で艇やオールの設計上の合理性が徹底的に追求されることになるのも当然であった。宿命的な軽量クルーにマッチした小艇ないし軽量艇への関心とその研究はこのころのわが一橋では他校に先駆けて進められていたのであり，それが具体的な設計段階に生かされることになるのは，岡本造船所の横山技師の協力が得られた昭和29年はじめのことであったが，27年の「玄武」や28年進水の「青龍」など，従来の伝統的な型式からみると風変わりな新艇は，ある意味ではその先駆けをなすものであったといえるであろう。

ともかく永年の経験の上に貴重な理論を打ち立てた遠山先輩と，若い実践的科学者である佐藤清や佐藤和実らが推進役となって，漕法ないし，技術面の活発な研究が部員たちの間から積極的に進められ，伝統的な漕法と新しい科学主義の結合の上に新しい一橋ローイングの理想像が模索されていったこと自体が，きわめて意義深いことで

あった。

昭和28年

第5回東商レースに2連覇

ところで28年の対校クルーは約半数の顔ぶれが代わったが，選手が大型化したわけではなかった。これをカバーするために，堀川コーチの指示通り，選手たちは練習量を増やし，またその効率を高めることに努力した。正月過ぎの厳冬にも合宿が行われた。

28年の年間行事日程は，ほぼ前年と同様であった。春季大会は4月19日快晴の絶好のコンディションのもとで行われた。第二選手ではC組が問題なく他を抑えて4連勝を達成したが，第一選手レースは終始僅差で熱戦が続き，白鬚橋をSとほとんど同時に通過したHが，最後にわずかばかりの差をつけて優勝した。先輩の来会者がかなり多かったのもこの年の特徴であった。

新入生クラスチャン・レースは5月24日，10クラスから11クルーが参加して盛況裡に行われた。この行事はすっかり定着した。5月3日の憲法記念レガッタ（向島）には，エイト・フォア各1クルーが出漕し，フォアが優勝した。このレガッタには全米スカル選手権保持者ケネック氏が出場し，注目を集めた。

6月21日には第5回の対東大戦が曇天の好コンディションのもとで行われた。ジュニア・クルーのレースは接戦の後1艇身半の差で敗れたが，対校では早稲田前と洗場のスパートが効いて，艇庫前で1艇身，言問で2艇身と差をあけ，その後も着実に差を広げて7艇身差で優勝した。昨年に続く連続優勝に，選手たちも一段と自信を強めた。

7月12日から17日まで体育科の臨時コースが開かれたが，この年の参加者は約40人であった。これとほぼ時を同じくして対校選手団が銚子遠漕に赴いた。そして間もなく7月19日から対校の合宿が続行された。

第1回朝日招待レガッタに全勝

この合宿の期間中に，この年からまた一つ新しい行事が附け加わった。朝日招待レガッタがそれであり，この28年には8月16日に東，早，慶大と本学の4校が招かれ，吾妻橋—大倉別邸間1マイルのコースで挙行された。招待クルーは前年の各種競漕会の成績を考慮して選抜されるものとされ，最初の年はたまたまこのころのいわゆるビ

ッグ・フォアが揃って出場することになったが，隅田川初の4杯レースでもあり，水準の高いレースでもあるところから人気をあつめ，当日は数万の観衆が両岸を埋め尽くした中で，白熱のレースが展開された。



昭和28年4月春季大会H組祝勝会（前列中央は高垣寅次郎先生）

ほとんど差のつかないまま4艇一線に並んで進み，言問で早大，山谷カーブで慶大がわずかにリードしたのち，洗場カーブを過ぎて早大が出，逃げ込むかにみえたところを一橋が追い込んで最後に2尺差で勝つという，めまぐるしいレース展開であったが，OBの2種目とも四神会が独占したこととあわせて，ともかく一橋が漕艇界の伝統的な地位を十分に回復し，安定した実力をもっていることを内外に強く印象づける結果となった。

このあと対校選手団は戸田入りし，植野先輩の犠牲的な援助によって全日本選手権へ向けての最後の仕上げのための合宿練習を続けることができた。9月5，6日の全日本には，対校クルーと並んで，スクラッチ・クルーが一橋ローイング・クラブの名で出場した。おそらく今年こそは優勝は確実と思われた。しかしこの年の全日本選手権は，はからずも翌年の北大旋風の前ぶれを示すかのように，地方勢の活躍が目立ち，また早大が粘り強く戦って勝利をつかんだのでった。

エイトの予選で，一橋は2尺差で北大に敗れた。出漕14クルーのうち予選を通過したのは早大，慶大と京大，東北大，北大であった。決勝レースは北大，早大，一橋の3校で争われたが，一橋は前半から早大との間で激しいスパートの応酬を繰り返し，後半に入ってやや生じた遅れを猛烈なスパートで追い上げたが，遂に早大には逃げ込まれ，北大にも3尺の差をつけられて3位にとどまる結果となった。その年の5月にボートを始めたばかりという新進クルーの北大は，記録そのものと戦っているかのような，まことにクールな漕ぎっぷりで，伝統校を次々となぎ倒した。

こうして一橋は隅田を我がものにすることはできても，戸田で覇権を握ることは，この年にもまた成功しなかった。何はともあれ戸田に拠点を設け，戸田の水になじむ



向島艇庫の食堂にて

ことがどうしても必要なのではないかという意見が，このころからいよいよ本格的に出始めた（前田正，戸田艇庫建設案，部報復刊9号22ページ）。たしかに戸田の静水は隅田の流水とは違うし，漕艇界の行事の重心は年々戸田に移りつつあった。しかし戸田は，国立や小平からはあまりに遠い，静水ならば相模湖はどうだ，今に与瀬へも電車ですぐ行けるようになる，という見通しも，他方ではあった。部を終戦直後の状態からどうにか建て直した時点で，よく考えねばならない一つの曲がり角に，さしかかっていたのである。

昭和20年代の3つの特徴

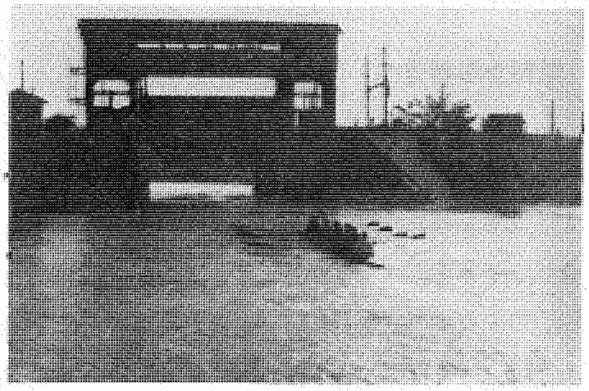
向島から戸田へ

この時点で一つの区切りをつけるとすれば，戦争直後から昭和28年までのボート部再建の時代は，同時にまた次のようないくつかの点で特徴づけられる時代であったということができる。すなわちそれは第一に，部活動の大部分が向島を本拠とし，隅田をわが物として繰り広げられていた時代であった。学生達は艇を駆って川沿いの，また運河沿いの至る所に出没し，川の自然な流れの微妙な変化を観察し，人々の暮らしの様々な断面を学び知った。

向島艇庫は，川筋のボートレース会場としては無二の立地条件を備えていたが，この艇庫から眺めるだけでも，季節による川の表情の変化とか，人々の日常の営み，それにつきまとう哀歓の様々な余響が感じとられるのであった。昭和20年代にはなお数多くの行事がこの向島艇庫を会場として行われていた。特に20年代の後半に入ると諸大学のボート部ばかりでなく，実業団関係の利用も目立つようになった。

あらゆる意味で日本ボート界の最大の拠点としての地位を，わが向島艇庫は持ち続けていたのであった。しかしすでに触れたように，川面が様々なボートでにぎわってくるにつれて，物理的な意味で隅田をわがものとすることが困難な時代がまもなく訪れた。とりわけ皮肉にも，食糧事情の改善と暮らし向きの向上をもたらした26〜27年以後の景気上昇は，河川交通量の増加を惹き起こし，隅田をわがものとする時代が過

ぎ去ろうとしていることを気付かせることになった。


昭和20年代の堀切の風景

流れ漕法から静水漕法へ

このような隅田に比べると，戸田は様々な攪乱要因から保護され，外界から隔絶された人工的小世界である。隅田では潮の流れや早さが刻々と変わるから，同時に艇を並べて雌雄を決するのでない限り，艇速を比べる客観的な尺度は存在しない。そこでは勝敗こそが決定的であり，勝つためには精神的要因，とりわけ強靱な意志というものが，しばしば決定的な意味をもつことになる。これに対して戸田では記録というものが格段の重みをもつことになり，記録に自信をもつクルーは，レースの駆け引きに巻き込まれることなく，ストップ・ウォッチをにらみながら最良のペースを守っていこうとする。端的にいえば記録という目的に向かって力学的合理性が，すみずみまで貫徹されることが重要であり，その合理性は先にも触れたように用艇の設計にまで直接的につながりをもつことになる。

こうした新しいローイングの方向は，一橋が独自に取り組む必要を感じていたものであり，程度の差はあれこのころには各校が目指していたものであったであろうが，29年の全日本選手権（この年初めてイギリスのケンブリッジ大学クルーが朝日新聞の後援で来日，参加した）で，北大がいちはやく小艇を駆って優勝したことによって，新しい時代の開幕を人々に強く印象づけることになったのであった。もちろん北大の漕法，とりわけ艇速のマイナス要因を極小化して一定の艇速を維持することに主眼を置いた漕法が，隅田のようなラフ・ウォーターにも無条件に有効であるとは限らない。むしろ戸田のような静水には隅田とは違った漕法が，どんな威力を発揮し得るものかを，ドラスチックな形で示したのがこの北大旋風であったというべきかも知れない。

ともかく，もしこれを技術主義または現代主義のローイングと呼び得るとすれば，それとの対比において28年以前は，多分に精神主義ないし伝統主義のローイングが未だ大きな影響力をもっていたということができる。これをこの時期の第二の特徴として挙げることができるであろう。

飢餓から希望へ

このような相違はローイングの技術面に限られるものではない。単純化していえば戸田ではレースは競技であり，その限りのものにすぎないのに対して，隅田ではそれは勝負であり，名誉と価値のすべてをかけて争われる。勝つという明確な意志を持ち様々な予測しがたい諸困難に対して，体力ばかりでなく知情意の総力をあげて対処し，力を合わせて見事その目的を果たすことを誇りと感ずるような，いわば古風なボート観と対比してみれば，戸田では，逆に予測し難い諸要因が可能な限り遮断され，記録の短縮のためにあらゆるものが管理され，合理化される。一人ひとりの学生にとって，ボートを漕ぐということの意味も，レースに勝つということの意味も，かなり異なったものとならざるを得ないことは明らかであろう。こうした現代風のスポーツへの変質は，むろんかなりの時間をかけて進行するのであって，古いものがさほど急速に消滅してしまうわけではない。しかしその中で，やはり20年代は，かなり濃厚に古い雰囲気を残していた時代というべきであろう。

そこではまだ多くのものが未完成で，不足しており，部員達はボート以前の食糧探しの段階から力を合わせて取り組んでいかなければならなかった。喜びも苦しみも共にしながら全力を挙げて，全人格的に取り組むべき対象，解決すべき課題が，そこには山積していた。そしてその中から学生達は様々なことを学び取り，成長していった。

向島という町は，そのような，ややもすれば，けた外れな若者達の成長の過程を柔軟に包み込んでくれる，親しみやすい町であった。学生達が飲み食いにしばし立ち寄った店，それにふろ屋や床屋やたばこ屋ばかりでなく，町の多くの人達が，学生達の一種の特権を認め，好意を寄せてくれた。学生達もそれぞれに，この人間くさい町に親しみを感じていた。多情多感な青年達の生活の舞台としては，戸田と比べれば，向島は格段に恵まれていた。

この時代は貧しさと希望が共存している時代，または飢餓感のゆえに大きな希望に向かって背伸びをしようとする時代，悪条件のゆえに全力を挙げて課題に取り組まざるを得ない時代であった。そしてその意味で成長期の若者のためには，むしろ恵まれた時代であった。そういった点を，いわば第三の特徴に数えることもできるであろうか。

部員の中にもいろいろなタイプがあったが一般の学生に比べれば，やはり，対象が

何であれ，行動力の大きい者が目立った。

厳しい合宿のさなかでも授業を休まなかった者，成績の優秀な者も多かった。他方では何十日も合宿の飯炊き係に専念する者もあった。それも偉いが，そのうまくもない飯に一度も不平を漏らさなかった選手達も，立派だった。勝つまでは欲しがらず，黙々と努力を重ね，卒業してからは高度成長時代の第一線で活躍することになる，あの昭和ひとケタ世代が，部の再建のために力を合わせた時代，それが20年代だったということになるであろうか。

28年ころにはもはや戦後の諸問題はほとんど片付き，それに代わって小艇の時代，そしてまた日本の漕艇界が国際的交流を本格的に進めて行く時代，そして一橋が次々と輝かしい戦果を収めて行く第三の黄金時代に入ろうとしていた。

第10期　第三黄金時代（昭和29～34年）

概　　説

戦後再建時代を終えて，一橋端艇部は漕艇技術，用具用艇の研究進歩に格段の成果をあげた。また日本漕艇界全体としても，北大，東北大，京大等の地方勢の活躍が目立つとともに，国際的交流もはじめられた。従来日本のボートの国際的交流としては，全てオリンピック（並びにそれに付随するもの）によるものであったが，昭和29年に，ケンブリッジ大が初来日（準決勝で，優勝した北大に敗れる），更に，昭和34年には，オックスフォード大が来日した。わが一橋は全日本決勝で，オ大と対戦し，劇的な接戦の末，写真判定による30cmの差でこれを破り，昭和22年以来，12年振りに全日本優勝の栄冠を奪回した。この昭和34年にはその他東商戦，朝日レガッタ（北海道茨戸）にも勝ち，対抗レースは完勝となった。しかし昭和34年に先立つ数年間，一橋は常に全日本において優勝候補の一つではあった。昭和30年には全日本決勝で東大に敗れたものの，東大，京大とともにメルボルンオリンピック派遣候補クルーに選ばれてもいる。東商戦でも昭和27，28，30，34年と優勝しているし，全日本でもフォアでは，昭和26，30，32年と優勝している。しかるに肝心の全日本エイトが常にいま一つのところで勝てなかっただけに，この昭和34年の完全優勝に対する喜びは大きかった。と同時にこれが単に昭和34年に忽然として具現したものではなく，過去の長い一橋端艇部の伝統の上に立って，脈々と受継がれて来たものが，それ迄も当然実現するべきところ，何らかの些細なマイナスが原因で勝てなかったに過ぎなかったのであった。

全日本では優勝を逸していたものの，部活動としては，非常に活発であった。村松端艇部長の指導が行き届き，各方面に陣頭指揮をとられて，一橋ボートを隆盛に導かれた。先生の指導理念はボートを人間育成と教育の場とする一方，一橋学園の中における多くの人々の参加と支持を得た全学的な「一橋のボート」を確立し，その中心に端艇部を据えて育成するということであり，強固な信念の下，運営，管理面の諸問題についても，実務的な面に到るまで，中心的役割を御担当になり，奮迅の活躍をされ

た。部員数も増加し，昭和33年度には124名を擁している。戦前はともかく，いまや一橋大学で，全日本優勝の可能性のある運動部は，実質上，端艇部しかない。部員の意識，誇りも高かった。校内レースも年々盛んで，更にはクラスチャンレース（正課体育授業時間出席の単位が与えられた），教職員対抗レース，一般学生弥次レース，寮対抗レース，体育臨時コースなど，向島，戸田に孤立する端艇部でなく，学校側，一般学生に理解を得られる端艇部にしようとの努力が試みられた。ただかかる一般学生をも対象とする広い意味での端艇部活動のためには，用艇用具が不足であった。そのため，第一物産（三井物産の前身），東京海上，安田火災，東洋棉花などの実業団の御協力により，艇，オールを借りて使用した。更には理事寺本隆一の提唱で，昭和30年の80周年記念一橋祭から，端艇部の展示（オール，スカル，その他写真など）が行われ，橋人皆漕の理想にまでは行かずとも，端艇部に対する関心が一般にひろまり，更には応援部創設（昭和31年）とも相俟って，特に東商戦における一般学生の応援は年々多くなり，端艇部員を感激させた。しかし，かくして増加した部員に対する校内レース用艇の不足，活発な部活動による経費の増加は，結局端艇部財政の慢性赤字を生じ，部財政の再建が，各年度代表幹事，会計幹事の頭を悩ます大きな問題であった。昭和34年の優勝をチャンスに，部一丸となって財政再建を果たすべく，11月より750万円を目標に，特別募金が開始される。また昭和31年より卒業生の桜井安彦，金秀太郎のもとに，野田正道，中川学ら有志学生が参加して，部史編さんの事業が，明治初期からの資料収集という地道な努力の積み重ねで開始された。

なおわが一橋の有する向島艇庫は東洋一と称されるもので向島隅田公園の北端に巨大なマーキュリーの校章をかかげてそびえ立っており，隣の東大艇庫とともに日本漕艇界の中心的施設として，全日本（戸田）を除く各種のレース，即ち早慶レース，朝日レガッタ，お花見レガッタ，各実業団レガッタ等にも利用された。また四神会は向島艇庫2階の四神会室に本部を置いていた。四神会の中心となる方々は，日本橋のそばや「砂場」の2階で昼食をとりながら連絡や運営の話し合いを学生の理事又は会計幹事を交えて行っていた。後，四神会の機動的な運営を図るため四者会（H坂岡操及びその代理として宮沢文雄，C畑弘平，S高橋保幸の各組代表と村松端艇部長）が設けられた。

昭和29年

漕艇技術の研究進歩

戦後再建時代を終えて，日本漕艇界全体とともに，一橋大学端艇部は漕艇技術（用具用艇を含む。）の研究進歩に格段の成果を上げ，さらに国際的交流も始まってきた。本年漕艇界全体の関心を集めた出来事は，名門ケンブリッジ大クルーがはるばる来日（9月4日）したことである。またそのケ大が全日本（同11，12日戸田）でも朝日レガッタ（同19日向島）でも予想に反して振るわなかったのに，昨年からすい星の如く進出してきた北海道大学が記録破りの艇足で優勝したことも特筆に値する。昨年来，北辺の北大，関西の京都大学と地方勢の活躍が目立ってきたが，北大は昨年の決勝第2位の余勢を駆って，ついに本年は秩父宮杯をして，初めて津軽海峡を越えせしめた。学生数から見て，ライトクルーたることを宿命づけられているわが一橋大学は，ヘビークルーに伍しつつ，そのマイナスを漕法とファイティング・スピリット・アンド・ユニフォーミティで補って健闘してきた。

しかし同様の条件にあった北大は，徹底した科学性でわが一橋大学を上回った。（コーチ堀内寿郎・後に北大学長。）本学の努力が足りなかったというより，北大の合理性追求の程度が前代未聞，空前の素晴らしさであったことを認めるべきであろう。北大のタイムが6分9秒台という大幅な記録更新であったことからも，それがいえる。艇やオールの設計から漕法に至るまで，一貫して技術の追求が北大によってなされた。ぬれ面積を最小にした船型，変型オール，加速度漕法など，北大は「科学するボート」を合言葉に全日本を制覇した。漕艇界にはこの北大の優勝をきっかけとして小艇ブームと，一種の技術主義が呼び起こされた。具体的な相手クルーとの精神的闘争としてのボートレースから，客観的な記録そのものへの挑戦の場としてのボートレースへの変化を，漕艇の歴史の重要な指標にとろうとするときには，この北大の優勝という出来事のあった29年は，重要な区切り目の年であるといえよう。

白虎の建造

本学とて単に精神主義でボートをしている訳ではなかった。むしろ文科系の学部しかない学校としては，科学性・合理性追求の努力がよくなされていたといえる。いち早く体躯に見合った小艇の研究に取り組んだ。宮沢文雄先輩（昭和2年）を中心とす

る先輩の力で50万円余を募金し，この資金によりコーチ用のモーターボート１隻（30年３月進水）のほか新艇「白虎」を進水させた（７月１日）。

終戦後はどの大学もそのシェルエイトを「デルタ造船所」にしか注文していなかった。本学はあえてこのしきたりを破り，新進のヨットデザイナーたる横山晃設計技師を擁する横浜の「岡本造船所」に発注したのである。同造船所もよくわが一橋大学の期待にこたえて努力してくれたが，同技師の熱意と献身はそれを上回るものであった。（この後，数年間本学のエイトはすべて同技師の設計，そして同造船所の建造するところとなる。すなわち白虎54，朱雀56，玄武57，青龍59など本学研究チームの中心は昭28の佐藤清）。

その結果，スパニッシュシダーのスキン，マホガニーのガンネル，かま首を上げて疾走する，特徴のあるスタイルの白虎54が誕生した。全日本では敗れ，朝日レガッタでも曳船の攪乱で切り込んだため真価を発揮できなかったが，その優秀性は他学，ことに遠来のケ大の連中を十分驚かすに足るものであった。

食事の栄養学的研究

さらにバックの面では２年生の小原順君により，対校選手の食事の栄養学的研究が行われた。この研究は国立栄養研究所栄養生理部長の鈴木博士，向島保健所の逸見栄養士のほか女子栄養短大のスポーツと栄養研究グループの人たちの協力で行われた。さらに本学で体育医学を担当している堀内助教授，教育大体育学部の小川助教授その他の専門家により本学クルーについて，体力面(種々の体力)検査精神面（向性検査，クレペリン検査）生理面（内的諸機能の検査）と総合的な調査も行われた。ある日の献立（７月27日)を例示すると，＜朝＞みそ汁（豆腐，油揚げ，わかめ)，卵，塩もみキャベツ。＜昼＞アジの空揚げ，ポテトサラダ，トマト。＜夕＞ポークカツ，ミルクスープ（じゃが芋，にんじん，玉ねぎ入り)，キャベツ。主食は米１合５勺(225ｇ)。間食に牛乳１合（180cc)，コッペパン１個。１日当たりカロリー3568カロリーという充実した内容であった。

全日本選手権と朝日レガッタ

北大旋風に見舞われたこの全日本選手権では，本学は準決勝で宿敵東大に敗れ，決勝に進出できなかった。優勝北大，２位東大，３位早大。順位決定戦でＢ組１位京大，２位本学，３位ケ大。Ａ組１位慶大，２位東経大，３位同志社大。フォアは決勝に進

出しながら，キャンバスの差で惜しくも中大に敗れ，2位となった。6月20日に行われた東商戦（向島4マイル¼）は一昨年，昨年と優勝しており，3連勝をねらったがおよばず，ジュニアは勝つ。9月19日全日本のあとで向島で行われた第2回朝日レガッタは，夜来の暴風雨が収まり快晴であったが，西の風すさまじく，濁流奔流のラフコンディションで行われ，予選で逐船に追われた曳船の起こす波で攪乱をかぶり切り込んだため，前半1艇身勝っていながら早大に敗れ決勝進出できなかった。

しかしこの年に成果がなかったことは，決して本学端艇部の衰退を意味するのではない。むしろこの年の反省の上に立って，より躍動する本学端艇部第三黄金時代への幕開けの年であった。10月1日寺本隆一理事以下の役員が決定したが，12月6日の部員総会でバックの新体制も論議された。29年度の四神会収入92万7,000円であった。

校内レース

第65回春季競漕大会は4月25日向島で開催。チャンは1艇身半遅れていたS組が逆に抜き返すという稀に見る好レースで優勝した。セコはH組。第65回クラスチャンレースは5月23日に行われ14クルー出漕。秋季大会は10月31日向島で行われ，チャン，セコとも熱戦の末H組が優勝した。またケ大が来日し，一橋艇庫を使用したため，三階合宿所，台船など，向島艇庫の修理が大学当局により行われた。

昭和30年

ボート競技の中心が隅田川から戸田へ移っていくのは，前期でも述べたように，川の汚染，護岸工事によるコンディションの悪化による時代のすう勢であった。せめてバラックでもよいから戸田に艇庫，合宿所が欲しいという気持ちは次第に強まってきた。さらに都内の他大学に比べて都下国立に学校があるという不利を補うため，大学の近くに水面を得たいという願望も強く，何とか相模湖に進出の拠点を確保したいとの要望も大きくはなってきたが，まだその具体的見通しはなかった。

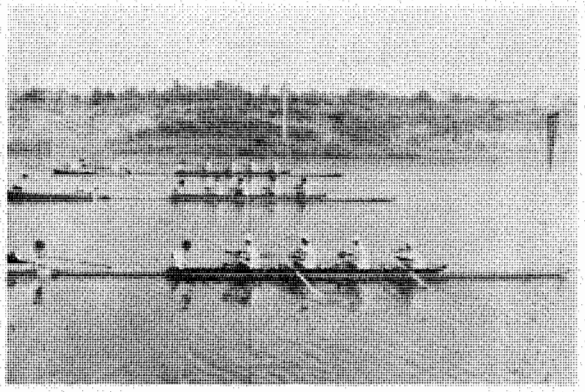
その相模湖では，漕艇コースが開設され，相模湖コース開きレガッタが開かれ（6月12日）本学も対校ストローク・フォアがナックル・フォアで出漕し，東大，教育大に対して大差で優勝した。日本では毎年優勝候補の一流クルーに伍していながら，いま一つのところで優勝できなかったが，翌年がメルボルン・オリンピックの年でもあり，対校レース，校内レース，その他部活動は大いに盛り上がりを見せた。



昭和30年全日本フォア優勝
前列左から　石井，江崎，崔，後列土井，瀬田(全員2年生)，佐藤コーチ

第7回東商戦

第7回東商戦は5月29日，向島4マイル¼（水神から永代まで）で行われた。夜来の雨降り続く悪天候ながら，本学中山・東大矢内原両学長も迎えて盛大であった。対校レースは，佐藤清（昭28）の率いるわがクルーが前半の厩橋まで½艇身リードし，正に水のあかぬ大レースであったが，同橋通過後，不幸にして東大2番のララックがはずれ，世紀の大接戦となるべきレースはあっけなく幕となり，結局大差でレースが終了した。



全日本フォア決勝レースのスタート

全日本レガッタ

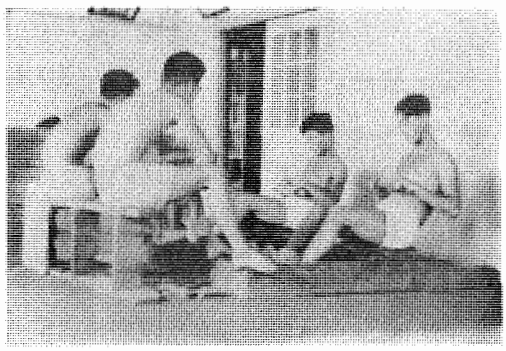
この余勢を駆っての全日本選手権レガッタは，メルボルン・オリンピックの代表候補の第1次予選を兼ねて9月3，4日，戸田で行われた。しかし選手，バック，先輩と一丸となってのこの一戦に，残念ながら勝利の女神は遂に我に微笑まず，宿敵東大に名を成さしめた。予選で中大に敗れ，敗者復活で浮かび上がって，準決勝で中大に報い決勝進出をきめた。しかし決勝で京大に水をあけたものの東大には及ばず，2位となった。なお決勝に残った本学，東大，京大の3クルーは，明年のオリンピック派遣代表決定の第1次候補に指定された。しかし，ジュニアクルーから選んだ全員2年生のシェルフォアは見事優勝した。ナックルフォアは残念ながら2位となる。全日本に先立ち8月21日向島1マイルコース（吾妻橋—大倉別邸）で第3回朝日招待レガッタが行われたが，決勝で東大に敗れた（参加，本学，東大，早大，慶大，中大，立大の6校)。その他対校レースは，5月3日の憲法レガッタ（向島1,000mコース)，11月20日の第3回東京地区国公立対校レガッタに参加し，いずれも優勝している。

各種校内レース

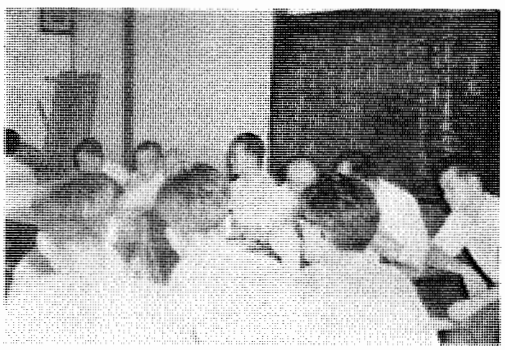
第66回春季競漕大会は4月17日に行われたが，風が強く，第二選手のレースのみ行い（H組艇は白鬚橋上流で沈没），翌18日に第一選手レースを行い，チャン・セコともにS組が優勝した。本大会より，対校分離が行われ，各組は選手を揃えるのに苦労した。また多くの議論の結果，全日本に勝つことを全てに優先して決められた対校分離ではあるが，その反面，対校クルーが従来有していたHCS各組に戻っての指導者たる機能がなくなり，単に対校クルーの一員としての機能しか有しなくなったことが，端艇部全体に与えたマイナスを忘れてはならない。従って本年は対校分離に決定したものの，以降各年でも分離，非分離が議論された。第20回秋季小会は10月30日行われた。春に引き続きコンディション悪く，H組第二選手艇が沈没するという事故もあったが，チャン・セコともにC組が優勝してレースは成立した。

学園と一体化した部活動

レース以外の部活動も，寺本理事のもと，財政再建と，一般学生との交流を主軸に



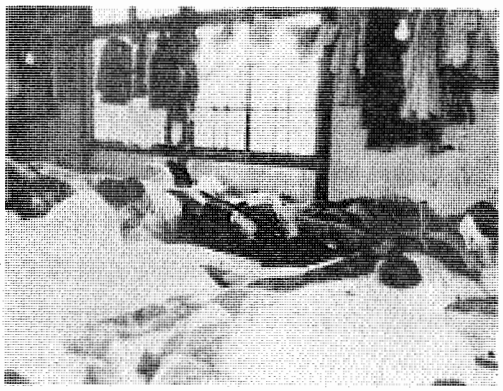
練習



向島風景



先輩の話を聞く



食堂

ふとんに入って

精力的に行われた。昨年からの募金により，３月26日コーチ用のモーターボートが進水し，マーキュリー号と命名された。用具の充実の一助にと続けられているレッド・オアー寄附運動は既に70本の実績を挙げ，さらに続行された（オール１本4,000円）。ただ物価の値上がり，部活動に伴う経費増等で，端艇部積年の「金詰まり」状態は，ますます悪化し，四神会拡充運動の呼びかけが強く行われた（１口月額100円）。

５月15日に行われたクラスチャンレースには，金ピカの徽章，真新しい学帽の新入生が15クルーも参加して，なごやかな中にも懸命のレースが展開された。さらに秋季小会には，弥次レースに一般学生が多数参加したし，東商戦には，本学運動部幹事長（排球部）を招待するなど，一般学生を向島に呼び寄せ，ともすれば，国立を遠く離れて孤立し勝ちであるボート部に理解をもってもらう努力がなされた。

逆に，秋の80周年一橋祭には向島より国立に出向き（秋季小会も一橋祭参加）端艇部はじめて本館38番教室にて展示会を開いて，デモンストレーションを行い大いに好評を博した。出品物は第１が端艇部年表，明治大正期出漕者名簿，部報等，また第２にボートの知識として図解，写真，スカル１隻，バック台１個，第３にレース記録の部として，東商戦，朝日レガッタ，全日本等の記録写真，優勝カップ，トロフィー，ならびにＨＣＳ対抗レースの戦績表，カップ，合宿生活ならびに艇庫周辺写真約40葉等であった。なかでも本学，東大，早大，慶大，京大，ケ大のオールの展示は，そのカラフルさも伴って大いに喜ばれた。ときにはバック台の実演まで行った部員の努力により，一般学生のボートに対する理解関心が向上することが予想され，ひいては橋人皆漕の理想とまではいかずとも，ボート部の層が厚くなっていくことが大いに期待された。

また学校で水上練習が出来るようにと，小平に玉川上水を利用して戦前使われていたローイングタンクを復活しようとの試みも行われた。残念ながらこの件は多額の費用を要する反面，折からの財源難で，具体化するには到らなかった。

昭和31年

メルボルン五輪出場ならず

この年は過去における連敗の記録（昭和３年から10年までの８年間）を上まわり，22年の優勝以後の９年間連敗の記録となった。しかし本学のスポーツで一流に伍して伝統を守っているのは，今やボートだけである。しかも東，商，早，慶大と名門ボー

ト部に列しながら，未だオリンピック代表の栄冠をいだいたことがないのを，心中だれもが悔しく思っていたのだから，今年のオリンピックこそは本学クルーをメルボルンへと願わざるを得なかった。四神会は声を大にして後援に乗り出し，端艇部（寺本理事）の働きかけで学内には応援団も組織され，バックメンは東奔西走して活動した。クルーもまれに見る粒ぞろいで，キャプテン（高橋泰和）のもと意気大いに盛んであった。堀川コーチ以下コーチ団もスタッフが整っていた。コーチ団の指導のもと，岡本造船所および，その横山技師の心魂こめた製作でエイト設計史上画期的な新艇「朱雀」もできた。「このボートを中心にしてこれら関係者が団結して一つの目標に向かって協力活躍したことは尊い経験である。本学の歴史には過去に大小幾回かのかかる記録があるが，この年のオリンピックに際してのこの努力は，レガッタの勝敗を離れて十分に評価さるべきことである(大10卒・森茂二郎)。」

第8回東商戦

第8回東商戦は6月2日向島で行われた。東大はオリンピック候補クルーとして，OBが入っているため，対校レースは行われず，ジュニアレースのみが行われた。この件についての経緯は次の如し。前年11月末ころ東大から，オリンピック候補クルーにはOBが入っているから，その候補クルーを除いて東商戦のために編成するエイトを出漕させるという話があり，本学側でそれを認めるかどうかが問題になった。12月中に態度を決定すべきであったが，遅れて1月になり，対校レースでありこちらが学生のベストメンバーを出漕させる以上，東大も学生ベストメンバーすなわちオリンピック候補クルーを解体して学生のみのクルー編成とすべきであると要求することになった。東大と会合を開いた結果，東大としてはオリンピック候補クルーを解体して出漕させることはできないとのことで，代案として，一橋もオリンピック候補クルー以外のクルーを出漕させてはどうかと言ってきた。これに対して本学は第2クルーのレースでは対校レースとはいえないと反対。結局その他の案も検討の挙げ句，やっと4月になってジュニアレースのみ行うことが決定された。レース結果は3艇身で本学が快勝（水神—厩橋間3,200m)。

朝日レガッタ

朝日招待レガッタは6月10日に向島で行われた。8月上旬に行われるオリンピック代表決定をかけた全日本選手権レガッタへの前哨戦として注目された。本学，東大の

艇庫のスタンドには，東商戦に続いて応援部（本学に東工大音楽部の特別参加のブラスバンドを含む）および一般学生が今までにない熱の入った応援を展開してボート部員を感激させた。レースは結局本学，東大，慶大，中大の４クルーで決勝戦が行われ好レースとなったが，惜しくも½艇身で東大に敗れた。しかし高橋主将以下の選手，寺本理事以下のバックメン等部員一同はかえって敵は東大であるとの目標を明確にし，一層の闘志で，きたるべき全日本に向けて，いやが応でも雰囲気が盛り上がって行ったのである。

全日本選手権兼オリンピック代表決定戦

全日本選手権レガッタは，オリンピック代表決定戦を兼ねて８月４，５日および11，12日の４日にわたって行われた。４，５日の２日は予選であり，前年オリンピック候補クルーに指定された本学，東大，京大の３クルーは出場しない。予選の優勝クルーと３候補クルーとでリーグ戦を行ってその勝者が本年度の全日本優勝クルーであり，かつオリンピック代表クルーとなるのである。予選には本学第２エイトが出場した。第１回戦で慶大に敗れたが，敗者復活で名工大に楽勝して第２日目に持ち越した。しかし準々決勝で東経大，早大に敗れて出場資格を失った。結局予選の決勝で慶大が早大を１⅔艇身で抑えて決勝リーグ出場権を得た。１週間おいた11日に，決勝リーグが行われた。A組で本学が逆カンバスで京大に敗れた。全く予想外のことで，信じられないイベントであった。B組でも大方の予想を裏切って１½艇身で東大が慶大に敗れた。続くC組で本学はまた慶大に敗れた。これで本学は万事休す。オリンピックに対する望みは断たれた。D組で本学を破って意気揚々の京大が東大を破った。この結果，翌12日には決勝リーグ最終戦として慶大と京大の間で争われ，息詰まる大レースの末に，差１尺（30cm）で慶大が全日本選手権制覇，メルボルン・オリンピック代表となったのである。なお３位決定戦では，６番の発病を理由に東大が棄権したため，本学の独漕となった。また同日行われたフォア準決勝でも，本学は慶大に敗れて決勝出場資格を失った。先輩学生はしょうぜんとして向島艇庫に帰り，しめやかな敗戦コンパを行った。

戸田合宿所の完成

かくて永年の夢であるオリンピック出場は今年もまた消え去った。しかしこのオリンピック予選に向けての一橋ボートの一致団結は素晴らしいものであった。そしてそ

れを背景に数々の新機軸が打ち出されたことは特筆すべきであり，レースに敗れたからとて，それらの価値が減ずるものではない。昨年に引き続いて留年し2度理事を務めた傑人寺本を中心にバックは非常に充実した。学生スポーツの目的が人格の陶冶と精神修養および体力錬磨にあるとすれば，敗れたりとはいえ，本学端艇部は，美しく一致団結し，正しく学生スポーツの神髄を極めていたといえるだろう。

朱雀の建造

岡本造船所およびその横山技師との連携も記憶すべきことであろう。本年度対校選手権使用の「朱雀」は，その第2作で，前年10月以来設計に4カ月，建造に4カ月を費やし，5月23日に進水式を行った。艇長53フィート，最大幅員23インチ，深さ15インチ2分，重量23貫（約86kg）で，浸水面積を極力小さくして磨擦抵抗を小さくしたため効率で約5％増となり，2,000mで10秒程度短縮できる計算になっていた。

その他スキン，リガー，ラダー，ガンネル等に創意工夫が織り込まれた。いかんせんその新機軸も研究熱心のあまり，かえって欠点となる場合が多く，特にシートの位置が高いため船底の形状の特徴と相まって，バランスの悪い艇になったのが決定的で，結果としては成功作品とはならなかったが，コーチ団をはじめ全員が，他大学に先駆けて創意ある艇を造ろうとした意図が素晴らしいし，また造船所側も熱意をもって，本学の期待にこたえてくれた。この延長線上に3年後に優勝する「青龍59」の建造があるのである。

一橋は向島には大艇庫を有していたが，戸田には用地のみで何の設備もまだもっていなかった。全日本レースは戸田で行われるので，レースの10日程前に「戸田入り」した。対校の「戸田入り」に際してはマネージャーが寝具，身廻り品，炊事用具その他世帯用具の運搬で大仕事であった。戸田では納艇に慶応の艇庫を借用するほか，戸田の旧家で大邸宅の植野晴一先輩（昭17）の実家2階を御尊父の特別の御高配と御家族の御協力で，毎年合宿所として使用させて戴いた。しかし昭和30年夏は，村松部長の指示で，余りにも植野家に御迷惑をかけることを避けるため，戸田公民館を合宿所として使用した。かかる不便さの延長として戸田に合宿所をもちたいとの気運が盛り上がって来た。既に戸田コース建設時に，大学及び一橋会として取得した用地を有しており，これを利用して合宿所を建てる計画が，昭和30年秋から急速に具体化した。しかし四神会費の拡充，新艇とモーターボートのための特別募金等で戸田合宿所建設のために新規の募金が出来る状況ではなかった。然るに近藤荒樹先輩が50万円の特別寄

付を申し出られ，また宮沢文雄先輩と前島秀博先輩(如水会書記長)の努力による如水会の厚意で，如水会報新年賀詞広告代収入（昭和31年及び昭和32年新年号の２回）により資金の見通しがつき，広告代の集金事務を行うため端艇部学生は如水会地下室を本部として活動した。かくて８月９日，160万円の巨費により別子建設（現住友建設）の施工で戸田合宿所が完成した。ほんの対校選手用の小さい施設で，端艇部の本拠が向島艇庫であることに変わりはなく，学生たちは「戸田へ行く」，「向島へ帰る」と称していた。

第67回春季大会

かくて端艇部活動は結果としての敗戦にかかわらず，一段と盛り上がりをみせていた。春のクラスチャンには百数十人の参加があった。第67回春季大会は４月22日快晴に恵まれ，桜の若葉につつまれた墨堤で行われ，チャンC組，セコH組優勝。このレースで特に注目されたことは，学校の教職員の招待レースが復活したことであり，ボート部が学校全体と密接な関係を持つためにも役立った。６月17日第２回新人レースが向島で行われ，15クルーが参加した。全日本敗退の沈滞をはね返すかの如く，第21回秋季小会は10月28日向島で新たにサードも含めて盛大に行われた。学生弥次レースにも参加者多く，結局チャンはH組，セコS組，サード（ナックルフォア）C組の優勝となった。この秋季小会で優勝したH組第一選手は11月18日向島で行われた国公立レースに出場して，東工大，教育大の対校クルーを相手に堂々優勝した。

部史編纂委の発足

部史編纂委員会は如水会館に事務局を置き，卒業生の桜井安彦，金秀太郎のもと野田正道，中川學等有志学生の地道な努力で端艇部誕生からとりあえず明治30年までの資料収集を行った。この部史編纂事業に要する活動資金については，菅礼之助氏ら大先輩の寄金によった。

バックの組織の確立

かかる部活動の活発化に伴い，河合和昭会計幹事以下全学生一同が四神会費の拡充，(関西方面での集金には，東亜ペイントの社員寮に泊らせて頂くなど，森茂二郎，高林定一郎（田忠商店），西堀岩蔵，広瀬勇などの熱心な先輩に非常にお世話になった。)，レッドオアー寄附運動の続行等収入増大に努力するも，支出の増大を賄い切れ

ず，60万円の債務が昨年に引き続き本年も繰り越されて，慢性的赤字財政状態が続くこととなった。

バックの組織は完全に確立され，部員数の増加もあり人材を得て機能した。すなわち理事（後に代表幹事と改称），総務幹事，部報幹事，会計幹事（四神会，支出，特別会計の３人），ＨＣＳ各組に主将と組会計幹事。端艇部の役員としては以上に対校主将が加わる。なお11月21日の部員総会で，高商時代からの伝統のＨＣＳ制度を，現在の４学部制の本学では考え直す必要があるのではないかとの意見も出てきている。もちろん学生数の均衡，財政，対先輩との関係等で，簡単に変えられる問題ではないが，新しい大学における伝統ある端艇部として，慎重に検討すべきことである。

応援部と一橋大学体育会の創設

本年１月端艇部の期待するかつての「一橋会」と異なることから種々の交渉調整を重ねた結果，運動部相互の連絡，協議，交流を図る組織として，「一橋大学体育会」が発足した。また30年秋より，端艇部寺本隆一を中心に重松成行らも参加して，一般学生に働きかけて一橋応援部が創設された。これは従来東商戦に東大側は応援部ブラスバンドを繰出して盛んな応援を行っているのに一橋は拍手や声援のみでいま一つ意気が上らないことに端を発したもので，本年の東商戦，朝日レガッタと一般学生も参加して，応援部の指導のもと盛大な応援が行われた。

昭和32年

第９回東商戦

第９回東商戦は６月２日向島で行われた。軽量艇普及の故か，護岸の故か，この春の隅田川は大荒れで，早慶戦で慶大沈没（レースは成立して早大の優勝），中大対東経大の対校戦も沈没寸前で後日再レースとなった。東商戦も前日来の強い南風が吹きつのり，白波の立つ極めて悪いコンディションの下で強行された。

ジュニアが東大に敗れて，対校レースがスタートしたが，白鬚橋付近は大荒れで，相次ぐ大波はどんどんガンネルを乗り越えて浸入し，艇庫前はやっと過ぎたものの，東武鉄橋前で本学艇は沈没寸前となり，審判艇より再レースが宣じられた。再レースは５時の予定が風波やまず，結局５時33分スタート。ハーフの言問・吾妻まで２艇身以上リードしていながら，後半風波に悩まされて，結局４½艇身差で敗れた。

東商戦の翌日（6月3日）午前10時35分ころ，東大艇庫の合宿所木造1棟60坪（約200㎡）全焼。原因は漏電。

朝日レガッタ

第5回朝日招待レガッタは7月28日向島の1マイルコース（吾妻橋―大倉別邸）で行われた。本学は1週間前に選手の故障からメンバーの交代があったばかりで，ユニフォーミティを欠き，慶大に敗れ2位となる。ただ敗れたりとはいえ，焦燥感の疑問はなく，石井和雄主将以下全員黙々と全日本を目指して精進をつづけた。

全日本選手権

全日本レガッタは8月24，25の両日戸田で行われた。本学は予選，準々決勝を最高タイムで通過し，しかも準々決勝では優勝候補の呼び声高かった京大を堂々1½艇身の差で破り，昨年の雪辱をなした。しかるに2日目の準決勝で慶大に¾艇身でまたも負けてしまった。この準決勝が，事実上の決勝戦であることは，すべてが認めるところであって，注目の的であった。前日のタイムが示すように，実力は十分あった。そんなはずではなかった。それなのに負けた。ウォーミングアップの拙劣さ，炎熱の下40分前に出艇したことが原因といわれるが，実力ありながら，勝利の女神に微笑まれていなかったといわざるを得ない。準決勝で本学を破った慶大は決勝で6分6秒2の好タイムで優勝し，2連覇を飾った。本学は遂に10年間優勝なしの不名誉な記録となった。ただ東商戦ジュニア戦で負けたジュニアクルーから選抜したフォアが，途中対校選手のため1人交代，船齢6年の旧艇（利根）という不利にもかかわらず，慶大，法大を抑えて見事優勝したのは立派であった。この強運のクルーが主力となって，翌々年34年の優勝がもたらされるのである。対校エイトも「今一息」であったのだ。

校内レース

第68回春季大会は，大会会長井藤半弥学長の出席の下に，4月21日向島艇庫で行われた。対校非分離で，各組大型クルーとなり，また絶好のコンディションに恵まれ，好レースが期待されたが，コックスの未熟さが目立ち，接触が多く，レースとしては惨めなものであった。結局対校選手に7人を送るS組がチャン，セコ，サードとも全勝優勝した。

5月11日第68回クラスチャンレースが向島で行われ，参加クルー18の多きに達し極

めて盛会であった。さらに6月新人レースが行われ1年生が多数参加した。この年入学の1年生のうち3人が34年優勝のクルーとなるが，その兆候は既にこのクラスチャンレース，新人レースの盛大さにも現れていたのである。

6月23日には第1回中和寮対一橋寮交歓ボートレースが，学校当局の協力も得て行われた。時々小雨があったがコンディションは最高で，100人余の寮生が午後1時よりボートレースを楽しんだ。同5時にレースを終え藤井寮監の訓話の後，ビールを片手に寮歌「紫紺の闇」を歌い，気炎をあげた。端艇部にとっても寺本元代表幹事（理事）以来の一般学生に対するPR，理解を深めてもらうための行事として大いに有意義であった。

第22回秋季小会は10月27日向島で行われた。学生弥次レースに一般学生の参加もあり盛大であった。秋季小会は前期学生中心のレースであるが，この年は新1年生の入部が多く，技術的にも，人数的にも過去最大の秋季小会となった。チャンは好レースの末C組が優勝。セコはS組，サードは2クルー合宿を行い，組内予選の結果，出漕クルーを決定したC組が圧倒的な強みで優勝した。

村松端艇部長外遊

端艇部長村松祐次教授は，ロックフェラー財団の招きで，8月上旬神戸をたち，アメリカに10カ月，ヨーロッパ，アフリカ，インドと約1年半の予定で外遊に出発された。6月22日その送別会が如水会館で行われた。その留守中は石井頼三教授が端艇部長代行を務められた。10月下旬，高垣寅次郎元端艇部長（名誉教授）の発案による公孫樹が，戸田の合宿所前に植えられた。



端艇部長の村松祐次教授

部史資料集の刊行

部史編纂委員会は2回の合宿を行って資料収集を，あるいは先輩の間をまわってテープレコーダーにおさめ，あるいは国会図書館にこもって明治時代の新聞雑誌を書き写すという地道な努力を積み重ねて，続けていった。またその成果を「部史資料集」として刊行した。第1号（明治8～30）第2号（同31～34）第3号（同35～36）第4号（同37～39）。

財　政　難

かくて端艇部は対外レースのみならず，対学校，対一般学生，部員相互の錬磨と，向島隅田公園の北端にそびえ立つ「東洋一」と称される大艇庫を根拠地にして，大活躍をするのであるが，いかんせん財政は厳しく，昨年度繰り越し60万円の債務が，ボート部諸活動活発化による支出増大により，今年度は70万円余の繰り越しとなった。また部員数の増加に伴い，用艇用具の不足にも悩んだ。校内レースの艇は老朽艇多く，また建造年度も異なるため不公平でもあり，さらには一般学生が気軽に使える艇も欲しい。とにかく金が必要であった。

11月15日の部員総会で，財政基盤を先輩に頼るのは止むを得ないことながら，学生としての誠意を見せるために，月50円の部費を徴収し，これをＨＣＳ各組の会計に組み入れることになった。それにしても財政問題の根本的解決は，やはり勝つことだろう，勝てば四神会費の拡充もたやすく行われよう。しかし何故これだけ志気高い部員が100人余もいて勝てないのだろう。すべての条件はそろっているのに，というのが現役部員の悩みであった。

昭和33年

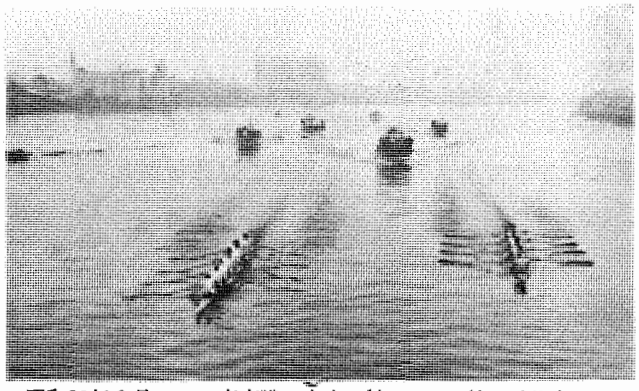
活発な部活動

この数年来の戦績は，東商戦２敗，朝日レガッタ優勝なし，この間オリンピック予選が１度あり，出場資格を惜しくも逸している。関東の４強といわれる東，商，早，慶大のなかで，オリンピックに出場したことのないのは残念ながら我が一橋大学だけである。ちなみに過去のオリンピック代表は次の通り。

昭和３年（アムステルダム）　フォア，スカルいずれもピックアップクルー。
７年（ロサンゼルス）　エイト早大，フォア慶大。
11年（ベルリン）　エイト東大，フォア早大，ペア早大。
27年（ヘルシンキ）　フォア慶大。
31年（メルボルン）　エイト慶大。

このように列挙してみると，あたかも本学端艇部が今や凋落の一途をたどりつつあるかの感があり，またその組織と運営に何らかの重大な欠陥があるかの如き印象を受けるかもしれない。しかしながら春秋２度のＨＣＳレースをはじめとして，クラスチャンレース，新人レース等の学内レースは部員100余人を擁して年ごとに充実してい

る。33年度の部員名簿による部員数は4年35人，8年44人，2年45人，計124人。



昭和33年6月8日，東商戦，向島4¼マイル（朝日新聞）

対校クルーも戸田に向島に合宿に合宿を重ねて，さらには数度にわたる遠漕，小見川における合宿，あるいはオール，用艇等の改革に日本の漕艇界をリードする等，数々の創意と工夫をこらしてきている。これをバックアップする会計，レース運営，その他のマネジメントにおいても，四神会の拡張と整理確立等，その着実さを増してきている。先輩の支援も昔に優るとも劣らず，むしろその熱意は強くなっている。

対学校，一般学生との関係においても，校内レースに教職員招待レース，一般学生弥次レースを取り入れたり，一橋祭展示を行い，また体育臨時コースに向島でのボート合宿が取り入れられるなど，非常に関係密接で，決して国立または小平を遠く離れた向島，戸田に孤立する端艇部ではない。東商戦に，全日本に，あるいは朝日レガッタに，強力な本学応援部の指導のもと，教室で机を並べている級友達の応援も年々数を増加し心強い。

すなわち本学端艇部は，1年1年それぞれの目標に向かって，懸命の努力をしてきているのである。むしろ積年の戦績不振につれて，その重圧のもと，努力は一層真剣必死となってきているのである。栄光なきが故に，それらの努力が非情にも歴史の底に沈んでしまっているのである。運動部に栄光のない寂しさと無力感は実にこの点にあるのであり，充実した校内レースや部生活も，対外試合に負けてはその喜びと自負が大きく割り引かれてしまう。対校の全日本優勝を願う必然性と合理性もまさにここにある。何とか勝って欲しい，皆でこれだけやっているのに何故勝てないのか，この危機感にも似た焦燥と自覚が，本年の敗北をきっかけに一段の努力を促し，その結果来年の優勝に必然的に結実するのである。

東　商　戦

第10回東商戦は6月8日向島で行われ，ジュニアは1艇身で勝ったが，対校レースは抜きつ抜かれつの接戦の末，2艇身半の艇差で敗れ2連敗となった。

朝日レガッタ

第６回朝日レガッタは７月27日向島１マイルコースで行われたが，本学は予選で出遅れたままラダーロープが切れてコースアウトとなり失格，決勝出場資格を失うという全く惨めなレースとなってしまった。優勝は東大。

全日本レガッタ

第36回全日本レガッタは，８月23，24日の両日戸田で行われた。エイトでは，予選で名大，東工大を，準々決勝で慶大医学部を破り，準決勝で早大を破って決勝に進出。決勝では，スタートで½艇身差で飛び出したものの，そのあとは徐々に差をつめられ遂に２½艇身差で敗れて，慶大に３連覇を許してしまった。これで本学は11年間優勝なし。フォアも不振で予選，敗復ともに敗れ，第１日目で戦列から消えた。

校内レース

第69回春季大会は４月20日向島で行われた。ゼミナール，語学クラス有志などに多数一般学生が参加した。チャンはＳ組（昨年に引き続き２連勝），セコはＨ組。なお用艇の調達ができないため，サードは残念ながら行わず，この意味からも部員数増加に伴う用艇用具の充実の希望が切実なものになる。

第69回クラスチャンレースは18クルーの参加で，５月12日向島で行われた。第４回新人レースは６月14日，11クルーの参加で言問―艇庫間800ｍコースで行われた。

第23回秋季小会は11月２日向島で行われた。対校非分離の基本方針のもとで充実した大型クルーにより校内レースとしてはレベルの高いレースとなった。チャン・セコ・サード（独漕）と層の厚いＣ組が全勝した。レースに福山市の三谷大先輩も来訪され，５万円のご寄附をされた。

遠山先輩水葬式

６月23日，日本で初めてフェアバーン漕法を採り入れ，東京商大を第３回目の優勝に導いた遠山不覇夫先輩（大13卒・「春墨堤」の作詞者）が逝去された。葬儀には本学端艇部の先輩学生が多数参列したが，さらに遺言による水葬式が朝日レガッタ当日の７月27日午後２時半より艇庫前において，レースの間に行われた。

優勝旗の大修理

中川英造先輩（昭和５年）のご尽力で，春季大会の優勝旗（昭和初期に作られた２本目）の大修理が行われた。これは京都高島屋製で，いま（昭和33年）では百万円でもできない見事なものであるが，永年の使用で傷み切っており，明年が第70回大会となるのを期して修理されたものである。（春季大会は明治35年を第１回とし，途中昭和19，20の両年，戦争のため中止されている）。

４月に艇番交代。旧艇番山本嘉平氏は戦時中より10余年勤務された。新艇番は山本道男。昨年４月に施行された売春防止法が１年間の猶予期間を経て，４月１日より実施された。向島の「鳩の街」もおしまい。

優勝への新方針

従来，本学端艇部は対外レースは対校選手のみで，一般部員は校内レースでその腕を競っていたが，端艇部員としての自覚が強まり，意欲が増大するにつれ，自然発生的にＨＣＳ各組が，それぞれＨＣＳレースとは別に１週間から10日程度の合宿を行って各種対外レースに出るまでになった。すなわち６月にＨ組が憲法レガッタ，Ｃ組が戸田レガッタ，７月にＳ組が国公立レガッタに。遠漕も各組が行い，また全日本終了後の８月30日，若い先輩と現役学生で来年度の基本方針を打ち出し，９月15日小平で行われた部員総会でも積極的に賛成され，早速実行に移された。すなわち一橋クルーの体力，特に腕の弱さからくるたくましさの欠如が，いつも今一歩のところで優勝を逃しているとの認識から，次の諸点が基本方針として打ち出された。

1.　対校非分離　2.　全部員による継続的練習　3.　基礎体力強化に重点をおく陸上練習。この基本方針に基づく練習は早速小平で始まり，秋季小会は対校非分離で充実したものとなり，年明けて34年へと引き継がれていくのである。この冬の間のトレーニングこそ大躍動の前の偉大なる準備体操であった。

昭和34年

臥薪嘗胆12年。本学の底力は遂に爆発した。

この数年間の苦節は決して無駄ではなかった。星霜移り年々歳々人は変わるけれど，先人の築いた伝統は，脈々として本学端艇部の中に継承されていた。その伝統の上に，毎年咲きかけては惜しくも咲けなかった勝利のつぼみが，この年に過去の分も含めて見事に満開したのである。

対校の合宿

本年の対校クルーは昨年から引き続きの冬の陸上練習の結果，正式に対校コーチに就任した佐藤和実（昭28）により選抜された。冬の陸上練習は，充実した昨年の秋季小会（例年より１週間多く合宿した）をうけて，全部員が対校候補ということで小平で陸上練習を行った。脚，腰，腕など基礎体力の鍛錬に重点を置き，ランニング，ダッシュ，懸垂，バック台を行うとともに，体操の専門家による新しい柔軟体操，鍛錬体操によって，体力の強化を図った。12月に入り一応対校候補を選抜して向島で合宿に入った（エイト２クルー，フォア１クルー）。

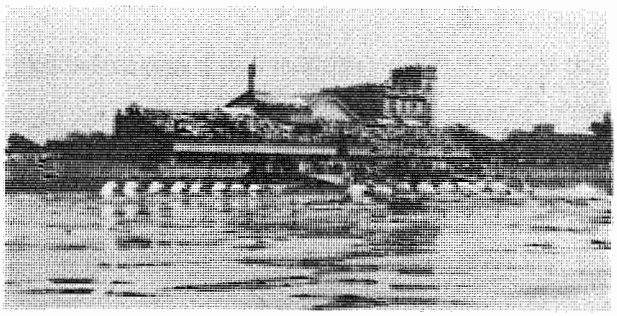
年末まで続けた合宿をさらに年明けの１月８日から10日間同じメンバーで強化合宿を行い，そこではじめて対校クルーが正式に編成され，以後は対校分離で練習を続けた。陸上練習および向島の通い練習を続け，学年末試験のため一時練習を中断した。試験が終わって３月７日より１週間，レクリエーションを兼ねて，富浦で陸上練習の合宿を行った。同15日から向島で合宿に入り，まず10日間程フィックスにより腕と腰の鍛錬と，スライドを使わない腕の動きのマスターをして，同27日から本格的エイトの練習に入って，合宿も向島から戸田に移した。

佐藤コーチは連日多忙の中を遠隔の戸田に勤務先の日本橋から夕方駆けつけ，モーターボート，自動車がないので，クルーに自転車で伴走してコーチをし，夕食後はミーティングをして夜遅く自宅へ帰るのを常にした。不言実行の内藤元巳主将以下の対校選手も，よく佐藤コーチの指導にこたえ，自主的により完成されたローイングへと努力していった。過去の本学各年度の対校選手と同じく，一人一人は，それぞれ強烈な個性を持つ人間の集まりではあるが，歴史の重圧につぶされない野放図なクルーとして，練習，合宿を重ねるごとに，そのまとまりが強くなっていったのである。

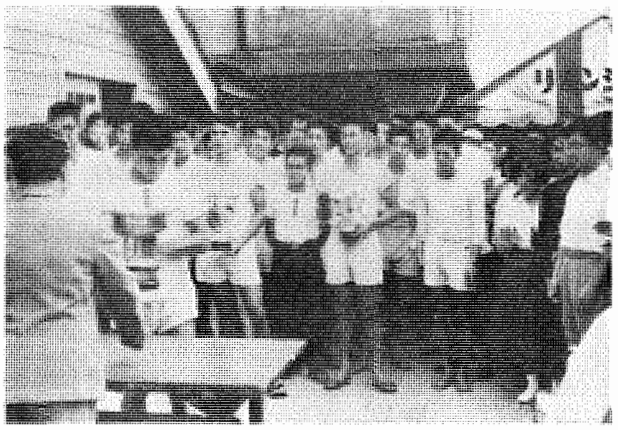
東商戦４年ぶりに優勝

第11回東商戦は６月７日向島で，茅誠司東大学長の開会の辞で始まった。本年から始まったフォアは進水後２週間の新艇ケインズをバウサイド整調で使用して，低いピッチでじっくり漕ぎ，併せて松本格コックスの有利な舵で４艇身の差で勝った。ジュニアはスタートで出られて，あせりがブレードワークにそのまま出て，６艇身の大差で敗れた。対校は新艇青龍を使用し，スタートでこそ東大が出たものの，洗場で並行となり，その後は本学が先行し，水神カーブで本学７番と東大２番が接触したが，そのままレースは続行し，ラストスパートで約２艇身と艇差が開き，そのままゴールイ

ンかと思わせたが，折悪しく達磨船がコースのど真ん中に入って来た。本学クルー止むなくイージーオールをして船を避け，再び漕ぎ始めて2～3本でゴールイン。このため艇差は⅓艇身となったが，見事な本学の勝利であった。



東商戦（艇庫前）



東商戦（向島艇庫）

久し振りの勝利に艇庫は沸きに沸いた。マネジャーもポカンとして何も手につかない。「マネジャー，コンパをもっと手際よく進行しろ！」「勝ったコンパのやり方知らないんだから無理もねえ！」との弥次も出る始末。先輩の祝辞も，せっかく勝っているのに，負けた時のコンパに慣れているせいか，ついついお説教口調になり勝ちで，「明日からはまた頑張りますから，せめて今日だけは喜んで下さい」と学生から言われたりする，全くうれしい中にも戸惑い多きコンパではあった。

「青龍」「ケインズ」の建造

東商戦に先立つ5月，新艇2隻の進水があった。5月10日向島でエイトの新艇の進水式が行われた。横山技師の設計，岡本造船所の建造によるもので，「青龍（59）」と命名され，バウの船名は山中篤太郎学長により揮毫された。総ヒノキ製で，スキンは我が国最初の特殊合板である。全長15.26m，全重量86kg。スターンの断面が角をもっていて，艇が疾走する際の水切れをよくし，抵抗を少なくするための工夫がされている。続いて同月23日にデルタ造船所で建造したシェルフォアの進水式が行われた。いままでの本学のシェルフォアは，26年建造の旧艇「利根」しかなかった。利根は非常に好運な艇で，26年，30年，32年と3回も全日本に優勝してくれた愛惜極まりなき

艇であるが，いかんせん寄る年波には勝てず，次第に重くなり，リガー等の故障も頻発し，ここに対校レース用のフォアとして，「ケインズ」が誕生したのである。船型はオーソドックスで全長13.7m，全重量65kg。

オックスフォードを破って全日本優勝

いよいよ乾坤一擲，第37回全日本選手権レガッタが，8月21日から3日間，戸田コースで遠来のオ大クルーも迎えて行われた。明年のローマ五輪大会を控え，オ大の参加もあり，エイト出場クルー35，他にフォア，スカル等全部で62クルーという空前の盛況であった。

東商戦の勝利以後，本学端艇部は，近年来，類をみない熱意に正に燃えていた。東京教育大杉靖三郎博士を招いての体力向上の医学的分析，慈恵会医大との協力による酸素ボンベによる酸素吸入，中外製薬の好意によるグロンサン錠服用試験，そして「白虎54」にはじまる横山技師および岡本造船所との造艇研究の集大成ともいうべき，「青龍59」の研究と設計，建造等々，文科系の大学でありながら，種々の科学的，技術的研究が，佐藤コーチを中心にして行われた。特に仲野実，佐藤清，桜井安彦，緒方彪，小松崎利広，小原順，寺本隆一などの若い先輩が参加した。

対校の合宿の献立には，昼食と夕食について，そのカロリーを食堂の黒板に表示し，見た目にはきれいでなくても，質の高い食事の提供が心懸けられた。対校合宿に参加していない部員もおよそ総動員で対校クルーのために一致団結して協力した。炎天のもと自転車で，あるいは走ってスパイは東北大，東大，京大，慶大の情報を探った（日比俊一，土屋忠正)。佐藤コーチが自転車で走り回っているのを見かねた部員（軽部久雄）は，某自動車会社と交渉して，みごと長期間小型トラックを無償で借りることに成功した。さらにはその車を端艇部員ではない自動車部員（池田雅博）までが運転することを申し出てくる有様であった。

丸の内，有楽町とアスファルトジャングルで金集めをして来た部員は，その合間を縫って戸田を訪れた。午睡している対校選手の邪魔をしないよう注意しながら合宿日誌を見たり，スパイやマネジャー等，戸田常住者の話を聞いて一喜一憂するのであった。先輩の来訪も多かった。応援部の諸君（榎本次男ほか）も，東商戦で心行くまで立派な応援ができた余勢を駆って，全日本でも再びと，応援部練習の暇に戸田に様子を聞きに来た。機は正に熟していた。

フォアは残念であった。予選で外語大に遅れて2位となるも準決勝に進む。準決勝

では慶大，東北大，東レを破り，決勝に進出した。しかし力既に及ばず，決勝では外語大，早大に遅れて3位に甘んじざるを得なかった。

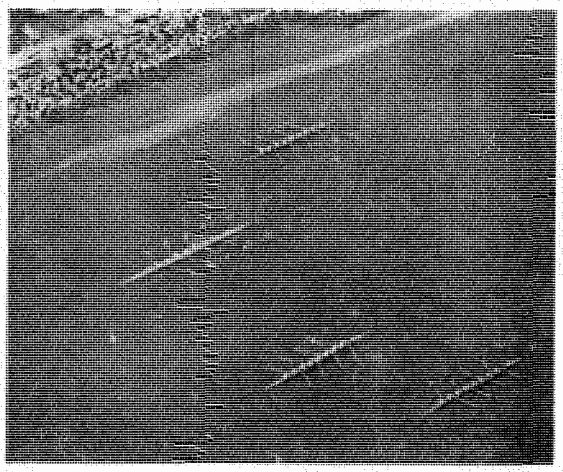
エイト。最初のレースは不安なものである。佐藤コーチのもと，存分な練習を積んだ我が一橋大学も例外ではなかった。図々しさでは人一倍の名整調渡辺宏之でさえ，緊張したという。まして相手が優勝候補に挙がっている京大なら不安もひとしお。しかし日ごろの鍛錬の賜物により2艇身差で難なく勝てた。

第2予選は立大，東工大，関西学院大で，大差にて通過する。

3日目は準決勝。慶大を破りオ大に迫った好調の北大が相手である。北大の連中は京大と異なり，どれをとってもものすごい。特に5番，6番あたりメインエンジン担当は，正に北海のクマかと見まごうばかりであった。しかし我が一橋大学にも信州，常陸，武蔵の国産出の野獣に匹敵する怪人どもがいる。予定通り500mで北大に1艇身，他には完全に水をあける。そこでピッチを35におとして相手の出方を待つ。じっくりと深いオールを引き後半に備える気迫十分。700m でスパートしたが効なく，逆にハーフから北大がスパートで追い上げて来る。こちらはじっくり構えて35のコンスタントを保つ。向こうのピッチが39から40で，35のピッチのこっちが幾分優勢なくらい。楽しみをラストスパートに持ち越し，1,700m あたりからどんどんピッチを上げ，結局⅗艇身で勝つ。

いよいよ決勝。あのオ大と出会う。色の白い思ったより優男ぞろい。しかしあんな毛唐には絶対負けられないぞと誓い合ってスタートにつける。と，東北大のコックスが立ち上がって，やおら短刀らしきものを取り出して，思い入れよろしく戸田の水中に投げ入れた。彼らも勝ちたいのだ，と痛切に感じた。「用意！ゴー！」主審の旗が振り下ろされてスタートが切られた。46ダッシュ10本から43の力漕。力漕15本で37.5にセトルダウン。少し出ている。6，7本漕いで43のスパート15本，隣の東北大がなかなか良くやって½艇身以上離せない。しかしここでは37.5のコンスタントピッチを守る。それでもオ大には完全に水をあけた。しばらくは東北大との勝負であった。ハーフを過ぎて東北大がだんだん遅れ，1,500 mの手前の20本のスパートで完全に振り切った。

ところが敵はまだいた。コックスの藤本啓一郎が，オ大コックスの専売のガンネルをたたく動作をはじめてガナリだした。1艇身以上離していたオ大がすぐ横について来たのである。岸で応援している応援団をはじめとする観衆2万は，いまや熱狂のル



昭和34年全日本エイト決勝，1コース東大，2コースオ大，3コース一橋大，4コース東北大

ツボと化した。ジリジリ，ジリジリとオ大が追い上げて来る。1,900 mを過ぎてのラスト10本は，もはやデスパレイト・ピッチである。

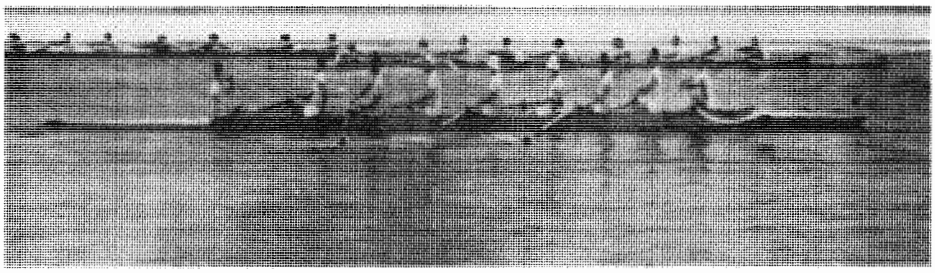
ゴールをしても，だれしも，いずれが勝者か断言できるものがいない程の大接戦であった。写真判定の結果，30㎝の差で本学が勝ったことが決定したのは，しばらくたってからであった。それにしても最後のワンストロークのときに漕いでいたか，フォーワードしていたかによって勝敗が分かれたと思える大レースであった。そして勝った。3着東北大，4着東大。

本部側をあるいは対岸側を伴走して応援した部員にも，いずれが勝者か分からなかった。とにかく本学，オ大のいずれかであることは分かった。そしてどちらにしても僅差であることも。しかし何となくかすかな希望が次第に着実に確信に向かっていく手ごたえがあった。

アナウンスで結果が発表されて，それが歓喜へと爆発した。佐藤コーチは順調で楽に漕いでいるハーフ辺りはある程度客観的に艇を見ていたが，ゴール直前では思わず眼を閉じてしまった。応援部長赤松要教授は勝ったとの放送がされるや否や，観覧席から飛び出して，顔をくしゃくしゃにしながら人込みをかき分けて，接岸しようとする艇に近づいて行った。

いつもレースに来る太田可夫教授は所用で在宅し，その代わりラジオの実況を聞きながら冷酒をチビチビ呑んでいた。かなり無理をすれば戸田へ行けないことはなかったが，ここ数年期待して裏切られるのに疲れて，無関心でいようと心に定め，それでも自宅で実況のラジオだけは聞くともなくつけていた。ラジオがはじめ「オックスフォード大が追い上げた結果，遂に一橋を僅かの差で抜いた」と報じたとき，やはりボートごときに1日を費やさなくて良かった，と自分の利巧さに満足した。すぐラジオが「写真判定の結果，一橋大が逃げ切り30㎝差で優勝した」と訂正放送をした。

太田教授は脱兎の如く自宅を飛び出し，国立駅前の「エピキュール」に行きビールで祝杯を挙げながら，店主相手に，さも今戸田から帰って来たかの如くレースを自慢



全日本決勝レースの写真判定，手前はオ大

した。

艇名「青龍」を揮毫した山中教授は，研究会議等の公用で関西から広島方面に行っていた。宿の部屋で女中から「先生，一橋がテレビに出ていますよ」と，言われたとき，所用に忙しくレースのことを忘れていたため「シマッタ，火事でもおきたのか」と反射的に悪い方に連想した。次の瞬間，一橋の優勝を知って，電報を打った。当日はラジオ・テレビで放送されたため，全国各地で四神会員，如水会員，夏休みで帰省中の一般学生が，放送にかじりつき本学の優勝を祝った。夜7時のニュース，さらにスポーツニュースと繰り返し放送を聞いて，感動を新たにした。

折から滞英中の端艇部長村松教授は祝電のあと次のような手紙を送って来た。

「謹啓，御無沙汰ばかり致しておりますが皆様御清祥の御事と存じ上げます。8月21日サンフランシスコを発ち，翌21日ロンドンに到着致しました。ロンドン第2日の朝タイムスを開いて全日本に勝ったこと，オックスフォードを破ったことを知り，狂喜しました。ブリティシュミュージアムの前の辺をマゴマゴしながら郵便局をさがし，祝電を打ちました。如水会，四神会の皆様の御後援の賜物と有り難く御礼を申し上げます。

（中略）

帰京は12月末或は1月始めになると思いますが，何れにせよ来年の第一期練習の頃には東京に帰れます。何れその際御礼は申し述べますが取敢えず御礼まで。

敬　具

昭和34年8月25日

於ロンドン　村松祐次

如水会四神会先輩御中　」

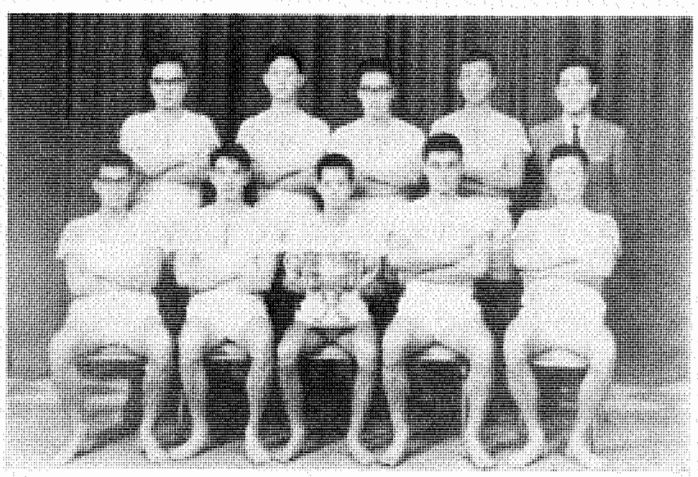
小雨の降る中，本部横の高台で閉会式が行われた。優勝の賞状，秩父宮杯，優勝旗，

優勝カップが，勢津子妃殿下はじめ大会役員から内藤元巳，西村浩二，渡辺宏之，広岡幸夫らの選手に次々と渡された。応援団が一際高く鬨の声をあげた。

長い苦しい合宿の思い出こもる戸田から，大勢の先輩，教授，端艇部員，応援部員が，バス，トラックに分乗して向島に帰った。艇庫の3階で大コンパ。秩父宮杯に満たされたビールがまわしのみされた。さすがに東商戦に勝ったときのコンパと違い，先輩の言葉も喜びにあふれるものばかりであった。指名されて立った前年のキャプテンは，自分の顔を指さしながら，ただ一言「良く見てくれ，これが負け続けの最後だ！」と言って座った。全員爆笑した。次第に機が熟した。応援部員も艇庫の2階でやはりコンパをしていた。自然発生的に全員が艇庫横のグランドに合流した。応援部のブラスバンドが「長煙遠く」「春墨堤」をはじめ，各種の寮歌・校歌を演奏し，全員が紙コップのビールを片手にドラ声を張り上げて気勢を挙げた。

何人かがクリンカーエイトの古艇(使用不可能なもの)を持ち出してきて，こわしてやぐらに組んで火をつけた。キャンプファイアーとなった古艇を中心に全員が輪になった。「ナンデモエエ，勝ッタ方ガエエ，ナンデモ勝ッタ方ガエエ，ナンデモエエ，勝ッタ方ガエエ，ナンデモ勝ッタ方ガエエ」というごく単調な歌がこれ程名歌だとは，ここで初めて分かった。

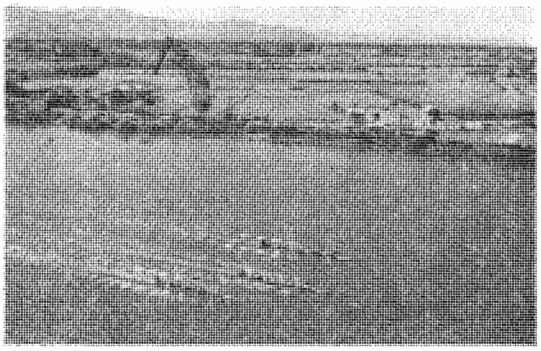
向島消防署，向島警察署，水上警察署の係官も警戒のために来たが，ニコニコとこの狂喜集団の乱舞を見守ってくれた。須崎町，寺島町の町内の人々もお祝いに来てくれた。本橋牛乳店，遠藤クリーニング店，吉沢理髪店，堤湯(とてゆ)，八百林商店，吉川米店，村田屋商店，朱美，ゑびす，バッカス，ロビン，ｅｔｃ，皆喜んでくれた。応援部の諸君との合同大キャンプファイアーは古艇を燃やして深更に至るまで続けられ，勝利の美酒に酔いしれた。



昭和34年全日本優勝クルー，前列左から渡辺，広岡，藤本，内藤，鈴木，後列柳沢，西村，本多，稲垣，佐藤コーチ

翌日の新聞は，朝日はもとより，毎日，読売のほか日本経済新聞から英字新聞ジャパンタイムスまでが，本学の勝利を大きく報じた。日刊スポー

ツ，東京中日新聞等スポーツ紙の取り扱いはほとんど1ページ全面を費やした大きな報道であった。村松部長の手紙にもある如く，8月24日付のロンドンのタイムスにも報じられた。



茨戸での朝日レガッタ優勝

1週間後の8月30日，北海道札幌郊外，茨戸コースで行われた朝日招待レガッタ(1,000m) でも，自信満々の我がクルーは，決勝戦で東大，オ大を破り，堂々6年ぶり2度目の優勝を遂げ，東商戦，全日本この朝日レガッタと，対校クルーの出場した全てのレースに勝ち，完全優勝を果たした。如水会報10月号は，「ボート優勝緊急特集号」として，全ページほぼボートの記事で埋まった。9月7日如水会主催の祝勝会が，如水会館スターホールで行われ，先輩，学生等300余人が参集した。



第7回朝日招待レガッタ（札幌・茨戸）で優勝

一橋祭での祝賀式典

さらに11月1日から始まった本年度一橋祭では第1日目午後3時から，兼松講堂で，一橋祭準備委員会主催（委員長原節夫）の「一橋ボート全国制覇祝賀式典」が盛大に行われた。式典では選手凱旋のあと，山中学長を初めとする来賓の祝辞，内藤主将の謝辞があり，さらに全日本レガッタ当日のフィルムを映写して，感激を新たにした。4時から祝典会場をグランドに移し，「祝賀ガーデンパーティー」と銘打ち，如水会も後援して，大パーティーが開かれた。やがて夕暮れとともに，キャンプファイアーが焚かれ，応援部の指導のもと，ボート部も何もない，オール一橋が一つになって，ゲマインシャフトとしての一橋の構成員であることの喜びを十分に味わった。参集するもの千数百人。酒の消費量，4斗樽4本，1升瓶40本，ビール53ダース。



全日本優勝祝賀会一橋祭兼松講堂で対校主将内藤元巳

校内レース

第70回春季大会は，例年より10日早く未だ桜の残る向島で4月12日に行われた。記念すべき70回大会としてはいささか寂しく，チャンはエイトであったが，セコまでで，それもナックルフォア。チャン，セコともにH組が優勝。

第70回クラスチャンレースは，年を追うごとに盛大で，本年も19クルーが参加して，5月2日向島で行われた。

全日本優勝の意気大いに上がったところで，10月25日向島で行われた第24回秋季小会は，春の大会とは異なり，気迫のこもったレースが展開された。結局チャンはC組，セコはH組が優勝した。サードはS組のみで，マネジャークルーと対戦して敗れた。

750万円特別募金

端艇部は，本年の全日本優勝の記念すべき歴史を書きつづった昭和34年度から，再び厳粛なる新年度へと歩を進めはじめた。過去に対する反省と，新たな目標に対する決意と信念をもって。その新たなる目標とは，ローマオリンピック出場であり，校内レースの興隆化である。

過去数年間にわたる校内レースの犠牲の上でなされた努力の成果でもある全日本優勝を無にせぬためにも，ぜひローマを目指さねばならない。しかしながら目標はただそれだけではない，老朽化した校内レース用艇しかない現状では，橋人皆漕はおろか，一般部員の練習さえ制約をうけ，伝統ある本学端艇部の厚い選手層を維持することは困難である。

端艇部は如水会館に本部を置き，学生の担当幹事（軽部久雄，坂倉正宣）を任命した上，対校選手以外一丸となって，750万円の特別募金を開始する。毎日如水会館地下に集まり，全員手分けして，計画的に，趣意書，申込書の発送，返事の整理等に専念して，部員数の増加で不足している用具用艇，特に校内レース用（エイト3隻），新人養成用（ナックルシックス3隻）の建造資金募集に奔走を始めた。

資料編 I

外語と一高，高商の関係（外語ボート70年史による）

（明治18年前後）

文化８年（1811）洋書和解御用方―安政２年（1855）洋学所，翌年藩書調所―文久２年（1862）洋書調所となり，文部省の前身，学問所の所管となる―文久２年８月，開成所―慶応２年（1866），開成所の教育方針，蘭語から，英仏独露語に転ず。

慶応２年４月，風雲急となり閉所，明治元年，開成所再開，東京府庁所管となる。

明治２年大学南校と改称，更に明治４年，南校と改称され，文部省所管となる，明治５年，第一学医第一番中学と改称，明治６年，開成学校と又々改称，語学生徒と，専門学生徒とに分け，更に前者に，外務省所轄の，語学所を併せて，東京外国語学校（英仏独露清の５カ国語外人教師15人）とし，後者を，東京開成学校（帝大の前身）とした。

明治７年，東京外国語学校のうち，英語科を，東京英語学校として独立させた（之は後に大学予備門の中の１校となる），明治13年，東京外国語学校に，韓語を加える。当時同校の終業は５年，明治17年，同校に，附属高等商業学校を設けた。明治18年，同校は突然，解体され，仏，独語生徒を，大学予備門へ。露，清，韓語生徒を東京商業へ編入した。

外語→帝大，一高，高商は兄弟関係と云うべきであるが，形式的には明治18年に，外語は東京商業学校に併合された事になる。扨，此神代時代のボート史を見るとボート55年史に「東京外国語学校は東京商業学校に併合された明治18年以前にボートを２隻持っていた。外語の生徒は海外に雄飛しようういう気概の者が多く，ボート位漕げなくてはというので生徒の醵金で買入れた」とある。之は大いにうなづける。

「一高対高商レースに就いて」東大の「ボート50年史」はいう。

「明治18年，東京外語を併合した，東京商業学校には，はじめ１隻のボートもなかった。外語から引継いだ２隻のボートは，１隻を大学予備門（旧一高）へ送り，残り１隻を東京商業学校に残した。然し，もともと生徒の醵金で造った艇であるし，商業学校派と，ことごとに対立していた外語派の学生は，血の気の多いのが揃っていたので，商業学校は引継がれた１隻を使用する事は出来なかった。そこで明治19年，６隻のボートを新造し，商業に始めてボート部を作った。明治20年，ボート部が誕生して間もない頃に，突如第一高等中学とのレースに帝大から招待された。その時の漕手は，おそらく腕自慢のバンカラが揃って居た，外語派の学生が中心であったに違いない」と。

つまり一高対高商レースの高商の漕手は初めは外語の先輩だったと云うのである。

然し，一高にしても，明治18年，外語廃校時に仏独語科の学生を大学予備門(後の一高)に編入して居るのだから，一高のクルーも亦外語と全く無縁であったとは云えぬ。

「フレデリック・ウイリアム・ストレンジ氏の事」

我国ボート界育ての親とも云うべき業績を残して居る，英国でのボート歴は大してなかったらしい，18歳で日本へ来て，横浜アマチュア・ローイング・クラブで２年間練習したあと明治６年に外語の講師になって居る。其頃（明治７年）外語の英語部が，東京英語学校に昇格し，独立して外語から離れて行った（後年大学予備門―一高の一部となる）その時，ストレンジは生徒と共に転任して行き，講義と同じ位の熱心さでボート部を育てたのである（明治７年以後，18年に廃校になる迄

外語には英語部はなかったのである）

「貸ボート屋　野田屋」

明治初期，ボートが始まったばかりの頃，ボートの中心は，浅草橋の野田屋という貸ボート屋にあった様だ。学校が艇庫を作ったのは，明治20年，東大が向嶋に建てたのを最初とする，後年各学校は，艇庫を持つ迄野田屋にボートを預けて居たらしい。当時は川へ行く迄の交通機関が不便だったからであろう。当時盛んにボートを漕いだ学校は東大，一高，高商，高工，高師，外語等で学習院も明治20年頃から漕いで居たらしい。私学では慶応が最古参，其他は明治20年以後。

「外語の独立」

日清戦争の教訓，明治27，8年の日清戦争では国家も国民も外国語を話せる人間が余りにも少なすぎるのをいやと云う程味わった。戦いをするにも，和平交渉をするにも我国には中国語，ロシア語，朝鮮語を話せる人間が余りに少かった。それで商業に外語を併合させた政策を改め，明治30年，ついに外語は東京高等商業学校附属外国語学校という形で再興される。明治32年法律改正され，高商との関係を断ち文部省直轄の東京外国語学校となった。此年を以て外語創立として居る。語部は英，仏，独，露，西，清，韓，伊の8カ国語。

明治31年の高商校内競漕大会には附属外国語学校は第一分科，第二分科，第三分科の3クルーを出漕せしめて居り，之が高商本家の本科2年（白），本科1年（黒），予科(青)，外語の分科クルー（赤）との間で熾烈な競漕を展開，1艇身半で外語クルーが勝ったと大々的に報じて居り，高商校内レースに於いて既に相当な対抗意識を持って居た事がうかがわれる。

一高高商戦漸く白熱化す（抄）

（明治22年）

帝国大学にては昨十日午後一時より，隅田川上流に於て春季競漕会を開かれたり。言問の裏，福岡楼より大学艇庫へ掛けての辺を会場となし，艇庫の楼上及び福岡楼を来賓の席に充てたり。同庫前の審査船は田代，朝枝，柏原，永原の四少佐及び雇外国人審判号令を為せり。漕程は一千メートルと聞えし，其間に於て法医工各科の競漕都合十三番を施行す。

第十二番は第一高等中学校(白)と高等商業学校（赤）の競漕なり。勝敗は遊技ながら両校の体面にも関する事多ければ，各々十人以上の人々中より此技に巧みなりと聞えし人々を選ばれたり。されば競漕の始る以前より，見物人の赤と云ひ白と唱へ，或は高等商業学校と叫び，或は高等中学と呼ぶ声は，海軍楽隊と共に河心に響き渡れり。斯くて両船競漕を始め，五百メートルに至るの間は互ひに負けず劣らず進み来たりしかども，遂に僅かの処に至りて高等中学校の勝とはなりぬ。

当日は快晴と云ふにもあらぬ所謂花曇の日和なりければ，啻にボートを試むる人々の便利なりしのみならず，来賓にも又好都合なりけん。会場は大臣次官陸海軍将校，及其他の貴顕紳士等にて充ち充ちて，十里の長堤も又見物人を以て築きたる程なりき。

〔東京日日新聞　明治22年4月11日 第5232号〕

新宇治川（抄）

（明治24年）

江見水蔭

スポーツ揺籃時代に於ける唯一の対抗競技として全都の人気を沸騰させた一高と高商の対校競漕は，明治二十年四月帝大の第一回競漕大会に招待レースの形式の下に行われて以来四回，全部一高の勝利に帰しているが，両校の応援団の熱狂と共に対立的気分を愈々濃厚ならしめ，何となく不穏の空気が漲ったので，遂に両校当事者の協定により当分中止を宣せらるるに到った。

此の競漕の前後は今日の早慶戦以上の騒ぎで，何処に行っても此の話で持ち切りだったが，車屋など迄が『今年は一つ橋（高商）の方が景気がいいそうじゃないか』『ナニ矢張り追分（一高）のものだよ』などと話合っていたそうである。此の競漕が勃興気運にあったボート熱の普及に拍車をかけ，更に漕法研究による漕艇技術の発達に貢献した功は没すべからざるものがあるが，一面中止によってファンの期待を裏切り，ボートに対する一般の興味を稀薄ならしめた罪も亦大と云わなければならない。然し何としても当時にあっては最大の競漕であったので，選手の努力，先輩の苦心は今日以上で，校友知人親戚などの真剣さは全く想像以上であった。江見水蔭氏の此一篇は競漕中止に甚だしく失望した読者に対する慰安的小説で，帝大レース当日に発表したところに作者のヤマがある。事実も人物も勿論架空なものであるが，最後のファウル事件なども当時の作者の常套手段である円満解決めでたしめでたしの手法である。

此の小説は当時の学生間に相当好評を博したものと見えて，今日でも記憶している人が多いが，水蔭氏は其後苦学生連中が安ボートを手に入れて，利根川遠漕に出かけると云う学生小説を中学世界か何かに発表している。

なお本稿は明治二十四年四月十一日から数回に亘って読売新聞に連載されたものである。

如何にしても残念なり。我等の失敗を取ること茲に三回高等中学の奴原（やつはら）鬼神にもあらねば魔物でもなし，同じく是二本の手を以って同一の櫂を握り，同じ流れの隅田川に，相図（あひづ）者（しゃ）が放つ砲声は，同じ瞬間に聴く筈なり。然るに何事ぞや中洲に沿ひ，渡船場を過ぎ決勝線に近づくに従ひ，常に白色旗を判定者が手に見る事，無念何物か之に過ぎん。敵の凱歌を聴きながら，陸上の者は帽子の徽章取りて去り水上の船は校旗を撤して帰る。皆しほしほとして散ずる様は，国亡びて君臣離散，空しく城壁に敵旗を見るの感なかりしかと。商業学校の運動場，小高き土壇の上に突立ちて絶叫する少年あり。此校中に奇行家と近眼とを以て有名なれば，彼が又何をか言ふと四辺より大勢集り来るに，益々得意に成りて握拳（にぎりこぶし）を振舞（ふりまは）はしながら，諸君，これ誰が罪ぞ。舵手は浮標を放つに誤りし事なし，「ヘビー」を掛け遅れしことなし，瀬を違へし事なし。擢手は鉄叉をはづせし事なし，足掛木を踏み違へし事なし，六番擢手より一番擢手に至るまで，更に屈せし者なし。然らば抑も何者の罪ぞ。嗚呼実に競技者以外の生徒が協心同力の薄かりしが故なりと断言するに憚らざるなり。視つらん敵方の熱心，校の内外を問はず，日頃欠席勝の者までも，あらんかぎり狩りあつめ，野田屋，楽水館の短艇は言ふに及ばず，川舟までも残らず借りて，なほ乗りあまりたるは陸上に隊を為し，勝てば競技者を胴上げになし，負けなば水中に投込むと言ふ覚悟。一中々々と呼ぶ声のみにても，彼が勝つ事知れたり。これに反して我校の諸子は何

事ぞや，今年も負なるべし，恥掻きに向島くんだりへ行く物かは，それよりは下宿屋の二階に月琴を鳴らして，あきたらば花でも引くべしと悠々余所に見過して，人の頭の蝿程も感ぜぬ事，慨歎の至りならずやと言へば，ノウノウ我校に其様な者なしと叫ぶ者あり。いやいやあるぞ，其所に居るぞと，どよめき合ふに，弁士は一切構ふ事なく，一段声を張り上げて，それ商にせよ農にせよ工にせよ，人各々士気なかるべからず，殊に我が商業学校には尤も貴ぶべき物士気なり。簿記の得意が商法家にあらず，算術代数の高点を取りたればとて，術は術なり，術のみに依頼して泰然たる度胸なき時は，一生を教師か銀行の手代に終るべし。更に言はん，短艇競漕は士気を鼓舞するの一部分なりと。再言，短艇競漕は一校団結の基礎とも成りて，他日天下の商界に雄飛するに方り，提携大いに得る処あるべし。諸君！　競漕に不熱心なるは士気の何物を知らぬ者の為す事なり。団結の何者を知らぬ者の為す事なり。天下に雄飛するの意なき人なり。大恥辱を雪ぐの勇なき人なり。玆に三カ年の間引続きて失敗したる不名誉を回復するは，今回にあり，帝国大学春期大競漕会近きにあり，願ふ処は諸君，我過言を咎むるなく，奮つて競技者に力を協し，一中の鼻柱打挫きて，隅田川の水にと，未だ何をか言ひ続けんとする時一人あはただしく走り来りて，残念何物か之に過ぎん。我校と一中との競漕は，文部省より差留められたり，と呼ばはれば，弁士あまりの事に一句も出でず，帽子かなぐり捨て，近眼鏡へし折って，手当り次第に人を擲りぬ。（中略）

自から進みて管理者と成りたるは，彼の奇行家の水元九郎なり。洲崎村なる某寺の一間を合宿に借りて，八人此所に起臥を共にし，此程より一月の間は世情を聴かず新聞も読まず，本堂より木魚を取出して，朝何時何分を相図になし，これを水元が打叩けば，一同布団蹴って飛起き，筋骨ゆるみてはと水浴に五体を清め，あらゆる滋養物の献立は皆水元の指図なり。食卓に向ふや否や，朝に限りて水元が美味や如何にと常に問ふなり。美味しと答ゆれば満足してこれぞ必勝の前兆なりと，何をか独り合点して喜ぶが，毎朝の例となりぬ。されば箸の上下まで眼を配りて，多食少食共に不可なり。酒は大敵，午睡元より悪し。何時何分より千住まで上り，昼食後は永代まで下りて，何時何分までには言問の下まで帰るべしと，万事を規則にて堅めけるに勇みに勇む若者なれば，熱心の余勢留め難く，台場辺まで行過して，時を違へ帰る事あるに，其都度足ずりして岸頭に待居り，上り来る舵夫の腕抓みながら，又も運動場にての演説を繰返して意見するに，言ふ事は道理，言ふ人は熱心，聴く者も道理とて熱心に聴くべきなれど，何となく愛嬌の溢るるに，一人吹出せば二人三人，つひには当人まで笑ひ出して，時には思はぬ興となりぬ。

今，第二回目の練習終りて，七人は一間に休息せる処へ学校よりの総代一人，様子伺ひにと来りければ，規約に従ひ別間に通して，競技者には会わしめず，水元一人出向ひながら，問ふに答へて熱心に語る様。今度は必勝なるべし我れ昨日三囲（みめぐり）の石段にて，蝦釣りに姿を窶し，敵の練習を伺ひて，一分時に櫂幾度を下すやを，漸くにして数へ得たり。これを味方に告げずして，無心に漕ぐ櫂の数を同じ仕方にて数へ見しに，実に一回我彼に越えたりと言ふに，総代膝を進めて，其の熱心感ずるに絶えたり。さりながら敵にも亦，用意なしと言ふ可からず，実に然り，大秘密なれば君のみに語るなるが，誠は四，五日前の夜まで，人目を忍びて漕出し，千住の上にて練習なしたり。その最後の夜の事なり，常の如く中洲に上りて，各決死を誓ひし後，漕ぎ帰らんと為す時しも，同じく蘆間を出る一艘，乗りたるは誰あらう。敵の整調——池谷源次

にありたりし。何，髭の池谷が……夫にて思ひ合はせる事あり。此頃の噂によれば池谷は只一人，川舟にて中洲辺を乗廻し，水流を測量なし大方に終りたりと。扨こそ油断は益々出来ず，猶此上にぬかり給ふな，いづれ其内に又来るべしと，総代は辞して去りぬ。

今日は競漕の当日なり。常の如く木魚に起されて，七人は食卓に向ひぬれど，扨て米飯の味少しもなく，牛乳は水の如く，ソップも鶏卵も，何故か喉に通らず，一様に箸を置きて暫く踌躇ひ居る処を，水元見つけて詞せはしく，毎朝の例とて美味きや如何にと問ひけれど，顔合せて答ふる者なし。再び高声に問ひけれど，誰一人答ふる者なし。「諸君，仮令不味くとも美味しと言ひ給へ。喉へ通らずば無理にも呑込み給へ。当日の朝と成りて，必勝の前兆なりと言はざる時は，何となく心地悪し」「さりながら水元君」と，初めて一人梶沢が返詞「如何にしても今朝は不味し。思ふに心の騒ぎ劇しく，気の勇み立つよりのわざなるべし」「無論，それに違ひはあらざるべけれど，此の間来りし爺が口伝，血気定まらざる時は，或は失敗するやも知れず，落着きて食卓に向ひ給へ」「それも皆承知なり，されど如何にしても喉に通らず」「嗚呼誠に然るや，実を言はば我とても，今朝は一粒も舌を離れず。これあまりに鬱したるの朝にして，一図に競漕の事を思ふは策の得たるものにあらず。気を浮立たせて余事を思ふにしかじ」と言ひつつ，火箸を以て火鉢の端を叩けば，一同微笑して色めきけり。水元は乗地になりて，益々火鉢を叩きながら，それ興なくんば花も只の花，月も只の月なり。景物の如何によりて，悲しくも亦楽しくもなると，詩吟に浄瑠璃を交ぜて囃すに，詞の姿は滑稽なれど，其真意を推量れば，水元が熱心の程思ひやられて，さぞや胸の内は苦しかるべしと，梶沢先づ箸を取りて，いやながらも茶碗を叩けば，和する者あるに水元喜びて，これを選抜者音楽と名づくべし，続け続けと呼はれば，仕方なしに応ぜる六人。これも梶沢と同様に表に笑ひ裏に萎れて，手に手に杉箸を持ちながら，種々の物叩きける。此の音聴きつけて入り来たるは，此の寺の住職なり。「扨も若い方とて此賑さは何事ぞ，今日は競漕の当日には御座らずや」「されば其当日なればこそ，此様に騒ぐなれ，発起者は此の水元，悪くば止めるべし」と言ふに。「なんのそれには及ばぬことなり。仔細承りこれにて安堵致したり。縁あればこそ我寺に，方々止宿仕給ふなれ。昔時ならば戦場の隅田川へ，今日出陣の門出でとていかでか余所に見申すべき，願くば仏陀の加護を以て，大勝利を得られん事，影ながら祈り申す」と，真実面にあらはれけるに，一同言合さねど手の箸を其儘持ちかへ，櫂を漕ぐべき勢を示し，「和尚が念力のみにても，今度は必ず勝つべし。さりながら勝負は時の運，万々一不運にして敵に遅れたらんには，決死は昔の妙号にて悟り給へ，我等は無神論者とて，仏も耶蘇も大嫌ひの仲間なれど，今や身に無常を感じて，隅田を其儘の三途の川，やがて血の波に漂ふ身の，迹は如何にもして弔ひ給へ」と，切れ切れながら七人が，一句々々熱情を吐くに，住職たまりかねて，法衣の袖もて払ひながら，「虚言にも其様な事言ひ給ふな。負けると言ふは無き事にして，勝っての上の嬉しき噂を，しばし聴かして給はれ」と言ふに梶沢握拳を膝の上に作りて，「否々，勝ちても負けても今度は死ぬる覚悟なり。元は身体の健康を計り，そが為の運動なるに，其運動が起源となりて，大事な身命を捨つる事，前後揃はぬ仕草ながら，其所には意気地と言ふものあり。局外者より見たらんには，馬鹿らしく思はれなんが，此道に入らば又別なり。昨年の競漕に，若し我校の勝ちしならば，一中の競技者は自ら河中に飛入つて，助かるまでは流れる覚悟。陸にある生徒等は，勝てる我等の階上

より，メタルを受けて降りる処を，待設けて擲ると言ふ，相談全く出来て居りけり。幸か不幸か兎に角我校の負けたれば，事も丸くおさまりしも，先年すら既に是なり。今年勝ちたる其時は，如何様な目に逢ふや知れず。されば前より此覚悟は，いづれにしても定むるなり」と，一部始終を物語るに，住職端然として手を拱き首を傾け聴き居りしが，「成程聴けば道理至極，花は桜木人は学生さんぢや」

七人は六字の妙号誌したる一様のシヤツを下に着て，身支度整ひければ，年少の二宮より土器を廻して，年長の梶沢に終る水盃。これにて思ひ遺す事なしと，勇ましく立出づれば，門外には同校の生徒大勢並び居て，拍手其行を盛んに為し，送られて到る道すがらも，早や大勝利と叫ぶを聴く。

帝国大学の艇庫を借りて，言問の横に関門を設け，此所に国旗を樹てて，楼上楼下を競漕一般の事務所となし，出入厳なり。中には両校の生徒黒山の如く集り，互ひに睨み合ひの姿にて控ゆるに，自ら殺気立つて容易ならず見えにける。向島の土手は言ふも更なり，橋場今戸の岸までも，今日の勝負如何ならんと，隙間なく人の群るに，水上にも何百艘と言ふ船，舳を交へて並び居りぬ。

只一番の競漕の為めに，かくまで人の集るとは実に恐しき勢ひにして，人気各両派に別れ，噂区々に聴ゆる中を，梶沢初め七人の競技者，勇しく場に入るに，敵も味方も拍手なして，着場を祝い，俄に乱れ合ふを潜りながら，競技者控所に到れば，早や中学の方は先にありて，身支度最中なり。彼は白色，此方は赤色の帽子，競漕衣，手早く校服と脱ぎかへて，しばらく休息せる処へ，時期係来りて，「既に時間せまりぬ，要意如何にや」と問ふ。「此方は何時にても好し。」と言ふに，「然らば直に相図を為すべし」と急ぎて走り行く暇もあらせず，海軍々楽隊の奏楽聴え，続きて鯨波の声起りぬ。これより後競技者の耳には，何一つ聴ゆるものなく，上の桟橋より競漕短艇に乗り移りて，六人は櫂を手にしたる儘，舵手は舵に手を加へし儘，敵の船と共に小蒸汽に引かれて，浮標のある八百松の正面に行くまでは，只舳の赤色旗風にひらめくを見るのみにて，他人もなく我もなく，只一つの短艇あるのみ。

されど小蒸汽を離れ，浮標を舵手が手にする頃は，数度の戦場に臨みたる強者とて，我に復して全身に力の満ち来れど，陸上水上の観客は眼中に無く，一人一本の櫂を見つめて，耳に砲声の今や今やと，息を養ひて待ち居るに相図者の船よりは，赤色の旗を動かし，進み過ぎたりとて後へさがれと促し，今やと思へば此度は白旗を動かし，しばし纜りかねて居たりける。

水元は競技者を桟橋に見送るや否や，車を飛ばして浮標近き土手に至り，人掻分けて前に進み，ある限りの声を出して，「赤，負けるな，しつかり遣れ，負けるな，負けて呉れるな」と叫ぶ様，正気とは思はれぬ程なり。

審判官は海軍の将校数名，桟橋に寄りたる川中に，各国の旗を翻へしたる小蒸汽船を据えて，中には勝を報ずる小旗を携ふるあり，小砲の引金に手を掛けて，今や遅しと待つあり，双眼鏡を持ちて見廻すあり，此方の艇庫の楼上には，両校の校長を始めとして，教頭教師一杯に並び，表面には談笑の興ゆたかに見ゆれど，胸中互ひに穏かならず。楼下には両校の生徒，いざと言はば，抓合(つかみあ)はんず勢ひにて控へ居る有様，これや爆裂弾を芳野紙に包みて，炉辺に置くに異ならず，福岡楼上には，特別来賓なる朝野の紳士貴女，入場券と引代へになしたる紅白の薔薇の花を，各目立つ処に挿して，暗にゆかりある方へ力を通はしぬ。

二宮の弟は己より年上の友達四，五人に連れられて，野田屋の短艇に乗り，其所此所と漕廻し，兄の勝負如何にやと気を揉み，四田の旧僕は土手の前の方に進み居りて，杖のた

ゆむも知らでありけり。

水元は漕ぎ出さぬ先から声をからし，合宿の住職も口の内に経文唱へて，競漕勝利の祈願を為し居る。

一発の砲声，川面に轟けば，両岸の観客どツと揚る鯨波の声，すはこそ出発為したり，赤アー赤アー，負けるな負けるなと，水元は早や夢中になり，短艇は水面，身は土手と一直線，一生懸命に走りながらも，なほも負けるな負けるなと叫び，短艇の方を見詰めて韋駄天の如く走るなれば，子供を突飛ばし，桜の立木に突き当り，転げて塵に塗れながらも，負けるな負けるなと叫びつづけ，目鏡を落したるに気も着かず，長堤すでに言間近くなれば，人立も多くなりて，走りながらはとても見えず。せわしく立留り人掻分けて見れば，短艇のみか隅田川さへ目に入らぬに，これは目鏡落したる故なりと，未だに水元は気の着かず。二三間走りては又立留り，同じく茫々何一ツ見えぬに，見えぬながらも亦走りて，負けるな負けるなと叫びつづけ，走りつづけ叫びつづけて，場の入口まで至りし時は，呼吸苦しく堪へがたく，ばったり倒れて起上る気力もなし。かくてもなほ，しゃがれたる声張揚げ，負けるな負けるなと続け居る時，浮立つ奏楽の声起りて天地も崩れつべき拍手喝采に，奮然水元は立上りて，川端に近寄れど，勝負はいづれか更に見えず，足ずりしていらちながら，今は堪へられず知らぬ書生の肩に縋り，勝ちしは赤かと問へば，否と答ふ。白か否，白にてもなし，衝突にて中止となりたり。何，衝突？　如何にも中止となりたり。此前までは殆ど並行して進みしが，今や決勝線に入らんとする瞬間，いづれよりか一艘の漁船矢を射る如く漕来りて，恰も仲裁を試みるが如く，二艘の前に横り進行を留めて，三艘衝突，咄，何者ぞ——邪魔したるは，名高き某教育家に似たる漁夫なりし。

隅田川に短艇競漕を観るの記（抄）

（明治29年）

穂積重遠

古い手箱の中から僕が丁度小学校を卒業した頃の作文が出て来た。帝大ボートレースの観戦記だ。其の当時の小学生は斯う云ふ文章を書いたものかと，我ながら滑稽だ。

時維れ明治二十九年四月十一日，軽舟を墨水に浮べて帝国大学の短艇競漕を観る。此日天色明朗，片雲を止めず。両岸の桜花正に芳姿を呈し，雲の如く霞の如し。士女絡繹，花を覓るあり。隅田の長堤も立錐の地なし。余は軽舟を決勝点の側に進めて之を観る。競漕数番互に技を競ひ俩を闘はす。一勝一敗，壮絶快絶，而して競漕中最も衆目を曳きしは第一高等学校と商業学校との競漕なりき。抑も両校の墨水に輸贏を争ふこと茲に数回，高等学校は常に一着を占めたりき。故に商業学校は累年の恥辱を雪がんと欲し，高等学校は既得の栄誉を失はざらんとし，両校の意気甚だ昂れり。乃ち高等学校は小蒸汽船に数多の短艇を繋ぎ河流を上下して威を示し，商業学校は小舟を決勝点附近に散浮して之と相睥睨せり。時至るや，商業学校の漕手は赤帽赤衣揚々として出発点に向ふ。衆人或は白と呼んで高等学校を励まし，或は赤と叫んで商業学校を声援せり。号砲一発，二艇出発点を出づるや，漕手互に秘術を現し死力を尽し，競漕益々盛なり。忽ち見る白艇疾風の如く突進せしを。遂に赤艇に先んずること数間，一躍して決勝点に入れり。是に於て高等学校又た勝を占め，両岸の喝采湧くが如し。

対一高戦

（明治29年）

一高対高商競漕の復活で殺気立つ

帝国大学春季端艇競漕会は予報の如く昨日を以て挙行せられたり。当日は土曜日にして晴天なりしと，又第一高等学校と高等商業学校との競漕ありとの事により，見物に出掛けし者頗る多く，吾妻橋上流の両岸は殆ど人を以て埋め，河中には紅白の球灯，旗幟など掲げたる大船小船其数を知らず。

第九番は当日第一の観物なる第一高等学校と商業学校との競漕なり。商業学校にては先年の恥を雪がんとて，選りに選りたる剛力の漕手のみにて，整調岸吉松氏は腕力三人に敵すと伝ふれば，勝利は商業学校のものなりといふ者もあれば，否高等学校とて揃ひに揃ひし漕手なれば，いかで商業学校に劣るべきと衆評区々なりしが，両校の生徒何れも味方を励まさんとて，商業学校は赤印し打ちたる帽旗を打ちふりて喊声を作り，高等学校は白の印し打ちたる帽旗を挙げて，劣らず示威運動を行ふなど随分勇ましかりしが，やがて一発の号砲と共に両艇水を切って漕ぎ出したり。初めの中は赤印の商業学校の方少し白印の高等学校を抜き居りしが，中頃に至りて彼れ一進，此れ一進何れを勝負と見分け難かりしが，決勝点に近づくに従ひ白の高等学校艇は，終に商業学校の赤艇を凌ぎて勝利は高等学校に帰せり。夫れより十二番の競漕ありて，午後六時頃無事終了を告げたり。

〔東京日日新聞　明治29年4月12日第7340号〕

墨堤スケッチ

帝国大学の催しに係る昨日の端艇競漕，左なくとも墨田の堤割るる許りに人の出盛る花見時，空も朝より晴れ渡りて，はる風そよぐのどかさに，木綿の冬着を入れ替へに，絹物の袷を質屋の庫より請け出してなりとも，ヤツコラサと浮れ出づべきこの日柄，十数年来鍛へに練へし漕手の競漕，学士もあれば博士もあり，上流紳士の楫取三昧に，見物人の多きは申すまでもなし。

途上も車に急がれて，最早や一番組の競漕は終りしならんと，速る心を躍らせて京橋日本橋より東に向ふ腕車とあれば，皆我と同じく墨田に走る仲間にやあらんと，車の梶棒打合はする左右の人も懐かしく，若しも堤に着きたらんには腰なる瓢箪を傾け尽してなりとも，これを縁にと挨拶したき下心は，互に見合はす眼波にそれと覚られ得るもあり。

〔時事新報　明治29年4月12日第4566号〕

一高・高商対校レース戦績

第1回	明治20年4月16日	① 一高	② 高商	タイム	5分16秒	艇差　不明
第2回	明治21年4月21日	① 一高	② 高商	タイム	不明	艇差　不明
第3回	明治22年4月10日	① 一高	② 高商	タイム	6分5秒	艇差　半艇身
第4回	明治23年4月13日	① 一高	② 高商	タイム	不明	艇差　¼艇身
第5回	明治29年4月11日	① 一高	② 高商	タイム	4分31秒	艇差　3艇身
第6回	明治32年4月30日	① 一高	② 高商	タイム	不明	艇差　5尺

会場は向島でいずれも1100m（第11回大会プログラムより）

第6回一高・高商戦

第5回の競漕が終って突然東大運動会から一高と高商の両校に対し，「来年からは一高と高商を別々に招待するが，対校レースとして招待することは断る」との通知が来てレースは無期延期ということになった。理由としては応援団の横行の為，会場も水路も散々荒らされて，レースの進行に差支えるというのである。

そこで知恵をしぼって考え出したのが，巳亥連合競漕大会である。表面は各学校の連合競漕大会ということにし，これに一高と高商が参加してレースをするというのだから文句のつけようがない。しかも会長に向島に住んでいた榎本武揚子爵をかつぎあげた。

非常な張りきり方であった。それだけにこの競漕の前景気は凄く高商の先輩が会社を休み合宿に皆勤したとか，一高側は毎晩船を出して全コースの水深を測ったとかという話はよく聞かされたものである。当日は例により凄い人出で，隅田川の両岸は人で埋り，いよいよ最後の一高・高商のレースに移ると，河上が急に色めき立った。手回しよく配置した高商の応援船では赤旗を手にした学生が早くから応援歌をどなり，川も岸もすっかり高商側で独占し，これに対して一高側は，堤上の所々に，白旗(当時の一高のスクールカラー)を持った少数の応援団がしょんぼりと佇んでいるだけであった。

丁度午後5時，選手の乗船を待つ緊張の一時，突然上流で激しい汽笛が鳴り響くと，小松島の土手から，2隻の汽船にひかれた60隻ばかりのボートが長蛇の列をつくって会場めがけて下ってきた。ボートの上には白旗を持った一高生がまるで狂人のように旗を振り，応援歌をどなった。それを見ると，沈黙を守っていた陸上の応援団も，又一斉にわめき出したから，まるで蜂の巣をつついたような騒ぎで，数万の観衆はすっかり気を呑まれて，ただ目を白黒させるだけであった。

こういう狂騒乱舞状態がいよいよ最高潮に達した午後6時過ぎ，一発の号砲と共に，両校の名誉をかけた，壮烈な火蓋は切られた。一高1コース，高商2コース，潮は上げどまりの後で，岸一杯に満々と水をたたえていた。

ところがスタートをするとあんまり踏張りすぎた為か，一高の4番のオールが抜け，あわててそれをもとに戻すまで，4，5本を無駄にした為，たちまち半艇身以上置かれてしまった（当時クラッチは上向きに開いていた)。この時の漆野が後年「もし負けたら俺の責任だと思ったので俺は死にもの狂いで漕いだ。1本漕ぐ毎にもうぶっ倒れるか，もうぶっ倒れるかと思いながら夢中で漕いだ」といっていた。その為か一高ジリジリとつめて，水門で両艇並行，高商すかさず力漕して又2シートを抜き，優勢のまま竹屋の渡しを過ぎた。この時一高俄然スパートして，逆に2シートをリードしてそのまま洗場にかかると，今度は高商が奮然と力漕し，それからは両艇力漕の応酬で，僅か1，2シートを抜きつ抜かれつして，手に汗を握るような大接戦を続けた。こうして全観衆総立ちとなって，天地がひっくり返るような騒ぎの中を一高最後の勇を鼓してよろめくようにゴールに飛び込んだ。艇差わずかに5尺，まさに死闘である。

なお，この時の両校の選手が卒業後，レース思い出会をつくり，毎年交替で招待し合って，酒と気焔で対校気分を発揮したというが，今ほとんど物故して，半世紀前の神話めいた懐旧談を聞く機会がなくなったのは心さびしい。（宮田勝善著「ボート百年」より抜萃）　（明治32年4月30日第19回プロより）

漕艇管見の諸論其他

（明治38年）

菅　禮之助（明38高商卒）

私は其後遊び半分に法学院へ通学して居たが，始終訪ねて呉れるボートの岩下家一に勧めて『漕艇管見』といふものを此雑誌（一橋会雑誌）に連載させた。力学の知識と実際の経験とを統一して書いた漕艇術の講釈は先づこれが元祖であろう。家一といふ男は今の逗子ホテルの主人で夏は泳ぎの先生もして居る，また宮様方のボートの御指南役をも仰付られて居る。此家一が学生中から従五位の子爵であったことは卒業後でも暫くは知らなかった。卒業すると直にスイスへ行って或ホテルのボーイに住込んで，毎日芋洗ひと皿洗ひと皿拭きを専らやって居る為め手の皮が剝けて仕舞ったなどといふ本人の通信を伝聞したことがあった。

此『漕艇管見』の諸論だけは九頁に亘って私は勝手なことを書かして貰って居る。劈頭『漕艇とは何ぞや，ボートを漕ぎて遊ぶことなり，遊ぶといふは愉快に遊ぶこと立派に遊ぶことなり』と云って居る。此時代には撃剣が剣道になったり，柔術が柔道と改められた頃で，ボートも亦其時代の風潮に従ってヤレ修養だヤレ何だといろいろの道理や勿体を付けねば自他共に満足しなかった時代で，私は当時の此風潮に対して，否々ボートは遊びなりと大に喝破した積りであった。もう一つは漕艇と云へば直ぐ競漕の勝敗ばかり重んずる風が何処の学校にもあったが，真のボートの徳はそんなものでないことを説きたかったのである。レースとは選手のみがすべきもので，それは選手の計画と研究と練習との3つに最後の判断を与えるが必しも絶対の判断では無い。「予は疑ふ，競漕ありしより古往今来幾何の奨励を漕艇に与へたるやを」といふ主張である。「彼等は先づ船に親しまずして端艇に親しみ，端艇に親しまずしてレースボートに親しみ，レースボートに親しまざるに早く既にレースに親しめる也，噫」と大に慨嘆し，大に警告を発してゐる。乾いて硬い文字ではあるが非常な熱心と已むに已まれぬ老婆心とが籠ってゐることだけは明かに認められる。尤も其結末は冒頭に比べて甚しく平凡で，「漕艇の為めに漕艇せよ，之を漕艇の根本観念となす」といって之れへ当時まだ流行して居た二重圏点を打って筆を擱いて居る。此一文の末の添へ書きの中に「我輩屁理屈を知らざるも幸に元気あり」といふ此時の手製の標語がある。これも圏点付きである。これが又学内で一時大いに流行った。

今年或機会に久し振りで学生のボートの会へ出席した時，学生が座間此標語を使ふのをチラホラ聞いた。こんな拙い標語が二十五年後の今日まだ少しでも伝はって居るのかと一寸驚きもしたが，同時に其頃のボート仲間が急に偲ばしくなったことであった。

大利根

此年（明治卅八年）の六月の卒業式前に，もう是れで永らくのボート生活も終りを告げるといふので『漕艇管見』の岩下家一と，之れもH組の選手の小泉哲一郎とて常陸山から養子に所望された水戸生れの大男と，C組の選手の頭目加藤季彦とS組の私との四人で，小艀を操って利根河を上下した。六月二十七日に厩橋を漕ぎ出でて二十九日には銚子の浜へ着き，七月一日に銚子から河を遡って四日に

印旛沼で水浴をして別れた。此四人はレースには四五年も敵味方であったが共に死生を誓った骨肉同様の間柄であった。卒業すれば家一は瑞西行き，季彦と哲一郎は南支那へ樟脳とゴムの採収に行く筈に決まって居り，私は東京で勤め口を探す積りで居った。此時の日記は四人の姓名を継ぎ合せて下り藤哲之助といふ名を以て『大利根』といふ見出しの下に私が一橋会雑誌へ書いている。巾一間長さ三間半ばかりの艀の中央へ先づ高さ二尺の三尺四方の箱のやうな屋台骨を組んだ。之は夜四人の者が此箱の内へ頭を突込んで寝る為めで，その時雨ならば胸から下へは莚を一枚掛けて置くだけのことである。帆や綱や鍋や七輪や柄杓桶箸茶椀から米も酒も漬物も積み込み，魚が食ひたくなったらばと網や釣糸も準備した。二十七日の朝本所の河岸で稲荷鮨と蚯蚓（みみず）を買ひ込んで出発したのである。出発匆々家一は前夜丼で二杯も食った胡瓜揉みに中てられて居たが，先刻浅草の青物店で胡瓜を見てから急にムカツイて来たといふので，「もう胡瓜を見ないやうに舟底に寝かして置く」と言って居た。中川の青葦の両岸を眺めにして江戸川の運河に漕ぎ入り，それから長堤を曳舟して午後二時江戸川へ出た。午後から日和は定まった。行徳が見えた頃に日が暮れ，市川の鉄橋の下へ小さな碇を卸して泊った。饂飩（うどん）を煮，正宗の罎を燗し，釣糸を舷から垂れて蚯蚓をいぢり乍ら晩飯を了へた。他の船に衝突されぬやうに帆柱を立てて，舷灯を吊し，一酔陶然として例の狭い箱の中へ四方から四つの頭を入れて眠った。夜半から大雨になって目が覚めたから敷莚を夜着にして掛けてまた熟睡した。巨人哲一郎は寝ずまひが悪いので夜っぴて頭を大雨に叩かれて居た。二十八日も豪雨の中を家一が巧にセールして午前中にはもう運河口へ着いた。名物の鯰の天麩羅を大食したあとはまた曳船をして三時間足らずで運河を抜けた。此処で舟は運河税の役人に捉まったが私が『文部省の舟ぢやぞ』と一喝して役人のひるむ処を漕ぎ抜けて仕舞った。卒業間際の年頃は一番悪智慧がある。年月と共にだんだん前後左右に気を配るやうになれば剰す所は徂徊と逡巡とあるのみだ。運河を出れば愈々利根川の雨中の大景へ入るので，此処を叙して「雨と霧とが眼を蔽うて両岸が模糊たり，朧朦たり。若し夫れ幾里の河幅に凡そ船たるものは是一艘」といふ変ンな文体は当時愛読した泉鏡花の口調を真似たつもりであろう。濡鼠になって力漕三里と帆走二里，雨は霽れたが暗黒な夜で，岸の藪中の泥へ舳を深くシカと突込んで今夜も饂飩を食って寝た。穢い臭い暑い処で夜っぴて蚊や羽虫に襲はれた。

二十九日は午前三時から起きて漕がされた。北寄りの夜風涼しくて星淡く，舳の行く手に大きな三日月がギラギラと光って居た。坂東太郎の夜色も曙光も共に壮快極りなきものであるが，日が昇りかけると鼻の先に直ぐ神崎のナンヂャモンヂャの黒い森が現はれた。佐原附近から艫を繋いで流れに随って船を下すこと一里半許り，津宮の猫婆の店でどぶろくを仕入れてまた船の流るるに委せて舟底に酔眠を貪った。猫婆といふのは或茶店の婆子で，各学校の遠漕隊をよく世話をして呉れたものだ。家一の如きは永年の間に利根河の往返数十回に及んでゐるだろう。斯くて数時間後に不図目を覚すと舳は何時の間にか岸の青茅の中へ潜り込んで前刻から同じ処にひっかかって居た。見ればこれはいかな事まだ津宮から程遠からぬ。

快晴で悪い風だが家一が上手に帆を操って三里許りよく帆走した。独り帆綱を持って躍り廻って居る内，彼は七輪の火へ懸っている鍋へ足を引懸けて饂飩一升を舟底の闕伽と泥の混りの中へひっくり返して仕舞ったので，我等一同の昼飯には軍用パンの欠ケら数片しか無くなった。是れが此行の中で一番の難儀

であったと後にも語り合った事であった。川幅が追々広くなり水嵩もだんだん増して来る。逆に南風が吹いて来て帆は利かなくなった。その風も俄かに暴れ始めると共に川浪はザブザブと音を立てて来たから雑多の荷物を舟や檣へ縛り付けた。炎天の下の暴風は壮快だ。今しも我等は漫々たる大利根の中流に一葉の孤舟を浮べ，暑い青空から吹き下して来る早手と共に，河伯が高浪を白く颺げ初めた水の大景に直面する。我等は舷を叩きつつ声の限りを歓呼した。

舟も人もザブリザブリと波を浴びせられながら，流石に大浪のうねりの背を乗り廻して巧に漕ぎ抜けること二里，風は漸く凪ぎ了ったが浪はまだ高い。そして暑い日が愈々照り付けた。全く暴風の余波が消えて遠岸の青茅も温順しくなったのは松戸あたりの事で，水は平かで上げ潮だ。銚子の町外れから踏張ってオールの千本漕ぎをやって旅宿大新の裏岸へ漕ぎ付いた。四人は足元も蹣跚として，舟道具や荷物は固より板子まで剝がして倉庫の内へ担ぎ込み，舟は陸へ曳き揚げて大新に這い上り，「久し振りで畳の上に乗ったら何だか勿体ないような気がした」と書いてある。翌三十日は休養。風呂場で南清経営の議論を始めた為め非常の長湯。七月一日は風の方角が宜しくないので終日風待ちをする。午後には先頃常陸山が来て演説をしたといふ銚子中学校を訪問して望みとあらば一場の講演をと，四人共小穢い風体で宿屋を出たが，45町行くと俄かの大夕立だ。四弁士這々の体で町中の観音堂へ逃げ込み，雨宿りをして居る内に日が暮れかかって無事に宿屋へ引返した。

七月二日。朝から晴れて九時頃から風が少し南へ廻ったから，急いで舟を洗ひ船具を支度して十一時出発。帆はよく張れず潮は下げてゐるから，艪と脇艪とオール二挺で力漕しても舟足は遅い。神崎で幸ひにも風が廻ったので南風雍々と帆走って，四人共帆の日陰に仰向けに転がって日盛の青天井を眺めて居た。此辺は遠い岸の真菰が何処迄も青く続き，白い鷺が飛び出したり舷に魚が跳ったりした。河上の涼風は帆一ぱいに孕んで何時までも舟の独りで快駛するに委せて置きたかったが，やがて日暮れて津宮の一里許り下手に夜泊した。此夜に持ち上った珍事といふのは，舷灯目懸けて大小の羽虫の大羣が羽音を立てて唸りながら襲うて来たことである。顔と云はず手足と云はずに飛び付くのは我慢も出来るが耳や鼻へ這入る咽喉へ引っかかる。遂に舟ごと避難したが羽虫はさう遠くまで追駈けて来るものではなかった。

三日朝の四時には河の面の夜明を待ちながら舷灯の下に朝食の饂飩を啜った。日が昇ってから津宮の猫婆の家へ漕いで米と炭を仕入れた。そこの一節は

> 去るに臨み猫婆曰くまた来年来なせいよ。もう来ない，これから御役人になるのだ。御役人になっても舟へ乗ってお出でなせいよ。否遠い処へ行って十年も二十年も帰らなくなって仕舞ふからモウ来ないよ。来ないぞ来ないぞ此猫婆ア，やいやい。毎年の遠漕に世話をして呉れた猫婆に告別すると共に，来年からボートに乗って来る連中もよく世話をして呉れとくれぐれも頼み，舟は桟橋を離れて猫婆を呼ぶ声遠く中流に泛べり。

この米一升五合は神崎で焚けた。巨人小泉が一人で此半を平らげ，鍋底へ粘り付いた残滓は川水を入れて攪拌して飲んで仕舞ったと記してある。金江津で日が暮れて後，夏の夜風が帆に孕むでかなり迅く流るる川面に星影が燦爛と映る。夜の水の沈黙を破って艪がギイギイと鳴る。舷灯を目当に蛍の羣が船に落ちて来たとも記してある。此辺で夜泊して翌四日も払暁前に起きて働いた。此日は風悪しく舟は進まぬ。巨人一人へ舵を預けて三人は昼寝したが彼は寂しくなって来ると，眠った

人間の顔へ柄杓で川水を掬っては打つ，斯うして三人はとうとう起きて仕舞った。安食（あじき）に上陸し印旛沼で水を浴びて一先づ上京した。此行写真も撮ることは撮ったが東京へ帰って現像したら，種板へ光線が洩れたか一枚残らず真黒であった。

事業は百年文学は千年，孰れも望み得べくもない。時といふものは前へ進行するのか将た又後ろへ経過するのか，兎も角も其間に物を変じて心とする，心を変じて物とする，斯くて一切の価値は賦与されて行き滅殺されて行くのだ。

思ふことなくて過ぎにし昔さへ偲べば今の歎きとぞなる（一遍上人）。それよりも星霜25年の昔と今と，夢なると現なると，筆者たると読者たると，我と我が形影相顧る其悦ばしさを爰に記す。　　（昭和４年７月）

（菅礼之助著『随筆うしろむき』より）

屁　理　屈

石井　阿杏

一橋大学では東京高商の昔からボートの対抗戦に，高等商業学校の頭文字をとって，H・C・Sの三組を用いている。

久し振りにそのS組の会に裸馬先生（＝菅礼之助翁）が顔を出した。このS組なるもの，先生在学中から数えて六十余年未だに会費を徴収に来る。先生よりも先輩と云えば，国際連合で日本より外国で外交界の長老として有名な佐藤尚武参議院議員一人のみで，勿論当日出席されていた。居並ぶ明治，大正，昭和三代に亘るS組会員を前にして，

「学校で習ったものは何一つ実用にならぬ。実用になるものはすべて理屈で説明のつかぬもので，説明のつくようなものはたいした事は一つもない。この齢になる迄の経験では実用になったものはボートばかりであった。学問はこの意味に於て，実用とは縁のないものだ」

という大演説をブッた。結語に曰く「吾輩屁理屈を知らざるも，幸にして元気あり」このキャッチフレーズ，在学中即ち六十年前の先生作（裸馬著随筆集「うしろむき」参照）であるが，今でも一橋端艇部での一枚看板の由。

（「裸馬先生愚伝」より）

漕艇管見

岩下　家一（明治38年高商卒）

ＨＣＳ撰手は今や最新式のボートを享け得て熱心実地の練習を試みつゝあり，其他一般の漕手は旧艇四隻を以て争うて漕艇界に游泳しつゝあり，殊に其驚くべきは旧艇四隻の乗艇券が悉く未明に取り去らるゝの一事にあり，朝三時に於て已に一枚を剰さず，四時にして尚ほ出艇簿を窺ふ者は曽てこれ無し，不肖かゝる現象を実見する毎に欣悦転た禁ゆる能はず，謂へらく我校士気の振へる何ぞ一に爰に至るや，漕艇に対する嗜味がかくの如く了解せられ，漕艇其自身が斯の如く実行せられつゝあること，他によく我校に及ぶものありやと。

我端艇部は已に自ら元気に於て何者にも譲らざることを自覚して確信す，この元気は維持せざるべからず，而して更に更に向上進歩せしめざるべからざる也。

元気を自覚し確信する我端艇部の伎術に至りては則ち如何，撰手は各校を代表す，帝国大学は撰手ありて一般の漕手なし，而してなほ其校をして向島に覇たらしむるを見る，蓋し其撰手の伎術頗る高度の進歩を経たればなり，我端艇部この勃々躍動する元気と覇気とを抱いてなほ伎術の一点よりして大学の撰手に壇場の権力を握らしむるに至りては，不肖常に遺憾に堪えず。故に曰く我端艇部の伎術はなほ幾多の研究を企てざる可らずと。不肖此考を懐くこと爰に三年，所思未だ其半をも実行せず，而して明年或は我校の業を卒えて去らむとす，顧みて深婉の情に堪えざるものあると共に一片自奮の念是に於てか則ち有り。

拠て過古に於て実地に経験したる漕艇伎術の私見を開陳して我端艇部が将来建設すべき大漕法の礎石に向ひ，この一片の瓦礫を添えむとす，『漕艇管見』を稿するの旨意要するに此の如し。　（中略）

緒論　漕艇の根本観念

漕艇とは何ぞや，ボートを漕ぎて遊ぶことなり。遊ぶとは愉快に遊ぶこと，立派に遊ぶことなり，六ツかしく云へば荘子逍遙遊の遊の字なり。

一艇の乗組オールを揃へて墨田川を遡り，千住綾瀬辺の森蔭に纜を結びて狭き艇内にころがれは，春なれば春風，秋なれば秋風がそよそよと胸毛を吹いて行くとき，如何なる武骨漢と雖も，アゝいゝ心持だ位は云はずに居られざるべし，蓋し草臥れたる筋力は無駄な働きを止めて，肉体に離れ難き凡ての邪念妄想はこの刹那に跡なく消散し，肺も腸も脳髄も爰に新鮮の空気を呼吸することを得，昔の風流などといふことは此時の感想の一部分に過ぎざるなり。

舵手の発するストップの一令は嘗て我が友をして左の痛快なる短文を草せしめたり。

細艇六挺の櫂，出でゝは飛龍翼を張りて万里の風に搏つが如く入りては蟄龍雲を呼んで大瀛の浪を割くに似たり，一漕又一漕艇や砕くる櫂や折るゝと，漕いで漕いで漕ぎつかれ，おのづと櫂の乱れかゝれば疾呼耳を裂く舵手の声「ドウシタ，トップ，シッカリ」，糞！　心も破れよ肺も裂けよ，オノレ死すとも櫂は捨てじ，息ある内は漕かでや置くべきと，再び櫂を取り直せば，満身の血行逆に心を衝いて熱火胸を焼き去り，目くらみ神消えてアハヤ倒れむとする一刹那，ストップの声に櫂を投じてシート

を辷り落つる其時其快，空や我，我や空，人なく世なく天なく地なし，昔は孟子浩然の気を説き仏者今尚禅を教ふ，我は諸君に漕艇を勧めむ。　（十八公）

以上は息みたるときの漕艇嗜味にして消極的ながらまた棄て難き思ひあり，而して飛ぶが如く艇を駛らして一漕又一漕の各瞬間，例へば力をオールに籠めつゝウンと曳きスーと出す刹那々々の快感は，送迎に遑あるべからず，這般の積極的趣味に至りては，口にて言ひ筆にて書ける程詰ら無きものにあらざる也，豪快，雄壮，卓落，颯逸……支那人の国語は完全なる形容詞一もこれ有るを知らず。

斯道の先覚者は，体育に加へて智育情育意育の諸方面よりボートを論ず，予は大にこの説に賛成するものなるは告白す，ボートを只に一の体育的器具として認むるを陳腐なる旧思想なり，予は漕艇を以て近代に於ける武士道の一なりと確信す。

然れども予は爰にボートを精神的方面より論ずることをせざるべし，ボートなる観念を抽象して心身の修養問題に論究するは不必要のことゝ云はざれども，是れ予の不得手なる所なる而已ならず，理屈は何とでも附くものなれば也。

加之予は抽象的の理論を以て漕艇の目的に悟入するの極めて困難且つ不得策なるを認め，漕艇技術の方面よりして真理の光明を辿らんと欲す，一例を挙ぐれば或一艇を進むるに当り各自思ひ思ひに漕ぎては艇は「出る」ことなし，故にクルーは皆心を一にして櫂を揃へることに注意することを要す，此一事は如何なる結果を人間に与ふるか，ボートを知らざるものには赤ン坊の欠伸程にも思はれざるべけれども，斯道に指を染めしものに取りては渠等の生命とも命脈とも云ふべきものならむ蓋しオールを揃えやうといふ漕艇上の観念は不知不識の間に吾人の脳髄を刺撃して止むときなく，依て協同団結の生ずる所以となる，而して斯く櫂を揃えることは甚だ六ツかしき技術上の問題にして，之れが為めには精神上肉体上余程辛き思をなさゞる可らず，忍耐は必ず是によりて養成せらるゝなり。

以上の如き関係は諸種の漕艇技術に就きて明かに発見せらるべし，されば漕艇の進歩発達は頓て人物修養の有効に経過し来れることを示す所以にして，予は此意味に於ける漕艇技術の進歩発達を望むものなり。　（中略）

漕界の通弊として大に反対すべき一事あり曰く漕艇と競漕との混同是れなり，漕艇とは上述の如く船を漕ぎて遊ぶことなれば決して競漕と混同すべきものにあらず，又漕艇なる語より直ちに競漕の聯想せらるべき程性質の酷似したるものに非ず。　（中略）

かく言へはとて予は決して競漕を無用の長物として排斥するものにあらず，競漕は大に予の重んずる所也，同時に漕艇も大に重んずる所也，只両者の全く別物なるを論じて其混同を非難する而已。競漕は試験なり裁判なり戦争なり，故に競漕会は試験場なり裁判所なり戦場なり，詳言すれば各競艇が一年間（又は或期間）に計画研究練習したる結果に最後の判断（絶対の判断にあらず）を与ふる所なり。　（中略）

競漕に関して勝敗の観念は男子の棄つる可らざる所，殊に撰手として或責任を負ふものはレースに勝つことが期待の一大条件なるを疑はす，されども是れその全部にあらず，勝つことをのみ唯一の目的として船を漕ぐは陋劣なり。　（中略）

学問せむが為めに学問するは真の学問なり，試験の為めにのみ学問するは何ぞや……斯の如く日常の観念あるにも係はらず，尚ほ競漕の為めにのみ船を漕ぐ謂れありや，希くは漕艇本来の目的を誤らずして向島に遊べ。

漕艇なる一語中には詩趣，和楽，団結，元気，同情……幾多の好文字を包含す，『漕艇の為めに漕艇せよ，』之を漕艇の根本観念と

なす。

研究の範囲と方法

（前略）

第一章　漕法

A　概論――速度に対する抵抗

B　スタイル諸種

C　櫂の在水中時と在水上時との関係

D　転舵法

第二章　操舵法

A　概論

B　数次的操舵主義

C　継続的操舵主義

D　目標の取り方

E　船の避け方

F　潮流横過

G　回転法

第三章　各撰手（漕手）の任務と資格

A　整調

B　五番

C　四番

D　三番

E　二番

F　艇舳

G　舵手

第四章　撰手練習方法

A　漸緩主義

B　漸急主義

C　ロングコースの練習

D　レースコースの練習

E　強漕練習

第五章　競漕大会

A　審判者

B　競技者　　（中略）

我輩庇理屈を知らざるも幸に元気あり，これ我端艇部の鉄律ならずや，徒らに筆舌を上下しても何の益なし，宜しく之を実地に試みて一家独創の判断を下すべし，予も亦自ら進むで向嶋の実地に当り，諸君と共に漕艇の何者たるやを学ばむことを期す。

旧艇朱雀遭難事件記事（一橋会雑誌付録）

（明治40年）

小　引

宝山沖に於ける旧艇朱雀の遭難は，我が一橋会に起りたる空前にして且つ絶後なるべき痛恨事なり，抑も斯事たる１個の局部的現象として看過するも亦為し得ざりし所にあらず。然りと雖も一波動きて万波これに応じ，終に天下の耳目を聳動して，知ると知らざるとの別なく，同情の涙翕然として此に聚れり。其の波をして動かしめたるものは何ぞ，其波をして応ぜしめたるものは誰ぞ。宝山に人あり，柳川惣助氏是れああ泓澄たる大江の水にして初めて克く碧落を泛ぶべし。濁水影を映さず細流焉んぞ巨舶を浮べ得む。

旧艇朱雀遭難事件は人生の悲惨事たる既に言を要せず。然れども翻って稽ふるに我が一橋会が之れに依りて贏得せし所真に大なるもの有りて存す。編纂部は茲に該事件に関する一切の記事と，会員の感想とを聚録し，一は以て亡友の霊にこれを捧げ，一は以て永く柳川氏の高誼を記念し，天下の同情者に答え，併せて一橋大艦隊の艨艟が舳艫相銜みて航行しつつある現状を披瀝し，聊か二君の霊を慰めんことを期す。

その波をして恒に斯の如くに動かしめよ，恒に斯の如くに応ぜしめよ。然して一橋会万才の声をして此の波と共に永久へに高からしめよ。

明治戊申２月

編纂部幹事　植野庄三郎　小磯　昭輔
野尻　孝　春田　茂躬
武井　正修　徳野　隆祐
奥沢俊次郎　讃井　源輔
岡　忠尚

例　言

1　本記事は匆卒の際編輯せしものなるをもって誤謬脱漏及び礼を失せる点尠なからざるべし。読者の諒察を仰ぐ。

1　本記中柳川惣助氏の小照を捜入して永く同氏の高誼を記念せんと欲せしが，こは却って謙譲なる同氏の意に反するを慮り，単に２名の亡友及び遭難地現場の写真のみを掲ぐる事とせり。

1　本記事中「遭難記」は遭難艇なる旧艇朱雀の全乗組員を代表して舵手徳野隆祐之を執筆せり。

1　本記事採録の順序は別項目次の如くなれ共，事件の性質上各項の関係纏綿交錯して其間固より劃然たる区別を為し得べきに非ず，従って記事の重複及び前後顛倒の箇所処々に散見せらるるは実に已むを得ざる也。

1　本記事原稿締切以後に起りたる事項は総て之を本会雑誌逐号に掲載する事とせり。

1　本記事を編纂せるに際し，端艇部，研究部，英語部各幹事を始め其他諸兄の補助を仰ぎし事多し編纂部は厚く感謝の意を表す。

緒　言

明治40年12月下旬，本会端艇部Ｈ・Ｃ・Ｓ各組選手の乗組める端艇８艘は例を襲ひて銚子方面に遠漕せしが，其中Ｓ組第２選手の乗組める旧艇朱雀号は同月25日向島艇庫を解纜し同月28日銚子に着，２泊の後同30日朝同地を発し利根川を遡りて津の宮に向ふ途中，茨城県鹿島郡若松村字太田新田小字宝山沖に差懸るや俄然西北の烈風に遭難し，遂に顛覆す

るの不幸に会せり。然して同艇乗組員中5名は同地柳川氏家人の為めに救はれしが4番村井俊二及舳手柏木粂作の2君は不幸にして不慮の死を遂ぐに至れり。

飛報一度至るや各選手は同地に集合し，関端艇部長も東京より急行せられ，直に右死者の屍体を捜索するに勉め，其結果村井君の屍体は41年1月1日之を発見することを得たるも，柏木君の屍体は遂に1月28日に至る迄発見せらるるに至らず，其間学校は為し得る限りの便宜を計り，一橋会は1月6日の臨時理事会の決議によりて本件に関する活動の中心となり，従って遭難地方面，即ち笹川及び宝山に存する学生は煩雑なる外部との交渉を執ると共に，一面に於て柳川氏一家及び千葉茨城両県下の遭難地沿岸の町村役場，警察署其他の官衙及び各町村民の援助を仰ぎつつ熱心に捜索事業を連日遂行せり。殊に松崎校長の照会に由り，商船学校の教諭にして彼の月島丸事件の際捜索事業を担当せられし奥洞海軍中尉は校長と前後して親しく現場に出張せられ在遭難地の学生を指揮して百方捜索の方法を講ぜられたり。

東京方面に於ては先づ1月6日の臨時理事会を開きて重要なる問題を決議し，其決議に基づきて委員は村瀬部長の指揮を仰ぎつつ遭難地方面との聯絡，諸方より贈られし見舞に対する謝状，外部との交渉，各部長及会員に対する通告，遺族の接待策諸般の事務を掌理せり，斯くて1月11日に追悼法会を営み，同17日に会長，部長及び委員の相談会を開き其議決により遭難地方面の学生の全部引上ぐるを待ちて遂に1月31日臨時総会を完了せり。又地方に於て本校出身者より成れる同窓会は這般の事変に関し深厚なる同情を表せられ，寄附金を募集して本会の為に多大の援助を与えられたり。

以上を旧艇朱雀遭難事件の梗概とす。別項小引中にも記せる如く元来今回の事件たる，或は観察の立場より見れば，単に1個の局部的現象として看過することを得べし。然れども吾人は彼の事変が壮烈悲惨なりし出来事となりしと，我校に何等縁故なかりし柳川氏一家が絶大の意気を以て我校友を遇せられしと，利根河畔惇朴なる幾万の村民が心より校友の死を悼み，多大の犠牲を払って我等が亡友の屍体を捜索することに努めしと，都下及び地方の漕艇者が陰に陽に満腔の同情を寄せたると，及び卒業生，先輩諸賢が深厚なる同情を以て我等の挙に助力を与えられるを見て，自から我校に籍を置く吾人は焉んぞ事の局部的現象なるの故を以て之れを看過すべき度量を有するを得んや。見よ局部的現象は既に拡大せられて総体的実在となりしに非ずや。吾人は一橋会理事会が這般の事件を目して一橋会の問題なりと決議せしに向って寸毫の異議を有せざる也。天下の同情者が至大の動力を与えしは敢て二友の人と為りを知悉せしに由るに非ずして実に東京高等商業学校学生を対象とせしなり。東京高等商業学校学生たる吾人は全力を傾倒して是等同情者に答ふべき当然の責務を有する。

然して吾人の採りし行動は如何，死者に対し，遺族に対し局に当ると当らざる者なるとを問わず均しく赤誠を以て一切の行動を採れり，東京高等商業学校学生団体なる我一橋会は亦誠を以て一切の行動を完了せり，千余の一橋会員が同心協力至誠を以て行動せし一路の足跡は即ち此一編旧艇朱雀遭難事件記事なりとす。吾人は悲しむべき事変に起りて美わしき活動に終りし此一篇の記事を永く一橋会史の一部とし，兼て天下に表白するを以て自からの光栄なりと信ず。

一橋会は謹んで此一篇の記事を柏木，村井両君の遺族に呈し，兼て柳川氏一家及利根沿岸に於ける官民各位，同窓会を中心とせる先輩諸賢，本校に於ける教職員各位並びに普く天下の同情者の坐下に捧ぐ。

遭難記　○向島の解纜　○利根の遠航
○銚子の２泊　○噫12月30日

向　島　解　纜

冽々たる朔風枯梢に怒号し，砂塵，曚々一橋々畔に渦巻きて，校庭為めに寂寥たるの時，恰も明治40年12月25日，何等の壮挙ぞや，S組第２選手７人は江戸川の急流を遡り大刀根の長流を下り，端艇老朱雀に乗じて遠く数十里を隔つる銚子港に遠漕を企てんとはする。寒気稜々筋骨に徹し，動もすれば六花紛々面を打たんとするの候，終日室内に蟄居し，衣を重ね火桶を抱き居てもなほ寒に苦しむ人もあらんに，何等の驕児ぞや，筑波の切先剣鋒よりも鋭き所，坂東太郎の中流に一葉の軽艇を浮べオールを把つて寒将軍の精兵と戦ひ，北風に嘯かんとはする。朔風それ何ものぞ，寒気それ何物ぞ，我に鉄腸あり，熱血あり，止まつて骨牌（カルタ）を弄し正月の屠蘇に酔はんより若かず，徃りて長流に神身を錬り河風に筋骨を鍛へんには。乗込む健児とは誰ぞ，舵手徳野隆祐，整調田代香苗，５番小寺直吉，４番村井俊二，３番矢ケ部卯市，２番橋本源太，舳手柏木粂作の７名即ち是れ。

勇み立つ之等７名を乗せたる朱雀号はH・C・S各組７隻の遠漕艇と相前後して同日午前８時，威勢よくその赤き腹を冬の水に浸して，朝霧に罩められたる墨田の中流に浮べり。来ん陽春４月３日ボートメンと其の美を競はんとする，堤上の桜樹幾百株今や寒気烈しき中に凛然として立ち，恣に北風の弄ぶに任す。老朱雀号は艇庫を後にし，桜樹と別れ見送る幾多の人を堤上に残してスルスルと辷り出しぬ。

やがて艇尾の赤きマーキュリー旗は遙かに下流朝霧の裡に消え去りぬ。

刀根の遠漕

12月27日，天未だ全く明けやらず，ほの闇き中を通して様々たる大利根の水音もなく流る。しばらくにして河の左岸，渺々漠々たる茨城の原野の彼方，空黄色さして杲々たる朝暾真紅の頭を抬げ，一揺地を蹴って空に昇り，鋭く幾億条の光線を万象に投ずれば，遙かに北方玲瓏たる秀色を刻して碧空に倚れる筑波の嶺，先づ其の光に照らされて頬辺紅色を呈し，雪と白き霜を以て掩はれたる彼方の森此方の丘，人家田野の一面，旭光に映じて晶々白光を放つ，右岸の木下町より立ち昇る炊煙，悠々として水晶の如き空に消え，静けき大空に羽搏ちて二鴉，布佐の山より対岸の松原に飛びぬ。少焉，瑠璃の長江も真二つに裂けよと許り突進し来る軽艇一艘乗込む健児が元気舷を溢れてオールを伝ひ，鏡の如き水面に金渦銀紋を刻んで矢と飛び行く，艇の赤き腹見えつかくれつ。

25日早朝東京向島を解纜して遠漕の途に上りし老朱雀は欵談笑語せる同胞７人を乗せて正午江戸川に出で，３時鴻の台下の急流を過ぎて同夜は柴又の岸風寒き所，川楊の下に繋がれて夜を徹し，翌26日六里の流を遡りて正午江戸川より利根川に通ずる運河に入り，瑞西山中のものなりと称せらるる，第一，第二，第三の橋の下を過りて午後２時半利根川に出でぬ。それより流に沿して五里余を下り正に６時に垂んとする頃，木下町に着きて艇は銚子屋の崖下に横りぬ。此夕練習艇朱雀号に乗れるチャンも来り一行14人は上りて銚子屋に入りぬ。由来ボートメンは健啖を以て鳴もの，息をもつかさづ重ぬる数碗飯櫃は幾度か運ばれ幾度か運び去られぬ。食後角力もの歌ふもの跳るもの吐鳴るもの，座も落ちよと騒ぎし健児は，今朝も指を墜さん許りの寒気を物ともせず，黎明起き出で，艇上の霜を払ひ，艤装をなし纜を解いて，今や艇は笹川に向はんとす。四番村井は其快活と磊落とを以て同友に愛せらるるもの，舳手柏木は其勤勉と漕法の妙とを以て一同に畏敬せらるるもの，村井独特の奇想天外的の言を以て得意の

諧謔を弄すれば艇友快と叫び妙と呼んでオールを捨てて歎笑し遠漕の疲労を忘れ柏木艇首より疾呼一番すれば，六艇のオール弓と曲りて，艇疾きこと矢の如し。漸やく漕ぎ疲れて艇を中流に放ち，艇内に仰臥して互に襟を開き心を剖いて，相談笑する時の快は殆んど他人の想像だも及ばず和気靄然として艇内に満つ。

此日は遠漕第３日目の事とて，漕手が身体も出来，腰や腕の痛みも去りて元気に天冲せん許り自ら艇脚も軽くして千本，二千本とノーストップにて漕ぎ通せば午前11時と云うに早や金江津も過ぎ去りて「後力漕百本」と舵手の声，朱雀は宙を飛び，勢余って二度許り洩瀬に乗り上げたり，それより千本一回，艇を岸に着けて昼食し，神崎ナンジャモンジャの森辺りにて高師の艇及び一高の艇を追い越す。

いよいよ広き大江の中流，吹く川風にマーキュリーの赤旗一旒，飜々として枯葭のかげに見えつかくれつ下り行く。此日の行程正に十有余里，チャンの艇に後るること時余にして日没の頃笹川町に着く旅館土屋に入る。夜火桶を中に団欒して談笑数刻，或は明日の航程僅か六里にして銚子港大新宿に着くを云いて打悦び，或は犬吠の怒涛を語り君ケ浜の勝景を賞して楽しむ。昨冬の遠漕以来Sの呼物となりし村井の「鈴ケ峠」の砂曲，総員手を更え術を変じて勧めたれども彼終に歌わず，と見て取りしチヤバの不動と綽名さるる人其の名にも似合ず頭を振り体を動かして，薩摩琵琶一曲を歌う余韻クシャクシャ然，ニャクニャク乎として梁を繞るるとはボートメンの謹んで捧げし形容詞なり，11時床に就かんとして障子の硝子を通し外を見れば寒天凛として幾億の星光も凍りつかん許り霜を帯びる空瑩然として凝り，茫として鉛色を呈せる利根の水，寒星の影を浮べ黙々として流る。

銚子の二泊

28日朝７人は艇の艤装を終り，チャンと別れて８時半笹川土屋を出発して独り銚子に向う。天気晴朗にしてぽかぽかと温かき事春かと疑わるる許り，後方遙かに聳ゆる筑波の姿は玉の如し，風なければ波も立たず，油の如き水洋々として，其の尽くるあたり遠く銚子の町を望む。右岸には下総の丘陵起伏し，左岸には松林枯葭数里に連りて生ひ茂る。其の松林尽きて宝山の砂丘と相接する辺，流水の湾に瀟洒たる二階屋あり，一屋の風致を添ふ。12時と云ふに早くも艇は銚子港旅館大新に着きぬ，今日は茲にて遊べるし，明日は緩つくり休めるし，且つ大新はボートメンの命洗濯所として知られるもの，骨をも凍らさんとする冬の水に入りて，砂地に艇を引き上ぐる苦しき中にも，日光に焼け黒づみたる七人が眉間云ひ知れぬ悦気溢れて頬辺微笑の軽く漏るるを見る。

艇内の諸道具取り外し，艇の内外残る隈なく掃除し終りて２階の１室に通る。室は20畳の大広間川口に面して眺望頗る佳く，川口の岩に激する太平洋の波，雪と白く砕くる様，座ながらにして手に取るが如く，波崎犬若の崎呼べば応へん許りなり。入浴後御馳走に満足して，折から来居たりしサードと一所になり，名指しや羅漢廻しに打興じたる末は，例のデッカンダンスとなり，「……流れついたか磯松風に，合わすダンスはボートメン」其声門外に徹す。跳ね疲れて一同は枕辺近く颯々たる外海の波を聞きつつ11時頃寝に就く。

29日朝眼醒めたる時は正に８時に垂んとせしが今日は終日此処に滞在と，緩つくり決め込んで起きんとするものもなく，漸やく皆起き揃ひたるは彼是９時，障子を放てば漫々たる河口の波，旭光に焼けて熔鉄の如し。帰漕の途に上るサードを見送りし七人は連立ちて10時半宿を出でて怒涛みんとて一里を隔つる犬吠に向ふ，燈台に案内を乞ひ，上に登りて

燭光云々廻転ＸＹの説明を聴きて下り，名高き岩の上に踞いて折詰を開く。太平洋の怒涛は脚下の岩礁に激しく韲磈白雪を吐き，万里澎湃の水は漫々として際涯なく遙かに水光天に接する所一沫の煙を残して天の彼方に消え行く汽船，又見る水平線上の一糸を辿りて波間に隠見する白帆，一行はしばしこの大景に打たれて黙想裡の人となりしがやがて柏木はスケッチブックを取り出して得意のスケッチを始める。一葉二葉写し終りて後筆に任して隣に座せる友が顔を巧みに描き各々に短評を附せる様実に滑稽にて，題してポートパックと云ふ。此処より松林を抜けて君ケ浜に出づ，矢ケ部は林の中より兎一匹走り出でたりとて，頓狂声出して騒ぎたれども，素手にて兎の捕えらるべきにも非ず，一同波打際に出て貝を拾ひ，又皎々たる波上に円を書きて土俵に代へ，大に力を角したれども橋本に敵するものなし，小寺が竹の棒もて波上に線を引きて走れば，残る六人其の線上に沿ひ並びて走り，吾は機関車なり，吾は一等車なり，否汝は貨車なり，石炭車なりなど相罵りて無邪気に戯るる様，実に骨肉を分ちたる兄弟よりも勝りて親しく見えたり。君ケ浜より銚子までは海岸に沿ひ，松原内の小径を辿りて各々今日の遊びの意外に愉快なりしを悦びつつ午後４時過ぎ大新に帰る。夕食後名指しをなして遊ぶ馬と呼べば電報と答え，勘平と呼べば猩々と応じナンジャモンジャ，売子，馬里等の奇しきニックネームを連呼されて，時々起る哄笑の声堂を揺る。夜８時頃より雨ふり来り，風又強くして庭の松樹に怒号する音凄し，一同明日の天気を心配しつつ10時就床す。

噫12月30日

12月30日の黎明，７人の健児は床を蹴って起き，天気如所にと庭に出てみれば，昨夜の雨や今如所。玲瓏たる空明鏡よりも澄渡りて片雲なし，風稍々強しと雖以てオール操従の自由を妨ぐるに足らず，波亦少しく高しと雖も，以て艇の進行を防害すべき程のものに非ず。

一同大に悦び匆々朝餐を終へ，艇の諸道具を積入れ，準備を整へて，正九時大新を辞す。肌を裂かん寒風は流水の上方にして且つ茨城県側の岸より河流の方向に斜にふき来れば艇は岸に遮られて風力弱き対岸に至らんとし，大新を出づるや否や直ちに風の方向に向ひて斜に川を横切り，斯くて波崎の上流銚子を去る約一里の北岸に艇を寄せて，暫く休憩し，それより波静かなる常陸の岸に近く沿ひ，寒風を避けつつ折柄の上潮に乗じて進む事約四里，鹿島郡若松村太田の鼻に至り，艇を岸に繋ぎて20分時間休憩し，正11時半纜を解きて出づ。此辺より河流東に折れ，風は又少しく西に転じて稍々強く，波又少しく高し。オールに激する波のしぶき，風に吹かれて幾度かメンバーの背を濡しぬ。河流に逆らひて舵を右に取り岸に沿はんとすれば，艇は横波に動揺甚だしきを如可んせん，河を中断して千葉県側の岸に至らんとすれば矢張り波を横に受け，且つ中央に大浅瀬あるを如何んせん。退かんか，之れ毎年夏冬２回此地方に遠漕し来って数々烈風に襲われ，激波と戦ひ風波につきては充分経験を有せる健児が１人として毛頭だも考えざりし所にして，風は決して如斯くしく波は決して此の如く高きものに非りし。艇は程近き笹川に至らんとして，舵を少しく左に転じて右に押上鼻の浅瀬を避け，左に中央に大浅瀬を避けつつ殆んど風の方向に向ひ，波を70～80度の角に切りて笹川水道に向って進行す。河を横切りて艇正に笹川水道口に入らんとする時，俄然烈風天の一角より狂ひ来って，驚瀾怒涛は跳って恣に艇を木の葉と弄び，時々波の頭の崩れ込むを物ともせず，健児が渾身の力を注いで漕ぐオールはあはれ，狂ふ白駒の巨口に呑まれて，艇は只波の間に漂ふのみ。

荒れに荒るる風はますます強くして，寒威凛烈指を墜さん許り，波はいよいよ高くして，恰も熱湯の沸騰する如く所謂三角波をなす，少しく舵を横に転ぜんか，之れ即ち破滅の時にして，波に充分抵抗するに足る速力なき艇は，忽ち波浪の為に方角を転ぜられ，横波を食ひて転覆の悲運に遭遇せん。嗚呼只々進むあるのみ。舵手励声一呼すれば整調声あり「元気出してッ」四番語を次いで一同を励まし，二番愉快々々と連呼し艇首に於て笑声あり。俄然烈風怒涛，し耳を劈く舳手柏木の疾呼「テーク，ケーアー」。此時遅く，彼時早く，乗るよと見えし艇は波を真二つに裂いて頭を波の中に突き込みぬ。舵手は「大丈夫漕げ」と令するに総員漕がんとしたれども能はず，踵を接して崩れ来る第二の波は艇をトップより呑みて，艇尾は水面上に上り整調田代大声警告を与へたれども最早如可ともせん術なく，マント羽織等を着せる舵手はマントをはね帯を解く間もなく，艇は見る見る白波の中に沈みて水健児が胸を浸さんとするとき波は全員を艇の外に押流して不幸なる七人は巨浪の中に漂へり，舳手柏木は直ちに艇より放たれて巨浪中に浮沈するにぞ矢ケ部は大声にて「艇を離すな」と呼びしに「応」と答へしのみにて終に其の姿利根の浪中に消えぬ。幾度か廻転せる艇に辛じて縋れる六名は此時上流より来れる帆船を望み見て，声を揚げて救助を求めしが，来るよと思ひし彼船は舵を転じて下流に向へり。村井は之れ迄と覚悟しけん。首をシートの下に突き入れて艇と共に廻転し，終に放れて水底に沈みぬ。水中に没して漸やく着衣を取れる舵手其他の四名皆着するものは只シャツ一枚にズボン下のこととて酷烈なる寒流に漂へる身は全く麻痺して凍死せん許り両友が死を目前に見つつ又如何ともすることを得ず，矢ケ部は「覚悟をしたか」と呼べば，田代は「最少し最少し」と答へて励まし，田代対岸までの距離を聞けば，徳野其遠きを云ひ，橋本小寺は咽喉を絞って「しっかりしろしっかりしろ」と連呼しつつ一同を励まし居たれども如何せん艇は浪打つ毎に車の如く廻転して其度に五名は艇より離されて幾度か山なす怒涛の中に漂ひ，幾度か浪の巨口に呑まれぬ田代，矢ケ部，徳野は之を防がんとして，上流に当れる艇の舷に取りつきたれども其の甲斐なく，橋本，小寺又元気を鼓して再び努力したれども其効無し，只見るは疲れ果てたる艇友が面影と踊り狂ふ怒涛狂瀾，勝ち誇りたる魔風·烈風，閧を作って天空を過ぐ。五名の健児はいよいよ最後と覚悟して，全員一斉に一橋会の万才を唱へんと，一同声を絞って再度「一橋会万才」を絶叫せり。恰も好し此時若松村字宝山なる柳川惣助氏の家人，遙かに河の中流波間に浮沈せる遭難者の影を望み見て，直ちに二隻の和船を仕立て現場に漕ぎつけ五名の生存者を救助さる，生存者はいづれも人事不省に陥り中にも2，3のものは生命殆んど危かりしが応急手当よろしかりし為め終て蘇生するを得たり。而して柳川氏の救助船に次ぎ自家用の和船一艘に乗じて現場に漕ぎ着けたる同所秋葉縫三郎氏の機敏なる働に由り端艇，オール，乗組員の荷物等殆んど全部全かりしかども，あわれ柏木，村井の両健児は姿を深く水底に隠して，終に帰らず，風は一層吹きしきりて，狂ひ狂ふ波ますます高し。

老野次の祈り

（大正８年）

水沢　嘉一郎（大正８年高商卒）

一橋ＨＣＳレース華やかなりし頃，予科クラスチャンを振出しに，最終学年には，Ｓ組チャンの舵手として，隅田川を我物顔に漕ぎ廻って卒業しましたのが大正８年春３月。

その頃，往昔の一高／高商戦を復活してはとの話から，東大／一橋戦をと迄進展しましたが，用艇の問題で折合がつかずじまい。当時，東大は旧来の固定席艇を，一橋は早くから使用しておりましたスライディングシートのヨール艇をと互いに突張り合って譲らず。何分にもボートを漕ぐ程の頑固者同志が夫々自艇に愛着する限り，話の纏まらぬのが寧ろ当り前だった訳です。

それが二転三転，翌々年の大正９年には華々しくインターカレッジの開幕を見，参加各校打揃って新鋭エイトで颯爽と登場して来たのですから，時代変転の鮮やかさに，私も眼を見張らされた一人です。かくして自称ボート通も一挙にして古代に追込まれ，爾来レースを見て楽しむだけで，漕法には一言も口をつけられぬ一野次へ転落の憂き目に遭いました次第。

然し乍ら漕法理論がどうあろうとボート道の真髄，特に一校の代表選手である限りに於ては，『クルーが，文字通り一体となって長期練習の苦闘に堪える事』レースに臨んでは，母校の名誉にかけて，『必勝の気迫をもって飽くまでも勝抜く事』これ以外には加う可き何物も無い筈との信念は50年来変えておりません。

況んや東大一橋大共に他校に比し一段とこの道一筋に精進された古代／近代の先輩達が築き上げられた輝やかしい伝統が光っております。その重さに打負かされず，その伝統をがっちり踏んまえて，堂々王者の貫禄をもって渡り合い，『流石は名門よ』と謳れて頂きたい。

以って老野次の祈りの言葉と致します。

（第19回東商戦プロより）

大正八年インカレ棄権の経緯

大森芳夫（大正9年高商卒）

頃は大正八年の春の朝，東大の東竜太部君と私とが向島，長命寺の桜餅のショウギに腰かけて茶を呑みながら，おい東大と高商と対校レースをやろうじゃないか，よしやろうと話は定った。すると二，三日たってどうだい他の大学を交へて対校レースをやろうじゃないか，他の学校は参加するだろうかと言ふから喜んで参加するとも，そうかそれではと言って早稲田大学，慶応大学，明大，日大，外語，商工を勧誘したら喜んで参加した。そこで一橋は僕が整調で練習を始めた。これで東大一高商の対校レースがインターカレッジに変ったのである。所が主催校の筈が一橋は時恰も大学に昇格の時であったので，佐野学長は大昔の一高対高商の対校レースの時のあの大騒ぎを引起しては大変だと，非常に慎重な態度で，此の対校レースを許して下さらなかった。そこで江口定條大先輩を始め，内田信也先輩等他の全国大先輩の御上京をお願ひして，校長説得に努めていただいたが，校長は頑として許して下さらん。僕も許して下さらなくても一橋は隅田をリードせねばならぬ，是非断行すると頑張ったが，翌日朝から晩まで如水会館に缶詰にされて左右田喜一郎先生と藤本・一郎先輩に説かれて夜おそく，それでは来年から必ず参加を許す，と言う言質を取って第一回のインターカレッジは涙を呑んで棄権したのである。（正式のインカレ第1回は大正9年）これが東大対高商の対校レースの始まりである。私は第一回第二回の東大対一橋大レース（戦後の東商戦）を見なかったが，今日審判艇上に，時の東大の東竜太郎君と久し振りで同乗して，審判に当った。私としては，往時を思い，今日のレースが第一回の東大対高商の対校レースの様な気がしてならなかった。実に感慨無量，来年の東大対一橋大レースには是非勝って貰いたい。

（26年7月　部報復刊第3号より）

福田徳三先生を憶う

（大正9年～10年）

藤瀬英二郎（大正11年高商卒）

我が一橋が誇りとする偉大なる経済学者であられた福田徳三先生が，ボート部長をして下さいました時の深く心に残る思い出を申述べましてご遺徳を偲び度いと思います。

一橋端艇部は大正9年から始まったインターカレッジ選手権競漕に参加したのですが，その参加に際し福田先生に部長をお引受願ったのであります。私はその第1回と第2回大会に選手として出漕の栄を担ったのでありますが，先生が右の部長をお引受下さった時のご胸中には，予て，経済学で東大をリードしている一橋が，ボートでは明治時代に一高に負け続けたままになっていた事を無念に思っておられたので，この機会にボートでも東大を打ち負かして大いに一橋精神を発揚せんものと考えられた事と拝察されました。それだけに先生のお力の入れられ方は大変でした。

先ず練習を観られるため特に双眼鏡とス

トップウオッチを求められ，レインコート姿でコーチのモーターボートに乗り込まれ練習中の我々を激励して下さったのも毎日の様でしたが，更にそんな中で，丁度その頃本場テームズでボートを研究して帰国された川添清男先輩（明32年卒）にコーチをお願いしたのでありますが，同氏は漕法は勿論練習方法についても新機軸を導入され，そしてその一つとして，レースの２，３日前の一，両日は選手は全くボートを離れて心身を完全休養するを要すとの事を先生に話されましたところ，先生はこれを実行すべしとして私財を投じて選手一同を鎌倉の料亭旅館『小町園』へ一泊旅行にお招き下され，鄭重なご馳走にあずかったのであります。あれこれこんなに熱を入れて下さった中にも明治男の熱血漢福田博士の面目躍如たるものがあったのであります。

併し，肝腎のレースは無惨にも東大に十艇身の大差で敗れたのであります。当時はレースに敗れた後には学校の大講堂で帰陣式という，選手が『敗けました』と頭を下げる儀式があったのですが，この席上，先生はお顔を真赤にして『ザンペイ（惨敗）もザンペイ，東大がゴールに入った時我が艇は遠く霞んで見えなかった』と悲憤慷慨され，その席で部長辞任を宣言されたのであります。

そして一方先生始め全一橋同人の期待に反した我々としても，敗戦後，早速来年の優勝を目指して，翌朝東大対東京高工の決勝レース前に早くも出艇して練習を始めたのであります。

右の先生の部長辞任のお申出でに対しては佐野学長はじめ皆で翻意方をお願いしたのですが，翌10年度の練習が始まっても先生は隅田川に姿を現わされなかった，そんな練習中のある日，いつもの様に選手が向島の銭湯へ行った処福田先生そっくりの老（？）人を見かけたのですが，我々としてはまさか先生が向島の銭湯においでになるとは思いませんので，よく似た人もあるものだ，と考えていたのですが，レース後にそれは先生ご自身，選手の身体つきを見たいので銭湯に出掛けたのだ，と先生のお口から伺って感激したのであります。

第２回大会には一橋は見事優勝しましたが，この時先生は艇庫へ顔を出されず，吾妻橋際のサッポロビールの屋上で観戦しておられ，我々が勝ったのを見届けてはじめて艇庫へ飛んで来られて我々を抱いて喜んで下さいました。その際承ったのですが，先生は幾度も秘かに向島の土堤の上から選手の練習振りをご覧になったばかりでなく，さきに述べた様に銭湯にまで来て選手の体調などをご覧になったとの事で我々は感涙にむせんだ次第で，前年の『ザンペイもザンペイ』のご演説の時のお心持を今更ながら拝察する事が出来ました。

この様に幸い第２回大会に優勝出来たのは全く先生のご熱意に動かされた全一橋の勝利があったとも申すべく，ここに往年の先生の逸話をご紹介して，先生のご冥福をお祈りする次第であります。

端艇部長としての思い出

一橋大学名誉教授　高垣寅次郎（伊藤治雄が話をきいてまとめたもの）
（大正2年高商専攻部卒）

大正9年第1回インター・カレッジで商大が東大に大敗した時，時の端艇部長であり熱血漢でもあられた福田先生は，学問で一橋が本郷を圧して居る時に看板スポーツであるボートが大敗するとは……と，憤激の余り部長を辞された。

止むなく佐野先生が学長の儘，端艇部長を引継がれたが，12年の大震災に依る学校の焼失，復興，更には国立への移転計画等の問題が相次ぎ，学長職が多忙を極め兼任は許されぬ所から，昭和2年インター・カレッジでの商大第3回目の優勝のあと辞意の表明あり，後任として自分に白羽の矢が立てられた。自分は当初其の任に非ずとして再三固辞したが，学長，端艇部先輩諸賢，学生諸君からの再三の懇請に依り，就任を応諾した。

昭和3年4月の事である。自分は夫迄一学究として只管学問の道に精進し，スポーツとは余り縁がなかったので固辞した訳であるが，就任したからには全力を挙げてその任を果そうとして努力した積りである。端艇部学生諸君，先輩各位も好く協力し，自分を支えて呉れた，有難い事だったと思って居る。御承知の余儀なき事情で昭和11年6月学校を去ったので自分の在任期間は8年余であったが，顧みて懐しい思い出で一杯である。

唯一つの恨事は在任中遂にインター・カレッジでの優勝を果し得ず，部長を辞した年の秋に9年振りでの優勝を果した事である。此の8年の間に商大クルーは毎年優勝候補に擬せられて居り，殊に昭和4年，6年，7年は何れも優勝に手をかけながら長蛇を逸した。

かくて昭和7年のロスアンゼルスオリンピック，昭和11年のベルリンオリンピックには何れも日本代表クルーとなるの栄に恵まれなかった。然し此の間に端艇部諸君の年々の努は力少しずつ資産として積上げられて居り，それが昭和11年の全日本制覇となるのだが，部長を辞した後に結実した事は運命の皮肉と嘆ぜざるを得ない。あの時向島の艇庫で主将の伊藤君と手を取合って泣いた事，又全日本制覇後瀬田川での大祝勝会の事などは今も鮮烈な記憶となって残って居る。

部長在職中の思い出は限りなくあるが，特に記憶に残って居る事柄や人々に就いて若干記して見たい。

(1)　隅田川から多摩川迄のペア艇回漕の事

学校が国立へ移転する事がきまってから端艇部の最大関心事は河が遠くなる，ボート部には大危機だ，何とかして国立近辺に水を求めようと言う事だった。それで表題の様な壮挙の敢行となった。参加したのは半田，久村，中川，相良君だった。隅田川を下り，羽田沖を通り，六郷川口より多摩川に入り，遡航して国立近傍に至り，適地を見付けてそれを掘削し，ボート練習の出来る水域を作ろうと言うものだった。回航は風波，浅瀬等を漕破し，4日後には谷保天神下流に到着，一応の成果を収めた。結局練習水域設定は物理的障害に依り実現を見なかったが，其の志たるや壮であった。

又村山貯水池でボート練習の許可を得ようとして困難を承知で東京府庁に陳情したり，又は多摩川が駄目なら運河を掘ろう等と言って計画したり，測量を行ったりした者も居た。自分は秦の始皇帝が大運河を掘った例に

倣うものと評した事もある。稚気と言えるかも知れぬが局面を何とか打開しようという熱情には心を打たれるものがあった。

(2) 向島新艇庫の建設

震災で烏有に帰した新艇庫の建設に当時の先輩，学生諸君が奔走した努力は大変なものだった。高林，河西君，先輩から遠山，塚田君等が中心になって活躍し，学校当局も好く之に応えて呉れ，11万円余の多額の予算も取って呉れた。地盤基礎固めの杭打ちの時には手抜きをされぬ様にと高林，河西君等数名の学生は泊り込みで看視に当ったりした。こうして昭和5年5月鉄筋3階建て470坪の名実共に東洋一の艇庫が完成し，長く一橋ボートのメッカとなった。その艇庫も今はない。東大，商大の艇庫が在った場所は高速道路が走り，往年の面影は何も残って居ない。世の変遷に寂寥を覚えるもの自分ばかりではあるまい。佐野学長の発意で艇庫のタワーの壁面を飾った“MENS SANA IN CORPORE SANO”のシンボルマークは向島艇庫の代替として造られた相模湖艇庫合宿所の一角に移築され健在と聞いたが嬉しい慰めである。

(3) 忘れ得ぬ人々

自分の前を去来して行ったボートメンの数は夥しいが，現存の人は暫く措き，亡くなった鷺島，遠山，宇治原，河西，広松君等は持味は違うが夫々に典型的なボートメンであった。鷺島君は一橋ボート部の生きた偉材で同君の漕法，オール，造艇等に関する造詣は深く其の著「漕艇」には自分も序文を書いた。遠山君は独創的な才能の人で，フェアバーンの漕法を基に，一橋の漕法改善に幾多の新機軸を出し成果を挙げた人である。

宇治原君は野性的且豪快な人柄だった。自分が世話して中川君と共に朝日新聞に入れた。卒業後もボートへの情熱を失わず，中川，河西君，慶応ＯＢの宮田，日下君等と隅田クラブを作り，漕艇を続けて居た。文は人を表わすというが一種飄逸な味のある文を書く名文家だった。河西君も元気なアイディアマンだった。自分には遠慮なく物を言い，時々苦言も呈して呉れた。自分が商大を去って或る時期失意の時，彼が示して呉れた思いやりと励ましは忘れ難い。彼の卒業時は就職難，彼も一時期不遇の事があったが，品川白煉瓦に移ってから大をなした。広松君は精悍な闘志溢れる快男児だった。彼の卒業の頃，シンガポールでゴム園を経営して居た往年のボートメン，三五公司社長の小泉哲一郎氏が後継者を求めて来日され，自分に依頼があった時，自分は躊躇なく彼を推薦した。太平洋戦争なかりせばと惜まれる。

皆亡くなってしまったが，ボート部に取り，得難い人材であった丈に惜まれる。其の他未だ沢山記憶に残る人々が居るが紙数の都合で割愛し，先を急ごう。自分の接したボート部の諸君は矢張り自分のゼミナールの諸君（此の中には可成り多数のボートメンも居るが）とは一寸違う人柄，雰囲気だった。

皆率直で，人懐こく，明朗で元気が好かった。のんびりして居たがスポーツマンらしく背骨に一本筋が通って居る感じだった。自分が稍堅物過ぎるとして自分を浅草に案内し，六区で流行のレビュー小屋に連込んだのも彼等だった。こういった率直さが魅力であった。ボートの御蔭で他大学のボート部先輩とも親しくなり，気風を知り得たのも幸せであった。ボート部の連中は自分に好くなつき，素直であったし，自分も彼等を愛し信頼した。すべて円滑に行って居た。自分は校内，対外を不問，レガッタには殆んど欠かさず出席し，行事にも顔を出し，職務を全うする様に努めた積りである。

当時の大先輩三谷一二氏から“貴兄も好く精が出る喃”と賞められた事もある。

自分も今年で93歳になる。昨年92歳になった時，往年の名漕手笠原文雄君がこんな歌を

贈って呉れた“師の君は矍鑠（カクシヤク）として富士の山，登り給ひぬ九合二勺”一ほのぼのとした温かい友情を感じ，涙した次第である。

自分も段々に老い，河に行くのも億劫になり，レースを観に行く事もなくなった。

残念だが止むを得まい。自分はかねがね道に志す者は道の奥儀を極むる事を目指して研鑽努力を続けるべきだと考えて居る。剣の道は剣術から始まって剣法に達し，更に進んで剣道に至ると同様に，ボートも漕術，漕法より漕道に到達すべく努力すべきだと思い，ボート部諸兄にも之を力説した。此の信条は今も変らない。今後のボートメン諸兄が常に研鑽を怠らず，光輝ある伝統を健全に継承されん事を期待し，祈願しつつ擱筆する。

老先輩の手記「ボート今昔物語」

（大正11年～昭和３年）

和　田　庸之助（昭和３年学卒）

1.　自分は，大正11年４月，商大予科に入学した。郷里和歌山の海草中学時代は，野球選手として，練習に熱中した。ボート部では，

11年春，クラチャンレース　勝

秋，小会に第三選手で出漕，勝

冬休，来春大会のH組第一選手候補として　ペア練習

12年春　H組第一選手として出漕，両国橋下よりスタート，向嶋艇庫前が，ゴールメンバーは

C　本三：遠山
S　本一：坂岡
7　〃　：寺尾
6　予二：和田
5　本一：鷺島
4　予二：李
3　専二：長谷川
2　予三：小田切
B　本一：葛西

H組は，ストロークサイド弱く，和田は鷺さんに対抗出来ず，Cに大敗した。

此頃の合宿は

H組：長命寺の桜餅屋
C組：言問団子
S組：精進料理の雲水

と大体きまって居た。

自分はレースの晩，酔いにまぎれて勝手に桜餅を作って喰べ，翌朝，主人に説教された。

春の大会後，対校の補欠に選ばれた。対校の主将は，鷺島氏ときまった。

８月　対校銚子遠漕，和田初参加。

メンバーは　Hから，遠山，鷺島，寺尾，坂岡，和田，Cから，畑，小松，高橋(朝)，水谷，Sから，木村，高田，土田，池田

向嶋艇庫出発当日，主力選手の不参，遅刻あり，海草中で，厳格な野球合宿を経験した自分は，いささか呆れた。径路は

第１日：向嶋→両国→竪川運河（今は道路になって居る）→中川→運河（浦安）→行徳→市川→松戸泊

第２日：松戸→流山→利根運河→取手→布佐泊（東大遠漕歌に二里八丁の風情あり運河のことを歌って居る）

第３日：布佐→安食→神崎→滑川→佐原→宝山→銚子

神崎の右岸遠くにナンジャモンジャの森あり，フレッシュマン洗礼の場である。

自分は先輩の云う通り，真裸になり舷側からとび込み，洗礼を受けた。

銚子大新にて　大騒ぎさしてもらって，逆川筋にて向嶋へ帰った。

此年は，震災で，レースは中止になった。商大は強力で，挙行されたら優勝の機会十分だった。

2.　吾妻橋，言問界隈の思い出

(1)　吾妻橋のビヤホール

給仕の女の子が，枝豆なんか売ってくれて，前掛の所に，ぶら下げた鞄の中に金を入れて居た。兎に角安かった。浅草側には，神谷バーがあり，電気ブランを飲まして呉れた。1杯10銭か20銭で強アルコールで，1杯でフラフラになった。

(2)　吾妻橋からビヤホールを過ぎて，上流に向って土手に沿って歩いて行くと，右側に水戸様の下屋敷があり，その近く河沿いに八百松と云う料亭があった。その傍に，横に隅田川に注ぐ小流があり，枕橋がある。震災後，松戸から帰京し，枕橋迄来ると，橋は焼け落ちて，1本の丸太が渡してあり，その上を両足で挟んで馬乗になって渡った。死屍累々で半焼けの死体が折重なり悲惨なものだった。

八百松から土手を上ると，当時は，東武鉄橋，言問橋はなかった。三囲神社，牛島神社（今は移転して三国社とは逆の位置になって居る）があり，清元などにも吹込まれて居るお社である。後年商大の大応援団2,000人位が屯した所である。更に上流の方に土手を上ると，竹屋の渡，洗場があり，土手下には長命寺と桜餅屋があり，その先言問団子の左側にダラダラ坂があって，向嶋艇庫があった。そのすぐ傍に一銭蒸汽の発着所があり，大倉別邸，白鬚橋を経て千住大橋が終点だった。大橋は又フィックス艇練習の終点でもあった。

(3)　大正10年，今上天皇が摂政官で在られた時，上記艇庫観覧席でインカレ，レガッタを観戦になり，商大が優勝した。全校狂喜した。其後も若宮様屢々御来臨になり，商大艇庫上から御観戦になった。其都度金壱千匹，二千匹という，ご下賜金があった。金一匹とは一銭で，千匹として十円，二千匹なら二十円という事である。

(4)　自分が現役時の或時，明大ボート部出身の鈴木伝明という，人気映画俳優が居たがボートを主題にした映画を撮るという事で協力を求められたので，艇，オール等貸してやった事がある。封切時は浅草の上映館の前にオールが飾られ，我々は切符をもらって観に行った。

3.　関東大震災の思い出

大正12年9月1日，商大対校は8月1日から銚子遠漕に行き8月一杯で第二期練習を了え，9月1日から第三期練習に入る予定だったが，その前夜はひどく蒸暑く寝苦しい晩で就寝後皆でバルコニーに出て涼を取って漸やく寝付いたのだった。9月1日は朝来浪が高く西南風が強かった。正午前頃，台風の目が隅田川を北上したとも云われエイトの出艇は無理なのでタブペアで交互に練習して居た。エイトを出して居たのは東大か一高の1艇丈だったと記憶する。我々が練習を了ろうとして居た時に突如無気味な地鳴りと共に烈震が襲来したのだ。時に11時58分40秒，上下動12糎，水平動18糎という激震で，堅牢を誇った商大艇庫もグラグラと揺れ，バルコニーは傾き支柱は正に崩れ折れんとし，又隣接の言問団子の屋根は瞬く中に崩れ落ちた。自分は其時ペアを漕いで居たのだが，地震が来た瞬間尻が持上った。対岸の浅草を見たら十二階の上半分がないという有様だった。川上からガスが流れて来て臭い。千住ガスタンクのものだったかも知れぬ。

余震が頻々でアーム上のエイトが落ち相だというので，皆で艇庫へとび込んで引上げよ

うとする瞬間，又も烈しい余震で，コンクリートの雨をかぶるという有様。その中本所も浅草も猛火発生，見渡す限り東京中の空が，埃と煙で一杯，段々浅草辺から人が，怪我した人達が逃げて来る。風浪は益々強く，火災は愈々拡がる。黒煙は砂塵と共に向嶋一帯を襲い，其間にも強震が相次いで来る。

其中に「津浪来る」の警報しきりで，遂に我々も一時艇庫を離れ，新荒川方面へ避難する事とした。最上級生の遠山さん，鷲さん，イッチャン(寺尾さん)，畑さん（コズと云われた。小角力の略だとの事別に弾丸整調という綽名もあった由）等が相談して，〝東京の住人は帰宅せよ，地方住人は一緒になって行動せよ〟と云う事になり，各自有金を全部遠山さんに預けた。粗末なビスケットを5円買ったら随分沢山あった。其他水を入れる一升壜，マッチ，蠟燭，食べる物を買いに行ったが，全部品切れ。新荒川の土手に行ったら既に東大の連中が来て居て食糧も「おはち」等持って居て，優勢，徹夜用の毛布も豊富に持って居た。間もなく悲報が来た。東大，商大の両艇庫も，午後4時半頃，突如出火した近くの洋食屋からの飛火で黒煙に包まれてると云うので，飛んで引返したが既に遅しであった。艇番必死の消火も空しかったのである。その晩は鐘ケ淵で野宿した。翌朝艇庫へ行くとすっかり焼落ち，艇は半壊の台船と偶々台船につないであった，フィックス1隻，ペア2隻が半焼で残って居た丈で，あとは全焼。東大艇庫は木造だったので，文字通りの全焼。隅田川には白い男女の死骸がいっぱい。一部が，台船上にごろごろして居た。

此日（2日）山本地震内閣が出来た。引続き大小の余震あり，津浪の報で北千住方面に逃げた。又艇庫へ帰らんとしたが，白鬚で市内には入らぬ方が好いと云われ其晩は新荒川土手に野宿した。取手の君塚茂太郎氏宅へ行こうと云う事で，金町から汽車に乗ったが流が飛び，情勢が好くないので松戸て下車した。江戸川鉄橋の手前で野宿した。翌朝の自然の生理排泄は，男女共に壮観であった。鉄橋は消防団員が厳重警固して居り，商大ボートメンスタイル丈では通れぬので，日本の歌を高唱して無理通過。松戸で米を買ったが握り飯の配給があるといふので米屋に返しに行ったら，買った時より値が高う上って居て，米屋に感謝された。警察署に行く。遠山さん持参の「東京商科大学」という提灯が物を云って，松戸警察署の雑用を勤める事になり，警察印のある腕章をつけて，避難民の収容警固に当った。夕方から翌朝迄の徹夜勤務である。夜半巡回中，学校や女子学生の奉仕で焚出しをやって居り，避難民一人に2ケの握飯を呉れた。勤務を了えてから，遠山さんの指揮で，2列縦隊を作り山上の松戸高等園芸学校に行き寄宿舎に泊った。

軍事教練団の三八式の歩兵銃と剣があったので，翌朝からそれを着用して松戸署に出た。そんな手伝いをしたりした後，松戸町役場で罹災証明書（通行証になった）を貰って5日東京に帰った。艇庫は焼け落ちて居たが，艇番一家は無事だったのが何よりだった。

自分は止宿先の日本橋浜町の兄の家へ行ったら初台の親類の家に避難してると貼札してあった。そこを訪ねる途中，高橋朝さんが，本郷一高の隣の広島浅野の殿様の寮に居たので泊めてもらい，食事にありついた。物情騒然として各戸より夜警番が出て居たので，一宿のお礼に夜警に出て，棍棒竹槍を持たされた。朝5時帰宅，昼迄寝て午後，初台に向った。赤坂の豊川稲荷前で雑炊にありついた。渋谷迄来たが歩けぬので，坂岡ヤギさんの家に泊めてもらい，神戸肉の味噌漬で，元気を回復した。その美味かった事。

翌朝やっと初台に着き，2～3日休養し，国の和歌山へ，電報を打った。和歌山へ帰る

のに役場で乗車券を貰うのに２日も通った。

芝浦から汽船で清水，そこから汽車で大阪経由帰郷した。途中，国防婦人会の奥さんから，あちこちで，手拭，握飯を貰い，しまいには断る程だった。９月11日帰郷したら，もう死んだと思って居たと云われた。

東京から打った電報は９月15日頃に着いた。故郷に居ては，学校の様子皆目判らぬので，店の番頭と上京した。学校は煉瓦塀丈残して焼け落ちて居た。紀州の殿様が上京学生の宿舎として建てた進修学舎というのが麻布の狸穴（今のソ連大使館の場所）に在り，上田貞次郎教授が舎監を兼ねて居られた。そこに起居し12月１日の開校迄居た。

4.　震災以後の思い出

開校後，予科は一時幡ヶ谷の東京高校の中に間借して授業を行った。其中に石神井にバラック校舎が出来て移転した。

向嶋から遠くなってボート部は大変な事になった。神田の焼跡に仮校舎が出来た。毎日，生徒控え室の大部屋の隣の小さい部屋に顔を出してストーブを囲んで今後どうするの相談ばかりである。其中に石神井の予科構内にボート練習用のタンクが出来て練習を始めた。又赤羽に仮艇庫が出来てフィックスが３隻入り，H・C・Sに１隻宛割当となった。練習に行くと，近くは陸軍の工兵連隊があり架橋の訓練をして居る。一物の頭をワラで結び丸出しであった。

石神井は又グラウンドが広いので，川の練習の代りに，陸上での体作りを十分にやらされた。授業が済むとH・C・S各組夫々に野原に出て毎日駈け足マラソンである。校庭に帰ると鉄棒にぶら下がって懸垂10回以上が日課である。神田ではバック台と附近のマラソンである。女学生に会うのが何となく嬉しかった。

震災の翌年横浜の岡本造船所へ注文したペアを取りに行った事がある。メンバーは舷手，細田，漕手，和田，池田である。資金がないので，漕いで向嶋へ回航しようというものだった。所が川崎，多摩川の沖辺りで風波を受けて浸水沈没してしまい，帆掛舟の投げて呉れたロープのお蔭で助かった。

漁師から着物を借りて帰るという一幕もあった。

川が遠くなったのでどうしましょうという事で，高橋定一郎君が目覚しい活躍に村山貯水池の使用を許可してもらうべく東京府の公園課等々に再三陳情したが結局実らなかった。

5.　和田の漕歴（大11.4—昭3.3）中の合宿時代の思い出

(イ)　大正11年，大正12年は既に述べた。

(ロ)　大正13年対校のメンバーは

C　鵜飼
S　小松
7　寺尾
6　高橋
5　鷺島
4　宮沢
3　和田
2　畑
B　高田

予選，準決で外語，工大，慶大等を降し，決勝で明治に僅差で敗れた。勝てると思ったのに敗れた原因は？　一寸天狗になってたきらいもある。又舳手高田氏が後半 ROW OUT した為とも云われる。一方レースの映画を後で見て，商大艇が止るのが甚しいので，何故止ると漕法に疑問を抱いた。大正13年には又第１回のフオア選手権レースあり，商大は第一クルー，一橋クラブクルーと第二クルー一橋レッドオアの二隻参加，決勝は商大第一クルーと同志社の争いとなり，第一クルーが優勝した。之に先立ち商大クルーは準決勝で当

り，レッドオアクルーが途中勝ち相になりセーブして第一クルーを勝たせた。

メンバーは一橋クラブ

C　鵜飼　　S　小松　　3　鷲島

2　高橋朝　　B　寺尾

レッドオアクルー

C　中島　　S　坂岡　　3　和田

2　畑　　B　高田だった。

(ハ)　大正14年ファウル事件があったが兎に角明治を降して優勝した。大正15年には逆に明治に雪辱された。此４年は，商明対立の時代。

一緒に漕いだ整調諸氏に若干の批評を加えると

(1)　H組の諸整調：

坂岡ヤギさん：至極好かった

横山ガマ　　：強過ぎる。土手ッ腹漕手

渡辺　　：固い，柔道マンの為コチコチ

朝海　　：柔らかすぎる。

(2)　対校の諸整調：

小松(C)：オールは強いが固い。

井手(S)：頗る変調子，然しSの連中は合わせ易い名整調という。

横山(H)：オール強すぎて他のクルーと調子が合わぬ，一人で漕いで居る。

宇治原(C)：ピッチの上げ下げが巧く，一番好かった。

私見では音楽好みで且高い人格の人は名整調となる素材と思う。

大正14年，対校舵手は中島俊郎（昭和３年卒）だったが，勝武夫という名で出た，之は彼の保証人は伯父さんの牧野英一東大教授（刑法学者）であったが，牧野さんは学生は勉強せよの一点張でボート等には大反対だったので匿名出場という苦肉策を取らねばならなかったのである。昭和２年には本名で出た。

(ニ)　大正15年　春の大会のHの第一選手は

C　細田　　S　渡辺　　7　和田

6　宮崎　　5　北条　　4　横山

3　吉村　　2　小田切　　B　久村

という強力メンバーで優勝の呼び声高かったが，レースはC組が善意の過失だったと思うがリミット，フラッグの外側通って結果的にはショート・カットで勝った。之が認められたのでHの選手が不満を持ち，ボート部を止めるという騒ぎがあった。遠山，寺尾，坂岡，葛西先輩等が心配して収めたが北条君は初志を変えず，ボート部を去り一橋会の仕事に専念すると云う事件に至った。北条君のボート部に対する支持は変らなかったがいささか後味の悪い事件であった。

(ホ)　ボート部と海軍水路部

横山曰く“川を研究したい”と筑地の海軍水路部に水流の速さを測定する機械を借りに行った事がある，海軍は学校からの正式要請あれば，貸してもよいと云う。その中に我々が知り度いのは水流の絶対的速さではなく，各コース（今はレーンと云う）の地点毎の相対的流速の比較が出来ればよい。それなら瓶流しで各コース毎に測れば足ると気付いて海軍から借りるのは止めた。スカールを漕ぎながら瓶を流して流速を測り，流れの地図の原稿を作った。細田も中島も之に励んだ。

(ヘ)　商大と他大学との体位比較

早，明，慶，東，商の順だった。敵に値するは早，東，明だった。商大は４人は大きいが，他の４人は小さいのが常体だった。

自分はインカレに勝つ為には，漕法の外にクルーが一体となって実現出来る漕風を持つ事が必要と考えた。大正15年のHの第一選手は体格も好かったが，そして漕法も好かったが，加えてクルーとしての漕風も作ったと考えて居る。そしてそれが昭和２年優勝の背景をなしたと思って居る。

(ト)　昭和２年優勝クルーの事

商大クルーは之迄毎年大きなボディスイン

グで漕いで居た為かピッチの上げ下げは得手でなかった。所で此年遠山コーチはいろんな点から，之が改善を考え，示して呉れた。オール先の力を主として形から入って行く漕法を廃した先覚者だ。本人がスカールを漕いで得た漕法がフェアバーンに結びついたのである。宇治原整調は此の遠山コーチの考えを好くこなした漕手と思う。自分は7番を漕いで居て好く判った。自分は6年間漕いだが彼は7年漕いだ。自分は野球の出身だが，彼は宇和島中時代からボートを漕いで居る。彼の生家は，宇和島の回漕業者で，水との縁は深かった。彼が名漕手，名整調となったのもゆえなしとしない。

(チ) 一橋会とボート部

一橋会の性格は学校の外廓として存在，学生は一橋会費（当時年5円）を払って居た。ボート，柔，剣，庭球，籠球，英語部等の部活動があったが，ボート，テニス，英語部の三部が盛んで柔剣弓等は静かに活動して居た。春の大会の優勝写真には一橋会の名が入って居た。昭和2年優勝の時は，一橋会で絵葉書を出した。

(リ) 老婦人の財嚢

春季大会の第一選手レースで勝つと優勝旗の外に三宝に載った二つの錦の袋を貰った，之は英国の LADY'S BAGS を真似したもので観覧席の先輩諸氏からクルーへの祝いの寄附金が入って居たと聞いたが，ほんとに入って居たかは知らぬ。

(ヌ) 一橋新聞とボート部

自分の在学中，萩原忠三氏（一世オメンチャン）等の努力で学生新聞が出来た。ボート部の政治局員，葛西，木村賢治等の活躍で仲が好かった。新聞部は好く協力して呉れた。

BOAT MEN WHO'S WHO として選手各自の紹介記事，又練習状況等好く載せて呉れた。

(ル) H・C・S各組と東大各学部との仲

夫々のカラーの同色のよしみで夫々に仲が好かった。

H組（青）と法学部（緑）
C組（白）と工学部（白）
S組（赤）と医学部（赤）

東大の遠漕歌の一節

“堤の桜　吹雪して　紅の頬かすめては
オール持つ手のたゆまるる　二里八丁の風情あり”

“オールの波紋泡立ちて　河上いつしか波立ちぬ　はや見えそめし白光に　灯台の声，口をつく”

“楽しき今宵　この筵　今日ぞレースの門出なる　固き誓いに艇友が　宴あぐる愉快さよ”

等，思い出は尽きない。

6. 思い出に残る人々：大先輩，小先輩，同級生等々。

(イ) 松葉谷良太郎氏（明治39年高商卒）

（古河鉱業常務，H組）が一橋会誌に書かれた「我は諸君に漕艇をすすめん」に曰く，「漕ぎ終った後の恍惚として，引っくり返って，艇上三尺の涼風に休む気持の壮快さ，肺病糞喰えだ。諸君に漕艇をすすむ」の一文は新入生は皆読まされた。印象鮮明である。

(ロ) 岩下家一氏（明治38年高商卒）

公卿の出身で研究家肌の人，隅田川は公平なレースを行うには不適当故，新コースを考えねばという意見の持主で先覚者であった。レガッタでは審判長を好く勤められた。大正14年の レガッタで 商明の ファウル事件のあった時の審判長。結局，明大オミット，商大独漕優勝となった。審判長判断は今日顧ても正しいが当時はいろんな的外れの批判もあり，それを心外とされたのか，苦にされたのか，亡くなられた今では知る由もないが，あの事件を契機に漕艇界を去り再び戻られる事なかった。一橋端艇部には大きな損失だっ

た。

(ハ) 大森芳夫氏（大正９年卒）

他大学にも勇名を走せた人。喧嘩の強い人でヤクザも避けたという，何時でも死ぬ積で体当りしたと伝えられる。昔は端艇部卒業生だからとて誰でも会員にはなれなかったという四神会（英国のクラブのメンバーシップの推薦制を取ったもの）に卒業前から入って居たのだから余程豪傑ぶりを買われて居たのであろう。

H組復興の祖，夫迄はC組に非ざれば人に非ずと云われC組全盛時代があった。卒業遠漕の時，銚子支所に三井物産からの採用通知の入電に対し“三井物産お断り”と返電したという。それがいろんな経緯で結局物産入りしたのだから面白い。

大森氏の後，Hは遠山，鷲島，寺尾等々現れて興隆しH勝たざれば対校勝たずと云われるに至る。

(ニ) 木村賢治氏（大正15年学卒）

自分より２年上の先輩，頗るつきの名文家，遠漕記などは“シャンシャンと手じめして乗艇，向嶋艇庫から吾妻橋を経て両国に向う”という書出しに始まり見事なものだった。震災後の艇庫復興。又少しづつ難しくなりつつあった一橋会との折衝等に大いに功績あった人である。

(ホ) 森米次郎氏（大正10年高商卒）

自分の漕手時代，小倉コーチのサブコーチとして，自分は表面に出ず好いアドバイスをいただいた。滑席バック台を好く見て呉れた。秀才である。

(ヘ) 森茂二郎氏（大正10年高商卒）

絶対の権威を以て押えて来る。自分は櫓先を見て呉れ，引張る腕の変な事は問題にしないで欲しいと訴えたが，コーチはウォーム，腕の引き方の形が第一で，それに依って自然に好いオールが引けると云い自分と相容れなかった。畑さんも自分と一緒に森茂さんにしごかれた１人である。畑さんは最上級生でありCの主将だから不満だったらしいが我慢して居られた。畑さんは何と云ってもオールは強かったが，短かった。それで直されたのだろうが大分頭に来て居られた様だった。

(ト) 川添清男氏（明治42年高商卒）

大正９年インカレ対校クルーのコーチ，大倉商事社員でロンドン駐在中，ビル・イーストに就いてスカルを習得，短躯上手の名スカラーとして名を馳せたという。オーソドックス漕法の信奉者。炯眼の人でクルーを一寸漕がせて見て，すぐに８人の漕手一人一人の欠点を指摘した。之には皆感心したがプレス，ダウンを始め，漕法の基本を教えるのに熱心すぎて時間不足となり，商大クルーはレーシング，コンディションにならぬ儘にレガッタに突入，東大に大敗した。それで川添氏も間もなく姿を消したが惜しい人だった。

(チ) 小倉千代三氏（大正２年高商卒）

川添氏に代って登場したのが，日本郵船ロンドン帰りの同氏，矢張プレスダウンを強調したが，漕法より精神面を強調。レースとなったら“ブルドッグの様に喰いついたら離すな”という教え方，大正10年のインカレは之で東大を破って優勝し面目を施した。

自分が補欠だった頃，対校コーチの為のモーターボート代りに毎日小倉さんが舵手でタブペアでエイトを追いかける。和田にはウォーター・マンシップの育成に随分役に立った。

(リ) 遠山不羈夫氏（大正13年学卒）

とに角，川好きだった。瓶を流し，スカールで追い，流速を計る。スカールで一般蒸汽と競争する。フェアバーン漕法を取入れて成功したし，造艇の研究にも熱心で，60呎の朱塗りの安定の好い赤舟，軽量で，安定の悪いマホガニー艇等を作った。マホガニーは結局クルーが乗りこなせなかった。

当時，商大は専ら岡本造船所に注文した。

東大は千葉四郎氏のデルタ造船所だった。

遠山さんは独創の才に富み，いろんな新しい事を試みた。列挙すると

(1) 遠山式スタート：“用意”の号令でブレードを直角に立てる。当時他校は“用意”ではブレードを水面にフラットにして置いた。だから“GO”で漕ぎ出す時一寸早くブレードが利き始める。当時のNEW IDEA だが今は皆やってるから神通力はない。

(2) ファイナル・ホイップ：自転車坂上りの最後の一蹴りの話から始まり，レース前3—4日にして始めて行った。2段漕ぎにならねば頗る有効と思う。

(3) コックスと料理

遠山氏は時々，ステーキ，魚のバター焼き，ジャガ芋のバターイタメ等々凝った洋食を自分で作り，クルーに喰べさせて呉れたが，頗る美味だった。懐しい思い出である。

(4) 遠山さんと8ミリ映画：当時としては仲々のＩＤＥＡだったと思う。障子をスクリーンにして写した。欠点の指摘には一言もなかった。

(ヌ) 商大の生んだ強力巨人選手たち

中山克巳，鷺島富造，高橋朝次郎，宮沢文夫氏等が印象に残って居る。

鷺島さん(大正14年卒)は185cmを越す長身の名漕手，和田はHで一緒にＦＩＸ艇レースを漕いだが，彼は大きいので4番，平素はバウサイド専門なので困って居た。音楽好きでワン・ハンドレッド・フェイマスソングズというのを常に口ずさんで居て，ローイングはリズムだ，それには音楽でリズムを教えるのが好いと常に云って実行して居た。又コンプリートオアズマンをよく読み研究して居た。鷺さんのオールの泡は独得のものだった。背が高いので写真に撮ると他のオールが上って居るのに未だフィニッシュを引いて居り感心させられた。

晩年一寸一人よがりの点もあり，鼻高々の所もあったが，漕艇第一人者の風格があった。昭和5年自動車事故で急死されたが，之も商大には大きな損失だった。

(ル) 宮沢パンチャンのこと

学校の構内を馬鹿デカイ男がマントの裾を引きずる様にノソノソ歩いて居る。之が後の名選手，宮沢文雄，パンチャンだった。合宿練習中に特大のパンツが2つある。1つが和田ので，他のもっと大きいのが，宮沢さんのだったのが，綽名の由来。逸話の多い人だった。力が滅法強く風呂屋でふざけて居て自分は投げとばされた事がある。バスケットボールをして居た時，久村トラチャンが上手なので腹を立てたパンチャンが腕も折れよとねじり上げた強力に之も力自慢だった，トラチャンも降参した。卒業して品川白煉瓦に入り平の工場に居た頃，何かの問題でヤクザが文句をつけに来た。パンチャンは黙って座蒲団毎，そのヤクザを持上げて縁側から庭先に投げとばした所，尻尾をまいて退散した相だ。走るのも早く合宿での朝食前のマラソンでは最後の500mのダッシュでは野球で鍛えた自分の走力も敵はなかった。幅飛びも得意で俺に勝った奴には浅草でおごるとよと云ってたが奢ってもらった者は居なかった。

一枚岩の様な胸をして居てオールは迚も強い。H組の練習で鷺さんと寺尾イッチャンの命令で，和田，宮沢でエイトの2本漕ぎをやらされた。バウサイドが有利なので最初の中は和田の方が強い，だが千本以上漕ぐとパンチャンの方が強い。彼の泡は一寸ちがって居た。大正14年インカレ決勝で明治とファウルがあった時，パンチャンは明治が商大のコースに入り込んだのを証する為，明治のオールをつかまえて放さなかったと云う。

(伊藤追記，宮沢さんは豪快な人で真にボートマンたるの風格を持った人と云う点で畑弘

平さんと軌を一にする。満州事変の時，主計将校で満州に出征中，糧秣の調達を命ぜられ敵中深く潜入し使命を達成され，部隊長から幹候上りの将校にもかかる勇敢な士ありとはと激賞された。

戦後帰還して苦労されたが，大日実業を起して，経営にも腕をふるわれた。ある年の戸田でのレガッタでどこかの子供が川に落ちたのを見るや，洋服の儘とび込んで，あわやと云う所を救けられた。決断の早い人であった。一橋の戸田旧合宿所，相模湖のボート部用地の購入等にも率先して尽力された。数年前に亡くなられたが，対校選手たりの時のレガッタ優勝写真を胸に抱いて居られたと聞く。ボート部に取り忘れられぬ人である。)

(ヲ) 高田正見氏（大正15年卒）

前掲和田が，森生蕃コーチにしごかれて居た時，上手と賞められて居た人。自分をよく慰め，励まして呉れた。人格者で将来こんな人が，コーチになれば好いと思った。黙々とオールを引張って居た，体が小さかったが，精一杯の力を出して居た。畑さんのロウアウトに通ずる人で，明治との決勝レースでは最後にロウアウトして失神された。第二次大戦末期斬込隊長で戦死された由が惜しい人だった。

(ワ) 横山巌氏（昭和３年卒）―がまさんと云うと皿廻し講義

和田の同級生でHの副将だった。対校も漕いだ。商大艇の止る原因を解説して呉れた。自分は鷺島さん式のローイングを長くやって来たので，意見が衝突した。彼はフェアバーン式漕法を考えた人で，久村(昭和４年卒)も彼と同意見だった。久村も一徹者だから小松主将（大正15年卒）と意見衝突して，ある年の合宿で何時の間にか姿を消した事がある。

自分は或る年，大国寿吉氏（三高出身，関西ボート界の大先輩）の漕艇に関する著書を読み，その中で，漕法と漕風を別けて説いた説に啓発され自分なりに考えた。自分の結論は漕法とは別に，クルー全体でマスターしたものが漕風で，クルー独自の漕風が出来ねば強くならぬ，漕法論義文に終始しては駄目というものである。

(カ) 葛西秀千代氏（ポンチャン，大正15年卒）の事

自分の２年先輩である。木村賢治氏も２年先輩，２人が本郷に一緒に下宿して居て，ボート部の梁山泊だった，二人は漕手でもあったがむしろボート部の政治担当だった。一橋会との折衝，一橋新聞の操作，学校当局，特に黒川事務官との交渉に大いに腕を発揮した。一寸後輩の池上三次郎氏（昭和３年卒）も与って功労があった。ポンチャン，賢チャンがあってこそ当時のボート部の隆盛があったと思う。

出陣式，凱旋式（敗けた時は帰陣式）応援団の結成等を取仕切って呉れた。この二人の後を継いだのが北条秀一氏である。

宮沢パンチャンをボートに引張込んだのもポンチャンであり，自分も亦彼に依てスカウトされた。

(ヨ) 塚田松二氏(マッチャン，昭和４年卒)の事

真すぐな人で，曲った事の嫌いな人，マッチャンの兄さんは，畑コヅさんが整調の時のC組の舵手，マッチャンはHのサードを漕いだが選手を止めてからはバックマンとしてH及びボート部の為に献身して呉れた。彼がレガッタ前，スタート練習をやる時，ステークボートから艇の尻を押えて呉れると何となく気分が落付いた。

その時の姿と，ある夏対校の銚子遠漕の応援として２日間舵手をつとめて呉れた姿が今も目に浮ぶ。

話し方に何とも云えぬユーモアがあり，人を引付ける魅力があった。書く事も好きで，彼の“端艇部内史”には彼の人柄が好くにじ

み出て居る。筆者には江戸前の蕎麦の喰べ方を教えて呉れた人でもある。

君塚茂太さん（大正9年高商卒）の奥さんと松チャンの奥さんとは姉妹である。

(タ) 北条秀一氏の事

昭和5年卒で，筆者の後輩である。大正15年の春季大会第一選手レースで，C組がリミットフラッグの内を通りながら，Cの勝とされた判艇をめぐりHの選手が騒いだ事あり，彼は之を機に選手を辞退，以後一橋会理事として活躍，常にボート部を支持して呉れた。卒業後満鉄入社，総務部長で終戦，満鉄社員の引揚げに尽力した。郷里兵庫県より衆議員選挙に立候補当選，民社党に入る。

後，選挙区を三多摩に移し，参院選挙に当選，和田耕作に地盤を譲って郷里へ帰り，夫人と共に幼稚園を経営，若き世代の育成に当って居る。憂国の士である。

(レ) 鳶職の金さん，江戸ッ子鳶で商大の大ファン。いとも威勢よく，レガッタの折，皇族の若宮殿下，台臨の折は準備で特に大張切だった。思い出深い仁であった。

追記

和田さんは，商大名門時代の，昭和2年，第三回目のインカレ優勝を飾った時の主将で，七番を漕がれた名漕手である。昭和3年日本のボートが初めてアムステルダム・オリンピック参加の為の代表クルーを作った時舵手の中島氏と共に候補に選ばれたが，商大は単一クルー参加が，ボートの精神という考え方であった為，2人共参加を辞退された経緯がある。今考えて見れば，一橋ボートの為には，惜しかったという感が痛切である。

同氏は，海草中学時代は野球選手として鳴らされた。商大卒業後は，三菱鉱業に長く在社された。同社に居られた一橋ボートマンは三谷一二氏を始め枚挙にいとまがない。

退社後，一時僧籍に入られた事もあり，仏教にも，一家言を持って居られる。

最近は，学生時代数限りなく遠漕で往復された江戸川，利根川の川筋への郷愁断ち難く，遠漕の定宿であった松戸の海老屋，布佐の伊勢屋，佐原の山本屋（如水会員で二科会員の山本画伯の生家）等に杖を引いて居られる。

この氏の思い出記には，我々も初耳も事も多く興味深い。和田さんも亦，ボートマンである。

（伊藤治雄記）

ボート生活の思い出

（大正13年～昭和５年）

中川英造（昭和５年学卒）

私は大正13年商大予科に入学した。前年の関東大震災で，一橋の校舎や，向島艇庫が焼失して，予科は石神井に急造されたバラック校舎に移転していた。学内はもとより，端艇部にも復興の気運がみなぎっていると，見受けられた。

復活インターカレッジ・レースでは，明治に，決勝で惜しくも敗れた。全学挙げての応援団が結成されたが，熱狂的な応援も甲斐なく，隊伍を整えて一橋まで校歌とともに帰着し，雨天体操場での解団式が行われた。声涙ともに下る演説が相次ぎ，新入生の私はその熱気に，大きな感動をおぼえた。

予科１年の行事は，春のクラスチャン・レースからはじまった。私は５尺５寸（166センチ）の小柄であったので，選に洩れないうちにと，真先に手を挙げて参加した。固定席フィックス艇による隅田川でのレースでは春秋とも３組（S組）として勝つことができた。続いて予科選手として大正14年の春の校内で勝ち，昭和２年の第一選手でも勝つことができた。その年の対校選手の補欠として練習に参加したが，レギュラー選手に病人が出て，代わってバウロに乗るようコーチの遠山不羈夫氏から言い渡された時には，びっくりした。そればかりでなく，軽量の一橋クルーが準決勝で，早大，帝大を破ったばかりでなく，宿敵明治を決勝で退けて，優勝してしまった。昭和２年秋のことである。

その間の漕法についてひとこと。当時は河の上での猛練習あるのみであった。ライトパドルもあまりやらない。一本一本に全力をあげる。基礎練習は固定席で重い水を引っ張る。陸上では，専らバック台で腹筋をきたえる。一橋のスウィングは華麗で定評があった。ところが，大正13年にフェアバーン著「ロウイング・ノート」が入ってきた。これはフォームから教えるオーソドックス漕法から，ブレード・ワーク中心の漕法への転換を唱えたもので，S組では先輩高橋保幸氏の下宿に合宿して，手分けしてこれを翻訳して，ガリ版刷りの冊子を作った。名づけて「自由漕法」と言った。一橋は従来の忠実なオーソドックス・スタイルから，フェアバーン漕法を取り入れ，スタイルの見かけは一見バラバラであったが，水中のブレード・ワークはよく利いて，艇速はよく延びた。翌年のアムステルダムオリンピック出場のフォア選手は，優勝一橋クルーを中心として編成されるべきであったが，各校からの選抜ということで，一橋は参加を辞退した。ただし，第一期練習のコーチには，遠山，小松両先輩が担当することになったので，フェアバーンの思想は各校に採り入れられることになった。

川の流れのある隅田川でのレース記録は，日本クルーがオリンピックに参加するようになって，比較の基準が考えられないかということで，平水換算記録が参考タイムとして発表された。私は昭和６年から数年の間，協会の記録係を担当していたので，平水換算記録表を徹夜で作った思い出がある。当時の優勝水準は６分20秒位であったと思う。又卒業後，朝日新聞社の営業局に入社したが，運動部からボートの記事を依頼されていたので，３段，５段の予想記事から，予選の記録・決勝の記録，その概評など，協会としての公式記録発表の後，審判艇から伝書鳩を飛ばし，或は艇庫から電話で新聞社に送稿した。

当時ボートは六大学野球，陸上競技とともに，スポーツの花形で，優勝記事は写真とと

もに，社会面のトップを飾ることもあった。その後人気の衰えたひとつの原因は，オリンピックでの惨敗があると考えられる。現在のラグビーのように世界水準にわずらわされることなく国内競技としての覇を争うことに関心を集めることなども，見習うべきものと考えられる。そうした関心の高まりのなかで，実力の向上が期待されるものと思う。

遠漕はボート生活の重要な一面である。春の校内レースに備えて，ＨＣＳ各組の銚子遠漕，対校選手の夏の遠漕，冬休みの野田遠漕又は夏の乞食遠漕など，私も数えて在学中に13回の遠漕に参加している。ボート部室にあった古い部報の遠漕記を興味深く読みフケったし又自分でも遠漕記を部報に掲載した。遠漕は耐久力の鍛練にとどまらず，風と水と，自然との戦い，苦しみと喜び，顧みれば多くの貴重な体験と，クルーとの友情を得た思い出がある。

学校が国立移転にともなって，近くに水路を探検しようとして，仲間とペアに乗って東京湾に出て，多摩川をさかのぼり，折柄豪雨の後の増水をついて，国立谷保先の水路先まで辿りついたことがある。又荒川，中川，綾瀬川をフォアで行き止りまで漕ぎのぼったこともある。とに角漕ぐことが好きで好きでたまらなかった時代である。

私は昭和２，３年の対校バウ，４年の鷲島富造コーチの下で監督をつとめた。４年の対校レースは尾久コースに移った。向島艇庫から遠いというので，千住に民家を借りて合宿し，仮艇庫を４本煙突手前の河岸に建設した。学校から，古い材木，トタン板を借り出して300円の費用で作った。その前後に向島に新艇庫建設の話があり塚田，高林両輩，在学の関川理事，河西理事等とともに新艇庫建設に没頭した。昭和５年５月向島新艇庫の完成レースと，数十隻による観艇式の偉容は隅田川を圧した。

この向島の新艇庫がやがて高速道路の下に没し，ボートコースも隅田川から戸田に移転した。かつて大正13年，予科の石神井移転とともに，赤羽の新河岸川にバラックの艇庫が新設され，固定席艇の練習に用いられたが，それも今は撤去され，当時桜草の名所であった浮間原を向岸に見，魚のとびはねた新河岸川も今は工場の乱立によって，有名などぶ川となっている。

更には，石神井の予科校舎も，小平移転にともなって，今は住宅街となって，当時を偲ぶ記念碑が立つのみとなっている。本科時代３年を過ごした一橋の校舎も，今は国立に移転した。隣接する如水会館も改築されて昔のおもかげが懐しまれる。遠漕の思い出の多い，隅田川から江戸川に抜ける舟堀川運河も今は通れなくなったし，江戸川から利根川に通ずる「土堤八丁の桜かな」と歌われた利根運河も今は通行不能となったらしい。

歳月の流れとともに，物事の移り変りの激しさを今更のように感ぜざるを得ない。はた又半世紀を超える今，それは当然のことでもあろうか。

高垣部長と向島新艇庫

（昭和２年～５年）

塚　田　松　二（昭和４年卒学）

ここに，稿を新らたにして，特に，一欄を設け，敢て，高垣部長に一触を試みようと思い立った所以は，一橋端艇部が，若し，彼を迎えず，選を他に覓めていたとしたらば，恐らくは，あの急速な復興一殊に大艇庫の実現は不可能に近い運命にあったものと想像さ

れるからである。いや，この様な形而上の問題に限らない。彼が在任11年の期間は，一橋端艇史上，稀に見る，内容充実の時代であったと回顧されるのである。

勿論，彼は就任早々，熱情を傾けて，その職務に尽粋し，遂に，倦むことを知らなかった。が，ただそれだけのことで，あの実績は挙げられるものではなかったと思う。彼は部に潜在する力源を刺激して，その効果を，最高度に発揮せしめ，且つ，これを１つの焦点に凝結せしめた。ボートにいささかたりとも関係があるか，或は，関心を持つ総べての人間が，働かずにはおられん様に仕向けることに成功したといった方が，より適切な表現であるかも知れない。が，彼は意図の人ではなかった。いわんや，計画に倚る人では，断じてなかったといえると思う。若しかすると，意識の人でさえなかったのではないか，とさえ仮想されるのである。一切は，要するに，かく在ればかく為さずには措かないという情熱の人である彼の性情が作用して顕現した自然の帰趨と，筆者は，看たいのである。

とまれ，彼を無視して，一橋端艇部は語り得ない。彼は，正に，部史において，特記に値する存在であると，筆者は深く信ずるものである。

佐野学長は，再度の就任であり，その前は，三浦新七，福田徳三，関一といった，一橋が持つ最高峯に位する各教授の間で，部長のバトンは受授されて，今日を迎えた。つまり，端艇部の部長といえば，学長か，これに準ずるもの，逆に，それ以上か，乃至は，学長を屁とも思っていなかった人々に定まっていたのである。

歴代の部長が，神棚の上に座っていたと譬えるならば，高垣教授は，学生が，膝を交えて語ることができそうな気がする程の人物である。学長とは，唯の１回も，酒酌みかわしたこともなく，その気もおきないが，教授ならば，艇庫や今文辺りで，一緒になって，遠漕歌ぐらい，合唱してくれそうに想う。

果して，教授は，その様な人であった。

「黒川さん，ボートの連中と飲むと，面白いですよ」

などと，事務官に，出席を勧めていた教授を憶い出す。

学生にとっては，この様な部長は，歓迎されるのである。（高垣教授，部長に決定）という噂は，忽ちの裡に，学内に喧伝され，部の内外は，春の光で包まれた様な，駘蕩とした気分が漲ったものである。

兎に角，高垣部長は，ここに実現化したのである。昭和２年４月のことであった。果然，一橋端艇部には，目覚しい許りに，活気が横溢した。部長の意気も，凄さまじいものがあった。部報再建創刊号に，部長は，所感を寄せている。

創刊の辞　一橋会端艇部長　高垣寅次郎

汎ゆる運動競技の要諦は，勝敗の決するところにあらずして，精神の陶冶にある。古来，我が国民精神が，伝来の武芸によりて，如何に養われて来たか。古代希臘の思想芸術が，オリンピアの競技によりて，如何に培われて来たか。這般の消息は，今ここに舒説するまでもない。凡そ運動競技の発展は，個人的競争的なるものより，団体的協同的なるものに進む。この発展段階において必要とせられる心理的要素は，単なる競合的克服の観念，従って，また，指導者に対する自覚的服従，小我超克の精神であり，而してその故にこそ，運動競技は，心神鍛錬の効果を挙ぐものであり，社会生活に役立つところの文化的意義を有つものであり，又，高き程度の心理的発展を要求するものである。

由来，我が一橋端艇部は，運動界の中心的形象であったばかりでなく，ここには，幾多の先輩が，涙と汗とによりて，所謂，

一橋精神の訓練を受け，我邦産業界の統率者たるべき素地を養われた。ここに，多年に亘りて育成せられた光輝ある伝統がある。

予は，スポーツマン・シップを讃仰し，特に一橋端艇道に対し熱愛を有つが故に，及ばざらんことを悟りつつ，自ら揣らず，現在の要地に就き，先輩諸賢の後援の下に，学生諸君と共に砥礪して，遺されたる伝統を守り，聊かにても栄光を添えて，之を後継者に伝えんことを期している。

右は，教授が部長就任早々の声明であった。

後述する新艇庫建設の時などは，この逃げ廻わりで，定一郎辺り，随分と苦心したらしかった。艇庫の工事は，着々，進捗していた。部長は，頻りに桟橋と台船を気にしている。

「桟橋と台船の設計は，まだかね？折角，立派な艇庫が出来ても，台船と桟橋で失敗すると，又，問題だよ」

定一郎を顧みて，部長は，熱心に，注意を喚起するに努めていた。定一郎，この時，薄笑いを浮べ，顎の先を摘みながら，適当に返事をしていた。彼，肚の中で，（まだ設計が出来とらんのが，すなわち，当方の設計なのである）と嘯いていたかも知れないのである。何しろ，当時で，桟橋が8,000円台船5,000円締めて13,000円は新艇庫総工費の1割以上に当るのである。いまの貨幣に換算すれば，優に7～800万円を超えるだろう。

「大丈夫です。総括的に文部省に話してありますから，心配いりません」

（安心して，もう，聞くな）という極め手を掲げておいて，話題を，他へ避らす戦法を専ら採っていた。新艇庫竣成式の当日，バルコニーに設備された木の香も高い観覧席に腰かけて，来賓の一群が，祝い酒の酔いを醒ましていた。隣席の山本技師が，高垣部長に話しかけた。

「兎に角，一橋の学生は，人が悪いですよ。予算一杯で，艇庫を作らせておいて，われわれは，これで全部終ったと想っていたら，桟橋と台船が残っているじゃありませんか。ボートには素人の弱味を泌々と感じましたねェ。学生に聞いたら，

（艇が出せなきゃ，艇庫じゃない）なんて嘯いてるんですからねェ。美事，一杯食わされましたよどうも，初めからの計画らしいです」

と，零していたが，案外，楽しそうな顔は明かるかった。聞かされた部長も，技師に誘われて，呵々大笑しながら，定一郎の横顔をみていたところを見ると，だいぶ，カブれて来たのかも知れない。

「君，大丈夫かい？こんなところ歩いていて……」

部長は，こんな処を見たのは初めてらしい。当時，観音座横は，震災後の混乱で，難民街の様相を呈していた。部長は内心，気持ちが悪いらしいのである。定一郎と筆者が誘って，玉木座で張切っていた榎健一座を観るために，あの辺りを歩いていた時の質問であった。それでも，2人が座り慣れていた2階席の一角に案内して，部長を真ん中に収まった時分には，すっかり安心して，結構，楽しくあったらしい。出てからは，多分，これも2人が通い慣れた道順の三河屋辺りに案内して，2人分がとこの牛鍋を突つきながら，一杯やったに間違いないと想うのだが，この点，筆者の記憶はハッキリしていないのは残念である。

以上記述した通り，高垣部長は要するに，部の親分であった。子分たちは，親分が歓ぶ顔を見たい許りに，一生懸命働いたのである。

「僕が部長に在任中の11年間，レガッタに一度も優勝したことがなかった。辞めた途端に十数年振りで栄冠を獲得した」

切ない気持ちで，述懐の言葉を聴いていると，親分は，淡々とした語調で，そのあとを続けるのである。

「では，僕の部長の時は，部は沈褪していたのかというと，イヤイヤどうして，あの時くらい，部の内容が充実し，精神が高揚していたことは，一橋端艇史上，滅多にあるもんじゃない……」

「そうです。その通りです。」

と肚の中で答えながら，聴き手は，親分の一言ごとに叩頭するのである。この様な部長は，少くともいままでは，史上，その類を見なかった特異な存在であったと憶う。

筆者は，いま，限りない懐しさを反芻しつつ，われらの部長，高垣寅次郎教授を，泌々と憶うのである。

新艇庫

1

高垣部長が在任中に築いた数多い業績の中，形而上，最も絢爛な色彩を添えたものは，何といっても，言問に，大艇庫を建設したことであろう。このことは，部長も，私かに自負するところのものであり，かつまた，それに値すること充分な内容を持つものである。リバーサイド・パークを背景に，東洋一の大艇庫。誰れだって，考えただけでも気負い立ちたくなる。それが，実現したのだ。学園の復興が，まだ，その緒に就いた許りだという時期に，延472坪5合の艇庫が着工されたのである。部長の胸中は，想察するに難くなかった。

大震火災の犠牲となって，収容していた愛艇と共に，一切を灰燼に帰した旧艇庫に代って，木造の仮屋ではあったが，屋上に観覧席を特設した艇庫が，災後早々に成ったことは既述した通りである。一橋人にとっては，これでも，当時は，非常な歓びであり，好個の刺激に役立ったことは事実であった。

その後，三科分立問題が一応終熄し，続いて，本学移転問題に，同時に，その対応措置として，既述した（手近かに川を求める）運動が，村山貯水池の利用に焦点化されて，部が全力を凝集して驀進する途は，ただ一つ，といった気運が，漸次，濃縮されつつあった矢先きに，この問題が，急遽表面化されたのであった。

震災地復興を目的とする国家機関に復興院という役所があった。その頃は，同院担当の業務も，大体は片付き，いよいよ，最終段階である仕上げに着手することとなった。墨田リバーサイド・パーク設計は，その一環をなすものであった。帝都復興の大業も，いよいよ，終局に近く，棹尾の意欲は，仕上げ工作に集中され，復興院は，全職員挙げて，有終の精華実現に，全力を傾注していた観があった。墨田公園を，日本における，臨江公園のモデル・ケースとして完成したいと，技師たちは，腕によりをかけて取組もうとしていたのであった。彼らが，公園の敷地を実地検分してみると，向島側市空地の西北隅に薄汚れたバラックが2軒並んで，川に臨んで立っている。バラックの中には，何れも，ギッシリ，ボートが詰まっていた。下流から数えて，商大，東大の艇庫だ。

臨江公園にボート・ハウス。観念的には，洵に似つかわしい存在だが，こんな薄汚れた木造小屋を如何せん，1つ，パリッとしたコンクリ建ての大艇庫でも造りたいものだというのが，復興院技師達の衆論となって盛り上がったのであった。

そこで，復興院は，文部省を通じ正式に，両大学へ勧告を発して，新公園にマッチする建造物に改築することをもってした。これが，新艇庫誕生の動機であった。いってみれば，リバー・サイド・パークのお蔭であり，復興院置土産のご相伴となった訳である。人生，何時，何処から，どんなことが生起する

か判らんものである。技術家のオセッカイ，潔癖も，時には大変好都合なものであると思う。

省議を経て，本学へ初めて通報されたのは，昭和２年も押詰った歳末のことであった。

黒川事務官に呼出された事務長高林定一郎が白い息も荒々しく吐きながら，長い顎を，いとど伸ばして，部室に馳せ戻って来た。

「吉報吉報。大艇庫が出来るぞォ。鉄筋混凝土造り，東洋一のボート・ハウスだッ」鈴を鳴らさない号外売りみたいに，部室に居合わせた誰れ彼の別なく，彼は，アナウンスしながら，独りで興奮していた。初めのうちは，何やら，薩張り見当も付かなかった連中も，漸く真相が摑めるに及んで俄然，色めき立った。急速に受け入れ体勢を完備しなければならぬとすると，正月も何もあったものではない。途端に，単位の２つ３つを，次学年度に申送くる決意を固めた奴も現われるという始末となった。

2

緊急幹事会は招集され，新艇庫委員首席に，高林定一郎を任命した。首席にも，なんにも，任命された委員は，彼１人であった。当時の端艇部は，よく，こういった手法を用いたものである。が，こんな大きな仕事に，委員一人では，ということは，無論，判らぬ筈はない。では，所要数の委員は，どうするのかというと，定一郎が，自分で勝手に，時に随い処に応じて，適材を物色しては，談じ込んで，業務を分担させるのである。部は，彼のやることに容喙もしなければ，関知もしない。つまり，一種の請負制度と看れば，よろしいのである。筆者も定一郎に談じ込まれて，下請けを引受ける光栄を荷うことになった。

首席委員の仕事は，質からいっても，量からいっても，大変なものであった。折衝の相手は，復興院，文部省，本学，四神会それに部内の各組，摑かまえ処がない様でいて，実は，最大の関心を払わなければならない相手である一般一橋人という相手まで存在しているのである。

歳末といえば，最終学期以前の繁忙期である。（怠けものの節季働き）という諺を，この時ほど，身に浸みて味わされることはない。シーズン・オフに入り，１年間ご無沙汰勝ちの学校の門を潜ぐり始めるのも，丁度，この時期となっている。ボートマンにとっては，学生としての，いわば，掻き入れ期に相当するのである。こういった意味を持つ，大切な時期に，彼らは，一橋端艇史上空前の事業に直面させられたのであった。完成した受け入れ体勢は，一刻も早く構成されなければならぬという客観情勢に追い込まれている反面，構成の基礎には，部百年の計が織り込まれなければならない。伝統を誇る一橋端艇道は，新しい息吹きを受け入れて，永遠の生命を雄々しく伝えるに似つかわしく，かつ，この目的を達成するために適合した環境の形成を，新艇庫に期待しようという気運が，当時の部の内外に生起したのであった。学年末だからといって，学位獲得なんかに拘泥しちゃアいられない。これは，先輩に対し，同時に，後輩に対する，ボートマンの厳かな責任なのである。事実，首席委員定一郎などは，あれから一年余り，トコロテンが竹鉄砲の筒から突き出されるように，校門を出るまでの期間は，彼の頭の中は，艇庫で一杯，学業など介在の余地は，あり得なかったと想像されるのである。この点，学徒としての彼は，大きな犠牲を強いられた形で，洵に，気の毒であった。もっとも，犠牲を強いられなかったとしても，大して違った成績が取られる訳でもなかったであろうことを想えば，残念がるにも当らないのである。

凡そ，物は心の影である。出来上がったも

のの背後には，必ず，人的要素が厳存しているものである。動機の萌芽は，復興院が蒔き，文部省と本学が，育成の温床の役目を演じた。が，温床の機能を最高度に発揮させ，育成物に性格を与えたものは，なにか。

部長を中心に凝成した部の力だと思う。よかれ，あしかれ，部の力を度外して，あの艇庫は考えられないのである。端的に，かつ，具体的にいう。若し，復興院と文部省，本学の手に一任して，これに，学生が参与しなかったとしたならば，あの様な艇庫は，決して，出現しなかった。472坪余の大艇庫は生れなかったのである。懼らくは，280坪が精々の小じんまりしたボートハウスが，代りに，建てられたことであろうことは疑う余地がない。では，部の力とは，なんであるか。それは，個人的な力量とか技能とか手腕とかいったものではない。個人のそれらは，一つ一つをとらえて見れば，洵に，とるに値しない些細な存在でしかなかった。ただ，これらが一つの目標に向って，集大成したのである。そして，これに，大きな，強い生命が吹き込まれたのであった。かくて，成った力が，あの仕事を完成させたと，筆者は看るのである。

高垣部長を中心として，組成され，凝結された部の力が，他のエレメンツを抱擁し，摂収し，深融して，ここに，総べては完結したのであった。首席委員定一郎は，この不思議な現象の渦中に在って，実に，媒介作用を演じたのである。この意味において彼も亦，一橋端艇史上の人物として記録される価値はあると想う。

筆者の史観は，完全に，唯心的傾向を帯びるものであることを自認する。定一郎が媒介物であることを指摘し，史上の人物としての価値を認める筆者は，この仕事に最も大きく作用したものは，実に，彼の性格であったと断定するに躊躇しないのである。その他の何物でもなかった。況んや，彼個人の手腕とか力量とか偉らさなどは，この場合，問題にはならんのである。彼が固有する性格が作用して，よい媒介物となり，事が円滑に運ばれたという事実に注目したいのである。

部は，いつも，かくあるべきだと祈らずにはおられない。特定な一個の存在などに支配されてはならない。一個一個は，それが，特異であろうが，卓抜であろうが，時には凡下であっても一向に差支えないのである。その総べてを網羅して集大成された力に，伝統の一橋精神が鼓吹されて，灼熱昇華した状態が部の健全な姿なのである。理想とする在り方だと思う。

この理想に最も至近な距離に達した時期が丁度あの頃であったと筆者は思うのである。定一郎が媒介物としての作用を，最も有効に，適切に発揮することが出来たのも，あの頃であり，彼が固有する性格の流露に外ならぬと看ることにおいて，筆者の論理は，初めて成り立つ定説を得るのである。

定一郎という人物は，一見，極めて慎重，細心，底の底まで読み切らんことにゃ，手を染めない男の様に，もっともらしい彼の顔付きを見ると，印象されるであろうが，実際は，それ程でもないのである。その実例を一つ，身近な処で求めるならば，彼は，先刻から，一生懸命，盤上の一ケ所を睨んで長考を続けている。まるで，専門棋士の風貌である。当然，相手はその間，ボンヤリ待たされている勘定になる。そして，胆の中で，思っていることであろう。(成る程，仲々慎重だ。コリャ，油断ならんぞ。サテ，次はどんな手を打って来るか？)

ところが，長考の末，破っ止と許り駒音高く打たれた彼の銀を中心に，盤面をよく見ると，彼が搦め取ろうと意図した敵角は，既に一歩手前において，彼の歩の隣りで斜め下の彼の王様に王手をかけていたのであった。つ

まり，定一郎は，自王と敵角との間に，合い駒を置く代りに，王手を超越して，角とりと出たのである。何んとも不思議な一手という外はない。そして，いうことがいい。（攻撃は最良な防禦だ）そうである。一度，王様をとられてしまえば，二度と取られる心配はないから，それもいいだろう。そうかと思うと，彼の竜の頭に，ピタリと香をつける。彼，周章して，まるで，反射的本能的の様な素早さで，竜は逃げてしまう。竜のあと，敵香の真っ正面，突き当りには，彼の王将が，悠然と座っているのだから，世話はないのである。（王より飛車を可愛がり，王より角将を欲しがり）といった諺は，彼の将棋から生まれたのではないかと想われるのである。筆者に師事する愛弟子の将棋を公表するには忍びがたい感情も動かん訳でもないが，彼の性格を紹介する具体例として，これ以上の適証は滅多に見当らないので，已を得ず，引用する次第である。

ここに提供された2個の資料を土台にして，読者が，彼を，抜け目がない様で抜けているとか，マジメな顔をして何考えているのか判らんとか，乃至は，相手がいなけりゃ多分名人だろうとか，想像を廻ぐらせられることは，各自の勝手で，筆者が容喙する筋合いのものではないと思う。が，この様な性格の人間が，首席委員として，兎に角，部の内外，関係当局，そして，これら各機関自体に生起し，或は，その間に誘発された，複雑多岐に亘る，あらゆる素因を取捨し整理して，纏め上げたのは間違いないのだから，面白いものだと思うのである。定一郎のやり方の中，最も顕著な特徴は，人間を，よくもこき使うことであった。どんな奴でも使う。その人間の性質などは問うところではなかった。ウルサ型は，ウルサ向きに，呑気な男は，呑気な仕事に，思慮深い人物は，六ケ敷しい役に，少々いかれてる向きは，押し一方の手にと，それぞれに配置して誤まらなかった。同輩だろうが，後輩だろうが，一向に頓着しない。現に，実質的には，2年も先輩の高士を，同輩同様，使した事実まである。

定一郎は，艇庫竣工ののち，部報に一文を載せて語っている。

> この艇庫は，誰れが造ったのか？　無論オレではない。誰れでも，彼れでもない。誰れ彼れ全部が纏まって，一つとなり，そこに，生れた，あるもの，それが造ったのである。それが，誰れ彼れを駆けって，造らしめたのである。

と断言している。判った様な，判らん様なと思うものもあるかも知れないが，これは彼自身，感じたままを表現したものと想われるのである。

立つ物の下には，必ず，土台がある。見えるものの後には，必らず見えない背景があるのだ。土台と背景を認めないものは，倶に，一橋端艇道を語る相手じゃないとするのが，定一郎と共に筆者らの考えているところである。定一郎は，新艇庫の構想を形成する協力者として，先輩に，その助力を仰いだ。四神会はこれに応じて，君塚，遠山の両先輩を代表に選定し，第1回の会合を，小石川林町の君塚先輩宅で開くことになった。筆者が，当時の市電を，西丸町停留所で下車したら，同じ電車の他の一方の昇降口から，定一郎が降りて来た。車内は，立っている乗客もいないぐらい閑静であったに拘わらず，筆者が乗り合わせていることに気付かん様な彼であったのである。

3

新艇庫に，要望し期待する部と先輩の総意は纏った。その内容は，次の通りであった。

1. 一橋精神の温床，一橋端艇道の道場に似つかわしい建造物とする。単なる艇の格納庫であってはならない。

この考え方を，具体的に表現するならば，

先ず内容が問題だ。そこは，艇の出入に便宜な条件を具えた格納庫と快適な合宿。一橋人が，在校生であっても，先輩になっても常に行って見たくなる様な空気を横溢させるために必要な休憩兼歓談用室を設ける。ボート全般の研究に役立て資料室，研究室。レガッタに備えて，作戦を練ったり天候を予測する設備を備えた特別室等。

学校に入ったのか端艇部に入ったのか，自分にも，ハッキリせん様な奴が，古来跡を絶たない現状に鑑み，せめて，ボートだけについても，学術的研究的要素を織り込んだ生活を，艇庫では，実行させたいというのが，根本的な指導思想であった。

2. 合宿だが，これは，現在する選手85人の外に，将来，増設が予想される各種選手数を考慮に入れて，120名位を収容するキャパアシティを持たせたい。艇庫の2階以上を，合宿室に当て，この部分に木造でも差支えないが，各室共，直接光線を浴びる様にしたい。対校選手用室は，最高階に設け，使用期間中は，随時，外部との遮断に便利ならしめる。

従来は，各組とも，艇庫附近の民家を借りて，合宿していた。これは，教育上からも経済的にも，好ましからぬ現象である。この点大いに強調して，文部省や本学当局の良識に訴えることとした。

3. 新艇庫は，形而上的にも，一橋精神を具象化したい。豪壮，壮麗，雄渾といった観念を織り込んだものとする。ドッシリした重さのうちにも，激しい闘志を秘め，一橋人が遠く離れて祖国を憶う時，瞼の裏に懐しく甦って来るだけの価値のある，印象的な存在としたいものである。

以上の様な構想を基礎にして計画し，素人考えではあるが，荒削りな設計図も，一応出来上がった。延坪は，最底500坪見当が要求されるのである。

定一郎は，部室に居合わせた学生2～3を，臨時委員に仕立てて同伴し，黒川事務官を訪ね，設計案を提示し，これが，要求の最低線である旨を縷述して実現化に協力方を懇請するところがあった。

本学の上に，文部省がある。（ワシは賛成だが，文部省がねェ）。当路者が窮地に追い込まれた時の遁け口上としては，これ程都合のいい理由はないが，先方様が都合のいいことは，こちらにとっちゃ，往々にして，都合の悪いことがあり得るのである。文部省だって，雲の上の存在ぢゃあるまいし，一つ，ぶつかってくれようかとも思い付いたが，書生にとって苦手の，（顔）という仁義もあろう。まア，当分，本学経由のまだるっこいコースを辿りながら，静観しようというのが，当初における，部の方針であった。数日たってから，事務官の呼出しが来た。出頭した委員の中には，偶然筆者も含まれていた。定一郎は首席だからこの場合，無論，主役なのである。事務官は，一同を捉がして，隣りの学長室へ導いた。学長，直き直きの引見である。一瞬，颯っと，緊張の色が流れた。

「君たちの案は，部長に話したかね？」

いきなり，学長は，質問した。

「部長許りぢゃありません。四神会にも諮り，その意見も織り込み，学生の手で，纏め上げたものです。」

「そうか。フム……四神会にもねエ…」

不思議な唸り声を揚げた学長は，大卓子に拡げられた設計図を眺め，説明書の頁を，ペラペラ，めくりながら，暫らくの間，頻りに，沈思していたが，やがて，顔を眺め渡した。

「君たちの趣旨も，よく判る。希望も，無理とは想わん。だが，……予算というものもあるし……第一，文部省の方針は，復旧という枠で限局されている。つまり，極めて消極的な性質を帯びているんだ。とても，こんな厖大な原案は出せ

ませんよ」

圧迫，制肘ということを譲るならば，余りに，消極，引っ込み思案，事勿かれ主義。それは，何時も，学生側の犠牲において構えられる学長の態度である。

「先生，予算額は，いくらですか？」

学生は，短刀直入，この様に質問した。学長は，瞬間，狼狽の色を掩うことができなかった。何んと答えたらいいか，胆の中で，自問自答している間が，答えが発せられなかった時間であったと想う。（定まっている）といえば，その額を隠す訳には行かんし，（まだ，定まってない）と答えれば，奴らのことだ。泌度，（では，この計画案に適応した予算を獲得して下さい）と来るであろう。下手すると，重い荷物を背負わされることになる。迂濶に返事はできないと，長考していたのは，已を得なかったかも知れんが，結果は，甚だ，マズかったのである。

「先生，何を考えておられるんですか？」

テキの追跡は急であった。元来，この日の学長は，学生を呼び付けて，野放図もない野望を破摧するのが，注文であったのである。この場合，旗印は，矢張り，文部省の確定方針の外はない。復旧なのだ。新設ではない。こう，大上段に構えれば，学生だって不精不精でも，納得する外ないであろう。別段，彼らを甘く見る訳ではないが，この一手を堅持して譲らなければ，何んとか，打開するであろう。というのが，学長の心境であったに違いない。学生は，復旧方針は呑んだ様な顔して触れて来なかったが，予算額を衝いた。いわば，一種の伏勢の観がないでもない。受ける立場は，恒に，痛く感じるものである。

学長は，改めて，学生たちの顔を一つ一つ眺め廻わした末，徐ろに，口を開いた。が，それは，学生の質問に対する回答としては，筋違いの感を免がれなかった。

「艇庫は，震災前は，80余坪，現在の仮艇庫は，それよりも小さく，68坪だ。文部省は，復旧という建前を変える訳には行かんので，精々120～30坪だというのを，事務官が，日参して説明してくれたお蔭で，200坪程度まで黙認させることに諒解がついた。それはいいが，予算面では，本学の校舎の分を割愛せにゃアならんので，心配しているところだ。……君たちも少しは考えてみてくれ給え。……君たちの要求は，その倍ぢゃないか。……そりゃア，無理というもんだよ……ナア，黒川君」

といって，侍立している事務官を顧みた。学長は，額には触れず，専ら，面で行く。具体を避けて，抽象を採った。要するに，自己のペースに，相手を引込もうという戦法なのである。精々，恩を着せて，懐柔の籠中に，丸め込もうという小魂胆とみえた。事務官は，学長の口から，自分の陰の功績が披露されて，うっとりと，目を細めていたが，呼ばれて，ハッと我れに返えった。

「ソウです。……そりゃア，君たち，無理だよ」

学長の尻馬に乗って，お太鼓叩いた。

「予算で，お困りなんですか？　先生」

学生も，シンミリ，同情した様な顔して，学長に反問した。

「そうだ。校舎が建たなくなる」

形勢好転とみて，反々，大袈裟になって来た。

「では，200坪見当の予算で，考え直しましょう。仕方ないだろう？　ナア，オイ」

これは，余り，頭の廻転工合のよろしくない，おまけに，臨時に狩り出された奴の発言であった。（バカッ！　そんなに急いで不利な結論を出す奴があるかツ。発言は，定一郎一人の約束ぢゃないか。お前なんか黙っていろ）と呶鳴りつけてやりたい衝動に駆られた

が，この場合，そうも出来ないので，筆者は，無言で，奴を睨みつけてやった。少しも感じない。

「200坪ぢゃア，たいした金額にはなりませんねエ……」

座談会のつもりでいやがる。重大なことをさも，軽々しくいい出す，冷汗が出る様だ。定一郎や筆者が，苦り切って，睨んでる顔みたら，大抵，察しも付きそうなものなのに，一向に平気，長閑なツラして漫談調を続けている。学長は，奴の発言で，いままでの緊迫した空気から解放されて，頬に明るさを増した顔を綻ばせて，例のバカ者1人を相手に，頻りに，語るのであった。

「いや，君，相当な額になるぞ……鉄筋混凝土だから，坪当り500円と看にゃならん……」

「エエ……そうすると，500円の200倍……2×5の10と……オイ，いくらになる？」

みんな，眼をつぶったり，指で宙に書いたりして暗算をしていたが，答は到頭出なかったらしい。学長の机の上に，指先きで計算していた定一郎に，筆者は囁いた。

「オイ，今日は，この辺で，失礼しよう」

部室に引揚げて来た一同は，早速，検討を開始した。

学長が洩らした予算額は，みんなして，鉛筆をなめなめ，計算すると，200坪で，10万円，22～30坪は，あの口吻なら認めそうだから，結局11万5千円見当が把握できた訳だ。この予算総額で，坪当り，500円の建物を造るとすると，いくら計算し直しても，230坪しか出来ない。八谷元吉と河西源吉の2人が口喧しく議論している。何騒いでいるのかと聞いてみたら掛けたり割ったりして，どうしても出来る出来ないの争であった。

「坪数殖やしたかったら，単価下げるんだ。500円を半分にすりゃ，230坪の倍になるぞォ」

筆者の1と声で，一座は，忽ち明かるくなった。十幾つかの目玉が，俄かに，輝き始めた。定一郎が，慎重な顔付きでいった。

「倍はいいが，半分で出来るかナア？」

結局，予算額を要求坪数で除した単位で，混凝土造りが出来るかどうか，学長のいう500円が最低額であるかが，先づ，第一に着手せにゃならん研究題目だということに絞り上げられた。

それにしても，予算額が摑かめたことは，大成功であった。結果的には，例の回転の鈍い奴の出鱈目から出た怪我の功名ということになる。殊勲に値するのである。奴も暫らく経てから，漸く，気付いて，（オレがいわせたんだ）と，誰れ彼れとなく摑かまえては，得意になって吹聴していた。摑かまえられた相手のあるうちはいいが，無くなると，事務官室辺りに引返えして行って，やり兼ねないのである。

「黙ってろ。これからが大切なんだ。さア，どうするか？」

絞り上げた結論へ，全力を集中化する様に誘導するのが，定一郎の役であった。君塚先輩の親友で，当時，日銀臨時建築部の技師を勤めていた，尾崎久助氏に意見を求めることになった。単価についてである。学生委員は，早速，重圧感が迫る。城廓の様な日銀を訪ねて，同氏に会った。頭髪を真ん中から綺麗に分け，痩躯な英国紳士から受けた初印象は，謹厳端正という語辞の表現そのものであった。寸分の隙も見出せない。後年，彼が，学位を授与され，その祝賀の式場で，筆者は彼に語った。

「僕と高林が，日銀で，先生に初めて会った時受けたと同じ印象が，いま，久し振りで再現しましたよ。危く，2杯目を食うところだった。」

ウエヤー・ハウスならば，立派な鉄筋混凝

土造りでも，坪当り160円で充分だと聞かされた時には，天にも登る想いだった。その場で，学生は技師に，原案の構想を土台に，設計図の作製を依頼した。艇格納庫と観覧席の部分を混凝土造りにし，合宿所その他2階以上は木造建てとすれば，予算額で優に500坪は可能である。いっそのこと，原案を修正して，建て増しするかなどと，鼻息は急に荒っぽくなって来た。

間もなく，署名入りの青写真が，尾崎技師から届けられた。素人と遠った，特性が滲み出ていることは，学生らの眼にも一見して，鮮明に灼き付いた。主階段は，川から見た艇庫正面の右端に，タワーを設け，その内部に収められてある。これが，学生共に，スッカリ気に入った。

意気軒昂，当るべからざる鼻息を，フウフウいわせた悍馬の様な一群が，定一郎を先頭に事務官室に押し掛け，学長に引見を求めた。事務官には見せないことにし，ただの陳情の様に偽装した。

「先生，この間は失礼しました。」

先日の説得で，スッカリ収まったつもりの学長は，大変ご機嫌がよかった。

「ヤア，どうだ？　修正案は，でき上がったかね？」

チョッキのポケットから，金側時計を取り出して，事務官を顧み，

「君，あれは，何時からかね？」

「ハア，3時からです。」

どうやら，われわれには関係のないことらしいが，遽わただしい会談に終るんじゃ，面白くない。

「何か，ご用があるんですか？」

「イヤ，まだ時間は充分ある。今日は，緩っくりしてくれ給え。」

珍しく打寛いだ空気である。定一郎は，小脇に，ご生大切と抱えていた例の小包を取り出し，

「先生，艇庫は，一種のウエヤ・ハウスですから，鉄筋混凝土でも，坪当り，160円で出来るそうですねエ。2階以上は，木造でいいんです。こんな設計ではどうですか？」

学長は，大卓子の上に披げられた尾崎技師署名入りの青写真を，穴の明くほど睨み付けていた眼を挙げて，定一郎を睨み上げた。事務官は，顔色変えて，フーッと，深い嘆め息を吐いた。息詰まる様な時間が続いた。

「君たち，一体，これは何んだ？　こんな設計を，誰れが頼めといった？」

形勢逆転，蒼白な顔を緊張させた学長は，この様に詰問するのであった。

「誰れにも頼まれません。自分たちで，勝手に，尾崎技師に参考資料を出して貰っただけです。先生は，500円かかるから，200坪しか建たんといわれましたが，尾崎技師によると，160円ですから，600坪以上建つ訳ですね。これで行こうぢゃありませんか，学校も賛成して下さい」

定一郎は，いとも朗らかに，淡々として，語るのであった。この間，黙って聴いていた学長は，苦が虫を嚙み潰した様な惨憺たる顔をしていた。

「君たちは，この様な設計を頼んで，一体謝礼は，どの位出せばいいと想ってるんだ？」

学長は，また，別の事をいい出した。が，こんどは，本当に困憊したらしい表情を示していた。顧みて他をいうジェスチュアーなどでは，決してなかったのである。それだけ，彼の言葉にも，迫る力の様なものがあった。

「イヤ，心配は入りません。尾崎技師は君塚先輩の親友ですから，問題ありません。」

客観的には認められなくとも，当事者の確信という奴は，恐ろしいものである。定一郎は堅く信じていたからこそ，この様な言葉も出

たし，また，この通りに振舞った。

「君たちは，その心算でも，学校としては，ムニャムニャ……」

謝礼問題に対する常識に基づいて，学生の短見を補って，どうしてやろうなどという態度を鮮明にしないことは，学長としてはこの際，已を得ない行き方であったろう。学長は，依然，不機嫌な表情が解けないままに，次には，文部省に対する思惑を仄めかした。学長にしてみれば，予算面で言質を与えた許りに，一流の無鉄砲さを発揮し始めた学生の，これからの行動が，心配であったに違いないのである。けれども，学校も，結局は，学生側の希望を容認しない訳には行かなかった。文部省と学生との間に立って，横たわっていた断層を調整する外はないと，学長らが決意した頃には，定一郎は，嘗って，多摩川問題で，内務省へ通ったと同じ戦法で，文部省に日参していた。錦町河岸に架けられている職員専用，外来者は絶対通さんという，怖ろしく封建的な橋を，どう手なづけたのか橋詰の守衛に（ヤア）と挨拶一つで，勝手に通過していた。

文部省の建築課長は，（予算額を超過しないならば，坪数は制限される理由はあるまい）と主張する定一郎らの言葉を，口の中で繰り返えし吟味しながら，法的解釈や事例や常識やらを総動員して咀嚼した揚句何回となく反芻したのち，漸く，意を決したものの様に，机の前に突っ立っている定一郎を見上げて，

「予算額を超過しない限りですよ，それに，その他の法規に触れない限り，坪数を制限すべき理由はあるべきではないと，私は思います」

といったが，そのあとを追う様に，（これは私個人の見解です）という断り文句を附け加えることを忘れなかった。定一郎は，鋭く斬って返えした。

「ヘエ？　……今日は，課長さんは，いないんですか？」

認められないとなると，周章するのは当り前である。

「いますよ。ここにいる私が課長です」

課長は，セキ込んで叫んだ。

「ぢゃ，いまいわれた見解は，課長の口から出たことに間違いないんですから課長の見解に外ならんことになりますよ」

坪数不制限説は，この様にして，無事確認させることに成功した。が，これは，押し手の勝利に帰すべきものでは，絶対になかった。文部省当局の意外にまで抱いていた学生に対する好意が，もたらした効果であったのである。文部省の見解は，即時に，学長，事務官に伝わり，ここに，既成事実の確立となったのであった。

高垣部長は，大歓びである。

「ソウカ，ソウカ。そりゃ，大成功。制限なしなら，もう一度，原案を練り直したらどうか」

などと，手離しである。こちらの方が，少少心配になり出した位であった。

結局，新艇庫は，学生側の原案が，殆んど受け容れられて，472坪5合となって実現した。もとはといえば，予算額を摑めたことと，尾崎設計の賜物に外ならぬ。尾崎久助博士には，竣工式に参列を乞い，部最高の謝意は表したが，学長が心配していた謝礼などは，無論，贈呈しなかった。博士の氏名を彫り込んだ記念メダルと，学長の揮毫になる（復興）の2字を染め抜いた手拭2本を添えて呈上した。無論，学生は経過については，詳細に亘って，その都度報告をしたり，途中，建築上の疑点を正したりして，文部省の技師を遣り込める材料に，遠慮なく使わせて貰ったことに対する深謝の微意であることを附言したのに対し博士は，微笑を以って応え，学生の賜物を快く受けてくれたのであっ

た。

4

総延坪数470余坪の大綱は成った。あとは，細図の検討である。が，これが，また一仕事なのであった。ボート・ハウスの格納庫の部分は，河童共を無視は出来ない。どうしても，その意見を徴せにゃならんのである。こちらは，前哨戦で，かなり，消耗した。次のファイト源が高まるまでは，一休みしたい心境にあったに反して，奴らは，フレッシュである。（サア来い）といった調子で，待ち構えている。（サポーターは，そんなに短くちゃ駄目だ）とか，（アームは，内側に湾曲させろ）とか，（艇を置いたまま修理が出来る様に，ピット造れ）などと，奴ら同志の間でも，盛んに論議がかわされていた。

宇治原兼一が，（柱がこんなに太くちゃア，エイトの出入りに邪魔だ）といい出したのを機会に，平面見取図上にエイトを厚紙型で，夫々，原寸の何分の一と精密に計って作り，コックスを招集して研究を重ねた。

「ソンナ無理するから，お前，ラダー打つけるんだぜ」コックスは，仲々，八釜しいのである。

艇庫の構造は，大体できた。問題は，桟橋である。下げ潮時の傾斜が，その程度に応じて，艇の出入に，どんな影響を与えるであろうか。一枚の大きな面とすると，干潮の極限時には，凄い傾斜になって，艇の出入は固より，人間の歩行も難渋となるであろう。結局，川に平行して，2つに仕切り，堤防寄りの部分を，川心へ向かって，下り勾配に固定させ，他の一部，すなわち川寄りの部分を，台船とジョイントして，連動装置にすることに定めた。但し，台船と桟橋は，学生側の原案は確定したが，これを文部省に提示することは，故らに差控えておいたことは，現述した通りである。

細目の検討は，連日，反覆，実施された。丁度，その頃，定一郎は事務官に呼ばれた。お隣りの東大も，いよいよ新艇庫を建設することになった。これは，本学と違って同学内に常設されている営繕課の手でやるが，リバーサイド・パークの予定地内に建造されることは，本学と同様であるので，両学は提携して，復興院の計画に協力して貰いたいと，同院から申入れがあったから早速，東大の学生委員と連絡しろと，事務官は申し渡したのであった。

復興院の技師連が，頻りに気にしている景観の美も，さることながら，敷地の関係や，いままで通りに，軒を並らべるとなると，協定の必要は，当然，起って来る。レースのつもりで，競い合っていた分には，いつまでたっても，軒は並らべられない。協定の一は，艇庫の最前線だ。川岸の通路は，復興院で制定するだろうが，観覧席はその上をカバーして設けられるだろうから観覧席の川寄りの最前線を協定すればいいことになる。

次は，観覧席の縦深と背高と傾斜度だ。これは，最も大切な点である。出来れば，観覧席だけでも，共通にしたいところである。

復興院は，当初，両大学を説いて，完全な共同艇庫を実現させようという案も考慮していた。が，これは両者の同意を得ることができないで終った。これは，無理はないと思う。学校が違うのだから，レースでは，敵味方だ。負けた方が，胆癒せに，勝った方の合宿の食堂辺り，人気のない個処を狙っては，硝子窓の引戸を外して，エッサ，エッサ台船へ運んで行き，ステップの角へ，破止と許り打っ叩いて，硝子が微塵に飛散する光景を現出するのである。やられた方も，黙っちゃいない。仕返えしに，先方の食堂を襲うのである。敵味方は，当然，行動の途中において，擦れ違うのだがそこでは決して，敵対行動には訴えないのである。相手の硝子を一枚でも多く破摧するのが目的で，人を悪くんでいな

いのだから，この点，甚だ，紳士的であった。

艇番の親爺が周章して，言問の交番へ駆け込んで訴えると，お巡りさんは，落付き払っていうのであった。

「お互様だろう？」

この様な次第で，艇庫が共通じゃ，工合が悪いと，実例を引用して説明してやったら復興院の役人は，妙な顔して，

「成る程ねエー」

と，長く引張って，判った様な，判らん様な表情であった。

東大の学生委員は，岸道三であった。事務局で知った途端に，（奴じゃ，河以外のところにいる筈はない）と想って，急いで正門を出ようとしたら，丁度，入って来る彼と出会わした，

「ヤア，君も，学校に来ることあるのか？」

と聞いたら，学校は学校でも，営繕課に日参してるんだと答えた。課長の教授，内田祥三博士を，これから，訪ねるところだといった。案内されて，ついて行ったところは，正門前の路次を入った1軒の民家の2階で，校外本部の様な1室であった。

「君んところじゃ，相手が，ボートの先輩だし，玄人だから，万事好都合だろう」

と，幾分，社交辞令を用いてやったら，

「逆だねエ。何んでも分ってるんで，やりにくいよ。君の方こそ素人相手で，羨ましいワイ」

と，顎を捻でながら，嘯いた。撫無とした面持ちである。何んとも，精悍なツラ魂である。（この男をして，わが一橋に在らしめば）と想うのであった。

彼との間に，次の様な協定が成立した。

1. 艇庫正面（川に平行）の通廊の幅員を同一にする。
2. 艇庫の最前線と，観覧席の背高，前線，傾斜並に幅員を同一にする。
3. その他，互に観覧上の視界に支障を来たさない限り，外観は自由たること。

間口17・9K，奥行12・25K，215坪という限定された敷地内に収容するウエヤー・ハウスを設計するとなると，格納する用艇の数量，種別その他を勘定した細目的構想は，仲々，纏まり悪いのであった。それも，現有数量，艇種だけならば，簡単だが，考慮の中に，将来を加味する必要があるので，面倒なのである。首席定一郎は頻りに，幹事会の招集を，理事兼一に要求した。

5

学生側が要望していたアイデアは，大体において，文部省も学校当局も容認したが，具体的な設計は，学生側の細目案が決定次第，検討しようということで保留されていた。

この時分には，学生委員は，本学よりも，寧ろ，文部省建築課を，折衝の対象としていた。自然，例の錦町河岸の木橋を渡る回数が殖えていたのである。

建築課の役人たちは，こちらが，純真？な学生であった所為かとも想われるのだが予期していたよりも遙かに高い程度の好意を示してくれた。それに，ボートハウスという特殊な建造物であることに好奇心が誘発されて，それが，大きく作用して，彼ら固有の好意に添加されたと解するのが，正しい観方と想う。愉快に，陽気に，歓んで彼らは，仕事をしてくれたことは，部のために，大変，幸せであった。相手のこの様な心理に対応して，事を運んで行く措置は定一郎が最も得意とする特技であった。

かくて，出来上がった文部省の最終案は学生の希望を殆んど容れた，472.5坪。文句はいえた義理ではなかった。それに，内容も亦，頗る充実したもので，アームなども主要な個処で，将来，変更などの心配のない見透しのものは，鉄筋入りの混凝土で固め壁や主柱から直接ジョイントするが，改造が予想さ

れる部分は，殊更らに，木造にしておく考慮も払われたのであった。

修理作業用のピットも掘ったが，八谷元吉は，初めて，これを見て，（便所か？）と聞いた。好意が示されると，忽ち狎れて，図に乗って来るのは，書生の習性である。注文も段々と，図々しくなる。

「ソンナ，あんた，そりゃ無理ですよ……
…あんたのいうこと聞いてた日にゃ柱も
壁もなくなっちゃいますよ」

柱や壁がなくちゃ，建物は建てられない。学生の要求を通すためには，建坪を殖やす外はないことになる。

「僕には，もう，この仕事はできません。
誰れか，外の技師にやって貰いましょう。」

山本技師が，憤然，色を作して叫んだこともあった。宇治原兼一辺りを連れて行くと，大抵，こんなことになる。この時，定一郎少しも狼狽せず，諄々として，事の成行きを説明した上（でき難いところを1つ，あなたの創意と工夫とを煩わして善処して欲しい）と頼むのか，煽り上げるのか，いい残して去ると，眼鏡をかけ直し，青写真を眺めて思案を続けている技師の面上には，既に，興奮の色は褪せ，頬笑みの影さえ，口辺に漂わせているのであった。

翌日また，例の木橋を渡って，出向いて行く。今日は，定一郎一人である。そして昨日と同じ問題を，同じ様に持ち出して，同じ様に懇請するのである。随分と知恵のない話で，無技巧といえば，これ以上の無技巧はないであろう。が，下手な技巧よりは，この種手法の方が優秀な結果を示すことは，世上，往々にして目睹するところである。反覆して，1つの個処を叩いていると，その一打は，仮令，微弱なものであっても，叩たかれた個処は，何時の間にか，強固な素地となることは，遠漕の途中，利根川の堤防護岸工事で目撃しているところである。文部省の建築課の窓から，遙かに大利根の景観を想見しながら交渉を進めているのだから，洵に雄大だと思う。

まア，いってみれば，根負けの形で，文部省は，学生の要求に，歩一歩，近接したのであった。枠内で左右が計られる事項は無論のこと，枠から少々はみ出しても，枠の外側の線に沿ってる様な問題は，解釈を拡大して考慮してくれた。前述した，桟橋や台船などは外側線どころの騒ぎではなかったが，どうやら片もついた。艇の出入りが出来なくちゃア，文部省も済ましている訳には行かんかったろう。今にして憶えば，よくも学生のいうことを聞いてくれたものと感心させられるのである。定一郎という人間に代表された学生の意思が，文部省の役人という人間の心に触れて，溶け合って初めて成ったものと筆者は解するのである。当時，官僚の通弊と非難されていたような，独善的，一方的，天下り的な態度は，あの場合，文部省の役人によって，その片鱗も示されなかった。彼らは，学生を無視しては，何事も敢てしなかった。必らず相談して，その納得を求めた。随分，激論もした。けれども，妥結を得るまでは，独行を慎んでくれた。彼らは，調整の線を見出すまでの努力を惜みなく払ったのであった。

反面，学生の態度もよかったと思う。柱や壁を無視した設計を迫る様な出鱈目をいって悩ませたことはあった。が，先方の考えが正しいか，こちらのいうことが無理かに気付いた時は，あっさりと申出を取り下げ先方の言に従った。この点洵に屑いものであったと追憶されるのである。

6

新艇庫も，いよいよ，工事に着手することとなった。工程は，6ケ月という話だ。東大も殆んど，同時の着工である。

トコロ天の様に，学校の門から突き出され

それでも，新調の背広を１着に及んで，先輩ヅラした定一郎や筆者らは，暇さえあれば，言問の工事現場に現われて，日１日と進行する夢の殿堂の完成を楽しみにしていた。艇庫に関する事務は当然在学の連中に引継がれ理事関川代二こと鬼瓦がこれを統轄していた。工事が，互に３分通り進んだ頃，東大艇庫に異様なものを，２人は見出した。観覧席の正面右端に，何やら，塔みたいなものが出来るらしい。聞いてみると，それは，露台式貴賓席で，一般席より遙かに高い処に位置するものであることが判った。これは，彼れにのみあって，我れにはないものである。並んでいる雛段の様な両艇庫の観覧席を１つの帯と看れば，その位置するところは，丁度，中心だ。これは，無論，規定に触れるものではなかったが，妙に一橋を刺戟した。意味も理由もない。ただ，何んとなくである。対抗意識，これは，いけないことかも知れない，偏狭の譏りも免がれないかも知れないが，兎に角，何糞ッという気が，体内に充満して来るのを禁じ得なかったのである。

（よしッ，そんならば，こっちでも……）

といった訳で，丁度，いい按配に，一橋側では，川から観た正面の最右端に，階段を内部に収容するタワーが設計されていたのを，更らに工夫を加えて，外観偉容をエンファファイズして，言問川下流から見た時それは，一橋艇庫の玄関であると同時に，東大を含めた大艇庫の大玄関と思わせる様にしようということになった。定一郎は，物の怪につかれた様に（中世紀の城廓を髣髴させる様な外観）と繰り返えし唱えていた。この要求は，不思議なことに，山本技師が２つ返事で承知したところか，彼は，もっと激しい対抗意識を燃やしていることが判った。

艇庫を前にして，この器の中に盛り上げられるべきアイディヤは，数限りなく湧いて来る。が，外観に訴える形象としては，彼らの胸中に常住するファイティング・スピリットを具体化するのが，最も適切であろう。

「タワーは，出来るだけ高くさ……天辺の櫓の塀はデコボコにするといいナア……中世紀の城塞のようにさア……」

こ奴まで，定一郎に伝染した。

「凹凸という奴があるか……ありゃア銃眼——鉄砲の眼——というんだよ」

「中世紀の何時頃から，鉄砲できた？」

「中世紀というのは，西暦何年から何年までか知っとるか？」

「知らん。お前知っとるか？」

「知っとる位なりゃ，聞きゃせんよ」

こんなバカらしい会話が遣り取りされている裡に，兎に角，定一郎が夢に見ていた城廓をとり入れたタワーが出来上がった。表玄関だから，地上45尺のタワー壁に，何かデンと誇示したい。一橋の表象，マーキュリをデッかく出して，それからと，先づ，高垣部長に相談をした。マーキュリーの件は部長も大賛成であった。

「序のことに，先生，ラテン語か何かで（これを見よ）とでも，デッかく，どうですか？」

何んでも，デッかいのが大好きな男である。こんなのに限って，貧乏人の奴に定まっている。

「（ザマア見やがれ）の方がいい。先生，この方がいいですよ」

学生たちの会話を聞きながら，苦笑いを洩らしていた部長は，表示の言葉については何んともいわなかった。結局，学長とも相談したのだそうだが，現に見られる通り，中心のマーキュリーを包んで

「MENS SANA IN CORPORE SANO」

と書かれることになった。相談の時，部長が学生案の（ザマアみやがれ）を取次いだか，どうかは，聞き洩らした。

7

タワー問題が，至極アッサリと片付いたのは同慶の至りであったが，これも文部省が最も嫌悪する設計変更の１つのケースに外ならなかったのである。この変更では，寧ろ積極的な動きを見せた山本技師も，一先づ片付いて，憑いていた狐が落ちたとなると急に肌寒さを感じたのだろう。学生の顔を見さえすれば，繰り返えし，

「もう，これが最後ですよ。設計変更なんか，しないで下さいよ」

と断っていた。

さて，問題のタワーだが，どんな風に出来上るであろうか？　表玄関の威容，艇庫の重点，一橋精神の象形を，この１点に集結するタワーの完成は，楽しみよりも憂いの種となって幻想されるのであった。

筆者は，暇さえあれば，出向いて行って，対岸から眺めたり，和船を漕ぎ出して，中流から観たりして，足場に囲こまれて，着々と固まりつつあるタワーの姿に想いを寄せるのであった。

この様な想いは，艇庫に関係あるものには，誰れの心にも共通した，現下最大の関心事となっていた。定一郎などは，無論，その随一に位するものであった。

山本技師と定一郎，それに筆者の３人は，或る日の正午，連れ立って言問団子の食堂の窓から，竣工近い艇庫を望みながら，大カツ大めしの昼食を共にしていた。定一郎が技師に話しかけている。

「タワーのてっぺんに立って，下界を見下ろしたら，いい気持ちでしょうねエ……足場は，何時頃取れますか？」

（奴，オレと同じ夢見てるナ）と，トンカツの一片を頬張りながら，筆者は思った。会話の最後の条りは，明らかに，サグリである。ただ，奴としては，敵前不用意な発言であったに過ぎないだけのことである。３人仲よく45尺のてっぺんに立って，談笑する快を知らぬ訳ではない。が，抜け駆けのスリルは，何んといっても，この際，最大の魅力なのである。定一郎が，豆粒の様に，地上に立ってるのを見下ろし，合図を送ってから，自分１人だけで，天にも届けよと許り，万才を絶叫したら，どんなに愉快であろう。前人未踏の処女地，これは何人も第一歩を印したい憧憬の聖地でなければならない。

定一郎よ，下にいろ。そして，オレを見上げて羨むがよろしい。

レースには，来年ということがあるが，処女登攀のチャンスは，唯１回だけで，２度とは来ないのである。某年某月某日某時某分，一橋の表徴，タワーのてっぺんに立って，一橋万才を三唱す。この瞬間は，絶対に２度とは，あり得ない。

筆者の胸は，野望で一杯に膨くれあがった。

人間の心は，洵に，微妙なものである。筆者が秘かに胸を膨くらませていた時も時，こともあろうに，彼れ，定一郎も膨くらませていたのである。しかも，秘かにであるから，笑止の至りという外はない。

意識してか，しないでか，足場のことは，技師を相手の会話を最後に，それからのち唯の１回も，彼れの口の端にのぼらなかった。筆者に対しては，その気配の片鱗さえも示さないのである。それでいながら，彼れは，秘かに，技師に，たびたび，工程を打診している証拠歴然たるものがあった。こうなると，わがファイトは，いやが上にも燃えるのである。よーし，野郎！　もっとも，敵も同じ様に，筆者を仮装敵視していたかも知れない。

山本技師は，両雄がタワーを呉越同舟の修羅場と見立てているとも知らず，その何れに対しても，至極大らかに公開しているのであった。が，技師は，工事の総監督の立場にあったので，大局は摑んでいても，細かい処は，現場主任の方が，より正確に抑えている

ことを，筆者は察知した。主任は，また責任上，慎重を期して幾分，控え目の報告をする事も同時に発見した。明日中は確実と想っても，明後日という。

定一郎は，技師専門だ。筆者は，技師から聞いて更らに主任に確かめる。これだけ，頭の出来が違っているのである。

いよいよ，明後日の朝から足場を取り外すという公式情報を得た筆者は，明日の正午過ぎから夕方にかけて，足場の外懸けを外ずし始めるものと判断した。従って，わが登頂決行の時機は，明早朝，工員たちがソロソロ，準備に取り懸る直前と決定した。敵は，明日正午頃と定めてると想う。もっとも，その時機を逸しない要心に朝のうちから工事事務所に詰めかけ，技師と談笑しながら，事前の愉悦に陶酔するくらいの計画は立てかねないのである。

情報を得て，決意を固めた日の夕方，筆者は定一郎を誘って，三州屋の２階で，堂々，祝盃を献酬したのであった。

「明後日，いよいよ，足場外すんだってナア」

定一郎は愕然とした心中を，さらぬ体に紛きらせて呆けていた。

「そうか，オレは聞かなかった」

（偽つけ，山本さんに聞いたこと知ってるぞ），これは筆者の胆の中の独り問答である。

「どうだい，明後日は日曜だから，先輩も来るだろう。佐倉からトラ（目下幹候で佐倉聯隊在隊中の久村伊太郎）も正午頃，河に来るといって来たから，山本さんと一緒に，タワーの頂上に登って，万才といこうじゃないか？　あとで，ビールでも呑もうや」

さり気ない調子で，淡々と誘った。

「よかろう。トラ，塔上に嘯くか，愉快愉快」

と，甚だ，ご機嫌であった。

わが遠計は，着々として成功，こちらも大変愉快になって，彼れと別れた。三州屋の勘定は，筆者が払った様に記憶している。仕事は，その翌朝である。

明朝こそ，と想いついてからというものは，夢寐の間も忘れることができなかった，あの処女登頂が実現するのかと想うと，酔余の頭は却って冴え，殆んど一睡もしない裡に曙を迎えてしまった。

朝めしも摂らずに，筆者は家を飛び出した。割引時間の市電は森閑としていた。筆者は運転手，車掌，それに数少い乗客の一人一人に，その興奮と歓喜を伝えたかったが，電車の足の鈍いのには焦慮した。

墨田川の川面は，朝霧に包まれ，遡江する一銭蒸汽の甲板からは，遠望が利かない。船が進行するにつれて，僅かに狭く限ぎられた視界の中に，四囲の物象は，現らわれてはまた消えて行くのであった。かくて，八百松・水門，竹やと過ぎ，洗場附近に差しかかった頃，流れる霧の層の中に，新艇庫の壮容は，朧げながら，全姿を現らわし始めた。朝暾は，この時，俄かに，光を加え，対岸待乳山の鐘楼の屋根瓦に，鈍い光を投げていた。

現場事務所の硝子戸は，無論，まだ閉め切られ，内側から，白いカーテンが引かれてあった。飯場裏辺りに，１条の炊煙が上りわずかに生活の息つきを伝えているに過ぎなかった。足場の真下に，筆者は立った。仰ぎ見る45尺のタワー！　胸は鳴った。出入を遮断する貫板の間隙を潜って，足場の階段の下に近付いて行った。誰れもいない。空洞の様な寂莫が，わが眼の前に迫っているだけであった。

歓喜とも，悲壮とも，その何れとも表現できない複雑な情緒で，筆者の胸は一杯になった。登頂の第一歩，世紀の歩みは，いま筆者によって印されようとしているのだ。歩一歩，激しく揺れる薄板を踏みしめて，孤影は

漂乎として，上がって行った。

「オーイッ，待てッ……」

朝霧は，この頃，漸く晴れ渡り，堤上に立つ梢の若葉を通して，無数の光線が，壁面を反射し始めた。この様な早暁の爽快な空気をふるわせて，鋭い叫び声が聞こえて来た。定一郎であった。彼も，今日は，1銭蒸汽を奮発したと見え，いまし，言問発着所の桟橋の上を，トドロトドロと踏み鳴らし，上半身を前につんのめらせながら懸命に駆けて来るのであった。宇治川の先陣争いにたとえてみると，距離が少々離れ過ぎている。

昨夜，筆者が提案したときには，何んともいわないで，只管に，賛成していた彼であった。泌度，胆の中では，明日曜の正午頃トラと筆者が，ノンビリ連れ立って，現らわれでもしたら，（昨日の朝，オレ1人で処女塔へあがったよ）とでも，ヤニ下がる光景を独りで描いて，自家陶酔に溺れていたことであろう。笑止千万，真逆に，その裏を掻く，先駆の賢士があろうとは，彼の夢想にも上らなかったに違いない。頭脳の働らきの相違というものは，怖ろしいものである。

足場の真下に馳け寄って来た彼を見下ろして，筆者は，右の手の平を大きく開らき，その親指の先きを，鼻の天の辺に突立てて煽って見せてやった。待てといったって，待ってやる理由も，待たにゃならぬ義理もこの場合，筆者にはないのである。この位の挨拶が丁度，頃合いの応酬なのであった。

（ハアーツ，ハアーツ）という，彼が吐く荒い息つかいの者が，遙か下界から響いて来た。

筆者は，この響きを心耳に感じた途端に，急いで上る自分の足が，不図その場に釘づけになった様な気がした。行動に先行して纏めてしまわなければならない心理上の課題が，定一郎の荒い息づかいに触れて，俄かに提起されたからであろう。

筆者は思った。

——流石は，オアーズマンだけのことはある。戦いの数は，既に明らかであり，われに利あらずという客観条件が横たわっているにも拘わらず，最後まで，戦いを捨てない，烈々たる闘魂を示す定一郎は，天晴れ一橋オアーズマンである。

結論を纏め上げた筆者は，心気頓に爽快，改めて行動の続行を起こし，ユルリユルリと，歩一歩，力強い歩みを一路塔頂へと進めるのであった。

「東京商科大学一橋会端艇部ッ万才ッ……」

筆者は，塔頂方八坪許りの枡混凝土荒塗りの床上に踊り上がって，天にも届けよと許り絶叫した。

「万才ーッ」

筆者の声に合わせて，定一郎は，6合目辺りから，万才を唱え上げて来た。せめて，声だけでも一緒にしようという艇友の心情は，哀れに感じられるのであった。

「どうぞ，お先きに……どうぞ」

先陣は争ったが，上がってしまえば，敵ではない。足場を下りようとして，お互いに謙譲の美徳を発揮している。もっとも，これは，謙譲許りではなかった。他に，理由があったのである。

上がって来る時は，そうとも気付かなかったが，下りるとなると，何んと，桟板の傾斜の急なことであろう。おまけに，幅も随分と狭いには驚いた。少々，心細い感じである。万一，堕落することになると，後ろの方が，利巧である勘定になる。

この時，突然，

「誰れだーッ，上がってるのは？　危いぞォーッ，気をつけて，緩っくり下りて来ーいッ」

山本技師が，地上から奴鳴ってる声である。2人は，ユルリユルリ，足場の縦板を，しっ

かりと摑み，互に，注意し合って仲よく降りて行った。

「なアーんだ。あなた方だったんですか？」待ち受けていた技師は，降りて来る２人を見て笑っていた。

一昨夜，定一郎に諮って賛成を得た通り，上京して来たトラ上等兵と山本技師を真ん中に，定一郎と筆者が参加して撮った，塔上の記念写真があった。定一郎に対する約束は，これで完全に果たした証拠になると思うので，筆者は，彼に対し疚ましいところはないのである。

8

夢幻の裡にも，さ迷っていた大艇庫，一橋人の心の故里，一橋精神の温床であるようにと祈念をこめて成った，われらの艇庫は，かくて，新装された壮容をもって，リバーサイド・パーク，言問の一角に屹乎として，立ったのである。時に維れ，昭和５年５月竣工式は，折から薫風かおる新艇庫楼上において，盛大に挙行された。

姿を現わした佐野学長も，黒川事務官も，宿怨？　を放下して，心から楽しそうであった。高垣部長に至っては，その歓び様は，子供のようであった。艇番のオヤジは，箒と屑とりとを持って，紙屑漁り専門である。

東洋一の大艇庫，目に触れるところ，何処も彼処も，輝く許りである。なんでも，かんでも，よく見えて仕方ないのである。５段のアーム，最上段はスカルが安置されている。

「梯子かけて，上げ下げすりゃア，５段でも，大丈夫だナア」

普段は口八釜敷い先輩も，本日は頗る寛容である。中には，ピットの中に入り込んで珍しそうに，天井を見上げている連中もいた。

明治神宮外苑の野球場のそれをモデルに設計されただけあって，観覧席の座り心地も上乗であった。シートの両端で，立っては腰かけ，腰かけては立ったり，手の平で腰板を捻でたり，独りを楽しむ三次郎，定一郎の姿も嗤う訳にはいかなかった。中央の貴賓室の中には，貴賓でない奴らまで入り込んで，ガヤガヤ見物していた。室の片隅に固着した洗面器を取り着けたが，ここで洗顔を試みている周到な先輩もいた。今朝早く，まだ誰れも来ない頃，東大の郷隆が小便を，洗面器に放射していた。見咎めた学生委員が，難詰気味の阻止をしたら，彼傲然として，反問したそうである。

「ナニ？　きたない？　お前たち，小便の中とツラの上と，どっちが，バイキンの数が多いか知ってるか？」

一橋に医学部のない悲しさは，反発する術がなかったと，口惜しがっていた。

兎に角，この日は，言問は，歓喜と感激との坩堝であった。

学長の発声で，（一橋会万才）――彼は，決して，そのあとに端艇部と付けない。一橋会即ち端艇部であり，端艇部即ち一橋会であるという彼の見解に由るものと想う――を三唱して，式は，滞りなく修了した。来賓や学生たちは，三々五々，式場を去り残るは，跡片付けの人夫たちと，学生委員だけが，右往左往する影だけとなった。

激しい戦いのあとに経験すると同じ様な感傷の一ときである。定一郎と筆者は，観覧席の最前端，ウォールの端に倚って，暮れ行く墨田の川面に眼を落していた。

「オイ，引揚げるか」

「ウン」

２人は，門を出て，改めて，タワーを仰ぎ見た。尖端の櫓の後ろ遙かに，宵の明星がただ１つ，瞬いているのが見られた。

定一郎は，ツと，戻って，タワーの壁面を，手の平で捻でていた。

「艇庫成る。一橋人の心の故里，わがボートハウス。今日，竣工の式を挙げた。スミダの流れと共に栄えよ」

低い呟きの声が，彼の口を衝いて洩れた。筆者は，黙然として，傍に立っていた。過去2年に亘る，彼を中心とした一橋の動きが，緩やかに，しかしながら鮮やかに，筆者の脳裡に廻転し始めたのである。

オーソドックスとフェアバーン

（大正15年～昭和4年）

朝海浩一郎（昭和4年学卒）

私のボート部時代は早，明の抬頭時代で，既成の大家然たりし商大の注目していたのは老舗の帝大よりはむしろ荒削りの早，明であった様に思う。商大は，オーソドックスの見事なフォームを殆んど当時完成して居たが，このオーソドックス型に対し厳しい批判の出たことがある。確かに明治に破れた大正15年の頃と記憶する。明治の荒削りの強引な漕法に圧せられて，オーソドックスよりは自由漕法というか——当時フェアバーン・スタイルといったが——そういう漕法が真剣に考えられたことがある。即ちそれは簡単に言うと各人を一定の型にはめないで，自分の力を出しやすい型で漕がせようとするのである。一寸聞いたところでは甚だ結構な様であり，一時商大のクルーもオーソドックスの型をやめて，夫々の自己流を尊重した傾向を見せたこともあった。ところが私は昭和4年英国へ行き，4年の在英学生生活中，剣牛レースは欠かさず見て来たが，両校のクルーが所謂オーソドックスの典型で8人一体となり，一糸乱れず8人の力を一つに集めて漕いでいる様子を見て，崩れんとしかけた当時の商大の漕法について大に心配したことがあるのを記憶している。

右の話は目下の日本の教育の状況に一寸似て居りはしないだろうか。日本の教育者なり学生なりは，自由なるものを自ら解釈して，英米では行われていない様な野放図な我儘な教育を採りこんでいる様に見える。果してフェアバーンといった漕法が自由漕法であったか又広く英米で採用されたか詳しく知ることができないけれども，個人の力の協和を基礎とするボートで，個々の自由な漕法を許すということ位馬鹿気たことはあるまい。各個人夫々の特質があったとしても1人の人はキャッチだけを強く引く，他の1人はフィニッシュのみ猛烈に強く引くのが得意であるという様なことはアカディミックにのみ通用する議論で，そういう議論に基礎をおいたことは漕法が実際には成り立たぬことは，個人の我儘勝手を基礎として優れた青少年の教育が成り立たないのと同じことであろうと思う。

私は現在の漕艇界の事情に通ぜぬので最近の漕法がどう変っているか知らないけれども，戦後派的の畸型的な自由漕法が考慮されてはならぬことを希望するのである。

（26年5月，部報復刊第2号より）

我れは一橋ボートマンである

（大正15年～昭和5年）

関川信二（昭和8年学卒）

私は中学時代（旧制新潟県立新発田中学校）柔道の選手に選ばれ，大正14年中学5年生の時講道館初段に列せられた。当時中学生で初段は全県下でも数名しか居なかった。

大正15年，東京商大予科に入学したが，1年生では予科専門部を通じて柔道初段は私1人しか居なかったので，入学早々柔道部予科選手として練習に加ったのであった。

他方，端艇部ではクラス毎に新入生全員を集めて次の様な説明会が行われた。

「我が東京商大は明治8年商法講習所として創立されたのであるが，その当時から海外勇飛をスローガンにしている。而して海外勇飛のためには海を征服することである。海を征服するためにはボートを漕ぐことだ。そのために一橋会員は入学した時から全員ボート部員となっているのである」

私はこの説明をきいて成程と思った。それで先輩の勧誘に応じて快くボートのクラスチャンになったのである。翌昭和2年春，S組第1選手に抜擢され，昭和3年予科3年の時には端艇部予科委員長を命ぜられ，更に同年オール一橋対校選手として予科から抜擢され，9月の全国漕艇大会に備えるため，6月から練習に入ったのであった。

私はこの様にボート選手として順調に進んでいたのであるが，柔道の方も怠っていたわけではない。練習も試合も一般選手と同様真面目にやっており，予科2年の時には2段に昇進し，3年生になってからは全予科選手の大将として位置付けされていたのである。

昭和3年予科3年生の時，我がボートのオール一橋対校選手として練習に入った6月頃，柔道部では水戸高校（現水戸大学）の柔道部と互に20名づつの選手を出して対校試合を実施することに決定したのである。私は柔道部の大将だから責任上当然この試合に参加しなければならないのであるが，運悪く丁度その頃ボートの対校選手として練習中であったので，去就を独断で決めるわけにはゆかず，どちらをとるかの判断については両方のコーチの話し合いに一任したのであった。

柔道部のコーチは「試合が間近かに迫っているから，試合の前1週間丈けでよいから，関川が柔道の合宿練習に加わることを許してもらいたい」と願ったのであるが，ボートのコーチは「ボートは完全なる団体競技だから唯一日たりとも練習から外すことは出来ない」と言って拒絶したのである。

そのため柔道部としてはやむを得ず，副将を大将に格上げ，三将を副将に格上げ，以下順次繰り上げ，補欠をレギュラーに入れて試合に臨んだのである。試合は先鋒から順次，勝ったり負けたり互格の勝負で熱戦を続け，ついに副将同志が引き分けとなったのである。そこで大将同志の決戦となったのであるが，残念なる哉，我が方は敗れたのである。

そこで試合の後，反省会が開かれ，敗れた原因について論議されたのであるが，結局

「負けた最大の原因は，頼みにする関川が試合をボイコットしたからである」「それでは関川は頼みにならないではないか」「かくなる上は背水の陣を敷く意味で関川は亡き者と考え除名すべきである」

と決議されたのである。

然しながらこの決議は私に知らされていなかった。それで9月漕艇全国大会が終ってから，私は「柔道の方は数ケ月間も御無沙汰したから，これからはその分とも一生懸命やるぞ」と張り切って柔道々場に行ったのであった。いつもなら私が道場へ顔を出せば，四方八方から「お願いします」「お願いします」と言って来るのに，その日に限って誰も来ないので，私は「変だなあ」と思いながら，此方から「お願いします」と言って行けば，誰も拒まず快く練習の相手になってくれたのであった。やがて練習が終ってから，洗面所で汗を拭きながら，隣に居た同級生の友人に「どうも変だな，道場の空気がすっかり変ったな」と言ったら，その友人は言いにくそうに「実はな，君は除名されているんだよ。このことは俺からお前に伝えるべきだったのだ

がどうも言いにくくてなあ……」と言うことであった。

私は柔道部では責任重大な大将でありながら，ボートの練習のために大切な柔道の試合をボイコットしてしまった。そのために水戸高校に敗れた。そして私は柔道部員に怨まれている。だからと言って私はボートをやめるわけにはゆかない。この上は柔道の練習を今迄より一層熱心にやってこの汚名を除かねばならない，と決意したのであった。

それ以来私はボートと柔道は両立させなければならないとの考えからどちらも一生懸命やったのであるが，それが結局体力以上の負担となって，健康に破綻を来す結果となったのであった。

昭和5年本科2年の時のことであった。私は推されて端艇部理事となった。——当時端艇部本科委員長は，予科専門部両委員長の上に在って端艇部全般を統轄する立場にあったので，本科委員長は委員長と言わず理事と称していた——丁度その頃，翌昭和6年には本科が国立へ移転することになっていたので，端艇部にとっては環境不備な地に移転した後の練習を考えた時，事前に講じておくべき手段方法が沢山あった。

例えば学校の近くの川と言えば多摩川だ。多摩川で練習が出来るか否か？　調査してみなければならないだろう。自然のままでは出来ないにしても浚渫したらどうか？　附近にプールを掘ったらどうか，何をやるにしても先き立つものは金だ。それなら将来に備えて基金づくりをやろう——と私は考えた。そのために音楽会開催を計画し，会場は青山会館とし，当時一流コンビとして有名な尺八の吉田晴風先生と琴の宮城道雄先生にお願いして実施した処，大入満員で，収入は総支出の2倍近くに達し，収支残金は全部基金としたのであった。「国立(クニタチ)に水を，ボートを」という熱意の現れが，昭和4年，中川，久村，高林氏等に依る向嶋から羽田沖を経て多摩川谷保天神附近迄のペア艇，回航遠漕の壮挙となり同地にバラック艇庫を設ける所迄発展したが，結局使い物にならず挫折するのであるが，当時のボート部の張詰めた意気込が看取されよう。

又大正12年の東京大震災によって言問の艇庫は焼失しその後はバラックの艇庫であったのであるが，学校当局の厚意により新艇庫が完成し，昭和5年この竣工式が盛大に行われた。

この様に昭和5年は端艇部にとっては多事多端な年であった。私はボートと柔道，更に肉体と精神との両面から来る重荷の為か，ついに体調を崩し，「過労による乾性肋膜炎」と診断され，東大附属病院に4ケ月間入院治療となり，退院後も半年以上自宅療養となったのである。そのため学校も1年間休学となり，漸く通学出来るようになったのは昭和6年9月であった。そのため学校も予定からすれば昭和7年卒業の筈だったのが，1年遅れて昭和8年となった次第である。

以上の様に私はボートと柔道と二股かけた為に大変苦労もし犠牲も大きかったが，今でも後悔していない。何故ならば，苦労も犠牲も大きかったが，それが基礎となって，より大きな効果を挙げることが出来たからである。その効果の最大のものは，終戦後シベリヤに於ける強制労働に堪えたことである。

私は昭和20年9月から23年12月迄，3年半シベリヤに抑留されて強制労働に服したのであるが，あの酷寒零下40度のシベリヤの山林に於て伐採に従事し，食糧不足で栄養失調に苦しみながら，非人道的な処遇にも堪えて，生きて還ったのは学生時代に鍛えた精神と肉体の強さの賜であると信じているのである。

私が日本へ帰還した時の年齢は40歳であった。捕虜収容所定員1,000人の中で私が最高

年齢者であり私と同年齢の者が10名居たが，その中で最後迄残って無事に帰ったのは私の外に唯1人居たがそれはマラソンの選手であった。スポーツで鍛えた者の強さがここで実証されたのである。

私は嘗ての一橋大学のスローガン「海外勇飛」の志に燃えて戦時中渡満し，満洲重工業会社に勤務したのであるが，そのためソ連軍が満洲に侵入して来た時現地召集となり，終戦後シベリヤに抑留されて強制労働に服したのであるが，日本に帰還後は「敗戦後の日本国の復興は先づ郷土から」との考えから新潟県庁に勤務した。而して「健全なる精神は健全なる身体に宿る」との信念に基き，県庁本務の傍らボートと柔道の普及に努力して来た。

具体的には昭和39年新潟国体を機として新潟県漕艇協会を創設して初代理事長となり，現在は会長として後輩を指導しているのである。「我れは一橋ボートマンなり」との信念は今も昔と変りないのである。

又柔道についても色々と世話した関係で，その功績が認められ昭和40年講道館長から5段に列するとの証書を贈られた次第である。

以上

専門部エイトの回顧

（昭和5年）

——世界制覇への道を探るために——

大森　吉次郎（昭和6年門卒）

過日如水会館で商東レース祝勝会の行われたとき，河西源吉氏が私の肩を叩いて，往年の専門部エイトの事績をこのさいもう一度掘り起して検討しようじゃないか，そこから日本のボートが世界制覇できる道を発見することができると思う，協力せよといわれた。

もう今から42年も昔のこと，伝説か神話みたいに，たまに一橋人の口の端にのぼるだけだが，これをほんの去年のことのように思い浮べることのできる輩がまだ生きている間に，できるだけその記憶を集約しておくこともそれ自身有意義なことであろうし，更にこれを専門家諸賢の研究の材料に供し得るならば，体躯の劣る日本人が欧米の巨人クルーを打負かす近代漕法が生れて来る可能性もたしかに考えられると思うのである。

私はその昭和5年の当時，専門部端艇部委員長，今でいう代表幹事みたいなことをしただけで，自らその艇にのったのではないから，総括的な外面のみから論ずることになるが，現にその艇を漕いだ上松宗理君，笠原文雄君らは在京四神会員として健在であるから，両君の記憶や意見も大いに引出して傾聴すべきだと思うし，また私らの時代より7，8年あとに専門部をコーチして再びでっかいことをやった工藤哲雄君をはじめ，何年かに亘って専門部ボートの黄金時代を築き上げた諸君にも登場して貰えば一層充実さを増すものと信ずる。まずは私自身の記憶を綴り，若干の卑見も開陳して見ようとするのであるが，本稿が叩き台となって日本人を勝たせることのできる新たな理論発見のための議論が起るようになれば倖せこれにすぎるものはない。

河西氏が専門部の事績と世界制覇の夢とを結びつけるのは故なしとしない。

まず，昭和5年，墨堤に彗星の如く現れて圧倒的最強クルーとなったその専門部クルーの概況を見よう。

1.　専門部の全生徒数は700名に足りなかっ

た。（エイトを出す学校としては恐らく日本一小さなハタケ）

2. 専門部独自のエイトを組んだのはその年がはじめであった。（伝統がない）

3. まず全一橋クルーに精鋭漕者をピックアップさせ，供出した残りの中から編成した。

4. 各人の漕歴は，最長2年余。（専門部は3年で卒業だから）最短は新入生で春のクラスチャンで固定席艇を1回だけというのがいる。

5. 漕手体重平均61キロ。インタカレッジ中第1のきわ立った軽量クルー。

6. レース前合宿期間は全一橋の6週間に対し4週間。

7. 栄養摂取面，合宿での賄いの品数は常に全一橋より1皿少い。

8. 用艇は，全一橋が理想設計の新艇に対し，こちらは秋のHCSのチャンが取った残りの中からあてがわれた。軽すぎて安定悪い点を皆に嫌われて，埃をかぶっていた，唐辛子みたいに全身をまっかに塗ったアカ艇というやつ。

いくら40年の昔といっても，向島に堂々鉄筋3階の新艇庫が完成した当時であり，インタカレッジも参加者十数校。フェアバンの新漕法などが紹介されて，名コーチ名選手輩出，各校ともに必死の研鑽を積んでおり，まぐれということは許される余地はない。漕艇界は既に黄金時代を謳歌していたころのことである。右にざっとあげた8項目のどれ1つをとって見ても，負けたときのエキスキューズとして充分に通用しないものがあろうか。

まだある。クルーの姿とは直接関係ないが財源の問題だ。寄附勧請は対象を専門部先輩のみに限り，それ以外の古い水源を荒してはならぬというのが一橋端艇部の厳命で，公然これに抗することはできなかった。専門部卒業者は大正12年から数えてやっと7年，先輩とはいっても皆さん失礼ながらまだ社会ではずっと青い下積の人だけで，どんなに頑張ってみても集め得る金額は知れたものだ。結局全一橋クルーの5分の1の費用でやりとげるにしてもその予算すら普通の手段ではどうにも調達の見込はなく，後述するような自助，他助の奇策も登場することになる。

さてその専門部クルーは，インタカレッジのロンドン盃戦に出場し，東大法学部に8艇身という大差で圧勝優勝した。（公式記録は差16本となっている。艇身差を目測ではかることが不可能なほどの大差だった）

ロンドン盃というのはその前年，昭和4年に新しく創設された，いうなれば十両のための土俵である。それまでは秩父宮杯のみを争っていたが，技術レベルの低い学校は永久に手も触れられまいからという親心（？）で漕艇協会は新たにその十両の土俵を作り，参加費も大割引して勧誘にこれ努めたのである。

しかし毎年，番付は低くも幕内土俵に上っていた従来の参加校がこの屈辱的な十両に自ら格下げを申出るものはない。折角のロンドン盃も見込外れて宙に浮きそうになったので，肝入り役の東大が苦肉の策を立て，自らの校内レースの優勝クルーを参加せしめると名乗り出た。他校には準備がなかったので，第1年度は結局東大医学部が独漕でカップをせしめることになったのである。

翌昭和5年，専門部はこれにチャレンジしようということになり，前年の秋から準備にかかり，ひたすらに東大の優勝学部を仮想敵として，十両クラス最強のクルー作りの策をねったのであった。

そして美事優勝したとはいうものの，十両の土俵でわずか2艇間の勝負にすぎず，何をもって墨堤第1などと自他共に称することになったのかというと，レース前に実際どこと並べても常に問題にせぬ程強かったからである。

その実力は，全一橋とフルコース競って常に4艇身の差をつけていた。その年の幕内優勝者東大は一橋に2艇身勝っているから，専門部が相手に出たなら優に2艇身お釣をやっている勘定だ。川では早大，明治など当時の強豪の練習中に，後から行って悠々と抜いてしまうのですっかり嫌われて，専門部のアカ艇が来たと見ると彼らはオールを休めてやりすごすのが例となった。

十両の最強を志したクルーが結果において幕内優勝より強くなってしまっていた——その原因にスポットをあてようというのである。

実は，そんなに強くなる，あるいは強くなっているということは，練習中のある時期までコーチ自身も，クルー諸君自身をも含めて何びとも予想しなかったできごとであった。はじめに掲げたような不利な条件の揃った中で，どうしてそんな不逞な予想が立てられようか。常識破りという言葉で片付けるには余りにもその成果は異常，奇怪というべきでなかったろうか。

「コーチ自身すらも」というのはこういうことである。

コーチは中山克己氏（故人）で愛称クマさんと呼ばして貰う。クマさんは専門部出身，偉大な体躯の割に声が小さく，口数も極めて少く，クマさんというにふさわしい，クリッとした澄んだ目にいつも微笑をたたえている温厚な人であった。Hの先輩としてそれまでに校内レースでは3度コーチし3度とも勝っているという実績に見込をつけて，わが専門部クルーのコーチをお願いに行ったのは，春の大会も終り，クラスチャンで背の高い男と目をつけた新入生の笠原君などまでもムリヤリつれて来てようやくエイトの頭数だけは揃ったあとであった。

クマさんは私らから差し出された各人の漕歴その他を見て開口一番何といわれたかというと，「これでエイトが走るのかな。相手はいくら弱いといっても東大の学部対抗で勝ち抜いて来る奴だろう。そいつに勝たしてくれといってもこのメンバーでは請合えない。まあ折角専門部が初陣するというのだから大いに肌をぬいでやるが，せめて晴の舞台でフネをひっくり返して赤のオールに恥をかかせることのないように。ぼくに期待して貰うのはそこまでだよ」と念を押してようやく引受けてくれたのであった。これは私自身がお願いに行って，やるせない思いを抱いて帰ったものだからよく覚えている。

こうして川に出て来られたのであるが，金がないから全一橋のようにモーターボートで追っかけて貰うわけに行かぬ。ご苦労にもご自身スカルを操ってついて来るだけである。

そこでクマさんの指導方針は，ただフネをひっくり返さないようにしようという基礎目標に重点がおかれ，たとえばフィニッシュをできる丈け長くというような若干の漕法上の指導はあったというが，絶対に力を入れるな，ラクに漕いでどこまでもフネになれるようロング，ロングパドリングを毎日くり返せということに最重点がおかれ，あるいはレースの日までそれで終始するのではなかろうか，どうやらこの分では，はじめのお言葉は冗談ではなかったのかと思い直される程徹底したもののようであった。

ともかくクルーはその指導方針に忠実に毎日ロングロングとやっている間に，実際には恐るべき艇足が具わっていることにクマさんも誰もそれがある偶然のことで実証される瞬間まで気付いてなかった——この一見滑稽に思われる経過にこそ今日技術面の重要研究課題が潜んでいるのではなかろうか。

2週間も早く合宿をはじめた全一橋クルーは，既にスパートの練習段階にあった。そして一方では毎日ロングパドルで明け暮れてる

専門部。それをつかまえてある日，練習台になってくれと申入れが来た。1艇身前において，スパート10本で抜いてみようというのである。これは誰の目にも過大な計算と映ったわけではなかった。

クマさんは，今までのところ力を入れない練習をさせているのだからそれをやらされるとぶちこわしだと頑強に断ったのであるが，遂にただ1回だけという固い約束で渋々承知した。クルーには，抜かれてもよいのだから絶対力を入れるでないぞと命じて。

ところがいざやってみると，専門部とて力を入れないわけに行かない。ナニクソということに当然なる。そして全一橋は10本で抜くどころか，逆に水をあけられてしまったのである。この思いもかけぬ結果には双方ともにびっくりしてしまった。誰よりクマさん自身が一番驚いたのではなかろうか。

翌日もう一ぺんという要求をうけたときにはクマさんもすっかり変っていた。今度はちゃんと並べてからやろう。そして今日も10本で勝負あった，専門部の勝。さあこうなったら何度でも来いということになって，いつしか2,000米のフルコースでやるようになり，それもやるたびに差がひろがって遂に4艇身が縮まらないという関係になってしまったのである。

僅か数週間の間に突如みんなの目に明らかとなって来た意外な事実。その原因を一体どう説明すればよいのだろう。両クルーをコーチしたオーソドックスの神様もフェアバンの神様も遂に科学的にこれを説明されることなく既にお2人とも此の世にない。掘り起して見たいというのは実にここにあるのではないか。世にある漕艇のセオリーから1度すっかり解放された姿で，ボートという，8人の神経が1本に統一されてはじめて走る独特のこの競技の中に未だかくされてあるものを，この事績から発見して貰いたいというのである。

私は，はじめに専門部クルーの背景にあった不利なハンディを8つ程並べて見た。しかし反面有利な点は何一つなかったろうか。

色々考えてみると2つほど浮んで来る。しかしその2つを以って特効薬的な利益と断ずる自信はないことを断っておく。

その1つ。専門部エイトには「伝統」という神符から来る重圧がなかった。

第2。右の神符の代りにホワイトライスと呼ぶ，奇妙キテレツな行を，はじめは野次馬気分から，中頃からは必死の気持でまる1年やり抜いた。

第1の伝統ということ，これは些かパラドックスにすぎるかも知れぬ。もちろん伝統ゼロといえば嘘になる。校門をくぐったときから赤のオールにあこがれた者は少いにしても1度ボートの飯をくい，雲の如き優秀な先輩に接して一橋のボートの何たるかを感銘したものでなければこのエイトに乗るはずはなかった。

ここにいう伝統の神符とは，極めて狭義のものであるが，「勝った先輩の名を汚すな」とか「今年こそは勝たねば相済まぬ」とかいう，過去との連帯を意識しての気負いを指す。何しろはじめてエイトを編成したのだし，専門部が出るときいて川にかけつけ激励してくれる先輩とて何人もいない。私たちはただ，私たちの時代に，自分らの力で1つでかいことをやってやろう（でかいといっても当初の目標は十両優勝にすぎないが）専門部の名でインタカレッジに出るだけでも愉快じゃないかということだけで気もはずみ，浮きうきしていたというのが当時の全一橋クルーに見られなかった点で，あえてこれを利点の1つに数えてみるのである。

アマスポーツにおいてこの点は案外重要なことではなかろうか。何物かに対する畏れや責任でやってる面があるならば，8人のうち1人や2人は時に逃げ出したいと希い，他の

1人2人は俺はこんなに頑張っているのにあの野郎がさぼるからという憤懣を抱くだろう。そういう状態で8人の神経が統一的に働くとすればむしろ不思議ではないか。

ボートはユニフォーミテイの競技ということは古くて永遠に新しい真理と思う。だとすれば，手脚の筋力を鍛え，デッドヒートの根性をたたき込むことも無論必要だが，それよりも先にまず，8人の気持をピタと1つにすることの方が重要で，この点に失敗したら他のいかなる努力も役に立たないと思う。

私は伝統の神符は否定したが，「吾人屁理窟を知らず，幸にして元気あり」という一橋ボートの伝統精神の方を完全に具現したのもまた専門部クルーだと信じている。オーソドックスだフェアバンだとセオリーをいじる資格もないほど経験に乏しい8人に対し，コーチもかれこれ理窟はいわなかった。即ちいやでも「屁理窟を知らず」である。元気という点では前述したように，ただいっちょやろうぜの内面から発し，前方の栄光のみをひたすら追求した純粋真物の元気であって，頭を張られて歯をくいしばって出そうとしたムリな元気では幸にしてなかった。

この意味で私は四神会は伝統の神符になってはならぬと思うのである。金は出しても口を出すなということは実際上むつかしいかも知れぬが，漕ぐやつを勝たせたければそこのところ大いに工夫すべき余地があるのではなかろうか。

次に第2にあげたホワイトライスという奇談をつけ加えたいと思う。これは後年伝えられて一種の竹槍精神として笑うものもあれば，これこそ真の勝因だと讃美する人もいるが，渦中にあった私としてはいずれの側の極論にも与したくない。

あれは吾々自身の青春の発露の1つのなり行きであり，自分らの発案で人に迷惑をかけずに楽しんでやっただけのことであるから，それを伝統として後人につがせようなどとは更に考えてもいなかった。後輩にも面白いと思うならやれ，先輩の遺した道だからというだけの理由ならよした方がよいといっていたのである。

しかし勝因となる背景を探って，あまりにも思い当るところが少いから，あえてその1つに数え，同時に，一橋の一時代に出現して消えた珍なる話を綴っておくも一興と考えて書いてみる。

それはレースの前年，私らが2年生の秋，国立で行なわれた陸上運動会のあと，野外の生ビールで気焔の上ったときのことである。期せずしてボート部の連中を中心に集ったグループの中で，来年は1つロンドン盃に挑むつもりだという考えを披露したところ，翌年学生会の元締，総務理事になった石井由太郎君が，これぞ専門部を天下に示す快挙だと真先に賛意を表し，一段と気勢が上った。余りの反響に私自身少々心細くなって，でもエイトとなると先立つものが大変だ，寄附の畑も限定されるので苦慮しているというと，石井君は，ナーニ資金なら俺達みんなで作ろうぜ。こうするんだ。食堂でみんな毎日15銭のカレーライスを食ってるだろう。ホワイトライスなら5銭だ。カレーを食ったつもりでホワイトにし，差額の10銭を積立てるんだ。毎日100人もやれば1日10円ずつたまるじゃないか。それだ。よしきまったと——ビールの勢でその日は意気軒昂と解散。

翌日ボートの幹部連に石井君も加わって私の下宿に参集。アルコール抜きでエイトへの秘策を本気でねり，改めてはっきりと決心を固めた。ホワイトライスはもちろんやろう，シンパが何人集るか，これはあてにはならぬ，100人なんてとんでもない話だが，10人でも5人でもよいではないか。目下のところそれより外に名案もなく，またやってれば案外人を動かすことになるかもという程度の計

算でスタートすることにした。もちろん金ができなければ練習を短縮すればよい，誰からも文句はいわれまいという安心感もあるから悲愴さなどというものはみじんもなかったのである。

こうしていわゆるホワイトライスはレースの前年の秋から始まった。昼食時の学校の食堂には珍妙な光景が展開された。1卓を占領した10人程が皆ホワイトライスの1皿ずつ。それにソースをぶっかけ，チョビッとそえられた福神漬だけが唯一のおかずだ。

食堂のおやじは学生共が何かの腹いせにたくらんでるのかといやな顔をした。食い終ると皆が10銭ずつテーブルにおく。会計幹事がこれを集めて郵便局へ預けに行く。毎日やってるうちに，臨時シンパが仲間入りしたり，こりてやめて行ったりする。また中には自宅から来る弁当持ちの男が自分のおかずを開いて振舞ってくれる。ちゃんとしたカレーなどを食ってなお10銭おいて行く奇篤の士も現れる。そのうち食堂のアンチャンが吾々の志を聞き知って，おやぢに内緒で飯のそばに何かの煮物をもりつけてくれたりする。

今日は2円も集ったぞと喜ぶ日もあれば50銭だという日もあるが，部の内外の好意とひやかしの眼差しの交錯する中でとにかく毎日頑張って，塵も積もり行く貯金通帳が壮図の前途を祝福するようであった。

春が来て向島の大会。まだ専門部エイトは姿も影もない頃であったが，その日たまたま私は船台の上で専門部には関係のない君塚茂太郎先輩（モタさん）に今までの話をし，旧高商の先輩に頼めないのでやってることだが，ホワイトライスだけでは充分な練習費がむつかしいと訴えたところ，モタさん大層感激且つ憤慨されて，高商の有力先輩20名を選んで俺が奉賀帳を書いてやる，遠慮せずに廻って来いとあって早速艇庫に上り紙筆を用意して即刻書いて下さったものである。

寄附集めの苦労は時代を問わず大変なもので，今更それを述べても面白くはないが，ただ昭和5年という年は有史以来といわれる世界的大不況のどん底だったので，流石有力先輩と見込をつけられた方々からも予定の3分の1も集めることができず，折角のモタさんのご好意も大した効果を上げ得ず残念であった。ただ苦労の中にユーモラスな想出は，当時山中銀行頭取の山中勇氏と，内田汽船の内田信也氏とが互にライバル意識旺盛という情報をつかんで，ご両氏を天秤にかけ，うまく立廻って双方から予想以上の金額を頂戴するに成功したことであった。何やら戦後の南北関係にも見られたような話だが。

まあそれやこれやで夢中にかき集めてる最中にレースも大勝。しかしホワイトライスは依然続行せられ，就職運動のかたわら寄附集めも続行，私らが卒業の日までにすべての借金はきれいに完済することができたのであった。

冒頭に合宿中の選手の賄いのことについてちょっとふれたが，もちろん練習中の選手にホワイトライスの仲間入りはさせられない。合宿中は最高の栄養をとらせることは当然の願いであったが，折角新装成った大艇庫で合宿を始めてみると，同じ食堂で卓を並べる全一橋クルーの食事に比べて，こちらはずっと見劣りするのである。予算の足りない悲哀をこの時程痛く感じたことはない。そこで少々の部屋賃を払ってもと思い切って土手下の民家に移ってしまった。

バックメンは選手に済まぬと思い，選手はバックの苦労を知って文句をいわず，逆に敵愾心の下に固い団結が醸成されたことは疑いの余地がない。

ホワイトライスの話というのは大体以上のようなものであるが，これは十両を志して横綱以上になったあの喜びを更に倍加するアクセンチュエーションとしていつまでも私たち

の心の中に残る１つの事績ではあるが，そしてクルーの精神的団結を培った養分の重要な要素であったことも間違いのないところであるが，これをクルーのスピードの原因と直結して説明することはあまり意義がないと思うのである。もしそうだとするなら，優勝したいクルーはとことん貧乏させて，ホワイトライスを食わせればよいというロジックになるであろう。

本論としたいことは，従来の漕法の常識やセオリーから一度完全に脱却した姿で，それらでは説明のつかない専門部クルーの客観的事実を煮つめ，専門部神話に得てつきものであった精神論一辺倒でもなく，科学的に研究し直すべきではないかということである。

私ははじめにも述べたように３年生のときはもうバックマンで終始したもので，漕法に口を出す資格を有しないものであるが，あの奇蹟の一部始終を見ていたあのとき以来，40数年の間，乏しい頭の中に去来して来た疑問のいくつかを並べて本稿を閉じ，あとは優れた漕法専門家諸兄の研究に委ねることにしたい。

1. ボートの進行を横から見ていると，進と停との連鎖であるが，この停の部分こそ案外の曲者ではなかろうか。停は何によって起るか，物理的には一応説明がつくけれど，それを減少する方法に向っての研究はきわめつくされているのだろうか。進のときの力がいくら強くても，次に来る停の力も強いときは自動車でもわかるように消耗が大きくなるばかりで全コースのスピードでは失うところが大きいであろう。停と進との節が際立って見えるほど力強くスピードが出てるように見えるものだが，その節の弱い一見ダラダラと進んでる方が却ってスピードをもっているのとちがうか。（クマさんがラクなロングパドルの繰り返しのみを強調していた目的は前述の通り別のところにあったらしいが，外見では気の付かぬ間に実は停力減殺の面で予期せぬ効果が生れていたのではあるまいか）
2. ピッチを上げたら果して艇は速くなるのだろうか。ピッチの数だけ停の数もふえるのだ。殊にスタートダッシュで50以上にも上げることにどれだけ効果があるだろう。スパートの練習に油の乗った全一橋が10本勝負であっけなく専門部に負けた。そこのところにどうしてもひっかかる。専門部は無茶苦茶にピッチを上げたことはしまいまでなかったと思う。

   また，よしんばスタートで敵に若干リードをつけたとしても，失ったスタミナを計算して引合うのだろうか。レースは2,000米なのだ。陸上の中長距離レースではスタートは余り問題でなく，途中で抜いた者の勝つ場合が多いが，ボートばかりは抜き返し勝の例が少いのはどうしたわけだろう。はじめに抑えられたら即ち不利という曲線コースでの通念が今でも生きていて，どのクルーも先制をねらってのはじめの無理なせり合いで消耗してしまうのではないか。
3. ユニフォーミティが最高の要素だとは誰でもいう。（手足の寸法も異り，各人の出力も同じではあり得ないから，本当はユニフォーミティでなく，むしろ，コンフォーミティと呼ぶべきだろうが）団体競技も数ある中にボートくらいこれが要求されるものはない。各人の間の目に見えぬ乱れがその瞬間に働いてる他人のプラス作用を妨害する。私は屢々思うのに，もゃっとしたらボートという競技は，この点の療法がまだ解決されていないために，世界中のボート界がまだ理想よりはるか遠いところをさまよっているのではないか。即ちクルーの各員が１本１本，お互に邪魔を与えながら漕

いでるのが現状で，たまたまその邪魔の総和が少なくなったときほど本来のスピードに近づいて来る。較量弱力クルーが強大な奴に勝つチャンスはこのときに生れるのではなかろうか。そしてこのチャンスは世界の舞台においてもなお残っているのではあるまいか。

だとしたら次にそこへもって行く指導の方法が問題となる。体躯や筋力のちがう８人が集って漕ぐのを外から見ながら指導する場合に，各人の間に何百分の１秒という短時間に起る不調和を１つ１つ発見することが果して可能であろうか。

ゴルフのクラブを振廻す。その動作を考えてもわかるが，セオリーについては万巻の書を読んだはずなのに，そして各部の筋肉はすべて１個の脳の指令で働かされるはずなのに，各筋肉は決して注文通り順序よく動いてくれない。所詮最後は大脳の指令から離れて，大小の各筋肉に自分の役割と出番をリズムによって覚えさせる以外にないものとされている。

それと同じくボートにおける真のコンフォーミティも，各筋肉にあたる８人がそれぞれの感触によって，そのクルーに特有たるべきリズムと，そのリズムの構成における己れの役割とを体得するかどうかにかかっているのではなかろうか。

その境地に到達するためには，練習は苦しいもの，逃げ出したいものと感じさせるものであってはならず，各人が身体で覚えたリズムに乗って踊るのをいつまでも楽しんでいたいと希うように仕向けることではなかろうか。

以上，無責任な野人の放言であるが，そして取りようによってはブラブラ遊ぶ程強くなるともきこえる危険もあるが，長い間頭の中にあったことを最後のチャンスと思い吐き出したものである。１つでもヒントとなる点があれば他の点では袋叩きにされても望外の倖せである。

なお，42年前の赫々たる事績を記した本稿を閉じるに当り，今はなき名コーチ中山克己氏，あのクルーの中で後年可惜太平洋戦争の戦場に散った主将７番芝田年夫，整調山本次郎，舳手向井正己，マネージャー野口新一の諸君の霊に心からなる合掌を捧げ擱筆。

（昭和47年６月）

ロスアンゼルスオリンピックのチャレンジレースの記録

（昭和７年～11年）

坂　口　　侃（昭和11年学卒）

○チャレンジレースの夜は更けて

昭和７年夏のロサンゼルス・オリンピック大会に日本よりエイト・フォアのクルーが派遣されたが，一ツ橋が候補を争ったのはエイトであった。選考方法は前年の全日本優勝者早稲田を第１候補とし，別に選出されたチャレンジクルーが早稲田との間に３回レースを行ない，その結果に基づき漕艇協会が代表を決めると云うものであった。

３月のチャレンジャー選出レガッタに於いて一ツ橋は優勝し，５月の対早稲田チャレンジレースに臨んだ。第１回は５月１日(日)，尾久コースで行なわれたが，力漕及ばず２艇身の差で敗れた。第２回は５月７日(土)，無念にも１艇身及ばなかった。５月15日の第３回戦に余程の大差で勝たない限り，代表権を得ることは困難な情勢となった。結果は，舳手の間宮選手の発病に因り第３回戦を棄権し，早稲田の代表が確定したのだが，私の懐い出は第２回戦５月７日（土）の夜である。

配属将校の北尾竜音大佐は端艇部の振興の為に常日頃，陰に陽に動いて下さったが，此の日も尾久へ応援に来られた。レース終了後，我が一ツ橋陣営の深刻な雰囲気を感ぜられてか，応援団を慰労しようと云い出され，タクシー2台に分乗した。1軒目の飲み屋を出て，次はキャバレーへ行こうと云って，またタクシーを拾ったが，私は北尾大佐と同車した。運転手といつもの通り雑談していたが，その運転手は翌日の日曜日は仕事を休んで多摩墓地へ叔父の墓参りに行くと云うことが分かった。5月8日が叔父の3回忌の命日であり，非常に世話になったと話していたので，北尾大佐はその運転手の謝恩の心情を褒め激励もされた。更にその叔父さんに就いて質問して行くうちに，生前の職業・氏名を明かした。商大教授福田徳三博士であった。同乗者一同奇縁に驚き翌日の代参を頼んだが，大佐は金5円也のチップを渡された。

私は此の時予科3年，同行者の顔振れは，金子精之助氏(本2・故人)，荒井格二氏（本2）の他は覚えていない。斉田英夫氏（本3・故人）も居られたかも知れない。

私は此の日以来，5月8日の出来事をよく覚えるようになった。

昭5—福田徳三教授逝去
昭16—上田貞次郎教授逝去
昭17—大洋丸撃沈（三菱系社員の大量遭難，コックス水谷実氏も此の時殉職）
昭20—伊太利バドリオ政権の降伏
昭33—日中貿易の中断（長崎，国旗事件に起因）
昭40—明和産業本店の移転（私の会社）

いずれも5月8日である。

○国際レースに出漕

昭和16年12月8日，開戦当時私は上海の三菱商事に居た。日本海軍は即日，共同租界・フランス租界に進駐し，目ぼしい建物・機関は接収されたが，ローイングクラブも接収された。

虹口(ホンキュウ)側からガーデンブリッジを渡って共同租界のバンドに入るとすぐ右側に英国大使館があり，正門前にはスカート姿のスコットランド衛兵が立って居り，その華麗な交替風景は上海名物の一つであった。その大使館のすぐ裏手，蘇州河に面して英国のローイングクラブがあった。日本海軍からの委嘱でクラブ運営委員会が作られ，会員作りに当たり三菱商事へは5名の割当てがあったが，若輩の私には到底廻って来ない。そこで委員長の青木氏（華中水電）が群馬県人会の会長であったのを幸い，三菱商事へ口添え願い，私は会員になることが出来た。

ローイングクラブは落着いた2階建てで，地下1階。ゴルフ場のクラブハウスにアスレチッククラブを併せたようなもので，各種ボートの格納，船台の張出し，バーあり，食堂あり，プールあり，スクォッシュもあった。スクォッシュと云うスポーツは，私はここで初めて見たのだが，一つの壁に向かって2人で球を打合う，テニスの変形小型で，開戦迄フランス租界にあったギャンブルスポーツ『ハイアライ』を小規模にしたものである。

この上海ローイングクラブに出入りするようになってから日独親善レースの議が起こり，シェルエイト・シェルフォアの練習が始まった。ローイングクラブの会員には慶応の若いOBが沢山居たが，彼等はなかなか器用で社交的で，テニス・ラグビー・ボート，何でもこなして居た。従って慶応のOBだけでもレースは出来るのだが，早稲田から2，3名，一橋から2名参加した。三井物産の根尾芳郎氏（昭10）と私である。ドイツ側もエイト・フォアの練習を始めた。

レースは昭和17年の9月だったと思う。コースは黄浦江のバンドに沿って1,000m。当

時黄浦江の真中に，伊太利の客船コンテヴェルデ号が船尾を水面に出して仰向けに沈んでいた。開戦直後に爆破されたものである。この沈船のお蔭で，一般の船の往来をとめてレースを行なうことは，海軍の支援があったとは云え，なかなかの大事業であった。

レースの数日前になってドイツ側の都合により，レースはフォアのみとなり，日本のエイトは独漕することとなった。フォアの２番根尾氏，バウは私。他は上野氏，高田氏(慶)，柴田氏(早)。親善レースの結果は，１艇身の差で日本クルーの勝ち。レース後の懇親パーティーでクラブ委員長の青木氏が日本語で挨拶した後『日独英の３か国語を駆使して最後の御挨拶を申し上げ度い』と前置きして，次の通り述べた。

ドイッチェ　クルー　バンザイ

○卒業前後の四神会行事

昭和９年に年間募金目標10,000円を達成出来たので先ず岡本造船所への買掛金を全部支払い，次年度以降の行事を計画するだけの心の余裕が出来た。一緒に働いて呉れた中心人物は，田寿郎，近藤勝重，伊藤茂三郎の諸君である。私の卒業前後の行事の内，印象に残っているものを２，３記す。

(1)出漕者名簿の発刊　明治以来の校内レース，対校レースをクラスチャン以外は全部記録し，各レース毎の出漕者氏名をシート順と共に全員載せようと云うのだから確かに大事業である。金子・荒井の両氏が既に膨大な原稿を集めて居られたが，脱落箇所が相当に多いのと，発刊するだけの資金が無いのでその儘になっていたのを私が引継ぎ，どうにか発刊したものである。先輩の記憶を引出しては穴埋めをしていったが，此の記憶と云うのが余り当てにならない。相当間違いがあると思う。印刷に使った紙型は，大量なものだが，その儘神田錦町の旭印刷に預け，昭和14年の暮私は上海に渡った。

(2)宝山卒塔婆の建替え　昭和12年の暮が宝山遭難の30周忌に当たるので，新しい卒塔婆を２本建てて来た。対校選手がフィックスで遠漕し，私は陸路で，柳川邸で落合い，読経の後現場へ漕出して建立したと記憶している。

(3)高垣先生に胸像を贈呈　昭和11年，高垣先生は端艇部長を辞任されたので，端艇部四神会合同にて謝恩の胸像を贈呈した。当時銀座の資生堂で立体写真に依る銅像作りを開発し，精巧な出来栄えを宣伝していたので，之を採り上げたのだが，先生が固辞してなかなか受けて頂けなかったのと，完成像が非常によく出来たので，未だに印象に残っている。高さは30センチ位か。

銚子遠漕

(昭和６年～７年)

笠原文雄 (昭和８年門卒)

東都の大学のボート部に籍をおいた者なら大抵経験のあるのが銚子遠漕である。堀江青年の太平洋１人ぼっちに較べてはスケールは小さいが，ボートメンにとって忘れ得ぬ憶い出である。使用するボートはおおむねフィックスかクリンカーフォア，勿論こんな小さな艇で海に出ることは危険だから，隅田川から荒川，江戸川，利根川と日頃鍛えた腕だけを唯一の動力源として銚子まで往復百里を漕破する。

この銚子遠漕を目的によって大別すると，１はレガッタに備えての練習の一環として，

漕法の訓練，スタミナの養成，クルーの精神的結合の強化をねらって行うものであり，他の一つは主としてボート部員の親睦をねらった行楽的なもので乞食遠漕とも称する。前者はコーチやコックスにどなられながら1本1本を丁寧に漕いで行くが，乞食遠漕の方は時に外交手腕を発揮して，川を上下する貨物船の尻にロープを結びつけてエネルギーの節約をはかる狡いのもある。

6月の末ともなると，大学の食堂あたりに各部の夏のスケジュールが貼り出される。この銚子遠漕プランも，「刀水百里を漕破……」「吾人屁理屈を知らず，幸にして元気あり……」とか勇ましい名文句と共に貼り出される。

かくて有志は夏休みを待ちかねて，向島の艇庫に集まる。

昭和5，6年頃の隅田川は今ほどではないがかなり悪臭が鼻をついた。それでも上げ潮にのって時にはダボハゼが艇庫のあたりを泳いでいたこともある。この向島を先輩たちの「ガンバレよ」の声に送られて出漕する。

“舟は出て行く蔵前を　ホイホイ
　呼ぶは波間の　都鳥　ホイホイ”

良い気なものだ。向島から白髭橋，鐘淵と遡航，綾瀬の水門を通って荒川放水路に出る。荒川放水路は隅田川の悪臭と変って水も美しく，両岸見渡す限りの緑，遠漕気分も湧いてくる。

放水路を漕ぎ下って行徳の運河に入る。運河は狭い上に舟の交通が多く長いオールが意のままにならない。そろそろ手に豆ができる。

“艇庫出る時や　元気で出たが　ナンジャエー”“船はゴチャゴチャで運河は苦手　ナンジャエー”これは一ツ橋大学に伝わる遠漕歌。

運河を抜けると江戸川，この辺にくると陽は頭上，腹はペコペコ，運河口あたりの食堂で腹ごしらえ。

“うどん詰めこみ江戸川上るナンジャエー”

汽車の窓から見下す江戸川は大して急流とも見えないが，重いフィックス艇を6本のオールで漕ぎ登るとなると，なかなか流れは早く艇速はにぶい。

少し話はそれるが，先日一ツ橋ボート部O・Bの某氏に会った時，江戸川を2回横断して泳いだという武勇伝であなたの名前を知っていると言われ，そういえばそんなこともあった，と大笑いした。

同じ対校選手のH君と練習休みに江戸川畔に遊んだ時のこと，たまたま雨上りで濁水が満々と流れていた。何となく泳ぎ渡って見たい征服感にとらわれて飛込んでしまった。近頃の若い人が「山がそこにあるからだ」という名句を残して犠牲者が後を絶たないが，私とH君にしても「水がそこにあったから」という心境。私には今の若い人を責める資格はないようだ。

さて市川を過ぎて，日が西に沈む頃漸く第1日の停泊地，松戸の鉄橋が見えて来る。相当にへバッて物をいうのも嫌になる。

翌日は再び江戸川の遡航，手のマメは所嫌わずとできてくる。

“風の松戸は辛くて出たが　ナンジャエー”

国府台から流山にかかる頃は流れはますます早く，気を許せば逆に流されるような感じ，真夏の陽に照りつけられて汗が滝のようだ。

“国府台ではじつ汗流すナンジャエー”

昼過ぎる頃，漸く利根運河の河口が見える。

“涙流すな流山　かすみの奥に運河口”

ボートメンらしからぬセンチな唄だ。運河に入れば流れはほとんどない。運河を出れば利根川である。坂東太郎の名にふさわしい悠然たる流れは，今までの苦労をいっぺんに忘れさせてくれる。あとは銚子まで流れに乗って漕ぎ下るばかり。一気に取手を過ぎ，第2

日の停泊地布佐につく。乞食遠漕の時はここに泊らず徹夜で漕ぎ続けることがある。真夏の炎暑を避けて涼しい夜に漕ぎ通そうというのだが，実のところは宿泊料の節約で，将に乞食の名にふさわしい。

早朝布佐を出て昼に近く神崎につく。ここの神崎神社は女神が祀られている。ボート部新入部員は洗礼を受けることになっている。洗礼の式というのは女神に男性シンボルをお目にかけるのである。女神のお気に召すと，それからの船路は平穏ということになっている。誠に話の判る女神である。この神社の境内に水戸黄門命名のナンジャモンジャという名木がある。一ツ橋ボート遠漕歌の末尾のナンジャエーという囃言葉は，これから出たのだろう。

“ナンジャモンジャ過ぎれば霞ガ浦で
ナンジャエー”

霞ガ浦を左にして香取，小見川，笹川とすぎて宝山沖に出る。この辺は霞ガ浦からの流れと横利根，本利根が合流して川幅3.4キロに達する。川の真菰の中に3本の卒塔婆(そとうば)が寂しく立っている。一ツ橋の先輩が暴風雨に遭難した時のものである。この先輩の遺霊に対し力漕100本を捧げるのが慣例である。茫洋たる利根の川面にコックスの「奉納力漕――」という声が沈痛に長く響いて，神経の鈍いボートメンも川風に熱涙を拭う。100本の力漕を終ってしばし黙祷。この3本の卒塔婆には一ツ橋校史に有名な辛酉事件にまつわる哀話があるが割愛する。

註（現在は立派な記念碑が建立されている）

“行けよ宝山　松風悲しナンジャエー”

いよいよ目指す銚子が夕靄の中に浮ぶ。マメの痛みも忘れてオールに力が入る。

“銚子銚子と皆行きたがる　ナンジャエー”
“燈台めがけて　行く先や大新ナンジャエー”“それもそのはず　大新ござる　ナンジャエー”

大新は当時各大学が定宿とした旅館で，ボート選手は日頃，禁酒禁煙を守っていたがこの一夜だけは禁酒令が解かれた。秋のインターカレッジまでの長い合宿生活を大新の一夜で飲み溜めしておこうというわけで，かくて，

“大新よいとこ　銘酊どころナンジャエー
今宵一夜は　実飲みあかすナンジャエー”

ということになる。

いささか恥しい話だが，当時墨堤を夕刻散歩する各大学のボート部員は好んで無断借用の大新の浴衣を勲章のように誇らしげに着たものだ。新入部員には銚子百里漕破の記念バッジにも見え羨しかった。大学生のこのような稚気を，諒めてくれていたよき時代であった。現在はどうだろうか。

翌日は犬吠燈台などに遊び静養，帰路は往路を逆に利根川を漕ぎ上る。かくて1週間の遠漕を終え，暮色迫る向島艇庫に帰りついた時は百里を漕破し，ボートメンとして一廻り大きくなった満足感に浸ったものである。

（千葉県漕艇協会理事・工学博士，昭和5年ロンドン杯，昭和6年，7年対校選手）

わが青春とボート

（昭和6年～12年）

前田　正（昭和12年学卒）

予科1年から本科3年までの，当時6年制度の大学生活は，子供から完全な大人になるまでの，肉体的にも，精神的にも，激しい変化を当人に齎らす期間であることは言うまでもない事であるが，予科に入学するまで，中学校で，柔剣道ぐらいしかやっていない，謂わば，筋骨がろくに定まっていない少年だった私が，強靱な肉体と，攻撃精神，堅忍不抜な魂，自主的な生活態度を身につけることができたのは，すべて向島のボート部生活によるものだったと言える。

ボートを知ったのは大学に入ってからではない。浪人していた頃，家が日暮里にあり，程近い尾久に，大学対抗レガッタ（多分，尾久レースであったろう）を観戦しに行ったことがある。その時の印象は中々強烈で，レースを終えて上陸して来た大学ボート選手の鍛え抜いた見事な体格と，エイト競技の素晴らしさに，強く惹かれたものである。と言って自分も鍛えれば，あの様な身体を持てるとまで考えてはいなかったと思う。府立5中（現小石川高校）にいた頃，課外に柔道を週3回程やっていたので，大学予科に入った時，柔道部に入部の申し込みをし，同時にボートのクラスチャンも漕いだ。所が，ボート部の部員の引きずり込み方は，一通りの生優しいものでなく，一旦興味を示した途端，簡単に足抜きが出来る様なものではなかった。しかし，1年の夏，夏季小会HCSレースの合宿練習に始めて参加した時だけは，心身共に，ホトホト疲れ果て，いやになってしまった。夏だから，午前5時起床，午後9時就寝で，午前に3時間，午後に3時間漕がされる。昼間は寝ていられるが，身体が出来ていないから，その程度の休息で疲労が恢復する筈がない。目方はドンドン減るし，疲労は蓄積する。しかも炎暑の下で，固定席ボートの様な重い艇を漕げば，苦しいだけで，全く楽しくない。大体，合宿所内の空気が明るくなかった。1年上級に佐久間（故人）と言う人がおって，之がフイックスクルーの主将，午後の出艇時間が来て，コックスの号令がかかり，少しでも起き上るのが遅いと，寝ている頭を蹴り飛ばして，「野郎，デレデレしやがると承知しネエぞ」等と脅かす。これで，よくも我慢してレースまで漕ぎ通せたものだと，懐古することがある。而も，結果は惨敗だった。も一人けむたい上級生がいた。広松（故柵山三好氏）である。綽名がヒョロで，上背の割に体重が60キロ位しかなく，秋からは対校選手に挙げられる予定の彼は，此時H組のエイトを漕いでいたが，此の2人は，1年生を虫ケラか奴隷の様に扱うので，疲労が累積している事と相待って，つくづくボート漕ぎにいや気がさした。反面，俺達が上級になったら，下級生にはもっと優しくしてやり，楽しい雰囲気のボート部にすべきだ，等と1年生同志語り合った記憶もあるから，やめる気もなかったのである。ボートをやめずに漕ぎ続けていたも一つの理由は，向島の合宿所が，芸者置屋や待合が軒を連ねる花柳街のド真中に位置し，周囲が華いだ雰囲気に包まれていた事である。夜，合宿所の2階から隅田川の下流を望むと，吾妻橋の方角に，松屋デパートのビルを挟んで浅草の歓楽街の灯がキラキラと輝いているのが見えたし，浴衣の客を乗せた屋形船

が提灯を沢山飾って川面を上下するなど，情緒豊かな環境は，下町育ちの私にはピッタリ来るので，それまで，度々練習に通った石神井校舎の柔道部で雑巾踊りを続ける気持ちなど，完全に雲散霧消してしまった様だ。艇庫を出て，隅田川の土手を越えた向側に堤湯と言う，商大，東大選手御愛用の公衆浴場があった。午後の練習終了後，此の浴場に通うのが，何と言っても素晴らしいリクリエイションだった。上級生になると図々しくなるから，私をはじめ，番台に眼鏡をあづかって貰うと言う口実で，上体を乗り出して女湯の脱衣場を覗くのが習慣になってしまった。向島の街で，時たま見かける芸者衆が，裸になって入浴の仕度をする姿は，何とも絶景であり，あまり夢中になって見物していて，番台のお内儀(かみ)に「いい加減にしないと営業妨害ですよ」と叱られる事再三であった。しかも，此の堤湯に赴く途中に芸者置屋が数軒あり，これから待合の客席に出ようと，鏡台に向い，肌ぬぎで化粧に余念のない芸者の姿が，開け放った窓から覗ける。先方は毎度の事で，大して気にもしないから，私達はいつも立止って見物し，1日の練習の疲れも吹き飛ぶ思いであった。さて，1年生の夏の2ケ月近い炎暑の下でのハードなトレーニングは，知らず知らずの間に，私の生理的な適応性を著しく改善していた事が，その次の練習の始まった頃から判って来た。涼しくなったせいもあるだろうが，秋になってからの漕艇訓練は，苦しさが半分以下になってしまったのである。

翌春の春季校内大会では，始め第2エイトの整調を漕いでいたが，第1選手の整調の奥田さん（当時本科2年，戦死）が病気で下船，第1エイトの2番に上げられた。しかし，体力的な面では，もう悲鳴を上げる様なことはなかった。

これ等のことをトレーニング方法の面から考察すれば，真夏の炎暑の下で，長期且つハードなトレーニングを行うことは，新人にとっては，極めて苛酷なものであって，もしこれに耐え抜いた場合は，次の練習開始までの一定期間の休みによる超過恢復(Super Compensation)によって，訓練の負荷に対する肉体上の適応性が著しく向上することが判る。これは，近代トレーニング理論と全く一致する所である。

ボートの練習は何時の間にか楽しいものになっていた。レースが終って合宿が解散となり，学校に通っていると，もう次の合宿開始が待ち遠しい気持に変って来た。馴れたと言うより，ボート練習に対する肉体適応性が備わって来たからであろう。

当時，対校選手の平均体格は，173cm・65kg位のものだったろう。私は170.5cm・60kgで，中々対校選手になれる見込みがない。予科3年の夏はスパイ団に編入されてしまった。1年上級の坂口さん（通称オバサンと言って極めて優しい性格の人だったから，上述の佐久間や広松の様に赤鬼みたいな奴に比べると月とスッポンの差であった。此のオバサン）を長とするスパイ団では，1年下の近藤勝重君たちと共に，尾久の「おもだか屋」と言う小料理屋の2階を昼間だけ借りて根拠地とし，他の大学エイトの，レースコースを漕ぐタイムを記録する任務に服した。此の料理屋は，実は売春屋だった様だ。顔は浅黒いのに，衿元だけ真白に白粉を塗り込んだ若い（?）女性が時々出入している。但し，そこは童貞の浅馬しさで，しかも夜訪れたことがないから，まさか淫売宿とは気がつかない。3週間近くも居りながら気がつかなかったのだから，当時，商大ボート部員が，いかに人格高潔，品行方正であったかを証拠立てる涙ぐましいエピソードと言える。

同級の兼本や，伊藤は既に対校選手として活躍しているのに，スパイ団員では，何とも

イカさない話であったが，人間と言うものは結構，環境順応性に富むもので，炎熱の下で辛いボート漕ぎをせずに済むスパイ団の暮しは，それなりに又面白く，一夏を過すことが出来た。此の夏のレガッタで対校エイトは惨敗した。そしてその晩，大事件が起った。イヤ，私が起したと言ってよい。惨敗に打ちひしがれ，涙を落しながら全員がビールを飲んでいる中で，私は泣きながら「スケアフィニシュしか教えられない様なコーチでは，対校は永久に勝てないよ」と大声でわめいたのである。

ローイングの何たるかを解りかけていた時であり，対校選手を指導するコーチが，ローイングを充分知らないで教えている事に，日頃から不満をかこっていたのが爆発したのであった。所が，此の乱暴な発言に対して，誰も私を叱る人もなく，当のコーチは其後，再び艇庫に姿を現わす事がなかった。そして私のニックネームは「トラブルメーカー」と言うことになった。先頃逝去されたキリンの高達先輩には全く何とも申訳のない暴言を吐いたものと今では悔まれる。ただ，それを機に，ボート部には下剋上の傾向が芽を吹いた様に思われる。中でも代表的なのは例のイヤな奴，広松（その頃は，むしろ頼母しい兄貴分に見えて来ており，私達は彼の器量に惚れてすらいた）が腰の筋肉を痛めて対校から下り，トレーナーになった。モーターボートに乗れば，必ず先輩のコーチからメガフォンを取り上げてわめき散らす様になったのである。我々部員は又部員同志，先輩のコーチに頼り切っていては，８年も負け続け，沈滞し切った一橋ボートを甦生させる事が出来ない。勝負は俺達の手でつけなければと思い込む様になって来た。

昭和11年がオリンピックの年である。前年春のチャレンヂレースで，東大エイトは連戦連勝，既にベルリン行きの切符を手中に収めていた。昭和10年の夏のインタカレヂは私が整調となってエイト（２軍）を編成し広松がコーチであった。よく走って早大と同着になったが，再レースの結果敗れ，フォアの切符まで早大に奪われてしまった。この頃から，対校選手分離制度をやめようと言う声が起り，翌11年の春季校内大会では，対校選手要員も皆，各組に分れて戦った。H組エイトは圧倒的に強く，４月29日の早慶レガッタに備えて練習していた早稲田や慶応の対校エイトと並べれば，僅か30本で水が開くと言うスピードを持っていた。此の大会は第１エイトは圧勝した。夏までに漕手８名中，７名がH組と言うメンバーで対校エイトが編成された。編成直後から他の大学エイトはゴミ扱いで寄せつけず，８月末の関東インタカレヂレガッタの２週間前に例年通り行われた尾久レガッタ（所謂前哨戦）では，大倉，慶大，早大と夫々1,000m レースを行ったが，圧倒的なスピード差で，何れも２艇身以上の差。正に鎧袖一触であった。

関東インタカレヂは９月始めに行われ，準決勝では，予想に反して伏兵一高に前半リードを奪われ，苦戦した他は，矢張圧勝であった。２週間後に大津市瀬田川で，関西インタカレヂの覇者三高と，全日本の覇を争ったが，スタートから50を超えるピッチで飛び出し，結局５艇身の差で勝ち，関西在住の一橋ＯＢを喜ばせたものである。戦争末期の昭和19年，私は，ニューギニアの戦場から，マニラの陸軍病院に還送され，ここで大変恢復したので，すんでの事で退院させられ，現地部隊に編入されそうになり，私としては，先が見えており，いづれマニラも戦場となる事が判っているだけに，何とかネバって退院を免がれ，内地還送にしてもらう手はないかと，日夜心を砕いていた。所が，何と，或る偶然の機会に，昭和11年の商大三高の全日本決勝戦で三高の応援団長をつとめた人が，私の主

治医である事が判った。地獄で仏とは此の事だ。私は彼の計いで，苦もなく内地還送の身となり，無事宇品の港に帰る事ができた。若し，そうでなかったら，翌年は，米軍の上陸で，マニラ市の郊外に白骨を曝す身となったろう。ボートを漕いだお蔭で，この様な命拾いをする事になろうとは。もっとも，人名を記憶することの苦手な私は，京大出身の此の恩人の軍医少尉の姓名を今，思い出せない。彼は京大のラグビー部出身と言っていた。

軍隊と言えば，当時は初年兵で入隊すると，極めて辛い日常や，古参兵にいぢめられる地獄の様に私も教え込まれていた。私は大学卒業の翌年1月10日に，岐阜の歩兵連隊に入隊させられた。所が予想に反して肉体的には極めて楽なのである。歩兵銃などを扱うのは割箸位にしか感じなかったし，行軍などは問題にする程のハードワークではないので，兵隊が日射病で倒れたり，落伍したりするのを見て，弱い奴等が多いものだなあと，歎いた位だった。鬼の古参兵たちは，字の書けない奴が多いので，女郎屋に出す恋文を片端から代筆してやって重宝がられ，夜，ベッドにもぐり込んだら，中に大福餅の包みが入れてあったりして，随分世間の話とは違うものだと感じた。戦場は極限の場である。人間の肉体の極限が此所で試される。ニューギニア戦線で米豪軍と戦った時は，連隊最古参の中尉だった。砲もなく，弾薬食糧の乏しい中で，半歳にわたる苦しい戦いを強いられ，戦友はバタバタ戦病死する中，私は下痢一つしなかった。レース度胸が身についているので，従っている部下達は頼りにしてくれていた。その部下を率いて，例の一橋得意のスタートダッシュの要領（敵が気がついた頃には1艇身抜いている要領）で，豪洲兵の陣地を急襲し，小さいながらも戦果を挙げたのは，ボートの果敢な攻撃精神が身にしみついていたお蔭だったと思う。此の東部ニューギニアの戦場では，日本軍はやられ放しの惨めな状態だったから，私の部隊が獲得した小さな戦果が珍らしかったと見え，直ちに歩兵団長（三箇連隊の長）から賞詞をもらった。

いささか軍隊話が長くなったが，ボートのハードトレーニングには，右に述べた様な副産物もある，と言いたかっただけである。

ボート訓練には，他のスポーツと異種な苛酷さがあると共に，堅忍持久の精神肉体を鍛え上げてくれる事は確かだ。それだけにボートの練習は辛いし，又，その辛さに耐え抜いた場合の成果は，全く，手応えのあるものだと思う。「見て面白くない，やっても面白くないスポーツ」と，ボート出身者たちは自嘲的に言う。これは世界的傾向らしい。本場のヨーロッパですら，今，もっと楽で，見栄えのするスポーツに若者を吸引され，ボート人口が増えないと言う歎きが聞かれる。まして国際的なレベルから見て，競技力が格段に引離されている日本漕艇の悩みは深刻だ。

とは言うものの，我々，年をとった者にとって，ボートの滋味，醍醐味は，年を経れば経る程深まって来る。思い出されるのは，レース数日前から襲い来る，ゾクゾクする様な緊張感，恐怖感とでも言おうか。そして，スタートに並んだ時，決闘者が白刃を引き抜いて向い合ったのに似た，神経が今にもハチ切れそうになる緊迫感と戦慄。これがボートを漕ぐ若者の精神を鍛えるのである。（完）

我がボート生活の生成発展に関する若干の考察

（昭和６年～12年）

伊藤治雄（昭和12年学卒）

ボートに明暮れた６年の間には，いろんな事があったが，昭和９年整調としてのインターカレッヂフォア，昭和11年主将としての全日本エイト制覇，昭和７年，春季大会に全敗してH組皆で一晩泣き明かした揚句，８年に見事，全勝優勝した事等の幸福な思い出もあれば，一橋学園を或時期ゆるがした白票事件で，恩師高垣部長を在学中に失った悲運，10年のベルリンオリンピック派遣クルー決定レガッタで，エイト，フォア共に敗北を喫するとか，にがい思い出も多い。其他にも我が人格形成に深い影響を及ぼした事柄は沢山あるが，冒頭に述べた二，三に就て，紙数の許す限り語って見たい。

11年の対校クルーは８人の漕手中，H組が７人を占めると言う形で編成されたが，仲々好いクルーであったと思う。漕歴も十分であったし，余りコーチを頼りにせず，自分達でいろいろ考えてやった。当時ある意味で先輩の学生に対する風当りは強かった。それは理由の如何を問わず，昭和２年の優勝以来，８年間も負け続けて来た事に対する不満，それに火をそそいだ形になったのが10年のオリンピックフォアクルー決定レガッタに臨むにあたり，そのコーチを再度買って出た，遠山氏を断り，我々の兄貴格であった広松氏（後，柵山と改姓）の強い個性と情熱にひかされて彼をコーチに再任せしめた事である。当時の先輩団の中には小松さん等を筆頭に，今の選手には一橋スピリットが欠けて居る。逞しさに欠けて居る。一橋対校クルーは昭和６年以来続いて居た春季大会前からの分離編成を止め，原点に立ち返り，各組対校選手は夫々の組に復帰し，春のＨＣＳレースに先づ全力を尽す。根性を叩き直す為には，レース距離を3,000mに伸ばし，体力的に一層の鍛錬をすべしと言う強硬な主張があった。いろいろの見方があろうが，吾人屁理屈を知らずである。我々は之等の非難を甘受して立った。11年の春季第１選手レースは，夫々の組の出身の対校選手を乗せて，言問一鐘ケ淵間の3,000mレースで行われ，Hは６艇身余の差をつけて快勝，広松共々稍溜飲を下げた。僕はHの舳手を漕いだ。然し秋の対校レガッタに勝たねば意地が立たぬ。我々は心中期する所があった。H組中心の対校クルーを編成したが昭和７年以来対校クルーの練習方法がライトパドルとコンスタントスピードに偏重の気味があった点を反省しスタートダッシュ，力漕，ラスト50を絶対に自信のある武器とすべく，初期から之に重点を指向した。体力作りの為に初めの１ケ月はフィックス２隻で，常に競漕を行いつつやる練習に徹した。エイト練習に入ってからも，専門部対校クルーをスクラッチとして度々レースを行い，又レースコースは午前午後必ず１回宛は引き，距離も2,100—2,200mを漕ぐ様にした。又スライドに半吋の傾斜をつけてフィニッシュを深くする等の工夫もした。之等は今振り返って見ても仲々有効な練習方法で，何時の世でも適用出来ると自負できる。インターカレッヂの前哨戦である尾久レース10日前に広松が上京して来て，メガホンを取った頃はスタート30本では軽く１泡を抜いた。尾久レースでは早，慶，大倉と手合せしたが，何れもスタート30本で１艇身の差をつけ問題にしなかった。一高も３勝無敗だったので，新聞では「商大一高強く，早慶振わず」と書かれた。３週間後，愈々秋９月の対校レガッタ，場所は尾久のストレートコース第１回戦慶応，第２回戦早稲田

何れも２艇身余の差で一蹴，準決勝で一高と対戦した。往年の一高高商戦以来の因縁レース。我々もスタートには自信があったが，前日見て居ると一高のスタートダッシュが実に良く出る。愈々決戦，最初の３本は確かに我々の方が出たが，見る見る内に抜かれて１艇身余の差となる。スタート地点から200mの三菱艇庫楼上で観戦の諸先輩は皆色を失ったそうだ。然しそれ以後は逆襲に転じ，少しづつ艇差を詰め，1,300m辺りのインカーブを利して遂に並び，結局４分の３艇身の差で勝つ。いつも冷静な我が相棒前田整調も慌てたと見えて全コースを平素より２本半高い40以上のレートでカバーしてしまった。我々は夢中だったが舵手の話では何度かの力漕が皆僅かづつながら効いたとの事だった。貸モーターボートでレースを観戦された三浦学長が「商大，商大」と連呼応援されたと言う。

小生が主将で優勝した昭和11年の関東インターカレッヂでは決勝戦は明治と当った。大正末期，明治とは交互に優勝を競って居たので，当時の先輩は可成警戒して居られたが，我々にはどうという事はなかった。唯1,000—1,500mの間で明治は好く出て，此間でレースの決着を着けて居たのでそこ丈を警戒し，そこで差をつめられて相手を元気づかせぬ様，レートは上げぬが意識的に強く漕ぎ，尚出て来る様なら力漕で応戦するという作戦で臨んだ。結果は作戦通りで1,000m迄１艇身リードし1,500mからラストスパートに入り１艇身４分の１で勝ち，９年振りインターカレッヂでの優勝成る。台船も沈まんばかりに集まり迎えてくれた先輩学生の拍手歓呼，正に一生の晴れ舞台であった。向島迄漕いで帰り艇を格納した時，白票事件で不本意な退官をされた高垣先生が小生の手を握り「何故僕が在任中優勝して呉れなかった」と号泣され，共に涙に咽んだが，今もまざまざと想起される感激である。

斯くて関東代表となった商大は，関西代表の三高クルーと，秩父宮盃をかけて全日本の覇を決すべく西下した。隅田川とは打って変った瀬田川の景観，唐橋の袂の網定旅館での合宿，余り上等の部屋ではなかったが関西風の鰻の蒲焼きや山椒の粉を入れたスキ焼等が美味かったのと，女中が大変愛想が好くて楽しい合宿だった。大阪商大の艇を借りたがレースコースを引いて居る時に舵手の木村大三が釣舟にまともからぶっつけ，舳が１尺以上メリ込むという椿事があった。誰も怪我しなかったのは奇蹟と言えよう。デルタの職人が夜通しで修理して呉れたのには感激した。対三高戦は６艇身差で楽勝だったが，此時のスタートダッシュは小生の歴史の中でも実に快心のもので一気に相手を突離した。九州の若松から観戦に来られた畑さんが唐橋の上で遠山さんと何の位抜いて来るかと賭をしたが遠山さんの慎重論に対し，畑さんは「３艇身」と強気を言った所，其通りになったと言うのが自慢話の一つである。川を埋めた三高の応援船の赤い幟と，彼等が余り快くない弥次を盛んに飛ばしたのを記憶している。此時は名前は忘れたが宮様がモーターボートで観戦され，我々はお揃いの白い帽子を冠って出漕し，スタート地点で一斉に脱帽敬礼したので「商大は礼儀正しい」とお附きが大変褒めて居た由である。網定の大広間を埋めつくしての大祝勝会，矢張レースは勝たにゃあ。遠山さんから名指しで起立させられ，１年間の怨みつらみを合せて大分御説教をされたが，勝てば官軍で，先輩団とのわだかまりも解消，遠山さんも再び川に見えられる様になり，昭和13，14年の連続優勝につながって行く。一橋第二期黄金時代の基礎を築いたと言う事で我々は幸運でもあったし，当時のクルー全員に改めて感謝を捧げると共に，不幸去る戦争で散華したクルー中の３人木村，塚越，北村君の冥福を祈り度い。当時の一般評では，此年

のクルーは練習で艇を漕ぎ出す時から従来に比して，精気溌剌として居たと言われ，又，レースコースを引いて居る時等とに角元気があったと言われた。矢張我々の意気込が不知不識の間に表れたのであろう。

白票事件に就いて少し語ろう。之は昭和10年の夏，杉村助教授の博士論文審査に当り，之が経済学の論文より，寧ろ哲学的な論文であると言う事で，可否を決する教授会投票中7個の白票が出て，結果的に否決となった裁定をめぐって，可成の数の助教授，助手等の間から反対運動が起り，之に更に可成の学生が同調した所から，全学的な騒動となったものである。11年小生が競艇部理事に就任してからも此騒ぎは続き，我々の部長高垣先生が審査官の一人であられた所から渦中の人となられた訳であるが，我々としては事体の真相は唯一方的に「白票は怪しからぬ，此様な事態を惹起す背景が教授間にある以上，全学的に之を一掃しなければならぬ」と言う様な話を聞かされて居る丈で，真相というものは何も知らぬのだから学生迄が一緒になって騒ぐのはおかしいと言う考えであった。又ボート部先輩からも学生は中立静観すべしというアドバイスがあった。そこで我々としては中立的立場に終始したのであるが，予科のボート部員の中には反対派に同調する者もあった。之が或る期間ボート部内にも気まずい空気を残した事は遺憾であった。迂余曲折があった後，文部大臣は両成敗と言う様な裁定を下し，高垣，岩田，本間の3教授，杉村助教授が学校を去られる事になった。然らば之に依って一橋の学風大いに刷新され，学問的に目立った業蹟等が実現したかと言えば決してさにあらず，結局はコップの中の嵐のお蔭で可惜有為の教授，助教授を失った丈としか言えない。今回顧して見てもボート部が中立的態度に終始した事は間違いではなかったと思う。矢張あれは派閥争いの様なものであり，一方が事を有利に運ぶ為に学生を煽った様に思う。助教授，助手の中にも恩師に弓を引いた人々が居るが，之とて本心からと謂うより，助教授，助手間の大勢に雷同してやったと言う事ではないかと思うが之以上の推測は差控えたい。とまれ我々として全く誠心誠意端艇部の為に尽していただいた高垣先生を御在職中，インター・カレッヂ・エイトの優勝を以て御酬い出来なかったのは終生の恨事である。先生が去られた年の秋に優勝を飾り得た事は誠に人生の皮肉な巡り合わせとしか言い様がない。

柵山（旧広松）三好氏の事に若干触れたい。彼の在学中，一橋に在って彼の感化を受けた者の数は甚だ多い。其強烈なる個性と言い，情熱と言いレースに対する執念と言い漕法理念と言い（全部が正しいとは言えぬが）彼の影響は甚だ強く，昭和11年の優勝に始まり，13，14の連続優勝，15年はもう一歩の所で優勝を逸したが，それなくんば三連覇と言う所であった。又戦後の数年間，22年の優勝を始めとし，彼の影響の及んだ範囲は大変なものであって，彼こそは一橋端艇部中興の祖と言って過言でない。小生と彼との交遊の歴史は昭和40年彼が下志津の一角で没する迄20数年に亘るが，その一コマを次に語りたい。彼との出会いは昭和6年小生入学の年の夏に始まる。九州の郷里に帰らず向島の艇庫に蟄居して居た彼から小生に乞食遠漕に行こうと言う葉書が舞込んだのは8月初めで，小生も彼も秋季小会のH組第一選手を漕ぐ事になって居た。乞食遠漕には一度行度いと思って居た矢先とて向島に飛んで行った。もう2，3仲間をと言う事で2人で1日駈けずり廻ったが集まらず，結局2人で行こうと言う事になり，真夜中に帆や炊事道具等を固定席艇に積んで出発した。

目的地は潮来。夜は艇の中で眠り，昼は順風なら帆走，風なければ2人で漕ぐ，飯は艇

の中で作ると言う訳だ。然し何と言っても6人漕ぎのフィックスを2人で漕ぐのだし，艇の中で寝るのは所詮仮眠で十分に疲れがとれない。2日掛って布佐に着いたが，此方は疲労困憊，泥鰌鍋か何かで飯を喰い了るなり寝床に這込む有様だが，彼は酒豪振を発揮してビールを6本位平げて平気な顔だ。結局潮来迄行っても帰りが大変だから布佐から引返そうと言う事になった。翌日運河口まで来たら，此儘帰るのも癪だから，更に6里位遡航して関宿を廻って帰ろうと言う。うんざりしたが，怖いから反対する訳にも行かない。3里位遡航したが，切埠が多くなり，其間を出たり入ったり縫う様にして行くので能率の悪い事夥しい。結局関宿迂回は止めて後戻りし，運河を通って帰ろうと言う事になり其晩は船頭小屋に1泊，翌日は漕ぎ通し，流山に差掛る頃には腹が空って何とも我慢出来ず，彼に頼み込んで残飯を喰った事等今も思い出す。午後8時頃，松戸到着，海老屋に1泊，之で路銀は底をついたが，翌日は帆走しながら漕いで，6日間の遠漕を無事了えた。

此間広松には怒鳴られ通しだった。小生が整調，彼が5番。だから1本1本にオールを矯正される。此方は未だクラスチャン丈，彼は第一選手も漕いで居るし，対校のサブもやってるのだから漕力が違う。舵手が居ないのだから何本か漕ぐ中に艇が曲る。だから此方は可成余計漕ぐ事になると言う始末。彼は兎に角，此方を鍛えてやろうという腹だから全くしんどい遠漕だったが，矢張此後で一人前になった様な気がしたから奇妙なものである。之が皮切りで，以来永年の付合いになる訳で，話の種はいくらでもあるが此辺で一応終りとしよう。昭和10年オリンピック予選の為の合宿入り前の銚子遠漕を彼の発案で，フォア一般，スカール4艇でやった事があるが，之はウォターマンシップとバランス感覚の養成には絶大な効果があった。これなどは今後もやると良いと思う。又我々は9年のインターカレッヂ以来オリンピックエイト予選も含めて日大に三連敗したが10年秋のオリンピックフォア予選の時に始めて2艇身半差で一矢を報いたが，其直後，彼がそのフォアに取縋って泣いて居たと言う。此様な彼の闘志と情熱が，彼の下に我々を結集させたものであり，長く其功を讃えたい。彼今や亡く，誠に得難き人材を失ったの哀感切なるものがある。

以上

バックマンの事ども

（昭和7年～13年）

近藤勝重（昭和13年学卒）

私とボートとの関り合いは中学生の時に始まる。私の居た中学は昔の高師付中（教育大付属高）で，この学校は現在でも続いている対開成中（開成高）とのボートの定期戦があり，又年に1度授業を休んでの全校生徒参加のボート大会が向島の旧一高の艇庫で行われた。私のクラスにボートの好きな連中が居て，私も時々誘われ日大と早大の裏側にあった艇庫に出掛けた。その当時から既に地盤の沈下で潮が上げて来ると汚い川の水と一緒におびただしいゴミ屑だのブクブクに膨れた猫の死んだのやらが浸水して来る粗末な艇庫から膝まで水につかってフィックスを川に押し出しポチャポチャ漕いで居た。帰りは地蔵坂から土手をブラブラ歩いて隅田公園の外れから右へ折れると立派な商大の艇庫へ出る。折から春の大会に備えて次々とエイトが出て行く様子を流石に商大はスゴイ，俺もああ言う

ヤツを漕げたら何んなに素晴しかろうと柵の金網越しに熱い眼差で見詰めたものだ。

その商大に運良くも入れた。石神井の予科へ通うようになった或る日の昼休み，一団の上級生がドヤドヤと教室に入って来てクラス対抗のボートを漕ぎたい奴は手を挙げろと言う。直ぐ10人ばかりの手が挙った。私も同じように手を挙げたがクラス選手にしてくれない。1m65，48キロしかないせいだ。

ハナハダ無念やる方ない思いであった。これで或る日1人の選手が何かの都合で練習に行けなくならなかったら恐らく私が今日この稿を書く事もなく終っていたであろう。コーチは私が手を挙げた事を覚えていて，仕方なしに私に声をかけて人数を合せる為川に連れて行く事になり，この日を境にして私と一橋のボートとの長い付き合が始まる。

前に書いたように私は中学の時からフィックスを漕いでいたので昨日今日練習を始めた他の連中に較べると格段にウマイ。すぐさま臨時雇いから一躍エースにと成り上ってしまった。

レースは言問橋をスタートしたと思ったら吾クルーは誠に不甲斐ない事にはバウの方から腹切り続出で小生孤軍奮闘するも及ばず大差を以ってビリ。ゴールに入って力尽き後へ引くり返って手ばなしで泣いた。この時私が漕ぐ事になった為1人漕手がハミ出しこれがコックスになったので，それ迄のコックスが降りる事になりヒドク浮かない顔をしてたのが後年対校のコックスを何回もやった戎野千太郎君（戦死）である。この時のクルーは彼の外にも随分死んで今生残っているのは私を含め僅か2人丈となっている。

春になって校内レースの合宿が始った頃，C組の先輩の処を廻って寄付を集めて来いと言われる。本科の人から命令されると気弱な私は何となくイヤだと言うのが悪いような気がして，先輩の名前と務め先の書いたカードを渡されるとフラフラと引受けてしまい，嫌々ながら丸ノ内のビル街をカードを頼りに会社から会社を渡り歩くハメになってしまった。

この時の尋ねて行く相手は殆ど昔C組で漕いだ事がある人で，何がしかの寄付をしてくれている先輩ばかりだったので，会う事が出来さえすれば殆どの人が心よく或は渋々乍らでも出してくれるのが普通ではあったが，何しろ私にとっては全く初めての経験ではあり，ボート部の事も良く分らぬ予科の2年生になったばかりの未だ純真な頃だ。最初の日は何んでこんな詰らぬ事を引受けてしまったかと悔む事しきりで，余程何も彼も放うり出して止めてしまうかと思い乍ら薄暗い丸ビルの長い廊下を心細い気持でウロウロした事をよく憶えている。

それでも何とか言われた通り1人1人の先輩の処をマメに廻ったせいか例年より可成り成果も上ったようで，之が為アレは金集めがウマイと言う妙な評判を立てられたのが間違いのもとで，その後卒業する迄続く事になったバックマンのスタートとなったのである。

その年の8月になると間もなく艇庫に来いと言う呼出しがあり，性懲りもなくノコノコ出掛けてみると会計幹事の谷正一郎さんから対校の寄付集めを手伝え，就いては艇庫に寝泊りするなら朝晩の食事は面倒をみると言い渡される。ここで私は又もや意久地なくも断わる事もせず言われるままに夏の暑い真盛りを走り廻る事になる。今と違って当時の学生は洒落たカラーのカッターシャツ1枚なんてイキな格好は出来ず，夏でもキチンと制服制帽で，何処へ行っても冷房なんて言うものは極く一部の大銀行の本店へでもなければお目に掛れなかった時代だ。今度はボートの先輩丈でなく一般の如水会員を片端から訪問する訳だ。丸ノ内のビル街を一軒一軒会社の受付へ行く。居留守，門前払，不在は毎度の事

で，折角会ってくれても俺はボートとは関係ないとオコられ空しく引上げる。汗がドット吹き出す。何の因果でこんな嫌な思いをするのかと幾度悔んだ事か。

イヤな事も随分あったが段々慣れて来るに従い次第にコツを覚えるようになった。従来寄付してくれた実績のある人のカードをその日の訪問予定の中に何枚か入れて置くと運良く会えさえすれば先づ間違いなく何がしか頂けるか或いは何日に更めて取りに来いと約束を取り付けられるので1日足を棒にして成果ゼロと言う事はなくなった。

この当時寄付金は一体何の位貰えたかと言うと，ボートに関係ない人で1—2円，漕いだ事がある人で年齢にもよるが3—5円位，会社の役員になっているような主として明治時代の卒業の人で5—10円，極く稀には20円30円と出してくれる人もあり，こう言う大口にありついた日は足どりも軽くイソイソと艇庫に御帰館と言う事になる。私が大学を出て最初に三菱鉱業から貰った給料が75円だった事からみても30円が如何に値打があったかがお分り頂ける事と思う。

こうして一夏中坂口侃，田寿郎，伊藤茂三郎，植松健悟等の諸兄と東京中を分担して歩き廻って集めた分と地方からの送金で大体2,500円位集まれば合宿費の補助，コーチ用モーターの借り賃，新艇の建造費やらが賄えたと記憶している。儘かオール込みでエイトが1,200円，スカルが100円位だった。

寄付集めは暑い辛い仕事であったがその中での楽しみは何と言っても昼食を面倒見のよい先輩の処で御馳走になる事である。狙われるのは在学中から顔見知りの若い先輩が多かった。予め今日は誰さんの処と心に決めて昼近く目指す会社へ出掛け首尾よく目的を達する事もあるが，相悪く不在であると空腹を抱えて安い食堂を探して歩いた。時には思いもかけず未知の先輩から学生の昼食としては不相応の御馳走をして頂く事でもあると，艇庫に帰ってから如何に豪華な御馳走であったかを大袈裟に吹聴して他の連中を大いに羨ましがらせたものだ。後年私が卒業し仲間の殆どが兵隊に取られ私1人が丸ノ内に残っていたので因果は廻るで昼時分になると薄汚い学生がドヤドヤ会社の受付に現われるようになった。

レースは今と違い9月の半ばに行われたので，それ迄に出来る限り沢山集めなければならない。レースで敗けると後は集りがサッパリ悪くなるからだ。昭和2年以来八年間も敗け続けた時代なので，レースが終ると2，3人で何となく力も入らずポソポソと落ちこぼれを拾って歩く外ない。既に川には一ぱいのエイトの姿も見られず秋の陽を一杯に受けた河面に冷い秋の風が渡って行く。

・　　・

寄付集めと並んで忘れられないのはスパイだ。戸田では敵の様子も手に取る如く分るのではないかと思うが昔はそうは行かない。スパイは吾々の時代より前からあったが商大のスパイ団が全盛を極め他校を圧倒したのは私達の時代ではなかったか。レースが隅田川から尾久へ移り伯林オリンピック予選が行われた頃が最高頂に達した。スパイ団員は校内選手の古顔と年中向島でゴロゴロしているバックマン達で，当時の面々は前田正，清水操五，神田節，松井巌根，藤沢康雄(戦死)，工藤哲雄，田，伊藤(茂)，私外数人の顔振れである。坂口侃さんが何処で何う言う工夫したのか知らないが，尾久の民家の一間を昼丈使う事で借りて来てスパイ団本部とした。この家は婆さんと娘と言ってもそんなに若くないのと2人住いで何をして食っているのか一向に分らぬ得体の知れぬ怪しげな家だったが，ここに朝集結し夫々決められた持場に散って行く。身に付けるものはストップウオッチ，双眼鏡，相図の旗，記録用紙。

或る者は小台橋の橋桁に隠れ，或は対岸の芦の蔭に身をひそめ，或は民家の間に立籠る。スパイ団指揮所は放水路側の小台の渡しの桟橋だ。敵クルーが小台橋下のスタートに現われコースを引くかと思われるや橋上のスパイは立上り相図の旗を左右に打振る。指揮所では或者は双眼鏡の標準を合わせ，敵艇を見守り，他の者は持参のビールビンをドブンと河中に投げ込み水流の測定と準備オサオサ怠らず今や遅しとスタートを待ち受ける。正に緊張の一瞬である。敵艇スタートするや橋上の旗はサット打下され，双眼鏡はストップウオッチを押す。こうしてタイム，途中計時，ピッチ，流速，風向き等必要事項は全て記録され夕方本部に引上げてから皆でワイワイガヤガヤ言って各校のデータを比較検討しコーチの処へ提出される。

スパイは隠密なる事を要すとは言っても橋の上や彼方此方で旗を振ればイヤでも敵側にも良く分る。向うも段々意地が悪くなりコースを引くと見せかけ一寸スタートしてみて慌てて旗を振るスパイを見てニヤニヤからかう奴等も居るし，時にはバカヤロー等と罵声をあびせられる事もあり，流して来てスタートを暫く過ぎてからいきなりコースを引くのも居り虚々実々駈け引があり仲々面白かった。レース近くなると何のクルーに付いても略々完全なデータが出来上り，吾スパイ団の処へは新聞記者が予想を聞きに来る事もある程で，それ程確度の高いものであった。この年は春にエイト，秋に舵付フォワーの予選があったのでスパイ団も大忙し休む暇もなく尾久の川べりを首から時計をブラ下げて右往左往した。

・　　・

寄付金集めやスパイの事ばかりを書いたので，私の事をクラスチャン以外には艇に乗った事がないのではないかと思われる方も多かろうが，後年対校を漕いだ前田正，堀川富太郎，塚越賢哉（戦死）の諸兄のH組を引離し，C組第一選手として7年振りに優勝旗を奪い返した事もあり，スカルなんぞ漕がせても戦前の或る年の全日本の時に行われたオープンレースに勇ましくも出場した伊藤茂三郎君なんかより可成ウマく，漕手としてもナカナカなものであったといまだに自分では思っていると言う事を念の為付記して稿を終る。

昭和13年優勝クルーについて

堀　川　富太郎（昭和14年学卒）

昭和13年の対校選手クルーの編成は，12年の暮の合宿に際して結成された。その年，昭和12年のインターカレッジでは，予期した艇速もついにレース当日までに達成出来ず，不本意な結果に終ってしまった。

どうもそのままでは納得出来ない気持から，12年の11月に行われた小艇の全日本レガッタに臨み，シエルフォアのレースにベストメンバーで出漕し，見事に優勝を果した。その勢を翌年に持込うとの意気込で，13年のクルーは，学年順とか漕歴を無視して，若手の素質もあり，体力，気力とも充実していると思われる有望新人を多数起用し，これをベテランの整調，7番とコックスがリードしてゆくと言う形で編成された。

メンバー

コックス	工藤　哲雄	（本2）
整　調	塚越　賢哉	（本3）
七　番	平野　昌	（本2）
六　番	佐藤長太郎	（専3）

五　番　荻生　真通　（予2）
四　番　黒川健太郎　（専3）
三　番　石原善二郎　（予3）
二　番　田端　穂　（専3）
舳　手　角鹿　哲也　（本1）

以上のメンバーで2番から6番までに専門部，予科の若手を配し，両はしをベテランがしめくくってリードする体制で，結局この考えは成功したと思われる。

12月の冬休から向島で合宿に入ったが，最初からこのメンバーは，事故の無い限り変更や入れ替は行わない。シート順やサイド替は当然ありうるが，この顔振れでレースまで不動のものとする方針を打出して，クルーの各々は，不退転の決意と，健康，個人的事情等に関しても万全を期してレースに勝つまではそのままで頑張るという決意を固めていた。ベテランと新人の配合も極めてなごやかな調和を得て，第1期練習から順調に滑り出したのであった。

このクルーの漕法の特徴として特筆すべきことは，従来の一橋流の漕法を基本にしているが，若干の改良を意識して，練習の当初から徹底して全員で新漕法の完成に邁進したことである。この漕法は先輩やコーチから強いられたものでなく，主将の塚越を中心として，ベテランの平野，工藤が考えを統一し，艇外から堀川らが援助したものである。

その要点を概説すれば，(1) フォワードのブレードの高さは水平とし，ブレードにフラットのままキャッチまでもってゆく。(2) キャッチの際，ブレードはスクエヤーとせず，フラットの位置からやや切込む様な感じで水中に入れる。その際ブレードは切込む直前にスクエヤーとなって水を押す。(3) 従ってストロークは極めて水平に移動する。(4) フィニッシュは，スクエヤーのままで引切り，漕上げは絶対禁物とする。フィニッシュの要領はブレードで造られる水の山の後側の谷の水圧の低い状態に導れて速に抜け出して，即，フラットにする。(5) バックは余り大きくしない。(6) フォワードは体を余り伏せ過ぎぬ様にするが，両脚の間に腰を充分割って入れ，ストレッチャーに体重を確実にのせる。(7) ストレッチャーはやや高目にして，足首の不自由にならぬ範囲内でかなり，垂直にする。(8) ストロークに際して，所謂シットアップはせず，上体は水平に動くようにする。(9) フィニッシュでは余りバックせず確実に深くスクエヤーに引切る。以上が漕法の要点であった。かくして編成されたクルーは，3月中旬より合宿練習を開始した。新漕法はキャッチで切込み易く，はじめは苦労したが次第に馴れてきて5月末の海軍記念日レースの時には，やや狙い通りのスムースな艇速を示すようになった。

合宿練習開始時には水谷実氏（昭9・三菱商事，昭17・大洋丸沈没で死亡）がコーチとして決定し，クルーの自主性に加えるにコーチのコックスとしての経験を生した指導も着々として効果を現している様に思われた。

この年はどうしても新漕法をマスターする必要があった為，例年より合宿も長期に行うことに決定し，殆ど合宿を解散することなく夏休の本格的練習に継続した。ところがここで思わざる事態が発生した。それは7月に入って頼りとするコーチが突如，会社の命令でテヘランへ転勤することになった。当時は若手のOBは殆ど兵役に従事していた為人材不足で，ハタと弱ったが，大先輩の肝入りで，往年の名コーチ遠山不羈夫氏（大正13年）が出馬してくれることになった。当時三菱銀行虎ノ門支店次長であったと思うが，多忙のところを押してお引受いただいた。所がここでまた困ったことが起きた。遠山コーチが突如病の床についてしまった。話は前後するが水谷コーチの転勤の後，ブランクが生じては困るので堀川（当時本科3年）が予科クルーの

コーチから対校クルーのアッシスタントコーチとしてコンバートされることになり，クルーの主脳陣と相談し乍ら，やってゆく体勢となっていた。

8月に入りいよいよレースを1ケ月後にひかえ病床にある遠山コーチも気が気でなかったと思うが，窮余の一策として堀川アッシスタントコーチは毎日の練習結果をコーチの病床に報告し，翌日の練習の指示を受けることにした。約20日間練習が終ると向島の合宿から牛込の遠山邸に通って報告をすませ，夕食を御馳走になって，そのまま泊り込むこともしばしばであった。

クルーは当初から自主トレーニングの習慣がついていたし，主将とアッシスタントの気脈も申し分なく通じていたので，極めて順調に仕上りつつあった。8月下旬になると，病癒えて遠山コーチもボチボチ川に来られる様になりレース前にはモーター上から最後の仕上にメガホンをとれる程になって，いよいよ艇は，はしり出した次第である。レース2週間前の尾久レガッタでは全勝してクルーはいよいよ自信をもち優勝を目指してポリシュアップも上々であった。

その年は慶応と早稲田が仲々強く，新聞評ではトップに上げられていたが，我が方は充分自信をもって新聞評を批判していた程である。

レースは9月4日に尾久2,000mコースで行われたが，予想通り決勝には当方と早稲田が残り，やや苦戦したが終始リードのまま2年振りに優勝し，黄金時代を築くこととなった。

この年はフォアは予科クルーを以って編成し最初堀川がコーチしていたが，中途から奥野浩爾氏（当時本科3年現在九州いすゞ社長）に変ったが，漕法は一貫して当時吾々の考えていたポイントを狙いこれもエイトに揃って優勝した。メンバーは，次の通りであった。

コックス	中村　達夫	（予3）
整　調	古沢　三郎	（予2）
三　番	石井　喜介	（予2）
二　番	藤井　良一	（予2）
舳　手	小坂謙四郎	（予3）

以上は関東学生選手権の結果であり，その2週間後9月24日に行われた全日本学生選手権に於ては，決勝は慶応との間に争われこれも完璧に勝利を収めることが出来た。

またフォアも拓大と争われエイトと併せ，文字通り王者の栄冠を獲得したのである。

尚その年の端艇部理事は植松健悟君（当時本3）であり，会計幹事は伊藤茂三郎君（当時本3）でバックメンの充実した援助の功も見逃せないものであったことを付記する。

会計幹事の想い出

（昭和18年）

伊　藤　茂三郎（昭和14年学卒）

〔あなたの趣味は〕と聞かれて，〔大飲寝楽読です〕と立板に水と撥ね返した。僅かに試験委員の1人が〔ええー〕と低い声を発したが，残りの連中は自分の浅学を恥じてか，意味のわからない即答にポカンとつっ立った。〔そんな漢語を昔習ったかな〕などと，今更ら辞書を出しても無理と言うもの。これぞ当時の合宿用語である。大とは次に便をつけるとよくわかる。朝一番に飛込んで，前日の精算を済ますのは気分壮快この上なし。なにしろ春の校内レースでは100を超す合宿者に対して，便所は僅かに数個，ノロマは公園の公

衆にでも行かねばとてももたない。だが話はこれから。中では悠々と新聞の隅から隅まで音吐朗朗と読みあげる。果てはもう読む所もなくなって小さな広告まで放送する。

戸の外には後れをとった連中の行列が続く。〔俺は3番目か〕などと臀を手で押さえて〔まだかや!!　まだか〕と下駄で戸を蹴る音。〔ウンチング・パピエ（英仏語）をよこせば交替するぞ〕と臭い中で悠々と朝の歯ブラシを使う猛者もいた。飲とは酒やビールの類ではない。アルコールはレースが終った晩に鯨飲する外，月曜のデンにも許されるが雷門の電気ブランデーは飲んではいけなかった。足を取られて大失態を演じた奴でもいたのか。当時としては珍らしいネオンがデンキブランデーと隅田の流れに揺れて映った。

時々故障で字が消え，デンブランに化けていた。本論の飲とは，練習を終って，オールを立てかけるものも待ち遠しく走る水道の蛇口の味。寝とは言わずと知れた豚寝。ゲットレデイで起こされるまで1分でも早く起きては大損害。もっとも早く起きた奴に，自分の乾いたパンツを先取されるノロマもいる。これでは全員皮フ病になるのが当り前。当時の雄はなんといってもF君（S14）。万里の長城みたいにタムシが，バンドの上まで拡がって，真冬の図書館でも，暖くなると腰のあたりを掻いていた。気の毒に満州の戦陣に仆れた彼に真先に祈ったのは〔キレイな肌になっていたかなあ!!〕の言葉であった。楽とはモツアルトやベートンベンではない。テレビのない時代の唯一の楽しみはラヂオ。新聞社から出る2つの週間紙は硬かったが〔奥の奥〕という30銭出すと1銭釣の来る雑誌を奪い合って読んだ。だが例外もいた。学校に残るといって，3階の個室で真夜中まで猛勉した人もいた。矢張り戦死した木村大ちゃん（S12）は本物のベートーベンをこよなく愛し，自からもフルートを見事にこなし，隅田の夜風に伝わるその音は遠く対岸の人々の心を奪った。

これが大阪のものもちのボンかと疑わせる程無頓着で万事キタない生活の中で，彼の独乙語と音楽は七不思議の1つでもあった。“ゴミダメのシューベルト”と筆者のことを評した彼が，入営の片見にくれた例のフルートがこわれたのに気付いたのは，戦死の報のあとであった。こんな輩の中にも少しは智的なまともな部員もいないではなかった。それが会計幹事であった。まさに泥田に降りた鶴といったもの，委員長・会計幹事・主将が唯一の行政機構で委員長は時には主将をも兼ねたため，実務は殆んど総て会計幹事の手に委ねられた。現在のように四神会担当とかといった部門もなく，選手の衣食住から，対大学，協会，先輩との接触とその活動範囲は無限といえよう。

軍隊で申せば経理部と副官部を併せたもの。練習，レース以外は悉く会計幹事の仕事といっても過言ではない。中には谷カン（S10）のような理論屋もいたが，ヲバサン（S11）の名がピッタリする良妻型もあった。最大の仕事は予算決算で，先輩の寄附に頼るは昔も今も同じで，寄附金集めには最も精力を費した。矢張り毎年一杯の新艇も欲しかったし，飽くことを知らぬ大男の旺盛な胃袋を満たす食堂の経営も苦労の種であった。

戦前の恵まれた食糧事情でも，とても家庭や下宿では充たされないカロリーで，合宿が終るとトタンに痩せた奴もいた。そんな奴に限って，合宿費の取立てに苦労させて，卒業後も彼は完納したかと思出して困った。食堂は業者に委託してあった。食堂の休日や選手が帰宅した後はよく雷門の一膳飯屋の厄介になった。時々吾妻橋上の顔見知りの乞食が吾々の手の届かぬ豪勢なものを喰べていて，すねかじりの悲しみを味った。釣銭はあの乞食の金だと信じていた。合宿の朝食にはよく生

卵がついた。真先に2階の食堂にかけ上って，全員の生卵を片端から割って得意になっていた悪童もいたっけ。三食毎につく薩摩汁の豚の白身を全部独りでドンブリにかき集めて“オー動物，動物”と叫けば，次の男は汁の実のネギを積み上げて“おれは植物だ”と名乗りを上げた。

遅れた大衆は油しか浮いてない澄んだ汁をスープの如く汲って次回の奮闘を誓ったものだ。後れをとった人間もただ指をくわえてばかりはいない。何とか他人の食慾を減退させて，残ったオカズをせしめようととても家庭では考えられぬ汚い話を続けては，これでもか，これでもかとけしかける。練習中に見た白髭橋の下に浮いていた犬の死体を思い出させては豚汁の実を奪い返そうと努める奴もいた。〔糞を喰うときは飯の話をしてはいかん〕（語順はこの通りだった）と一喝する若き日の前田総監督のダミ声で騒ぎは落付いた。こんな輩に鱈腹食わせる会計幹事も勝ちたい一念で，今日も寄附金集めにと，アスファルトの焼けた街に散って行く。

戦果は毎晩記帳され，明日の訪問先を準備する。先輩から奢られた一杯のアイスコーヒー，社員食堂の中食いに，“俺も卒業したらキット…”と胸に誓って，床にもぐると夜半になった。時には竹葉亭のウナギを御馳走になり，得意になって，タケバ亭と呼んだ田舎者も，今は世界を股にする国際人となったっけ。カツ定食をおごってくれた若い先輩も月給日前には〔今日は社員食堂だぞ〕とサラリーマン社会の一端を味わせてくれた。

ある年は大阪に1ケ月も下宿生活をしてマムシを喰べた。東京は申すに及ばず京阪神のビルというビル，会社は片っ端から訪問したものだ °一橋皆漕の名のもとに，全卒業生を虱つぶしに歩いた。金を手にするまで，領収書を書くまで。お陰で今も何々会社と言えば××ビルの何階と即座に出る。ただ戦後ビルの新築で会社がとんでもないビルに移って却って智識があるだけに戸惑う始末。雀百までとはこのことか，会社の受付でホット先輩の名前をど忘れして，冷汗をかいた経験を持つ人も多かろう。普段から渾名ばかりで通した天罰か。吾々の時代にインチキという人物がいた。ヂャンケンの強いことから出た名誉ある愛称だが，不幸彼は保険会社に就職した。会社のイメージや本人の名誉のためにも受付で椿事が起きねばと案じられた。

読みにくい名にも困った。今はとっくに故人となられたが，忍足（オシタリ）先輩を訪ねて，突然呼び方を忘れて，“シノビアシ”とやってしまった。受付嬢吹き出したのか，何か変な夜の動作でも連想したのか，引込んでしまって待てど暮せど顔を出さない。まだニンソクとでも呼べばよかったに，後悔先にたたず。会社だけに飽き足らず大先輩の私邸をも訪問した。財政界の超大物だけあって故久原房之助氏の邸は蝉しぐれのふる砂利道の奥にあった。凡そ人にはおぢけないカモ君（S14）ザクザクと玄関まで小砂利を踏んで進んだら，そこで出迎えられたのは小牛ほどもある猛犬。いいカモござったとばかり。でも木の間がくれに散歩していた若い娘さんの助けで，何とか目的の大金を握った。

翌年から流石の彼も“今年は犬はいいかなあ”と前夜から案じていた。あのパラソル姿にひかれてか，彼は再び任務を達成した。苦労の成果はレースで実った。予め早くから海外を含めた全国の主な如水会支部に電報を用意していた。ドルやポンドになって帰って来た。碌に学校にも行かなかった自分が外為とか英文電報を身につけたのもこの時のこと。昭和13年にはエイトとフォアーに全勝した。偶々上海で幹部候補生の教育を受けていた谷さん（S10）にも〔八四トモニカツ，モサ〕と全勝の悦びを分った。当直将校ビックリ驚天して，オットリ刀で飛んで来た。勇名をは

せた共産系八路軍の勝利を毛沢東将軍が何故に誤って日本の一候補生に打電して来たのかと。しかじかこれこれの速答に“お前の大学にはなんと頭のいい奴がいる”と爾来谷候補生は後輩の光りで優秀人物と可愛がられたことであろう。戦争は端艇部をメチャクチャにしてしまった。独りポツント東京の陸軍の官衙に残った筆者の軍用行李には四神会の通帖や書類が格納され，来る日も行く日も戦地に赴く友人を見送った。終戦のゴタゴタも碌に収まらぬ時に財産税の申告が始まった。法人格のない四神会の財産は丸裸の私の財産に上積されて一緒に申告された。その名残の一部が今も私の名儀で残っている。時は流れて，戸田に念願の新艇庫が誕生した。堀川君（S14）の男気で金の不足を承知で完成させた。残金30万円がどうしても集まらない。

偶々私も住友建設の監査の手伝をしていて，毎回売掛金残高の年齢調べには赤丸が続いた。“これは大丈夫ですわね”と笑いながら念を押す課長の手前も，何とか天から金が降って来ぬかと祈った。世の中は捨てる神ばかりではなかった。故村松部長の長期渡米の寸前に近藤荒樹先輩がポント出してくれた。喜んで代理受領に上った私の手はふるえていた。それにもまして驚いたのは，出された金の束である。大銀行の真新しい封印ものかと思いきや，地方の名もない金融機関から引出した古くさい札の3束がそれぞれ別のものであった。娘さんを時の総理の子供に嫁がせて，箱根の豪邸は総理の別荘となっていたほどの大金持にも，金は天から降って来るものではない，勿体ないものだと改めて自分らの生活態度を振返った。

やがて相模湖に艇庫用土地が得られた。学生と金を持って登記所で受払して帰る積りだったら，是非うちまで来て皆に会ってくれとの話。その夜に集まった親類の前で，学校のたっての願で先祖伝来の土地を手離すのだと仏前で報告する姿に私達も目頭が熱くなった。お赤飯と酒でもてなされた私は，この土地が手に入らねば卒業延期だぞと部長とともに頼んだ森下一乗君と月の湖面を左に見て吉野の駅へと秋の夜道を急いだ。

墨堤有情

（昭和9年～15年）

丸山泰男（昭和15年学卒）

昭和9年から15年までの6年間，多情多感なわが青春時代にとって，「隅田川」は何ものにも代えがたい存在であった。「ボート」というスポーツに，青春の情熱を燃焼させた光溢れる日々。そして「ボート」という縁に結ばれた今は亡き数多くの個性豊かな先輩，同僚たち。すべては「隅田川」そして「墨堤」を抜きにして語ることはできない。時は流れてほぼ半世紀になんなんとしても，今なお当時の過ぎ去った青春の想い出は鮮烈である。

商大予科に入学した昭和9年の春，ボート部に勧誘され，クラスチャンを漕いだのが，そもそもの始まりであった。その時のコーチは1年上級の堀川さんだった。大きな眼がギョロッとしていて，高い鼻がいつも赤く日に灼けていたので，「天狗」というあだ名がついた。予科のあった小平から国分寺で中央線に乗り換え新宿で下車して，向島の艇庫まで，少くとも往きだけは，タクシーに乗って行くのが，当時のならわしだった。今から考えると随分ぜいたくなようにも聞えるが，このタクシーがまた滅法安かった。当時はタクシーといっても，全部外車で（といってもか

なりガタのきたオンボロで）後部座席には，運転手席の背に２人分の補助席が引き出せるようになっていた。６人が定員で，メーターなどもなくて，始めは１円という定料金制であったところから，一般に「円タク」という愛称で呼ばれていた。

しかし昭和９年ごろは，世の中が不景気だったせいか乗る前の交渉しだいでかなり値切ることができた。当時は新宿から向島まで50銭というのが相場であった。従って，６人こぎの固定席艇のクルー７人で乗れば，当時の市電の１人７銭とほぼ同じだったし，それにコーチでも乗れば，市電より安いという計算だった。ただ６人定員制であるために，交番の前を通るときだけは，運転手さんのご要望で，１人ないし２人は，横に寝て頭が外から見えないようにしなければならなかった。

１ケ月ほどクラスチャンの練習に通ったのであるが，その交通費などは，ボート部から僅かな補助がでていたようにも思うが，大部分はクラス会の集金で賄われていたように記憶している。放課後２時間近くもかかって向島へ行って，ボートを漕ぐのであるから，１時間ぐらいしか練習ができなかった。練習が終って帰りは「市電」ということになるのであるが，艇庫に一番近い向島須崎町の停留所の前に，色鮮かな大きな天狗の顔の看板のある「天狗焼」の店があった。今でいう今川焼のようなあんこの入ったたい焼で，４コが５銭であった。時々コーチの堀川天狗がその天狗焼をみんなにご馳走してくれた。練習に疲れた選手たちは，熱くてやけどしそうな天狗焼をふうふう吹きながらぱくついた。その甘いあんこの舌にしみるようなおいしさは，今だに忘れられない。

私は最初ボート部に入ることをためらっていて，入学当初はちょっと貴族的にみえる格好のいい馬術部に籍をおいていた。クラスチャンが終って，馬の方に夢中になり出したころ，浅草雷門の前にあった明治製菓に新入生の何人かが呼び出されて，ボートを漕ぐように説得された。そしてフィクスの予科専対抗レースの選手になって，すぐ練習を始めるようにいわれた。馬の魅力にとりつかれていた私は，その場ですぐには承知するという訳には行かなかった。するとあごの張った赤ら顔の鋭い眼をした広松さん（当時本科２年）という先輩が，とっさに私の耳をつかまえて，左右に強く振りながら，「丸山，お前は馬をやめて，ボートを漕ぐんだ，わかったか」と，大きな声でどなられた。耳がちぎれそうに痛かった。やむをえず，とっさに「はい，漕ぎます」と答えてしまった。今から考えれば，無茶苦茶なひどく強引なやり方だった。

しかし，広松さん（やせて背が高かったせいか「ヒョロ」というあだ名）の強引な勧誘というか「強要」がなかったら，私とボートとの長いその後の歴史はなかったかも知れない。この時の予科クルーに選ばれたのが，小島慶三（バウ），井上裕（２番），中崎力信（３番），両角（のちに三井）侃二（４番），外松修一（５番），丸山泰男（整調），工藤哲雄（コックス）の７人であった。コーチは前チェン（前田正，当時本科１年）であった。

昭和９年７月１日の予科専レースのあと，７月13日から，当時７月末に行われていたＨＣＳ秋季小会のための向島における合宿練習が始まった。私にとっては，初めて経験するボートの合宿だった。不本意ながら馬のことはそろそろ諦めなければならないかなと考えるようになった。このころの私達予科の新入生にとって，３年先輩のコーチの前チェンは結構魅力のある存在であった。他の人たちとどこか変っているというところから，あまり正しい英語ではないが，「チェンジ」というあだ名がついた。それだけに奇声を発したり，冗談を言って，みんなを笑わたり，またこわい先輩の前でも平気で遠慮のない反対意

見を述べたりするところが，後輩たちの人気を集める所以であった。

この夏の合宿における前チェンの言動が，私たちのボート生活をひどく愉しいものにさせた。もちろん真夏の合宿練習は決して楽なものではなかった。酷暑のなかでの午前，午後2回の猛練習で，全身の汗が吹きでて，のどがカラカラになる。練習が終って艇番の用意してくれた大きな西瓜ほどもあるデコボコの古いアルミヤカンの口から呑んだシロップ入りの氷水が，まるで「甘露」のように五臓六腑にしみわたった。夕方の練習が終ると，汗にまみれたシャツやパンツをヨレヨレの浴衣に着更えて，鉢巻をしてバスタオルを首にひっかけて，汚い下駄で土手下の「堤湯」という銭湯に出かけるのが日課だった。向島は今でもそうだが，いわゆる花柳の街で，若い芸者さんが多かった。夕方のお座敷前の芸者さんたちで，女湯はまことに大賑わいであった。前チェンは番台のところで風呂銭を渡すふりをして，この女湯をしげしげとのぞきこむのが得意だった。「いいオッパイだなあ，こてえられねえや」というのが彼の口癖だった。番台のおばさんが，時々は申し訳みたいに「学生さん，やめて下さいよ」と笑いながら頼むのが関の山だった。すると前チェンは「何でえ，減るもんぢゃあるめえし」と江戸弁でブツブツいって，みんなを笑わせた。

風呂から上って，サッパリして夕食を腹一杯たべて，7時ごろになっても，外はまだあかるかった。またぞろみんなで浴衣姿で向島の街や隅田公園の「リバーサイドパーク」へよく散歩にでかけた。花街のところどころに小じんまりした芸者の置屋があった。道路に面した連子(レンジ)窓の格子の間から，若い芸者さんが，双肌をぬいで夜の化粧をしているのが見えた。そういうのを見つけると前チェンはみんなを呼んで「見ろよ」といった。たそがれ時の薄暗がりの中から，なまめかしい若い女の白い肌が，まるで夕顔のように美しく妖しく，若い私たちの胸をときめかせた。山の手の郊外の住宅地に住んでいた私にとっては，こうした下町の色町風景は，すべて物珍しく，新鮮なおどろきであった。連子窓の軒先に下げられている「忍ぶ玉」のガラス風鈴が澄んだ涼しげな音を立てていて，何となく樋口一葉の小説を想いおこさせた。

他のスポーツではまことに不器用な私なのに，どういう訳か眼をつけられて，翌年の予科2年の春には，HCSのチャンにのり，対校選手の補欠となり，予科3年の昭和11年には対校の正選手として，雌伏8年ぶりの優勝クルーの幸運にめぐまれた。この頃になると殆んど1年の3分の2は，向島の艇庫で寝起きして，そこから学校に通っていた。ところで昭和9年，10年のインカレでは，対校選手は苦い連敗の憂目をみていた。レースの晩になると，老いも若きもビールを浴びるように呑んで，オイオイと声をあげて泣いた。コーチの広松ヒョロが立ち上って，しみだらけの黒ずんだ合宿の天井をカッとにらんで，悲痛な言葉を吐くと対校選手もバックメンも，いっせいにワッと泣声をあげた。時には先輩の厳しい叱正の声に，泣きながら大声をあげて反論するものもいた。自分たちの力で一橋ボート部の危機を何とかしなければという学生たちの自主的な気力が盛り上ってきていた。

従って昭和11年の対校選手の練習は，かなり厳しかった。その年は「HCSに帰れ」で，対校選手は春の大会が終ってからすぐに正式に選定され，早速合宿練習に入った。ウィークデーは朝5時起床，直ちに1時間の猛練習に入り，朝食後学校へでかけた。学校から帰ってきて，5時から7時まで2時間みっちり練習をした。土曜日は3時半から6時までの2時間半，日曜は午前2時間，午後2時間半のハードな練習日程であった。選手たちの間でフェアバーシの「ローイング・ノー

ト」の読書研究会もやった。いわゆるセルフ・コーチで，それぞれが自分のローイング・テクニックをいかにマスターするかに夢中になって挑戦した。木村大三コックスは遠慮会釈もなく，選手の未熟なところをびしびし指摘した。先輩たちに大きな口を叩いただけに，今年こそは何が何でも優勝しなければという闘志がクルー全員に満ちあふれていた。勿論，練習中は禁酒禁煙で，苦しい精進の連続だったが，気持が緊張していたせいか，それほど苦しいとは思わなかった。

しかし，合宿練習は苦しいことばかりではなかった。学校が休みの時の合宿では，土曜，日曜は先輩たちが艇庫に激励に来られるので，月曜を練習休みの日ときめ，この日は艇を出さないので「デンの日」とよんでいた。この日はみんな50銭銀貨1枚をもって，浅草へでかけて行った。1日遊んでも結構足りたほど，当時は物価が安かった。

「オペラ館」というレビュー小屋では，浅草オペラでならした田谷力三が出演していて，人気を集めていた。新しくオープンした花月劇場では新進のボードビリアンたちが観客をひきつけていた。エノケンやロッパの「笑の王国」の全盛時代でもあった。「大勝館」という一番上等な映画館では，外国映画の封切をやっていた。15銭か20銭の入場料で，4時間近くも楽しむことができた。ボート選手を主人公とした映画では，鈴木伝明，英(ハナブサ)百合子共演の「栄冠涙あり」とか，ドイツの女子大生のエイトクルーを題材にした「ボート8人娘」というドイツ映画があった。「会議は踊る」「にんじん」「商船テナシチー」「未完成交響楽」「外人部隊」「ミモザ館」「白き処女地」「オーケストラの少女」といった名画をみては大いに感動した。食い物といえば，すしのにぎりが1コ3銭，たこの足やさざえが1くし3銭か5銭，焼きそばも大盛で5銭。当時は間口が2，3間しかなかった「ハトヤ」はコーヒー5銭，ホットケーキ10銭で結構うまかった。劇場にでている有名な芸人たちも，「ハトヤ」にはよく現れていた。

私たち若いボートマンの胃の腑をみたす食い物の店は，向島近辺にも少くなかった。お好み焼がはやりだした頃で，「雀のお宿」という店があった。そこの娘が「オーケストラの少女」に主演した可愛らしい「ディアナダービン」に似ているというので人気があった。「梅月」という汁粉屋のおかみが美人であかぬけているというので通いつめたボートマンもいた。3人娘のあんみつ屋もあって，そこの姉娘の歩き方が白うさぎに似ているところから，「ピョンピョン」というあだ名がついた。こうした向島の魅力ある女たちに心ときめかしたうぶで純情なボートメンが，そっと「付け文」（今のラブレター）をおいてきたという微笑ましい話もあった。言問団子の店は，ボートレースの日などは，先輩たちの溜り場になっていて，団子よりビールを飲む人が多かった。「おたねさん」という気まえの良い年配の女中さんがいて，三谷一二大先輩の学生時代からの知り合いで，お互いに気のおけない冗談を言い合っているのを聞いたこともあった。

昭和13年ごろになると，将来ありうべき空襲にそなえて，灯火管制の演習が行われるようになった。サイレンがなると一斉に電気を消した。夏など30分も続けられて，向島の人たちは家の中にいても仕方がないので，小さな懐中電灯をもって，隅田川の川べりに夕涼みにでてきた。いつもは明るい浅草方面の夜空も暗く，艇庫のバルコニーからみると隅田川は，満天の星空を写して，満々と黒い水がまるで生き物のように流れていた。川の流れというものには，不思議な生命力のようなものが感じられた。ボートを一緒に漕いだ先輩たちが次々と戦地にでかけて行った。私たち

も何れは戦地に赴かなければならないと覚悟していた。あれから数えて，もはや半世紀。多くの懐しい艇友たちが戦争で，あるいは病気で亡くなった。生きながらえた私たちは，せめて昔の想い出を通じて鎮魂の祈りを捧げる他はない。

鼻唄漕法ほか

平野　昌（昭和15年学卒）

幹事丸山君からボート部時代のことを何か書けという命令なので，当時を思い出して気の付いたことを断片的に書かせて頂きます。しかし何せ昔のことなので，その当時考えていたことと思って書いて見ましたが，今考えていることと若干混同しているかも知れません。

○チーム力

Boat は，エイトにしても，フォアにしても，一つの生き物だと思いました。昭和12年，当時対校選手のストロークとして，小生は身，技共に最高の出来だと思っていました。それに較べ他の漕手は何をしているんだ，皆おれに続けと練習も試合も自己本位にぶっ飛して了い，Crew 全体が一つの生き物にはなりませんでした。試合に負けて，破壊者はこの俺であったと気がつきました。皆には悪かったが良い勉強になりました。

○鼻唄漕法

（新明解国語辞典で，鼻唄の項に「Ⓐ気分のいい様子，Ⓑどっちかというと真剣味の足りない様子で仕事をする」と出ていました）

一緒に漕いだ連中は皆知っていましたが，ライト，パドルの時，小生は良く鼻唄を唄いながら漕いでいました。

当時，ストロークが塚越君（タンク），小生が7番でした。タンクは真面目な人なので，小生に時々鼻唄を唄いながら漕ぐのは不真面目だと文句をいわれました。小生としては，鼻唄まじりで漕いでいるのは調子が良く気分が良かったからです。理屈をつける訳ではありませんが，ライト・パドルは5（時には3）の力で漕ぐ練習だと思っていました。この5～3の力を全部，無駄なくボートに伝えることが出来るととても良い気分です。又そう出来ればパドルの時10の力を10全部ボートに伝えることが出来るのです。船と身体の一体化がライト・パドルの主目的と思っていました。5～3の力が全部船に伝わる気持の良さが鼻唄を唄う気持になったのだと思います。しかし一寸不真面目だったのかも知れない。

○反体制派

陸ではそうではありませんでしたが，漕いでいる時はよくコーチ（広松さん）と喧嘩をしました。（自分ではそう思っていましたがコーチがどう思っていたかは知りません）

船を走らすのは漕手であって，コーチではない。コーチは助言は出来るが，実際に船を走らすのは我々漕手であるとの自信（？）によるものでした。余りうるさく云うのなら代って漕いで見たらどうだと心に思っておりました。

反体制派といわれたゆえんだと思っております。

募金趣意書

（昭和15年）

謹啓　盛夏の候弥々御清適之段奉大賀候陳者常に母校一橋ボートに対し，格別の御支援御鞭韃を忝ふ致し，先輩諸賢の相渝らざる御厚情誠に難有万謝仕居候

扨て日本漕艇協会主催第十三回全日本学生選手権競漕大会並びに関東漕艇協会主催関東学生選手権競漕も既に一ケ月半の後に迫り候。御蔭を以て一昨年はエイト及フォアに完勝し，墨堤に五度の優勝を録し，昨年亦堂々エイトに連勝し，六度墨田制覇を成し遂げ，全日本漕艇界を席捲し，揺ぎなき王座を確保し，母校一橋の名声を天下に示し以て先輩諸賢の御期待の一端に副ひ得たるは吾等の欣快と致す所に御座候

本年は時恰も皇紀二千六百年に際会し，千歳一遇の記念すべき大会出漕の意義は真に大なりと謂ふ可く，吾等先輩諸賢の御期待に副ひ，今秋の一戦には誓つて優勝，前人未踏の三連勝，七度制覇を達成し以て母校一橋の栄誉顕揚の為に微力乍ら一層の精進致し居候

本年度対抗選手は既に昨年十一月中旬ベストメムバーを以て編成，今春の春季競漕大会にはＨＣＳ各クルーと練習試合に実力技量の涵養を計り，常に競漕第一主義を目標として練磨に努めたる成果は着々と上り，今や絶対自信ある艇速を示し，去る五月下旬行はれた海軍記念日競漕にはエイト及フォアに群敵を一蹴して優勝致候

今や第四期練習を終了し，愈々七月中旬より酷暑の下に最後の猛練習に入らんと致居候。吾等一橋史上に三連覇を録する光栄ある務を双肩に担ひ「墨田は永遠に吾がものぞ」てふ一橋人不抜の信条を一身に体し，墨田に七度のヘゲモニーを掌握すべく，只管精進致居候

本年十一月には待望の戸田ボートコースの竣功を見る可く，戸田コースに於ける第一回の競漕たる全日本選手権競漕大会に光栄ある覇権を握るもの亦断じて吾等一橋クルーたりとの確信は必ずや先輩諸賢の御期待に背かざる成果を揚げ得るものと奉存候

就ては誠に恐縮の至りに存じ候へ共，吾等の微意を御汲取りの上，同人の出費及選手負担額にて不足致す練習費御補助被成下度別紙予算表相添へ伏而奉懇願候

敬　具

昭和十五年七月

東京商科大学一橋会端艇部

部　　長　高　瀬　荘太郎

理　　事　松　井　孝　夫

会計幹事　中　村　達　夫

後援団委員（氏名略・三六名）

ボート入門・その他

（昭和10年～16年）

角鹿哲也（昭16卒年学）

思い付くままに当時のことを書き綴ることにします。

1. ボート入門

昭和10年4月に，田舎の中学校から1人ポツンと予科に入学し，心細さと物珍らしさとの中に何となく夏休みが終った頃，突然白票事件が起り，驚きと何が何だか分らないなりに感動して居る内に，秋のクラスチャンの勧誘を受けた。当時は春秋にクラスチャンがあり，クラスを挙げて醵金し応援したものでした。しかし自分が選ばれるとは露思わず，春の選手連中の練習やレースの話を聞いても自分とは別世界のことと考えて居たので，吃驚はしたが，入学以来半年経って何となくもやもやして居たので簡単に応じた様に思う。

扨，国分寺の先，小平から向島へ通うには相当の時間を要するので，授業が終った後中央線大久保から向島迄はタクシーを拾って行った。

手に豆が出来たり，尻の皮がむけたり，腹が痛くて笑うと大変だったりはしたが，振り返ると楽しかったこと丈が残って居るし，又この時一緒に漕いだ連中が今でもクラス中で最も親しく，特にビルマで戦死した原田君が何時迄経っても偲ばれる。

愈々レースの日になった。コースは言問橋から艇庫のやや上流迄の800メートル，用艇は固定席の6人漕であった。スタートする迄は冷静だった筈だが号砲一発何が何だか分らなくなり，気が付いた時は艇庫の船台でコーチ奥野浩爾兄が帽子を振り乍ら何か叫んで居た。もう大分C組に抜かれて居てH組には少し勝って居たが要するに負けてしまった。この時口惜しかったのでその後ずっとボートを漕ぐことになってしまったらしい。

尚，奥野兄とは不思議な因縁で，在学中常に教えられ励まされ心の支えになってくれた人だが，戦後同じ会社に勤務し，現在は福岡市所在の当社販売会社の社長であり，時々会う機会を得て懐旧談に耽って居る。

2. 練習と通学

クラスチャンの次には春のＨＣＳレース，予科対専門部レースと続き，秋のインターカレッヂになる。

春のレースで初めて合宿と遠漕を経験し，その後合宿遠漕通い練習が卒業迄繰り返えされたが，その中から予科時代の合宿し乍らの通学のことを少々書くことにする。

当時の予科では出席時間数が全体の3分の2以上なければ試験を受けることが出来なかった。これをカバーするためには，代返だけに頼る訳にはいかないので，向島から遙々小平へ通わなければならない。

朝5時から練習，朝食それから早朝の割引電車（労働者のために市電は6時半以前に乗車すると通常片道7銭のところ，特に往復9銭に割引する。そして乗り換えは一目的地迄は自由であった。）で新宿へ出る（この間50分）それから中央線，多摩湖線を乗り継いで学校へ辿りつく。授業終って今度は逆の経路で向島，そして練習と云う日課である。

必然的に授業中居眠りする。しかも眠り乍らガタンと机を蹴とばす，或いはエーイとばかり机を引っ張ったりする。先生方も心得たもので「ああボート部か」と見逃してくれる。将にクーベルタン氏の「参加することに意義あり」である。

合宿中は禁酒禁煙であることは勿論であっ

て，艇庫の門の外で心ゆく迄喫って合宿入りする訳であるが，始めの頃は艇庫内では何ともなくても娑婆の風に当ると煙草を喫いたくなる。特に学校の休憩時間がきつかったが間もなく感じなくなる。別にストイックな身構えだからではなく，練習時辛いことを体で知って居たからだろうと思う。この様に生活の中心にボートを走らせることがどっかり座を占めて居て，全ての行いがそれを中心に動いて居た様に思える。

3. 対校レースその他

対校選手になったのが昭和14年からで，この年のコーチは故遠山不羈夫氏，トレーナーが堀川富太郎氏（学３）主将は故塚越賢哉氏（学３）で，既に亡いこのお２人に関する思い出は尽きないが，故遠山氏については他の方々が書かれることと思うので私は直接合宿で指導を受けた塚越氏のことを書きたい。

クルーの纏め役としての塚越氏は，卒先垂範，艇上でも合宿でも常に我々の規範であった。勿論努力もあったであろうが，自ら備わった人柄の流露であったと思う。文句なしに敬服にたえないものを持って居た。

私に対しては特に，練習の合間には必ずスカールに乗れと機会ある毎に注意してくれたが，私は必ずしも之に従わず，昼寝したり，浅草のオペラ館辺をうろついたりで過した方が多かったと思う。思うに，私は自分の置かれた位置について深く考えることなくのんびりして居たのに対して，氏は秘かに自身の後継者として今の内に鍛えようと考えて居たのではないかと，私自身翌年主将になって初めて気が付いた様な次第で，誠に申し訳ないと今に至る迄後悔の念に馳られる。昭和14年優勝した時「よくやってくれた」と抱き付いて喜んでくれたことを思い合わせて，殊にこの感が深い。

昭和13年は，対校のエイト，予科のフォア共々優勝して，新聞に独占的優勝と書かれる様ないい年であった。

翌14年は，コーチ故柵山三好氏，トレナー平野昌氏（学３）私が主将であった。クルーは学部が石原(学１)，岸(学１)一共に故人一で私を含め経験の少いメンバーであった。

前年優勝の余勢を馳って今年もと，先輩始め学生も意気騰って居たが，私自身は内心不安であった。この時のメンバーはその後目覚ましい成長をしたが，当時の経験，技術レベルを考えてどうしたら優勝に持って行けるか確信がなかった。

このクルーを強烈な意志と情熱でぐんぐん引っ張って行ったのがコーチ柵山氏であり，緻密なアドバイスをし且つリラックスなムードを作ってくれたのが，ベテラン平野氏であった。そして良かったことは，クルーは経験不足のため脆さのあった反面，純粋にコーチの意図に従い怒鳴られると直ちに反応する若さがあったことと，更に一ツ橋が負け続けて居た時代を知らず，前年優勝の後を受けて勝って当然と云う向う見ずな所があったことであると思う。以上の要素がうまく作用して優勝することが出来たと考えられる。

柵山氏は当時近衛野砲兵連隊付の主計中尉で，軍務の間を縫って実に屢々川に来られた。

時には演習に出発する日の朝早く艇庫に来我々もスケジュールを変更して早朝艇を出すこともあった。

しかし仲々思う様にスピードが出ず，７月頃迄は専門部と並べて抜かれることもあり心細い状況であったが，８月に入ってスタート及びその後のスピードが目に見えてよくなり，それにつれてコンスタントのスピードにも延びが出て来，本レース前の尾久レースも全勝で乗り切って優勝への期待が濃くなった。

所がレース１週前夕闇迫る尾久，小台橋下

で伝馬船と衝突して艇を大破し，前年使用艇に乗り換えたため折角上昇して居た調子を壊し，その上レース４日前整調が目の腫物のため練習不能になって，トレーナーを代漕させ等，結局尾久レース後一度もレースコースを引くことなくレースに臨むことになった。幸い選手の故障が治り正規メンバーで漕げたことは不幸中の幸であった。

しかしこの様なアクシデントが精神的には大きくプラスに働いたと思う。艇を大破した日の夜，柵山コーチがクルーに与えた悲愴な激励がクルーの胸を強く打たずにはおかなかった。

此の年インターカレッヂ，続く瀬田川での全日本決勝にも優勝出来たのであるが，漕いで居た私には分らないコーチ団並に先輩諸賢の焦燥と苦悩とに思いを至す時，それは如何程ばかりであったであろうかとしみじみ思われる。

一方バックの活躍も目醒しいもので，例えば会計幹事の大西君が国内は素より遙々満洲迄遍歴して，先輩にボート部の状況を説明し，多大の御後援を戴いたこと，スパイ団と称する敵状偵察グループが処々の河岸に潜んでデータを提供してくれたこと等，それにも増して東京に於ける或いは瀬田川に於ける先輩の激励と精神的経済的援助には感謝に堪えぬものがある。それ丈に優勝を心から喜んで下さる中でボートマンの冥利をつくづく嚙みしめたものである。

この年忘れることの出来ない行事があった。恰も宝山沖での朱雀号遭難33年目に当って居たので，７月の対校選手の銚子遠漕の際に現地に卒塔姿を１基建立した。

予め，遭難当時救助，死体捜索に献身的御尽力を戴いた柳川惣助氏を訪ね，卒塔姿建立の趣旨を申し上げたところ快く御助力を承諾され，７月19日柳川氏及び往時死体捜索等に携わった方々を煩わして，無事建立を行い，奉納力漕を行った。昭和51年石碑を建てたことに関連して38年前のことを思い返し，３分の２世紀に亘る柳川家代々の御厚誼は深い感謝の念を新にして居る。

私は，恵まれたボートマン生活を送ることが出来たことを幸に思って居る。しかし勝つも負くるも時の廻り合せであり，勝つだけが生甲斐ではなかろうと思う。私は優勝することがなくても何時迄もボートマンであったことを誇とし，喜びとしたと思う。

終りに，書き綴って居る間に今は亡い方々の名と顔が次々に浮んで来る。前述の外にも特にコーチして戴いた水谷実氏，木村大三氏そしてその他の方々に，謹んで御冥福を祈る次第である。

ボート追憶

（昭和10年～16年）

大西重則（昭和16年学卒）

武蔵野一隅田に結ばれし６ケ年
思いて楽しく，実りて美味たれ

これは昭和16年春，学窓をすだつに際し卒業アルバムに記した小生の寸言である。入学以来ボートに明け暮れし，どちらかと言えば学業にうしろめたさを覚え，同期の朋友に遜色を感じていた当時，６ケ年を振り返り，人生はこれからなのだと負けおしみをおしかくす意味をもこめた言葉と言えよう。

あれから30数年が過ぎた。果しておいしい実がなったかしら，９年もの戦争体験をへ，比較的に体力にめぐまれてどうにか現在あるのはボートのお陰だと言いたい。

× × ×

昭和10年春，若冠19歳のロマンチィストが最初に洗礼をうけたのがボートのクラスチャンであった。兎に角午後の終業をまちかねて，小平—国分寺—大久保—タクシー—向島と約20日間をくり返した。練習も終り家路への空腹をいやしてくれたのが向島２丁目にあった「テング焼」だ。タイコ焼より少し大きめの８ケ入り１皿が拾銭，３度に１度はコーチが奢ってくれた。向島とテング焼はボートマンとは切りはなせないライフサイクルだった。

× × ×

昭和13年春，端艇部会計幹事におされた。年度最初の行事が春季競漕大会だ。一橋皆漕の当時だったので艇庫は万国旗に飾られ学長をはじめとして教授連から妻子同伴の先輩でバルコニーは埋めつくされ，桜花の咲き乱れと共に向島の名物であった。大会は日曜日だったが翌月曜は臨時休校となっていた。当時の大会諸経費は200円余であったが「財嚢」という有難い特別寄付があった。日本郵船と三菱本社からと記憶しているが，夫々100円づつ頂戴した。金絵蒔の袱紗づつみが艇庫に２ケあった。それを大事にかかえて会社を訪問して中味を入れて頂いた。なにしろ親からの仕送りが月20円～25円の頃なので100円の威力は大したものだった。

× × ×

合宿といえば春季大会の合宿はＨＣＳ各組それぞれ20数人をこす大合宿だったので，此の合宿中に行われた新卒業生を東京駅から勤務地への赴任を祝福した数回の見送りも盛大だった。練習を終って夕食後，外出を禁じられた各組漕手には別れを惜しむ心より，春宵への尽きぬえにしをかみしめるひとときでもあった。

× × ×

昭和14年も会計幹事を仰せつかった。当時先輩からの寄付金は3,000～4,000円位であったが，13年に全日本に優勝したせいもあってか14年には5,000円近く集まった。此の年小生は夏休みを利用して学生課から「先輩の就職状況を調査しろ」という名目の辞令をもらい，朝鮮，満州をかけ歩いて寄付金集めをした。約500円程あつめたが費用も100円近くかかった。今迄の寄付金集めの基盤に新規を加えたわけだが，不幸にも戦争の進展にあい続かなかった様だ。

× × ×

昭和15年秋，紀元2,600年を奉祝して戸田コース開きが行われた。予定されていたオリンピックを東京でという件は戦雲急を告げてきたので取止めとなったが，戸田コースはその準備の遺産である。小菅刑務所の囚人と東京各大学ボート部員の土掘りという勤労奉仕が完成に寄与したことは戸田コースにまつわる陰れた記録と言えよう。

私のボート生活

（昭和11年～17年）

岡村俊夫（昭和17年学卒）

私は，昭和12年予科入学，17年９月（戦争で半年繰上げ）卒業する迄の間殆んどの期間を自宅—学校—艇庫の三角形の内で過した，その間14，15，16の３年間対校選手の舵手を勤めた訳ですが，今から振り返って見ると昭和13年から戦争が激しくなる迄の数年間は，端艇部の黄金時代であったと言えるでしょう。

実力があり乍ら，レースに負けると言う苦しい長い時代を経て，11年に優勝して大いに意気の上って居た様子は，12年春に入学した

我々新入生にも感じられ，ボートなど全く知らず，増してや自分がボートを漕ぐ事になろうとは夢にも考えて居なかった多くの人材を艇庫に連れて来る結果に連ったと思います。入学試験に合格して天に登った様な気持で中学（当時は５年制）と全く違った環境と雰囲気の中で新しい授業を受け始めた日の，最終時間にドヤドヤと，教室に入って来た上級生は，「我々はボート部である。諸君を歓迎に来た」と言う処から始まり，クラスチャンのメンバーの編成をして歓迎会に送り込まれた。一橋人は全員ボート部員なりとの先輩の言葉は，そのままでは学内に通用はしなかったけれど，一橋の伝統と共にあり，多くの優秀な人材を持ち優勝し得る実力を持つ，唯一の運動部として，学内で，最大な運動部であった事に違いは無い。

当時の学内レースは，

○４月中旬　春季大会ＨＣＳ第１から第３選手迄
○５月上旬　春季クラスチャン（新入生）
○６月中旬　予科専門部レース。第１選手及び新人
○７月末　夏季小会ＨＣＳ新人主体
○10月末　秋季クラスチャン（新入生）

等であった。私は体が小さい為レースがある度に舵手として狩り出されている内に何時しかボート部の中に組み込まれて了った。練習や合宿で接する上級生や先輩の人柄にひかれたり，２年生になれば自分では柄にも無いと思い乍らも，否応無しに後輩を指導する立場に立たされたりしている内に，ボートが自分の生活そのものになって了った。

昭和14年春季大会にＳ組は大敗して，ガックリして居たある日，対校エイトの舵を引けと命じられた。11年に優勝，12年惜敗，13年横綱相撲の様な見事な優勝。何んとしても２連覇が，先輩学生一同の最大目標であった。当時対校選手は，隅田川，向島の艇庫の３階に合宿して居て，我々下級生から見ると雲上人の様な偉い存在であり，水の上でも陸に居ても，大変な貫禄と威厳を持った存在だった。

従って，自分がその一員になる事は，非常な光栄と思うと同時に，それに価する能力を持って居るかどうか戸迷う処であった。「俺が対校クルーになったら商大の対校は格が下がるんじゃなかろうか」と殊勝な気持で，合宿に入ったように思うが，始めて３階に入るのは悪い気分ではなかった。その後15年，16年も引続き舵手を勤めたが，初年度であったせいか14年の頃の事が一番記憶に残っている。

昭和12年９月，日支事変が始って，日本は戦時体勢に入り14年迄には，我々の周囲にも，ぼつぼつ戦死者が出始めた頃である。

物資不足を騒ぎ始め買溜めが問題になり始めた頃であり，この後の２～３年に比べれば未だ平常に近い良い時代と言うべき状態であったと言えよう。卒業した先輩は，一応就職し２～３度背広で艇庫に現れたと思うと，次回は半年位経って軍服を着て川へ来られた。「軍隊に入ると，やたらと艇庫が懐かしくなるものだよ今年は勝てるか？」と，聞かれるのが常であった。14年のコーチは，昭和11年卒業の故柵山三好氏。主将は学部２年角鹿哲也氏が端艇部理事兼任で，１人２役の全責任をもって当られた。

他の選手は，本１で石原，岸の２人，専門部は，新藤，坂，予科３の荻生，藤井，予２から浅岡の７人で，前年の優勝クルーからは，角鹿，石原，荻生，の３人のみ残り舵手を含めて６人が交替した事になる。

４月末に合宿に入ったが，向島，国立，小平と通学と練習を併行するのは大変なハードワークであった。現在の私達の年齢ではとても考えられない事だけど，若くて体力の一番充実した年代だから続けられたのであろう。

それでも教室の最前列で居眠りをしたり，電車でつり革にぶら下ったままうとうとした経験は誰でも持っている。

コーチの柵山さんは，当時世田ケ谷三宿にあった砲兵連隊の主計中尉で保谷村(西武線)から通勤して居られたが毎週土，日は勿論の事，週日にも1～2回艇庫に来て練習を見て居られた。その熱意に選手一同感激して練習に励んだものである。

御宅の近くの農家から，真紅なトマトを沢山買ってバスケットに入れて艇庫に持って来られて夕食に戴いた事が何回もあった。但し「ヒョロさん（柵山氏のあだ名）がトマトを持って来た日は猛練習だから覚悟しろ」と言う事になっていた。

同氏の強烈な個性は力があり乍ら勝てなかった端艇部を実力通りに勝てる様にした原動力の一つとして大きく評価されていますが，練習も同様に強烈そのものであった。モーターボートの上からメガホンで1人1人どなられたが，その声は遠くに居る他校の選手迄ふるえ上らせるに十分であった。私も一度ノンストップ赤羽廻りの帰り柵山コーチの指示を聞き違えてイーズオフを掛けて，えらい事どやされた時の声は今でも耳の奥に残っている。昨年の選手は3人しか入って居ない。対校クルーの編成が春季大会後である為練習期間が短かい等から，柵山コーチ角鹿主将は基礎練習から始めて全員に漕力を付けた上，クルーとして纏め上げるのに大変な苦労をした。

この様な対校選手を頂点として，大西会計幹事を始め端艇部全組織を上げて2連覇に向って全力を集中した。更に我々にとって忘れられないのは当時本学の学生課長であられた太刀川浩一郎先生が，度々艇庫に見えては「舟虫の子等やっとるな」と，大きな声で激励された事である。

8月に入って艇速も次第に少しづつ上って中旬過ぎから実力も付いて来た。前哨戦である尾久レースが月末に行われたが4戦4勝大いに意気揚った。

本当のインターカレヂ（関東学生選手権）では順当に勝進み，9月11日午後いよいよ決勝レースで慶応と雌雄を決する事となった。予定通りスタートで飛び出して水が開いたと思った頃からぢりぢり詰められた。あわや並ばれそうになった1,500で此処が勝負とスパートを入れたらするすると出た。そのままゴールに飛び込んで宿願の2連覇をなし遂げた。その後どうやって艇庫に戻ったかどう言う風に艇を納めたか全く記憶が無い。更に優勝クルーのコックスが川に抛り込まれるのは東西古今変りはないらしいがあの尾久の汚い水の中に投げ込まれたら，只では済まなかった筈である。汚水の中で泳いだ記憶が無い所を見ると「此処で奴が病気になると来週関西の全日本決勝に差支える」と言う事だったのだろうか。一度誰かに聞いて見ようと思い乍ら会った時は，他の話をわいわいやって忘れて了う。関東で優勝して休む暇も無く翌日の燕(当時唯一の超特急)で西下瀬田川河畔の宿に1週間合宿，18日に関西の優勝校大阪商大と全日本学生選手権の決勝レースを行った。

当日は豪雨で艇内に水が溜りスタートしたら水が後部に集り整調7番は引きが重くなる程だったが，大差で優勝2年連続全日本制覇の偉業を達成する事が出来た。

東京で勝った時は閉会式が一高の艇庫で行われ優勝杯を受領した後上田学長御臨席の下本科予科専門部一般学生も相当参加して居たり長煙違くを唱和したが，夢の中で歩いて居る様な気持だった。

関西の場合は今と違って関東と関西では実力に格段の差があり，勝つ事は既定の事実であったが，やはり優勝は格別に良いものである。然し乍ら関西遠征中，9月14日独ソ戦開始されヒットラーの進攻優勢で，世界の風雲暗然として破局に向い始めた。

昭和12年から17年までの思い出

下　元　進　助（昭和17年学卒）

昭和12年春に東京商科大学予科へ入学した我々は，入学の喜びも束の間，諸先輩から，曰く，「一ツ橋の学園の歴史をよく勉強し，光輝ある伝統を守れ」，「中学生的受身の価値観を打破して経国済民の志を樹てよ」，「非体系的な東洋流考え方から体系的・個性的な西欧流の考え方へ速かに脱皮せよ」，「橋人皆漕，何よりも先づボートを漕げ！」等々……百花斉放の方向を無秩序に押しつけられて，何が何だかわからずに，聞くことなすこと新しいことばかりで，頭が混乱するばかりであった。そこで何となくボートのクラスチャンを漕ぐハメとなり，隅田川の水を赤いオールでかきまわし，疲れ果ててコーチのご馳走してくれる天狗焼に舌鼓を打つ身となった次第。

さて，当時，学園は杉村広蔵博士の学位論文をめぐる粛園事件が一段落して，上田貞次郎先生が学長，予科は堀潮先生が主事という時期で，東西文明史を講ぜられていた三浦新七先生が，一橋の伝統的スローガン「キャプテン・オブ・インダストリー」をふまえ，「国士としての経済人たれ」という言葉を打出された時代。

一方，ボート部は隅田の覇者として全盛時代。例えば部員の数も，春季H・C・S大会では70名を越す猛者が桜花爛漫の墨堤に力を競った。当時の入部者は予科生約20名，専門部生約10名合計30名を越え，その前後の年次の中では最大の部員数を擁し，部員夫々の個性も多種多様，奇人偉材雲の如くという有様であった。従って対抗試合では連戦連勝，内部ではバックメンの量質共に充実し，歴代の名会計幹事により，端艇部財政の基礎も確乎たるものがあった。

入学当初の百花斉放の価値観に混乱した我々の頭の中に，月日の経過と共に次第に結晶となって結論めいたものが浮んできた。

それは，学園の歴史を振返ってみると，学問が盛んな時には，運動部も元気があってよく勝ち，両者は一見相反する活動のようであるのに，何となく奮発心，向上心の面でよい意味の相互刺戟になっているという事実であった。殊にチームプレーの華であるボート部の強弱が学園の隆衰に正比例しているように思われてきた。昔の武士の個人完成の目標として文武両道ということが，学園全体として成り立った時代が多かったのが学園の歴史の示す事実であった。

さて，私自身は，予科三年の時に，運動部選出の理事として一橋会理事会の仕事をやらされることになった為に，ボート部の表芸である対抗試合に勝ちながら強いクルーづくりをする立場から離れて，学内問題を取扱う過程で前述の如き一橋全体の隆盛という大前提の中で運動部全般の存在意義を高める仕事に没頭する事となった。

そして，昭和17年秋，繰上げ卒業になるまでに２つの重要問題に取組むこととなった。

その１つは，予科３年から学部１年にかけて起った問題で，先述の学問の振興と運動部の存在意義如何という問題である。即ち，一部の人々から「現運動部は対外試合偏重で，セクト的存在であり，学問の府にふさわしくない。施設を開放してクラブ制に移行すべきである」という運動部改革案，実体は解体論が提案された。

これは，種々議論を重ね，運動部夫々の立場で検討した結果，運動部のクラブ化は，各部少い人員で，施設も不十分であり，物の面

だけでも実現不可能であるという理由で見合せの事となった。

尚，この論議の過程で，ボート部のクラスチャン制，春秋の大会等の行事のあり方は改革的発想の一部を既に永い間，適切に定着させている事は有意義であるという事になった。

第２の問題は学部二年の時に起った。それは，一橋会の解散，即ち学徒報国団への強制移行の問題であった。当時，戦時体制への波はきびしく，一橋会の学生自治，民主的運営という点が，当時の官辺筋から好ましくないということが云われ，学校当局者も，他の大学の如く「学徒報国団」というヒットラーユーゲント式形態に移行しようという意見が多かった。之に対し，先輩が営々として築いて来た学園自治の業績を頭から否定する俗吏の時局迎合案は返上すべしという強硬意見もあった。杉本栄一先生宅での大晦日の深夜に及ぶ意見交換の一幕もあったが，結局，昭和16年２月，一橋会は自らの手で解散総会を行い，それ以降，学徒報国団結成，戦時体制へ一路直進のこととなった。

—・—・—・—・—

ともあれ，予科入学から40数年の歳月が流れたが，入学当時の先輩諸賢の百花斉放の名言の数々は，強いインパクトとなって，今なお，私の耳に残っている。そして，学内問題を取扱う過程で，青春の情熱を傾けて色んなテーマを熱心に討議した友人諸賢の言葉も，今なお耳に残っている。

私自身も，その後引続いてボート部の仕事を手伝い乍ら，当時の先輩・同僚・後輩諸君と，或時は思い出話として，或時は理想の姿として，これらの言葉を引継いでいるわけである。それにしても，40数年の昔を思い出す時，「少年老い易く，学成り難し」という中国詩人の至言を今もって，時により，折にふれ，かみしめている次第である。

端艇班幹事日誌

（昭和18年）

小沢恒與（昭和18年門卒）

昭和18年３月５日，休講（予科入試の為）午前８時より第二学生集会所に於て予算第一読会。順序を例年は総務部，端艇班以下の順に習慣づけられて居たが今年は抽籤にすると言い出した。余大いに反対す。凡そ後から予算を取る者は攻撃が激しく自然困難な立場になるため何れの班も先に取りたいのは当然である。例年ひどく審議，質問を受けるのはどうしても中頃以降の班である。1,500円も2,000円も計上する端艇班も同じように抽籤によったのでは技術上不合理が生じ第一，端艇班としての貫録に係わる。どうしても以前の通りか少く共端艇班だけ第一にやって貰わなければならない。会計幹事の児島がラグビー班に属し，ラグビー班は従来最後に審議されて居た為に児島は抽籤の手段を選びそれを猛烈に主張したためだ。

現在制度の上ではどの班も同列になっている。然るに校技となって全同人校門を去る迄は必ず一度はオールを握って漸く一橋の生命と一つになるを得る事は歴史に照して明らかである。此の２，３年不振を続けているが，吾々の血みどろの練苦も効を奏せず，自ら威信地に堕つ，そこへつけ込んでこそ泥の様に鎌首をもたげる奴が有る。我々は決して他を踏み倒して自ら象牙の塔の中に閉ぢ込まろうという如き姑息因循な考えを持っている訳ではない。凡そ集団をなして共同生活を営む限

り互に切磋琢磨して校風作興に資するのは望ましい。その実際に役立つ為には吾々は凡ゆる努力を惜しまない。事実愛校の誠意と没我の至誠に立つ者とは吾々は積極的に連繋して来たのである。斯くてこそ一橋専門部の使命達成にも役立つと思う。全く兄弟垣にせめぐようでは到底所期の目的は達し得ないのだ。専門部，否一橋と運命を共にする端艇班は絶対の自負と責任とを以て真剣に一橋の将来を担うという意味で活動していると了解してくれるなら彼等ももっと和気を以て吾々に協力して呉れるべきではないか。

兎角偏見を以て独善とか，横暴とかの批判を蒙るのであるが，或いは時にはそのような点も目につくかも知れぬが，吾々の献身ぶりを認識し，学校当局の熱意と先輩後輩の縦の結合を理解するなら軽率なる言動は許されないのではないか。学生として真摯なる生活をしようと心掛るなら特に時局柄一層協心戮力して本分達成に邁進すべきであると思う。他を知り同時に自己を知って互に相扶け相補って渾然一体となって一橋専門部の基体となろうとするのは吾々のささやかな願いなのだ。

（専三在学中の日記より）

学徒出陣とボート

（昭和14年～18年）

辻　君雄（昭和19年学卒）

私のように記憶のわるい者にとって，過ぎ去った昔を思い出すことは容易でない。何しろ，あれからすでに40年近くもたっている。

私の小さな２ＬＤＫの居間には，一橋のオールのブレードがある。その色は昔は真紅であったはずなのだが，今では色あせて茶色に近くなっている。私が第二次世界大戦中に学生として持っていたわずかの家財の中で，今もなお残っているのはこれだけである。当時を思い出す手がかりは，そのほかには意外に少ない。

ブレードの表面には，消えかかった字で，「祝学徒出陣」と記され，私の名と，私が昭和15年に対校選手（フォアの舵手），昭和18年に会計幹事であったことが書かれてある。

今から考えて見ると，「祝学徒出陣」と記されたオールのブレードを現在でも持っている人は何人もいないと思う。これは私たちが向島に合宿していた時代をよく象徴している。

私が一橋のボート部に入ったのは，昭和14年，つまり戦前最後の一橋ボート部の黄金時代であった。昭和13年，14年と，対校選手はインターカレッヂに２連勝した。準決勝で敗れた昭和15年でも，少くともレースの前日までは，一橋に対抗できるクルーは全くなく，６分10秒を切ることだけが対校選手の課題であった。

私の記憶では，その頃の向島の艇庫はすばらしかった。対校選手及びＨＣＳ第一選手用のシェル・エイト，第二選手用のクリンカー・エイト，第三選手用のタブ・フオア，クラスチャン用のフイックス，それらの他にフオア，ダブル・スカルなど数多くのボートが，大体何時でも使える状態になっていた。天気のよい午後に，予科の授業を休んで向島に来れば，何時でも墨堤に沿ってスカルを漕ぐことができた。

しかし太平洋で戦争が始まり，昭和17年から18年頃になると，艇庫の様子は大きく変った。先づ第一に艇庫の附近の川岸にコンクリの防潮堤が作られた。これは練習の時のボートの出入りをやりにくくさせたばかりでなく，艇庫の中を暗くした。暗くなった艇庫の

中では，戦争で物資が次第に欠乏して来ると，常に整備の必要なスライディング・シート，ストレッチャー，リガー，ララック，オールなどの部品がなくなり，修理が困難になって来た。その結果常時使用出来る艇が少なくなり，次第に数多くの艇が使われないままほこりをかぶり，アームの上段に放置されるようになってきた。

新艇の建造は，資金的にも，又物資不足と言う点から見ても非常に難かしくなった。競漕用のボートを作っていたデルタ造船所は，いつの間にか上陸用舟艇の建造に追われ，ボートを作らなくなっていた。

上流の化学工場の排水のためか，川のよごれは増していた。練習が終ったあと，よごれはてたエイトのシェルを拭き，残り少ないオセダ油で磨きながら，このボートはあと何ケ月使えるのかと思ったことがよくある。

戦争で金属が不足したためか，艇庫に泥棒が入ったこともあった。真鍮のララックなどが盗まれた。艇番に鍵をかけるようよく注意し，場合によってはララックをとり外しておいたこともあったようにおぼえている。

合宿生活も不自由になって来た。幸いに，米は充分ではないがかなりあった。料理も質が低下したが，がまんすれば何とかなった。しかし艇庫を一歩出ると，食べ盛りの選手の食欲を満足させるようなものは少なかった。墨堤にある言問団子も長命寺の桜餅も殆んど商売ができなくなっていた。言問団子のお種ばあさんに頼まれて，私の家の近所で週に1回行列すれば買える餅菓子を買ってあげたこともあった。

合宿用の薬品も不足した。須崎町の薬局でメンタム，赤チンは買えたが，包帯，脱脂綿，ちり紙の類は不足しがちであった。

練習の時困ったのは，コーチ用のモーターボートが燃料不足の為充分に使えなくなったことだった。そしてそのモーターボートも，練習中に時々動かなくなった。衣料も少くなり，消耗のはげしい靴下やパンツは破れかけたものをいつまでも大切に使った。それでもレースの時には，胸に赤い縦の縞の入ったユニフォームを何とか新調した。しかしそれは，今では想像もできない程質のわるい，ピカピカしたステープルファイバーで出来ていて，2，3回使うとだめになってしまうようなものであった。

そんな時代でも，レースの終った夜には，先輩から生ビールのたるがいくつか届けられた。レースの終ったあとで，「ワーッ」と叫びながら乾杯したのが，当時の私たちの唯一のぜいたくだった。

多くの苦労がつきないのに，バックメン達は7銭の市電に乗って熱心に先輩の寄附を集めていた。先輩はいつも暖かく協力してくれた。しかし戦争が続くにつれ，若い年代の先輩の多くは戦場に去って行き，寄附金の募集は困難となって来た。極めて稀な例だと思うが「日本が国をあげて戦っているのにボートなど漕いでいてよいのか」とお叱りを受けるようなこともあった。

そして今度は私たちが戦争に出て行く番となった。昭和18年の秋深い頃，折れたオールの中から，欠けていないブレードを選んで私達に卒業の贈物が作られた。それは卒業ではなかった。いわゆる「仮卒業」であった。誰が考えたのか，それまでの「祝卒業」の字句に代って「祝学徒出陣」と記されていた。

昭和18年の12月1日，私たちの殆んど全部は入営した。

出陣学徒答辞

（昭和18年）

鈴木邦治（昭和22年学卒）

想ヒ起セハ今ヲ去ル四星霜　始メテ櫂執ル技ヲ教ヘラレシヨリ今日ニ到ル迄吾等ガ一橋ノ生活ハ実ニ悉ク端艇ノ生活ナリト言フモ過言ニアラス　然ルニ今吾等其ノ学業未ダ半ニシテ戦場ニ赴カントス　真紅ノ櫂トノ袂別ノ日遂ニ来ル　吾等ガ感慨豈深カルザルモノアランヤ　然レ共想ヘ国難襲ヒテ祖国ヲ脅カシ祖国ノ存立今正ニ危殆ニ瀕ス　今若シ吾等起タズンバ誰カ能クコノ危局ヲ打開スルモノアランヤ　時恰モ良シ学徒出陣ノ大命吾等ガ頭上ニ下ル　今コソ吾等蹶然起ツテ国難ニ馳セ参ズルノ時ナリ　祖国ノ興廃正ニ一ニカカツテ吾等ガ双肩ニアリ　皇国学徒ノ本懐之ニ過グルモノアランヤ　吾日本ヲ愛ス故ニ吾一橋ヲ愛ス故ニ吾端艇ヲ愛ス　トハカノ日烈日ノ下或ヒハ雪霜ノ間常ニ吾等ガ唱ヘシ信条ニアラスヤ　祖国ニ直接ツラナルガ故ニ端艇又無限ノ光輝ヲ沿ヘシモノニアラズヤ　吾等ガ日頃ノ鉄火ノ如キ肉体ト精神ノ錬磨ハ実ニ今日コノ時アルガ為ノ難行ニアラザリシヤ　一橋端艇道ノ真髄ヲ発揮センハ正ニ今日ヲ措イテアルヘカラス　学徒出陣ノ大命畏クモ拝シテハ光栄素ヨリ高ク衆望素ヨリ大ナルモノアリト雖モ吾等須ラク酔フベカラス甘ユルベカラス　只管峻烈ナル現実ヲ直視シ愈々必勝ノ信念ヲ固メ不撓ノ決意ヲ錬リ誓ツテ頑敵米英ヲ撃滅シ以テ上宸襟ヲ安ンジ奉リ皇国ヲ富岳ノ泰キニ置カントス　然レ共戦ノ庭ニ生死自ラ問フヘキニアラス　今吾等一度端艇ニ袂別シテ戦場ニ赴キシ上ハコノ身ニシテ他日再ヒ揺籃ノ地墨堤ニ帰リ来リ懐カシノ真紅ノ櫂ヲ手ニ執ランハ素ヨリ期シ難シ　肉体或ヒハ南溟ニ或ヒハ北洋ニ滅ビントモ吾等ガ魂魄必ラスヤ墨江ニ立チ帰リ永遠ニ端艇ト共ニ生キルコトヲ信ス　在学生諸兄ヨ兄等ガ出陣ノ日決シテ遠カラスサレド其ノ出陣ノ日迄兄等ノ双手ヨリ断ジテ櫂ヲ放スコト勿レ　然シテ出陣ノ日来ルニ及ンデハ一橋端艇人ノ逞シキ闘志モテ吾等若シ生アラバ吾等ト伴ニ吾等斃レナバ吾等ガ屍ヲ乗リ越ヘ米英撃滅ノ最後ノ日迄邁進セラレヨ

聊カ所信ノ一端ヲ述ベ以テ答辞トス

昭和18年11月14日

東京商科大学一橋会端艇部

出陣学徒代表学部２年

鈴　木　邦　治

ピンネース競漕会・新艇香取・学徒動員

（昭和18年）

後藤隆之（昭和19年学卒）

昭和18年，戦争は我々の知らないところで，せっぱつまっていた。一橋の徽章マーキュリーが敵性的だと，どこかで陰険にささやかれていたらしい。高瀬荘太郎学長が万一に備えて，日本の紋章文献を調べられているのを，私は眼のあたりに拝見した。欧米スポーツの禁止がじわじわと押しつけられて来た。私たち一橋会の役員数名が，文部省に小笠原体育局長を訪問して，学生の気持を訴えたこともあった。

新入生のクラスチャンレースは，その伝統にもかかわらず実行不能に陥っていたと記憶する。その打開策として，予科ＨＣＳレースが行われた。石川島の水産学校（？）から競

漕艇ピンネース（海軍のカッターの一種）を借りて練習に精進せざるを得なかった。向島でフィックスならぬピンネースの大会を持ったとき，一橋端艇道は死なず，尚生きつづけてるのだと自分自身に云い聞かせていた。

× × ×

端艇部の財政も苦しかった。どうしてもインターカレッヂに優勝をと，遠山不羈夫先輩の音頭で寄附が集まり新艇エイトが建造された。昭和18年5月中旬の頃昭和年武運の香取神宮からとって戸田ボートコースで命名進水式が挙行された。対校選手がユニホームで列び，神事があり「新艇は香取と命名する」と宣言された時，遠山先輩が一瞬ビックリされたのを鮮明に思い出す。氏の御令室のお名前が香取様であると，後で聞かされた。

5月29日，30日がインターカレッヂ。その前夜，遠山先輩がワックスを持参されてボートのすべりを良くしようぜと，心をこめて私たちは艇に塗って磨きあげたのだった。すでに物資の欠乏のひどい時であった。遠山先輩はテキ屋のルートを頼って，何とかいう相当な親分を訪問して，苦心のすえ手に入れられたワックスだったと語られた。

しかし，一橋クルーは今度も敗北の涙を流した。それはまた永久にボートを漕ぎ艇庫の虫となる日が去ってしまった悲しみと怒りであったかも知れない。隅田川でボートを漕いでいると岸辺の心ない人から「穀つぶし」などとののしられることさえあった。8月から9月にかけて，北海道千歳空港（海軍）への勤労動員。そして11月14日は思い出の向島で端艇部の出陣式，つづいて12月1日私たちは軍隊の門をくぐった。

戦中派ボートマン

（昭和20年～22年）

橋本　博（昭和22年学卒）

敗戦。悪夢の様なと人は云う。然し私はこの戦いに青春をかけた。海軍特攻隊艦上爆撃機の操縦士として基地に待機していた私は敗戦後間もなく8月中に復員した。武蔵小金井にあった我が家は幸いに戦災をまぬがれて居た。それから毎日国立の大学へかよった。授業に出る気はなくボツボツ復員して来る友達先輩に会うのが嬉しかった。そのうち河が恋しくなって艇庫を訪れた。商大東大の艇庫だけが焼け残り早大その他の艇庫は全部戦災にあって居た。浅草も向島も全く変って了って居た。ただ河は澄んで吾妻橋の上から多勢の人が糸をたれてはぜ釣りをして居たのが未だ目に残って居る。隣りの東大の艇庫には理科系で徴兵を免れて居たボートメンが合宿して居りエイトを出して漕ぐのを見た。カッターならぬボートのオールの感触が懐しく早くオールを握りたい気持で胸が一杯になった。

その年の11月漸く8人の艇友を集め東大と艇を並べることになった。たまたま後楽園球場で全早稲田対全慶応の早慶戦が行われた。新聞は陸に早慶河に東商と明るいニュースとして報道した。その時のクルーの名前は思い出せないが私が7番を漕いだこと，ニュースカメラマンがモーターボートで追いかけて来たのを思い出す。レースは練習を積んで居る東大に比すべくもなく大差を以て敗れたが戦後初めてエイトを漕いだ事だけで満足だった。

次の思い出は戦後第1回のインターカレッジである。物資不足で始終腹をすかして居て何がボートだと云う声もあったがボートを漕ぐ魅力を知らない人々には分って貰えない事である。最初私が主将でクルーを編成する予

定であったが１年先輩のボラこと鈴木邦治氏が復員したので彼に主将になって貰った。コーチは今はなきヒョロこと柵山三好氏であった。合宿開始は21年９月６日である。あと当時の日誌から抜すいする。

９月10日，夜十五夜，月に照らされた隅田の流れ船台がギイギイ揺れている。幾多の先輩同僚が今次大戦で散った。その霊魂が嘗て青春の一時を歓喜と苦脳の中に送った隅田の艇庫を訪れて泣くが如くむせぶが如く聞えて来る。バルコニーに横になって空をみている私の眼からは涙があふれて止まらなかった。

９月28日

同宿している早稲田の昼食の事で皆くさった。スキヤキの匂いがプンプンする，私達はウドン粉のたらし焼と芋である。栄養不足について文句多し。然し午後の練習で太平洋まで行き帰って来るとコーチが来て居て土堤コーチで絞られた。絶好のコンディションの下で低ピッチのパドルで艇を走らせて上って来ると一遍で憂うつが吹き飛んで了った。ボートメンなんてえらく単純な者であるが只ひたすらに艇を走らせると云う純粋な気持は非常に尊いものではあるまいか。

10月１日

連日の秋晴れでボートを漕ぐのも楽しくなって来る。我々は現在の条件の下で最善の練習をして行けば良いのだろうと思う。体力食糧の不足等悪条件があっても合宿して好きなボートを漕げると云う事丈で十分満足しなくてはなるまい。バックメンの食糧調達の努力には深く頭をさげる。

10月６日

午前10時より，午後は２時より練習，尾久でレースコースを引く，へばり方甚だし，ケチョンケチョンにへばる。練習後スパート会を兼ねて四神会あり，ビールを痛飲する。柵山コーチ，工藤，藤井先輩より色々御批評を伺う事が出来た。敵は何と云っても東大である。

10月12日

今日は午前午後練習，非常にへばったが午後の練習には相当走る。

本日抽選あり。１回戦は独漕，２回戦は早大一高の勝者と対戦決定す。東大も１回戦独漕２回戦は慶応工大の勝者と対戦，矢張り東大が最後の相手である。

10月19日，20日とレースあり，遂に宿敵東大に名をなさしめて了った。

翌年春のＨＣＳ大会があった。

後藤が主将で私は副将格，コーチはテングこと堀川富太郎氏であった。後藤，加々見，野村，私と対校選手４名を揃えたH組に敵なく完全な圧勝であった。

レース後の懇親会で後輩の馬場等から対校を降りないで呉れと云われたが，卒論も書かねばならず私の心は降りる事に決まって居た。

降りると云って馬場から一本背負で投げられた事を思い出す。皮肉な事に鈴木，後藤，私とクルーの中心として自負して居た３人が降りたあと，昭和22年のインターカレッジに商大は優勝した。そのニュースを既に就職して居た私は岐阜の山奥で聞いた。

（52年６月，同氏の手記より）

敗戦直後のボート部

（昭和21年～26年）

畑　　弘　恭（昭和26年学卒）

21年の秋は戦後初のインターカレッジで，一橋対校選手エイト，予科専門部のフォアフィックス各１艘と計５クルーが一挙に合宿を行い，食糧消費も少なからぬものがあり，こ

れが補給には甚だしく苦しんだ。配給には当時騒がれた遅配欠配に脅かされ剰(あまつさ)へ米，麦，薯，豆類等の綜合配給であって，補うに常磐沿線の米，東部沿線の麦，薯等を以てした。それすらも汽車の乗車制限によって思うに任せず，片道切符のみ持って復路は無札に依った自爆的買出も今から考えれば懐しい思い出であり，又粥をすすって出艇した練習は悲しい思い出である。

22年の秋は対校エイト，同フォア，専門部エイトとが合宿を行った。此の年は前年に比して質的には低下したとも言える。専ら玉蜀黍粉が猛威を奮い，殊に専門部クルーの玉蜀黍粉を主食としての猛練習は涙ぐましいものが感じられ，皮膚の色も黄色く変化した程であった。対校クルーも負けず之を利用し，水で練って蒸した団子は「艇庫コロッケ」の異名を頂いて同年エイト，フォア両者優勝の原動力として力あったのかも知れない。配給事情は前年に比して向上も見られず，大いに補給を行った筈であるが何処へ遠征したものか思い出せない。

23年は対校エイトのみ出漕し，全日本にフォアも出漕したかと思う。この年も配給は不充分であって米は精々2分の1程度で，丸麦なども加わって米の補給には苦慮せざるを得なかった。目的地は千葉県京成沿線に在った。取締はきびしくさりとて合法的には事は運べず，端艇部の部印を4つ5つ押して証明書を仕立て無事通過した事もあり，2，3日毎の買出しは悩みの種であった。この頃の給与基準はパン等も含めて3合5勺位であったろうか。

24年，25年は確かに楽になった。2合1勺，2合3勺，2合5勺と変化した。配給基準も2合8勺に切上げられ，米食率も徐々に向上し，艇庫周辺私設営団も発足して，入手面の苦労は大いに解決され，代用食も廃止され，練習に対して最も恵まれた状態に復帰したようである。只毎年襲い来る台風は向島に於ける食糧調達の主幹ルートをなす東武鉄道を麻痺せしめ，「洛陽の紙価」ならぬ向島の米価を高からしめ，米櫃を脅かし生活面に恐怖をもたらした。

ともあれ今や我々の生活の糧，力の源泉は，戦後に於いて最も恵まれた状態に立戻り，質的にも量的にも，思い出としてのみ数年前の状態を考え得るのである。

（26年10月，部報復刊第4号より）

思い出すもの

（昭和25年～27年）

三　堀　正太郎（昭和27年学卒）

２年間キャプテンをやり，第１回から３連敗。特に25年には，整調をして出漕直前に観衆にブレードを踏まれ，只１本のスペアオールもない経済事情から，全く合わない短いオールでレースをやり，敗れた無念さは，現在の一橋を勝たせるためのバックの仕事に熱を入れる原因ともなっている。

26年には戦後初の銚子遠漕。偶々７月のお盆の最中であり，利根の卒塔婆の供養をした。レースは初の6800m。大敗して永代から観覧艇の作った攪乱の中を，涙を流しながら延々と漕いだ４本漕。朝日新聞が寄贈してくれた羽左衛門の様な耳の大きなカップを，東大米谷主将と共に受けた時は，必ずや一橋の手にと思ったが，遂に一度も手に出来なかった。

当時のボートは，苦しい食糧事情の中，先輩の支援は勿論だが，向島と近辺の人情，風物に支えられて来た面も多い。

川に出れば，子供達から「腹っぺらしー」と叫ばれたが，さすがに向島付近ではそんな事もなく，町の人々はボロを着て歩く我々を「ボートさん」と呼び，大いに学生の特権を認めてくれていた。

吉沢の床屋との競馬談義。番台の所で女湯を見ながら話し込んだ堤湯のおかみ。蔦の外常経営の氷屋の３人娘とヤス兄い。久月の屋台とそば屋。いつも一橋にビール１箱を賭けて取られていた吉野鮨のデブ祖爺。散歩コースの鳩の街の哀愁とたたずまい。そんな雰囲気の中で，飢えはしても豊かな心でボートを漕げた事を思うと今昔の感に堪えない。

屠殺場から豚の頭を買って来たり，神田の残飯の南海シチューを食べながら頑張ったのもこの頃までで，この２，３年後には急速に諸事情好転し，物質的には恵まれた事になっていく。しかし，先輩の支援は昔乍らであるが，町の人々との交流に於て，現在の学生を気の毒に思い，向島をのみ懐しむのは，ロマンチックすぎるであろうか。

主体性の確立

（昭和27年）

長　岡　　孝（大正７年高商卒）

戦後，一時放心状態とも言うべき姿にあった母校端艇部も，今年あたりようやく息を吹きかえしたと見受けられるに至った。にも拘らず，向島の艇庫のバルコニーに立って河を眺めると，何かしら，重ったるい感じがする。言うまでもなく一橋が勝ち抜いて居ないからだ。

この重苦しい気持を如何にして漕き抜けるべきか，何年か何度か同じ事を考へ乍らいつも時が来れば同じ目を見ているという事は一体どう言う事であるか。

そもそも，一橋のクリュウ程一生懸命に練習するものはない。が一橋の艇程ギコチなさの抜け切れぬ艇も亦少い。ということは一橋

そのものに何かバランスの取れぬものを包蔵しているのではなかろうか。

自分の感じているところでは，「戦う一橋」の中心にクリュウがどっかりと坐っていないように思われる。ロウイングに於ては，他の運動競技に比べて特にプレイヤー即ちクリュウ自らが，自分達の力，身心の両方からあふれてくる力，を最も有効に，適時に而もバランスを取って出し切る必要があるにも拘らず，一橋のクリュウはいつのまにか「戦う主体」の座からズレて終っているように思われる。先輩は殊に，直接クリュウに接触するコーチングスタッフは70年の伝統を背負って「この一年」にその持っているもののすべてをクリュウに注ぎ込もうと力を尽すのであるが，不幸にしてその力の尽し方は，クリュウに外面から漕法を，戦法を解説するのに手間取ってしまってクリュウ自らにロウイングの面白味——例えて言えば学問の面白味に等しい味——を感得させ，進んで競技としてのレースの面白味を身にしみて汲み取れるような境地にまで進ませる暇のない間に年に一度のレースが来てしまっていたように思われる。

「戦う主体」がキチッとすれば，そのロウイングは必ず合理的な無駄のないものにならざるを得ないし，如何なる戦いにも弾力のあるペースを持つようになるし，土手から眺めている吾々の眼にエヴリイ・ストロークがほんとうにこたえるようになるのである。

一橋はいま歴史始まって以来最もボートに明るい端艇部長を持っている。四神会は今や一橋全部のものに成長した。戦いは，一橋の総力を挙げて行わねばならぬことは素より乍ら「俺がやるんだ」と言う主体がなくては一橋は永劫に勝てない。

（27年　月，部報復刊第6号より）

惜敗の記

（昭和28年）

一橋大学学長　中山伊知郎（大正12年学卒）

9月6日のレースは，見ていて文字通り惜敗という感じであった。準決勝のタイムからゆくと早大，一橋，北大となって居り，早大が決勝における強敵であることは充分に予知されていた。如何に，どこまでついて行くか，どこでチャンスをつかむかが問題であったといえよう。

果してレースは最初から息もつけぬような熱戦であった。1,500あたりで見ていると三つの艇身が視野に入ったときには，すでに第2コースの早大が若干の優位を示していた。しかしそれから，ゴールまで殆んど全コースをよくついて行って水をあけなかった。朝日招待レースで一艇身の差をちぢめつつ最後に早大を打遣った記録を念じながら息をのんでいたというのが見ている人々の気持であったであろう。

夢は遂に実現せず，差は半艇身に近いところで敗れた。華々しいせり合いの見られなかったことと，最後の艇差とだけを考えると惜敗とは見えぬかも知れぬ。しかし実力一杯寸分のゆるみを見せずに最後まで闘った経過は実質的に明かな惜敗である。

決勝にのぞんだ3者の実力の差はまことに紙一重であった。それが惜敗という結果を生んだのである。僅少の差と大きな結果との相違，これはわれわれに新しい反省を要求する。話はとぶが今度久しぶりに西欧諸国を視察する機会をもって痛感した第一事は，まさにこの僅少の差であった。

学問においても生活においても，日本と西欧との間に横たわる相違は，個別的に比較してゆくと案外に少い。学者の中にも個人的に西欧に比して少しも劣らぬ人のあることはいう迄もない。研究会といった専門の場を見ても例えば一橋の経済研究所のそれは，ケムブリッジのデパートメント・オブ・アプライトエコノミックスのそれよりも遙かに上である。道路にしても西欧の何処でもが京浜国道の幅をもっているわけではない。

時計だって一つ一つをみれば精工舎の時計がスイスの何かより優秀だということもあるであろう。一つ一つをこのようにとり上げて見ると相違は思いの外に小さい。ところがよく見るとこの小さい様に見える相違が実は大きな文化の差を生み出す基礎になっている。

第一に日本の場合は不揃である。学者を学界というところまで広げて見るといかにも見劣りがする。設備もでこぼこがあって全体の能率は最大公約数的に低いところにおちつく以外に仕方がない。第二に，一つ一つに念が入っていない。道路にしても幅はあるが深さがない。ロンドンの市中の道路は3米の底からつみ上げてあるが，日本の場合は1米に足らずそのために常に掘り返して修繕している。

西洋の皿は25枚つんでも形が崩れないが，日本のそれはそこまで積むことが出来ない。僅少の差の根底には実は一朝一夕にして築くことの出来ないこれだけの相違が横たわっている。この故に，この僅少の差のつみ重なったところから大きな文化の相違が生れて来るのである。本当に日本の再建を考えるなら一見して僅少の差と見えるこれらの点を真剣に掘り下げて，大きな将来の大成にそなえることを考えざるを得ない。

話が大きくなりすぎたが，ボートの場合でも同様である。惜敗を惜敗たらしめた僅少の差は新しい反省の資料として吟味されなければならない。ここから一橋端艇の将来が生まれるであろう。しかし幸に惜敗であった。この差は東西文化の場合のように容易に架橋し難いものではない。惜敗の文字を生かすためにもわれわれは反省の中に明日の目標を確立したいと思う。

（28年9月11日記，部報復刊第9号より）

カブトのスパルタ教育

畑　　弘　晃（昭和28年法卒）

その年は新人ばかりなので強化合宿が6月10日より3週間行われた。之に先んずる1日からの通い練習の最中，当年のコーチ「カブト」（平野氏）が現れた日を思い出す。「カブト」は有名なスパルタ教育者だ。体の出来てない現在の名整調仲野と僕は，何百本何千本ローイングマシンをやらされたか解らない。その練習，肩を抱えて体が飛ばないと突き飛ばされるのだ。つんのめって後倒しになり後の床で頭を打ちそうになったり，足の甲は破れて血だらけ，気も遠くなった頃「ラスト100本」が掛った時は嬉しいやら悲しいやら。

合宿は差当っての目的がなかったので悠々たるものだったが，練習はきつかった。

早朝練習を終って学校に一時限に間に合う様に行く。昼食後直ぐ帰り3時頃艇庫に着くと待っていましたと「ゲットレディ」。そして合宿に入って翌日から3日間に4隻が赤羽廻りをしている。その1度，「カブト」がコックスで赤羽廻りをした時，何も知らぬ我々を乗せて尾久の突当りからパドル。計5,000m余を赤羽まで行ってしまった。あの豊島橋

のカーブをパドルで抜けた「カブト」の腕に感心させられるがそのときの嬉しかったこと。途中で「お前は艇を進めているのか，止めているのか」と言われた時の辛さ，苦しさ，今でも耳に残っている。

最後の赤羽廻りは6月28日，山田さんの到着を待って5時過ぎ。10m先も見えぬ驟雨の中を出艇。江北で釣糸を引っかけた時と赤羽1分休憩以外のノーストップ。2時間10分の行程だった。雨水だけでシート迄浸水したのだからその凄惨だったこと。唯オールだけを見ていた放水路，真暗な尾久コース。プレードも見えない鐘ケ渕で「艇庫の明りが見える」の大磯コックスの声。今もありありと眼前に見える様だ。その夜で総計9名の淋しい対校選手合宿は解散。翌日から語学の試験が始ったのには参った。

（27年12月　部報復刊第6号より）

敗戦の記

（昭和26年）

端艇部長 村松祐次（昭和8年学卒）

午前の課業を少し早目にやめて，雨を衝いて艇庫へ行ったら，中山学長はもう来て居られた。間もなく三谷大先輩が見え，大森さんその他の先輩方も段々に見えられた。天候が悪いのに，大ベランダは先輩学生で満員である。3時半に中川お面氏や，柵山三好や，浅沼貫々や，曽祢冬来山人と40歳以上のO・Bレースに出漕して敗けた。前後して，30歳以下，同以上，50歳以上のO・Bが次々に惨敗した。学生吉村一高に先輩もダラシがないと叱られた。

やがて雨が上り，川は銀色に静まり，落水は強いが，絶好のレース日和になった。三谷先輩を顧問艇に御乗せして観戦する。南原総長や東陽氏，宮沢ベン先輩や伊藤猫君なども乗って居て，呉越同舟である。白髭橋をくぐり，スタートの少し上でまっているが，仲々両艇ともスタートにつかない。やっと商大がスタートについたかと思うと，殆どその瞬間にレースが始まった。放送等の関係でスタートの時間が厳守されるから，遅れてスタートに着くと，あわただしいことになるのだろうと思った。

ハッと思う間もなくスタートして，そしてトタンに少しリードされた。言問の下で一寸いい調子が出たかと思ったら，逆に之に対抗してかけられた向うのスパートが効いて，大きく水が入った。そしてその後は，1本1本着実において行かれ，遂に負けた。

危うございますと言うのをきかずに，顧問艇の舷側に立って居られた三谷先輩は，厩橋をくぐってしばらくしてから，「入る」と一言いわれて，艇の中に下りて腰かけられた。80を越えた三谷さんは，此のレースを見る為だけの目的で，遙々上京され，そして今日は殆ど体力の限界迄，やたらにラーチする舷側に，水をかぶって立って居られたのである。何とも申し訳ない気がした。南原先生は大変に御元気で，顧問艇の上に仁王立ちになって観戦せられた。心中必ずや得意であられたろうと推察する。

薄暮に吾妻橋ビヤホール楼上で開かれた両大学の懇親会は盛会であった。但しカップを5つもゴッソリもって行かれた後で，当然のことだが，本学側は気勢が上らなかった。大分他校の先輩からも批評を聞いた。別けても手厳しかったのは或る早稲田の先輩で，商大は水上の動作は美くしい。然し水中のオール

が之に伴わなかったから敗けたのだと言う。尤もつい2日前の観漕会の時には，とても強かったのだがなア，とも言っていた。何を言われても黙って居る事にした。四面楚歌である。われ又何をか言わんや。

艇庫へもどって，ビールを呑み乍ら，先輩の方々から色々な話しがあった。自分には，君塚茂太さんが，「我々は非力であった為に敗けました。一体ボートでは強い奴が勝ち，弱い奴が敗けるのは，あたり前であります。」とズバリと言ったのが印象的だった。色々な原因があろう。しかし結局の所一橋の総力を結集したクルーが，敗けた事だけはたしかである。もっと強くならなければ勝てない。そして，此の事の反省が足りず，敗けても勝っても，ボヤボヤ，ニヤニヤして居る様な気分が，少しでも残って居ては，艇や漕法や調子についての反省も，悪くすると言い訳けがましい事になって了う。敗けた後は，黙ってコツコツ練習するに限る。漕法の事は名コーチ柵山に聞けば良い。夢中でコツコツやって居る時が，自分もそれと知らない間に，何時の間にか弱かったクルーが強くなりつつある時なのである。但しこの厳しい猛練に耐える為には，よほど強く勝つ決心，敗けない執念をもたなくては駄目だ。

月曜に学校へ行ったら，ラヂオをきいて切歯扼腕していた山口茂，山中篤太郎，村松恒一郎等の諸教授から，ギュウギュウとっちめられた。ダラシがないと言うのである。「見に行かなくて良かった」などとさえ言う。数日後には，昭和2年度会が激励会をやって下さって，そこで小田切賢さんから，商東戦を日本漕艇界の権威的行事たらしめる為にも，勝敗はとにかく，せめていいレースをしなくてはいけぬと，耳の痛い御叱りを受けた。久々で井手さんの激励演説も聞いた。味の素の宮路さんからは「勝敗の差は紙一重だ。しかしその紙一重の間に，天地の開きがあり，本当に勝たうと思わなくては，仲々勝てないのだ」とも教えられた。皆ごもっともである。又何をか言わんや。黙ってうんと頑張って，今度こそ一つ勝ってやろう。

（26年7月，部報復刊第3号より）

自信の欠如が敗因

（昭和31年）

——五輪ボート予選を反省する——

畑　　弘平（大正14年学卒）

過去1年間全一橋関係者の全幅の期待を集めて来た我一橋クルーのメルボルンへの夢は無惨にも破れて了った。何とかして勝ち度い勝たせ度いと考え自然大学当局はじめ各方面の先輩にも色々格別の御配慮御援助を願って来た事であったが此の始末で本当に残念，常日頃選手諸君に最も接触の多い一先輩として又，四神会の世話役の一人として，選手諸君と共に各方面に対して「御期待に副えず本当に済みませんでした。早速来年を期して出発します」と深く遺憾の意を表する次第である。

扨て戦敗れた原因は如何，之には色々の点が考えられるが此際は其の根本的な主として精神的な面を掘り下げて今後の勝利への糧と致し度いと思う。

私は最近大阪在住の同級生，一橋を愛する事最も熱烈な親友から深く其辺を衝いた1通の便りを受取った。

「素人が何をいうかと叱られる事かとは思

うが永年の輝かしい伝統が逆に選手諸君の重荷と成っているのではなかろうか。謂う意味は，先輩の残した業績に眩惑されて一応他校に対し優越感を抱き，いい難い事だが一種の軽視という様な気持が動いて却って何が何でも負けられぬというような強迫観念とも謂うべきものに囚われて肝腎の一戦に伸び伸びと漕ぎ切れぬような事はないか，（中略）技術よりもメンタルの面で欠ける処は無いか」というのである。真に痛い批評，之に対して私は取敢えずの返事として「伝統の力に守られる一橋クルーが却って其の伝統を重荷として敗けたのではないかと考えねばならぬ現実は本当に寂しい」という意味を書送ったのであるが兎も角右の友人の申越に対して「そんな馬鹿な事は無い」といい切れぬ処に（今迄も左様であった如く）一橋クルー今後の勝利への鍵がひそんで居ると思うのである。然り私は一橋の赫々たる伝統を偉大なる推進力にするのも，重荷とするのも，一に懸って選手諸君の考え方の一転回と其の上に立つ心身必死の鍛練とによって決すべく，依而以て一橋クルーの勝敗が岐れる事と成ると信ずる。

即ち，私は今の選手諸君が「伝統の上に立って他校を軽視」したり，又其の結果として「何としても負けられぬとの考えから伸び伸びと漕げない」ような事が仮にも無いよう，とくと猛省を要するは勿論，更に進んで一橋クルーが従来とも兎角其の持力を十分に発揮出来ない場合の多かった点を根本的に深く反省して，今一歩従来の「是が非でも負けられぬ」との考え方を乗り越えて「必ず勝つのだ勝てるのだ」と考える境地にまで心身の鍛練を進めるならばあえて優勝の確保は困難でないはずだと私は考えるのである。

さらに今度のレースにしても，たとえば対京大戦になぜ水を入れられるまで抜かせておいたのか（？）京大クルーの前半が特に強いのは定評あるところであったにしても，あの場合一橋大の実力をもってしては水を開けさせてしまっては戦は負けである。なぜ五百米から千米の辺りで今一，二戦交えなかったのか（？）私は審判長として五百米辺の指揮所にいて実は懐さにたえなかったのである。「左様な無理なスパートを連発しては，後半崩れてかえって大敗する」という言いわけは聞いたが，およそボートレースは艇差やタイムの競争ではない。一発勝負，１寸でも１尺でも勝てば良いのである。したがって決戦決戦を続けても敵を完全に圧倒すべきである。なおこのように決戦を続ければ後が崩れると考えるのは弱気と申すべし。このためにこそ長い長い練習を続けて来たのではないか(？)この「後で崩れる懸念ありとする考え」即ち自信の欠如こそが（昨年も左様であったが）今年の最大の敗因と考えるのである。

この辺を含んで予て私は口癖によく「レース中今一度余計に死ねば勝てる」と選手諸君に話すのであるが，要するにボートレースも今次決勝リーグ戦位の高度のレースになると勝敗は紙一重，所詮精神力の戦の一語に帰することとなる。夫れは死闘の連続であり，従ってレース中何時何回「死ぬ」かが問題となる。かくて相手より一度でも余分に有効に，「死」にさえすれば勝てるともいえるのである。即ち右の「死」は「活」を意味する。何卒一橋クルー諸君よ，レース中何度でも「死」ねるクルー，左様な自信のあるクルーであって欲しい。これこそ一橋の輝かしい伝統を仮にも重荷とせず，正しく推進力とする尊い道と信ずるのである。

勿論此の他にも漕法上にも，またレースへのコンデイションの整え方や表面目立たぬ問題であるが之亦最も重要なる敗因の一つと考えられる「サブ」（補欠選手）の運営方法，その他に於てもなお研究改善の余地は多い。が一番の問題は上記の精神力の問題であることを此際更に深く認識して「今年の一橋クル

ーは例年と異り競り合い（戦争）に強い」といわれ乍らも脆くも敗れ去った戦の跡を深く深く反省して奮起して貰い度いのである。

以上いわんとして之を尽さぬ憾はあるが，私は茲にコーチ諸君，選手諸君と共に敗戦の跡を辿り来年のレースへの門出の餞とする次第である。妄言多謝。31. 9. 2

一橋大，エイトに優勝

（昭和34年6月）

四年ぶり 対東大ボートレース

朝日新聞社後援，第11回東大対一橋大のボートレースは7日午前9時半から隅田川向島コースで挙行，呼物の対校エイトは午後2時半浅草東武鉄橋をスタート，鐘ケ淵まで逆航3,100mコースで争われ終始水の開かぬ大接戦をくりひろげたが，一橋大が3分の1艇身東大を押え4年ぶりに優勝した。これで通算成績は東大6勝，一橋大4勝（中止1回）となった。なおジュニア・エイトは東大，フォアは一橋大が勝った。

◇対校エイト（3,100m）
①一橋大　8分53秒5
②東　大　1/3艇身

◇ジュニア・エイト（同）
①東　大　9分54秒0
②一橋大　6艇身

◇対校フォア（2,000m）
①一橋大　6分55秒8
②東　大　4艇身

◇OB30歳未満エイト（1,000m）
①東　大　1分35秒7

◇同30歳以上エイト（500m）
①一橋大　45秒8

◇同50歳以上エイト（同）　①一橋大
①一橋大　54秒0
②東　大　30㌫

〔評〕 途中2，3回両艇が接触気味となったのを除けば，実力は伯仲でなかなか好いレースだった。薄照りで潮は上げ始め，右斜後の微風，まず絶好のコンディションに恵まれた。東大は50，一橋は48のピッチで飛出す。スタートの手際は東大の方がよくそろって巧かったが，一橋もすぐ立直り48—44—41—38と見事なセット・ダウンで両艇ほとんど並行で言問橋（約300m）をくぐる。一度ピッチを下げた東大は山谷堀（約500）でスパートを入れ1—2mリードしたかに見えたが，

対校エイト

【一　橋】		【東　大】
藤　本	C	中　野
内　藤	S	佐　藤
広　岡	7	望　月
林	6	赤　峰
西　村	5	田　中
柳　沢	4	三　矢
鈴　木	3	小　野
本　多	2	有　泉
稲　垣	B	小　林
176㌫	（平均）	179㌫
71㌔		74㌔

ピッチ表

	【一橋】	【東大】
スタート	48	50
言問橋	41	41.5
山谷堀	38.5	44
洗場	36.5	39.5
会場前	41	41
橋場町	35	38
白鬚橋	37.5	42
水神	40	36.5
ゴール	43	40.5

洗場カーブ（約700）の内曲りで一橋がダブル・スパートを放ち逆に半艇身リード，東大もすぐスパートを報いたが効なく，やや不利な曲り方をした。そのまま会場前カーブ(1,100）を過ぎ次の橋場町カーブ（1,700)にかかる時両艇中央へ相寄り接触気味，東大のストローク・サイド（整調側）のオールが一橋大のバウ・サイド（じく手側）のこいだオールのあわの跡をかく不利となり，一橋は3分の2艇身先行となる。

レースは後半戦に移り白鬚(2,100）のカーブで東大猛烈なスパートで約2m差につめたがここの内曲りを有利に活用出来ず，かえってまた一橋のオールのあわをかく不利に陥る。一橋は落着いたこぎぶりでよくオールを押えつつ3分の1艇身差で水神カーブ(2,500）を回ると逃げ込みに入り，一方東大もイン・カーブを利して追い込み，最後のはげしい競り合いとなったが，ゴール間近でまた両艇接触，オールがからみ合い，一橋の7番手のブレードと東大2番手のブレードがぶつかった。一橋は40—42にピッチをあげ東大の猛追を押え切った。一橋のラスト・スパートで差は3分の2艇身と増したが，ゴール直前で2コースに入って来た荷船と衝突しそうになったため，1度こぐのを止め2，3本ロスして東大に追い込まれ辛勝となった。

実力はほとんど互角といってよかったが，一橋は洗場のスパートで半艇身出てから以後は気分的に余裕を持ったか，比較的に落着いた巧いレース運びで，そのためラスト・スパートがきいた。これに反し東大は平常より早いピッチを引き通し，ことに何度もスパートを入れたために，やや後半の余力を失い，動きが縮まって恵まれた地力を十分発揮出来なかったのと右後方からの追風に禍されたか後半の有利なイン・カーブを活用出来ず，大事なところで一橋のオールのあわをかくという不利にしばしば陥ったのが痛かった。両校とももう一段かじの研究が望まれた。（高橋）

（昭和34年6月8日付朝日新聞）

一橋大，30センチ差で勝つ

（昭和34年8月）

オ大の追込みを振切る

全日本レガッタ　最終日

23日埼玉県戸田コース（2,000m)で行われた全日本選手権レガッタ第3日の最終日は朝のうちは小雨がパラつく天候だったがレースの始まるころにはやみ，弱い斜逆風が吹いてコンディションはまず良好であった。エイト決勝は午後4時半，逆風のうちにオ大，一橋大，東大，東北大の間で行われた。4クルーの力はほとんど互角で，終始息詰まるようなレースとなった。一橋大は前半の飛出しがよくトップに出て，東北大，オ大，東大Aの順でいずれも水をあかせず競り合い，1,700をすぎてからオ大がラスト・スパートで東北大を抜き一橋大を追込んでほぼ同時にゴールインした。写真判定の結果，一橋大が30㌢のわずかな差でオ大を押え優勝，秩父宮杯が外国にとられるのを辛うじて食いとめた。一橋大の優勝は12年振りで通算8回目，戸田コースでは初めてである。レース終了後，南岸高台で閉会式が行われ，エイト優勝の一橋大内藤主将に秩父宮杯が秩父宮妃殿下から渡され，その他の優勝者には古市会長から賞品が授与され，日英両国国旗下で3日間にわたる大会の幕を閉じた。

◇男子スカル準決勝（各組1着のみ決勝へ）
〔A組〕 ①春日井（法大）8分39秒6
②阿部（安田火災）4艇身
〔B組〕 ①好田（早大）8分40秒4
②進藤（学習院大）大差
〔C組〕 ①菊地（慶大）8分47秒4
②中村（学習院大）大差
◇舵手付フォア準決勝（各組2着まで決勝へ）
〔A組〕 ①東京外語大　7分21秒2
②早大　1艇身2/3
③東京医歯大　4艇身1/2
④東大　1艇身
〔B組〕 ①一橋大　7分28秒1
②慶大カンバス
③東北大　3艇身
④東洋レーヨン　1/3艇身
◇舵手付フォア決勝
①東京外語大　7分26秒9
②早大　1艇身1/4
③一橋大　2艇身1/2
④慶大　1艇身1/3
◇エイト準決勝（1着のみ決勝へ）
〔A組〕 ①東大A　6分31秒6
②東工大　2艇身
③中大Aカンバス
④日大　3艇身
〔B組〕 ①オ大　6分32秒2
②京大　2/3艇身
③東経大A　1/2艇身
④早大B　大差
〔C組〕 ①一橋大　6分38秒0
②北大　3/5艇身
③明大A　1艇身1/4
④商船大A　4艇身
〔D組〕 ①東北大　6分41秒2
②慶大A　10㌢
③東大B　3艇身
④関学　大差
◇エイト決勝
①一橋大　6分29秒1
②オ大　30㌢
③東北大　2/3艇身
④東大A　2艇身

一橋大内藤主将の話　スタートが良いので，前半に大きく離し，後半追い込まれればスパートして常にリードを保っていく作戦がその通り出来た。1,900でオ大に並ばれてからはハイピッチで夢中だった。昨年秋から猛練習を重ね，かなりの自信を持っていた。オ大は日本では見られない力強いクルーだ。

遅すぎたスパート

エドワーズ監督の話　一橋大クルーに善戦して敗れたので何もいうことはない。日本クルーは短距離に強いと聞いていながら，われわれのスパートは遅過ぎていたようだ。コースは申し分なく，運営もヨーロッパに劣らない。ただ日本ではスターターが旗を下ろすだけなので，いつ下ろされるか分らず不安だった。イギリスではスターターが“用意”それから“ロウ”（こげ）とどなると同時に旗を下ろす。また審判艇はあった方がよいと思う。日本の計時はよかった。戸田をオリンピック・コースに使うのなら，各国クルーがコース近くで休めるようにたくさんテントを設け，また艇もレースごとに艇庫に上げずにすむように艇用のテントも欲しい。さらにゴール付近で各艇が楽に出入り出来るよう十分なスペースが欲しい。

◇女子シングル・スカル決勝
①阿部弥恵子（安田火災）　5分45秒6
◇かじ無しフォア決勝
①東京外語大　7分56秒9
②日大　2艇身
◇男子ダブル　スカル決勝
①安田火災　9分28秒4
②レイワ・クラブ　大差
◇男子シングル　スカル決勝
①菊地（慶大）　9分12秒3

②春日井（法大）　大差
③幸田（早大）　大差

写真判定のきわどさ

一橋，オ大が同時ゴール

〔評〕 エイトは決勝にふさわしい激戦だった。4艇ともよいスタートを切り，一橋大が鋭いダッシュでトップに立つ。オ大は400では一橋大に1艇身弱の先行を許した。東北大は一橋に1/3艇身，東大はほぼオ大に並んで食い下った。1,000mあたりで東大がオ大を抜き3位に上るかに見えたが，結局，順位は変らず1,500へと移る。ピッチ35のオ大に対し，一橋はずっと37.5で確実にこぎ続け，全員が最後の争いに備えてじっくり待機の形だった。1,500で東北大がピッチ40のスパートで一橋に1/3艇身差につめたが抜けず，続いて1,700からオ大がピッチを37—38に上げて最後の追い込みに入った。オ大は苦もなく東北大を抜き，さらに一橋と艇首を並べた。ゴールまで200mをオ大と一橋はすさまじくせり合い，同時にゴールイン。写真判定で一橋の優勝となった。

一橋大は腕，脚，ボディースイングの調和も，全員のそろいも非常によく，伝統のスムーズなこぎぶりの中に今年こそとブレード・ワークの強化に専心した効果があり，強いキャッチから一気に引くストロークはきれいだが，非力だといわれていた欠陥をすっかり返上，せり合いにも強みを発揮した。伝統の技に力を加えての栄冠であった。オ大は最後の追い込みにすばらしい威力をみせた。ラスト・スパートに入るのがもう50mも早かったら選手権の行方は分らなかったほどだった。

東北大も最後まで一橋をおびやかし全力つきての敗戦だった。最後の300からのスピードがちょっと足りなかったが準決勝で4連勝をねらう慶大Aをしりぞけての決勝進出は立派だった。東大Aも伝統の力でよくやった。クルーが若いためか，まとまり，体の使い方，ブレード・ワークの点でももう一歩力不足の感があった。

今大会はオ大の参加に刺激され，大変活況をみせたが，出場クルーが多いだけで全体の水準が上っていたかどうかは疑問である。一橋大，東北大，東大Aそれに北大，慶大A，京大などがAクラスで互角の力だったため，きわどい勝負が続出したが，コンディションに恵まれた割合には期待のタイムは出なかった。それにもまして30年も前に「日本人には不向きで古い」と捨て去られた英国のオーソドックスなこぎ方が，予想以上の威力を示し，危うく選手権を奪われるところだった。軽量の日本艇に有利な波のない平水コースでさえ，この有様であった。ローマ大会を前に日本のボート界の課題はこの辺から生れよう。荒天で惨敗したメルボルン大会の例とあわせて重大な問題といえる。

また東京オリンピックを開こうとする日本のボート界はエイトだけでなくフォアやペア，スカルにも強力クルーを養成する必要があろう。この点，今年もさびしかった。

（高橋）

（昭和34年8月24日付朝日新聞）

Oxford University Upset in Regatta

Underdog Hitotsubashi Winner by Hairbreadth

By United Press International

Hitotsubashi University's crew defeated the visiting Oxford University shell in a photo-finish yesterday to win the eight-oared title in the three-day annual all-Japan rowing championships.

Hitotsubashi won by a hairbreadth's difference of only 30 centimeters (about 11 inches) over the British oarsmen on the 2,000-meter Toda course.

The Hitotsubashi crew clocked 6 minutes 29.1 seconds and Oxford 6 minutes 29.2 seconds. Tohoku University was third in 6:30.8 and Tokyo University fourth and last in 6:34.5.

The lack of cross winds favored the lighter Hitotsubashi crew in their battle with the heavier Oxford rowers.

Hitotsubashi took the lead at the 600 meters mark from Tokyo University and held it all the way to the finish.

Oxford was in fourth place up to the 1,200 meters mark but the Britishers began spurting. Oxford, with a 37 stroke-beat, crept up to second place at the 1,800 meters mark.

Oxford and Hitotsubashi appeared to be even at the 1,900 meters mark and the smooth stroking Britishers seemed the winner to some spectators at the finish line.

But the judges, deliberating from photographs, awarded the race to Hitotsubashi.

Oxford qualified for the finals when it won its semifinal heat earlier in the day in 6:32.2 with a two-thirds boat length margin over Kyoto university.

Also qualifying for the finals were Hitotsubashi University, Tokyo University and Tohoku University, winners in their respective heats with times of 6:38.0, 6:31.6 and 6:41.2.

(昭和34年8月24日付 JAPAN TIMES)

オ大また敗れる

(昭和34年8月)

一橋大3分13秒4

力漕の東大，2位奪う

朝日招待レガッタ

〔札幌発〕 第7回朝日招待レガッタは30日午前9時半から北海道札幌市郊外の茨戸河湖1,000mコースに英国オックスフォード大学はじめ一橋大，東大，慶大，早大，それに地元北大のエイト6クルーを集めて行なわれた。終始3mほどの横風が吹いたが快晴で好コンディション。デッドヒートの続出は両岸を埋めた約3,0000の観衆を楽しませた。予選

を勝ち抜いたオ大と一橋大，それに敗者復活戦で浮かび上った東大の3クルーの間で決勝となったが，スタートで飛び出した一橋大が2位東大を3m差に押えて逃げ切り3分13秒4で快勝，全日本レガッタと2つのタイトルを獲得した。オ大は東大にも3分の2艇身およばなかった。

◇エイト決勝

①一橋大　3分13秒4

②東大　3分14秒9（3m）

③オ大　3分16秒4（$^2/_3$艇身）

◇同第1予選

〔A組〕①一橋大　3分13秒2（抽選勝）

②東大　3分13秒2（同着）

〔B組〕①北大　3分12秒3

②慶大　1艇身

〔C組〕①オ大　3分13秒9

②早大　1艇身

◇同第2予選

①オ大　3分11秒0

②一橋大　2m

③北大　3m

◇同敗者復活戦

①東大　3分17秒2

②慶大　2m

③早大　$^2/_3$艇身

オ大，一橋大，東大が決勝へ進出

決勝メンバー

	【オ　大】	【一橋大】	【東　大】
C	ロウボサム	藤本	中野
S	ランダー	渡辺	三矢
7	ショー	広岡	望月
6	エドワーズ	内藤	佐藤
5	ハワード	鈴木	田中
4	ラザフォード	柳沢	赤峰
3	エリオット	西村	小野
2	リンゼー	本多	有泉
B	グリーン	稲垣	小林

ピッチ

	スタート	250	500	750	ゴール
一橋大	44	40	41	41	48
東　大	45	39	39	41	48
オ　大	43	38	36	36	37

自信満々の一橋大

“全日本”の快速を再現

遠く手稲山をのぞみ，コース周辺にはポプラがみえ，澄んだ空気にまぶしい日ざしが照りつけたが，冷い北風が吹き，茨戸は秋晴れだ。どのクルーも調子よく，短距離だけにハイ・ピッチの応酬で接戦がつづいた。

まず第1予選で先行の一橋大を東大が半艇身差だった500mから42のピッチで猛追して同着，抽選で一橋大の勝ちとなった。

その他は北大が慶大の45のスパートで500mで2分の1艇身，700で4分の3艇身とともに40のスパートで逃げ切り。注目のオ大もスタートで出たまま早大のミドル・スパートをものともせず35の低いピッチで楽勝した。

北大も地元の声援で闘志満々，艇足は軽快だったが第2予選で一橋大に先行され，オ大にも後半押えられて僅か1シート（約1m）差に泣いた。

オ大の追い込みは相変わらずもの凄く，700mでは北大と平行して一橋大に3分の1艇身遅れていたが「短距離はハイ・ピッチでないと……」とはじめて38のコンスタント・ピッチで漕ぎ，スパートもラストも41にあげたのでさしもの一橋大も逃げ切れなかった。

一方敗者復活戦では東大が早慶両クルーを38のピッチで押えて浮かび上り，決勝はオ大と一橋大，東大の対戦となった。

決勝はオ大もスタートを46から43に落すハイ・ピッチだったが，やはり一橋大の方がスタート巧者だ。オ大と東大を3分の1艇身から2分の1艇身出バナを押えるとそのまま楽に漕ぎ相手の出方をみる。オ大は500mから700にかけて東大を抜き返そうとしたが，東大の41のスパートにはばまれた。

その後はオ大のピッチ上がらず先行一橋大

と東大の48のラスト・スパートに入ったが，3m差で一橋大が逃げ切ってしまった。

一橋大は全日本に優勝しただけに自信満々で使用艇“玄武57”の艇足よく，他のクルーが下り調子なのに反し，全日本当時のローイングを再現していた。〔杉戸〕

勝てる自信はあった

一橋大佐藤コーチの話　前日の午後練習を休んだのでこの日午前の予選はガタガタだった。逆風だったので，決勝では大きく体を使わせ，長く漕ぐようにいっておいた。オ大には勝てると思ったが，東大が一番こわかった。

スタートで遅れとる

東大荒川コーチの話　コンスタント・ピッチで勝負しろといっておいたが，スタートで半艇身も出られてはダメだ。ラストであれだけ追い込んでいただけに残念だ。

ハイ・ピッチに苦杯

オ大エドワード監督の話　日本のクルーがハイ・ピッチで漕ぎとおすので，第2予選ではピッチをあげさせたが，日本の強いクルーには通用しなかった。また一橋大に敗れて雪辱出来なかったが，この北海道では日本のクルーと宿舎が同じで，非常に親しく過ごせたのは楽しかった。

ハイ・ピッチでは日本が上

東俊郎氏（漕艇協会理事長）の話　短距離のレースだったが，どこも強豪揃いだけに見応えがあった。オ大は1,000mのレースなので38から40のピッチで漕いだがハイ・ピッチはやはり日本のクルーの方が巧い。とくに一橋大は水も洩らさぬ巧さだ。今年のクルーにはかなりの漕力が備わっていた。天気に恵まれて，風さえなかったら当然3分を切るクルーが出ていたろう。技術的なことは別にオ大も日本クルーと同じ宿舎に寝泊りして本当の親睦の機会を持てたので，北海道の朝日レガッタは有意義だった。

（昭和34年8月31日付日刊スポーツ）

水の心

（昭和42年）

一橋大教授　太田可夫（昭和2年学卒）

ボートが好きだといっても何でもボートなら好きだというわけではない。僕は一橋のボートが好きだ。だから最後の思い出にと思っ驚，この間戸田の艇庫にやって来た。そしてていた。ここにいる若者は学校にいる若者達とまるで目付が違う。別の大学へ来たのかと思った。皆な生き生きしている。これではボート大学でも作って，ゼミナールに経済学や哲学を開いたらいい。そうしたら経済学や哲学がぐんぐん伸びていくのではないかと思う。ボートをサボッてそれを夢中に勉強するからだ。恐らく今よりももっと生き生きと学問するだろう。

戸田には昔の若者達がウヨウヨしている。幾つになってもボートの事が気になるらしい。うるさすぎる程今の若い者の世話をやいている。この人達が又僕は好きなんだ。学生達はこの人達に頭が上らないらしい。年も若いし未熟だし，教わることも多いし，仕方がない。若さというものはそういうものだ。しかし僕はボート部の先輩ではないから違った目でそれを眺める。哲学者だからいうわけではないが，若さには二つの意味がある。一つは老人に対する若さ，もう一つは若い世紀の

若さ。僕は戸田では若い世紀の息吹きを感じる。それは僕らを乗り越える力だ。老人達を忘れろ。問題は水の心だ。しっかりやれよ。

口述筆記　文責・大久保

（第19回東商戦プロより）

東商戦プログラム余話

塚　田　松　二（昭和4年学卒）

負けた時には殊更に残るべきだ，という普段の考えを実行すべく，台上へ参集すると，ヨウ……松っちゃん…。見ると一橋大教授太田可夫が学長高橋泰蔵と連れ立って近づいて来た。学長は今日のレース会の会長だから予期していたが，可夫の出現は僕を歓ばせた。

オイッ…松っちゃん…プログラムの…これ見たか？と可夫が聞いた。東大のキャプテンだ…立派なこといってるぞオ。彼が激賞した全文を引用する。（133ページ参照）

僕は読んで驚いた。プログラムは貰ったまま丸るめて持っていたが，こんな珠璧の文字がこの中に載せられていようとは夢にも想わなかった。（レースは最後の練習だ）の一句が灼然と僕の胸で燃えた。そして（戸田コースを無心に漕ぐ姿）に深い含蓄のある詩情が漂うことを覚えた。東大クルーに根性があるのも当然だ。ボートを根本から考えている。そして生活の中に織り込んでいる。

僕はこの一文を詩篇のように見た。読後，・然として胸に響くもののあることを感じるのであった。ウーム。僕は唸った。どうだい……いいだろう？　哲学の教授太田可夫は誇らし気に僕の顔を覗き込んだ……。東大の主将に会おうじゃないか…と誘った。ご執心のほど恐縮の至りだが，僕も大いに気が動いた。松ちゃん…オレはナァ…伝統なんかにこだわってるのは採らんねェ…あのキャプテンのボートの考えは正しいと思う…。と一つ僕の背中をドヤしつけておいて彼は語を続けた。ボートは…遊びなんだ…その遊びに生命を打ち込む…お前さんなんかのボートは…そうだったんじゃァ…なかったかネ？

この時僕の眼の前に卒然として向島艇庫内の白壁の上に書かれた文字が浮び上って来た。伝統とは古き生命を克服する新らしき力なり。作者は前田正あたりではなかったと思いながら僕の口は可夫に答えていた。いまだって…。そうだ……。

オイッ…福田君…会うのは初めてだがナァ…キミに一橋大の哲学の教授太田可夫を紹介する…。僕は（おめでとう）なんて挨拶はしなかった。直ちに真を可夫に語らしめたかったからだった。彼はハッと緊張して可夫に正対して頭を下げ，福田です。可夫は矢庭に福田の右手を握り彼も亦挨拶は抜きで，福田君…キミの書いた内容に…ボクは感心した…アレ立派だよ。福田は顔を真っ赤に染め，でも嬉しそうに，イヤ…と謙遜して，あとの言葉は続かなかった。ボクの家に遊びに来いよ…国立の官舎だよ…イイカ太田だぞ……。

福田君との会見はこれで終り2人は瓢々として元の席へ戻って行った。可夫は僕に向って述懐した。ボートはいいねェ…水ってェものもいいナァ…これからレースには…大いに来るぜ。艇は清らかな水の上に泛べしむべきであり，若人たちの眼には秀麗な風光をこそ触れしむべきだという僕の持論は，必ず彼の共感を呼ぶと思ったが，僕はいわずにただ胸の中で思うのであった。オレは，レースを見に来る太田可夫に会いに来る。37.5.28

（東商戦30年史より抜萃）

艇・オールと価格

前田　正（昭和12年学卒）

1　艇の種類

ボートは大別して2種類に分ける。

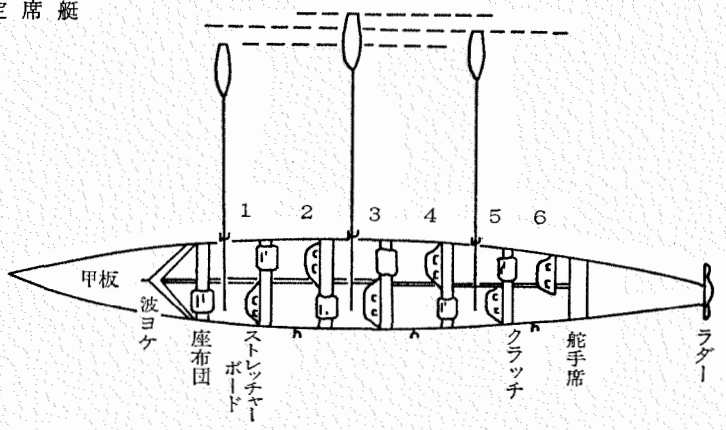
固定席艇 Fixed Seat boat と，滑席艇 Slidingseat boat である。

別な分け方は，外板の張り方による分類で，鎧張りのクリンカーボート Clinker built boat と，一枚張りのシェルボート Shell boat である。

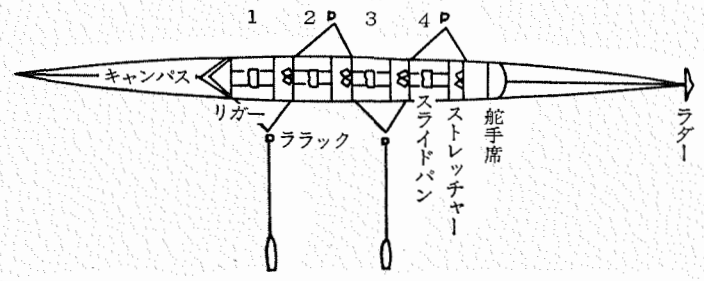
また，外形や構造上の分類では，断面が角張ったナックルボート Knuckle boat と，断面が半円で，継ぎ目のないシェルボートに分ける。

シェルボートは，スピードを速くするために槍のように尖った形状で，造波抵抗が少なく造られている。固定席艇やナックル艇またはクリンカー艇は，浮力の大きな形に造られバランスが安定するよう幅も広くできているので，タブ tub 即ちタライと呼ぶ。

固定席艇



滑席艇



これは Four（4人乗り滑席艇）であるが Eight（8人乗り），Pair，Scull 等もこれに準ずる。

2　オールの種類

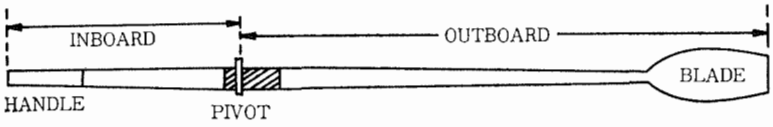
固定席艇と滑席艇では異なったオールを用いる。固定席艇の元祖は海軍や商船のカッターで，現在日本各地にある競漕用固定席艇は通常6人漕ぎである。船体は大変重く，幅が広いため，艇外にアウトリガーを張り出してオールを支える必要がなく，舷側にクラッチを植えつけてある点は公園のオワンボート同様である。オールの軸の断面は直円に近く，中空になっていない。アウトボード out board（クラッチから艇外に出た部分）が長く，しかもオールの重量が大変重いので，重さのバ

ランスをとるために，ハンドの内部に鉛を埋めこむ場合もある。オールの長さは座席によって異なり，中央の3，4番が長く，整調，舳手（6，1番）のオールは最も短く，2，5番のオールは両方の中間の長さである。

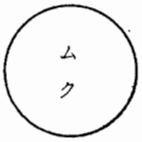
滑席艇のオールは断面が半円で，漕ぐ時にララック Row-Lock の軸に触れる部分が半面になっており，長さは各座席一様である。片舷漕ぎ艇（エイト・ペアなどのこと）のオール sweep oar は長さが3.6～3.8m で日本も外国も大して変わらず，両舷漕ぎ艇（Sスカル，Dスカルなどのこと）のオール scull は長さもブレード blade も小さい。その長さは2.9～3 mである。

競漕艇のオールはすべて，水を軽く楽につかむために，水を掻くブレード blade（オールの扁平部）が極めて薄肉に華奢に作られているから，これで岸壁を突くなど乱暴なことをしたらこわれてしまう。

オ ー ル



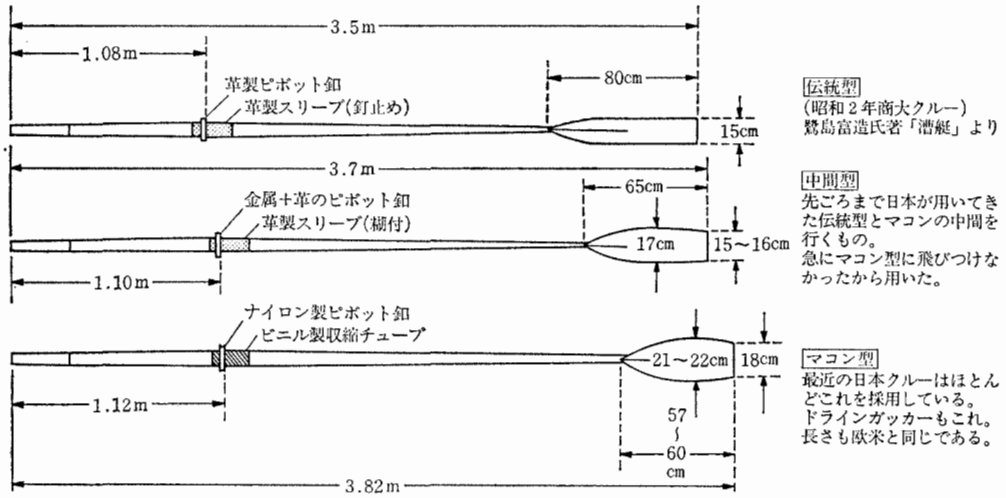
固席艇用オールの断面



滑席艇用オールの断面



リガー付ボートのオールの変遷



3　シェル艇の値段

競漕を目的として建造されているシェル艇は，軽量で華奢であり，またほとんどが1人の職人の手によって造られるため，時によっては名人芸であるから，値段も大変高い。

（昭和50年1月調）

（昭58年２月調）

	艇　の　み	オ　ー　ル　込	艇　の　み
ナックル・フォア	640,000	1,324,000	1,150,000
エ　イ　ト	1,300,000	2,528,000	2,180,000
舵手つきフォア	1,100,000	1,994,000	1,820,000
〃　規格艇	750,000	1,434,000	1,260,000
ダブル・スカル	560,000	1,200,000	1,040,000
シングル・スカル	270,000	640,000	560,000
〃　普及艇	210,000	500,000	420,000
片舷漕ぎ艇オール（１本）	21,000	43,500	
スカル用オール（２本１組）	38,000	80,000	

艇の型式・規格（昭和20年代）

	竣工	全長	幅	深さ	重量	備考
はやし						
白虎三号						
香　取	18.5.15					
国　立	23.9.19					
一　橋	25.9.3					
玄　武	27.6.4	50呎				
青　龍	28.8.9	52呎	23吋	9.5吋	34.0貫	
白　虎	29.8.31	48呎	23吋	9.5吋	23貫	
朱　雀	31.5.23	53.3呎	23吋	15.25吋	23貫	
玄　武	31.	51呎	23吋	11吋	24貫	
玄　武						
鹿　島						
利　根	26.9.	40呎	19吋	10吋	24貫	

ローマへの夢潰ゆ―ローマオリンピック予選

オリンピック出場は一橋端艇部，否，全一橋の多年の夢であった。そして第17回ローマオリンピック程，オリンピックが身近に感じられた事は無かったであろう。

前年度全日本優勝の栄誉を担う対校エイト，第三位の対校フォアには大きな夢と期待が掛けられていた。漕手は練習に，バックメンはバックの仕事に励み，先輩の方々は支援激励を惜しまれなかった。

5月7・8の両日，埼玉県戸田コースには13のエイトと20のフォアクルーがローマ目指して集った。鋭い緊張感が戸田を支配していた。7日，既にフォアは京大に敗れて戦列より退いた。

8日，6分の壁を破る有力な優勝候補我がエイトは，準決勝で慶応大学の追込みに敗れた。一瞬の静寂，メルボルン同様，オリンピックの夢は実を結ばなかったのである。

◇エイト◇

〔準決勝〕

着順	500m	1,000m	1,500m	2,000m
一橋 ②	**1′22″2**	**2′52″2**	**4′27″3**	**6′02″1**
慶応 ①	1′25″1	2′55″9	4′28″7	6′01″8
商船 ③	1′28″5	3′07″1	4′50″0	6′30″9

経過

ストロークサイドから風が吹いていた。青龍は風上とくにストロークサイドに振られる艇だったのでそれを考慮して幾分バウサストロイドよりに目標をとったのが大失敗となった。いつものレースコースと違って風上に振られずそのままの状態で風下の2コースへ流されてしまった。

スタートは10本15本で37.5に下す。例の通り快調なすべり出しで500で10本スパートを入れ下した時に1Lの差が開く。コンスタントでも走りはすばらしくハーフの手前で少し水が開く。慶応がここでスパートを入れてくる。整調と相談して下し際をねらってスパートを入れる。½L位につめられていた。この大事なスパートが思った程でず，一ぱつ決めるつもりでダブルスパートにしたのが，かえって失敗であったらしい。が逆カンバス位で1,300あたりを通過する。ダブルスパートを下してからが悪く又つめられたので1,400で抜かれてはと思いスパートを8本位入れる。スパートを連発した為か大してでずかえって下し際に相手につめられ½Lとなる。このまま逃げ切ろうと1,500にかかってすぐダブルスパートを入れる。慶応もスパートを入れるがシングルらしく一橋より早く下す。一橋は1,700の手前ですこし長く入れたが，第3クォーターでのスパートの連発がたたったか低いピッチの慶応につめられ逆にほんのわずかリードされた。それでコンスタントに下して大してこぐ間もなく相手より早くラストスパートに入れる。ラスト10本も相手より2本位早くかけたが，低いピッチを長く引かれて出られたカンバス位の差を追いつめることができずゴールインした。2コースによりすぎハースでは1コースと2コースの中間位を走っていた。慶応も3コースへ寄っていたが，コース侵害になると思って「これはいけない」と思ったのだが「バウサイド強く」のクライがでず舵を切ってしまいハースをすぎて入れたスパートでバランスをくずす様な大失敗をやってしまい，それがスパートの走らなかった一つの原因になってしまった。30cmの差で破れてしまった。

◇フォア◇

〔第一敗復〕

一橋 ②	1′49″7	3′46″6	5′50″8	7′57″1
京大 ①	1′47″7	3′44″3	5′48″5	7′54″8

エイト二連覇ならず，登里，スカルで優勝
―第38回全日本レガッタ

第38回全日本選手権レガッタは去る8月20日，21日の2日間戸田コースで行われた。昨年に続く2連覇をねらって出場した本学エイトは，準決勝で東大とあたり，終始半艇身から1艇身の差をつけられ，必死の追撃も及ばず決勝に進出できなかった。尚本学初出場のスカルで，登里（2年H）が堂々優勝を遂げ，一橋にカップを持って来た。

◇エイト◇　　◇フォア◇

〔準決勝〕　　〔準々決勝〕

関西　③　大差　　一　橋　②　8′10″4

一橋　②　6′15″0　　法政A　①　7′45″8

東大　①　6′14″0

◇スカル◇（登里）

〔決勝〕

東大　②　4L

一橋　①　8′03″2

早大　③　大差

経過

とにかく勝ったことは何よりも嬉しい。

予選A組　一橋大（登里）　一着

商船大（高田）　二着

学習院大（甲野）　三着

生れて初めてのスカルレース。見たこともなければましてやったこともなし。スタ力も何もあったものでない。ただスタート後沈しないようにと軽くスタートした。トレーナーの安藤さんに前もって相手かまわず最後までとばせと言われていたので500で2，3艇身水があいたがぐんぐんとばした。

準決勝　一橋大（登　里）　8′19

法政大（大　塚）　大差

決　勝　東　大（馬　上）　2着4艇身

一橋大（登　里）　1着　8′03″2

早稲田（大好田）　大差

スタート20本位で早大東大の順に出られたがこれはあわてたことが原因していた。そこで少し冷静になってじっくり1本1本引いてゆくことに考え直し（実は出艇前ダッシュ・モーチャンからこんこんと言われていたことですが）落ちつきをとり戻すとまたたく間に逆転してしまった。500で2艇身位差がついたろうか。東大が2位にくいついている。そのままじりじりとラストまでくる。ラストスパートでやや差がついた気がした。結局4L。

H組全勝―第71回春季大会

第71回を迎えた伝統のH．C．S対抗競漕大会は去る7月31日向島コースで行われた。第一選手は言問―水神間2,000mのレース。午後4時半，南風が強く吹き，相当なラフコンディションの中をスタート。Hはバランスよくまとまり，ゴールでは2着Cを5艇身引離す。Sはさらに1艇身半遅れてゴールイン。第二選手は進水したばかの真新しいナックルシックスで1,600mのレース。サードはナックルフォアで1,000mレース，いずれもH組が優勝，トリプルクラウンを奪った。

◇第1選手◇	◇第2選手◇	◇第3選手◇
S ③ 1L	H ① 6′22″3	H ① 4′41″2
C ② 5L	C ③ 3½L	S ② 3L
H ① 7′04″5	S ② 2L	C ③ ¾L
(2,000m)	(1,600m)	(1,000m)
エイト	ナックル・シックス	ナックルフォア

昭和36年

連敗喫す―第13回東商戦

第13回一橋大，東大対校レガッタ（東商戦）は5月21日午前9時半から向島隅田川で行われた。OBレースでの先輩連の活躍の後に，スカル，舵付ペア，舵付フォア，ジュニアエイト，対校エイトの全種目に敗れるという無残な姿をみせた。（部報29号）

▶対校エイト（6,800m）

① 東　大 26′35″0　② 一橋大　10L

▶対校フォア（2,000m）

① 東　大 8′13″0　② 一橋大　6 L

▶ジュニアエイト（3,200m）

① 東　大 11′46″0　② 一橋大　3 L

▶舵付ペア（2,000m）

① 東　大 9′38″4　② 一橋大　6 L

▶スカル（2,000m）

①馬上(東大)10′14″0　② 藤井(一橋大)大差

再びH組完全優勝―第72回春季大会

第72回を迎えた伝統のH・C・S対抗春季競漕会は6月18日（日）向島本学艇庫を会場に，第一選手エイト2,000m，第二選手ナックルシックス1,200m，第三選手ナックルフォア1,000mで挙行された。土手評では上級生の多く乗っているC組が優勢とされていたが，スタートでCとSが接触しているうちにとび出したHが気を良くし追いかけるC組を⅔艇身離してゴールインした。

◇第1選手◇　◇第2選手◇

水神一言問 200m　東海一言問 1,200m

H ① 6′27″5　H ① 4′14″0

S ③ 大差　C ② 2 L

C ② ⅓L　S ③ 3½L

◇第3選手◇

大倉一言問 1,000m

S 棄権

C ① 2 L

H ② 4′33″0

大敗喫す―第39回全日本（エイトの部）

第39回全日本選手権競漕会エイトの部（フォア，ペア，スカル等は来る8月25，26，27日小艇の部として行われる）は7月29日および30日戸田ボートコースで行われた。先日の東商戦で大差で敗れた本学は，雪辱を誓い必勝を期してレースにのぞんだにも不拘，第一予選で大阪市立大に水を開けられて敗退，午後の敗者復活戦でもE組で関西学院，名古屋大，東経大とあたり全てに水を開けられて敗れ，準決勝進出もならなかった。

オックスフォード盾争奪レガッタでは，本学第二エイトがこれに出場したが，決勝で慶応に惜敗した。

◇エイト◇

〔敗復〕

関 学 ① 4′43″0

一 橋 ④ 2¼L

東 経 ③ 1 L

名 大 ② 1 L

◇オックスフォード盾◇

〔決勝〕

慶 応 ① 6′30″5

一 橋 ② 2 L

中 大 ③ ⅔L

登里スカルで2連勝（小艇の部）

◇無フォア◇〔準決勝〕

北 大 ① 7′02″8

一 橋 ② 2½L

◇付ペア◇〔決勝〕

早 大 ① 8′28″5

北 大 ② 2½L

一 橋 ③ ¾L

東 大 ④ 5L

◇付フォア◇〔敗復〕

中 大 ① 7′25″2

法 政 ② 3L

一 橋 ③ 2L

医歯大 ④ 大差

◇無ペア◇〔敗復〕

東 大 ① 8′07″4

一 橋 ② 4L

共栄企業 ③ 大差

◇スカル◇〔決勝〕（登里）

一 橋 ① 8′00″2

法 大 ② 7L

大 内 ③ 大差

チャンS組―第36回秋季大会

第26回秋季競漕大会は10月21日（土）埼玉

県戸田2,000mコースで行われた。当日は肌寒い曇天のためか，弥次レース参加，応援者も比較的少なかったが，各組とも対校選手，1年生を交えた総勢70人余りの部員が，3週間半の合宿成果を競った。

弥次レースにスキー部が優勝した後，1年生を中心にした第3選手エイトは，見事なレースを展開。スタートは3年生を加えたS組が先行し，コンスタントピッチ36.5。500mはS・C・Hの順に1艇身ずつの差で通過した。800m付近からH組が「強く」でC・Sを把え，1,500mで水を空けた。第二選手シェルフォアは，スタートでC組が飛びだし，500mでH組に逆カンバスのリード，S組は遅れた。しかしH組ジリジリと差をつめ，1,000mではC組に水を空けてトップに立つ。Cもスパートをもって応酬し，逆カンバスまでつめたが，ラスト50mで切りこみがあり，H組が勝利を得た。第1選手エイトは，流石に見応えのあるレースを見せたが，スタート力漕中のC組・H組の接触事故が，レースに少なからず響き，若さのS組が，H組の3連勝を阻み一艇身弱離して33年以来3年振りに優勝した。

不慣れな戸田コースであったことと，幹事が入れ代わったばかりとから，大会の運営がスムーズでなかったことが批判された。戸田では向島に倍する準備が必要とされよう。又，第三選手レースは大過なかったのに対し，第二選手，第一選手レースに事故があったのは皮肉なことであった。

◇第1選手◇	◇第2選手◇	◇第3選手◇
(2,000m)	(2,000m)	(2,000m)
C ③ 逆カンバス	C ② 2L	C ③ 2L
H ② 2/3L	H ① 8′02″0	H ① 不明
S ① 6′37″0	S ③ 2L	S ② 2L

昭和37年

はじめて戸田で開かる—第14回東商戦

5月20日　雨あがりの戸田2,000mコースで第14回東大—橋大対校レースが行なわれた。午前中は無風，午後になって稍逆風のコンディション。10.30より舵手無ペアレースを皮切りに対校レースが行なわれたが，本学は東大を終始リードしたスカルの登里一人の奮闘におわった。これで対校エイト戦績は4勝9敗となった。（今年は両校とも出漕種目が多いことから，漕手のダブルワークが行なわれた。）

—記録—

種目	1位	2位	艇差
舵手無ペア	東大7′37″8	一橋7′55″0	大差
シングルスカル	一橋8′19″6	東大8′28″0	5L
舵手無フォア	東大7′14„8	一橋7′23″4	5L
〃 付フォア	東大8′09″0	一橋8′10″6	1/2L
ジュニアエイト	東大7′00″8	一橋7′06″0	1 2/3L
エイト	東大6′29″8	一橋6′41″0	4L

準決勝で敗退—第40回全日本レガッタ

第40回全日本選手権レガッタは，昨年と同じくオリンピックを控えての小艇重視の気運から，エイトと小艇とを分け，6月と7月にそれぞれ戸田で行なわれた。7月14，15日のエイトの部では，本学はレース直前に好タイムを出しながら，レースでは練習時の鋭い艇足が見られず，準決勝で慶大に敗れた。同時に行なわれたオックスフォード盾争奪戦は，決勝で，前半とび出した日大をどうしても把えられず，1/3艇身の差で惜敗した。

（対校エイト）

＜準決勝＞①慶大 6′12″0　②本学 6′27″9（大差）　①東大3/4L　③京大，1/2L

（オックスフォード楯エイト）

＜決勝＞①日大，6′47″0　②本学，1/3L　③慶大，1/2L

▶準決勝（7月15日）本学，慶応，東大，京大。昨日の雪辱を期して，前半に勝負を挑

む。スタリキで慶応に1シート，450 mにはキャンバスまでリードしたが，500 mのスパート応酬の後慶応するすると出る。600～700のコンスタント（本学ピッチ38）に下した所で，慶応に⅔L出られる。後，1,000 mで2艇身弱に差が開く。本学はラスト450からピッチを上げ，250 mでスパートしたが，慶応に大差で敗れた。

コンスタントの非力が致命的であり，2度とも，前半の争いにもろかった。

▶オックスフォード楯エイト

▶決勝。中央，日大，一橋，慶応の順―スタリキ15本。慶応，日大ほぼ同じ。スタリキで慶応早くも半艇身出る。日大も1.2シート先。コンスタントで一橋大ジリジリと慶応日大を追い上げる。日大を抜き慶応に僅かの差で500のラップをとる。慶応日大はスパートの連続，一橋大は「強く」で応戦する。日大のピッチ高く37.8。800をすぎるあたりでスパートの日大グイグイ出る。一橋大必死に「強く」を入れ，1,200でスパート。ピッチ36。日大に⅓～½艇身と追いつめる。日大と一橋とのスパート争いで慶応落ちる。1,500すぎ慶応，一橋大のコースに入る。チャンバラを避けようとする間に，日大わずかに出て差⅔艇身，1,700で一橋大「強く」からスパート，ピッチ上がらず，36.7。たいして差ちぢまず慶応も日大，一橋大を追い上げ，一橋大もデスパレイトに入るが，日大のスタミナに屈する。⅓艇身

海外に進出ならずフォアは準決で，スカルは決勝で敗退＜全日本レガッタ小艇の部＞

全日本レガッタ小艇の部は，6月16，17日戸田コース(静水2,000 m)で行なわれた。今回は9月上旬にスイスのルシェルンで開かれる世界選手権への代表決定を兼ね，出場クルーは72の多きに上った。本学はスカルと舵手なしフォアに参加したが舵手なしフォアは準決勝で外語に敗れ，スカル登里は，ダークホース鈴木（慶大）に，決勝の土壇場に，⅘Lの差で敗れた。

―記録―

シングルスカル　＜決勝＞①慶大，8′10″8　②本学（登里），8′12″4（⅘L）

舵手なしフォア　＜準決勝＞①外語大，7′02″8　②本学3L½

スカルレース

（予選）スタートは一寸もたれて調子が出ず800 mでは東経大に1Lリードさる。登里あせらずに悠々と漕ぎ，1,000 mで把え，1,500 mでは既に3Lのリード，結局ゴールには7Lの差でトップ。

（準決勝）明治が予選で好調。これを敵とする。スタートから並んで出，前半はぬきつぬかれつの白熱戦となる。1,700付近までに½Lリードした登里は，これを不動のものとして明治にすきを与えず，そのままゴールした。

（決勝）強敵は余りさわがれずに決勝に進出した慶応鈴木，スタリキは本学，慶応ほぼ並び，500を過ぎて登里出る。700で1Lのリード，慶応執拗にくいさがり，1,500まで雁行。ラスト500から慶応は次第にピッチを上げ1,800～1,900の土壇場で，登里は慶応に把えられ，勢いにのった慶応のスパートに両者ゴールになだれこみ，暫くは記録の発表もされない程の接戦であった。しかし結果は½Lで登里は日本代表を逃した。

決勝進出ならず―第10回朝日レガッタ

第10回朝日招待レガッタはルツェルンで開かれる世界選手権大会に派遣決定となった選抜エイト，および舵手無フォア，舵手無ペア，スカルの壮行会を兼ね，8月19日隅田川尾久の1,000 mコースで行なわれた。本学クルーは準決勝にスタートでつまづき，艇の故障も災して最後まで立直りの機会がつかめず，敗退の結果となった。本学では新たにオックスフォード楯で善戦した，4人の2年生

をのせ出漕したが，結果的には上記の惨敗となった。今後はこのような敗戦の経験からして，上級生層の充実は勿論のこと分厚い新人層育成が重要な問題となろう。

＜準決勝＞①立教，②慶応，1 L　③明治，3 L　④一橋，⅔L

H組が覇権奪回―第73回秋季大会

（戸田荒川）

第73回秋季競漕大会は去る10月28日戸田橋をはさんで2,000 mの新コースを荒川に設定し行なわれた。隅田川コースは，川の汚染，流木，曳船の激増に加えて現在艇庫前が丁度護岸工事の工事現場となっているため使用不能，また戸田の2,000mコースは東京オリンピックのための工事を目前にして使用禁止となっていたため，やむなく戸田荒川に一時的措置として新コースを設定したものである。新コースの設定に至るまでには本学と東大，東工大の数回にわたる共同測量によった訳であるが，レースコースとして採用するのに適当なところが少なく，結局戸田橋をはさんだ3つの大きなカーヴを含むコースと決定した。

◇第1選手

①H6′30″0　②S6′36″0　③C 2 L

◇第2選手

①H3′58″9　②Cキャンバス③S 1 L

◇第3選手

①S4′31″1　②H½L　③C⅓L

昭和38年

荒川で開催さる―第15回東商戦

第15回対東大レガッタ，6月23日荒川の戸田橋上流2㎞の地点に本部を設け，1,800 m直線コースを新設して行われた。荒川に会場を移したのは戸田ボートコースが，オリンピックを控えての拡張工事により使用不能の状態にあったためである。スタートは笹目橋の下流約1㎞。付近には人家もなく，唯々強い日射しを映す川面と，風にさやぐ密生した葦があるのみ。これも又一つの素朴なボート風情とは言うべきか。

◇対校エイト◇（1,800m）

東　大　①　5′47″8

一　橋　②　6′05″6（5 L）

対校エイトは3時30分スタート。2週間前の戦傷は未だ癒えて居らず，又，一本一本決めるというブレードワークに欠けていたために700 mで1艇身を許したのちはスタミナの衰えも加わって，差は開く一方となり，対校エイトは遂に4連敗を喫した。

◇対校フォア◇（1,800m）

東　大　①　6′10″0

一　橋　②　6′20″8

◇対校シングルスカル◇（1,800m）

東　大　①　6′41″1

一　橋　②　6′55″2

◇ジュニアエイト◇（1,800m）

東　大　②　5′44″1

一　橋　①　5′43″0

ジュニアエイトは，クルーが旺盛な気迫をそなえた若者ぞろいであったために，我々の期待の最も集まるところであった。予想通り，スタートからよく東大をおさえ，終始40を下らぬハイピッチで漕ぎまくった。1,000 mでは約1艇身半のリードを奪ったが，東大も小粒のクルーながら後半の追込には，鋭く迫って来た。しかし，東大のラストスパートも遂に効を奏さず，本学½艇身のリードを保ってゴールイン。

期待の艇速出ず準決勝で敗退―欧州選手権国内予選

欧州選手権国内予選（欧州選手権は8月15日コペンハーゲンで行われた）は，朝日招待レガッタを兼ねて，6月8，9日の両日に亘り，相模湖2,000 mコースで行われた。

本学クルーは，土手評ではビッグフォアの

一つに数えられ，活躍が期待されていたが，予想を全く下回り，早くも予選で惨敗した。敗者復活戦では危げなく勝ったけれども，第２日目の準決勝では再び前日と同様のレース振りに終始し，３位という惨めな結果に終った。

チャン，H組大差で勝つ―第28回夏季小会

第28回春季小会は去る７月28日，対校を分離して，向島艇庫前2,000ｍコースで挙行された。風の荒れ模様は前日程ではなかったが，それでも絶えず３ｍ位の風が吹き，真夏の太陽の下では珍しいラフコンディションとなった。

尚，開会式に於て，今は亡き艇友村上驍君の霊に対し，全員黙祷し，心から冥福を祈った。

◇第１選手◇　　◇第２選手◇

水神―言問 2,000m　水神―艇庫前 1,200m

H ① 8′04″4　S ① 6′04″

S ② 6L　C ② 2½L

C ③ 3L　H ③ ½L

相模湖で開催―第41回全日本

８月31日と９月１日の両日，神奈川県相模湖の2,000ｍコースで行われた。本学クルーは健闘も空しく，全日本エイトは敗復に於て又オックスフォード盾エイトは準決勝に於て敗退した。

６月下旬，東商戦が終ってから約１週間後に，本学両エイトクルーは全日本レガッタ，及びオックスフォード盾レガッタに備えて約２ケ月間の合宿に入り，猛練習を続けたが戦利あらずして敗れ去った。

◇全日本エイト◇

〔敗復〕

東　大　①　6′18″4

商　船　②　6′25″2

一　橋　③　6′29″8

◇オックスフォード盾エイト◇

〔準決勝〕

東　大　①　6′28″1

早　大　②　6′32″2

一　橋　③　6′41″3

明　大　③　6′42″3

舵手付ペア明大に惜敗―東京国際スポーツ大会ボートレース

去る10月12，13，14の３日間に亘り，新装成った戸田東京オリンピック漕艇場に於て，全日本小艇選手権を兼ねて東京国際スポーツ大会ボート・レースが行われた。本学は舵手付ペア，舵手無しペア，シングルスカルの各レースに参加した。舵手付ペアは決勝で30センチ差で明大に惜敗，舵手無ペアは決勝で５位，シングルスカルは敗者復活戦で敗退した。

◇シングルスカル◇

〔敗復〕ＥＳＥ 0.4ｍ／Ｓ

山口豊田町　①　8′33″73

東　経　大　②　8′48″57

一　橋　大　③　9′06″30

◇付ペア◇

〔決勝〕

明　治　①　8′11″05

一　橋　②　8′11″39

東　経　③　8′17″41

早　大　④　8′18″48

外　語　⑤　8′23″38

決勝　１コース明大　２コース一橋大　３コース早大　４コース東外大　５コース東経大

微逆風。水面は静か。スタートからスタリキに入り早大わずかにリード。それに続いて一橋，外語，明大，東経大。500の手前でスパートを入れるも相手良く頑張ってその差はあまり縮まらず。500を過ぎてから三度目のスパートでようやく早大を抜き去る。昨日の予選の時から比較するとだいぶ良い。1,000を通過するあたりでは早大を⅔艇身，明大を一艇身余り引き離す。東外大と東経大はだい

ぶ遅れる。早大，明大のスパートに応じてこちらも時々スパートを入れる。1,000から1,500にかけては艇差にたいして変動なくそのままラスト500。二位明大との差一艇身余り。早大はさらに半艇身ほど遅れる。ラスト500に入ってから明大は高いピッチでガムシャラに追い上げて来る。こちらもスパートで応酬。あまり効果なし。このままスパートを続けるか，一旦下すかで意見が分かれたが結局下す。この間に明大するすると出て来る。こちらはスパートを下したばかりだったし，少々追いつかれてもまた振り切れると安易な気持が心の隅にあったため，相手が猛烈にスパートを入れて来てもコンスタントを10本余りも漕がせてしまった。並びかけてから「序々に調子を上げて」のクライを放ってもスムーズにピッチが上がらず。その間にみるみる明大にリードされ，こちらが本格的にスパートに入った時は，すでに半艇身近く差を開かれた。ラスト200で必死に追い上げるもスパートの時期すでに遅く，30センチの差をもって破れた。時間的には0.3秒の差ではあったが，このレースはある意味では大敗であった。心に隙があったためにこんなことになってしまったのだ。ボートの厳しさを，まざまざと味わわさせられたレースであった。

（cox　遊佐伸彦）

◇無ペア◇

〔決勝〕

ア　メ　リ　カ	①	7′22″87
西　　独	②	7′39″91
中　　大	③	7′46„78
東京医歯大	④	7′49″94
一　　橋	⑤	8′01″32
東京トヨペット	⑥	8′04″00

C組完全優勝—第74回秋季大会

第74回を迎えたH・C・S対抗秋季競漕大会は一橋祭参加の学校行事として，去る11月10日向島本学艇庫を会場に，第一選手エイト2,000m，第二選手ナックルシックス1,200m第三選手ナックルフォア1,200mで挙行された。

一般学生のレースの後の第三選手レースでは，C組クルーが独漕，優勝した。第二選手のレースは，本部前で1コースS組と3コースC組が接触，第一選手レースの後で再試合となったが，今度はC組が快調に飛び出し，終始リードを奪って逃げ切り優勝。待望の第一選手レースは午後3時半スタート。優勝候補と見られたS組はスタートから少し遅れ，H組がまずリード。しかし艇庫前でC組俄然スパートし，序々にH組を追い上げ，ゴールでは半艇身の差をH組につけ優勝した。S組は振わず三位に終った。

◇第1選手◇（エイト）　水神—言問 2,000m

S	③	2L
H	②	½L
C	①	7′17″0

◇第2選手◇（ナックルシックス）　白鬚—洗場 1,200m

S	②	⅓L
H	③	1¼L
C	①	4′35″9

◇第3選手◇（ナックルフォア）

S	棄権
H	棄権
C	①

昭和39年

対校エイト5連敗，ジュニア健闘2連勝—第16回東商戦

第16回商東戦は5月10日午前11時から埼玉県戸田の2,000mコースで開かれました。当日は快晴にめぐまれましたが，斜め逆からの強い風が吹き，対校エイトは東大クルーに大差で敗れましたが，一橋ジュニアエイトクルーは東大対校エイトクルーを上回る記録でよく健闘，2連勝致しました。対校フォアは途中リードしたにも拘わらずゴール前でぬか

れ，惜敗致しました。

◇対校エイト◇

一橋	②	1′36″4	3′24″6	5′16″2	7′04″1
東大	①	1′36″1	3′17″0	5′10″1	6′47″8

◇対校フォア◇

一橋	②	1′52″4	3′52″2	5′52″0	7′54″8
東大	①	1′50″5	3′51″7	5′51″3	7′51″8

◇ジュニアエイト◇

一橋	①	不明	3′11″8	不明	6′45″1
東大	②	不明	3′17″8	不明	6′53″3

決勝進出ならず―東京オリンピック代表決定レース

東京オリンピックエイト代表決定レースは5月23，24日の両日に亘り埼玉県戸田オリンピックコースで行なわれた。本学からは商東戦ジュニアクルーが参加したが，第二次敗者復活戦に於てコース侵害により失格となり，惜しくも決勝進出はならなかった。決勝レースでは予想通り日漕選抜クルーが圧倒的な強さを示して優勝した。（選抜クルーに一橋から長谷川晨が参加）

〔第2次敗復〕（2位まで決勝へ）

一橋	失格	1′31″1	3,06″1	4′44″8	―
京大	④	1′30″9	3′09″1	4′46″8	6,27″7
東大	①	1′29″8	3′03″7	4′40″1	6′16″9
東北	③	1′32″4	3′06″0	4′42″8	6′19″4
名大	⑤	1′38″7	3′14″5	5′13″6	6′57″9
明治	②	1′30″3	3′04″8	4′40″9	6′17″5

（**経過**） スタートが間が抜けたような感じで完全に出遅れ，東大，明大がとび出し，京大，一橋大，東北大が僅かの差で続き，名大は大きく遅れた。500m の spurt で京大をふりきり，先行する東大，明大をなんとかつかまえようとした。しかし1,000 mでは東大から約1艇身，明大から⅓艇身遅れてしまった。動きが小さくなり，オールが浅くなってきた1,200mあたりから艇速が急速に鈍り，1,500 mでは東大，明大に水をあけられ，東北大にも1艇身程リードされてしまった。spurt も足蹴りも効果なく，ラスト100 mでは2コースの方に大きく寄ってしまい，強引に突っ込んでしまったため京大とオールが接触し，コース侵害で失格となってしまった。

昭和40年

東商戦・朝日レガッタ・全日本

今年度の対外レースのスケジュールは8月28，29の両日戸田コースに於て行なわれた全日本選手権をもって全てを終了した。本学の今年の戦績は相変らず不振で，関係者一同を落胆させた。

東商戦（5月23日）

◇エイト◇

一	橋	②	6′53″4
東	大	①	6′42″9

◇ジュニアエイト◇

一	橋	①	6′58″8
東	大	②	7′06″0

◇フォア◇

一	橋	②	8′12″9
東	大	①	8′00″0

◇ＳＳ（豊田）

一	橋	②	8′23″2
東	大	①	8′15″6

朝日レガッタ（8月8日）

◇エイト◇（予選）（1,600m）

慶	応	①	5′19″3
東京トヨ		④	5′45″0
東経大		②	5′29″4
一	橋	③	5′32″9

全日本（8月29日）

一	橋	④	6′39″7
明	治	③	6′33″7
東	大	②	6′24″9
慶	大	①	6′21″4

チャンH，セコS—第29回夏季大会

第29回夏季競漕会は9月5日戸田コースで行われた。この会は春季競漕会が日程上の都合で例年より遅れて催されたものである。秋空の下午後4時30分開会式，5時より第2選手レース，5時20分より第1選手レースが行われた。第2選手レースはC棄権でHとSの戦いとなったが，練習時より強みをみせたSはスタートからHをおさえ2⅓艇身の差でゴールした。

第1選手レースは対校選手を主力としたH，ジュニアを主体としSに対し，Cは1年生を4人乗せており，下馬評ではHとSの争いとなるという予想であった。

力漕をやらないCはスタート200mで既に2艇身離され圏外に去ったかに見えた。500mではHが僅かにSに先行し，2艇身程の差でCが続いた。しかし，700m以後，Sの艇速が鈍り，ピッチ30で漕ぐCとの差が縮り，ハーフでは懸命にスパートを入れたが，低ピッチのCにとらえられてしまった。¾艇身リードするHと以後1,500mまで殆どそのままに進み勝負はラスト500mにかけられた。1,700mでは，SはCに1艇身おくれ，H，Cの差は½艇身までにつまった。C必死に追いすがるが1年生多数をのせており，ピッチが全く上らず，Hがかろうじてゴールに飛び込んだ。5日間の合宿で練習の成果は期待できなかったがCの健闘は称賛に値するものと思われる。C組は一見バラバラで見た目には良くないが，低いピッチで一本一本深いオールを引いていたのが，印象的であった。

◇第1選手◇（エイト 2,000m）

H ② 6′44″2
C ② ½L
S ③ ⅔L

◇第2選手◇（ナックル・フォア1,000m）

H ② 2⅓L
C 棄権
S ① 4′01″5

昭和41年

全種目に優勝—第17回東商戦

◇対校エイト◇

一 橋 ① 6′30″9
東 大 ② 6′32″7

◇対校フォア◇

一橋	①	1′48″5	3′48″5	5′41″3	7′39″1
東大	②	1′50″2	3′45″8	5′46″6	7′43″4

◇対校スカル◇

一 橋 ①
東 大 ②

◇ジュニアエイト◇

一 橋 ①
東 大 ②

（エイト経過）

並んだまま6本から力漕20本に入る。150mあたりからは力漕を続ける我々が一本一本出始め，200m過ぎてコンスタントに下した時には半艇身程リードした。400mで「強く10本」を「スパート」代りに使い39に上げる。東大もすぐに強くで応じてきたが効き目なく差を一艇身とした。

一度は水を開けたが東大のスパートで1000m付近より半艇身差と追い上げられた。前半での高目のピッチがたたったかと不安な気持もあったが1500mでのスパート，2分の1艇身を決めてからはリズムとピッチで逃げ切れると思った。

1700mからラストスパート40本に入る。動きが極端に乱れることなく2分の1艇身差に逃げ込んだ。

タイム，一橋大 6分30秒9
東京大 6分32秒9

スカル日本最高で優勝—第44回全日本

41年度の最後を飾る全日本選手権レースは，昨年8月27～8の両日にわたって，戸田ボートコース2,000mで行われました。本学から対校エイト，付フォア，スカル，オック

スフォード楯エイトが出場しましたが，悲願のエイト決勝進出は果せず，準決で敗退しました。付フォアは3位，スカルは2年の佐々木が優勝，オ楯は3位でした。

◇エイト◇　　◇付フォア◇

〔準決勝〕　　〔決勝〕

明治	④	6′20″8	広島商科大	④	7′12″0
早大	①	6′05″7	立　教	②	7′02″2
同大	②	6′09″8	法　政	①	7′01″2
阪大	⑤	6′27″3	一　橋	③	7′05″1
一橋	③	6′13″3			

◇オックス　　◇シングルスカル◇

フォード楯エイト◇　　（佐々木）

〔決勝〕　　〔決勝〕

一橋	③	6′22″6	一橋	①	7′30″5
日大	①	6′19″6	東大	③	7′50′7
早大	②	6′22″1	北大	④	7′56″1
慶大	④	6′30″0	法政	②	7′33″8

（スカル経過）

2m前後の快い順風が吹き，波も静か，コンディションは絶好調である。今にも血が飛び出して来そうな心臓をぐっと抑え，ステッキボートにつけ，1年生の顔を睨みつける。（幸か不幸かウォーターマンは我が下級生である。）“用意・ゴー”でタイミング良く飛び出す。久しぶりに良いスタートだと思ったらフライング。2回目のスタートは慎重にならざるを得ず出遅れてしまったし，3本もバタバタだった。この時は半ばあきらめの境地だった。300m を過ぎて東大，北大を完全にぬく。400m で法政（4コース）の黄色のユニフォームが斜後方にチラチラ見えたのでしめたと思ったが，いつものように容易に出ることはできず，1,000m ではピッタリ並んでいるようだった。第2・第3クォーターでリードするという私の思惑は完全にはずれる。第4クォーターは本当に苦しかった。特に1,600～1,700m の苦しさは忘れられない。頂度その頃法政がスパートを入れ始めたので，並んだりして，あきらめたことも再三あった。しかしハアハア言いながらもピッチは絶対落とさず，寧ろ上げ気味に漕ぐ。1,750 mあたりで“佐々木出たぞ”の声。これに勢いを得てさらにピッチを上げ始め1,900 mに入ってからは完全にラストスパート・デスパリット，半分目をつぶり歯を食いしばって漕ぐ。最後は1艇身から水があいた位か。それにしても本当に苦しかった。死ぬかとも思った。せったお蔭で7分30秒5の国内最高を記録することができた。法政も新記録。遂に笠木を負かすことは出来なかったが，この記録を出すことにより幾分救われた形だ。

朝日レガッタ4位におわる（8月7日）

〔決勝〕（1,500m）

トヨタ	①	5′04″9
慶　応	③	5′08″2
日　大	②	5′06″4
一　橋	④	5′13″0
東　大	⑤	5′13″5
早　大	⑥	5′18″7

C組優勝—第77回秋季大会

◇第1選手◇（2,000m）

C	①	1′39″0	3′22″1	5′07″0	6′55″0
S	③	1′37″0	3′21″0	5′09″5	7′00″5
H	②	1′42″0	3′27″0	5′14″5	7′00″0

◇第2選手◇（ナックル 1,000m）

C	棄権	
S	①	4′32″0
H	②	4′33″5

昭和42年

エイト2連勝ならず—第19回東商戦

42年度のボートシーズンの開幕を飾る第19回一橋，東大対校レガッタは，5月14日（日），戸田ボートコース2,000 mで行われました。

当日は両校合わせて2,000名近い観衆を集め，又一橋大学の応援団30名近くを繰り出しての大応援にもかかわらず，スカルを除き，敗れました。

◇対校エイト◇

一橋	②	1′38″4	3′19″2	5′08″1	6′53″4
東大	①	1′35″3	3′18″8	5′07″5	6′52″4

◇対校フォア◇

一橋	②	1′49″9	3′44″5	5′38″2	7′31″3
東大	①	1′53″6	3′45″0	5′38″6	7′29″5

◇シングルスカル◇

一橋	①	1′58″2	4′00″5	6′11″0	8′24″5
東大	②	2′04″1	4′17″0	6′38″9	8′57″7

◇ジュニアエイト◇

一橋	②	1′35″7	3′17″4	5′02″0	6′49″2
東大	①	1′35″1	3′15″1	5′01″2	6′48″1

8年ぶり9度目の全日本制覇

—第45回全日本—

昭和43年，遠来のオックスフォード大クルーを破り，全日本制覇をとげて以来，久しく沈滞を続けていた端艇部は，昨年の東商戦に全種目に勝利を得て意気大いに上ったが，昨年の全日本及び今年の商東戦，北米選手権，朝日レガッタに敗退し続け，今回の全日本も悲観視されていた。しかし，昨年の4年のレギュラー5人を有する対校エイトクルーは屈せず，前田監督，佐藤，藤本両コーチのもとにレース2週間前から調子を上げ，本来の持てる力を大いに発揮して，9月2・3日の両日行われた全日本レガッタにおいて予選，準決勝，決勝と戦うごとに艇速をのばし，みごとに9度目の優勝を飾った。

◇エイト◇〔決勝〕　N1.5m

一　橋	①	6′24″5
名　大	④	6′38″0
同　大	②	6′28″4
外　大	③	6′30″0

（経過）

紅茶とビスケットで腹ごしらえの後，ミーティング。前田監督，曰く『実力伯仲であり，相手としては不足はない。だが午前の出来栄えを，出せば必ず勝てる。相手に，まどわされるな。』作戦は準決と同じ作戦でゆく。

しかし気持としてはより積極的に，大きく豪快なローイングを作り出そう。最後に安藤コーチにクギをさされた。『決勝に何年ぶりかで残った。これでもういいんだ等と八人の中で一人でも思ったらもう負けだ。必ず負けるだろう。』

いよいよ出艇。この1週間，コックスや漕手8名が不安に思う程タップリ休養を取ってある。その為にか，予選では力んで，少しバタついたが，準決はかなりの出来だった。決勝に向って気力体力とも絶好調。ヤル気は十分。中に名工大と同大を置いて1コースと4コースに一橋大，東外大。外語から声がかかる。『一橋ガンバレ。関西に負けるな！。』『ウォ！』1回目は外語のフライング。やはり外語は相当固くなっている様だ。2回目は一斉にスタート。かなりの横風だったが，レース3週間前に思い切って Bow サイド整調に変えたのが成功して，矢の如く真直ぐにすべり出した。250で外語を押さえてに降ろす。気持良いリズムで艇速が延びる。だが外語も4コース並んでいる。コックスの白いユニホームが真横に見える。500の手前でスパート。降ろして35。徐々に外語は遅れ出した。白いユニホームが後退してゆく。800に差しかかる。外語長谷川コックスの号令『スパートに行こう。スパート』だが，白いユニホームはすぐに後退を始めた。ピッチ35，リズムもいい。1000米を通過。前半飛ばしてきた外語は，1000過ぎてから目に見えて落ちて行った。だが入れ替る様にコースがグングン艇足を延ばして来た。同志社だ。去年は準決勝にいたい所で負けたが，今年は簡単にはやられないぞ。しかしハイピッチでジリジリと追い上げてくる。でも，一気に艇を追い越すスピ

ードの鋭さはない。“強く3本”“足けり3本”で応戦。やがて1400米，スパート10本で1500を通過。艇差1艇身。大歓声が耳に入ってくる。“ラスト500ラスト500”声にならない。ふとオールを見ると良くそろっていた。1700米からラストスパートに入る。同志社にも水を開けてゴールイン！“勝った！”

◇フォア◇〔敗復〕

一　橋	②	7′16″5
福　島	④	7′25″0
トヨタ	①	7′09″2
北大水産	③	7′22″8

防衛大	①	7′16″6
葵水会	④	7′31″1
四神会	②	7′17″3
滋賀大	③	7′27″2

◇ＳＳ◇〔準決〕

日　大	①	7′53″1
中村荷役	④	8′07″8
一　橋	③	7′57″1
戸田ＲＣ	②	7′55″4

優勝祝賀会開かれる

—感激渦まくスターホール—

9月3日の第45回全日本選手権レガッタ優勝を祝って，9月20日午後6時から，如水会館スターホールにおいて如水会主催の盛大な祝賀会が開かれた。祝賀会には，増田学長，村松端艇部長，本田如水会理事長，朝海四神会会長をはじめ，ボート部ＯＢ，如水会員，ボート部員など約300名が参加した。会場には，過去8回のエイト優勝，9回のフォア優勝の写真や新聞記事が展示され，中央には今回の優勝1,900mあたりの大写真そして正面の秩父宮杯と大優勝旗が一きわ感嘆の声をさそっていた。定刻6時，出席者約300名の万雷の拍手と応援部ブラスバンドの奏する勇壮なマーチに迎えられて，優勝クルー，監督，コーチが入場した。

樋野事務局長が開会宣言した後，伊藤理事長がクルー，監督，コーチを紹介するたびに盛んな拍手が続く。その後，本田理事長，増田学長，朝海会長から祝辞と激励がなされた。次いで，村松端艇部長，前田監督が優勝の喜びを述べると共に，来年のオリンピックを目ざして，既に強化練習に入っていると述べた。

引き続き，佐藤和実ヘッドコーチ，藤本啓一郎エイトコーチの挨拶があり，最後に安田主将が選手を代表して，「我々部員一同はこの勝利におごらず来年のレースに向かって一層頑張るつもりです。」との決意を述べた。

ここで佐藤尚武四神会名誉会長の乾杯の音頭で祝宴に入った。

四神会顧問の畑弘平氏の有志演説を皮切りに数々の先輩がこれに続き会場は笑顔，笑顔で満ち満ちた。その後決勝レースのニュース映画が上映された。1,900米からゴールインにかけて完全に水をあける場面，コックス諸共漕手全員が水にとびこむ場面等が映し出されると大拍手が起こり会場は感激の坩堝と化した。

校歌，一橋会歌斉唱後閉会となったが，300名にも及ぶ先輩，後輩，学生入り乱れての交歓はなかなか尽きず深夜まで続いた。

昭和43年

不覚の全敗喫す—第20回東商戦

第20回一橋大，東大対校レガッタは，5月5日こどもの日に戸田ボートコース2,000mで行なわれた。当日は前日までの雨も止み，雲一つない晴天に恵まれ，2,000名以上の観衆を集めた。本年の商東戦レガッタはオリン

ピックの年であり，又昨年一橋が全日本レガッタで優勝したため，東大が非常なファイトを燃やし，部員減少のため舵手付きフォアが出場できなかったにもかかわらず，近年にない盛り上がりを見せた。しかし，我がクルーは一橋伝統のスタートダッシュで対校エイト，ジュニアエイトともに1,000mで水をあけたが，1,000以後一本一本のコンスタントでじりじり迫られ，NHK総合テレビを通し全国の一橋の先輩の声援もむなしく敗れてしまった。

だが，現在，オリンピック強化クルーに指定されている我がクルーは，この敗戦を教訓とし，一つのふみ台とするならば，念願のオリンピック出場も夢ではない。

◇対校エイト◇

一橋	②	1′40″0	3′25″4	5′15″4	7′06″4
東大	①	1′40″8	3′27″7	5′15″4	7′05″3

◇シングルスカル◇

一橋	②	2′10″4	4′28″2	6′49″7	9′09″0
東大	①	2′09″7	4′24″4	6′44″6	9′07″1

◇ジュニアエイト◇

一橋	②	1′34″0	3′16″4	5′03″4	6′51″4
東大	①	1′38″2	3′18″7	5′03″1	6′49″7

メキシコへの夢果せず—第46回全日本

昭和43年度の最後を飾る全日本レガッタは8月23，24，25の3日間に渡って戸田コースに於て行われ，本学からは対校エイト・オックスフォード楯エイト・シングルスカルが出場した。

全日本二連覇を狙うエイトは決勝にて惜しくも4位に終わり，メキシコオリンピック出場はならなかった。

◇エイト◇

〔決勝〕

同大	①	1′25″8	2′56″8	4′29″8	6′01″4
一橋	④	1′26″6	3′00″7	4′37″1	6′14″6
早大	③	1′30″5	3′02″1	4′34″5	6′07″3
慶大	②	1′27″2	2′58″5	4′31″9	6′02″2

（**経過**） 予選・準決勝と同大，慶応に前半でリードされ，後半追い詰めるか結局，負けてしまう。——といった同じ様な負け方をしてしまった。そこで，決勝でも，同大慶応は順風に乗って前半飛ばす事が予想されたので，決勝では，とにかく，スタートから500mまでで，同大の頭を，何とかレースを有利に展開しようと，ミーティングで決めて，レースに望んだ。200m当りまでは，同大の頭を押さえたが，500mで，1シート程出られ，スタート力漕を，500mまで続け，何とか勝利への切っ掛けをつかもうとした，作戦も裏目と出て，700mで慶応，1,000m過ぎでは早大にも出られてしまった。

◇スカル◇〔敗復〕

白門艇友会	①	3′58″2	8′05″9
新潟大	②	4′11″1	8′19″1
一橋大	③	4′15″3	8′34″6

◇オックスフォード盾◇〔敗復〕

東大	③	3′24″1	6′53″0
一橋大	②	3′18″1	6′40″9
慶応大	①	3′15″4	6′39″4

C組優勝—第79回秋季大会

第79回秋季競漕大会は，11月24日戸田ボートコースに於て行われ，チャンはC組がわずか15cmの差でH組を降し，セコは2艇身半の差をつけて同じくC組が優勝した。今年，特に注目すべきことは，超OB，戦前卒，戦後卒の3レースが行われたことであり，漕ぐ四神会を目指す先輩の心意気が行われた。

◇第1選手◇

S	③	1′45″2	3′32″6	5′24″0	7′18″5
C	①	1′42″2	3′24″0	5′17″6	7′06″0
H	②	1′46″0	3′30″0	5′18″0	7′06″0

◇第2選手◇

S	キ	ケ	ン
C	①	2′07″8	4′22″5
H	②	2′10″8	4′29″8

昭和44年

全敗を喫す—第21回東商戦

◇対校エイト◇

東大	①	1′39″1	3′23″8	5′11″1	6′57″4
一橋	②	1′40″6	3′26″2	5′13″1	6′59″0

◇対校フォア◇

東大	①	1′55″0	3′54″7	6′01″0	8′04″2
一橋	②	1′59″0	4′02″5	6′18″7	8′14″1

◇シングルスカル◇

東大	①	2′20″8	4′41″6	7′02″2	9′18″4
一橋	②	2′23″4	4′42″6	7′01″1	9′16″3

◇ジュニアエイト◇

東大	①	1′40″9	3′27″0	5′13″8	7′04″0
一橋	②	1′43″4	3′29″5	5′14″9	7′02″8

メルボルン大参加—第47回全日本

メキシコ五輪以後初の外国クルー，オーストラリア・メルボルン大学クルーを迎え，オリンピック後のボート界に活気を与えた。生活の面では一橋の学生が世話をすることになったが，皮肉なことに準決勝で顔を合わせ，彼らのいつもとはちがった速いスタートでケンカすることもできず敗れてしまった。しかしながら，彼らとの約20日間の付き合いは，ボート界全体，そして一橋の学生の将来にとっても有意義なものであったと思われる。

一方，44年卒の白井，宮嶋両氏が四神会としてダブルスカルに出漕，1,500 mまで首位を保ったが，スタミナ不足で慶応に敗れた。しかし，社会人クルーの弱さとしてのスタミナ不足で惜しくも敗れたが，漕ぐ四神会としての第一歩をしるしたという点は高く評価されるべきだろう。

◇エイト◇

〔準決勝〕

メルボルン大①　広島工業大③　一橋大学②

1′29″9	3′11″3	4′55″3	6′35″3
1′37″2	3′22″6	5′08″2	6′55″6
1′34″5	3′16″8	4′58″2	6′42″2

◇スカル◇

〔決勝〕

山田ＲＣ③　美津濃Ｓ①　埼玉艇友会②
一橋大④

1′55″7	3′56″0	5′58″3	7′57″5
1′53″7	3′50″4	5′51″0	7′49″6
1′57″0	3′55″0	5′56″4	7′55″0
1′58″5	3′59′9	6′08″6	8′15″7

◇オックスフォード楯◇

〔準決勝〕

大阪市立大④　一橋大学③　同志社大学②
早稲田大学①　防衛大学⑤

1′37″6	3′24″3	5′10″7	6′53″7
1′36″3	3′21″0	5′04″1	6′47″7
1′35″8	3′19″4	5′03″4	6′45″6
1′33″3	3′15″2	4′57″4	6′40″5
1′40″1	3′29″9	5′16″2	7′05″8

◇ダブル・スカル◇

〔決勝〕

京都大学③　聖ポールＲＣ④　慶応大学①
四神会②

1′50″7	3′47″6	5′42″8	7′36″5
1′44″8	3′39″7	5′39″1	7′41″0
1′48″5	3′43″5	5′39″8	7′33″2
1′46″8	3′41″4	5′38″9	7′35″3

昭和45年

第22回東商戦完敗

45年度のボートシーズンの開幕を飾る第22回東大一橋大対校レガッタは，5月5日(火)，戸田ボートコース2,000 mで行われたが，一橋は全種目に敗れた。なお，本年のジュニアエイトレースには，一橋側は三月の事故の為上級生との混成クルーが第二エイトとして，一方，東大は昨年の入試中止でジュニ

アがいない為医学部クルーが出漕した。

◇対校エイト◇

一橋 ② 1′33″6 3′15″1 4′57″0 6′44″0
東大 ① 1′33″8 3′13″6 4′55″1 6′35″8

◇ダブルスカル◇

一橋 ② 2′01″0 4′07″8 6′19″5 8′30″2
東大 ① 2′00″5 4′08″2 6′16″6 8′27″2

◇シングルスカル◇

一橋 ② 2′05″0 4′19″5 6′35″0 8′49″3
東大 ① 2′04″1 4′15″5 6′29″7 8′42″6

◇東大医学部対一橋第2エイト◇

一橋 ② 1′48″2 3′40″8 5′38″0 7′31″6
東大 ① 1′47„0 3′39″2 5′33″2 7′26″4

小艇振わず，エイト決勝に行けず—第48回全日本

全日本レガッタは，6月6，7日に世界漕艇選手権派遣代表選考会を兼ねて，付フォア，ダブルスカル，シングルスカル，8月29日30日にエイトをはじめ4種目と，2回に分けて行なわれた。6月の大会にはダブルスカル・シングルスカルに出場したが全く振わず。8月の大会は，エイトとオッ盾に参加。エイトは大会前土手評では優勝候補に挙げられ，確かに練習では素晴しい艇速を出していたが，予選の不調が続き，準決勝で慶応大学はともかく伏兵同志社にも敗れ決勝進出を阻まれた。

オッ楯は，予選で早稲田に負けたが敗者復活で勝ち残り，決勝でのレースに期待をかけたが，最低の調子で5位であった。

◇エイト◇

〔準決勝〕

慶応 ① 1′43″7 3′27″5 5′12″5 6′54″5
一橋 ③ 1′43″5 3′32″6 5′21″1 7′08″2
外大 ③ 1′47″8 3′38″6 5′26″7 7′13″0
京都 ⑤ 1′47″1 3′38″4 5′27″0 7′14″3
同大 ② 1′43″1 3′32″5 5′22″0 7′04″5

◇オックスフォード盾◇

〔決勝〕

一橋 ⑤ 1′41″9 3′34″5 5′25″7 7′11″8
新潟 ④ 1′41″8 3′29″9 5′15″0 7′01″0
防衛 ③ 1′36″9 3′24″7 5′09″8 6′55″4
京都 ② 1′33″8 3′17″4 5′04″6 6′46″4
早大 ① 1′36″8 3′18″9 5′03″1 6′43″4

◇シングルスカル◇

〔敗復〕

一　橋 ③ 9′22″3
駿台艇友会 ① 8′56″0
東　大 ② 9′09″3

◇ダブル・スカル◇

〔敗復〕

早大理工 ② 7′14″6
早　大 ① 7′11″0
一　橋 ③ 7′38″6

昭和46年

全種目東大に名をなさしむ—第23回東商戦

対校エイトは“今年こそは”と昨年10月から練習に練習を重ねてきたクルーだけに気魄は，はるかに東大を圧していたが，一本一本のストロークに差があり，400mで水があき，1,000mまでは期待をもたせたが，1,000m以降は勝負にならず，結局大差で東大に五連敗した。対校ダブル・スカルは，善戦したが勝てなかった。ジュニアエイトは，オープン・レースとなってから3年目をむかえて初めて東大が文科と理科とジュニアエイトを組み3バイレースが行なわれた。一橋はメンバーが9人しかおらず，ケガ人がおり満足な練習ができなかったが，500mでラップをとるなど，いいレースを見せたが，東大文科に逆カンバスでとどかなかった。

◇対校エイト◇

東　大 ① 1′28″6 3′01″5 4′36″5 6′13″4
一橋大 ② 1′32″1 3′09″1 4′49″5 6′32″1

◇ダブル・スカル◇

東　大 ① 1′43″5 3′36″6 5′27″1 7′20″3
一橋大 ② 1′46″6 3′42″5 5′36″3 7′33″1

◇ジュニア・エイト◇

東大文科① 一橋大② 東大理科③

1′33″9	3′09″4	4′50″4	6′31″9
1′33″8	3′10″0	4′53″7	6′35″7
1′39″0	3′19″1	5′03″2	6′48″1

◇女子レース◇

〔予選〕

三菱化成 ② 2′18″6
千葉大 ③ 2′25″8
一橋大 ④ 2′26″0
明治生命 ① 2′10″0

全く振わず—第49回全日本小艇

欧州選手権派遣代表選考会を兼ねた第49回全日本小艇選手権大会は，付フォア，ダブルスカル，シングルスカルの3種目にわたり，7月3日，4日，戸田ボートコースにて行なわれた。本学は付フォア2ハイ，シングルスカル2ハイが出漕したが，シングルスカル，付フォアBはいずれも予選敗退と全く振わず，最強メンバーでのぞんだ付フォアAも，準決勝で優勝候補の慶応，東レ滋賀とぶつかり，大接戦の末敗れ，決勝進出を阻まれた。

◇シングルスカル◇

〔敗復〕			〔敗復〕		
東大	③	8′20″0	中部電力	③	8′32″7
医科歯科	①	8′13″5	京阪電鉄	①	8′08″7
一橋	②	8′15″6	慶応	②	8′19″0
同志社	④	8′48″0	四日市	④	9′01″2

◇フォア◇

〔敗復〕

一橋B③ 東経大② 中大B① 早大理工④

1′49″4	3′42″4	5′37″7	7′32″2
1′48″0	3′40″1	5′32″0	7′23″3
1′46″8	3′38″7	5′31″6	7′23″3
1′47″1	3′41″1	5′41″6	7′43″5

〔準決勝〕

一橋A③ 慶応① 東レ滋賀（志賀）② 鹿児島大学④

1′43″0	3′31″6	5′24″1	7′16″3
1′40″3	3′29″5	5′22″4	7′13″0
1′43″0	3′30″8	5′22″6	7′13″5
1′45″5	3′37″7	5′31″7	7′27″3

敗復止まり—第49回全日本エイト

今大会では，多くの先輩，学生から何とか立ち直ってもらおうとの期待が大きかった。

全日本エイトは，予選で5コースというコース運の悪さがあったにせよ，防衛大に4艇身もの差をつけられ，3位。敗者復活戦は，スタートでは出遅れたものの1,500mでは京大にキャンバスの差で続いていたが，ラストで，中央にトップをとられ，京大を捉えられなかった。

◇エイト◇

〔敗復〕 NW2.0m/s

中央大 ① 6′31″0
京都大 ② 6′31″5
一橋大 ③ 6′33″2
山口大 ④ 6′46″1

◇オックスフォード楯エイト◇

〔敗復〕 SW2.5m/s

静岡大 ① 6′41″8
同志社 ② 6′42″8
一橋大 ④ 6′54″7
慶応B ③ 6′45″4

◇女子シングルスカル◇

〔決勝〕 E1.0m/s

一橋（三谷） ② 5′16″7
早大 ① 5′01″1
外語大 ③ 5′38″1
一橋（後藤） ④ 5′49″3

C組3年振りに優勝—第82回秋季大会

第82回一橋大学秋季競漕大会（HCS大会）は，大会会長に馬場学長代行をお迎えし，11月14日，戸田ボートコースにも挙行されました。注目のチャンはC組が着実なレース展開を行ない，追い上げるH，Sをふりきって，3年ぶりに優勝。セコ・サードはそれぞれC，Sが大差でゴールインし，優勝カップを

ものにしました。

◇第1選手◇（2,000m）

C	①	1′38″6	3′25″5	5′14″2	7′04″3
S	②	1′41″5	3′29″0	5′17″5	7′08″4
H	③	1′40″0	3′26″0	5′17″0	7′09″4

◇第2選手◇（2,000m）

C	①	7″04″3
S	②	7′08″4
H	③	7′09″4

◇第3選手◇（ナックル 1,000m）

C	③	4′55″0
S	①	4′31″8
H	②	4′42″0

昭和47年

6年振りの勝利—第24回東商戦

◇対校エイト◇

一橋	①	不明	3′24″8	5′12″3	7′03″7
東大	②	不明	3′31″4	5′18″4	7′10″6

東大のスタートに比して一橋が必ずスタートで出るとの確信があった。トップが斜風に流されたままスタートしたがすぐに少し大きめに舵を切り，極端な程，トップを風上に向けて以後舵を切った。予定通りスタートで出，強く10本，コンスタントに下すあたりで，一艇身，500mで水があいた。勝負はここまでで，1,000mあたりまで，しばしば後を見て，東大の艇の出かたを見たが，出が悪いので，1,000m以後，予定通り，1,500mの強く10本のみで，あとは艇速が鈍った時，強く5本を単発したのみで舵に専念した。1,000m前後の東大のスパート，1,500m前後での一橋の艇速の鈍りも，さ程気にならず，ラスト150mでラストスパートに入った。

◇シングルスカル◇

一橋	①	2′08″8	4′15″9	6′30″4	8′45″0
東大	②	2′14″8	4′25″4	6′40″9	8′58″2

◇ジュニア・エイト◇

東大理A① 一橋④ 東大理B② 東大文科③

1′40″1	3′28″4	5′21″7	7′10″9
1′43″0	3′34″9	5′30″3	7′27″7
1′45″3	3′35″2	5′27″8	7′13″4
1′49″2	3′39″7	5′31″6	7′22″7

敗復止まり—第50回全日本

第50回全日本エイト，第12回オックスフォード楯エイト選手権レガッタは，8月26日・27日戸田コースにて行なわれた。両日とも快晴ではあったが強い横風の為，必ずしも良好とは言えぬコンディションの下，全日本は東レ滋賀が，オッ楯は同志社大Bが，それぞれ優勝した。一橋大対抗クルーは，商東戦以後メンバーの交代が激しく，継続的な練習の出来ないまま合宿入りし，よく健闘したが，敗復でわずかの差で届かず，準決勝進出をも逃がした。オッ楯エイトも，有力選手を対抗に引き抜かれたのがたたり，惨敗した。全日本の小艇部門の選手権は，11月3日・4日・5日，戸田コースにて行なわれ，シングルスカルのみが出場したが，準決勝で敗退。

◇エイト◇

〔敗復〕

防大② 中大① 一橋大③ 小樽商大④

1′32″7	3′12″2	4′54″3	6′35″0
1′32″2	3′10″0	4′53″4	6′36″6
1′34″6	3′13″6	4′55″0	6′36″6
1′40″6	3′26″0	5′08″2	6′49″8

◇オックスフォード楯エイト◇

〔敗復〕

関　学	①	1′42″5	3′27″9	5′12″5	6′56″6
都立大	②	1′42″6	3′27″4	5′13″9	6′57″9
一橋大	③	1′47″5	3′38″2	5′28″9	7′20″4

◇シングルスカル◇

〔準決勝〕

東レ② トヨペット① 一橋大③

1′56″0	3′58″9	6′02″6	8′06″5
1′50″4	3′49″1	5′52″9	7′53″9

1′59″3　3′57″7　6′07″5　8′08″9

H組圧勝―第83回秋季大会

第83回ＨＣＳ大会は，11月19日戸田コースにて行なわれた。大会副会長村松祐次先生の御挨拶の後，審判長長谷晨氏より諸注意があり，いよいよレースが開始された。ＯＢレース第二選手レースＨ組優勝の後，注目のチャンスは，スタートから飛び出したH組が，一本一本突き離し，他クルーを寄せつけずそのままゴールイン。

◇第１選手◇（2,000m）

H ①　1′43″2　3′34″0　5′26″3　7′25″1
C ③　1′47″5　3′39″1　5′34″2　7′33″1
S ②　1′46″3　3′37″8　5′29″6　7′29″5

◇第２選手◇（2,000m）

H ①　9′41″0
C ③　11′09″7
S ②　10′53″9

昭和48年

２連勝ならず―第25回対東大戦

第25回一橋大学・東京大学対校競漕大会は，５月５日晴天の戸田オリンピックコースにて行なわれた。ジュニアエイト，対校フォア共に完勝の後，期待の対校エイトは，ミドルスパートでリズムを狂わせ，スタートのリードを守り切れず，ゴールにおいては水をあけられ完敗した。

対校付フォアは，２年生のみで編成されていたにもかかわらず，漕歴の不足を持ち前の元気で補い，スタートから東大を寄せつけず，大差で完勝した。

ジュニアエイトは，スタートをうまく飛びだし，その差を守り切った。

近年各大学の運動部員の減少がいろいろ論議されているが，端艇部もその例外でなく，例年部員の入部が減少し，せっかく入った部員も急激に少なくなるという現象が毎年の様に繰り返えされているが，その様な中で，今年の２年が14名も残り，それに続く１年生が体格も良く，20名を越えている。荒川沖遭難事故のショックが漸く薄れるようになった今，これら若い部員をいかに部内に停まらせ，底辺を広げるかという事が大きな課題であると思う。

◇エイト◇　E 3 m/s

東京大 ①　1′40″3　3′26″4　5′16″3　7′11″4
一橋大 ②　1′37″6　3′27″2　5′21″9　7′19″3

◇フォア◇

東京大 ②　1′51″6　3′55″6　6′04″7　8′14″3
一橋大 ①　1′48″6　3′50″5　5′54″2　7′58″1

◇ジュニア・エイト◇

東京大 ②　1′42″7　3′35″7　5′34″0　7′28″3
一橋大 ①　1′41″5　3′33″3　5′29″7　7′23″5

エイトは敗復どまり，フォアＢのみ準決勝へ―第51回全日本

◇エイト◇

〔敗復〕

一橋大④　東大③　早大①　関西学院②
名古屋大⑤

1′36″7　3′21″3　5′09″2　6′52″9
1′32″8　3′11″5　4′53″8　6′36″7
1′33″2　3′13″3　4′54″2　6′34″8
1′34″7　3′14″8　4′56″1　6′36″6
1′39″5　3′27″0　5′17″9　7′08″9

◇オックスフォード椙◇

〔敗復〕

静岡大 ②　1′38″8　3′22″2　5′08″4　6′52″7
北　大 ①　1′36″9　3′20″0　5′06″2　6′51″1
一橋大 ③　1′41″0　3′29″2　5′17″0　7′08″3

◇フォア◇

〔準決勝〕

外語大 ①　1′45″9　3′39″1　5′35″0　7′30″8
佐賀大 ②　1′46″0　3′40″6　5′38″3　7′34″0

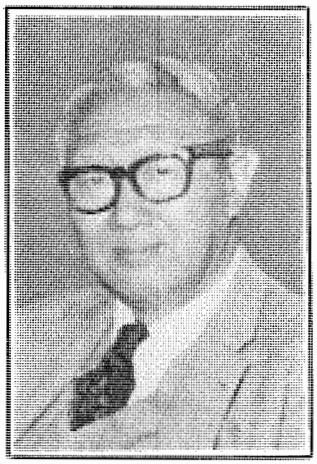
一橋B ③ 1′50″9　3′48″3　5′45″9　7′42″9

H組連続優勝―第84回秋季大会

第84回H．C．S大会は，年間スケジュールの調整のため，暮れもおしせまった12月23日，戸田ボートコースで行なわれました。当日は競艇開催中のため1,500mで勝負を決めるレースになった。最終レースが始まるころには，風もぴたつとやみ絶好のコンディションとなった。スタートは出遅れるクルーもなし，一勢に飛び出しH．C．S各組とも前半はCLOSE RACEを展開した。後半になって，H組がややLEADを取ったのをきっかけとしてグイグイ艇速をのばし，激しくLASTスパート，迫るS組さらにC組を僅差で押えて優勝した。

昭和49年

村松祐次先生急逝


故村松祐次先生

一橋大学端艇部長村松祐次先生は，御退官を間近にしながら，3月6日肝硬変の為急逝されました。享年63歳。先生は昭和24年以来25年の長きに亘り，部長として指導に当られました。昭和24年といえば，第一回東商戦が開かれた年であり，言わば先生は東商戦とともに歩んで来られた訳です。その間，東商戦は年を追う毎に盛大になり，実に今年26回を迎えました。東商戦も少年期から青年期に入った訳で，これから更に発展しようとするこの時期に先生を失った事は返す返すも残念でなりません。

新端艇部長に中川　助教授

事在強勉　部長　中川　　学

どういう心境でボートを漕ぐのか。それは人それぞれの気持があるわけで，とても一元的には意味づけられないであろう。ただ，どういうわけでか，漕ぎたい人々があつまって一緒にくらしている。そのくらしの場の核心にあって，故村松部長は，四分の一世紀間，みんなの面倒を見てこられた。

部長って何をなさるものなのですかとたずねたとき，「祈るものさ。みんながしっかりやれるように，一人くらい祈りつづけるものがいたっていいだろう。」とのおこたえを得たことがある。「しっかりやれよ」と部員を鞭韃なさる先生の書斎には，故根岸佶博士の筆で「事在強勉」と書かれた額が掛けられてあった。なにごとも「強いて勉める」つまり「しっかりやる」のが先決で，楽しみが味わえるとすればそれは人事をつくしたあとのことだ，と説明してくださった。

ボート部にくらした人々のみんなの願いを集約し，先生は一心に祈ってこられた。その一念一願は，かなえられもすれば，又，達せられないこともあった。残念なことに，多事にして多難，そして多敗でもあった。けれども，念願かなって，花の隅田川に東商戦がよみがえりロングレースがたたかわられるようになった頃，若手教授の先生はとても嬉しそうだった。戸田と茨戸に，遠来のオックスフォード・クルーを迎えうって優勝したときのお喜びようにいたっては，まさに宙に舞わんばかりであった。そして，相模湖の合宿所建設にあたっては，汗みどろ泥まみれになって陣頭指揮され，われわれがしっかりやれる場を築いてくださった。

レッド・オアーズのゆきかう湖畔で，先生に写生を楽しんでいただけたらと思っていたことも，今はかなえられぬ夢となった。われわれの胸中に去来する回憶，感謝，追悼のおもいは，銘々それぞれの響きをもって，先生のご霊前につたわることであろうし，それぞれに先生の遺志をうけとめていくことと思う。

銘々の存分の響きがコダマしあう，いわば大きなシンフォニーのような部生活。そういう諸君と，私は顧問教官という立場で結ばれることになった。その第一歩を，どういうかたちで踏み出すにせよ，「事ハ強勉ニ在リ」ということを考えないわけにはいかないのである。故村松部長をまねるわけではないが，みんな，しっかりやろうぜ。！

ジュニアエイト以外敗れる―第26回東商戦

第26回東商戦は5月5日，ここ数年の大会とはうって変わった今にも泣き出しそうな雲天の下，戸田オリンピックボートコースにて行なわれた。

ジュニアエイトクルーは，東大クルー3バイをおさえ完勝したものの，続く対校フォア対校シングルスカル，対校エイトはたて続けに敗北を喫した。

◇対校エイト◇

一橋	②	1′40″8	3′29″6	5′17″9	7′05″0
東大	①	1′37″4	3′24″2	5′12″6	7′00″0

◇フォア◇

一橋	②	2′02″5	4′07″8	6′18′8	8′32″6
東大	①	1′58″4	4′03″3	6′12″3	8′20″4

◇シングル・スカル◇

一橋	②	2′05″6	4′24″6	6′51″6	9′17″7
東大	①	2′07″8	4′24″8	6′44″7	9′01″4

◇ジュニア・エイト◇

東大（文理）③　一橋①　東大（文科）④　東大（理科）②

1′45″4	3′33″2	5′22″3	7′10″00
1′38″0	3′24″3	5′12″7	6′58″9
			7′13″8
1′41″5	3′26″5	5′15″3	7′03″8

準決勝どまり―第1回全日本大学選手権
第14回オックスフォード楯レガッタ

準決勝終了後，台風による荒川増水のため，戸田コースが欠壊し，決勝は中止となりました。

◇エイト◇

〔準決勝〕

関西学院大	④	7′18″1	
一橋大	③	7′16″7	
京大	②	7′16″5	
早稲田大	①	7′08″4	

◇フォア◇

〔準決勝〕

一橋大	③	8′36″0	
金沢大	②	8′31″8	
都立大	④	8′48″1	
中大理工	⑤	8′58″5	
広島工大	①	8′22″1	

◇オックスフォード楯エイト◇

〔準決勝〕

千葉大	②	7′42″0	
一橋大	③	7′42″2	
東京大	①	7′30″3	
土浦艇友会	④	7′51″4	

第52回全日本レガッタ・第15回全日本新人レガッタ

◇エイト◇

〔準決勝〕

同志社大	②	3′07″2	6′20″0
東レ	①	3′04″4	6′18″4
東大淡青会	③	3′07″0	6′30″5
東北大	⑤	3′13″2	6′34″6
一橋大	④	3′11″2	6′34″2

◇シングル・スカル◇

宮武（一橋大）③　柿沼（早大）②
永沼（法政）①　藤井（一橋大）④

1′56″4	3′58″5	6′03″0	8′07″2

1′54″2	3′54″6	5′55″0	7′54″0
1′51″8	3′51″4	5′52″5	7′50″9
1′57″4	4′03″3	6′11″5	8′15″5

H組3連勝—第85回秋季大会

去る12月1日，戸田ボートコースにおいて，恒例の一橋大学秋季競漕大会が行なわれました。H・C・S対抗レースは，スタート直後からC組とH組がせり合い結局C組がカンバス差で勝利を得ました。なお，先立って行なわれたOBレースではH組の勝利に終わりました。

◇第1選手◇

H	②	1′46″3	3′37″2	5′30″0	7′20″9
S	③	1′57″0	3′59″8		8′06″0
C	①	1′44″6	5′29″3	5′29″3	7′20″2

村松前部長の追悼会行われる

村松前部長の追悼会が6月29日午後2時より如水会館，スターホールにて行なわれた。四神会，端艇部が中心になって企画を進め，当日は華子未亡人をはじめとし，大正年代卒業OBから，昭和49年卒業のOBまで，幅広い層に渡り，100名を越す参加者を得た。会場は白菊でふち取られた先生の写真を中心として，左右にレッドオールが立てられ，先生の著書が並べられた。式は四神会のOBの方々からの御言葉を初めに，端艇部の代表の言葉でしめくくられ，先生の経歴，先生の生前の声が tape によって会場に流された。改めて，学者としての先生，端艇部長としての村松先生を思い起こさせる追悼会であった。式の後，超OBから，現役端艇部員入り混って立食パーティが装され，5時には当日の予定のすべてが終了した。

昭和50年

対校エイト・対校フォア惜敗

ジュニア・シングルスカルは楽勝——

第27回東商戦は5月5日晴天の戸田コースで行なわれた。

今年は史上初の1マイル（1609m）レースとなり，好レースが期待されていた。ジュニアエイトは東大3杯をスタートから引き離し，そのリードを守り切って，2位の東大Cクルーに2艇身の差をつけて悠々ゴール。

注目の対校エイトは，スタートで一橋が飛び出したものの，コンスタントにおろしたころから，ジリジリ東大につめられ，400mで逆に東大に半艇身リードを奪われた。

その後は，両クルーのスパートのかけ引きで艇差は1艇身から2/3艇身まで詰めよる白熱したレース展開となったが，結局⅔艇身で涙をのんだ。

これで対戦成績は6勝20敗1中止となり，対東大戦3連敗を喫した。

▼ジュニアエイト

東大A	③	1′39″9	3′24″0	5′35″6
一橋大	①	1′36″0	3′15″4	5′20″4
東大C	②	1′39″1	3′21″4	5′26″8
東大B	④	1′44″0	3′33″4	5′51″5

▼対校シングルスカル

東　大	②	2′08″8	4′20″5	7′04′2
一橋大	①	1′53″4	3′53″0	6′21″6

▼対校フォア

東　大	①	1′46″5	3′34″3	5′50″2
一橋大	②	1′47″5	3′3L″4	6″00″0

▼対校エイト

東　大	①	1′31″1	3′07″2	5″06″2
一橋大	②	1′33″2	3′08″9	5′10″2

昭和51年

四年ぶりの勝利—第28回東商戦

◇エイト◇

一橋大 ① 1′31″0　3′05″6　4′44″5　6′24″1
東　大 ② 1′31″9　3′08″7　4′46″2　6′26″5

朝からの逆風も弱まり，スタート地点に着ける頃には弱い横風に変わって絶好のコンディション。スタート前の野次り合いで，完全に東大を圧倒し，意気上がる中，定刻通り15時50分，スタートのフラッグがおろされる。一橋，6本，10本，10本コンスタント，東大は，10本，10本でコンスタント，6本は練習時通りの出来で，ほぼ平行，一段目力漕（ピッチ47）で，キャンバスだけでる。二段目（ピッチ41）ではほぼそのままで，東大が先にコンスタントに下ろすが，ピッチ下りきらず，40の声，数本力漕が長かった分だけ，1シートさらにでて，コンスタント38.5に下ろす。下ろして10本で，足けり5本，相手のピッチ40に⅓艇身リードして300mを通過，リズムは非常によく，相手の下ろし際をねらってもう一度足けり5本，これで½艇身に差を広げる。このとき東大ピッチ38，一橋38.5，そのまま，500mにかかって初めての足けり10本よくでてさらに⅔艇身に差を広げ，800mで2度目の足げり10本一気に水を開ける。後半のスタミナに自信を持っていた我々は，ここで勝利を確信し，このまま大差をつけんものと1,000mで，3度目の足けり10本を入れるが，少々気がゆるんだのか決まらずピッチはかえって一枚ほど下がり，リズムが少し忙しくなって艇が思うように出ない。1,100mあたりから，東大は，「深いオール」のcryから得意の足けり10本を2～3回入れて，半艇身差に迫る。下ろし際を狙って強く，足けりを入れるが，どうももう一息の感。しかし相手の足けりも，昨年のような切れ味がなく，また我がクルーもよく落ちついてリズムを回復，ラストクオターに入ると，逆にまたじりじりと離しはじめる。予定通り1,600mで，ピッチ1枚上げて38.5，1,700mで，さらに1枚あげて39.5，ラスト250mからスパートに入り，土手から大歓声を受けつつ，デスパレイト（43），¾艇身から逆カンバスの差をつけてゴール。勝った！

◇対校付フォア◇

一橋大 ② 1′55″1　3′53″1　5′56″2　7′55″2
東　大 ① 1′48″8　3′41″9　5′37″7　7′33″7

◇対校シングルスカル◇

一橋大 ② 1′51″7　3′56″9　6′18″4　8′32″1
東　大 ① 1′52″2　3′55″2　6′02″9　8′12″9

◇ジュニアエイト◇

一橋大 ② 1′39″9　3′27″4　5′16″6　7′05″2
東　大 ① 1′42″0　3′27″9　5′16″3　7′04″4

中日本レガッタ制覇—第21回中日本レガッタ

6月12日～13日　愛知県愛知郡東郷町　愛知池　静水直線 1,000m

◇エイト◇〔決勝〕（1,000m）

一橋大学　①　3′03″80
京都大学A　②　3′05″68
法政大学　③　3′07″40
大阪大学　④　3′10″43

いよいよ決勝のレース。第1レースから大阪大，京都大，一橋大，法政大の4校。京都，法政とは予選，大阪とは準決ですでに顔を合わせ勝っているので別にあがることもなくスタートにつける。ウォーミングアップ途中から降り出した雨が，スタート直前には数メートル前も見えなくなるほど激しくなり，身体も徐々に冷えてくる中，法政とやじりあって意気を上げて，15時30分スタート。例によって6本，10本（47），10本(42）でコンス

タント（38.5）。寒さのせいか，かたさも目立つが出は悪くない。スタートのよい法政にはキャンバス程出られるが，その他の頭をおさえてコンスタントでじりじり法政を追い，300mでとらえて400mの足蹴り10本で半艇身リード。それまで力漕を続けていた法政がピッチをおろすと一気に水をあける。500mをすぎると，かわって京都が45のハイピッチで追って来るが，強くで押さえ，引きつけて700mで1枚あげ，800mからスパート（43）。一時半艇身程につめられたのを3/4に広げ，余裕をもってゴールした。

昭和52年

対校エイト惜敗―第29回東商戦

第29回東京大学一橋大学競漕大会は，5月8日の日曜日に，快晴斜順の好コンディションの中で行なわれた。本学対校エイトは，レース前日まで戸田の土手評では有利を噂されていた。レースは，500mまでは全くの同タイムであったが，第2クォーターで東大がスルスル出だし，1,500m地点においては1艇身強の差があったが，本学も1,400mあたりから強くを連発しピッチもしだいにあげて，一時は逆転優勝もと思われたが，わずかに0.4秒およばず惜敗した。これで対校エイトの対戦成績は7勝対12勝となり，またまた差が開いてしまった。来年からは連勝に連勝を重ねて差をなくして欲しいものである。

また，シングルスカル・ダブルスカルはスタートから着実に地力の差を示して快勝したが，対校フォアはクルー編成の遅れが最後までたたり完敗。ジュニアエイトもレース当日に漕手が風邪をこじらせ，高熱を押して出漕したものの，東大のジュニアエイト2艇に見せる所なく完敗した。

◇対校エイト◇

東大①　一橋大②

1′28″4	3′02″2	4′39″2	6′14″0
1′28″4	3′04″8	4′42″6	6′14″4

◇対校フォア◇

東大①　一橋大②

1′44″2	3′33″1	5′24″4	7′18″6
1′50″0	3′45″0	5′44″0	7′39″8

◇対校シングルスカル◇

東大②　一橋大①

1′57″8	4′03″0	6′11″0	8′26″0
1′58″2	3′58″4	6′02″6	8′10″3

◇ダブル・スカル◇

東大②　一橋大①

1′50″6	3′50″7	5′55″0	7′56″6
1′48″1	3′42″7	5′42″8	7′44″9

◇ジュニアエイト◇

東大(旭)①　一橋③　東大(暁)②

1′34″4	3′12″9	4′54″8	6′38″5
1′37″4	3′20″5	5′01″6	6′47″4
1′33″5	3′12″3	4′56″4	6′41″6

中日本レガッタ連勝

中日本レガッタは6月11日，12日の両日，愛知県の愛知池で行なわれた。この大会は昨年に続いての出場であり，東商戦の鬱憤を晴らすべく奮起し，予選からコンスタントスピードで危げなく勝ち進み見事に昨年に続く優勝を収めた。

愛知池は例年風に恵まれる場所であったので今年も好タイムが期待されたが，あいにく今年は天候も不順で，強い逆風が吹き望まれたタイムを出すことができなかった。ただ，今春朝日レガッタで優勝した関西の雄，同志社大学に第2次予選，決勝の2レースとも完勝できたことは，これからのレースへの大なる力づけとなるであろう。

◇エイト◇〔決勝〕

同　大　③　3′23″97

一　橋　大　①　3′21″36
トヨタ自工　④　3′28″19
中　央　大　②　3′23″54

（レース経過）　東商戦の敗北後，郵船レガッタではシート外しのアクシデントで早稲田に負け，翌日の東大・東工大との千米タイムレースでは，東大に水を開けられて完敗し，負け続けであったが，愛知池に来て，ようやく勝利の女神は我々にほほえんでくれた。

準決勝までの3レースともコンスタントの力に違いを見せて楽勝し，決勝に臨んだ。レーンは同志社大，一橋大，トヨタ自工，中央大の順，好調を伝えられた同志社も愛知池で見る限り迫力に欠けるし，トヨタはバテている。中央大はタイム的には互角だが，いつも戸田で見ているせいか負ける気はしなかった。大きく漕いでコンスタント・パドルで勝負することを確認し合つてスタート。一次予選でフライングを取られて以来，フライング気味の東大型スタートをやめたこともあって，スタートは不調で，ハイピッチで漕ぐ同志社や中央に，はじめのうちは出られるが，300を過ぎて一線に並ぶ。500での「強く10本」が決まり，リードを奪う。700では半艇身のリード。750から相手の出方を見ながら余裕を持ってピッチを1枚ずつ上げ，結局，3分の2艇身差でゴール。会心の勝利であった。

惜しくも3位　全日本学生エイト
全日本付フォア　健闘5位

第4回全日本大学選手権競漕大会は，52年8月27日・28日の両日，戸田オリンピックコースで行なわれた。本学対校エイトは最近にない大型クルーで，戦前の土手評では一橋強しの声が高かった。しかし，予選2位のタイムを出しながら敗復におちたことにより調子の波に乗り切れず，決勝には進出したものの惜しくも3位に終わった。しかし，十年ぶりに決勝進出を果たした成果は大きく，その経験を生かした本年度クルーの活躍に期待したい。

また，同日併催されたオックスフォード楯争奪レガッタには，2年から4年までの多彩なメンバーで臨んだが，敗復止まりであった。

11月3日，5日，6日に行なわれた全日本選手権には，本学対校エイトはクルー編成後間もなく，また長期的展望に立った練習が最重要としてあえて出場を見合わせた。一方4年生のみで出漕した付フォアは，予選，準決といずれも1位で決勝に上がり，優勝の期待を抱かせたが，惜しくも5位であった。

また，2はい出漕した新人エイトは，いずれも敗復で敗退した。

◇大学エイト◇（8/27～28）
〔決勝〕　E1.1m/s
東大①　同志社大④　中央大②　一橋大③　日大⑤

1′35″87	3′15″57	4′55″40	6′31″58
1′37″43	3′16″78	4′56″35	6′35″95
1′34″51	3′13″51	4′55″15	6′33″92
1′35″94	3′14″95	4′56″63	6′35″91
1′36″00	3′17″75	4′58″93	6′40″77

（レース経過）　我々のインカレ制覇にとって，目の上のタンコブは中大になってきた。予選・敗復・準決を通じてベストタイムは中大の6分16秒74。次が一橋の6分17秒00であって，10秒台のクルーはその2クルーだけであった。何とかして中大に予選と準決の借りを返したかった。決勝進出クルーは戦前の予想通り1レーンから東大・同志社大・中大・一橋・日大の順である。ついに決戦の時が来た。ウォーミングアップを始める。パトルの走りも悪くない。岸を自転車で走る中野さんからすかさず「よく走ってるぞ！」と，声が掛かる。ステッキボートにつける。弱い逆風だ。準決同様右隣りは中大。Start！　中大がややリード，同志社が遅れ他は一線。中大

とは準決と同じ位置関係だ。500過ぎ日大が遅れほぼ1L差。東大もやや遅れて来た。やはり中大との勝負か。1,000を過ぎて日大艇がバウサイドに曲がり始め，接触しそうになる。それを気にしているうちに，今度は我が艇も中大に寄り始めた。審判艇からの注意が聞える。ブイをたたいたり，中大の泡をかいたらまずい。両隣りを気にしているうちに，1,500の少し手前で東大がかなり出て来たのに気づく。同志社も上がってきた。しかし我々の前には依然として中央が½L差でがんばっていた。この時，東大のことを漕手全員に意識させるクライをしたらどうだったか。発想の転換により，漕手は新しい力を生みだし，新しいリズムでラスト500を漕げたかも知れない。東大にできたラストの追い込みが我々に出来なかったことがくやしい。我々は，結局，予選の逆転負け以後，中大の存在を意識するあまり，自分たちのベストのリズムを取り戻すことができないで，マイペースで漕いだ東大に優勝の栄冠をさらわれてしまった。2レーンから5レーンまでの4クルーが寄ったり離れたり泥仕合を繰り返しているその横を東大がさっそうと駆け抜けてゴールインしていた。

◇オックスフォード楯エイト◇

〔敗復〕

防衛大④　早大理工②　檀国大①　一橋大③
東京水産大⑤

1′45″46	3′32″37	5′19″29	7′07″05
1′39″28	3′22″86	5′06″34	6′51″01
1′36″51	3′20″44	5′06″07	6′49″07
1′40″70	3′27″58	5′15″04	7′06″35
1′46″72	3′36″52	5′28″62	7′20″92

◇全日本フォア◇（11/3～6）

〔決勝〕NE2.2m/s

新潟大③　福島大②　東レ滋賀①
トヨタ自工④　一橋大⑤

1′47″93	3′37″87	5′33″04	7′25″02
1′47″86	3′38″77	5′33″79	7′24″61
1′45″07	3′33″73	5′28″37	7′19″25
1′46″78	3′37″56	5′34″78	7′25″31
1′46″99	3′38″63	5′36″71	7′27″85

◇新人エイト◇

〔敗復〕

一橋大(恒天)　④　7′20″3

〔敗復〕

一橋大(青龍)　④　7′20″3

S組3連覇—第88回秋季大会

第88回一橋大学秋季競漕大会は11月27日（日）戸田のオリンピックコースで開催された。午後1時半の開会式のあと，戦後卒OBレースがスタート。最初H組の飛び出しがすばらしく，後半S組が激しく追漕したものの僅差（約30cm）でゴール。レースは第二選手によるシングルスカルとすすみ，3時半第一選手レースがスタート。スタートからCが飛び出し，SとHがそれを追う形となったが，レース直前艇を破損し，乗り替えるというハンディキャップをもつCは後半にぶり，1,700m地点でSにつかまり，デッドヒートとなったが結局S組がせり勝ちキャンパス差でゴールへ飛び込んだ。

S組は昨年，一昨年優勝したのに続き，HCS大会三連勝を飾った。

◇第一選手レース◇（シェルエイト2,000m）

C　②　7′17″1
S　①　7′16″5
H　③　7′28″3

◇第二選手レース◇

（シングルスカル 1,000m）

C　①　4′20″0
S　③　4′38″5
H　②　4′36″3

河西副会長（9月29日），**中山前副会長**（10月29日）**ご逝去**

四神会副会長河西源吉氏は今春東京都漕艇協会会長ならびに日本漕艇協会副会長に選任

され，また如水会常務理事，如水会寮歌祭実行委員長などの役務にあたって非常な活躍をしておられたが，不測の病を得られ，9月29日逝去された。

また前副会長中山隆祐氏も10月29日逝去された。両氏ご在世中，四神会発展のため尽くされた業績を偲び，謹んでご冥福をお祈りしたい。

河西さんとボート



故河西源吉氏

河西さんの余り長いともいえない一生にとって，多感な青春における一橋のボートとの出合いは，かなり重要な意味をもっていたように思われる。府立四中を卒業して商大予科に入学されたのが，大正14年。この年に初めて隅田川でクラスチャンのオールを握られたが，母校商大はこの年に全日本レガッタに優勝の栄冠を獲得した。一年こえて昭和2年，予科3年のときには，応援団の参謀長をやられ，この年も商大名門時代で全日本に優勝した。

河西さんは生来，余り頑健でもなく，背も高からずといった処から，華やかなボート選手となることなく，商大6年の青春時代を専らバックマンとして七面六臂の活躍をされた。三谷一二氏や菅禮之助氏などの先輩からの資金集め，校内レース用のクリンカー・エイト建造資金の大学からの予算獲得，東洋一の向島艇庫の建設，一橋会理事としての学内での活躍などなど，枚挙にいとまがない。

関東大震災（大12）から向島艇庫竣工（昭5）に至る当時のボート部は，畑，寺尾，坂岡，木村(賢)，宮沢，高橋(朝)，和田(庸)，池上，塚田，高林，宇治原，中川(英)などの部員が活躍し，多士済々であった。それらの先輩から河西さんは鍛えられ，商大黄金時代の一橋愛の精神を受けつがれた。昭和4年，選手経歴の乏しい河西さんが100名近い部員をリードする端艇部理事に推されたのも，「河西の源ちゃん」と皆から愛された信望による。一橋ボートマンの魂の城，心の故里の向島大艇庫の建設に参画して，深夜，寒風肌をさす墨堤の工事現場をかけ廻って，杭打工事の監視を続けられたという挿話も，河西さんの真摯熱烈な人柄を現わしている。

不況時代の昭和6年に卒業して，11年品川白煉瓦に入社，岡山工場に赴任。社務に尽瘁される一方，ボートへの愛情たちがたく，スカルこぎにあきたらず，37年の岡山国体にそなえて，33年に同社ボート部を創立，県の漕艇協会々長にもなられた。38年本社常務就任後は，激務のかたわら，四神会副会長，東京都漕艇協会副会長，のうちに会長，日本漕艇協会副会長などを歴任されて，極めて熱心に後輩の指導に当たられた。寮歌祭の実行委員長を引きうけられたのも，かっての応援団参謀長としての活躍を想起させる。筆者は河西さんの9年後輩になるが，親しくご交誼ご指導を賜わったのは，最近の10年間である。あの紅顔の温容と秋霜の厳しさにふれて，教えられ，励まされてきた。今ここでその追憶のかずかずを述べるいとまはないが，去年の暮，河西さんと2人で，戸田の合宿所を訪れて，若い選手諸君と会食し，膝を交えて，一

橋の歴史を諄々と説かれていた姿が，筆者の眼にやきついている。骨身惜しまず，一橋ボートへの熱い愛情をもち続けられた河西さんが亡くなられて，一つの大きな穴があいた感じである。　　丸山泰男（昭和15年学卒）

昭和53年

東商戦敗れる

一橋大学，東京大学対校競漕大会は，本年で第30回目を迎えた。当日の5月7日は朝からあいにくの雨で，会社招待レース，OBレースは雨中のレースとなったが，午後からは雨も小降りとなり風も微順とまずまずのコンディションとなった。

注目の対校エイトは小雨の中午後3時半スタート。本学対校エイトはスタートから積極的にハイピッチでとばしキャンバス程リードして500m地点を通過したが，その後じりじりと東大に追い上げられ，1,000m地点では並ばれ，そのまま差を拡げられ結局2艇身差で敗れた。これで対校エイトの対戦成績は7勝対22勝となり，またまた差が開いてしまった。

またシングルスカルは終始水のあかない大接戦となったが，30cmの僅差で勝ち一人気を吐いた。対校フォアは体格，漕歴の劣勢をはねかえすことができず完敗，ジュニアエイトも前半の半艇身のリードを保てず惜敗した。

◇対校エイト◇

一橋	②	1′31″2	3′07″2	4′48″1	6′29″5
東大	①	1′31″6	3′06″2	4′43″9	6′22″2

◇対校フォア◇

一橋	②	1′48″4	3′38″9	5′36″0	7′34″3
東大	①	1′47″4	3′35″6	5′27″5	7′17″1

◇対校シングルスカル◇

一橋	①	1′55″8	4′00″3	6′05″7	8′12″8
東大	②	1,57″3	4′00″6	6′08″0	8′13″5

◇ジュニアエイト◇

東大(暁)①　一橋②　東大(旭)③

1′36″4	3′15″6	4′58″2	6′41″9
1′34′4	3′14″3	4′59″1	6′44″3
1′41″0	3′26″0	5′10″1	6′54″2

中日本レガッタ4位に終る

中日本レガッタは6月10，11日の両日愛知県東郷町の愛知池で行なわれた。あいにくレース場は渇水により1,000mのコースがとれなかったため，すべてのレースは950mで行なわれた。

本学対校エイトはレース前戸田コースにおいてかなりの艇速をみせており，愛知池での土手評も高かった。また昨年，一昨年に続き三連覇せんものとクルーの意気込みも強くレースに臨んだ。

予選，準決勝と危げなく勝ち進んだ本学は決勝で初めて強豪とあたったが，スタートの出遅れが最後までたたり，4位という不本意な成績に終った。

◇エイト◇

〔決勝〕（950m）

滋賀大	⑤	2′53″55
飛水会	②	2′48″89
東レ滋賀	①	2′45″79
中央大	③	2′51″45
一橋大	④	2′53″36

全日本学生エイト5位

全日本決勝進出ならず

全日本学生ダブルスカル　健闘5位

第5回全日本大学選手権競漕大会は，53年8月25日・26日の両日，戸田オリンピックコースで行われた。本学対校エイトは夏場の漕ぎ込みをもって本大会にのぞんだ。予選では東北大学に離され2位で敗復にまわった。準決勝では先行する東大を1,300m付近でと

らえ商東戦の借りを返し，決勝進出を果たした。

決勝では惜くも5位という成績で，並行して行なわれていた全日本選手権の決勝進出への切符を手にすることができなかった。

10月28日・29日に行なわれた全日本新人選手権には，今までになく2年生のエイトを出し期待されていたが，夏の間のブランク，合宿期間の短さもあり準決で敗退した。

◇全日本学生エイト◇

〔決勝〕

筑波大③　日大②　東北大①　中大⑥
北大④　一橋大⑤

1′34″00	3′13″34	4′52″58	6′29″77
1′32″12	3′12″40	4′51″05	6′28″74
1′32″73	3′10″69	4′48″31	6′26″46
1′35″20	3′17″68	5′02″31	6′46″67
1′33″18	3′15″23	4′57″70	6′39″24
1′36″40	3′18″12	5′00″15	6′43″37

◇全日本学生ダブルスカル◇

〔決勝〕

一橋大⑤　中央大①　慶応大②　早大理工③
明大④

2′00″87	4′05″70	6′11″33	8′12″62
1′48″56	3′43″65	5′44″41	7′43″27
1′50″35	3′48″84	5′53″53	7′56″26
1′51″14	3′53″97	6′01″16	8′05″50
1′52″11	3′55″68	6′05″05	8′10″66

（レース経過）　決勝　15時30分発艇，1レーンから筑波大，日大，東北大，中大，北大，一橋，スタートアッという間に他艇に出られラスト，北大にも半艇身出られるが喰いついてゆけば抜けると言いきかせる。準決勝が頭にあった。これが裏目に出てしまった。途中2度のダブルスパートで⅓艇身までつめるが，コンスタントに下ろすとスーと出られラスト必死に追い上げるが及ばず，中大を抜いただけで5位。全日本決勝へ進めず，スパートの時機が50mづつでも早かったらと悔やまれる。　（cox 坂東）

H組優勝，S組4連覇ならず―第89回秋季大会

第89回一橋大学秋季競漕大会は11月26日（日）戸田オリンピックコースで午後1時半より開催された。絶好のコンディションの中，戦後卒ＯＢレースがスタート。終始S組とH組との先頭争いが続き，トップボールの差でS組に軍配が上った。又，第1選手のレースでは，H組がスタートより飛び出し，1,000m付近でC組に迫られはしたものの，その追撃をかわし，1艇身の差をもってゴールした。

尚今大会よりＨＣＳ大会の拡充を目指し，その第1歩として，深沢（昭28卒H組），大川（昭23卒C組），浜林（昭23卒S組）三教授にそれぞれ，H.C.Sの顧問教官となっていただき，御指導，御支援を賜わることになった。

―記録―

◇第一選手◇

S	③	3′38″2	7′16″2
H	①	3′31″0	7′11″5
C	②	3′32″5	7′14″5

昭和54年

東商戦敗れる
ダブルスカルは余裕の勝利！

今年で31回を迎えた東商戦は去る5月13日，戸田オリンピックコースにおいて，強風，小雨のぱらつくという悪コンディションの中で開催され，わが一橋大は対抗ダブルスカルが一矢を報いたものの他の対抗エイト，対抗フォア，対抗シングルスカル，ジュニア

エイトはすべて東大に敗れるという惨たんたる結果であった。

◇エイト◇

東　大 ① 1′33″9　3′12″6　4′56″3　6′39″5
一橋大 ② 1′36″8　3′19″2　5′06″3　6′50″2

◇舵手つきフォア◇

東　大 ① 1′46″2　3′36″0　5′30″5　7′27″0
一橋大 ② 1′50″5　3′50″5　5′54″2　8′01″8

◇シングル・スカル◇

東　大 ① 1′58″4　4′06″1　6′14″4　8′21″7
一橋大 ② 2′04″5　4′18″2　6′32″1　8′45″3

◇ダブル・スカル◇

東　大 ② 1′46″6　3′41″5　5′49″4　7′54″4
一橋大 ① 1′44″0　3′41″3　5′41″35　7′42″5

◇ジュリア・エイト◇

東大(暁)①　一橋大②　東大(旭)③

1′37″5　3′23″9　5′11″7　6′58″9
1′39″6　3′29″9　5′19″2　7′08″5
1′41″7　3′31″7　5′21″5　7′09″0

（レース経過）　スタートの出来は悪くはなかったのだが，東大に出られ，通常より高めのピッチ。2段目力漕を長めにして，ついてゆくが，おろし際で出られる。コンスタントピッチも高め，漕手には，落ちつかせようと，ピッチ36.5とクライ。しかし，レースになったのは，450 mまで。これ以後は，オールが浅くなり，ピッチばかりが高く，水中が押せないという悪循環で，途中，スパートを入れても，立て直せず完敗であった。

（cox　坂東正章）

第1回全日本軽量級選手権

ハーバード大学に及ばず2位

一橋大エイト世界軽量級選手権派遣決まる！

第1回全日本軽量級選手権競漕大会は，去る6月16，17の両日，ハーバード大学を招待して戸田オリンピックコースで行なわれた。この大会は1979年世界漕艇選手権派遣選考を兼ねており，本学対校エイトは商東戦より3名ほどのりかえ，これに臨んだ。

予選では実力を出しきれず東北大に遅れをとったものの敗復・準決と順当にのりきり決勝に進出した。

決勝ではハーバード大・東大に先行されたが後半の猛烈な追い込みでハーバード大学につき2位となった。

この結果，本学対校エイトは8月29日～9月9日にブレド（ユーゴスラビア）で行なわれる世界漕艇選手権の軽量級で各国の強豪クルーと伍して覇を競うこととなった。

◇エイト◇

〔決勝〕

一橋大②　HARVARD①　筑波大⑤
東北大④　東大③　中大⑥

1′36″48　3′19″98　5′05″26　6′46″21
1′34″85　3′16″39　4′58″16　6′40″80
1′42″21　3′29″64　5′19″71　7′05″47
1′38″54　3′23″16　5′09″59　6′53″30
1′34″21　3′73″65　5′00″82　6′47″54
1′36″64　3′22″48　5′14″47　不　明

（レース経過）　1レーンから，一橋，ハーバード，筑波，東北，東大，中央。500 mでなんとか一秒縮め，1,000 m点で隣りのハーバードにくっついてゆければ，1,000 m以降必ず勝材が出てくる。最後のレースだから，悔いのないレースを，とミーティングして出艇。

スタート。5本＋10本(40)＋21本(40～41)＋const. 135.5)，スタートの一本目，バウペアが引きおくれ，5本は，決まらなかったが，力漕では，ハーバードについてゆけたので，クルーに落ち着きが出，2段目力漕も，水中で一枚上げ，ストンとコンスタントに下ろすことが出来た。半艇身，東大の飛び出し良し，中央も良く出ている。とにかく，ハーバードに遅れぬように，早め早めにと400 mで，強く10本，よくくっついている。700 mで強く8本，900 mで強く8本を入れるが，

このあたりから，ハーバードにはジリジリ出られる。相変らず，東大が突っ走り，中央が落ちる。筑波来たが完全に脱落。東北が全く精彩がないのには驚いた。3位 pitch 35。1,000m通過。ハーバードは無理かもしれぬがまだ，ここからが勝負だと思い，1,200mからスパート14～5本(38)。下ろして35.5。追撃はならなかったが，このころから東大が落ちてゆくのが見える。1,500mを過ぎ，一枚あげ36.5，とにかく東大を追おうと1,700mからスパートを入れかけたところで，6番，7番から“まだ早い”と声がかかり，6番，7番がおさえて徐々に上げてゆく格好になる。(これが良かったように思う。) 1,800mからはバウフォアに追わさせ猛然と追い上げる。このあたりのクルーの盛り上がりは素晴らしかった。1,900mでとらえ抜いたのはラスト50mあたりではなかったろうか。

付・フォア／オッ楯エイトともに惜敗！
—第6回全日本学生

第6回全日本大学選手権競漕大会は，54年8月24日，25日の両日，戸田オリンピックコースで行われた。本学，対校エイトは世界選手権出場の為，すでに21日，日本を発っており，付フォアだけが出場した。留守をしっかり守るべく健闘したが，力たらず敗復で敗退した。

また，同日，開催されたオックスフォード楯争奪レガッタにはほぼ東商戦のジュニアエイトのメンバーにより臨んだが，敗復止まりであった。

—記録—

◇全日本学生　付フォア◇

〔敗復〕

島根大学	④	8′19″55
岡山大学	②	8′08″30
山口大学	①	7′57″51
一橋大学	③	8′10″54
茨城大学	⑤	8′27″88

◇オックスフォード楯エイト◇

〔敗復〕

一橋大学	③	6′42″26
北海道大学	②	6′34″30
檀国大学	①	6′32″47
九州大学	⑤	6′59″32
同志社大学B	④	6′56″62

付フォア準決勝進出—第20回全日本新人

第20回全日本新人選手権競漕大会は，54年10月27日，28日の両日，戸田オリンピックコースで行われた。本学は対校の2名，全日本付フォア出場の2名，オックスフォード盾出場の8名，合計12名を3パイの付きフォアに分け，互いに切磋琢磨し，チャレンジレースに勝った1パイだけを出場させるという新しい試みを行なった。残念ながら決勝には進出出来なかった。

◇付フォア◇

〔準決勝〕

東経大②	一橋大③	八百津高①	福島大④
1′47″56	3′38″93	5′31″53	7′23″67
1′47″26	3′40″48	5′34″50	7′24″48
1′46″04	3′37″08	5′28″75	7′18″98
1′51″91	3′48″48	5′34″70	7′25″38

S組優勝—第90回秋季大会

第90回一橋大学秋季競漕大会は，11月18日（日）戸田オリンピックコースにて開催された。本年は部員数も増え，全員参加の主旨で行なった為，第1選手から第3選手までの3レース，加えて戦後OBレース，3年生対校選手によるダブルスカルレース，以上，5レースを行ない例年になく大盛会となった。

第1選手のレースは，スタートよりS組が飛び出し，終始他の組の頭をおさえそのままゴールした。

◇第1選手◇（2,000m）

H	③	1′46″4	3′36″2	5′36″0	7′24″2
S	①	1′43″8	3′32″4	5′26″4	7′19″0
C	②	1′49″0	3′39″0	5′31″0	7′22″3

◇第2選手◇

(1,000m)

(シングル・スカル)

H ① 4′08″0

S ③ 4′27″7

C ② 4′20″1

◇第3選手◇

(1,000m)

(付フォア)

H ② 3′52″4

S ① 3′45″7

C ③ 4′06″8

一橋大学クルー 世界漕艇選手権出場報告書(抄)

はじめに

一橋大学端艇部

部長 中川 学

この報告書は,1979年世界漕艇選手権派遣日本代表選手団の一翼をになって,ユーゴスラビアのブレド湖における軽量級エイト選手権に出漕した一橋大学クルーが,8月30日の予選,9月1日の準決勝,同2日の順位決定戦でどのように戦ったかを,正確に記録し,反省事項を整理し,9月9日におこなわれた無差別級選手権までも含めて観察することのできた世界漕艇界の実情の一端を覚え書きするとともに,一橋大学関係者による巨額の派遣募金に関する会計報告をさせて頂くことを目的として編まれたものである。

一橋大学端艇部は,この小冊子を,深い感謝の念とともに,ご支援くださったすべての方々に捧げる。とりわけ:

日本漕艇協会の牛場信彦会長・根岸正理事長はじめ役員各位

一橋クルー世界選手権派遣募金会の如水会代表茂木啓三郎理事長はじめ役員・会員の皆さま,ならびに,四神会代表畑弘平会長・丸山泰男理事長・中村達夫総務委員長はじめ役員・会員各位,日本オアーズマン倶楽部・伊藤治雄理事長

一橋大学の蓼沼謙一学長・勝田有恒学生部長はじめ教職員各位,ならびに,体育会・応援部等の学生諸君

派遣募金に協力くださった法人諸団体,ならびに,監督コーチ陣派遣を快諾された品川白煉瓦株式会社・朝日新聞社・住友銀行の各社関係各位

日本代表選手団の団長・北川喜一郎総監督ならびにFISA(国際漕艇連盟)の高田健雄代表・前田正代議員はじめ役員・団員の各位

用艇図南号を貸与してくださった東北大学漕艇部および西独ミュンヘン艇庫関係者各位

に対し,かさねてお礼を申しあげたい。

ブレドの清澄な湖面と,東アルプスの山合いに谺した大観衆のあの声援,ヤーパン,ヤーパン! という歓声と拍手を選手たちは決して忘れえないであろう。

内外に湧きおこる声援に,こたえられないでいることは,恥である。列強とならべて力のかぎりを尽くしてもついに及ばなかった現実を,虚心に反省し,生理学にかなった練習体系を確立し,用艇用具の技術革新を思いきって推進し,一層の気魄をもってローアウトできるクルーを鍛えあげねばならない。

この報告書をご高覧いただいて,ご意見とご教正をお寄せ願えれば幸甚である。

昭和54年10月10日

ご挨拶

学長 蓼沼 謙一

本学クルーが過日ユーゴスラビア・ブレドで行われた世界漕艇選手権大会に出場しましたことは,本学ボート部はじまって以来の空前の快挙であり,まことにご同慶の至りであります。出場に際しましては,本学教官のみならず,如水会とくに四神会の皆様から,多額の資金援助を賜り,重ねて厚く御礼申し上

げます。

大会での成績は，本学クルー及び関係者の方々の最善の努力にもかかわらず，残念ながら九位にとどまりました。聞くところによりますと，この一年間の世界漕艇界における欧米諸国，とくに今次大会で上位をしめた諸国のレヴェルアップは，用艇の技術革新を介して著しいものがあり，現在の日本漕艇界におけるタイムでは，国際大会においてはもはや通用しないとのことであります。

しかし，この度の大会出場によって得た経験・教訓と知識・情報の貴重さは計りしれぬものがあると思います。これを最大限有効に活用すれば，伝統ある本学クルーの今後の飛躍的な技術向上と活躍を期待することができ，わが国漕艇界に対して大きな刺戟を与えるであろうことを確信いたします。

最後に，ご後援いただいた関係者各位に重ね重ね厚く御礼申し上げます。

昭和54年11月

『遠征の反省こそ貴重
一橋ボートの安定復興を期待する』

四神会会長　畑　　弘平
（大正14年卒）

我等のクルーの戦績は，クルーの諸君自身の目指した処は固より，此のクルーを日大代表に選んで呉れた全日本漕艇界の期待や，又何よりも此の派遣を喜び，物心両面に亘り厚く後援し，鞭撻して下さった大学，如水会，四神会を中心とする皆様の願望に照らしても，誠に残念ながら満足出来るものでなかった。此の点，選手に近い処に位置して，常に一橋ボートを後援，指導，協力する立場にある我々として，今更ながら遺憾の意を表する次第である。

もっとも，翻って我がクルーの出発前の実力其他を更めて想起し，又其後の短期間の強行日程，就中現地到着後の用艇関係の不慮の支障による練習の不如意（是れは今後仮にも繰返してはならない）等々伝えられる残念な諸事情をも考えるならば，此の遠征行が結果から見て今後の一橋の，そして日本の漕艇の強化向上のために役立ち得るものである限りは亦以て瞑すべし。要は，我がクルーが如何に立派に戦ったか。又此の行を通じて広く世界の漕艇を如何に観，之に対抗するための途を素直に自覚反省して，今後に対する覚悟を如何に固めたか，と云った点を重視し度いのである。幸い我が選手団の諸君に於ては，既に認識と覚悟とを新たにして将来に向けての努力を始めて居ると聞く。嬉しい限りである。斯くてこそ我等も此際心を新たにして現役の諸君に協力して発奮興起，以て一橋ボートの黄金時代の回復，それもさきに端艇部報号外ででも申述べた様に安定永続の回復を期し度いものと思うのである。

我が一橋ボートは（宿敵東大等と並び）常に日本の最高峰に居て全日本の牽引車でなければならぬ，との高い信念を以て常に最大最高の努力を堅持するを要すと云う事である。更に換言すれば，一橋ボートメンたる者よ，常に鍛えに鍛えた高い心，強い体力と優れた技術を以て伝統の『一橋端艇道』を守り，更に前進させて貰い度いのである。

最後に一言，，我が一橋端艇部には古くから『ボートメンは負けても言い訳けせず，専ら反省してレースの翌日からまた黙々として次のレースに向って練習する』と云う訓えがある事を想い起しつつ筆を擱く。

世界選手権出場を終えて

監督　高橋　泰和
（昭和32年卒）

対校エイトは６月に代表クルーとして選ばれて以来，相模湖，そして戸田と猛練習を積み重ね，考えられる総ての準備を全うしてブレド湖に臨みました。二年生，三年生の若手が多く，漕歴，技術，体力ともにこれからというクルーであっただけに，この間に艇速は

かなりの伸びを示してまいりましたが桁違いともいえる欧米クルーの強さに全く歯が立たなかったというのが正直なところです。

軽量級エイトで優勝したスペインとのタイム差は約20秒。彼我のスピードをくらべてみると100米で1秒，1本のストロークで50糎近い差があるということになります。無差別級で優勝した東独エイトは更に速く，タイム5′36″41とこのスペインを20秒近く上廻りました。これだけのスピードを出す彼等のパワーと確実なブレード・ワークにくらべれば，われわれのそれは未だ半人前であったといわざるを得ません。一糸みだれぬ彼等の動きは，あくまで滑めらかで華麗であり，眩しいぐらい美しいものでした。

欧米クルーのこのような強さのまえに，一橋クルーはいたずらに委縮していたわけではありません。選手達はあたえられた条件の中で最善をつくしてまいりました。「負けてもともとなどという甘えは毛頭なし。それぞれの持場で全力をあげて戦った」選手団の誰もがこのようにきっぱりと言い切れるはずです。予選では後半ただズルズルとおいていかれるレースに歯ぎしりもしましたが，最後の順位決定戦で，一橋クルーはフランスには先行されたものの，カナダとは終始水のあかない大接戦を演じ，立派なレースを展開してくれました。スタートから果敢に飛び出し，漕ぐ，ただひたすらに漕ぐ，並んでいる，並んでる，さあ抜けるぞ，と見るものを歓喜させながら，カナダを追い詰めていく一橋渾身の力漕，ローアウトしながらも最後の最後までカナダに肉迫しようとするクルーの気魄には，2秒余の艇差も一瞬の間とみえるほどの凄まじさがありました。

6′13″02，このクルーの持つ力のすべてであります。このタイムの良し悪しは別として，ゴールで天を仰ぐクルーの顔には力を出し尽したさわやかさがありました。決勝レース終了後，1位のスペインを先頭に入賞クルーの観艇式が行われましたが，大観衆で埋った観覧席の一隅から「一橋!!　よくやったぞ!」と異国にあって思いがけない日本語の声援もとんできました。一きわ大きな拍手を浴びながらしんがりを漕ぎ進む日本の一橋クルーには，初の海外遠征を完漕したという充実感，りりしさがあったような気がいたします。

優勝したスペインの選手は漕歴が5年以上，そして最古参の10年選手でも年齢は25歳。平均身長はわれわれと変わらなくても，鍛え抜かれた上半身の逞しい筋肉，太い腕っぷしはすばらしいものでした。スタートから毫も調子を変えることなく正確で巧緻なオールを引き続けるのも，一見しただけで首肯させるものがありました。

しかし，この5分53秒10で優勝したスペインですら，ヘラクレスや不動明王を思わせる無差別級にはタイムの上で20秒近く差をつけられるのですから，まさしくボートはパワースポーツであり，強さの根源は体力でありパワーであることを改めて思い知らされました。パワーがあり，ローイングの技術も名人クラスの漕手を国内から集めて鍛える。これが欧米クルーが圧倒的に強く記録も年々向上している最大の理由に違いありません。これに対し，われわれは大学クルーに宿命づけられる条件を言い訳することは簡単です。しかし，言い訳をすることは世界では勝ち目がないというに等しく，世界選手権へチャレンジする資格を自から放棄することになります。たしかに欧米クルーがナショナルチームを編成する時代に，一橋クルーがパワーにおいて彼等を凌駕することは不可能なことかも知れません。しかし，われわれが世界を目指す以上，不可能であっても，パワーアップはなお努力し続けるべき最重要な課題であります。

たしかに，すべての技術の出発は，平凡な

「スロー・シュア」であり，その完成は「クイック・シュア」でなければなりません。迅速でも不確実であれば，スローにしてシュアーに劣ることは明白です。この辺にも漕歴の長短の差があるのかも知れませんが，確実性の有無は個人の頭脳にも関係する技術であり，しかも体力には限界があっても，技術を練磨する訓練には限界はありません。それだけに，パワーにおける彼我の差ほど，彼等に追いつくことは難かしい問題でないはずです。「強くて一気なストローク」を実現するための前提づくり，技術の練習に再考の余地があるのではないかと考えます。これまでの経験を生かしながら，大学クルーであるわれわれに適した体力技術練習のトレーニング法をもう一度見直すこと，将来への積み重ねができるようなトレーニング方法のシステム化を完成させることが必要と思います。

欧米クルーのスピードを目のあたりにしてこの格段の差を冷静に考えると，彼等に早急に追いつくことは至難のわざでありますが，決して絶望とは思いません。小悲観の大楽観，これが不可能を可能にしていくわれわれ端艇部のモットーでなければなりません。初の海外遠征で得た充実感をバネにして，部員が一丸となって世界のレベルに追いつく努力を続けます。自己の体力の限界を高めながら，ローイング技術の完成を目指す。このたゆまない努力が必ず一橋端艇部の黄金時代を築くのであり，この金字塔を打ちたてることこそ，物心両面にご支援いただいた皆さんに，おこたえする唯一の途であると考えている次第です。

世界軽量級選手権報告

コーチ　白井　宏和
（昭和44年卒）

予選６分16秒４，準決６分16秒31，順位戦６分13秒02のタイムは急拠の借艇という条件からみると持てる力は出し切ったと言ってよい。遠征というのは，与えられた条件の中で最大の力を出すことを要求されるわけで，「たら」とか「れば」と言ってはいけないが，ただあと10秒短縮したかった（６分ちょうどでも８位であるが）のがクルーとコーチの実感である。国内に居たときより，前半で約５秒，後半のタイム落ちが大きくなった分であと５秒タイムが悪かったと言ってよい。

今年のクルーの最終的な姿は，①脚のドライブを生かすことを基本にしながらも，②比較的上体の強い起き上りが目立つクルーとなった。これは，比較的長いレールを使い，ストレッチャーを上げているため，脚ののび切りが外見上少し遅れているようにみえる点にあろう。これは，オールが艇に対して直角になる前後（ちょうどミドル）で体重が水によく乗るように意図したためである。ただ最後まで残った欠点は，①ストロークのミドルから後半にかけて，力強く水を押し切ることができない。②オールの不ぞろい，の２点である。

この点，少くとも軽量エイトクルーだけをとってみても外国クルーは，㋑１ストロークでの仕事量が大きい，㋺８人のブレードワークが均質でよくそろっている，㋩最初から最後まで正確なブレードワークを実現するための訓練がいきとどいている，等が言える。特に優勝したスペインの1,900～2,000mのブレードワークは素晴しい。最後のラストスパートでも，オールが水を離れる瞬間まで上体を大きく使い，腕を強引に使うことによりスクウェアに水を押している。この点は我々は大いに見習うべきであろう。

コーチ　宮武　祥夫（昭和52年卒）

“体力”を論じる時たいていの場合，筋力，持久力，瞬発力というような個々の要素に分けられているが，私が今回の世界選手権に参加し，じかに外国人選手に接しその練習

ぶり，レース期間中の生活ぶりを見て感じたことは，感覚的表現を使えば，彼等は実にタフであるということである。使いべりのしない実にたのもしい肉体をもっているということである。

常識的に考えれば，食生活の違い，遺伝的要因の差等が考えられるわけで，比較的短期間で選手を強化しなければならない宿命にある我国のボートにおいて，真剣に論じることはそれほど意味をもたないかもしれない。しかしながら，練習においても，レースにおいても，非常に消耗の激しいボートの特性を考えるにつけ，あるいは，長い合宿トレーニングをせざるを得ない我国のボート環境を考えるにつけ，選手の生理学的機能（私は，これをタフネスとでも呼びたい）を後天的に高めるにはどうやればよいのかを研究してみる必要性は大きいと思う。つまり，選手の肉体の総合的な強靱さを高めていく生理学的，医学的考察が必要ではないかと私は感じたのである。

日本では，コーチは，合宿における選手の食生活に対しては，あまり意を介さない傾向にある。かなり前から，カロリー計算はなされてきたけれど，どのような栄養素が，あるいは，どの食品群が重要であるのか，ということは，従来それほど真剣に論じられたことはなかったと思う。しかし，真から強い肉体をつくりあげるために何を食べるかという問題は，スポーツ選手にとっては，非常に重要な問題だと思う。

人工添加物，人工食品を食べて育ってきた日本の若者が，体力がなく，壊れやすいひ弱な骨格をしているということが問題にされるようになっているが，そういった若者の体質を改善していくには，トレーニングと食事とを有機的に結びつけたプログラムが必要だと思う。そして，少しでも使いべりのしない肉体にしていかなければ，外国人選手と同じ土俵で戦うことは，とうてい不可能だと思う。

日漕理事・元端艇部監督
前田　正（昭和12年卒）

出場クルーの殆んどが国家養成のナショナルチームで，単独の大学などは日本だけです。ですから今回参加した一橋エイトが，結果は最下位であったとはいえ，国内で持っていた力を100％近く発揮し，初陣としては実によく戦ったということができます。

相手は殆んど4～5年継続して強化訓練を受けているナショナルチームであり，決勝に参加したクルーは何れも5分台で2,000mを漕ぎ切る強豪ですから，何とか6分の壁を破りたいと願いながら多年それが達成できていない日本の大学クルーの歯の立つ相手ではありません。ただ，この記録から見た通りの決勝5，6位又は7位と算術的な計算で5′57″7（仏・豪）－6′13″02（日本）＝15″32 だから5艇身も違うと単純に判定すべきものではなく，借艇の不利（一橋はミュンヘンに置いてあった東北大エイトを借りレース前日から使い始めた）と遠征の不利を勘案すれば，決勝5，6位の英国やオーストラリアとの実力の差はせいぜい2艇身6秒位のものであり，決して手の届かない程のものではないと言えます。

また軽量級レースは，クルーの平均体重が70キロ以下クルー中の最大体重が72.5キロ以下という制限のもとに戦うのですが，今回痛感したことは，日本の軽量級選手が小さ過ぎると言うことです。一橋エイトクルーの平均体重は68キロです。外国クルーは，エイトで優勝したスペインが身長平均175cmだったのを除くと何れも185cm～190cmの巨人で，普段80キロぐらいある体重を大幅減量して出て来るのですから，日本選手は著しく見劣りするのであります。絶対量がこれだけ違うと，力も心臓や肺の出力も違うので，その上練度に

差があると言うことになると叶わない訳であります。

外国選手と日本選手は身体の出来がまるで違うのです。優勝したスペインエイトは平均身長こそ，一橋より3㎝低い175㎝ですが，一人一人が筋肉モリモリのレスラー型の体格であるのに比べ，一橋エイトの選手達は腕も腿も細く，見た目にも玄人と素人位の差を感じさせるものでした。

【第8回　世界漕艇選手権軽量級エイト出漕クルーメンバー】

シート	氏名	学部	学年	身長(cm)	体重	出身校
C	坂東正章	社	4	163	51	浦和
S	小野沢康夫	商	3	170	64	野沢北
7	内藤雅和	商	4	172	61	秋田
6	油谷隆	経	4	176	70	大田原
5	小川英穂	商	3	185	72	水戸一
4	山本隆夫	法	2	182	71	六甲
3	北村雅彦	法	3	182	69	大教大付
2	安丸徹	法	4	178	70	北野
B	武良研二	法	2	174	65	都立富士
補漕	阿部秀幸	法	3	177	71	甲陽
	青島秀治	社	3	180	70	藤枝東

レース結果

8月30日（木）

○予　選　第二レース（0.3M／S　NE）

レーン		着順	500m	1,000m	1,500m	2,000m
1	フランス	2	1′27″54	2′57″12	4′26″05	5′57″31
3	アメリカ	1	1′25″01	2′53″09	4′23″66	5′55″92
4	西ドイツ	3	1′25″38	2′55″37	4′28″27	6′04″70

9月1日（土）

○敗　復　第一レース（1.1M／S　NE）

1	カナダ	3	1′28″92	3′01″80	4′37″47	6′12″26
2	イギリス	1	1′27″39	2′57″46	4′31″57	6′05″37
4	西ドイツ	2	1′26″71	2′57″80	4′32″41	6′07″76

9月2日（日）

○順位決定戦（1.0M／SE）

1	フランス	1	1′27″21	2′57″11	4′27″72	5′57″69
3	カナダ	2	1′29″82	3′02″66	4′36″90	6′10″64

○決　勝（0.8M／SNE）

1	オーストラリア	5	1′28″93	2′57″87	4′28″87	5′57″64
2	オランダ	3	1′27″33	2′56″26	4′25″91	5′55″06
3	イギリス	6	1′28″69	2′56″75	4′28″47	5′57″23
4	スペイン	1	1′26″60	2′55″66	4′25″09	5′53″10
5	西ドイツ	4	1′26″90	2′56″50	4′27″73	5′56″05
6	アメリカ	2	1′25″75	2′54″78	4′23″92	5′53″28

加藤　博（昭和48年卒）

一橋大学が世界選手権に出場するという吉報が私の元に届いたのは，丁度私がカイロでの留学の最後として，ロンドンの図書館を覗いてみたいと思い，その旨計画していた矢先であった。この吉報を前にして私の心は騒ぎ，この騒ぎを静めるためには，一橋クルーを実際にこの目で見ることしかないと考え，ここにロンドンからカイロへの帰路ブレドへ立寄ることになった。

さて，私はブレド訪問中，東北大学の艇をとりにミュンヘンまで行く機会をえた。そして，夜を徹してのトレーラーで東北大学の艇を運ぶブレドへの帰路，ボーッとした頭に突然浮かんだのは，ボートとスキーという二つのスポーツの共通性であった。スキーの選手達は，冬のシーズン中は勿論のこと，夏でも雪を求めて車でヨーロッパ中を駆け巡る。スキーはオリンピック種目であり，世界選手権が毎年開催されるが，そこへの参加国は所栓，環境と金とに恵まれたヨーロッパ諸国であり，それ以外はアメリカ，カナダ，オーストラリア，日本ぐらいのものである。ボートも水を求めて，ヨーロッパの各国は国際レガッタがあるごとにトレーラーで艇を運び，ヨーロッパ中を駆け巡る。今回のボート世界選手権の参加国は，ヨーロッパ諸国を除けば，金のあるアメリカ，カナダ，オーストラリア，日本でしかない。（もっとも，中国が女子スカラーを参加させ，そして，どういう訳かエジプトが参加していたが。）以上のような背景を抜きにしては，軽量エイトで優勝したスペイン・クルーの若いながらも長い漕歴と多くの国際レガッタ参加経験は説明されない。だからといって，この二つのスポーツが金をもつエリートだけのスポーツだということを主張することは出来ないだろう。少なくともヨーロッパにおいては，この二つのスポーツは娯楽として一般庶民に楽しまれ，そのためのスキー場，ボート・クラブの数は数知れない。しかしながら，この二つのスポーツのヨーロッパにおける大衆性を述べたところで，スキーとボートが，環境と金という条件から，地域的にみて世界的スポーツだとは決して言えないだろう。こうした環境と金に加えて，身体という問題がある。外国クルーと日本クルーとの間にみられる体力差については耳にたこができる位聞かされている。実際，私自身，ソビエト女子クルーを前にして出るのは苦笑のみであった。環境と金と身体。ブレドで私が感じたのはこの三つであり，それは，大学の一クラブで培われた私のボート観とは異質な何ものかであった。

6番(主将)　油谷　隆

我々はもっと小艇を重視する必要がある。オランダクルーは，国内選手権のシングルスカルで1位から5位までにはいった人たちが選抜されてきているし，2年前のアムステル

ダム大会で2位になった時のスペインは，エイトによる乗艇練習はわずか2週間で，あとは各自が小艇をやっていたそうである。エイトにばかりのっていると，どうしても相互依存が強まり，マンネリに陥りやすい。バランス感覚を養うためにもこれは効果的だと思う。

次に，日本におけるボート人口の増大に，最善の努力をはらう必要がある。今回遠征した我がクルーには，二年生が二人含まれていた。そもそも漕歴1年程度の者が日本代表に選ばれるような層の薄さに問題がある。日本にはボートにむかない急流が多いことは確かだが，まだまだボートが漕げる所はいくらでもあるはずだ。

整調　小野沢康夫

漕法に関して言えば，我々が日頃抱いているものと大きく変わっているようなクルーは見あたらない。目指しているところは一緒ではないだろうか。しかしパワーを生かしたストロークの前半の一番水の重いところを一息に引き切る感じや，ミドルから後半の鋭い腕のしぼりには目を見張るものがあった。

7番　内藤　雅和

軽量級エイトの一位から七位までは5分57秒台で漕いでいますこれらの国々は，500メートルおきの4つのクォーターを，時計で計ったように正確なペース配分をしていました。捨て身で，“いちかばちかの勝負をかける”などという日本的な発想は，彼らにはありません。自分達の力を冷静に分析し，500メートルごとにその力を割り当て，ゴールで余力がゼロになるように漕ぎ切るのです。優勝したスペインの漕法は，水中の有効レインジを素早く，力強く引き切るものでした。スペインと接戦を演じた2位アメリカの漕ぎは，ローイング・アングルを出来るだけ長くとり，このレインジを丁寧に引き切るものでした。両者の漕姿にはそれ程目立った差はありませんでしたが，水中でのオールさばきには以上の特徴がみられたと思います。

一橋大クルーは，ついに夢にみた海外遠征を果たしました。このクルーの一員として漕ぐことのできた私は，本当に幸福者でした。この背景には，ここ数年来の充実ぶりが挙げられましょう。その上に，クルーには勝負を捨てない執念と，逆境になればなる程沸きおこる開き直りの精神がありました。この貴重な経験を生かし，一橋ボート部の新たな黄金時代を築こうではありませんか。

5番　小川　英穂

スペインのエイトクルーの編成はシングルスカルの上位者からピックアップしているという事，シングルスカルでいいタイムを出す者は，エイトに乗せても十分に漕げるという観点に立てば，我々の練習においても，秋から冬にかけては，小艇にどんどん乗らなければならないと思います。また練習内容としては，低いピッチのロングが重視されているということです。それも一万メートル級のロングをやるべきだという印象を強く受けました。

他にもいろいろありますが，私はこの大会を通じて，日本人のボートに対する接し方が，まだまだ甘い事を痛感して帰って来ました。

4番　山本　隆夫

我々と外国クルーのTimeの差はずばり実力の差だと思うのである。その差の第一は技術である。うまい，実にうまい！彼らは10年位の漕歴があり，世界選手権の経験も豊富で，又全員がスカルからの選抜でCoxさえも国内のスカル大会で勝っている。我々とは全然違うと言わねばならない。

第二の差は，Powerにある。我々は軽量

級だから体格にはあまり差がないだろうと思っていたが，実は大ありで，特に腕の太さなどはえらい違いであった。その辺の Power の差が Finish の強引な引きしぼりの差に現われたのだと思う。だから今後我々がやらねばならない事は小艇利用による技術練習と陸トレによる Power 増強であると思う。

3番　北村　雅彦

優勝したスペインの漕手に聞いたのだが，彼らは漕歴少なくて5年多くて10年，世界選手権などの国際レース参加経験2回～5回。これを我々と比較する漕歴3年～1年（!!）国際レース経験全員初めて，これではまともにはりあおうとしてもまず無理な事は分り切っている。年齢はほぼ同じなのだから漕歴の差はボートを漕ぎはじめる年齢の差であろう。現在の日本では大学へ入ってはじめて漕ぐ人がほとんどなのだから，この差は仕方ないとしても，これから徐々にボート人口の拡大（これには低年齢層の増大と共に，社会に出てからも漕ぎ続ける人をもっと増やすことも含まれる。）を計ることが必要である。

2番　安丸　　徹

漕法に関しては，力強い腕のひきしぼり，爆発的な足のドライヴという点で，クルーの感想は一致していると思います。日本のクルーは我々に限らず，ひきしぼり，けりかえしの最後のつめのワン・モーションが，なおざりにされているのではないでしょうか。このワン・モーションずつの甘さが2,000 mという距離では，実力差となって如実にあらわれるのでしょう。外国人は無器用，日本人は器用というのが一般論ですが，ボディ・コンビネーションの全体的な“器用”さにおいては，外国クルーの方が，より完成度が高いことは否めません。ピッチが高めだった英国の重量級（私が最も強い印象を受けたクルーの一つ）は，高いピッチでも実にのびのびとしかも一糸くるわぬリズムで，本当に鋭利な刃物を思わせる漕ぎっぷりでした。

バウ　武良　研二

図南は試合前日の朝到着。早速リギングをして乗った。バランスはすぐ取れた。またドノラチコより走るので，ひと安心する。しかしこの艇もいろいろ問題があった。小さく短かいのでピッチングが激しく，かなり沈み込む。それでリガーを高くし，オールを引く位置をかなり上げねばならなかった。それに回転木馬にでも乗ったような大ピッチング，このピッチングはかなりの波を起こしており抵抗を増していた様だ。この状態でレースに出なければならなかった。

順位決定戦は少し気落ちしていたが，それでもレース中はかなり気合が入った。少しも気を抜くことができない。カナダは押える，ということでとにかく漕いだ。千過ぎではかなり疲れておりその上ラスト250がスパートであったので最後の辺りは死にもの狂いで漕ぎまくった。残念ながらカナダは逃してしまい，つまり最下位であった。出場万歳だけでなく上位入賞を望むなら長期的展望をもって新人大量勧誘を続け，高密度で能率の良い練習を積んでいく必要があるだろう。

コックス　坂東　正章

外国のようにナショナルクルーが編成できない現状では，大学，社会人が，日本全体のレベルを上げていくしかないと思われます。そのためには，1．絶対的な筋力養成（体格は同じでも体力差は歴然としていた）2．小艇を重視した個人の漕力のアップ。3．陸上トレーニング，水上トレーニングのトータルプランの作成（年間計画，三ヵ年計画等）4．艇，オールの研究等が必要とされると思います。世界の壁は厚くても，軽量級ならばまだ

可能性はあると思います。その可能性を少しづつでも切り開いていかなければならないと思います。

代表幹事　石川　敏之

私は計らずもミュンヘンへ東北大学の『図南』を取りにゆくことになり，オリンピックコースを見ることができました。戸田に住みなれた私にとってこのコースを目のあたりにしたことは非常に印象深いことでした。ここで，私達は微笑ましい光景を見ました。小学校低学年生と思われる子供（男女）・白髪まじりの年配者らが夕方になると艇庫に集まり各々ローイングを楽しんいる姿です。戸田では，大学生の必死の形相を見るだけて決して子供達がスカルを楽しんでいるところなど見られません。

私達が知っているボートメーカーといえば数は限られています。例えば私達が持っているスタンフリー，日漕のダブルスカルや慶応のエイトのエンパッハ，東北大エイトのカーボクラフトといったところです。今大会では圧倒的にハニカム構造のエンパッハがブレド湖の圧倒的制湖権を握っておりました。概して合成樹脂の艇が目立ち日本の様に木製艇だけという事は決してありません。現在は情報過多の時代と言われていますが，ボートに関する限り鎖国状態にあると言わざるを得ないのです。これはまさしく日本漕艇界の置かれている状況の一端を如実に物語っています。今回幸運にも遠征できた私達が集めてきたわずかな資料が，世界の現状を知る手がかりとなれば幸と思います。

決　算　報　告

収入の部		
募　金		
四神会員	1,255名	11,964,000(円)
如水会員		6,217,287
法　人	団体22名	2,200,000
個人有志	2名	682,200
合　計		21,063,487
日本漕艇協会補助金		2,250,000
個人負担金		800,000
収入利息		11,116
合　計		24,124,603
支出の部		
渡航滞在費		9,921,646
用艇建造費		3,288,922
記録用諸費		566,250
募金費用		932,282
報告書作成郵送費		980,000
雑　支　出		511,344
合　計		16,200,444
差引剰余金		7,924,159

差引剰余金は四神会特別基金に繰り入れさせて戴きます。

昭和54年10月31日

昭和55年

ダブルスカル，ジュニアエイト勝つ―第32回商東戦

（5月11日）

◇対校エイト◇

一橋②　東大①

1′29″34　3′03″05　4′39″00　6′14″71

1′28″06　3′00″46　4′36″05　6′12″23

◇フォア◇

一橋②　東大①

1′44″15　3′30″09　5′21″91　7′14″59

1′41″98　3′28″03　5′15″98　7′04″14

◇シングルスカル◇

横堀(一)②　氏家(東)①　藤代(一)③

1′59″87	4′04″98	6′12″61	8′21″98
1′50″64	3′48″70	5′50″14	7′52″49
2′05″06	4′15″05	6′28″46	8′43″86

◇ダブルスカル◇

一橋①　東大②

1′45″87	3′37″26	5′30″36	7′23″66
1′49″59	3′47″29	5′46″39	7′48″45

◇JrエイトA◇

黒潮(東)②　白虎(一)①　旭(東)③

1′37″30	3′15″06	4′57″75	6′43″35
1′33″80	3′11″60	4′51″26	6′34″64
1′37″10	3′19″44	5′03″68	6′49″64

◇JrエイトB◇

青龍(一)②　暁(東)①

1′34″36	3′13″22	5′02″13	6′51″56
1′35″29	3′12″50	4′53″26	6′37″64

NW 3.8 m

エイト惜しくも2位—第2回全日本軽量級

（6月14日～15日）

◇エイト◇〔決勝〕

一橋大②　慶応大③　東大①

1′31″58	3′09″27	4′46″19	6′22″62
1′31″85	3′07″77	4′45″62	6′23″84
1′29″59	3′04″98	4′42″64	6′19″51

（レース経過）　かねてからの予想通り決勝は東商慶三つどもえの戦いになった。準決勝で東大は東北大に苦しめられており，楽な戦いをした一橋優位との土手評も聞こえ，我々の士気はいやが上にも高まった。

スタート5本はまずまず。しかし力漕の時点ですでに東大に½艇身ほど先行される。コンスタントは36.5。降ろすと⅔艇身差となった。コンスタントは35。バランス，リズムとも良好とはいえぬ。

ハーフでは東大には水を開けられ，リズムもつかめず慶応にも1艇身出られていた。4回の「8本」と1回の「5本」で慶応を逆転し得たのが1,600 m。ピッチは34.5。1枚ずつ上げ35，36.5。前方を漕ぐ東大が視線に入るのかオールが強くなる。必死の追漕をし，ピッチも38から40.5へ上がるが，東大には再び及ばず敗北した。

◇付フォア◇

〔準決勝〕

防　衛　大　①　7′35″29

名大艇友会　③　7′48″37

一　橋　大　②　7′42″91

◇オックスフォード楯エイト◇

〔敗復〕

早大理工⑤　千葉大②　一橋大③　新潟大①

京大B④

1′42″20	3′29″71	5′17″84	7′04″77
1′35″10	3′16″65	5′00″91	6′45″36
1′36″70	3′18″35	5′02″81	6′47″53
1′38″90	3′19″05	5′02″09	6′45″09
1′39″08	3′22″31	5′04″39	6′49″35

全日本

◇シングル・スカル◇

〔予選〕

吉成(中大)②　高橋(一橋)④

磯(トヨタ自工)①　松橋(東京トヨペット)③

1′52″47	3′55″13	6′01″10	8′08″20
1′56″27	4′01″53	6′07″82	8′14″87
1′50″04	3′48″89	5′51″62	7′53″52
1′51″75	3′55″59	6′03″60	8′09″75

◇クォドルプル決勝◇

〔決勝〕

瀬田R．C．①　東北大②　一橋大③

3′39″14	5′34″87	7′26″70
4′05″34	6′01″38	7′54″37
4′10″11	6′08″43	8′05″54

◇無しフォア決勝◇

碧水会④　一橋大⑤　理科大・早大理工②

日大①　R．H．Y．C．③

1′52″15	3′54″23	5′56″37	7′55″13
2′08″43	4′25″18	不　明	8′57″21
1′44″88	3′35″66	5′33″21	7′29″41

1′42″47　3′32″51　5′25″87　7′20″41
1′45″81　3′42″98　5′40″86　7′34″14

インカレ・エイト準決で敗退―第7回全日本学生・第8回全日本・全日本大学

◇エイト◇

〔準決勝〕

一橋大④　東北大①　北大⑤　京大③
同志社大②

1′28″93　3′05″98　4′46″14　6′23″97
1′29″61　3′01″80　4′37″61　6′14″97
1′33″23　3′10″91　4′48″06　6′25″92
1′27″85　3′02″02　4′40″99　6′17″96
1′28″66　3′01″34　4′36″27　6′15″88

◇付フォア◇

〔準決勝〕

東工大③　広工大②　東北大①　一橋大④
1′49″76　3′40″97　5′36″56　7′29″61
1′48″57　3′41″39　5′35″90　7′29″21
1′44″24　3′32″67　5′27″06　7′19″56
1′45″82　3′38″28　5′36″14　7′30″77

◇ダブル・スカル◇

〔敗復〕

一橋大③　北大②　日大①　岐阜大④
1′53″75　3′53″37　5′49″42　8′05″54
1′51″81　3′56″42　5′49″69　7′46″49
1′50″23　3′46″59　5′45″41　7′42″27
1′58″33　4′07″92　6′19″22　8′27″46

◇シングル・スカル◇

〔敗復〕

大久保(一橋)③　松田(法政)①
梅沢(立教)②　山口(防大)④
2′09″42　4′22″88　6′55″66　8′50″55
1′56″41　4′01″48　6′09″08　8′16″20
2′03″26　4′13″89　6′27″40　8′38″67
2′11″38　4′30″72　6′39″67　9′28″62

エイト健闘及ばず4位―第21回全日本新人

10月25・26の両日戸田ボートコースで行なわれた昭和55年度全日本新人選手権にエイト1クルーとシングルスカル2クルーが出漕した。エイトは予選，準決勝ときに悠々1位で通過し，決勝での活躍が大いに期待されたが，決勝に於てはスタートでの出遅れが最後まで響き，健闘したものの4位に終わった。

シングルスカルの2クルーはいずれも準決勝まで進んだが，決勝進出はならなかった。

昭和56年

スカル・ダブルスカルのみ勝つ
―第33回東商戦

第33回　東商戦は5月10日，強い逆風の吹くなか戸田のオリンピックコースで行なわれた。

シングルスカル・ダブルスカルでは勝ったものの，他の種目は大差で敗れる結果に終わった。

◇エイト◇

東大①　一橋②
1′32″15　3′09″56　4′51″60　6′35″95
1′31″65　3′12″11　4′58″71　6″46″99

◇フォア◇

東大①　一橋②
1′50″32　3′46″37　5′45″37　7′45″63
1′51″94　3′54″29　5′59″74　8′06″20

◇シングル・スカル◇

東大②　一橋①
2′18″98　4′39″72　7′04″23　9′24″64
2′09″20　4′26″97　6′48″60　9′12″10

◇ダブル・スカル◇

東大③　一橋①　東大②
2′02″81　4′11″70　6′32″92　9′00″03
1′59″01　4′09″80　6′24″17　8′43″87

2′03″76　4′19″56　6′31″01　8′47″72

◇ジュニアエイト◇

東大(旭)③　一橋(青龍)②　東大(暁)①　一橋(白虎)④

1′45″56　3′35″99　5′29″18　7′23″59

1′44″14　3′37″00　5′29″46　7′20″23

1′37″99　3′24″03　5′13″33　7′02″75

1′47″33　3′42″75　5′37″00　7′30″33

エイト決勝で敗れる―ユニバシアード派遣選考会

5月20日，21日の両日，日漕主催のユニバシアード派遣選考会が行なわれた。1,000 mのレースである。20日の予選で2ハイの決勝進出クルーを決め21日にその2ハイで優勝を争う（2レース行ない両方とも勝った方を優勝とみなす）

シングルスカル，フォアは残念ながら予選落ち対校エイトも決勝の2レースで東大に連敗，またしても東大により行く手を阻まれる。

◇エイト◇

〔決勝〕　1回目　2回目

東　大　①　2′51″07　①　3′02″14

一　橋　②　2′59″17　②　3′04″17

◇フォア◇

〔敗復〕

一橋　②　3′44″42

東大　①　3′37″96

◇シングルスカル◇

〔二次予選〕

一橋　③　4′18″86

立教　②　4′12″05

法政　①　4′10″49

エイト惜しくも3位―第3回全日本軽量級

6月20日，21日両日にわたって軽量級世界選手権派遣選考会が行なわれた，エントリー数はシングルスカル14，ダブルスカル4，フォア15，エイト14カット我が一橋クルーは減量に苦しむことなく万全の体調でレースに臨んだ。

しかし，シングルスカル，フォアとも準決勝で敗退期待のエイトも1,500 mまでリードしていたものの最後で逆転されるという結果に終わった。

◇エイト◇

〔決勝〕

東北大②　東大①　一橋大③

1′35″20　3′13″60　4′54″89　6′33″74

1′32″47　3′11″80　4′52″24　6′31″84

1′32″10　3′09″65　4′52″08　6′34″99

◇フォア◇

〔準決勝〕

一橋大③　東経大①　新潟大②

1′51″69　3′49″45　5′49″01　7′50″73

1′48″53　3′42″25　5′36″56　7′32″37

1′49″62　3′48″94　5′50″93　7′50″58

全日本

◇フォア◇

〔敗復〕

慶応③　早大理工①　一橋②

1′50″83　3′45″53　5′44″20　7′45″23

1′49″63　3′44″99　5′40″11　7′36″66

1′47″76　3′42″48　5′40″20　7′40″83

◇シングルスカル◇

〔決勝〕

東海③　トールキング②　三洋①　東理④　一橋⑤

1′52″69　3′51″30　5′53″21　7′58″13

1′48″67　3′50″97　5′57″28　7′53″96

1′46″99　3′45″21　5′47″56　7′45″96

1′57″50　4′01″70　6′06″08　8′08″90

1′58″77　4′04″38　6′09″79　8′08″94

エイト準決勝で敗れる

―第8回全日本大学，第59回全日本

8月27～30日。東商戦，軽量級選手権との雪辱を晴らされて期待された対校エイトは，準決勝で中央に敗れる。しかし，ＳＳはインカレ2位，全日本5位。

―全日本大学―

◇エイト◇

〔準決〕

一橋②　商船③　中央①

1′28″46　3′03″27　4′41″00　6′18″79
1′35″68　3′17″19　5′01″46　6′40″57
1′26″98　3′00″99　4′38″02　6′16″56

◇フォア◇

〔準決〕

商　船　①　7′26″31
広　島　②　7′27″39
滋　賀(医)　③　7′33″09
一　橋　④　7′35″46

◇オックスフォード楯エイト◇

〔準決〕

早大②　一橋③　檀国①

1′33″86　3′13″57　4′53″18　6′34″13
1′36″97　3′15″52　4′57″67　6′41″96
1′28″04　3′03″10　4′40″21　6′17″01

◇シングルスカル◇

東理(鈴木)③　法政(清久)④　東海(魚地)①
一橋(山内)②

1′51″05　3′50″08　5′51″92　7′55″89
1′48″34　3′48″48　5′54″53　8′08″41
1′53″72　3′50″04　5′47″91　7′49″61
1′49″64　3′49″51　5′52″05　7′55″74

（インカレ3位までのクルーは全日本の決勝へ）

エイト準決勝敗退—第22回全日本新人

（10月16日）

◇エイト◇

〔準決〕

鹿児島②　一橋⑤　早稲田③　慶応①
千葉④

1′31″39　3′08″11　4′47″52　6′30″31
1′36″86　3′19″13　5′03″67　6′48″38
1′35″02　3′17″90　5′02″49　6′42″78
1′32″26　3′08″62　4′46″33　6′26″18
1′38″21　3′22″42　5′05″92　6′47″52

◇フォア◇

〔準決〕

金沢大②　一橋大④　東工大A③
福島大A①

1′49″27　3′36″43　5′30″20　7′24″66
1′45″41　3′38″96　5′34″92　7′29″44
1′46″65　3′36″77　5′30″79　7′26″69
1′43″83　3′33″82　5′27″61　7′21″53

H組優勝—第91回秋季大会

◇第1選手◇

C　②　7′12″5
S　③　7′24″0
H　①　7′08″5

◇第2選手◇

C　②　7′38″5
S　①　7′38″0
H　③　8′00″3

◇第3選手◇　SS

C　②　9′43″2
S　③　9′55″9
H1　①　9′27″6
H2　④　10′02″1

昭和57年

第34回東商戦

第34回東商戦が5月9日，戸田オリンピックコースで行なわれた。

残念ながら，全ての種目において東大に敗れ，エイトの対戦成績は7勝26敗となつた。

◇エイト◇

一橋大②　東大①

1′32″02　3′07″99　4′45″49　6′28″14
1′30″17　3′04″28　4′42″41　6′17″23

◇フォア◇

一橋大②　東大①

1′44″30　3′36″54　5′34″42　7′34″96
1′47″24　3′35″78　5′26″63　7′18″84

◇シングルスカル◇

一橋大②　東大①

1′58″46　4′08″58　6′22″38　8′42″21
1′55″37　4′00″45　6′07″76　8′23″59

◇ダブル・スカル◇

東大A②　東大C③　一橋大④　東大B①

1′52″10	3′50″74	5′57″10	8′04″26
1′06″69	4′11″66	6′19″00	8′26″11
1′59″29	4′10″54	6′26″07	8′39″84
1′53″41	3′51″69	5′56″08	7′57″24

◇ジュニア・エイト◇

東大(暁)②　一橋大③　東大(深空)④

1′38″91	3′25″50	5′13″06	7′02″07
1′35″95	3′23″47	5′13″62	7′13″03
不明	3′27″99	5′12″91	6′58″52

ユニバシアード派遣選考会

（5月22日～5月23日）

本年度は，2,000mレース(昨年は1,000m)で行なわれた。エイトは第1次選考で上位3ハイに入れなかったため第2次選考に出漕できなかった。

第1次選考では早稲田，第2次では東大が勝ったため，最終選考が2ハイで行なわれた結果，東大のミラノ派遣が決定した。

◇エイト◇

〔第1次選考〕

一橋⑤　中央④　東北③　東京②　早稲田①

1′29″86	3′02″00	4′41″56	6′22″07
1′29″83	3′03″79	4′41″17	6′14″35
1′32″65	3′05″34	4′38″96	6′12″39
1′29″85	3′02″01	4′36″66	6′09″81
1′29″98	3′01″46	4′34″86	6′06″66

◇シングル・スカル◇

〔敗復〕

一橋③　TKC①　中央②　成蹊④

1′56″27	3′59″83	6′02″68	8′09″28
1′53″92	3′52″96	5′52″87	7′55″45
1′50″63	3′49″38	5′52″40	7′57″78
2′06″32	4′22″83	6′41″48	8′58″79

◇ダブル・スカル◇

東京医歯②　一橋①

1′48″02	3′41″79	5′41″57	7′39″54
1′51″73	3′54″24	5′59″93	8′03″30

エイト2位，スカル4位—第9回全日本大学

8月26日より4日間にわたり，全日本選手権，全日本大学選手権及びオックスフォード楯レガッタが行なわれた。コンディションも良く，予選インカレエイトで早大が5′56″92を出すなど，レベルの高い大会であった。

期待の対校エイトはインカレ決勝ではスタートで出遅れ，そのまま東大に逃げきられ2位に終った。全日本ではスタートで果敢に飛び出したものの1,000m以降，艇速が伸びず，4位に終わった。一方，シングルスカルの内藤は，コックスから転向したにもかかわらず，勝負強さを発揮してみごと決勝へ進出，橋人の意気を高揚させた。

◇エイト◇

〔インカレ決勝〕

東大①　一橋大②　法政大④　早大③

1′30″38	3′03″95	4′39″69	6′17″36
1′31″49	3′06″95	4′42″22	6′20″32
1′33″05	3′09″84	4′48″34	6′26″44
1′31″03	3′05″17	4′44″63	6′23″56

〔全日本決勝〕

法政大学②　早稲田大学③　トヨタ自⑤

一橋大④　東大①

1′30″77	3′06″61	4′47″74	6′23″29
1′35″03	3′11″24	不明	6′24″69
1′34″07	3′17″25	5′02″75	6′44″65
1′29″86	3′04″55	4′44″68	6′26″37
1′30″50	3′06″62	4′42″31	6′17″08

◇オックスフォード楯エイト◇

〔準決〕

筑波大④　檀国大①　中央大②　一橋大③

1′41″54	3′28″47	5′16″80	6′57″83
1′35″28	3′19″53	5′01″92	6′41″10
1′39″91	3′26″50	5′09″29	6′50″41
1′42″48	3′27″29	5′10″07	6′52″22

準決勝で敗れる—第4回全日本軽量

（6月26日～27日）

一橋はシングルスカル２ハイとエイト１ハイを出艇した。

エイトは東北に敗れ決勝に進出できなかった。

◇エイト◇

〔準決〕

一橋②　東北①　商船③

1′28″31	3′01″36	4′36″31	6′10″34
1′26″51	2′58″59	4′33″14	6′06″42
1′32″13	3′08″94	4′49″87	6′28″55

◇シングルスカル◇

〔準決〕

四神会②　東レ(堀内)①　東大(斉藤)③

1′59″21	4′05″04	6′13″21	8′20″68
1′55″92	4′01″97	6′09″45	8′11″18
1′58″90	4′05″06	6′12″65	8′22″03

〔敗復〕

東大①　法政②　一橋④　明治③

2′04″90	4′17″93	6′33″02	8′44″62
2′02″95	4′15″92	6′32″48	8′45″19
2′05″19	4′21″35	6′43″36	9′06″33
2′02″03	4′18″87	6′42″36	9′05″25

昭和58年

第５回全日本軽量級選手権に優勝，デュイスブルグに派遣さる

故村上驍君遭難事故記録

日　時　昭和38年７月18日（木）
　　午前11時20分

現　場　埼玉県北足立郡戸田町美女木
　　戸田橋上流約７km

気　象

午前９時　温度27.7度　湿度72%
　　高曇　北々西の風 0.7m

上記の気象は現場の記録がないため熊谷測候所で観測したものである。現場ではこの記録より温度が高く風は弱く感じられた。

クルーメンバー

舵手	伊東　勇	56kg
整調	豊田雅孝	65kg
７番	大内多喜男	70kg
６番	吉田幹則	63kg
５番	庄司政義	72kg
４番	森　一将	72kg
３番	坂野洋一	66kg
２番	村上　驍	68kg
舳手	森　正義	62kg

このクルーは９月１日のオックスフォード楯レガッタに出漕するために７月１日より合宿乗艇練習をしていた。

当日の行動記録

午前10時　起床

使用艇「白虎」を川へ運ぶ。土手で準備体操をしてから出艇(10時20分)陽ざしが強く暑い。出艇直後「一昨日波をかぶって腰を冷したのでちょっと痛い。」と村上舳手森に話す。また一昨日の練習中戸田橋の下で東大のスカラーのオールと村上のオールが接触し村上のオールが破損したためオールをかえたのだがそのオールはどうもハンドリングがうまくいかないと言っていた。

練習内容

A．スタート６本，スタート力漕30本（15本づつに分けてピッチ48から43におろす,）おろしてコンスタントパドル100本（ピッチ38～40）を７回。

B．コンスタントパドル30本の短漕を10回

C．三段漕ぎ（コンスタントパドル10本――力漕10本――コンスタントパドル10本）を３回

ウォーミングアップののち第１セットの練習で笹目橋を越え更に上流の第２カーブまで行き休憩をとる。ウイスキーのビン２本に水を入れたのを積んでいたので飲む。

（11時15分）

休憩後第２セット目の練習に入る。パドル30本を１回終え２回目の後半２番手村上切り込んで腹を切り一気に艇外に放り出され，「白虎」と村上の距離は一瞬にして２艇身ほど開く。この瞬間の前後はクルー各人の記憶が異なるので別々に記す。

整調　ストロークサイドが傾いたのを感じたら，舵手が２番手が落ちたという。気がついた時には村上は艇の後方にいた。庄司が「あいつ泳げないんだ」というので，これは大変なことになると思い，即座に飛び込み，艇に向って早く艇を廻せと叫びながら村上のところに向う。村上のところにたどりついたが救助法も知らなかったのでつかんだら引っぱり込まれて一緒に沈んでしまう。練習中で非常に疲れており，しがみつかれてしまったので，これでは自分も死んでしまうと思い手を離してしまった。

５番　ストロークサイドに傾くのを感じ，「ザアー」という音がしたので，誰か切

り込んで落ちたなと思った瞬間艇の側を誰かが流れていくのを見た。30m程一瞬の中に艇と離れ艇が止まりかかってはじめて，村上であることが分かり，「あいつ泳げないんだ」と叫び，豊田に次いで飛び込んだ。村上のところに別達するまでに早く艇を廻せと叫び，どちらの岸に引っ張っていこうか両岸を見るとゴルフ場側が近いと思う。村上のところにつくと，先に豊田が村上をつかんだが，しがみつかれて一緒に沈んでしまった。数秒後ものすごいいきおいで水中から二人同時に飛び出してきたが，その時２人は離れていた。今度は自分のランニングシャツを村上はつかんだがシャツが切れた。次の瞬間もがきながらでなく一瞬の中に水中に沈んでしまった。その直後艇が近づいてきたがクルーは茫然としていた。

舳手　イージーオールがかかったとき，目の前の２番手が切り込んで，ちょっとの間，腹でこらえていたが，次の瞬間一回転して頭から落ちていくのを見る。落ちていくのに時間がかかるものだなあと思ったが，フィニッシュで体が後にとんでいるので，手が出ない。落ちてから２艇身以上離れるまでは一瞬の中の様な気がする。茫然としていたが二人飛び込んだのでコックスの指示に従う。

コックスの「艇を止めて」のクライはほとんど艇が止まりかかったときかけられたのだが，オールが３本漕手の手を離れており，クルーがあわてていたので，艇を両舷で廻そうとしてもオールが合わずバランスがくずれて，かっぱいたりして少しもたついた。艇を廻し終って近づくと，村上はすでに沈んでしまっていた。潮が下げていたので村上が沈んだと思われる地点よりやや下に艇を止めて２～３人づつ水中にもぐって探す。200ｍ程下流にいたジャリ取り船に助けを求めて，きてもらったがすぐ帰ってしまう。

連絡と救援隊

11時30分　４番手森が連絡の為岸に上がったが，ゴルフ場の端なので，入口の事務所まで駆けて10分程かかる。そこで事情を説明し，救急車出動の要請をし，自動車で合宿所へ向う。

11時40分　５番手庄司も連絡の為岸に上がりゴルフ場入口附近で農夫の乗っていた自転車を借り，合宿所へ連絡に向う。

12時15分　ゴルフ場社長牛島氏より，向島に電話連絡がある。代表幹事尾藤が受ける。即時蕨警察署に電話して，詳報を聞き，事情を確かめて，埼玉県警大宮機動隊，水上警察，救急車に連絡をしてから，村松部長に連絡をしたが部長は自宅，学校に不在。前田監督，渡辺，鈴木コーチに連絡。東大艇庫に連絡して合宿に連絡してもらう。向島では春季小会のため一般部員が合宿中だったので，全員戸田へ急行させる。

12時30分　救急車現場到着。捜索中なのですぐ帰る。

12時45分　戸田で合宿中の対校選手現場到着。ジュニアと一緒に水中にもぐって探す。

13時30分　東洋文庫に居た村松部長と連絡がとれる。村松部長現場に急行。

14時　村松部長，15時　前田監督，渡辺，鈴木両コーチ，塚田，宮沢，伊藤(茂)先輩，村上の御両親等現場到着。これよりさき東大，中大，外語大，日大，早大，商船大，日漕等々の救援隊が，ボート及び，モーターボートで現場に到着。竹ざお手がき等で捜索に当る。

16時　水上警察署，20時　機動隊，21時　陸上自衛隊朝霞駐屯部隊第31普通科連隊及び同第一建設団現場到着。22時　部長各隊長と連絡。

18時頃まで昼の捜索が続けられたが，暗く

なりかけたので，他校ボート部の人達にはお引き取り願い，水中にもぐって探していた本学選手も寒くなり，疲労したので一度合宿所に戻すことにした。その後は機動隊，自衛隊が投光機其他の器材をフルに使用し，午前4時頃まで捜索を実行。捜索本部を岸上のゴルフ場の端の天幕に設け，炊き出しを行う。学生は交替制にし，部長朝まで岸に頑張る。学校から前期事務長来る。

7月19日黎明と共に機動隊，自衛隊，それに付近の漁夫の援助も得て捜索を再開。8時頃村上が死体となって浮上したのが発見される。土手に上げ警察の検証を済ませてから御両親と対面。先輩，部員の涙と共に「長煙遠く」の校歌をうたい部旗をかけた柩に入れる。部長以下一同で柩をもって車につみ，艇庫で告別式を行い，戸田橋対岸の火葬場で火葬する。

村上驍君遭難記事

悪夢のように当日のことを思い出して，すぐ心に浮ぶのは，次のような諸点である。書きしるしておく。これからの学生に，よくよく読んで考えてもらいたい。

(1) 尾藤，その他の努力にも拘らず，警察や機動隊に必要な連絡がとれ，それぞれの隊の内部で，必要な手続が終り，現地に大がかりな器材を携行した大部隊が到着したのは，もう夜も更けてからのことであった。それぞれの部隊における，隊長以下の御熱意や御努力には，ありがたく頭が下り，又これに対して事件後，大学としても鄭重に，謝意を表した次第であるが，しかし結局そのような，外部からの御援助は，早いか遅いかの別こそあれ，死体を発見するのに役立つだけで，水に落ちた学生の生命を取りとめる第一の努力は，やはりクルーと学生の手で，なされなくてはならなかったのだと言うのが一つである。学生はこのことをよく認識し，又下級生にもれなく申し次いでもらいたい。

(2) クルーの練習の場所は，両岸に人家が建ちならび，大小の船舶が行きかい，専門の船頭や水手の，眼の光っている隅田川から，両岸に人気が全くなく，水路は屈曲して見通しがきかず，しかもしばしば河川工事や，砂・砂利の採取によって，水底が不当に変形されている荒川に移された。競漕用艇が堅固さよりも，軽さや速さを中心に，謂はば戸田静水コースを前提にして設計されるようになったばかりでなく，小艇（舵手なしをふくむ）の比重が増えて，危険の度は増大した。

(3) ボート部の学生にも，泳げぬものがいるのかと言う，一般の不審にも拘らず，案外今の学生には，小学校や中学校で，泳げるようになっていない者がいるのである。ボート部では勿論のこと必らずこれらの学生の水泳訓練をしなくてはならない。幹事学生の申送り責任事項の第一に，このための体育科や水泳部との連絡きびしい訓練によるカナヅチの絶滅を，必らずふくめなくてはならぬ。救命具その他も艇庫に整備してあるはずだが，十分活用されているかどうか。必要なら小型無線機位は艇のコックスにもたせてもよい。何よりも忘れてはならぬことは艇には何時もオールがついていて，オールは大変いい「うき」になるということだ。オールを投げてやることさえ出来たら，村上の場合も助かったかも知れぬ。

(4) 水と言うものは恐ろしいものである。平和な時には言いようもなくやさしいが，これを軽視したり，調子に乗ったりして，水の恐ろしさを忘れると，人は忽ちきびしい罰をうける。学生は水に対して，艇に対してや，オールに対してと同様粛然として襟を正すような気もちをもたなくてはなら

ぬ。そして時々この点について反省して，浮わついたまのぬけた気分を，艇上や艇庫内から，徹底的に払拭しなくてはならぬ。物的な施設の改善は，そのような心のもちかたをまってはじめて，ボートを真に明るく楽しく教育的な，学生生活の中心にしてくれるだろう。

1965. 9. 2.　　村松　祐次

故 村上 驍君一周忌慰霊祭

（昭和39年8月18日）

故村上驍君の一周忌慰霊祭が去る8月18日，荒川の上流桃源境の村上君遭難現場に於て行われました。当日は真夏の太陽が照りつける中を，増田四郎一橋大学学長，金子前期部長，村松端艇部長の他学校関係者，端艇部先輩，ボート部員多数の参列の下に慰霊祭は行われました。村上君の木牌にはきれいな花が飾られ，川ではかつての艇友達が同君の冥福を祈って力漕を数回くり返し，参列者一同の焼香をもって慰霊祭は無事終りました。

君の青春はあの刹那にその活動を停止した。猛烈な暑さで照りつける太陽の下で，真青な川の上で，桃源境と呼ばれる美しい景色の中で。君が逝きて春秋が過ぎた。我等涙呼すれど君は帰らない。而も青春のエネルギーをのみ込んだ河の水はとうとうと流れ続ける。何事もなかったように。酷なるかな自然，偉大なるかな自然。8本の赤いオールはオックスフォード楯目指してパドルを続けていた。艇速の陶酔，快い疲労，若い筋肉の躍動。その刹那に君は我等に永遠の青春の姿を残して遠い旅路についた。何を求めて逝きしか。天の星か，水の精か。願わくば勝利の女神となりて我が一橋端艇部に美酒を与えん。

村上を憶うて　　森　　正義

村上驍君の冥福を祈る

諸行無常とはいえ，我々は惜しみて余りある艇友を失った。ジュニア選手の中で，最も頑健な体駆に，灼熱の闘志を蔵し，黙々と励んで，我々の模範だった村上驍君！

君は本学商学部に入学するや，直ちに端艇部に入り，爾来一橋ボート発展の若い担い手の一人として粉骨砕心の努力を惜しまれなかった。6月23日の東商ジュニア戦には，2番手として，我がクルーを勝利に導く動力になった。君は今もなお我々の眼前に彷彿としているのに，洋々たる前途を残して還らぬ人となったことは余りにも悲しい。

しかし，君の不屈の意志，旺盛な力，柔和な微笑，理知に澄む目は，今も戸田に生きている。我々は心から君の冥福を祈り，一橋端艇部の一層の躍進に向い，さらに不断に努力することを，今は亡き君の霊に誓おうと思う。

艇友を失う

ジュニアエイト

主将　大内多喜男

今思うと全てが一瞬時であったという気がする。あれから早や2週間過ぎたが，我々は未だに村上と共に生活し，漕いでいるように思える。

あの日は朝から夏の暑い太陽がぎらぎらと水面を照らしていた。10時に get ready，型どうりに体操をし，上に向け漕ぎ出した。paddle 30 を3回，スタ力30下して300本を3回済ませて休憩に入った。再び練習開始となり paddle 30 の2回目，easy oar と cox がかけた。その刹那，誰か切り込んだと思った時，2番の村上が空中に放り出され頭から水中に没していった。瞬間唖然としたが，直ちに整調，5番手の二人が救助の為飛びこんでいき，他の者は艇を回わし二人のいる所に向った。「沈んだ」という声を聞き，一人に救急車の出動と合宿所に知らせるため東大艇庫への連絡を頼み，皆で「村上，村上」と口

々に叫びながら水中を捜した。見つけ出すことが出来ず，我々は次第に焦燥を感じ，潮の流れを考えて下に移動し出した。水面は波一つなく青々とし，只茫と両岸に緑色の蘆が見えるだけで，静寂そのものであった。胸苦しさというか何とも言えぬ気持がつのってくるばかりであった。暫くし，——どのくらいたっていたかは分らないが——対校の人たちも来てくれ一緒に捜し始めた。その後，他の学校，水上警察の協力をえて必死に捜索したが駄目であった。

翌日８時過ぎ死体となって発見され，到着した時には，仮設テントの所に安置されてあった。ユニホームに着換えさせている時も彼が死んだなどとはどうしても信じられず，唯青白い顔をして眠っているとしか感じられなかった。「村上」と呼べば，あの大きな目を今にも開きそうに思えた。悲嘆にくれる御両親が彼に縋る姿はいたましい限りで，どうしてよいか全く分らなかった。最後に我々数人で一橋会歌を歌ったが，一筋二筋と流れ出る涙がしまいには堰を切ったようにどっと流れ出して，声は出ず歌えなかった。

彼の冥福を祈ると共に，今後このような事故を二度と繰り返すまいと強く深く思っています。

「村　　上」

二年　小林　大寿

村上，オマエは逝ってしまった。だれが信じるものか。嘘だ！　オマエはそこで笑っている。オレの目の前で。笑え！　村上！　笑え！　笑え！　もっとだ！　もっと笑え！　村上！

オマエの柩の重みを両腕に感じながらも，オレはオマエの死を信じることが出来なかった。坊主が来て，オマエの柩と，オマエとは似ても似つかぬぼけた写真の前で唸っていた。

オマエのお母さん，妹さん，お姉さん，お父さんは泣いていた。オレも泣いた。皆泣いた。だが，オマエ一人は笑っていた。オマエらしい，あのニヤッとした顔で，てれくさそうに笑っていた。オレもオマエにつられて笑ってしまった。急に涙が込み上げた。

オレはオマエの安らかだったという死の顔も，むなしかったという骨片も見なかった。オマエの笑顔とオマエの親しい眼差しを，いつまでも失いたくなかったので。オマエはそれを許してくれるだろう。

放心の数日が過ぎた。夏休みで誰もいない寮に，一人帰った。そして，オマエのギターを抱いて泣いた。

いつも「いるかい」といって，のっそり笑顔を見せたのは，オマエだった。オマエは自分の部屋に行かず，隣のオレの部屋に来た。そしてギターを弾いた。何度直してやっても，箸の持ち方を知らなかった無器用な指は，意外な程正確に絃を押え，弾いて，オレを驚ろかせた。あまり身近なためか，我々の間には話題が不足した。そんなときでも，我々は楽しい数時間を過すことが出来た。

７月３日の夕方，オマエはこのギターを抱いていた。やがていつものように「じゃあ」といって帰っていった。いつものように青い汚いスリッパを，オレの下駄箱に忍び込ませて。最後の別れとも知らずに。

彼を知ってから，まだ一年しか経っていない。それなのになぜか彼とのつきあいは，この世に生を受けて以来の，長いものであったような気がしてならない。個人対個人のつきあいというよりは，むしろボート部の一員として，お互いを知り尽した上での，兄弟のような関係であった。彼が逝ってしまった今，しみじみ感じるのであるが，ボート部というところはこのようなところであったのだ。我々の会話の中には，学問のことや，人生のことなどというむづかしいことは顔を出さなか

った。しかし，日常のほんのつまらない会話の中に，あたかも自分自身のもののように，お互いの心の動きを感知し合い，また，悩みや喜びを共有していたのだ。

練習がつらい，勉強が出来ないと弱気を起し，「やめようかな」と軽々しく何度でもいい，それでいて止められない私の矛盾した気持，矛盾した立場を彼に語るとき，彼は「いつまで続くかな，でもやってみるよ」というのであった。秋空の下を，暗の霜柱の上を，いかにも堅そうな上体を少し前の方に傾けて，黙々として走る彼の後方に続き，そのような彼の態度を無意識のうちに観察するのであった。彼は常に自分の生活に疑問を持ち，反省しつつも，辛抱強く，必死になって，何ものかを求め，何ものかをつかまえようとしていたのだ。

笹目上流白虎号遭難の記録(抄)

I　事故の記録

1.　3月1日のデータ

日時　昭和45年3月1日(日)午前11時30分

現場　荒川笹目橋上流約800 m

気象　正午　天候　晴　北の風　風力9 m

温度8.5℃　湿度38%

クルー・メンバー

舵手	岡本裕二	経済学部	54kg
整調	野上　衛	社会	63kg
7番	北川鳴海	商	60kg
6番	田口哲生	商	71kg
5番	川端祥当	社会	59kg
4番	太田文雄	経済	62kg
3番	河村憲司	商	59kg
2番	菓子野　広法		57kg
舳手	美原　融	経済	66kg

このクルーは5月5日の東京大学との定期戦のジュニアレースに出場するために，学校の入学試験休みを利用して2月25日から3月5日での予定で，25日より合宿乗艇練習をしていた。

使用艇　「白虎」(昭和35年製)

2.　事故までの練習経過

午前　9時30分　起床

荒川に出艇　下潮

早朝の霧がはれて快晴であったが風がやや吹いていた。

雪の中艇を河まで運んで河で練習するか，ポンドで練習するかトレーナーと協議。その結果，準備体操，柔軟体操をして10時05分上流に向けて出艇。

練習内容

A　コンスタントパドル　30本15回

B　コンスタントパドル　200本3回

笹目橋のあたりまで4人漕ぎ，変化漕ぎにてウォーミングアップののち，30本パドルのインターバル5セット終えた。やや風が出始める。パドル200本の1回目を桃源境の入り口のカーブを回ったところから桃源境上流500mの地点で終える。200本漕ぎ終えた頃，下流へ向う対校エイトクルーとすれちがう。風はさらに強まり，しかも逆風なのでクルーはかなり疲れていた。ノーワーク，4人漕ぎの後30本パドル3セットを分解して行い秋ケ瀬橋の下流で艇を回す。

その後30本パドル2セットを行ってから，約3分程休憩する。休憩後パドル200本の2回目の練習に入った。

風が順風だったので艇は早く進み，200本のパドルを終えると笹目橋上流1,200～1,300 mの地点であった。(11時20分頃)その後皆疲労しているようなので少し長目のノーワークで休息をとりながらオールを整えて400 m位進んだ。事故現場上流より30本パドルのワークに入る。パドル30本11セット目・パドルに入るための3本目位で河の真中にある杭に艇をぶつける。午前11時30分ごろと推測される。

3.　事故の模様

クルー及び釣船で現場に来合せた戸田市新曽4,261建設業，長谷川金二氏の言葉により事故の模様は下記の通りと思われる。

艇は杭に跨座した形で沈没した。舵手，2番手を除く全員はオールをはずし，浮き代りにして戸田橋に向って左岸の方向へ泳ぎ出す。

途中舵手，2番手，3番手，5番手の一団は他の5人のクルーの一団より離れてしまう。

舵手，4番，6番，7番，整調の順に自力

で泳ぎ着く。

下流より釣船（和船長谷川，榎本，松尾の三氏）が泳いでいるクルーを発見して助けに来てくれる。（図Ⅱ参照）

この間7番手，6番手は人家（大野）の方へ救助連絡に走る。2番手，3番手，5番手の中に船が進んでいく中に，3番手，5番手の2人は水中に没してしまい，2番手，舳手の順に救助される。

舵手を乗せて投網を打ったが手懸りなく，岸につけてガソリンでタキ火をし5名に暖をとらせる。

一方連絡に走った2人は人家が空家であったので，やむなく笹目の方へ走っていく。途中で宇田川畳店の小型トラックを発見，車の持主が来るのを待っていた。和船の松尾氏が雪の中の足跡をたよりに車に来ると2人が中でぐったりしていた。そうこうするうちに宇田川，榎本氏が現われ，7名を車に乗せて艇庫に向った。

（文責　村井靖人＝昭和34年卒）

Ⅱ　捜索活動の記録

3月1日11時30分事故発生から，同月3日11時35分河村，同日14時45分川端，それぞれの遺体発見まで約50時間，足かけ3日間を要す。

1.　遺体発見までの経過

3月1日

12時30分　110番連絡（事故にあった学生が，小型トラックで艇庫に帰る途中）

50分ごろ　ジュニア選手艇庫着

安藤，白井コーチ，対校エイトクルー武良，3学年田辺の運転するモーターボートで現場へ急行（当日は日曜日であったから，両コーチは午前の対校エイトクルーの練習を見たのち，艇庫で休憩中。ジュニアクルー担当の村井コーチは，午後から艇庫に来たので，事故発生直後は不在）

13時10分ごろ　安藤コーチら現場着。釣船で2人を助けた長谷川氏らが現場に残っており，遭難時間（「11時半ごろ」といった）場所などを聞く。

白井コーチは，現場急行前，艇庫から110番連絡した。（既に選手からの第一報が入っていた）艇庫では代表幹事小池が，村松端艇部長，中川部長代理，前田監督などに連絡するほか，東大などの他校に応援を求めた。

モーターボートで急行した安藤らは，長谷川氏らが「これでワシらは帰っていいですネ」と去ったあと，まず現場近くのクイの根元をオール先で探り，ついで風下，東京都岸を同様に探って笹目橋まで下っていった。岸にいる学生はフロッグマンの手配を行った。

この間東大，日大らのモーターボートが来援。東大の1人は，ウェットスーツを着用し，水に入って探す。岸には警察官，空には新聞社のヘリコプター。戸田消防署の救急隊もモーターボートで現場に近寄る。

一橋モーターに救急隊員の一人を移乗させ，カギバリで現場付近から下流へ底をさらう。

フロッグマン手配などを正式に行うため，笹目橋上の捜索本部で朝霞署河井次長（当日は本部長）に依頼する。（15時30分ごろか）自衛隊も到着したが，全体を統括する本部は設置されていない。

結局，第1日は捜索用具が整わず，散発的な捜索に終った。警察，自衛隊などは，日没とともに作業を打切った。フロッグマンは習志野から日没後にやっと到着した。

本部にタキ火をたき，安藤，村井，白井，岩井が残ったが，暗く風が吹きつのるばかりで，捜索はできなかった。

3月2日

3時ごろ，風がなぎ，月明りがさしてきたので，艇庫に戻って人を若干集め，モーターボート2台で現場中心にすばりによる捜索を始めた。

朝，警察，自衛隊，学生などが集った。自衛隊の潜水夫，ヘリコプターも加わった。ここで，安藤が各参加者の責任者を集め，おおまかな打合せを行った。

現場中心に，下流をあたることにし，モーターボートは河の中央，ナックルフォアなどは両岸を捜るという分担であった。

フロッグマン（4人）は，この日現場中心に4回潜水。しかし，顔から30センチぐらいに自分の手をもってきてもはっきりしない，というほど水のニゴリがひどく成果はなかった。

モーターボート3台で現場近くを全速力で走って波を立て，遺体が浮上がるのを期待して，自衛隊ヘリコプターが上空から注視を行ったが，これも効果はなかった。

ヘリコプターは，荒川流域を東京湾口近くまでの下流と，秋が瀬橋近くの上流まで捜索した。

この日の作業の中心は，フロッグマンによる潜水捜索と，すばりを持ったモーターボートで現場近くの河流を繰返し横断したことであった。現場近くについては，ある程度河底の模様がつかめるぐらいにまでなった。

日没で作業は一旦中断した。

翌日以降の捜索計画も考慮し，徹夜で現場中心の捜索を続けることにした。自衛隊は天幕を貸してくれ，この中で残った学生，OBが捜索方法につき約30分話合った。3日目以降の捜索をより組織的に行うため，両岸にハタを立てて，捜索区域を区分することを決めた。

21時作業再開。モーターボート2台，各3人ずつ乗ることとし，6組，計学生，OB18人が，1時間交替で現場中心の捜索を行った。

3月3日

午前零時から暫時休憩。

当夜は月も出ず朝まで暗闇であった。

朝

前夜，荒川の釣師仲間が和船で捜索に参加してくれるとの連絡がある。これを現場近くに，その下流を自衛隊，学生，警察の順に分担することにし，各責任者と十分打合せを行った（区分は，両岸のハタで行った）。前日同様，現場を中心とし，捜索範囲を下流へ笹目橋まで広げて行くことになった。

フロッグマンは前日よりやや下流で潜水。

自衛隊ヘリコプターも前日同様，上，下流域を探索した。

11時30分ごろ，現場近くで河村の遺体が発見された。川端の遺体も現場をあまり動いていないとの判断で，全捜索員をふたたび現場重点に戻すこととし，昼食，休憩をはさんで，各捜索員の分担がえと捜索具の急造にかかった。

とくに，河村の発見が小さな釣バリ（ただし釣バリとしてはかなり大きい）を手漕ぎの和船で静かに引きながら，であったことから，同じ釣道具を買い求めた。

河村の遺体発見は，和船が数隻並んで，現場をジグザグに上下していた際であった。戸田市笹目の福田吉象氏が和船の櫓を漕ぎ，一橋大1年加藤が，用意の釣バリをたれていた。加藤は「初めガクッと引っかかり，外れたかと思っていたが，引いている感じがズッシリ重かった」「ドロはそれほどついておらず，ユニフォームはきれいだった。河床に，そのまま横たわっていたようだ」と語った。釣バリは遺体のトレーニングパンツの腰ゴムひもあたりにかかり，トレーニングパンツが足首までぬげそうになりながら上ってきた。

14時30分ごろ，同じく現場近くで川端の遺

体が発見された。これも河村をあげた吉象氏の弟福田七三氏の和船からおろした釣バリにかかった。一旦落したものを自衛隊員のいかり（先がとがっていない）に両足がからみついたようになって上ってきた。

両遺体は，捜索本部のある河岸にあげ，直ちにマイクロバスで艇庫に運んで，朝霞署の検屍を受けた。

最後

現場には，安藤，白井が残り，自衛隊員が全員去るのを待って17時ごろ艇庫に帰った。

2. 捜索参加者

(1) 警　察

朝霞警察署(所轄署)，埼玉県警機動隊，合せて約20人。

(2) 自　衛　隊

第一師団　三十一連隊（朝霞・自衛隊の中心となる）
第一空挺団（習志野・潜水隊）
第一飛行隊（宇都宮・ヘリコプター）
第一施設団（朝霞）
第一施設大隊（古河）

合計約100人（とくに最終日の3日には大部隊となる。）

(3) 消　　防

戸田消防署救急隊約10人（遭難当日）

(4) 下荒川睦会（荒川の釣仲間の同好会）

渡辺朝春会長ら9人（最終日）

(5) 戸田競艇警備隊（最終日午後）

約6人

(6) 大学関係

東大（連日，常時，対校選手も）

早稲田，日大，明治，法政，東京医科歯科大，東京経済大，慶応大など約50人

一橋大部員約60人，ＯＢ約20人

（文責　安藤　博＝昭和37年卒）

長谷川氏の談話

（遺体発見後の3月5日と8日両日，長谷川氏が話したことを安藤がまとめた）

遭難に出合ったのは，ともだちと三人で，荒川上流，秋が瀬橋の方へ釣船で行く途中だった。笹目橋を過ぎ上流のクイをよけるため，埼玉県側にフネを寄せたころ，前方に，川いっぱいにキラキラ光っているものが見えた。カヌーのスタート練習か，なんかかナ，これじゃ通るのに困るナ，そう思っているうち，光っているのはオールで，これにつかまって泳いでいることがわかった。これは大変だと急行した。川のまんなかに四人が見えた。突こんでいってフネでケガをさせちゃいかんと減速したところが，エンストした。あわてて，エンジンのヒモを引っ張ったがかからない。櫓をとって，四人の間にわって入っていった。と，そのとき二人が見えなくなった。一人は近づいていったわたしのフネの下に引込まれるように，スーッと沈んでいくのが見えた。残った二人のうち，一人はまだ頭をかなり高くあげて元気があった。もう一人はもう沈みかけていた，こっちだ，とこれを引きあげた。ついで元気な方をあげた。岸につけたところ，先に上ったものは，寒さのためか，みんなぼんやりしていた。助けた二人がこごえてはいけないから，シャツを脱がせて全身をこすれといいつけ，一人を乗せて，現場にもどった。投網を打ってみた。しかし櫓が使えて網が打てるのはオレしかいない。ともだちの一人がなんとか櫓を使ったが，風が強いためもあり，場所が定まらない。自分もそう網がうまいわけじゃないし，何回か打ってみたが，結局だめだ。そのうち，乗せてきた学生が口からアワを吹きだした。外トウを着せかけてやったが，これ以上やってもだめだ，と岸に戻った。フネからガソリンを運び，たき火をたいてやった。雪の後だから，なかなか燃えつかなかった。釣師仲間の一人

が土手に上ってみると，先に連絡に走ったはずの二人がトラックのところでぐったりなっているという。こりゃいかん，といっているところにトラックの持主が帰ってきた。同じ戸田の人だった。あの日釣に行ったのが不思議でならない。風が強いし，家族はふだんきつい仕事をしているのだから，日曜日ぐらいゆっくりしろ，と引きとめる。それでも，なんとしても行きたいと出かけた。事件の日から，沈んだ二人のことが頭に残ってなかなか夜寝つかれない。これじゃ好きな釣にも行けないし，どうしたもんかと思っているところに釣師仲間から電話だ，「同じ川で遊んだり，練習したりしているどおしだから，なんとかお手伝いしようじゃないか」「それは願ったりだ」というわけだった。あそこは危いところだ。わたしもクイで釣船のスクリューを折ったことがある。たいていのものが一度はやっているんだ。

三月二日慰霊祭挙行

昭和45年３月１日，荒川笹目橋上流にて，Jr. クルー（白虎）が遭難して，早10年の歳月が流れた。我々，一橋大学端艇部は，去る３月２日，事故でお亡くなりになった川端，河村両艇友の霊をお慰めするとともに，これからも我々が事故のない安全な練習を行うため



慰霊碑

に，慰霊祭及びレクチャーを開いた。

午前中は戸田オリンピックコース周辺に合宿する他大学の主将，舵手を招き，当時の監督であられた前田先輩とコーチの安藤先輩に安全に練習する為の講義をして頂いた。（その内容については後述する。）

又午後は，川端，河村両艇友の御遺族の方々や四神会の多くの先輩に出席して頂いた中，慰霊祭を行った。

笹目橋上流での対校クルー（２ハイ）による献花，力漕にさいしての舵手の言葉，

「両君，不帰の客となりてはや10年，一橋はブレドに遠征し，武運ますます隆盛なり。ここに川端・河村両君に，花と我々の力漕を捧げん！」

が，印象的であった。

向島艇庫の変貌

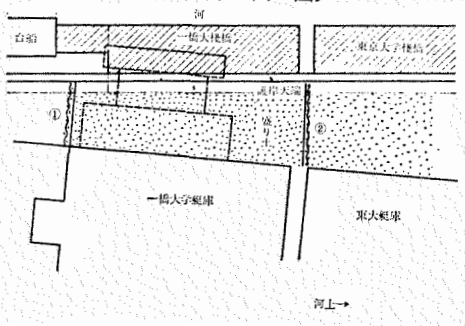
（昭和38.4.15 部報）

(1) 概容及び経過

約3年前の昭和35年頃から吾妻橋から鐘ケ淵にかけての隅田川左岸護岸工事が開始され，一橋大学向島艇庫前も37年8月末より着工したため向島艇庫は現在使用不能の状態にある。護岸は既設のものより約1.5m高く，比較的完備したもので一橋大学艇庫前方約12mの位置につくられる。将来の桟橋は取払われ東京都により新らたなものが，その見返りとして作られることになっている。しかしながら，水面使用の許可が護岸より5.5m迄しかおりず，従来の桟橋のような艇の出し入れに非常に能率的なものは期待出来なくなった。5.5mの水面許可も当初において認められず，大学側の再三再四の申請によりやっと認められたもので，これ以上水面使用面積を広げる事は求め得ない。従って，この範囲内で艇の出入れに最も安全で能率的なものを作ることになり，ボート部からの種々の要求を考慮した下述のものに決定した。

(2) 桟橋及び堤の位置

図Ⅰ（平 面 図）



A．破線の部分が旧桟橋及び台船

B．斜線の部分が新桟橋

C．点々の部分が盛り土して護岸天端より艇庫に向けてスロープになる。

D．堤及び桟橋を使えば大体17mあるから艇は廻して位置の転換が出来る。

(3) 桟橋の説明

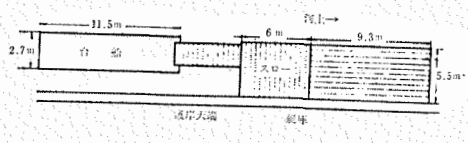
A．河上から艇をつける場合にはストロークサイドのオールがひっかかり，つけにくい（図Ⅱ参照）

B．従来の桟橋より約2m高く前方が5.5mしかないので艇を廻して出し入れする場合に足をふみはずして落ちる危険がある。

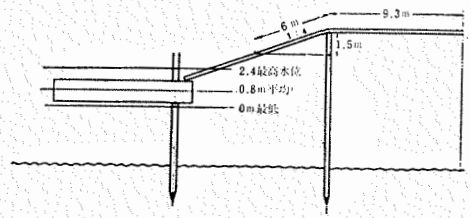
C．桟橋は一橋，東大同じもので境界線を中心に左右に対称になる。

D．桟橋は新設されるけれども台船は従来の旧い台船を使う。工事中破損した部分があるがこれは修善するよう要求している。

図Ⅱ（桟橋平面図）

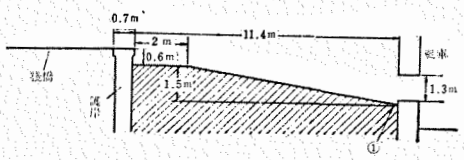


図Ⅲ（桟橋断面図）



(4) 堤の説明

図Ⅳ（堤 断 面 図）



(イ) スロープの説明

A，盛り土をして艇庫の艇出入口から護岸にかけてのスロープをゆるやかにする。

B 護岸より2mは防災上人が通れる様平らにしておかねばならない故，これ以上スロ

ープをゆるやかにすることは出来ない。

C．堤は本年の工事（38年3月31日）では盛り土のままの状態にしておいて，盛り土及び地盤（河を埋めたてしたため）が固ってからコンクリートで“のりばり”をする。盛り土及び地盤が固るのに7～8カ月かかり，あまり早期に“のりばり”をすると堤が沈下してコンクリートにひびが入ったりする危険があるからして“のりばり”は38年度の末になる予定。

D．コンクリートの“のりばり”が出来るまで，滑止めとして何かを敷く事を考えている。（学校の玄関にある古い泥よけの払下げ，等）

(ロ) スロープの排水

堤の雨水は“のりばり„の出来る迄は図Ⅳの①の部分をコンクリートの端より5㎝低くして盛り土をし傾斜をつけて野球場及び東大の上に排水出来るようにする。“のりばり”が完成すれば排水溝をつけて排水管に流し込み完全な排水が出来るようになる。

(5) 柵についての説明

図Ⅰの①②の部分に通行止の柵を設けなければ非常に不用心となるが，この部分は一橋大学の敷地ではなく又護岸の天端70㎝と平らな部分2ｍとは防災通路として永続的に遮断する事は出来ず，移動式の柵程度のものしか設置する事ができない。しかもこの柵は大学側は作る事は出来ない。作るとなると端艇部の自費で作るようにとの事であった。

(6) 全排水について（図Ⅴ参照）

下水管の配管をどのようにするかは未決定であるが図Ⅳのマンホールに下水管を導いて言問団子の方の本管に流し込むという基本線は決定している。

(7) 工事の所属及び工事着工，完成の時期

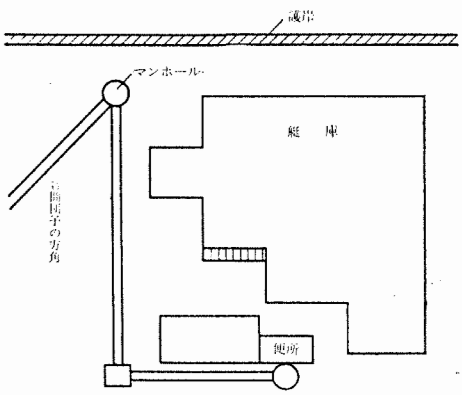
東京都建設局→江東治水事務所→第六工区→勝村建設

A．勝村建設が護岸工事，Ⅰ（盛り土），桟橋，コンクリート(のりばり)，排水，一式を請負っている。

B．護岸工事，堤(盛り土)，桟橋工事は38年3月31日完成予定。

C．コンクリート工事は(4)の堤の説明のところで説明したので省略。

図Ⅴ（排　　水）

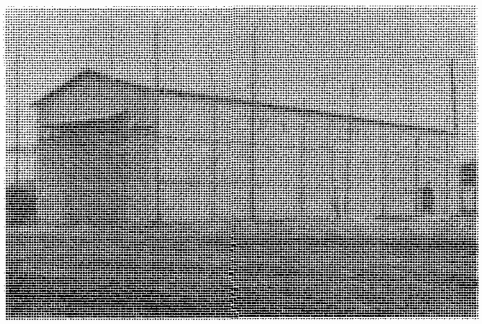


(8) そ　の　他

A．護岸工事が完成すれば従来のように満潮時になると河の水が逆流して艇庫内に水がたまったり又マンホールから河水が海き出て一面水浸しになるようなことはなくなる。

B．艇庫敷地が低いためグランドの雨水が敷地内に流れ込んでこないよう配慮する。

完成近し、戸田納艇庫



戸田仮艇庫

〔昭和38年〕

此度端艇部の長年の念願でありました戸田艇格納庫を小規模ながら建設することになり，それにつきまして以下説明致します。尚工事は浅沼英二氏の御好意によりまして朝日機材に請負っていただくことになりました。

(1) 外形及び配置

(2) 仮艇庫概説

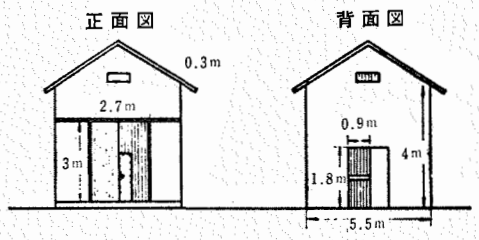
A．坪数　3間×11間　33坪

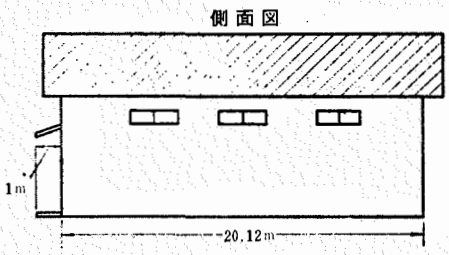
B．工費　見積額　125万円

C．工事請負会社　朝日機材株式会社

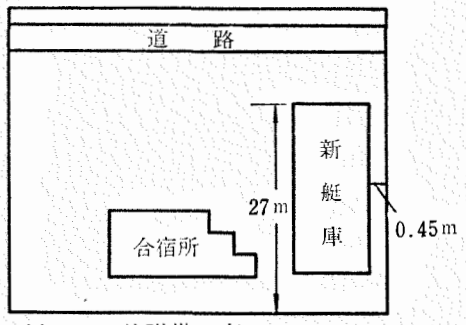
D．建築材料　骨組……軽量鉄骨　外壁及び屋根……中波スレート　床……コンクリート

仮艇庫構造





配置図



(3) その他附帯工事

A．電気　投光器2ケ（300W）　蛍光灯2―400W）4ケ

B．水道　平面図に示す位置に蛇口を取付ける。

C．排水　弁を掘って底に10cmぐらい砂利を敷き吸込ませるようにする。

戸田艇庫について（昭和38. 12. 20）

来年10月の東京オリンピックまでに，是非とも戸田に一橋ボートの根拠地になるような，ちゃんとした艇庫を建設したいという，先輩学生を通じての熱烈な願いをこめて，昨年から準備がすすめられていた戸田艇庫の基本設計がようやく完了した。

四神会の中に設けられた戸田艇庫建設準備委員会は，昭和38年4月発足，同6月から名古屋工業大学内藤昌教授の研究室が作製した，基本設計についてくりかえして会合討論しその結果をもりこんだ8回目の基本設計を，最終的なものとして決定した。新艇庫の基本的構想を略記しておく。如水会・四神会の特別の御配慮を煩わしつつある。大方の御援助によって，一日も早く戸田の艇庫が出来ますよう，何卒よろしく願上げます。

設計概要

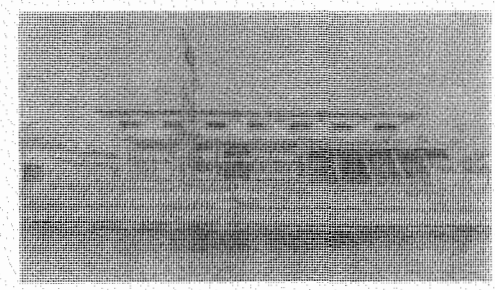
① 基本的事項についての説明

a．総工費　約3,000万円　c．建坪　122坪

b．建築様式　d．延坪　312坪

カーテンウォール式鉄骨造り

② スケッチ写真



③ 平 面 図

○主要部分説明

1. 対校選手室

対校選手室は18名用（ジュニアー選手はH．C．S選手室を使用する）として上床式にする。室内に濡れた練習衣及びよごれた衣類等をつるすという悪習を一掃するようロッカー室を選手室とは別に設けた。

2. H．C．S室

室は向島艇庫と比較した場合いささか狭いようではあるが向島の場合，土足脱場，下駄箱等によりかなりの面積をとられ実際に選手の寝るスペースはほぼ同一である。

3. 食堂及びロビー

食堂とロビーはカーテンウオールにより仕切り随時開閉することにより弾力的に使用可能である。

4. 学 習 室

選手が十分勉強出来るよう収容人員12～14名程度の学習室を設けた。

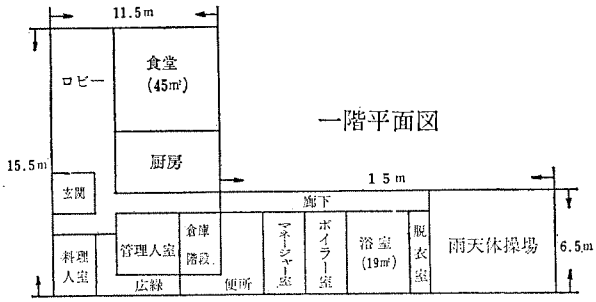
5. 便 所

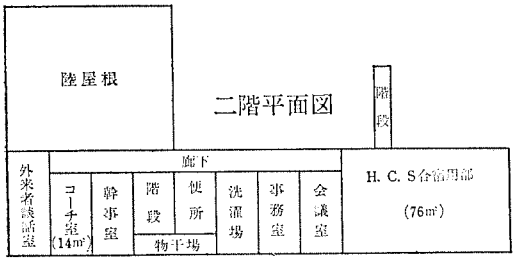
1階 大3 小4

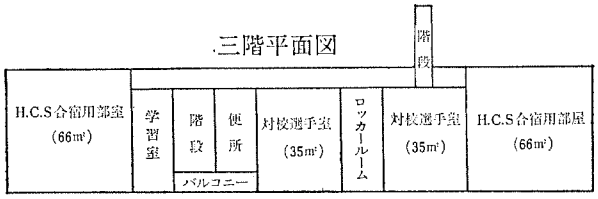
土足用 大1 小1

2階 大2 小5

3階 大3 小5







④ 各パート面積

一階	㎡	坪	二階	㎡	坪	三階	㎡	坪
食堂	45.9	13.8	H．C．S．室	76.5	23.0	H．C．S．室	66.0	19.8
ロビー	30.0	9.0	会議室	14.1	4.2	H．C．S．室	66.0	19.8
厨房	27.0	8.1	事務室	14.1	4.2	対校選手室	35.6	10.7
玄関	10.7	3.1	洗濯場	14.1	4.2	対校選手室	35.6	10.7
管理人及び料理人室	42.3	12.7	便所及び洗面所	10.0	3.0	ロッカー室	14.1	4.2
			物干場	8.3	2.5	階段	14.5	4.4
浴室	19.1	5.7	階段	10.0	3.0	バルコニー	8.3	2.5
脱衣室	9.1	2.7	幹事室	14.1	4.2	学習室	18.6	5.6
便所及び洗面所	18.2	5.4	コーチ室	14.1	4.2	廊下	33.1	9.9
ボイラー室	14.1	4.2				便所及び洗面所	14.5	4.4
倉庫	10.0	3.0	外来者用（先輩教職員等用）（談話室兼更衣室）	18.0	5.4			
（含一部階段）	(2.7)	(0.8)						
廊下	29.8	9.1	廊下	27.1	8.1			
マネジャー室	14.1	4.2						
計	270.3	81.0	計	220.4	66.0	計	306.3	92.0
総計			797㎡		239坪			

〔註〕 前掲表以外にベランダ（面積33.2坪）雨天体操場，展望台をつくる。

〔参考〕 向島部屋面積

a．食堂 16.5坪 b．三階対校合宿室26坪（畳41） c．H．C．S合宿室 22.5坪（畳34）25坪（畳43）24坪（畳44）

一橋大学戸田艇庫建設資金募集御協力御願に係る件

（昭和39．4．1）

一橋大学端艇部は，橋人皆漕を実現し，ボートによる錬成を盛んにして，社会有為の人材を育成し，以って我国漕艇界に覇を唱え，指導的役割を果たして参りました。そして，戦後久しきに亘り，本拠地向島の諸環境悪化により，新たな本拠地の建設が待望せられ，大学当局は，相模湖に全学レクレーションを主体とする施設を向島の代替施設として建設する事，これと別途に練習，競漕を主目的とする艇庫を戸田に建設する事となり，一橋大学端艇部，如水会，及び四神会三者が協同して，之が計画を推進することになりました。

戸田に相当規模の艇庫を建設する事は，我々が，久しく待望して来た事であり，東京オリンピックをひかえ一日も早く建設することが必要であります。即ち，向島艇庫が練習，競漕のための施設としての機能を全く失うに至り，一橋ボートの本拠地として不適当となり，我国漕艇界に占める戸田の比重が近年特に急速に高まり，更に東京オリンピック会場としてコースが拡幅整備されて練習，競漕場として極めて完備され，将来，ほとんど我国漕艇界の中心地となって行く事，東京オリンピック施設建設計画の一環として建設する事が有意義であると同時に，建設契機としても適当と考えられる事，等であります。

建設計画作成に当たりましては，

1. 対校選手の合宿練習，及対外競漕出漕の本拠地として充分である事
2. H・C・S・選手の合宿練習，大会開催にほぼ充分である事
3. 部員，一般学生の通い練習にも適当，可能なる事
4. 教職員，先輩の来庫，練習，会合も可能なる事
5. 東京オリンピック始め，各種大会の開催に当たり，相当多数の観客，出漕者を適宜収容可能なる事
6. 長期の使用に耐え得る事

を基本方針とし，先輩，学生委員による充分の研究，討議と，名古屋工大内藤助教授の高度の設計技術と熱意ある御指導により，充分の経済性を持つと共に適度の性能，外観を備えたものと致しました。その詳細は既報の通りであります。

この建設資金総予算（45,000千円）の調達に当たりましては，大学当局の御尽力により，その一部を国家予算（約10,000千円）に拠る事となり，法人よりの募金（約25,000千円）については如水会の絶大なる御支援により既に募金活動に入って居ります。そこで如水会員各位の「個人募金」につきましては四神会が中心となって之を推進することとなりました。その目標は10,000千円であります。

本施設は，申す迄もなく一橋大学に所属し，その建設は当然国費を以って賄われる可きものとも考えられますが，文部省当局においても，設備不充分の大学を多数管理している状況に鑑みまして，本施設にのみ充分の金額を期待する事は全く不可能でありまして，本予算措置は，相当の御理解に基づくものであります。

さて，個人募金の目標額は多額に上り，前途は多難と思われますが，本計画が，一橋ボート百年の計を為すとも言う可き稀有の大事業であり，我々が何としても為し遂げなければならない課題であると確信致します。又，一橋のボートに対する理解者の数多きことを考えますと，決して不可能な事ではなく，一にかかって我々の努力如何によるものと考えられます。又数年期より，この事あるを予想し，四神会拡充運動を推進し，経常財政の安定を達成し，臨時募金を一切行わずに之に備

えて参りました経緯があり，今後共，この様な建設資金以外には臨時募金は行わない方針を持って居りますので，何卒本募金を成功させ得る様，格段の御尽力を御願い申し上げます。

四神会は，個人からの募金活動を致しますので御了知の上各位は積極的な御協力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和39年４月１日

四神会理事長　伊藤　治雄

一橋大学戸田艇庫建設資金募金中間報告

募金会事務局

頭書個人募金につきましては，全国各地，海外如水会員の皆様から御申込を賜わりました事，厚く御礼申上げます。

1.　７月25日現在申込，入金状況（個人）

卒業年度	申込数 通	目標額 千円	申込額 千円	入金額 千円	達成率 %
明治大正年代	159	7,000	1,007	574	14.4
昭２学大13門〜昭10学昭７門	125	5,300	956.5	679.5	18.0
昭11学昭８門〜昭15学昭12門	67	2,690	358	212	13.3
昭16前学昭13門〜昭20学昭17門	118	2,390	562.908	349.208	23.6
昭21学昭18門〜昭28学昭29門	67	2,180	225.7	193.7	10.4
昭28新〜昭39新	207	1,750	788	367	45.0
客員	1		3	3	
団体	1		10	10	
総計	745	21,310	3,911.108	2,388.408	18.4

2.　年次責任者募金促進打合せ会の件

募金申込実績は６月25日現在，目標に対し13%強の2,868,608円に過ぎず，１千万円達成が危ぶまれる状況なので，６月18日及び22日の両日にわたり，募金促進打合せ会を開催致しました（出席者30名）。年次責任者はボート部出身者を中心に次の点に御留意の上，勧誘と促進に努めていただくようよろしくお願い致します。

㈠　今回の募金の目的に鑑み，ボート部出身者の方に対しては年度別目標額を基準にし，漏れなく申込みいただくこと。

㈡　クラス会等会合する際は，極力之を活用して，「一般如水会員」にも勧誘に努める。

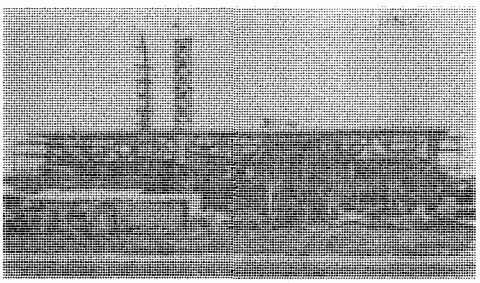
㈢　会社別に如水会員にあたり，勧誘に努める。

㈣　地方在住のボート部出身者は，地方如水会支部に趣意書等発送してありますから，極力勧誘に努める。

㈤　小グループの年次責任者会議を頻繁に開いて促進していただきたい。

㈥　如水会館で納金する場合，如水会庶務課の木村さんまで。

㈦　東京地区の年次責任者は，学生が如水会館別館（電話262局0111）に待機していますから，申込，納金の手続等必要に応じて之を活用していただきたい。



昭和39.9.12　竣工間近い戸田艇庫

上の戸田艇庫の写真は，８月18日に写したものです。ほぼ全体の輪郭が認めうる程に工事は進んでおります。恐らくこの部報が皆様の手に渡る頃には，この一橋大学戸田艇庫は無事竣工して，その勇姿を戸田のコースに現わしているでありましょう。戸田艇庫建設に関しまして御支援，御後援いただきました皆様に改めて御礼申し上げます。

さて今年も数々のレースが行われ，我が端艇部はその戦績振わず，残る全日本エイト選手権に全力を傾け，対校選手は8月20日より合宿練習に入ります。現在向島においては夏季強化合宿が行われており，一年生が猛練習に励んでおります。今回は上智大学経済学部助教授の中村宏先輩から，原稿用紙30数枚に亘る「一つの敗因」と題する原稿を得ました。学生は勿論，諸先輩の皆様も中村氏の言わんとする処をよくお考えいただき，批判検討していただきたい。

次号部報の発行は12月の予定です。新幹事諸兄の下，もっと内容の豊富なよりよい部報にしてほしいと思います。部報に関してこの一年間何かとお世話いただいた大方の皆様に厚く御礼申し上げます。　　（穂積記）

向島艇庫惜別式　昭和42.11.18

四神会員　100名以上

端艇部員　50名近く

友艇オールのファイヤー

全一橋人の心のふるさととして60年余の星霜を刻む向島艇庫は高速道路6号線建設の為遂に取りこわされる運命に至り惜別式が11月18日（土）午後2時半より向島艇庫で行われた。

当日はあいにくの曇空で肌寒い天気にも拘わらず，増田学長，南郷大先輩を始めとして，東大，早大，慶大，明大O・B，母校O・B，学生など約200名が続々とつめかけ，壁の落書きを見たり，ほとんど窓ガラスのなくなった塔に上って隅田川を見渡したりして，皆若き日の思い出が刻みこまれている艇庫と別れを惜しんだ。折りしも艇庫からはナックルフォア数杯が出され，先輩，学生が一緒に漕ぎ納めを行った。初めは桟上から眺めていた老先輩連も遂にたまりかねて，急拠学生から運動着を借りたり，又運動着がなくて下着姿のままで船に乗り，汚ない水しぶきに喚声をあげ涙を流した。船が全部揚がるのを待って，4時から惜別の式典がしめやかに執り行われた。神主の祝詞，学長，部長挨拶の後，長年端艇部の為尽した地元商店主へ感謝状が贈られた。米屋，八百屋，風呂屋，床屋のオヤジさんなど慣れぬ席にしばしとまどっていたが皆からの盛んな拍手に顔をほころばせ，いかにも嬉しそうな反面，もうこれで艇庫もなくなるのかと，本当に残念そうだった。

式が終るとすぐ懇親会が催されたが，一つの部屋には入りきれないので戦前，戦後と二つの部屋に分かれてビールを飲みながら向島の思い出を語りあった。ボートの歌がとび出すと各部屋共負けじと蛮声を張り上げた。やがて下の庭に火がともされると会はいよいよ佳境に入り先輩も学生も一緒になり火を取り囲んでファイアストーム，すっかり暗くなった墨堤に火はあかあかと燃え，乾杯の叫び，ボートの歌などがあたり一面にこだました。こうして向島最後の夜は終りを告げた。

さて向島艇庫取壊しに伴い相模湖に新艇庫を建設することになり土地の買収も済み今年秋には着工することになりました。

宝山沖慰霊碑，戸田安全祈願碑できる

宝山沖慰霊碑の除幕式に

明治40年12月，朱雀号の遭難は一橋端艇部にとって，また一橋大学にとって，永く忘れられぬ痛恨事でありました。

有為の才をもちまた大志をいだいていた青年を思わざる暴風のために一瞬にして失ったことはかえすがえすも無念であります。

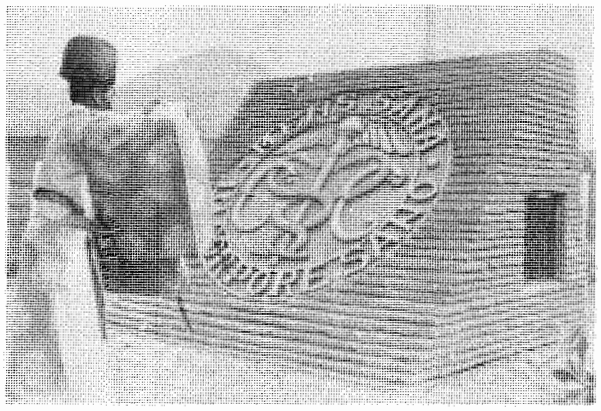
70年後の今日もなおわれわれの哀惜の念はかわることなく，ここに慰霊碑が建立され，菩提を弔うこととなりました。

本日は公務のため参会できませんが，一橋大学を代表して，心より御冥福を祈るものであります。

また，遭難以来柳川家はじめ地元の各位の御芳情に厚く感謝するものであります。

昭和51年10月23日

一橋大学長　小泉　　明



向島艇庫モニュメント相模湖合宿所に安置さる！　　(昭和54. 4. 1)

碑　　文

このマーキュリー章は，もと本学向島艇庫の楼上にあって，橋人の漕艇活動を見守ってきたものである。

関東大震災により烏有と帰した向島艇庫は，昭和５年に再建されたが，本学の国立移転に伴い，橋人皆漕を旨とする端艇部は，新たな水を求め続け，遂に当地に仮艇庫を建設した。時に昭和35年，四神会先輩の尽力により相模湖移転の道が開かれたのである。

おりしも，墨堤の環境悪化と首都高速道路の建設により，向島艇庫は接収され，代って本合宿所設立の運びとなり，昭和46年その竣工を見た。顧みれば東洋一の偉容をたたえられた向島艇庫において，本学端艇部は回にわたり全日本優勝を成し遂げている。

ここに一橋生の元気の象徴として，本校章を安置する次第である。

昭和54年４月１日

一橋大学学長　蓼沼　謙一

祝　詞（のりと）

実刺(さねさし）相模国　茜(あかね）さす津久井郡　美わしき名も藤野町　周りの山山の影を写す相模湖に近きこの処に　深山（みやま）の榊葉(さかきは）を神離(しもろぎ）と挿し当て招奉（ませまつ）り斉（いわ）い奉（まつ）る　かけまくも畏き産土大神（うぶすなのおおかみ）水波能売神(みずはのめのかみ）の御前に　かしこみ　かしこみ白（もう）さく　さてもこの世の将来を担う若者等が　学びの道をきわめ身体を鍛うる技さまざまあるがうちに　この相模湖に艇（ふね）を浮べ力をあわせて漕ぎ競う姿　いとも雄々しく頼もしく見ゆるなり，ここに一橋大学にては，東なる花の隅田の川に東洋一と称えられし向島艇庫を根拠となし橋人皆漕を旨となす端艇部は風音も遠き大正の震災にも負けず　７度の多きにわたり全日本の優勝をなすなど漕艇の技に励みてありしが学舎の移転　あるいは墨堤の様子も変わり新しき高速道路の開かれるなど　かれこれをもって　四神会も力を添え　昭和35年この地に仮艇庫を設け　くだりて46年　かく合宿所を建設して今に至りし　この広庭にもと向島艇庫の楼上より　橋人の漕艇活動を見守りきたりし　マーキュリー章を移し　その大いなる精神を世にあらわさんと　さきつころより工事を起し　今しも厳しく美わしく建ておえて　諸神等にこの由を告げ奉り　さらに漕艇の安全をも乞い祷（いの）り奉らんと神食（みけ）神酒（みき）を捧げ奉り　一橋大学教職員　学生　先輩　関係者一同　御前に集い　玉串を採々（とりどり）仕え奉る状態（さま）を　たいらけく　やすらけく諾（うべな）い　きこし召したまい　このマーキュリー章に奇しき妙なる大神威（おおみいつ）を寄せさせたまい　仰ぎみる諸人等に誠の心を奮いおこさせたまい　如何なる雨風地震に

もゆるぐことなく　かわることなく　また水に浮かみ　艇漕ぐ若者等に　手の禍（わざわい）足の躓（つまずき）あらしめたまわず　互いに技を競いあい　明日への力を養いて　学びの道にいそしみ　正しき　美わしき誠の人となり　世のためにつくさしめたまい　この一橋大学の名を称や益々に挙げしめたまえと　かしこみかしこみ神職厳鉾（かむつかさいかしほこ）の仲就（なかとり）持ちて乞い祷り奉らんともうす

（おことわり）

この祝詞は与瀬神社の宮司柏木昭治殿にお願いをし，この部報に掲載することを特におゆるしをいただいたものです。読み易くするため，使用漢字，かなづかいに編集者が勝手に手を加えてありますことでご了承ください。

よみがえったマーキュリー

昭16後　中村　達夫

昭和42年11月18日，100名を越す四神会員と50名に近い端艇部員学生が向島艇庫に参集した。この艇庫に永久の別れを告げる惜別式を挙行するためであった。

昭和5年に建設されて以来，東洋一の威容を誇り，幾多の名漕手をはぐくみ，7回にわたる全日本制覇のよろこびをみつめてくれた向島艇庫は，この日をもって永遠の眠りに入り，翌年5月に取りこわされたのである。

わが向島艇庫を眺めるのに一番良い場所は言問橋の上であった。言問から上流に向って，やや向島側に湾曲している隅田川は，堤上に美しい桜並木がつながり，その突き当たりに艇庫が巨体を据えていた。そして4階建ての塔屋に丸い紋章がはっきりと見え，この建物全体のアクセントとして見事な効果を発揮していた。

一橋の学生は入学するとすぐに春のクラスチャンを漕ぐためにこの艇庫を訪れる。チャンに選ばれない連中でも応援には必ず来る。そしてこの艇庫の大きさにびっくりし，このマーキュリーの紋章の美しさに見とれる。さらにMENSS SANA IN CORPORE SANOという21文字が，ラテン語で『健全なる精神は健全なる肉体に宿る』という意味のことばであるということを教えられる。隅田川に数ある諸大学艇庫の中で，ひときわめだって立派なこの艇庫に入るとき，いつも我々はこのマーキュリー章を仰ぎ，一橋のボートメンとしての誇りをいだき，MENS SANAのラテン語を口の中で復唱するのである。

惜別式の当日，古い艇やオールを大々的に燃やしたファイヤーの光りに輝くこのマーキュリー章を向島艇庫のモニュメントとして，相模湖畔に建設を予定される新しい艇庫合宿所に移設することを我々は申し合わせた。

このマーキュリー章が向島艇庫塔屋から取り外され，戸田艇庫わきに置かれてから何と10年もの歳月が経ってしまった。この間にはいろいろな事情もあったがこんなに遅れた最大の理由は，『相模湖艇庫合宿所は向島艇庫の機能補償として建設されたものであり，向島艇庫の代替建物である。従って向島艇庫のモニュメントであるマーキュリー章は当然に相模に設置さるべきであり，当時の学校当局との間の固い約束ごとである。』という原則論と，『相模湖は休日における湖面混雑や，上流水面の使用制限のため練習上に支障があり，端艇部選手の合宿練習は年間数日に過ぎない。光輝ある向島艇庫のシンボルであるマーキュリー章は一橋ボートメンの日常の活動の場である戸田艇庫に設置すべきである。相模にはレプリカと由来書の掲示をすれば良い。』という現実論の意見相異である。

四神会幹部会では，向島モニュメント設置の件が提起されるたびにこれ等論議が繰り返えされた。最終的に決定的な要素となったのは，相模湖艇庫合宿所の活用についての若い

世代の諸君の積極的な情熱と，戸田艇庫にはこのマーキュリー章を設置することについて艇庫の構造上にも，また周囲の景観上にも満足すべき最適な案が見当たらないということであった。

何れにしろ昭和53年暮に原案通り意見の一致を見，今回相模湖艇庫に立派な台座の上に生き生きとよみがえった。学長，学生部長，端艇部長及び学校事務当局の皆様のご理解，ご支援に心から感謝したい。最早このシンボルを粗末にしているからレースに勝てないのだという先輩の繰りごとは通用しないことになった。永年の懸案が解決しての除幕式当日に飲んだビールは，暑さのせいもあってか一きわうまかった。一橋ボートにとこしえに栄光あれ。

大転換成る

端艇部長　中川　　学

昭和54年，1979年は，一橋ボートにとって大転換の年であった。これよりさき，宝山の慰霊碑，戸田の安全碑をまつり，負の伝経への逆転の祈念を重ねてきたのであるが，その仕上げとして，よき伝統の積極的な新展開への念願をこめ，向島から相模湖へ，マーキュリー章の遷座を実現することができた。

明治以来のＯＢの希望にこたえ，蓼沼学長と勝田学生部長の絶大な推進力のもと，堀川富太郎社長の住友建設の手で，あの校章が，清らかな藤野の丘高く安置された。東のかた相模湖に面し，はるかに隅田川を望むかのごとく，昇る朝日を照りかえすマーキュリー章こそ，わがボート部の伝統と理想のシンボルに他ならない。

ひるがえって，戸田艇庫においては，発祥の道場であった四神会木造合宿所が，積年のつとめを果たして朽ちるがごとくに姿を消した。その貢献を記念して，大学当局はトレーニング・ルームの新設とシェル・エイトの新造に着手している。５月末の恒例の水上運動会の充実とあいまって，大学の新たな環境のなかに端艇部の位置づけが確立したと言ってよい。

一橋の元気の全学的象徴であるボートのルネッサンスは，昨夏，そのピークを迎えた。四神会会員と部員すべての励ましにこたえ，対校エイトの選手諸君は，遠来のハーバード大学クルーに食いさがり，ついに軽量級世界選手権への日本代表となった。その派遣のために，卒業生と母校関係者が総力をあげて募金につとめ，またたく間に２千万円をこえる巨額の支援を実現されたことは，橋人の熱情と実力の程を物語る。その声援の熱烈さは一橋出身初の大平宰相誕生を祝福した時に優るとも劣らぬものであった。実に有難いことである。

こうしてユーゴスラビアへの壮途につき，ブレドにおける世界選手権に臨んだ一橋クルーの死斗ぶりについては，別に刊行の報告書に記録されている通りであるが，この空前の体験をもとに，早くも，部員の自主的な研究心が高まり，練習における小艇活用のためのスカル新造や合理的な陸上訓練法の導入などの動きがみられる。高橋泰和監督はじめコーチ陣の指導よろしきを得たことを慶び，一層の気合に期するところ大である。

指導陣の頂点は，四神会会長の畑弘平大先輩であるが，このたび，名誉会長となられ，伊藤治雄会長が新たに就任された。副会長の中川英造・曽禰冬来両先輩は顧問に，理事長の丸山泰男先輩と中村達夫・岡村俊夫両先輩が副会長になられ，新理事長には三堀正太郎先輩を迎え，役員の若返りが敢行された。この機会に，新旧役員各位への感謝の念を新たにしたい。なによりの恩返しは，部員みんなが常に元気で，善戦全勝すること，なかんずく来るべき対東大戦に完勝することである。そして，ベルギーに予定される1980年の軽量

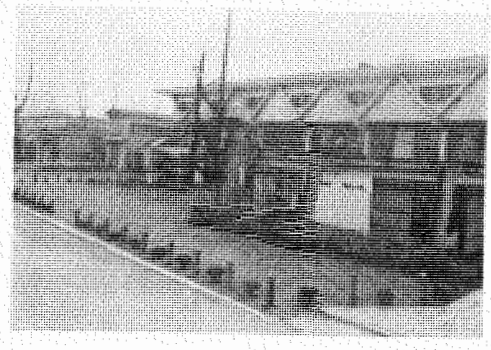
級世界選手権に連続出場し，こんどこそ入賞を目ざそう。

昭和55年，1980年は，増大した部員の斗魂を一つに合わせて，破竹の進撃の年にしようではないか。

戸田艇庫緑化計画について

加藤　博

宝山沖遭難慰霊碑建立計画とならんで，戸田艇庫安全碑建立計画が進められていることは，現役諸君もよく知っていることと思います。その趣旨は，亡くなられた艇友の霊を慰めるとともに，今後の一橋端艇部の安全と発展を祈願するというものです。しかし，この計画には，安全碑建立以外に，食堂前の敷地に芝生を植え戸田艇庫の緑化を計るというもう一つの大きな目的がありました。我々は現役時代より，戸田艇庫周辺が殺伐としており，緑が少ないのを残念に思い，ボートコースの対岸にある早稲田大学の芝生を羨ましいと思っておりました。こうした思いは時々しか戸田艇庫を訪れなくなった今になっても変りなく我々の心にありました。そうしたとき，安全碑建立計画がもち上がり，この企画の一環にぜひ緑化計画を加え，長年の願いを実現したいと思ったわけです。工事はすでに7月末に着工され，8月末のインターカレッジまでには，芝生も何とか見られるようにな



るのではないかと思っています。ついては，現役諸君にお願いがあります。そのお願いとはほかでもない，芝生を大事に育て，有意義に活用していただきたいということです。先輩のなかには，芝生を植えるのはよいが，すぐに枯らしてしまうのではないかという危惧の念をお持ちの方もおられます。ぜひ，そのようなことがないようお願いいたします。とにかく，この芝生を植える計画は，戸田艇庫緑化計画の先駆けにすぎません。相模湖艇庫があるとはいえ，やはり，端艇部の活動の中心は戸田艇庫です。この機会に，現役諸君が進んで戸田艇庫を住みよい場所にするよう，さらに一層の努力をすることを期待します。

なお，この計画において，住友建設の堀川富太郎先輩（昭14年卒）には何から何まで御世話になりました。現役諸君もそのことを心に留めておいて下さい。

端艇部財政危機の克服と戸田，相模湖諸施設の整備

（まえがき）

昭和30年以降，昭和31年の戸田木造合宿所の建設，昭和34年以降の財政危機の克服，昭和36年の相模湖基地用地の取得，昭和39年の戸田本艇庫・合宿所の建設，昭和47年相模湖艇庫合宿所の建設と，わが端艇部及び四神会は，次々と生起してきたこれらの諸難問にとり組み，これを見事に解決して行った。この10年に及ぶ困難な時期に，数多くのボート関係者は懸命な努力を続けてきた。とくに当時の端艇部長故村松祐次教授（昭８学卒）及びその指導のもとに協力した寺本隆一君（昭32学卒）及びとくに相模湖艇庫について昭和36年度代表幹事森下一乗君（昭37法卒）の献身的な尽力は，わが一橋端艇部史上，特筆大書せらるべきものであったということができよう。以下掲載する資料は，とくに寺本君に依頼して，当時の事情及び経緯につき，執筆して貰ったものである。ただ紙幅の制約があるため，その全文を掲載することができなかった。また相模湖艇庫合宿所建設の詳細な経緯は他日を期すこととなった。しかし，その貴重な記録は，将来作製されるべき端艇部の戦後通史の重要な資料であり，また大切に保存されるべきものであることはいうまでもない。（丸山記）

（その１） 戸田木造合宿所建設（抄）

昭和20年代末から同30年代前半は一橋のボートの運営管理面の諸活動の各方面において旺盛且活発な動きが展開され，多くの成果を挙げた時代と言えよう。

端艇部勢盛んで，部員数多く，幅広い活動を可能にし，如水会，四神会の後援が力強く，大学当局の理解配慮も厚く，一般学生層への浸透とその支持も相当に得ていたと言える。

村松端艇部長の指導が行届き，各方面に陣頭指揮をとられ一橋のボートを隆盛に導かれると共に，戸田艇庫建設，相模湖艇庫建設の両大事業を達成される等，多大の成果を挙げられた。

先生の指導理念はボートを人間育成と教育の場とする一方，一橋学園の中における多くの人々の参加と支持を得た全学的な「一橋のボート」を確立し，その中心に端艇部を据えて育成するということであり，強固な信念の下，運営，管理面の諸問題についても，実務的な面に到る迄中心的役割をご担当になり，奮迅の活躍をされた。

端艇部バックメンも多くの人材を擁し，精力的な活動により，相当の成果を収めたと言えよう。

以下，この時期における運営管理と施設・財政面における特記事項を概説する。

戸田木造合宿所建設

1. 資金調達構想と準備活動

戸田合宿所建設計画は昭和30年秋に急速に具体化して行ったが，四神会費納入の拡充，特別寄附募集（「新艇モーターボート募金」）等募金活動を既に盛んに行った後未だ余り時間的経過を経ておらず，四神会において，重ねて大規模な特別募金を行うことは出来ない状況下にあった。

このような状況下での資金調達計画の目度は容易に立ち得ず，四神会四者会の協議は数回に亘り，延々と続けられながら，解決の糸口を見出し得ず，極めて悲観的な空気がただよい始めていた。

2. 如水会の援助と近藤先輩の篤志

このようなとき，如水会の特段の配慮による援助と近藤荒樹氏（大２本卒）の篤志による特別寄附の意向が伝えられ，計画は一気に具体化することとなった。

如水会の援助は如水会報新年号の賀詞交換紙面を２年間に限り，ボート部のために提供しその広告収入を合宿所建設資金に充てて良いというものであり，一方近藤先輩の篤志の御寄附を相当多額のものをご検討頂いているというものであった。

直ちに四神会の臨時総会が開かれ，これ等ご支援を謝意をもってお受けすることに決し，具体的活動に入った。

なお，ここに到る迄の如水会関係への説明，折衝等においては，宮沢文雄先輩（昭２学卒，大13，14，15対校選手）が積極的な活動をされ，又，如水会書記長前島秀博氏の理解と支援によるところが多かった。

3.　如水会報，賀詞交換広告募集活動

如水会賀詞交換広告については如水会は必要な紙面提供は行なうが，広告申込みの募集事務はすべて端艇部四神会が行なうこととなり，端艇部幹事学生がこれを担当した。

如水会並に四神会の先輩を訪問して協賛を頂く仕事で相当に時間と労力を要する仕事であり，実施が決まってから完了迄１か月弱という押しつまった日程の中で消化しなければならず，全幹事を動員して毎日如水会地下室に集まって活動した。

昭和31年新年号と翌32年新年号が当該号であり，その活動は昭和30年11月と翌31年11月に行われた。

幸い，先輩の方々のご協力を得て，両年共予期以上の実績を得ることが出来た。

4.　設計，工事は別子建設に依頼

合宿所の設計，施工は昭和28年以来当時，対校クルーの監督であった堀川富太郎氏（昭15）が居られた別子建設（現住友建設）に依頼した。

工事は昭和31年春に着工，７月に完成し，８月の全日本選手権合宿から使用された。なお，艇庫は備えていなかったので東経大艇庫を借用，納艇した。

5.　建　設　費

総計約180万円であり，内，如水会報賀詞交換広告料収入が両年合わせて130万円，近藤荒樹先輩の篤志寄附金50万円であった。

（その２）　相模湖基地用地取得

学園の近くに水を求める運動は，学園の国立移転以来連綿と続けられて来たが，昭和36年夏，相模湖基地用地の取得によって大きな結実を見るに至った。

相模湖基地計画は向島艇庫に本拠を置き，対外レース用施設として，戸田艇庫を利用する一方，シーズン・オフ練習等を中心とする施設を比較的学園に近い相模湖に持とうとしたものであった。

この計画は当時の端艇部長村松祐次先生が昭和30年頃より構想されていたものであり，先生の指導の下に推進され，財源としては，昭和34～35年に募集された特別募金（750万円）の一部と，有力先輩の一時貸付金並びにその返済にあてられた昭和36～37年の四神会費拡充によって得た余剰金によった。

この計画は向島艇庫が高速道路用地に指定，接収される以前に，端艇部，四神会によって計画実施されたものであり，後に行われた向島艇庫の相模湖移転とは別個の計で画あった。

第１　相模湖基地構想

1.　学園の近くに水を求めて

大正12年関東大震災を契機として，学園が国立に移転することが決定されるや，わが端艇部の学園の近くに水を求める運動が活発に展開され，国立に水路を設けようとする「一橋 River 構想」，多摩湖利用構想，多摩川水

路調査等当初の構想はいずれも種々の障害を乗り越えられずに挫折した。

その後石神井予科時代の石神井ローイング練習施設，小平ローイング練習施設等が建設されたが，小平ローイング練習施設が，玉川上水利用問題等のため使用不能に陥り，以後大戦前後の荒廃，復興期においてこの一連の運動はほとんど進展を見ることが出来なかったが，国の復興とほぼ軌を一にして端艇部の復興期が一段落した昭和30年頃から再び新しい展開を模索することとなった。

この頃小平ローイングタンク復旧構想があり，一方村松端艇部長は戦後完成した相模湖，津久井湖に注目し，ここに練習基地を建設する構想を練られることとなった。

2. 山紫水明の地に学業とボートの両立を

村松先生は教育者としての端艇部長のお立場と，一橋のボートに対する深い愛着から，一橋のボートの理想を高く掲げられ，その中で，ボートを美しい静かな水面，山紫水明の地において漕ぐことの意義を考慮され，広い水域と永い歴史，伝統を持つ隅田川流域，全国のクルーが競い合う戸田コース周辺においてボートを漕ぐと共に相模湖でボートを漕ぐことを一橋のボートメンに勧めようとのお考えを持たれていた。

又，学生の学業とボートの両立について特に大きな配慮をされ，その意味においても相模湖基地に大きな期待を持っておられた。

第2　750万円募金残金により用地取得方針決まる。

1. 750万円募金とその残金

昭和34年，オックスフォード大学を迎えての全日本選手権レガッタ，朝日レガッタ等に連勝し，意気大いに挙がった端艇部と四神会は「橋人皆漕」の理想を具体化する方策として，用艇用具の飛躍的充実を目指して，昭和34年年末から翌年にかけて，大規模な特別募金を行ない，750万円に上る多額の資金を得た。

募金資金は掲げられた目的に沿って多くを用艇，用具の建造費に使用した他，昭和35年の全日本選手権兼ローマオリンピック日本代表グループ選抜レガッタの優勝を目指す対校選手の練習費の補助にも相当額があてられた。

昭和36年春，同募金の残金は約100万円程度に過ぎなかったが，当時としてはまとまった金額であり，又，端艇部，四神会財政にとっても貴重な資金であった。

2. 村松先生の提唱により端艇部，四神会の議まとまる。

村松先生はこの資金をもって永年温めて来られた相模湖基地構想を実現すべく，その用地取得費にあてるよう端艇部，四神会に提唱された。

この提唱に応じた端艇部員の間にはこれに賛同し，直ちに具体化したいとする空気が強かったが，四神会の反応は全体にやや鈍く，その意義は理解はするが，実際的な有効性を疑う意見さえ聞かれた。

村松先生はこの状況を打開するため，自ら相模湖周辺状況，大学との交通事情等の説明を含む，案内並びに趣意書を作成，配付されPRに務められた。

先生の熱心なる説明，提唱が効果を生み，昭和36年春四神会理事会において，特別募金の残額によって相模湖用地取得の方針が議決された。

第3　諸候補地調査と交渉対象地の決定（略）

第4　買収交渉，予算問題と成約

1. 買収交渉

買収交渉は，村松先生の指導のもとに森下一乗（昭37法卒）氏の熱意と精力的な折衝活動によって急速に進展して行った。

しかしながら，当初，周辺事情等から坪当たり1,500円程度と見積もっていた価格が売

主の希望と粘り強い交渉にあい，交渉を重ねる度に上昇し遂に3,000円を越える状況となり，用意された資金のみでは賄い切れない金額に迄上って来た。

2. 補充資金の対策

村松先生は寺本にその対策の検討を指示し，財政事情に付き詳細に調査の上，寺本が提示した対策試案を検討された。

試案は不足資金50～60万円は，四神会費の拡充運動を推進し，経常収支の中から余裕金を捻出して当てることとし，その余裕金が得られる迄のつなぎ資金は，一時有力先輩の方々から借用しようというものであった。

先に750万円の特別募金を行ってまもない時期であり，新しい特別募金の募集は行い得ない状況の中で，この方法による他に方法がないと考え，具申したものではあった。しかし，当時端艇部，四神会の財政は極めて苦しく造船所等に多額の債務を負っており，又，過去の財政運営の歴史の中で，四神会費収入を基礎とする経常収支が黒字基調に推移した時期は全くなかったことから，この対策試案は極めて実現困難と考えるのが，常識であったにも拘らず寺本が，学生幹事と共に鋭意努力して，この計画の実現を図る他なしとの結論に達し，土地の買収に踏み切ることとなったが，当事者としては大きな重荷を負う不安を感じながらも新たな決意を固めた。この試案を出し得た背景には前年年末より既に開始し，成果を挙げつつあった四神会拡充運動の実績があったが，その状況については資料その3に記すこととする。

3. 有力先輩団の協力

この対策の説明，協力要請は村松先生，宮沢先輩から，当時の四神会理事長森米次郎氏（大正13），常任理事塚田松二氏（昭2）に伝えられ，両氏が直ちに藤田茂氏（大正11）高橋保幸氏（大12），畑弘平氏（大正14）ら有力先輩諸氏に伝えられ，意向取りまとめが進められ，これ等の方々を含む12名の方々より各5万円計60万円のつなぎ資金を借用出来ることとなり，用地買収契約交渉の詰めが進められた。

この間，買収契約の詰めと上記資金対策の推進が同時平行的に進められ，双方の調整につき充分の時間が無く，相当に不安な状況の中で，進められて行ったが，先輩団の協力により，円滑な推移を得ることが出来た。

4. 契約締結

用地売買交渉は昭和36年7月，森下が，藤野町役場職員，諸角氏等の尽力により結着を見，同月19日契約が締結された。

契約並びに登記名義人は関係者の相談の結果，四神会代表として村松先生の名前で行われることとなった。

買収土地　3筆　440坪

対　価　1,550万円（坪当たり3,500円）

所要総資金（諸経費含む）160万円

内特別寄附金残金引当て　100万円

〃先輩より借用金（後に四神会費収入より返済予定）　60万円

土地の売主，紹介者等の方々に対する御礼の挨拶は村松先生の指示により9月に行われ，金秀太郎（昭30），中川学（昭34），森下（昭37），寺本（昭32）が同行した。

この際，端艇部長名の感謝状を先生が，全文直筆で作成されたものを持参され，丁寧に御礼を申し述べられた。

第5　基礎調査

1. コース，環境調査

土地買収完了の知らせが伝わると若い先輩の方々に高い関心を持つ方が多く，今後の相模湖利用について「百年の計」といった長期展望に立って考えて行く必要があるとの趣意で，まず周辺の基礎調査を行おうということとなり，桜井安彦(昭30)，金秀太郎，町井直行（昭30），中川学，森下，寺本が，10月初旬現地調査を行った。

調査はまず水路調査をということで，藤野駅前より，上流方面へ向かい，橋上等より上流方面支流状況等を観察し，吉野艇庫用地を経て勝瀬橋まで徒歩にて入念な調査を行ない，藤野町駅の下より上流に直線2,000m近い良好なコースが取れること，艇庫前にてレースを行うためには直ぐ上流に急カーブがあって上流からは難しく，相模湖本体方面から勝瀬橋下にカーブを取って乗り入れる方法が考えられる等の議論が交わされた。

2. ダムの特徴と長期展望

調査の最後の目標はダム事務所を訪ね，水位変動等ダムの特性，その年月を経た場合のダムの変化，水害の危険等の知識を得ることであったが，幸い，ダム事務所の方々が快く資料提供と説明をして下さり成果を得ることが出来た。その内容，要旨は以下の通りである。

① 相模湖は山中湖から発する相模川を堰止めて造った人造湖であり，その上流にはダムは存在しない。

② 従って大地震によるダム決壊による出水被害の恐れはない。

③ 多量降雨の場合上流より運ばれて来る土砂は比較的多く，又附近並に上流に切立った崖や急斜面が多く，それ等が崩落して流失土砂となる場合が多く，湖底に沈澱しつつある。

④ 一般にダムは土砂堆積により，湖底がせり上り，貯水量を減少させて次第に機能低下を来たすものであるが，その末期的時期を迎える迄には数十年あるいは100年以上の長年月を経ることとなろう。

⑤ 相模湖は，下流の津久井湖と共に神奈川県企業庁が管理し，県下の上水及び工業用水等に利用するいわゆる多目的ダムで，年間を通じての水位の変動は10m以上にも及ぶ。

⑥ 湖底にはダム建設前に在った立木がそのまま多数残っており，水位低下の際には水面あるいは水面近く迄頭を出す状態となるものもあるので，ボートを漕ぐ際には注意を要する。

⑦ 湖底は徐々に姿を変えつつあるが概して入り組んだ急斜面となっており，水深は極めて深い。

⑧ 冬期には湖面水温は0度近く迄下がる時が多くボートの沈没等の事故は冬期には厳重注意を要する。

（その3） 財政危機の克服，急速な回復から戸田艇庫建設へ

昭和35年，ローマオリンピック代表決定レース。全日本レガッタに敗れたとき，端艇部は重大な財政危機に陥っていた。

前年の華々しい勝利を跳躍台として，前年末よりこの年の春にかけて行った特別募金（所謂750万円募金）によって得た資金は，多数の各種用艇の建造，昭和35年の対校選手練習費に対する多額の補助金支出によって大部分を使い果たしており，経常財政はその基盤であった四神会費収入の伸び悩み状況の中で，通年の諸活動費・用艇・用具費等を賄い得ず，慢性的な赤字体質となっていた。

又，35年度に行われた多額の諸支出状況の影響により，会計管理がずさんになり，多額の債務を負うようになっており，財政は未曽有の危機的状況にあった。

一方東京オリンピックを四年後に控え，戸田艇庫の拡充問題が懸案となりつつあり，この状況下で，この重大問題解決への道は遠くかつ険しく，その見通しはほとんどつき難いかに見えた。

しかし，経常財政の確立は，端艇部の生命線を守る必須の課題であり，東京オリンピックを機に戸田艇庫を整備・拡充することは千載一遇の好機であると同時に，この機を逃す

ことは半永久的にその道を閉ざされるようにさえ見えた。

この難局の打破と，難題解決への挑戦は，昭和36年春よりスタートした経常財政再建活動から開始された。

この経常財政再建活動は，昭和36年度，同37年度，同38年度の３年度に画期的な成果を収め，100万円以上に及ぶ過去債務の返済，相模湖基地用地買収費の40%に相当する60万円の債務返済を行い（資料その２参照），更にスレート葺き艇庫１棟の建設費125万円等を賄い，且つ，昭和38年度以降の数年間，特別募金に依存せず，用艇建造費を含む経常財政を安定的に維持し，昭和39年の戸田本艇庫建設の基盤を築いたものであり，特記に値する活動であった。

第１　財政危機

1.　昭和32～34年は財政基盤脆弱化の時代

昭和34年の勝利の時既に財政基盤は脆弱化し，危機が迫っていた。端艇部財政の運営は年々の対校選手練習費補助費，諸大会出漕，開催費，事務費，オール等の消耗品的用具費等の経常的支出を行った残額をもって，耐久用具的性格を持つ用艇の建造費にあてることとなり，四神会費収入を基礎とする経常財政で用艇を購入する資金が得られない状況において特別募金を行って，これを賄っていたのが，昭和30年前後の財政運営であった。

従って，用艇の建造実績が，その年の財政の健全度を示すバロメーターであったともいえる。

昭和32，33年度は目立った用艇の建造は行われず，昭和34年進水の「青龍」は昭和31年の「朱雀」以来３年振りのエイト建造であった。なお34年進水のフォア「ケインズ」は，大学予算による戦後建造艇第１号であり，端艇部，四神会が建造したものではなかった。

昭和32～34年，四神会費収入増加対策は行われず，特別募金も実施されず，財政基盤脆弱化の時代であった。

2.　昭和35年の放漫財政

昭和34年のレースに勝って昭和35年のローマオリンピック代表を目指した対校選手の合宿練習は長期に及び，選手の合宿費負担の軽減を図る配慮と質の高い食事をとらせて，必勝を期し度いとする意気込みから，対校選手練習費の補助額が飛躍的に増加した。食事は毎食，多量の肉類をとるという，これ迄には考えられない高価な内容であった。

又，選手に対するやや行過ぎた配慮とバックマンの管理業務の不徹底から，選手が合宿費を滞納する悪習が漫延し，多額の未納金を残す者が多数に上った。

一方オール用具等も例年以上に多量の発注が行われ，これ等が合わさって一般会計の負担を重くした。昭和35年度の一般会計は対校練習費補助の相当部分と，造艇費の一切を750万円の特別募金に頼りながら，大幅な赤字を計上した。造船所の他，米屋，肉屋，八百屋等の商店にまで債務を残し，その総額は150万円程にも上っていた。選手の合宿費滞納額も又100万円にも上っていた。

3.　750万円募金とその使途

昭和34年末～昭和35年に行われたいわゆる750万円募金は，応募申込額は750万円に達したが，集金事務等が不充分で，実際の入金額は申込額を数十万円も下まわり，又募集・集金事務経費も比較的多くかかり，実際に入金した手取額は600万円程度であった。

その使途は「橋人皆漕」の呼声の下，レース用艇，練習用艇等多数の艇の建造にあてられたが，これ等が，その呼声の目指した方向にほとんど効果を現わさなかったことは，以後の部勢衰退の事実に照らしても明らかである。

対校練習費の食事補助等にも相当額が支出されたが，レースは敗北に終り，実を結ばなかった。

最後に残された100万円が，後の財政再建と相俟って，相模湖に大きな遺産を残すこととなった。

昭和36年以降の財政危機に際し，造艇費の若干の節減効果をもたらしたが，大きな支えにはならなかった。

募金使途概要

練習用エイト3隻	約 150万円
	(50万円×3)
〃 ナックルシックス3隻	約 100万円
	(35万円×3)
レース用エイト（玄武）	約 70万円
オール等用具購入費	約 80万円
小　計	約 400万円
昭和35年対校選手練習補助	約 100万円
相模湖基地用地買収費	約 100万円

4. 36年の危機状況

36年度財政は前年度に比し，大幅な縮小を余儀なくされていた。もはや特別会計から一般会計への支援的支出は期待出来ず，年額150万円程度の四神会費収入を源資とし，それと同額程度の債務を背負っており資金繰りは正に火の車であった。

前年度に行われた多数の艇の建造によって用艇用具の建造費負担はほとんどない点に幾分負担が軽い有利さはあったが，レース用艇の建造は早晩避けられない時期が来ると見られ，多額の債務返済を消化しながら，毎年用艇建造を行い得る安定した経常財政を築き上げるのは極めて難しいと予想された。

更に東京オリンピックが近付きつつあり，愈々戸田艇庫の拡充乃至本格艇庫建設問題が懸案となりつつあった。

前途に明るい展望はほとんど見出せず，端艇部バックメン始め，関係者の心は重く，表情は暗く，その後に続く，対校レース不振の冬の時代を予感させるものがあった。

第2　危機克服への基本方針

昭和36年秋，寺本はこの危機を乗り越え，戸田艇庫建設への足掛かりを築く財政再建を企図し，端艇部幹事学生と接触を持ち，実情を調査し，構想を練りながら，具体的活動へと入って行ったが，その活動の指導原理，戦略等は端艇部，四神会の伝統的基盤に立脚したものではあったが，強い目的意識に支えられ，具体的成果を目指す尖鋭な面を多分に持っていた。

1. 指導原理

① 幹事学生は財政の主体的担い手であり，充分の責任と権限を有するものである。責任を充分に認識する結果として目標は自らの手で高く掲げなければならず，その遂行上の権限は部内においては対校選手はもちろん，監督，コーチに優先し，又，四神会理事等役員にも優先する。

② 目標を設定するに当たり，内部事情と将来展望につき充分に検討，理解し長期的ヴィジョンに立った高い目標を立てること。財政再建と戸田艇庫建設は幹事学生の手でやり抜く覚悟を固めなければならない。

③ 端艇部員相互の意志疎通に常に留意し，バックマン活動の活動力を部内より最大限に引出し，財政再建の原動力として活用する。

④ 大学における端艇部の位置を常に意識し，大学事務当局との意志疎通に心掛ける。

⑤ 端艇部長への報告，連絡を密にし，部長指導の徹底を図る。

⑥ 四神会は端艇部が活用すべきであり，決して受動的になってはならない。広く如水会員に端艇部後援依頼を働き掛ける等の方法も又，端艇部幹事学生の責任において行われても良い。

⑦ 支出の管理も又幹事学生の責任において適切な判断に基く措置がとられるべきであり，予算管理，経費節減を常時責任をもって行うこと。

⑧ その他雑収入等，財政に寄与する諸方策

も自主的積極的に行うこと。

⑨　コーディネーター（寺本）は幹事学生と共に執行の一員である面を持ち，その経験と実務遂行能力を充分に活用すること。

2.　基本戦略とその展開

幹事学生を中心とするバックマンの自主的活動力を最大限に引出し，これを計画的な日程の下で，組織化し，有効な活動をさせることを基本戦略とし，以下の通りの活動，コーディネーションを行った。

①　財政再建と戸田艇庫建設のヴィジョンに付いて幹事学生と充分に話し合い，この課題に主体的に取組んで行く共通の認識と同志的信頼感を得る努力を繰り返し行った。

②　収入最大，支出最少の原則の下，充分の討議検討を経て，自主的な予算編成を行い，目標設定を明確にした。収入並びに支出の漸増を堅実に見込み，織り込んだ公表予算の他に，収入増を大幅に見込み，支出を極力抑制する目標的な非公表の実行予算を組み，非公表予算の実行を図る二重予算管理を実行した。

③　四神会新会員の獲得を中心とする会費収入の拡充運動を精力的に実施した。

④　合宿費滞納の防止策として，対校選手の理解を得る努力を重ねるほか，既応の滞納分の徴収の徹底を図る。

⑤　部活動の細部に亘る経費節減を図り，節減分をその都度留保貯蓄する。

⑥　大学予算による用具購入，雑収入の増大等の具体的推進を図る。

⑦　以上諸活動を毎年度当初，年間日程を作成，実行する。年間日程作成上の基本事項として学生の試験，休暇，練習等の年間総合日程を置き，学生が最も活動し易い時期に諸活動の中心期間を定め，活動の盛り上げを図る。

⑧　前項に必要な四神会説明手続き，事務的準備を事前に充分に詰める。

⑨　コーディネーター（寺本）は上記日程に沿い，実務的協力，フォローアップを遂行し，諸活動全般の円滑な推進を図る。

⑩　成果としての余剰金は過去債務の返済にあてるほか，相模湖基地用地取得費，戸田艇庫建設資金等長期の資本的支出に振向ける。

3.　管理実務の充実

学生の事務能力が低く，又，1年交替であることから申し継ぎや新幹事の実情把握に担当期間の相当部分を費し，活動力を著しく低下させている状況に鑑み，コーディネーターの実務面への積極的参加と，管理実務の標準化等により端艇部の管理実務能力の向上を図った。概要下記の通り。

①　予算・決算業務を学生コーディネーターが協力して作業を行い，財政の実情把握と管理能力の向上を図る。同様に2～3か月毎に実績集計と実行予算の補正を行う。

②　基本帳簿類を作成，整備する。

支出日計表，収入日計表，合宿費納入台帳，用艇用具台帳，公表予算表，同付属積算諸表，実行予算表，同付属積算諸表，月次実行計画表，予・実対比月次集計表。

③　予・決算説明書，四神会拡充運動趣意書等説明書類は幹事学生と協議の上，一切，コーディネーターが作成する。

④　集金，拡充運動等に必要な集金カード，申込書領収証等帳票類の整備を，コーディネーターの助言の下，常時整備する。

⑤　四神会幹部会への説明，応対，連絡等の財政関連事項は，コーディネーターが行い学生の活動の円滑化を図る。

⑥　幹事学生以外の一般部員の積極的活用，動員につき，幹事学生，コーディネーター協力して下記を行う。

(ア)　財政事情・活動趣旨，目標の説明を行い，理解と協力を求める。

(イ)　動員人員，日程，活動基準等あらかじ

め，具体的に検討し，効果的な活動を引出す。

(ウ) 必要な帳票類の他，活動上の手順，注意，要領等の説明書をあらかじめ準備して置き，即戦力化を図る。

第3　四神会大拡充運動

前章に述べた基本方針に基づく財政再建の柱として四神会の大拡充運動が据えられ，昭和36年度から38年度迄の3年間に行われ，画期的な成果を収めたが，その成功の秘訣は第2に述べた「危機克服への基本方針」が当時の実状に合致したものとして幹事学生に受入れられ，幹事学生の精力的な活動と一般部員の積極的な参加によって支えられたことにある。

その基本戦略と活動の実際については，その他施策と共に総括的に前に述べたが，以下に四神会拡充運動の固有の諸事項につき概要を記すこととする。

1.　賛助的新規会員獲得を目指す直接アプローチ

拡充運動の実際面の判断から導き出された次の基本認識方針と方法によって実施された。

この方針と方法はコーディネーターによって立案され，幹事学生の賛同を得て実施されたものであり，それ以前，あるいは以後において行われた拡充運動と異なった際立った特色を有していた。

① 端艇部に対する理解を持つ，潜在的後援者は如水会員の方々の中に多数おられるので，それ等の方々へのアプローチを速やかに且つ出来るだけ簡略な方法により行う。

② アプローチの方法は学生が全ての四神会員へ直接働き掛け潜在的後援者の紹介を頂き入会依頼を行う。

四神会理事あるいは年度幹事を介して各四神会員の活動を要請する方法は，上記ルートの中に吸収することとし，特別の段階を設けない。

③ 会員拡充の方針に関する四神会幹事会了承は，長期的概略的方針として了承を受け，具体的日程，活動は学生幹事，コーディネーターに一任して頂く。

④ 先輩の方々の同年次卒の関係以外に各職場における先輩，後輩への紹介を積極的に依頼する。

2.　既加入分会費集金活動の活用と拡充運動業務の吸収

当時，四神会費の納入は学生の集金によって行われており，会計幹事を中心とする幹事学生に相当の負担を課しており，一面他の活動の制約となる問題点がある一方，この活動を通じて先輩の方々と知り合いになり，意志の疎通が得られ易い利点があり，この四神会，拡充運動は，その利点を充分に生かしたものであった。

集金は先輩勤務場所の地域を東京においては7～8区域に分担して行われていた。

拡充運動は既加入者会費の集金の際に，会員の一人一人に新規会員加入依頼の紹介を依頼する方法によって進められた。

3.　活動時期は年2回に限定

端艇部の年間日程，試験期等学生としての年間日程から，幹事学生が最も活動し易く，又一般部員学生を比較的動員し易い時期は，毎年12月（冬休み前半）と2月下旬～3月初旬（春休み前半）の2回である。

拡充運動は各年共年2回，この時期に実施されたが，時期の選定と共に留意された点は参加者全員が一致協力し特定時期に力を集中させることによって大きな効果を挙げることを狙いとしていた。

4.　準備活動（略）

5.　動員，勧誘活動とフォロー・アップ（略）

6.　画期的な拡充の達成

拡充運動は昭和36～38年の3年度におい

て，四神会収入金額において，同運動実施前に比し，およそ2倍に増加させるという画期的な成果を収め，短期間の中に財政再建を達成し，相模湖基地用地取得戸田艇庫建設等の基礎固めをする大きな役割を果たした。

本運動成功の基礎として，如水会員の中に幅広い端艇部支持局があり，それ等の方々が多数の一口会員として加入し，端艇部，四神会を支えて下さった事実があったことは，心からの謝意を以て永く記憶に止められなければならない。

この期間に達成された拡充実績は凡そ下記の通りである。

	拡充口数	拡充後総口数	四神会費当年度収入
昭和35年度	——	1,400口	150万円
〃 36 〃	200口	1,600口	170万円（前年比＋20万円）
〃 37 〃	700口	2,300口	270万円（〃 ＋100万円）
〃 38 〃	900口	3,200口	360万円（〃 ＋90万円）

第4　財政再建の達成と成果

1.　財政再建の進展

前章に述べた四神会拡充運動の成功を主な柱とし，第2に述べた基本方針による財政全般の建て直し対策の浸透により，急速な立直りを見せ，再建に着手後約1年半後の昭和37年春にはほぼ再建達成の見通しを得，昭和38年には潤沢な余剰財源を得て，経常財政の枠を越え，艇庫建設資金の一部を負担することとなった。逐年の概況は下記の通り。

① 昭和36年度は相模湖基地用地取得資金対策のため有力先輩の方々に対する特別債務を新たに加え，債務総額は増加したが，造船所，商店関係債務の一部の債務返済を行い財政建全化へ向かって一歩を踏み出した。又，戸田木造合宿所南側に仮設雨天体操場建設費約10万円を支出する等の設備費負担も行った。

② 昭和37年度は，造船所，商店関係債務の返済をほぼ終り，経常財政の再建と収支均衡の目標をほぼ達成した。

③ 翌昭和38年度は多額の余剰金が得られ，相模湖基地用地取得の際の先輩に対する特別債務（60万円）を返済した上に，約100万円をもって戸田にスレート葺き艇庫1棟を建設するに至った。（次項並びに資料その4参照）

2.　財政再建の遺産

① 相模湖基地用地

相模湖基地用地取得費の約60％は昭和34～35年に蒐集した750万円特別募金の残金によったが，残り40％はこの財政再建運動によって得た資金によった。

更に注意すべき点は土地買収契約の最後の決断は，この財政再建計画によって賄うことを基本として行われたものであり，財政再建対策無くして，到底，契約に踏み切れない実情にあったことから（資料その3参照），財政再建対策の果たした役割は決定的な重要性を持っていた。相模湖基地用地は言わば，財政再建対策の大いなる遺産である。

② 戸田スレート葺き艇庫

本艇庫はその建設資金を財政再建対策から生じた経常費余剰資金によって全額を賄ったものである。戸田に一橋の初の艇庫として建設された意義は大きかった。

③ 戸田本艇庫建設への布石

戸田本艇庫建設は，昭和36年頃より懸案となりつつあり，その頃から建設構想が模索され始め，昭和39年に完成することとなる。（資料その5参照）

前項のスレート葺き艇庫は本艇庫の建設と共に戸田艇庫全体の建設計画が進展して行く経過の中で，その先駆として建設されたものであり，本艇庫建設への布石であった。

財政再建はまた本艇庫建設計画時期及びその建設時期を通じ，本艇庫建設を積極果敢に遂行し得る基盤として大きな役割を果たしたものである。

（その４） 戸田本艇庫建設構想の模索と前段階における諸活動

昭和30年前後から漕艇界の中心が次第に隅田川から戸田コースへ移って行く状況に対応し，昭和31年に戸田木造合宿所を建設した経緯は前出資料(その１)に述べた通りであり，又，同艇庫建設後，対校選手の合宿練習における戸田合宿の比重は次第に高まり，昭和35～36年頃より，戸田合宿所の拡充，艇格納庫等の建設が懸案となり，昭和36年，戸田木造合宿所の仮設雨天体操場建設，昭和38年３月，スレート葺艇庫建設等が行われた。

この頃より，東北大艇庫建設，東大本艇庫建設等，各大学艇庫の建設があり，東京オリンピックへ向けての周辺諸施設諸環境整備と軌を一にして一橋の本格的な艇庫を建設しようとする胎動が始まった。

戸田本艇庫建設計画は昭和38年年末に内外に発表され，昭和39年，一気に具体化し同年８月末完成することとなるが，それを目指す準備活動は既に昭和36年頃より開始されていた。

その活動は村松端艇部会を中心に，少数の財務担当ＯＢ，学生幹事の間で進められ，財政再建と四神会拡充運動（前記（その３）参照），戸田スレート艇庫建設等を含む，この時期の総合的な諸活動であった。その方法並びに諸経緯には多くの問題を含み，評価が分れるところであるが，本格艇庫建設を目指した関係者の必死の努力の足跡であり，今後の財政施設問題に対処する上に大いに参考とされる点が多い。

本資料（その４）においては，財政再建の進行と共に戸田本格艇庫建設を模索し，その中から戸田スレート葺き艇庫が建設される等の成果が生まれる一方，本格艇庫建設への準備活動が，これ等と密接な関連の下に，関係者によって秘かに進められて行った，昭和38年春迄の経緯を記す。

第１　本格艇庫建設論の起りと諸状況

1.　戸田施設拡充の要請と仮設雨天体操場の設置

昭和35年の全日本選手権兼ローマ・オリンピック代表選抜レースが敗北に終ったとき，漕法，練習法の再検討の中で，この頃から漕艇界全般に広くとり入れられる状況に有ったいわゆる陸上トレーニングを強化充実することが急務であるとの議論が高まった。

戸田木造合宿所は最少限度の合宿部屋と付帯設備のみから成り，艇格納庫も無く，艇は東京経済大学艇庫を借用して納艇している状況で，雨天のときの練習や，いわゆる陸上トレーニングを行う施設は全く備えていなかったため，コーチ団から，これ等の必要に応ずる施設を早急に建設して欲しいとの要請で出された。

この要請に応えるべく，昭和36年春，戸田木造合宿所の南側に，コーチ・マネージャー室前を中心とする部分に仮設雨天体操場を設置した。

木造の骨組みにＦ．Ｒ．Ｐの屋根を付けた10坪程のもので側壁の無い，いわゆる「差しかけ」といった程度のものであり，そこにバック台，バーベル等の器具を置き，トレーニング室とした。

費用は約20万円であり，再建途上の一般会計の中から捻出した予算をあてた。この頃既に本格艇庫建設を構想し，その一環としての財政再建に取組み始めてまもない財政担当者にとってこの出費の負担は重く，又，一時しのぎの効果の少ない投資と見られたが，上記の事情からやむを得ず実施した。

2. 東北大，東大の艇庫建設

昭和36年，東北大学が艇庫を建設した。

木造2階建てで，艇格納庫と合宿所を併設したもので，当時としてはかなり大規模な本格的な艇庫であり，現存する東北大艇庫そのものである。土地は以前から所有していたものであり建設費は大学予算にＯＢ寄附金を加えたとのことで，前年の全国制覇とオリンピック代表の座を勝ちとったことが，大学内外に認められてのことであると言われた。

更に我々にとって参考となったことは，同大学が仙台に本拠地艇庫を保有している上に戸田艇庫建設資金を大学予算から得たことであり，我々に戸田艇庫建設についての大学の予算措置に対する若干の期待感を持たせることとなった。

翌昭和36年末東大が，現在の本艇庫建設に着工し，翌37年春完工した。鉄筋コンクリート3階建ての堂々たる建物は，すべて木造建てであった各大学艇庫や，その周囲を威圧する偉容を誇るものであった。

建設当時は，資金約5,000万円は全額大学予算によったということの他，後に判明した予算の源資（第2参照）等の詳細は全くわからず，我々は驚きと羨望の念にとらわれると共に，いよいよ一橋の本格艇庫建設への決意を固め，又，その課題が大きく重く我々の肩にかかっていることを感じた。

3. 本格艇庫建設の議論起こる。

昭和36年末，東大艇庫着工の報が伝わるや，一橋の本格艇庫建設すべしとの声が，学生，コーチ団，先輩の間に急速に高まった。

既に前年末頃から財政再建と共に戸田艇庫の拡充を目指していた財政担当者，幹事学生の間においては，東大艇庫の規模をききその構想を東大艇庫に匹敵する規模の大艇庫建設計画にまで高め，その資金計画をまとめ上げなければならないと言う課題に取組まなければならないこととなった。

問題は言う迄もなく資金調達問題であり，財政再建が漸く結についたとは言え，債務残高200万円近くにも及び経常予算年額約200万程度の状況下で，数千万円の資金調達の見込みは容易に立ち難く重苦しい焦躁感の中で動向を見守った。

第2　初期の模索と挫折

1. 大学予算期待出来ず

村松端艇部長は，昭和36年末より，学長，大学事務局に対し戸田本庫建設につき強く要望し，検討方申入れられたが，大学においては教育研究施設等，大学運営の基本に係る諸施設等の建設案件が多数懸案となっており，戸田艇庫建設をこれ等に優先して予算に組み入れることは到底出来ず，そのため大学予算に期待することは額のいかんにかかわらずほとんど全く期待出来ないとのことであった。

2. 四神会の対応

前項大学への交渉と平行して，四神会への説明と相談は，村松端艇部長より，昭和36年末頃より，種々の会合，機会をとらえて行われ，翌37年春に掛けて，総会，理事会，首脳部懇談会等の席で種々議論が交わされたが，先ず何よりも大学側に財源を求めることが先決であるという立場から，果敢且つ積極的な推進の動きや，実現性のある具体的な提言が何等得られぬまま，終始し，約半年を経過することとなった。

四神会において交わされた議論における代表的な意見はおよそ次のようなものであった。

① 艇庫は大学の施設であり，大学は教育施設としての艇庫建設に充分配慮すべきである。大学にそれを要請し，実現することは端艇部長の職責であるので鋭意尽力願い度い。

四神会は大学端艇部の後援団体であるので，大学端艇部から後援の要請があれば，出来る丈の努力をするものである。

艇庫建設の方針，計画は大学端艇部において先ず検討されるべきものであり，四神会が，先に検討し，大学に要請する性質のものでは無い。

② 大学の予算措置が難しいということであるが，東大，東北大において実現したことが，一橋では出来ないということは理解出来ない。若し，政治的な動きが必要ならばしかるべき措置をとるべきである。

③ 募金によって建てても良いが，成績不振の状況では多額を望めない。全日本に勝てば何とか道が拓けようし，要は勝つことに有る。

3. 特別財源の調査

以上のような経過の中で，大学の経常予算措置は期待出来ず，又，四神会の自主的，積極的な活動を期待出来ない状況の下で，村松端艇部長は，何らかの特別財源を求めて局面の打開を図ろうと，昭和37年春頃より活動を始められた。その背景に，東大艇庫建設資金が，特別財源によっていたことが判明したことがあった。

村松端艇部長は東大艇庫の多額の建設資金がどのようにして調達されたかについて，大学当局を通じて問合せ，調査したところ尾久の隅田川沿岸にあった旧一高の艇庫跡地を売却処分して得た資金によるものであったことが判った。

尾久コースは昭和10年代にインターカレッジレガッタ等が行われたところであり，そこに当時旧一高が艇庫を持ち，その跡地がこの時期迄残っていたものである。

村松端艇部長は当時，一橋も尾久に艇庫を持っていたことを思い出され直ちに一橋にも何等かの権利が残っていないかについて調査された。

調査は大学事務局に調査を依頼されたのみで充分と考えられず，先生自ら大学の古い事務文書をほこりにまみれながら克明に調べられるという徹底したもので，先生の戸田艇庫建設にかける意欲と意気込みを示す精力的なものであった模様であるが，結果は，当時の一橋艇庫は借地の上に建てられたものであり，既に借地権を失っているというものであった。

借地契約解消に関するはっきりとした記録が無いため，建物に関する記録が残っていないか，あるいは戦災等による混乱があって未だ何等かの権利関係が残っていないか等考えられる疑問を解き，何等かの糸口を見出そうと懸命の調査・検討をされたが遂に期待された成果は何等得られなかった。

ここに初期の模索活動は成果を得られないまま，昭和37年夏，挫折した。

第3 戸田用地一部処分構想と路線論争

昭和37年夏，村松端艇部長の戸田艇庫建設の決意は固く，愈々具体策を練って具体的活動へと入って行かれたが，一方，財務担当者（寺本）も財政再建，漸く軌道に乗り，具体策の検討に入っていた。

ここに両者の路線の突合せが行われ，戸田艇庫建設問題は新しい段階に入り，これに続く本格艇庫建設計画へと展開して行くが，この段階からの構想と論議は，各方面への影響等が配慮され，ほとんど公表されることなく秘かに展開されて行った。（以下略）

第4 諸情勢の検討と建設構想

昭和37年夏，関係者は諸情勢を検討の上，愈々建設構想を練り上げねばならない時期に到達した。かねて建設の好機と目された東京オリンピックは既に2年後に迫っており，これ以上時間的猶予を求めることは建設を放棄することになりかねない切迫した時期とさえ思われた。

1. 大学，端艇部，四神会の協力事業

建設資金の内のある程度の額を大学予算に求めることは資金計画上も重要な柱であると共に，一方募金活動等を実施する上にも，大

学の建設事業に対する協力という形が必要であり，且つその効果を挙げる上にも重要な意義があるものと考えられ，その点に戸田艇庫建設の成否がかかっているものと見られた。

しかしながら大学の経常的予算にはほとんど期待出来ず，何等かの特別予算を，土地処分の方法をとらずに獲得する方法を見つけ出すことは極めて難しいことと，考えられた。

2. 東京オリンピック協力事業

当時東京オリンピックは国を挙げての大事業として，国立競技場整備，代々木体育館等各種競技施設が計画又は建設中であったが，その他選手団の宿泊施設として代々木選手村の整備等が計画されていたが，なお不足している模様であった。金秀太郎氏（昭30）は，このような状況に鑑み戸田艇庫建設を東京オリンピックの際の選手宿泊施設の提供に係わるオリンピック協力事業とし，文部省に何卒かの特別助成予算を申請することを考え，端艇部長に進言した。

これはあるいは相当の可能性を持つ問題提起と見られ，端艇部長は急きょ関係先と折衝に当たることとされた。

3. いかなる経過による場合も東京オリンピックに間に合わせることとする。

上記諸状況，特に全国民が大きな盛り上りを見せつつある状況から，これを機に艇庫建設を企図することは正に千載一遇の好機であり，又，その施設が，直ちにオリンピック遂行に貢献し得る意義は極めて大きいと考えられた。

従って，いかなる困難，あるいは経過の不首尾があろうとも，この機に戸田艇庫完成を目指すことに関係者は一致団結した。

一面端艇部は部勢後退期に在り，対外レースは極めて不振となり，部員数もかなり落ち込んでいた。戸田艇庫建設は部勢回復の期待も寄せられていた。

4. 向島艇庫，高速道路用地に指定さる。

同昭和37年夏，向島艇庫が，首都高速道路建設予定地に指定されたとの報が堀川富太郎氏（昭14）よりもたらされた。

しかし接収時期等は未定であり，戸田艇庫建設に関連させることは，考えられる状況には無かった。

端艇部長はこの時，将来向島艇庫を相模湖に移転することを構想し，時期の到来を待つこととされた。

戸田艇庫建設は向島艇庫問題と別個に進められることとなった。

第5 大学，文部省関係折衝の推進と建設構想の具体化

前述の構想に従い，東京オリンピック協力事業としての予算申請に関する折衝は昭和37年頃より，端艇部長，大学，文部省当局との間で行われ，同年秋，かなりの可能性が見込まれるに至り，直ちに基本設計を開始，建設計画と所要資金概算が開始され，愈々戸田本艇庫建設計画は具体化へと動き始めた。

しかし，未だ計画を公表し得る段階に到らず，折衝への影響等への配慮から関係者において非公式に進められて行った。

1. 先輩団の後援を含む東京オリンピック協力事業として申請

戸田本艇庫建設予算の申請に関する折衝は，昭和37年夏頃より大学当局との間に始められたが，同申請趣旨は東京オリンピック協力事業である面が中心とされたが，一方施設建設計画の裏付けとして四神会を中心とする先輩団の後援・協力が予定されたものとされていた。

四神会等に対する具体的説明等が行われない段階におけるこのような申請は手続き上の問題を残したものではあったが，永年に亘る四神会の後援と端艇部大学との信頼を基礎とした当を得たものであったと言える。

2. 予算折衝の進展と計画の具体化

折衝は大学当局の協力の下に文部省関係と

の折衝へと進展し，同年秋何等かの予算措置実現の可能性が濃い感触を得るに至った。

この間金秀太郎氏は端艇部関係者として端艇部長を補佐し，大学においても学長はじめ関係当局の理解と協力が得られ，交渉が進展した。

ここに折衝は新たな段階を迎え，戸田艇庫建設計画を建設所要資金等具体的な計画化を行いながら，折衝を具体的に進めて行かなければならない段階に入り，それ等対応に取り組まなければならないこととなった。

3. 計画具体化のため，設計を依頼

前項の状況の中で，建設計画の概要と建設所要資金の算出等の概算を行うために建物の設計，見積りを平行して行うことが必要となり，同年10月金秀太郎氏，桜井安彦氏(昭30)両氏の紹介により，東京工大助手内藤氏を中心とする，株式会社「スペース・コンサルタンツ」にとりあえず，基本設計を依頼することとなった。

計画未確定の段階におけるこの措置は種々の不安，懸念を乗り越えての端艇部長の果断をもって実施された。

4. 設計の前提としての資金計画及び建設基本方針

設計の前提として，資金計画概要，建物の規模，既存建物との関係等を概略詰める必要があり，同年10月～11月次の通り検討，計画概要を策定した。

① 既存建物（木造合宿所）は一応撤去を前提とし新艇庫は諸施設を総合的に備えたものとする。

② 施設の内，合宿所施設を重点とし，艇格納庫部分は必要最少限度のものとする。なお，本計画時点において既にスレート葺き艇庫1棟の建設を決定しており（次章参照），これを以って不足分を補助する他，更に必要ある場合は追って追加計画を組むものとした。

③ 本艇庫は一橋を代表する施設であることに鑑み，それにふさわしい美しい外観を備えたものであること。

④ 必要施設のリスト，及所要面積等基礎資料を細密に作成し，これ等必要施設を備え，充分の総合機能を持った建物とすることとした。

⑤ 床面積等全体の規模は東大艇庫の70%程度を目安とするが，機能上はほぼ同等のものを具備出来るよう設計の上で充分工夫すること。

⑥ 資金計画はおよそ次の通りとする。

建設資金総額 3,000～3,500万円

内大学国庫予算 1,000万円

先輩寄附金 2,000～2,500万円

なお先輩寄附金は特別募金の募集を中心とするが，不足を生ずる場合は四神会経常会費による補塡を図る。

第6 スレート葺き艇庫の建設

1. 建設計画の沿革

昭和31年の木造合宿所建設以来，艇格納庫の建設が次の懸案となっており，昭和35年秋にスタートした財政再建活動の中で一つの大きな目標とされていたが，財政再建の進捗により，昭和37年春頃より計画具体化の時期を迎えていた。

この頃戸田本艇庫建設構想の模索期を迎え，本艇庫の段階的建設構想の中で検討されて行った。

昭和37年10月，戸田本艇庫建設に関する大学，文部省関係折衝の進展により，本艇庫建設計画が具体化して行く中で，本艇庫建設総合計画の中で再検討され，その一環の先行建設としての位置付けを得て，実施に移されることとなった。

2. 設 計

戸田に初めて建設する艇格納庫であるため，各種の艇を一通り取揃えて効率良く収納出来るよう配慮して設計され，次の収容能力

を持つものとして，昭和37年10月に設計を完了した。

エイト4，シェルフォア4，スカル6，オール約40本

なお床掘下げによりオールを縦に吊り下げて収納出来るようにしたこと。フォア収納アームの間にナックルフォア収納の場合の補助アームを取付けたこと等に工夫をこらした。

3. 建設位置

建設位置は本艇庫建設構想との関係に配慮し，用地の東端に位置させることとした。

なお，将来，南側方面へ延長して建て増しを行った場合，南北の縦方向にナックルフォア2隻を縦に収納するスペースをとれるように配慮し，コースに面した入口前面位置を決め，南側裏にそのために必要な空地を残すこととした。

4. 発注と建設

見積りを，旭機材㈱と大和ハウス㈱に依頼した。

大和ハウス㈱見積り額150万円に対し，旭機材㈱は，同社役員であった浅沼英二氏（昭和8年卒）の尽力によりコスト割れの最低額見積りとして125万円が提示され，昭和37年12月，同社と契約した。

昭和38年2月着工，同3月完工した。

戸田に初めてわが一橋の艇格納庫を得ることが出来た喜びは大きかった。

第7 大学，文部省関係折衝と建設計画の進展

1. 大学，文部省関係折衝の進展

大学，文部省関係折衝は大学当局の協力の下順調に進展し昭和38年春にはほぼその見通しが得られる段階に到着していた。

当時文部省大学学術局長に在職されていた杉江清氏（昭17学）は端艇部長の要請を受け，先輩として助言や協力を頂いた。

昭和38年5月，翌39年度予算の概算要求手続きがとられ，いよいよ戸田本艇庫建設計画は公式の場で具体化されて行くこととなった。

以下の経緯は「資料その5」に記すこととする。

2. 設計の進捗

昭和37年末端艇部長の依頼を受けて設計検討に入ったスペース，コンサルタンツ㈱スタッフは逐次設計作業を進め，昭和38年春には既に基本設計の段階に入った。

その間の進捗状況は次の通りである。

① 昭和38年1月，東大艇庫の建設実績情報を入手，戸田コース周辺の地盤は砂礫層から成り相当軟弱な地盤であることが判明し，建築構造としては比較的軽量なカーテンウォール式鉄骨造とすることが選択された。

② 同年3月基本設計に入るに当たり，端艇部長は，同社に対し，設計依頼の約束をされ，同社は作業に入った。

その後の諸般の日程等総合判断の上決断されたやむを得ない措置であった。

③ 同年5月末の国庫予算概算請求手続きの際には建設計画の概要説明書，平面図，見取図等が出来上がっていた。

（その5） 戸田本艇庫建設計画の具体化から完工迄

文部省，大学関係の予算折衝の進展し，艇庫建設に対する国庫助成金が下りる見通しが確実となって来た昭和38年6月，端艇部長より四神会に対し，戸田本艇庫建設構想の説明と協力要請があり，愈々この計画は公表され，本格的に推進されることとなった。

四神会は直ちに協力，支援体制をとる一方，如水会に協力，支援を要請し，資金計画を練った。募金は如水会の全面的協力の下昭和38年末に計画，昭和39年4月より実施され，3,500万円の応募を得た。

本艇庫建設は昭和38年年末より着工し，昭和39年9月竣工した。建設資金4,500万円(国庫助成金1,060万円，如水会・四神会寄附金3,500万円）であった。

本資料にこの間の経緯並びにこの時期に行われた戸田コースの拡幅工事に伴って起こった土地問題，艇庫建設に伴って起こった別の土地問題，旧木造艇庫の処置等関連諸問題の経緯について記す。

第1　建設構想の発表から，四神会，如水会支援体制の確立まで

1.　建設計画の発表と四神会体制の整備

村松端艇部長は大学並びに文部省関係の折衝についてほぼ確実な見通しが得られ，大学において国庫助成金に対する予算の概算要求手続きがとられた段階において昭和38年6月，四神会に対し，戸田本艇庫建設計画の説明と，これに対する協力支援を依頼した。

四神会は直ちに理事会を開き，満場一致で，これを了承，早速支援体制を整えることとし，戸田艇庫建設準備委員会を発足させた。

戸田艇庫建設準備委員会

畑	弘平	(大14)
前田	正	(昭12)
伊藤治雄		(〃)
堀川	富太郎	(昭14)
伊藤	茂三郎	(〃)
金	秀太郎	(昭30)
寺本	隆一	(昭32)

各委員はその後の活動の中でおよそ次の通り業務を分担することとなって行った。

如水会関係＝畑　弘平，伊藤治雄

漕艇協会関係＝伊藤治雄，前田　正

募金準備事務局関係＝伊藤治雄，寺本隆一

建設，設計関係＝堀川富太郎，金秀太郎，寺本隆一

2.　如水会の全面協力

戸田本艇庫建設計画は，早速，端艇部長，四神会幹部より如水会に説明され，協力支援の依頼が行われた。

如水会はこれを受け，昭和38年秋，全面的にこれを支援することが決定され，寄附金の募集について，如水会，四神会の一致協力の下に行うことが決まり，万全の体制が確立された。

3.　設計委託問題の表面化と結着

本艇庫の設計については，既に大学，文部省関係の折衝を進める中で，昭和37年末頃より，端艇部長の委嘱を受け，スペース・コンサルタンツ㈱において始められ，昭和38年春には基本設計を進めていたが，このことは当時未だ四神会等に説明されておらず，同年6月以降計画の説明，公表とその後の準備活動の進捗の中で，この事が四神会において明らかにされ，その進め方について適切を欠く面がなかったかとの質疑議論を呼ぶこととなったが，端艇部長より経緯並びに事情説明があり了承された。

多くの意記としては建設会社に設計，施工管理，施工等一切を一貫して行わせるべきであるとの点と，設計はサービスとして建設会社に負担させるべしという意見等であったが，同社に設計，施工管理を一貫して実施させることによりほぼ同様の効果が期待出来るということで了承となった。

大学当局に対しては予算折衝等の段階において説明がなされており，後に変更入札等必要な手続きがとられた後，同社に決定された。

第2　資金計画の具体化と募金

1.　国庫助成金予算の決定

昭和38年年末，翌昭和39年度の国の予算の成立により，一橋大学戸田艇庫建設に対し，1,000万円の助成金が下りることが決定した旨，大学当局より通知があった。

永年に亘った待望の国庫資金認可であった。

2. 「一橋大学戸田艇庫建設資金募金会」の発足

戸田艇庫建設資金募金については，大学如水会，四神会の協力の下，既に昭和38年秋より協議，準備が行われていたが，同年12月，「一橋大学戸田艇庫建設資金募金会」が発足した。

高橋泰蔵一橋大学長，中島慶次如水会理事長，佐藤尚武四神会名誉会長を代表とし，如水会・四神会の有力者多数から成る万全の布陣であった。

3. 募金目標の設定と資金計画

募金目標額は建設所要資金見込み額から国庫助成金を差引いた残りの必要金額として3,000万円が設定された。

これをもって，国庫助成金1,000万円と合わせ4,000万円の資金計画が確定した。

資金計画の決定に伴い後述するごとく設計，建設計画もほぼ具体的に決定された。

4. 募金計画と法人寄附及びその免税措置

募金は，その規模，目標額から，当初より法人寄附を相当額見込んだものであり，そのため，法人寄附に関する免税措置を講ずることが有効な方策と見られたが，大学当局並びに如水会の尽力により実施されることとなり，法人寄附金の募集は如水会が中心となって推進することとなった。

個人寄附金は，その目的から四神会が中心となって実施することとなった。

5. 四神会の個人募金準備

四神会は既に昭和35年に大規模な募金(750万円募金）を実施して間もなくであり，又，当時端艇部の対外レース不振の状況から，募金額の伸びに危惧の念を抱かざるを得ない状況にあったが，その状況下において出来る限りの努力を払うこととした。

まず，寄附依頼状の先附先名簿の作成が急務となり，端艇部出身者の他，端艇部に対する理解ある方々の名簿を作成することとなり，学生幹事と寺本が協力の上，次の該当者の方々をすべて網羅した寄附依頼先名簿を作成した。

イ　四神会現在の会費納入者

ロ　〃　過去に会費納入実績の有る方

ハ　750万円募金に応募された方

ニ　四神会，名簿に記載のある方

この名簿は，下記の当時の事情により，1,500～2,000名にも上る方々を記載することとなり，個人募金推進に効果を挙げることとなった。

① 四神会拡充運動の進捗により，四神会員が大幅に増加していた。

② 当時の四神会名簿は端艇部出身者のみならず，過去に四神会費納入実績の有った方々等，端艇部に対する後援者若しくはこれに準ずる方々をすべて網羅し，多数の会員の記載があった。

一方募金実施に必要な諸管理，折衝の実務担当者の責任者として伊藤治雄氏が大いに尽力された。

第3　設計，建設計画に関する経緯

戸田艇庫の設計は昭和37年末より前にものべたように非公式に開始されたが昭和38年年末の資金計画の決定迄，資金計画のはっきりとした見通しが得られない状況下で進められたため，その状況に応じて逐次修正が行われた。

又計画の公表に伴い，設計に対する新たな意見の吸収が必要となって更に修正が加えられ，更に募金の実際上の進展を見極めながらこれに対応して規模の変更が行われ得るような対策も盛り込まれた最終設計が作成されて行った。（以下略）

第4　戸田コースの拡幅と用地の権利関係問題等

戸田コースは，東京オリンピックを迎えるに当たり，拡幅工事が行われることとなり，それを経て現況のコースとなるに至ったが，

この事に関連して，用地に関する権利関係に重要な変更が行われることとなり，現在に至っているので，その経緯及び関係事項について記すこととする。

1. コースの拡幅

戸田コースはそれ迄，現況より幅が15m狭く，レースのコースは4コースしか設けられない状態であり，東京オリンピック開催に当たり，オリンピック・レース開催に必要な6コースを設けられる水路とするために15mの拡幅工事が行われた。

拡幅はそれ以前のコースの北岸10m幅，南岸5mにわたって行われ，工事は昭和38年春からオリンピック開催年である翌昭和39年春迄1年間にわたって実施された。

拡幅と同時に水深も国際レース基準に合致するよう掘り下げられ，護岸工事，本部建物，メイン・スタンド等の工事も実施された。

2. 工事説明等の経緯

同工事により，周辺艇庫用地所有各大学等は次項に記す通り，用地の一部を水路に提供を求められる等用地の権利に重大な影響を受けることとなったが，この計画並びに各大学関係者への説明・申入れは着工を目前に控えた昭和38年3月に行われた。

この措置については，説明，協力要請の手続き並びに時間的余裕等の点で問題を含むものとして，端艇部，四神会においても批判的意見も多かったが，東京オリンピック開催と，戸田コース改善への協力という趣旨で，理解，了承された。

3. 拡幅工事実施による土地の権利関係について

同工事実施により，コース南岸に艇庫用地を所有する各大学はすべて幅（南北幅）5mの土地をコース水路に提供することとなったが，当該土地等に関する権利関係は次の通りとなり，この状態のまま，現在に至っている。

① 各大学は，土地の所有権は存続するが，埼玉県がその土地の上に無期限に水路を設けることを認める。

② 設けられた水路の水面占用権は日本漕艇協会が保有する。

以上により，一橋大学としては約90坪（間口32間，幅5m）の土地を戸田コース水路に提供し，上記の状態で所有することとなった。

4. 拡幅工事と，一橋艇庫用地の土盛り

拡幅工事は，コースの拡幅と既存コース水底の掘下げのため莫大な量の土砂を掘り起こし，撤去，運搬，棄却が行われた。

この時，この棄却土砂によって一橋艇庫用地に土盛りを行うことを，寺本が発案し，端艇部長，大学当局の了承を得て用地全体を50～60cm程度カサ上げを行った。

このため南岸各大学用地の中で一橋用地のレベルが高くなり，後に昭和40～41年頃台風によって起こった戸田地区の出水に際し，各大学艇庫は床上浸水となったにも拘らず，一橋艇庫のみ浸水を免れる等の効果を挙げた。

第5 一橋会名義土地の処理等用地問題

1. 一橋会名義用地とその処理

昭和38年秋，艇庫着工を前にしてこの問題が起こった。

全一橋としての戸田艇庫用地は当時800坪（東西間口32間，南北25間）であったが，内，西側200坪（東西間口8間）が，旧社団法人一橋会所有名義となっていたため，大学としてはここに国の建物を建設するため，当該地を国有地とするため，端艇部長に寄附手続きを依頼した。

このことは直ちに四神会に説明された。

四神会においては当該土地取得当時の記録は不詳ながら，四神会・端艇部が資金拠出を行ったものではないかとの見方と，所有名義関係の状況から，これを端艇部又は四神会に

おいて保有する方策を検討すべしとの意見が寺本等から出されたが，これを行うためには当該地と東側（明大艇庫側）の大学所有地と土地交換手続きを行わなければならないことや，戸田艇庫建設に対する大学の配慮や，本件の大学の要請に応えるべしとする意見が強く，大学要請の線に沿って処理されることとなった。

2. 西側用地一部を日漕より買取り

艇庫建設位置は当初，現在位置より3.5m程東寄りに計画されていたが，着工間近になり，西側日本漕艇協会用地（当時，現在の成城大学艇庫用地は日漕用地であった）との境界線が，計画線より3.5m程西側に在るということになり，その線を基準にして艇庫建設が着工された。

当時日本漕艇協会はコース拡幅工事並びに本部建物の建設等のため，コース周辺の土地の測量を行っており，その結果一橋との境界に新たなクイ打ちが行われ，これを新しい境界線として，一橋艇庫建設位置が西側へ移動されることとなった。

しかし，着工後まもなく，この新境界線は誤りで，当初考えられていた境界が正しかったことが判明し，一橋の艇庫が日漕用地へ3.5m程かかって建設されていることとなった（3階部分の西側突き出し部分がそれに当たる）

この問題の解決善後策について，前田正氏（昭12）の尽力により端艇部，大学，日漕が協議の結果，当該土地（50坪弱）を一橋大学が，日本漕艇協会から買い取ることとなった。

この結果，一橋は新所有地50坪を加え，850坪の用地を所有することとなった。

第6 募金，建設の完了と旧木造合宿所の処理

1. 目標額を上廻る募金達成

募金は如水会，大学，四神会の一致協力の下昭和38年末より準備されて行ったことは，第2に述べた通りである。

募集関係書類の準備等も整えられ，翌年3月，書類の発送と共に募金活動に入り，同4月より6月迄の期間に活動の推進に応募申込みが行われた。

その結果，法人応募2,700万円，個人応募800万円，計3,500万円の応募を得，当初の目標額を大幅に上回る額を達成することが出来た。

特に法人関係については如水会の強力な協力，推進によって上記の通り，多額の応募を得ることが出来た。

2. 建設の進捗と完工

建設工事は昭和38年末，所定の手続きを経て住友建設㈱に発注された。

工事は直ちに着工され，スペース・コンサルタンツの施工管理の下，住友建設の尽力により突貫工事として着々と進められ，昭和39年8月末完工した。竣工式は9月12日に行われ，好天の下，全一橋人の喜びに沸いたが，特に永年にわたりこの日を目指して来た関係者には感激が深かった。

3. 東京オリンピックにイタリークルーの宿舎となる

翌10月は待望の東京オリンピックが開催され，新築の一橋艇庫は国庫助成金と建設の趣旨に基づき，外国選手受入施設として利用されることとなり，イタリークルーが入居した。

4. 旧木造合宿所の処理

旧木造合宿所は昭和38年末，本艇庫着工を前に艇庫用地南西の角に移設された。

移設は本艇庫建設期間中，選手の利用に供するためのものであり，本艇庫完成後直ちに取壊し，撤去する予定とされ，そのため基礎は木杭を打ちその上に仮設状態が設置された。

本艇庫完成後間もなく予定に従って撤去さ

れようとする時期に到り，寺本はその存続を検討し，端艇部長に申請した。

存続の理由と狙いは，対校選手，H．C．S選手が同時に合宿する場合，新設の本艇庫がやや手狭であり，旧木造合宿所の有効利用の必要があることの他全日本選手権レースの際上京する地方大学クルーに利用の便に供し得る等の利点があることなどであった。

四神会においては環境，整備の面から計画通り撤去すべしとする意見が大勢であったが，端艇部長は上記趣旨に理解を示され，存続を決められた。

旧木造艇庫はその後，昭和53年迄存続し，同54年，大学の配慮により雨天体操場に建て替えられることとなった。

5.　スレート葺き2階建て艇庫

スレート葺き2階建て艇庫は向島艇庫の相模湖への移転の際に，向島艇庫の取壊しのため，相模湖艇庫竣工迄の間の艇の一時保管を主な目的として向島艇庫の補償金の一部を財源として大学が昭和42年に建設したものである。

その建設に至る迄の経緯は，相模湖艇庫問題の極めて複雑且つ錯綜した経緯全体の流れの中で説明，理解されなければならず，それ等諸経緯については後日別稿をもって説明することとする。

相模湖に艇庫を！
土地買収契約成立，第一歩ふみだす　（昭和36.7.19）

代表幹事　森　下　一　乗

昭和36年７月19日，神奈川県津久井郡藤野町吉野　550坪（坪2,800円）154万円　不動産売買契約が端艇部長と地主大房元次郎氏との間に締結された。

話は昨年の昭和35年11月にさかのぼる。高速道路６号線が向島艇庫の上を通るという話がもち上りそれがきっかけとなって一橋端艇部の長期計画を立案する必要にせまられた。

私は常々ボート部の将来の姿というものをかく考えていた。それは現在のような部員のみのものでなく，学生全体，学校全体の端艇部となることである。一橋入学者は全員体育正課でオールを取り，クラスチャンは全員が漕ぎ，夏休みは交代で合宿を経験し，春秋の校内レースは他の部に入っている学生，教職員，諸先輩共々オールをとって楽しむような状態である。それら，ボートを楽しみ，ボートを通じて体力及び健全なる精神を養う気分の満ちあふれている環境より選ばれた選手が全日本に出漕して覇をきそう。そこにおいて始めて，一橋端艇部の土台はゆるぎのないものになり，毎年々々高水準のエイト出漕及び日本漕艇界の発展にも寄与することが出来ると確信する。またアマチュアスポーツの極致であるボートを通じて心身共に優れた学生を一橋より送り出すことは有意義なことである。では何故現在それが行われていないのか。

クラスチャン及び夏季体育合宿，野次レースを通じて一般学生に対して働きかけているものの，最も大きな壁は，学校よりの交通が不便であること。隅田川の水，空気は汚く，ボートを漕ぐ環境ではないということであろう。又向島自身も有意の学生が心身を鍛えるような環境ではない。選手諸君は学校に通いながらボートの練習を行うのは不可能に近く，ボート一辺倒の現状である。やはり学生の本分が勉学にある以上艇庫が遠いということは教育施設としての意義も小さいであろう。

また戸田も距離的には向島と等しく，環境の不整備，競艇が行われていること，コースがせまいこと等により学校全体のボートクラブの地点としては不満足である。

以上のことより，学校に通いながら練習出来る場所，景色，空気，水のきれいな所，学生が勉学し，ボートをやり，すくすくと伸びることの出来る環境を綜合判断して相模湖に将来の艇庫を建設する案が出来た。まず最初の布石として土地買収がすんだことは２割方の成功である。このあとを数年かかって立派な艇庫を作るよう努力したい。

35年11月　現幹事相談の結果，多摩川及び相模湖の候補地調査にとりかかる。

12月　相模湖３候補地を検討する。

36年１月　村松先生に視察してもらう。

１月～２月　相模湖役場，藤野町役場にて地主の調査及び協力を願う。役所の税務係諸角氏にあっせんの労をたのむ。

２月　森，村松，畑，塚田，藤田，高橋諸先輩の土地見分行わる。だいたい良いとのこと。

３月～４月　斡旋３件不成功

５月２日　現地でクラスチャンレース。前期学生400名を集めて楽しい１日を過す。漕いでいて気持の良いこと。

５月８日　艇庫建設小委員会が堀川氏を委員長として結成さる。

５月18日　四神会理事会にて承認を受ける。

5月　諸角氏の斡旋は3個所にて不成功。

5月27日　村松，堀川氏と最後の手段，前町長山田尊徳氏に斡旋方を依頼に行く。

5月～6月19　日値段でおり合いがつかず山田氏席を立つ，坪2,355円が3,000円に値上りする。

6月20日　話がこわれる。直接地主の家に談判に行く。はっきり断わられる。理由は安値であること。他に買手があること。先祖伝来の土地を手ばなすのはおしいこと。そこをねばり学生としてぜひほしいという理由を力説する。真夜中になり，相手も教育施設ということで理解してくれるが，こちらの坪1,300円では絶対駄目と断わられる。独断にて2,800円にて話をきめ地主の家に泊る翌日村松先生，堀川氏に事情を話し承認を得る。

7月4日　農地転用許可おりる。県に提出する，実測を行う。

7月19日　村松，堀川氏と共に行き本契約を行う。

以上のように8ケ月の間三十数回相模湖に通い，60通の電話，話しかけた土地6ケ所，出来そうになってこわれた話2回，現在の土地も値段，感情の問題で3度話がこわれかけて土地の話のむつかしさをいやという程味わった。でも話がまとまったのは仲に立ってくれた水田，諸角両氏，地主の方の学校に対する理解，部長，堀川氏を始めとする諸先輩の援助があったからこそここまで漕ぎつけることが出来た。感謝に耐えません。　以上

相模湖艇庫用地問題の現状

一橋端艇部は昭和36年9月に将来相模湖に本拠地を移すべく，艇庫及び合宿所建設用地を購入した。土地売買契約と同時に農地法第5条に基き農地転用申請を神奈川県知事に提出し，農地を宅地に転用する許可を求めたが，諸々の事情により農地転用申請を提出してから1カ年以内に転用目的（艇庫及び合宿所建設）を達成する事が出来ないため，農地転用の許可はおりず，37年9月30日をもって農地転用申請の有効期間がきれた。そのため延期又は再申請の要にせまられたが，ここで一時的に延期又は再申請をしても有効期間は1年しか続かない。しかるに端艇部の相模湖進出は数年後でなければ成し得ない状態にあるので，交渉の結果1月末までに目的達成（艇庫及び合宿所建設）延期理由書を提出し，確定的な計画が出来てから農地転用再申請をするといった処で諒承してもらった。延期理由書は既に提出した。

相模湖艇庫問題の経過報告

（昭和41.8～42.4）

大震災以後40年に亘って一橋ボートを育んできた向島艇庫にいよいよ別れを告げねばならないときがやってきた。首都高速道路公団による高速道路6号線（日本橋―白髭橋）の最終設計図が昭和41年6月に完成し，向島艇庫の一部が道路建設予定地となったのである。

四神会・端艇部は昭和41年8月に相模湖施設建設委員会を結成し，向島艇庫の補償問題，相模湖艇庫の建設準備について検討を重ねてきた。

これまでの委員会の経過をごく簡単に報告しておきたい。第1回委員会は8月21日，戸田艇庫で行われ，経過説明，相模湖施設の構想，補償交渉の進め方など基本的問題について検討した。向島艇庫が全一橋人のリクレエーション・センター的な役割を果たしてきたことを高く評価し，相模湖施設にもその機能を移すという考え方で，その中心としてボートを考えるということを確認した。補償交渉を進めるに当たっては，大学当局と緊密な連絡を保ち，学生・先輩・大学三者が一体となってできる限り最大の補償額を獲得するという方針を確認した。

9月6日，第2回委員会が開かれ，先に述べた方針を大学当局に説明し，相互の意見調整を行った。大学側からは事務局長，経理部長，主計部長，管財係長が出席し，公団の接収方針が説明された。買収方法には用地・建物補償と機能補償の2通りあり，向島艇庫の場合，どちらを適用するにしても，公団は4,000万円前後と評価しているということである。隣りの東大艇庫も接収されるので，東大側ともよく連絡をとりながら交渉を進めようということになったが，東大は補償に対する考え方において一橋と若干異なるところがあり，全く同一の歩調で交渉を進めていくのは難しいものと見られている。

第3回委員会では，四神会・端艇部と大学の双方が，相模湖施設に関する具体的プランを持ち寄り，相模湖施設の構想について検討した。結局相模湖施設は，ボートを中心とした学生・教職員・先輩のための総合娯楽・休遊施設として考えるということで一致し，具体的には，艇庫・合宿室関係を端艇部・四神会が担当し，教職員・先輩の休憩室関係を大学当局が担当してプランを練り，調整を図るということにした。

第4回委員会においては，前田委員（昭和12年卒，端艇部総監督）から元日本道路公団用地部長の板倉巻夫氏（昭和8年卒）を訪問し，補償交渉の目標額，進め方について説明を受けたことが報告された。報告によると，先を急がずに，方針通り学生・先輩・大学が一体となって交渉に当たれば，6,000万円前後の補償額は無理なく獲得できるということであり，要は正当な要求を掲げ，足並みを乱さずに一致団結して交渉せよということである。

その後数回に亘って委員会が開かれ，向島艇庫の補償要求点の整理，相模湖の土地問題の検討などが行われた。しかし公団側が年内解決を諦め，補償交渉が具体的に始まらないうちに年が明け，現在委員会活動は小休止の段階といったところである。3月に入れば，公団側も具体的に買収にとりかかるものと見られているので，委員会も活動を再開し，当面は補償交渉に焦点を絞って活動していく予定である。

なお現在四神会・端艇部は相模湖の桂川べりに約550坪の土地を所有しているが，新施設の建設予定地とは一応切り離して考え，他にもっと優良な土地があれば，現在地にこだわらないという態度で臨んでいるが，今のところ新候補地が確定している段階ではない。

相模湖施設建設委員氏名（敬称略，卒業年度順）

畑　弘平（大14）	河西　源吉（昭6）
村松　祐次（昭8）	前田　正（昭12）
堀川富太郎（昭14）	大西　重則（昭16）
下元　進助（昭16）	金　秀太郎（昭30）
寺本　隆一（昭32）	中川　学（昭34）
安藤　博（昭37）	森下　一乗（昭37）
尾崎　昭雄（昭38）	尾藤　建二（昭39）
佐藤　義明（昭39）	町田　晶生（学生）
平岡　哲郎（学生）	（文責　町田）

1　昭和44年1月25日団交確認書（抜粋）

Ⅱ　相模湖艇庫合宿所については，国有財産管理の面を除いては，学生の自治にまかせる。（前期自治会・後期学生会）

2　昭和44年1月25日　学生間確認書

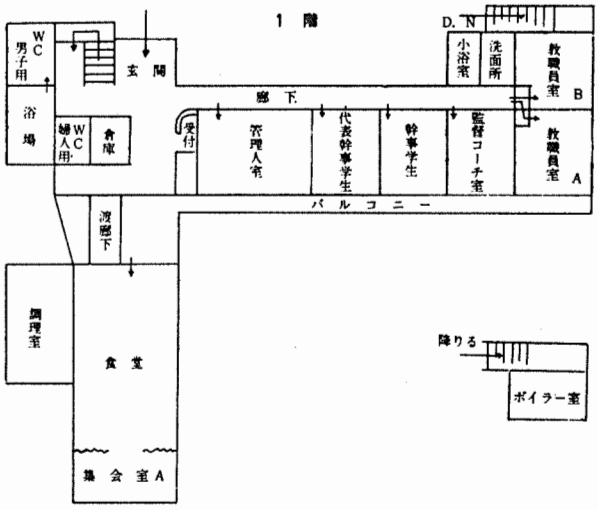
① 相模湖艇庫はボート部を中心にした全学的なボートの施設である。

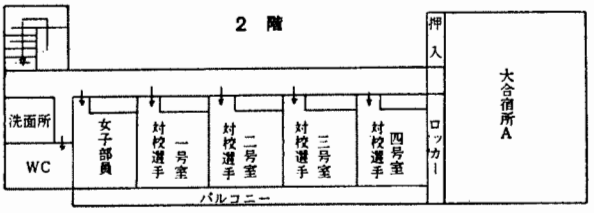
② 11月25日（昭和43年）施設合同委員会案設計図を基本的に認める。

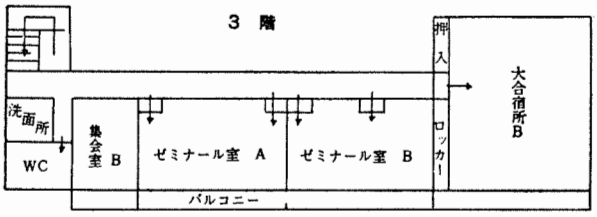
③ 1・2階に関してはボート部が従来の自治慣行にのっとり，運営を行う。

④ 3階の運営に関しては，原則的に全学的なボートの施設であるという前提に基づき，使用当事者（ボート部・体育会・自治会・文連・ゼミ幹会議）からなる運営委員

相模湖艇庫合宿所間取図







会を設ける。運営委員会において3階運営規則を定める。又概略的年間スケジュールの調整をはかる。又日常の実際的運営は，運営委員会の代表としてボート部が艇庫において窓口をもうけ，それにあたる。

後期学生会執行委員会
前期自治会執行委員会
一橋大学　端　艇　部

相模湖水面使用に関する覚書

1. 相模湖合宿所，艇庫開設にあたり，一橋大学長と一橋大学端艇部顧問教官との間に相模湖水面使用についてこの覚書をとりかわすものとする。
2. 漕艇のため相模湖水面を使用する場合は本学々生の学外授業および課外活動としての漕艇に限ること。
3. 一橋大学端艇が相模湖漕艇場を使用する場合は神奈川県立相模湖漕艇場条例，同施行規則を遵守して神奈川県立相模湖漕艇場コースを使用することとし，本学艇庫と漕艇場コースとの間は神奈川県企業庁が許可した所定の航路において徐行して航行すること。
4. 本学艇庫より上流の水面ならびに上記所定の航路以外の水面には緊急避難の場合を除いては，立入らないこと。また遊覧船，釣船その他の利用者の迷惑にならないよう注意すること。
4. 漕艇場を使用する者は予

め，遊船，釣船両組合へ連絡し，事故防止のための協力を得ること。

6. 漕艇活動中に，他船と接触の危険を認めたときは一時停止して他船の航行を優先させることとし事故防止に万全を期すること。なお，端艇部員が本学艇庫と漕艇場コースとの間の航行水面で徐行を怠ったことにより生じた事故または使用許可を得た範囲以外の水面で行動したことにより生じた事故については，その一切の責任を端艇部が負うものとすること。

7. 端艇は体育活動を目的として漕艇に使用することとし，漕艇終了後は速やかに端艇を揚陸格納すること。

8. 漕艇場コース使用の許可については申請書に使用計画書を添え端艇部顧問教官より大学長に申し出るものとし，大学長において漕艇場長の許可を得るものとすること。

9. 本覚書は2通を作成し，一橋大学長と一橋大学端艇部顧問教官と各1通を保有すること。

昭和46年2月19日

一橋大学長事務取扱
馬　場　啓之助
一橋大学端艇部顧問教官
中　川　　学

橋大主第　　号
昭和46年2月20日

相模湖遊船連合協同組合長
平　井　正　敏　殿
相模湖釣船連合組合長
五　宝　敏　男　殿

一橋大学長事務取扱
馬　場　啓之助

相模湖水面使用について

一橋大学々生の課外活動および学外授業として，別紙漕艇計画のとおり実施するに際しては下記条項について充分なる注意をもって履行することを約束いたします。

記

1. 一橋大学端艇の相模湖漕艇場使用については神奈川県立相模湖漕艇場条例，同施行規則を遵守する。

1. 艇庫より漕艇場までの水面については，別に神奈川県企業庁の許可を受け使用することとし，その航路については釣船等への影響を考慮し別図のとおり迂回，徐行する。

1. 本学艇庫より上流の水面ならびに上記以外の水面には緊急避難の場合を除き立入らず，遊覧船，釣船等他の利用者の迷惑にならぬよう注意する。

1. 漕艇場の使用にあたっては予め，遊船，釣船両組合へ連絡し，事故防止のための協力を得る。

1. 漕艇活動中，他の船との危険を認めたときは停止して遊覧船等の航行を優先せしめることによって事故防止をする。

1. 漕艇水面へは，神奈川県立相模湖漕艇場条例，同施行規則の指定する浮標の形式を改良して水面使用の安全を期するよう県庁の所管部局に対し大学からも陳情する。

なお，本学漕艇による危険防止のために浮標が不足する場合は本学においても考慮する。

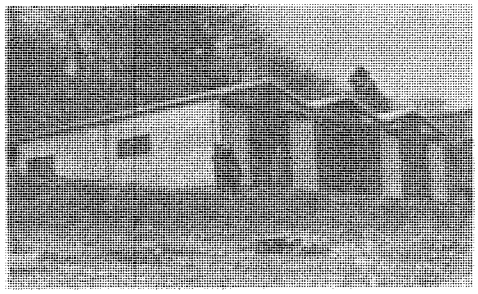
1. 端艇は，体育活動を目的として漕艇に使用するもので終了後は速やかに揚陸格納する。

相模湖艇庫合宿所完成！

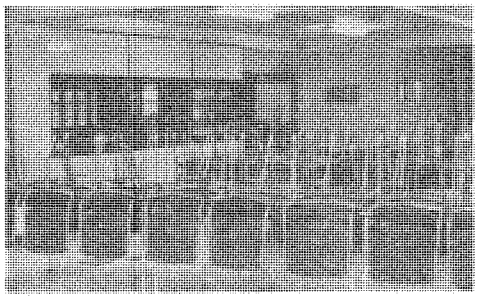
（昭和46.6.15 部報）

向島艇庫の機能補償として代替艇庫合宿所は現在ほぼ完成して居り，間もなく落成式を迎えるところです。相模湖艇庫合宿所は，風光明眉な立地にあり，春は新緑，夏は涼風，秋は紅葉を背景に鉄筋白亜3階建の威容を誇って居ります。1・2階はボート部専有，3階は一般学生・教職員も使えるようになって

います。艇庫は桂川に面しており，３棟あり収容能力はあるが，内部整備が不備であり，桟橋船台が今の所ついてないので使用は難しい。しかし今年度予算でおりる筈であり，期待して居ます。水面使用につきましても，４月20日に大学側へ相模湖遊船連合協同組合，同釣船連合組合から使用に関して異存ない旨連絡がありました。船台が取付けられ，艇が入れば，開所式後直ぐに使えます。一橋大学端艇部の更なる発展の場として大いに利用したいものです。



相模湖艇庫



合宿所食堂

一橋大学相模湖艇庫合宿所に関して

大学側と遊船・釣船組合とは，相模湖水面使用について，漕艇する上での約束をとり決め，両組合との話し合いはついており，又学長事務取扱と中川端艇部顧問教官との間に相模湖水面使用に関する覚書がかわしてある。

別の問題として，料理人雇用の問題があり，これが解決しないうちに，利用するのは大変難しいと思われる。

去る５月22日ボート部員で植樹を行ってきた。

一橋大学相模湖艇庫合宿所使用規程

（昭和47.1.24）

（趣旨）

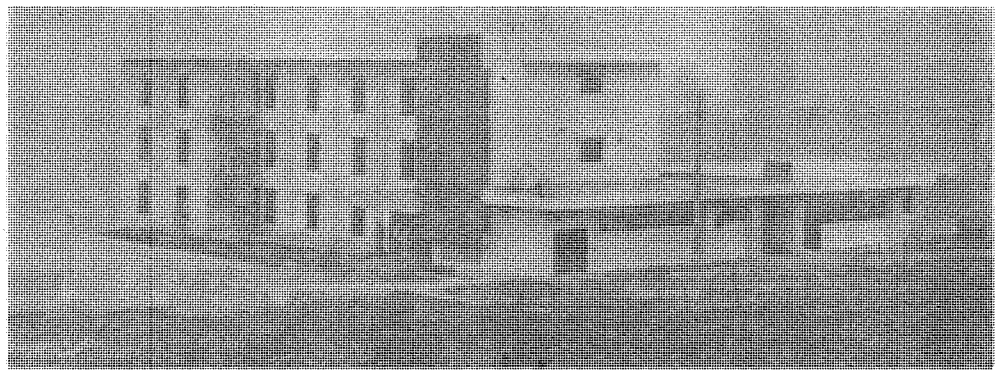
第１条　一橋大学相模湖艇庫合宿所（以下「合宿所」という。）の使用については，この規程の定めるところによる。

（目的）

第２条　合宿所は，漕艇を中心とする体育活動及び文化・研修活動に使用することを目的とする。

（管理）

第３条　合宿所の管理（申し合せ事項参



相模湖艇庫合宿所全景

照）については，学生部長が行う。

学生部長と，運営委員会との「申し合せ事項・相模湖艇庫合宿使用規程に関し，学生部長と運営委員会の間に以下の様な申し合わせをする。

(1) 使用規程第3条，条文中の“管理”はあくまでも“国有財産管理”（施設の補繕）を意味するものである。

(2) 教職員室は，運営委員会の管轄外におき，教職員に任せるものとする。

（運営委員会）

第4条　合宿所を運営するため，運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2　委員会について必要な事項は，別に定める。

（使用者の範囲）

第5条　合宿所を使用することができる者は，原則として本学の学生，大学院生及び教職員とする。ただし，学生部長が委員会の議を経て特に認めた者はこの限りでない。

（使用申込み及び転貸禁止）

第6条　合宿所を使用するものは，あらかじめ所定の使用申込書（様式第1号）に，必要事項を記入し，学務課へ提出し，使用許可書（様式第2号）の交付を受け，これを管理人に提出するものとする。

2　使用者は，他の者に転貸使用させてはならない。

（経費）

第7条　使用者は，その使用期間中の経費については，別に定める金額を負担しなければならない。

（使用許可の取消し）

第8条　学生部長は，使用を許可したのち，合宿所の目的に反し又は管理運営上支障があると認めときは，委員会の議を経て取消すことがある。

2　使用者は，使用期間中管理人の指示に従うものとする。

（管理人）

第9条　合宿所に，管理人を置く。

2　管理人は，学生部長の指示に基づき，運営委員と協力し日常業務を行なう。

（物品の使用及び返還）

第10条　合宿所備え付けの物品は，管理人の許可を得て使用し，使用後は，必ず管理人に返還するものとする。

（補修又は弁償）

第11条　合宿所並びに備え付け物品の使用は，特にてい重に取扱い，使用者が故意又は重大な過失により施設・物品等を破損及び紛失したときは，これを補修又は弁償しなければならない。

（疑義の処理）

第12条　この規程の運用について疑義が生じた場合の処理は，学生部長と委員会の決するところによる。

（発議）

第13条　この規程を改正する場合の発議は，学生部長と委員会の合議に基づいて行なうものとする。

附　則

この規程は，昭和47年3月13日より施行する。

昭和47年1月24日

前　文

この運営細則は，昭和44年1月25日の確認書にもとづいて作成したものである。

一橋大学相模湖艇庫合宿所運営細則

（昭和47年3月23日）

一．この運営細則は，一橋大学相模湖艇庫合宿所使用規程第4条にもとづき合宿所の運営について必要な事項を定めるものとする

二．合宿所の円滑適正な運営を図るため，運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2　委員会は1・2階端艇部運営小委員会と

年　　表

ボ　ー　ト　部	大　学　社　会　関　係
明治18年〔1885〕	
東京外国語学校との**合併**により，同校所有のカッター2隻の内1隻が，わが「**東京商業学校**」に，他の1隻が大学予備門(一高の前身)に移管(一ッ橋ボートの始まり)	3. 2 帝国大学令公布 4. 10 小学校令公布 5. 14 「東京商業学校」農商務省所轄より文部省の所轄へ移管 9. 22 「東京商業学校」と「東京外国語学校及び附属高等商業学校」を合併して一ツ橋に開設（生徒数 238名，内外教員数13名） 「東京大学予備門」を「第一高等中学校」に改称
	9. 尋常科3年，高等科2年の課程を決定
明治19年〔1886〕	
練習用四挺櫓艇6隻建造 **蔵前にボート係留場**を設置	9. 26 大蔵省所轄「銀行事務講習所」を本校に附属させ「銀行専修科」と称す
明治20年〔1887〕	
4. 16 帝大第1回競漕大会の招待レースとして一高・高師と対戦（敗退） （**第1回一高・高商戦**）本邦最初の対校レース	4. 東京大学向島艇庫竣工落成式，新艇進水式，第1回校内競漕大会
11. 3 **第1回校内競漕大会挙行**	10. 5 「**高等商業学校**」と改称 （生徒数446名，内外教員41名，予科1年，本科4年に課程を改正）
明治21年〔1888〕	
4. 21 帝大第2回競漕大会　高師不参加のため一高高商のみのレース（敗退） 春季競漕大会	4. 研究科規則を改め，研究年限を2年 4. 25 市制・町村制公布
—. — ボートを中心とする「**運動会**」を設立し，その規則を制定，春秋2回校内競漕大会を行うことを決定（月日不詳）	9. 「英語会」設立 水泳練習開始
明治22年〔1889〕	
3. 6 六挺櫓固定席艇4隻建造 石川島造船所製作 朱雀・白虎・青龍・玄武と命名	2. 11 大日本帝国憲法公布 文部大臣森有礼暗殺
4. 6 運動会主催　第2回競漕大会（榎本文相，清国大使，和蘭公使等来賓）	3. 15 本科4年を3年に短縮 3. 19 第1回卒業証書授与式（商法講習所創立以来の卒業生173名）
4. 21 第3回（帝大）一高・高商戦（敗退）	4. 13 同窓生による「**学友会**」設立（会

ボート部	大学社会関係
10. 27 秋季小会挙行	員200余名） 7. 3～22 入学試験施行 11. 25 本校英語会大会（帝大講義室）
明治23年〔1890〕 4. 6 第3回春季競漕大会 4. 8 第一高等中学短艇競漕会の招待に応じ，本校より4隻参加 4. 13 第4回（帝大）一高・高商戦（敗退）過熱気味のため以後中止	1. 26 高等商業学校「学友会雑誌」第1号発刊 4. 21 商法公布 4. 22 各地商業学校長会議本校で開催 4. 25 「英語会」 5. 22 「音楽会」開催（いずれも帝大講義室借用） 7. 1 第1回衆議院総選挙施行 10. 30 **教育勅語**発布 11. 25 第1回帝国議会開会
明治24年〔1891〕 4. 3 第4回春季競漕大会 4. 11 第5回（帝大）競漕大会に招待出場 5. 「舟鑑事件」（ボート過熱気味による学生処分をめぐる紛争） 11. 18 本科3年生親睦第1回競漕会	1. 12 東京・大阪商業会議所設立 5. 11 大津事件（ロシア皇太子襲撃） 7. 予科2年，本科3年に改正（従来は補充科2年，予科1年，本科3年） 11. 28 陸上運動会（上野不忍池畔） 12. 25 矢野校長排斥運動（学生60余名辞職勧告）
明治25年〔1892〕 4. 9 第6回（帝大）大会に3艇招待 4. 16 第5回春季競漕大会 4. 24 第一高等中学第5回競漕大会に招待4艇出漕 6. 4 本科3年第2回競漕会	1. 10 校長排斥運動首謀学生45名退学処分 6. 21 鉄道敷設法の公布 11. 21 第2回卒業証書授与式（帝大講義室）（明23年以降281名，有栖川宮，総理大臣，文部大臣，渋沢商議委員祝詞）
明治26年〔1893〕 4. 9 第6回春季競漕大会	4. 14 集会・結社・出版・版権法公布 4. 27 矢野二郎校長辞任 8. 予科1年，研究科1年に短縮 12. 15 三菱合資会社設立
明治27年〔1894〕 4. 8 第7回春季競漕大会 4. 一高・高商戦再開への動き，高商側対戦を拒否	4. 17 下関条約調印　三国干渉 6. 新築落成した新講堂で第4回卒業式 6. 25 高等学校令公布「第一高等中学」を「第一高等学校」に改称
明治28年〔1895〕 4. 27 第8回春季競漕大会 7. 14 琵琶湖連合競漕大会に出漕	7. 16 日英改正通商航海条約調印 8. 1 **日清戦争**勃発（～28年）

ボート部	大学社会関係
明治29年〔1896〕	
4. 11 一高・高商戦復活（第5回）（敗退）	9. 本年専攻部卒業生福田徳三母校講師に就任
4. 26 第9回春季競漕大会　本校卒業生在職の三菱・三井・郵船の3社クルーの第1回招待レース	10. 航海奨励法実施 この年恐慌勃発
明治30年〔1897〕	
4. 一高・高商戦再び中止	2. 5 八幡製鉄所開設
4. 6 第10回春季競漕大会	4. 22 本校に「附属外国語学校」を設置英仏独露西支朝の7カ国語
9. 「運動会」端艇4隻建造を議決	10. 1 金本位制の確立
明治31年〔1898〕	
1. 本科2年の銚子遠漕 運動会規則制定	1. 9 「学友会」を合併した「**同窓会**」設立
3. 5 浅草蔵前に仮艇庫建築（104坪・工費800円）	6. 万国郵便条約調印
3. 13 新艇4隻建造進水式（明22年建造の旧艇と同名）	6. 東帝大清水書記官本校校長に就任，学生新校長任命に反対（流水事件）
4. 10 ～12 第11回春季競漕大会	8. 6 清水校長辞任
4. 帝大校内レースに本校4クルー招待出漕	11. 20 高商対東高師第1回テニス大会
11. 13 秋季競漕会	11. 一高・高商間に己亥連合競争会成立，榎本子爵会長両校校長副会長
明治32年〔1899〕	
4. 9 第12回春季競漕大会（北白川若宮殿下来臨）	1. 関税定率法の実施
4. 30 第6回一高・高商戦（従来の帝大校内大会の来賓レースとは異なった独立の「巳亥連合競漕大会」）敗退	3. 3 「商業数員養成所」を設置
	3. 25 同窓会会誌第1号発行
	4. 4 本校「附属外国語学校」を「**東京外国語学校**」と改称して，本校より分離独立
10. 29 秋季端艇競漕会	—. — 各地に同窓会支部設立
明治33年〔1900〕	
4. 8 第13回春季競漕大会（北白川諸若宮来臨）	3. 10 治安警察法公布
	4. 「運動会規則」を改正し，端艇部のほかに柔道部，弓術部，撃剣部を設置
	6. 11 北清事変
	7. 1 本校「同窓会」主催の渋沢栄一翁還暦及び叙爵祝賀会の席上，渋沢男爵初めて「商業大学」設立の必要を力説
	10. 3 同窓会臨時常議員会開催，商業大学設置のための調査委員会を選任
明治34年〔1901〕	
4. 14 第14回春季競漕大会（最後の分科競漕会）	2. 5 八幡製鉄所操業開始
	6. 専攻部規程を改正し，専攻部卒業

ボート部	大学社会関係
	者は「商業学士」
	9～10 福田徳三，関一ドイツ留学より帰国
明治35年〔1902〕	
4. 6 第15回春季競漕大会（**初のH・C・S方式**）S組優勝	1. 30 日英同盟締結
	3. 27 本校を「**東京高等商業学校**」と改称（学生数863名）
12. **銚子遠漕開始**	4. 11 日本興業銀行開業
12. 6 明治33年34年と中断されていた一高・高商戦再開を申入れたが，一高側一切の対抗試合を禁止する決議のため謝絶	11. 1 旧運動会を合併した「**一橋会**」創立，一橋会員はすべて端艇部員とし，端艇，庭球，柔・剣・弓道の他に研究，編纂，英語の3文化部の計8部を設置
明治36年〔1903〕	
4. 5 第16回春季競漕大会（**第1回一橋会主催**端艇部競漕会）	2. 7 一橋会研究部第1回討論会
	3. 「一橋会雑誌」発刊（年4回）
10. 同窓会ロンドン支部一橋会端艇部へ銀杯を賜る（**ロンドン・カップ**）	5. 14 ロンドン同窓会支部設立
	12. 6, 20 研究部講演会
11. 3 秋季競漕大会	
12. 新艇4隻建造の募金	
明治37年〔1904〕	
1. 28 一橋会会費及び端艇部新艇建造募金4500円私消事件発覚	2. 10 **日露戦争**勃発（～38年）
	2. 12 対露宣戦の提灯行列を計画するも当局より中止命令
1. 31 新艇4隻建造（青龍，朱雀，白虎，玄武）	8. 2 福田教授休職処分
4. 3 第17回春季競漕大会	2. 15 一橋会歌「**長煙遠く**」制定
10. 11 端艇部員，編纂部幹事菅礼之助ほか1名除名処分	
明治38年〔1905〕	
1. 新艇4隻建造	5. 17 一橋会編纂部主催第1回「投書家懇談会」を上野韻松亭に開催
2. 4 S組単独レース	5. 27
2. 部員菅礼之助の復学許可	～28 日本海海戦（**日露戦争**）
4. 3 第18回春季競漕大会	9. 22 本校「開設記念日」制定
6. 向島艇庫新築用地二百数十坪購入（言問と帝大艇庫との間）	一橋会大会開催，向島艇庫新設費用1万5千円の1割を会員の負担とすることを議決
7. 端艇部内に水泳会を新設（茅ケ崎）	9. 28 ポーツマス条約
	11. 10 一橋会編纂部主催投書家懇親会（上野韻松亭）
明治39年〔1906〕	
3. 3 **向島新艇庫**が完成し，牧野文相をはじめ仏・米・清各国公使などを招き，落成式挙行（10日入艇式）	1. 7 第一次西園寺（政友会）内閣成立
	2. 24 堺利彦ら日本社会党結成
	各地の軍関係工場で争議

ボート部		大学社会関係	
4. 3	第19回春季競漕大会　三社レース復活	3. ～ 9	東京市電電車賃上げ反対運動
10.	艇庫新築寄付金19,677円に達し，建築費17,662円残2,015円端艇製造基金	6. 18	矢野二郎翁逝去（62歳）
11. 4	秋季小会開催　S組勝つ。	6. 27	如意団創始
11. 16	早大端艇部より対校競漕の申込みあるが拒絶	11. 26	南満州鉄道設立 一橋会研究部の各種講演会，弁論大会開催
12. 23 ～1. 8	銚子遠漕	12. 10	専攻部卒業生の呼称を「商業学士」より「商学士」に改正
明治40年〔1907〕			
4. 3	第20回春季競漕大会　H組優勝	2. 4	足尾銅山暴動
4.	端艇部製造基金2,317円に達し，端艇3隻・ヨット1隻・船台4隻分の製造決算報告	2. 23	「商科大学設立に関する建議案」衆院にて可決，次いで貴族院も通過（3. 26）
7.	一橋会端艇部水泳会を興津で開催	6. 6	別子銅山暴動
11. 10	秋季小会開催　S組勝つ	9. 11	東帝大法科大学に経済科を新設
12. 30	S組銚子遠漕　第二選手が乗る旧艇朱雀が**宝山沖**において烈しい風波のため転覆　村井俊二，柏木粂作2選手死亡	9. 22	本校開設記念式ならびに一橋会大会開催（大隈重信等の講演）
		1. 22	本校同窓会遭難学生弔慰捜索資金を募集
明治41年〔1908〕		4. 30	東帝大法科大学に経済科設置案報道
1. 6	一橋会臨時理事会開催，一橋会端艇部は**旧艇朱雀号遭難事件**責任問題につき，5名の生存者は端艇沈没並びに溺死に関して責任なしとの結論発表	6. 22	赤旗事件　荒畑寒村ら検挙
		7.	―差別糾弾闘争，小作争議増加―
		7. 10	第二次桂内閣成立
1. 30	朱雀号遭難事件に付，一橋会臨時総会を開催，一橋会雑誌第39号に付録として詳細に「旧艇朱雀難遭事件記事」掲載	8. 3	同窓会大学問題委員会開催，委員成瀬隆蔵文相訪問陳情
2. 14	神戸高等商業より対校競漕の申込み来る（拒絶）	9. 11	東帝大に経済科開設
4. 3	第21回競漕大会　S組全勝		
7.	一橋会端艇部水泳会を北条で開催		
11. 3	秋季小会開催　C組優勝	2. 24	大学問題に関し第1回学生大会開催
		2. 27	第3回大会決議の文相，両院議長への請願書の進達を松崎校長拒否，学生処分に対し校長排斥運動
明治42年〔1909〕		4. 17	同窓会春季総会にて「商科大学」設置3議案を決議
4. 3	第22回競漕大会　C組優勝 上海の高商卒業生より，第三選手レースに「揚子江杯」が贈られ，S組が獲得	4. 26	関一，佐野善作等4名の教授辞表提出
7.	一橋会端艇部水泳会（北条）	5. 5	松崎校長辞職
11. 7	秋季小会　C組優勝	5. 6	文部省．東京高商専攻部廃止の省令（**申酉事件**）
11. 29	この年より予科クラスのセレクションレース（800m）始まる。	5. 11	東京高商学生総退学「**校を去るの辞**」
12. 23	銚子遠漕（H．C～12. 31） （　S～12. 28）		

ボート部	大学社会関係
	5. 24 学生復校
	6. 25 専攻部今後4年間存続の文部省令公布（事件解決）
	10. 26 伊藤博文ハルピン駅頭で暗殺
	11. 三井合名会社設立
明治43年〔1910〕	
1. 23 **新ヨール艇**（クリンカー・スライド・シックス）4隻を新造，進水式（本邦最初の6人漕滑席艇使用）	5. 25 大逆事件　幸徳秋水ら逮捕
	8. 22 「韓国併合に関する」条約調印
	9. 9 「一橋消費組合」設立
4. 第23回競漕大会　C組優勝	
7. 水泳会（北条）	
明治44年〔1911〕	1. 31 申酉事件により引責辞職された関一，佐野善作両氏教授に再任
4. 第24回競漕大会　C組優勝	
7. 水泳会（北条）	8. 30 第三次西園寺内閣成立
	11. 26 一橋会柔道部道場新築落成式
明治45年〔1912〕	3. 25 専攻部廃止の明治42年文部省令を廃し，省令にて存続と制定
4. 4 第25回競漕大会　H組全勝	4. 23 一橋校風刷新のための「校風問題演説会」開催
	6. 22 一橋会全役員辞職，総選挙による新理事会発足
	7. 29 **明治天皇崩御**
	9. 13 明治天皇大葬
	12. 21 第三次桂内閣成立
大正2年〔1913〕	
1. 15 新ヨール艇4隻新造，所有艇数19隻。	6. 13 山本権兵衛内閣成立
4. 3 第26回競漕大会　C組優勝	8. 孫文ら日本亡命
6. 明治45年卒業生よりヨール艇1隻寄贈	11. 25 商業大学問題に関する第1回一橋会委員会，文部当局と交渉
7. 水泳会（北条）	
大正3年〔1914〕	
2. 4 朱雀号遭難の村井・柏木両氏の七回忌を宝山で挙行	1. 23 シーメンス事件
	4. 16 第二次大隈重信内閣成立
4. 3 第27回競漕大会　C組優勝	7. 28 **第一次世界大戦**勃発。
7. 水泳会（北条）	8. 15 佐野教授（初めての本校出身）校長に就任
7. 28 関部長辞任，志田部長就任	
10. 31 秋季小会　S赤組優勝	8. 23 ドイツに宣戦布告
	11. 14 **「如水会」創立総会**
大正4年〔1915〕	
4. 3 第28回春季競漕大会　C組優勝 8年ぶりに三社レース復活	1. 12 本校専攻部規程を改正し，修学3年の官立高商にも入学資格を認める（大学昇格への準備）
9. 22 創立40周年記念祝典に伴い，端艇競漕大会開催	1. 18 対華21ケ条要求交渉開始
11. 15 第29回端艇競漕大会　S組優勝（本年より秋季	

ボート部	大学社会関係
小会は大会となる）	9. 14 学期制を改正，毎年3月末を終期と決定 9. 21 文部省新大学令案発表 9. 22 本校創立40周年記念祝典 11. 10 大正天皇即位大礼（本校祝賀式） 12. 2 本校用地の一部の如水会館建設敷地借用出願
大正5年〔1916〕 3. 25 春季銚子遠漕を行う。 ～4. 5 言問艇庫改築落成式（観覧席増設）を兼ね，春季競漕小会開催　C組優勝 5. 28 8. 30 秋季銚子遠漕 ～9. 10 11. 5 第30回競漕大会　C組優勝	1. ～3. 本校卒業生安宅弥吉，内田信也，犬塚信太郎，牧野元治郎氏等より多額の寄附金 3. 27 三井家寄贈の専攻部校舎新築落成開館式 4. 23 弓術部新道場落成式 11. 25 渋沢男爵喜寿祝賀会 10. 9 寺内正毅内閣成立
大正6年〔1917〕 3. 28 春季銚子遠漕 ～4. 12 4. 22 新艇7隻の進水式を行う 5. 26 春季小会　H組優勝（新ヨール艇による初めてのレース）（固定席から滑席へ） 10. 31 第31回競漕大会　C組優勝（天長節）	2. 18 一橋会寄附による柔剣道場落成式 5. 14 内田信也氏寄贈「研究館」開館式 9. 10 孫文，広東軍政府樹立 9. 28 如水会・同窓会寄贈の御大典記念図書館開館式 11. 7 ロシア革命
大正7年〔1918〕 3. 23 春季銚子遠漕 ～4. 12 5. 19 春季小会　S組勝つ 10. 30 第32回競漕大会　C組全勝	2. 23 「如水会館」上棟式 7. 2 シベリヤ出兵 8. 13 日比谷米騒動 9. 29 原敬内閣成立 11. 11 第一次世界大戦終結 12. 6 新大学令，高等学校令公布
大正8年〔1919〕 3. 25 ～4. 17 春季銚子遠漕 7. 福田徳三教授端艇部長に就任 11. 10 第33回競漕大会　C組全勝	2. 普通選挙要求の大示威運動起こる 3. 31 勅令第71号「**東京商科大学**」官制公布，予科・附属商学専門部・商業教員養成所設置等を制定 4. 30 パリ平和会議 9. 29 「**如水会館**」開館式
大正9年〔1920〕 4. 11 一橋会端艇部第34回競漕大会（商大昇格後第1回）を開催　第一選手S組，第二選手S組，第三選手C組が優勝 6. 1 **日本漕艇協会創立**　加盟校は商大・東大・早大・明大・高工・外語・高師の7校，会長に岸清	2. 5 慶応義塾大学・早稲田大学，大学令による初めての大学として設立認可 4. 1 東京高商専攻部を昇格，**東京商科大学開設**

ボート部	大学社会関係
一氏，名誉会長に加藤寛治氏推挙	4. 15 明治・法政・中央・日本・国学院・同志社の各私立大学設立認可
7. 一橋会端艇部，向島艇庫増築と新式端艇建造を企画，資金募集趣意書を発送	6. 雑誌『一橋』第1号発刊
佐野学長，端艇部長併任	6. 30 同窓会を「如水会」に合併
9. シェルエイト「玄武」進水	
10. 14 シェルエイト「朱雀」進水	
10. 23 **日本漕艇協会第1回インターカレッジ**向島で開催（商大・東大・早大・明大・高工の5クルー参加―高師，外語は新式艇未建造のため不参加）東大優勝	
～24	8. 31 『如水会会報』第1号発刊
	9. 23 第1回東京・京都両帝大競漕会，滋賀県瀬田川2マイルコースで開催　日本最初の8人漕滑席艇レース（東大勝利）
	11. 15 国際連盟第1回総会
大正10年〔1921〕	
4. 17 第35回競漕大会開催　第一選手H組優勝，昨秋以来の漕法研究の成果を見る大会，第一選手はシェルエイト，第二，第三選手はフィックス	5. 1 東都専門学校庭球軟球で開始，単・
～29	複共に慶応優勝　関西専門学校は秋から硬球トーナメント開始
5. 22 新入生クラスチャンレース	7. 20 京大，高専大会を開催　野球：神
8. 18 各組ごとに銚子遠漕実施	～28 戸高商，庭球：長崎医専，柔道：五高，剣道：六高，弓道：八高が優勝
10. 8 第2回インターカレッジ対校選手出陣式　全学挙げて必勝祈願	8. 3 第19回全国中等学校競漕大会開催
10. 23 日本漕艇協会第2回インターカレッジ競漕大会	9. 5 デ杯に日本（熊本・清水・柏尾本校OB）初参加，インド・オーストラリアを破り，デ杯保持国アメリカに敗れる
～24 を隅田川で開催（参加校は東・商・早・慶・明・拓殖・高師・高工・外語の9校）皇太子殿下御観覧	10. 1 第2回東京・京都両帝大対抗競漕会，隅田川で開催　東大連勝
商大は第一次予選で高工に勝ち，第二次予選で慶応に勝ち，東大との決勝で**商大優勝**，艇差2艇身・タイム10′23″6	11. 4 原敬首相，東京駅頭で刺殺
大正11年〔1922〕	
4. 14 英国皇太子来日，我が皇族の臨場を仰ぎ台臨閲艇式開催　海軍カッター，東・商・早・明・日・高師・高工・外語・拓大の10校クルー参加	2. 6 ワシントン会議で海軍軍縮条約，中国に関する九カ国条約調印
	4. 商大予科入学試験　志願者2077名合格205名で競争率10倍以上
4. 16 第36回競漕大会開催　第一選手H組優勝	6. 6 高橋内閣総辞職
10. 21 日本漕艇協会第3回インターカレッジ競漕大会	6. 12 加藤友三郎内閣成立
～22 に出場，予選で早大に敗退，艇差2艇身，優勝は早大	9. 24 慶応対同志社対抗競漕会，瀬田川で開催　慶応勝利
11. 4 秋季小会開催	10. 本学ラグビー部創設，一部ボート部員参加
11. 19 日本漕艇協会スカル競漕会に商大遠山選手優勝	12. 2 一橋会規則起草委員会39対12票をもって本科・予科・専門部の「三科分立論」採用を決定
大正12年〔1923〕	
4. 22 第37回競漕大会開催　第一選手（2マイル）C	3. 東京学生柔道連合会結成

ボート部		大学社会関係	
	組優勝	5. 30	学長より専門部養成所の廃止，横浜高商設立の提案（如水会，学生の反対で存続と決定）
9. 1	**関東大震災**により向島艇庫焼失	9. 1	関東大震災のため本学一ツ橋校舎は三井ホールを除いて全て焼失崩壊，臨時休校
12. 9	他校に先駆け復興レース挙行　慶大の好意により借艇（7隻） 艇庫及び愛艇の追悼式を行う，端艇部員に「復興」の気運漲る	10. 3	震災後の地方への一時帰郷学生との連絡のため日刊『一橋時報』発行，のちの『一橋新聞』の前身
		10. 4	本学敷地及び石神井の運動場に仮校舎建設に着手
		12. 1	本科・専門部養成所3年生は一橋本校，予科は東京高校（幡ケ谷），専門部・養成所1・2年は農業大学（渋谷）にて授業再開
大正13年〔1924〕			
4. 20	第38回競漕大会開催　第一選手S組優勝	1. 7	清浦奎吾内閣成立
4. 25	フォア選手権に備え向島・鈴木方に合宿練習開始（一橋漕艇クラブ・一橋レッドオアーズ・四神会）	3.	府下石神井の本学運動場に仮校舎竣工
5. 10 ～11	一橋会端艇部・日本漕艇協会主催第1回全日本フォア・スカル選手権競漕に参加，フォアで優勝	4. 16	本科は一ツ橋焼残り校舎及び新築仮校舎，予科は石神井仮校舎にて授業開始
6. 21	対校選手スタート会 プレジデント（主将）制度を採用	4.	本学生有志によるSPS労働学校開設（芝公園友愛住宅）
8. 20	一橋会端艇部出身者から成る「四神会」震災による全艇喪失の再建を図るため総会（帝国ホテル）開催	6. 15	一橋会より『**一橋新聞**』発刊（月2回）
8.	専門部端艇部の事業として小冊子『朱雀』発刊（謄写印刷200部）	6. 23	本学OB岡本忠選手国際テニストーナメント（ウインブルトン）に出場惜敗
9. 17	レース用エイト艇岡本造船所にて竣工	8.	本学と箱根土地㈱との間に国立移転に関する仮契約調印
10. 5	日本漕艇協会主催第4回全日本レガッタに出場 決勝で明大に敗退	9. 22	第49回本学創立記念祭を挙行 本年は余興をやめて大講演会開催，同日端艇選手出陣式，一橋会総会
11. 4	予科端艇部，漕法研究タンクを石神井校門前に設置	10.	本学予科専門部にホッケー部創設
11.	在ニューヨークの先輩よりハドソン・カップ寄贈		
12.	赤羽（現在の北区赤羽北2丁目25番付近，浮間橋袂）にバラック艇庫建設		
大正14 〔1925〕			
4. 12	汎一橋四神会第1回競漕大会開催	2. 6	㈱兼松商店より「兼松講堂」建設資金寄付
4. 19	一橋会端艇部第39回競漕大会開催	4.	日本漕艇協会が全国的組織に改組され，各実業団体，諸官庁及び青
9. 19	本学創立50周年記念祝典の一行事として記念端艇競漕を開催		

ボート部	大学社会関係
9. 26 第5回10大学対校レガッタ，本学優勝 ～27 日本漕艇協会予選で早大に勝ち，準決勝で東大を破り決勝で明大と当たつたが，接触事故により明大失格，**商大優勝**（第2回） 10. 3 凱旋式を挙行 10. 24 クラスチャンレース 10. 25 S組レース	年クラブ等の関東，関西の漕艇協会，全国学生漕艇連盟等を包含 4. 治安維持法公布 7. 18 一橋会が関東大震災にて焼失した艇庫，端艇，柔剣弓道場の復興資金の寄付募集開始 7. 大学・高専に軍事教育実施 9. 20 本学開校50周年記念大運動会（石神井校庭） 東京五大学野球リーグに東大正式加盟 9. 22 **開校50周年記念式典**（加藤首相，岡田文相，片岡商相，外国大公使，渋沢子爵，鎌田慶大総長参列）一橋会編纂の「一橋五十年史」発刊 11. 10 庭球部テニスコートが一ツ橋本学敷地内に完成 12. 8 「東京商科大学創立50周年記念論文集」刊行
大正15年〔1926〕 1. 5 一橋会端艇部主催**第1回高商レース**開催される（参加校，本学専門部・大倉高商・彦根高商）専門部優勝 4. 25 第40回競漕大会開催　第一選手C組優勝 9. 18 対校選手出陣式 9. 19 秋季小会開催　専門部第一選手H組優勝 9. 25 第6回全日本レガッタが千葉医大の加入により ～26 11校参加で開催，本学は予選で明大に敗退，明大優勝 11. 5 S組レース 11. 28 青龍会主催のH組レース	1. 15 京都帝大など全国の社研学生検挙 2. 13 一橋会総会　従来の組織を改めて社団法人とすること及び社団法人東京商科大学一橋会定款共に可決 4. 1 国立駅舎完成 6. 6 国立運動場グラウンド開き 8. 26 デ杯アメリカゾーンに日本チーム ～28 （原田・鳥羽・俵・清水）優勝，インターゾーン決勝（ニューヨーク）でフランスに敗退 10. 23 明治神宮野球場竣成　皇太子殿下，優勝杯（東宮杯）を東京六大学野球連盟に下賜 11. 14 **如水会館修築復興工事完成**　開館披露式渋沢子爵寿像除幕式，同日国立にて先輩学生交歓大運動会
昭和2年〔1927〕 2. 13 専門部会端艇部主催競漕会開催 4. 24 第41回春季競漕大会開催　第一選手H組優勝 6. 「復興院」隅田公園（リバーサイドパーク）に美観を添える意味で，本学と東大の木造艇庫を鉄筋コンクリート造りに改築するよう勧告	2. 専門部会歌「万象光輝きて」決定発表 4. 15 本学専門部，教員養成所国立仮校舎に移転し授業開始 4. 20 田中義一内閣成立

ボート部	大学社会関係
7. 11 全国第2回高商レースは本年取りやめと決定発表	4. 29 専門部国立移転記念式（祝賀会・講演会・運動会）
9. 18 端艇部秋季小会を開催　第一選手S組優勝	6. 19 一橋会バスケットボール・コート落成
9. 24 第7回インターカレッジ・レガッタ開催	9. 28 専門部理事会で専門部独立運動を討論
～25 （拓大の新参加により12校出場）**本学優勝（三度目）**	11. 6 **兼松講堂落成式**　弓道場落成
第一予選　高師に6艇身差	11. 14 如水会より渋沢子爵寿像大学に寄贈除幕式
第二予選　帝大・早大　帝大に差1艇身半 タイム6′17″	
決　勝　明大を破り優勝　7艇身差 タイム6′46″	
11. 24 クラスチャンレース	
昭和3年〔1928〕	1. 10 閣議，運動競技を文部省所管と決定（従来内務省と係争中）
4. 22 一橋会ボート部第42回春季大会開催	1. 14 第1回全日本学生スキー競技大会を青森大鰐で開催，北大優勝
～23 暴風雨のため第一選手競漕は3艇共沈没，23日に改めてレースを行う，第一選手S組優勝	1. 19 専門部学生大会（専門部独立問題及び学制改革問題について討議）
5. 1 昭和3年度一橋会本科会確定予算，総額7,000円のうちボート部は1,285円（16の文化部，運動部のうち最高額）	1. 27 日本学生陸上競技連合結成
	1. 28 一橋会定期総会，全一橋を挙げて専門部独立に尽力することを可決
	2. 20 第16回衆議院総選挙（最初の普通選挙）
	3. 15 三・一五事件
	4. 24 本学庭球部牧野選手，関東インターカレッジで優勝
	5. 5 人見絹枝，第5回日本女子オリンピック大会400m競走に世界新記録（59秒0）を樹立
	5. 11 一橋会総会ならびに申酉記念式挙行
	5. 20 予科が石神井へ移転して満5年，第1回の予科記念祭を開催
	5. 26 第1回全日本学生陸上競技会，神宮で開催　早大優勝
	～27
	6. 4 本学庭球部の牧野・野村両君，関東庭球選手権大会決勝に出場，ダブルスは慶大志村・山岸組に敗れ，シングルスにおいて牧野優勝
	～5
	6. 13 独立問題に関し，専門部学生一同国立に会して協議，独立期成委員会は本部を神田に移して本格的独

ボート部		大学社会関係	
			立運動を開始
		6. 16	大正11年1月以後，本日現在までの学生死亡数は100余名に達し，本学学生の寒心すべき健康状態発表，病気は主に呼吸器病
		6. 17	専門部独立期成委員会，6月13日の学生大会における生徒一同の熱情を勝田文相に訴えるべく，大学長の添書を付して全生徒署名の陳情書を文部大臣宛提出
7.	アムステルダムのオリンピックに日本代表フォアクルー及びシングルスカール（石井金一郎）初参加 （ピックアップクルーに反対して本学候補選手不参加，コーチにのみ本学出身小松栄氏参加）	7. 2	専門部独立予算，文部省議において否決，この問題に特に尽力された内田信也氏は，如水会側，大学側および期成委員と面談，以後一切を同氏に一任して運動を打切り
7.	半田清企画初めての「乞食遠漕」	7. 9	予科当局は，学生の「社会科学」の研究および社会運動について特別の注意を依頼する文書を父兄に郵送
		7. 28 ～ 8. 12	第9回オリンピック大会アムステルダムで開催。参加国46，参加者3,015。日本は三段跳びで織田幹雄，水泳200m平泳で鶴田義行優勝，初めての金メダル獲得
7. 29	高垣部長を加え，対校選手銚子遠漕		
8. 1	第3回全国高商レースに商大専門部クルー優勝		
8.	赤羽艇庫豪雨で浸水（ボートは無事）		
8.	遠山コーチ設計になる独創的なエイト新艇建造，マホガニー材使用，艇長57呎，幅22吋，横断面U字型，縦断面は舳手から7番迄直線 （スマート過ぎて対校選手乗りこなせず，レースには不使用）	8. 13	専門部独立予算，大蔵省において不承認，昭和3年度における独立は不可能
9.	第8回インター・カレッヂ・レガッタ予選で早大に敗退 早大は2回目の優勝 早大は商大にならい，フェアバーン漕法を採用	9. 11	第7回全日本庭球選手権大会に出場した本学牧野元君，シングルスに優勝，ダブルス出場の牧野・野村組は準決勝において，慶大の山岸・志村組に敗退
		9. 29	専門部寄宿舎「中和寮」（渋沢子爵命名）開寮式
10. 12	ボート部幹事会で来春よりクラス・チャン以外は専らスライディング艇選手を養成するため，第一，第二選手はシェルエイト，第三選手はクリンカーフォアでレースすることを決定	10. 6 ～ 7	日本学生対フランス対抗陸上競技会，神宮で開催 日本77.5—71.5フランス（陸上競技実況放送の初め）
		10. 13 ～14	東京玉川プールで国際水上競技大会開催　朝日新聞社，世界一流6選手　ワイズミューラー，ワイヤット，ミーニー嬢(各アメリカ)，ラーデマッヘル(ドイツ)，アルネボリー（スウェーデン）を招待
		11. 3	全国学生剣道連盟発会式

ボート部	大学社会関係
	第1回全日本大学・高専剣道優勝大会を陸軍戸山学校で開催
昭和4年〔1929〕	
	2. 5 国分寺～国立間に初めて省線電車が延長開通。ただし正式運転は5月から
	3. 19 深刻な昭和恐慌により卒業生半数就職不能
4. 春季競漕大会用の新優勝旗作成（旧優勝旗が優勝者縫いこみのスペースなくなったため）	4. 27～28 第9回全日本バスケットボール選手権大会が行われ，決勝戦で早大を破り優勝，選手権を獲得
4. 21 第43回春季競漕大会開催，第一選手優勝H組 この年より，従来の3科制（第一選手，予科，専門部）を改め，H.C.Sの第1・第2・第3選手制	6. 東京，神戸，大阪三商大野球リーグ誕生
6. 1 クラスチャン・レース	7. 1 文部省に社会教育局を設置，また学生課を部に昇格，思想対策を強化
6. インターカレッジ・レースのコースが変更され尾久の学習院艇庫下流2,000m。（白鬚橋橋梁工事のため，向島コース使用できぬため）本学は千住の上手に対校艇庫を造り，付近に合宿して練習，コーチ鷲島富造氏	7. 2 田中内閣総辞職，浜口雄幸内閣成立
	7. 12 専門部独立問題に関し，同期成委員会は学生大会の決議にもとづき，専門部生徒600名の署名と学長の添書を付し，文部大臣に陳情書を提出
7. 14 第4回全国高商レースにおいて本学専門部優勝 対校レースが波静かな尾久で行われる所から，静水を見越し，長58呎，幅20吋の画期的新艇を建造 （鷲島コーチ設計） この艇も浮力不十分かつ向島コースには不向きのため，以後使用されず	8 震災で失った各運動部諸設備復興のため一橋会では現在まで2回にわたって資金募集を行ったが予定金額に達せず，第3回目の資金募集趣意書をとくに新入生父兄あてに発送
	9. 28 柔道部創立30周年祝賀会
	10. 1 商業実務専修所，夜間部本科の授業で本日より開始
	10. 一橋会解散説，運動部反対声明
	11. 1 専門部同人700人をはじめ広く一橋人の熱望する専門部の独立は先に文部省の省議は通過したが，本日の大蔵省省議において新規事業費削減の主旨によって否決
9. 15 秋季小会 第一選手C組優勝 向島艇庫，区画整理のため現在地より約70mほど上流の敷地に移転が決定，本日の秋季小会後直ちに取り壊し作業開始	11. 4 商学専門部本館竣工
9. 23～24 第9回関東インターカレッジ選手競漕において，準決勝で慶大に15cm敗退。第1回ロンドン杯（高専学部）帝大（工）の独漕（本学は参加せず）	11. 19 一橋会専門部会主催の移転記念祭
9. 29 第2回全日本漕艇選手権大会（秩父宮杯）	11. 20 「大平洋クラブ」発足
11. 23 全日本フォアスカル選手権大会	
12. 7 向島艇庫の復興工事が開始（鉄筋コンクリート3階建）	

ボート部	大学社会関係
昭和5年〔1930〕 東商対校競漕の復活，条件折り合わず交渉不調	1. 全国高校長会議，指導教官制度の実施　スポーツ奨励などの左傾防止策を決定 1. 28 極東オリンピック大会(本年5月)出場のわが国バスケットボール選手18名の候補者中，本学より3名選出
4. 20 一橋会ボート部第44回春季競漕開催 第一選手C組優勝，四神会対淡青会（東大OB会）のレース	4. 専門部校舎全般の新築成り移転完了，予科の移転地，小平の敷地縄張り区切り伐採を開始
4. 28 向島新艇庫の上棟式を挙行	4. 7 国立本館上棟式
5. 8 元端艇部長福田徳三博士逝去（享年57歳）	4. ロンドン海軍条約調印
5. 15 対校選手のスタート会（コーチ，遠山不羈夫，宇治原兼一両氏）	4. 30 全国高等学校体育連盟（旧制）創立
	5. 卒業生の就職本決まりは本・専とも6割見当の不成績（過去9割以上の実績）
	5. 4 専門部主催の移転および新校舎落成記念式挙行
6. 22 商大対明大，商大専門部対大倉高商の2対校レガッタ，1/3艇身差で明大に勝，利明大からの申込みによる練習レース	6. 2 わが国最初の学生教練特別検閲に高専代表として本学予科・専門部が選ばれ，国立に白川大将を迎えて査閲，なお当日および前日等に反帝同盟ビラ撒布
	6. 27 予科会臨時総会を開催，会則，選挙規則，自治会食堂部規則改正および旅行問題等
7. 6 **向島新艇庫落成式**開催，閲艇式，記念レース，HCS対校リレーレースはC組優勝 宇治原コーチの設計したエイト新艇は長さ58呎，幅23吋，材質アメリカ桧横断面U字型（俗称タライ） （昭3，4，5と造艇では試行錯誤の繰り返し）	7. 11～13 デ杯に日本チーム（原田・太田・安部・佐藤・俵）初めてヨーロッパゾーンに参加，決勝で敗退（イタリア3—2日本）
	7. 20 専門部独立運動を続けてきた独立期成委員会は，現在の客観的情勢に鑑み，運動の一時中止をする旨の声明書を公表
8 乞食遠漕（自炊の格安経費で実施，一般参加も募る）	
9. 1 国立移転 出陣式・帰陣式廃止	9. 21 11大学対校のボートレース実況を，NHK東京隅田川からラジオ中継放送
9. 20～21 第10回関東インターカレッジ選手権，第2回高専対校（ロンドン杯）で**本学専門部が優勝** インターカレッジ選手権は準決勝で東大に敗退	
10. 昭和7年ロスアンゼルス・オリンピック大会に派遣されるエイトクルーは，昭和6年全日本選手権優勝校を候補とすることになったためこれ	

ボート部	大学社会関係
にそなえ，ボート部幹事会は来年度のみ「対校選手を各組より分離し1年間練習を行う」ことを決定	
10. 高専新人の対校競漕開催	
11. 本学の国立移転にともない，向島艇庫が遠く，一般学生の利用に不便のため多摩川にコースを物色，本学より南方約4kmのところに350mコースを発見，主務官庁より水上使用を許可され，尾久のバラック仮艇庫を移転，国立谷保附近の多摩川畔にバラック艇庫建築に着手	11. 9 商大ホッケー部はリーグ戦最後の試合で，対早大戦に勝ち，第一部の優勝者となり，18日第二部優勝校立大を破り，都下ホッケーの覇権獲得 11. 14 浜口首相，東京駅頭で狙撃され重傷 11. 15～16 第1回全日本柔道選手権大会，明治神宮外苑相撲場で開催，決勝戦は，ラジオ中継 11. 18 昭和4年9月以来如水会および一橋会共同の事業として「一橋の歌」歌詞募集中のところ52編の応募歌詞中酒井敬三郎氏（如水会員，ただし応募当時は一橋会員）の作品が当選，山田耕筰作曲で，その初演奏（日本青年館）
12. 鷲島富造コーチ交通事故により急逝，遠山不羈夫，宇治原兼一の両氏対校コーチに就任	12. 12 予科会定期総会開催，予科生有志は予科の小平移転について国立と離れることは無意味，かつ不便極まりないと反対運動を開始 12. 国立本館落成
昭和6年〔1931〕	
1. 20 本科運動部，各部の連絡懇親を主要目的とする各運動部代表者の会「運動部連合懇談会」第1回会合を開き声明書を発表	1. 18 如意団設立25周年記念会 1. 24 全日本学生庭球連盟結成
3. 24 隅田河畔，本学艇庫が聳える一帯を水の公園として復興局が造園中であった隅田公園が竣成，開園式開催	3. 桜会の一部将校ら，軍部クーデターによる宇垣内閣樹立を企図，未遂（三月事件） 3. 27 昭和恐慌のため本学卒業生の就職難 3. 昭和5年度卒業（昭和6年3月）の予科生の記念事業として「予科会旗」を調製寄贈 3. 28 兼松講堂にて初の三科合同卒業式挙行
4. 19 第45回春季競漕大会開催。第一選手競漕S組優勝 5′ 39″ 1/5, コース1,800m	4. 一昨年度授業料滞納により25名の学生除名発表 4. 14 浜口内閣総辞職，若槻内閣成立 4. 29 東都五大学野球連盟結成

ボート部	大学社会関係
5. 7 昨年末，尾久のバラック艇庫を移した，多摩川艇庫開き，使用コース350m，国立より徒歩45分	5. 10 **国立移転記念式**ならびに一橋会主催移転記念祭を挙行，矢野二郎初代校長銅像除幕式 弓道部国立道場落成式
5. 18 運動部懇談会が開催され，その設立の目的である「いまわしい選手争奪の防止」「新部員名の公表」等を決定	5. 21 学長佐野善作博士，本日文部省に田中文部大臣を訪れ辞表を提出。理由は 1 国立移転の完了 2 校長・学長在職17年 3 次男が共産党に係はり，起訴された事への道義的責任 結果的には5. 25の教授会及び5. 29学生大会の全会一致の決議により，6. 20に慰留留任決定
5. インター・カレッジ・レガッタ応援団廃止説が本科評議会に起こるが，結局，本年は極めて自由な応援団を組織することと決定	6. 19 予科寮生，寮生大会を開き，小平移転後即時寄宿寮設置を希望する件を可決，実行委員を挙げて学校当局および文部省に運動を開始
8. この年のインターカレッヂのエイト勝者を以て明年のロス・オリンピック代表第一候補クルーとする事になつていたため，必勝を期した本学はアメリカ桧材とマホガニー材を使用した同型エイト二隻を造り（レースには桧艇を使用）又オールは英国エイリング社製のものを輸入	7. 22 予科の小平移転（昭和8年4月予定）について政府各省歳出節約断行の形勢に，予科理事会は文部省に大臣・次官・専門学務局長を訪ね，移転促進の請願書を提出
9. 20～22 第11回関東インターカレッジ選手権が開催され本学クルーは予選で慶大と同着，翌日再レースの結果，慶大を破るも決勝で早大に敗れ，早大が候補クルーと決定	9. 18 **満州事変勃発**
10. 5 「予科及び専門部廃止」に反対，一橋旧校舎に籠城を決定した約1,500名（のち2,000名）に**ボート部全員が参加**	10. 1 大蔵省内示の行政整理準備委員会の整理原案中に本学予科専門部廃止の項が「東京日日新聞」に報道，(**籠城事件**)全学生の退学決議等にまで発展し，渋沢栄一氏政友会民政党両党への働きかけ等となり教授学生，如水会一体となっての反対運動を8日まで継続，政府案撤回
10. 籠城事件のため，ロス派遣フォア代表候補クルー決定レースには本学参加できず，慶大自尊会クルー優勝候補	10. 8 「廃止取止め」の報を確認，籠城解散を決議
11. ボート部幹事会にて来年度も対校選手を各組選手と切離して練習することに決定	11. 11 大学創立以来の恩人，渋沢栄一子爵，滝野川飛鳥山暖依村荘において逝去（享年92歳）
12. 若い選手養成のため，予科専門部対抗フレッシュメンレース（東部鉄橋，重間間1,300mのコース，フィックス艇を使用）予科1シート差で勝利	

ボート部	大学社会関係
昭和7年〔1932〕	
	1. 3 関東軍，錦州を占領
	1. 23 専門部対横浜高商戦存廃を諮る専門部臨時総会が開かれ継続と決定
	1. 24 本科柔剣道場竣成，剣道部落成式（柔道部は別に）
4. 第46回春季競漕大会を隅田川で開催。第一選手（2,000m）S組優勝，第二選手S組，第三選手C組	1. 上海事変
	3. 満州建国宣言
	5. 15 海軍青年将校と陸軍士官学校生徒ら，首相官邸などを襲い，犬養首相を射殺（**五・一五事件**）
5. 1 オリンピック出漕クルー・チヤレンジレース，本学フォアは準決勝で外語Aに敗れたが，エイトは，慶大・一高・帝大・を破り挑戦権獲得	5. 20 旧一ツ橋に「一橋講堂」落成
5. 7～15 チャレンジ・レースにて候補クルー早大に敗退	5. 22 予科記念祭，前夜，突然板橋署からの臨検室内装飾の一部の撤回を命令（時事問題を戯化したもの）
	5. 26 斎藤実内閣成立
	6. 6 本科「国防研究会」発足
	7. 全日本学生馬術選手権大会，本学から出場の藤野泰吉（予科3年）優勝（後に相川改姓）
	7. 30～8. 14 第10回ロスアンゼルスオリンピック大会開催，参加国37，参加者1,408，日本選手131人参加，うち本学水泳部より出場清川正二金メダル獲得，また日本金メダル7個 ホッケー選手宇佐美敏夫（昭和6大卒）柴田勝見(昭和7大卒)の両君出場 ボート競漕にエイト早大，フォア慶大参加いずれも惨敗
9. 11～18 秋季小会開催，第一選手はなく固定席艇レースのみ挙行，予科はH組，専門部はS組優勝 第12回関東インターカッレジ選手権大会に出場，本学は優勝候補筆頭だったがレース中不幸波をかぶり水船となり予選で東大に敗退，この年の優勝は日大，第4回ロンドン杯レースにおいては，本学専門部が再び制覇	
9. 18 第1回関東固定席選手権大会に予科H組が出場優勝，最初の文相杯を獲得	
	10. 7 本科会改造の中心をなしていた在来の運動部選手制度に対する非難は，運動部の反駁で対立的な空気に包まれていたが，形式的にも財政的にも本科会から独立したクラブ制運動部として本科会運動部会

ボート部	大学社会関係
	を組織し，本日発会式
	10. 15 東北帝大主催，全国高商対校東北乗馬大会に出場した予科馬術部は30校出場の強敵を倒し参加以来最初の優勝，大学総長杯，第二師団長杯を獲得
	10. 30 運動部の財政的危機を救うため，運動部懇談会が主催し基金募集のため「一橋運動部を讃える夕べ」日比谷公会堂で開催
	12. 日本橋白木屋火災
昭和8年〔1933〕	
	1. 10 本学教授大塚金之助氏伊豆湯ケ島で共産党事件に連座容疑で逮捕
	1. 27 一橋新聞付録予科版，本日以後発行禁止命令
2. 7 漕艇協会幹事会は，春に小艇（フォア・ペア・スカル）のインターカレッジを開催することに決定	2. 「一橋新聞」2月10日号以後休刊 一橋新聞付録予科版において大塚金之助助教授留任問題を取り扱った件に関して，学校当局の忌諱に触れ，その弾圧に抗して部員一同総辞職
	3. 日本国際連盟脱退
4. 漕艇協会主催小艇インターカレッジ・レガッタ（フォア・ペア・スカルの小艇主体）開催。本学舵付ペアは独漕にて優勝，フォアは準決勝で東大に敗退	4. **学生赤化防止策**確立のため7教授による思想善導対策委員会を作り，その答申により，昭和2年度以降廃止されていたプロ・ゼミナール制度を本年度より復活
4. 23 第47回春季競漕大会，第一・第二・第三選手H組，全勝	5. 21 第6回予科記念祭を小平移転を控え石神井最後のものとして盛大に挙行
	5. 25 中国側，日本に停戦を正式申出，停戦交渉開始，31日塘活停戦協定成立
	5. 一橋ジャアナリスト・クラブ員の斡旋により「一橋新聞」続刊
	6. 15 一橋会総会，投書家懇親会の復活をねらって，一橋振興調査委員会設立，一橋会所有本学国立グラウンドの大学へ寄付を可決
	6. 30 東京府北多摩郡小平村に**予科本館落成**，7月22日移転完了 8月1日より事務開始
9. 17 秋季小会開催，第一選手エイトはH組優勝	9. 30 神宮大会において本学水泳部清川
9. 23 第13回関東インターカレッジ選手権大会言問・	〃 正二，400m 背泳に5分30秒4の

ボート部	大学社会関係
～24 水神間2,000mコースで開催，本学は予選で敗退，東大優勝 9. ロンドン杯レースで専門部は東大医学部を半艇身差で破り**優勝**	10. 1 世界新記録を樹立 10. 17 皇道精神を標榜し，あわせて最近の一橋会および学内の空気沈滞を打開しようとする学生有志の団体「一橋青年同志会」発会式挙行 10. 22 早慶野球試合後両大学応援団衝突し紛議（リンゴ事件）24日両校の協議で円満解決 11. 21 民政党総裁若槻礼次郎，上野駅で暴漢襲撃
昭和9年〔1934〕	
3. 18 学校予算で建造されたクリンカーエイト新艇3隻(青龍・朱雀・白虎）竣工し，進水式を挙行，このクリンカーエイトは以後数年にわたり，第二選手競漕艇として使用され新人育成に多大の威力を発揮 4. 14 ～15 第2回小艇インターカレッジ選手権（荒川放水路2,000m直線）開催，本学はフォアで東大その他を破り，決勝で大倉高商に1艇身差で優勝 4. 22 第48回春季競漕大会開催，第一選手競漕S組優勝	2. 7 飛行機「大学高専号」献納のため，国防部寄付金募集を開始 3. 3 鳩山文相，綱紀問題で辞任 4. 5 デ杯に遠征途上の佐藤次郎選手，マラッカ海峡で箱根丸より投身自殺 4. 20 予科臨時総会を開催，記念祭の定期挙行，記念祭費，弁論部独立等の件を上程 5. 7 学生の研究振興のため第1回ゼミナール学生会開催 5. 11 非常時における綱紀粛正が叫ばれている時佐野学長より三科学生宛に，学内での禁酒励行の通達が発せられ，今後は記念祭，旅行等一切の公的会合での飲酒厳禁 5. 一橋会本科会の昨年来の文化・運動両部の対立分裂により予算不成立であったのが，本年度に解決，予算配分決定，学術部「ヘルメス」再刊，文芸部「一橋」発行決定 6. 5 予科柔剣道場および弓道場落成 6. 9 学生集会所開き挙行，同集会所使用規定制定 6. 11 ヒトラー・ユーゲント・スポーツ検定章作成（ドイツ） 8. **ヒトラードイツ総統**に就任

ボート部	大学社会関係
9. 2 尾久1,000mレースが行われ，慶大に勝ち東大には敗退（インターカレッジ前哨戦）	
9. 15～16 第14回関東インターカレッジ選手権開催，本学クルーは第2予戦で日大に敗退，第6回ロンドン杯レースは専門部が慶大医学部を2艇身差で破って3連勝達成	
	11. ベーブ・ルース来日
	11. 3 如水会創立20周年記念祝賀会，記念式典は一橋講堂で，午餐会は会館で，庭園内では，園遊会開催
	11. 4 一橋会主催の「一橋発展回顧講演会」あと国立グランドにて一橋会秋季大運動会開催
	12. 6 「一橋会財政建直の件」を主たる議題として一橋会定期総会開催
昭和10年〔1935〕	
	3. ドイツ再軍備宣言
4. 第49回春季競漕大会を開催，第一選手はC組優勝	4. 23 一橋会定期総会が60周年事業に関し，会費増徴等の件を議題に兼松講堂で開催
4. オリンピック代表決定レース用の新艇，岡本造船所で竣工，バウサイド・ストローク艇で57呎，38貫（142.5kg）	
	5. 20 専門部において昨年度入学者から断髪を奨励してきたが2年生には反対運動も起こり，趣旨徹底のため「第1学年生徒，第2学年生徒，長髪を禁ず」の布令
	5. 27 予科生徒控室，集会所，食堂および雨天体操場が竣成
6. 1～3 ベルリン・オリンピックエイト派遣クルー，選抜レース予選で本学拓大に敗退（東大優勝）	6. 9 昨夏総工費8,000余円をもって竣成された小平のプール開き
	7. 3 5.26～7の予科記念祭のあと多摩湖電車の一部破壊した学生50余名の譴責処分（一部刑事事件）木村予科主事及び石田学生主事辞職
	7. 9 杉村広蔵助教授提出の学位請求論文「経済哲学の基本問題」審査の教授会があり出席教授21名の投票の結果可13，不1，白票7をもって不通過（可とする者出席人員の4分の3に満たず）これを契機にいわゆる「**白票問題**」起こり，種々の曲折を経たのち9月21日佐野学長辞任し，三浦新七氏新学長として10月4日就任，この間6回の

ボート部	大学社会関係
	学生大会開催，新学長就任により一応粛学運動解散を決議
8. バウサイド・ストロークのフォア新艇“玄武”を製造，（好い艇であったが進水して，尾久から向島への回航途次レースコースを漕破中，和船に衝突，艇首を大破する事故あり）	8. 中国共産党抗日救国宣言
8. 25 尾久レガッタ・エイト（1,000m）早大・慶大・東大，大倉高商に4戦4勝 フォア日医大に勝利（日医大は本学出身中川氏のコーチ）	
9. 15～16 関東インターカレッジ選手権大会に出場 エイトは第2予選で優勝校早大と同着，再レースで敗退，フォアは優勝校日大に準決勝で敗退，ロンドン杯で専門部クルー4連覇	
11. 3 ベルリンオリンピックフォア派遣クルー決定レースに玄武，青龍の2クルー参加。いずれも予選で敗れたが，玄武クルーは東大・日大を破ったが準々決勝で拓大に惜敗，決勝は早拓となり，早が僅差で勝ち代表クルーに決定	11. 8 **創立60周年記念式**三浦新学長のもと兼松講堂で開催，式後申酉，籠城事件記念講演会
	11. 23 予科の如意団道場開堂式
11. 7 一橋会主催秋季ボート大会開催，お椀ボートの弥次レースが人気を独占，代表選手競漕はH組が連覇	11. 24 全日本学生ホッケー戦の決勝で，関西代表京大を破り，再度全日本選手権獲得
12. 19 四神会員・ボート部員合同懇親会で小松栄氏等の先輩より対校選手分離主義を排し「**HCSの昔に帰れ**」の声が強く来年度春インカレのフォア出漕を断念し，校内春季大会には，対校選手はHCSに編入との合宿方針を決定	
昭和11年〔1936〕	
1. 3 宇治原兼一先輩（昭5本卒）岩手県八幡平で遭難，5.12に遺体発見	1. ロンドン軍縮会議脱退
	2. 10 三浦学長予科，専門部，本科の主事等の大幅人事移動発令
	2. 13 昨年の「白票事件」の余波としての三浦学長人事発令に反対して14教授連袂辞職（事件再燃）
	2. 26 **二・二六事件**
4. 19 第50回春季競漕大会が開催される。第一選手競漕はH組が優勝。レースは2,700m第二第三はS組優勝	4. 6 内務省言論取締強化
	4. 10 予科一橋寮開く，1年生は強制入寮
4. 25 三谷一二先輩（明29年卒）主催春季大会選手役員招待晩餐会，平生釟三郎文部大臣（明23年卒）出席	
5. 5 ボート部報復活1号発行（昭和3年5月創刊，昭和5年10月第9号で途絶していたもの）	5. 9 白票事件の収拾として杉村助教授及び高垣，本間両教授辞表受理，

ボート部	大学社会関係
5. 8 **高垣部長**東京商大教授を辞任され，それに伴いボート部長を退任	免官発令
6. 28 部報第2号，宇治原氏追悼特輯号発行	6. 1 辞表提出した9教授三浦学長の説得により辞表撤回して復校
6. 28 第6回予科専門部対抗レース，専門部優勝	6. 3 白票事件全面的解決，三浦学長本科予科専門部の全学生を兼松講堂に招集，学園振興の訓辞，この後最後の学生大会において学生運動の打切りを確認，統制部解散
7. 対校レガッタ用のエイト新艇建造	7. 英国で行われたマローレガッタで東大エイトクルー優勝，ヘンレー・レガッタでも善戦
8. 尾久レガッタ（1,000m）で本学3戦全勝	8. ベルリン・オリンピック200m平泳ぎで前畑優勝
	8. 11 ～12 オリンピック日本ボート代表エイト，フォア，ペアともに予選で敗退
9. 6 フォア全日本選手権関東予選に予科クルーが出場，日本医大に2艇身1/3差で敗退	
9. 12 ～13 第16回関東インターカレッジ選手権大会（尾久2,000m コース）に出場，予選で慶大，早大，一高を破り，決勝戦で明大を破って優勝 昭和2年以来**9年ぶりに優勝**，なおこのレースはＪＯＡＫ（現ＮＨＫ）中村アナ（四神会員）により全国に実況放送 第8回ロンドン杯に本学専門部5連勝	
9. 23 関西インターカレッジ選手権大会の覇者三高との全日本選手権が瀬田川で挙行，本学が優勝，秩父宮杯を獲得，艇差5艇身　瀬田唐橋東詰「綱定楼」にて盛大な祝勝会を開催	
	10. 6 一橋会主催の申酉・籠城事件記念式兼松講堂で挙行，引き続き本学ホッケーチームのオリンピック出場，端艇部の全日本制覇，馬術部の全日本学生選手権獲得の祝勝式三浦学長祝辞，伊藤主将挨拶
11. 8 全日本制覇祝賀競漕会（向島）	11. 日独防共協定調印
12. 11 本科会理事会において運動部の選手制化と学園への無関心に注意を喚起	12. 23 三浦学長辞任，上田新学長就任
昭和12年〔1937〕	
1. 31 専門部ボート部は，昨秋ロンドン杯を獲得，**5年連続**を祝って，先輩の団体墨堤会から記念杯贈呈	1. 8 始業式のあと上田新学長就任式において学内の融和，学園の再建を力説
	1. 20 如水会主催新旧学長送迎晩餐会
	2. 2 林銑十郎内閣成立，ボート部先輩

ボート部		大学社会関係	
			佐藤尚武氏（明37本卒）外相に就任
4. 18	第51回春季競漕大会を向島に開催，H組4年振全勝	4. 12	入学式（兼松講堂） 学部　303名 予科　256名 専門部　219名 養成所　30名 （志願者予科1755名，専門部1493名，養成所251名）
5. 30	埼玉県戸田村の予定地に**オリンピック・コース**の起工式（長さ2,500m，幅100m，深さ3m，土地は村で無償提供，工事費140万円はオリンピック大会が支出，3年で完成予定）		
6. 5	第7回予科対専門部競漕が開催。専門部が新人（フィックス）第一選手（エイト）ともに優勝。	6.	第一次近衛内閣成立
7. 29	春季小会5組優勝	7. 7	**蘆溝橋事件**
		7. 15	第4回日米学生会議（スタンフォード大学）出席50名本学より3名出発
8. 15	商帝慶ＯＢレース，商大ＯＢ再度優勝	8. 13	上海で日中交戦（第2次上海事変）
9. 4 ～5	第17回関東インターカレッジ選手権（尾久2,000m直線コース）に出場の本学エイトは，第一予選で慶大を，第二予選で千葉医大を破ったが，準決勝で東大に惜敗し連覇ならず（艇差2艇身）東大優勝		
9. 8	大連にて一橋対一高ＯＢレース，一橋勝利		
9. 12 ～13	全日本選手権関東予選が都下10クルーの参加で尾久2,000mコースで行われ，本学より全一橋，予科，専門部の3クルーが出場したが，全一橋は準決勝で早大に1/3艇身の差で，専門部も準決勝で東大に2艇身差でいずれも敗退，東大優勝，専門部は多年の宿願，全日本への初出漕，優勝クルー東大と善戦		
9. 25	幹事会で対校選手強化のため再びＨＣＳからの分離練習方針を決定		
10. 5	四神会主催全日本出漕3クルー選手慰労晩餐会（如水会館）	10. 2	時局認識を深めるための本学教授による9回にわたる「時局特別講義」開始（11月7日終了）
		10. 14	漕艇協会で製作中の舵なしフォアとペア尾久コースで初試漕
		10. 23	国民精神総動員行事として予科教職員645名武蔵滝山城址に行軍
11. 2 ～3	全日本小艇選手権大会のフォアにおいて予選で東大，慶大，日大を破り決勝戦で関西代表同志社，朝鮮代表総督府を破って**全国制覇**	11.	戦時大本営令公布

ボート部	大学社会関係
11. 26 秋季クラスチヤンレース挙行	
	12. 20 東京オリンピック大会全競技日程決定発表
	12. 南京占領
昭和13年〔1938〕	
	1. 22 予科三年ごしの懸案学制改革案教授会にて承認
	1. 月刊「一橋論叢」創刊
	1. 軍需工場動員法公布
	1. 岡田嘉子ソ連亡命
	2. 1 予科一橋寮第一回開寮記念式
4. 17 第52回春季競漕大会開催，H組が全勝優勝，会長訓辞，大優勝旗及びカップの返還，選手代表堀川富太郎宣誓，丸山理事スカルの先導によるHCS第一より第三選手までの9クルーと対校選手の10クルーの艇庫前閲艇式	4. **国家総動員法公布**，灯火管制開始
5. 8 **部史編纂委員会**発足（一部委員艇庫に合宿）	
7. 戦局拡大のため，オリンッピク大会を返上したので戸田コース工事も自然中止となったが，漕艇協会等の働きかけで工事再開（長さ2,400m，幅70m，深さ2.5mに計画縮小）	7. 15 日本オリンピック組織委員会第12回**オリンピック東京開催返上**を決定
	7. ～9 本科，予科，専門部の集団勤労作業
9. 1 台風により，向島艇庫の一部被害。	9. 14 3科防護団防空訓練
9. 3 ～4 第18回関東学生選手権大会（尾久コース）に本学クルー，エイト，フォアとともに優勝	
9. 12 第1回商・早新人エイト対校戦に勝利	
9. 22 高商時代から長い伝統に生きてきた一橋応援団（ボート）は昭和10年以後廃止されていたが今回ようやく各方面との諒解が成立し，本日創立記念式典後，兼松講堂において結団式および出陣式を挙行	
9. 24 ～25 第18回全日本競漕大会(尾久コース)に全一橋，専門部（エイト），予科（フォア）3艇が出場，全一橋は慶大を破り**優勝**，予科フォアも拓大を大差で降して**優勝**，専門部クルーは準決勝で敗退	
	10. 27 日本軍武漢三鎮を占領
11. 3 如水会，一橋会合同大運動会に先立ち，全一橋凱旋式を挙行一橋会総務理事内海君祝辞，上田学長挨拶，塚越主将凱旋の答辞	11. 18 佐野元学長への報恩記念事業として記念品贈呈式
11. 29 新作ボート部歌「春墨堤の花の色……遠山作詞外山圀彦作曲，および新作全一橋応援歌（学生入選作品，岡本敏明作曲）披露祝勝演奏会（ボート部，音楽部共催，日本青年会館）を開催	11. 25 ～26 第二次東部防空訓練として教職員学生生徒の避難演習
11. 墨堤会の経費援助で「専門部端艇部報」発行	
12. 21 部員大会（戸田コースの新艇庫敷地実地検分，	

ボート部	大学社会関係
井浦部長停年退官による新部長推挙の件，部史編纂，小平予科に流水タンク建造等の件）	
昭和14年〔1939〕	
1. 29 隅田川一帯の地盤沈下と船の往来多く，かねて静水コースでの練習を希望していたボート部は，本日，上田学長ほか学校関係者，ボート部関係者が集まり，戸田コースの実地検分を行い敷地1,000坪買収を確定	1. 5 平沼内閣成立
	2. 11 代々木練兵場にて都下大学高専建国奉祝式
	3. 20 大学の軍事教練必須科目となる。
	3. 関門トンネル開通
4. 16 第53回春季大会（一橋会総務理事大会委員として参加）部員以外の学生多数参集，名実ともに全学的行事。	4. 米穀配給統制令公布
	4. 22 青少年学徒への勅語下賜
	4. 30 兼松講堂で奉読式
	5. 青少年学徒に賜わりたる勅語
	5. 12 ノモンハン事件
	6. 21 上田学長「東亜経済研究所」設置案公表
7. 2 第9回予科専門部レースを初めて荒川放水路，（水道鉄管一総武鉄橋間）直線2,000mで行う	7. 10 興亜青年勤労報国隊結成　満州現地に2か月訓練
7. 4 上田学長，ボート部長就任快諾，井浦部長（停年退官）との新旧部長交代式	
7. 19 朱雀号遭難第33回忌を営み対校選手遠漕，現地宝山に卒塔婆建立	
8. 20 第1回全国高専大会，暴風雨にもかかわらず尾久2,000m コースで決行，本学専門部初制覇相手校は早大高芸学院及び大倉商業，艇差2艇身	
8. 27 尾久レース対校，専門部ともに全勝	
9. 9 ～10 第19回関東インターカレッジ選手権大会に本学エイトが**優勝**	9. 1 **第二次世界大戦勃発**（独陸空軍ポーランド進撃）
9. 17 第12回全日本選手権レガッタ（瀬田川）が開催され，関西の優勝校，大阪商大と豪雨，雷鳴の悪条件の下で戦い優勝（**2連覇**）（6回目の優勝）	9. 22 創立64周年記念式典挙行（兼松講堂）併せて一橋会如水会共催で戦病没者慰霊祭を挙行
11. 3 第10回明治神宮体育大会レース，専門部が東大鉄門，第一早高を破り決勝で一高と対戦，逆カンバスで優勝	11. ニッポン号世界一周飛行
	11. 白米禁止，ネオン全廃，パーマ禁止
12. 9 朱雀号遭難第33回忌追悼法会を如水会館で挙行長岡先輩が委員長	
昭和15年〔1940〕	
	1. 16 米内内閣成立
	2. 11 代々木練兵場にて都下大学高専参加の「**紀元2600年建国奉祝式**」挙

ボート部		大学社会関係	
			行
4. 14	第54回春季競漕大会を向島に開催，C組が5年ぶりで全勝	4. 1	故各務鎌吉氏寄附金を基金とする「東亜経済研究所」発足
5. 25 ～26	海軍記念日短艇記念大会において，本学クルーはエイト，フォアの双方に快勝	5. 8	上田貞次郎学長逝去（5.13学葬）
		5. 25	高瀬荘太郎教授学長に就任
5.	上田学長兼ボート部長逝去，高瀬荘太郎新学長第8代ボート部長に就任	6. 24	一橋講堂で東亜経済研究所開設記念大講演会開催
6. 25	一橋会定期総会後，一橋会理事会主催による全**一橋ボート応援団結成式**を兼松講堂で挙行（昭和10年以来，5年ぶりの復活）	6.	パリー陥落
6. 29	第10回予科，専門部競漕大会，専門部ついに5連勝，荒川放水路2,000m コース艇差 1/3		
7. 18	故各務鎌吉氏寄贈の新造固定席艇進水式		
8. 25	尾久レガッタに本学クルー快勝	8.	ダンスホール閉鎖
9. 14 ～15	第20回関東インターカレッジ選手権大会，準決勝で専大に惜敗，3連覇ならず	9. 12	文部省省議により学制新体制案の第一歩として高等学校内団体再編成案を決定，これにより一橋会は，新修練組織へ改組
		9. 21	**創立65周年，大学昇格25周年記念式**（兼松講堂）陸軍大将宇垣一成の講演
		9. 27	日独伊三国同盟ベルリンで調印
10. 23	**戸田コース入水式**	10.	全政党解党，大政翼賛会発足
11. 1 ～ 3	皇紀2,600年奉祝の明治神宮大会（全日本選手権）新設の戸田平水コースで行われ，本学チームは，エイトは決勝で慶大，明大と三杯レースをやり優勝，タイムは6分46秒，またフォアは慶大，日医大，宮城工大と四杯レースで，2着慶大と一艇身の差で**優勝**	11. 21	東京商科大学奨学財団創設
		11.	**紀元2600年式典**
11. 17	第7代部長故上田学長部長寄贈のスカル進水式2,600年戸田初制覇記念祝賀レース		
11. 25	予科校庭南側林の中に一部予科部員の勤労奉仕による工作中のわが国初の流水タンク（試漕場）竣成，落成式を挙行		
昭和16年〔1941〕			
2. 11	一橋会の解散と新編成に伴い，端艇部は**三部報国団**の端艇班	2. 11	社団法人一橋会を解散し，新たに一橋学部**報国団**，予科報国団，専門部報国団が誕生
		2. 16	学生・生徒の運動競技，試合はすべて文部省の承認を必要
4. 13	第55回春季競漕大会を初めて戸田漕艇場で開催，第一選手はH組が，第二選手はH組が，第三選手はS組が，それぞれ優勝	4. 13	日ソ中立条約，モスクワで調印
		4.	小学校は国民学校と改称

ボート部	大学社会関係
4. 「端艇部資料室」を設置，部史編纂事業を再開	
5. 25 海軍記念日端艇競技大会（本年より水上練成大会と改称）が向島コースで挙行。本学からはフォア並びにエイトに全一橋が，エイトに専門部が出漕したが，いずれも準決勝で敗退	
	6. 22 ドイツ軍突如ソ連邦攻撃を開始（**独ソ開戦**） イタリアとルーマニア対ソ宣戦布告
7. 30 予科・専門部合同新人対抗レースで専門部大差で勝利	7. 1 専門部の学部受験者の選抜試験制度の実施を文部省と交渉
	7. 18 第三次近衛内閣成立
	7. 25 アメリカ，在米日本資産を凍結
8. 16 戸田漕艇場のコース使用が突如禁止，8月26日戸田コースで挙行の予定であった全国高専競漕大会は，急遽尾久コースに変更	8. 8 文部省，各学校に全国組織の学校報告隊（団）の編成を訓令
8. 28 全国高専競漕大会が尾久コースで開催，処女出漕の予科クルーは決勝迄勝ち進み慶応予科に逆カンバスで惜敗，専門部は慶応予科に準決勝で敗退	
9. 6 ～ 7 関東学生水上練成大会（学生選手権大会）を尾久コースで開催，全一橋クルーが出漕，東大に準決勝で敗退	
	10. ゾルゲ事件
	10. 16 大学・専門学校・高等学校，大学予科などの修業年限を臨時短縮
11. 3 神宮レースに予科，専門部両クルーが出漕，予科は六高に敗れ，専門部は決勝迄勝進み，横専に敗退（6人漕固定席艇）	
	12. 8 日本軍，**ハワイ真珠湾襲撃** 米英両国に宣戦布告
	12. 27 戦時臨時措置法実施に伴う繰上卒業者の卒業式を兼松講堂において挙行 米英映画上映禁止
昭和17年〔1942〕	
	1. 2 日本軍マニラを占領
	2. 5 東亜経済研究所の官制化が閣議で決定，勅令で本日公布
	2. 15 シンガポールのイギリス軍降伏
4. 4 第56回春季競漕大会を向島コースにて開催，第一選手はH組，第二選手はH組，第三選手はS組優勝	4. 18 アメリカB24，，東京，名古屋，神戸を初空襲
	4. 27 本学外団体として海洋班を設立，橋爪講師が初の班長に就任
	5. 8 3科合同全学生の対米英宣戦詔書

ボート部		大学社会関係	
			奉読式（兼松講堂）
6. 6 ～ 7	全国大学高専競漕大会が戸田漕艇場で開催，全一橋クルーは予選で早大（優勝）に2艇身差で敗れ，敗者復活戦でも日大に敗退	6. 5	ミッドウェー海戦（戦局の転機）
		6. 27	東京商科大学奨学財団を設立
6. 13	予科・専門部合同新人対抗レースで専門部優勝		
8. 2	第四回全国高専競漕大会が戸田コースで開催専門部は決勝迄勝ち進んだが東外語に敗退，予科は予選において東外語に敗退	8.	米軍ガダルカナル島上陸
		9. 1	予科鍛錬科にグライダー訓練を加えることとなり，初級機を購入
		10. 8	三井物産玉造造船所より海洋班に救命艇が寄贈され「潮風」と命名
11. 1	明治神宮大会，戸田漕艇場で挙行，本学よりフォア及びエイトが出漕，エイトは予選で敗退したがフォアは東大に2艇差一尺で優勝	10. 22	如水会・報国団主催第2回合同慰霊祭
11. 9	中山伊知郎教授第9代端艇部長に就任，推戴式を如水会館で開催		
		12. 8	大東亜戦争一周年記念式典，記念講演会，3科合同閲兵分列式
		12. 10	一橋新聞第358号をもって休刊（359号は21年6月25日に再刊）
		12. 31	大本営，ガダルカナル島撤退を決定
昭和18年〔1943〕			
		1. 1	高専校修業年限短縮による9月卒業のため，専門部2年生は新春より3年の課程に編入
		1. 20	勅令第40号をもって大学予科の修業年限を2年に短縮
4. 11	第57回春季競漕大会，向島コースで挙行される。第一選手はH組，第二選手はC組，第三と手はH組がそれぞれ優勝	4. 18	連合艦隊司令長官山本五十六，ソロモン群島で戦死
5. 22	全一橋用艇・新艇を進水「香取」と命名	4.	予科，専門部校舎一部を日本軍に貸与
5. 23	第38回海軍記念日水上練成大会，向島コースで挙行，専門部から6人漕固定席艇とエイトが出漕，固定席艇は準決勝で東北医専に，エイトは日大に敗退		
5. 26	予科，専門部合同新人対抗レースで予科が快勝，専門部用艇・新艇を進水，「八紘」と命名		
5. 29 ～30	関東大学高専競漕大会，戸田漕艇場で挙行，全一橋クルーは敗者復活戦で準決に進出したが，一高に敗退		
		6. 25	専門部相撲場完成
7. 18	海の記念日海洋競技大会，向島コースで挙行，	7. 19	専門部夏季動労作業

ボート部	大学社会関係
漕艇の部に専門部エイトが出漕して優勝，スカルも出漕したが予選で敗退	
7. 21 **高専競漕大会が無期延期**，戸田村の農家に合宿して練習を重ねていた予科及び専門部クルーは甚だしく落胆，止むなく練習中の各校に連絡してチャレンジレースを行ったあと練習打ち切り	
	8. 10 本科北海道派遣勤労報国隊1か月の予定で出発
	9. 8 イタリア無条件降伏
	9. 22 兼松講堂において本科，予科，専門部及び養成所卒業式を挙行，式後報国団総会を開催
	9. 23 学徒の徴兵猶予の特典停止（ただし理工学系学徒は入営延期）
	9. 24 学徒体育大会いっさい禁止
	10. 21 文部省主催出陣学徒壮行会，神宮競技場において開催
11. 14 予科・専門部のクラスチャンレースのあと，一橋会**端艇部出陣学徒壮行会**を向島艇庫において開催	11. 20 兼松講堂において本科，専門部卒業の仮合格卒業証書授与式を挙行のち出陣学徒の壮行会を開催
	12. 1 **学徒兵入隊**
昭和19年〔1944〕	
インターカレッヂ・レガッタ中止	6. マリアナ海戦，わが空母壊滅
	7. 7 サイパン島守備隊玉砕
	7. 学童集団疎開，中学生は軍需動員
	9. 26 東京商大を東京産業大学と，神戸商大を神戸経済大学と改称
	10. 満18歳以上兵役編入，神風特攻隊編成
	11. 「産業経営研究所」発足
	11. B29東京大空襲，映画館閉鎖
昭和20年〔1945〕	
	12. 兼松講堂，大学校舎一部を中島飛行機㈱に，専門部を東部第92部隊に貸与
3. 10 **東京大空襲**により江東一帯は焦土と化したが本学艇庫は焼失を免れだが，しかし艇庫・合宿所の設備，備品は荒廃 艇庫周辺の川面に焼死体多数漂流	1. 6～10 予科専養生徒勤労奉仕に出動
	2. ヤルタ会談，硫黄島全滅
	3. 9 本日の大空襲により専門部主事，増地庸次郎教授行方不明
	3. 11 一橋講堂，東亜経済研究所（連隊庁舎）を東部第100部隊に貸与
	4. 1 文部省令にて工業経営専門部附置
	4. 米軍沖縄上陸

ボ　ー　ト　部	大　学　社　会　関　係
	5.　ドイツ無条件降伏
	8.　広島に原爆
	8. 15　日本**無条件降伏**・ポツダム宣言受諾を発表「終戦の詔勅」
	8. 20　教授陣による戦後問題委員会結成
	8. 26　三科報国団解体，自治的校友会再編の通牒
10. 1　インターカレッジ・レガッタが再開されたが，出漕校は本学と東大のみ，レースは8艇身の差で敗退（このレースは後にインターカレッジ公式記録から除外）	9. 2　ミズーリー号で降伏文書調印
	全早・慶野球（神宮球場）復活
11. 1　**戦後第1回四神会**を開催，現状，将来計画，食料問題について懇談 満潮を見計らってエイトやフォアを出漕，台船，桟橋の復旧が最大の課題	11. 12　高瀬学長を中心とする学制委員会
11. 18　隅田川で戦後初のボートレース非公式インターカレッヂ挙行，「ボートレース復活祭」	11. 18　編成，戦後第1回学生大会，一橋学園再建同志会結成，一橋会再建案否決
11. 23　端艇部新入生初練習（向島，フィックス） 四神会開催（於お茶の水岸体育館）先輩8人学生約20人出席	11.　財閥解体指令
昭和21年〔1646〕	
	1.　天皇人間宣言
	2.　新円切換え
	2. 26　三科連合教授会にて大学長推薦規則決定（学長公選，学生参加ルール）
	3.　学生自治会の母体としての評議員会成立
	3. 20　東亜経済研究所を経済研究所と改称，一橋新聞復刊第1号（359号）発行
5.　**戦後最初の部員総会**開催（役員決定）	4.　工業経営専門部廃止
	4.　戦後初の総選挙
	5. 20　一橋講堂，如水会館進駐軍に接収
	5. 24　全学学生大会学長選挙への学生参加決議，一橋会予算，文化部2200円運動部4980円（内封鎖1630円）新聞部2000円決定
6.　四神会会合(艇庫)，沈没台船引上作業完了，修理依頼	5.　野球，蹴球，水泳，籠球各運動部練習再開
6.　予科クルー松戸遠漕	6. 10　本学教員資格審査委員会結成
	7.　ビキニ原爆実験
8.　艇庫桟橋復旧工事完了	8. 26　高瀬学長辞任，上原学長発令
9. 5　対校合宿開始，合宿所大掃除	9. 20　入学式

ボート部	大学社会関係
10. 6 四神会（於艇庫）先輩30人出席	9. 30 三井，三菱，安田3社財閥解体
10. 19 第24回関東学生選手権大会兼第1回国体予選	10. 1 「東京産業大学」を「**東京商科大学**」に名称復帰
～20 （於向島）東大優勝す。（出場は東，早，慶，工，商，一高の6校）	
11. 3 専門部クラスチャン挙行	11. 3 新憲法公布
11. 9 第1回国体漕艇競技（於瀬田川）	11. 28 金子，米谷，常盤3教授，文部省「適格審査委員会」で不適格と決定
エイト東大優勝	
11. 16 予科クラスチャン挙行（C組優勝）	
12. 7 端艇部各科対抗野球	
昭和22年〔1947〕	
1. 新年度役員決定	1. 17 日本オアズマン倶楽部創立
2. 20 春季大会練習開始	1. 31 マッカーサー官公庁ゼネスト禁止
2. 21 部員会（於部室）部費の件，春季大会日程，インカレ出漕方針，高専大会の開催について	2. 10 6年ぶりの一橋会本科会総会，理事会提案会則審議するも，決定に至らず
2. 27 荒川口へ遠漕，汐干狩	2. 17～21 本科学生評議員改選
4. 14 各組合宿練習開始	2. 27 第1回評議員会開催
4. 27 戦後初の4年ぶりの第58回春季大会開催，第2選手はS，第1選手はH優勝（強風のため各艇浸水）	4. 1 教育基本法，学校教育法，六三制実施
5. 11 クラスチャン練習開始	5. 1 メーデー本学学生100名参加
5. 23 四神会開催（於岸体育館）先輩43人出席（対校コーチング・スタッフの問題および財政問題）	5. 3 **新憲法施行**
	5. 11 第16回早慶ボートレース（吾妻橋→白鬚橋間 2,000m）で慶大勝つ
5. 26 専門部クラスチャン（4クラス出場 4組(H)優勝）	5. 31 片山哲（初の社会党）内閣成立
5. 31 予科クラスチャン（5クラス出場 1組(H)が優勝）	
6. 1 関東漕艇協会主催**第1回向島レガッタ**（会場は商大艇庫），エイト12クルー，フォア9クルー出場（フォア商大優勝）	6. 22 食糧事情のため中和寮閉鎖
6. 1 部員会（三科合同，於艇庫）開催 各組主将（H森，C高井，S井上），対校主将（山田輝雄），対校コーチ（柵山三好氏ほか）の確認	
6. 18 予科専クルー合宿入り	
6. 29 第14回予科専門部対抗（新人）レース接触後再レース専門部優勝	
7. 10 寄附金募集開始	7. 28 全国高校大会(固定席艇，瀬田川)で四高優勝
8. 3 対校クルー合宿入り	8. 9 一高・三高戦（瀬田川）一高勝利
8. 10 専門部クルー合宿開始	8. 24 インターハイ，一高優勝
	8. 東京都漕艇協会発足
	8. 30 第2回国体漕艇競技兼全日本固定席艇選手権（瀬田川）
	～31

ボート部		大学社会関係	
		8.	東京都漕艇協会発足
		8.	オアズマンクラブ創立
		8.	水泳の古橋新記録
9. 13	関東インターカレッジ宣誓式および組み合わせ抽せん	9. 25	三浦新七元学長の大学葬（8.17逝去）
9. 20～21	第25回関東学生選手権競漕大会（向島，商大艇庫）エイト，フォアとも商大優勝（出場はエイト日，慶，東，早，商の5校，フォア外，専，工，明，商の5校）昭14年以来の壮挙	9. 25	学部卒業式，306名
9. 24	あらたにフォア・クルーを編成，合宿開始		
9. 27～28	全日本選手権競漕大会（日本漕艇協会主催）開催（向島），エイトは東大，京大，商大専門部の3校出場東大優勝，フォアは商，明，工大，専修，外語の5校出漕本学優勝		
10. 2	国立の学生食堂で祝勝会開催	10. 18	一橋祭（予算僅少のため極めて質素）
10. 4	新卒業生送別会		
10. 20	高専大会のため予科，専門部両クルー合宿入り		
10. 22	四神会（於浅沼商会，先輩17人出席）幹事選出復興計画		
10. 25	部員会(於艇庫)端艇部復興計画（用艇の整備），次年度の役員，行事日程		
11. 1	部員会（於艇庫）　端艇部主催ダンスパーティ会員券の割り当て		
11. 9	高専大会，専門部優勝（早大高等学院の棄権により出漕は商大予科および専門部の2クルーのみ）		
11. 9	部員会（幹部交代　次年度のインカレに専門部の出漕を認める件）		
11. 15	端艇部各科対抗野球		
11. 16	専門部クラスチャン		
11. 29	端艇部主催ダンスパーティ(於田村町フロリダ)		
12. 14	対校クルー野田遠漕	12.	新制大学設立趣意書草案本科会新役員決定
		12.	経済力集中排除法公布
昭和23年〔1948〕			
		1.	帝銀事件
		1. 18	国立の予科一橋寮焼失
2. 8	船台修理のため輸送（3月29日完成）	2. 2	教授会にて学長公選規則改正案承認（任期4年から2年に短縮，学生拒否権規定）
		2. 14	戦後初の新艇，慶大のボローニヤ号進水
3. 16	四神会（於浅沼商会，先輩約20人出席），端艇部復興資金の寄附状況，新艇建造について		
3. 28	卒業生送別レースおよび送別会		

ボート部		大学社会関係	
		3. 31	卒業式（参会者少し）
4. 5	各組合宿入り	4.	従来年間600円の授業料を一挙3倍の1,800円に値上げ（文部省）学生不払運動
4. 17	部員会にて理事，会計幹事を正式決定（部員数60名）	4. 1	新制高校発足
4. 18	第59回春季競漕大会開催（第1選手のみ）	4. 29	第1回朝日レガッタ（大阪，中之島）
5. 5	復興計画資金募集のため理事，会計幹事関西へ出張（16日帰京）	5. 1	第19回附属開成レース（尾久）
5. 8	予科，専門部新入生クラスチャンレース（フィックス1,000m）	5. 2	サマータイム実施
5. 23	憲法記念第2回向島レガッタ，エイトに予科，専門部，フォアに本科出漕，商大ＯＢや墨堤会も活躍	5. 28 ～30	予科専門部最後の合同文化祭・記念祭（明年度新制大学移行）
5. 23	部員会		
5. 26	予科専両クルー合宿開始		
6. 2	第15回予科，専門部対校レース挙行　専門部優勝	6. 9	全一橋学生大会（兼松講堂）社会科学総合大学案（4学部2研究所）を支持し校名を**一橋（ひとつばし）大学**とすることを決議，教授会承認
6. 3	対校選手第1期練習開始（12日中止）		
6. 7	本科全運動部予算会議（臨時の復興予算としてボート部に2,100円配分）		
6. 10	戸田コース視察，戸田合宿の可能性検討（本学としては戸田でレースを行うことには反対する方針をとる）	6. 22	全一橋学生大会にて授業料3倍値上げ反対のため，24時間一斉盟休（国立大学高専自治会連合会一斉盟休参加）
6. 20	関東高専大会開催さる（向島），出漕は6クルー，慶大予科優勝す。		
6. 21	東大船台修理のため，東大，一高のエイト，慶応のタブ・フォア等預かる		
6. 21	復興資金募集再開		
7. 7	対校選手合宿開始	7. 1	第1回大阪レガッタ（中之島）
7. 13	四神会（於浅沼商会，先輩15人出席）対校合宿のための寄附金募集について		
7. 14	本学艇庫に三高合宿開始	7. 24 ～25	第17回全国高校固定席艇（瀬田川）
7. 25	同じく八高合宿開始	8. 1	一高三高定期戦（向島）三高勝つ。
8. 20	対校合宿再開	8. 8	全国高校滑席艇（於戸田）八高優勝
8. 26	台船の件について日本郵船の生駒副社長らと協議	8. 9	ロンドン・オリンピック，エイトに米（加州大クルー）優勝，（5′56″7）フォアも米優勝（6′50″3）
9. 1	本学艇庫に工大合宿開始	9. 18	第17回早慶レース（向島2,000m）早大勝利
9. 3	同じく専修大合宿開始	9. 18	全学連結成大会
9. 19	新艇進水式（於艇庫桟橋），中山部長臨席，「くにたち」と命名	9. 25 ～26	関西滑席艇選手権（瀬田川）
9. 21	戸田の合宿所へ移動		
10. 2 ～3	第26回関東学生選手権競漕大会が戸田コースで開かれ，エイトは早大，フォアは慶大が優勝		

ボート部		大学社会関係	
10. 17	全日本選手権大会兼第3回国体漕艇競技大会（戸田）エイトは本学，フォアは外語が優勝	10.	授業料不払のため，一橋会費別途徴集，財政難のため部活動停止
11. 1	祝勝会	11. 3	一橋祭
11. 27	端艇部内野球試合	11. 6 ～ 7	専門部中和寮祭
12. 15	部員会（於本科食堂）新年度理事，会計幹事を決定	11. 20	運動部活動進促のための幹事会成立
12. 15	四神会（於明治製菓，先輩約25人出席）部長交代の件，リーグ戦の件，戸田艇庫建設について	11.	極東軍事裁判判決
		12. 20	中山伊知郎新学長に決定
昭和24年〔1949〕			
1. 28	部員会　主将（村山和夫）の選出，新年度の日程	1. 24	中山伊知郎教授学長就任式
2. 15	四神会(於明治製菓ビル地下，先輩約20人出席）中山前部長と村松祐次新部長の交代挨拶	2. 16	高瀬荘太郎教授文相就任
3. 27	卒業生送別会（於向島艇庫）	3. 1	大学建物，研究室整備，図書購入のため一橋基金募集開始（2000万円目標）
4. 2	戸田艇庫用地視察	4. 1	戸田コース修理起工
5. 1	憲法施行記念都民大会レガッタ（於戸田）	4. 10	お花見レガッタ
5. 15	第60回春季競漕大会が東大の学部対抗レースと合流して挙行	4. 16	旧制学部入学式（397名）
5. 30	対校第1期合宿練習開始（戸田，海洋道場にて）	5. 3 ～ 8	関東学生漕艇リーグ戦（戸田）
		5. 22	慶大戸田艇庫竣工，水上運動会
6. 5	関東漕艇連盟・戸田町主催第1回戸田レガッタ開催，本学学生エイト，一般エイト，スカルの3種目に優勝	5. 28 ～30	全学連第2回全国大会（於兼松講堂）大学設置法反対
6. 22	部員会（於本科部室）　対校練習計画，新部員獲得について	6. 1	**新制一橋大学**（商・経・法社の3学部）正式発足(学制改革)
6. 26	対校クルー第2期合宿開始（7月5日まで）	6. 8 ～ 9	新制一橋大入試
7. 3 ～11	大阪地区募金活動	6. 25	一橋大学開校式入学式（573名）
7. 30	対校クルー第3期合宿	7. 2	専門部編入者入学式
		7. 19	イールズ声明（レッド・パージ）
		7. 31	関西固定席艇選手権（尾花川）
		7.	下山事件，三鷹事件，松川事件相次ぐ
8. 13 ～14	第1回淡路島レガッタ開催，本学も出漕日大に敗退		
8. 28	第1回の東商対校レース，東大優勝		
9. 17 ～18	全日本選手権大会，関東インターカレッジ合同開催，本学惨敗，エイトでは東大が優勝(戸田)	9. 4	第18回早慶レース（戸田）慶大優勝
9. 29	小平で新入部員勧誘，クラスチャン練習開始（交通費，焼芋補助）	9. 10	東大の新艇白光進水
10. 8	部員会（於艇庫）　役員交代	9. 10	同立定期戦（戸田）
10. 23	ＨＣＳ各1クルーのエイトでクラスチャン・レース，Ｃ組優勝	10.	中華人民共和国成立

ボート部	大学社会関係
11. 1 第4回国体レース（戸田）に専門部フォア・クルー出漕（決勝レース3位）	11. 3 一橋祭
12. 10 対校クルー練習スタート会	11. 3 湯川博士ノーベル賞 四神会，月額会費制に移行
昭和25年〔1950〕	
3. 25 卒業生送別会	
3. 29 春季大会練習開始（第2選手レース復活）	3. 旧制学部最後の入学式 新制大学入試
	3. 28 3科卒業式予科30年の歴史を閉ず
	3. 31 世間一般の就職難に拘らず，本学卒業生は95%が就職確定
4. 6 春季大会合宿開始	4. 授業料滞納300余名
4. 16 第61回春季大会開催	
4. 19 対校選手第2期練習	
5. 1 四神会報第1号（ガリ版刷り1枚）発行	5. 5 7.14関東学生リーグ戦
5. 3 憲法施行3周年記念第4回都民体育大会漕艇競技大会開催（戸田）	5. 20 新制大学「全学連」に加入
	5. 20 第19回早慶レース（永代橋・大倉別邸間600m）慶大勝つ
5. 15 新制クルー戸田レガッタをめざし練習開始	
5. 18 部員会（於国立部室，村松部長出席） クラスチャン，戸田レガッタ，その他について	5. 23 教育大附属中・高端艇大会（於商大艇庫）
6. 1 対校選手第3期練習開始	6. 3 新制大学全学連の反戦反帝ストに参加
6. 4 日本漕艇協会創立30周年記念第2回戸田レガッタ（新制3年クルー決勝進出）	6. 25 **朝鮮動乱勃発**
6. 前田正先輩のご好意によるコーチ用モーターボート常備	6. 25 第2回東大教養文理科対抗(向島)
6. 10 ボート部便り（ガリ版1枚）発行	7. 30 第1回新制東大対京大対校レース（於瀬田川2マイル）
	7. 30 第2回名古屋レガッタ
8. 20 第2回東大一橋大対校レース（両国，大倉別邸間2マイル） 5艇身差で敗退	8. 10 警察予備隊令公布
9. エイト新艇「一橋」進水	
9. 9 ～10 全日本選手権大会（戸田）決勝で東大，慶大に次ぐ3位で敗退	
10. 2 新部員勧誘	10. 5 レッド・パージ反対学生総決起大会，本学も参加
10. 29 一橋創立75周年記念ボートレース大会挙行（於向島艇庫）記念祭委員会より経費補助	10. 21 ～29 **一橋創立75周年記念祭**
11. 14 S組松戸遠漕	10. 31 第5回国体秋季大会（名古屋）
11. 21 C組松戸遠漕	
11. 25 部員会（於向島艇庫） 次年度役員について	
12. 5 対校選手冬季通い練習開始	12. 8 新寮全焼（144名寮生）
12. 12 台船沈没を発見 徹夜で排水作業を行うも再び沈没	
昭和26年〔1951〕	
1. 10 台船水汲み出しの結果浮上 再び沈没	1. 15 中山学長再選

ボート部		大学社会関係	
1. 13	台船修理のため野口造船所へ曳航	1. 25	ダレス使節団来日
1.	部報復刊第1号発行		
1. 30	第3回東商戦準備打合せ会　$4^1/_4$マイル決定す。		
3. 29	卒業生送別会	4. 1	経済学，商学，法学，社会学の4学部制発足
4. 4	台船据付後再び沈没	4. 8	実業団向島レガッタ（本学艇庫）
4. 8	各組合宿開始	4. 9	入学式
4. 20	四神会（於竹葉亭）役員の選出	4. 24	国電桜木町電車火災（焼死107人）
4. 22	第62回春季大会開催　四神会総会（於艇庫） レッド・オア寄附運動発足	4.	マッカーサー解任
4. 30	対校選手合宿入り		
5. 3	憲法記念第5回都民レガッタ（向島）		
5. 8	NHK第2放送「学生の時間」で一橋大学端艇部の合宿生活を放送	5. 8	日本オリンピック復帰
5. 10	対校選手健康診断 クラスチャン練習開始		
5. 12	台船修理完了	5. 12	早慶ボートレース
5. 20	新入生クラスチャンレース（フィックス言問→一高800m HCS各3クルー出漕，E組(C)が優勝	5. 14	国立学生大会，一橋会会則可決成立
5. 24	東商戦$4^1/_4$マイルコース測量開始	5. 25	教育大附属高水上運動会（於本学艇庫）
5.	部報復刊第2号発行	5. 27	住友海上水上運動会(於本学艇庫)
6. 3	戸田レガッタにエイト・フォア各1クルー出漕	6.	連合教授会，国立文教地区指定推進声明書を発表
6. 16	第3回東大一橋大対校戦白鬚・永代橋間$4^1/_4$マイルコースで挙行，東大優勝，NHKによる実況放送		
6. 21	昭和2年会主催の対校選手激励会(於如水会館)		
7. 1	部報復刊第3号発行	7. 10	朝鮮休戦会談開始
7. 2 ～8	関西地方募金活動		
7. 5 ～10	体育臨時コース（一般学生約100人が艇庫で合宿練習）		
7. 10 ～14	対校選手団戦後はじめて銚子遠漕		
8. 25	四神会会費増口，会員拡充運動開始，趣意書を部報臨時号として発送		
8. 28	四神会大阪支部発会式（於如水会大阪支部）		
9. 3	対校クルー戸田入り，フォア新艇「利根」進水	9. 8	**講和条約・日米安保条約調印**（サンフランシスコ）
9. 8 ～9	全日本選手権大会兼第15回オリンピック日本予本学慶大，東大に次ぎ3位，優勝校慶大がヘルシンキ・オリンピック出場権を獲得，フォアは一橋大が優勝	9. 26	米軍司令部より立川基地周辺，10マイル以内灯火管制演習（中央寮ファイヤーストーム事件）
10. 3	部員総会（於向島艇庫）　次年度主将（田幡恵一）選出	10. 7	東大慶大医学部対校レース
10.	部報復刊第4号発行		

ボート部		大学社会関係	
10. 20	四神会秋季総会（於如水会館）	10. 30	授業料納入率3分の1以下
10. 21	秋季小会合宿入り		
11. 4	復活第1回（通算第16回）秋季小会開催	11. 3 4	創立76周年一橋祭
11. 17	部員会　次年度役員決定		
11. 22	C組松戸遠漕	11. 30	教授，学生の協力により推進してきた国立文教地区指定浄化運動ついに成功，指定実現
11. 23	S組松戸遠漕		
11. 30	対校選手練習開始		
昭和27年〔1952〕			
		1. 6	建設大臣より国立町の文教地区指定正式公布
		1. 28	学生との対話のため学長懇談会
		2. 1	兼松講堂にて町内有志を含む「国立文教地区協会」発会式
		2. 15	一橋大入試競争率経済学部25倍，商学部23倍，平均16倍
		2. 19	小平一橋寮解散コンパ，津田塾大学学生寮にストーム，同大学より厳重抗議
		2. 28	日米行政協定調印
3. 22	卒業生送別会（於艇庫）		
4. 20	第63回春季大会開催　強風波のためHCS対抗レースは24時間延期。四神会総会で新会則承認，新会長に佐藤尚武氏（明37年本卒）推戴		
5. 3	第6回憲法記念レガッタ（向島）	5.	白井義男フライ級世界チャンピオン
5. 25	新入生クラスチャン・レース（フィックス）に10クルーが出漕し，H組が優勝した。	5. 1	**二重橋血のメーデー事件**，本学から200名以上参加
		5. 9	メーデー事件調査のため大学構内に私服警官侵入
		5. 11	佐野善作元学長大学葬（兼松講堂）
6.	部報復刊第5号発行	6. 17	破防法反対の全学連指令に呼応全学スト決行，本学，東経大，学芸大，津田塾大学による全三多摩学生総決起大会開催（兼松講堂）
6. 1	第4回戸田レガッタ兼オリンピック・クルー壮行レース		
6. 4	エイト新艇「玄武」進水（遠山氏設計）	6. 18	学生会予算会議
6. 15	第4回東大一橋大対校戦に一橋が5艇身差で勝ち，また今回始まったジュニア・レース（2マイル）にも勝利	7. 9	如水会館，一橋講堂進駐軍接収解除
6. 19	部報祝勝特報発行	7. 19	ヘルシンキ・オリンピック大会
7.	対校クルー千葉県小見川合宿，遠山コーチの集中的指導	7. 21	破防法公布施行
9.	全日本選手権大会（戸田）決勝レース東大優勝本学3位，フォアは準決勝で敗退		
10. 26	復活第2回（通算第17回）秋季小会　一般学生野次レース出漕15クルー	10. 5	杉本栄一教授大学葬（9月17日逝去）

ボート部	大学社会関係
	10. 13 炭労スト
12. 1 四神会名簿（昭和28年版）発行	
12. 15 部報復刊第6号発行	
昭和28年〔1953〕	
	2. 1 NHKテレビ放送（白黒）開始
	3. 5 スターリン死去
	3. 吉田首相バカヤロー解散
	3. 旧制東商大最後と新制一橋大第1回の同時卒業式
4. 18 第64回春季大会	
4. 27 対校クルー合宿開始	4. 1 **新制大学院**発足
	4. 2 日米友好通商航海条約調印
5. 3 第7回憲法記念レガッタ	4. 19 第26回総選挙
5. 24 新入生クラスチャン・レース，11クルー出漕	5. 10 早慶レース
6. 1 部報復刊第7号発行	
6. 21 第5回東商レース，本学昨年についで連続優勝ジュニアは敗北	
7. 12 夏季体育臨時コース～17	
7. 13 対校選手団銚子遠漕～17	
7. 19 対校クルー合宿入り	
7. 20 部報復刊第8号発行	
8. 9 新艇「青龍」進水	8. 28 民放テレビ放送（白黒）開始
8. 16 第1回朝日招待レガッタ（吾妻橋，大倉別邸間1マイル）東商早慶4校出漕，現役，OB各種とも本学が優勝	
9. 5 全日本選手権大会(戸田)，決勝で早大，北大に～6 敗退3位	9. 12 フルシチョフ，ソ連第一書記就任
9. 28 部報復刊第9号発行	
	10. 27 中山学長再選決定
11. 1 第18回秋季小会	
	12. 1 ソ連第一次引揚船舞鶴入港
昭和29年〔1954〕	
1. 15 C組スタート会兼卒業生送別会（如水会館）出席40人	
	3. 1 ビキニ水爆実験(第五福竜丸被災)
4. 25 第65回春季大会（S組優勝）	4. ジュネーブ会議開備
5. 22 朝海浩一郎先輩帰朝歓迎会兼端艇部スタート会（中央クラブ），ケンブリッジ・クルー来日に備え，先輩談を参考	4. 20 造船疑獄佐藤栄作幹事長逮捕請求に対し吉田首相指揮権発動
5. 23 第65回クラスチャンレース（14クルー出漕）	
6. 20 第6回一橋対東大対校レース，ジュニアレースは水神，厩橋間3,000m コース本学優勝，対校エイトは白鬚水神，永代橋間4マイル1/4コース	

ボート部	大学社会関係
東大に敗退	
6. 26 東商戦反省会　於如水会館	
7. 1 新艇「白虎」進水（岡本造船所横山技師設計）	7. 1 防衛庁自衛隊発足 新「三菱商事」発足
7. 11 船台修理，艇庫老朽個所修理とともに艇庫大掃除を行う。	
7. 25 部報第10号発行	
9. 4 ケンブリッジ大クルー来日	
9. 5 体育科臨時コース合宿	
9. 11～12 全日本選手権レガッタ（戸田）ケンブリッジ大参加。北大優勝（6分9秒）**北大旋風**（造艇，漕法ともに科学的合理主義）	
9. 19 第2回朝日レガッタ（向島）ケンブリッジ大参加	9. 26 青函連絡船洞爺丸台風で没沈
10. 31 秋季小会（向島）チャン，セコともH組優勝	
11. 24 四神会評議員会　於如水会館	11. 鳩山一郎日本民主党結成
12. 11 S組懇親会　於如水会館（出席者菅礼之助以下30余人）	12. 第1次鳩山内閣成立
昭和30年〔1955〕	
3. 26 モーターボート進水式（艇庫）マーキュリー号と命名	
4. 17～18 第66回春季競漕大会（水神・言問橋間2,000mコース）　S組優勝	4. アジア・アフリカ会議開催（バンドン）
5. 3 憲法記念レガッタ（言問・大倉間1,000mコース）で決勝に早大を破り本学優勝　四神会クルーも一般の部に優勝	5. 7 ワルシャワ条約機構成立 この年「神武景気」
5. 15 第66回クラスチャンレース	
5. 29 第7回東商戦，本学中山，東大矢内原両学長臨席，ジュニア（水神，厩橋間3,000mコース）は本学敗退，対校レース（水神，永代間4マイル$^1/_4$コース）**本学優勝**	
6. 12 相模湖コース開きレガッタ開催　出漕クルー約50，本学は対校ストローク・フォアがナックルで出漕，1,000m ナックル日本新記録をつくり優勝	
6. 19 第1回新人レース（言問，艇庫前800mコース）本レースはクラスチャンと異なるボート部の新人レースでナックルフォアのスライディング艇を使用，第1回レースはS組優勝	
7. 30 部報第12号発行	
8. 21 朝日招待レガッタ(向島)決勝で東大に敗北	8. 6 広島で初の原水禁世界大会
9. 3～4 第33回全日本選手権レガッタ兼メルボルン・オリンピック第1次予選（戸田，2,000mコース）決勝戦で東大に敗れ2位，明年のオリンピック代表決定戦に出場資格を獲得	9. ガットに加盟 9. 13 砂川測量で衝突

ボート部		大学社会関係	
	シェル・フォア（ジュニアより選抜全員2年生）は優勝，ナックル・フォアは2位		
10. 30	秋季小会（向島2,000m） 一橋祭参加行事 チャン，セコ共C組優勝	10.	中山伊知郎教授学長辞任，井藤半弥教授学長就任
11. 6	ジュニアインターカレッジ（向島2,000m，秋季小会の優勝クルー出漕）	11.	民主党と自由党が合同して自由民主党結成（保守合同）
11. 7 ～25	対校第1期合宿練習		
11. 20	国公立大学対校レガッタ（向島1,000m），東大，教育大，都立大，工大，本学参加。1，2，3位を独占		
11. 20	80周年記念一橋祭において本館38番教室で端艇部展示会を開催 レッドオアー運動 120本達成		
昭和31年〔1956〕			
1. 5 ～22	対校第2期合宿練習	1. 1	弥彦神社事件 死者124名
1. 20	部報第13号発行	2.	週刊新潮創刊（出版社系週刊誌ブームのはじまり）
3. 11 ～ 4. 22	対校第3期合宿練習 第67回春季大会（向島） 第一選手はC組，第二選手はH組が優勝		
5. 1 ～ 6	対校銚子遠漕	5. 9	マナスル初登頂
5. 23	新艇「朱雀」進水式，岡山造船所横山技師の設計	5.	日ソ漁業条約調印
6. 2	第8回東大，一橋大対抗レース開催 対校レースは中止（東商両クルー共メルボルンオリンピック候補クルーに選ばれたため）ジュニア・クルーは東大に快勝 OBレースも30歳以上40歳以下のクルーを除き，各年代で快勝		
6. 10	朝日招待レガッタ（向島） 出漕は，本学ほか東大，慶大，早大，明大，中大，東経大の7校，本学クルーは決勝レース東大に惜敗		
6. 17	第2回新人競漕大会（向島艇庫）開催，15クルー参加 U組（S）優勝		
7. 16 ～20	前期体育課夏季臨時コース合宿入り（向島艇庫）	7.	経済白書「もはや戦後ではない」
8. 4 ～ 5	全日本選手権大会予選，本学第2エイト出漕敗退		
8. 9	**戸田艇庫合宿所**（木造）竣工式		
8. 11 ～12	全日本選手権大会決勝兼オリンピック代表決定戦 本学エイト京大に惜敗，決勝で慶大が30cmの僅差で京大に勝利，本学フォアも敗退	9. 30	砂川基地反対運動に学生カンパ，

ボート部	大学社会関係
	～10. 8 泊り込み
10. 28 第21回秋季小会（水神・高間橋間2,000 m）チャンはH組，セコはS組，サードはC組優勝	10. スエズ戦争
	10. 19 日ソ国交回復共同宣言，通商議定書調印
	10. 23 ハンガリー動乱
11. 10 ～12 S組遠漕	11. 22 メルボルンオリンピック
	11. 第1次南極観測隊出発
11. 17 ～18 C組遠漕	
11. 18 国公立対校レガッタ　本学は秋季小会優勝のH組がエイトの部に出漕，優勝。ナックルレースに出場の一橋クルーも優勝	
11. 21 端艇部部員総会，新役員を決定　反省会にてH．C．S制再検討	
	12. 18 国連総会で日本加盟承認
	12. 20 鳩山内閣総辞職
	12. 23 石橋内閣成立
昭和32年〔1957〕	
1. 30 部報第16号発行	1. 南極に昭和基地設置
	2. 25 岸内閣誕生
	3. ＥＥＣ条約成立
4. 21 第68回春季大会（向島）　S組完全制覇	4. 商学部付属産業経営研究所開設
5. 11 第68回クラスチャンレース	
5. 27 東商戦に備え，対校クルー合宿入り（戸田合宿所）	
5. ＨＣＳ優勝旗修理（中川英造氏寄贈）	
6. 2 第9回東商戦（向島）　OBレースは全勝，ジュニア，対校共に敗北	
	6. 18 日銀公定歩合引下げ，この年「なべ底不況」
6. 22 第1回中和寮対一橋寮交歓レース	
7. 20 部報第17号発行	
	7. 25 九州地方豪雨，死者982人
7. 28 第5回朝日招待レガッタ（吾妻橋一大倉別邸間）開催　参加，本学，東大，慶大，早大，中大，東経大，明大，日大計8校　本学は決勝で慶大に敗れ2位となる。	
	8. 27 東海村に原子炉第1号移動開始
8. 24 ～25 第35回全日本選手権レガッタ（戸田）　参加クルー・エイト23，フォア12。エイトは準決勝第3レースで慶大に敗退，シエル・フォアは優勝	8. 村松部長外遊
10. 20 部報第18号発行	10. 4 史上初の人工衛星ソ連スプートニク号打上
10. 27 秋季小会（向島）サード・チャンともC組組優勝。セコはS組	
11. 6 ～ 8 C組遠漕	
11. 15 部員総会を開き，部費月額50円徴収を決定	
11. 15 対校選手銚子遠漕	
	12. 日ソ通商条約調印

ボート部	大学社会関係
	12. 10 愛親覚羅慧生さん天城山中で心中
昭和33年〔1958〕	
1. 31 部報第19号発行	1. 米人工衛星1号打上げ
3. 15 H組銚子遠漕 ～20	
4. 20 第69回春季大会（言問橋一水神）開催 チャンはS組が連覇，セコはH組優勝	4. 1 売春防止法実施
5. 12 第69回クラスチャン・レース（向島一早稲田艇庫）開催 18クルー参加 T（S組）が優勝し，S組はクラスチャンに三連覇	5. 本学国立敷地内に経済研究所建物竣工 東京で第3回アジア大会開催
6. 8 第10回東商戦 ジュニア・レースは勝つも，対校は昨年に続き連敗	
6. 14 第4回新人レース（言問一艇庫） C組優勝	
6. 23 遠山不羈夫氏逝去	
7. 3 四神会幹事会	7. イラク革命
7. 27 第6回朝日招待レガッタ（言問一白鬚橋）開催 本学，東大，慶大，中大，明大，東北大，東工大7クルー参加 本学クルーは予選で敗れ（ラダープが切れてコースアウトで失格），慶大優勝。OBレースで四神会クルー6連覇。遠山不羈夫氏の水葬式挙行	
8. 10 部報第20号発行	
8. 23 第36回全日本選手権レガッタ（戸田） 本学エイトは決勝で慶大に敗れ2位。フォアも敗退 ～24	
8. 30 艇庫において，部会開催 若い先輩10人出席。対校非分離，全部員による継続的練習，陸上練習による体力強化等の新方針決定	
9. 15 部員総会 新役員を決定	9. 27 狩野川台風 死者331人
11. 2 第23回HCS秋季小会（向島）	11. 27 皇太子妃に正田美智子さん内定発表
	12. 1 1万円札登場
	12. 23 東京タワー完成
	12. ドゴールフランス大統領に就任
昭和34年〔1959〕	
	1. メートル法実施 キューバ革命勃発(カストロ政権)
4. 12 第70回春季大会（向島） チャン・セコH組優勝	4. 10 皇太子ご成婚
	4. 井藤半弥学長辞任，山中篤太郎学長就任
5. 2 第70回クラスチャンレース（向島）	
5. 10 新艇青龍（エイト）進水式（横山晃設計，岡本造船所建造）	
5. 23 新艇KEYNES（フォア）進水式（デルタ造船所建造）	

ボート部	大学社会関係
6. 7 第11回一橋大対東大対校戦（向島） ジュニアレースを除き，フォア，対校エイトとも本学が**優勝** 7. 30 部報第23号発行 8. 21 ～23 全日本選手権（戸田） オックスフォードに30cmの僅差で勝って12年ぶりに**優勝**（エイト），フォアは決勝で3位 8. 30 朝日レガッタ（北海道・茨戸） 東大，オックスフォード大を破って優勝 9. 7 如水会主催 全日本優勝祝賀会（如水会館） 10. 25 第24回秋季小会（水神一言問橋） チャンはC組，セコはH組優勝 11. 一橋祭準備委員会主催「端艇部全国制覇祝賀会」（兼松講堂） 11. 13 ～19 S組銚子遠漕	9. ソ連月ロケット月面着陸 9. 26 伊勢湾台風 10. 社会党分裂，西尾新党結成
昭和35年〔1960〕	1. **日米新安保条約**調印 4. 12 ソ連，人工衛星打ち上げ（ガガーリン少佐）
～ 6. 財政再建のための特別募金運動（S34. 12～），寄付申込700余万円 5. 7 ～ 8 ローマオリンピック予選(戸田)，エイトは準決勝にて慶大に30cmの差で惜敗。東北大代表決定 6. 12 第12回一橋対東大対校レガッタ（戸田)敗退，ジュニアエイト優勝	5. 1 キューバ社会主義革命 6. 15 反日米安保デモ。樺美智子さん死亡 6. 23 日米新安保条約発効 7. 19 第1次池田内閣成立（初の婦人大臣，中山マサ厚相）
7. 24 第○回朝日招待レガッタ 7. 31 第71回春季大会（向島），H組全勝 7. 朝海浩一郎氏モータボート寄贈 8. 20 ～21 第38回全日本選手権レガッタ（戸田），エイトは準決勝で東大に敗退2連覇ならず。本学初出場のスカルで登里君が優勝	8. ローマオリンピック開催
10. 特別募金を源資として校内レース用にエイト3艇を建造 11. 高速道路6号線が向島艇庫の上を通る計画があり，艇庫移転候補地として多摩川及び相模湖の調査を開始	9. 池田内閣，所得倍増政策発表 9. 10 カラーテレビNHKなど8局放送開始 10. 浅沼社会党委員長，日比谷公会堂で演説中刺殺

ボート部	大学社会関係
昭和36年〔1961〕	1. アメリカ，キューバと断交
	4. 山中学長辞任，高橋泰蔵学長就任
5. 2 第　回クラスチャンレース（相模湖），400人参加	
5. 8 艇庫建設小委員会結成（委員長堀川高太郎氏）	
5. 21 第13回一橋・東大対校レガッタ(向島)，全種目に敗退	
6. 18 第72回春季大会（向島），再びH組完全優勝	
7. 19 神奈川県津久井郡藤野町に艇庫用地として 550坪買収	
7. 29 ～30 第39回全日本選手権レガッタ・エイトの部（戸田），準決勝進出ならず。(オリンピックを控えて小艇重視の気運から小艇を分離)	
8. 10 小艇3艇進水（源資特別募金）	
8. 26 ～27 第39回全日本選手権レガッタ・小艇の部（戸田），登里スカルで2連勝	
9. 3 日独対抗レガッタ(戸田)，西独キール大学出場　本学からスカル出場，4艇身差で敗退	9. 米ソ軍縮共同宣言
10. 21 第36回秋季大会(戸田)，向島護岸工事のため校内レースとして初めて戸田で開催　チャンS組，セコ・サードはH組	
11. 2 ～3 日米レガッタ(戸田)，レイク・ワシントン・ローイングクラブ参加。無フォア，無ペアスカルに出場し敗退	
昭和37年〔1962〕	
	2. 1 東京都の人口，世界初の1000人万突破
5. 20 第14回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，初めて戸田で開催，スカル以外は敗退	5. 3 常磐線三河島二重衝突事故，死者160人
6. 2 クラスチャンレース（相模湖）	
6. 10 第74回春季大会(向島)，チャンS，セコC，サードH	
6. 16 ～17 第40回全日本選手権レガッタ（小艇）（戸田），スカル　決勝で2着	
7. 14 ～15 第40回全日本選手権レガッタ（エイト）（戸田），オックスフォード盾エイトは決勝で日大に惜敗	7. 11 公明党結成
8. 19 第10回朝日招待レガッタ(尾久)，準決勝敗退	8. 堀江青年ヨットで単独太平洋横断
10. 28 第73回秋季大会(戸田荒川)，チャンはH組，セコH組，サードはS組優勝	10. 22 ケネディ大統領，キューバ海上封鎖

ボート部	大学社会関係
昭和38年〔1963〕	
	2. 日ソ貿易協定調印
	3. 31 村越吉展ちゃん誘拐事件
	戸田ボートコース，オリンピックを控えて拡張工事
4. 四神会戸田艇庫建設準備委員会発足	
5. 4 クラスチャンレース（向島）	
5. 20 戸田仮艇庫完成	
5. 25 新人レース（向島）	
6. 8 欧州選手権国内予選兼朝日招待レガッタ（相模湖），準決勝で敗退	
～ 9	
6. 23 第15回一橋・東大対校レガッタ(戸田荒川)，ジュニア以外全敗	
7. 18 村上驍君（ジュニアクルー2番）荒川戸田橋上流で練習中溺死	
7. 28 第28回夏季小会(向島)，チャンH組，セコS組優勝	
8. 31 第41回全日本選手権レガッタ・エイト(相模湖)，	8. 5 米英ソ3国部分的核実験停止条約調印
～9. 1 敗復で敗退	
10. 12 東京国際スポーツ大会ボートレース兼全日本小	10. **戸田ボートコース新装完成**
～14 艇選手権（戸田）	10. 第3回日本寮歌祭，一橋(ボート)参加
付ペア2位，無ペア5位，スカル敗復敗退	
11. 10 第74回秋季大会(向島)，C組完全優勝	11. 磯野長蔵氏寄贈による磯野研究館竣工
12. 6 岩下家一先輩（M38卒）逝去	11. 南ベトナムクーデター
	11. 22 ケネディ米大統領暗殺
	12. 8 力道山刺殺
昭和39年〔1964〕	
3. 14	
4. 1 戸田艇庫建設募金活動開始	4. 高橋学長辞任，増田四郎学長就任
5. 10 第16回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，ジュニアエイト以外全敗	
5. 23 東京オリンピック・エイト代表決定レース（戸	
～24 田），日漕選抜クルーが代表と決定（本学から長谷川参加）	
	6. 16 新潟大地震
7. 2 小松栄先輩逝去	7. 経済研究所付属日本経済統計文献センター開設
8. 18 故村上君一周忌法要	8. 2 トンキン湾事件
9. **戸田艇庫竣工式**	10. 1 東海道新幹線開業
	10. 10 **東京オリンピック開幕**
	11. 9 佐藤内閣成立

ボート部	大学社会関係
昭和40年〔1965〕	
	2. 7 ベトナム戦争米軍北爆開始
5. 23 第17回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，ジュニアエイト以外全敗	
	6. 一橋大学創立90周年記念式典
	6. 22 日韓条約調印
8. 8 第12回朝日招待レガッタ（戸田)，エイト予選敗退，スカル決勝4位	
8. 28 ～29 第43回全日本選手権レガッタ(戸田)，エイト準決勝で敗退，オックスフォード盾レガッタで決勝3位	
9. 5 第29回夏季大会(戸田)，チャンH組，セコS組が優勝	9. 母校創立90周年記念祭と記念事業を挙行
10. 26 三谷一二先輩逝去	10. 朝永博士ノーベル賞
11. 四神会総会において総務・会計・強化部会の新設を決定	11. 10 中国で文化大革命
昭和41年〔1966〕	
	2. 4 全日空機，羽田沖で墜落，133人死亡
	3. 5 BOAC機，富士山中に墜落，124人死亡
5. 15 第18回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，エイト・フォア，ジュニアエイト，スカルの**全種目優勝**	
	6. ビートルズ東京公演
	7. 4 新国際空港，成田に決定
8. 7 第13回朝日招待レガッタ(戸田)，決勝4位	7. 後期学生寄宿舎中和寮新設（ラグビー場の一部敷地）
8. 21 相模湖艇庫建設委員会発足	8. 5 「黒い霧」事件
8. 27 ～28 第44回全日本選手権レガッタ(戸田)，エイトは準決勝3位で敗退，フォアは決勝3位，スカルで佐々木優勝，オックスフォード盾で決勝3位	
11. 27 第77回秋季大会(戸田)，チャンC組，セコS組優勝	
昭和42年〔1967〕	
	1. 母校所在地に市政，国立市発足
	2. 11 初の建国記念日
4. 岩崎恒弥先輩逝去	3. 国立大学拡充計画により，学部入学生定員780名に増員
4. 27 第78回クラスチャンレース	
5. 14 第19回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，スカル以外全敗	3. 校門完成
	4. 増田四郎学長再任
6. 10 HCS新人レース	4. 15 東京都知事に社会・共産推せんの美濃部氏当選
7. 15 ～16 カナダ建国記念レガッタ派遣国内予選（戸田）	6. アラブ・イスラエル中東戦争
7. 30 国公立戦	

ボート部	大学社会関係
8. 6 第14回朝日招待レガッタ(戸田)，敗復敗退	
9. 1 第45回全日本選手権レガッタ(戸田)，**エイト優勝**（**9回目**）2位同志社に1艇身，3位東外大，4位名工大	
9. 20 優勝祝賀会開催（如水会館）	
	10. 吉田茂元総理歿，国民葬
11. 5 故三谷氏墨蹟除幕式（戸田合宿所）「至誠一貫」	10. 8 第1次羽田事件
11. 15 第78回秋季大会(戸田)，H組全勝	11. 12 第2次羽田事件
11. 18 **向島艇庫惜別式**挙行（向島）	
昭和43年〔1968〕	
	1. 米国原子力空母エンタープライズ佐世保入港
4. 向島艇庫(解体工事着手)，収納艇は戸田へ運送	
5. 5 第20回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，全種目に敗退	5. 日本GNP世界第3位
5. 11 第79回クラスチャンレース	
5. 15 故岩崎恒彌（大9本）氏追悼会（如水会館）	
	6. 26 小笠原諸島，日本に復帰
8. 23～25 第46回全日本選手権レガッタ(戸田)，メキシコオリンピック国内予選も兼ねていたが，決勝4位で敗退	8. ソ連，チェコに侵入
	10. 21 新宿駅占拠事件
11. 24 第79回秋季大会(戸田)，チャン・セコともC組優勝	
	12. 10 三億円事件
昭和44年〔1969〕	
	1. 18 東大安田講堂占拠事件
5. 4 第21回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，スカル・ジュニアエイト勝つが，エイト・フォア敗退	5. 17 **本学国立本館封鎖**
	7. 1 村松教授（ボート部長）学長事務取扱に就任
8. 第47回全日本選手権レガッタ(戸田)，メルボルン大学がエイトに参加，エイト準決勝2位で敗退，スカル4位。OB2名，ダブルスカルに出漕堂々2位	7. 21 米「アポロ11号」人類初の月面到着
	8. 3 「大学運営臨時措置法案」成立
8. 故岩崎恒彌氏寄贈エイト（恒天）スカル(恒星)進水式	
	10. 6 国立本館封鎖解除
	11. 馬場啓之助学長事務取扱就任
昭和45年〔1970〕	11. 一橋大学後援会，小平分校に教室寄付
3. 1 ジュニアクルー荒川笹目上流で**遭難**，河村，川端両君溺死	3. 14 大阪万国博開会
	3. 31 赤軍派，日航機「よど号」ハイジャック，北朝鮮へ亡命
5. 5 第22回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，全種目に敗退。	
6. 6 第48回全日本選手権レガッタ・小艇（戸田）	6. 23 日米安保条約自動延長

ボート部	大学社会関係
～ 7　（兼世界漕艇選手権派遣代表選考会） 8. 29　第48回全日本レガッタ・エイト（戸田） ～30　準決勝3位で敗退，オックスフォード盾は決勝5位 10.　**相模湖艇庫完成**	11. 25　三島由紀夫，市谷の自衛隊で割腹自殺
昭和46年〔1971〕 1. 7　内田信也先輩逝去 2. 18　菅礼之助先輩逝去 3. 6　荒川沖遭難事故一周忌追悼会 5.　第23回一橋・東大対校レガッタ（戸田），四神会費増口運動	1.　ソ連金星に軟着陸 6.　沖縄返還協定に調印
7. 3　第49回全日本選手権・小艇（兼欧州選手権派遣選考会）（戸田），フォア準決勝で敗退 8. 28　第49回全日本選手権・エイト（戸田），敗復3位 ～29　敗退，大学女子選手権に本学から初めて参加，シングルスカルで2位（三谷利江） フォア準決勝3位	8. 15　ニクソン・ショック（ドル防衛へ新政策）
11. 14　第82回秋季大会（戸田），C組優勝	9. 27　両陛下ご訪欧 12. 18　10カ国蔵相会議（スミソニアン体制） 12. 20　円切り上げ実施，1ドル＝308円
昭和47年〔1972〕	1.　元日本兵横井庄一グアム島で発見 2. 19　連合赤軍，浅間山荘占拠事件 2. 21　ニクソン訪中 4.　都留重人学長就任 川端康成自殺
4. 30　第24回一橋・東大対校レガッタ（戸田），エイト優勝 5. 19　第83回クラスチャン 6. 4　全日本小艇選手権兼ミュンヘンオリンピック選考会（戸田） ～ 5	7. 7　田中内閣発足
8. 13　**相模湖艇庫合宿所竣工披露宴** 8. 26　第50回全日本選手権レガッタ（エイト）（戸田）， ～27　敗復3位敗退	8. 26　ミュンヘンオリンピック開幕 9. 29　田中首相訪中
11. 19　第83回秋季大会（戸田），H組優勝	
昭和48年〔1973〕	3. 2　ベトナム和平協定調印 3. 29　駐南ベトナム米軍撤兵完了 5. 17　米上院，ウォーターゲート事件調
5. 5　第25回一橋・東大対校レガッタ（戸田）敗退	

ボート部	大学社会関係
5. 25 第84回クラスチャン	査委公聴会
6. 9 中日本レガッタ(愛知用水)，優勝	
～10 第51回全日本選手権レガッタ（戸田）敗復敗退	
	8. 8 金大中誘かい事件
	10. 6 第4次中東戦争
	10. 16 オイル・ショック（原油21%値上げ）石油危機緊急事態対策
12. 18 四神会新会長に畑弘平氏就任	
12. 23 第84回秋季大会(戸田)，H組優勝	
昭和49年〔1974〕	
1. 11 四神会年度幹事会が発足	
3. 6 村松部長逝去	3. 10 元日本兵小野田寛郎ルパング島で発見
3. 中川学新部長就任	
5. 5 第26回一橋・東大対校レガッタ（戸田）敗退	
5. 24 クラスチャンレース	
6. 29 故村松前部長追悼会（如水会館）	
8. 31 第1回全日本大学選手権レガッタ（戸田）	8. 8 ニクソン大統領辞任
～9. 1	8. 30 三菱重工ビル爆破事件
11. 2 第52回全日本選手権レガッタ(戸田)，準決勝4	11. フォード米大統領訪日（現職大統領としては初）田中首相，金脈問題で辞任
～4 4位敗退	
12. 1 第85回秋季大会（戸田）	12. 文春金脈暴露で田中退陣，三木内閣成立
12. 四神会に総務・財務・**部史編さん**・選手強化の4委員会発足	
昭和50年〔1975〕	
3. 四神会費増口運動（～7）	
	4. 30 ベトナム戦争終結
5. 5 第27回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，初の1マイルレース	7. 20 沖縄海洋博開催
	8. 4 赤軍クアラルンプール事件
5. 23 クラスチャンレース	8. 小泉明学長就任
	9. 30 両陛下ご訪米
	10. 30 一橋大学**創立百年記念式典**（兼松講堂），同夜記念祝賀パーティー（職員集会所）
昭和51年〔1976〕	
	2. 4 ロッキード事件発生
5. 5 第28回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，エイトは4年ぶりの優勝	
	6. 18 一橋大学創立百年記念事業募金会発足，会長中山伊知郎，副会長水上達三，川又克二
6. 12 中日本レガッタ（愛知池1000m），優勝	
～13	7. 田中元首相逮捕(ロッキード事件)
	7. 17 モントリオールオリンピック開幕

ボート部	大学社会関係
8. 5 如水会理事長高橋朝次郎氏(昭2，ボート先輩)急逝	9. 日本経済統計文献センター新館落成
8. 14 大学購入のシュルエイト一橋百年を記念してCentennial と命名	9. 9 毛沢東死去
8. 28 第3回全日本学生選手権レガッタ（戸田）～29	11. 銀座松屋前に「一橋大学発祥の地記念碑」完成
10. 四神会募金による**宝山慰霊碑**建立	11. 10 天皇在位50年祝典
11. 戸田艇庫前庭に**安全祈願碑**建立	12. 24 福田内閣成立
11. 27 第88回秋季大会(戸田)，S組優勝	
昭和52年〔1977〕	
5. 8 第29回一橋・東大対校レガッタ(戸田)	2. 小泉学長逝去，富沢健一学長事務取扱就任
5. 27 クラスチャンレース	7. 蓼沼健一学長就任，附属図書館貴重本書庫完成
6. 11 中日本レガッタ（愛知池1000m)，優勝～12	7. 1 領海12カイリ，漁業水域200カイリ，スタート
6. 18 世界選手権派遣選考会～19	
8. 27 第4回全日本学生選手権レガッタ（戸田）決勝～28 3位	9. 3 王，756号本塁打，世界記録達成
9. 29 河西源吉四神会副会長逝去	9. 日本赤軍ハイジャック事件（16億円奪取）
昭和53年〔1978〕	
	3. 26 成田空港占拠事件
5. 7 第30回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，スカル以外敗退	5. 20 成田空港開港
6. 10 中日本レガッタ（愛知池）	
	7. 社会科学古典資料センター開所式
8. 25 第5回全日本学生選手権レガッタ（戸田）決勝～26 5位	8. 12 日中平和友好条約調印
	10. 円レート1ドル175円50銭
11. 26 第89回秋季大会(戸田)，H組優勝	
	12. 7 大平内閣発足(本学出身初の宰相)
昭和54年〔1979〕	
	1. 東京サミット開催
	1. 如水会主催大平総理就任祝賀会，ホテルオークラ
	1. 13 国公立大学初の共通一次入試
	3. 本校舎（旧専門部）構内に新体育館完成
4. 「東商戦の三十年」発刊	3. 26 エジプト，イスラエル平和条約調印
	4. 1 イラン・イスラム共和国発足

ボート部	大学社会関係
5. 13 第31回一橋・東大対校レガッタ(戸田)，ダブルスカル以外敗退	4. 23 中山伊知郎教授（元ボート部長）葬儀
6. 10 **旧向島艇庫モニュメント(マーキュリー章)**，相模湖艇庫合宿所に竣工披露式	
6. 16 第1回全日本軽量選手権レガッタ（戸田）	
～17 ハーバード大学（招待）につぎ2位	
世界軽量級選手権に派遣決定	
6. クルー派遣のため募金活動	
	7. 1 旧如水会館解体お祓い式
8. 24 第6回全日本学生選手権レガッタ(戸田)，付フォアのみ参加	
8. 28 **世界漕艇選手権**（ユーゴスラビア・ブレド）	
～9. 2 （軽量級）に出漕	
9. 20 派遣団の帰国報告会	
	10. 26 朴韓国大統領射殺
	11. 4 イラン，アメリカ大使館占拠事件発生
	12. 14 ダグラス，グラマン事件発覚
	12. ソ連，アフガニスタン進攻
昭和55年〔1980〕	
3. 2 白虎遭難事故（昭和45年3月1日）十周忌にあたり，慰霊祭挙行（戸田）	
5. 11 第32回一橋・東大対校レガッタ（戸田）	
ダブル・スカル，ジュニア・エイト以外敗退	
6. 14 第2回全日本軽量級レガッタ（戸田）	
～15 エイト惜しくも2位，連勝ならず	
8. 8 中日本レガッタ（愛知用水）	
8. 22 第7回全日本大学，第58回全日本レガッタ（戸田）	
～24 エイト，舵付フォア，ジュニア出漕いずれも準決勝で敗退	
	5. モスクワオリンピック不参加（ソ連のアフガニスタン進攻に対する抗議）
	6. 12 大平総理（70歳）急死
	7. 創立百年記念事業募金会より図書購入費その他10億円を大学に交付
	9. 22 如水会主催故大平総理追悼会（ホテルオークラ）
	10. 如水会館改築着工
	10. 18 第20回日本寮歌祭（日本武道館）
11. 第91回秋季大会	12. 国立・小平の環境整備工事完了
昭和56年〔1981〕	
5. 10 第33回一橋・東大対校レガッタ（戸田）	
シングル・スカル，ダブル・スカル以外敗退	
5. 20 ユニバシアード派遣選考会（戸田1000m）決勝	
～21 で敗退	
6. 20 第3回全日本軽量級レガッタ（戸田）エイト3	
～21 位	
	6. イラン，米大使館人質を解放

ボート部	大学社会関係
	6. 12 一橋大学学園史編纂事業委員会第1回委員総会
8. 26～27 第8回全日本大学，第59回全日本レガッタ（戸田）	
10. 16～18 第22回全日本新人選手権（戸田）	10. 3 第21回日本寮歌祭(日比谷公会堂)
18. 18 ヘッド・オブ・チャールズ・レガッタ（ボストンチャールズ河）に参加	10. 北炭夕張炭坑大惨事
10. 25～26 全日本新人レガッタ（戸田）エイト4位	
11. 22 第92回秋季大会，H組優勝	
昭和57年〔1982〕	
	2. ホテル・ニュージャパン火災 日航機羽田墜落
	4. フォークランド戦争（英・アルゼンチン）
5. 9 第34回一橋対東大レガッタ（戸田）敗退	
5. 27 第93回前期学生体育大会（水上の部） 900人戸田に参集	
6. 26～27 第4回全日本軽量級レガッタ（戸田） 213クルー出漕 準決で敗退	6. イスラエル，レバノン進攻
	6. 第30回東京地区国公立大学体育大会（本学は20種目全競技に参加）
	7. 2 第22回三大学（旧三商大）体育大会（於神戸大学）
8. 26～29 第7回全日本大学，第58回全日本レガッタ（戸田） インカレ・エイトで2位，東大優勝（差1艇身）全日本で4位	
	9. 29 新如水会館竣工落成披露祝賀会
11. 第93回秋季大会	
昭和58年〔1983〕	
4. 16～17 第36回大阪市民レガッタに四神会関西支部よりクルー出漕	
5. 3 第36回朝日レガッタ，一般男子ナックルフォアに四神会関西支部クルー出漕借敗	
5. 8 第35回一橋対東大レガッタ（戸田）ジュニアエイト，ダブルスカル，シングルスカル，舵付フォア，エイトいずれも敗退，エイトは0秒15（75cm）の僅差	
5. 14～15 ユニバシアード派遣選考会（戸田）準決で東北大に敗退2位	5. 15 第31回東京地区国公立大学体育大会，本学硬式庭球で2位，柔道で3位，バレーで3位，サッカー3位，ラグビー2位，卓球で2位
5. 30 第94回前期学生体育大会（水上の部） 172クルー出漕	
6. 25 第5回全日本軽量レガッタ（戸田）エイト本学	

ボート部	大学社会関係
～26 6′35″79で1着，2位京大差1艇身，3位東大，4年ぶり**2度目の優勝** 7．5 退任中川部長，新任大川部長歓送迎会（如水会館） 7．23 全日本軽量選手権優勝祝賀パーテー(戸田艇庫) 8．20 全日本大学選手権，オックスフォード楯，全日 ～23 本選手権レガッタ，敗退 11． 西独デュイスブルグにて開催の**世界軽量選手権大会**に出漕	11．5 一橋祭（国立） ～7

目　　次

◇出漕者名簿の編集にあたって…… 548
◇歴代部長一覧…… 549
◇学生役員名簿……（大９～昭58）…… 550
◇対一高レース……（明23～明32）…… 552
◇全国高商レース……（大15～昭４）…… 552
◇倫敦盃レース……（昭４～昭11）…… 553
◇主な対外記録……（大９～昭58）…… 554
◇東　商　戦……（昭24～昭58）…… 572
◇校内大小会……（明20～昭57）…… 579
◇予科専門部対抗競漕…（昭６～昭23）…… 622
◇戦歿ボートマンに捧げる…… 625
◇戦没ボートマン名簿…… 626

出漕者名簿の編集にあたって

端艇部創始以来の出漕者名簿の作成は数年前より計画され資料の蒐集整理が進められて参ったのでありますが，整理担当責任者の決定が遅れ組織的且つ継続的な編集方針及び計画が確立しないままに推移したため，百年史の全貌が明らかになってから急速に編集に努力を注いだのでありますが，残念ながら誠に不完全なものとなった次第です。

明治20年第一回校内秋季大会以来昭和11年までの資料は幸いにして第50回校内春季大会の記念事業として当時の端艇部が編集した『出漕者名簿』（担当責任者昭11年学卒，坂口侃氏）がありましたので，全面的にこれを採用いたしました。それ以降戦前戦中の記録は部報及び当時の出漕者諸兄の資料提供により纏めました。戦後の資料は部報，日本漕艇協会プログラム及び東商戦記録を中心にし不足分を各時代の出漕者諸兄及び学生諸君中の一部の方々よりの資料提供によるものです。

最後まで編集委員全員による不足資料の充足，誤謬の訂正の努力にも拘らず，時間と力不足のため実現出来なかった次第です。

終りにお願いですが，資料不足の部分及び誤謬の訂正のため，甚だご手数ですが先輩各位よりのご指摘を頂き度いと存じます。又前後の出漕者名簿を整備し継続するためにも，四神会又は一橋端艇部内に年度毎に校内外レースの出漕者名簿を記録保管する組織の確立又は担当者の任命を是非共実現して頂き度いとお願い申し上げます。　　（菊地　壽雄）

歴代部長一覧

		就任	辞任
第1代	関　一		大正3年7月28日
第2代	志田鉀太郎	大正3年7月28日	
第3代	福田徳三	大正8年	大正9年
第4代	佐野善作	大正9年7月	昭和2年
第5代	高垣寅次郎	昭和2年	昭和11年5月8日
第6代	井浦仙太郎	昭和12年	昭和14年7月4日
第7代	上田貞次郎	昭和14年7月4日	昭和15年5月
第8代	高瀬荘太郎	昭和15年5月	昭和17年
第9代	中山伊知郎	昭和17年11月9日	昭和24年2月15日
第10代	村松祐次	昭和24年2月15日	昭和49年3月6日
第11代	中川　学	昭和49年3月	昭和57年4月23日
第12代	大川政三	昭和57年4月23日	

一橋大学端艇部学生役員名簿＜その１＞

（大正９年～昭和20年）

役職名 / 年次	本科		予科		専門部		
	代表幹事（理事）	会計幹事	班幹事（委員長）	会計幹事	班幹事	会計幹事	補佐
大正９年	森　米次郎	荒井　二郎					
10	内田　量平						
11	大下禎五郎						
12	木村　賢治	塚田　松二					
13	葛西秀千代	塚田　松二					
14	小松　栄	池上三次郎					
15	井手　正男	秋山　章造					
昭和２年	和田庸之助	今井　清					
3	宇治原兼一	人谷　元吉					
4	河西　源吉	川野　謙次					
5	関川　信二	大島　重雄	芝田　晋		大森吉次郎	大久保　栄	野口　新一
6	板倉　巻夫	金子精之助	浅沼　吉三		坂上　正夫	大上　光男	
7	岡本　三平	荒井　格二	広松　三好（柵山と改姓）		岩尾　新一	工藤　英雄	角田　浩
8	浅沼　吉三	谷　正一郎	兼本　豊		園田　友治	山田　敏	斎藤　龍明
9	広松　三好	坂口　侃	佐久間富正		石川　次夫 日野水次郎	三浦　大吉	立山　秀治
10	和泉　信夫	田　壽郎	植松　健悟		富岡　義夫 石井　正	藤田　友蔵	桜田　武
11	伊藤　治雄	近藤　勝重	小島　慶三		立岩袈裟松	琴坂　重幸	金子益之助
12	植松　健悟	伊藤茂三郎	山牧　辰志		伊勢谷嘉一	高城　民平	松崎　弘
13	丸山　泰男	大西　重則	阿波　三男（博康と改名）		佐藤長太郎	松崎　弘	三宅　美雄
14	角鹿　哲哉	大西　重則	植野　晴一		坂　美治	山岸　重夫	木原　保
15	松井　孝男	中村　達夫	篠崎　保男		中村　秀雄	大久保嘉三	井田　俊男
16	松井　孝男	荻生　真通	後藤　隆之	高橋　弘吉	中江　勝	井田　俊男	
17	小藤田思郎	金子　尚夫	立野　広光	高橋　弘吉	羽野　瑛	嘉永　政行	
18	後藤　隆之	辻　君雄	秋山　英一	村田　英雄	小沢　恒与	霜田　一郎	
19							
20							

一橋大学端艇部学生役員名簿＜その２＞（昭和21年～昭和59年）

役職名 / 年次	主　将	代表幹事（理　事）	会計幹事	四神会幹事	副 主 将	学連幹事	東 商 戦
21	鈴木　邦治	太田　富穂	広瀬　勇				
22	山田　輝雄	浜林　正夫	川口　恵三				
23	井上　一郎・森　千昭	橋本　靖臣	玉井　善和				
24	村山　和夫	椎野　嘉・佐藤　直	畑　弘恭				
25	三堀正太郎	君塚　克己	小林　康夫				
26	三堀正太郎	吉村　一馬	中村　宏				
27	田幡　恵一・瀬田慎吾	山岡　三郎	林　幸一				
28	藤山　昭也	星野　稔	林　幸一・川島雄次				
29	櫻井　安彦	浅田　正弘	山田　敬一	安田　順一			
30	小野　早苗	寺本　隆一	金子　雄美・植草　健				
31	高橋　泰和	寺本　隆一	石原　道郎	河合　和昭			
32	石井　和雄	星　正紀	渋谷　栄介	平川　茂			
33	石原　幹也	福田　正之	野沢　一男・岡本　節	松本　敏彦			
34	広岡　幸夫	芝田正次郎	大和田　忍	小山　一郎			
35	鈴木　崇司	菅井　弘之	高木　俊志	岸　均			
36	野上　浩	森下　一乗	大久保元三郎	飯塚　茂			
37	田中　伸次	大村　庄司	尾崎　昭雄	人見　裕			
38	立石　武士	尾藤　建二	佐藤　義明	大須賀　守			
39	政井　孝道	山崎　常光	塚野　文彦	菱山　浩			
40	大内多喜男	近堂　一郎	平野　勝洋	加賀美隆夫			
41	磯崎　幸						
42	安田　幸治	鈴木　道郎	林　克介	白川真太郎			
43	白井　宏和	佐々木直哉	佐藤　信宏	岡田　重行			
44	佐伯　貞幹	岡田　重行	竹内　幸男	川村　裕英			
45	小林　靖夫	小池　隆男	太田　道雄	曽田　立夫			
46	秋山健一郎	井上　高治	木村　祐基	杉山　和宏			
47	加藤　博	美原　融	武藤　秀一	目羅　輝和			
48	岩本　保	中井　義政					
49	井上　良	内藤　敏雄					
50	浜岡　敬祐	逢見　直人	辰巳　順				
51	福重　隆一	小林　寛重	塩山　弘蔵				
52	相場　正樹	斉藤　力	村松　康延	山船　茂樹			
53	大枝　宏之	清野　明	折本洋紀・高見沢昌彦	渡辺　孝道	鴨井　和宏		
54	油谷　隆	石川　敏之	森　淳・松尾　徹	安丸　徹	内藤　雅和		
55	小野沢康夫	鈴木　司	佐藤　栄一・中野孝造	保坂　信司	北村　雅彦		
56	山本　隆夫	西郷　信也	藤代久也・横堀喜一郎		武良　研二		
57	代野　照幸	高橋　健司	竹之内純一・外村　稔		大久保忠夫	八木沢新樹	竹之内純一
58	渡辺　修	中川　喜博	安田　真	岸本　雅久	山崎　真也	桜井　正美	興梠　裕一
59	大城　健嗣	岡田　昭吾	吉沢　栄治	倉崎　嘉典	新堂　博英	平松　知雄	笠原　英一

対一高レース

第一回

（明治二十三年）

舵手　長岡　長　整調　波多野久松　五番　鹿島房次郎
四番　加藤　正生　三番　千坂　忠　二番　原田芳太郎
舳手　林　幾太郎

第二回

（明治二十八年）

舵手　安藤　兼吉　整調　岸　吉松　五番　窪田　四郎
四番　中山　晋　三番　武田　恭爾　二番　高橋　季吉
舳手　和田　喜伝

第三回

（明治三十二年）

舵手　木下　裕　整調　南郷　三郎　五番　吉田　市恵
四番　青池玄三郎　三番　田尻　常雄　二番　津田　五郎
舳手　横川平太郎

全国高商レース

第一回　優勝

（大正十五年）

舵手　鈴江　一臣　整調　三田　正次　五番　有村　新次
四番　秋元和三郎　三番　宮村　末雄　二番　木田　一郎
舳手　佐藤　正巳

第二回

（昭和二年）

中　止

第三回　優勝

（昭和三年八月一日）

コーチ　高橋　芳三
舵手　吉沢　順蔵　整調　高橋　伸二　五番　海老沢　彪
四番　飯塚　守夫　三番　橋本　真平　二番　藤沢　当
舳手　本多　光治

第四回

（昭和四年七月十四日）

舵手　東畑　弘　整調　山本　次郎　五番　芝田　年夫
四番　藤沢　当　三番　石井　克夫　二番　星　義定
舳手　野口　新一　補欠　矢部　尚一

倫敦盃レース

昭和四年九月二十四日

第一回

帝大（工）の独漕であつた。本校は参加せず。

第二回　優勝

（昭和五年九月二十一日）

コーチ　野口　新一　総コーチ　中山　克巳
舵手　安藤慶四郎　整調　山本　次郎　七番　芝田　年夫
六番　外崎　亮一　五番　石井　克夫　四番　上松　宗理
三番　笠原　文雄　二番　高嶋　達雄　舳手　向井　正巳

第三回　二位

（昭和六年九月二十一日）

コーチ　芝田　年夫
舵手　安藤慶四郎　整調　坂上　正夫　七番　高嶋　達雄
六番　藤原宇弥雄　五番　石井　克夫　四番　園田　友治
三番　岩尾　新一　二番　横山喜次郎　舳手　内田　松夫

第四回　優勝

（昭和七年九月十八日）

コーチ　海老沢　彪　曽祢　冬来
舵手　矢野　三郎　整調　山口　庄衛　七番　木野　三郎
六番　大宮宗三郎　五番　川添　正美　四番　西野健二郎
三番　大川寅之助　二番　内田　松夫　舳手　園田　友治

第五回　優勝

（昭和八年九月二十四日）

コーチ　芝田　年夫　マネヂヤー　斎藤　龍明
舵手　中川邦次郎　整調　山口　庄衛　七番　石川　次男
六番　西野健二郎　五番　岡田　正　四番　向井　忠
三番　大川寅之助　二番　大宮宗三郎　舳手　岩田善三郎

第六回　優勝

（昭和九年九月十六日）

コーチ　高島　達雄　マネヂヤー　立山　秀治
舵手　中川邦次郎　整調　向井　忠　七番　岡田　正
六番　坂田　正三　五番　岩田善三郎　四番　立岩袈裟松
三番　石井　正　二番　市川　虎司　舳手　山崎　徳造

第七回　優勝

（昭和十年九月十六日）

コーチ　芝田　年夫　マネヂヤー　桜田　武
舵手　菊池　寿雄　整調　山崎　徳造　七番　石井　正
六番　金井　三次　五番　伊勢谷嘉一　四番　村井　英男
三番　二川　勝男　二番　柴田秀治郎　舳手　高地　鈴雄

第八回　優勝

（昭和十一年）

コーチ　芝田　年夫　マネジヤー　金子益之助
舵手　菊地　寿雄　整調　立岩袈裟松　七番　柴田秀治郎
六番　金井　三次　五番　右近　徹也　四番　琴坂　重幸
三番　二川　勝男　二番　増田賢治郎　舳手　田縁　政明

主な対外記録

大正9年

インターカレッジ・エイト

10月，23，24日（両国橋・東大艇庫間2マイル）

関東選手権Ⅱ　B　2

コーチ　川添　清男　C　林　謙介　S　森　茂次郎
7　鷺島　富造　6　大下禎五郎　5　森米　次郎
4　内田　量平　3　小野沢　潤　2　野田　憲策
B　藤瀬英二郎

大正10年

インターカレッジ・エイト

10月22，23日（外語艇庫・安田邸間2マイル）

関東Ⅱ　決勝東大ニ勝ツ

コーチ　小倉千代三　C　寺井　俊彦　S　野田　憲策
7　鷺島　富造　6　中山　克巳　5　昭賀　井泰
4　内田　量平　3　藤瀬英二郎　2　畑　弘平
C　寺尾　一郎　補　小松　栄　木村　賢治

大正11年

インターカレッジ・エイト

月　日（外語艇庫・安田邸間マイル）

関東Ⅲ　予選B組　第2着

コーチ　小倉千代三　C　町田権九郎　S　野田　憲策
7　鷺島　富造　6　中山　克巳　5　昭賀　井泰
4　木村　賢治　3　小松　栄　2　坂岡　操
B　寺尾　一郎

大正12年

対校選手名

（関東大震災ノタメ競漕ハ中止）

コーチ　小倉千代三　C　遠山不羈夫　S　坂岡　操
7　小松　栄　6　高橋朝次郎　5　木村　賢治
4　水谷　幸夫　3　土田　功介　2　畑　弘平
B　寺尾　一郎　補欠　池田　沢巳　中村斉太郎
和田庸之助　坂本　定雄

大正13年

全日本フォア選手権

一橋クラブ　優勝

監督　細田　健

C　鵜飼新一郎　S　小松　栄　3　鷺島　富造
2　高橋朝次郎　B　寺尾　一郎

レッドオアー　2位

C　中島　俊郎　S　坂岡　操　3　和田庸之助
2　畑　弘平　S　高田　正見

インターカレッジ・エイト

10月4，5日（吾妻橋・鐘ケ淵間2マイル）

関東Ⅳ　決勝明大ニ敗ル

コーチ　森　米次郎　森　茂二郎　川添　清男
C　鵜飼新一郎　S　小松　栄　7　寺尾　一郎
6　高橋朝次郎　5　鷺島　富造　4　宮沢　文雄
3　和田庸之助　2　畑　弘平　S　高田　正見
補　中島　俊郎　横山　巌　池田　沢巳
張　在　鳳　宇治原兼一

大正14年

インターカレッジ・エイト

9月25，26日（鐘ケ淵・三囲間1¾マイル）

関東Ⅴ　優勝

コーチ　畑　弘平　寺尾　一郎　C　中島　俊郎
S　小松　栄　7　和田庸之助　6　宮沢　文雄
5　高橋朝次郎　4　張　在　鳳　3　池田　沢巳
2　横山　巌　B　宇治原兼一　補　細田　健
宮村　末雄　北条　秀一　秋元和三郎
高橋　芳三

大正15年

インターカレッジ・エイト

9月，25日（鐘ケ淵・三囲間1⅝マイル）

関東Ⅵ　予選B組2着

コーチ　小松　栄　C　水野　重雄　S　井手　正男
7　高橋朝次郎　6　宮沢　文雄　5　和田庸之助
4　横山　巌　3　吉村　豊　2　宇治原兼一
6　久村伊太郎　補　鈴江　一臣　半田　清
北条　秀一　吉村　恒七　平野　慶蔵

昭和2年

インターカレッジ・エイト

9月24，25日（水神・言問橋間2,000m）

関東Ⅶ　優勝

コーチ　遠山不羈夫　C　中島　俊郎　S　宇治原兼一
7　和田庸之助　6　井田与想平　5　吉村　豊
4　篠崎　鷹夫　3　飯塚　守夫　2　吉村　恒七
3　中川　英造　補　西堀　岩蔵　上原　正
海老沢　彪　金　禎洙　久村伊太郎

昭和3年

インターカレッジ・エイト

9月22，23日（水神言問橋間2,000m）

関東Ⅷ・全日本選手権Ⅰ　予選B組2着

コーチ	遠山不鳳夫	C	西堀　岩蔵	S	宇治原兼一
7	篠崎　鷹夫	6	久村伊太郎	5	金　禎　洙
4	張　在　鳳	3	海老沢　彪	2	関川　信二
B	中川　英造	補	菅　　英一		吉村　恒七
	吉村　　豊		飯塚　守夫		乾　　信

昭和4年

インターカレッジ・エイト

9月23，24日（尾久新コーチ2,000m）

関東Ⅸ・全日本Ⅱ　準決勝慶大ニ敗ル

コーチ	鷺島　富造	C	安井柱三郎	S	宇治原兼一
7	深井　弥平	6	板倉　巻夫	5	金　禎　洙
4	古川喜久夫	3	柴田　　晋	2	津布楽武雄
B	岡本　三平				

昭和5年

インターカレッジ・エイト

9月22，11日（吾妻橋一白鬚橋間）

関東Ⅹ・全日本Ⅲ　準決勝東大ニ敗ル

コーチ	遠山不鳳夫	C	安井柱三郎	S	曽祢　冬来
7	岡本　三平	6	板倉　巻夫	5	奥田　二郎
4	柴田　　晋	3	浅沼　吉三	2	内海　常雄
B	乾　　信	補	古田　道雄		

フレッシュマンレース

	第1回	第2回	第3回
	昭昭3年	昭和4年	昭和5年
	対早稲田大学	対大倉高商	対慶応大学
	優　勝	優　勝	優　勝
C	安井柱三郎	水谷　実	斎藤　晋一
S	浅沼　英二	内海　常雄	上田　博
7	曽弥　冬来	外崎　亮一	和久井千吉
6	板倉　巻夫	奥田　二郎	間
5	岡本　三平	和久井千吉	宮　文雄
4	古川喜久夫	浅沼　吉三	内田　松夫
3	柴田　　晋	石井　克夫	榊原栄一郎
2	君塚　満雄	古田　道雄	村上　芳郎
B	深井　弥平	芝田　年夫	田中与佐応

昭和6年

インターカレッジ・エイト

9月20，21日（東武鉄道一白鬚橋間）

関東Ⅺ・全日本Ⅵ　決勝早大ニ敗ル

コーチ	小松　　栄	C	石原重二郎	S	曽祢　冬来
7	笠原　文雄	6	柴田　　晋	5	奥田　二郎
4	外崎　亮一	3	岡本　三平	2	板倉　巻夫
B	古田　道雄	補	広松　三好		

秋オリンピック・フォア決定予選

月　日（於向島・神宮レース）

第1予選　早大ニ敗ル

C	水谷　　実	S	広松　三好	3	和久井千吉
2	浅沼　吉三	B	古田　道雄		

昭和7年

春オリンピックチャレンジャーレース

（於　尾久）

フォア　準決勝　外語Aニ敗ル

C	木村　大三	S	広松　三好	3	和久井千吉
2	村上　芳郎	榊	福栄　一郎	補	大川寅之助

エイト　優勝

コーチ	中山　克巳		小松　　栄		岩崎　恒弥
C	水谷　　実	S主	柴田　　晋	7	笠原　文雄
6	古田　道雄	5	間宮　行直	5	浅沼　吉三
3	岡本　三平	2	兼本　　豊	C	高島　達雄
補	内田　松夫				

対早稲田大学チャレンジレース

（於　尾久）

3　　5月15日　選手中ニ病人出デ棄権シ代表権ヲ失フ

インターカレッジ・エイト

9月17，18日（於向島）

関東Ⅻ・全日本Ⅴ　第一予選帝大ニ敗ル

コーチ	中山　克巳	C	水谷　　実	S	柴田　　晋
7	笠間　文雄	6	古田　道雄	5	間宮　行直
4	浅沼　吉三	3	和久井千吉	2	兼本　　豊
C	広松　三好				

昭和8年

インターカレッジ

9月23，24日（於尾久）

フォア　準決勝　東大ニ敗ル

コーチ	中山　克巳	C	水谷　　実	S	広松　三好
3	間宮　行直	2	兼本　　豊	B	和久井千吉

ペ ア 優勝
C 椿 祥夫 S 古田 道雄 B 岡本 三平

インターカレッジ・エイト

9月23，24日（於向島）

関東全XIII・日本回VI 1戦 東大ニ敗ル

コーチ 中山 克巳 C 水谷 実 S 柴田 晋
7 木野 三郎 6 古田 道雄 5 間宮 行直
4 浅沼 吉三 3 昭久井千吉 2 兼本 豊
B 望月 武雄 補 伊藤 治雄 前田 正
木村 大三

昭和9年

インターカレッジ・フォア

4月14，15日（於放水路）

優 勝
コーチ 高橋朝次郎 C 戎野千太郎 S 伊藤 治雄
3主 間宮 行直 2 兼本 豊 S 有ケ谷英男

インターカレッジエ・イトイ

9月15，16日（於尾久）

関東XIV・全日本VII 2回戦 日大ニ敗ル

コーチ 高橋朝次郎 C 戎野千太郎 S 伊藤 治雄
7 古田 道雄 6 兼本 豊 5 有ケ谷英男
4 石川 次男 3 佐久間富正 2 平野 昌
B 上田 正治

昭和10年

インターカレッジ

9月15，16日（於尾久）

関東XV・全日本VIII

エイト 戦績 2回戦早大ト同着再レースニテ敗ル

コーチ 中山 克巳 安井柾三郎 広松 三好
C 木村 大三 S 前田 正 7 北村 隆義
6 藤沢 康雄 5 佐久間富正 4 塚越 賢哉
3 山代 洋 2 堀川富太郎 B 奥野 浩爾
補 丸山 泰男 竹下 貞雄 沢木 宇吉

フォア 準決勝ニ敗ル

コーチ 遠山不羈夫 広松 三好 C 戎野千太郎
S 上田 正治 3 平野 昌 2 兼本 豊
B 伊藤 治雄

春オリンピック・エイト決定競漕

6月1～3日（於尾久）

1回戦（第2日）拓大ニ敗ル

コーチ 中山 克巳 広松 三好 C 戎野千太郎
S 上田 正治 7 平野 昌 6 兼本 豊
5 有ケ谷英男 4 北村 隆義 3 立岩袈裟松
2 佐久間富正 B 伊藤 治雄

秋オリンピック・フォア決定競漕

（於 尾久）

玄武 準々決勝 拓大ニ敗ル

コーチ 広松 三好 C 木村 大三 S 上田 正治
3 平野 昌 2 兼本 豊 B 伊藤 治雄
補欠 山代 洋

青竜 1回戦（第2日）拓大ニ敗ル

C主 戎野千太郎 S 藤沢 康雄 3 北村 隆義
2 塚越 賢哉 B 奥野 浩爾

昭和11年

第16回関東選手権

9月13日

優 勝

第9回全国決勝

9月23日（瀬田川）

優 勝
監 督 瀬尾 三郎 奥田 二郎 C 木村 大三
S 前田 正 7 北村 隆義 6 塚越 賢哉
5 奥野 浩爾 4 兼本 豊 3 伊勢谷嘉一
2 伊藤 治雄 B 丸山 泰男 補 堀川富太郎

関東選手権フォア

決勝 2着 商大予科

昭和12年

第17回関東インターカレッジ・エイト

9月4，5日

準決勝 2着
コーチ 瀬尾 三郎 C 戎野千太郎 S 平野 昌
7 奥野 浩爾 6 佐藤長太郎 5 伊勢谷嘉一
4 田端 穂 3 辻 二郎 2 塚越 賢哉
B 佐久間富正

第1回全日本選手権

9月12，13日

対 校 メンバー上記に同じ B組決勝2着

専門部 A組決勝2着

コーチ 芝田 年夫 C 荒井 泰郎 S 増田賢治郎
7 光枝 実 6 青木 勉 5 黒川健太郎
4 笠井 誠 3 望月 鋼一 2 山田 英雄
B 田縁 政明 マネ 松崎 弘

予 科

コーチ 木村 大三 C 大友 立也 S 篠崎 達夫
7 大西 重則 6 石原善二郎 5 原田幸一郎
4 小柳英二郎 3 松井 2 沢木 宇吉
B 角鹿 哲也

全日本選手権フォア

11月2，3日

優　勝

コーチ	伊藤　治雄	C	工藤　哲雄	S	丸山　泰男	
3	塚越　賢哉	2	平野　昌	B	堀川富太郎	

昭和13年

第18回関東学生選手権

C	工藤　哲雄	S	塚越　賢哉	7	平野　昌	
6	佐藤長太郎	5	荻生　真通	4	黒川健太郎	
4	石原善二郎	3	田端　稔	B	角鹿　哲也	

第2回全日本選手権

専門部　準決勝　慶大ニ敗ル

コーチ	菊地　寿雄	C	大矢　光義	S	新藤　栄一	
7	光枝　実	6	竹村　弘	5	杉本　鉄二	
4	坂　美治	3	秋山　義辰	2	山田　英雄	
B	望月　鋼一					

昭和14年

第19回関東学生選手権

C	岡村　俊夫	S	新藤　栄一	7	藤井　良一	
6	石原善二郎	5	岸　博太郎	4	坂　美治	
3	荻生　真通	2	浅岡　善一	B	角鹿　哲也	
・	小坂謙四郎					

全国高専レース（1）

8月20日

専門部　優　勝

コーチ	工藤　哲雄	C	大矢　光義	S	新藤　栄一	
長谷川	啓（高専）	7	中村　秀雄	6	波立一二三	
5	杉本　欽二	4	金藤　義雄	3	浜　森十	
2	森　一行	B	秋山　義辰			

第3回全日本選手権専門部優勝

メンバー上記に同じ

昭和15年

第20回関東学生選手権

4月14，15日（尾久2,000m）

エイト　準決勝2着

	柵山　三好	C	岡村　俊夫	S	石原善次郎	
7	藤井　良一	6	浅岡　善一	5	岸博　太郎	
4	波立一二三	3	若杉　第一	2	橋本　要三	
B	中村　秀雄					

フォア　準決勝2着

C	辻　君雄	S	角鹿　哲也	3	荻生　真通	
2	島田　正敏	B	新保　圭一			

第11回明治神宮国民体育大会

11月1～3日

	一ツ橋	専門部	舵付フォア
C	岡村　俊夫	菊地　邦雄	辻　君雄
S	新保　圭一	長谷川　敬	浅岡　善一
7	若松　第一	篠田金三郎	
6	石原善次郎	仲江　勝	
5	岸　博太郎	橋本　要三	
4	角鹿　哲也	塚本　敬三	
3	藤井　良一	小川　英	橋本　要三
2	植野　晴一	渡辺　芳明	波立一二三
B	石井　喜介	松永　文一	中村　秀雄

第4回全日本選手権

11月2，3日（戸田新コース）

対　校　優勝

コーチ	柵山　三好	C	岡村　俊夫	S	角鹿　哲也	
7	藤井　良一	6	石原善二郎	5	岸　博太郎	
4	波立一二三	3	若松　第一	2	浅岡　善一	
B	中村　秀雄					

専門部　慶応ニ敗ル

フォア　優勝

C	関口　久雄	S	石井　喜介	3	主植野晴一	
2	橋本　要三	B	新保　圭一			

全国高専レース

コーチ	琴坂　重幸	C	菊地　邦雄	S	長谷川　啓	
7	渡辺　芳明	6	塚本　敏	5	篠田金三郎	
4	仲江　勝	3	羽野　瑛	2	中村　泰人	
B	平川　仁市	・	松永　文一			

昭和16年

第21回関東学生選手権

対　校

C	岡村　俊夫	S	浅岡　善一	7	藤井　良一	
6	橋本　要三	5	若松　第一	4	島田　正敏	
3	仲江　勝	2	原　一夫	B	岸　博太郎	

神宮大会（六人漕定席艇）

コーチ	仲江　勝	C	丸山　守	S	吉田　敏幸	
5	横田　昱郎	4	水垣　昭敏	3	霜田　一郎	
2	高木　重知	B	小沢　恒与			

昭和17年

第22回関東学生選手権

対　校

コーチ	木村　大三		藤井　良一	C	小村　一郎	

S　星谷　朝久　7　羽野　瑛　6　森　正雄
5　鈴木　邦治　4　島田　正敏　3　原　一夫
2　塚本　敬　B　大野英三郎

第22回全日本選手権

C　小松　守一　S　浅岡　善一　7　鈴木　邦治
6　加藤　章　5　森　正雄　4　中川富二三
3　後藤　亨　2　星谷　朝久　B　橋本　博

明治神宮大会漕艇競技

（11月1～2日）

エイト
コーチ　中山　克巳　S　小松　守一　7　浅岡　善一
6　鈴木　邦治　5　加藤　章　4　後　藤亨
3　森　正雄　3　中川富二三　2　星谷　朝久
B　橋本　博
フォア　優勝
コーチ　中山　克巳　C　牛島　英彦　S　水垣　昭敏
3　野村　邦夫　2　斎藤　弥助　B　山田　輝雄

昭和18年

第23回学生選手権

エイト
コーチ　遠山不羈夫　S　小松　守一　7　浅岡　善一
7　鈴木　邦治　6　加藤　章　5　横田　昱郎
4　後藤　亨　3　中川富二三　2　森　正雄
B　橋本　博

第23回全日本選手権

C　岡村　俊夫　S　進藤　栄一　7　藤井　良一
6　石原善二郎　5　岸　博太郎　4　坂　美治
3　荻生　真通　2　浅岡　善一　B　角鹿　哲也

第3回海の記念日海洋競技大会（漕艇）

専門部エイト　優勝
コーチ　牛場　英彦　C　丸山　守　S　水垣　昭敏
7　横田　昱郎　6　高木　重知　5　斎藤　弥助
4　中北　治郎　3　郡　惇　2　柿沼　利重
B　小沢　恒与

昭和19年

昭和19年，昭和20年　全日本行われず

昭和20年

関東学生選手権改め

ボート・レース復活祭

11月18日（向島 1,500m）
エイト　①　東大　②　商大

昭和21年

第24回関東学生選手権兼第1回国体予選

10月19，20日（水神言問 2,000m）
エイト　決勝2着
コーチ　柵山　三好　C　小松　守一　S　加々見　正
7　鈴木　邦治　6　加藤　章　5　後藤　亨
4　高井　敬二　3　野村　邦夫　2　上島　良一
B　橋本　博
フォア　予科クルー　決勝2着
C　満喜　雅男　S　二宮　三郎　3　森　千昭
2　植野　嘉　B　榎本　靖臣　（使用艇 鹿島）
専門部クルー　予選2着
C　植栗　祐輔　S　大石　勝五　3　荒木満喜男
2　柿本宗之助　B　大塚　（使用艇 玄武）
フィックス（大倉一言問 1,000m）
予科クルー　予選2着
C　佐藤　直　S　川瀬　英夫　5　村山　和夫
4　三堀正太郎　3　山本　忠雄　2　本多完五郎
B　野田　栄
専門部クルー　予選2着
C　君塚　克美　S　井関　昭　5　中田　富三
4　遠藤　作造　3　村山　清　2　服部　恭助
B　堀江　昭

昭和22年

第1回向島レガッタ

6月1日（1,000m）
エイト　商大専門部（予選2着）
C　十束　公司　S　大塚　秀二　7　林　昭二
6　市川信二郎　5　広沢　章　4　馬場　昭
3　荒木満喜男　2　村山　清　B　中田　富二
（使用艇　八紘）
商大予科（予選2着）
C　佐藤　直　S　三堀正太郎　7　森　千和
6　塩野　要　5　椎野　嘉　4　狩野　保宣
3　村山　和夫　2　矢島隆之輔　B　行木　陽一
（使用艇　白虎3号）
フォア　優勝
C　鈴木　稔　S　鈴木　邦治　3　後藤　亨
2　野村　邦夫　B　橋本　博
（使用艇　鹿島）
スカル　2着
藤井（商大OB）

第25回関東学生選手権

9月20，21日（水神一言問2,000m）
エイト　決勝（横順風順潮）優勝
コーチ　柵山　三好　堀川富太郎　C　君塚　克美

S　野村　邦夫　7　村山　昭夫　6　馬場　昭
5　遠藤　作越　4　三堀正太郎　3　井上　一郎
2　山田　輝雄　B　木原　良
（併用艇　はやし）
フォア　優勝
C　佐藤　直　S　広沢　章　3　矢島隆之輔
2　椎野　嘉　B　市川信三郎
（使用艇　玄武）

第25回全日本選手権

9月27，28日（言問一水神2,000）

エイト
商大専門部　準決勝A 2着
コーチ　平野　昌　C　十束　公司　S　大塚　秀二
7　林　昭二　6　早川　栄一　5　中田　富三
4　村山　清　3　鍵田　昭夫　2　柿本宗之助
B　服部　恭助
商大エイト
C　君塚　克美　S　野村　邦夫　7　村山　昭夫
6　馬場　昭　5　菅　恭二　4　三堀正太郎
3　遠藤　作造　2　山田　輝雄　B　木原　良
（使用　艇白虎一号）
フォア　優勝
商　大
C　君塚　克美　S　馬場　昭　3　遠藤　作造
2　山田　輝雄　B　井上　一郎

第5回全国高専レース大会

11月9日（言問一水神 2,000m）
（参加3クルー，うち早高棄権）
商大専門部　1着
C　十束　公司　S　大塚　秀二　7　林　和二
6　村山　清　5　中田　富三　4　鍵田　和夫
3　荒木満喜男　2　柿本宗之助　S　服部　恭助
（使用艇　白虎一号）
商大予科　2着
コーチ　藤井　良一　C　鈴木　稔　S　畑　弘恭
7　森　千昭　6　三堀正太郎　5　村山　和夫
4　小笠原貢蔵　3　村田　宏　2　伊藤　銖治
B　行木　陽一
（使用艇　はやし）

昭和23年

関東高専大会

6月20日（水神一言問 2,000m）
予　科　予選2着
コーチ　野村　邦夫　C　蓮沼　和男　S　矢島隆之輔
7　村田　宏　6　狩野　保宣　5　千葉　正昭
4　瀬田　慎吾　3　田幡　恵一　2　西村　博邦
B　行木　陽一
専門部　準決勝2着
コーチ　山田　輝雄　C　大磯　幸雄　S　市川信三郎
7　広沢　章　6　早川　栄一　5　菅　恭二
4　中山　英治　3　堀江　昭　2　古橋　進
B　山田　利夫

第26回関東学生選手権

10月2，3日（於　戸田）
エイト　2着
準決勝（雨斜逆風）
コーチ　藤井　良一　C　佐藤　直　S　村山　昭夫
7　菅　恭二　6　馬場　昭　5　井上　一郎
4　三堀正太郎　3　山本　忠雄　2　矢島隆之輔
B　森　千昭
（使用艇　くにたち）
スカル　決勝3着
吉　村（商大）

第26回全日本選手権

10月17日（於　戸田）兼第3回國体
エイト　優勝
C　佐藤　直　S　矢島隆之輔　7　村山　昭夫
6　馬場　昭　5　山本　忠雄　4　吉村　一馬
3　菅　恭二　2　三堀正太郎　B　森　千昭
（使用艇　くにたち）
フォア　準決勝3着
C　大磯　幸雄　S　木原　良　3　八田　義一
2　行木　陽一　B　市川信三郎
（使用艇　玄武）
OBエイト（1,000m）　1着　四神会
BOスカル30歳以上　（900m）　①　藤　井（商大）

昭和24年

第1回戸田レガッタ

6月5日（1,500m）
エイト　決勝1着
コーチ　藤井　良一　C　君塚　克美　S　村山　昭夫
7　森　千昭　6　三堀正太郎　5　田幡　恵一
4　瀬田　慎吾　3　村田　宏　2　吉村　一馬
B　行木　陽一
スカル　①　藤井（商大OB）

第1回淡路島レガッタ

8月13，14日（由良コース）
予選　①　日　大　②　商　大

国体予選フォア決勝

11月1日
①日大　②　竜谷大　③　商大専門部　④　稲門艇南会

第27回全日本選手権

9月17，18日（於　戸田）

エイト　2着
コーチ　藤井　良一　C　君塚　克美　S　矢島隆之輔
7　村山　和夫　6　三堀正太郎　5　行木　陽一
4　伊藤　鉸治　3　村田　宏　2　瀬田　慎吾
B　森　千昭

昭和25年

第4回憲法記念レガッタ

5月3日

エイト　3着
C　大礒　幸雄　S　三堀正太郎　7　田幡　恵一
6　山田　富三　5　栗原　恒雄　4　瀬田　慎吾
3　仲野　実　2　佐藤　和美　B　行木　陽一

第2回戸田レガッタ

6月4日

エイト　決勝3着
コーチ　植野　晴一　C　矢田　清明　S　佐藤　清
7　坂本　正吉　6　畑　弘見　5　田辺耕一郎
4　安島　俊輔　3　山岡　三郎　2　柏木　芳郎
B　小泉　誠一

第28回全日本選手権

9月9，10日（戸田，晴天逆風2m）

エイト　決勝（南南西約5m）　3着
コーチ　工藤　哲雄　C　大礒　幸雄　S　三堀正太郎
7　田幡　恵一　6　瀬田　慎吾　5　仲野　実
4　山田　富三　3　畑　弘見　2　佐藤　和美
B　行木　陽一

昭和26年

第5回憲法記念レガッタ

5月3日（言問—大倉別邸1,000m）

エイト予選で本学2クルーとも敗退
フォア　決勝3着

第3回戸田レガッタ

6月3日（戸田コース　1,000m）

エイト　予選で敗退
フォア　決勝3着

第29回全日本選手権

9月8，9日（8日快晴微順風，9日小雨無風）

エイト（出漕1Iクルー）　決勝3着
コーチ　柵山　三好　工藤　哲雄　C　大礒　幸雄
S　佐藤　和実　7　畑　弘見　6　仲野　実
5　三堀正太郎　4　瀬田　慎吾　3　栗原　恒雄
2　田幡　恵一　B　行木　陽一
フォア（出漕12クルー）　優勝
C　瀬古　政一　S　藤原　隆二　3　藤森　久弘
2主　佐藤　清　B　藤山　昭也

昭和27年

第6回憲法記念レガッタ

5月3日（言問—大倉　1,000m）

Aエイト予選（参加8クルー）敗退
フォア（参加4クルー）　優勝
C　高橋　剛　S　仲野　実　3　栗原　恒雄
2　長友　真理　B　畑　弘見

第4回戸田レガッタ

6月1日（1,000m）

エイト（出漕4校）　優勝
C　会田　晴康　S　村田　茂　7　滝　芳正
6　絹川太一郎　5　木植　茂夫　4　山田　敬一
3　林　孝介　2　吉田　満　B　金子　健吉
フォア（出漕9校）　決勝3着

第30回全日本選手権

9月6，7日（戸田）

エイト　決勝（東南東1m）　3着
C　瀬古　政一　S　仲野　実　7　藤山　昭也
6　佐藤　和実　5　藤森　久弘　4　瀬田　慎吾
3　藤原　隆二　2　桜井　安彦　B　畑　弘見
フォア　準決勝B（北西1.2m）　2着
C　町井　直行　S　長友　真理　3　緒方　彪
2　杉山　方良　S　児島　章郎

昭和28年

第7回憲法記念レガッタ

5月3日

エイト　予選敗退
フォア　優　勝
C　町井　直行　S　桜井　安彦　3　藤森　久弘
2　浅田　正弘　B　緒方　彪

第5回戸田レガッタ

6月7日

エイト　予選C2着
フォア　優　勝

第1回朝日招待レガッタ

8月16日（吾妻橋—大倉別邸）曇天無風

一橋大クルー　優勝
C　瀬古　政一　S　長友　真理　7　藤山　昭也

6　桜井　安彦　5　藤森　久弘　4　杉山　方良
3　緒方　彪　2　藤原　隆二　B　児島　章郎

第31回全日本選手権

9月5，6日（5日曇天横微風，6日晴順風）

エイト　（出漕14クルー）

一橋大　決勝（微風）3着

コーチ　堀川富太郎　佐藤　和実　C　瀬古　政一
S　長友　真理　7　藤山　昭也　6　桜井　安彦
5　藤森　久弘　4　杉山　方良　3　緒方　彪
2　藤原　隆二　B　児島　章郎

一橋ローイング・クラブ

準決勝（微斜順風）　3着

C　町井　直行　S　小野　早苗　7　勝田　一彦
6　寺本　隆一　5　並木　恒夫　4　高浦　民雄
3　小松崎利広　2　浅田　正弘　B　大岩　吉之

昭和29年

第32回全日本選手権

9月11，12日

エイト　準決勝2着

C　町井　直行　S　田子　幸夫　7　児島　章郎
6　桜井　安彦　5　緒方　彪　4　高橋　泰和
3　佐藤　哲也　2　高浦　民雄　B　小松崎利広

フォア　決勝2着

C　望月　幸正　S　小野　早苗　3　平田　隆造
2　吉田　陽吾　B　勝田　一彦

ナックル・フォア予選B　2着

C　松本兼太郎　5　石原　道郎　3　瀬田　五郎
2　高間　雄二　B　藤田　昌己

第2回朝日レガッタ

9月19日（一高—厩橋2,000m）（順風，水流強）

エイト　予選敗退

OBエイト　1着　四神会

昭和30年

第33回全日本選手権

9月3，4日

エイト

コーチ　堀川富太郎　佐藤　清　C　望月　幸正
S　小野　早苗　7　平田　隆造　6　高橋　泰和
5　佐藤　哲也　4　吉田　陽吾　3　高浦　民雄
2　田子　幸夫　B　小松崎和広

シェルフォア

コーチ　佐藤　和実　C　江崎　亮　S　土井　正
3　瀬田　五郎　2　崔　文浩　B　石井　和雄

ナックルフォア

コーチ　桜井　安彦　緒方　彪　C　松本謙太郎
S　石川　威　3　藤田　昌己　2　藤本　閏
B　畑　弘能

昭和31年

第34回全日本選手権

8月4，5日11，12日

メルボンオリンピック候補エイト

コーチ　堀川富太郎　佐藤　和実　C　望月　幸正
S　土井　正　7　平田　隆造　6　高橋　泰和
5　佐藤　哲也　4　吉田　陽吾　3　瀬田　五郎
2　崔　文浩　B　石井　和雄

第二エイト

コーチ　瀬田　慎吾　C　江崎　亮　S　崔文　浩
7　藤田　正己　6　山東　裕美　5　石原　幹也
4　畑　弘能　3　黒川　嘉郎　2　加藤　博
B　星　正紀

シェルフォア

コーチ　小松崎利広　C　中田　徳郎　S　福田　清成
3　板垣　幸雄　2　上原　包　B　畑　弘能

昭和32年

第35回全日本選手権

8月24，25日

エイト

コーチ　佐藤　和実　C　中田　徳郎　S　崔　文浩
7　石井　和雄　6　土井　正　5　瀬田　五郎
4　山東　裕美　3　黒川　嘉郎　2　内藤　元巳
B　石原　幹也　補　畑　弘能　加藤　博

シェルフォア

コーチ　小松崎利広　C　高井　秀雄　5　渡辺　宏之
3　西村　浩二　2　丸子　博之　B　広岡　幸夫

昭和33年

第36回全日本選手権

8月23，24日

エイト

コーチ　瀬田　慎吾　C　中田　徳郎　S　内藤　元巳
7　黒川　嘉郎　6　林　俊介　5　広岡　幸夫
4　山東　裕美　3　西村　浩二　2　渡辺　宏之
S　石原　幹也

フォア

コーチ　緒方　彪　C　藤本啓一郎　S　大内　正三
3　鈴木　崇司　2　竹井　忠夫　B　安藤　博

昭和34年

第37回全日本選手権

8月21～23日

エイト

コーチ	佐藤　和実		渡辺　宏之	C	藤本啓一郎		
S	渡辺　宏之	7	広岡　幸夫	6	内藤　元巳		
5	鈴木　崇司	4	柳沢　健治	3	西村　浩二		
2	本多　孟	B	稲垣　正武				

フォア

コーチ	仲野　実	C	福島　明男	S	林　俊介		
3	安藤　博	2	大村　繁雄	B	野上　浩		

昭和35年

ローマ五輪予選

5月7，8日

エイト

コーチ	佐藤　和実		仲野　実	C	藤本啓一郎		
S	渡辺　宏之	7	稲垣　正武	6	柳沢　健治		
5	鈴木　崇司	4	竹井　忠夫	3	田中　伸次		
2	内藤　元巳	B	安藤　博				

フォア

コーチ	小松崎利広	C	福島　明男	S	日比　俊一		
3	林　俊介	2	野上　浩	B	本多　孟		

第38回全日本選手権

8月20，21日

エイト

コーチ	仲野　実	C	藤本啓一郎	S	稲垣　正武		
7	竹井　忠夫	6	田中　伸次	5	柳沢　健治		
4	野上　浩	3	森村　大作	2	鈴木　崇司		
B	林　俊介						

シェルフォア

コーチ	長友　真理	C	山下　輝男	S	尾藤　建二		
3	栗田　房穂	2	兼松　通彦	B	小川　浩男		

シングルスカル

コーチ	佐佐　和実		佐藤　清	S	登里　貞治		

権1第回全日本ジュニア選手権

11月3日（戸田コース）

ジュニア・エイト

C	山下　輝男	S	登里　貞治	7	尾藤　建治		
6	栗田　房穂	5	田中　伸次	4	小川　浩男		
3	戸谷　俊弘	2	青山　克彦	B	大村　庄司		

昭和36年

第39回全日本選手権

7月29，30日

エイト

コーチ	緒方　彪	C	原　洋二郎	S	田中　伸次		
7	立石　武士	6	尾藤　建二	5	森村　大作		
4	山下　康弘	3	宮地　勝利	2	田村　公孝		
B	野上　浩						

オ　楯

コーチ	緒方　彪	C	本多　幸吉	S	岡田　竜二		
7	木村　希一	6	海野　勝	5	山下　善久		
4	青山　克彦	3	赤木　明宏	2	小川　浩男		
B	大村　庄司	補	藤井　正人				

4月26，27日

無フォア

C	立石　武士	3	山下　康弘	2	野上　浩		
B	田中　伸次						

付フォア

C	久保修太郎	S	木村　希一	3	山下　善久		
2	大須賀　守	B	赤木　明弘				

付ペア　決勝3着

コーチ	佐藤　和実		佐藤　清		緒方　彪		
C	原　洋二郎	S	小川　浩男	B	最所　崇文		
補	宮地　勝利						

無ペア　敗者復活戦2着

C	宮地　勝利	S	尾藤　建二				

シングルスカル　優勝

S	登里　貞治						

第39回全日本選手権

8月26，27日

付フォア　敗者復活戦3着

コーチ	佐藤　和実		佐藤　清		緒方　彪		
C	久保修太郎	S	木村　希一	3	山下　善久		
2	大須賀　守	B	赤木　明宏	補	山下　康弘		
	登里　貞治						

日独対抗レガッタ

9月3日

スカル

5	登里　貞治						

日米レガッタ

フォア

コーチ	佐藤　清	S	立石　武士	3	山下　康弘		
2	田中　伸次	B	大須賀　守				

ペ　ア

S	宮地　勝利	B	赤木　明宏				

スカル　決勝進出

	登里　貞治						

昭和37年

第40回全日本選手権

6月16，17日（戸田）

無フォア

コーチ　佐藤　清　S　立石　武士　3　山下　康弘
2　木村　希一　B　田中　伸次

シングルスカル　決勝2着

コーチ　佐藤　清　S　登里　貞治

エイト

7月14，15日（戸田）

コーチ　佐藤　清　C　本多　幸吉　S　登里　貞治
7　尾藤　建二　6　立石　武士　5　田中　伸次
4　小川　浩男　3　田村　公孝　2　岡田　竜二
B　木村　希一

オ　楯

コーチ　鈴木　崇司　C　遊佐　伸彦　S　吉沢　隆平
7　穂積　大輔　6　長谷川　晨　5　塚野　文彦
4　堀本　良雄　3　藤沢　忠雄　2　山下　善久
B　政井　孝道

昭和38年

第41回全日本選手権

8月31日～9月1日

エイト　敗者復活戦3着

コーチ　前田　正　渡辺　宏元
S　長谷川　晨　7　田中　伸次　6　政井　孝道
5　山下　康弘　4　立石　武士　3　田村　公孝
2　藤沢　忠雄　B　木村　希一　補　金谷　俊彦
吉沢　隆平　舵　本多　幸吉

第3回オックスフォード盾レガッタ

8月31日～9月1日

エイト　準決勝3着

コーチ　前田　正　鈴木　崇司　C　伊東　勇
S　豊田　雅孝　7　大内多喜男　6　吉田　幹則
5　庄司　政義　4　森　一将　3　坂野　洋一
2　町田　昌生　B　森　正義　補　金谷　俊彦
吉沢　隆平　塙　勝良　補　本多　幸吉

昭和39年

第42回全日本選手権

8月1～2日

付フォア　準々決勝3着

監督　前田　正　コーチ　渡辺　宏之　S　御村　治雄
3　本郷　元秀　2　永井　邦雄　B　溜箭　隆司
B　加藤　和幸　補　金谷　俊彦

無フォア　棄権

S　青山　守　3　中村晋太郎　2　奥村　徹
B　泰井　俊介

舵手付ペア　敗者復活戦3着

コーチ　鈴木　崇司　C　遊佐　伸彦　S　大内多喜男
B　森　一将

無ペア敗　者復活戦2着

コーチ　渡辺　宏之　S　下里　俊二　B　礒崎　幸

シングルスカル　A，B共準決勝2着

コーチ　佐藤　和実　A　豊田　雅孝　B　坂野　洋一

11月2～3日

エイト　敗者復活戦3着

監督　前田　正　コーチ　渡辺宏之　C　御村　治雄
B　本郷　元秀　7　礒崎　幸　6　加藤　和幸
5　長谷川　辰　4　下里　俊二　3　永井　邦高
2　大内多喜男　B　溜箭　隆司　補　坂野　洋一
補　豊田　雅孝　補　泰井　俊介　補　青山　守
補　本田　英生

第4回オックスフォード楯レガッタ

11月2～3日

エイト　決勝戦2着

監督　前田　正　コーチ　渡辺　宏之　C　本田　英生
S　豊田　雅孝　7　坂野　洋一　6　青山　守
5　中村晋太郎　4　泰井　俊介　3　中村　恒雄
2　町田　晶生　B　森　正義

第5回全日本ジュニア選手権

11月2～3日

一橋大学端艇部　敗者復活戦3着

監督　前田　正　コーチ　渡辺　宏之　C　西沢　忠夫
S　吉田　正則　7　鈴木　道郎　6　万代　岐
5　宇佐美元也　4　江川　正　3　森岡　暁
2　塚本　真索　B　青木　要輔

一橋大学端艇部（B）　敗者復活戦4着

C　出野　浩之　S　林　克介　7　白川真太郎
6　村井　靖人　5　安田　幸治　4　坂本　充幸
3　石岡　信　2　岡野　進　B　宇野　透

昭和40年

第43回全日本選手権

8月28，29日

エイト　準決勝4着

コーチ　前田　正　C　本田　英生　S　村井　靖人
7　永井　邦雄　6　加藤　和幸　5　大内多喜男
4　万代　俊　3　青木　要輔　2　本郷　元秀
B　礒崎　幸　補　坂野　洋一　補　下里　俊二
補　吉田　正則　補　宇佐美元也　補C　御村治雄

無ペア

コーチ　前田　正　S　下里　俊二　坂野　洋一
補　江川　正

シングルスカル

コーチ　前田　正　　豊田　雅孝

第5回オックスフォード楯レガッタ

8月28，29日

コーチ　山下　康弘　S　西沢　忠雄　7　吉田　正則
6　森岡　暁　5　江川　正　4　塚本　真索
3　宇佐美元也　2　林　俊介　B　中村晋太郎
補　石岡　信　坂野　洋一　下里　俊二
補　江川　正　御村　治雄

昭和41年

第2回世界漕艇選手権大会

7月23～24日

舵付フォア

監督　前田　正　コーチ　稲垣　正武　C　大先　一正
S　吉田　正則　3　森岡　暁　2　合田　正彦
B　原田　寿史

シングルスカル

コーチ　安藤　博　S　佐々木直哉

第44回全日本選手権

8月27～28日

エイト　準決勝3着

監督　前田　正　コーチ　佐藤　和実　C　本田　英生
S　万代　峻　7　礒崎　幸　6　白井　宏和
5　安田　幸治　4　加藤　和幸　3　宇佐美元也
2　江川　正　B　石田　尚道　補　永井　邦雄
補　村井　靖人　補　大先　一正

舵付フォア　決勝戦3着

C　大先　一正　S　吉田　正則　3　原田　寿史
2　森岡　暁　B　合田　正彦　補　永井　邦雄
補　村井　靖人　補　平岡　哲郎

シングルスカィ　優勝

コーチ　佐藤　和実　　佐々木直哉

第6回オックスフォード楯レガッタ

8月27～28日

エイト　決勝戦3着

監督　前田　正　コーチ　藤本啓一郎　C　平均　哲郎
S　塚本　真索　7　青木　要輔　6　佐藤　信弘
5　中村晋太郎　4　岩井淳一郎　3　林　宏一
2　宮崎　裕　B　石岡　信　補　永井　邦雄
補　村井　靖人　補　大先　一正

昭和42年

第1回北米漕艇選手権大会
派遣代表選抜競漕大会

7月15～16日

エイト

監督　前田　正　コーチ　藤本啓一郎　C　大先　一正
S　吉田　正則　7　石田　尚道　6　白井　宏和
5　原田　寿史　4　万代　峻　3　宇佐美元也
2　江川　正　B　安田　幸治　補　村井　靖人
補　石岡　信　塚本　真索

舵付フォア

コーチ　山下　康弘　C　岡田　重行　S　安藤　禎夫
3　合田　正彦　2　森岡　暁　B　青木　要輔
補漕　佐藤　信弘　岩井淳一郎

シングルスカル

コーチ　安藤　博　5　宮崎　裕

第45回全日本選手権

9月2～3日

エイト　優勝

監督　前田　正　コーチ　藤本啓一郎　C　大先　一正
S　万代　峻　7　石田　尚道　6　白井　宏和
5　原田　寿史　4　江川　正　3　宇佐美元也
2　吉田　正則　B　安田　幸治　補　合田　正彦
補　森岡　暁　佐伯　貞幹　青木　要輔
補舵　井口　秀実

舵付フォア

コーチ　山下　康弘　C　岡田　重行　S　合田　正彦
3　森岡　暁　2　佐伯　貞幹　B　青木　要輔
補漕　安藤　禎夫　岩井淳一郎

四神会

コーチ　柳沢　健治　C　井口　秀実　S　柴田　聡
3　竹内　幸男　2　松岡　史朗　B　柳瀬　真澄
補漕　白崎　憲二

シングルスカル

コーチ　安藤　博　S　佐々木直哉

昭和43年

第46回全日本選手権兼
メキシコオリンピック代表選考

8月23～25日

エイト

監督　前田　正　コーチ　安藤　博　C　大先　一正
S　石田　尚道　7　白井　宏和　6　原田　寿史
5　佐伯　貞幹　4　柴田　聡　3　小林　靖夫
2　安藤　禎夫　B　合田　正彦　補　宮島　裕
補　松岡　史朗　補　香川　満

シングルスカル
コーチ　前田　　正　S　宮崎　　裕

第8回オックスフォード楯レガッタ

8月23～25日

エイト
監督　前田　　正　コーチ　田村　公孝　C　香川　　満
S　　武良　敬治　7　平田　省三　6　松岡　史朗
5　　小林　広実　4　斉藤　俊一　3　岡田　　礎
2　　田辺　　明　B　曽田　立夫　補　近藤　　好
補　　萩原　旭児

昭和44年

第47回全日本選手権

8月30～31日

エイト　準決勝2着
監督　前田　　正　コーチ　安藤　　博　C　香川　　満
S　　武良　敬治　7　柳瀬　真澄　6　柴田　　聡
5　　小林　靖夫　4　佐伯　貞幹　3　上田　　伸
2　　松岡　史朗　B　平田　省三
シングルスカル　決勝4着
コーチ　宮嶋　　裕　S　井上　高治
ダブルスカル　四神会決勝2着
S　　宮嶋　　裕　B　白井　宏明

第9回オックスフォード楯レガッタ

エイト　準決勝3着
コーチ　礒崎　　幸　C　田辺　　明　5　秋山健一郎
7　　風間　秀樹　6　内藤　新蔵　5　谷　　逸夫
4　　本郷　祥介　3　杉山　和宏　2　中村　純一
B　　小林　広実

昭和45年

第48回全日本選手権

6月6，7日

舵付ペア
C　　大矢　一正　S　白井　宏和　B　宮崎　　裕
シングル・スカル　敗者復活戦　3着
コーチ　宮崎　　裕　S　杉山　和宏
ダブル・スカル　敗者復活戦　3着
S　　清水　高志　B　内藤　新蔵

8月29，30日

エイト　準決勝3着
監督　前田　　正　コーチ　安藤　　博　C　加藤　　博
S　　秋山健一郎　7　平田　省三　6　小林　靖夫
5　　小林　広美　4　本郷　祥介　3　中村　純一
2　　武良　敬治　B　上田　　伸

第10回オックスフォード楯レガッタ

8月29，30日

エイト　決勝5着
C　　目羅　輝和　S　太田　文雄　7　野上　　衛
6　　内藤　新蔵　5　清水　高志　4　美原　　融
3　　杉山　和宏　2　菓子野　広　B　桑原　新一

昭和46年

第49回全日本選手権

8月28，29日

エイト　敗者復活戦3着
コーチ　礒崎　　幸　S　加藤　　博　C　秋山健一郎
7　　小林　靖夫　6　本郷　祥介　5　上田　　伸
4　　菓子野　広　3　中村　純一　2　武良　敬治
B　　清水　高志

第11回オックスフォード楯レガッタ

8月28，29日

エイト　敗者復活戦4着
コーチ　長谷川　晨　C　組野　　繁　S　内藤　新蔵
7　　入山　賢一　6　佐々木雅一　5　岩本　　保
4　　篠田　博之　3　美原　　融　2　桑原　新一
B　　中井　義政

第14回全日本大学女子選手権

8月28，29日

シングルスカル　決勝4着
S　　後藤　茅子
決勝2着
B　　三谷　和江

第19回全日本小艇選手権

7月3，4日

付フォAアクルー　準決勝3着
監督　前田　　正　コーチ　礒崎　　幸　C　加藤　　博
S　　秋山健一郎　3　小林　靖夫　2　上田　　伸
B
フォアBクルー　敗者復活戦3着
C　　福井　　亨　S　本郷　祥介　3　中村　純一
2　　菓子野　広　B
シングルスカル　敗者復活戦4着
コーチ　礒崎　　幸　S　桑原　新一
敗者復活戦2着
S　　美原　　融

昭和47年

第50回全日本選手権

8月26，27日（戸田 2,000m）

エイト　敗者復活戦3着

監督　佐藤　和実　コーチ　白井　宏和　C　加藤　博
S　木田　隆平　7　内藤　敏雄　6　菓子野　広
5　渡辺　啓　4　太田　文雄　3　井上　良
2　篠田　博之　B　岩本　保

第12回オックスフォード楯レガッタ

8月26，27日

敗者復活戦3着

監督　佐藤　和実　コーチ　宇佐美元也　C　組野　繁
S　田村　文明　7　宮武　剛　6　株木　博
5　児玉　克己　4　永江　一剛　3　長田　弘之
2　浜岡　敬祐　B　浜崎　成司

第50回全日本小艇選手権

11月3～5日

シングルスカル　準決勝3着

S　高浜五三己

昭和48年

第51回全日本選手権

8月25～26日

エイト

監督　佐藤　和実　コーチ　白井　宏和　C　組野　繁
S　井上　良　7　岩本　保　6　木田　隆平
5　柴本　泰宏　4　越田得伍良　3　浜崎　成司
2　株木　博　B　永江　一剛　補　宮武　剛
補舵　加藤　博

11月2～4日

舵付フォア　Ⓑ

監督　佐藤　和実　コーチ　永井　邦雄　C　組野　繁
S　永江　一剛　3　浜崎　成司　2　塚田　俊彦
B　辰巳　順

Ⓐ

コーチ　白井　宏和　C　岩下　久人　S　木田　隆平
3　柴本　泰宏　2　田谷　純　B　井上　良

シングルスタル

監督　佐藤　和実　コーチ　安藤　博　合田　正彦
S　浜岡　敬祐　S　児玉　克己　S　越田得伍良

第13回オックスフォード楯レガッタ

8月25～26日

エイト

監督　佐藤　和実　コーチ　合田　正彦　C　岩下　久人
S　塚田　俊彦　7　椎名　政幸　6　浜岡　敬祐
5　児玉　克己　4　播磨　俊和　3　田谷　順
2　逢見　直人　B　辰巳　順　補　宮武　剛

第14回全日本ジュニア選手権

11月2～4日

エイトA

監督　佐藤　和実　コーチ　安田　幸治　C　山田　司
S　藤井　泰輔　7　宮武　剛　6　小形　滋彦
5　狩生　信安　4　竹内　達彦　3　塩山　弘蔵
2　井上　善量　補　山本　剛士　角　茂樹

エイトB

C　榊原　健一　S　和田　好夫　7　本橋　造道
6　上加世田策　5　飯田　直樹　4　鈴木　仁
3　吉岡　泰弘　2　本庄　謙一　B　福重　隆一
補漕　上野　嘉蔵　大橋幸之助

昭和49年

第1回全日本大学選手権

8月21日，9月1日（戸田）

全日本エイト　準決勝3着

コーチ　白井　宏和　C　山田　司　S　浜岡　敬祐
7　柴本　泰宏　6　井上　良　5　田谷　純
4　塚田　俊彦　3　椎名　政幸　2　木田　隆平
B　浜崎　武司

付フォア　準決勝3着

コーチ　永井　邦雄　C　辰巳　順　S　岩下　久人
3　内藤　敏雄　2　永江　一剛　B　鈴木　仁

第14回オックスフォード楯レガッタ

8月31日，9月1日

エイト　準決勝3着

コーチ　安田　幸治　C　榊原　健一　S　藤井　泰輔
7　宮武　祥夫　6　小形　滋彦　5　木橋　浩道
4　本庄　謙一　3　福重　隆一　2　小林　寛重
B　和田　好史

第52回全日本選手権及
第15回全日本新人選手権

11月2～4日（戸田オリンピックコース）

エイト　準決勝4着

コーチ　稲垣　正武　C　山田　司　S　浜岡　敬祐
7　柴本　泰宏　6　本庄　謙一　5　田谷　純
4　小形　滋彦　3　和田　好史　2　塚田　俊彦
B　岩下　久人

新人エイト　敗者復活戦3着

コーチ　本郷　祥介　S　林　大樹　S　清水　治
7　上南　達郎　6　枡本　守生　5　熊谷　泰
4　日高　順一　3　山船　茂樹　2　山岸　昌弘
B　四方田康博

新人エイトB　敗者復活戦3着
コーチ　上田　伸　C　塩山弘　蔵　S　長谷川　優
7　伊藤　寛泰　6　斉藤　力　5　横山　雅仁
4　相羽　正樹　3　吉岡　武司　2　片柳　雅博
B　村松　康延
新人シングルスカルA　決勝戦4着
コーチ　宮嶋　裕　S　藤井　泰輔
B　決勝戦3着
S　宮武　祥夫
C　予選3着
S　鈴木　仁
全日本ダブルスカルB　敗者復活戦2
コーチ　富崎　裕　S　福重　隆一　B　本橋　浩道
全日本ダブルスカルB　敗者復活戦2着
S　山本　剛士　B　小林　寛重

昭和50年

第2回全日本大学選手権

8月30，31日（戸田コース）

エイト　準決勝2着
監督　史佐藤和実　コーチ　稲垣　正武　C　山田　司
S　塚田　俊彦　7　福重　隆一　6　本庄　謙一
5　和田　好・　4　浜岡　敬祐　3　熊谷　泰
2　小形　滋彦　B　田谷　純
舵付フォア　敗者復活戦4着
コーチ　稲垣　正武　C　林　大樹　S　相場　正樹
3　上南　達郎　2　山岸　昌弘　B　山船　茂樹
平均ダブルスカル　決勝3着
コーチ　豊田　雅孝　S　藤井　泰輔　B　岩下　久人
補　小林　寛重
シングルスカル　決勝2着
S　宮武　祥天

第16回全日本新人選手権

11月1～3日（戸田）

エイト
監督　佐藤　和実　コーチ　原田　寿史　C　高見沢昌彦
S　津布久祐次　7　葉山　峻　6　大枝　宏之
5　山田　保　4　鴨井　和宏　3　江藤　治
2　岡本　哲也　B　折本　洋紀
舵付フォア
C　林　大樹　S　斎藤　力　3　吉田　浩
2　清水　治　B　山船　茂樹
ンシグルスカル
コーチ　佐々木直哉　S　上南　達郎

昭和51年

モントリオール予選会

4月25日（戸田コース）

エイト　敗者復活戦2着
監督　佐藤　和実　コーチ　稲垣　正武　C　山田　司
S　小形　滋彦　7　和田　好史　6　本庄　謙一
5　福重　隆一　4　相場　正樹　3　熊谷　泰
2　藤井　泰輔　B　宮武　祥夫

第3回全日本大学選手権

8月28，29日（戸田）

エイト　準決勝2着
監督　佐藤　和実　コーチ　稲垣　正武　S　山田　司
S　清水　治　7　福重　隆一　6　本庄　謙一
5　枡本　守生　4　相場　正樹　3　熊谷　泰
2　小形　滋彦　B　和田　好史
軽量舵付フォア　準決勝2着
コーチ　原田　哉史　C　伊東　正章　S　津布久祐次
3　江藤　修治　2　岡本　哲也　B　高見沢昌彦
シングルスカル
コーチ　稲垣　正武　S　鈴木　仁

第16回オックスフォード椙レガッタ

8月28，29日（戸田コース）

エイト　決勝5着
監督　佐藤　和実　コーチ　本田　英生　C　林　大樹
S　上南　達郎　7　宮武　祥夫　6　大枝　宏之
5　伊藤　寛泰　4　鴨井　和宏　3　吉田　浩
2　清野　明　B　村松　康延

第17回全日本ジュニア選手権

11月6～7日（戸田コーチ）

エイト
監督　佐藤　和実　コーチ　稲垣　正武　C　難波　一弘
S　油谷　隆　7　黒田　敏彦　6　関戸　良行
5　内藤　雅和　4　東　光邦　3　日野　泰伸
2　堀内　直人　B　葉山　峻
付フォア　準決勝
コーチ　稲垣　正武　C　渡辺　孝道　S　津布久祐次
3　江藤　修治　2　岡本　哲哉　B　高見沢昌彦

昭和52年

第17回オックスフォード椙レガッタ

8月27，28日（戸田）

エイト　敗者復活戦3着
コーチ　C　坂東　正章　S　油谷　隆
7　葉山　峻　6　安丸　徹　5　村松　康延
4　折本　洋紀　3　岡本　哲哉　2　内藤　雅和
B　高見沢昌彦

中日本レガッタ，第7回世界選手権選考会

6月11，12日（愛知池）6月18，19日（戸田）

エイト　決勝1着

C　林　大樹　S　清水　治　7　熊谷　泰
6　相場　正樹　5　枡本　守生　4　鴨井　和宏
3　伊藤　寛泰　2　津布久祐次　B　江藤　修治

第4回全日本大学選手権

8月27，28日（戸田）

エイト　決勝3着

コーチ　稲垣　正武　C　林　大樹　S　清水　治
7　熊谷　泰　6　相場　正樹　5　枡本　守正
4　鴨井　和宏　3　伊藤　寛泰　2　津布久祐次
B　江藤　修治

第55回全日本選手権

11月3～6日

舵手付フォア　決勝5着

監督　高橋　泰和　コーチ　佐伯　貞幹　C　林　大樹
S　清水　治　3　熊谷　泰　2　相場　正樹
B　枡本　守正

第18回新人選手権

11月3～6日（戸田コース）

エイト

監督　高橋　泰和　コーチ　白井　宏和　C　鈴木　司
S　青島　秀治　7　阿部　秀幸　6　小川　英穂
5　小野沢康夫　4　神崎　裕巳　3　北村　雅彦
2　佐藤　栄一　B　高橋　尚宏

エイト　**四神会**

C　保坂　信司　S　長友　崇敏　7　中野　孝造
6　半田　治充　5　山本　浩文　4　本多　孝
3　村松　義郎　2　山崎　晃生　B　山本　雄司

シングルスカル

コーチ　佐伯　貞幹　S　安丸　徹

昭和53年

第5回全日本大学選手権

8月25，26日（戸田コース）

エイト　決勝5着

コーチ　白井　宏和　C　坂東　正章　S　油谷　隆
7　江藤　修治　6　鴨井　和宏　5　北村　雅彦
4　小野沢康夫　3　葉山　峻　2　内藤　雅和
B　岡本　哲也

シングル・スカル

S　神崎　裕之

ダブル・スカル　決勝5

コーチ　白井　宏和　S　阿部　秀治　B　小川　英穂

第19回新人選手権

10月28，29日（戸田コース）

新人エイト　準決4勝

コーチ　白井　宏和　C　山本　雄司　S　小野沢康夫
7　北村　雅彦　6　長友　崇敏　5　山本　浩文
4　阿部　秀幸　3　小川　英穂　2　鈴木　司
B　神崎　裕己

恒　天　敗者復活戦5着

コーチ　小林　靖夫　C　橋本　弦久　S　佐古田　明
7　中野　孝造　6　半田　治充　5　山内　晋一
4　平井　淳　3　藤代　久也　2　土屋　昭裕
B　藤井　典彦

白　虎　敗者復活戦5・

コーチ　小形　滋彦　C　西郷　信也　S　溝内　良輔
7　武良　研二　6　横堀喜一郎　5　三輪　隆司
4　山本　浩夫　3　江藤　俊郎　2　山崎　晃生
B　青島　秀治

新人シングルスカル　敗者復活戦4着

コーチ　宮武　祥夫　S　高橋　尚宏

昭和54年

ユニバシアード（国際大学漕艇選手権）派遣選考会

5月22，23日（戸田コース）

エイト

監督　高橋　泰蔵　C　中島　大祐　S　香月　道生
7　大久保忠夫　6　代野　照幸　5　小倉　健
4　渡辺　修　3　山崎　真也　2　成沢　正一
B　藤本　隆

第1回全日本軽量級選手権

6月16，17日（戸田コーチ）

エイト　決勝2着（優勝はハーバード大学）

監督　高橋　泰和　コーチ　白井　宏和　C　坂東　正章
S　小野沢康夫　7　内藤　雅和　6　油谷　隆
5　小川　英穂　4　阿部　秀幸　3　青島　秀治
2　安丸　徹　B　武良　研二　補　長友　崇敏
山本　浩文　C　北村　雅彦

シングルスカル　棄権

コーチ　白井　宏和　S　高橋　尚宏

第6回全日本大学選手権

8月24～26日

舵付フォア

監督　高橋　泰和　コーチ　白井　宏和　C　山本　雄司
S　高橋　尚宏　3　山本　浩文　2　平井　淳
B　山内　晋一

第19回オックスフォード楯レガッタ

8月24～26日（戸田）

エイト

コーチ　小形　滋彦　C　橋本　弦久　S　佐古田　明
7　土屋　昭裕　6　西郷　信也　5　三輪　隆司
4　横堀喜一郎　3　江藤　俊郎　2　溝内　良輔
B　藤代　久也

第20回全日本新人選手権

10月27，28日（戸田コース）

フォア　準決勝3着

C　橋本　弦久　S　横堀喜一郎　3　三輪　隆司
2　平井　淳　B　武良　研二

昭和55年

第2回全日本軽量級選手権

6月14～15日（戸田コース）

エイト　決勝2着

監督　高橋　泰和　コーチ　白井　宏和　C　山本　雄司
S　小野沢康夫　7　武良　研二　6　山本　隆夫
5　阿部　秀幸　4　青島　秀治　3
2　佐古田　明　B　江藤　俊郎　補　長友　崇敏
補　山崎　晃生　高橋　尚宏　中郎　孝造
坂東　正章

舵付フォア　準決勝2着

コーチ　相場　正樹　C　橋本　弦久　S　溝内　良輔
3　土屋　昭裕　2　平井　淳　B　三輪　隆司
補漕　保坂　信司

シングルスカル

コーチ　藤井　泰輔　S　横堀喜一郎

第20回オックスフォード盾レガッタ

8月22～24日

エイト

監督　高橋　泰和　コーチ　相場　正樹　C　橋本　弦久
S　溝内　良輔　7　土屋　昭裕　6　平井　淳
5　三輪　隆司　4　山内　晋一　4　小林　真人
2　横堀喜一郎　B　藤代　久也　漕　竹之内純一
補　光吉　徹次　長友　宗敬　高橋　尚宏
舵　保坂　信司

第7回全日本大学選手権

8月22～24日

エイト

コーチ　白井　宏和　C　山本　雄司　S　小野沢康夫
7　武良　研二　6　山本　隆夫　5　小川　英穂
4　阿部　秀幸　3　青島　秀治　2　佐古田　明
B　江藤　俊郎　補　高橋　尚宏　補　坂東　正章

舵付フォア

コーチ　浜岡　敬祐　C　中所　宣夫　S　飯塚　隆史
3　泉山　一仁　2　香月　道生　B　小倉　健
補漕　平井　国善

ダブルスカル

コーチ　鴨井　和宏　大枝　宏之　S　代野　照幸
B　三村　秀樹

シングルスカル

S　大久保忠夫

第58回全日本選手権

8月22～24日

舵手無フォア

コーチ　坂東　正章　S　山崎　晃生　3　長友　崇敏
2　佐藤　栄一　B　鈴木　司

シングルスカル

コーチ　鴨井　和宏　大枝　宏之　S　高橋　健司

第21回全日本新人選手権

10月25，26日（戸田ボートコース）

エイト　決勝4着

コーチ　浜岡　敬祐　C　中所　宣夫　S　三村　秀樹
7　小林　真人　6　代野　照幸　5　高橋　健司
4　香月　道生　3　藤本　隆　2　成沢　正一
B　外村　稔

シングルスカル　共に準決勝まで

コーチ　枡本　守生　S　小倉　健　S　八木沢新樹

昭和56年

ユニバシアード漕艇競技会派遣選考会

5月20，21日

シングルスカル　2次予選3着

藤本　隆

フォア　敗者復活戦2着

C　内藤　善治　S　成沢　正一　3　小倉　健
2　溝内　良輔　B　外村　稔

エイト　決勝2着

C　橋本　弦久　S　代野　照幸　7　武良　研二
6　山本　隆夫　5　大久保忠夫　4　香月　道生
3　小林　真人　2　佐古田　明　B　江藤　俊郎

第3回全日本軽量級選手権
（兼軽量級世界選手権派遣選考会）

6月20，21日

エイト　決勝3着

監督　高橋　泰和　コーチ　白井　宏和　C　橋本　弦久
S　代野　照幸　7　武良　研二　6　山本　隆夫
5　大久保忠夫　4　香月　道生　3　小林　真人
2　佐古田　明　B　江藤　俊郎　補　山内　晋一

フォア

コーチ　浜岡　敬祐　C　内藤　善治　S　成沢　正一
3　小倉　健　2　溝内　良輔　B　外村　稔

シングルスカル　準決勝3着
コーチ　安丸　徹　　藤本　隆

第59回全日本選手権
第8回全日本大学選手権

8月27～30日

インカレエイト　準決勝2着
C　橋本　弦久　S　代野　照幸　7　武良　研二
6　山本　隆夫　5　大久保忠夫　4　香月　道生
3　小林　真人　2　佐古田　明　B　江藤　俊郎
シングルスカル　全日本決勝5着，インカレ決勝2着
山内　晋一
インカレフォア　準決勝4着
C　内藤　善治　S　成沢　正一　3　小倉　健
2　一ツ木　正　B　外村　稔
インカレダブルスカル　敗者復活戦3着
C　内藤　善治　S　興梠　裕一　B　横堀喜一郎
全日本フォア　敗者復活戦2・
C　高浜　一郎　S　大塚　武生　3　佐藤　淳
2　中田　善文　B　塩島　久
全日本シングルスカル　敗者復活戦2着
藤本　隆

第21回オックスフォード楯レガッタ

10月16～18日

エイト　準決勝3着
C　中島　大祐　S　三村　秀樹　7　土屋　昭裕
6　渡辺　修　5　山崎　真也　4　岸本　雅久
3　桜井　正美　2　八木沢新樹　B　大久保弘一

第22回全日本新人選手権

10月16～18日（戸田コース）

エイト　準決勝5着
コーチ　熊谷　泰　C　中島　大祐　S　一ツ木　正
7　大久保弘一　6　渡辺　修　5　山崎　真也
4　中川　喜博　3　安田　真　2　岸本　雅久
B　桜井　正美
付フォア　準決勝4着
コーチ　熊谷　泰　C　高浜　一朗　S　大塚　武生
3　佐藤　淳　2　中田　善文　B　塩島　久

昭和57年

ユニバシアード（国際大学漕艇選手権）派遣選考会

5月22，23日

シングルスカル　敗者復活3戦
内藤　善治
ダブルスカル
S　大久保弘一　B　塩島　久
エイト　第1次選考5着
C　中島　大祐　S　香月　道生　7　大久保忠夫
6　代嶋　照幸　5　小倉　健　4　渡辺　修
3　山崎　真也　2　成沢　正一　B　藤本　隆

第4回全日本軽量級選手権

6月26，27日

シングルスカル　準決勝2着
コーチ　葉山　峻　　塩屋　久（四神会）
敗者復活戦4着
内藤　善治
エイト　準決勝2着
監督　高橋　泰蔵　コーチ　相場　正樹　C　中島　大祐
S　香月　道生　7　大久保忠夫　6　代野　照幸
5　小倉　健　4　渡辺　修　3　山崎　真也
2　成沢　正一　B　藤本　隆

第60回全日本選手権
第9回全日本学生選手権

6月26～29日

エイト　決勝インカレ2着　全日本4着
C　中島　大祐　S　代野　照幸　7　大久保忠夫
6　香月　道生　5　小倉　健　4　渡辺　修
3　新堂　博英　2　赤石　良治　B　藤本　隆
インカレ付フォア　準決勝3着
C　高浜　一朗　S　飯田　毅　3　草野　継弘
2　阿字地　譲　B　岸本　雅久
インカレダブルスカル　敗者復活戦4・
S　笠原　英一　B　平松　知雄
全日本シングルスカル　準決勝3着
S　塩島　久
インカレシングルスカル　決勝4着
S　内藤　善治
インカレシングルスカル　敗者復活戦4着
S　原田　和幸

第22回オックスフォード楯レガッタ

エイト　準決勝3着
C　下郡　稔裕　S　大城　健嗣　7　佐藤　淳
6　一ツ木　正　5　山崎　真也　4　成沢　正一
3　倉崎　嘉典　2　吉沢　栄治　B　大久　保弘

第23回全日本新人選手権

10月15～17日（戸田コース）

エイト　朱雀
監督　高橋　泰和　コーチ　江藤　修治　C　下郡　稔裕
S　吉沢　栄治　7　飯田　毅　6　大城　健嗣
5　新堂　博英　4　赤石　良治　3　阿字地　譲
2　草野　継弘　B　倉崎　嘉典　補　岡田　昭吾
白虎
コーチ　山本　隆夫　C　加藤　賢一　S　山下　和則

7	中屋 浩一	6	門松 功	5	榎本 武由
4	額田 幸治	3	藤井 賢也	2	内田 浩介
B	伊藤 健一	補	葉山 真一		

Centenial

コーチ	山本 隆夫	C	中居 義之	S	河田 良久
7	曽根 徹	6	高山 太志	5	小村
4	敦	3	小川 則道	2	難波 正義
B	藤岡 信夫	補	朱 殷卿		

シングルスカル

コーチ	江藤 修治	S	平松 知雄	S	笠原 英一
S	原田 和幸				

昭和58年

第5回全日本軽量級選手権

6月26日

エイト 優勝

監督 鈴木 崇司 コーチ 江藤 修治

C	中島 大祐	S	赤石 良治	7	佐藤 淳
6	渡辺 修	5	塩島 久	4	大城 健嗣
3	新堂 博英	2	一ツ木 正	B	大久保弘一

東　商　戦

第1回
昭和二十四年八月二十八日
（東武鉄橋―鐘ケ淵2マイル）二着
コーチ　藤井　良一
舵手　君塚　克美　整調　矢島隆之輔　七番　村山　和夫
六番　三堀正太郎　五番　行木　陽一　四番　村田　宏
三番　伊藤　鉸治　二番　瀬田　慎吾　舳手　森　千昭

第2回
昭和二十五年八月二十日
（両国橋―大倉別邸 3,000m）二着
コーチ　平野　昌　藤井　良一
舵手　大礒　幸雄　整調　三堀正太郎　七番　田幡　恵一
六番　瀬田　慎吾　五番　仲野　実　四番　山田　富三
三番　畑　弘晃　二番　佐藤　和実　舳手　行木　陽一

第3回
昭和二十六年六月十六日
（水神―永代橋4¼マイル）二着
コーチ　柵山　三好
舵手　大礒　幸雄　整調　佐藤　和実　七番　畑　弘晃
六番　仲野　実　五番　三堀正太郎　四番　瀬田　慎吾
三番　栗原　恒雄　二番　田幡　恵一　舳手　行木　陽一

第4回
昭和二十七年六月十五日
対校（水神―永代橋4¼マイル）一着
ジュニア（水神―厩橋2マイル）一着
コーチ　遠山不羈夫　畑　弘平　柵山　三好　工藤　哲雄
対抗クルー
舵手　瀬古　政一　整調　仲野　実　七番　藤山　昭也
六番　佐藤　和実　五番　藤森　久弘　四番　瀬田　慎吾
三番　栗原　恒雄　二番　藤原　隆二　舳手　畑　弘晃
補欠　長友　真理
ジュニア・クルー
舵手　町井　直行　整調　飯島　仙一　七番　児島　章郎
六番　桜井　安彦　五番　緒方　彪　四番　青戸　博邦
三番　浅田　正弘　二番　杉山　方良　舳手　勝田　一彦

第5回
昭和二十八年六月二十一日
対校（水神―永代橋4¼マイル）一着
ジュニア（水神―厩橋2マイル）二着
コーチ　堀川富太郎　佐藤　和実
対校クルー
舵手　瀬古　政一　整調　長友　真理　七番　藤山　昭也
六番　杉山　方良　五番　藤森　久弘　四番　桜井　安彦
三番　緒方　彪　二番　藤原　隆二　舳手　児島　章郎
補欠　土谷　俊幸　浅田　正弘　勝田　一彦　町井　直行
ジュニア・クルー
舵手　上田　一郎　整調　寺本　隆一　七番　大岩　吉之
六番　小野　早苗　五番　水崎　巌　四番　高浦　民雄
三番　並木　恒夫　二番　小松崎利広　舳手　樋川　幸雄
補欠　内川敏雄

第6回
昭和二十九年六月二十日
対校（水神―永代橋4¼マイル）二着
ジュニア（水神―厩橋3,200m）一着
対校クルー
コーチ　堀川富太郎　佐藤　和実
舵手　町井　直行　整調　杉山　方良　七番　児島　章郎
六番　桜井　安彦　五番　緒方　彪　四番　小野　早苗
三番　小松崎利広　二番　高浦　民雄　舳手　勝田　一彦
ジュニア・クルー
コーチ　佐藤　清
舵手　望月　幸正　整調　田子　幸夫　七番　平田　隆造
六番　高橋　泰和　五番　佐藤　哲也　四番　吉田　陽吾
三番　樋口　和也　二番　石原　道郎　舳手　藤村　知勝

第7回
昭和三十年五月二十九日（向島）
対校エイト（水神―永代橋4¼マイル）一着
コーチ　堀川富太郎　佐藤　清
舵手　望月　幸正　整調　小野　早苗　七番　平田　隆造
六番　高橋　泰和　五番　佐藤　哲也　四番　吉田　陽吾
三番　高浦　民雄　二番　田子　幸夫　舳手　小松崎利広
ジュニアエイト（水神―厩橋2マイル）二着
コーチ　佐藤　和美
マネ　楠原　正祐　井上　貞郎
舵手　江崎　亮　整調　土井　正　七番　藤田　昌巳
六番　石川　威　五番　瀬田　五郎　四番　崔　文浩
三番　逢坂　章一　二番　畑　弘能　舳手　石井　和雄

第8回
昭和三十一年六月二日
対校エイト（両校ともオリンピック候補となり中止）
コーチ　堀川富太郎　佐藤　和実
舵手　望月　幸正　整調　土井　正　七番　平田　隆造
六番　高橋　泰和　五番　佐藤　哲也　四番　吉田　陽吾
三番　瀬田　五郎　二番　田子　幸夫　舳手　石井　和雄
ジュニアエイト（水神―厩橋2マイル）一着
コーチ　瀬田　慎吾　藤村　知勝
舵手　中田　徳郎　整調　加藤　博　七番　石原　幹也
六番　山東　裕美　五番　黒川　嘉郎　四番　上原　包
三番　板垣　幸雄　二番　福田　清成　舳手　畑　弘郎

第9回
昭和三十二年六月二日（向島）
対校エイト（水神―永代橋4¼マイル）二着
コーチ　佐藤　和実
舵手　中田　徳郎　整調　崔　文浩　七番　石原　幹也
六番　山東　裕美　五番　瀬田　五郎　四番　土井　正
三番　藤田　昌己　二番　畑　弘能　舳手　石井　和雄
補欠　加藤　博　畑　弘郎
ジュニアエイト（水神―厩橋2マイル）二着
コーチ　小松崎利広
舵手　松本　格　整調　渡辺　宏之　七番　田中　茂
六番　内藤　元巳　五番　広岡　幸夫　四番　丸子　博之
三番　西村　浩二　二番　菅井　弘之　舳手　田中　俊雄
補欠　蟠田　春久　吉木　健雄　高山　治

第10回
昭和三十三年六月八日（向島）
対校エイト（水神―永代橋4¼マイル）二着
コーチ　瀬田　慎吾　佐藤　和実
舵手　中田　徳郎　整調　渡辺　宏之　七番　石原　幹也
六番　山東　裕美　五番　広岡　幸夫　四番　林　俊介
三番　西村　浩二　二番　内藤　元巳　舳手　黒川　嘉郎
補欠　田中　正満　日比　俊一
ジュニアエイト（水神―厩橋2マイル）一着
コーチ　緒方　彪　加藤　博　板垣　幸雄
舵手　藤本啓一郎　整調　大内　正三　七番　鈴木　崇司
六番　竹井　忠夫　五番　安藤　博　四番　小林　幹雄
三番　稲垣　正武　二番　本多　孟　舳手　桑名　正洋
補欠　徳永　昌信　広田　真幸　須田　宗克

第11回
昭和三十四年六月七日（向島）
対校エイト（東武鉄橋―鐘ケ渕2マイル）一着
コーチ　佐藤　和実
舵手　藤本啓一郎　整調　内藤　元巳　七番　広岡　幸夫
六番　林　俊介　五番　西村　浩二　四番　柳沢　健治
三番　鈴木　崇司　二番　本多　孟　舳手　稲垣　正武
対校フォア（洗場―水神2000m）一着
コーチ　仲野　実
舵手　松本　格　整調　土屋　忠正　三番　日比　俊一
二番　大内　正三　舳手　安藤　博
ジュニアエイト（　〃　〃　）二着
コーチ　石井　和雄
舵手　福島　明男　整調　森村　大作　七番　藤井研一郎
六番　大村　繁雄　五番　野上　浩　四番　原　良三
三番　大久保元三郎　二番　森下一乗　舳手　藤井　正人

第12回
昭和三十五年六月十二日（向島）
対校エイト（東武鉄橋―鐘ケ渕2マイル）二着
コーチ　佐藤　和実　仲野　実
舵手　藤本啓一郎　整調　渡辺　宏之　七番　稲垣　正武
六番　内藤　元巳　五番　鈴木　崇司　四番　竹井　忠夫
三番　田中　伸次　二番　大内　正三　舳手　安藤　博
対校フォア（洗場―水神2000m）二着
コーチ　小松崎利広
舵手　須田　宗克　整調　日比　俊一　三番　林　俊介
二番　野上　浩　舳手　本多　孟
ジュニアエイト（　〃　〃　）一着
コーチ　長友　真理
舵手　山下　輝男　整調　登里　貞治　七番　尾藤　建二
六番　粟田　房穂　五番　兼松　通彦　四番　小川　浩男
三番　戸谷　俊弘　二番　青山　克彦　舳手　大村　庄司

第13回
昭和三十六年五月二十一日（向島）
対校エイト（白鬚橋―永代橋4¼マイル）二着
コーチ　緒方　彪
舵手　山下　輝男　整調　森村　大作　七番　尾藤　建二
六番　野上　浩　五番　田中　伸次　四番　小川　浩男
三番　山下　康弘　二番　登里　貞治　舳手　木村　希一
対校フォア（白鬚橋―言問橋2000m）二着
コーチ　渡辺　宏之
舵手　原　洋三郎　整調　青山　克彦　三番　大須賀　守
二番　立石　武士　舳手　田村　公孝
対校ペア（　〃　〃　）二着
コーチ　佐藤　和実　安藤　博
舵手　久保修太郎　整調　最所　崇文　舳手　大川　洋平
対校シングルスカル（　〃　〃　）二着
コーチ　佐藤　和実
整調　藤井　正人
ジュニアエイト（白鬚橋―言問橋3100m）二着
コーチ　東海林義昭　藤本啓一郎
舵手　本多　幸吉　整調　岡田　竜二　七番　加藤信一郎
六番　厩橋　輝男　五番　山下　善久　四番　宮地　勝利
三番　佐藤　義明　二番　荒井　敏彦　舳手　藤井　克男

第14回
昭和三十七年五月二十日
対校エイト（戸田2000m）二着
コーチ　佐藤　清
舵手　本多　幸吉　整調　立石　武士　七番　山下　康弘
六番　小川　浩男　五番　田村　公孝　四番　田中　伸次
三番　尾藤　建二　二番　岡田　竜二　舳手　木村　希一
対校フォア（　〃　）二着
コーチ　佐藤　清
舵手　青木　寛夫　整調　田中　勝美　三番　山崎　常光
二番　塚野　文彦　舳手　山下　善久
無フォア（　〃　）二着
コーチ　佐藤　清
整調　立石　武士　三番　山下　康弘　二番　尾藤　建二
舳手　田中　伸次
無ペア（　〃　）二着
コーチ　佐藤　清

整調　岡田　竜二　舳手　木村　希一
対校シングルスカル　一着
コーチ　佐藤　清
整調　登里　貞治
ジュニアエイト　二着
コーチ　鈴木　崇司
トレーナー　荒井　敏彦
舵手　遊佐　伸彦　整調　斉間　武　七番　早川　剛
六番　吉沢　隆平　五番　長谷川　晨　四番　政井　孝道
三番　横井　次郎　二番　堀本　良雄　舳手　藤沢　忠雄

第15回
昭和三十八年六月二十三日
（荒川、笹目橋—戸田橋 1,800m）
対校エイト　二着
監督　前田　正
コーチ　渡辺　宏之
舵手　遊佐　伸彦　整調　立石　武士　七番　田中　伸次
六番　長谷川　晨　五番　山下　康弘　四番　吉沢　隆平
三番　田村　公孝　二番　政井　孝道　舳手　木村　希一
対校フォア　二着
コーチ　渡辺　宏之
舵手　本多　幸吉　整調　藤沢　忠雄　三番　金谷　俊彦
二番　町田　晶生　舳手　塙　勝良
対校シングルスカル　二着
矢野　直喜
ジュニアエイト　一着
コーチ　鈴木　崇司
舵手　伊東　勇　整調　豊田　雅孝　七番　大内多喜男
六番　吉田　幹則　五番　庄司　政義　四番　森　一将
三番　坂野　洋一　二番　村上　驍　舳手　森　正義

第16回
昭和三十九年五月十日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
監督　前田　正
コーチ　佐藤　和実　鈴木　崇司
舵手　遊佐　伸彦　整調　豊田　雅孝　七番　坂野　洋一
六番　政井　孝道　五番　大内多喜男　四番　森　一将
三番　吉沢　隆平　二番　藤沢　忠雄　舳手　森　正義
対校フォア　二着
コーチ　前田　正
舵手　本田　英生　整調　町田　晶生　三番　中村晋太郎
二番　泰井　俊介　舳手　中村　恒雄
ジュニアエイト　一着
コーチ　渡辺　宏之
マネ　山崎　常光　堀本　良雄
舵手　御村　治雄　整調　本郷　元秀　七番　溜箭　隆司
六番　加藤　和幸　五番　永井　邦雄　四番　下里　俊二
三番　磯崎　幸　二番　青山　守　舳手　奥村　徹

第17回
昭和四十年五月二十三日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
監督　前田　正
コーチ　渡辺　宏之
舵手　御村　治雄　整調　本郷　元秀　七番　永井　邦雄
六番　加藤　和幸　五番　磯崎　寺　四番　下里　俊二
三番　大内多喜男　二番　青山　守　舳手　坂野　洋一
対校フォア　二着
コーチ　渡辺　宏之
舵手　本田　英生　整調　町田　晶生　三番　中村晋太郎
二番　江川　正　舳手　中村　恒雄
対校シングルスカル　二着
豊田　雅孝
ジュニアエイト　一着
コーチ　山下　康弘
舵手　西沢　忠夫　整調　吉田　正則　七番　森岡　暁
六番　村井　靖人　五番　安田　幸治　四番　万代　峻
三番　宇佐美元也　二番　塚本　真索　舳手　青木　要輔

第18回
昭和四十一年五月十五日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　一着
監督　前田　正
コーチ　佐藤　和実　山下　康弘
舵手　本田　英生　整調　万代　峻　七番　礒崎　幸
六番　村井　靖人　五番　永井　邦雄　四番　加藤　和幸
三番　宇佐美元也　二番　江川　正　舳手　安田　幸治
対校フォア　一着
コーチ　藤本啓一郎
舵手　平岡　哲郎　整調　塚本　真索　三番　中村晋太郎
二番　吉田　正則　舳手　石岡　信
対校シングルスカル　一着
佐々木直哉
ジュニアエイト　一着
コーチ　稲垣　正武
舵手　大先　一正　整調　佐藤　信弘　七番　林　宏一
六番　白井　宏和　五番　石田　尚道　四番　宮嶋　裕
三番　原田　寿史　二番　安藤　禎夫　舳手　合田　正彦

第19回
昭和四十二年五月十四日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
監督　前田　正
コーチ　藤本啓一郎
舵手　大先　一正　整調　白井　宏和　七番　石田　尚道
六番　万代　峻　五番　宇佐美元也　四番　江川　正
三番　原田　寿史　二番　吉田　正則　舳手　安田　幸治
対校フォア　二着

コーチ　山下　康弘
舵手　岡田　重行　整調　佐藤　信弘　三番　合田　正彦
二番　森岡　　暁　舳手　青木　要輔
対校シングルスカル　一着
コーチ　安藤　　博
佐々木直哉
ジュニアエイト　二着
コーチ　柳沢　健治
舵手　井口　秀実　整調　柳瀬　真澄　七番　竹内　幸男
六番　村本　卓生　五番　菊地　雅之　四番　前田　光幸
三番　佐伯　貞幹　二番　松岡　史朗　舳手　谷　　逸夫

第20回
昭和四十三年五月五日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
コーチ　安藤　　博
舵手　大先　一正　整調　石田　尚道　七番　白井　宏和
六番　原田　寿史　五番　佐伯　貞幹　四番　合田　正彦
三番　柴田　　聡　二番　柳瀬　真澄　舳手　安藤　禎夫
対校シングルスカル　二着
宮嶋　　裕
ジュニアエイト　二着
コーチ　田村　公孝
舵手　香川　　満　整調　武良　敬治　七番　赤木　功昇
六番　小林　靖夫　五番　小林　広実　四番　斉藤　俊一
三番　曽田　立夫　二番　田辺　　明　舳手　平田　省三

第21回
昭和四十四年五月四日
対校エイト　二着
監督　前田　　正
コーチ　安藤　　博
舵手　香川　　満　整調　柳瀬　真澄　七番　武良　敬治
六番　小林　靖夫　五番　佐伯　貞幹　四番　小林　広実
三番　谷　　逸夫　二番　平田　省三　舳手　松岡　史朗
対校フォア　二着
コーチ　宇佐美元也
舵手　大野　健一　整調　中村　純一　三番　清水　高志
二番　鈴木雄三郎　舳手　杉山　和宏
対校シングルスカル　一着
コーチ　宮嶋　　裕
鈴木　顕定
ジュニアエイト　一着
コーチ　礒崎　　幸
舵手　稲葉　　創　整調　上田　　伸　七番　井上　高治
六番　内藤　新蔵　五番　風間　秀樹　四番　本郷　祥介
三番　朝山　　恭　二番　石村　彰敏　舳手　木村　祐基

第22回
昭和四十五年五月五日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
監督　前田　　正
コーチ　安藤　　博
舵手　加藤　　博　整調　秋山健一郎　七番　平田　省造
六番　小林　靖夫　五番　小林　広実　四番　本郷　祥介
三番　中村　純一　二番　武良　敬治　舳手　上田　　伸
対校ダブルスカル　二着
コーチ　宮崎　　裕
整調　清水　高志　舳手　内藤　新蔵
対校シングルスカル　二着
コーチ　宮崎　　裕
杉山　和宏
第二エイト　二着
コーチ　村井　靖人
舵手　田辺　　明　整調　太田　文雄　七番　北川　鳴海
六番　田口　哲生　五番　野上　　衛　四番　菓子野　広
三番　美原　　融　二番　斉藤　俊一　舳手　赤木　功昇

第23回
昭和四十六年五月五日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
舵手　加藤　　博　整調　上田　　伸　七番　秋山健一郎
六番　清水　高志　五番　本郷　祥介　四番　中村　純一
三番　太田　文雄　二番　桑原　新一　舳手　内藤　新蔵
対校ダブル・スカル　二着
コーチ　石田　尚道
整調　美原　　融　舳手　菓子野　広
ジュニアエイト　二着
舵手　組野　　繁　整調　田村　文明　七番　入山　賢一
六番　篠田　博之　五番　岩本　　保　四番　佐々木雅一
三番　中井　義政　二番　谷口　　博　舳手　池上　澄善

第24回
昭和四十七年四月三十日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　一位
舵手　加藤　　博　整調　木田　隆平　七番　関　　和範
六番　菓子野　広　五番　内藤　敏雄　四番　望月　一成
三番　渡辺　　啓　二番　篠田　博之　舳手　岩本　　保

高浜五三己
ジュニアエイト　四着
舵手　田原　賢明　整調　井上　　良　七番　宮武　　剛
六番　設楽　哲也　五番　長田　弘之　四番　株木　　博
三番　浜崎　成司　二番　永江　一剛　舳手　加地　俊彦

第25回
昭和四十八年五月五日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
整調　木田　隆平　七番　岩本　　保　六番　株木　　博

五番　内藤　敏雄　四番　井上　　良　三番　浜崎　成司
二番　永江　一剛　舳手　宮武　　剛　舵手　組野　　繁
対校フォア　　一着
整調　越田得伍良　三番　柴本　泰宏　二番　逢見　直人
舳手　岩下　久人　舵手　安藤　朋也
ジュニアエイト　　一着
整調　扇屋　秀行　七番　辰巳　　順　六番　浜岡　敬祐
五番　児玉　克己　四番　塚田　俊彦　三番　田谷　　純
二番　播磨　俊和　舳手　椎名　政幸　舵手　熊埜御堂真

第26回
昭和四十九年五月五日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　　二着
コーチ　白井　宏和
舵手　岩下　久人　整調　浜岡　敬祐　七番　柴本　泰宏
六番　越田得伍良　五番　児玉　克己　四番　井上　　良
三番　田谷　　純　二番　木田　隆平　舳手　浜崎　成司
対校フォア　　二着
コーチ　永井　邦雄
舵手　加藤　　博　整調　塚田　俊彦　三番　椎名　政幸
二番　永江　一剛　舳手　鈴木　　仁
対校シングルスカル　　二着
辰巳　　順
ジュニアエイト　　一着
コーチ　安田　幸治
舵手　山田　　司　整調　藤井　泰輔　七番　宮武　祥夫
六番　小形　滋彦　五番　本橋　造道　四番　本庄　謙一
三番　福重　隆一　二番　山本　剛士　舳手　和田　好史

第27回
昭和五十年五月五日
（戸田ボートコース1マイル 1,609m）
対校エイト　二着　⅔艇身
コーチ　稲垣　正武
舵手　山田　　司　整調　本庄　謙一　七番　福重　隆一
六番　浜岡　敬祐　五番　田谷　　純　四番　小形　滋彦
三番　本橋　浩道　二番　塚田　俊彦　舳手　和田　好史
対校フォア　二着　3½艇身
コーチ　秋山健一郎
舵手　塩山　弘蔵　整調　日高　順一　三番　四方田康博
二番　片柳　雅博　舳手　山岸　昌弘
シングルスカル　　一着
コーチ　登里貞治　豊田雅孝
宮武　祥天
ジュニアエイト　　一着
舵手　林　　大樹　整調　長谷川　優　七番　熊谷　　泰
六番　斉藤　　力　五番　横山　雅仁　四番　相場　正樹
三番　山船　茂樹　二番　清水　　治　舳手　村松　康延

第28回
昭和五十一年五月五日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　　一着
コーチ　稲垣　正武
舵手　山田　　司　整調　藤井　泰輔　七番　宮武　祥夫
六番　本庄　謙一　五番　和田　好史　四番　相場　正樹
三番　熊谷　　泰　二番　小形　滋彦　舳手　福重　隆一
対校フォア　　二着
コーチ　本田　英生
舵手　林　　大樹　整調　清水　　治　三番　山船　茂樹
二番　上南　達郎　舳手　吉田　　浩
対校シングルスカル　　二着
伊藤　寛泰
ジュニアエイト　　二着
コーチ　原田　寿史
舵手　岡本　哲哉　整調　津布久祐次　七番　葉山　　峻
六番　大枝　宏之　五番　鴨井　和宏　四番　清野　　明
三番　永藤　修治　二番　折本　洋紀　舳手　高見沢昌彦

第29回
昭和五十二年五月八日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　　二着
監督　佐藤　和実
コーチ　稲垣　正武
舵手　林　　大樹　整調　清水　　治　七番　熊谷　　泰
六番　相場　正樹　五番　枡本　守生　四番　鴨井　和宏
三番　伊藤　寛泰　二番　大枝　宏之　舳手　上南　達郎
対校フォア　　二着
コーチ　本田　英生
舵手　坂東　正章　整調　岡本　哲哉　三番　吉田　　浩
二番　折本　洋紀　舳手　高見沢昌彦
対校シングルスカル　　一着
葉山　　峻
ジュニアエイト　　三着
コーチ　永井　邦雄
舵手　難波　一弘　整調　油谷　　遼　七番　森　　淳
六番　安丸　　徹　五番　石川　敏之　四番　内藤　雅和
三番　吉安　乙起　二番　日野　泰伸　舳手　東　　哲也
ダブルスカル　　一着
整調　江藤　修治　舳手　津布久祐次

第30回
昭和五十三年五月七日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　　二着
監督　高橋　泰和
コーチ　白井　宏和
舵手　坂東　正章　整調　鴨井　和宏　七番　江藤　修治
六番　大枝　宏之　五番　葉山　　峻　四番　油谷　　隆
三番　北村　雅彦　二番　小野沢康夫　舳手　高橋　尚宏
対校フォア　　二着
コーチ　山田　　司　福重　隆一

舵手　山本　雄司　整調　内藤　雅和　三番　匿本　哲哉
二番　鈴木　　司　舳手　中野　孝造
対校シングルスカル　　一着
安丸　　徹
ジュニアエイト　　二着
コーチ　宮武　祥夫　本庄　謙一
舵手　保坂　信司　整調　半田　治充　七番　山本　浩文
六番　長友　崇敏　五番　青島　秀治　四番　小川　英穂
三番　本多　　孝　二番　山崎　晃生　舳手　村松　義郎
補漕　阿部　秀幸　神崎　裕己

第31回
昭和五十四年五月十三日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　　二着
監督　高橋　泰和
コーチ　白井　宏和
舵手　坂東　正章　整調　小野沢康夫　七番　北村　雅彦
六番　油谷　　隆　五番　小川　英穂　四番　山本　隆夫
三番　山本　浩文　二番　岡部　秀幸　舳手　内藤　雅和
対校フォア　　二着
コーチ　山田　　司
舵手　山本　雄司　整調　西郷　信也　三番　山内　晋一
二番　田中　　純　舳手　中野　孝造
対校シングルスカル　　二着
高橋　尚宏
ダブルスカル　　一着
整調　青島　秀治　舳手　安丸　　徹
ジュニアエイト　　二着
舵手　橋本　弦久　整調　佐古田　明　七番　土屋　昭裕
六番　平井　　淳　五番　三輪　隆司　四番　横堀喜一郎
三番　武良　研二　二番　溝内　良輔　舳手　藤代　久也

第32回
昭和五十五年五月十一日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　　二着
監督　高橋　泰和
コーチ　白井　宏和　小形　滋彦
舵手　山本　雄司　整調　小野沢康夫　七番　武良　研二
六番　山本　隆夫　五番　小川　英穂　四番　阿部　秀幸
三番　北村　雅彦　二番　江頭　俊郎　舳手　青島　秀治
対校フォア　二着
コーチ　相場　正樹
舵手　橋本　弦久　整調　西郷　信也　三番　土屋　昭裕
二番　平井　　淳　舳手　三輪　隆司
対校シングルスカル　　二着
横堀喜一郎　藤代　久也
ダブルスカル　第一着
整調　山内　晋一　舳手　佐古田　明
ジュニアエイト
青龍　　一着
コーチ　浜岡　敬祐
舵手　中所　宜夫　整調　三村　秀樹　七番　小林　真人
六番　代野　照幸　五番　平井　国喜　四番　光吉　徹次
三番　藤本　　隆　二番　成沢　正一　舳手　外村　　稔
ジュニアエイト
白虎　　二着
コーチ　浜岡　啓祐
舵手　竹重　昭男　整調　香月　道生　七番　大久保忠夫
六番　飯塚　隆史　五番　小倉　　健　四番　高橋　健司
三番　泉山　一仁　二番　木八沢新樹　舳手　竹之内純一

第33回
昭和五十六年五月十日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　　二着
舵手　橋本　弦久　整調　佐古田　明　七番　武良　研二
六番　山本　隆夫　五番　小林　直人　四番　代野　照幸
三番　大久保忠夫　二番　香月　道生　舳手　江藤　俊郎
対校フォア　　二着
舵手　内藤　善浩　整調　成沢　正一　三番　小倉　　健
二番　高橋　健司　舳手　外村　　稔
シングルスカル　　一着
藤本　　隆　八木沢新樹　泉山　一仁
ダブルスカル　　一着
整調　土屋　昭裕　山内　晋一
ジュニアエイト
白虎　　四着
舵手　高浜　一朗　整調　一ツ木　正　七番　佐藤　　淳
六番　岸本　雅久　五番　山崎　真也　四番　中田　善文
三番　佐竹　裕之　二番　梅田　　彰　舳手　桜井　正美
青竜　　二着
舵手　中島　大祐　整調　中川　喜博　七番　大久保弘一
六番　士川　　元　五番　渡辺　　修　四番　相場　　彰
三番　安田　　真　二番　大塚　武生　舳手　塩島　　久

第34回
昭和五十七年五月九日
（戸田ボートコース2000m）
対校エイト　　二着
整調　香月　道生　七番　大久保忠夫　六番　代野　照幸
五番　小倉　　健　四番　渡辺　　修　三番　山崎　真也
二番　成沢　正一　舳手　藤本　　隆　舵手　中島　大祐
対校フォア　　二着
整調　大久保弘一　三番　佐藤　　淳　二番　小林　真人
舳手　草野　継弘　舵手　高浜　一朗
対校シングルスカル
塩島　　久　一ツ木　正　内藤　善治
ダブルスカル　　四着
整調　岡田　昭吾　舳手　平松　知雄
ジュニアエイト　　三着
舵手　下郡　稔裕　整調　赤石　良治　七番　新堂　博英
六番　大城　健嗣　五番　阿字地　譲　四番　笠原　英一

三番　倉崎　嘉典　二番　吉沢　栄治　舳手　飯田　毅

第35回
昭和五十八年五月八日
（戸田ボートコース 2,000m）
対校エイト　二着
監督　鈴木　崇司
対校ヘッドコーチ　江藤　修治
コーチ　鴨井　和宏　藤本　隆
舵手　中島　大祐　整調　赤石　良治　七番　佐藤　淳
六番　渡辺　修　五番　塩島　久　四番　大城　健嗣
三番　新堂　博英　二番　一ツ木　正　舳手　大久保弘一
対校フォア　二着
＜言　問＞
舵手　下郡　稔裕　整調　草野　継弘　三番　阿字地　譲
二番　笠原　英一　舳手　倉崎　嘉典
＜Tinbergen＞
舵手　高浜　一朗　整調　内田　浩介　二番　難波　正義
舳手　原田　和幸
ダブルスカル
山崎　真也　吉沢　栄治
対校シングルスカル　二着
飯田　毅　内藤　善治
ジュニアエイト
＜白　虎＞　四着
コーチ　山本　隆夫　大久保忠夫
舵手　加藤　賢一　整調　大塘　敦　七番　小川　則道
六番　伊藤　健一　五番　小村　康浩　四番　河田　良久
三番　葉山　真一　二番　額田　幸治　舳手　中屋　浩一
＜玄　武＞　三着
舵手　中居　義之　整調　門松　功　七番　曽根　徹
六番　山下　和則　五番　榎本　武由　四番　高山　太志
三番　藤井　賢也　二番　朱　殷　卿　舳手　藤岡　信夫

校内大小会

第一回秋季競漕大会

明治二十年十一月三日

漕程七百メートル

	本科		予科		本科	別科
舵手	長岡	長	品川	健吉	武田勝太郎	河合松之助
第四	祖山	鐘三	波多野久松		榎本鎌七郎	松永 由熊
第三	石井郁三郎		小田柿捨次郎		錦戸 右門	加藤 正生
第二	前田鋲次郎		染谷 成章		吉成英七郎	額川甲子郎
撓手	友常	和中	本城	一生	河内鮮太郎	山田萬里四郎

第二回春季競漕大会

明治二十二年四月六日

第三分科競漕

	本二		本一		予科	別科
舵手	津田	萬吉	諏訪	庸輔	平松鉞五郎	百田礼五郎
整調	田邊	文索	下條	直幹	大原春次郎	赤羽 克己
五番	原田	定助	長村	英勁	武田 信一	川崎善次郎
四番	古澤	謙吉	河田大三九		石橋徳次郎	志岐 守通
三番	藤田	直治	村瀬	春雄	金子 量太	佐野 雪
二番	青木金太郎		高橋鈴太郎		林 徳太郎	永田 雄一
舳手	土屋	豊吉	橋本	毗郷	児玉 謙次	青山孝太郎

第二分科競漕

	本二		本一		予科	別科
舵手	藤村	義苗	平田勝之助		保坂京三郎	鵜瀞 修一
整調	中田季三郎		加藤義之助		露木初太郎	今村 直蔵
五番	町田豊千代		高木 貞吉		浅野 長七	大井 益吉
四番	松井竹次郎		藤島 重郎		吉川 孝三	深井栄之助
三番	友常	和中	近藤金之助		田中新之助	梅津庫之助
二番	会田	健吉	中山	兵馬	中村 米吉	青柳龍五郎
舳手	栗田	代作	奥田	操	小林 政雄	山崎麟太郎

第一分科競漕

	本一		予科		主計科	別科
舵手	染谷	成章	近藤秀太郎		古沢 基	森川 鍵蔵
整調	諸井	巴	近藤	千吉	長柄梅次郎	日高驥三郎
五番	小林	武一	辻	朋吉	田中六三郎	赤津 仁作
四番	矢橋	亮吉	関口積一郎		山本健一郎	瀬島猪之丞
三番	永富	雄吉	石橋多喜郎		上田金一郎	関 孝助
二番	栗原作太郎		藤岡九二三		太田平太郎	坂本尚五郎
舳手	早水	親宗	柿崎	精一	松井定一郎	柚木亀太郎

分科選手競漕

	本二		本一		予科	別科
舵手	長岡	長	富安	季吉	小林直太郎	品川 健吉
整調	河村	艮平	波多野久松		加藤 正生	田部房次郎
五番	石井郁三郎		小田柿捨次郎		江間 平吉	河村 寅次
四番	平生釟三郎		朽木恒次郎		原田芳太郎	矢野 義弓
三番	亀井	藤重	山口	増蔵	岩下 清朝	千坂 忠
二番	小松	辰吉	本城	一生	柿原 定吉	三橋喜之助
舳手	祖山	鐘三	萩原峯三郎		工藤金三郎	河合松之助

第三回春季競漕大会

明治二十三年四月五日

第二分科競漕

	本三		本一		予科	補充科
舵手	藤村	義苗	保坂京三郎		百田礼五郎	山下 氏保
整調	松井竹次郎		関口積一郎		萩原喜三郎	宇田 精一
五番	栗田	代作	金子	量太	木村 勝	大滝岩次郎
四番	中田季三郎		浅野	長七	青柳龍五郎	林 栄吉
三番	原田	定助	中村	米吉	川崎善次郎	鳴海 重要
二番	会田	健吉	高木	辰男	鵜瀞 修一	北村 久義
舳手	亀井	藤重	山本邦之助		原 文二郎	桃井 健吾

第一分科競漕

	本二		本一		予科	補充科
舵手	染谷	成章	近藤秀太郎		森川 鍵三	品川 健吉
整調	諸井	巴	小林直太郎		三橋喜之助	赤羽 克己
五番	小林	武一	岩下	清朝	河村 寅次	佐野 雪
四番	中山	兵馬	石橋徳次郎		矢野 義弓	永野 耕造
三番	加藤義之助		辻	朋吉	青山孝太郎	池田 政唆
二番	藤島	重郎	林	徳太郎	瀬島猪之丞	加福力太郎
舳手	近藤金之助		武田	信一	山崎麟太郎	飯島 和一

分科選手競漕

	本三		本二		本一		予科
舵手	長岡	長	富安	季吉	山田萬里四郎		河井松之助
整調	河村	艮平	波多野久松		加藤	正生	千坂 忠
五番	祖山	鐘三	小田柿捨次郎		原田芳太郎		田部房次郎
四番	平岡寅之助		朽木恒次郎		吉川	孝三	坂本尚五郎
三番	平生釟三郎		山口	増蔵	大原春次郎		日高驥三郎
二番	石井郁三郎		本城	一生	工藤金三郎		今村 直蔵
舳手	小松	辰吉	萩原峯三郎		近藤	千吉	柚木亀太郎

第四回春季競漕大会

明治二十四年四月三日

第三分科競漕

	本三		本二		予科	補二
舵手	萩原峯三郎		平松鉞五郎		山内作左衛門	伊東祐次郎
整調	栗原作太郎		山本邦之助		北村 久義	松沢藤三郎
五番	高木	貞吉	柳谷巳之吉		林 栄吉	桃井 健吾
四番	藤島	重郎	河合梅三郎		斎藤 艮八	吉岡信太郎
三番	近藤金之助		小西元三郎		佐藤 金時	白木 申三

二番	高橋鈴太郎	水沢　謙治	八十島親徳	小林　和介
舳手	下条　直幹	若杉米太郎	久保　茂樹	畠山粂太郎

第二分科競漕

	本二	本一	補二	補一
舵手	堀　富太郎	戒田　秀澄	道家登美太	平岡焉三郎
整調	辻　朋吉	赤津　仁作	太田　有二	岸　吉松
五番	大原春次郎	井上金治郎	河方　靱男	大森昌次郎
四番	金子　量太	矢野　義弓	安宅　弥吉	山村　鹿彦
三番	田中新之助	河崎善次郎	賀来　務	加藤　典雅
二番	高木　辰男	深井栄之助	岡崎久次郎	神木治三郎
舳手	工藤金三郎	原　文二郎	賀来佐太郎	小柳津邦太

第一分科競漕

	本二	本一	予科	補二
舵手	山田萬里四郎	河村　寅次	品川　健吉	加福力太郎
整調	原田芳太郎	萩原喜三郎	北条鈔次郎	鳴海　重要
五番	岩下　清朝	関　一	河田　右一	新里伊八郎
四番	近藤　千吉	守能　尚	金子精次郎	増田　愛吉
三番	石橋多喜郎	瀬島猪之丞	園田　近一	出口恒三郎
二番	林　徳太郎	三橋喜之助	福田　由松	池田　政竣
舳手	小林　正雄	山崎麟太郎	鹿野治三郎	大木信二郎

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	本城　一生	近藤秀太郎	百田礼五郎	泉　喜一
整調	波多野久松	加藤　正生	田部房次郎	永野　耕造
五番	小田柿捨次郎	柿原　定吉	木村　勝	久保井鉎之助
四番	朽木恒二郎	関口積一郎	阪本尚五郎	木村知四郎
三番	山口　増蔵	小林直太郎	青山孝太郎	飯島　和一
二番	諸井　巴	吉川　孝三	今村　直造	芹沢　伊作
舳手	加藤義之助	武田　信一	日高驥三郎	宮岡　武吉

第五回春季競漕大会

明治二十五年四月十六日

第二分科競漕

	本三	本二	本一	主計
舵手	堀　富太郎	高野　省三	柿内常二郎	勝田　耕造
整調	小平浜次郎	岡崎久次郎	加藤　典雅	小西　増吉
五番	小西元三郎	泉　勉三郎	河原林順次郎	山田市次郎
四番	工藤金三郎	和田　耕平	奥邨　弘	広瀬　実光
三番	柿原　定吉	畠山粂太郎	神木治三郎	小川　作郎
二番	柳谷巳之吉	吉岡信太郎	小柳津邦太	島　覚司
舳手	田中新之助	浮田　郷次	井上伝二郎	奥邨純之助

第一分科競漕

	本三	本一	予一
舵手	山田萬里四郎	福田　芳紀	平岡焉三郎
整調	関口積一郎	宮岡　武吉	岸　吉松
五番	辻　朋吉	永野　耕造	相生由太郎
四番	吉川　孝三	金子精次郎	菊地幹太郎
三番	岩下　清朝	岩間　保造	三谷　一二
二番	山本邦之助	山川駐七郎	池内官三郎
舳手	河合梅三郎	田島　道丸	安東　二郎

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予二
舵手	近藤秀太郎	百田礼五郎	品川　健吉	伊東祐次郎
整調	加藤　正生	木村　勝	芹沢　伊作	鳴海　重要
五番	原田芳太郎	原　文二郎	園田　近一	出口恒三郎
四番	武田　信一	矢野　義弓	北村　久義	池田　政竣
三番	近藤　千吉	井上金治郎	久保井鉎之助	増田　愛吉
二番	金子　量太	郷　隆三郎	木村知四郎	賀来　務
舳手	大原春次郎	青柳龍五郎	飯島　和一	小林　和介

第六回春季競漕大会

第七回春季競漕大会

明治二十七年四月八日

第四分科競漕

	本二	予二	予一	主計
舵手	鈴木　太郎	那波　斉治	立木　秀夫	保坂徳太郎
整調	飯野　俊一	野沢米太郎	増田寿一郎	片柳　修
五番	高橋橘太郎	高松　鉎一	大村得太郎	井上　好一
四番	白杉次郎太郎	田中慶三郎	森川　昭太	長谷川鏡次
三番	中司頼之助	阿曽　菊蔵	西元栄之助	森下金一郎
二番	野間貞次郎	松本　長蔵	児島　精一	高橋　錬逸
舳手	関　徳雄	黒沢　精次	上田　英一	宮津　起一

第三分科競漕

	本三	本二	予二	予一
舵手	北村　久義	堀内明三郎	中島久万吉	大胡　強
整調	山川駐七郎	加福力太郎	最上　国造	中村　端
五番	品川　健吉	中野　観象	力石元次郎	井上茂太郎
四番	田村啓三郎	竹田量之介	立川　隆吉	甲斐山留吉

三番	久保	茂樹	大島	隆夫	森	広蔵	内池	廉吉
二番	長野	恵太	深野	志磨	手束	謙吾	牧	三良
舳手	河田	右一	相沢	垣	有吉	明	岡田明九郎	

第二分科競漕

	本二	本一	予一	主計
舵手	伊東祐次郎	川村 桃吾	安藤兼三郎	花房 熊彦
整調	飯島 和一	中島 虎吉	原沢由太郎	川井 源八
五番	松沢藤三郎	上埜 嘉吉	西内 孚一	松尾弥太郎
四番	鹿野治三郎	榊原 真平	久野 安雄	橋本 安一
三番	川口 留吉	山村 鹿彦	安田繁三郎	小幡 三郎
二番	佐野 善作	柿沼 道助	高節 柳三	栗原又次郎
舳手	高橋 徳次	薬谷 英夫	竹谷 辰郎	青木文次郎

第一分科競漕

	本二	本一	予二
舵手	大木信次郎	柿沼 道助	野沢朱太郎
整調	小林 和介	柿内常二郎	中山 晉
五番	桃井 健吾	田中 覚司	宮崎 道三
四番	安宅 弥吉	相生由太郎	栖原 栄輔
三番	桃井 豁	井上 伝	大竹勝一郎
二番	和田 耕平	塚口慶三郎	羽田福太郎
舳手	楠目 成俊	千野 郁次	伊藤 金吾

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予二
舵手	斎藤 艮八	池田 政竣	神木治三郎	中村 仁造
整調	久保井鉎之助	志井保重要	岸 吉松	和田 喜伝
五番	芹沢 伊作	出口恒三郎	加藤 典雅	西尾 季吉
四番	園田 近一	立川 愛吉	河原林順次郎	長沼 恭爾
三番	木村知四郎	岡崎久次郎	三谷 一二	神成 季吉
二番	宮岡 武吉	吉富 璣一	菊地幹太郎	安東 二郎
舳手	永野 耕造	太田 有二	窪田 四郎	矢村 克

第八回春季競漕大会

明治二十八年四月二十七日

第三分科競漕

	本二	本一	予科
舵手	大熊篤太郎	児島正一郎	大木強太郎
整調	菊地幹太郎	大村得太郎	大坂 栄
五番	河井 浩	甲斐山留吉	鈴木慶次郎
四番	塚口慶三郎	内池 廉吉	高橋邦二郎
三番	渾太防狭三	中村 綱吉	田中俊次郎
二番	峠 延吉	高松 鉎一	黒川喜太郎
舳手	小沢欽之助	牧 三良	羽倉信太郎

第二分科競漕

	本三	本一	予科
舵手	吉富 璣一	中島久万吉	竹谷 辰郎
整調	和田 耕平	最上 国蔵	武内 和吉
五番	楠目 成俊	井上茂太郎	片山真五郎
四番	相沢 垣	安田繁三郎	中井松太郎
三番	加福力太郎	大竹勝一郎	沼田 亀三
二番	中野 観象	羽田福太郎	窪川 真澄
舳手	勅使河原欽哉	上田 英一	大村信次郎

第一分科競漕

	本二	本一	予科
舵手	柿沼 道助	那波 斉治	木下 裕
整調	柿内常次郎	栖原 栄助	田島 岩平
五番	窪田 四郎	宮崎 道三	谷村 正友
四番	中島 虎吉	矢村 克	井上 四郎
三番	上野 嘉吉	西元栄之助	山東 宗
二番	榊原 真平	手束 謙吾	水野 与敬
舳手	薬谷 英夫	伊藤 金吾	岡部喜三郎

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	伊藤祐次郎	川村 桃吾	立木 秀夫	中村 仁造
整調	武内 重要	岸 吉松	中山 晉	和田 喜伝
五番	太田 有二	三谷 一二	長沼 恭爾	立川 隆吉
四番	桃井 謙吾	川原林順次郎	西尾 季吉	久野 安雄
三番	岡崎久次郎	山村 鹿彦	原沢由太郎	西内 孚一
二番	桃井 豁	相生由太郎	神成 季吉	安藤兼三郎
舳手	小林 和介	加藤 典雅	安東 二郎	森川 照太

第九回春季競漕大会

明治二十九年四月十九日

第三分科競漕

	本二	本一	予科
舵手	大竹勝一郎	大胡 強	深尾隆太郎
整調	栖原 栄輔	飯田 庸治	矢橋 寛忠
五番	西元栄之助	古郡 良介	前川恭三郎
四番	羽田福太郎	滝本 美夫	多久 陣平
三番	上田 英一	水野 与敬	山中 盈蔵
二番	児島正一郎	吉山 京介	市川 芳雄
舳手	宮崎 道三	沼田 亀三	津田 五郎

第二分科競漕

	本三	本一	予科
舵手	柿沼 道助	竹谷 辰郎	森本啓太郎
整調	菊地幹太郎	増田寿一郎	白峯 数馬
五番	上野 嘉吉	高柳 節三	岡部喜三郎
四番	中島 虎吉	参木雄四郎	野木和一郎
三番	渾太防狭三	高橋邦二郎	本原忠太郎
二番	榊原 真平	大村信次郎	尾崎 巌
舳手	薬谷 秀夫	溝口 稲雄	天野 政吉

第一分科競漕

	本二	本一	予科
舵手	小柳津邦太	木下　裕	朽屋　勝助
整調	井上茂太郎	安藤兼三郎	中井松太郎
五番	安田繁三郎	西内　孚一	斎藤　謙
四番	大村得太郎	山東　宗	山崎　増二
三番	手束　謙吾	馬詰　次男	小松熊之助
二番	伊藤　金吾	窪川　真澄	河手　捨二
舳手	矢村　克	田中俊次郎	花房　正助

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	川村　桃吾	立木　秀夫	中村　仁造	長崎竹十郎
整調	岸　吉松	中山　晉	和田　喜伝	谷村　正友
五番	三谷　一二	長沼　恭爾	田島　岩平	山岸慶之助
四番	河森順二郎	西尾　季吉	久野　安雄	田中　算吉
三番	山村　鹿彦	原沢由太郎	森川　照太	早川　吉次
二番	相生由太郎	神成　季吉	武内　和吉	平瀬三七雄
舳手	窪田　四郎	安東　二郎	立川　隆吉	片山真五郎

第十回春季競漕大会

明治三十年四月四日

第三分科競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	原沢由太郎	和田　喜伝	深尾隆太郎	松沢三四郎
整調	宮崎　道三	増田寿一郎	野木和一郎	佐藤喜久松
五番	羽田福太郎	大坂　栄	酒井鍵之助	江川　和吉
四番	大竹勝一郎	城戸崎広三	横竹平太郎	宮本　茂実
三番	牧　三良	松永　長次	松崎昇三郎	榎　知染
二番	加賀覚太郎	原　広太郎	尾崎　巌	石丸　素一
舳手	児島正一郎	平尾　丹次	森本啓太郎	野呂　美雄

第二分科競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	児島正一郎	中村　仁造	深尾隆太郎	永井　英夫
整調	安東　二郎	武内　和吉	片山真五郎	望月　良嗣
五番	矢村　克	森川　照太	宮内　実	松浦与三松
四番	大村得太郎	飯田　庸治	福島　真吉	岩田　可盛
三番	安田繁三郎	古郡　良介	会　種次郎	則武重三郎
二番	伊藤　金吾	黒川喜太郎	小松熊之助	藤田　穏定
舳手	手束　謙吾	安藤兼三郎	河手　捨二	半田　賢作

第一分科競漕

	本二	本一	予科
舵手	竹谷　辰郎	河手　捨二	本原　忠興
整調	山東　宗	早川　吉次	多久　陳平
五番	立川　隆吉	山崎　増二	高津　芳輔
四番	滝本　美夫	吉田　市恵	佐野和一郎
三番	田中俊次郎	柳田正太郎	森下　勇馬
二番	窪川　真澄	関川徳太郎	稲生　誠一
舳手	大村信次郎	平瀬三七雄	佐々木正三

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	安東　二郎	木下　裕	長崎竹十郎	白峯　数馬
整調	中山　晉	久野　安雄	谷村　正友	南郷　三郎
五番	長沼　恭爾	馬詰　次男	斎藤　謙	大谷　英一
四番	西尾　季吉	高橋邦二郎	前川恭三郎	高島菊次郎
三番	井上茂太郎	参木雄四郎	市川　芳雄	関屋為三郎
二番	神成　季吉	溝口　稲雄	津田　五郎	飯田　一馬
舳手	原沢由太郎	田島　岩平	山岸慶之助	村田　省蔵

第十一回春季競漕大会

明治三十一年四月十日

第三分科競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	増田寿一郎	中川浅之助	浅井　義嗣	坂本　勉
整調	上田　英一	吉山　京介	半田　賢作	川添　真蔚
五番	古郡　良介	野口健太郎	望月　良朔	岡本　虎雄
四番	松永　長次	青地玄三郎	松崎昇三郎	森　卉六
三番	水野　与敬	山岸慶之助	野呂　美雄	坂本　宗蔵
二番	中村　仁造	神谷市太郎	堀口米太郎	中井長三郎
舳手	竹谷　辰郎	石渡　映三	中島　誠治	鎌瀬　貞蔵

第二分科競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	竹谷　辰郎	森川　照太	永井　英夫	伊藤　末彦
整調	武内　和吉	平瀬三七雄	佐藤喜久松	田中　一馬
五番	田中俊次郎	市川　芳雄	岩田　可盛	北代　真幸
四番	飯田　庸治	梶野　抄平	松浦　正秀	早瀬　義正
三番	安藤兼三郎	福島　真吉	榎　知染	長田　正平
二番	山東　宗	三浦　新七	山内　恕	竹内　寛
舳手	久野　安雄	丹波　義次	松沢三四郎	金子　宗市

第一分科競漕

	本二	本一	予科	外語
舵手	森本啓太郎	本原　忠興	和田　徳	石川　順也
整調	山崎　増二	佐々木正三	中村　源治	厚見　元治
五番	野木和一郎	佐野和一郎	永峰　承受	武村　元蔵
四番	宮内　実	高津　芳輔	大久保一男	宮崎　幹
三番	横竹平太郎	稲生　誠一	山中　勇	根本　一三
二番	会　種次郎	宮島明治郎	大森　兵蔵	柘植　延雄
舳手	関川徳太郎	片山真五郎	大橋　駒吉	松本　俊蔵

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	木下　裕	深尾隆太郎	白峰　数馬	江川　和吉
整調	窪川　真澄	河手　捨二	南郷　三郎	榊　精三
五番	馬詰　次男	早川　吉次	大谷　英一	上野亀太郎
四番	高洲鉄一郎	小松熊之助	高島菊次郎	中尾　晴他
三番	参木雄四郎	吉田　市恵	関屋為三郎	田尻　常雄
二番	溝口　稲雄	津田　五郎	飯田　一馬	杉浦進太郎
舳手	大村信次郎	斎藤　謙	村田　省蔵	藤田　穏定

第十二回春季競漕大会

明治三十二年四月九日

第三分科競漕

	本二	本一	予科	外語
舵手	堀口米太郎	檀竹龍三郎	片柳　台三	武久　郁雄
整調	弘田　守真	竹内　寛	滝川　寅吉	田代　光雄
五番	中島　誠治	稲生　誠一	寺田　徹一	中村　達雄
四番	高木捨次郎	向坂　均一	平田竹三郎	柘植　延雄
三番	助川　純吉	小野　彦治	遠藤　茂雄	岩間光次郎
二番	伊藤栄次郎	川島　五作	村上壮次郎	熊田　敏
舳手	後藤　貫一	金子　宗市	穴戸熊次郎	金子与三郎

第二分科競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	森川　照太	高島菊次郎	天野　正	清水貞次郎
整調	野木和一郎	飯田　一馬	杉浦進太郎	苦山　末蔵
五番	野口健太郎	村田　省蔵	岡本　虎雄	左右田喜一郎
四番	柳田正太郎	宮内　実	森　卉六	杉本　由夫
三番	福島　真吉	関川徳太郎	長田　正平	福島熊三郎
二番	酒井鍵之助	松崎昇三郎	永井　真澄	小林　隆治
舳手	丹羽　義次	松沢三四郎	堀井　廉一	中川　太一

第一分科競漕

	本三	本一	予科	外語
舵手	森本啓太郎	坂本　勉	坂本　陶一	高橋　元雄
整調	神谷市太郎	田中　一馬	樋口　一造	中島　亀彦
五番	早川　吉次	藤田　穏定	山中　勇	中村　達雄
四番	小松熊之助	早瀬　義正	蛯子　聰	小田　精吉
三番	深尾隆太郎	中尾　晴他	高田　四郎	阿閑貴二郎
二番	山崎　増二	中井長三郎	岡野　甚吉	稲垣　篤
舳手	山岸慶之助	大橋　駒吉	井上　幹造	仲　万次郎

分科選手競漕

	本三	本二	本一	外語
舵手	深尾隆太郎	浅井　義喝	江川　和吉	内藤安太郎
整調	河手　捨二	南郷　三郎	中村　源治	古賀十二郎
五番	吉田　市恵	大谷　英一	永峰　承受	武村　元蔵
四番	青地玄三郎	山内　恕	大久保一男	上村　哲三
三番	斎藤　謙	佐野和一郎	田尻　常雄	矢島　春造
二番	津田　五郎	半田　賢作	榊　精三	厚見　元治
舳手	横竹平太郎	久保　正助	北代　真幸	根本　一三

第十三回春季競漕大会

明治三十三年四月八日

第三分科競漕

	専攻	本二	本一	予科
舵手	筒井　継男	永峰　承受	中川　精吉	三山　藤二
整調	神谷市太郎	増田　恒蔵	小沢　泰一	安藤　敬三
五番	安藤兼三郎	岩田　可盛	横山　政好	加藤　武弥
四番	青地玄三郎	波佐間正一	柘植武千代	明渡　益一
三番	津田　五郎	太田　喜平	松村　大助	和田　周平
二番	三浦　新七	山崎　衛助	内野英太郎	上原　和夫
舳手	石渡　映三	金子　宗市	池辺　龍一	小山英之助

第二分科競漕

	本三	本一	予科
舵手	本原　忠興	坂本　陶一	浜崎　素
整調	浅井　義喝	磯島　省蔵	片岡　音吉
五番	佐野和一郎	中川　太一	渡辺　貫一
四番	高島菊次郎	加藤　操	田中教太郎
三番	立川　隆吉	遠藤　茂雄	所　徳次
二番	松崎昇三郎	竹田　嘉助	安富　喜一
舳手	多久　堯純	山尾　精一	河橋吉次郎

第一分科競漕

	本二	本一	予科
舵手	天野　正	清水貞次郎	高木　舜三
整調	森　卉六	岡野　甚吉	石山　文雄
五番	関川徳太郎	笠原　種治	外山　泰三
四番	竹内　寛	蛯子　聰	中村晉次郎
三番	榎　知染	福島熊三郎	荒井　健治
二番	坂本　勉	大森　兵蔵	小川　続次
舳手	松沢三四郎	穴戸熊次郎	三輪　勉一

分科選手競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	谷村　正友	田中　一馬	広谷　末蔵	寺田　徹一
整調	南郷　三郎	中村　源治	井上　幹造	樋口　一造
五番	大谷　英一	北代　真幸	山中　勇	外山　泰三
四番	山内　恕	宮島明治郎	藤本恕一郎	井上熊三郎
三番	渡辺　与七	田尻　常雄	高田　四郎	辻　琢磨
二番	飯田　一馬	杉浦進太郎	村上壮次郎	滝川　寅吉
舳手	村田　省三	藤田　穏定	左右田喜一郎	塩田　重三

第十四回春季競漕大会

明治三十四年四月十四日

第三分科競漕

	本三	本二	本一	予科
舵手	永峰 承受	中川 精吉	高田 久	内田 信也
整調	榊 精三	岡野 甚吉	伊藤 董	島 金之助
五番	岡本 虎雄	横山 政好	三由 藤二	斎藤 浩介
四番	森 卉六	加藤 操	加古 政蔵	篠本 鼎
三番	大橋 駒吉	湯浅 亮	飛島貞太郎	福島喜三次
二番	増田 恒蔵	三枝 二郎	和田 英一	阿部重兵衛
舳手	金子 宗市	柘植武千代	高山 繁治	洲崎 房七

第二分科競漕

	専攻	本二	本一	予科
舵手	浅井 義嗣	清水貞次郎	中島専之助	秋山兼太郎
整調	神谷市太郎	小沢 泰一	安藤 敬三	磯部 忠亮
五番	渡辺 与七	山尾 精一	笠原 種次	坂本 庫輔
四番	青地玄三郎	竹内 寛	井上熊三郎	新実太一郎
三番	安藤兼三郎	杉本 由夫	福島熊三郎	津秋 貞男
二番	三浦 新七	竹田 嘉助	森川 一甫	金子常太郎
舳手	石渡 映三	中川 太一	小山英之助	沢田 稲衛

第一分科競漕

	本一	予科
舵手	山崎 馨一	星野準一郎
整調	石山 文雄	伊知地虎彦
五番	浜崎 素	加藤 季彦
四番	田中教太郎	玉置亀次郎
三番	塩田 重三	塩田 敏三
二番	中村晉二郎	田中虎之輔
舳手	三輪 勉一	田中 尚武

分科選手競漕

	本三	本二	本一
舵手	田中 一馬	山尾 精一	高木 舜三
整調	中村 源治	井上 幹造	樋口 一造
五番	北代 真幸	池辺 龍一	荒井 健治
四番	宮島明治郎	藤本恕一郎	外山 泰三
三番	田尻 常雄	高田 四郎	辻 琢麿
二番	大久保一男	蛯子 聰	滝川 寅吉
舳手	坂本 勉	藤田 穏定	和田 周平

第十五回春季競漕大会

明治三十五年四月六日

第三選手競漕 （第一着 S組）

	H	C	S
舵手	五条 道久	高山 繁治	中島専之助
整調	上原 一朗	浜崎 素	島 金之助
五番	渡辺 襄二	品川 静	田崎 義介
四番	松本 和助	宮崎 万三	玉置 弥造
三番	倉田初四郎	小坂 順造	秋月 国臣
二番	古賀 貞一	加古 政蔵	秋庭 義清
舳手	関 孝治	津秋 貞男	斎藤 外吉

第二選手競漕 （第一着 S組）

	H	C	S
舵手	汾陽光次郎	内田 信也	内村 三樹
整調	坂井 義夫	阿部重兵衛	田中虎之輔
五番	塩田 敏三	沢田 稲衛	観世 元継
四番	牧之瀬行秀	木村平太郎	生野 鼎
三番	足立 正	笠原 種次	野崎 誠一
二番	山本 純吉	安藤 敬三	森川 一甫
舳手	首藤 謙次	中村 乾二	三輪 勉一

第一選手競漕 （第一着 S組）

	H	C	S
舵手	高木 舜三	山崎 馨一	田中 尚武
整調	岩下 家一	加藤 季彦	井上 幹造
五番	菊地 啓麿	和田 周平	荒井 健治
四番	曽祢 寛治	外山 泰三	牟田 亮吉
三番	小泉哲一郎	玉置亀次郎	中須 養三
二番	田中教太郎	加藤弥兵衛	滝川 寅吉
舳手	伊知地虎彦	斎藤 浩介	上野亀太郎

第十六回春季競漕大会

明治三十六年四月五日

第三選手競漕 （第一着 S組）

	H	C	S
舵手	服部 正	内田 信也	熊田 悌
整調	井上 信	中村晉次郎	島 金之助
五番	荻原 幾熊	浜崎 素	山崎 秀直
四番	岡田 博	宮崎 万三	森川 一甫
三番	山口亀之助	宮崎忠次郎	太田 利一
二番	井上源次郎	阿部重兵衛	宮入 房夫
舳手	古賀 貞一	斎藤 浩介	津守 豊治

London Cup Race 第二選手競漕 （第一着 S組）

	H	C	S
舵手	田中教太郎	波多野義男	原 直節
整調	伊知地虎彦	安藤 敬三	広谷 末蔵
五番	関 孝治	和田 周平	荒井 健治
四番	曽禰 寛治	新見太一郎	生野 鼎
三番	室谷藤太郎	笠原 種次	三輪 勉一
二番	山本 純三	志村清右衛門	上野 憲一
舳手	塩田 敏三	坂本 庫輔	小山英之助

第一選手競漕（第一着　C組）

	H	C	S
舵手	高木　舜三	星野準一郎	田中　尚武
整調	岩下　家一	加藤　季彦	田中虎之輔
五番	菊地　啓麿	玉置亀次郎	中須　養三
四番	平野　武治	加藤弥兵衛	牟田　亮吉
三番	小泉哲一郎	田村　孝次	沼野　清之
二番	坂井　義夫	外山　泰三	杉浦　真作
舳手	松葉谷良太郎	小坂　順造	井上　幹造

第十七回春季競漕大会

明治三十七年四月三日

第三選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	古賀　貞一	阿部　嘉八	原　直節
整調	安藤　博	志村清左衛門	生野　鼎
五番	佐藤　順	宮崎忠次郎	林　好茂
四番	平野　武治	武口　守三	堤　芳雄
三番	宮本　光三	石田　礼助	斎藤　明威
二番	福地　慶吉	藤井万治郎	県　豎
舳手	横山　兼吉	市場八百作	下田　滋

第二選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	世古小次郎	波多野義男	菅　礼之助
整調	関　孝治	外山　泰三	島　金之助
五番	四条七十郎	和田　周平	森川　一甫
四番	田村　羊三	住田　房治	上野　憲一
三番	塩田　敏三	矢島　富造	藤岡忠太郎
二番	大塚与四郎	河津　可二	北村　敏
舳手	松葉谷良太郎	木下照太郎	津守　豊次

第一選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	伊地知虎彦	星野準一郎	荒井　健治
整調	岩下　家一	加藤　季彦	田中虎之輔
五番	小泉哲一郎	玉置亀次郎	中須　養三
四番	坂井　義夫	加藤弥兵衛	牟田　亮吉
三番	室谷藤太郎	赤崎　盛助	野崎　誠一
二番	菊地　啓麿	森　半之助	宮入　房夫
舳手	山口亀次郎	田村　孝次	川崎　肇

本年一月卅一日新固定席艇進水式挙行セラレ選手競漕用艇トナス

第十八回春季競漕大会

明治三十八年四月二日

第三選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	飯田　尚武	平田　忠雄	宮崎　敬蔵
整調	井上　信	藤井万次郎	斎藤　明威
五番	宇治橋正則	木下照太郎	県　豎
四番	渋谷　南陽	中古賀晴太	堤　芳雄
三番	富田　寛次	林　政治	宗　正次
二番	戸田　清	熊生　栄	田辺　真男
舳手	松崎　寿	島田　宏	富田　康

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	神田源七郎	市場八百作	山崎　秀直
整調	関　孝治	志村清右衛門	宮入　房夫
五番	岡部常太郎	石田　礼助	渋谷　千里
四番	福地　慶吉	藤山　文三	宮部　匡一
三番	大西外一郎	原　恂吉	乾　吉松
二番	原島　茂	武口　守三	森川　一甫
舳手	妹尾　勝蔵	清水　太郎	門倉　利平

第一選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	岩下　家一	波多野義男	秋庭　義清
整調	菊地　啓麿	加藤　季彦	津守　豊治
五番	田村　羊三	玉置亀次郎	藤田　義信
四番	田中重太郎	永尾甚十郎	川勝　庸吉
三番	小泉哲一郎	赤崎　盛助	荒木　直躬
二番	坂井　義夫	森　半之助	斎藤鉄次郎
舳手	山口亀次郎	田村　孝次	岩倉　具光

本年三月墨堤ニ新艇庫成リ同月十日入艇式挙行セラル

第十九回春季競漕大会

明治三十九年四月三日

第三選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	三宅　昌新	藤田　秀雄	田辺　真男
整調	小栗　良三	福島　蒸二	春田　茂躬
五番	富田　寛治	友部　鼎五	柏倉吉三郎
四番	渋谷　南陽	宇多　良一	石崎　良行
三番	大野　敬佶	橋爪準一郎	舟木　重義
二番	平野　武次	塙　雄太郎	坂本　鉄也
舳手	田中金三郎	竹原　伝	目黒栄太郎

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	神田源七郎	原　耕三	渡辺　重吉
整調	大塚与四郎	藤井万次郎	津守　豊治
五番	南部八万人	平田　忠雄	渋谷　千里
四番	戸田　清	佐藤徳之助	横井　秀吉
三番	田村　羊三	矢野　友顕	阿部　俊三
二番	原島　茂	森　半之助	宮入　房夫
舳手	松村松次郎	木下照太郎	門倉　利平

第一選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	関　孝治	波多野義男	鈴木　元
整調	菊地　啓麿	田村　孝次	上野　憲一
五番	坂井　義夫	原　恂吉	岩倉　具光
四番	田中重太郎	永尾甚十郎	斎藤鉄次郎
三番	岡部常太郎	赤崎　盛助	藤田　義信
二番	福地　慶吉	藤山　文三	北村　敏
舳手	山口亀次郎	清水　太郎	藤岡忠太郎

第二十回春季競漕大会

明治四十年四月三日

第三選手競漕　（第一着　C組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	岡田　千里	上村　琢麿	赤田　雄治
整調	小栗　良三	川添　清男	坂本　鉄也
五番	小松正之助	塙　雄太郎	柏倉吉三郎
四番	大塚　常吉	森　半之助	橋本　源太
三番	西巻　安一	阿部吟次郎	柏木　粂作
二番	原島　茂	山代　泰	山口　謹吾
舳手	竹岡　菊三	西川　正伍	長谷川佳平

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	服部鎭三郎	志村清右衛門	徳野　隆祐
整調	大塚与四郎	平田　忠雄	春田　茂躬
五番	山口亀次郎	清水　太郎	舟木　重義
四番	加藤　新一	麻生政一郎	村井　俊二
三番	坂田　満作	小須田常三郎	山本　武夫
二番	石井　忠吉	宇多　良一	田代　香苗
舳手	大野　敬信	佐波　修	宗　正次

第一選手競漕　（第一着　H組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	神田源七郎	木下照太郎	渡辺　重吉
整調	菊地　啓麿	福島　蒸二	上野　憲一
五番	岡部常太郎	石田　礼助	岩倉　具光
四番	田中重太郎	赤崎　盛助	石崎　良行
三番	柳原　民治	矢野　友顕	乾　吉松
二番	木村　四郎	佐藤徳之助	横井　秀吉
舳手	富田　寛治	友部　鼎五	目黒栄太郎

噫明治四十年十二月三十日

S組第二選手旧艇朱雀号遭難

舵手　徳野　隆祐　　出　発　　十二月二十五日
整調　田代　香苗　第一日（二十五日）艇庫——柴又
五番　小寺　直吉　第二日（二十六日）柴又——木下
四番　村井　俊二　第三日（二十七日）木下——笹川
三番　矢ケ部卯一　第四日（二十八日）笹川——銚子（二泊）
二番　橋本　源太　三十日　銚子出発　鹿島郡若松村
舳手　柏木　粂作　太田ノ鼻ニテ二十分休憩正十一時半出発

第二十一回春季競漕大会

明治四十一年四月三日

第三選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	山崎　雄二	上村　琢麿	舟木　重義
整調	倉橋　一雄	佐波　修	坂本　鉄也
五番	岡　忠尚	西沢善三郎	長谷川佳平
四番	和田　節三	麻生政一郎	小林　百代
三番	金井　孔重	白根　治郎	元吉　光大
二番	木村　四郎	北村　民也	新井藤次郎
舳手	福地　慶吉	鈴木　勇	山口　謹吾

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	小栗　良三	増田　力松	徳野　隆祐
整調	大塚　常吉	川添　清男	田代　香苗
五番	富田　寛治	山代　泰	矢ケ部卯一
四番	青木　太郎	池内　又一	中村　福
三番	浜田　晶三	小須田常三郎	南　節
二番	加藤　新一	村上　是介	橋本　源太
舳手	加藤　徳雄	大竹　栄	小寺　直吉

第一選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	菊地　啓麿	原　耕三	渡辺　重吉
整調	大塚与四郎	福島　蒸二	春田　茂躬
五番	坂田　満作	清水　太郎	岩倉　具光
四番	乗本　万吉	三枝　広作	石崎　良行
三番	柳原　民治	矢野　友顕	山本　武夫
二番	逸見　信躬	阿部吟次郎	横井　秀吉
舳手	石井　忠吉	友部　鼎五	目黒栄太郎

第二十二回春季競漕大会

明治四十二年四月三日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	岡田　千里	山脇　六郎	川喜多忠義
整調	三枝威之介	北村　民也	岩村　卯吉
五番	亀井　貞義	鈴木　勇治	山口　謹吾
四番	加藤儀三郎	佐野　英二	白石　増蔵
三番	海福　秀雄	小林　俊一	吉岡米四郎
二番	寺田　宗一	山田　政次	真田　孝太
舳手	永島　保治	水野　達夫	興津　三郎

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　H組　用艇フィックス旧艇

	H	C	S
舵手	西巻進四郎	西沢善三郎	徳野　隆祐
整調	倉橋　一男	佐波　修	矢ケ部卯一
五番	富田　寛治	小山　増三	橋本　源太
四番	乗本　万吉	荒木　良一	中村　富強
三番	加藤　徳雄	増森　万治	小寺　直吉
二番	速水　量平	茂木　猛平	増本芳太郎
舳手	矢野　正雄	大川　恂	佐脇宗次郎

第一選手競漕　（第一着　C組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	山崎　雄二	塙　雄太郎	渡辺　重吉
整調	大塚　常吉	福島　蒸二	新井藤次郎
五番	坂田　万作	村上　是介	元吉　光大
四番	柳原　民治	阿部吟次郎	石崎　良行
三番	金井　孔重	矢野　友顕	小林　百代
二番	逸見　信躬	池内　又一	横井　秀吉
舳手	浜田　昌三	山代　泰	南　節

明治四十三年一月二十三日ヨール艇四隻新造成リ進水式ヲ挙行ス

第二十三回春季競漕大会

明治四十三年四月三日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	犬塚　三郎	山脇　六郎	川喜多忠義
整調	寺田　宗一	宇野良之介	増本芳太郎
五番	縄田　事逸	大竹　謙	佐脇宗次郎
四番	上杉　直松	鳥飼　正安	小畠　常吉
三番	中村善之助	大曲　廉介	平井卯之助
二番	永田　栄蔵	加藤　登	杉村虎四郎
舳手	汾陽　泰造	水野　達夫	金矢　光一

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　H組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	一ノ宮余五郎	北村　民也	田代　香苗
整調	三枝威之介	鈴木　勇治	新井藤次郎
五番	永島　保治	山田　政次	山口　謹吾
四番	乗本　万吉	小島　忠一	関　徳四郎
三番	横沢　倖	大川　恂	吉岡米四郎
二番	福井　亮吉	佐野　英二	白石　増蔵
舳手	北　麟蔵	加名生良信	加藤　倹三

第一選手競漕　（第一着　C組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	山崎　雄二	西沢善三郎	渡辺　重吉
整調	大塚　常吉	佐波　修	矢ケ部卯一
五番	浜田　昌三	村上　是介	橋本　源太
四番	加藤　徳雄	池内　又一	中村　富強
三番	海福　秀夫	増森　万治	元吉　光大
二番	田島千代三	荒木　良一	真田　幸太
舳手	加藤儀三郎	山代　泰	南　節

第二十四回春季競漕大会

明治四十四年四月二日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	長田　実	竹内徳三郎	斎藤　常吉
整調	三枝威之介	加藤　登	杉村虎四郎
五番	中藪　貢	小林　龍也	加藤　倹三
四番	貞弘莞三郎	村山　富雄	平林　占守
三番	上杉　直松	千葉庄二郎	鈴木周三郎
二番	綾部定太郎	宮崎　真一	中村　久治
舳手	黒子久五郎	大曲　廉助	池田　昌夫

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　H組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	一ノ宮余五郎	小島　藤吉	岩村　卯吉
整調	倉橋　一雄	鈴木　勇治	佐脇宗次郎
五番	亀井　貞義	佐野　英二	小畠　常吉
四番	鈴木富二郎	小島　忠一	高橋　泰三
三番	横沢　倖	針生寅次郎	空閑良三郎
二番	汾陽　泰造	岩城　良三	川村　喜一
舳手	北　麟蔵	加名生良信	越田市太郎

第一選手競漕　（第一着　C組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	寺田　宗一	小高　親	川喜多忠義
整調	浜田　昌三	佐波　修	増本芳太郎
五番	田島千代三	村上　是介	元吉　光大
四番	加藤儀三郎	池内　又一	関　徳四郎

三番	海福　秀夫	増森　万治	吉岡米四郎
二番	加藤　徳雄	荒木　良一	真田　幸太
舳手	福井　亮吉	山田　政次	白石　増蔵

第二十五回春季競漕大会

明治四十五年四月三日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	長田　実	鈴木　治郎	原　正三
整調	湯地　信雄	木村　龍也	中村　久治
五番	沢本　嘉春	横井弥之助	東野　源浩
四番	前田　直雄	大下　真吉	平林　占守
三番	伊藤　和夫	奥野　勁	蔀　徳次
二番	小平　乙蔵	丸田駒次郎	中村　楠男
舳手	河原　英二	熊田　磊三	北村正太郎

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　H組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	福田　清三	小島　藤吉	斎藤　常吉
整調	汾陽　泰造	加藤　登	佐脇宗次郎
五番	北　麟蔵	大曲　廉助	鈴木周三郎
四番	貞弘莞三郎	村山　礼治	高橋　泰三
三番	河原井　淳	大幡　久一	市毛　五郎
二番	上杉　直松	伊藤　孝	吉田米次郎
舳手	中薮　貢	黒沢　寛	遠藤　博明

第一選手競漕　（第一着　H組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	一ノ宮余五郎	小高　親	杉村虎四郎
整調	倉橋　一雄	池内　又一	増本芳太郎
五番	小倉千代三	増森　万治	真田　孝太
四番	横沢　倖	針生寅次郎	空閑良三郎
三番	福井　亮吉	千葉庄次郎	元泉　浩
二番	鈴木富二郎	小島　忠一	小畠　常吉
舳手	加藤儀三郎	山田　政次	白石　増蔵

大正二年一月十五日新ヨール艇成リ進水式ヲ挙行ス

第二十六回春季競漕大会

大正二年四月三日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　C組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	長田　実	高橋政治郎	鏑木　孝雄
整調	河原　英二	山本芳太郎	北村正太郎
五番	沢本　嘉春	鷹野峰治郎	田中　栄
四番	松尾伊三郎	富沢　馨	渡辺　守雄
三番	上野　十蔵	中村　清平	児玉　恭助
二番	渡辺　静	山本　喜一	織内　経緯
舳手	重盛米次郎	神保　朔造	山田　好一

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　H組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	福田　清三	熊田　磊三	原　正三
整調	中薮　貢	伊藤　孝	吉田米次郎
五番	貞弘莞三郎	播井弥之助	遠藤　博明
四番	大内　鐄一	黒崎　三市	伊藤　寛一
三番	河原井　淳	平尾　九一	宮本　正策
二番	吉田　義夫	本田　正吾	林　竹重
舳手	小平　乙蔵	黒沢　寛	内山　直三

第一選手競漕　（第一着　C組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	一ノ宮余五郎	小島　藤吉	斎藤　常吉
整調	汾陽　泰造	木村　龍也	杉村虎四郎
五番	小倉千代三	針生寅次郎	市毛　五郎
四番	横沢　倖	大下　真吉	中川喜一郎
三番	福井　亮吉	村山　礼治	元泉　浩
二番	鈴木富次郎	奥野　勁	平林　占守
舳手	北　麟蔵	大曲　廉助	鈴木周三郎

第二十七回春季競漕大会

大正三年四月三日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　C組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	岸本　久雄	薮　秀夫	鈴木　利
整調	湯地　信雄	本田　有道	中村　久治
五番	古山治太郎	山田多喜男	井上　亀吉
四番	関　進一郎	小林　茂	渡部　森蔵
三番	梶沼三之助	安田　信吾	小泉郁喜雄
二番	今村　義人	南　俊一	土田和久治
舳手	今村嘉七郎	田村栄之助	中井田静夫

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	富田正之助	高橋政治郎	鏑木　孝雄
整調	河原　英二	鷹野峰治郎	吉田米次郎
五番	沢本　嘉春	山本芳太郎	北村正太郎
四番	上野　十蔵	今泉　武夫	伊藤　寛一
三番	河原井　淳	中村　清平	今井　三吉
二番	村上　薫	奥野　勁	関　徳四郎
舳手	平塚　昌治	村瀬　満	内山　直三

第一選手競漕　（第一着　S組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	福田　清三	小島　藤吉	杉村虎四郎
整調	汾陽　泰造	木村　龍也	平林　占守
五番	重盛米次郎	針生寅次郎	市毛　五郎

四番	前田　直雄	富沢　馨	中川喜一郎
三番	松尾伊三郎	村山　礼治	児玉　恭助
二番	大内　鎭一	伊藤　孝	宮本　正策
舳手	小平　乙蔵	黒沢　寛	元泉　浩

第二十八回春季競漕大会

大正四年四月三日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　H組）用艇旧ヨール艇　漕程千百メートル

	H	C	S
舵手	大内　鎭一	岩城　之剛	片岡輝代雄
整調	貴島　休蔵	東屋　正平	鈴木　利
五番	伊藤　和夫	笹谷万次郎	山田　三郎
四番	吉田　義夫	金子　正吉	松井　俊二
三番	梶沼三之助	三盃一太郎	宮崎　清
二番	藤垣　佶	飯野　厚	宇野　碩夫
舳手	渡辺　寿郎	辻　鈔吉	茅野　孝三

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	岸本　久雄	本田　有道	立川　巌介
整調	山本助太郎	山本　喜一	土田和久治
五番	木村　実	山田多喜男	深海　勝男
四番	大森　芳夫	川奈　良雄	滝川　潤三
三番	堤　高温	小林　茂	辻川　真一
二番	及川　清資	山路精一郎	南里　英俊
舳手	高石　慎	平松　録治	奥野　梅作

第一選手競漕　（第一着　C組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	重盛米治郎	高橋政治郎	鈴木周三郎
整調	河原　英二	木村　龍也	中川喜一郎
五番	河原井　淳	伊藤　孝	児玉　恭助
四番	宮田国次郎	富沢　馨	宮本　正策
三番	上野　十蔵	村山　礼治	今井　三吉
二番	古山治太郎	鷹野峰治郎	伊藤　寛一
舳手	平塚　昌治	平瀬　光夫	右近　久吉

第二十九回秋季競漕大会

大正四年十一月十五日

従来競漕大会ハ芳春ノ佳辰ヲ期シテ行ハレ、秋季ニハ単ニ小会ヲ行フニ過ギザリシガ本年ヨリ学年暦変更シ、四月始業トナリシタメ、秋季レースヲ以テ大会トナスコトト決定セリ、即チ秋季大会ハ之ヲ以テ嚆矢トナス。

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	土井　通次	加野吉次郎	堀越　健吉
整調	太刀川浩一郎	海辺誠次郎	塚部　克二
五番	梶山　増吉	溝淵　清深	深海　勝男
四番	塩川豊次郎	臼井　文彦	宇野　碩夫
三番	荻野　弘吉	太田　保夫	相馬　忠雄
二番	成島　武八	松山　慶道	服部　謙
舳手	二宮金一郎	三宅徳三郎	山田　三郎

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	仙波　二郎	山本　喜一	片岡輝代雄
整調	岸本　久雄	本田　有道	南里　英俊
五番	平塚　昌次	小林　茂	奥野　梅作
四番	及川　清資	金子　正吾	岩田彦二郎
三番	梶沼三之助	辻　鈔吉	辻川　真一
二番	藤垣　佶	今泉　武夫	滝川　潤一
舳手	川崎貞之助	笹谷万次郎	宮崎　清

第一選手競漕　（第一着　S組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	重盛米次郎	山田多喜男	立川　巌助
整調	古山治太郎	平瀬　光夫	土田和久治
五番	上野　十蔵	三盃一太郎	児玉　恭助
四番	宮田国次郎	川奈　好雄	伊藤　寛一
三番	高石　慎	宮沢　馨	今井　三吉
二番	石山武二郎	山路精一郎	宮本　正策
舳手	辻　穣	平松　録治	右近　久吉

大正五年春季小会

五月二十八日

此日艇庫改築落成式ヲ挙グ

第三選手競漕　（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	梅津　勝夫	藤井　四郎	田中　良市
整調	成島　武八	沈　時広	森川常次郎
五番	石黒　捷平	八島　栄二	水沢嘉一郎
四番	前田　保男	香山　一男	田尻　愛義
三番	中村　武	田辺藤一郎	村木　市平
二番	山県　明	林　信	梅北　末初
舳手	村田　憲吉	佐土井賀茂	大須賀　実

第二選手競漕　（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	長田　長	小野　光次	山田　三郎
整調	石山武次郎	海辺誠次郎	塚部　克二
五番	梶沼三之助	太田　保夫	川瀬　雅男
四番	久保　三蔵	金子　正吾	伊藤　旗吉
三番	荻野　弘吉	臼井　文彦	山崎　善次
二番	塩川豊次郎	飯野　厚	松下曽登知

舳手	二宮金一郎	溝淵　清深	深海　勝男

第一選手競漕（第一着　C組）用艇新ヨール艇

舵手	岸本　久雄	加野吉次郎	長岡　　孝
整調	平塚　昌治	村山　礼治	南里　英俊
五番	髙石　　慎	三盃一太郎	辻川　真一
四番	宮田国次郎	川奈　好雄	服部　　謙
三番	大森　芳夫	辻　　鈔吉	石近　久吉
二番	藤垣　　佶	山路精一郎	宇野　碩夫
舳手	辻　　譲	平松　録治	奥野　梅作

第三十回秋季競漕大会

大正五年十一月五日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	梅津　勝夫	藤井　四郎	田中　良市
整調	加藤　秀雄	八島　栄三	西村三次郎
五番	中村　　武	田辺藤一郎	水沢嘉一郎
四番	永田　計介	早瀬　友造	大須賀　実
三番	金　　鐘遠	香月　英一	村木　市平
二番	遠藤亀三郎	中島豊次郎	森川常三郎
舳手	月原　修一	三宅恒太郎	占部　正武

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	長田　　長	小野　光次	片岡輝代雄
整調	石山武二郎	海辺誠次郎	塚部　克二
五番	堤　　高温	太田　保夫	川瀬　雅男
四番	塩川豊次郎	金子　正吾	岩田彦次郎
三番	二宮金一郎	香山　一男	滝川　潤三
二番	前田　保男	松山　慶道	宇野　碩夫
舳手	太刀川浩一郎	溝淵　清深	黒田　　実

第一選手競漕（第一着　C組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	岸本　久雄	加野吉次郎	長岡　　孝
整調	平塚　昌治	村山　礼治	南里　英俊
五番	梶沼三之助	三盃一太郎	深海　勝男
四番	宮田国次郎	川奈　好雄	服部　　謙
三番	大森　芳夫	辻　　鈔吉	右近　久吉
二番	藤垣　　佶	山路精一郎	奥野　梅作
舳手	辻　　馥	平松　録治	辻川　真一

大正六年春季小会

五月二十六日

第三選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	林　　謙輔	君塚茂太郎	秋山　誠一
整調	葛田　庄八	奥平　　明	田尻　愛義
五番	村田　憲吉	鳥居繁太郎	弓削　　靖
四番	臼杵　常次	福田　茂雄	梅北　末初
三番	竹内　善次	森　米次郎	山本令一郎
二番	木全　秀雄	糸園　朔市	鈴木　信治
舳手	早川治兵衛	杉内　芳威	駒崎　俊郎

第二選手競漕（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	石黒　捷平	藤井　四郎	田中　良市
整調	前田　保男	八島　栄二	水沢嘉一郎
五番	太刀川浩一郎	沈　　時広	黒田　　実
四番	金　鐘　遠	香山　一男	垣内広次郎
三番	中村　　武	香月　英一	森　茂二郎
二番	髙石　　慎	早瀬　友造	森川常三郎
舳手	大宮　美晴	佐土　井栄	岩田　義一

第一選手競漕（第一着　S組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	土居　通次	小野　光次	長岡　　孝
整調	石山武二郎	平松　録治	滝川　潤三
五番	辻　　譲	三盃一太郎	村木　市平
四番	宮田国次郎	川奈　好雄	服部　　謙
三番	大森　芳夫	辻　　鈔吉	大橋　孝造
二番	塩川豊次郎	山路精一郎	大須賀　実
舳手	二宮金一郎	田辺藤一郎	浅賀　　鏡

第三十一回秋季競漕大会

大正六年十月三十一日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　C組）S組オミット　用艇フィックス新艇　漕程千百メートル

	H	C	S
舵手	林　　謙輔	君塚茂太郎	田中　良市
整調	葛岡　庄八	太田　保夫	鈴木　信治
五番	南　　通次	溝淵　清深	弓削　　靖
四番	金　　鐘遠	飯野　　厚	山本令一郎
三番	荻野　弘吉	松山　慶道	岸野　彰一
二番	木全　秀雄	福田　茂雄	梅北　末初
舳手	村田　憲吉	糸園　朔郎	駒崎　俊郎

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	加藤　秀雄	藤井　四郎	水沢嘉一郎
整調	前田　保男	八島　栄二	塚部　克二
五番	太刀川浩一郎	沈　時広	黒田　実
四番	竹内　善二	早瀬　友造	柿内広次郎
三番	中村　武	田辺藤一郎	岩田　義一
二番	大宮　美晴	本田　為雄	森川常三郎
舳手	永田　計介	森　米次郎	鹿田　信夫

第一選手競漕（第一着　C組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	土居　通次	小野　光次	長岡　孝
整調	石山武次郎	平松　録治	滝川　潤三
五番	辻　穣	三盃一太郎	村木　市平
四番	宮田国次郎	川奈　好雄	森　茂二郎
三番	大森　芳夫	香月　英一	大橋　季造
二番	塩川豊次郎	山路精一郎	服部　謙
舳手	二宮金一郎	辻　鈔吉	大須賀　実

大正六年春、新ヨール艇四隻建造成り、又三社（三井、三菱、郵船）ヨリ、フィックス艇三隻ノ寄贈ヲ受ク、四月二十二日、以上七隻ノ進水式ヲ挙グ。

大正七年春季小会

五月十九日

第三選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	大輪英一郎	笠原　勇太	高畠　六雄
整調	村田　憲吉	糸園　朔市	大倉　元
五番	高橋　義胤	松井　計郎	川瀬　雅男
四番	竹内　善次	大槻　秀夫	占部　正武
三番	金　鐘遠	井上　亀三	田辺慎一郎
二番	木全　秀雄	田中　茂	田中　厳
舳手	天野憲治郎	大越　茂文	神立　郁良

第二選手競漕（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	加藤　修	君塚茂太郎	鈴木　信治
整調	葛岡　庄八	山川　晟	大須賀　実
五番	南　通次	山崎　尚夫	深海　勝男
四番	愛波　剛介	多護山鹿吉	宮下
三番	平井　利一	近藤復三郎	渡辺　幹
二番	大宮　美晴	尾崎精三郎	山本令一郎
舳手	島村　峯雄	村田　知章	岸野　彰一

第一選手競漕（第一着　S組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	林　謙輔	藤井　四郎	水沢嘉一郎
整調	辻　譲	山路精一郎	服部　謙
五番	大森　芳夫	田辺藤一郎	大橋　孝造
四番	前田　保男	香山　一男	森　茂二郎
三番	二宮金一郎	森　米次郎	村木　市平
二番	塩川豊次郎	島井繁太郎	浅賀　鏡
舳手	永田　計介	沈　時広	鹿田　信夫

第三十二回秋季競漕大会

大正七年十月三十日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	大輪英一郎	糸園　朔郎	高畠　六雄
整調	村田　憲吉	浜田　良平	大倉　元
五番	高橋　義胤	安東　武三	川瀬　雅雄
四番	内田　量平	大下禎五郎	占部　正武
三番	竹内　善二	臼杵　春水	浅賀　鏡
二番	藤田　茂	小倉　金	田中　岩夫
舳手	川北　俊一	井上　亀三	神田　郁良

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	加藤　修	尾崎清之助	鈴木　信治
整調	葛岡　庄八	八島　栄二	岩田彦三郎
五番	南　通次	鳥居綿太郎	黒田　実
四番	愛波　剛介	早瀬　友造	垣内広三郎
三番	島村　宗雄	名護山鹿吉	本多　厚
二番	松井　彰三	山崎　尚夫	田辺　慎一
舳手	天野賢次郎	村田　知章	茶屋　順次

第一選手競漕（第一着　C組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	手葉　長	藤井　四郎	水沢嘉一郎
整調	大森　芳夫	山路精一郎	服部　謙
五番	二宮金一郎	田辺藤一郎	大橋　孝造
四番	塩川豊次郎	森　米次郎	森茂　二郎
三番	金　鐘遠	香月　英一	村木　市平
二番	前田　保勇	香山　一男	深海　勝男
舳手	永田　計介	沈　時広	鹿田　信夫

大正八年春季小会

五月十八日

第三選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	南　通次	桐谷千代貞	藤原　猛
整調	村瀬　良平	湯沢　興宗	玉家　義雄
五番	中村　肇	福島　修一	水野　新二
四番	鷺島　富造	藤瀬英二郎	沓沢武三郎
三番	佐藤　孝次	稲田　龍一	岸野　彰一
二番	松井　彭三	松田　五郎	橘　鴻石
舳手	天野堅次郎	鈴木　勘三	江藤　清実

第二選手競漕（第一着　H組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	寺井　俊彦	糸園　朔郎	大倉　元
整調	葛岡　庄八	早瀬　友造	大須賀　実
五番	高橋　義胤	鳥居繁太郎	神立　郁良
四番	藤田　茂	香月　保	野田　憲策
三番	谷田　静夫	山本麟太郎	小野沢　潤
二番	渡辺秀四郎	福田　茂雄	田中　岩雄
舳手	川北　俊一	井上　亀三	高橋　保幸

第一選手競漕（第一着　C組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	加藤　修	君塚茂太郎	鈴木　信治
整調	大森　芳夫	山崎　尚夫	服部　謙
五番	永田　計介	香月　英一	大橋　孝造
四番	島村　宗雄	森　米次郎	垣内広次郎
三番	金　鐘遠	臼杵　春水	田中　信雄
二番	内田　量平	大下禎五郎	森　茂次郎
舳手	愛波　剛介	浜田　良平	本多　厚

第三十三回秋季競漕大会

大正八年十月三十一日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	宮本　繁	桐谷千代貞	秋山　誠一
整調	村瀬　良平	稲田　龍一	鈴木　信治
五番	臼杵　常次	中村　徳寿	浅賀　鏡
四番	島村　宗雄	平田　瑞穂	小野崎通道
三番	谷田　静夫	宮崎　実	江藤　清実
二番	横田　豊一	中尾　義彦	伊藤　静夫
舳手	渡辺　秀雄	渡部　久吉	加納　丑郎

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　C組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	寺井　俊彦	村田　知章	大須賀　実
整調	葛岡　庄八	田辺藤一郎	神立　郁良
五番	川北　俊一	井上　亀造	本多　厚
四番	鷺島　富造	藤瀬英二郎	高橋　保幸
三番	中村　肇	和賀井　泰	小野沢　潤
二番	藤田　茂	香月　保	柿内広二郎
舳手	佐藤　孝次	松田庄一郎	水野　新二

第一選手競漕（第一着　C組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	加藤　修	君塚茂太郎	荒井　二郎
整調	大森　芳夫	山崎　尚夫	服部　謙
五番	二宮金一郎	香月　英一	大橋　孝造
四番	内田　量平	森　米次郎	森　茂二郎
三番	金　鐘遠	臼杵　春水	佐藤　信彦
二番	愛波　剛介	大下禎五郎	田中　岩夫
舳手	永田　計介	浜田　良平	野田　憲策

大正九年春季小会

第三選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	浦松佐美太郎	湯浅　興宗	竹田権九郎
整調	葛西秀千代	湯浅　鶴一	神谷　肇
五番	斎藤　憲二	小島　勇	斎藤　長嗣
四番	山住　二郎	洲川　愛造	茅根　茂
三番	尾藤　建治	梅田　啓爾	中村　茂
二番	原　直治	乾　武一	猪瀬弁一郎
舳手	秋葉　哲	小山富士雄	荒川　良一

第二選手競漕（第一着　H組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	宮本　繁	辻　秀次郎	鈴木　孝
整調	坂岡　操	入江　伝	斎藤　元武
五番	奥　利一郎	足立　祐次	後藤吉之助
四番	加藤　玉吉	篠原　八郎	豊田　秀尾
三番	高斎　善三	深作　長部	西山　重生
二番	具　鎔書	中尾　義彦	井藤　敏政
舳手	渡辺秀四郎	三好　一三	岸　義臣

第一選手競漕（第一着　S組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	寺井　俊彦	塚田欣太郎	神立　郁良
整調	村瀬　良平	井上　亀三	大倉　元
五番	中村　肇	稲田　龍一	本多　厚
四番	中山　克巳	畑　弘平	小野崎通直

三番	谷田　静夫	柿崎省太郎	豊田　薫
二番	横田　豊一	香月　保	伊藤　静夫
舳手	川北　俊一	中村　徳寿	加納　丑郎

第三十四回春季競漕大会

大正九年四月十一日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　C組）用艇フィックス新艇

	H	C	S
舵手	宮本　繁	辻　秀次郎	藤原　猛
整調	坂岡　操	塚田欣太郎	伊藤　静夫
五番	渡辺秀四郎	湯浅　鶴一	横山　剛
四番	加藤　玉吉	長尾　義弘	斉藤　元武
三番	雨宮　実	山本麟太郎	西山　重生
二番	高津　優	入江　伝	町田権九郎
舳手	前島　秀博	足立　祐次	斎藤　長嗣

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇旧ヨール艇

	H	C	S
舵手	寺井　俊彦	桐谷千代貞	神立　郁良
整調	藤田　茂	井上　亀三	水野　新二
五番	高橋　義胤	中村　徳寿	加納　丑郎
四番	寺尾　一郎	畑　弘平	小野崎通直
三番	谷田　静夫	柿崎省太郎	岸　義臣
二番	横田　豊一	中尾　義彦	藤井　敏政
舳手	川北　俊一	渡辺　久吉	後藤吉之助

第一選手競漕　（第一着　S組）用艇新ヨール艇

	H	C	S
舵手	林　謙輔	村田　知章	大須賀　実
整調	愛波　剛介	大下禎五郎	森　茂二郎
五番	中村　肇	森　米次郎	佐藤　信彦
四番	鷲島　富造	和賀井　泰	野田　憲策
三番	島村　宗雄	藤瀬英二郎	小野沢　潤
二番	村瀬　良平	松田庄一郎	高橋　保幸
舳手	臼杵　常次	稲田　龍一	田中　岩雄

第三十五回春季競漕大会

大正十年四月二十四日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス　漕程千百メートル

	H	C	S
舵手	浦松佐美太郎	田中　外次	鵜飼新一郎
整調	川北　俊一	紺野　武	藤原　敏
五番	高橋　義胤	川越　治助	猪瀬弁一郎
四番	愛波　剛介	阿部　東吉	高田　正見
三番	尾藤　健治	三沢虎免象	浅山　正陽
二番	斎藤　憲治	高橋泰太郎	菅沼　武雄
舳手	中村　肇	赤沼　悦郎	上領慎三郎

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス　漕程千百メートル

	H	C	S
舵手	宮本　繁	桐谷千代貞	玉家　義雄
整調	葛西秀千代	篠原　八郎	加納　丑郎
五番	秋葉　哲	深作　長節	中村　茂
四番	原　直知	伊藤　省吾	豊田　秀尾
三番	高斎善次郎	中山　雅彦	尾上　大助
二番	渋川　一郎	高橋朝次郎	伊藤　静夫
舳手	横田　豊一	小山富士雄	後藤吉之助

第一選手競漕　（第一着　H組）用艇シェルエイト　漕程二千メートル

	H	C	S
舵手	寺井　俊彦	塚田欣太郎	町田権九郎
整調	藤田　茂	藤瀬英二郎	野田　憲策
七番	鷲島　富造	和賀井　泰	小野崎通直
六番	内田　量平	柿崎省太郎	木村　賢治
五番	寺尾　一郎	渋川　愛造	大川　一
四番	中山　克巳	畑　弘平	近藤　秀雄
三番	矢部　卓之	小松　栄	神谷　肇
二番	村瀬　良平	梅田　啓爾	藤井　敏政
舳手	坂岡　操	稲田　龍一	岩崎喜八郎

大正十年秋季小会

第三選手競漕　（第一着　組）用艇フィックス

	H	C	S

第二選手競漕　（第一着　組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	日向　康二		
整調	加藤徳三郎		
五番	宮沢　文雄		
四番	田村　清助		
三番	北尾　義人		
六番	阿部　礼治		
舳手	原田　貢		

第一選手競漕　（第一着　H組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	遠山不羈夫		
整調	村瀬　良平	篠原	
三番	矢部　卓三	深作	
二番	山住　三良		

舳手　葛西秀千代

第三十六回春季競漕大会

大正十一年四月二十三日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	熊井征太郎	赤沼　悦郎	志村　政三
整調	鹿島宗次郎	高橋泰太郎	吉本　久基
五番	加瀬　恕	坂田金太郎	吉田　利彦
四番	小田切　賢	久保　廉三	菱沼　政二
三番	村上良太郎	安野　毅一	井手　政男
二番	松本　重男	岡柳　喬	小宮山　秀
舳手	塚田　松二	篠崎　団治	滝沢　澄

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	加藤　玉吉	桐谷千代貞	鵜飼新一郎
整調	原　直和	足立　祐次	藤原　敏
五番	奥　利一郎	三沢虎免象	菅沼　武雄
四番	阿部　礼次	水谷　幸夫	土田　功介
三番	斎藤　憲治	坂本　定雄	上領慎三郎
二番	菅　吉男	木村　耐七	山辺　六郎
舳手	藤井喜与治	今井　一利	扇原秀治郎

第一選手競漕（第一着　H組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	遠山不羈夫	塚田欣太郎	町田権九郎
整調	坂岡　操	畑　弘平	野田　憲策
七番	鷺島　富造	和賀井　泰	神谷　肇
六番	中山　克巳	小松　栄	木村　賢治
五番	寺尾　一郎	渋川　愛造	浅山　正陽
四番	村瀬　良平	大下禎五郎	豊田　秀雄
三番	矢部　卓之	柿崎省太郎	中村　茂
二番	山住　三郎	伊藤　省吾	加納　丑郎
舳手	葛西秀千代	三好　一三	高田　正見

大正十一年秋季小会

第三選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	稲森　重夫	中島　俊郎	藤田　一郎
整調	湯原　岩夫	岡　一夫	
五番	椎橋　正夫	木村　政一	
四番	和田庸之助	片岡　辰巳	
三番	長谷川武夫	森山	
二番	西村　武雄	酒井真兵衛	
舳手	中村吉次郎	池上参次郎	

第二選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	奥　利一郎	鈴木　八郎	小林　棟材
整調	原　直知		川口　又男
五番	斎藤　憲次		村岸　武雄
四番	国松　文雄		中村斉太郎
三番	李　玩朝	小林　忠重	神崎　邦治
二番	宮崎　鉄三	間　相楽	細川　宏
舳手	阿部　礼二	土館　多門	石榑　勇

第一選手競漕（第一着　S組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	熊井征太郎	足立　祐次	菅沼　武
整調	小田切　賢	三好　一二	井手　正男
三番	山住　三郎	久保　廉三	土田　功介
二番	加瀬　恕	水谷　幸夫	菱沼　政二
舳手	斎藤　憲三	坂本　定雄	池田　沢己

第三十七回春季競漕大会

大正十二年四月二十二日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　H組）用艇旧フィックス

	H	C	S
舵手	小笠原幸次	米原　赳夫	
整調	渡部　親	久保　廉三	
五番	宮井　東一	池上参次郎	
四番	横山　巌	根岸　正一	
三番	細田　健	清水　千尋	
二番	阿部龍五郎	原　昇	
舳手	枝松　貞蔵	宮内　太朗	

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	熊井征太郎	中島　俊郎	鵜飼新一郎
整調	宮崎　鉄三	木村　耐七	小林　棟材
五番	菅　（ま）	岡　一夫	滝沢　澄
四番	内藤	片岡　辰巳	細川　宏
三番	吉田　鶴雄	小林　忠重	上森　正雄
二番	西村　（き）	大渡　順二	神崎　邦治
舳手		土館　多門	斎藤　幸治

第一選手競漕（第一着　C組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	遠山不羈夫	足立　祐次	菅沼　武雄
整調	坂岡　操	畑　弘平	高田　正見
七番	寺尾　一郎	小松　栄	木村　賢治
六番	和田庸之助	高橋朝次郎	土田　功介
五番	鷺島　富造	坂本　定雄	池田　沢巳

四番	李　玩　朝	水谷　幸夫	中村斉太郎
三番	長谷川武夫	安野　毅一	村岸　武雄
二番	小田切　賢	木村　政一	菱沼　政二
舳手	葛西秀千代	三好　一三	川口　又男

第三十八回春季競漕大会

大正十三年四月二十日

Yangtsze Cup Race　予科選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	安部輝太郎	米原　起夫	水野　重雄
整調	枝松　貞蔵	半田　清	菱沼　政二
五番	久村伊太郎	木村　政一	村岸　武雄
四番	李　玩朝	大渡　順二	高橋　芳三
三番	横山　巌	小西　正男	張　在　鳳
二番	渡辺　謙吉	大久保　績	吉村　垣七
舳手	林　秀雄	中山　隆祐	安江　茂

London Cup Race　専門部選手競漕（第一着　C組）用艇旧フィックス

	H	C	S
舵手	渡辺雄二郎	奥村小四郎	土屋　敏朗
整調	西村　武雄	岡　一夫	小林　棟材
五番	大久保静雄	根岸　正一	松林　信
四番	小船惣四郎	東城　守	伊藤　恒一
三番	長谷川武夫	原田　一春	荻田　哲夫
二番	朝海浩一郎	和田　治郎	石井　辰次
舳手	末弘　常雄	武井　綱紀	梶浦　広一

第一選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	細田　健	中島　俊郎	鵜飼新一郎
整調	坂岡　操	畑　弘平	井手　正男
五番	寺尾　一郎	小松　栄	池田　沢巳
四番	鷲島　富造	高橋朝次郎	木村　賢治
三番	和田庸之助	宇治原兼一	上森　正雄
二番	小田切　賢	秋元和三郎	中村斉太郎
舳手	葛西秀千代	坂本　定雄	高田　正見

大正十三年秋季小会

九月二十一日

予科選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	今井　清	久保　領一	秋山　幸造
整調	久村伊太郎	古我　周二	安江　茂
五番	吉村　豊	矢野　鎮夫	森　敬治
四番	今川三九郎	平野　廉蔵	湯浅　六郎
三番	佐野浩三郎	中山　隆祐	吉村　恒七
二番	壇上　忠一	大久保　績	松丸　清一
舳手	水越徹三郎	松尾善二郎	松本　醇一

専門部選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	宮島　良吉	奥村小四郎	梶浦　広一
整調	朝海浩一郎	岡　一夫	伊藤　恒
五番	末広　常雄	小林　忠重	松林　信
四番	小船惣四郎	木田　一郎	水間　精治
三番	山本　孝之	松田　精一	荻田　哲夫
二番	水島　一郎	和田　二郎	鶴　覚
舳手	吉羽　忠	原田　一春	平田　雅彦

第一選手競漕（第一着　）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	細田　健	高林定一郎	菅沼　武雄
整調	渡部　親	半田　清	菱沼　政一
三番	林　秀雄	根岸　正一	村岸　武雄
二番	北条　秀一	秋元和三郎	宮村　末雄
舳手	長谷川武夫	武井　綱紀	高橋　芳三

第三十九回春季競漕大会

大正十四年四月十九日

Yangtsze Cup Race　予科選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	秋山半之助	久保　領一	水野　重雄
整調	水越徹三郎	岡村　幸二	湯本源一郎
五番	福本　節三	松尾善二郎	安江　茂
四番	吉村　豊	矢野　鎮夫	吉村　恒七
三番	松本　巳義	柴田　弘	中川　英造
二番	佐野浩三郎	大久保　績	長　功
舳手	壇上　忠一	阿部　武雄	松丸　清一

London Cup Race　専門部選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	宮島　良吉	鈴江　一臣	梶浦　広一
整調	水島　一郎	三田　正次	高田　亦三
五番	末広　常雄	原田　一春	有村　新次
四番	小舟惣四郎	木田　一郎	木本茂三郎
三番	大久保静雄	松田　精一	井堀　和夫
二番	新井　勝二	笠井　誠	本間　精二
舳手	山本　孝三	佐藤　正巳	浜本　俊一

第一選手競漕（第一着　S組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	細田　健	高林定一郎	鵜飼新一郎
整調	横山　巌	小松　栄	井手　正男
七番	和田庸之助	高橋朝次郎	池田　沢巳

六番	宮沢　文雄	秋元和三郎	張　在鳳
五番	北条　秀一	宇治原兼一	木村　賢治
四番	渡辺　親	平野　廉蔵	高橋　芳三
三番	小田切　賢	中山　隆祐	宮村　末雄
二番	朝海浩一郎	小西　正男	菱沼　政二
舳手	久村伊太郎	半田　清	高田　正見

大正十四年秋季小会

予科選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	松井静一郎	河相　薫	西堀　岩蔵
整調	大野　隆治	岡村　幸二	湯本源一郎
五番	村山　隆司	柴田　弘	池田　武
四番	倉田　武	井田与想平	橋本新太郎
三番	小松　徹志	上原　正	中川　英造
二番	細川　良爾	光枝　和夫	森永　武雄
舳手	壇上　忠一	細野　政男	河西　源吉

専門部選手競漕（第一着　C組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	今井　林二	鈴江　一臣	松田　久蔵
整調	新井　勝二	三田　正次	高田　亦三
五番	水島　一郎	佐藤　正巳	竹村　勝作
四番	御簾納辰男	笠井　誠	磯部　康雄
三番	高橋　高雄	野本　義一	井堀　和夫
二番	佐々木真一	伊藤　大策	藤原　和夫
舳手	大賀勝比古	戸部　武	菅野　善二

第一選手競漕

	H	C	S
舵手	秋山半之助	高林定一郎	水野　重雄
整調	久村伊太郎	小西　正男	井手　正男
三番	水越徹三郎	中山　隆祐	有村　新次
二番	吉村　豊	平野　廉蔵	村岸　武雄
舳手	福本　節三	松田　精一	安江　茂

第四十回春季競漕大会

大正十五年四月十八日

London Cup Race　予科選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	松井静一郎	河相　薫	高橋　要二
整調	福本　節三	森　弥太郎	湯本源一郎
五番	村山　隆司	奥山　誠	橋本薪太郎
四番	倉田　武	上原　正	金　煥成
三番	小松　徹志	中村　新	中川　英造
二番	大野　隆治	小川　千春	西堀　岩蔵
舳手	細川　良爾	細野　正男	村上　五郎

London Cup Race　専門部選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	今井　林二	小山　隆良	岡野　洋三
整調	新井　勝二	三田　正次	浜本　俊一
五番	水島　一郎	佐藤　正巳	竹村　勝作
四番	竹村　直衛	木田　一郎	磯部　康雄
三番	佐々木真一	笠井　誠	井堀　和夫
二番	高木　清	伊藤　大策	木村　与吉
舳手	大森恒太郎	矢部　武	菅野　善二

第一選手競漕（第一着　C組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	細田　健	高林定一郎	水野　重雄
整調	横山　巌	半田　清	井手　正男
七番	和田庸之助	高橋朝次郎	池田　沢巳
六番	宮沢　文雄	宇治原兼一	張　在　鳳
五番	北条　秀一	平野　廉蔵	宮村　末雄
四番	渡辺　親	小西　正男	高橋　芳三
三番	吉村　豊	秋元和三郎	有村　新次
二番	水越徹三郎	井田与想平	吉村　恒七
舳手	久村伊太郎	柴田　弘	菱沼　政二

大正十五年秋季小会

九月十九日

予科選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	松井静一郎	八谷　元吉	西堀　岩蔵
整調	大野　隆治	森　弥太郎	関川　信二
五番	相良　三男	宗方　恒男	河西　源吉
四番	田中　秀一	若林　一郎	橋本新太郎
三番	小松　徹志	中村　新	洪　承　虎
二番	細川　良爾	黒瀬　太郎	殿村昇一郎
舳手	園山	雨宮　卓二	村上　五郎

専門部選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	榊原　友七	小峰　柳多	松田　久蔵
整調	新井　勝二	西村　進	五十嵐　健
五番	大森恒太郎	小山　隆良	高橋　伸二
四番	新堀　伸	八島　進	磯部　康雄
三番	海老沢　彪	鈴木喜代三郎	橋本　呉平
二番	渡辺　雄治	福島　聰	崎元　功
舳手	吉沢　順蔵	犬飼　政美	菅野　善二

第一選手競漕（第一着　H組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	秋山半之助	菅　英一	岡野　洋三

整調	朝海浩一郎	高林定一郎	湯本源一郎
三番	水越徹三郎	柴田　弘	竹本　勝作
二番	篠崎　鷹夫	上原　正	
舳手	飯塚　守夫	笠井　誠	中川　英造

第四十一回春季競漕大会

昭和二年四月二十四日

Yangtsze Cup Race　予科選手競漕　(第一着　H組) 用艇フィックス

	H	C	S
舵手	瀬尾　三郎	鏑木　忠元	安井桂三郎
整調	大野　隆治	岡田　安郎	鈴木　忠一
五番	村山　隆司	黒瀬　太郎	浅沼　英二
四番	田中　秀一	上原　正	洪　承　虎
三番	相良　三男	金　禎　渙	山本　貞義
二番	小松　徹志	若林　一郎	石田　博
舳手	浅沼　治一	雨宮　卓二	殿村昇一郎

London Cup Race　専門部選手競漕　(第一着　H組) 用艇フィックス

	H	C	S
舵手	榊原　友七	小峰　柳多	
整調	大森恒太郎	西村　進	高橋　伸二
五番	吉沢　順蔵	小山　隆良	
四番	新堀　伸	伊藤　大策	崎元　功
三番	海老沢　彪	鈴木喜代三郎	橋本　真平
二番	近藤　石蔵	岩本　久康	
舳手	渡辺　雄治	秋山　勝重	

第一選手競漕　(第一着　H組) 用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	秋山半之助	菅　英一	西堀　岩蔵
整調	朝海浩一郎	半田　清	湯本源一郎
七番	水越徹三郎	柴田　弘	池田　沢巳
六番	横山　巌	宇治原兼一	張　在　鳳
五番	和田庸之助	平野　廉蔵	吉村　恒七
四番	篠崎　鷹夫	井田与想平	磯部　康雄
三番	飯塚　安夫	秋元和三郎	竹村　勝作
二番	吉村　豊	高林定一郎	関川　信二
舳手	久村伊太郎	奥山　誠	中川　英造

昭和二年秋季小会

九月十一日

予科選手競漕　(第一着　S組) 用艇フィックス

	H	C	S
舵手	高道　猛	新井　亮一	川野　謙次
整調	加賀美宗二	宗方　恒男	浅沼　英二
五番	大島　重雄	岡田　安郎	河西　源吉
四番	佐藤　雄三	雨宮　卓二	石田　博
三番	相良　三男	曽禰　冬来	小原　浩
二番	村山　隆治	井上　茂夫	村松　祐次
舳手	田中　清吉	八谷　元吉	村上　五郎

専門部選手競漕　(第一着　H組) 用艇フィックス

	H	C	S
舵手	大谷　忠一	芦刈　重次	
整調	吉沢　順蔵	星野　博愛	
五番	村木　勝利	島森　一郎	
四番	近藤　石蔵	井上　満	
三番	渡辺　雄治	平井清八郎	
二番	山崎　武夫	西村　進	
舳手	毛利　猛	小川　利浩	

第一選手競漕　(第一着　S組) 用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	瀬尾　三郎	河相　薫	安井桂三郎
整調	大野　隆司	乾　信	鈴木　忠一
三番	相良　三男	奥山　誠	橋本　真平
二番	板倉　巻夫	黒瀬　太郎	関川　信二
舳手	水越徹三郎	山木　修	井上　勇

第四十二回春季競漕大会

昭和三年四月二十二日

Yangtsze Cup Race　予科選手競漕　(第一着　S組) 用艇フィックス

	H	C	S
舵手	瀬尾　三郎	石原重二郎	安井桂三郎
整調	加賀美宗二	岡田　安郎	浅沼　英二
五番	大島　重雄	曽禰　冬来	小原　滋
四番	大倉　徳治	雨宮　卓二	石田　博
三番	佐藤　雄三	宗方　恒男	結城　一郎
二番	伊沢　道三	柳沢　庄司	村松　祐次
舳手	君塚　満雄	井上　茂夫	村上　五郎

London Cup Race　専門部選手競漕　(第一着　S組) 用艇フィックス

	H	C	S
舵手	大谷　忠一	石井英之助	東畑　弘
整調	村木　勝利	星野　博愛	高橋　伸二
五番	石森　安雄	島　森一郎	矢部　尚一
四番	近藤　石蔵	長坂　精一	崎元　功
三番	吉沢　順蔵	井上　満	木田　光治
二番	陳　木　村	田洞　国徳	仲　恒男
舳手	毛利　猛	秋山　勝重	犬塚　敏男

第一選手競漕　(第一着　C組) 用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	秋山半之助	菅　英一	西堀　岩蔵
整調	朝海浩一郎	宇治原兼一	宮村　末雄

七番	水越徹三郎	上原　正	吉村　恒七
六番	吉村　豊	井田与想平	張　在鳳
五番	飯塚　守夫	平野　廉蔵	関川　信二
四番	板倉　巻夫	和元和三郎	鈴木　忠一
三番	久村伊太郎	金　禎洙	橋本　真平
二番	海老沢　彪	半田　清	高橋　芳三
舳手	相良　三男	奥山　誠	中川　英造

昭和三年秋季小会

予科選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	斉田　英夫	金子精之助	川野　謙次
整調	加賀美宗二	荒井　格二	岡田敬太郎
五番	田口　清吉	岡田　安郎	八木　保
四番	板倉　巻夫	雨宮　卓二	佐藤　孝一
三番	君塚　満雄	荒井辰三郎	松田　英彦
二番	池上　繁	大井　忠紀	水谷　実
舳手	神林　正教	大久保慶一	村上　五郎

専門部選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	大谷　忠一	岡村　樹	東畑　弘
整調	石森　安雄	星野　博愛	仲　恒男
五番	市野　銀三	小西　頼蔵	矢部　尚一
四番	藤沢　当	神　弥一郎	森田　茂治
三番	杉本　治	織茂　誉弐	本田　光治
二番	木村　庫三	黒田　俊夫	須藤　政一
舳手	石井由太郎	芝田　年夫	野口　新一

第一選手競漕（第一着　S組）用艇ヨール艇

	H	C	S
舵手	瀬尾　三郎	河相　薫	安井桂三郎
整調	古川喜久夫	比江島英一	宮村　末雄
三番	相良　三男	奥山　誠	茅根　定之
二番	深井　弥平	曽禰　冬来	津布楽武雄
舳手	古荘　清	岡本　三平	浅沼　英二

第四十三回春季競漕大会

昭和四年四月二十一日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　S組）用艇クリンカーフォア　漕程千百メートル

	H	C	S
舵手	代田　秀弥	大久保慶一	東畑　弘
整調	市野　銀三	黒田　俊夫	岡田敬太郎
三番	吉沢　順蔵	大久保　栄	向井　正巳
二番	藤沢　当	比江島英一	大森吉次郎
舳手	石井由太郎	金子精之助	尾上保太郎

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　S組）用艇シェルエイト　漕程二千メートル

	H	C	S
舵手	石森　安雄	河相　薫	安井桂三郎
整調	大野　隆治	荒井　格二	仲　恒男
七番	浅沼　治一	森　伊平	矢部　尚一
六番	山本　次郎	久保　信義	猪俣千代吉
五番	君塚　満雄	芝田　年夫	野口　新一
四番	奥田　二郎	上田　博	上松　宗理
三番	田中　秀一	荒井辰三郎	橋本　義治
二番	平野美津基	宗方　恒男	佐藤　孝一
舳手	田中　太郎	岡田　安郎	本田　光治

第一選手競漕（第一着　H組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	瀬尾　三郎	菅　英一	西堀　岩蔵
整調	水越徹三郎	井田与想平	鈴木　忠一
七番	福本　節三	宇治原兼一	浅沼　英二
六番	板倉　巻夫	曽根　冬来	津布楽武雄
五番	深井　弥平	岡本　三平	茅根　貞之
四番	古川喜久夫	金　禎洙	村松　祐次
三番	飯塚　守夫	柴田　晋	橋本信太郎
二番	佐藤　雄三	乾　信	関川　信二
舳手	相良　三男	雨宮　卓二	中川　英造

今回ヨリ第二選手ハシェルエイトヲ、第三選手ハクリンカーフォアヲ用フル事トシ選手競漕ハ孰レモスライディング艇ニ依ルコトトナレリ。

尚大優勝旗ヲ新タニ調製シ本大会ヨリ用フ。

昭和四年秋季小会

予科選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	関谷　利平	大久保慶一	谷　正一郎
整調	平野美津基	荒井　格二	岡田敬太郎
五番	田中　太郎	俵田　昌三	井出秀次郎
四番	奥田　二郎	日野　義雄	浅沼　吉三
三番	渡辺　芳夫	真田　幸三	山川幸一郎
二番	矢口錄一郎	大井　忠紀	田中与佐応
舳手	鈴木　登	多田　米吉	尾上保太郎

専門部選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	安藤慶四郎	高橋　若松	栗原　隆平
整調	市野　銀三	北畑紀一郎	大森吉次郎
五番	石井由太郎	大久保　栄	須藤　政一
四番	坂上　正夫	森田　秀雄	向井　正巳
三番	斎藤長太郎	外崎　亮一	野口　新一
二番	岡田　正博	英二	三好　英夫

舳手	小川　貞寿	髙島　達雄	斎藤　一巳

第一選手競漕（第一着　C組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	瀬尾　三郎	石原重二郎	水谷　実
整調	山本　次郎	曽爾　冬来	鈴木　忠一
七番	浅沼　治一	森　伊平	上松　宗理
六番	佐藤　雄三	上田　博	村松　祐次
五番	堀合　幸信	芝田　年夫	和久井千吉
四番	石井　克夫	乾　信	山口　晃
三番	都村新次郎	荒井辰三郎	岸　藤吉郎
二番	間宮　行直	古田　道雄	内海　常雄
舳手	君塚　満雄	宗方　恒男	浅沼　英二

第四十四回春季競漕大会

昭和五年四月二十日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　S組）用艇旧クリンカーフォア

	H	C	S
舵手	村山　隆司	武田亥一郎	栗原　隆平
整調	大野　隆治	小友万寿雄	安達　泰三
三番	相良　三男	倭田　昌三	須藤　政一
二番	間宮　行直	多田　米吉	上松　宗理
舳手	鈴木　登	平塚　潔	島田　源蔵

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　S組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	安藤慶四郎	荒井　格二	水谷　実
整調	山本　次郎	久保　信義	岡田敬太郎
七番	田中　太郎	真田　幸三	井出秀二郎
六番	星　義定	吉村　太郎	村上　芳郎
五番	有賀　格	上田　博	野口　新一
四番	堀合　幸信	佐藤　長治	田中与佐応
三番	坂上　正夫	外崎　亮一	榊原栄一郎
二番	平野義津基	雨宮　卓二	森　好衛
舳手	矢口錄一郎	北畑紀一郎	山田　武夫

第一選手競漕（第一着　C組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	瀬尾　三郎	石原重二郎	安井桂三郎
整調	深井　弥平	曽爾　冬来	関川　信二
七番	板倉　巻夫	岡本　三平	浅沼　英二
六番	古川喜久夫	柴田　晋	内海　常雄
五番	渡辺　芳夫	金　禎涘	和久井千吉
四番	奥田　二郎	乾　信	浅沼　吉三
三番	石井　克夫	荒井辰三郎	村松　祐次
二番	佐藤　雄三	古田　道雄	鈴木　忠一
舳手	君塚　満雄	芝田　年夫	向井　正巳

昭和五年秋季小会

九月十四日

予科選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	岡谷　利平	武田亥一郎	二村　謙三
整調	矢口錄一郎	小友万寿雄	山田　武夫
五番	平井　再造	多田　米吉	池田平八郎
四番	津田　正夫	北野　進	田中与佐応
三番	杉仲　儀市	大栗　一男	椿　文
二番	山田　武	山本　輝夫	中富　義夫
舳手	菅野善五郎	倭田　昌三	谷　正一郎

専門部選手競漕（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	杉坂　正信	立原　俊助	猪又　寿夫
整調	原田　史郎	平野　武光	深見
五番	大上　光雄	北畑紀一郎	斎藤猪子二
四番	井上　鑒	長谷川宗吉	藤田
三番	山川健太郎	山下　朝	逵井　正吉
二番	柏　次雄	石田謙二郎	栗原　隆平
舳手	飯塚　富則	岩尾　新一	舟久保　将

第一選手競漕（第一着　S組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	斎藤　晋一	石原重二郎	水谷　実
整調	間宮　行直	荒井　格二	鈴木　忠一
七番	深井　弥平	荒井辰三郎	井出秀次郎
六番	佐藤　雄三	上田　博	榊原栄一郎
五番	広松　三好	内田　松夫	村松　祐次
四番	斉田　英夫	林　慧	和泉　信夫
三番	浅沼　治一	雨宮　卓二	山川幸一郎
二番	星　義定	真田　幸三	村上　芳郎
舳手	君塚　満雄	宗方　恒男	森　好衛

第四十五回春季競漕大会

昭和六年四月十九日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　S組）用艇クリンカーフォア

	H	C	S
舵手	矢野　三郎	立原　俊助	猪俣　寿夫
整調	柏　次雄		山崎弘太郎
三番	守谷　正清	久保　信義	谷　正一郎
二番	小林　正介	長谷川康彦	柴田　鈔安
舳手	杉坂　正信	吉川　紀彦	椿　文

London Cup Race　第二選手競漕　(第一着　C組)　用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	斎藤　晋一	俵田　昌三	島田　源蔵
整調	田中　太郎	多田　米吉	和泉　信夫
七番	矢口錞一郎	神保　重雄	井出秀次郎
六番	森山　操	横山喜次郎	藤原宇弥雄
五番	癸智善次郎	岩尾　新一	達井　正吉
四番	佐久間惣次	吉村　太郎	舟久保　将
三番	坂口　侃	大栗　一男	田尾　忠義
二番	角田　浩	落合　章男	橋本　弥平
舳手	森　達夫	山下　乾	山田　武夫

第一選手競漕　(第一着　S組)　用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	安藤慶四郎	荒井　格二	水谷　実
整調	佐藤　雄三	上田　博	森　好衛
七番	君塚　満雄	荒井辰三郎	笠原　文雄
六番	広松　三好	高島　達雄	榊原栄一郎
五番	石井　克夫	乾　信	和久井千吉
四番	間宮　行直	古田　道雄	浅沼　吉三
三番	渡辺　芳夫	内田　松夫	山本　貞義
二番	坂上　正夫	林　慧	村上　芳郎
舳手	田村秀次郎	真田　幸三	田中与佐応

昭和六年秋季小会

九月十三日

予科選手競漕　(第一着　S組)　用艇フィックス

	H	C	S
舵手	立松　舗雄	椿　祥文	木村　大三
整調	佐久間惣次	小金井鍬次郎	井出秀次郎
五番	岩政正太郎	小林　輝雄	谷　正一郎
四番	三苫　仕	山本　輝夫	山崎弘太郎
三番	坂口　侃	金井　保	鈴木　文雄
二番	前田　正	森　五郎	八田　勘弥
舳手	野崎城之助	吉田　稔	中村　淳一

専門部選手競漕　(第一着　H組)　用艇フィックス

	H	C	S
舵手	矢野　三郎	牧野　務	猪俣　寿夫
整調	中田　正吉	柳川　三郎	横山　礼二
五番	中津原　正	佐藤　義夫	大宮宗三郎
四番	大川寅之助	北畑紀一郎	西尾　正二
三番	千野　雄三	山田春之助	望月　武夫
二番	高井　祥	丸尾　認	国松孝太郎
舳手	杉坂　正信	猪瀬　昌夫	山口　敏夫

第一選手競漕　(第一着　S組)　用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	斎藤　晋一	立原　俊助	島田　源蔵
整調	広松　三好	真田　幸三	和久井千吉
七番	田中　太郎	荒井辰三郎	田中与佐応
六番	間宮　行直	乾　信	浅沼　吉三
五番	君塚　満雄	宗方　恒男	椿　文
四番	伊藤　治雄	上田　博	和泉　信夫
三番	畑中　正	大栗　一男	二見　正
二番	森山　操	神保　重雄	森　好衛
舳手	斉田　英夫	雨宮　卓二	山本　貞義

第四十六回春季競漕大会

昭和七年四月二十四日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　(第一着　C組)　用艇クリンカーフォア

	H	C	S
舵手	山田福太郎	近藤　三郎	田　寿郎
整調	園田　友治	渡辺　進	横山　礼二
三番	坂口　侃	俵田　昌三	星野　敬次
二番	畑中　正	小林　喜一	田岡　俊三
舳手	藤吉　雄二	小林　忠一	福島　正道

London Cup Race　第二選手競漕　(第一着　S組)　用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	矢野　三郎	丸尾　認	木村　大三
整調	岩政正太郎	宗方　恒雄	谷　正一郎
七番	野崎城之助	荒井辰三郎	柴田　鈔安
六番	柏　次雄	柳川　三郎	山崎弘太郎
五番	癸智善次郎	長島　正男	望月　武雄
四番	森山　操	大和田　進	国松孝太郎
三番	清水　操五	山田春之介	田尾　忠義
二番	大木　良茂	猪瀬　昌夫	橋本　弥平
舳手	浦郷　勲	金井　保	西尾　正二

第一選手競漕　(第一着　S組)　用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	斎藤　晋一	立原　俊助	島田　源蔵
整調	板倉　巻夫	上田　博	内海　常雄
七番	森　達夫	高島　達雄	和久井千吉
六番	伊藤　治雄	岩尾　新一	和泉　信夫
五番	君塚　満雄	神保　重雄	藤原宇弥雄
四番	木野　三郎	山本　輝夫	大宮宗三郎
三番	川添　正美	西野健次郎	山口　庄衛
二番	前田　正	真田　幸三	田中与佐応
舳手	千野　雄三	山下　乾	舟久保　将

昭和七年秋季小会

九月十一日

予科選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	斎藤　晋一	椿　　祥夫	奈佐　孝次
整調	前田　　正	松井　巌根	田　　寿郎
五番	野崎城之助	小永井鍬太郎	和田　栄達
四番	伊藤　治雄	赤沼　　茂	見富　八郎
三番	木村　憲八	長島　正男	大谷　威彦
二番	大木　良茂	土方格之助	佐藤　秋孝
舳手	清水　操五	海老　敏治	唐沢　利定

専門部選手競漕（第一着　　）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	高橋三男治	吉住　三郎	山田　　敏
整調	向井　　忠	柳川　三郎	西尾　正二
五番	千野　雄三	神保　重雄	横山　礼二
四番	柏　　次雄	石川　正一	前田　利弥
三番	岩田善三郎	田村　知彦	望月　武雄
二番	上野道太郎	猪瀬　昌夫	国松孝太郎
舳手	斎藤　龍明	指田　重康	沢田　正男

第四十七回春季競漕大会

昭和八年四月二十一日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　H組）用艇クリンカーフォア

	H	C	S
舵手	三浦　大吉	近藤　勝重	山田　　敏
整調	平野美津基	名坂　浅治	田　　寿郎
三番	永井　輝尚	指田　重康	柴田　鈔安
二番	中前　正巳	石川　正一	国松孝太郎
舳手	平井　再造	山田春之助	山田　　襄

London Cup Race　第二選手競漕（第一着　H組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	高橋三男治	戎野千太郎	奈佐　孝次
整調	向井　　忠	神田　　節	前田　利弥
七番	野崎城之助	小永井鍬次郎	橋本　弥平
六番	大木　良茂	村上健太郎	見富　八郎
五番	岩田善三郎	松井　巌根	日野水次郎
四番	北村　正三	石川　英雄	西尾　正二
三番	岡田　　正	本沢　正武	岡塚　亮三
二番	上野道太郎	市岡　正範	佐藤　秋孝
舳手	岩政正太郎	海老　敏治	横山　礼二

第一選手競漕（第一着　H組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	斎藤　晋一	椿　　祥夫	木村　大三
整調	前田　　正	古田　道雄	山口　庄衛
七番	木野　三郎	岡本　三平	望月　武雄
六番	伊藤　治雄	土方格之助	大宮宗三郎
五番	田村　健吾	上田　　博	田中与佐応
四番	森山　　操	西野健二良	村上　芳郎
三番	大川寅之助	中野　勝市	石川　次男
二番	千野　雄三	阪田　正三	和泉　信夫
舳手	清水　操五	真田　幸三	井出秀次郎

昭和八年秋季小会

九月十七日

第二選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	高橋三男治	立山　秀治	山田　　襄
整調	平井　再造	田中　隆司	山崎弘太郎
五番	植松　健吾	安高　健祐	岡本　栄助
四番	塚越　賢哉	名坂　浅治	藤沢　康夫
三番	箱田　　清	石川　英雄	橋本　弥平
二番	市川　虎司	平松　正三	森田　三夫
舳手	松尾　舜作	指田　重康	原　　稔

第一選手競漕（第一着　H組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	三浦　大吉	椿　　祥夫	奈佐　孝次
整調	森山　　操	神田　　節	前田　利弥
七番	野崎城之助	海老　敏治	田中与佐応
六番	平野　　昌	松井　巌根	村上　芳郎
五番	田村　健吾	近藤　勝重	日野水次郎
四番	永井　輝尚	土方格之助	西尾　正二
三番	清水　操五	小野沢達郎	鬼沢　誠二
二番	中前　正巳	坂田　正三	見富　八郎
舳手	清水　俊正	小永井鍬次郎	佐藤　秋孝

第四十八回春季競漕大会

昭和九年四月二十二日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕（第一着　H組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	坂口　親英	大野　義光	関本　達宜
整調	平井　再造	岡野　栄吉	井出秀次郎
五番	鈴木　　登	伊藤　　彰	藤田　友蔵
四番	斎藤　龍明	村井　英男	水原　正博
三番	箱田　　清	長島　祥平	橋本　弥平
二番	畑　　直行	村上健太郎	熊木　達郎

舳手	小口定一郎	柴野美佐雄	松尾　寛

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　S組）用艇クリンカーエイト　漕程二千メートル

	H	C	S
舵手	角田　正義	立山　秀治	田村　幸雄
整調	大内　寅雄	松井　巌根	前田　利弥
七番	植松　健悟	近藤　勝重	横山　礼二
六番	永井　輝尚	石川　英雄	藤沢　康雄
五番	佐藤　礼一	石井　正	佐藤　秋孝
四番	堀川富太郎	名坂　浅治	山崎　徳造
三番	塚越　賢哉	安高　健祐	湯浅　正敏
二番	伊藤茂三郎	宮崎　覚	堀内幾久寿
舳手	斎藤　晋一	海老　敏治	奥野　浩爾

第一選手競漕　（第一着　S組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	中川邦次郎	椿　祥夫	奈佐　孝次
整調	前田　正	神田　節	谷　正一郎
七番	岩田普三郎	真田　幸三	和久井千吉
六番	向井　忠	土方格之助	浅沼　吉三
五番	岡田　正	古田　道雄	上田　正治
四番	平野　昌	坂田　正三	石川　次男
三番	野崎城之助	佐久間富正	岡塚　亮三
二番	市川　虎司	指田　重康	富岡　義夫
舳手	清水　操五	小永井鍬次郎	日野水次郎

此ノ年クリンカーエイト三隻ヲ新造シ第二選手競漕ニ用フルコトトセリ。三月十八日進水。

昭和九年秋季小会

七月三十日

第一選手競漕　（第一着　H組）用艇クリンカーエイト　漕程二千メートル

	H	C	S
舵手	角田　大義	今井　善樹	関本　達宜
整調	大内　寅雅	松井　巌根	藤沢　康雄
七番	小口定一郎	安高　健祐	松崎　政蔵
六番	奥　一男	村井　英男	立岩袈裟松
五番	菅野　菊雄	古田　道雄	奥野　浩爾
四番	堀川富太郎	金井　三次	堀内幾久寿
三番	外松　修一	柴野美佐雄	右近　徹也
二番	丸山　泰男	岡野　栄吉	村岸　礼三
舳手	前田　正	伊藤　彰	江川　博邦

昭和十年夏季小会

七月二十八日

第一選手競漕　（第一着　H組）用艇クリンカーエイト

	H	C	S
舵手	八木　茂	近藤　勝重	奥山　忠教
整調	丸山　泰男	岡野　栄吉	堀内幾久寿
七番	田縁　政明	小島　慶三	松崎　政蔵
六番	両角　侃二	塩島　淳晏	岡本　陽三
五番	琴坂　重幸	鳴海　繁男	西永　嘉夫
四番	市川　虎司	富松　省三	川畑　信義
三番	高取　俊夫	浅川　正	右近　徹也
二番	近江　宏	前田紀太郎	佐藤　秋孝
舳手	真庭千代吉	赤崎　徹男	村岸　礼三

第四十九回春季競漕大会

昭和十年四月二十一日

Yangtsze Cup Race　第三選手競漕　（第一着　S組）用艇フィックス

	H	C	S
舵手	中川邦次郎	曽原　康夫	桜田　武
整調	若葉　信久	士方格之助	福田　穣吉
五番	吉田　亨	柴野美佐雄	村岸　礼三
四番	細野　利男	井上　裕	石井　喜一
三番	斎藤　晋一	石川　正一	今井　茂
二番	矢部　敏光	越田　省三	熊木　達郎
舳手	横尾　清蔵	川又　忠洋	西田　定治

London Cup Race　第二選手競漕　（第一着　H組）用艇クリンカーエイト

	H	C	S
舵手	菊地　寿雄	今井　善樹	田村　幸雄
整調	丸山　泰男	岡野　栄吉	柴田　鈔安
七番	小口定一郎	伊藤　彰	高地　鈴雄
六番	奥　一男	名坂　浅治	橋本　弥平
五番	菅野　菊雄	金井　三次	藤田　友蔵
四番	琴坂　重幸	佐藤　正	島田祥一郎
三番	菅野　健児	大井　敏夫	河川　博邦
二番	杉山　泰三	長島　祥平	堀内幾久寿
舳手	外松　修一	小島　慶三	松崎　政蔵

第一選手競漕　（第一着　C組）用艇シェルエイト

	H	C	S
舵手	角田　正義	工藤　哲雄	木村　大三
整調	前田　正	神田　節	藤沢　康雄
七番	植松　健悟	近藤　勝重	奥野　浩爾
六番	堀川富太郎	松井　巌根	水原　正博
五番	塚越　賢哉	石井　正	右近　徹也
四番	両角　侃二	村井　英男	竹下　貞雄
三番	市川　虎司	山代　洋	山崎　徳造

二番	大内　寅雄	宮崎　覚	竹内　正司
舳手	清水　操五	安高　健祐	柴田秀治郎

昭和十年秋季小会

十一月七日

此ノ年恰モ本学創立六十周年ニ当タリ式典講演ニ加ヘテ水陸大運動会ヲ挙行ス。十一月七日向島ニ競漕大会ヲ開キ、端艇部ニテハ秋季小会ヲ重ネテ行フ。即チ各組ヨリ責任選手ヲ出漕セシメ、リーグ戦ヲ行ヒタリ。

第一選手競漕　（優勝　H組）
用艇クリンカーエイト
漕程千三百メートルリーグ戦

	H	C	S
舵手	菊地　寿雄	工藤　哲雄	奥山　忠教
整調	丸山　泰男	宮崎　覚	堀内幾久寿
七番	外松　修一	近藤　勝重	柴田秀治郎
六番	琴坂　重幸	金井　三次	竹下　貞雄
五番	菅野　菊雄	佐久間富正	右近　徹也
四番	両角　侃二	松井　巌根	沢木　宇吉
三番	高取　俊夫	安高　健祐	西永　嘉夫
二番	堀川富太郎	神田　節	水原　正博
舳手	小口定一郎	二川　勝男	伊藤　秋孝

第五十回春季競漕大会

昭和十一年四月十九日

第一選手競漕　スライディング
シェルエイト
三千メートル
言問橋鐘淵間

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	奥田　二郎	曽祢　兆輝	中川　英造
舵手	菊地　寿雄	戎野千太郎	木村　大三
整調	丸山　泰男	神田　節	藤沢　康雄
七番	前田　正	松井　巌根	奥野　浩爾
六番	北村　隆義	金井　三次	水原　正博
五番	塚越　賢哉	佐久間富正	右近　徹也
四番	伊勢谷嘉一	兼本　豊	沢木　宇吉
三番	堀川富太郎	水野秀三郎	竹下　貞雄
二番	植松　健悟	土方格之助	柴田秀治郎
舳手	伊藤　治雄	小島　慶三	高地　鈴雄

第二選手競漕　スライディング
クリンカーエイト
言問・日活間
二千メートル

	H	C	S
着順	③	②	①
コーチ	間宮　行直	芝田　年夫	水谷　実
舵手	清水　操	工藤　哲雄	奥山　忠教
整調	高取　俊夫	塩島　淳雲	佐藤　秋孝
七番	外松　修一	安高　健祐	大西　重則
六番	琴坂　重幸	岡野　栄吉	竹内　正司
五番	菅野　健児	柴田　淳造	角鹿　哲也
四番	両角　侃二	富松　省三	原田幸一郎
三番	高城　民平	前田紀太郎	立岩袈裟松
二番	増田賢次郎	佐藤　正	金子益之助
舳手	田縁　政明	小永井鍬次郎	村岸　礼三

第三選手競漕　固定式フィックス
言問大倉間
千メートル

	H	C	S
着順	②	③	①
舵手	三条　益栄	今井　善樹	大杉　正
整調	田崎　正八	宮崎　覚	沢田　信雄
五番	小口定一郎	沢藤　浩平	下村　武雄
四番	青木　勉	二川　勝男	稲葉辰右衛門
三番	菅野　菊雄	狩森　正雄	小牧　辰志
二番	近江　宏	井上　裕	河田　稔
舳手	真庭千代吉	小野沢達郎	川井田　稔

第五十一回春季競漕大会

昭和十二年　月　日

昭和十二年夏季小会

七月二十九日

言問一水神間　二千メートル

	H	C	S
コーチ	堀川富太郎	工藤　哲雄	藤沢　康夫
舵手	村田　倉夫	大矢　光義	岡村　俊夫
整調	新藤　栄一	森　一行	吉川　四郎
七番	秋山　義辰	寺島　恒久	斉藤　武
六番	石井　喜介	新宮　徹也	仲山　淑夫
五番	多田　喜逸	荻生　真通	坂　美治
四番	堀川富太郎	藤井　良一	伊藤　毅雄
三番	田中　清之	松下　保彦	石田　智郎

二番	下元　進助	青木　貞夫	津田　信雄
舳手	肥田　一郎	植野　晴一	杉本　鉄二

第五十二回春季競漕大会

昭和十三年四月十七日

第一選手競漕

着順	H ①	C ②	S ③
C	三宅　義雄	中村　達夫	田村　幸雄
S	高取　俊夫	光枝　実	原田幸一郎
7	小口実一郎	山田　英雄	松井　孝夫
6	笠井　誠	望月　鋼一	藤沢　康夫
5	植松　健悟	植野　晴一	杉本　鉄二
4	両角　侃二	荻生　真通	伊藤　毅雄
3	石井　喜介	藤井　良一	坂　美治
2	堀川富太郎	小坂謙四郎	小池　真登
B	菅野　健児	宮崎　覚	斉藤　武

第二選手競漕

着順	H ①	C ②	S ③
C	村田　倉夫	大矢　光義	大杉　正
S	篠崎　達夫	森　一行	古沢　三郎
7	中西　鋭	堤　新三	大島　義郎
6	阿波　博康	竹村　弘	吉川　四郎
5	秋山　義辰	柴田　和也	尾崎　昇
4	下元　進助	岡野　栄吉	壇　芳郎
3	山岸　重夫	松下　秀雄	加藤　忠篤
2	新藤　栄一	秋森　清	河田　稔
B	諸橋　洋一	寺島　恒久	村岸　礼三

第三選手競漕

着順	H ①	C ②	S ③
C	八木　茂	小島　慶三	岡村　俊夫
S	琴坂　重幸	松浦　一清	小柳英二郎
3	塩見　英次	安高　健祐	加藤　敏夫
2	斉藤　源二	佐藤清一郎	関　大一郎
B	高木　正武	畠山久兵衛	木田健二郎

第五十三回春季競漕大会

昭和十四年四月十六日

第一選手競漕

着順	H ①	C ②	S ③
コーチ	平野　昌	工藤　哲雄	奥野　浩爾
C	八木　茂	大矢　光義	岡村　俊夫
S	新藤　栄一	佐藤清一郎	角鹿　哲也
7	石井　喜介	小坂謙四郎	古沢　三郎
6	高取　俊夫	藤井　良一	石原善二郎
5	菅野　健児	荻生　真通	坂　美治
4	三井　侃二	仁品　正	杉本　鉄二
3	岸　博太郎	柴田　淳造	小池　真登
2	篠崎　達夫	植野　晴一	松井　考夫
B	秋山　義夫	堤　新三	原田幸一郎

第二選手競漕

着順	H ②	C ①	S ③
コーチ	丸山　泰男	中村　達夫	奈佐　孝次
C	関口　久雄	原山　正照	田村　幸雄
S	下元　進助	森　一行	大野　和夫
7	中村　秀雄	秋森　清	浜　義郎
6	浅岡　善一	新保　圭一	吉川　四郎
5	波立一二三	津田　守夫	若松　第一
4	森　泰助	中川　通	加藤　忠篤
3	小松　政重	松下　俊夫	中城　覚
2	金藤　義雄	小藤田　思	多田　政影
1	山岸　重夫	畠山久兵衛	篠崎　保男

第三選手競漕

着順	H ②	C ①	S ③
コーチ	塚越　賢哉	青木尚一郎	桜田　武
C	村田　倉男	田村　兼敏	加藤　敏夫
S	斉藤　源三	竹村　弘	小柳英二郎
3	中西　鋭	工藤　哲雄	伊藤　毅雄
2	近江　宏	原　一夫	松永　文一
B	白土　一	猿山　誠治	平野　伸一

昭和十四年夏季小会

七月三十日

言問一日活間　二千メートル

着順	H ③	C ②	S ①
コーチ	高取　俊夫	小坂謙四郎	原田幸一郎
C	内尾　博明	菊地　邦雄	山田　利夫
S	金子　尚夫	大沢　英治	浜田　幸雄
7	前川　一郎	小川　英	伊藤　毅雄
6	小谷野敏夫	仲江　勝	松永　文一
5	馬上　政夫	撞井　保夫	印南　素行
4	岡戸　斉彦	鯰田　大造	渡辺　芳明
3	大塚　陽一	原　一夫	高木　国雄
2	倉林　圀夫	深見　武雄	橋本　要三
B	横沢　基夫	井田　俊男	中川　秀造

第五十四回春季競漕大会

昭和十五年　月　日

昭和十五年夏季小会

月　日

日活一言問橋間　二千メートル

	H	C	S
着順	③	②	①
コーチ	石井　喜介	荻生　真通	原田幸一郎
C	久住呂　仰	牛島陽太郎	上杉　栄一
S	星谷　朝久	塚本	立野
7	峰島	酒井	伊藤　毅雄
6	金綱　竜吾	宮崎慶太郎	鈴木　英夫
5	小山　敏夫	大野英三郎	羽生
4	金子	竹内　敏男	中坪
3	佐藤	丸山　三郎	吉田
2	後藤	戸塚	印東　秀夫
B	斉藤　秀雄	江淵	中川　秀造

第五十五回春季競漕大会

昭和十六年　月　日

第五十六回春季競漕大会

昭和十七年四月五日(日)

第一選手競漕

	H	C	S
コーチ	間宮　行直	神田　節	木村　大三
C	小松　守一	小村　一郎	種ケ島貴弘
S	浅岡　善一	植野　晴一	立野　広光
7	峰島　全	藤井　良一	羽野　瑛
6	島田　正敏	森　正雄	岡田　宗元
5	横田　星郎	原　一夫	鈴木　邦治
4	高木　重和	鈴木　英夫	塚本　敬
3	秋山　栄一	岡　泰彦	若松　第一
2	星谷　朝久	新保　圭一	藤本　亮太
B	橋本　博	大野英三郎	印東　秀夫

第二選手競漕

	H	C	S
コーチ	関口　久雄	荻生　真通	岡村　俊夫
C	真木淳一郎	平山　正照	丸山　守
S	水垣　和敏	高橋　信行	荒井　栄一
7	小沢　恒与	牛島陽太郎	吉田　敏幸
6	加藤　章	藪野　安信	村田　英雄
5	後藤　享	霜田　一郎	桜井　俊平
4	加々見　正	北村　猛郎	中川富二三
3	西堀弥寿雄	二神　重成	伊藤　毅雄
2	小林　卓之	竹内　敏男	田村　七治
B	豊田　貞雄	丸山　三郎	土金　弘治

第三選手競漕

	H	C	S
コーチ	関口　久雄	荻生　真通	古沢　三郎
C	鶴岡　正敏	高橋　弘吉	太田　道夫
S	纐川　祐夫	戸塚　敏一	古沢　三郎
3	槙田　秀雄	佐藤清一郎	中川　秀造
2	大塚　陽一	山本　徳義	森永　進
B	岩城　照雄	寺島　恒久	奈良　幸男

第五十七回春季競漕大会

昭和十八年　月　日

第五十八回春季競漕大会

昭和二十二年四月二十七日

第一選手競漕（晴天逆強風）（水神一言問）二千メートル

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	堀川富太郎		
C	小林　伸夫	佐藤　直	君塚　克美
S	加々見　正	三堀正太郎	清水　仁
7	森　千昭	広沢　章	鈴木　邦治
6	野村　邦夫	畑　弘恭	斉藤　博
5 主	後藤　亨	荒木満喜男	井上　一郎
4	塩野　要	飯笹　浩	遠藤　作造
3	橋本　博	林　昭二	山田　輝雄
2	大塚　秀二	小笠原貢蔵	荒井　栄一
B	中田　富三 主	木原　良	浜林　正夫

第二選手競漕（水神一洗場）1,500m

	H	C	S
着順	②	③	①
C	柿本宗之助	手島　三郎	鈴木　稔
S 主	本多完五郎 主	高井　敬二	金子　尚美
7	堀江　昭	大石　勝五	川口　恵三
6	馬場　昭	高橋　信行 主	村田　英雄
5	嘗　恭二	牛島陽太郎	村山　和夫
4	村山　清	榎本　靖臣	加藤　智康
3	行木　陽一	中島　二郎	野口　保寿
2	矢島隆之輔	狩野　保宣	井関　昭
B	野田　栄	枝広　正純	加藤　薫

第五十九回春季競漕大会

昭和二十三年四月十八日

第一選手競漕（無風微順潮）（水神一言問）二千メートル

	H	C	S
着順	②	③	①
コーチ	高取　俊夫	藤井　良一	奥野　浩爾
C	小林　伸夫	佐藤　直	君塚　克美
S	矢島隆之輔	三堀正太郎	金子　尚美
7	行木　陽一	広沢　章	村山　和夫
6	馬場　昭	畑　弘恭	椎野　嘉
5 主	森　千昭	市川信三郎	村田　宏
4	鎌田　和夫	八田　義一	山本　忠雄
3	野田　栄	大石　勝五 主	井上　一郎
2	中山　英治	狩野　保宣	早川　栄一
B	堀江　昭 主	木原　良	田幡　恵一
マネ	片山　昌弥	山本　昂	豊村　芳郎

（第二選手なし）

第六十回春季競漕大会

昭和二十四年五月十五日

第一選手競漕（言問一水神）二千メートル（東大学部対抗と合同）（再々レース結果）

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	野村　邦夫	藤井　良一	角鹿　哲也
			奥野　浩爾
C	小林　伸夫	鈴木　啓之	君塚　克美
S	矢島隆之輔	吉村　一馬 主	村山　和夫
7	行木　陽一 主	三堀正太郎	山本　忠雄
6	塩野　要	八田　義一	早川　栄一
5 主	森　千昭	小野崎兼資	椎野　嘉
4	田中　和明	伊藤　鉞治	西村　博邦
3	曽野　瑞彦	西川　良	田幡　恵一
2	佐藤　和実	瀬田　慎吾	佐藤　清
B	中村　宏	山田　利夫	村田　宏

第六十一回春季競漕大会

昭和二十五年四月十六日

第一選手競漕（曇やや強風）（言問一水神）

	H	C	S
着順	②	①	③
C	大磯　幸雄	佐藤　直	鈴木　稔
S	矢島隆之輔 主	三堀正太郎 主	村山　和夫
7 主	森　千昭	畑　弘恭	田幡　恵一
6	田中　和明	八田　義一	山田　富三
5	曽野　瑞彦	小野崎兼資	山本　忠雄
4	塩野　要	瀬田　慎吾	西村　博邦
3	行木　陽一	吉村　一馬	椎野　嘉
2	佐藤　和実	伊藤　鉞治	佐藤　清
B	中村　宏	千葉　正皓	村田　宏

第二選手競漕

	H	C	S
着順	③	①	②
C	矢田　清明	蓮沼　昭男	君塚　克美

S	八神　寿也	安島　俊輔	畑　弘晃
3	木俣　滋郎	栗原　恒雄	仲野　実
2	内記　昭	柳田　昇	鈴木　藤雄
B	坂本　正吉	佐賀　紀正	山岡　三郎

第六十二回春季競漕大会

昭和二十六年四月二十二日

第一選手競漕　言問一水神二千メートル（西強風）

	H	C	S
着順	②	①	③
コーチ	野村　邦夫	山田　英雄	岡村　俊夫
C	矢田　清明	松本　譲治	君塚　克美
S	矢島隆之輔	瀬田　慎吾	佐藤　清
7 主	行木　陽一	栗原　恒雄	畑　弘晃
6	佐藤　和実 主	三堀正太郎 主	田幡　恵一
5	曽野　瑞彦	小泉　誠一	仲野　実
4	田中　和明	伊藤　鉸治	川島　雄次
3	大丸　司郎	藤山　昭也	山岡　三郎
2	塩野　要	星野　稔	西村　博邦
B	坂本　正吉	小野崎兼資	田辺耕一郎

第二選手競漕（クリンカー）

	H	C	S
着順	②	①	③
コーチ	馬場　昭	山田　英雄	荒井　栄一
	管　恭二		
C	高橋　剛	柏木　芳郎	瀬古　政一
S	桜井　勇	安島　俊輔	高山　和実
7	鈴木　章允	佐賀　紀正	井上　正義
6	長友　真理	藤原　隆二	川野　弘充
5	副田　佳宏	藤森　久弘	小暮　邦夫
4	林　幸一	村居　哲	有馬俊一郎
3	土谷　俊幸	柳田　昇	伊藤　章雄
2	田中　宏明	荻原　克英	村田　宏
B	鋤柄　義	金子　健吉	阿部　和司

昭和二十六年秋季小会

昭和二十六年十一月四日

第一選手競漕

	H	C	S
着順	③	②	①
コーチ	森　千昭	三堀正太郎	塚本　敬
	大礒　幸雄	瀬田　慎吾	畑　弘晃
	佐藤　和実	栗原　恒雄	佐藤　清
C	高橋　剛	松本　譲治	西村　博邦
S	桜井　勇	安島　俊輔	神谷　信能
7	大丸　司郎	杉山　方良	小暮　邦夫
6	長友　真理	星野　稔	川島　雄次
5	坂本　正吉	滝　芳正	越智　一夫
4	林　幸一	村居　哲	竹村　欣也
3	土谷　俊幸	松尾　弘人	西村　隆治
2	平田　栄治	吉田　修	高山　和実
B	鈴木　章允	金子　健吉	東　瑞穂

第二選手競漕

	H	C	S
着順	①	③	②
C	会田　晴康	谷　幹男	町井　直行
S	飯島　仙一	絹川太一郎	山田　敬一
7	関　良三	緒方　彪	児島　章郎
6	青戸　博邦	金田　圭司	村田　茂
5	浅田　正弘	木植　茂夫	桜井　安彦
4	高橋　裕生	村松豊一郎	後藤　浩巳
3	勝田　一彦	林　孝介	松永　剛
2	宇田川正信	勢多　章達	吉田　満
B	井上　信	中村　和夫	安田　順一

第六十三回春季競漕大会

昭和二十七年四月二十一日

第一選手競漕　八百松一言問二千メートル（北東3m　順潮）

	H	C	S
着順	③	①	②
コーチ	堀川富太郎	工藤　哲雄	塚本　敬
C	高橋　剛	蓮沼　昭男	瀬古　政一
S	桜井　勇 主	瀬田　慎吾	仲野　実
7	坂本　正吉	栗原　恒雄 井	畑　弘晃
6 主	佐藤　和実	藤原　隆二	神谷　信能
5	土谷　俊幸	藤山　昭也	村田　宏
4	長友　真理	藤森　久弘	山田　富三
3	大丸　司郎	小泉　誠一	児島　章郎
2	林　幸一	星野　稔	佐藤　清
B	中村　宏	緒方　彪	田幡　恵一

第二選手競漕（北東3m順潮）

	H	C	S
着順	③	①	②
コーチ	馬場　昭	三堀正太郎	村山　和夫
C	会田　晴康	柏木　芳郎	町井　直行
S	飯島　仙一	杉山　方良	村田　茂
7	浅田　正弘	滝　芳正	川島　雄次
6	青戸　博邦	絹川太一郎	桜井　安彦
5	勝田　一彦	林　孝介	小暮　邦夫
4	高橋　裕生	荻原　克英	吉田　満
3	田中　宏明	森川　昭男	西村　隆治
2	服部清太郎	村松豊一郎	山田　敬一
B	平田　栄治	金子　健吉	東　瑞穂

昭和二十七年秋季小会

昭和二十七年十月二十六日

第一選手競漕（快晴無風）

着順	H ②	C ①	S ③
C	会田　晴康	柏木　芳郎	上田　一郎
S	飯島　仙一	安島　俊輔	村田　茂
7	勝田　一彦	滝　芳正	小暮　邦夫
6	林　幸一	秋月　程賢	山田　敬一
5	浅田　正弘	木植　茂夫	金　秀太郎
4	高浦　民雄	小松崎利広	後藤　浩巳
3	並木　恒夫	林　孝介	西村　隆治
2	小室　俊一	村松豊一郎	吉田　満
B	大丸　司郎	金子　健吉	松永　剛

第二選手競漕

着順	H ①	C ②	S ③
C	村瀬　満	海老原靖幸	浜口　光宏
S	東海林義昭	堀田　久也	水崎　巌
7	中村　哲二	蕗沢　晴彦	桶川　幸雄
6	阿部　肇	小野　早苗	内川　敏雄
5	大岩　吉之	鳥海　巌	佐藤　浩一
4	桜井　栄	清水　定	寺本　隆一
3	河野　一夫	鈴木　芳治	植草　健
2	福村　邦夫	桑原　太吉	山井　輝彦
B	金子　雄美	都　价　生	山下　彬

第六十四回春季競漕大会

昭和二十八年四月十九日

第一選手競漕　言問一水神二千メートル（快晴無風、上げ始め殆ど静水）

着順	H ①	C ③	S ②
コーチ	佐藤　和実	瀬田　慎吾	佐藤　清
C	高橋　剛	清峰　太造　主	瀬古　政一
S　主	長友　真理	藤原　隆二	桜井　安彦
7	大丸　司郎　主	藤山　昭也	児島　章郎
6	土谷　俊幸	杉山　方良	村田　茂
5	勝田　一彦	藤森　久弘	水崎　巌
4	高浦　民雄	緒方　彪	寺本　隆一
3	並木　恒夫	林　孝介	桶川　幸雄
2	浅田　正弘	小松崎利広	山田　敬一
B	大岩　吉之	滝　芳正	金　秀太郎
マネ	宇田川正信	川喜多宏一	浜口　光宏
補			町井　直行

第二選手競漕（下げ止め静水）

着順	H ③	C ①	S ②
C	会田　晴康	桑原　太吉	上田　一郎
S	東海林義昭	絹川太一郎	佐藤　浩一
7	関　良三	金子　健吉	植草　健
6	桜井　栄	小野　早苗	山下　彬
5	阿部　肇	木植　茂夫	飯野　健
4	高橋　裕生	秋月　程賢	金原　啓延
3	斉部　政弘	鈴木　秀治	伊藤　章雄
2	平田　栄治	村松豊一郎	山井　輝彦
B	井上　清	森川　昭夫	安田　順一
補			内川　敏雄

昭和二十八年秋季小会

昭和二十八年十一月一日

第一選手競漕

着順	H ②	C ①	S ③
コーチ	長友　真理	瀬田　慎吾	佐藤　清
C	村瀬　満	望月　幸正	上田　一郎
S	高浦　民雄	絹川太一郎	寺本　隆一
7	勝田　一彦	小松崎利広	植草　健
6	土谷　俊幸	小野　早苗	山下　彬
5	大丸　司郎	成瀬　栄二	戸田　敬之
4	東海林義昭	秋月　程賢	高橋　泰和
3	阿部　肇	樋口　和也	矢口　晴彦
2	福村　邦夫	桑原　太吉	山井　輝彦
B	金子　雄美	鈴木　秀治	飯野　健
マネ	奥平　真三	清峰　太造	浜口　雄幸

第二選手競漕

着順	H ③	C ②	S ①
C	小林　宏	開野　嘉賢	久田　章雄
S	中藤　昭	山口　正光	吉田　陽吾
7	平田　隆造	佐藤　哲也	田口　格
6	河合　和昭	村松豊一郎	原　啓介
5	藤村　知勝	三枝　伸	松井　稔
4	石原　道郎	小原　順	藤井　晴文
3	加藤　卓	小森　芳明	村上　満男
2	大木　勇一	吉崎　英輔	林　義人
B	小林　孝司	海老原靖幸	五藤　昌平
補		守屋　徹	

第六十五回春季競漕大会

昭和二十九年四月二十五日

第一選手競漕　水神一言問　二千メートル

着順	H ②	C ③	S ①
コーチ	行木　陽一	工藤　哲雄	佐藤　清
	佐藤　和実	三堀正太郎	
	長友　真理	瀬田　慎吾	
C	村瀬　満	望月　幸正	町井　直行
S	飯島　仙一	杉山　方良	桜井　安彦
7	勝田　一彦	小松崎利広	児島　章郎
6	浅田　正弘	佐藤　哲也	寺本　隆一
5	並木　恒夫	緒方　彪	水崎　巌
4	阿部　肇	絹川太一郎	山田　敬一
3	高浦　民雄	滝　芳正	戸田　敬之
2	東海林義昭	堀田　久弥	村田　茂
B	大岩　吉之	鈴木　秀治	金　秀太郎
マネ	奥平　哲三	川喜多宏一	浜口　光宏

第二選手競漕

着順	H ①	C ③	S ②
C	小林　宏	海老原靖幸	五藤　昌平
S	田子　幸夫	桑原　太吉	高橋　泰和
7	平田　隆造	樋口　和也	植草　健
6	河合　和昭	山口　正光	吉田　陽吾
5	藤村　知勝	成瀬　栄二	樋川　幸雄
4	高尾　雄彦	長谷川治雄	林　義人
3	太田　実	小沢　敏夫	田口　格
2	石原　道郎	小原　順	山井　輝彦
B	井上　清	小森　芳明	村上　満男
マネ	小林　孝司	吉崎　英輔	山下　彬

昭和二十九年秋季競漕小会

昭和二十九年十月三十一日

第一選手競漕　言問―水神、順風微順潮

着順	H ①	C ②	S ③
コーチ	長友　真理	瀬田　慎吾	桜井　安彦
	浅田　正弘	緒方　彪	児島　章郎
マネ	高浦　民雄	小松崎利広	五藤　昌平
		小野　早苗	明石　勇
C	小林　宏	望月　幸正	久田　章雄
S	田子　幸夫	山口　正光	吉田　陽吾
7	平田　隆造	佐藤　哲也	戸田　敬之
6	石原　道郎	石川　威	高橋　泰和
5	藤村　知勝	成瀬　栄二	瀬田　五郎
4	高尾　雄彦	畑　弘能	土井　正
3	太田　実	藤田　昌己	石井　和雄
2	河合　和昭	鈴木　秀治	丸　磐根
B	大岩　吉之	樋口　和也	崔　文浩

第二選手競漕

着順	H ①	C ②	S ③
C	江崎　亮	松本謙太郎	楠原　正拓
S	中村　悌郎	井上　貞郎	榎本　洋介
7	星　正純	大竹　孝明	渡辺　尚之
6	藤本　間	峯村　栄	渋谷　栄介
5	河合　静雄	安原　和雄	槙田　庸見
4	平川　茂	後藤峯太郎	重松　成行
3	逢坂　章一	木村　文雄	高崎　滋
2	高梨　章一	吉崎　英輔	林　義人
B	加藤　卓	小森　芳明	野田　正道

第六十六回春季競漕大会

昭和三十年四月十七、十八日

第一選手競漕　向島

着順	H	C	S
コーチ	長友　真理	瀬田　慎吾	桜井　安彦
マネ	奥平　哲三	三枝	戸田　敬之
C	村瀬　満	開野　嘉賢	五島　昌平
S	東海林義昭	山口　正光	寺本　隆一
7	大岩　吉之	藤田　昌己	樋川　幸雄
6	阿部　肇	石川　威	土井　正
5	並木　恒夫	長谷川治雄	瀬田　五郎
4	藤本　間	高間　雄二	崔　文浩
3	太田　実	守屋　徹	槙田　庸見
2	桜井　栄	畑　弘能	山井　輝彦
B	藤村　知勝	樋口　和也	石井　和雄

第二選手競漕

着順	H	C	S
コーチ	勝田　一彦	緒方　彪	町井　直行
マネ	石原　道郎	佐藤	馬場　道夫
C	江崎　亮	松本謙太郎	楠原　正拓
S	高尾　民雄	井上　順雄	榎本　洋介
7	逢坂　章一	安原　和雄	野田　正道
6	平川　茂	山原	丸　磐根
5	星　正紀	藤田	高崎　滋
4	高梨　章	磯部　佳弘	重松　成行
3	河合　和昭	原　治平	西山日出男
2	中村悌一郎	吉崎　英輔	須貝　政男
B	河合　静雄	小森　芳明	林　義人

昭和三十年秋季小会

昭和三十年十月三十日

第一選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	高浦　民雄	緒方　彪	高橋　泰和
			吉田　陽吾
マネ	田子　幸雄	望月　幸正	渋谷　栄介
	平田　隆造		
	小林　孝司		
C	江崎　亮	松本謙太郎	楠原　正拓
S	中村悌一郎	石川　威	榎本　洋介
7	星　正紀	藤田　昌己	槙田　庸見
6	藤本　閲	福田　清成	鈴木　文雄
5	岩田　幸三	大竹　孝明	石原　幹也
4	上原　包	佐藤　幸雄	山東　裕美
3	森本　泰史	黒川　嘉郎	畑　弘郎
2	平川　茂	高間　雄二	福田　正之
B	河合　静雄	畑　弘能	高崎　滋

第二選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	大岩　吉之	小野　早苗	高橋　泰和
		佐藤　哲也	吉田　陽吾
マネ	田子　幸雄	望月　幸正	馬場　道夫
	平田　隆造		
	小林　孝司		
C	中田　徳郎	勝本　泰央	野沢　一男
S	立脇　堯	磯部	須貝　政男
7	加藤　博	秋田　修一	朝日　正男
6	高梨　章	吉田　充利	小路　英明
5	原田　佾介	大橋　喜治	広田　学
4	奥野　葆	後藤峯太郎	出沢　俊樹
3	板垣　幸雄	伊藤　正徳	三井
2	藤田　稔	岡本　節	辻巻　孝
B	安井　敏之	小西　恒彦	星　悠

第六十七回春季競漕大会

昭和三十一年四月二十二日

第一選手競漕　向島

	H	C	S
着順			
コーチ	勝田　一彦	緒方　彪	桜井　安彦
マネ	平川　茂	佐藤絢一郎	高崎　滋
			渡辺　尚之
C	中田　徳郎	松本謙太郎	五藤　昌平
S	加藤　博	高間　雄二	鈴木　文雄
7	藤村　知勝	成瀬　栄二	槙田　庸見
6	高雄　雄彦	石川　威	山東　裕美
5	逢坂　章一	長谷川治雄	戸田　敬之
4	藤本　閲	佐藤　幸雄	丸　磐根
3	河合　静雄	黒川　嘉郎	林　重人
2	上原　包	福田　清成	重松　成行
B	星　正紀	樋口　和也	野田　正道

第二選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	浅田　正弘	小松崎利広	町井　直行
マネ	森本　泰史	伊藤　正徳	広田　学
C	中川　学	木村　文雄	星　愈
S	立脇　堯	磯部　佳弘	福田　正之
7	原田　佑介	小森　芳明	西山日出男
6	高梨　章	岡本　節	辻巻　孝
5	板垣　幸雄	秋田　修一	畑　弘郎
4	松本　政彦	浅田　潤一	野沢　一男
3	大井　明	笠置　正洋	出沢　俊樹
2	田口　平	後藤峯太郎	三井　康
B	安井　敏之	小西　恒彦	小路　英明

昭和三十一年秋季小会

昭和三十一年十月二十八日

第一選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	勝田　一彦	藤田　昌己	土井　正
	平田　隆三		
マネ	安井　敏之	大和田　忍	石井　和雄
		望月　賢一	三井　康
		持田　実	
C	中田　徳郎	松本　格	星　愈
S	加藤　博	石川　威	榎本　洋介
7	板垣　幸雄	黒川　嘉郎	石原　幹也
6	上原　包	福田　清成	山東　裕美
5	逢坂　章一	秋田　修一	畑　弘郎
4	立脇　堯	内藤　元巳	鈴木　文雄
3	岩田　幸三	広岡　幸夫	西村　浩二
2	松本　政彦	佐藤　幸雄	福田　正之
B	大井　明	笠置　正洋	小路　英明

第二選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	田子　幸夫	畑　弘能	瀬田　五郎
	江崎　亮		

マネ	安井　敏之	大和田　忍	石井　和雄
		望月　賢一	三井　康
		持田　実	
C	吉留　敬高	蠣田　春久	小山　一郎
S	本多　敏男	渡辺　宏之	田中　俊雄
7	田中　茂	小西　恒彦	野沢　一男
6	山田　俊彰	吉田　充利	菅井　弘之
5	森本　泰史	伊藤　正徳	出沢　俊樹
4	佐藤　晃	渡辺　俊一	丸子　博之
3	田中　政彦	高山　治	辻巻　孝
2	白石　武夫	岡本　節	広田　学
B	江面　誠一	荻原　道夫	芝田正次郎

第三選手競漕　フォア

	H	C	S
着順			
コーチ	田子　幸夫	佐藤　哲也	崔　文浩
	江崎　亮		
マネ	安井　敏之	大和田　忍	石井　和雄
		望月　賢一	三井　康
		持田　実	
C	中川　学	山川　仁	藤井　治彦
S	馬場　肇	北村　輝文	宮田　和昭
3	清水　武	山元　淑弘	森　浩平
2	石井　利一	松崎　一	鈴木　健之
B	田中　正満	上田　伊久	森　史礼

第六十八回春季競漕大会

昭和三十二年四月二十一日

第一選手競漕　向島

	H	C	S
着順			
コーチ	浅田　正弘	小松崎利広	桜井　安彦
マネ	安井　敏之	勝本　泰史	高崎　滋
		持田　実	
C	中田　徳郎	蠣田　春久	星　愈
S	加藤　博	高間　雄二	崔　文浩
7	板垣　幸雄	黒川　嘉郎	瀬田　五郎
6	上原　包	畑　弘能	土井　正
5	逢坂　章一	藤田　昌己	畑　弘郎
4	松本　政彦	福田　清成	山東　裕美
3	田中　茂	広岡　幸夫	石井　和雄
2	立脇　堯	石川　威	榎本　洋介
B	河合　静雄	笠置　正洋	石原　幹也

第二選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	浅田　正弘	佐藤　哲也	町井　直行
マネ	安井　敏之	秋田　修一	槙田　庸見
		伊藤　正徳	
C	吉留　敬高	松本　格	藤井　治彦
S	吉木　健雄	渡辺　宏之	福田　正之
7	大井　明	小西　恒彦	西村　浩二
6	田中　正満	内藤　元巳	丸子　博之
5	森本　泰史	高山　治	田中　俊雄
4	本多　敏男	佐藤　幸雄	鈴木　文雄
3	清水　武	上田　伊久	西山日出男
2	市川　豊	渡辺　俊一	菅井　弘之
B	石井　利一	山元　淑弘	宮田　和昭

第三選手競漕　ナックルフォア

	H	C	S
着順			
コーチ	浅田　正弘	望月　幸正	吉田　陽吾
マネ	安井　敏之	北村　輝之	高崎　滋
C	江崎　亮	山川　仁	高井　秀雄
S	中村悌一郎	吉田　充利	広田　学
7	藤本　閏	小川　昌一	芝田正次郎
6	高梨　章	山本　拓	鈴木　健之
5	田中　政彦	荻原　道夫	野田　正道

昭和三十二年秋季小会

昭和三十二年十月二十七日

第一選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	浅田　正弘	黒川　嘉郎	石原　幹也
	加藤　博	畑　弘能	
マネ	藤本　閏	伊藤　正徳	崔　文浩
		岡本　節	
C	吉留　敬高	松本　格	高井　秀雄
S	田中　正満	渡辺　宏之	菅井　弘之
7	田中　茂	広岡　幸夫	西村　浩二
6	板垣　幸雄	内藤　元巳	鈴木　文雄
5	早乙女正己	高山　治	桑名　正洋
4	大内　正三	林　俊介	本多　孟
3	安藤　博	稲垣　正武	岡田　俊彦
2	吉木　健雄	広田　真幸	田中　俊雄
B	鈴木　崇司	小西　恒彦	芝田正二郎

第二選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	浅田　正弘	石川　威	山東　裕美
	加藤　博		
マネ	藤本　閏	笠置　正洋	崔　文浩
C	須田　宗克	蠣田　春久	藤本啓一郎

S	黒田　晴二	渡辺　俊一	徳永　昌信
7	石井　利一	上田　伊久	森　浩平
6	山地　宏明	松崎　一	宮田　和昭
5	有賀　孟	小林　幹雄	坂倉　正宣
4	小沢　哲夫	北村　輝文	上原　亮三
3	穂塚　重行	山元　淑弘	宮井　基雄
2	笠井　良夫	軽部　久雄	大公　一郎
B	田中　政彦	岸　均	鈴木　健之

第三選手競漕

	H	C—A	C—B	S
着順				
コーチ	浅田　正弘	藤田　昌己	藤田　昌己	石井　和雄
	上原　包			
マネ	藤本　閲	福田　清成	福田　清成	崔　文浩
C	清水　武	山本　拓	大和田　忍	藤井　治彦
S	日比　俊一	土屋　忠正	望月　賢一	渡辺　慎二
3	渡辺　幹彦	山川　仁	高木　俊志	熊崎　皓一
2	江頭　健之	竹井　忠夫	大橋　一慶	広瀬隆一郎
B	福留　淳之	橋詰　渡	長船　俊彦	小山　一郎

第六十九回春季競漕大会

昭和三十三年四月二十日

第一選手競漕　向島

	H	C	S
着順	②	③	①
コーチ	浅田　正弘	緒方　彪	仲野　実
マネ	安井　敏之	大和田　忍	土井　正
		荻原　道夫	
	清水　武	大橋　一慶	丸子　博之
C	中川　学	松本　格	藤本啓一郎
S	加藤　博	渡辺　俊一	菅井　弘之
7	板垣　幸雄	小西　恒彦	畑　弘郎
6	上原　包	小林　幹雄	本多　孟
5	鈴木　崇司	稲垣　正武	桑名　正洋
4	田中　正満	竹井　忠夫	鈴木　文雄
3	安藤　博	秋田　修一	出沢　俊樹
2	松本　政彦	広田　真幸	徳永　昌信
B	田中　茂	笠置　正洋	田中　俊雄

第二選手競漕

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	江崎　亮	石川　威	崔　文浩
	逢坂　章一	福田　清成	
マネ	安井　敏之	伊藤　正徳	上原　亮三
	清水　武	吉田　充利	広瀬隆一郎
C	須田　宗克	蝸田　春久	高井　秀雄
S	大内　正三	土屋　忠正	小路　英明
7	石井　利一	上田　伊久	芝田正二郎
6	吉木　健雄	軽部　久雄	双川　武治
5	日比　俊一	高木　俊志	半田　正雄
4	笠井　良夫	岸　均	大　公一郎
3	渡辺　幸彦	長船　俊彦	坂倉　正宣
2	本多　敏男	青山　隆之	渡辺　慎二
B	田中　政彦	山元　淑弘	小林　四郎

昭和三十三年秋季小会

昭和三十三年十一月二日

第一選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	浅田　正弘	藤田　昌己	崔　文浩
			西村　浩二
マネ	田中　茂	山元　淑弘	石原　幹也
		望月　賢一	山東　裕美
C	須田　宗克	松本　格	藤本啓一郎
S	大内　正三	内藤　元巳	徳永　昌信
7	安藤　博	広岡　幸夫	半田　正雄
6	田中　正満	竹井　忠雄	本多　孟
5	鈴木　崇司	稲垣　正武	桑名　正洋
4	野上　浩	広瀬　国基	森村　大作
3	森下　一乗	柳沢　惇	岡田　俊彦
2	黒田　晴二	大村　繁雄	菅井　弘之
B	日比　俊一	広田　真幸	田中　俊雄

第二選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ	板垣　幸雄	藤田　昌己	山東　裕美
		黒川　嘉郎	
マネ	清水　武	山元　淑弘	丸子　博之
		望月　賢一	
C	藤井　弘和	福島　明男	渡辺　慎二
S	笠井　良夫	土屋　忠正	宮井　基雄
7	田中　政彦	高木　俊志	板倉　正宣
6	柳沢　健治	軽部　久雄	双川　武治
5	早乙女正巳	上田　正三	鈴木　武雄
4	山地　宏明	青山　隆之	藤井研一郎
3	藤井　正人	松本　光史	鈴木　健之
2	原　良三	飯塚　茂	大　公一郎
B	大藤　吾一	岸　均	小林　四郎

第三選手競漕

	H	C	S
着順			
コーチ		藤田　昌己	
C		林　俊介	

S	武藤　嘉孝
3	大久保元三郎
2	角田　史郎
B	宮田　晨生

第七十回春季競漕大会

昭和三十四年四月十二日

第一選手競漕　向島（シェルエイト）

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	浅田　正弘 中田　徳郎	瀬田　慎吾	石井　和雄
マネ	清水　武	山川　仁	大公　一郎
C	須田　宗克	松本　格	高井　秀雄
S	大内　正三	渡辺　宏之	田中　俊雄
7	安藤　博	高木　俊志	半田　正雄
6	田中　正満	大村　繁雄	森村　大作
5	野上　浩	軽部　久雄	藤井研一郎
4	吉木　健雄	小林　幹雄	丸子　博之
3	日比　俊一	松本　光史	桑名　正洋
2	黒田　晴二	土屋　忠正	菅井　弘之
B	藤井　正人	大久保元三郎	坂倉　正宣

第二選手競漕　（ナックルフォア）

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	上原　包	瀬田　慎吾	石原　幹也
マネ	石井　利一	山川　仁	大公　一郎
C	田中　政彦	福島　明男	小山　一郎
S	笠井　良夫	飯塚　茂	上原　亮三
3	田中　茂	山元　淑弘	小林　四郎
2	森下　一乗	大川　洋平	加藤　恵三
B	大藤　吾一	角田　史郎	宮田　和昭

昭和三十四年秋季小会

昭和三十四年十月二十五日

第一選手競漕　向島

	H	C	S
着順	②	①	③
コーチ	東海林義昭	藤田　昌巳 広岡　幸夫	石井　和雄 西村　浩二
マネ	田中　茂	青山　隆之	芝田正次郎
C	高橋　幸夫	松本　格	小山　一郎
S	大内　正三	土屋　忠正	森村　大作
7	藤井　正人	大久保元三郎	桑名　正洋
6	森下　一乗	竹井　忠夫	藤井研一郎
5	大村　庄司	松本　光史	戸谷　俊弘
4	青山　克彦	広瀬　国基	上原　亮三
3	大藤　吾一	尾藤　健二	田中　伸次
2	登里　貞治	大川　洋平	坂倉　正宣
B	原　良三	高木　俊志	半田　正雄

第二選手競漕

	H	C	S
着順	①	③	②
コーチ	田中　正満 吉木　健雄	藤田　昌巳 軽部　久雄	石井　和雄 田中　俊雄
マネ	須田　宗克	上田　正三 宮田　晨生	高井　秀雄
C	鈴木　義尚	永山　芳男	中田　智夫
S	志賀　司信	飯塚　茂	栗田　房穂
7	綿貫　武	人見　裕	吉田　耕造
6	岩本田麻呂	角田　史郎	小川　浩男
5	兼松　通彦	大神　宜也	鹿島　耕
4	大坂　一義	尾崎　昭雄	岩瀬　隆俊
3	川口　博正	最所　崇文	三橋　喜文
2	後藤　育夫	山下　輝男	記内　博高
B	野村　覚蔵	山川　仁	大矢　鉄夫

第三選手競漕

	H	C	S
着順			独漕
コーチ			石井　和雄 田中　俊雄
C			高井　秀雄
S			井手　清明
3			山口　真人
2			長沢　弘
B			小林　四郎

第七十一回春季競漕大会

昭和三十五年七月三十一日

第一選手競漕　向島

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	東海林義明	藤田　昌巳	本多　孟
C	鈴木　義尚	福島　明男	中田　智夫
S	大内　正三	土屋　忠正	徳永　昌信
7	藤井　正人	大久保元三郎	戸谷　俊弘
6	森下　一乗	広瀬　国基	記内　博高
5	日比　俊一	最所　崇文	半田　正雄
4	原　良三	大川　洋平	木村　希一
3	野村　覚三	上田　正三	山下　康弘
2	青山　克彦	飯塚　茂	本多　孟
B	大村　庄司	松本　光史	三橋　喜文

第二選手競漕（ナックルシックス）

	H	C	S
着順	①	③	②
コーチ	江崎　亮	内藤　元巳	本多　孟
C	久保修太郎	原　洋二郎	大西　節男
S	志賀　司信	押田　徹也	宮井　基雄
5	登里　貞治	大神　宣也	鹿島　耕
4	岩本田麻呂	尾崎　昭雄	立石　武士
3	川口　博正	岩城　明良	山下　善久
2	海野　勝	荒井　敏彦	岡田　竜二
B	後藤　育夫	加藤信一郎	佐藤　義昭

第三選手競漕（ナックルフォア）

	H	C	S
着順	①	③	②
コーチ	吉木　健雄	軽部　久雄	本多　孟
C	水口　幸治	吉田　久雄	小林　四郎
S	岩瀬　愈	角田　史朗	双川　武治
3	赤木　明宏	田村　公孝	桑名　正洋
2	厩橋　輝男	青山　隆之	上原　亮三
B	大坂　一義	岸　均	坂倉　正宣

昭和三十五年秋季小会

昭和三十五年十月三十日　向島

第一選手競漕

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	浅田　正弘	緒方　彪 瀬田　慎吾	藤本啓一郎
マネ	黒田　晴二	松本　格	上原　亮三
C	鈴木　義久	山下　輝男	藤本啓一郎
S	大内　正三	内藤　元巳	本多　孟
7	安藤　博	稲垣　正武	田中　伸次
6	柳沢　健治	竹井　忠夫	小川　浩男
5	鈴木　崇司	松本　光史	山下　康弘
4	野上　浩	大川　洋平	粟田　房穂
3	日比　俊一	最所　崇文	山下　善久
2	登里　貞治	広瀬　国基	森村　大作
B	藤井　正人	尾藤　建二	戸松　俊弘

第二選手競漕

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	江崎　亮	渡辺　宏之	石井　和雄
マネ	笠井　良夫	軽部　久雄	双川　武治
C	久保修太郎	原　洋二郎	本田　幸吉
S	青山　克彦	土屋　忠正	岡田　龍二
7	野村　覚蔵	大神　宣也	三橋　喜文
6	後藤　育夫	尾崎　昭雄	立石　武士
5	川口　博正	上田　正三	木村　希一
4	海野　勝	荒井　敏彦	川手　清明
3	赤木　朋宏	田村　公孝	佐藤　義明
2	志賀　司昌	押田　徹也	大　公一郎
B	大村　庄司	人見　裕	坂倉　正宣

第三選手競漕（ナックル／シックス）フレッシュメン

	H	C	S	H
着順	①	②	③	独漕
コーチ	上原　包	藤田　昌己	崔　文浩	上原　包
マネ	原　良三	福島　明男	桑名　正洋	岩本田麻呂
C	須田　宗克	吉田　久雄	中田　智夫	山本　靖彦
S	岩瀬　愈	松浪　壮一	上原　亮三	上野　郁夫
5	綿貫　武	加藤信一郎	半田　正雄	山田　晃
4	大坂　一義	宮地　勝利	山本　武利	荻原　惇
3	大須賀　守	矢口　俊郎	蛭川　隆夫	大山　金男
2	厩橋　輝男	小豆沢	石井　光雄	
B	藤井　克男	池田　和興	鹿島　耕	

第七十二回春季競漕大会

昭和三十六年六月十八日　向島

第一選手競漕

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	江崎　亮	小松崎利広	榎本　洋介 鈴木　文雄
C	久保修太郎	吉田　久雄	中田　智雄
S	厩橋　輝男	大川　洋平	岩瀬　隆俊
7	藤井　勝男	大久保元三郎	戸谷　俊弘
6	岩瀬　愈	上田　正三	菱山　耕志
5	川口　博正	松本　光史	鹿島　耕
4	原　良三	山下　輝男	穂積　大輔
3	野村　覚蔵	人見　裕	山崎　常光
2	志賀　司昌	押田　徹也	早川　剛
B	大村　庄司	大神　宣也	三橋　喜文

第二選手競漕（ナックルシックス）

	H	C	S
着順	①	②	㊂
コーチ	中田　徳郎	小松崎利広	榎本　洋介 鈴木　文雄
C	遊佐　伸彦	青木　寛夫	佐藤　義明
S	上野　郁夫	松浪　荘一	土屋　一弘
5	草深　泰明	堀本　良雄	斉間　武
4	長谷川　晨	横井　次郎	清水　正敏
3	金谷　俊彦	藤沢　忠雄	城　稔
2	大坂　一義	伊佐早昌司	川上　進

B	綿貫　武	佐藤　之敏	巽　重機

第三選手競漕（ナックルフォア）

	H	C	H
着順	①	②	独漕
コーチ	上原　包	小松崎利広	
C	大山　金男	福島　明男	鈴木　義尚
S	政井　孝道	池田　重郎	柳沢　健治
3	吉沢　隆平	塚野　文彦	藤井　正人
2	荻原　惇	綿引　充	井畔　紘一
B	田中　勝美	矢野　直喜	谷村　元

昭和三十六年秋季小会

昭和三十六年十月二十一日　戸田

第一選手競漕

	H	C	S
着順	②	③	①
コーチ	鈴木　崇司	渡辺　宏之	藤本啓一郎
マネ	志賀　司昌	上田　正三	三橋　喜文
C	遊佐　伸彦	原　洋二郎	本多　幸吉
8	登里　貞治	尾藤　建二	岡田　龍二
7	野上　浩	荒井　敏彦	山下　康弘
6	柳沢　健治	田村　公孝	立石　武士
5	大須賀　守	宮地　勝利	小川　浩男
4	赤木　朋宏	最所　崇文	田中　伸次
3	海野　勝	広瀬　国基	木村　希一
2	藤井　正人	加藤信一郎	栗田　房穂
B	青山　克彦	大川　洋平	山下　善久

第二選手競漕（ナックルフォア）

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	大内　正三	渡辺　宏之	藤本啓一郎
マネ	志賀　司昌	大久保元三郎	三橋　喜文
C	荻原　惇	福島　明男	中田　智久
S	森下　一乗	松浪　壮一	早川　剛
3	大山　金男	大神　宣也	山崎　常光
2	山田　晄	押田　徹也	穂積　大輔
B	藤井　克男	伊佐早昌司	佐藤　義明

第三選手競漕

	H	C	S
着順	①	③	②
コーチ	安藤　博	渡辺　宏之	丸子　博之
マネ	志賀　司昌	上田　正三	三橋　喜文
C	久保修太郎	青木　寛夫	杉山　忠良
S	政井　孝道	山下　輝男	川手　清明
7	田中　勝美	藤沢　忠雄	斉間　武
6	金谷　俊彦	横井　次郎	清水　正敏
5	吉沢　隆平	塚野　文彦	城　稔
4	長谷川　晨	池田　重郎	土屋　一弘
3	佐々木信義	堀本　良雄	戸谷　俊弘
2	井畔　紘一	矢野　直喜	片岡　敬三
B	草深　泰明	綿引　充	巽　重機
			綱川
			菱山　浩志

春季競漕会

（この年から春季大会は秋季大会になる）

昭和三十七年六月十日　向島

第一選手競漕

	H	C	S
着順	②	（沈没）	①
コーチ	江崎　亮	広岡　幸夫	森村　大作
	中田　徳郎		
C	遊佐　伸彦	青木　寛夫	杉山　忠良
S	田中　勝美	尾藤　建二	岡田　龍二
7	大須賀　守	藤沢　忠雄	斎間　武
6	長谷川　晨	田村　公孝	小川　浩男
5	吉沢　隆平	塚野　文彦	山下　善久
4	政井　孝道	最所　崇文	穂積　大輔
3	佐々木信義	宮地　勝利	早川　剛
2	青山　克彦	堀本　良雄	栗田　房穂
B	藤井　克男	矢野　直喜	山崎　常光

第二選手競漕

	H	C	S
着順	②	①	③
コーチ	江崎　亮	広岡　幸夫	森村　大作
	中田　徳郎		
C	久保修太郎	原　洋二郎	中田　智夫
S	屍橋　輝男	山下　輝男	清水　正敏
7	大山　金男	綿引　充	戸谷　俊弘
6	金谷　俊彦	池田　重郎	菱山　浩志
5	草深　泰明	伊佐早庄司	小林　大寿
4	荻原　惇	押田　徹也	坂野　洋一
3	近堂　一郎	豊田　雅孝	城　稔
2	井畔　紘一	松浪　壮一	川手　清明
B	山田　晄	大神　宣也	巽　重機

第三選手競漕（ナックル・フォア）

	H	C	S
着順	①	②	③
コーチ	江崎　亮	広岡　幸夫	森村　大作
	中田　徳郎		
C	長田　恵次	伊藤　勇	三橋　喜文
S	稲垣　徹	大内多喜男	町田　晶生
3	小川　勝美	森　正義	村上　驍
2	渋谷　義行	角田　芳樹	吉田　佑一

B	当麻　友代	上田　正三	塙　勝良

第七十三回秋季競漕大会

昭和三十七年十月二十八日　戸田　荒川

（オリンピックに備えて工事中のためコースは使用不能この年より春季大会はとりやめ）

第一選手競漕（シェルエイト）

	H	C	S
着順	①	②	③
舵手	遊佐　伸彦	青木　寛夫	本多　幸吉
整調	登里　貞治	藤沢　忠雄	小川　浩男
七番	吉沢　隆平	田村　公孝	田中　伸次
六番	青山　克彦	塚野　文彦	立石　武士
五番	長谷川　晨	最所　崇文	木村　希一
四番	政井　孝道	矢野　直喜	早川　剛
三番	佐々木信義	堀本　良雄	斉間　武
二番	田中　勝美	茂井　敏彦	岡田　竜二
舳手	藤井　克男	綿引　充	山下　善久

第二選手競漕（ナックルシックス）

	H	C	S
着順	①	②	③
舵手	伯野　乙彦	原　洋二郎	平野　勝洋
整調	井畔　紘一	山下　輝男	菱山　浩志
五番	小川　勝美	大内多喜男	山崎　常光
四番	稲垣　徹	池田　重郎	粟田　房穂
三番	当麻　友代	豊田　雅孝	戸谷　俊弘
二番	金谷　俊彦	松浪　壮一	川手　清明
舳手	野村　覚蔵	森　正義	三橋　喜文

第三選手競漕（ナックルフォア）

	H	C	S	S
着順	②	③	①	（独漕）
舵手	綿貫　武	伊藤　勇	鹿田　宏一	片岡　敬三
整調	大阪　一義	押田　徹也	吉田　幹則	町田　昌生
三番	川口　博正	結城　宇明	坂野　洋一	加賀美隆夫
二番	庄司　政義	角田　芳樹	森　一将	村上　驍
舳手	大村　庄司	宮地　勝利	小林　大寿	塙　勝良

昭和三十八年夏季小会

昭和三十八年七月二十八日　向島

第一選手競漕（エイト）

	H	C	S
着順	①	③	②
舵手	久保修太郎	青木　寛夫	平野　勝洋
整調	田中　勝美	山下　輝男	町田　晶生
七番	大須賀　守	綿引　充	塙　勝美
六番	金谷　俊彦	池田　重郎	穂積　大輔
五番	佐々木信義	堀本　良雄	早川　剛
四番	岩瀬　愈	矢野　直喜	菱山　浩志
三番	近堂　一郎	溜箭　隆司	山崎　常光
二番	当麻　友代	松浪　壮一	片岡　敬三
舳手	藤井　克男	奥村　徹	加賀美隆夫

第二選手競漕（ナックルシックス）

	H	C	S
着順	①	②	③
舵手	萩原　惇	御村　治雄	本多　幸吉
整調	木郷　元秀	西尾　征郎	岡田　龍二
五番	伯野　乙彦	押田　徹也	加藤　和幸
四番	藤原　洋志	青山　守	佐藤九州雄
三番	下里　俊二	磯崎　幸	中村晋太郎
二番	加納　正三	原　洋二郎	泰井　俊介
舳手	永井　邦雄	角田　芳樹	中村　恒雄

第七十四回秋季競漕大会

昭和三十八年十一月十日　向島

第一選手競漕（エイト）

	H	C	S
着順	②	①	③
舵手	遊佐　伸彦	原　洋二郎	本多　幸吉
整調	政井　孝道	豊田　雅孝	町田　昌生
七番	金谷　俊彦	田村　公孝	坂野　洋一
六番	吉沢　隆平	藤沢　忠雄	立石　武士
五番	庄司　政義	大内多喜男	木村　希一
三番	本郷　元秀	池田　重郎	森　一将
三番	当麻　友代	綿引　充	早川　剛
二番	青山　克彦	矢野　直喜	岡田　龍二
舳手	田中　勝美	森　正義	山下　善久

第二選手競漕（ナックルシックス）

	H	C	S
着順	③	①	②
舵手	本田　英生	御村　治雄	平野　勝洋
整調	岩瀬　愈	荒井　敏彦	加藤　和幸
五番	永井　邦雄	磯崎　幸	中村　恒雄
四番	藤原　洋志	青山　守	小林　大寿
三番	下里　俊二	溜箭　隆司	中村晋太郎
二番	伯野　乙彦	山下　輝男	加賀美隆夫
舳手	大山　金男	奥村　徹	戸塚　健彦

第三選手競漕（ナックルフォア）

	C
	独漕
舵手	角田　芳樹
整調	松浪　壮一

三番　尾藤　健二
二番　押田　徹也
舳手　横井　次郎

第七十五回秋季競漕大会

昭和三十九年　月　日

第七十六回秋季競漕大会

昭和四十年　月　日

第七十七回秋季競漕大会

昭和四十一年十一月二十七日　戸田

第一選手競漕（エイト）

	H	S	C
着順	②	①	③

第二選手競漕（ナックルフォア）

	H	C	S
着順	②	（棄権）	①

第七十八回秋季競漕大会

昭和四十二年十一月五日　戸田

第一選手競漕（エイト）

	H	C	S
着順			
舵手	香川　満	藤原　章彦	井口　秀実
整調	村井　靖人	柳瀬　真澄	吉田　正則
七番	青木　要輔	岡田　礎	森岡　暁
六番	白崎　憲二	三沢　良祐	松岡　史朗
五番	谷　逸夫	宇佐美元也	安田　幸治
四番	小林　靖夫	杉崎　宏光	岩井淳一郎
三番	赤木　功昇	小林　広実	平田　省三
二番	加藤　晴幸	田辺　明	塚本　晋作
舳手	石岡　信	小川　智	江川　正

第二選手競漕（ナックルフォア）

	H	C	S
着順			
舵手	前田　光幸		岡田　重行
整調	紀伊　隆三		武良　敬治
三番	太田　道雄		高橋　伸夫
二番	曽田　立夫		深井　麗雄
舳手	宇野　透		近藤　好

第七十九回秋季競漕大会

昭和四十三年十一月二十四日　戸田

第一選手漕漕

	H	C	S
着順	②	①	③

第二選手競漕

	H	C	S
着順	②	①	（棄権）

第八十回秋季競漕大会

昭和四十四年十一月十六日　戸田

大優勝旗争奪競漕　第一選手競漕　シェルエイト　二千メートル

	H	C	S
着順	②	③	①
整調	佐伯　貞幹	田辺　明	武良　敬治
七番	清水　高志	小林　広実	平田　省三
六番	曽田　立夫	美原　融	本郷　祥介

五番	北川　鳴海	河村　憲二	川端　祥当
四番	野上　　衛	内藤　新蔵	太田　文雄
三番	小泉　克人	柳瀬　真澄	武藤　秀一
二番	菓子野　広	加藤　　博	松岡　史朗
舳手	谷　　逸夫	吉村　　明	風間　秀樹
舵手	香川　　滴	荻原　旭光	岡田　重行

倫敦杯争奪競漕　第二選手競漕　シェルフォア　千メートル

	H
着順	（独漕）
整調	小林　靖夫
三番	上田　伸一
二番	中村　純一
舳手	杉山　和広
舵手	紀伊　隆之

第三選手競漕　シングルスカル　五百メートル

	C	S
着順	①	②
	川村　裕英	中島　　清

第八十一回秋期競漕大会

昭和四十五年　月　日

第八十二回秋季競漕大会

昭和四十六年十一月十四日　戸田

第一選手競漕（エイト）

	H	C	S
着順	③	①	②
コーチ	永井　邦雄	合田　正彦	加藤　和幸
	白井　宏和	宇佐見元也	大先　一正
整調	木田　隆平　主	内藤　新蔵　主	本郷　祥介
七番	宮武　　剛	加地　俊彦	関　　和範
六番	菓子野　広	望月　一成	太田　文雄
五番	渡辺　　啓	内藤　敏雄	浜崎　成司
四番	設楽　哲也	井上　　良	安藤　友章
三番	杉山　和宏	谷　　充史	長田　弘之
二番　主	秋山健一郎	永江　一剛	株木　　博
舳手	中村　純一	桑原　新一	高浜五三巳
舵手	組野　　繁	加藤　　博	田原　賢明

第二選手競漕（シングルスカル）

	H	C	S
着順	③	①	②
	入山　規一	篠田　博之	岩本　　保

第三選手競漕（女子ダブルスカル）

	H	C	S
着順	②	③	①
整調	井上　和子	田辺　豊子	桜井　玲子
舳手	後藤かや子	辻村みよ子	三谷　利江

第八十三回秋季競漕大会

昭和四十七年十二月十五日　戸田

第一選手競漕　二千メートル

	H	C	S
着順	①	③	②
コーチ	白井　宏和	合田　正彦	本郷　祥介
整調	菓子野　広	浜岡　敬祐	太田　文雄
七番	柴本　泰宏	内藤　敏雄	浜崎　成司
六番	設楽　哲也	椎名　政幸	越田得伍郎
五番	田谷　　純	播磨　俊和	児玉　克己
四番	宮武　　剛	塚田　俊彦	逢見　直人
三番	辰己　　順	井上　　良	長田　弘之
二番	上田　　伸	内藤　新蔵	高浜五三巳
舳手	岩下　久人	扇屋　秀行	岩本　　保
舵手	組野　　繁	加藤　　博	熊埜御堂真

第二選手競漕

	H	C	S
着順	①	③	②
整調	木田　隆平	永江　一剛	株木　　博

第八十四回秋季競漕大会

昭和四十八年十二月二十三日

第一選手競漕（エイト）　千五百メートル

	H	C	S
着順	①	③	②
舵手	山田　　司	柿原　健一	熊埜御堂真
整調	藤井　泰輔	和田　好史	本庄　謙一
七番	柴木　泰宏	井上　　良	宮武　祥夫
六番	木田　隆平	塚田　俊彦	越田得五郎
五番	岩下　久人	山本　剛士	本橋　浩道
四番	小形　滋彦	塩山　弘蔵	株木　　博
三番	狩生　信安	鈴木　　仁	浜崎　成司
二番	木林　寛重	永江　一剛	逢見　直人
舳手	田谷　　純	椎名　政幸	岩木　　保

第二選手競漕（シングルスカル）千五百メートル

	H	C	S
着順	②	③	①
	辰巳　順	浜岡　敬祐	児玉　克己

第八十五回秋季競漕大会

昭和四十九年十二月一日　戸田

	H	C	S
着順	②	①	③
整調	日高　順一	長谷川　優	山岸　昌弘
七番	柴本　泰宏	内藤　敏雄	加地　俊彦
六番	斉藤　力	清水　治	株木　博
五番	熊谷　泰	伊藤　寛泰	上南　達郎
四番	片柳　雅博	相場　正樹	斉藤　則行
三番	横山　雅仁	井上　良	長田　弘之
二番	木田　隆平	永江　一則	浜崎　成司
舳手	四方田康博	村松　康延	山船　茂樹
舵手	辰巳　順	塩山　弘茂	林　大樹

第八十六回秋季競漕大会

昭和五十年十一月二十二日　戸田

第一選手競漕（エイト）千五百メートル

	H	C	S
着順	③	②	①
舵手	岡本　哲哉	榊原　健一	熊埜御堂真
整調	岩下　久人	清水　治	越田得伍郎
七番	柴本　泰宏	村松　康延	山舟　茂樹
六番	津布久祐次	浜岡　敬祐	上南　達郎
五番	田谷　純	鴨井　和宏	本橋　造道
四番	折本　洋紀	長谷川　優	大枝　宏之
三番	江藤　修治	清野　明	葉山　峻
二番	片柳　雅博	塚田　俊彦	逢見　直人
舳手	辰巳　順	椎名　政彦	高見沢昌彦

第八十七回秋季競漕大会

昭和五十一年十一月二十日　戸田

第一選手競漕（エイト）千五百メートル

	H	C	S
着順	②	③	①
舵手	坂東　正章	難波　一弘	林　大樹
整調	吉安　乙起	宮丸　徹	油谷　隆
七番	福重　隆一	和田　好史	宮武　祥夫
六番	藤井　泰輔	山本　剛士	本庄　謙一
五番	江藤　修治	石川　敏之	吉田　浩
四番	小形　滋彦	塩山　弘蔵	東　哲也
三番	黒田　敏彦	内藤　雅和	本橋　浩道
二番	小林　寛重	日野　泰伸	松下　裕
舳手	馬場慎一郎	鈴木　仁	森　淳

第二選手競漕（シングルスカル）千五百メートル

	H	C	S
着順	②	③	①
	津布久祐次	鴨井　和宏	高見沢昌彦

第三選手競漕（ダブルスカル）千メートル

	H	C	S
着順	①	②	③
整調	折本　洋紀	山田　保	山船　茂樹
舳手	岡本　哲也	村松　康延	上加世田策

第八十八回秋季競漕大会

昭和五十二年十一月二十七日　戸田

第一選手競漕（エイト）二千メートル

	H	C	S
着順	③	②	①
舵手	山本　雄司	鈴木　司	林　大樹
整調	藤井　泰輔	半田　治充	清水　治
七番	熊谷　泰	伊藤　寛泰	山本　浩文
六番	長友　崇敏	相場　正樹	小川　英穂
五番	上南　達郎	北村　雅彦	枡本　守生
四番	阿部　秀幸	山崎　晃生	本多　孝
三番	青島　秀治	中野　孝造	山船　茂樹
二番	片柳　雅博	長谷川　優	小野沢康夫
舳手	神崎　裕己	村松　康延	村松　義郎

第二選手競漕（シングルスカル）千メートル

	H	C	S
着順	②	①	③
	江藤　修治	安丸　徹	保坂　信司

第八十九回秋季競漕大会

昭和五十三年十一月二十六日　戸田

	H	C	S
着順	②	③	①
舵手	岡本　哲哉	渡辺　孝道	橋本　弦久
整調	津布久祐次	土屋　昭裕	横堀喜一郎
七番	武良　研二	鴨井　和宏	葉山　峻
六番	平井　淳	佐古田　明	大枝　宏之
五番	江藤　修治	三輪　隆司	山内　晋一
四番	折本　洋紀	溝内　良輔	山本　隆夫
三番	吉安　己起	藤井　典彦	高見沢昌彦

二番	田中　純	清野　明	江藤　俊郎
舳手	山川　哲哉	藤代　久道	村松　義郎

第九十回秋季競漕大会

昭和五十四年十一月十八日　戸田

第一選手競漕　シェルエイト　二千メートル

	H	C	S
着順	③	②	①
舵手	坂東　正章	難波　一弘	橋本　弦久
整調	津布久祐次	香月　道生	三村　秀樹
七番	小倉　健	内藤　雅和	小林　真人
六番	代野　照幸	田中　純	油谷　隆
五番	平井　国喜	泉山　一仁	大久保忠夫
四番	飯塚　隆史	高橋　健司	成沢　正一
三番	竹之内純一	藤本　隆	東　哲也
二番	光吉　徹次	安丸　徹	中所　宜夫
舳手	松尾　徹	外村　稔	八木沢新樹

第二選手競漕　シングルスカル　千メートル

	H	C	S
着順	①	③	②
	武良　研二	石川　敏之	山本　隆夫

第三選手競漕　付フォア　千メートル

	H	C	S
着順	②	①	③
舵手	長友　崇敏	山本　雄司	保坂　信司
整調	西郷　信也	溝内　良輔	横堀喜一郎
三番	藤代　久也	三輪　隆司	山内　晋一
二番	平井　淳	佐古田　明	佐藤　栄一
舳手	中野　孝造	土屋　昭裕	江藤　俊郎

第九十一回秋季競漕大会

昭和五十五年十一月十六日

第一選手競漕　（エイト）

	H	C	S
着順			
舵手	内藤　善治	中島　大祐	高浜　一朗
整調	阿部　秀幸	山崎　晃生	小野沢康夫
七番	青島　秀治	中野　孝造	小川　英穂
六番	一ツ木　正	土川　元	相場　章
五番	山崎　真也	渡辺　修	塩島　久
四番	佐藤　淳	桜井　正美	佐藤　栄一
三番	梅田　彰	安田　真	大久保弘一
二番	中川　喜博	岸本　雅久	興梠　裕一
舳手	高橋　尚宏	鈴木　司	大塚　武生

第二選手競漕　（エイト）

	H	C	S
着順			
舵手	山本　雄司	保坂　信司	橋本　弘久
整調	代野　照幸	香月　道生	三村　秀樹
七番	武良　研二	土屋　昭裕	小林　真人
六番	平井　淳	佐古田　明	山本　隆夫
五番	小倉　健	三輪　隆司	大久保忠夫
四番	飯塚　隆史	高橋　健司	八木沢新樹
三番	泉山　一仁	藤本　隆	山内　晋一
二番	光吉　徹次	溝内　良輔	横堀喜一郎
舳手	竹之内純一	藤代　久也	江藤　俊郎

第三選手競漕　（シングルスカル）

	H	C	S
着順			
	平井　国喜	外村　稔	成沢　正一

第九十二回秋季競漕大会

昭和五十六年十一月二十二日　戸田

第一選手競漕　（シエルエイト）

	H	C	S
着順	①	②	③
舵手	下部　稔裕	土屋　昭裕	橋本　弦久
整調	西郷　信也	溝内　良輔	山本　隆夫
七番	武良　研二	三輪　隆司	江藤　俊郎
六番	山内　晋一	佐古田　明	赤石　良治
五番	新堂　博英	阿字地　譲	大城　健嗣
四番	草野　継弘	平松　知雄	野本　功
三番	飯田　毅	笠原　英一	岡田　昭吾
二番	吉沢　栄治	植田　匡志	横堀喜一郎
舳手	竹之内純一	藤代　久也	倉崎　嘉典

第二選手競漕　付フォア

	H	C	S
着順	③	②	①
舵手	内藤　善治	中島　大祐	高浜　一朗
整調	代野　照幸	渡辺　修	成沢　正一
三番	小倉　健	桜井　正美	大久保忠夫
二番	一ツ木　正	香月　道夫	大塚　武生
舳手	山崎　真也	藤本　隆	塩島　久

第三選手競漕　シングル・スカル

H	C	S	H
①	②	③	④
佐藤　淳	岸本　雅久	大久保弘一	中川　喜博
		興梠　裕一	

第九十三回秋季競漕大会

昭和五十七年十一月二十七日　戸田

第一選手（エイト）

	H	C	S
着順			
舵手	代野　照幸	中居　義之	加藤　賢一
整調	内田　浩介	髙山　太志	成沢　正一
七番	榎本　武由	中屋　浩一	曽根　徹
六番	門松　功	香月　道生	山下　和則
五番	小倉　健	小村　康浩	大久保忠夫
四番	額田　幸治	大嶋　敦	河田　良久
三番	小川　則道	葉山　真一	藤岡　信夫
二番	朱　殷卿	難波　正義	伊藤　健一
舳手	藤井　賢也	藤本　隆	原田　和幸

第二選手（付フォア）

	H	C	S
着順			
舵手	下郡　稔裕	中島　大祐	髙浜　一朗
整調	内藤　善治	阿字地　譲	赤石　良治
三番	佐藤　淳	渡辺　修	塩島　久
二番	一ツ木　正	平松　知雄	大城　健嗣
舳手	飯田　毅	笠原　英一	大久保弘一

第三選手（シングルスカル）

	H	C	S
着順			
	草野　継弘	岸本　雅久	倉崎　嘉典
	新堂　博英		
	吉沢　栄治		

第九十四回秋季競漕大会

昭和五十八年十一月二十七日　戸田

第一選手（エイト）

	H	C	S
着順			
舵手	藤原　一朗	中島　大祐	髙浜　一朗
整調	轟　美孝	渡辺　修	今泉　直人
七番	佐藤　淳	山崎　登	塩島　久
六番	一ツ木　正	石森　久也	中山　孝志
五番	酒井　亮	加畑　拓之	岩崎　修也
四番	志村　直幸	河村　大	清田　剛史
三番	山崎　真也	行木　慎一	鷲田　剛平
二番	内藤　善治	安田　真	中田　善文
舳手	茂木　明彦	石原　真寿	大久保弘一

第二選手（付フォア）

	H①	H②	C	S
着順				
舵手	下郡　稔裕	原田　和幸	中居　義之	加藤　賢一
整調	内田　浩介	草野　継弘	難波　正義	赤石　良治
三番	飯田　毅	榎本　武由	葉山　真一	曽根　徹
二番	額田　幸治	門松　功	髙山　太志	伊藤　健一
舳手	小川　則道	新堂　博英	中屋　浩一	藤岡　信夫

第三選手（シングルスカル）

	H	C	S
着順			
	藤井　賢也	小村　康浩	河田　良久

予科専門部対抗競漕

第一回

昭和六年十一月二十三日

（第一着　予科）　用艇　フィックス

	予科	専門部
舵手	木村　大三	矢野　三郎
整調	内海　常雄	千野　雄三
五番	村上　芳郎	内田　松夫
四番	兼本　豊	大川寅之助
三番	佐久間惣次	岩尾　新
二番	伊藤　治雄	渡
舳手	鈴木　文雄	望月　豊

第二回

昭和七年十二月十七日

（第一着　専門部）　用艇　フィックス

	予科	専門部
舵手	木村　大三	高橋三男治
整調	伊藤　治雄	木野　三郎
五番	海老　敏治	岩田善三郎
四番	刑　振　鐸	上野道太郎
三番	木村　憲八	川添　正美
二番	土方格之助	向井　忠
舳手	佐藤　秋孝	石川　次男

第三回

昭和八年十一月二十五日

（第一着　専門部）　用艇　フィックス

	予科	専門部
舵手	戎野千太郎	立山　秀次
整調	松井　巌根	山崎　徳造
五番	安高　健祐	箱田　清
四番	土方格之助	市川　虎司
三番	佐久間富正	平野　昌
二番	藤沢　康雄	平野　正夫
舳手	植松　健悟	石井　正昭

第四回

昭和九年七月一日

新人競漕　（第一着　専門部）　用艇　フィックス　漕程　千百メートル

	予科	専門部
舵手	今井　善樹	菊地　寿雄
整調	丸山　泰男	金井　三次
五番	外松　修一	右近　徹也
四番	両角　侃二	立岩袈裟松
三番	中崎　力信	北村　隆義
二番	井上　裕	文屋　武彦
舳手	小島　慶三	松崎　政蔵

第一選手競漕　（第一着　専門部）　用艇　クリンカーエイト　漕程　二千メートル

	予科	専門部
舵手	工藤　哲雄	中川邦次郎
整調	神田　節	向井　忠
七番	植松　健悟	岩田善三郎
六番	土方格之助	坂田　正三
五番	松井　巌根	岡田　正
四番	堀川富太郎	富岡　義夫
三番	塚越　賢哉	石井　正
二番	山代　洋	市川　虎司
舳手	堀内幾久寿	山崎　徳造

第五回

昭和十年六月三十日

新人競漕　（第一着　専門部）　用艇　固定席艇

	予科	専門部
舵手	市村　浩蔵	中島　義一
整調	長尾　乾三	岡本　陽三
五番	大西　重則	二川　勝男
四番	沢木　宇吉	浅川　正
三番	西永　嘉夫	伊勢谷嘉一
二番	前田紀太郎	増田賢治郎
舳手	湯浅　駿一	稲葉辰右衛門

第一選手競漕　（第一着　予科）　用艇　クリンカーエイト

	予科	専門部
舵手	工藤　哲雄	菊池　寿雄
整調	宮崎　覚	大内　寅雄
七番	小口定一郎	柴田秀治郎
六番	塚越　賢哉	山崎　徳造
五番	山代　洋	奥　一夫
四番	堀川富太郎	竹内　正司
三番	奥野　浩爾	金井　三次
二番	藤沢　康雄	島田祥一郎
舳手	外松　修一	高地　鈴雄

第六回

昭和十一年六月二十八日

	予科　二着	専門部　一着
舵手	工藤　哲郎	菊地　寿雄
整調	高取　俊夫	高地　鈴雄

七番	外松　修一	右近　徹也
六番	菅野　健児	柴田秀治郎
五番	近江　　宏	二川　勝男
四番	大西　重則	青木　　勉
三番	角鹿　哲也	増田賢治郎
二番	原田幸一郎	高城　民平
舳手	前田紀太郎	田縁　政明
補	竹内　正司	稲葉　祐三

第七回

昭和十二年六月六日

第一選手競漕

	予科　二着	専門部　一着
コーチ	木村　大三	芝田　年夫
舵手	関口	荒井　泰郎
整調	角鹿　哲也	増田賢治郎
七番	臼田	光枝　　実
六番	諸橋	青木　　勉
五番	石原善二郎	黒川健太郎
四番	小坂謙四郎	笠井　　誠
三番	沢木　宇吉	望月　鋼一
二番	原田　幸郎	山田　英雄
舳手	小池	石田
		田縁　政明

第二選手競漕

	予科　二着	専門部　一着
コーチ	藤沢	丸山　泰男
舵手	岡村　俊夫	中西　東一
整調	加藤　敏夫	新藤　栄一
五番	荻生　真通	秋山　義辰
四番	石井　喜介	竹村　　弘
三番	小柳英二郎	森　　一行
二番	寺島	坂　美治
舳手	小平	浜　義郎

第八回

第九回

昭和十四年七月二日

荒川放水路　水道鉄管　総武鉄橋　二千メートル

	予科　二着	専門部　一着
コーチ	塚越　賢哉	工藤　哲雄
	高取　俊夫	
舵手	平山　正照	大矢　光義
整調	古沢　三郎	長谷川　敬
七番	中城　　覚	中村　秀雄
六番	浅岡　善一	波立一二三
五番	若松　第一	杉本　鉄二
四番	小藤田思郎	金藤　義雄
三番	松下　俊夫	浜　　義郎
二番	植野　晴一	森　　一行
舳手	仁品　　正	秋山　義辰

新人レース

		予科　二着	専門部　一着
A組	コーチ	松井　孝夫	小坂謙四郎
	舵手	太田　道夫	内尾　博明
	整調	浜田　幸雄	橋本　要三
	三番	馬上　政夫	石塚　　健
	二番	鯰田　大造	渡辺　芳明
	舳手	川又　満吉	阿部　忠次
		予科　一着	専門部　二着
B組	コーチ	中村　達夫	原田幸一郎
	舵手	田中　瑞穂	山田　利夫
	整調	大沢　英治	仲江　　勝
	三番	井出潤一郎	小川　　英
	二番	張　　三儀	深見　武雄
	舳手	印南　素行	横沢　基夫

決勝　第一着　予科　　第二着　専門部

第十回

昭和十五年六月二十九日

第一選手競漕

日活一言問間二千メートル

	予科　二着	専門部　一着
コーチ	角鹿	大矢
舵手	辻	菊池
整調	大沢	長谷川
七番	原	渡辺
六番	小藤田	中川
五番	島田	橋本
四番	大塚	仲仕
三番	篠崎	横沢
二番	多田	平川
舳手	伊藤	松永

新人エイト　クリンカーエイト
千五百メートル

	予科 二着	専門部 一着
舵手	牛島	上杉
整調	森	塚本
七番	戸部	峰島
六番	鈴木	前田
五番	塚本	羽野
四番	立野	金網
三番	木村	井上
二番	印東	戸塚
舳手	江淵	酒井

新人フォア　千三百メートル

	予科	専門部
舵手	大塚	種子島
整調	星谷	高崎
三番	土谷	冨安
二番	竹内	金井
舳手	木村	吉田

第十一回

昭和十六年

	予科 二着	専門部 一着
コーチ	木村 大三	北村 隆義
舵手	辻 君雄	種子島貴弘
整調	星谷 朝久	渡辺 芳明
七番	森 正雄	篠田金三郎
六番	鈴木 邦治	(主将)深見 武雄
五番	橦井 保夫	大野英三郎
四番	藤本 亮太	塚本 敬
三番	土谷 徹雄	羽野 琢
二番	立野 廣光	岡田 宗元
舳手	中川 秀造	横沢 基夫

第十二回

昭和十七年

	予科 二着	専門部 一着
コーチ	若松 第一	岡村 俊夫
		橋本 要三
舵手	小松 守一	丸山 守
整調	立野 広光	高木 重知
七番	橋本 博	峰島 全
六番	加藤 章	水垣 和敏
五番	岡 泰彦	櫻井 俊平
四番	加々見 正	中川富士三
三番	後藤 享	大野英三郎
二番	藤本 亮太	(主将)岡田 宗元
舳手	印東 秀夫	吉田 敏幸

第十三回

昭和十八年

	予科 二着	専門部 一着
コーチ		牛島 英彦
舵手	大田 高穂	丸山 守
整調	新井 栄一	水垣 和敏
七番	八木沢 稔	横田 昱郎
六番	橋本 博	髙木 重知
五番	後藤 亨	斎藤 弥助
四番	髙井 啓二	中北 治郎
三番	秋山 栄一	郡 惇
二番	加々見 正	柿沼 利重
舳手	木原 良	小沢 恒与

第十四回

昭和二十二年六月二十九日

言問一白鬚
千五百メートル
逆潮逆微風

	予科 二着	専門部 一着
コーチ	後藤 亨	大石 勝五
舵手	石平 整治	大磯 幸雄
整調	田幡 恵一	本田 恒巳
七番	村田 宏	下川 一郎
六番	八田 義一	早川 栄一
五番	伊藤 敏治	倉田 辰夫
四番	須田健一郎	星野 芳樹
三番	飯田朝次郎	小杉 茂夫
二番	滝島 孝衛	鎌田 和夫
舳手	丹羽 章一	山田 利夫

第十五回

昭和二十三年六月二日

言問一白鬚
千五百メートル
順潮

	予科 二着	専門部 一着
コーチ	森 千昭	馬場 昭
舵手	蓮沼 昭男	佐藤 和実
隣調	瀬田 慎吾	佐藤 清
七番	千葉 正皓	中村 宏
六番	鈴木 啓之	大森 是
五番	曽我部桂史	山下 吉夫
四番	西村 博邦	矢野 栄一
三番	木俣 滋郎	深沢 宏
二番	土屋 恭平	石川 操
舳手	武田 友孝	倉井 常吉

戦歿ボートマンに捧げる

田　寿郎（昭和12年学卒）

昭和12年7月北京郊外での一発の銃声は，支那事変を呼び，更に四年後には太平洋戦争にまで発展した結果は，20年8月のあの惨めな敗戦に終った。戦争は，すべての日本人を捲きこみ，犠牲にし，不幸に陥れた。ボートマンも勿論例外ではあり得なかった。多くのボートマンが，オールに代えて銃を執り戦った。そして，その中の何人かは，或は傷つき，或は病魔に冒されて，終に不帰の客となってしまった。

今や，わが国は完全に戦争の痛手から立直り，自由と繁栄を謳歌できるようになった。ボート界も復活し，国民スポーツとして成長し，昔日に見られぬ繁栄振りで，一橋ボートも往時に勝る健在を誇るに至った。しかし，あの戦争で失った艇友達は，この繁栄に浴することも自由を享受することもできない。まして，母校のボートの活躍を目にすることはできない遠い彼方に行ってしまったのである。

今度，如水会内にできた一橋学園史編纂委員会では，その事業の一つとして「第二次大戦と一橋」なる冊子を刊行した。この中に，卒業生の戦歿者672名の点鬼簿が纏め上げられた。これは，各年度毎の幹事の報告や，諸記録を基に作られたものであるが，これを一読して，更めて多くのボートマンが名が連ねていることに驚いた。

勿論，身近かな友人等については時に思い出すこともあったが，中には全く始めて戦歿されたことを知った方もいる。

いづれにしろ，戦歿ボートマンとして今迄その鎮魂のことを行っていなかったことは，全く慚愧に耐えない。艇友の貴重な犠牲を忘れて，安逸に過して来たことが悔まれてならない。

今回，懸案の「一橋端艇部史」がやっと刊行の運びになった。そこで，その一部にせめて戦歿ボートマンの名簿だけでも掲載し，鎮魂のよすがの一端としたいと思い，関係者の協力を得て作り上げたのが別表である。

今頃となっては遅過ぎた誇は免れぬばかりでない，調査不充分の責も負わねばならない。それより心配なのは，この表に洩れたボートマンがいるのではないかと云うことである。もっと早く気がついて徹底的に調べ，遺族との連絡もとり，供養の万全を尽すべきであった。

筆者の卒業した昭和12年に戦争が勃発した。この年卒業した仲間で甲種合格者は，兼本豊君と小生の二人だけで，従来ならば二人だけで軍務は済んだ筈である。ところが，私達の壮行をしてくれた同級諸兄は，みんな続々として召集されることになった。爾来，ボートマンは，卒業一年以内に入営し，後には校門から営門に直行した。従って，犠牲者が昭和12年以降に断然多い訳である。

筆者等の卒業した前年に，一橋のボートは九年振りに全国制覇をなしとげ，その後十三十四年と引続き優勝，一橋ボートの全盛時代を築いた。この時期に活躍した名選手の多くが，実は今回の名簿の中心となっている。これらの諸君の中，一部には一時復員して結婚したものもあるが，大半は独身であった。系累の関係では身は軽かったが，それだけに後に遺すものもなく，一層に不憫でならない。

一方，先輩の方々も少からず鬼籍に入られている。小泉大先輩は別格としても，高田先輩始め四十歳を越えて召集された方もおられる。いずれにしろ，前記の若い方々と違い，ほとんどが妻子を残しての出征であり，ご遺

族の当時の御悲嘆，その後のご苦労の程は想像に余るものがある。これに対し，ボート仲間として今迄閑に附して来たことは申訳けないと思う。特に，私の場合直接指導薫陶を受けた方々が何人かおられるだけに，忘恩，不人情の苛責に耐えない。

この名簿に載せられた方々の一人一人について思い出を反芻して見た。二，三の方はかけ違って生前お会いする機会がなかったが，お話には聞いていた人達である。

みんな，こよなくボートを愛し，一橋を愛した人達であった。恐らくや，勇敢に戦い，立派に職責を果されて散華されたものと思う。戦争さえなかったら，また元気で帰還されておれば，温かな家庭に恵まれ，幸福な生活を享受すると共に，社会的にも貢献することも多かったものと思う。更に，その中の何人かは，母校ボート部の発展の為にも，大きな力となられた筈である。

誠に残念と云うより他ない。

唯々，安らかにお眠り下さいと申上げる他言葉を知らない。

戦歿ボートマン名簿

卒　年	氏　　名	死亡年月日 場所事由	記　　事
明38本 （H）	小泉哲一郎	17. 5. 8 大洋丸にて南支那海上殉職死	ＨＣＳ開設当時の有力Ｈ組チャンであった。三五公司にてマライゴム栽培に成功，昭和11年後継者にボートマンをと端艇部長に依頼した。これに選ばれたのが広松三好（柵山）である。双方共惚れ込み，広松は愛弟子上田正治を従えて入社した。戦争のため，広松の南方活躍は実現しなかった。小泉は，三菱系東山農事の総帥として，赴任の途次，大洋丸にて遭難した。
大15学 （S）	高田　正見	20. 8. 16 ソ満国境にて戦死	大分県出身，Ｓ組チャンを経て大13年対校選手舳手。対明大決勝レースに惜敗したとき，ロウアウト・ゴールで失神した逸話は有名である。安田銀行勤務中，50歳近くなり応召，ソ満国境にて砲兵中隊長として勤務中，押寄せる敵戦車に応射，弾丸尽きるや，率先抜刀切込み，壮烈な戦死を遂げた。
昭４学 （C）	小西　正男	17. 5. 8 大洋丸にて殉職	大正末期よりＣ組チャンとして活躍，後に端艇部会計幹事となり，その後のボート部会計の基礎を確立した功労者である。三菱銀行に入行，大東亜戦争勃発直後，南方占領地司政官要員として赴任の途次遭難
昭５学 （H）	秋山半之助	20. 7. 4 ビルマにて戦死	東京都出身，大正14年以来Ｈ組チャン（舵手）として連続出漕した。三菱商事に入社，本社京城支店等に勤務した後，ラングーン支店（ビルマ）に配属され，現地召集，困難な状況下に戦死(未亡人健在)

卒　年	氏　　名	死亡年月日 場所事由	記　　事
昭6門 （H）	山本　次郎	20. 1. 18 ルソン島パンガシナン州カバルアンにて戦死	神戸三中卒，H組セコ，昭5ロンドン杯(優勝)三井鉱山に入社，応召にて満州に派遣，比島に転進後，ルソン島を死守して戦死（未亡人健在，二児成長）
昭6門 （C）	芝田　年夫	17. 1. 18 ジョホールバルにて戦死	宇都宮中卒，昭5ロンドン杯主将（優勝）専門部委員長として活躍。C組の大先輩山中勇氏の山中銀行を経て岩尾磁器工業，近歩四に召集，小隊長としてマレー作戦に従軍，シンガポール攻略目前にして戦死（実弟健在）
昭6専 （S）	向井　正巳	20. 4. 24 マニラ西方クラーク地区にて戦死	鳥取県出身，昭5ロンドン杯舳手（優勝）S組コーチ，火災保険，出先商店等を経て，住友鉱業入社，比島開発要員として在勤中，現地海軍に応召，敵の集中爆撃を受け戦死（未亡人健在）
昭8学 （H）	佐藤　雄三	14. 1. 31 上海兵站病院にて戦傷死	郡山中（福島）卒，昭4～昭5H組チャン，東京火災保険（安田火災）に入社。昭和9年現役入隊，経理部将校となる。12年秋召集，中支戦線に従軍，大別山系にて負傷，上海にて戦傷死
昭8門 （C）	内田　松夫	18. 6. 11 南方にて戦病死	東京都出身，昭和6年ロンドン杯（優勝）として活躍した。関東演にて満州に出征，南方転進後現地にて罹病
昭8門 （C）	柏　　次雄	18. 3. 3 南海戦線にて戦死	茨城県出身，H組セコ，サード，専門部選手。現役にて昭9入隊，経理部幹部候補生，南支より南海方面転進中
昭9学 （S）	水谷　　実	17. 5. 8 大洋丸にて殉職死	青山学院中卒，神田生れの江戸っ子，昭7～昭8対校選手(舵手)，メタルの愛称を以て親しまれた。三菱商事会計部，テヘラン支店を経て，南方派遣の途次遭難(未亡人，遺児健在)
昭9学 （H）	奥田　二郎	20. 7. 15 ルソン島タヤバス州にて戦死	京城中卒，昭和7年対校選手。三井物産入社，昭和10年現役入隊，陸軍少尉，昭和12年応召，上海戦線にて金鵄勲章，19年再度応召，比島にて戦死(未亡人健在)
昭9学 （C）	金子精之助	21. 2. 23 ハルピン病軍病院にて戦病死	東京五中卒，C組セコ，昭和7年度端艇部会計幹事として功労多し。三菱商事入社，神戸，青島各支店勤務，戦争末期召集，北満にて罹病（遺族不詳）

卒　年	氏　　名	死亡年月日 場所事由	記　　事
昭10学 （S）	内海　常雄	20. 9. 4 満州搭城子附近において戦死	兵庫県竜野中卒，昭5対校選手。入高早々対校に選ばれた。極めて勉強好きな秀才で，合宿にも本を離さなかった。正金銀行に入行，新東支店勤務中召集，ソ連軍の不法侵入に際し戦死
昭11学 （S）	和泉　信夫	21. 9. 5 南鮮において殉職死	石川県出身，養成所を経て学部に進む。S組チャン。昭和9年度端艇部理事代理，10年理事として活躍した。日本窒素に入社，北鮮に赴任，終戦に際会し，引揚団長として帰任の途中罹病
昭11門 （S）	山崎　徳造	20. 8. 1 北ボルネオサンダカン附近にて戦死	和歌山県御坊中出身，昭9，昭10ロンドン杯(優勝)主将として活躍。三菱系タワオエスラート入社，ボルネオ勤務中，現地召集
昭12学 （S）	木村　大三	20. 1. 28 ビルマ，トングー附近にて戦死	大阪北野中四修，実兄木村賢治氏は大15学S組端艇部理事である。昭11対校舵手（優勝）文学好き，音楽好きの秀才であった。東芝入社後応召満州に出征，復員後結婚し，昭和18年再応召ビルマに赴く。(未亡人再婚，子供なし)
昭12門 （S）	立岩袈裟松	14. 7. 3 ノモンハン作戦にて戦死	長野県上田中卒，昭11対校（優勝）専門部委員長として活躍。日本郵船に入社，入隊北満警備に当るノモンハン事件に際し，対戦車砲射手として活躍中壮烈な戦死。
昭12門 （C）	金井　三次	20. 3. 1 レイテ島オルモック北方10キロにて戦死	東京市立二中卒，昭11ロンドン杯(優勝)。キリンビール入社。独立歩兵第十三連隊所属，比島に従軍（陸軍大尉）
昭12門 （S）	柴田秀治郎	20. 5. 10 ルソン島ボルポソにおいて戦死	東京府立三商，昭11ロンドン杯(優勝)。三井物産に入社，同年歩兵第一連隊入隊，陸軍予備士官学校卒業，再度召集により比島に出征，対空任務中戦死
昭13学 （C）	戎野千太郎	19. 7. 16 天津陸軍病院にて戦病死	東京府立三中四修，昭和9.10.12対校(舵手)。内田商店㈱入社，14年現役入隊，復員後再応召，北中支転戦中罹病
昭12学 （C）	小永井鍬次郎	20. 11. 12 牡丹江陸軍病院にて戦病死	東京府立一商卒，C組，チャン，セコ。三菱鉱業入社，留萌営業所勤務中昭和14年現役入隊。再応召にて渡満，終戦後の悪条件にて罹病

卒　年	氏　　名	死亡年月日 場所事由	記　　事
昭14学 （S）	藤沢　康雄	15. 4. 19 牡丹江陸軍病院にて戦病死	東京市立二中卒，神田明神前生れの江戸っ子。昭和10年インターカレッジ出漕（6番）S組キャプテン。卒業後，奉天満州機器株式会社（三菱系）に入社，昭和15年始め現役入隊，教育中発病
昭14学 （H）	塚越　賢哉	18. 12. 4 南太平洋海域にて戦死	前橋中卒業，昭11対校四番(優勝)，昭12，昭13主将（優勝）として活躍，端艇部黄金時代を築く。三菱商事に入社，満州に入隊せるも海軍短期現役主計に合格，南太平洋海域に従軍中戦死
昭14門 （C）	佐藤長太郎	不　明	北海道出身，昭12対校選手 昭13　〃　（優勝） 専門部委員長
昭15学 退 （C）	山代　　洋	比島リポール州ボソボソにて戦死	東京府立一中卒，父君はC組大先輩山代泰（日本鉱業役員），昭10年インターカレッジ(3番)出漕。その後端艇部を離れ，思想問題にて退学となる。幹候資格なく兵として転戦中，比島病院にて前田正（昭12）と劇的再会をなす，多感なる文学青年として多くの詩歌を残す(「第二次大戦と一橋」参照)
昭15門 （S）	坂　　美治	20. 6. 22 ルソン島カランブラン北方10kmにて戦死	昭14対校4番（優勝）専門部委員長として活躍す。旭ベンベルグ入社。昭15. 12北支に入隊，保定予備士官学校卒業後，比島に転進した。
昭16学 （前） （S）	原田幸一郎	19. 8. 19 ビルマ，ミートキーナにて戦病死	満州安東中学卒，よって満州とアダ名す。S組チャン，昭12全日本予科単独クルー。卒業と同時に大阪屋証券に入社，現役入隊，ビルマに出征
昭16門 （H）	波立一二三	19. 1. 18 サイパン島にて戦死	福島県磐城中卒 石原産業入社，17年4月現役入隊，豊橋予備士官学校を卒業して任官，サイパン島守備に赴く。
昭16学 （後） （S）	石原善二郎	19. 5. 22 ニューギニアにて戦病死	島根県浜田中卒 昭13予科3年で対校選手（エイト）に選ばれ優勝，昭14にも連続優勝，昭15には主将としてクルーを牽引，インカレには惜敗したが戸田コー

卒　年	氏　　名	死亡年月日 場所事由	記　　事
			ス開設第１回全日本で雪辱，一橋ボート最高の黄金時代を築いた中心的人物。ゴリポンの愛称で親しまれた。
昭16学 （後） （S）	松井　孝夫	20. 6. 22 沖縄本島にて戦死	東京府立七中卒 S組のセコ，チャンの主将を勤め，昭15には理事として多大の政治力を発揮，多彩な行事を計画，実施し，一橋会における端艇部の地位を不動のものとした。藤沢康雄に次ぐ２代目の〝クロ〟と呼ばれ性剛毅，将たる器の持主であった。沖縄戦での司令部防衛隊長としての壮烈な最後は，〝昭和の天皇史〟（読売新聞社刊行）にもその名を残した。
昭16学 （後） （S）	小池　真澄	19. 7. 9 インパールにて戦死	ハワイ生れの二世，青山学院出。日本語より英語の方を早口で話し，その〝丘を越えて〟のメロディの調子のはずれ方は有名で〝犬吠〟と愛称され，合宿生活を明るくした。S組のセコ及びチャンの主将をつとめ，インパールでの最後は手榴弾による自爆と伝えられている。
昭16学 （後） （S）	仲山　淑夫	19. 11. 17 黄海朝鮮沖にて戦死	府立一商卒 ボート部には珍らしく温厚な紳士。S組のセコ，チャンを漕ぐ。内に秘めた頑張り屋で，バックの仕事にも，いやな顔を見せずに敢闘。部の財政強化に大きな成果をおさめた。マニラへ転戦中，黄海朝鮮沖にて魚雷攻撃を受ける。

一ツ橋ボートの唄

古いボートの唄（明治二十年）

作者不詳

神田下宿八時立ち　弁当さげて
行列揃えて　あれわいさのさ　コチャ
艇庫に着いたは十時頃　コチャエー　々々

◇

今日はデパート　チャン揃い　オール出し
右と左に、取りすがり　コチャ
エンヤラヤット艇下ろし　コチャエー　々々

◇

水門漕ぎぬけ首尾の松　ちょと眺め
いま厩橋へとさしかかる　コチャ
ヘビーを十本ひと休み　コチャエー　々々

◇

右を眺むりゃ駒形の　観音堂
春の勝利を祈りつつ　コチャ
蒸気を追ひ抜け吾妻橋　コチャエー　々々

◇

思い竹屋の渡場で　ちょと流し
往き来の船を眺めやり　コチャ
石碑の下までひと息に　コチャエー　々々

◇

かかるヘビーに腕が鳴る
オールも折れよとふん張って　コチャ
いつしか学校の桟橋へ　コチャエー　々々

(注) 一橋ボートマンの作った日本最古のボート歌「お江戸日本橋」の曲。当時の艇庫は蔵前、屋根のない繋留場、掘割に水門がついていた。デパートは分科対抗、ヘビーは力漕の意味。桟橋は向島にあった。

漢の高祖（明治末年）

作者不詳

漢の高祖も秀吉も
天下取らなきゃ只の人
まして凡夫のわしじゃもの
オール取らなきゃあ只の人

練習疲れにスヤ〳〵と
オール枕にうたた寝の
夢路辿れる七人の
心は一つじゃないかいな

(注) 作者不詳。当時は固定席六人漕舵手一人で艇内に寝ることができた。

一橋会々歌（明治三十七年）

中田庄三郎（明41年本卒）作詩

長煙遠く棚引きて
入相の鐘暮れてゆく
隅田の流れ夕潮に
オールを軽く浮ばせて
秋西風に嘯きし
その豪快のあとかたや

㊟ 従来の運動会と合併して一橋会が発足したのは、明治三十五年であるから、発会二年後に会歌ができた。

オール持つ手に花が散る（大正初期）

作者不詳

春は　春は　桜咲く向島
ヤッコラセー　ヤッコラセー
オール持つ手に花が散る花が散る
アウー　アウー

夏は　夏は　緑濃き綾瀬川
ヤッコラセー　ヤッコラセー
オール持つ手に蛍飛ぶ蛍飛ぶ
アウー　アウー

秋は　秋は　鷗飛ぶ品川へ
ヤッコラセー　ヤッコラセー
オール持つ手に月が差す月が差す
アウー　アウー

冬は　冬は、名にし負う坂東太郎へ
ヤッコラセー　ヤッコラセー
オール持つ手に雪が積む雪が積む
アウー　アウー

㊟ 作者不詳。ボートメン共通の愛唱歌。坂東太郎は利根川の別名。

東都の流れ（大正九年）

大友春一（大12学卒）作詞
瀬戸口藤吉　作曲

東都の流れ千年の
隅田をまもれ一ツ橋
あゝその高き
名を惜しむ五尺の男児が
ひとたび立たば
とどめん力あるべしや
一橋　一橋いざふるえ
一橋　一橋いざふれふれふれ
一橋　一橋いざふるえ
隅田は永遠に吾がものぞ
隅田は永遠に吾がものぞ

㊟ 最初のボート応援歌
第一回インカレ応援のために募集した当選歌
作曲者は軍艦マーチの作曲で有名。

一橋節（大正九年）

高橋保幸作詞（大13学卒）作曲

㈠カンカーンカンカーン鐘が鳴るぞえ
一橋〳〵え一橋え
あれは一橋え
自由の鐘の声
一橋え〳〵

㈡朱雀青竜玄歩白虎は
一橋〳〵え一橋え
映る一橋え
月影漕ぎ下る
一橋え〳〵

㈢ヒラリ〳〵と黄いな蝶々が
一橋〳〵え一橋え
咲いた話しに
舞いかかる
一橋え〳〵

㈣高橋保幸氏はボート部員で大正九年のインカレの一橋応援団々長、音楽部にも所属し、作曲もできた。

一橋人の歌う（大正中期）

作者不詳

㈠此処はお江戸の隅田川
川路はるかに眺むれば
波を隔てて船一つ
赤の旗地にマーキュリー
きっと勝ちます勝たせます
きっと勝ちます勝たせます

㈡色の黒いのは親ゆずり
腕の太いのはボートゆえ
きっと勝ちます勝たせます
きっと勝ちます勝たせます

遠漕歌（大正中期）

作者不詳

一、艇庫出る時や元気で出たが何じゃえ
船はゴチャ〳〵で運河は苦手何じゃえ
うどん詰込み江戸川上る何じゃえ

二、国府台では実汗流す何じゃえ
風の松戸は辛くて出たが何じゃえ
取手あたりで仰ぐ朧月何じゃえ

三、月は朧に夕日は赤し何じゃえ
ナンジャモンジャ過ぎゃあ霞が浦で
何じゃえ
昔栄えし潮来も過ぎて何じゃえ

四、行けや宝山松風悲し何じゃえ
燈台目がけて行く先や大新何じゃえ
銚子〳〵と皆行きたがる何じゃえ

五、それもそのはず大新ござる何じゃえ
大新よいとこ酩酊所何じゃえ
今宵一夜は実のみあかす何じゃえ

遠漕歌（大正中期）

――一つと出たワイ――
一つと出たワイな、よさホイノホイ
　一つ橋だよよく見やれホイ
　　赤の旗地にマーキュリーホイホイ

二つと出たワイな、よさほいのホイ
　船は出てゆく蔵前をホイ
　　呼ぶは波間の都鳥ホイホイ

三つと出たワイな、よさホイノホイ
　未練残して隅田川ホイ
　　いつか運河の船の中ホイホイ

四つと出たワイな、よさホイノホイ
　寄ろか寄るまいか行徳へホイ
　　橋が見えます市川のホイホイ

五つと出たワイな、よさホイノホイ
　一気力漕千本でホイ
　　乗り切ろうかい鴻の台ホイホイ

六つと出たワイな、よさホイノホイ
　むせぶ松戸の朝風にホイ
　　黒い腕が十二本ホイホイ

七つと出たワイな、よさホイノホイ
　流れ止めよか男ならホイ
　　こゝは味淋の流山ホイホイ

八つと出たワイな、よさホイノホイ
　山は筑波根、川は利根ホイ
　　漕ぐは商大のボートメンホイホイ

九つと出たワイな、よさホイノホイ
　心乱るゝ宝山やホイ
　　偲べ朱雀の遭難をホイホイ

十と出たワイな、よさホイノホイ
　遠い旅路を恙なくホイ
　　今宵大新のみ明かすホイホイ

(注) 口伝作譜　内田量平　作詩不明

天翔る翼（昭和二年）

木全秀雄（大9本卒）作詩
山田耕筰　作曲

(一)
天翔る翼の象徴
　血に燃る紅の色
江風に旗棚引けば
　あゝ一橋、光栄をぞ負ふ
　あゝ一橋、光栄をぞ負ふ

(二)
日に焼けし黒鉄の肌
　血ににじむ櫂とるその手
沸り立つ意気と血潮の
　あゝ高鳴りを聞かずや君よ
　あゝ高鳴りを聞かずや君よ

(注) S組の大先輩故高橋保幸氏が、学生時代山田耕筰氏を隅田川につれて行ってボートの練習を見せてから作曲してもらったという。

一橋長恨歌

作者不詳

一、果なく続く武蔵野の
　森の梢に陽は落ちて
　ねぐらにいそぐ群雀(むらすずめ)
　いづくともなく飛び去りぬ

二、ここ墨堤のたそがれに
　身を打ち伏せてむせびなく
　友の姿君見ずや
　覇業未だ成らざるを

三、鳴呼一橋の端艇部
　汝がむねに青春の
　意気と血潮は絶えにしか
　覇業はいまだならざるに

四、さはあれ吾が友徒らに
　憂うるなかれ一橋の
　歴史と旧き伝統に
　強き力を吾は知る

五、見よ大空に崩れては
　またたてなほる雲の峰
　地に蛟龍(こうりょう)の呼ばんとき
　などか覇業のならざらん

(注) レースに負けたあとしみじみとボートメンの愛唱した歌

春墨堤（昭和十三年）

遠山不羈夫（大13学卒）作詩
外山　國彦　作曲

(一) 春墨堤の花の色
　又秋冷の月の影
　永遠(とわ)に流るる川の面(へ)に
　輝く面(おもて)昂然と
　櫂(かい)とる男児(おのこ)一ツ橋

(二) 星霜移る五十年
　その伝統を胸に秘め
　祖国日本の進む道
　身もて進まんその時は
　櫂とる男児一ツ橋

(三) 我もし千里の外(そと)にゆき
　愛(いと)し同胞(はらから)偲ばんか
　強き力を求めんか
　想ひ起さんその時は
　櫂とる男児一ツ橋

(四) 今極東の嶺(みね)に立ち
　黎明の光身に負ひて
　五族の救い成し遂げん
　若き日本の誇りこそ
　櫂とる男児一ツ橋

(注) 昭和十三年インカレ、全日本優勝記念募集当選歌　作曲者は東京音楽学校教授

端艇部応援歌（昭和十三年）

尾田卓三（昭16後学卒）作詞

一、流れたえせぬ大川に
　縹(はなだ)の波にしぶきして
　幾春秋を鍛えきし
　力溢るゝ若人よ
　今戦いの時は来ぬ

二、鳴呼一橋の健男児
　双手(もろて)にかざす紅の
　我等が旗を君見ずや
　永久(とわ)の歴史をかざるべし
　戦はんかな我が友よ

三、生ける誇を一筋の
　オールに寄する我が友よ
　若き血潮の高鳴りや
　墨堤の空ゆるがして
　乾坤(けんこん)正にどよむなり

四、墨江十里日は高し
　正気溢るゝ一橋の
　健児に永久(とは)の栄(さかえ)あり
　見よマーキュリー照り映えて
　覇業の栄に輝かん

(注) 昭和十三年全日本優勝を記念して一般から募集した応援歌当選作　日本青年会館にて発表演奏会（本文参照）

あ と が き

端艇部史編纂の動きは，戦前の昭和13年頃からあったものですが，戦争及び戦後の混乱期という止むを得ない事情で中断しておりました。昭和30年代になって，故村松祐次部長は，格別の情熱をもって，部史編纂のための資料の整理を企図され，当時学生であった前端艇部長の中川学氏ほか数名が，これに好く応えて，資料の蒐集，整理にあたり，財政的には四神会有志先輩の資金を仰ぎつつ，10年位の間に明治末年までの資料集５巻と塚田松二著「端艇部外史」１巻の刊行を見るという並々ならぬ努力があったことは，知る人ぞ知る所であります。

昭和50年，一橋大学が創立百年を迎えた時に一橋大学百年史刊行の議がおこり，端艇部もこれと歩調を合わせて，「端艇部百年史」を刊行する事を決議いたしました。10名のメンバーからなる編纂委員会を組織し，発足した訳でありますが，編纂委員も，それぞれ専業ではなく，本業の余暇をさき，手弁当で学生諸君の援助を得つつ進めるという訳であり，加えてさきの資料集以降の大正―昭和の今日に到る70年余にわたる資料の蒐集，年表，出漕者名簿の整理等，多岐にわたる仕事量は数千時間に達し，誠に想像を絶するものがありました。加えてこれら膨大な資料の整理と，端艇部通史の執筆を依頼した有給専属のライターが，途中で病に倒れて仕事の進行が中断する等のハプニングがあり，結局再び全部の仕事を編纂委員で分担するの止むなきに至り，今日まで８年余を費すという仕儀に立ち到りました。遅延に対するご不満，ご叱責もあるかと存じますが，事情ご諒察願います。言い訳がましくなりますが，一言蛇足をつけ加えさせていただきますと，一橋の建学は明治８年ですが，一橋端艇部の発足は明治18年，東京外語を合併し，東京商業学校となってからでありますから，本年の部史刊行は実質的には恰度百年目という事にはなります。

ともあれ，難行苦行の上，出来上ったボート部史ではありますが，何分年代が長きにわたること，資料の不足や散逸などは，免がるべくもなく，編纂委員の数や時間にも限りがある等の諸事情に依り，関係者一同としては，出来る限り誤謬，脱漏の無きを期した積りですが，各位がそれぞれ端艇部に在籍された年代の前後については，容易に発見れる誤りも多々ある事と存じますが，それは他日の修正を期すこととして，この度は何卒ご寛容のほど願いたく存じます。

また，今回の部史においては「通史」の叙述は，明治初期の第１期学生ボート草創

時代から，端艇部の創立を経て，第二次大戦後，新生一橋大学の誕生と端艇部の復興と遠来のオックスフォード・クルーを僅差で破って全日本で優勝した第三期黄金時代昭和34年までといたしました。

実際はそれから更に23年を経過している訳ですが，その間の主要な出来ごとや戦績等は，すべて「資料篇」に集録いたしました。しかし通史として，こういう形態をとらざるを得なくなったのは，若干のデリケートな学内事情がある事をご諒察いただきたいと存じます。

35年以降の通史をも網羅した真の意味での「端艇部史」は，次期の「百二十五年史」か「百五十年史」に待つ事に致したいと存じます。この部史は不完全なものとは存じますが，各位が座右に備えて青春の昔日を偲ぶよすがとして，また現役学生諸君にとっては，有意義な指針として，十分に有用な歴史記録であると信ずる次第であります。

1. 編集刊行費概算見込

昭和50—昭和55年の間に

① 資料，写真の蒐集，整理，アルバイト代，フォトコピイ代等　約 60万円

② 資料整理，年表，通史の一部執筆など

契約ライターへの支払（昭53.12—55.11）　240万円

昭和56年以降今日までの製版費，印刷費，製本，製函費，材料費，郵送費一切込み（第一法規出版㈱）　約600万円

計 900万円

2. 出版書の体裁

B 5判，上製本，ビニールカバー付，ケース入り

本文 550頁（通史，資料及び思い出集，年表，出漕者名簿，写真 200点）

3. 編纂委員

四神会名誉会長　畑　弘平（大14）

四 神 会 会 長　植松健悟（昭14）

部史編纂委員　曽祢冬来（昭７）故人　伊藤治雄（昭12）　丸山泰男(昭15)　石井　正（昭11門）　菊地寿雄（昭12門）　松崎弘（昭14門）　下元進助（昭17）　中北治郎（昭19門）　畑　弘恭（昭26）　中村　宏（昭28）　江崎　亮（昭33）

石井和雄（昭34）　高木俊志（昭36）　小林靖夫（昭47）

(1) 昭和13年に発足し，資料蒐集のため一部合宿して努力された学生の部史編纂委員の方々は，

植松健悟（昭14）　堀川富太郎（昭14）　奥野浩爾（昭14）　丸山泰男（昭15）　沢木宇吉（昭16・3）　阿波博康（昭16・12）　小牧辰志（昭16・3）の7名でありました。

(2) 昭和30年代に，故村松部長の意を受けて，学生委員として資料の蒐集，刊行に絶大の貢献をされた方々は，

金秀太郎（昭30）　桜井安彦（昭30）　寺本隆一（昭32）　野田正通（昭33）　丸　盤根（昭33）　渡辺尚之（昭33）　中川　学（昭34）　福田正之（昭34）　笠置正洋（昭34）　清水　武（故人，昭35）　本多敏男（昭34）　吉留敬高（昭35）　伊原隆三（昭35）　小川昌一（昭35）　大橋一慶（昭35）　広瀬国基（昭37）　綿貫　武（昭38）　宇野　透（昭43）の18名であります。

(3) また資料集の刊行に際し，資金的に援助をいただいた方々としては，

平沢栄次郎（故人，大9）　森米次郎（故人，大10）　藤田　茂（大11）　野田憲策（大13）　坂岡　操（大14）　寺尾一郎（大14）　畑　弘平（大14）　高橋朝次郎（故人，昭2）　宮沢文雄（故人，昭2）　池上三次郎（昭3）　中島俊郎（昭3）　高橋芳三（昭4）　長幸一（昭4）　河西源吉（故人，昭5）　安井桂三郎（昭7）の諸氏が居られます。

また，これら資料の刊行，用紙調達について，瀬尾三郎氏（昭7）に格別のご援助をいただきました。これ等の方々のご功績に対し，深甚な謝意を改めて表するものであります。

(4) また，現編纂委員会が発足いらい，今日まで協力していただいた学生諸兄としては，

塩山弘蔵（昭52）　渡辺孝道（昭54）　東　哲也（昭55）　長友崇敏（昭56）　光吉徹次（昭57）　小林真人（昭58）　平井国喜（昭59）　興梠裕一（昭59）　等の方々があげられます。

（伊藤治雄）

あとがき

想えば長い長い苦しい道のりであった。いまやっと曲りなりにも，かなり部厚い真赤な表紙に金文字のきざまれた一冊の書物ができ上った。この一冊の書物――「一橋ボート百年の歩み」――を手にして感ずるずっしりとした重みは，過去８年に及ぶ長い歳月の苦闘と，そして一世紀にわたる波瀾万丈のわがボート部の歴史の重さでもある。

一橋大学創立百年記念式典が催された昭和50年前後に，一橋学園の歴史への関心が高まった。歴史と伝統を誇るわが一橋端艇部の部史を作ろうという提案が，昭和49年12月の四神会役員会で可決され，年明けて昭和50年１月から部史編纂委員会が発足した。わが一橋のボート部に席をおいた人間は，常に先輩たちから，わがボート部の長い苦しい戦いと，そのあとにやってくる何度かの輝かしい栄冠の歴史と伝統について，語り聞かされてきた。それだけに一橋のボートメンはこの偉大なる歴史の足跡を何とか後世に遺したいという悲願をもち続けてきた。

今を去る45年前の昭和13年に，「60年史」を作ろうと企てた時も，当時の現役学生からなる「部史編纂委員長」の植松健悟氏(四神会々長)が，学生時代，部報で述べているように，ボート部員は「右手にオール，左手に部史」をもつことによって始めて，部員たるの自覚と責任を感ずることができるという考え方があったからである。また戦争と戦後の激動期をくぐりぬけて，漸く人心の安定がえられるようになった昭和30年代に，故村松裕次部長の勧奨にもとづいて，18名にのぼる現役学生が部史資料集作成の事業に取りくんだ。戦後の時代の激変をのりこえて，一橋ボートの歴史的源流を探ろうとする意欲にもとづいていたということもできよう。

ともあれ，昭和50年に発足した委員会も最初の段階では，委員全員がやるからにはうんと立派な部史を作ろうではないかという熱意にあふれていた。編集方針をめぐって，お互いにヴィジョン討論を熱っぽく，夜おそくまでたたかわせたことも，今では懐しい想い出となってしまった。まるで学生時代に帰ったような若々しい気持で，歴史とはいかにあるべきかというような議論にまで及んだ。しかし戦前と戦後にわたる過去の部史づくりの実績があるだけに，試合記録や想い出集や写真を適当に並べたてた在りきたりの拙速主義はとりたくないというのが，みんなの一致した意見であった。

12の時代区分にわけて，それぞれの時代の特徴をつかみ，各時代別の担当者も決め

て，資料の蒐集整理を始めた。ある程度資料の整理が進んだ段階で，全時代をカバーする通史の執筆は，やはり一人のライターが一貫した思想と文体でやるのが望ましいということになった。執筆者の選定についても色々と困難な事情もでてきたり，また折角きめて作業を進めてきたライターが土壇場になって病気で倒れたりという不幸な出来事が重なった。最初の希望にみちた熱意もいつしか色あせて，責任の重苦しさだけがずっしりと肩にかかってくる想いであった。蒐集した各種資料を時代順に整理し，仮印刷にして他日を期そうという意見もあった。またたとえ作るとしても，35年以降の通史については，学内のデリケートな事情もあり，今回は資料のみに留めて見合わせるべきであるという意見もあった。

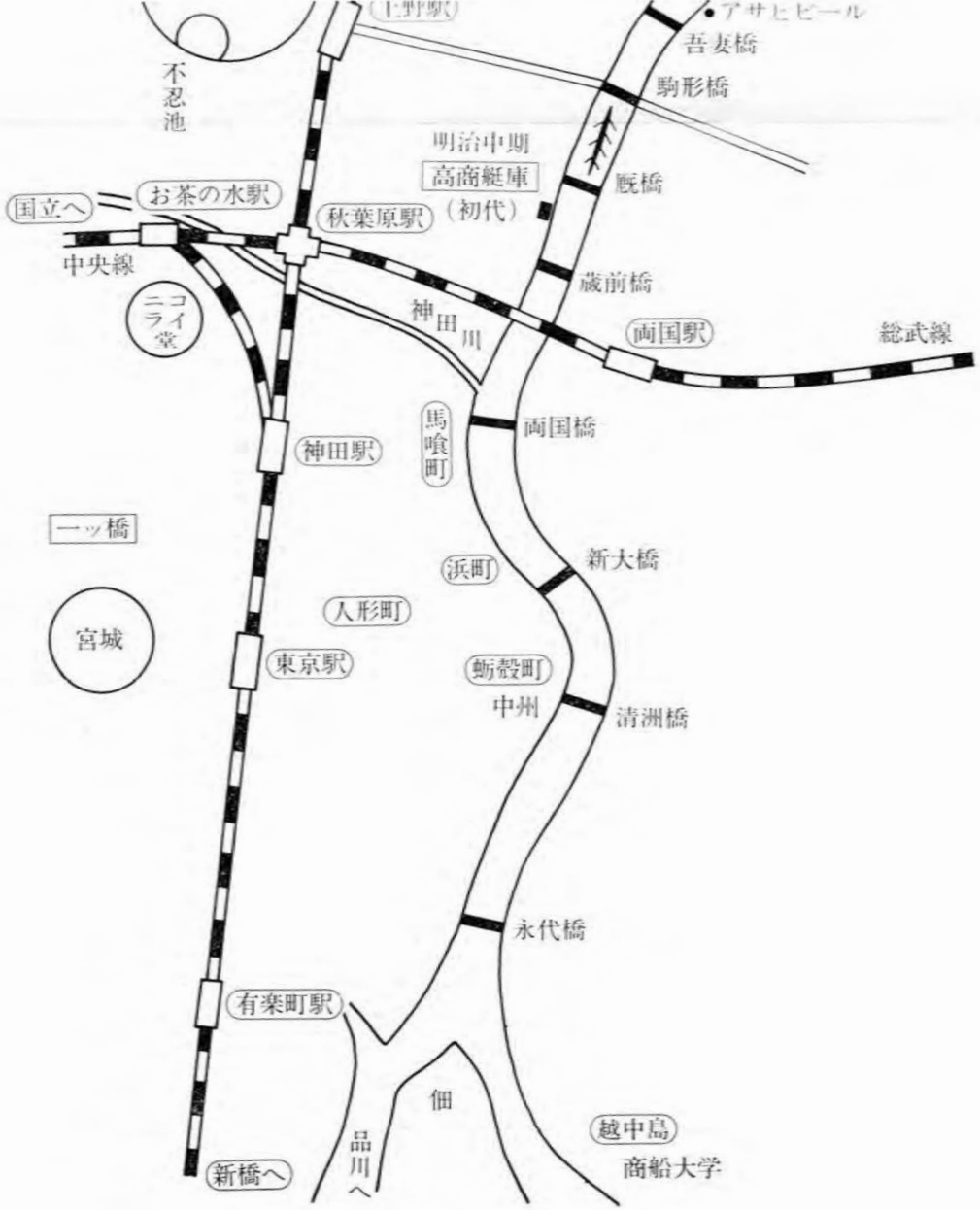
しかし，四神会の役員会では，たとえ当初の予定より大幅に延引したとはいえ，折角ここまで進めてきた一橋ボートメンの悲願ともいうべき部史作りを中断することは絶対にとるべきではないという意見が大勢をしめた。伊藤前会長みずからこの困難な作業に強力なリーダーシップをとられて，各時代区分担当者その他が分担執筆することとなって，今日ようやく曲りなりにも日の目を見ることができた。

各時代区分の執筆者の個性によって，文体の不統一もあり，記述内容の繁簡の差も甚だしい。各自の原稿を回読して相互に十分調整をとるということも考えたが，これもできるだけ早期にまとめ上げるという考え方から，断念せざるをえなかった。当初の構想から考えれば，まことに不本意な結果に終ったわけで，全く自責の念にたえない想いである。ただ同じ赤いオールを漕いだ艇友としての友情に甘えて，ご寛恕のほどをひたすら願うのみである。

なお出版公刊については，第一法規出版株式会社の斎藤實東京支社次長には，長期にわたって，一方ならぬご配慮とご協力を頂き，感謝にたえない。そして最後に編纂委員の一人として，また通史の執筆者としても，努力された昭和7年学卒の曽禰冬来氏が，不幸にして病いにたおれ，瀕死の病床にあってもなお，このボート部史のことを心配しておられた。また一生を通じて，誰よりもボートと一橋に愛情を注いだ熱血漢河西源吉氏（昭和6年学卒）は，本文中にも記載（150頁）してあるように，昭和11年の9年ぶりの優勝のあと，いち早く端艇部史の編纂を力説された。また昭和50年以降の部史編纂事業を強力に支持し，激励され，戸田の合宿所を訪問して，現役の選手たちと膝を交えて，一橋ボート部の歴史と伝統について熱弁をふるわれた。これらの今は亡き先輩たちのご霊前に，この部史をお供えして，心から謝意を表し，その冥福をお祈りする次第である。

（丸山泰男）


隅田川周辺図
戸田へ
小台橋
尾久橋
旭電化
尾竹橋
荒川放水路
東電火力
四本煙突
（お化けエントツ）
日光街道
千住新橋
千住大橋
江戸川
利根川へ
綾瀬川
中川
堀切橋
水門
綾瀬橋
四ツ木橋
鐘ヶ淵
八百松
南千住
玉の井
白鬚橋
百花園
早慶明外大倉艇庫
大倉別邸
東大艇庫
向島商大艇庫
ポンポン蒸汽発着場
木造向島艇庫
三囲神社
言問橋
牛島神社
アサヒビール
吾妻橋
常磐線
東北本線
吉原
竹屋渡
待乳山
山谷堀
日暮里駅
浅草
花川戸
松屋
鶯谷駅
上野駅
上野公園


上野駅
アサヒビール
吾妻橋
駒形橋
不忍池
明治中期
高商経庫
（初代）
既橋
国立へ
お茶の水駅
秋葉原駅
中央線
蔵前橋
ニコライ堂
神田川
両国駅
総武線
馬喰町
両国橋
神田駅
一ツ橋
浜町
新大橋
人形町
宮城
東京駅
蛎殻町
中州
清洲橋
永代橋
有楽町駅
佃
品川へ
越中島
商船大学
新橋へ

本書(製本版及び電子版)の利用条件と権利規定

1. 著作権について

本書の著作権は、四神会に帰属します。
また、本書に掲載されている写真、新聞記事等の著作権は、
それぞれの撮影者、発行元、または正当な権利者に帰属します。

2. 禁止事項

本書の利用にあたり、以下の行為を禁じます。
・本書の一部または全部を、著作権者の許可なく複製、転載、再配布、
公衆送信(WebサイトやSNSへのアップロード等)すること。
・本書の内容を改変、加工すること。
・本書を営利目的で使用すること。

3. 個人情報の保護について

本書に含まれている個人情報に関し、以下の行為を固く禁じます。
・個人情報を第三者に開示・提供すること。
・営業活動、勧誘活動、政治・宗教活動等に利用すること。
・名簿業者等への転売、譲渡。

4. 免責事項

本書の利用により生じた損害等について、発行者は一切の責任を負いません。

(c) 2026 四神会

一橋ボート百年の歩み

昭和58年12月8日発行

編集兼発行者　四神会
〒335 戸田市戸田公園5—38
一橋大学戸田艇庫
電話 0484 (41) 4057

印刷所　第一法規出版株式会社
〒107 東京都港区南青山2—11—17
電話 03 (404) 2251

令和8年2月13日　v.1.0
電子版作成　端艇部140年史編纂委員会事務局